

# 気儘に生きた転生馬物語

イナダ大根

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ウマ娘をやって原作を見てイニシャルD見てロマンを求めたくなつて書いた転生馬物怪文書。

息抜き作品なのであまり気を張らずにギャグとして見れるものを目指しています。

馬をやりながらウマ娘を書いていく予定。

シリアスするときはシリアスするがな!!

競馬知識のない男が転生して馬になって、ウマ娘になつてもマイペースにやるお話よくあるのです。基本好き勝手にやる予定。

作者も知識は0から調べつつやってるのでいろいろ間違ふかもしれません。がご容赦ください。

題名に星マークがついている場合、挿絵付きです。

失敗AI画像供養場

<https://syosetu.org/?mode=kappa&view&kind=292156&uid=270965>

3/28、Prettyderby編・第三十四話更新

なんとか月一更新だけは守れたぞ：全然自慢にはなりません。がね。切る場所を見いだせず長くなっちゃいました。がどうかお納めください。

所で最近のウマ娘、どんどん新キャラ突っ込んできてて把握できな

くなりそう…

フリーオーソ？・トランセンド？・ウマ娘から入った民にはまだよくわからんとです。

期間限定・リクエストボックス『12／07～12／10』  
募集は終了しました。

目次

第21話	232
第20話	218
第19話	203
第18話	192
第17話	180
第16話	173
第15話	160
第14話	148
第13話	135
第12話	126
第11話	116
第10話	102
第9話	88
第8話	78
第7話	71
第6話	62
第5話	51
第4話	39
第3話	25
第2話	17
第1話	5
酒蔵の馬	
プロローグ	1

第41話	569
第40話	559
526	
小ネタ3・20XX年、ウマ娘で雑談するスレPart2014	511
第39話	498
第38話	483
第37話	467
第36話	454
第35話	439
第34話	426
第33話	407
第32話	394
第31話	383
※おまけ改訂版	360
※改訂版	
第30話	345
小ネタ2・20XX年、新育成ウマ娘を語るスレPart1939	327
第29話	314
第28話	301
第27話	291
第26話	283
第25話	273
小ネタ・20XX年・ウマ娘プリティダービー緊急告知	261
第24話	249
第23話	
第22話	

第十五話	886	馬 IF・番外編	677
第十四話	875	シマカゼタービン、タルコフ遭難記録	715
第十三話	865	Pretty Derby	
第十二話	850	第一話	730
第十一話	841	第二話	735
第十話	828	第三話	749
第九話	821	第四話	758
第八話	808	第五話	771
第七話	793	第六話	783
第六話	783	第七話	793
第五話	771	第八話	808
第四話	758	第九話	821
第三話	749	第十話	828
第二話	735	第十一話	841
第一話	730	第十二話	850
		第十三話	865
		第十四話	875
		第十五話	886
		小ネタ4・20XX年、アニメ版ウマ娘を語るスレNo. 230	659
		第46話	635
		第45話	615
		第44話	602
		第43話	584
		第42話	

	第十六話	894
	第十七話	908
	第十八話	922
	第十九話	936
	第二十話	953
	第二十一話	967
	第二十二話	983
	第二十三話	995
	第二十四話	1004
	第二十五話	1015
	第二十六話 ☆	1028
	第二十七話	1047
	第二十八話	1065
	第二十九話	1088
	第三十話	1099
	小ネタ・今年のウマ娘で駄弁るスレPart226	1123
	第三十一話	1143
	第三十二話 ☆	1162
	第三十三話	1178
	第三十四話	1193
	ウマ娘 IF・番外編	
	IF1・オグリキャップの災難 ☆	1219
	ブルーアーカイブ×ウマ娘コラボイベント『三女神SOS』	
1234	終章2『残された蹄跡』 ☆	最

## プロローグ

2002年、その馬は日本で生まれた。

深き衝撃の名を付けられ、日本競馬界の結晶と呼ばれた馬はかの世界では数々の栄光を打ち立て、あらゆる敵と難関をなぎ倒し、そして世界でその声をとどろかせた。

この世界もそれは同じだ、圧倒的な実力で日本を席卷し、世界でも名を広めた。だが一つだけ違った、かの衝撃の馬には勝てなかったライバルがいた。

公式では記録されていない挑戦と敗北は関係者にしか語られず、たった一度の大舞台で見せつけた実力はすぐに衝撃の馬の威光に歪められてかき消された馬がいた。

居なかったことにされた、だれも認めなかった、暴走と狂気によって奪われた。

まぐれで生まれたフロツクか、それともかの呪いを受けた不遇の存在か。否、その馬は何にも縛られなかったただけだ。

嫌だから走らなかった、理由があったから走らなかった、走るときは走るだけだ、自分の都合を優先しただけだ。

レースで縛れたためしがない、呪いなどトロ過ぎて話にならない、世間の目なんて追えやしない。

逃げるからだ。逃げ馬だから逃げて逃げて逃げまくるのだ。

公式の世界では片鱗しか見えないライバル、その馬に衝撃の馬は何度となく挑んでは敗北していたというのは後世に語られるまではほとんど知られなかった。

だが衝撃の馬とともに歩んだ騎手、厩務員、調教師、関係者たちの心には深く刻まれ、今なお厩舎の中では語り継がれている。

かの馬の永遠のライバル、英雄を下した酒蔵の走り屋、自分勝手を極めた趣味道楽。

すべてを置き去りにする破滅逃げ、蘇ってきた狂気の系譜。競馬場の中で唯一エンジン音をかき鳴らす、その馬の名は――





深夜の山間部、静まり返った峠の山道を1台のスポーツ車が法定速度を超えて峠を攻める。

ダークブルーのスポーツセダン『スバル・WRX―STI』がEJ207型水平対向4気筒DOHCターボエンジンを思い切りふかし、スキル音を響かせながら峠のカーブに突っ込んでいく。

街灯の少ない暗闇の峠道、一歩間違えれば大事故、下手をすれば道を飛び出して真つ逆さまに落ちる違法な峠攻め。

だがそのスリルとアグレッシブな輝きは、たとえ世界が変わろうともそう簡単に色あせやしない。

愛車にかける情熱と自分がどれだけ高みに上れるか、その中でのかかり合いはこの世界にいる二つの種族を対等に並び立てる。

ここでは『人間』も『ウマ娘』も対等なのだ。愛車を操り、エンジンを吹かし、だれよりも早く、だれよりも巧みに峠を抜けるのに必要な素質なんて種族の違いなど些細なものではない、そう少女は自信を持って言えた。

足が速い？力が強い？大食いだったりする？反射神経がいい？だからなんだ、この峠を攻めるのにそんなものは関係がない。

街灯の少ない暗闇の峠道を攻めていくのに必要なのは精神力だ、スピードと闇の恐れを知った上で制御できなければアクセルを踏むことすら躊躇してしまう。

スピードも闇も、運転席の少女にとっては慣れ親しんだものだ。エンジンをふかし、シフトレバーを即座に切り替え、ブレーキを踏み一瞬の減速と同時にハンドルを切る。

鮮やかなハンドルさばきから繰り出されるのは、右カーブの内側に限りなく迫った最短距離のドリフト走行。

車体の重さをもともせず危なげなく曲がったカーブの先で、少

女はアクセルを踏まず静かに減速した。

法定速度まで落とすと同時にこの峠道の随所にある寂れたパーキングエリアが見え、少女は迷わずその中にWRX―STIを入れて適当なスペースに停める。

「うくん…ちよつと所々膨らんだな。ハンドルもちよつとピーキーすぎか、あとで調節だな」

運転手の少女は手帳に今後の修正を書き込み、一息つくと運転席から外に出る。

峠道の中ほどにあるパーキングに人気はない。その中で白シャツに革ジャン、ジーンズ姿の彼女は一人大きく息を吸い一時の高揚感の名残に身を浸していた。

この解放感と高揚感が少女を魅了してやまない、こうして思いつきり飛ばした後に来る弛緩した感覚は格別だと思っていた。

そんな少女のウマ耳に着信音が届く、ジーンズの後ろポケットに突っ込みっぱなしだったスマートフォンに着信が入っていた。

着信相手に表示された『ツインターボ』の文字を見て、少女は思わず顔を緩ませた。

「よう、こんな時間にどうした、ターボ？」

WRX―STIのドアに腰を預け、スマートフォンを人間のようになり右耳にあてた彼女はこんな夜更けに電話をかけてきたいとこの少し眠そうな声に耳を傾ける。

「起きちゃった？ま、あとで寝なおせ。いつこっちに来るか？バカ言え、俺はお前みたいに頭良くないからな。うん、その気はねえよ」  
趣味をするのも難儀そうだな、と心の中で付け加える。ウマ娘の多くが好む『レース』にほとんど興味がない自分にとって、この愛車と峠から引き離されるほうが拷問に等しい。

煌びやかな府中の街にいる従妹には悪いと思うが、トレセン学園という最高学府でウマ娘の理想郷にはいささかも興味が湧かなかった。

自分がそこに入って活躍する姿が全く思い浮かばないし、それで背負わされるものが重たすぎて考えるのも億劫だ。

「ブライアンとティープにズバツと言えって？すまんそりゃ無理だ、

もう言った」

親しい従妹と同じ髪色、ウマ娘でも珍しい蒼い髪を短くショートに切ったボーイッシュな髪形に恵まれた体格をした彼女はドアに腰を預けたまま足を組み愉快そうに笑う。

「うるさいならそつちの生徒会長にでもいうんだな。それはそうと、聞いたぞ？ 免許をもう取ったんだろ？ あ？ お前、コマツに漏らしただろーが、もう仲間はみんな知ってるよ。はっはっは！」

いところによく似た勝気な空気に男性じみた性格を醸す彼女。

「お前が好きなのが買えばいいさ、金はあるんだろ？ え、もう買った？ エンジンびりびりでターボやばい？ それはたまらんな」

ウマ娘としての本能に流されないマイペース、ある種の突然変異種で自己中。

「待て、名前は言うな、お披露目は今度の夏休みの時まで内緒にしとけ。限定でもこっち来るくらいできるだろ、乗ってきてみんなを驚かせてやれよ」

そのウマ娘の名は。

「解ってるよ、約束は約束だ。峠の走り方を教えてやるよ、シマカゼタービン先生のレクチャーはきついから覚悟しとけよ？」

シマカゼタービン。

## 酒蔵の馬

### 第1話

気が付くと生まれ変わってた、よくある二次創作なんかでよく見る神様転生とかそんなのなんだけど、まさか自分がそうなるとは思わなかったわ。

なんだ？前世でなんか悪いことしたか？普段から冷静、悪く言えばなんか冷めてるとか言われてたがテロとか犯罪とかした覚えはない。生まれは平凡な一般家庭で、独り立ちしたら大企業の支社勤め、しいて言えば30超えてなお独身だったけど、それは結婚に関心なかっただけやねん。

ぶっちゃけ女性に金掛けるより趣味してたほうが人生色鮮やかだったのにな。ミリタリ型雑食オタクだったから女受け悪かったもんだよ。だからってこれはないでしょ…

「ひひいん…」

馬なんだよ。しかもリアルなほうなのよ。なんで畜生道に落とされるにやならんのだ、動物ならもつとネズミーとかユニバーサルな感じだったりフレンズ的なのとかやろ。

百歩譲って愛と勇気だけが友達な食物兵器でもよし、命がいくつあっても足りそうにないけどな。

古典ならあの白いヤツな感じなのかもしれんが、それだと俺は初手で詰んだも同然だ。何しろ生まれが生まれだからね。

「ひひいん…」

あかん、思い出したらまたため息が出た。要はあれだ、俺は望まれて生まれた馬じゃなかった。母馬のヤツは生んだら育児放棄かまし、父親は文字通り蹴り入れてきやがった。

母親の育児放棄で代わりに一緒に過ごさせようとしたら一緒に来た厩務員さん諸共馬房から蹴りだすんだもん。

一緒に押し出されたときは同伴してくれた厩務員と顔見合わせた

あと一緒に呆れちゃったよ。

血のつながる祖母もダメだったし、祖父はいないし、継母についてくれる馬も居ねえの、それどころかすごい気味悪そうにみんなするんだ。

それ以来、その厩務員さんが担当になって人工保育よ。まさかこの年になって哺乳瓶でミルク飲むことになるとは思わなんだ。

しかも生まれた理由が面白い。入りたての新人がどつかの馬房のカギを閉め忘れて、その馬が逃げて思いっきり盛った結果だそうだ。

結果は御覧の通りだし被害もひどかったらしい、最初は墮胎するつもりだったけどなんやかんやあって出産の方向になったそうだ、俺としちゃ笑うしかねえよ。

だってそうだろ、転生したけど生まれる前に居なかつたことになる寸前な上に生まれたときから借金？いや宿命？とにかく厄介なの背負うとかさあ…これももう生存戦略とかそんな次元じゃねえよ？

どう媚売ろうがアピールしようが成るようになららんよこれ、糞が…

「この子がそうですか？」

「ええ、ツインロックの仔です。賢い子ですよ、人懐っこくて物わかりのいい子です」

「なんかため息ばかりついてるように見えるんですが…まさか持病でもっ…」

「いえいえ、なんというか…まあ賢い子なので、時々ナイーブになっちゃうみたいで。ほら、おいで」

ふと顔を上げるといつの間にか馬房の中には見慣れた厩務員さんを見慣れないおっさん、いつの間に入ってきたんだこの人たち？忍者？

ま、俺が勝手に落ち込んで拗ねただけですよネ、すんません。厩務員が手招きしたのとことと傍による。するとそれを褒めるように彼は撫でてくれた。

ひどいよな、この手の温かみと愛情は本物なんだから。今生の生みの親が親なもんだからこういうのに敏感になっちゃまった。

だから厩務員の人たちとか牧場長とか、大切にしてくれてんの分かるんだもの。経営預かってる人からは冷たく見られてるけどな。

「さあ、この人がお前の馬主さんだ。挨拶できるか?」

え、生まれてからすぐ馬主つているもんなの? そりゃ挨拶しなきゃな、どうも、と頭を下げてお辞儀をする。

顔を上げると見慣れない男のほうは目を丸くしていた。

「驚いた、お辞儀するのかい?」

「人間が挨拶をするときはこうすると覚えちゃったんですよ、言っただしょう? 賢い子だつて」

そりゃ中身は人間やがな、しかも未来人だぜ? 少しだけどな。ちなみに詳しくは分からんけど大体西暦2002年くらいらしい。

2021年に暮らしてた身としては懐かしいよ、過去の俺いるかもしれんぞ。うわ、絶対会いたくねえ。

「人に育てられたせいかもしれないですが色々人間臭い奴です、生まれの事も理解してんじやないかって言ってるのがいるくらいでね…ここだけの話、連れてくなら早いほうがいいでしょう。ここはつらいことが多すぎますから」

そうね、その通りだよ。この牧場つて資金繰りそんな良くないらしいじやないの、それなのに予定外の出産で出費痛かったそうじやないの。針の筵やねん。

「フブキも妙にこの子を嫌つてまして、昨日なんて目にした途端走つて蹴りに行こうとしたくらいなんです、今まで走らなかつたのに」

何それ知らん、昨日つて外に出されたときでしょ? そういえばすぐに呼び戻されたつけ。生みの親に殺されかけてたのん? うそでしょ、畜生道つて辛い…

「ヨシミも最近機嫌が怪しいし、ツインロックはどこ吹く風だし…」

最悪、好美つて祖母ちゃんの北海好美の事だよ。祖母ちゃんも俺を見る目怪しかったけど実害出始めてんのか。

クソはクソだが、おふくろがマシだったのが笑えるわ。実の仔とか言わないで近づいたら見慣れないガキの扱いだつたけど普通だつたし、実に馬鹿っぽい姉ちゃんだったよ。

というか生んだこと忘れてやがった、カマかけたら親父と会ったらしい時期から記憶がぼつかりとないらしい、嘘だろ母ちゃん。

俺もうこんな牧場嫌だ、俺この人んところいくだ。もうこの際肉になってもいいわ、せめておいしくいただいてちよ。

「…解りました、今日連れて帰りましょう」

うまうまうーまーうーまー、こうまをつーれーてー…



『懐かしい夢見た』

最後は親父さんのハチロクに乗せられて峠を攻めて…と、これはもう2年前の話だ。

あの時はかなり拗ねてたけどもなんだかんだ住めば都、身の丈に合った生活できりやそれはそれでええねん。

なつちやつたんだからこれから先の事考えるわ、とりま頭のいい馬つてこと解つてもらえりや道は開ける。で、開いたわけよ。

なんせ俺の馬主さんすごい理解ある人でほかの馬より頭がいいつてわかつてくれたら扱い変わったもんね。

俺の城である物置小屋を改造した馬房から顔を出すと、仕切りで区切られた放牧場らしきもの。といってもテレビで見たような広さはない。

ほんのり酒の香りが流れてくるほうを見ると、見慣れた酒蔵の戸が開いてるのが見えた。今日も朝から仕込みが始まつてる。

つまりここは酒造会社の敷地内にあります、衛生面とかは少し離れたところにあるから問題ないらしいね。衛生管理のあんちゃんが言つてたよ。

『おはようタービン坊主』

はい、自分の名前はシマカゼタービン。競走馬だと思つたか？地方酒蔵の輓馬だよ!! そう、俺は勝つたのさ、勝負事の世界じゃなくて匠の世界に入ったのさ!!

我が家は群馬県の芦名山、その麓にある地方酒蔵『瀬名酒造』で熟

成型日本酒『馬練り』が一番人気、なんと俺が仕込みをやってるのよ。背中に乗せて歩くだけだからって嘗めちやあかんよ、この酒造で飼育してる馬の中じゃ俺が一番うまいんだ。

だから特別にこんな個室を貰えて：すんません嘘です、部屋に関しては新しく作った場所に一番最初に入っただけです。

ついでにこの放牧地の馬房は別に立派なのがあります、まだ誰もおらんだけです。俺だけボツチです…

『おはようブチ、気持ちよく寝たわ。ざっと6時間くらい』

馬房の入り口わきであくびをする三毛猫はブチ、家族の中でも最古参で俺もお世話になったボス猫だ。

ちなみに今は朝7時、昨日は遅かったでやんす。親父さんも俺も眠かった：そーいや親父さんは家に帰ったのかな？一緒に馬房で寝た気がするんだがいなかったぞ。

『おはよう。お前さんがよく寝る馬なのは知ってるけど寝すぎは感心しないぜ？ちよいとたるんでんじゃねーか？』

そうね、馬になって知ったけど馬って人間みたいに寝ないんだってね。けど俺は寝る。

『おはようコマツ、そういうお前は相変わらずちっさいけど飯食ってる？コーラ飲む？』

『うっせうっせ！これから大きくなるんじやい!!』

瓜坊みたいに小柄で愛嬌のある猪豚はコマツ、実はこれでも成獣なんで合法ロリってやつだな。だが雄だ。

ここの会社の親父さん、つまり俺の馬主さんの知り合いがやってる牧場で猪豚を生産してるんだけどその中で育たなかったやつを引き取ってきた。

もう出荷時期も過ぎた成体なんだけど子供みたいな体躯のまんま、姿も愛くるしくて会社じゃ女性社員によく可愛がられてる。

最初は突っかかってきたけど今はこのマイルドツツパリ、自分は運がいいってこと教えてやったからね（暗黒微笑）

『では私にくださいな』

『おはようレッド』



パタパタの背中に降りてきたのはレッド、近所に住んでるカラス。瀬名酒造で飼育されてるわけじゃないから近所の姉ちゃんみたいな感じ。

けどほかの家族よりエンカウント率高い気がする。ちなみにレッドっていうのは両目がルビーみたいだから俺がつけた、ほかの奴と違ってホントキレイなんだよね。

『おはよう、タービン。インテリジェンスな私に糖分たっぷりなコーラはお似合いでしょう?』

なんていつてるけど…うん、カラスは鳥だから、うん。ポンコツ姉ちゃんよ。別のカラスにいいようにからかわれてるところ何度も見たもの。

期待した目で見てくれるのは悪いけどもほんとに買う気は…いや、やっぱ後で買ってあげよ。

『昨日は帰りが遅かったけどどうしたの?また峠にでも寄ってきた?』

『いや、トレーニングセンターでちよつと絡まれちゃってさ。延々と勝負させられちゃって長引いたんだよ』

ちなみに酒造りのほかにもバイトで地方競馬の練習相手だったり誘導馬だったりの仕事もしてる。

一応地方競馬の登録もしてるぞ、でかい大会に出たことはないけどな。草レースみたいなものなら何度か勝った。

そんなこともあるから行くときや行くのよね、お呼ばれあったりするから。昨日は練習相手に呼ばれたから行ってきた。

『確か…ディープリンパクトとかいったっけ、負けん気強くて何度も挑んできたから大変だったぞ』

『群馬じゃ聞かねえな、新人か?』

『地方じゃなくて中央のらしいよ。東京から遠征練習に来てた』

ふと昨日の仕事を思い出す、俺に散々突つかかってきたあの鹿毛のサラブレッドの追い込みからの追走圧はすごかった。同じ年とは思えん。

前世のどつかで聞いたような気もするけど、なんだっけ、映画かな

んかだった気がする。

そもそも練習にわざわざ来るってことは…場所が取れなかったのか？こつちに来るくらいだからそんな強くないのかもしれないけど、あんなのがそんな扱いの中央競馬か…魔境だな。

そんなとこいくより俺はここで馬並みに酒造りしてるほうがいいわ。さーて今日も頑張るぞい！

そんなこと考えてると遠くからエンジン音が聞こえてくる、このスーパーチャージャー音は…敏則のAE101か。

あれを転がしてるのは久しぶりだな、ということは…合格したな、さすが敏則。

くそ、良いよな人間。俺もインプレッサが買いたい、馬でも乗れる車が開発されねえかな？

「タービン、起きてつかー」

「オウオウー！」

「久しぶりだな、元気してたか。今日から俺も復帰だ」

「ぶふっ!？」

「わかるか、帰って来て早々だぜ？あのクソ親父」

少ししてやってきたどこにでもいそうな優男、瀬名敏則はこの瀬名酒造の跡取り息子。趣味で芦名山の走り屋やってる。

つい最近までは騎手の資格取るために家を開けてた。時々帰ってきてたけど長い2年だったもんな。きっと卒業ついでに峠を流してきたんだろう。

それ加味してもいきなり仕事か、親父さんは変わらんねえ。

『合格したか？したよな？うん？』

「やめろやめろ。そんなにせかすな、合格したよ」

鼻先で突っついて結果を言うようにせかすと敏則はすぐに理解してくれた。

良しよくやった、人間も動物も会社でさえ資格の魔境である瀬名酒造、地方とはいえ競馬騎手の資格持ちとは一段輝くぞ！

厩舎、調教師、騎手などなど一端の競走馬育成資格はそろってたが若手もゲットで未来も安泰だな。

…酒造会社って何だっけ？こいつら取りたい資格は何でも取る我が道を行く家系だからって限度あるだろ普通。

「にやあ！にやぶにやあ!!」『やるじゃねえかとし坊！鼻が高いぜ!!』

「ぷもーぷひい!!」『ちくしょー!!俺だってなんかとりてー!!』

「カーカー!」『さすがね、お姉さん感心だわ!』

「おいこらやめろって!!」

ブチとコマツに飛びつかれて頭をぐりぐりされながら尻もちをついた敏則は、レッドに頭に乗られたままくすぐったように笑う。

ドーベルマン先生がいたら怒るかな…いやきつと苦笑いするだけだろうな。

『はいはいやめやめ、これからお仕事だからね』

一声かけるとみんな敏則から降りて近くに座る、敏則はそれを見て微笑むと一匹一匹頭を撫でた。

俺もライアンカットとかいう短く切った鬣を梳かれる。まったく撫でるのがうまい奴だよお前は。

『今晚は楽しみだな！きつと飯は豪華だぞ!!』

『今夜はとんかつだな！ちがいない!!』

『コマツ？あなたそれ意味…いえ、いいわ、そんな澄んだ瞳で穢れた私を見ないで!』

コマツ…まあそういうの乗り越えたもんね君。

「じゃあ行くぞタービン、まずはスプリンターから仕込もうか」

寝起きから全力疾走とはお前も鬼だな敏則!?



こいつを見たときからただの馬じゃないのは理解できた。親父がめちやくちやいい顔で手に入れてきた仔馬の目には、確かに理性があつたからだ。

血統はぱつとしないというか、競走馬の血が入ってるけど戦績から

見てもなんとというかロマンでしかない。

親父はその馬のファンで、いつか馬主になってやるとか意気込んだのはガキの頃から覚えてる。で、その血が入った馬をまじで買ったわけだ。

普通なら誰かが止めるべきなんだろうけど、買うことも扱うこともうちの酒蔵じゃ当たり前だしこのド田舎にも聞こえるスター性となれば反対するやつはいやしない。

俺自身当時は分かってなかったし、こいつ自身も頭がいい大当たりな奴だったしね。

夜の峠道をパカラパカラと軽快な足音を立てて軽く走るシマカゼタービンの栗毛の体に応急処置セットとかを積んだ軽トラックで併走しながら、タービンの背中に着けた酒入れがズレてないか確かめる。

競馬で見るゼツケンみたいなやつを袋にした酒袋は、片方に一升瓶5本が入るようになっていて一度に十本背負える。

タービンはそれを背負って毎日こうやって走って、うちの主力商品『馬練り』の最後の仕込みをするのが仕事だ。

『馬練り』は熟成型の日本酒で、一年熟成させた後に馬の体に乗せて走らせることで酒を練り、味に変化を持たせる変わった工程を持っているのが特徴の変わり種なんだ。

何でもご先祖様が酒の納品する時に走った距離で味が変わるのを見つけてから代々改良を続けてきたんだと。

だから最後の仕上げをする馬によって味の良し悪しが変わる。下手な馬がやると飲めたもんじゃなくなるからどんな馬でもいいわけじゃない。

競走馬みたいに見極めが必要なんだ…というか、ぶつちやけ競走馬とほぼおんなじかもしれない。それでいえばこいつは大当たりだ。

こいつは自分の走りが酒の味を変えるのを知ってる、だからペース配分とかがうまい。走るのも好きだし、競馬的に言えば逃げ馬とはいえただ逃げるだけじゃないってところもある。

今の走りだと切れのある酒になるが…あ、黄色のインプレッサ。

「なんだ、あの下手くそ」

「ブルルツヒイン」

思いつきり飛ばして坂を上がってくるインプレッサを避けるために少し端に寄せると、なんだかすげえ馬鹿にしたような眼でこつちを見てきやがった。

見た感じ走り屋っぽかったけど…まだビギナーって感じかなあ、このゆるい道を飛ばして粹がってるっぽかったし。

本命はこの先の下りなんだろう、でもあの分じや明日にや板金コースだな。この芦名山は有名どころほど名は知られてないが難所だぞ。そんな風に考えながら走らせてるともう頂上だ、トイレと自販機エリアしかないパーキングエリアは昼間は閑散としているけど夜はそうじゃない。

ここの峠を攻めに来た走り屋たちが顔を出してきていていつもそれなりの人気がある。おかげでここの自販機は設置主が奮発してて豪華だ、しかも値段も町中価格で安いし。

俺がタービンを連れてパーキングに入ると興味深げな視線がこちらから飛んでくる。

どうやら遠征組が多い日らしい、ここらを拠点としてる奴らならタービンとは顔なじみなんだがな。

「敏則にタービン、なんだお前も来たのか。GT-Zはどうした？まさかそれでやる気かよ？」

端っこに車を停めると顔なじみの走り屋がこつちに寄ってきた、顔色からして何かあるらしいな、俺は知らんが。

「何の話だよ良助、見てのとおりタービンと仕込みしてるだけだぞ」「なんだ、じゃあただの偶然か？何も聞いてないのか？」

「だから何の話だ？」

「今日は榛名と赤城の連中がやるんだ、聞いてないのか？」  
「交流戦か？知らねえよ、騎手の資格取るのに忙しかったし」

なるほど、だからこんなギャラリーが集まってんのか。榛名山のチームと赤城山のチームの交流戦か、ここなら互いにアドバンテージが無いから対等だもんな。

ここらの連中も滅茶苦茶盛り上がってる、ここの連中はお祭り好きだもんな。

「タービン！お前も見に来たのか！！今日はすげえぞ、赤城と榛名の対決だってよお！！」

「ブルツ!?ブオンブオン!!」

「そうだろそうだろ、見ろよ！あの黄色のEG6と青のS13、ガチガチにチューンされててエンジン音がすげえんだ!!サイツコーにクルだぜ!!」

「ブウンブウウン…」

仲のいいいつものギャラリと喋るタービンは興奮気味に右後ろ足を掻いて鳴らす。アクセル踏みたいてうずうずしてんな、これ。

親父のハチロクで遊んでたのを思い出したか、でかくなって運転席に座ることもできなくなってからはしばらく落ち込んだもんな。

「タービン、いっちょ飛ばしてみるか？」

タービンに声をかけるとほんとに良いのか？と見つめ返してきた。良いだろ、夜の仕込みはこういうお茶目ができるから楽しいんだ。

「仕込みは終わったんだ、思いつきり遊ぼうぜ。下り一本、追走するか好きに走りな」

瞬間、タービンが大きく嘶いてにかりと笑う。じゃあさっそく準備だ、まずタービンが仕込んだ酒を荷台の専用ボックスに入れてしっかりと固定する。

そのあと荷台に乗せておいた反射板付きの馬着を着せる。工事現場の誘導員みたいなやつだ、尻の部分がテールライトみたいになる。

あとは首からライトを掛けさせて準備は完了、タービンはやる気十分で鼻息を荒げてる。

「良助、次の連中が下りたら俺たちが下りていいか」

「なんだよもう行くのか。できれば新米の先導してほしいんだがなあ…」

「邪魔しちや悪い、メインイベント前にタイムトライアルして帰る」

「このあたりの奴らならタービンの事はよく知ってるが、ほかの連中

から見たら異物でしかないしな。目立たないうちに退散するとするさ。

そういうと良助は納得してトランシーバーでどこかと連絡を取り始める。

「こちら良助だ、次はもう走るか？割り込みで悪いんだが一組こつちで入れたい：え？タービンと敏則だ、さつき来たんだよ：誰とバトルって？タイムトライアルだよ、行けるか？」

馬と軽トラでEG6とS13相手にやるってか？何の冗談だ、ましてや走り屋チームとなんてやってられつか。

## 第2話

群馬競馬トレーニングセンター、ここは群馬地方競馬に所属する競走馬を訓練するトレーニングセンターだ。通称群馬トレセン。

地方競馬のトレセンにしては設備が整っているほうらしくて、各種調教設備のほかにコースが芝とダートの両方がある。

ちなみらしいってのはここ以外のトレセンに俺は行ったことないから知らないんだ、馬の身の情報収集はなかなか厳しいのよね。

俺ことシマカゼタービンも一応は地方競馬所属の競走馬、ここを使うこともできるけども今は別の仕事でここにきている。

『む、むりいいいい!?!』

砂を敷き詰めたダートのレースコースでひたすら爆走すること、それが俺の仕事。模擬レースらしいけどもはやタイムンレースである、今も一頭千切つてるところだ。

今日のレースは一本1600メートルダートコース2周のシマカゼタービン先生長距離爆速大逃げ講座だ。とはいえ座学とかじゃないから体で覚えること。

俺の足は基本的には逃げ一本、それしかできない。競馬の知識なんてないし、はじめからトップを取って突っ走るのが一番走りやすいからだ。

そうでなかったら? まあやることは一緒だよ、走りやすいとこぶち抜きやいい。要は最後にハナとりやどんな走りだつて逃げだし勝ちだよな?

ついでに峠の走りで鍛えたコーナーはインコースやカーブを攻める時に輝く、だつたらなおさらぶっ飛ばすしかないでしょうよ。

なおルール違反は論外だからそれは分かっておくように!

『お先に失礼』

ハイ加速! 俺の加速についてこれなくなった時点で大体勝負決まってるんだよねこれ。

『くっそおおおお!!』



大差をつけてゴール板を超えて、そこで騎手に走るのを止められた競争相手の葦毛ちゃんを後ろに見ながら少し先のコース横に置いてある軽トラヘダツシュ!

今日はずっとここで走りまくるから荷台にいろいろ置いてあるのだ、つまり小休止である。

レースを勝ってそのまま直帰!一度やってみたかったことその一よ、馬になってやれるとは思わなかったがな。車でやりたかったぜ、ハチロクで!

「ほらよ」

『さんくす』

ササと下りた騎手は親父さん、瀬名酒造の社長であり馬主の瀬名茂三53歳、この年になってもバリバリのビジネスマンであり趣味に生きる男。

俺個人、というか個馬としてすげえ尊敬してる命の恩人だ。この人の期待だけは裏切れねえ、だから俺は酒造りに命を懸けるぜ。

親父さんにもらったキンキンに冷えた蓋の開いた水の500mlペットボトルを口に咥えて、親父さんと一緒に一気に煽る。

喉を通っていく冷たい水が体の火照った熱を冷ましていくのがわかる、ああこの水は高級水道水だああ…

「ぶつはあああツ!!」

たまらん!!これがたまらん!!人も馬もこれだけはやめられんよなあ!!

「相変わらずおっそろしいスタミナだ、あんな加速しといてけろりとしてやがる」

「うちのツバキプリンセスが全く太刀打ちできないなんて信じられない、東海のスティヤーじゃトップクラスなのに」

「車のシフトチェンジみてえな加速してやがったな…つていうかホントになんだあれ、馬かあれ?」

「言っただでしょう?馬鹿にしないほうがいいって。馬です、一応」

なんか外野が騒いでいるが無視だ無視…とそーいや件のツバキプリンセスちゃんはまだいるかな。あ、まだコースにいる。水持ってっ

てやる。

嫌がるかもしれないけど、俺としては水桶よりこっちのほうが飲みやすいと思うんだがな。

『ツバキプリンセスちゃん、水飲む？』

「あ…どうも」

お前じゃねえよ…横から手を伸ばしてきた騎手の兄ちゃんに水を横取りされた。おまえの分は親父さんが持つてくるのに何うまそうに飲んでやがる。

畜生文句言いつらいな、うまいんだよな？気持ちわかるよ。仕方ない、足に砂掛けるだけで勘弁してやる。

「え、なぜ!？」

「そりやお前、ツバキに持つてった水横取りされたからだろーが」

前足で砂を搔いて騎手の兄ちゃんの足にばさばさ飛ばしていると親父さんが水のボトルを持つてやってきた。

親父さんは蓋を開けて差し出すけどでもツバキちゃんはいらないみたいで顔をそむけた、ならええわ。

『次は負けない…覚えておきなさい!!』

『はいはい、また今度な』

『東海ダービーで待つてるわ、そこで決着を付けましょう!』

『すみません、その日は仕事があるので』

『私たちの仕事は走ることでしよう!他の大会で負けたら許さないから!!』

いや出ねえよ、東海ダービーってデカイ大会だしそもそも遠いわ登録してねえわ。意識してくれるのは良いんだけど期待されても困る、本業は輓馬だし仕事もあんだよ。

ま、あんだだけ元気のいい啖呵きつてたからまあ大丈夫だね。たまにガチへこみしてる奴いるし、それで走らなくなるとちよいと困るから。

今も騎手さんを引っ張ってってるし…むしろ騎手さん擦り下ろされそうだなこれ。

「ツバキプリンセスも終わり、と…なら午前はこれで終わりだな。腹

減った、飯にするか」

『いいな、喰おう喰おう！』

ちなみに今日の併走予定は午前中に3頭、でもガチンコレースで何度も走ったから疲れてきたよ。だってツバキちゃんの前なんて休憩挟んで10本走ったんだぜ？朝っぱらから走りっぱなし。

軽トラの前に無造作に体を横たえて、親父さんが下ろしてくれただかいクーラーボックスは俺の弁当箱だ。中に口を突っ込んでうちの社員食堂謹製の野菜の切れ端サラダを口いっぱい頬張る。

美味である、サラダ美味い、飼い葉もいいけど俺は野菜のほうが好きです。おかずにコロツケとかいろいろ入っているとテンション上がります。

「しかし今日は張り合いがねえな、ツバキプリンセスはともかくほかの面子もほとんど新米ばかりじゃねえか。

ホクリクダイオーとノルンファングはどこ行ったんだ？あいつらの相手じゃないとなると他に誰か相手が来るのか？」

『あ、コロツケ…おっしやきたあああッ!!』

なんとここでサラダの端っこに焦げ茶の塊発見、テンションマックスである!! 大方揚げ過ぎちゃったやつ入れたんだろうね、でもいいのよこういうので!!

馬の身じや喰わせてくれるのも馬の食事なんだもん、そりや喰えるけどやっぱ人間の食い物が恋しくなるんだよ畜生!!

外はカリツカリ香ばしく、中はねっとりお芋のお味、冷たいけどコロツケである、ああ懐かしや!

「お前ホントそういうの好きだよなあ、午後に腹壊しても知らねえぞ？」

いいんだよ、なんだかんだで壊したことないからな!! 馬に食えないもんって何なのか知らんけど、毒ある奴じゃなきや大体喰ってるから問題ない。

あと正直、親父さんのコンビニ弁当も捨てがたい…3つあるよな、多くないですか親父さん？食ってあげてもいいんですよ？

「やらん、お前はこっちー!」

視線向けただけでバレた、さすが親父さんだぜ畜生!! ああ、牛丼が、ホイコーローが、レバナラが消えていく…喰いたいなあもう!

白飯だけでもいいから食わせて、だれかほつくほくの炊き立てご飯を馬でも炊ける炊飯器作ってくれ…あ、俺が作ればええねん! 蹄だけど試してみよつと。

「お前、何か企んでるな?」

なんのことでございましよう?

「口が笑ってんだよ。明日から敏則に任せるのが怖くなってくるぜ」

敏則は関係ないでしょ、あいつとならうまくやるつて。あ、ちようちよ。

「そつぽ向くな…ホント解りやすい奴だな」

うっせーうっせー! 畜生サツサと喰つて昼寝じゃい!!



昼飯の後に休憩用の馬房でおやつさんと雑魚寝で昼寝して戻ってきたらレース場が騒がしい喧騒に包まれていた。

「妙に人が多くないか?」

『多いねえ』

午前中に比べて人が妙に多い。いつもの調教師や騎手の人たち以外に…あれ、記者やカメラマンが多くないか?

しかも見てる先はダートの練習コース、今日の俺たちの仕事場だよ。

「どうしたんだ? こいつあ?」

『知らぬ』

親父さんと顔を見合わせると親父さんがとりあえず近くにいる顔見知りの職員に聞こうとした。

俺はその後ろにゆったりとついていきながら周りを見回す、変だな? やつぱり、この馬も居なくなってるけど無駄に記者が多い。

それになんだ、見たことのない厩務員や調教師がいるな。ここの連中じゃない、あれは中央の?

「おう、一体どうしたんだ？妙ににぎわってるじゃねえか？」

「あ、瀬名さん!!待ってましたよ、どこ行ってたんですか!？」

「え？あつちの馬房で寝てたけど？」

「…しまった、今日はドライブじゃなかったか!!」

親父さん、たまに馬運車で一緒にドライブ連れてつてくれるんだよな…それは今関係ないか。

それよりも今はこの異様な感じが何なのか知りたい。おや、馬はいないと思つたが訂正だ。ダートで一頭走ってる。

コースの周りに人が一段と濃いから、そのせいで音が届かなかったのか。

「とりあえず、まずダートコースへ。次の相手がいいますから」

「ああ？何言つてやがる。次つて予定じゃ一時間先じゃねえか、だれか割り込みしてんなら俺たちは後回しだろ」

「その相手にあなたたちが必要なんですよ。午後の予定は全部キャンセルです、その代わりに彼らの相手をしてください」

「キャンセルつてただ事じゃ…くそ、元からこのためか。どこの馬だ？見慣れない連中がめちやくちやいるんだが？」

「それはお楽しみです！お願いしますね!!」

なるほど、群馬トレセンに一杯食わされたのね俺たち。まともにお願ひしたら拒否る相手か、まったくひどいと思ったらないね、でも嫌いじゃない。

こんなことしてまで当てたいというなら本気だ、その気合に免じてここはこつちも腹を据えましょう。

親父さんにいったん目でやる気を伝えてから人垣を割つてダートコースに入る、そこにいたのは騎手が乗った鹿毛のサラブレッドだった。

良い体してやがる、ピシツと引き締まった体に走るために特化した筋肉の付き方だ。今日走つた地方の奴らとは鍛え方が違う。

いつも相手をするホクリクダイオーやノルンフアングとはまた違つた威圧感というか貫録を感じるね。

『お前が練習相手か?』

『この担当か？俺だ。お前は？』

『デーブインパクト』

『デーブインパクトね。俺はシマカゼタービン、よろしくな。ルーはコース一周——』

『説明は良い、さつき走って分かった。さつきとやろう、こつちにこい』

ありや、愛想のないヤツ。ま、いつか。おやっさんとあつちの騎手もなんか話してたけどそっちも終わったらしい。

つてあれ？デーブインパクトのヤツ芝のほうに行っちゃった。なんでダートコースでやらの？

「臯月賞の練習だから芝でやりたいんだとさ」

臯月賞っていうと中央の重賞、G1だったか。そんな馬がここまで練習しに来たのか？向こうの芝コース開いてなかったのかな？

まあいいか、午後には使う予定もあったし。でも久々に芝だ、砂とか土とかアスファルトじゃねえのは新鮮だけど滑りそうだな。

デーブインパクトがさつきとゴール板の前に立ったから俺も少し間を開けて並ぶ。自分が内、あつちが外だ。

残念ながらタイムだと、いちいちゲートなんて使わないので合図は適当な暇な奴が行うか親父さんがやってた。

これでどつかの騎手がカウンントを始めてくれりやもつと乗り気になるけど…あ、ダメだな、なんかゲート引っ張り出してきてる。

ホント珍しいな、こんなタイムンで普段使わせないだろうに。

「うおう、なんか気持ち悪いな。タービン、どうやら中央の秀才はかなり気合入れてるらしい。弥生で勝ってるから自信たっぷりって感じだ」

弥生、弥生…中央のG2だったつけ？よく覚えてないけど、臯月賞に関連するならすごいんだよな。

ならなんでこんなところに練習くるんだ？やっぱあれか？強いけどまだそこまでじゃないとか？

まあ、ちよつと調子乗ってそうな感じはするな。馬のほうが。どつちにしろ、普通に頼んできてたら拒否ってたな。俺も嫌だ。

「瀬名さん、ゲートインしてくださいーい」

言われんでもするよ。

「だから何だって顔だな、ま、そうだよな」

スタート係の調教師が声を張り上げると同時に、親父さんが少し面白そうに小声で耳打ちしてきた。中央競馬の秀才だからどうしろと？

俺たちはただの趣味で競馬に出てるようなもんで、親父さんはあつちの騎手みたいな腕も何もない。走り方はほとんど俺が決めてるしな。

「しょうがねえ、負かしてやろうぜ」

ならいつも通り逃げればいいんだな!!おやっさんがにかりと笑ったと同時に、ゲートが開いて俺は即座に飛び出した。

### 第3話

「なんだ、あの馬は…」

とある雑誌記者である彼が見たのは、競走馬というには妙な体つきをした馬だった。全体的にがっしりとしているが、それ以外は何の特徴もないように見える栗毛の牡馬。

小さくもなく、大きくもない、鬣を短く切りそろえて清潔感を出しているが競走馬と呼ぶには体つきは野暮ったい。

乗っている騎手、いや馬の持ち主だろう男性は騎手ではなく酒造会社の社長。体つきも中年にしては引き締まっているとはいえ騎手の体つきではない。

そんな重荷を背負って走る馬が模擬レースの相手だ、そう考えると無謀すぎてむしろ真剣に相手に同情してしまうほどだった。

事実、この時の彼はあの馬と社長に同情を感じていた。中堅どころの雑誌記者とはいえこれまでデイープリンパクトについて回って取材してきた彼には、今のデイープリンパクトがまさに波に乗っているのを知っていた。

阪神競馬場での2歳新馬戦では初戦から2着に4馬身差で勝利。

次に出場した京都競馬場での『若駒ステークス』では最後尾からのレースを行い最終直線で一気に追い抜き2着とは5馬身差で勝利。

そして皐月賞トライアルである弥生賞では2歳王者『マイネルレコルト』と京成杯を制した『アドマイヤジャパン』を相手に接戦の末、勝利。

今季中央競馬クラシックでも最有力候補のスターホース、それがデイープリンパクトなのだ。

「シマカゼタービン、地方競馬でも聞いたことないな。強いのか？」  
「解らん、今本社でデータを洗ってるけどなぜか酒でヒットしてるって連絡があった。難航してるよ」

近くで一緒に見物していた他社記者の言う通りそれに比べて群馬トレセンから推された『シマカゼタービン』は全くの無名だ。



自分の持っている群馬地方競馬の有力馬は直近では『ホクリクダイオー』と『ノルンファンング』の2頭、シマカゼタービンの名前はなし。ホクリクダイオーは父にトウカイテイオーを持つ良血牝馬で群馬地方競馬の芝コース中距離路線、先行型で足運びがうまく前をふさがれても隙間を縫うように抜け出してトップを取る競馬をする。

ノルンファンングは中距離芝を走れるダート牝馬で差しか追い込み型、馬群にわざと潜む変わった走り、終盤にどこからともなく強烈な末脚で加速して襲い掛かってくる戦法に意表を突かれる馬や騎手が多い。

この二頭ならばいい練習相手になったかもしれないが、出てきたのはまるきり情報がない謎の馬で乗っているのも地方競馬の正式な騎手じゃないのだから意味が解らない。

一体なんでこんな馬が相手に推薦されたのか訳が分からない、群馬トレセン職員の謎の信頼に満ちた視線も気にかかる。

記者は何とかこの疑問を払しょくしようとシマカゼタービンに注目して、目が合った。

「え…」

馬と目が合った、そう思った瞬間記者の背筋に何とも言えない違和感が走り金縛りにあったような感覚に陥った。見られている、馬に見られているのだ。

ただ見られているのではない、目が合っている、見定められている、観察されている、馬とは思えない理性の輝きが感じられる。

それが理解できた瞬間、記者の背筋に怖気が走った。馬から興味が薄れて視線が外れる、その瞬間に金縛りにあったような感覚は消え去った。

「深淵を覗き見る時、深淵もまたこちらを覗き込んでいる、だったか？」

昔読んだ雑誌に載っていた一説を思い出す、今の感覚はまさにそれに思えた。

「あれがうちのデイープの相手になるんですかね？」

「なると思うか？ あんなの相手にならんだろ」

デュープリンパクトに帯同していた若手の厩務員たちがシマカゼタービンの競走馬とは思えない体つきに優越感に浸っているのを見て気を持ち直した。

今のは気のせいだ、デュープリンパクトが負けるわけがない。そう思いつつも、なぜか不思議と記録用のビデオカメラに力が入っていた。

これは記録しておく必要がある、なぜかそうせかされているように思えた。模擬レースはすぐに始まる。



足が少し滑ったけど俺は一気に駆け出す、立ち上がりはデュープリンパクトのほうが早い。徐々に前に出てすぐに頭を押さえられた、さすがは中央のサラブレッド。

俺の足は逃げだ、頭を取られるのは苦手。これは俺にも言える、自分のペースで走れないとどうも疲れやすい感じがするからな。

けどな、それじゃ峠の走り屋はやってけないんだ。そのまま押さえ込めると思ったら大間違いだ、抜かし抜かされなんていつものことだ。

まずは追走で煽ってみよう、様子を見て最初の勝負をかける。場所は最初のカーブだ。

群馬トレセンの芝コースはカプセル型の平坦な2000メートル、今回は右回りだが右でも左でも大きな差が出ない。

『何?!なんだお前!!』

まずは加速してぴったりくつつく、俺が抜こうとしてるんじゃないかとわざと張り付いたのは奴らに理解できないはずがない。

これだけで動揺を少し誘えたのはラッキーだ。馬の脚で走れば最初のカーブなんてすぐだ、それまでに煽ってやる。

ぴったりと後ろにくつつく逃げ馬なんて珍しいだろ? 抜けないならまだしも、わざと張り付くなんてのは逃げ馬のやり方じゃないからな。

少し加速してみせたりちよつと間隔を開けたりと妨害行為にならない範囲で煽ってみせる。動揺したのかデイーブが加速するようなそぶりを見せたが…ふむ、持ち直したか、走りの乱れが消えた。

なるほど騎手か、よく見るとしつかり馬を落ち着かせてる。互いの信頼関係は最高つて感じだな、だが練習とはいえ手は抜かん。

俺は寸前に一度牽制に一瞬加速してからデイーブインパクトに続いてカーブに入る。親父さんが手綱を握ってしつかり体に張り付くのを感じてから加速、遠心力を利用して一気に外に膨らんでデイーブをかわしつつ進路妨害にならない距離をもって直角カーブ、そのまま内側一直線!!

『その加速で急カーブだと?!』

うまくいったが後ろ足が滑って少し膨らんでるな、いきなり芝でまだ踏み込みが足りないか。ま、いいや、十分抜けるし対応できる。

後ろ足が流れそうになるのを歩数を増やして滑りつつ抑え込んで、曲がりながら体重を前に出して加速を促しながらデイーブの前に割って入る。

急カーブからの立ち上がりは登りも下りも峠でもつと急なヤツをいやほどやってきたんだ、隙は作らん。

『今のは一体何なんだ?!体が横に!!』

『喋ってる余裕があるのか?お前、もう後ろだぞ?』

逃げ馬は先頭で走らなきや本来の力は出ない、それくらいは俺だつて覚えたさ。だからこいつは俺の頭を押さえに来たんだろ?でも抜いたぞ。

『抜き返す!!』

『やってみな』

カーブが終わって二本目の直線に出る。もう一度加速を入れてスピードを上げるとデイーブインパクトからの威圧が強くなった感じがした。

ここはスタートと違って一本すべてを使える、ここでもう一度抜き返したいってところか、カーブで動けるのは見せたからな。

でもだめだ、解りやすすぎる。

直線に入った途端、アウトから抜きに掛かってきたディープリンパクトに俺は後ろを見ていた親父さんの首を平手で叩く合図で少し尻を振ってフェイントをかけてやる。

外に重心がブレかけたフェイント、それで体がヨレると思ったディープリンパクトがすぐに切り返してインコースに行こうとしたがそれも駄目だ、だって俺は動いてない。無理に割り込めば走行妨害だ。

すると面白いようにディープリンの行き足と騎手の綱引きに陰りが出た、俺が進路妨害してるって？あつちが勘違いしただけだよ、曲がってすらいないし。

またディープリンが外を抜こうとする、次も外に体がブレかける振りをする。行き足が止まった。今度は大外、戸惑ったにしても加速がいいな。距離の余裕も持ってる。

良い判断だ、多少被っても問題ない大外に狙いを変えたか。おそらく騎手の指示、馬との連携ができている上に判断も早くて確か。

これは天才ってやつか？こんな騎手はなかなかないだろ。俺たちは背負うのと引つ付くのでいっばいいいっばいだもんな。

『お前！』

『ナンノコトカナ？』

『しらばっくれやがって!!』

悪いな、レースじゃこんなの日常茶飯事だぜ？って前世で見たどこかのレーサーが言ってた。

距離を置いて併走状態になったディープリンパクトが文句を言うてくる、鼻息が荒くなってるのが見える。けどな、これくらい対処できなくてどうするよ。

中央の競馬となりや、当然かかる金も面子も段違いだ、ルール違反はダメだが、ルールの中なら何でもするのは当たり前だろうよ。

追い付いてきたディープリンパクトを少し剥がすようにもうちょっと加速する。やっぱりこいつ速いな、一緒に速度を上げてきた。

最初は手を抜いてやがったか？だがまだまだ、まだ足は回るぞ。もう

すぐ最後のカーブ、速度はまだ上がる、まだ速く走れる。体感時速60 km過ぎつてところかな？

『まだ上がる!?だが!!』

もう少しで最後のカーブ、そこで加速をやめると思ってるのか？それとも最後の直線で一気に抜いてやればいいと？ まだわからん。

直線が終わる、2本目のラストカーブ、ただのコースだとデカイカーブがこれしかないから面白みがない。でも今回はそうでもなさそうだ。

俺はここでも内を攻める、内ギリギリ、ガードレールに体を擦るか擦らないかまで寄せていく。デーパーインパクトも外から寄せてきたが加速する俺が邪魔で抜ききれない。

なら前に行こうとデーパーの足がさらに速くなるのがわかる、さすが中央のサラブレッドだ、ぴったりついてきやがって。

このままだと置いてかれるな、最後の直線勝負だと危なそうだ。体感時速65 km、上がきつくなってきたがここから仕掛けよう。

『その姿勢でさらに加速だ?!お前、どこまで伸びるんだ!!』

体を前傾姿勢に、内側の柵ギリギリに、今回はカーブ中盤のここからラストスパートだ。気合を入れなおす、もっと足が伸びる、加速していくのがわかる。

良いぞ、この感じだ、峠の坂道とは比べるべくもないがその分周りがよりよく見える。デーパーインパクトと距離が広がる。

スタミナはまだ十分、足も残ってる、蹄鉄の食いつきも完璧になった、何より周りが良く見える、ゴールまでは一直線で走りやすい。

デーパーインパクトの足にさらに力が入る音が聞こえる、なるほどお前もスパートか。この感じ、スタイルは差しか追い込みか？

足音が違う、踏み込みの力がさつきよりも強い、この足の踏み込みは本気だ。お前は今自信に満ちている、これで決めてやるって息巻いてるな？どんどん近づいてきてる、差が縮まっている、背中にびりびり来てるぜ。

馬も騎手も、俺を睨んで追い抜かしてやるって睨みつけてんだろ。ただの練習相手だと思つて甘く見てたのがすっかり吹っ飛んだか？

わかる、俺も今熱くなってる。

不思議と思考がクリアだ、真つ白なんじゃない、自然ととらえてどうするか考えられる。加速しなきゃ負ける、もっと早く、でもただのじゃだめだ。

まだだ、足と息がそろわない、まだだ、鼓動と息があつてこない、もう一つ先のスピードに入れる最高のタイミングを逃したら負ける。

もっと速く、もっと先へ、もう少し…今!!

「ビヒツ…スウ…ブウンツ!!」

息を入れる、頭の中でシフトレバーを切り替える、息を吸って後ろ足を踏ん張って、アクセルべた踏みラストスパート!一馬力エンジンフル稼働!!

体が一気に加速する、前足で飛び出す体を支えて、後ろ足が地面に付いたら思いっきり蹴り上げてさらに前へ。

前へ、前へ! 前へ!! いつか峠を走る走り屋にだって追いついてみせる、そのために鍛えまくった足だ。

ゴール板が近づいてくる、景色が遅く感じる。だからもっと踏み込みを正確に、確実に芝を踏みしめて推力にする思考に割ける。

後ろからの圧力は収まらない、近づいてくる。車に追っかけられるみたいだ、もうすぐ抜かれそう。体感時速72km、まだ持つか、73、持つか、74。

直線に入った、来いよ、俺の加速についてこれるか?

「詰めてきた、ムチが入った」

75、親父さんの言う通りじりじり追い詰められてる。踏み込む、これで76!息を吸い込む、足を踏ん張る、気合を入れて地面を蹴る!!

筋肉、呼吸、鼓動、血流、思考、諸々すべてをただ走る為だけに向ける。少しでも踏み込むタイミングを外せば一瞬で失速、即クラッシュなんだ。

「飛んでる、あいつツ…」

だからなんだ、回せ、進め、足を回せ、進め、前だけ見てぶん回せ!親父さんの前には行かせねえ!!

「ブウンツツ!!!」

これで77! もう一息、78!79!!

「ダメか……!」

80、カウントと同時に聞き覚えのない呻きが後ろから聞こえて  
ゴール板手前で後ろからの追走圧が弱まった、おそらくこの声は  
ディープリンパクトの騎手だ。足を使い切ったか。

俺はそのまま一気に駆け抜ける。うん、最後はギリギリ80いった  
か、喉からから、水飲んでー…

「よくやった」

親父さんの声に世界が戻ってくる感じがした。80か、平地じゃこ  
れが限界か、まだまだ走りには改善の余地あり。これじゃまだまだ足  
りない、先は長いな。

でもあいつは千切った、5メートルは確実に開いただろう。クール  
ダウンしながらゆっくり速度を落としながら後ろを見ると、少し離れ  
てディープリンパクトも追走してきていた。

訂正、たぶん1メートルくらい、本業つてやっぱ怖い、ギリギリだ  
よ。足取りはやや重いが怪我とかはなさそうだ、全速力を走り切っ  
たって感じた。

ギリギリ、ほんとギリギリか、勝ちも勝ちだけでも…まあ、精いつ  
ぱい強がつてやる。

『なかなかやるな、今日の練習相手に最後まで喰いついてきたのはお  
前が初めてだ』

なんだか騎手がすごい目をしている、そりゃ地方の聞いたこともな  
い馬と親父に負けたんだものな。

現役のサラブレッドが酒屋の道楽親父の趣味に負けた、そう口の悪  
い週刊誌なら書きそうなスクープだ。帰ったら絞られるな。

『負けた、俺が…』

あかん、こっちは落ち込みかけている。騎手がすぐに宥めに掛かる  
けどなんかうまくいってる感じがしない、少し目をやると親父さんが  
手ぶりで行けと言ってくれた。

はいはい、じゃ失礼しますよ。鼻で騎手さんを避けて親父さんに押

し付けてディープリンパクトと正対する。騎手さん少し失礼、お話しせてね。

『そう落ち込むなよ。これは練習だ、黒星になんてなりやしねえよ』  
『負けは負けだ、最後は本気だったんだ!! どうしてだ? 俺は弥生賞で勝ったんだぞ!! 訓練だってお前なんかよりずっとしてきたはずなんだ、頑張ってきたんだ!!』

『そりゃそうだ。だがな、それは負けねえ理由にやらねえよ』

ふうー…と一息ついて自分の気を落ち着かせながら、アドバイスしつつ元気づけるためになんていえば考える。

「ただ努力しようが負ける時は負けるもんだ、しかもあつさりと。それをどう言いくるめるかだな。」

こいつは良い奴だ、競走馬としても真面目で努力家で筋がいい、ちゃんと負けを認めた上でもがいてるからな。

周りの記者どもを見ろ、今日は調子が悪かったとか、移動で疲れたとかとか、言い訳並べてるんだぞ。

負けはつらい、つらくてもこいつは呑み込もうと必死だ…なんか騎手のほうは逆に興奮してるみたいだけどそこは親父さんに任せる。

喋ってるのかって? 喋ってるんだよ。

『俺は最初から本気でお前に勝つつもりだったよ』

『それは! アツ…』

反論しようとしてディープは口が回らなくなる、どこかでこいつも感じたのか。自分の気付かなかった、無意識の驕りってやつだ。

こいつとは今日が初対面だけど、本気で勝負するならこいつはいきなり頭を押さえるなんてことしなかったと思う。

一緒に走ったから感じた直感ってやつかな。たぶん後ろからがつりマークして疲れさせてくんだろ。そのほうがスタミナも温存できただろうに。

『さつきも言ったがこいつは練習だ、黒星にやらんさ。それにお前すげえよ、初見で俺の加速にビビらずついてこれるなんてな。』

それでも走りの速さには自信あったんだ、芦名峠じゃ俺の加速にビビるようじゃ一人前とは言えねえって言われるくらいには。やる



じゃねえか』

少なくとも芦名峠で走り屋を名乗るなら下りの俺を抜けなきや半人前以下だ、車どころか馬だもの。こそばゆい話だけど。

『…もう一度だ』

『そ、時間はまだあるんだしもう一度挑戦すりや…なんだつてえ?』

『もう一度勝負だ!!』

項垂れていたディープインパクトの顔が上がり、やる気に満ちた目で俺を射抜いてきた。

すぐに気付いたよ、これ天才つてやつだ。自分でなんか自己完結して調子取り戻しやがったし、きつとほかにもなんか閃いてそうだぞ。

『勝負しろシマカゼタービン!今度こそ本気の勝負だ!!』

『待て待て、まだ走ったばかりだろディープインパクト。少し休もう、な?』

『ディープでいい、情けねえまま終われるか。休んだらもう一回だ』

そういうとディープインパクトはその場でどっしり座り込んで体を休める姿勢になった。こいつの担当調教師が故障かと顔を青くして駆け寄ってきたが、ディープインパクトの目が俺に向いてるのを見てすぐに怪訝そうになる。

しかたないなあ、俺もその横に座り込んで親父さんに向けて視線を送る。やるよ、とりあえずこいつの気が済むまで。

『どうやらこいつはまだやるつもりみてえだな、どうだい大竹さんよ?』

「ええ、私も負けていられませんね。次は勝ってみせましょう」

そんなわけで、一時間休みを入れてもう一戦。

『届かない!』

『加速が遅かったな』

2戦目、ディープが本気の追い込みをかけてきたけど俺の加速を見違えて差し切れず一馬身負け。今度は最初から最後まで加速しまくりましたが何か?

『そこを走るか普通!』

『邪魔するなら邪魔されないとこ走るもんね』

3 戦目、また前に出てきて邪魔してきたので外側ガードレールギリギリ走り。大外枠の時にたまにやる。距離が長いならその分速く走ればいいんだよ。

デイープが深追いしなかったので邪魔されないから加速し放題、好きな走りし放題で悠々爆走でぶつちぎり。

『なんで…お前…疲れてないんだ…』

『スタミナには自信あるからな、峠育ちを嘗めちやいかん』

4 戦目、外側ガードレール走りにデイープがくつついてきちやったのであつちが先にバテてスタミナ勝ち。

『デイープ！これはやりすぎだ！』

『すみません、大竹さん…』

5 戦目、何か閃いたのかフェイントを吹っ掛けようとしてミスってタツクルしてきた、進路妨害反則負け。騎手さん大激怒、搦手にはまだ弱いと見た。

別にそこまで怒んなくてもいいけどね、アホにダツジ・ステルスで擦られた時と比べれば屁でもないから。

「抜けない!? 動きが全く読めないなんて!」

「走りのテクじゃ負けないよ大竹さん。タービン、やれ」

『お尻フリフリーおつとカーブだ体が外にー』

『そこだ!』

『オウツ…俺のトンネルになんか用?』

『ウワアアアア!!』

6 戦目、親父さん提案のハンデ戦。俺が先行でコース一周中にどこかでデイープが大外以外で抜いたら勝ちの走り屋スタイル。

俺は親父さんお墨付きのフェイントテクニック（競馬用）でがっちりガード。

こいつは親父さんが培った峠走りのテクの応用だから騎手さんもびつくり、そりや公道レースのテクなんて知らんわな。

当然ながら勝ち、走り屋ルールで負けるわけにはいかんよ。

「大竹さん!!もうダメ、ダメです!!これ以上は臯月賞に響きます!!」

結局、これ以上はまずいと調教師がドクターストップを掛けるまで

連戦は続いた。

デューパックト、思った通りやばいやつだった。綺麗だった芝のコースはすっかり耕されて、最後はほぼダートだ。恐ろしい執念だよ。

『まだだ！もう一周!!放せ！押すな!!』

『いや帰れ、もう遅いだろが』

『嫌だ!』

「ああくそ！座り込んだぞ!!大竹さん!!」

「デュープ、今日はもう帰ろう！また来れるからさ!!」

ドクターストップかかっても全然聞こうとしないから俺まで駆り出されてる、疲れてんのになんでコイツの手綱引いてやらにやならんのだ！

時はすでに午後10時、もはや耕され切った芝コースの上でデューパックトVSその他全員の力比べ大会開幕中である。

ちなみにその他大勢ってのはデュープの騎手さんとか関係者と居合わせた群馬トレセン職員たちと俺と親父さんである。

この四面楚歌でなお梃子でも動かないデュープ、かといってこいつを無理に引つ張り回すわけにもいかない。

しょうがないので意地でも動かんと座り込むデュープを親父さんたちが総出で持ち上げ、その下に俺がもぐりこみ無理矢理レッカーする羽目になった。

『くっ！下ろせ!!』

『手間かけさせんなよ、今日はもう終わりだ』

「踏ん張れタービン！車回せ!!馬運車の方から寄せろ!!ゆっくりだ!!」

自分もデュープを持ち上げながら全体の指示してるのは親父さん、社長なだけあってこういう指示とかリーダーシップは凄いなんだよ。なんだか自然とそこに収まるって感じで。

馬運車がゆっくりとやってきて後ろの乗り込み口を開ける、俺はその中に入って怪我をさせないようにゆっくりと下ろしてデュープを荷台に乗せた。

荷台の奥にデーパー、出入り口を俺がふさぐ形なのでもう出られない。出たければ俺を倒してみせろ、なんてな。

で、なんで君は俺の手綱を啜えているのかね？

『お前もうちの厩舎で走らないか？』

『いやです』

クソめんどくせえ。

『ぐっ!? 即答か…』

マジな声が出た、いやマジでそう思ってたけども。デーパーも本気にはしてなかったんだろう、すぐに手綱を放してくれた。

『はあ：俺がこんなに勝てなかったのは、お前が初めてだ』

『ここまで駆けずり回ったのはお前が初めてだよ…』

『なんだか清々しいんだ、今日は気持ちよく寝られそうだ』

『こっちはクタクタだ：どうしてくれる、おかげで予定が丸つぶれだ』

『それは…すまない』

『悪いと思ってるなら素直に乗れよ』

まあ、俺としても悪い気はしないがな。予定といっても誰かと約束があるわけじゃないし。

『ま、いいよ。仕事優先だ、峠はまた別の機会を待つき』

『俺も行ってみたいな、アシナトウゲとやらに。お前のような奴らがたくさんいるんだろう？ 走ってみたい』

『俺よりも強い連中はそこら中にいるぞ。芦名だけじゃねえ、赤城や榛名にもいる。東京にだって探せばいるさ。』

湾岸辺りの連中なんか、きつと俺なんか全く歯が立たないだろうなあ…』

首都高を法定速度ガン無視で思いっきり飛ばすなんて前世じゃ考えもしなかったが、今となっては一回はやつとけばよかったと常々思うよ。

まったくもったいないことをした、馬になってから走る面白さを覚えただからどうしようもないんだがな。

『ワンガン？ 聞いたことないな…』

『機会があつたら探してみるといいさ、まず手も足も出ないがね。ま

た機会があれば会おう、デーパー』

『違うだろタービン、皐月賞でまた会おう。決着はその時だ』

だから行かねえよそんな大会…そう否定してやりたかったけど、この時は俺も疲れてこれ以上返事する気は起きなかった。

## 第4話

公道をレース場とする走り屋は基本的に夜行性だ。深夜から翌朝朝方、真つ暗で走りにくい峠道は交通量がほとんどなくなる。

芦名の走り屋はそこで昼間の姿を捨てて夜の姿となるのだ。

翌日から休日に入る金曜日はこの時間帯は走り屋が集まりやすい日だ、瀬名敏則とコマツ、シマカゼタービンもその一角に過ぎない。

普段はこの地域でも有数の企業である『瀬名酒造』の跡取り息子であり有能な次期社長、その下で一番の酒を仕込む筆頭馬とペット。

しかし夜はこの街でも腕のいい走り屋、悪い言い方をすれば暴走族である。決して一般車には危害を加えないなど超えてはいけない一線があるという一種のマナー意識があるとはいえ、危険走行を繰り返す交通法違反者であることに違いはない。

そんな走り屋の一人である敏則は愛車のスプリンタートレノAE101GT-Zの運転席でハンドリングの確認をしながら、同じ芦名峠の走り屋である良助とドア越しに他愛のない雑談に花を咲かせていた。

少し前、父親である瀬名茂三が群馬トレセンで負かした中央競馬のサラブレッドの名前を出したその瞬間まで。

「ディープリンパクトに勝つただあ!!」

「い、いきなりなんだよ良助。うるっさいなもう…」

「お前!!?あのディープリンパクトを負かしたって!!?あのタービンが!!?」

「うるせえ、コマツが驚いてるだろうが」

外に立つ良助に抱かれて可愛がられていたコマツが目を見ん丸くして不愉快そうに身をよじっているのを見て敏則は顔を険しくする。

コマツも騒々しいことには慣れてるほうだが、耳元で怒鳴られてぎゅうぎゅう締め付けられれば嫌がるに決まってる。

「あ、悪い悪い…で、群馬トレセンの話はマジだったのかよ、街でもちよいちよい噂だぜ」

「トレセン?…そっういやバイトしに行ってた時にボコボコにしたんだよ

な、記者がうざかったとか親父言ってたっけ」

「マジかよ、それじゃあ中央競馬会も雑誌も沈黙したって話題はそれなのか。ネットでも話題に上がってんぜ？」

気持ち悪いくらい今回の群馬トレーニンングセンターでの調教の様子を話そうとしないって、もうみんなだんまりらしいぞ。

一緒に行った記者を取材したが恐ろしいモノを見たような顔をして逃げたやつもいたらしいしよ」

「取材したほうの記者が怖かっただけじゃねーの？」

顎が外れそうなくらい口をあぐりと開け、今日相手にする新人走り屋を顔見知りの走り屋に紹介されているシマカゼタービンと交互に見ては信じられないといった顔で息を詰まらせる。

「なんだよ、いくら中央の競走馬だからって絶対勝てないわけじゃないだろ。ましてや親父が乗ってるんだぜ？親父が乗るとタービンの気合いがすげえのは知ってるんだろ」

「そうじゃねえよ。お前も一応騎手だろ、デーパーインパクト知らねえのかよ？」

「知らねえよ、俺は親父と一緒に地方競馬しか見ないしな」

「ニュースくらい見んだろツ、学校の方で話とかなかったのかよ？」

「向こうじゃ遊びに行く余裕はなかったからな、暇があったらトレーニングの研究してたんだ」

騎手の資格を取るための訓練が厳しくて、趣味で何とか気持ちをつなぎとめて頑張ってきたようなものだ。

交友関係などに割く暇なんてなかったし、地元に戻れば馴染みの顔がいてそれで十分だったのだから。

騎手といっても卒業の際の紹介をすべて蹴って以来、ほかの場所から騎乗依頼なんて一度も来たことがないまさにアホなド新人である。

訓練校での交遊も少なかった自分には同期もわざわざ声をかけてこないのだ。

元々、シマカゼタービンや会社の馬に乗るのに騎手の資格が役に立ちそうだから取っただけで本来は酒造会社の跡取りコースなのだから心構えそのものが違う。

父の計らいでシマカゼタービンの専属騎手という肩書はあるが、どのみち地方競馬騎手はシマカゼタービンを自分で走らせるための資格を取るときについてきたおまけの副業に過ぎないというのが敏則の認識だった。

そもそもシマカゼタービンは自分で考えて勝手に走るタイプの馬である、自分は助言役に徹すればいいのでそこまで技術もいらなかったりするのです。

「有名なのか？その馬は」

「有名なんてもんじゃないぞ、今は日本中の競馬ファンが注目してる注目株だ。クラシック三冠だつて見込まれてるんだぜ。」

この前の皐月賞だつて出遅れからもすっげえ巻き返しでき、俺もテレビで見てたけどもうほかの馬を後ろからどんどんぶち抜くのはすげえとしか感じねえよ」

「ふーん、そういうや珍しくご機嫌でトレセンの仕事を引き受けてるときあるけどそういうことか」

気味が悪いくらい機嫌が良くて、聞けば面白いヤツと遊んでくると告げてシマカゼタービンと一緒に出掛ける昨日の父。

母曰く、こんな上機嫌なのは本当に久しぶりで若返ったみたいらしい。

帰ってきてからも上機嫌、その面白いヤツと模擬レースをするといつもギリギリまで攻め込まれて若いころを思い出してうずうずするのだとか。

「お前、相変わらず興味ないのにはとことん興味ないんだな」

無いね、敏則は新顔の走り屋に馬鹿にされてニヤニヤ笑ってるシマカゼタービンに目をやった。

強い馬に勝ったと言われても目の前にいるのはいつものシマカゼタービン、瀬名家の家族である。

そんな父親の遊びの入った仕事に付き合つて、律儀に全戦全勝してくるあたり親孝行な馬だ。

「正直、だから何だつて話なんだよな。中央の話だし、ここにや大して影響ないだろ。むしろ地方競馬の打撃やばそうだけど、客取られまく



るだろそれ」

「その客を取る筆頭をボコボコにしたのがお前の馬なんだよ。くう！  
芦名の走り屋にこんな逸材がいたとかまるで漫画だぜ」

「お前、タービンに負けたほうだもんな」

「だからなおさらうれいんだよ、タービンが公式でもっと活躍できるかもしれないだからさ」

そういうの嫌うと思うんだけどな、敏則は男泣きしそうなくらいテンションを上げる良助から今からレースを行おうとするシマカゼタービンに再び目を向けた。

相手は今年に芦名に引越してきたばかりの新人、顔のいいイケメンで取り巻キラしい女性たちの声援に手を振ってこたえている。

使用車種はワインレッドの『シビツククーパーEJ1』で足回りなどは一人前にカスタムされた走り仕様、芦名では日は浅いが県外での経験はあるようだ。

それをバトルするのは栗毛の牡馬、シマカゼタービン。こちらは知り合いたちにいつも通り声援を送られている、中には手加減してやれとはやし立てる声も聞こえた。

それにこたえるようにシマカゼタービンは嘶き、右後ろ脚でアクセルを踏む仕草をしながら鼻息でエンジンを吹かすような声を出す。

テンションが上がっているのだろう、あの馬が一番テンションを上げるのは公道レースかサーキットの走行会なのだ。

「もしかしたらオグリキャップみたいに殴りこむなんてのもありじゃねえか、伝説の再来だぜ!!」

「こいつの爺さんツイスターボだぞ…そんな話が来ても困るよ。俺たちだって仕事あるんだ、あいつが仕込みできなきゃ困る」

「それは…まあそうだけだよ、俺だってあいつの酒は好きだぜ？ けど千載一遇のチャンスだぞ？」

「あいつの酒だから契約してるホテルもあるんだよ、うちの商売が成り立たなくなるぜ」

だから酒造りの傍らでそろそろ後継者育成してほしいところではある、その辺りはまだ茂三と調整中だが購入は確実だろう。

「あいつが望んでいきたいっていうなら別だけどき、まず絶対に嫌がるよ。それこそ親父がなんか言わない限り無理だ」

「あー…そういうところお前そっくりだもんな。じゃあ俺が碓氷峠とかほかのコースに連れて行くって誘ったら？」

それは揺れるだろうな、シマカゼタービンも趣味に生きる馬なわけではかのコースでトライしてみたいという欲はあるだろう。

以前に赤城山のコースを走る機会があったときのテンションの上がり方が凄まじく、その時に出会った赤城山筆頭チームの二軍と互角に渡り合ったくらいだ。

相手がやや旧式な180XL中期型だったとはいえ、馬に何度も抜かれてカーブのコーナーリングで負けたので相当ショックを受けたそうだ。

シマカゼタービンが芦名峠をホームとして気に入っていても、ほかのところでは走れるとなればそれは揺れるだろう。親父に漏れたらまず遠征間違いなしだ。

「なあ、もしほんとに行くなら俺も一緒していい？」

「コマツ、お前この兄ちゃんボケっぷりどう思う？」

「ぶもっ？ぶもも、ぶぎゆう」

「お前にやわからんか」

素直に答えたのにボケはひどい、思わず良助を睨む敏則だった。



バトルである、久々のガチンコ公道バトルである。場所は馴染みの芦名峠、下り一本タイムアタック方式。

芦名峠のこのコースはカーブとコーナーが連続する低・中速セクション、直線道路の多い高速セクションが交互に来るコースだ。

最初の立ち上がりからカーブとコーナー連続の急勾配、速度の乗るゆるい直線、5連続ヘアピンカーブ、ゆるい道のインターバルをはさんで3連カーブ、L字カーブの下りと上り坂、3連ヘアピンで難所は終わりといった感じだ。

一番苦手なのがL字カーブ、登りになると一気にスピードが持つてかれちまう。馬だからどうしてもパワーじゃ勝てんわ。

相手は引越してきたばかりの新顔、都会のイケメンが運転する『シビッククーペEJ1』だ。結構手が入ってるように見える。

「始めるぞ。何度も言うが、こいつはタイムアタックだ！負けそうだからって相手にアタックかけるようなことするなよ!!」

「言われてるよお馬さん」

いや、良助はお前に言っただと思うぞイケメン、それくらいわからんもんかね。

新米はともかく新顔はそういうところ扱いにくいところあるし、走り屋ってのは走りへのプライド高いからさ。

「へッ」

「なんだその目は！人間の怖さを分かっていないようだな。ちょうどいい、この田舎者共と一緒に前も調教してやる！」

「ブルッブルッ」

おーこわおーこわ。アツカンベー！

「馬鹿にしてやがるな？良いだろう、首都高で磨いた腕前を見せてやる!!」

この東京もん、煽り耐性無しか？これちよつと不安だな。勝ち筋見えただけ。

「カウント！5！」

すぐ横でEJ1がエンジンを吹かす、この感じが溜まらない。俺も後ろ足でアスファルトを搔く。

「4！」

この感じ、競馬のゲートにはない緊張感。

「3！」

行くぞ、俺もここでは長いから新顔にはすぐには負けてやれん。

「2！」

息を吸う、整える、足に力を入れる。

「1!!」

スタートダッシュで前が出る!!

「GO!!」

EJ1のエンジンが真横で咆哮。甘いな、それじゃあ俺の立ち上がりに負ける。デイクのほう为数段速い、皐月賞を取ってからもっと磨きがかかっている。

おかげで練習に付き合うこつちもずいぶんスタートに磨きがかかったってもんだ、わざわざ群馬に来るようになったしあいつを相手するのなら鍛えなきゃ話にならん。

「シマカゼ先行！前に出たぞ!!」

後ろからライトが照らされる、スタートはまずほどほどに長い直線。俺は左車線でセンターラインに少し寄り気味にラインを取って前に行かせないように走る。

うまい奴はここであえて抜きに来るかきつちりつけてくるが：うん、なんか遅い。追っては来てるけど詰め方が緩い。取り巻き連れてきてたけど、見栄を張っているにしてもちよつと想定外に踏み込みが甘い。

エンジンのふかしが甘いのか、それとも勝てるから少し遊んでんのかな？ま、いいか。飛ばそう。

「シマカゼだ！シビックはまだ後ろだ!!」

「あの野郎！先生ナメてやがる!!」

まずは右折からのS字カーブ、まだ速度が乗っていないから悠々と曲がれる。ここからここから、馬の足だからってナメちゃあかんよ。

すぐ後ろにEJ1、ライトの感じからしてやつと詰めてきたのか。こつちも普通にカーブか、あまりドリフトの音が響かなかつたな。

左折が終わって少しだけ直線、馬体をずらして車線をブロック。体感速度時速50キロ、坂道がまた少しきつくなる。

直線で速度を稼ぐ、車の加速にはさすがに負けるから稼ぐときに足を稼がなきゃならん。立ち上がりで勝ってもエンジンには負けるからな。次、第2コーナー、左折、ここからだ。

「シマカゼが来た、後ろにEJ1、近いぞ!!」

後ろでエンジンが吠える、飽きちやったかな？なら楽しませてやるよ。

速度80、足が軽く感じる。坂を思いつき走り走ると平地に比べて飛んでるような感覚になる、良い感じに乗ってきた。

曲がるぞ、一歩目で体をよじる、足は最小限の踏み込み、体の推力を消さないように、ステップするようにカーブ!!

EJ1も俺を追い越すように外側から突っ込んできた、ブレーキングドリフトの音が後ろから響いてくる。

でも遅い、曲がる前にブレーキを踏んで速度調節を入れたな。俺が内側ギリギリを攻めているから外は広く開いてるんだ、普通の車よりも随分とやりやすいはずなのにそれか。

なまっちよろいな、そんな遅いカニ走り俺の加速に追い付いてくれるなんて思うなよ。

速度は落とさないように体が横を向いたまま滑空してるみたいになる、踏み込みをアスファルトの上で滑るように、右二つの足でスリップ方向を制御して曲がり切る!!

「曲がった！EJ1は追走!!」

「いや、ハナを入れ損なつたんだ！シマカゼが差を広げるぞ!!」

馬に負ける気分はどうだい、坂道なら車にだって足じゃ負けんよ。ほら次のカーブだ、差を広げてやる。

もっと速度を上げる、そろそろ体感時速100km行けるくらいには体も整った、新顔相手だから手加減しないよツと!!

「相変わらずすげえ足だ！4本別々に動いてやがる!!」

「全然減速しやがらねえ、コーナリングもキレキレだ!!」

いや減速してるからね、ただ馬の足だと加速が間に合わなくなるよ。うな眼に見える調節しないだけで。

右折、前足を軸に走りながら流れる後ろ半身をぐるりと流しつつ後ろ足でアスファルトを叩くように踏み込んで流れを抑える。

ここで重要なのは踏み込みで流れを止めようとしないう事、ある程度緩和したら足をもう一度差し直して支えつつ力の向きを前に変える、これを繰り返す、気分はタップダンス。

体の流れが収まると同時に前に走るのではなく少しだけ横に走らなかつつカーブを曲がり、終わると同時に一気に踏み込む!!

次の左カーブも同じ、速度を落とさず一気に突き進む。蹄鉄がカリカリ音を立てて削れる感じがするが、まだ許容範囲だ。

直線体感時速95キロ、もつと踏み込む、そらそら!!

「EJ1、かなりオーバークションだな」

ギャラリーの声に少し後ろに耳を傾ける。後ろからエンジンの音が強くなる、ブレーキの代わりにタイヤの悲鳴が強い。なんだよ、この程度でカツカ来てんのか?まだ挑発してないぞ。

さらに大きい右カーブ、少し体の傾きを多めに取りながら横目で後ろに視線をやる。少し離れてEJ1がブレーキングドリフトでカーブに入る、確かにオーバークションだ。

この程度のカーブなら慣れてる奴は初めのきついところで角度を調節するだけで抜けられるところなんだがな。

無理に内側に寄せようとして無理にハンドルを切ってやがる、見た目は派手だが速度を殺してる。

現に少しずつ、カーブを曲がるごとにEJ1が離れてる。エンジンを吹かせばあつという間な距離だけど、問題はこの距離を埋めるのに必要なスピードがこの低速セクションである曲がりくねった道じや出せないってことだ。

小回りの良さは車に勝る数少ない利点だからな、あとは本当に自分の体一本だから操縦のレスポンスがないこと。

あと二つカーブがある、そこを抜けたら勝負所だ。そこまでに勝負になるようにしておかなきゃな!!

「シマカゼ先頭!!EJ1は…ああッ!離されてる!!」

「追い付いてねえ!タービン行けえ!!」

前半最後のカーブ。ギャラリーの言葉通り、EJ1との車間はかなり開いてる、あいつがカーブを曲がり切るときには俺が次のカーブに差し掛かるくらいには。

俺は最初から同じように速度を落とさずカーブを抜けたが、あつちはブレーキを強くし過ぎて速度を殺してる。立ち上がりもなっていないから差が開くばかりだ。

でもそれでいいと思ってる節があるんだろう、何故ならこのカーブ

を過ぎればゆるい左曲がりを描いた直線の高速セクションだからだ。

さあ正念場だ、2車線でも両幅に車寄せ可能なスペースがあるそこそこ広いここは馬の俺じゃどこにいてもブロックできないから一番抜かれやすい。

だから俺は思いつきり加速する、体感時速は110、どこまで上げられる？今の俺は下りでどこまで伸ばせるかな？

後ろでギヤラリーのざわめきと同時に車がカーブを曲がり切った音がする、ついで思い切りエンジンを吹かす音。

俺はもうヤツの射程距離内だ、EJ1がエンジンを吹かして一気に距離を狭めてくる。やっぱり車は速い!!

あつという間に並びかけた、ゆっくりとだけど横を抜かれてる。でもこいつ足元が怪しいぞ？

「ああまずい!!」

ギヤラリーが悲鳴を上げたと同時に高速セクションを抜けて右折カーブに入る、その直前に俺は少し体を浮かせてわずかに減速して右折カーブに入る。

瞬間、横に並びかけていたEJ1の車体が耳障りなタイヤの擦れる悲鳴を上げて外に向けて車線が膨らんだ。

タイヤのグリップが遠心力に耐えきれず、外側のガードレールに向けて車体が滑っていく。アンダーが出た、運転手のイケメンが必死の形相でハンドルを切っているがもう遅い。

ガードレールに高速で車体の左側面がぶつかり、グラインダーのような耳障りな音がしたと同時に大きな金属の跳ねる音。

ガードレールに弾かれたワインレットのEJ1の車体がスピニング、前後が180度ターンし右側面をぶつけてそのままガードレール沿いに何メートルかスリップして止まった。

「やっちゃまったあああ!!」

『やりやがった、まったく』

左にゆるいカーブのある高速セクションからすぐに右折から始まる5連ヘアピンは一番の難所だ。

スタートから適度に面白いカーブが連続するのがこの道だけど、そ

こを抜けるとこの左に湾曲してるだけの走りやすい下り直線があった。そこからいきなり右折からの5連ヘアピンカーブが待ってる。

パワーのある車に乗ってて相手の車を最初のカーブで抜ききれなかったら、この道で抜いてアドバンテージを取ろうっていうやつは多い。

峠の走り屋としてはそういうのは情けない勝ち方って言われてるけど、勝ちも勝ちだしそういうスタイルも一つだから俺は別に何とも思わない。

問題はこの直線で飛ばし過ぎて次の曲がりでも適応できないってのが新顔や新米にはかなり多い、大体どこかでぶつけるか擦る。

中堅の走り屋だって結構気を遣うこの芦名の峠では危険な場所の一つだ。

だからここは新顔なら少し落とさなきゃいけないだよ、普通の走り屋には。左曲がりも急に右曲がりになって感覚も狂うしな。

今回みたいにバトル中だと負けてかつか来てるからつい飛ばし過ぎちゃったりとかもするわけだ。

どんなことを考えてたのかは知らんが、あのEJ1のドライバーは運転をミスった。結果がこれだ。

俺はクラッシュしたEJ1から少し離れたところでゆっくり減速してUターンして戻る、さすがに事故車を放っておいてタイムアタックとかありえない。

少し戻ると事故を起こしたEJ1はすぐに見えた、見た限り幸い火災とかはしてないみたいだ。

でもこれ、板金7万コースとかじゃすまないな。側面ボロボロだし、左タイヤの軸が歪んでる。オイル漏れがないのが奇跡だよ。

フロントガラスもひび割れだらけ、側面に至っては全損だ。焦げ臭い感じはしない、エンジンは動いてるけど異音もないからダメージは入ってないみたいだ。

『あーあ、派手にやったね。生きてる？生きてるね、よかった』

ガードレールに左側の車体をこすりつけたままのEJ1の中を覗き込むと、バケットシート運転席ではすごい顔で荒い息をしたイケ



メンが目を丸くしていた。

運転席は見た限り歪んでいたりはしてないな、挟まってる様子もない。でもスピードメーターがぶっ壊れて130で止まってら、高くつくぞこれは。

ま、車はおじやんでも生きてるから良し、怪我也見た感じ打ち身程度に見えるし後で病院だな。連絡とかは多分きてくれるだろうギャラリーの人たちに任せるとして、まず発煙筒だ。

俺が走るときに着ている馬着には取れる位置にいくつかポケットがついててな、その一つに事故とかのために発煙筒を常備してるよ。

そいつを口で引き抜いて、足で蓋を外したら着火部分をアスファルトに思いっきりこすりつけてファイヤ!!

1個付けて道路の登り側に転がしたら、もう一個もすぐに着火できるように啞えたまま待つ。一般車とかが来たら合図しなきゃ事故増えるからね。

それにこれで敏則か事故に気付いたギャラリーの誰かが来てくれるはずだ、派手な音を立ててたしな。

「なん、なんなんだ、お前」

「ブルルツ、ヒヒイイン」

上から下ってくる車が見えたので口に啞えたほうもつけてよく見えるように振り回して合図していると車の中からうめき声が聞こえた。

我を取り戻したのかい、イケメン。馬だよ、見りゃわかんだろ。

## 第5話

2005年6月4日『芦名山ダウンヒルタイムアタック・中堅戦』  
息がもはや切れかけている、芦名峠の終わり近くまでずっと全力疾走すればそうもなる。

足もキツイ、いつ滑るかわからない、そんな状態で俺は峠の最後のコーナーを内側に沿って回っている。

速度なんて考える余裕はない、とにかく走る、出せるもの全て出して走りまくる以外もう他にない。

外側には良助が操るワンビアカスタム、シルビアS13をベースに180XLの前部パーツを組み合わせたカスタムマシン。

金のない良助が学生の頃からバイトで稼いで何とかためたお金で買ったシルビアをカスタムしてきた至極の旧式。

俺を追い越そうと4輪ドリフトを繰り返すワンビアカスタムの運転席では良助が笑っている、あいつは気付いてないだろうけど。本当に楽しそうに笑っている。

俺も楽しいよ、こうして車と張り合って走れてるんだぞ、また強くなつたと実感できる。

「ブウン!!」

最後のコーナーが終わる、あとはゆるいインターバルを挟んでのふもとまでの続く直滑降のみ。ふもとの参道前では計測係が待っている。

もう小手先勝負はいらない、あとは純粋な脚力勝負。俺の足かあいつのエンジンか、ただそれだけ。

俺は最後の力を振り絞る、同時に隣でワンビアのエンジンが吠えるのが聞こえた。

1,6リットルのノンターボエンジン、これも古い車から引っぺがした中古オブ中古、だが、敵として不足なし。

良助と目が合った、あいつももう止まれない、俺も笑う、互いにアケセル全開だ！

「こちらゴール地点、見えたぞ、シマカゼと良助のワンビアカスタム！やべえ、本当に並んできやがった!!」

あいつの出せるだけの速度で流して入った4輪ドリフトのコントロールは完璧だった、立ち上がりも出口でスライド抑えてスムーズに立ち上がっている。

俺だって負けるもんかよ、小回りが利く分車よりもスピードを殺さず曲がり切ってワンビアカスタムの横に併走して見せる。

遠くから聞きなれた計測係がトランシーバーに怒鳴っている声が聞こえる。そりやそうだ、こんな競り合いをするのはめったにないんだから。

隣に右隣に良助が乗るワンビアカスタムがいるのは見える。下りで、少し前に俺を負かしたあいつの車が、並んでやがる。

良助は腕のいい走り屋なんだ、腕を磨いて強くなったんだ。ワンビアだって、旧式でもいろいろ手を加えて今の世代に追従できるくらいに仕上げてきた最高の車だ。

あいつがかけた情熱は俺も痛いほど知ってたんだ、俺だって一緒になって手伝ったんだ、壊れたら直してカスタムして形にしてな。

それで俺に何度も挑んで、勝った、俺を超えた、でもな、でもな!!今はまた隣にいるんだ、うれしすぎるだろうが!!

「ワンビアが前に…シマカゼも加速だど!!競り合いだ！良助とタービンが競り合ってやがる!!」

「馬鹿野郎どもが突っ込んでくるぞー！」

負けたくねえぞ、せつかくここまで来たんだ。意地でも食らいついてやる!!口から泡が出てくるが構いやしない、最後の最後まで食らいついてぶっちぎってやる!!

「計測係、気合入れろお!!一瞬で勝負が決まる、来た来た来たあッ!!」

良助もアクセルを吹かす、俺も蹄を鳴らす、チキンレースじみた最後の直滑降。エンジンがさらに咆哮する、俺も気合を入れて走る、走る！走る!!勝つのは俺だ!!



早朝、敏則のスプリンタートレノAE101GT-Zに後ろから追走されながら俺は公道を走る。

負けました、良助のワンビアカスタムとタイムアタックしたけどダメでした、くそ、最後は喰いつけたと思ったんだが。ハナ差で負けたぜ。

あいつのワンビアカスタムは金がないのをこねくり回した旧式だから他と比べたら性能はそこそこだけど、やっぱり車のパワーは偉大だ。

でもジムカスタムみたいな特長がないのが特徴なスペックは滅茶苦茶怖い、付けこめる隙がなかなかねえから。

「タービン、そんな元気がない走りだと尻のタイヤの跡が目立つっちゃうぞ」

うぐ!? 気にしてること…ニヤニヤしやがって敏則のヤツ、反応を面白がってやがる。

いつも夜明けあたりまで走り回るから眠くなったときは少し仮眠するんだけど、寝相悪くて良助のワンビアカスタムの右前輪に尻を押し付けちまったんだ。

おかげでホイールの跡がお尻にくつきりよ、まるでSUVが良く車体後部にくっつけてる予備タイヤみたいな感じになっちゃった。

しかもホイールの汚れが原因だからうちに帰って洗わねえと落ちねえとききた、寝ぐせより恥ずかしいぜ。

くそ、今度あいつのトラックに蹄鉄で泥ハンコ押しやる。知らずに運転して笑われるがいい。

「睨むなって、ひと眠りしたら洗ってやるから」

「ブルッヒイン!!」『ちゃんとした洗剤でだぞ!!』

「へいへい、わーってるって。ちゃんと石鹼使ってやるから」

朝日に照らされてる公道を走っていくと見慣れた酒蔵が見えてくる、瀬名酒造は会社である酒蔵の裏に社長とその家族が住む家があ

る。

昔は仕込み用の器具を置いていた納屋を改装して立派なガレージにしている、設備は古くても車屋みたいなことができるようになってる。

小さなころから俺はここで親父さんや敏則の車を見てた、遊んで怒られたのが懐かしいぜ。

いつもの見慣れた会社の前を通って、横道に入って会社の裏手に回るともう見慣れた我が家だ。

車庫のほうに行くと、親父さんが自分の車のボンネットを開けてエンジンの点検をしていた。

昔懐かしい白黒カラーのあの車、スプリンタートレノAE86GT—APEX。親父さんが昔から乗り続けてる長年の愛車だ。

昔はあれでこの芦名の山を駆け回っては他の場所に遠征して最速を競ってたそうさ。

今はもう年代物だから派手な攻めとかしないで普通に乗り回してるけどエンジンそのまんまだから音が違うんだよな。

「おかえり、随分走りこんできたみたいだな。タイヤ、削れてるぞ」「予備ならもうあるから大丈夫だよ。それより親父こそ早いな、どっか行くのか?」

「ああ、ドライブに行こうと思ったんだがエンジンが機嫌損ねてるみたいなんだ。だがどうもわからなくてよ」

使い込んで年季が入ってる4A—Gエンジンは親父さんが手塩にかけて調節したやつだ、機嫌損ねるとは珍しい。

エンジンの機嫌が悪いと車に響くし、そのまんまにしてたらほかのところも悪くなるしな。

「手伝おうか?」

「頼む。タービンも手伝ってくれ」

へいへい、俺の出番か。馬は人間より耳がいいからね、どらどら。「回すぞ」

親父さんがエンジンを回す、確かに少しいつもより音が甲高い。それは親父さんも敏則もわかってる、いや、カリカリ?

なんかカリカリしてる、それがエンジンに反響してるのか？これは…空冷ファンか？

「タービン、どうだ？」

「ブーン、ブルブルブル」『空冷ファンかも』

着たままにしていた馬着のポーチに常備している細かい作業用の道具類からトングを引っ張り出して啜える。

とりあえず親父さんが用意してる整備部品置き場から、4A—Gエンジン用の空冷ファンの部品をトングで引っ張り出して出す。そこからへんが悪いかもって意思表示だ。

「空冷ファンのブレード？歪みは無いように見えたんだが…いや、もしや…」

「解ったのか、親父？」

「ああ、エンジン止めるからお前交換してくれ。空冷ファンのカバー、表じゃなくて裏をじっくり見てくれ」

「おう」

親父さんは何か気付いたみたいでエンジンを止めると手袋をした敏則が手早くエンジンに手をいれて、空冷ファンのカバーを付け替える。

敏則が手でOKサインを出すと再びエンジンをかける。うん、異音がなくなつた。

「親父、このカバー不良品じゃないか。中が膨らんでる」

「エンジン熱で膨張しやがったか、バッタもん売りつけやがって」

「どこで買ったんだ？津雲さんはこんな悪いの売らねえだろ」

「津雲も内藤も品切れだよ、新しくできたチエーンで間に合わせに買ったんだ」

あー、街に新しくできた車屋。店構えはデカいいつものチエーン店、人間の頃は買いに行つたつけ。一般人向けにしてもひどいな。

「しかしまいったな、これじゃ乗れねえや。今付けたのも同じ店で買ったんだ。…悪い、しばらくお前のトイチ貸してくれないか？」

おっと待て親父さん、どこか行くなら俺に乗るといいぞ。AE101もいいけど馬の背中だつていいだろ？

「タービン、お前も走り回っただろ？気持ちはうれしいけど今日は良いよ。ちよつくら津雲と内藤のとこ行って、いつ部品が届くか聞いてくるわ」

残念。

「早くね？まだ8時だぞ？」

「市場に寄ってニンジン買うからいいんだよ、ついでにガソリンも入れてやる。ハイオク満タンでな」

ニンジン！ラッキー！！

「ガソリンはいいよ、俺は何もしてねえし…」

「しばらく借りるかもしれないから前払いだ、あとタービン、お前を待ってるヤツが第一馬房にいるから顔出せよ。じゃ、悪いけど片付けといてくれや」

そういうと親父さんはまだ外に止めたままだった敏則のAE101に乗って行ってしまった。

「…片付けて寝るか」

「ぶるう」『そだな』

そんなに散らかってるわけじゃないから道具箱を片付けてハチロクのボンネットを閉めれば終わりだ。

その足でいつもなら行かない第一馬房に向かう、普段はあまりこちら辺を通らない。なぜかっていえば、俺の馬房がそもそもこの近くがない。

なんでこっちにいるのかって、そりやもちろんさつき親父さんが言っただことを確かめにさ。

『こんちわ、珍しいな、爺さんがここにいるなんて』

『なんだ、ドーベルマンの次はお前か？今日はいい天気だからな、日向ぼっこや』

馬房の手前、寝藁の代わりにぼろいマットレスが置かれた休憩所に一匹の年老いた栗毛の牡馬が寝転がっていた。

ここでは珍しく酒造りじゃなくて乗馬とか新人の相手とか相談役みたいなことをしてる爺さんだ、もう年だから今はきれいで広い一番奥の馬房でゆったりしてることが多いんだがな。

昔は中央の競走馬で大きな大会にも勝つたらしいが、なんと  
か、俺には想像つかねえんだよな。

俺に競馬を教えてくれた恩師みたいなもんなんだが、古い知識だ  
つたからむしろ一緒に勉強してた気もして微妙。

気のいい爺ちゃんだがつがつしたところもないしな。

『なんか話あるんじゃないの？親父さんがそう言ってたよ』

『茂三のヤツ、気を利かせやがって。どうだった、今日も走ってきた  
んだろ？』

『負けたけどな。でも楽しかったよ、良助のワンビアに直線で何とか  
食いつけていけるようになったからな。次は差してやるさ』

『頑丈な足してるなお前さんは。車と張り合う馬なんてそうはいない  
だろうに』

『下りの峠限定だよ、うまい奴らからしたら俺は敵じゃないしな』

俺の教えたやつらには先生とか呼ばれてたりするけどさ、やっぱり  
車に乗ってるあいつらは速いんだわ。ちよつと悔しいんだよな、先輩  
としては。

いいマシンに乗ってきたら新人にだって苦戦する、つくづく俺は馬  
なんだよなあ…俺も乗りたいよ。

『一緒に走るとマシンの恐ろしさってのがよくわかるよ』

『よくいう、怖いって言っても性能だろ。ああいうバンバンでかい音  
を鳴らしてるのが怖くないお前は異常だよ。俺も慣れるのには苦労  
したんだ』

『親父さんのハチロクに乗ったからかもな。俺に取っちや車も音も普  
通…いや、憧れなんだよ』

元人間だ、というわけにもいかないから普段はこんな回答になる。  
でもあの時の経験が俺の走りにデカい影響を与えたのも事実だ。

力強いエンジン音に窓の外を流れる風景、コーナーを曲がるたびに  
横からくるGとドリフトのスクール音。

そして普通に走ってるだけじゃ絶対に味わえないスリルと風景、4  
輪ドリフトしながら流れる風景なんて初めて見た。

一瞬で通り過ぎていく対向車のヘッドライトを見たときは思いつ



きりビビったのにさ、思い出すとまた経験したいって思うようになる。

あれですっかり公道を走るのに虜だ、馬の身である風景をもう一度見たい。そう思ったら走るしかないんだよ。

『ところでだが、お前、競馬に興味が出てきたのか?』

『どうした急に』

『茂三の奴が言ってたのさ、お前が中央の強い馬を蹴散らしてるとな。地方レースもまともにやらないお前がだ』

『ただの練習相手してるだけさ、模擬レースじゃ負け無しだがありややべえわ。いつもひやひやしてる』

というかレースは出たら勝ってるぞ、プレオープンとか小さいやつなら。だいたい短距離かマイルだからあんま飛ばせないけど。

年間登録料とかなら余裕で勝ってるし、じやなきや登録なんてとつくに抹消されとるわ。

『ひやひや? わかってんだろ? お前は実質中央のG1の勝ち星に手が届く力量がある、今から殴りこめば盛り上がりそうなもんだ。それでも興味ないのかい?』

無い、はつきり言って全く惹かれない。

『走るのは好きだけど競馬に興味あるかってのは別だぜ。正直惹かれねえんだよな、ああいうの』

『でも練習には付き合ってるだろ? それもかなり気合入ってるんじゃないか?』

『そうか?』

『そうさ、競馬に興味のないお前が競走馬を負かすために頭捻ってんじゃないか。いつもは車と酒だったのによ。今だってお前、ワンビアを差すって言ってやがったぜ』

そういえばそうだな、ほかの競走馬を相手にしたことはいくらでもあるけどあいつとやりあうときはなんていうか、燃え方が違うんだよな。

不思議と力が入るっていうか、最近はいいつには負けらんないって思ってる。走り屋のプライドとは別に、あいつだけには先に行かせた

くない気持ちだ。

ま、あいつは良い奴だしな。そりゃ手加減なんて絶対しないわ、走ってて楽しいんだから。

『競馬は良いぞ、強いヤツとのレースは燃える。お前を燃やしてくれる奴がもつといるかもしれないぞ』

『嫌だな、気が休まらん。振つかかってくるのが大きすぎる』

でもそれ以外どうでもいいんだよな、正直あいつと勝負するなら群馬トレセンで十分なんだよ。公式レースとか面倒なだけじゃんか。

『勝ちまくれば種牡馬だ、良い飯食って、ごろごろして、イイ牝とやりたい放題だぞ?』

『いらねえな』

ぶつちやけ繁殖とかまったく興味ねえし、馬にデカくならんによ：あれだろ、できねえと薬で無理矢理とかだろ、絶対嫌だわ。

グラビア見るとおつきくなるから不能じゃねえけどな、敏則と一緒にいい女を見てニヤニヤしてたのはいい思い出。

いい飯って言っても馬の飯だろ、俺はうちの余り物サラダのほうが好きなんだよ。厩舎の飯でコロッケ出る? 出ないだろ。

『金が入る、名誉も入る、お前は有名になって銅像すら立つかもしれない、自分の名前がレースの名に残るかもな』

『金以外余計だわ』

名誉も銅像もいらんわ、めんどくせえ。というか俺の名前がレースに? シマカゼタービン杯とか? 滅茶苦茶恥ずかしいんだけど。

ラベルに使われるくらいで十分、産地直送野菜とかについての自分が作りましたってやつ。俺も出したぞ、酒で。

『茂三や敏則が喜ぶぞ、きつと。瀬名酒造の名も広まる、酒がもつと売れるぞ』

『爺さん、それ本気で言ってる?』

『…すまん、例えが悪かったな』

ぶつちやけ敏則も親父さんも必要以上に有名になるなんて死んでもごめんってタイプなんだよ。

そもそもうちの酒は仕込みに時間がかかるし全部手作りだ、生産量

なんてたかが知れてんの。

それでも今まで何不自由なく暮らしてんのは経営と収入と生産をうまく調整してほどほどでまとまるようにしてっからだ。

そんな否応なしに有名になったらうちは破滅だわ、そんなの嫌だぜ。

『ディープリンパクトはダービーを勝ったぞ』

『あいつならそうだろうな』

2400走ったか、前の時は俺も走らされた。前は譲りませんが何か？ 模擬レースは全部千切ってやったわ。

『：ほんとレースの方には興味なさそうじゃなあ』

『爺さん、わざとやってんだろ？俺が中央に行きたいとごねるとでも思ってたのか？』

『かもしれん、と思ったがやつぱりダメだな。お前は変わり者だ、シービーもこんな奴を見たら大笑いしてただろう』

分かってんなら聞くなよ、俺は気儘に公道レースしてたほうが向いてるんだよ。変な期待なんかかけられても困るわ。

強い弱いなんて仲間内だけでワイワイやってるくらいがちょうどいい、趣味は趣味だよ。

それにさ、やつぱ芦名の峠を走らないと力が出ないんだよ。俺が見たいのはそつちなんだから。

『それでもお前は行けと言われれば行く。断言するよ、一回は絶対に走るだろう』

『あり得ねえよ、そんなの。嫌だし』

『だろうよ、お前はそういうやつだ。でもお前は義理堅いバカ馬だろ、悪ぶっても変わらん。行くときは行くさ。』

それが悪いことってわけじゃねえ、いい経験になるし走っても儂は喜ぶほうだぞ？良い土産話ができる、俺の弟子はすごいぞってな』

『土産話、かあ…』

そんな風に言われちゃったら俺ダメじゃん、解ってやってんじゃん。ひどい先輩もいたもんだよ。もっと強くならなきゃな、せめてもっと車に勝てるように。ちよつと酒の仕込み手伝いに行くか。

『機会があるかどうかなんてわかんねえが、もしそうだったらせいぜい頑張るさ。そもそもありえん話だけど』

『あり得るさ、あのレースならあり得るのさ。もしお前がデイーピンパクトに勝ち続けていたら、そのデイーピンパクトがこのまま連勝し続けたら、必ず暮れの中山はお前を呼び寄せる。』

お前の血はそういうのを持つてるのさ、このメジロモンズニーが断言するぞ。かっかっか！』

## 第6話

芝コース、距離3000メートル、群馬トレーニングセンターを三度訪れたディープリンパクトと大竹が主目標として据えた模擬レースは菊花賞を見据えたものだった。

芝コースを駆ける、大竹は相棒の尻を鞭でたたいてスパートの合図をしながら急激に来る加速に歯を食いしばりながら前を走る栗毛の背中を見つめた。

ディープリンパクトは小さく嘶きながら思った通りの追い込みの足を炸裂させ、シマカゼタービンの背中がどんと迫る。

ゴールまで残り1000メートル、普通の馬ならこのまま加速していけば追い抜いていける。

皐月賞でも抜いた、日本ダービーだって勝ち抜いてきた。今の日本中央競馬ではトップと言える末脚をディープリンパクトはもっている。

どんどん近づいてくる背中、行けると感じた、手ごたえはぼつちりだ、今度こそ前に飛び出してやれるのだ。

「そんな…」

だから信じられなかった、追い込みは完璧だった。スピードも、加速も、ディープリンパクトの足も、タイミングもすべて完璧だった。

まるで飛んでいるように走っている、自分たちに羽が生えているかのように。なのに、シマカゼタービンとその背中に乗る瀬名茂三の背中が大きくなるらない。

3馬身、そこまで迫った、あと少しだ、あと少し、前の時はこれで追いつけていたはずだ。なぜ、止まってしまうんだ？

(速くなってるのか、あいつも強くなっているというのは分かっていたはず、なのに!!)

シマカゼタービンがスパートを入れた様子はなかった、ならばディープリンパクトの最大加速でなお届かない速さでシマカゼタービンは巡航しているのだ。

咄嗟に持ち込んだ携帯型の速度計に目を落とす。時速80キロ、狂っていた、自分たちは明らかに狂った速度でスパートをかけていた。

つまりそれ以上の速度で今もシマカゼタービンは走り続けている、2000メートルを走り切った後にも関わらずだ。

なんだそれは、ふざけているのか、一体どこからそんな足と馬鹿げたスタミナが出てきているんだ？普通の逃げ馬なら2000メートルも逃げればどんなスタミナを持つのが垂れるのだ。

それこそ彼の祖父のツインターボしかり、メジロパーマーしかり、サイレンススズカでさえも2000メートル前後が限界だった。

ずっと全力で走っていられる馬なんていないのだ、最後まで全力で走るのならどこかで足を溜めるのが普通なのだ。

垂れなければおかしいのだ、そうでなければ折れてしまうのだ、かつての相棒のように、あの時のように。

なのに、目の前の馬にはそんなものが一切感じられない。常に全速力で、最後の最後までただただ加速していく頭のおかしいレースを實現している。

圧倒的なスタミナ、それが実現する終わらない加速と持久力、それを支える異常な体の頑丈さ、そして大逃げという何のひねりもない作戦。あれはただ速いだけだ、ただの力技だ、でもそれが強いのだ。

「ブウン！ブウウウン!!」

信じられないモノが始まる、シマカゼがさらに加速する。ゆっくりと、だがどんどんと差が広がる。ディープリンパクトの足が垂れ始めているのに、そこからまだ加速する。

ディープリンパクトは身をよじるように、追い付こうと足を動かす。大竹のそれに応えるようにもう一度鞭を入れる、だが足は動かない、これが今の全速力なのだ。

敏則曰くこれは余力などではない『最高のタイミングで最終ギアに入った上でのアクセルべた踏み、エンジンブロー限界までぶん回す荒業』という文字通りすべてを出し切った危険な最大出力。

そこまで立ち上がるのには馬自身が苦勞するのだと言っていた、体

への負担もあって苦しいはずなのだ。でも必ず彼はそれを見せてくる。

それ程の相手がディープリンパクトなのだと、常に己の全てを出していないと勝てない相手だとシマカゼタービンは認めているのだと。

こんな風に本気で勝ちに行く馬はディープリンパクト以外にはそれこそ数える程度しかいない、シマカゼはいつも全力でぶつかっているのだ。

(届かない)

だから悔しかった、悔しすぎた、あの背中が遠すぎるのだ。どこまでも自分の前を行ってしまう背中が遠すぎる。

自分たちは全力で走っている、ディープリンパクトは全力でシマカゼタービンを追っている。でも届かない。

2000メートルまでは勝機が見えた、2400メートルでは負けが込んだ、3000メートルでは影さえ踏めない。

これが今まで自分の勝利してきた騎手や馬たちが見てきた光景なんだ、自分とサイレンススズカはこういう風に見えていたんだ。

作戦も何もぶち壊す大逃げ、追いかけて追いかけてなお届かない、その先でさらに加速して突き放されていく。

まるでレースをしに来た走りではない、文字通りのタイムアタックをしに来たような逃げ、それがサイレンススズカだったから。

(悔しいな、ああ、どうしてこんなにも悔しいんだ)

そんなの簡単だ、自分がいた場所だったからだ。そこに自分がいないからだ、相棒をそこまで引き上げてやれないからだ。

シマカゼタービンはゴール板を通過する、3000メートルを悠々と走り切る、かつての相棒すらあり得なかった距離を。夢だった、それがそこにいた。



さすがに3000メートルはなかなか厳しいぜ、何とか勝ちを拾ったがただけ詰めてきやがったあいつら：ほんと怖いわ。

芦名峠で鍛えてきたけどもう次はどうなるかわからんな、こりやホント、次の練習の時は抜かれかねん。

でもどうしたんだろうな、なんか大竹さんさっきのレースから落ち込んでるみたいだったけど。

親父さんと離れたところで喋ってるっぽい、聞こえないが。というかデイープが邪魔、逃げなんかしないのに監視されてちやコースで雑誌読むくらいしかないよね。

『なんだそれは』

『車雑誌』

トングを使って表紙を一枚ぺらり、良いよねこれ、このフェアレディZのフォルム。かつこいい、乗りたい。

でもスカイラインもいいよな、R33とかデブっていうけどこの重厚感がまたいい味じゃないの。

これで前を爆走されたら威圧感すげえだろうな、やばいぜ燃えてきちゃうよ。

お、アルトの特集もあるぞ。最新型はやばいよな、あのちっちゃいボディで4WDあるし、軽いからぐいぐい行くんだよな。

下りの軽自動車は意外と伏兵だったりするんだ、うまい人が乗ったら手に負えない。

しかも軽自動車だから安価なほう、だから車体以外にもいろいろ手を入れる資金が余りやすい、フルチューンしたら怖い奴だよ。

『変な新聞だな、俺たちの姿が乗ってないぞ。こんなの見て面白いかな？』

『俺は好きだぞ、これも研究よ。最近R33持つてくるヤツも出てきたしね』

『アールサンサンってなんだ？』

車だよ、といっても分かんないか。

『次にやるかもしれない相手かな。デカイ凶体にハイパワー、頑丈な体で強靱な足、非力な俺には辛い相手だよ』



『…ヒシアケボノ?』

なんでお相撲さん?

『ところで今、戦うといったな。どこのレースだ、俺も一緒に出る』  
『ディープリンパクト…すまない、予定が合わん。たぶん来週なんだ』  
『そもそも予定が合うかなんて運次第だしな、向こうはやりたがってるって聞くけど。R33、生で見れるといいな。』

みんな32か34は持つてくるけど33はあんま見ないからまだ見たことない。

『…ちよつと暴れてくる』

『やめーや』

暴れて駄々こねれば少し時間稼げると思ってんのかこのお馬鹿、いや馬か。とりあえず大竹さんは悪くないやろ。

うちの親父さんとなんか喋ってるから邪魔せんといてあげてな? 行くな、やめろ、どうどうどう!

『くっ…お前とレースできる機会だつてのに!』

『中央のダービー馬がこんなのに顔を出すんじゃないやねーよ、G3どころかオープン以下だぞ』

『だからなんだ、俺はお前とバトルがしたい。本物のレースでだ』

『たびたびすまん、タイムアタック形式でタイムマンだ。競馬場の奴じゃないぞ』

芦名峠ダウンヒルタイムアタックだもの、普通の2車線だから馬でもタイムマン発進するくらいが限界じゃないかな。

『…ならそのオールサンサンとやらに勝てばいいんだな。奴が次に出るレースを教えろ、ぶち抜いてくる。』

そうすれば次にお前が出るレースへの優先出場権は俺のものだ。そいつが出るレースには当然お前も出る、そうだな?』

お前はサーキット場にも飛び込むつもりか、死ぬわ。というかんなもん無いわ。

『バカだね、狂ってんのそのスペシャルさん?』

『知らないだけだ、そういうお前はほんと存在感ないな』

唐突にディープリンパクトの後ろからひよっこり顔を出してきた

のはホクリクダイオー、性別以外は親父とそっくりらしい。こいつの親父知らんけど。

群馬トレセンでいつも相手にする訓練相手だ、こいつが暴れると俺以外だとノルンくらいしか相手にならないとかなんとかか。

いや、最近はツバキプリンセスもバチバチやりあつてるとか言つてたな。あいつ東海のほうが主戦じゃなかったっけ？

『ナツ!? 誰だお前は!!?』

『おおっ? 中央のスペシャル様にも僕のステルスは通じるんだね、良いこと知った。僕はホクリクダイオー! いずれは君を超えて、父さんやルドルフお爺さんの跡を継ぐ馬だ!!』

『群馬競馬のステルスキラ、結構強いぞ』

『ステルスキラ? 聞いたことがない走りをするみたいだな。面白い、確かにお前の存在感のなさには驚いた』

『それが僕の持ち味だからね、だれも僕が後ろにいても気づかない。タービン以外はね』

こいつとはなんとというか腐れ縁、前にレースでかちあつたとき俺の逃げについてきたから思いつきり逃げながら睨んでやったら気に入られた。

ほかの馬曰く、こいつは存在感が希薄で後ろにつかれていても全然心配がないから抜かれるとびっくりするらしい。

それをいっつも見抜くのは俺だけだとか。そうとは思わんがね俺は、だって足音するじゃん。あいつは歩幅と歩調を合わせてくるけどよく聞けばわかるぜ。

『走り方は普通の先行型だぞコイツ、トップにべつたり張り付き』

『なんでバラしちゃうのさ!?!』

『すぐばれる』

『ワケワカンナイヨ!?!』

アホ、そんな啖呵切っちゃつたら大竹騎手経由で映像見るだろコイツ。もうガチ勝負するくらいじゃねえと勝てんぞ。

あとお前も十分わけわかんないからね、歩幅を相手に合わせるってどんな足してるんだっての。俺もするけど。

『何の用だダイオー、俺は休憩中だぞ』

『いやいや、僕の事故っておいて別の馬にかまけてるって聞いてね。どんな泥棒ネコかと思ったんだけど…勘違いだったみたいだね?』

最近いちいち言葉が怖いんだよこいつ、なんなの?目が肉食獣のそれなんだけど?草喰え草、馬なんだから。あ、馬って雑食か?』

『泥棒猫?俺は馬だぞ』

『ディープ、お前は清いままでいてくれ』

『うん、とつてもいい子なんだね。ごめんねディープ君』

『??』

ディープ、キョトンとしてやがる、こいつって純粹培養だなあ…雑根性バリバリな俺たちとはちよつと別な意味で天然な所あるのよね。

競馬以外のこと何も知らないというか、それ以外教えられてないっていうか。おかげでなんか湿ってたダイオーが乾燥してやがる。

『タービン、車にご執心なのは良いよ、でも君の隣は——』

『それはユルシマセン』

ホクリクダイオーを押しつけるようにやってきたのは幸薄っぽい感じの牝の白馬。うわ、今日はこいつもか。

おい騎手さんたちはどうした?うん、後ろに控えて何ニヤニヤしてやがる!さつさと連れてけ!!

『げ、ノルン!!』

『誰コイツ、というかまた増えた。いつのまに?』

『ノルンファンング、こいつに狙われたら苦勞するぞ。ダイオーとはまた違った意味で』

群馬地方競馬のスナイパー、こいつの場合は本当にどこから突っ込んでくるかわからん。真後ろに馬群があるのに突っ込んでくる足音も紛れさせちまう。

それでいて加速力は俺よりもはるか上だ、末脚の鋭さと正確さはマジで狙撃手の撃った弾みたいに最高のラインで相手を差し切っちゃう。

こんな目立つ体でどうやって隠れてるのか俺が知りたいくらいだ

よ。

『私は狙った獲物は逃しません、だから次は絶対逃がしません』

俺殺されんのかな？目がホントに笑ってないよ。俺とお前の場合相性悪いだけじゃん、射程圏外に逃げちゃえばあたんないし。

だから狙われてんのかもしいれないけど、一回短距離戦でぶち抜かれただけであとは勝ってるしな。

『休ませて、俺休憩中』

『あら？いいですよ、車。私も好きです、M2ブラッドレーとか』

『装甲車だぞそれは』

『でも強いですよ。あの大きな大砲、あんなのを振り回して走ったらどんなに気持ちいいでしょうか』

なおお嬢様っぽいけどミリタリー好き。いや俺も好きだけどね、と  
いうか渋くね？M2ブラッドレー。在日米軍乗り回してるの？

『あんな加速があったらもうあなたは逃げられませんね、いえ、逃がしませんね、撃てばいいですもんね』

やだ、25ミリでなんて粉々になっちゃうよ。ちよつと会話が不思議ちゃん系だけど一応まとも…のはず。

でもコイツ、まじで撃ちそうな感じもある。不思議系は読めんから。

『ちよつと待ちなよ、何勝手に盛り上がったのかな？ノルン』

『あら、ダイオーさんまだ居たんですか？』

『何言ってるのかなあ…うん、今日こそ決着付けよつか？』

『付けましようか？』

にらみ合いから一転、ホクリクダイオーとノルンファンクが前足を振り上げる。でも殴り合いじゃない。

両前足のひづめを互にくっつけあって二人で支えあう感じに立ち上がって、そして押し合い。

『ふんぬおおおおお!!』

お相撲開始、誰だよこんな決闘を教えたの？あれか、騎手どもか？まあ体こすりつけて大喧嘩するより良いけどさ。

ちなみにこれ、力が入ってるの声だけで互いに支えあってるだけだ

からいつも引き分け、怪我するほど立ってもいられないからすぐ終わる。

押し勝てば勝ちって思ってるみたいけどね、二人ともバランスいいから絶妙に噛み合っちゃってるの。

終わるときだって引き際解ってるから事故らない、互いに安全な形で離れる。だから絶対決着つかないって気付かないのよね。

『…なあにこれえ？』

あ、ツバキプリンセス。お前もいたのか。騎手さんご苦労さん、あんたも大変だね。

『おー、なんかいいなこういうの』

デープ…うん、お前がいいならもうそれでいいかもしれないな。

さて次は、ほうほうセリカだ。いいねえ。

## 第7話

シマカゼタービンは不思議な馬だ、大竹は芝コースの脇でディープと寄り添うように横になりながら車雑誌に釘付けの彼の馬体を眺めながら考えていた。

常々、彼の走りを見てから思うようになってしまった、あの背中を見て思い出してしまった。

あの常識外の速度と加速、目の前をいくら追っても追いつかない背中が、どうしても過去の記憶を蘇らせてくる。

「茂三さん、どうしても彼を中央に出そうと思わなかったんですか？」隣で一緒に彼らを眺めてくつくつ笑っている茂三に問いかけた。もし出していれば、あの足がもつと前に出会っていたのなら、そう思わずにはいらなかった。

自分にとってディープインパクトは最高の相棒だ、性格も、足も、何もかもが最高傑作だと自信を持って言えるのだ。

今の自分にシマカゼタービンとディープインパクトのどちらを選ぶかと聞かれれば自分はディープインパクトを取る。

ディープインパクトは最高の馬なのだ、最高の相棒なのだ、今の自分の中では一番なのだ。だがそれでも、とIFを考えてしまうほどにシマカゼタービンの強さが頭に残って離れない。

「あいつを中央にか、考えたこともなかったな。あいつはうちの稼ぎ頭だし、地元でのんびりのほうがあつてると思つてよ」

「彼は強い馬ですよ、それこそ重賞だつて狙える。いえ、出ていけば今はタービンがダービー馬だ」

だつてそうだろう、大竹は正直に考えた。自分たちは負けっぱなしなのだ、芝の2000メートルも、2400メートルも、そして3000メートルもすべて負けている。

その逃げを皐月賞で、日本ダービーで、そしてこの次の菊花賞で発揮されたらどうなるか。そう思うとゾクゾクしてくる。

ディープインパクトと勝ちたい、それでいてシマカゼタービンの勝

つ姿も見てみたい、どちらの思いも浮かんで止まらない。

「生憎、うちの厩舎は競馬向けじゃなくてね。もともと酒造り用の馬のための施設だ、趣味で競走馬も管理できるようにしちまっただけだよ。」

それにほかのところと預けるとなると掛かる金がバカ高くなっちゃう、ただでさえ中央はいろいろ金掛かるだろう？うちじゃ無理無理」「そんなのすぐにどうとでもできますよ、彼なら今のクラシックには間に合わなくてもほかの大会で十分活躍できます。」

預託料を払ってもおつりがくるくらい稼げます、私たちっていう証拠があるじゃないですか？」

「話にならないよ、そもそも環境が違うじゃないか？お前たちとはいつも模擬レースで、実戦は一度もしちゃいない。」

あいつの勝ちなんざ、地方のオープンがせいぜいさ。それだってダイオーやノルンが出てくりや危ないんだぜ？」

「適正距離があっていない、彼が強いのは中距離から長距離でしょう？ギリギリでマイル、あなたが出した短距離はむしろ苦手だ」

「ほほう？その理由は？」

「彼の足は車と同じ、速く見えますが実質はスロースターターだ。最初の直線で足を温めて、そのあとぐんぐん加速する。」

短距離とマイルはその距離が稼げないから速度は乗らないし後続に追い付ける体力が残ってる、相手に勝ちが十分にある不利な条件がそろってる」

何度も走ったからシマカゼタービンの脚質は嫌というほどにわかっていた、それを茂三が知らないはずがない。

現に答えていけばいくほどに、茂三はうれしそうに笑いだしてそれを肯定するように頷いた。

「だから距離が取れる中距離、長距離レースだと一気に化ける。速度が乗ればそれだけ引き剥がせるし、何よりそれを持たせる尋常じゃないスタミナが生きてくる。」

スタミナ任せの大逃げなのに最後の最後まで垂れないで最高速度のまま抜けていく。そういう恐ろしい馬でしょう、彼は」

「さすが天才と言われるだけある、よく見てる。確かにあいつなら活躍できるかもしれない、実力は俺たちだって理解してるさ」

「なら出さない理由なんてないじゃないですか、それこそオグリキャップの再来だ」

「そいつは夢のある話だな、だが夢だけじゃダメだ。オグリキャップの再来？笑わせんな」

茂三は目に見えている栄光の道をたやすく切って捨てる。その目は冷酷な光ではなく、家族を愛する慈愛に満ちていて、悲しげだった。「あいつはツインターボの孫ではあるが訳アリだ、そんなことになったら一斉に叩かれて潰されるだけさ」

「そんなことわからないじゃないですか」

「あるね、残念だが人間ってのは自身が考えてるほど知的な生き物じゃない。俺だって経営者だ、記者ってヤツはよく知ってる。」

ヤツラはどこまでも正義面して探ってくる、ぶちのめせば被害者面で書き立てる、悪魔に魂を売っちゃまった連中ならもつとひどい、使いたいよだがな」

茂三は静かに語りだす、それは大竹も聞いたことがあるとある繁殖牧場が馬の管理の不手際を隠蔽していたという事件だった。

栃木にある新しい繁殖牧場は開設初年度で地方競馬に強い馬を輩出することに成功して大金を手に入れたがその後が続かなかった。

繁殖牧場としてはそこそこやっていけたが肝心の競走馬がうまくいかず、過去の栄光にすぎる社長はワンマンでキレ散らかし現実を見据えた経営陣とも軋轢が生まれて社内空気は最悪。

そんな状況で一度目の不祥事、一頭の馬が逃げ出して牝馬馬房に侵入し勝手に種付けし大暴れした。当然ながらそのことが外部に漏れれば牧場へのダメージは計り知れず、廃業は確実である。

しかし幸いにもその一頭しか逃げず、牧場の外に被害もない。これによって生まれてしまった馬も種付け現場に突入したから目視で確認できた一頭だけ残して秘密裏に処分され、事件は闇に葬られたのだ。

だがその翌年に牧場は経営破綻し倒産、その一件も含めて隠蔽され



ていた事件や事故が明るみに出たのだ。

「発覚したときに俺たちもはじめて知ったよ。あいつは隠蔽された事件で種付けされて生まれた産駒だったんだ。

思えばピンポイントでツインターボの孫が手に入るかもってあいつから聞いたときに変だと思うべきだった。

発覚は登録済みで新馬戦も終わった後でな：俺たちは被害者だし血統自体ははつきりしてるってんでお目こぼしされた」

「それはシマカゼも茂三さんも悪くないじゃないですか、悪いのは牧場とあなたをだました牧場長でしょう」

「二つ違う、糞だったのは経営陣と社長だ。経験も少ないのに難しい配合ばっかやってな、最初にデカいの当てて調子乗ったギャンブラーそのままだ。

あいつはいいヤツだし部下もそうだ、あいつらはこの血と生まれたあいつを必死で守ろうとしただけなんだよ」

茂三の友人である牧場長の馬に対する愛は本物だった、担当厩務員もツインターボに対する思いとこの子に対する愛も本物だった。

だから守ろうとした、この馬なら確実に買ってくれる茂三がいるのを経営陣に囁いて、茂三から高い金を分捕ってそれで隠蔽費用をせしめるように仕向けて、彼の命を救った。

「あいつらが妙にすぐに連れて帰るように勧めたのも思えばそのためだったんだろうな。

俺はハチロクで行ったんだぞ？様子見のつもりだったからな。なのにあいつは後部座席に乗れるとか言ってその気にさせやがって。

俺もツインターボの走りに惹かれた一人だ。俺も趣味で走り屋してたからな、ああいう必死の走りは大好きで、いつつも見えたよ。

大勝利か大敗北か、勝ちか負けか、妥協なんてどこにもない一辺倒な逃げ、あれほど心を奪われる走りはなかった。

その孫が今俺の後ろに乗ってると思ったら浮かれてな、あいつがいののに暢気にいつもみたいに芦名を攻めて帰ったりしてさ」

そこにあるのは一つの後悔だ。

「あいつにはただ轡馬でいさせるべきだった、そうすりゃあ、そうで

すか』で終わった話だ。どんな血だろうがあいつはあいつなんだから」

「それは違う、あなたの目は正しかった。それにその話だって終わったことでしょう、今更どう言われようがあなたは馬主でタービンは競走馬なんですよ」

「あんたは今、誰を見てる？」

茂三のまっすぐな言葉に大竹は胸を締め付けられるように感じた。

「随分と押ししてるな、あそこにいるのはシマカゼタービンだ。ツインターボでも、ましてやサイレンススズカでもないぞ」

「解っていますよ、そんなことは」

「そうだろうな、頭ではそうなんだろうよ。けど重ねちまってる、どうやっても振り払えない、違うか？」

まるで分っているかのように言い当ててくる茂三に大竹は苦笑いするしかなかった。頭では理解しているのだ、でも感情がどんどん膨れ上がってしまう。

彼の後姿にサイレンススズカを重ねてしまう、ツインターボが重くなってしまう。失ってしまった相棒と、走らせてあげられなかった相棒が脳裏に過る。

もつと早く出会いたかった、ディープリンパクトよりも前に出会えていたら、その走りを見ていたら、彼の鞍上は是が非でも自分のものにしていた。

「あいつはサイレンススズカじゃねえ」

分かっている、あの天皇賞（秋）で相棒は死んだんだ。

「あいつはツインターボじゃねえ」

分かっている、帝王賞で彼には本当にすまないことをした。

「あいつの鞍上は俺の息子だ、お前じゃねえ」

「解って…いますよ…」

自分はおそこにはいないんだ、乗ることはできないんだ、それで終わりなんだ。もう終わったことなんだ、そう思いたいののに、振り払えない。

ディープリンパクトが悪いんじゃない、自分の弱さだ。自分の欲が

出ている、どうしようもない騎手としての強欲なのだ。

彼に乗ってまた駆けていきたかった、またあの光景を見たかった。今度こそ天皇賞（秋）を、ジャパンカップを、そして世界を。

レースなのに前に誰もいないターフを、自分たちしかいない静かな景色を、スピードのその向こう側へどこまでも。

相棒たちと行けなかったあの場所へ行ける馬が、自分たちの願いをかなえられた馬が、手を伸ばせばそこにいるというのに届かない。

「迷うな、お前はデーパーインパクトに乗れ。あいつの強さはお前たちには出せねえよ」

その言葉にカチンときた。自分の弱さを卑下されるのはいい、でも仲間たちをバカにされるのは許さない。

「…それはどういう意味ですか？」

自分たちの技術が瀬名酒造よりも劣っているのかと言いたいのか、栗東トレセンのみんなが劣っているとでも言いたいのか。

思わず頭に血が上り睨みつけた大竹だったが、茂三が悪戯っぽく優しい笑みを浮かべているのを見てすぐに頭が冷えた。

彼はわざと挑発しているのだ、ただの悪戯である。自分を氣遣った優しい悪戯だ。

「遊ばないでくださいよ」

「グダグダしてたからな、悪い。いいプライドがあんじゃねえか、今イ目つきしてたぜ？でも今言ったのは本当だ。

別にお前らの腕がどうかそういうんじゃないやねえんだ、ただ方向性が違うのさ」

茂三はどこか感慨深げな瞳をシマカゼタービンに向ける。

「あいつは走り屋なんだよ。芝もダートも普段は走らねえ、本当のあいつの走りはアスファルトでこそ輝くんのだ。

夜の峠、芦名の下りでこそあいつは本当の走りができる。芦名の峠を車相手に攻める、それがあいつの本当の姿だ。

お前たちの競馬用の調教じゃ、あいつはああならねえのさ。峠じゃなきや、走り屋でなければあいつは上にはいけねえんだよ」

「何言ってるんですか？走り屋？峠？」

言っていることが今一理解できなかった大竹は茂三に聞き返した。公道レース、走り屋、それぞれの意味を理解することはできる。

だがそれとシマカゼタービンとが全く結びつかないのだ。シマカゼは地方競馬の競走馬で、瀬名酒造でお酒を仕込む輓馬なのだ。

それでいてディープリンパクトに常に勝ち続けている馬、恐ろしく速い足とんでもないスタミナを誇る大逃げ馬だ。

その馬が峠道を走る？何をバカなことを言ってる、そんなことをしたら足が壊れてしまうじゃないか！

「わけわかんねえって顔してるな？当たり前か。来週の週末、あんたまた来れるかい？芦名駅の夜の9時ぐらい迎えに行くぜ。」

群馬にや芦名なんて名前の駅は俺たちの街しかないから迷うことはないだろ」

「どこに行くっていうんです」

「連れてってやるよ、あいつのレースに。模擬レースじゃない、本物のレースだ。あいつの本気の走りを見たくないかい？」

ぞくりときた、茂三の挑戦的な視線は全く嘘を言っていないと理解できたのだ。シマカゼタービンの本領はここでは出ない、そういつている。

つまりいつもディープリンパクトが負けているのは、不得意とは言わないまでも本当に慣れたコースではなかったシマカゼタービンだということ。

見てやろうじゃないか、その本気のシマカゼタービンの姿とやらを。お前の走りを見せてもらおうじゃないか。

## 第8話

夜の芦名の街を抜けA E 8 6がゆつたりと芦名山の峠道に入っていく、その助手席で大竹は外の景色に目をやりながら一人考え込んでいた。

休暇を取ってきたはい、テキヤ栗東トレセンの調教師たちに頼んで最新の映像機材を用意してもらったのも後悔はしていない。

しかしこうも思うのだ、本当にこんなところにあのシマカゼタービョンが本気で走るコースが存在するのか？

完全にここは山の中、そして公道だ。競走馬が走るにはあまりに似ても似つかない。本当は悪戯じゃないのか？

「ここが芦名の峠だ、お前さんの持ってきた機材は使えそうかい？」  
運転席でハンドルを握る茂三の問いかけに大竹は持ってきたケースのうち、助手席に持ち込んだ一つを開けて茂三に中身を見せる。

高解像度ハンディカメラ、暗視装置もついている最新機種だ。車に固定する三脚もあり、車内からの撮影もできる。

ほかにもいくつか車のトランクに固定して入れてもらっているが、今日に限ればあまり出番はないだろう。

ほかの機材は明日、今日の予定が終わった後の自由な走りができるときに使う予定だ。

「いいカメラだ、この道は暗いからな。暗視装置があるくらいがちょうどいい」

「うちの自慢ですよ、これなら真夜中の放牧にも対応できます」  
「これからやるのはバトルだがな、手振れには気を付けなよ？」

分かっていますよ、大竹は頷きながら再び外に目を向けた。空気がざわついている、夜の峠だというのに人の気配が多いのだ。

異様な空気のある峠道を登りながら、大竹は少し窓に張り付くようにしてアスファルトの様子を見てみる。

(こんなところ、馬が走る場所じゃない)

アスファルトの路面は荒れていてひどい状態だ、適度な補修痕が見られることから手入れはされているのだろうが所詮は公道であつて見慣れたレース用のコースとはまるでコンディションが違う。

アスファルトの破片や小砂がそこら中にあるし、木の枝や枯葉も散つている。細々としたゴミも多い、紙の切れ端から空き缶まで見れば所々にある、踏んでしまえば転倒しかねない。

街灯も少なく、競馬場のナイターのような明かりは望むべくもない。一部は完全な暗闇、夜目が利く馬でも躊躇しそうな怖さがある。

まさに車の走るコースだ、馬が走れるような場所じゃない。いや、車でさえ危険な道だ。

(本当にこの坂を下り切るのか?)

信じられない、自分の知るシマカゼタービンがここを走るのか?あの逃げ馬が?そもそもこのアスファルトの道路を走るということ自体信じられないというのに。

「この坂の距離は?」

「最短9キロ、最長10キロだ」

長すぎる、いくら下り坂とはいえあまりにも絶望的な距離だ。走る、というだけならばどんな馬にだってできるがこれはレースだ。

それも車を相手にしたレースだ、全速力でこの坂を最短でも9kmをノンストップで駆け降りなければならぬ。

下りだから体力消費が少ない、なんてことはない。下りだからこそ、距離が長ければ長いほどに速度が乗りすぎて速くなり過ぎる体を制御するために余計に力を使うのだ。

全身の使わない筋肉まで酷使して、ある意味登り以上に体力と精神力を消耗する。

自分だって、いや、中央競馬会のどこを見てもそんな距離を走り切れる競走馬なんて見たことがない。

だがもし逃げ切れるのなら、それを持たせる体力があつたなら?そりゃ、あんな馬鹿げたスタミナを持つてらるだろう。

「あいつはずつとこの道を走ってきた、登りも降りも、毎日酒を担いで行ったり来たり、だからこの坂の事はよくわかつてる。驚くぜ、あ

つは一気に駆け降りるからな」

だから大丈夫だと？それで納得できるほど自分は競走馬に無知ではない、大竹は自分の相棒をこの道で走らせると仮定して考えてみた。

頂上から一番下まで、競争を考えないとしても、デーパーインパクトではかなり厳しいと思えた。

例え路面がアスファルトではなく芝であったとしても、到底走り切れるとは思えない。

(本当に、走るのか?)

周りを見れば、コーナーを曲がるたびにそこに多くの人々がギャラリーを決め込んでいるのが見えた。

その彼らが待つのは今日のバトル『スカイラインGT-R・BCNR33VSシマカゼタービン』のタイムアタックバトル。

無謀な賭けだ、あり得ない賭けだ、目に見えた勝負だというのに暗闇の中で今か今かと開始を待つギャラリーたちの目には見慣れた光が灯っている。

あれは競馬場を見に来る観客たちと同じ『ワクワク』している目の光だ。

彼らは知っている、理解している、期待している、スカイラインにシマカゼタービンがどんなバトルをしに行くのかを待っている。

つまりシマカゼタービンがスカイラインと張り合えると本気で思っているのだ。

(みんなわかってて期待してる、つまり何度も走ったという意味、つまり本当にここを彼が走るのか)

頭の中でシマカゼタービンがこの道を駆け下る様子をシミュレートしてみる。結果はどうしようもない、車の快勝だ。

そんなものは目に見えているというのに、ここのギャラリーたちの期待の色はまったくもって不可解だ。

「もうすぐ着くぞ、みんな集まってやがるな」

人の耳にも聞こえるほどに、聞きなれない爆音を響かせるエンジンの音が響いてきている。

そこにすでにシマカゼタービンがいるのだ、普通の馬ならば怯え切ってストレスしか感じない場所で。



うーむ、やはりR34も大体ヘビー、これ軽量化されてるけど重そうだし、やはり今日のバトルに勝つにはあの手しかなさそうだ。

いつも見慣れたレースのスタート地点、俺は走り屋仲間が乗ってきたR34の周りをまわりながら今日のバトルの作戦を練りながら唸っていた。

今日の相手はスカイラインGT-R・BCNR33、通称R33は目の前のR34の前型だけど油断はできねえ。少なくともおれは32にすら勝ったことないからな。

「相変わらず勉強熱心だ事、感心感心」

あ、この34のおっちゃん。

「ぶるるッ」『おっちゃん、何かアドバイスねえの?』

「まあ、今日のはR33、それも首都高カスタムって話だからな…俺のじゃ参考程度にしかならんか」

そうなんだよな、今日のR33。何でもこの前事故ったイケメン君の兄貴が乗ってるらしい、かたき討ちかな?ひでえとぼっちり。

あのイケメン君は勝手にキレて勝手に事故っただけ、走り屋は自己責任だからね。

ん…少し前走してるって話だし、勝つならやっぱりギャンブルかなあ…

どんなタイヤでどんな走りしてくるかにもよるけど、首都高と峠じゃ走り方は違いすぎるからそこらへんは俺に有利か。

「ブルルッ」『おっちゃん、もうちよい教えて』

「なんだ?聞きたいのか?首都高の湾岸辺りとここじゃ必要な要素が違うからな、相手も加味してくるだろうけどねらい目はそこかもな。



例えば俺の34は峠に合わせて車体を軽量化して、エンジンも出力は落ちるけど軽いカスタムに変えてある。

タイヤはグリップ重視で、俺の腕で悪路に対応しやすいようにサスをちよつとやわらかめの奴にしてるって感じだ。

元の重さと比べたら2割軽量化してるかな、その分エンジン出力は低くなってるがそこは軽さでカバーしてる」

そうね、おっちゃんの34はそんな感じの走りするね。曲がるとき不思議なくらい車体傾くのに全然ラインはぶれねえし。

ヘビー級なんだけどタイヤの垂れ具合は不思議と少なくて最後までバリバリ走り抜ける、デカくて重いつて笑うやつの初見殺しだもの。

「でもあつちのはそうはいかない、首都高でバンバン飛ばす仕様になつてたから車体は重いヤツのままだ。

リアウィングもでかめのが乗ってたぜ、車体が滑るのを防ぐためのカウンターだ。

エンジンも高出力チューンのツインターボだから出力はやばいかなり重い、500馬力が出る。音で分かるよ、足のタイヤもそれに合わせてグリップの利くヤツを履いてたな。

峠に合わせて細々とした調整はしてるんだろうが基本は使い慣れたまんま、首都高の整備された道路をかつ飛ばす超高速巡行カスタムだな」

おい、詳しいなおっちゃん。何ぜそこまで知ってたんだ？

「なんだ？不思議そうな目だな。同じR乗りだ、相手の戦闘力を知りたくなるのは当然だろ。隠れて練習を眺めてただけさ」

ぐぬぬ、こういう時人間っていいよな。俺もできなくは無いけど見つかつた時が面倒だからやらないようにしてるし。

まあつまりだ、俺は出力じゃ相手にはならん。それは他の車でもそうなんだけど今日の奴は特別そうってことか。

「気を付けろよ。あいつも走り屋としては腕がいい、コーナーの多い場所でも強力なエンジンで一気にスピードを取り戻してたぜ」

だろな、高出力ハイパワー系の何が怖いって少しまつすぐなだけの

道でも馬の俺だと抜かれやすいってことだ。タイトなコーナーでできるごまかしがきかん。

「来たぞ、R33だ」

ギャラリーの声が聞こえて顔を上げて道路のほうに目をやる。

おう、相変わらずずんぐりボディ。でもその分すごい迫力だ、高馬力エンジンの逞しい鼓動がここまで響いてくるぞ。

確かに随所にカスタマイズされてて重くなってそうだな、尻のリアウイングなんてここじゃデッドウェイトじゃねーのって感じた。

でも腕は確かに良さそう、見た感じ手がかなり入ってて一般人には運転できなさそうなのにはびっくりコントロールしてるし。

色は白：いやライトグレーか、ちょっと高級な感じに見えますな。いや高級車なんだけども視覚的にもリッチな感じ。

R33から降りてきたのはシビックEJ1のイケメンが少し年喰ったような顔立ちのイケメン、イケメン兄だな。

助手席からイケメン弟も降りてきたぞ：あれ？なんか顔色悪いね。あ、イケメン兄がこっちに来る。

「お前がうちの弟を負かした馬か」

「ブルッ」『おうなんだ、やるってか？』

「落ち着けよ、別にお礼参りとかさそういうんじゃねえ。ただうちの弟が負けたっていう馬がどんな奴か確かめたくなっただけだ」

イケメン兄はくつくつ笑う、嘘を言ってる感じじゃねえな。となるとイケメン君が黙ってるのは：あ、どうしてこうなったって顔してるわ。

悪いイケメン弟、兄貴に泣きついたとかそういうのだと思ひ込んでたわ。許せ、次はまたバトルしよう。

「弟はまだ未熟者だが腕はよかったはずだ、首都高の走りじゃなかにかいい味出してたんだぜ？」

それがこうもあっさり負けて車は修理屋送りだ。気にならねえわけがねえ、だから勝負がしたいんだ」

イケメン兄は俺の前で片膝を突く、俺の足が見たいのか？いいぜ、変なことしたら蹴る。

「お前の足がどんなもんなのか、見て分かったぜ。普通の馬の足じゃねえ、専門家が見たらさぞ気味の悪いバランスになってるんじゃないかね？」

知らんね、そんなの聞いたこともないし。でもこいつが俺の足だ、今の俺の最高の足だ、どういわれようが構うものかよ。

「良い目で睨みやがる、全部言ってることわかってやがるな。なら見せてくれよ、俺のRに馬のお前がどれだけついてこれるか。楽しみだぜ」

「ブルン！」（なめんなよ、ぶち抜いてやら）

「馬だと思って甘くは見ねえぞ、良いバトルにしようぜ」

そういうとイケメン兄は踵を返してR33のほうに戻っていく。気持ちのいい漢だ、むさくるしくて嫌いじゃない、むしろ気に入った。こりやまいったね、いままで俺のことみると侮ってくる連中ばつかなかったのがつつりマークされてるわ。

『あらあら、人気者ね？タービン、うれしそうじゃない』

『そう見えるか？厄介だぞ、付け入るスキ少なくなったし』

背中に何かが降りてきて止まった感触がして振り向けば、見慣れた真つ赤な目をしたカラス。レッドだ、どうやら頼んでいた情報収集が終わったらしい。

『で、どうよう？』

『いつも通り横やりは無しね、ここらの野生動物たちはみんな避難しちゃってるから。道路状態も普通、前回と大きな変化なし。』

ブチの情報だと、この前に修繕工事をした箇所が少し欠けてる程度だつてさ。空の天気も快晴、急激な気候変動の予兆もなし、絶好のレース日和つて所かしら』

『カーツ…ますます不利じゃねえかよ』

これで急に雨とか降ってきたら断然俺が有利になったんだがな、雨でも雪でもここらは走りまくってるから。

同じく野生動物のコース侵入も俺に有利、車より断然感知しやすいもの。でもここ最近では避難しちゃうからあんまり期待してねえわ。

近くの空いてる自販機でコーラがあることを確認して、馬着からト

ングを引き出してからポケットに突っ込んで小銭をつまむ。100円一枚、かしやんと入れたらトングでボタンを押す。

取り出し口に落ちてきた250mlの細いタイプの缶コーラをトングで引っ張り出して、口でプルタブを開けてから近くの地面に置くとレッドが器用に口で缶を食わえて一回呷った。

『ありがと、やっぱりコーラは浴びるように飲むのが一番ね』

というかよく浴びねえよな、その飲み方。俺も買うか、ウーロン茶でいいや。

『で、勝算は?』

『かなりきつい状況なの分かってってそれ聞いちゃう?』

『もったいぶらないですよ』

ウーロン茶のペットボトルを口で啜えて一口飲んでから考える。勝算は…

『10パー、そんなところじゃねえかな。あの車見る限り、やっぱり分の悪いギャンブルになるよ』

『あら、10%あるなら十分じゃない。普通の馬なら0だから』  
『そもそもここで暢気にしてらんないだろ』

周囲は見慣れない人ばかり、タバコはスパスパ吸ってるし排気ガスはがつつり、エンジン音なんかバリバリだ。

酒飲んでない以外は馬に取っちや最悪じゃん、俺には見慣れた光景だけでもね。タバコ吸おうが大声出そうが元人間だから慣れてんよ。

敏則はレースの調整で忙しそうだ、良助もスタートの準備、イケメン兄弟も車のセッティング、俺は少し暇かな。

ん?このエンジン音は4AG:親父さんのハチロクか、ちよつと遅かったけどどこ行ってたんだろ。

『おおッ!ハチロクだ!!』

『あれが先代の芦名筆頭、相変わらずいい音してるエンジンだぜ』  
『隣に座ってるんの誰だ?ここらじゃ見ない顔だな』

『え、あれ大竹じゃねえか?デーパーインパクトの主戦騎手!!』

え、まじで?大竹さん来てんの?うわ、マジだ。帽子被って変装してるけど大竹さんだわ。なんでいんのさ?デーパーまでいねえだろ

うな。

うえーい、大竹さんこつちこつち、一緒にお茶しよーぜ…ってあら、すぐ引つ込んじやったよ。

まあ周りが騒いでつから気にしちゃったかな？親父さんめ、誘ったの秘密にしたな？まったくもう。

大竹さんにも相談したかったなあ、なんかアドバイス貰いたかった。

『ん？コースの近くにハチロクを停めてるわ。親父さん、なんかする気かしら』

『そこにしか空気がなかっただけでしょ。それよりレッド、ほかになんかいい情報ないの？』

『えー？聞かないほうがいいかもよ』

『なんだよ？』

『L字カーブのところ、電灯一つ点滅してた。あんたが通った後からだから知らないでしょ』

ふざけんな、あそこ降りと登りが入れ代わる直角コーナーのところ一つしか生きてるライトないだろ。つまりほぼ全体真っ暗な可能性有。

ますます不利じゃないか。馬の目は夜でも見えるっていうけど俺は普通に人間のそれと同じだからな!!

L字のところが視界不良、となると俺のへなちよこライトよりもパワーがあるヘッドライトのR33が断然見えるわけだ。

いや、いつそのことそこまで一回抜くか？あの直線のところならチャンスが：ライトを逆に利用してやりやあ：でもそれだと後が余計にきつくなる。

あそこの坂、俺じゃブロック利かないしな。しかも下りだと登りがクソきついからできれば余裕持っておきたいんだけど…悩ましい。

『まいったな、全体像はできてもすっげーキツイ。あとはもう相手まかせだよ』

『いつもの事じゃないの、どうあがいたってあんたじゃ車のパワーにや勝てないわよ』

んなこた百も承知だよ、俺馬だもの。でもさあ、親父さんがいる上に大竹さんもいるんだぞ？絶対後でデイープも知るじゃん。

もしかしたら録画みるかもしれないだろ、カメラ持ち込んでるかもしれないだろ、負けた姿見せんのか？

『大竹さんに俺がR33に負けたって、そんなの言わせらんねえよ』

俺のバトルを大竹さんが生で見てるのに黒星？あいつに一番最初に聞かされるのが負けたバトル？そんなの嫌だ。

あいつに負けたバトルなんざ最初に聞かせたくなんかねえ、そんな情けない姿見せたくねえ。

こいつは実戦だ、模擬レースじゃねえんだ、あいつの走る中央競馬が俺にはこの峠レースなんだからな。

『なら、勝つしかないわね。R33、千切つてらっしゃい』

言われなくてもやってやらあ。見てろ大竹さん、デイープに俺がR33を千切ったって言わせてやる。

## 第9話

スタート地点になる2車線道路に栗毛の馬であるシマカゼタービンとライトグレーのスカイラインR33が横並びに並ぶ。

それを敏則は近くのガードレールに寄りかかりながら眺めていた。

「シマカゼのヤツ、どう走るつもりかね」

「さてね、おっちゃんこそ随分と熱心に教えてたじゃねえの？」

「当たり前よお、あいつは俺たちの仲間だからな」

敏則はこの峠のR34乗りの照れくさそうな笑みを横目で見る。

彼がここにいるのはひとえに、シマカゼタービンを応援するためだ。

「正直厳しいと思うぜ、相手が相手だ。車の相性が峠に悪くてもドライバーはガチのベテランだからな」

「相性最悪のR33を完全にものにして走ってたからな、俺も惚れ惚れするくらい腕がいい」

この男がそこまで言うならそれこそ最高のR乗りと言える、芦名山のR乗りでもトップのこの男が太鼓判を押すのだから。

「だがうちのシマカゼはここがホームコースだ、地の利はこっちにある。あとはそこをどう生かせるかだ」

「馬力じゃ勝ち目がない、スピードも負けてる、体力だって後になればなるほどきつくなる」

勝てる要素がない、それはいつものことだ。でもそれでシマカゼタービンはずっと戦ってきた、負けて負けて負け続け、そして勝って勝って勝ってきた。

負けは勝ちよりもはるかに多い、でも勝つのだ。あいつは車相手に勝ちをいくつももぎ取ってきた馬なのだから。

「いつもワクワクするよな、あいつのバトルは。いつも期待しちまう」

「そういう馬なんだよ。だからこうしてみんな見に来る、今日は勝つかも、ってな」

そういうところは血筋なのかもしれない。シマカゼタービンには

そういう応援したくなる何かを感じる人は多いのだ。

かつてのツインターボを知る競馬ファンがここを訪れたときもある、そしてシマカゼタービンの走りに彼を見て、次第にシマカゼ自身を応援するようになる。

何よりこれはただの公道レースでお金は動かない、勝手に来て勝手に楽しむ主役も観客も自己責任の場だ。

だから誰もがただ勝負をしに、応援して見届けるために来る、ただ純粹に夢を求めてやってくる。

R33とシマカゼタービンの周囲から人気が去り、両者の前に良助が立って右手を振り上げる。

「始めるぞー準備はいいな!!」

良助の号令に周囲のざわめきが消える、この場の全員が固唾を飲んだ。

「カウント、5!!」

シマカゼタービンが蹄を鳴らす、R33がそれに応えるようにエンジン吹かす。

「4!」

いつもこのカウントを聞くと身が引き締まる。

「3!」

自分が走るわけではないのに、ワクワクが胸から湧き出てくる。

「2!1!!GO!!!」

良助が腕を振り下ろす。その瞬間、両者が一気に良助の脇を突き抜けて飛び出した。

先行はやはりR33だ、だがその前に敏則はシマカゼタービンのスタートダッシュに舌を巻いた。

以前よりもはるかに早く、正確に足を踏み込んで理想的なスタートダッシュを決めてR33の立ち上がりについて行ったのだ。

あの動きの元はおそらくディープリンパクトのスタートダッシュ、それを自分なりにアレンジして身に付けてきたのだろう。

あいつはまだまだ強くなるのか、面白いことになってきたぞ。敏則はわくわくしながら峠の道を駆けていくシマカゼタービンの後姿を



見送って、その後ろを追走する見慣れた車に目を見開いた。

「ハチロク!? 親父のヤツ、追走する気だ!」

「嘘だろ!? 親父さんずりい!!」

やりやがったなあ親父、昔から何も変わっちゃいねえ。



〈兄貴、本当にやる気なのか? あいつはイカレてるぜ〉

先ほど降りた弟の言葉が脳裏に過る。弟は自分を気遣っている、その優しさがうれしいと同時に少し鬱陶しく思えた。

「俺が仕掛けたバトルだ、今更逃げられねえよ」

〈解ってる、だが兄貴は峠の事まだわかり切ってないだろ? 怖いぜ、その車じゃ〉

弟は自分のR33の事はよく知っている、戦闘力もその傾向もだ。だからこそ、彼は感じて素直に忠告してくれている。

「俺にはこれが一番なんだ、不甲斐ない走りはしねえさ」

スタートの合図と同時にアクセルを踏み込む。R33のエンジンは快調だ、それこそいつもより良く回つてるとすら思えるほどに。

タイヤの食いつきもだいぶこなれてきた、ステアリングのキレもいつも通り、自分は全力を出して挑んでいける。

「食いついてきた? いいスタートだ」

スタートと同時にちらりと見たバックミラーにはあの栗毛の馬がしっかりと追走してきているのが見える。

後ろには時代遅れのスプリンタートレノAE86、距離を空けて追走してるのを見るとあの馬の主が追いかけてきてるといったところだろう。

自分の馬の雄姿だ、見たいに決まってる。自分も馬主ならそうしただろうと彼には理解できた。

だからアレはギャラリー、敵ではない。今日の敵はやはりあの馬、

シマカゼタービンだ。彼はコーナーをグリップ走行でインベタを突き抜けながら後ろを見る。

(マジかよ、こいつは本物だ)

食らいついてきてやがる、それも馬なのに馬体が横に向いている。このキツイコーナーで蹄鉄が滑っている、それを車のようなドリフトで対応しているように見える。

だがそれだけが驚くべき点ではない、シマカゼタービンの馬体がゆっくりとだが接近してきているのだ。

あいつのラインは自分のさらにイン、普通ならあり得ない僅かな隙間を通るライン。初っ端から抜くつもりだ。

「この車間でも抜きに来るのか、並みの度胸じゃねえな」

ハンドルをさらに深く回し、車体をさらにインコースに寄せながらアクセルを踏んで速度を上げる。

するとシマカゼタービンはすぐに速度を緩めて車間を少し開ける、様子見の体勢だ。

外から抜くような余裕は相手にはない、つまりこの先は馬の体では通れない程のインコース運転を強いられるということだ。

(一気に吹かしたわけじゃないにしても、車の加速にしっかりとついてきてる)

コーナーを抜けながらバックミラーを見ると、必ずシマカゼタービンの姿とライトが映っている。

通常は450馬力、それを無視してフルで回せば500馬力の超高出力チューンのエンジンを持つR33の加速力はここでは使いづらい。

今も本気では回さずアクセルは踏み込んでいない、それでも普通の馬ならばすでに千切っているはず。なのにコーナーをもう3つ抜けているのに後ろにいる。

アスファルトの下り坂を駆け下るだけでも普通の馬ならば大きなダメージになるはずなのに、まったく気にもせず踏み込んでいく。

もうすでに時速100kmで飛ばしてる、コーナーではブレーキングで速度を落としているにしても馬の足では到底無理なはずだ。

なのに奴はついてくる、こちらはブレーキング速度を落としているグリップ走行のカーブに速度を落とさずにコーナーに突っ込んで食らいついてきているのだ。

(こっちのタイヤは滑りやすくて苦労してるつてのに、あっちは踏み込みがいい。地元の強みか)

普段から走っている首都高の高速道路では見られない路面コンディションの悪さは、自分のR33の足にまわりついていた。

対策としてグリップの利く高グレードタイヤに履き替えているのに、走り出してみればそんなものは全くの誤差だと気づかされた。

不用意に踏みすぎればタイヤの空転は免れないし、ハンドリングのミスは不用意な消耗を招く。

ABSを効かせたブレーキングは確実なラインを自分に作ってくれているが、一瞬でもタイヤが路面をつかみ損ねればそれこそクラッシュの可能性が出てくる。

仮にクラッシュは免れても、後ろのシマカゼタービンがその隙をついて前に出るだろう。前に出られたらどうなるか、そこが想像できない。

(不用意に踏めない、低速域だと車体が重いつてのにな。この差が弟を事故らせた一因か)

これが首都高の湾岸線ならば思い切りエンジンを吹かして速度に乗せて車体をかばえるが、ここではそうもいかない。

速度を上げすぎれば次のコーナーで曲がり切れない、しかも車が暴れて余計に気を遣う。かといって遅すぎれば馬に負ける。

あの馬は確実に時速100kmを出せる足がある、立ち上がりでは車に負けるが速度に乗ったまま迫られれば、コーナーでは抜きに来ることもできるのはさつき分かったばかりだ。

(なるほど、この加減が難しい。先生だのと言われるわけだけ、あいつは俺よりも完璧にこの道を掴んでる)

踏みすぎれば速度が出過ぎる、もたつけば馬が前に出る。馬の足だからこそある即応性と走行能力、車にはない特性が峠を走る上で光るのだ。

それはドライバーの技術が上達して車の性能を引き出せるようになるばすぐに埋まってしまうもの、だがそれができなければこの峠の走り屋はこの馬の尻を追いかけることになる。

このコースでは馬に抜かれないインコースの抜け方を初心者の方に叩き込まれる、つまり曲がり方と制御性を培われるということ。

峠の走り方を覚える初心者のアグレッサーとして、この馬は最適な相手と言えるのだ。

(こりや、タフなバトルになりそうだ)

そしてそんな初心者相手の先生は今、自分の尻を追いかけて本気で迫っている。思わず笑みがこぼれた、おかしくて仕方がない、こんなにも興奮しているのだから。

首都高にはないこのびりびり来るスリル。それも相手は車ではなくて馬、だがあいつは確実に一級品の走り屋だ。

最初から自分に仕掛けてくる思い切りの良さ、勝負への執着、何を企んでるかかわからない駆け引き、後ろから聞こえる蹄の足音が奇妙で恐ろしく聞こえて刺激してくる。

背筋にビンビン伝わってくる、恐怖？いや、これは武者震いだ。

(いいね、最初から乗せてくる奴は向こうにもいなかった。良い馬だぞお前は)

舐めてかからないで正解だ、こいつは並みの走り屋小僧なんかへでもないスキルと技術を持つイカれたヤツに違いない。

何をどうすればこんな馬に育つのかなんて皆目見当もつかないと言えるのはただ一つ。

「ついてこれるか、俺のRに！」



大竹には目の前の光景がいまだに信じがたかった。シマカゼタービンが一頭で本当にレースを行っている、そしてR33に本当に食ら

いつている。

シマカゼタービンがレースの時は騎手を乗せないというのは茂三から聞いてはいたが、それでも現実に目にしてみるとあまりにも現実離れしていた。

だがその足運び、レースのやり方、その後ろ姿はまさしくシマカゼタービンの走りそのものだ。

たった一頭で、自分の頭で完璧にこの峠のレースを考えて走っていることに他ならない。普通ではありえないことが、目の前で起きている。

大竹は思わず震えが来た腕を抑え込んだ、こんな頭のいい馬はこれまで見たことがなかった。あり得るはずがない馬が目の前を走っているのだ。

「いい腕だな、あの33。シマカゼの抜きにすぐに対応してきた、あのデカイ巨体できっちり詰めるのはそうそうできるもんじゃないぞ」「そんなにいいドライバーなんですか？ 私にはすごいとしか…」

「あのR33は首都高カスタムのヘビータイプ、馬力も全力なら500は出せるチューンだろうな。だがこの峠じゃいささか重すぎる。」

エンジン出力は過剰、装備も無駄、足回りもピーキー、普通の走り屋が飛ばせば一気に操縦不能で谷底、ここではそういう味付けのじゃや馬だ。

それをきっちり制御して攻め込んで、自分の相棒を完璧に理解した上でコースの違いも頭に叩き込んできてんだ、やる奴だ」

そういう茂三はその激しい競り合いの後ろにしつかりと安全マージンを取りながら、大竹の撮影を配慮してAE86を付けている。

それだけ大竹にも茂三の運転テクニックが恐ろしく卓越したものだとわかった。一瞬で切り替わるシフトレバーが全く見えなし、ブレーキングとアクセルの踏み込みはけた違いに早い。

この勾配が強く右に左にとコーナーで揺られる車体を完全に制御して後ろの特等席を維持し続けているのだ。

（こんなうまい人にそういわれる相手にシマカゼは一頭で食いついてるのか）

自分で考え、自分でレースプランニングを行う馬、それはまるで人にレースを教えたと言われたかのシンボリルドルフか。

それとも世紀末霸王と言われたテイエムオペラオーか、幾重もの強豪たちの姿が大竹は脳裏に過るがピタリと彼の姿が嵌った。

今は北海道にいる彼、今の自分になる土台を作ってくれた相棒。ダメだというのに、また重なる。

「あつ…」

コーナーを曲がる、インベタグリップと言われた走法で抜けるR3の減速に対してシマカゼタービンは減速せずにコーナーに入り、尻が横に流れて馬体が横になる。

(これがあの時見せたドリフトの本当の姿！なんて足だ、アスファルトを蹄鉄で滑ってるのか!?)

足の動きはけた違いに早く、それでいて正確だ。体の動きを止めない、速度を止めない、あくまで稼いだ推力を制御するための足運び。

足使いはバラバラに動き、一つ一つの足が『走る』ために考えているかのように動いている。その足運びがシマカゼタービンをドリフトさせているのだ。

芝の上で見せたあのドリフト走行も見事だったが、この坂で速度が乗った本気のドリフトと比べると劣ってしまう。

(まるで違う、ターフの上の走りとはまるで、全然違うじゃないか)

曲がりのキツイコーナーは右に左にと尻を振って、自由自在にドリフトで走りを制御するシマカゼの姿はまるで別の馬だ。

前のシマカゼを追うようにAE86も同じようにドリフトでシマカゼタービンのラインを追うように抜ける。

強烈な感じたことのない横Gに、大竹は必死でこらえながらカメラをバトルから離さない。そのAE86の傾きに大竹はピンときた。

「シマカゼタービンの動きは、あなたの動きと同じ?」  
「そうだとも、良い動きしてるだろ?完全にモノにしたんだよ、あいつは」

茂三はくつくつと笑う。

「新馬戦前からあいつはここを走ってた、仔馬の時からあいつを乗せ

てここを下った。俺の走りを教え込んだんだ」

それならば、彼の走りがいびつなのも理解できる。彼の走りは馬のそれじゃない、彼にとって走りの基準は『車』なんだ。

それも芦名の走り屋で先代筆頭と呼ばれた凄腕の走り屋の元で、その走りを見続けた家族と一緒に併走して鍛え続けたから得た足。

彼にとって基準も目標も『車』であって、馬はただの同族の競争相手という枠組みでしかなかったのだ。

「あいつはすげえよ、いくらビビってもいくら苦しくてもついてきてくれたんだ。俺の走りに食らいついてどんどんモノにしてくんだ。」

敏則と一緒にどんどん強くなって、みんなと一緒にどんどん走ってどんどん一人前の走り屋になってくんだ」

シマカゼタービンがR33を追ってインベタグリップで一氣にコーナーを抜けてフェイントを再度仕掛ける。

「自慢の息子だ、あいつも最高の息子に育ってくれたよ」

茂三が笑う、今まで見た中でも凶悪に、狂気すら感じるほどの家族愛に満ちた笑い声。

その笑いはどこまでも茂三の心を映しているように聞こえた。こんなに楽しいことはない、こんなにうれしいことはない。

自分の息子たちが、こうして自分の跡を継いで更なる高みを目指すなんて、それこそ父親の冥利に尽きるというものだ。

「お？あいつが抜きにかかるぞ」

「え!？」

道が直線に入る。いや、わずかに左にカーブした直線、道幅が広く車のブロックではどこに寄せても馬が悠々通れる幅がある。

直線で抜きにかかる？そんな足はシマカゼにはないはずだ。大竹はAE86のスピードメーターに目をやる。

時速112km、シマカゼタービンはその速度をもってR33を追走している。それでもR33はじりじりと突き放していく。

この最悪の路面で、馬の出す速度じゃない足をもつてしてもシマカゼタービンは置いて行かれているのに。ここで抜く？

「すぐわかる、ちよいとこつちも激しくいくぞ、気合い入れて撮れよ」

！」

緩いカーブを描いた緩い左の直線が終わる、奥にぼんやりと見えるのは急激な右コーナー。

先に差し掛かったR33のブレーキ音、そこからの4輪ドリフトで車体が一気に横を向きコーナーを抜けていく。

素人目に見ても惚れ惚れするくらい綺麗に車体が滑っていくのだから、ドライバールのテクニクが凄まじいことが大竹にも身をもって分かった。

その瞬間、シマカゼタービンの足がさらに強く加速した。速度を落としながら完璧なコースを描くR33の内側、車でもギリギリ通れる狭い隙間にシマカゼタービンはまっすぐその身を潜り込ませた。

まっすぐ、いやコーナーにもぐりこんでインベタのさらにインとでもいうようなギリギリの場所を減速することなく、気持ち悪いほど綺麗な曲線を描いてスパッと抜ける。

あの動きは弥生賞の後初めて彼の走ったときに魅せたあの動きと同じもの、いやそれよりも洗練された動きだ。

「良いラインだぜ、腕を上げたな」

恐ろしく速かった、恐ろしく綺麗だった、立ち上がる寸前のR33を抜いてコーナーの先へ消えていくシマカゼタービンの姿に大竹の騎手としての欲が嫌でも高鳴る。

A E 8 6もコーナーを抜け、前後の入れ変わった両者を追走する。今度はシマカゼではない、R33のテールライトを追う番になった。

不思議だ、R33のドリフトからの立ち上がりは素人の大竹から見ても素早い物だった。

速度もコースも、R33の性能とドライバールの技量ならばすぐ後の直線からでも一気に抜けてまた仕切り直せるはず。

なのに、シマカゼに抜かれたR33はすぐに連続するコーナー終わりの直線で抜きに掛かれていない。

なぜだ？大竹が首を傾げると、R33の走行ラインにわずかなブレがあるのに気づいた。迷いだ、騎手であるからわかる鞍上の迷いだ。

(タービンが前、R33が抜きに掛かれない。まさかブロックされて



る？あのフェイントか）

ディープリンパクトが翻弄され、自分の目でさえもいまだに掴み切れないシマカゼタービンの行うフェイントブロック。

もしそれをR33のドライバーがまともに受けていけば、こうなるのは理解できる。彼のお尻が出す不可思議なラインはほんとうに目を欺かれるからだ。

それが全て嘘ならば全部無視すればいいだろうが、彼の悪どいところはそうタカを括って抜けようとする位置の誘導までしているところだ。

だからそれに掛かると一気に自身の判断力を疑ってしまう、嘘のはずなのにそのラインを突き破ればそこにはシマカゼタービンの尻が待っているのだ。

（あのドライバー、やはり上手い。気付いてる、だから乗らないけど前に出るタイミングが掴めてないんだ。これは、行けるか!!）

馬が車を翻弄している、もし自分が馬で車に勝つならば無理をしても一度前に出たら徹底的にブロックして前に出さないようにするだろう。

胸が高鳴った、もう止められない、あの動き、あの速度、あの切れ味に、自分が鞍上にいたらどんな景色が見れただろうか？その想像を大竹は止めることができなかった。



まるでゲームの中に飛び込んだみたいだぜ、R33のハンドルを握る腕にいやな汗が噴き出る感じがして思わず彼は唸った。

油断したつもりはなかった、完璧なラインで弟がミスをしたコーナーに入り抜けられる運転だったはずだ。

いや、ドリフトからのコーナリングは完璧だったのだ。ミスがあったのは、相手が『馬』だということをそこで一瞬忘れてしまっていた

ことだ。

自分は普通に車が通れないラインを使って走ってしまった、シマカゼタービンはその車は入れない隙間に身を滑り込ませてあっさり抜いてきたのだ。

「なんて馬だよお前は、本当に、どこまでもワクワクさせてくれる」  
今すぐにも追い抜いてやりたい、R33が速度を上げると焦れて焦れて仕方がない。いつもはバンバン吹かせるエンジンが、押さえつけられて不機嫌な音を立てている。

だというのに、前を行くシマカゼタービンのブロックに彼はうまく突破口が見いだせないでいた。

(癖の悪い尻だ、どう走るのか全く予想できねえ)

コーナーでは確かに外から抜きに掛かれる隙間がある、そこを狙うのは当然だ。なのにそこに入る気が起きない。

あいつの尻のラインが、確実にそのラインをブロックできる線を描いているからだ。そこに突っ込めば『当たる』とわかる。

(俺が馬の命なんざどうでもいいと思ってるクソならそこで抜いてたぜ)

だがそれはできない、やってはいけない、走り屋としても人間としても自分はそんな命を粗末にする人間じゃない。

これは人間としての誇りだ、走り屋としての誇りだ、お前は自分の獲物で倒すべき相手だ。

このバトルはこいつが居なきや終わらねえ、どっちも生きててどっちも走りぬいて、それで勝敗が決まるんだ。

勝ちも負けもきっちり認めて、互いを讃えあつて次を目指す、それが走り屋というものだ、それが自分の誇りなのだ。

(焦れるな、まだチャンスはある、そろそろ半分…いや、まだ決めきれないところじゃない)

あの馬が何を狙ってるかはわからないが、まだ焦る時間じゃない。コーナーを抜けながらシマカゼタービンの尻の動きを注視しつつ、彼は時を待つ。

今までもこういうフェイントを使ってブロックをする相手とはバ

トルしてきた、だがシマカゼタービンのそれは今までの中でも最高のフエイントブロックだ。

ほかのドライバーが仕掛けてきたものが霞むくらい、自分の判断が本気で『行けるかも』『これはだめ』と乗せてくるからだ。

分からなくなる、どう見ればいいかわからなくなる、弟はこれにも翻弄されて頭に血が上ったのだろう。

(痺れるぜ、痺れまくってるぜ、こんなすごい奴がいるなんてよ。たまらねえぜ！)

背筋が凍るようなコーナリングを何本も抜けるスリルの中で、前を走る馬は足並みが一切乱れない。

確実にコースを走っている、知り尽くしている、それでいて決して油断していない、常にこちらを観察して対応してくる。

こんな燃えてくるバトルになるなんて思ってもみなかった、もうどうしようもなく火がついている、もっとお前を見せてみる！

(もうすぐL字、ここは…いや、こいつは!!)

この芦名特有のアトラクション、登りだろうが降りだろうが必ずアップダウンの激しい一撃を見舞ってくる難所。

そこに差し掛かった瞬間、彼は背筋に冷水が飛び込んできたように感じた。

(なにも——ない!?)

真っ暗だ、上つてくるときについていた登りと降りの境目にある街灯が消えている。思わずアクセルが緩みかけるほどの衝撃に彼は見舞われた。

首都高ではこういったことはめつたにない、一部でも街灯が切れればすぐに業者が交換するし、そうでなくても少し暗くなるだけで周囲の街灯が補助をするからだ。

だが今日の前にあるのは真っ暗な暗闇だ。車輪はしつかり噛み付いて坂道を降りている、ショックから立ち直れば坂道はちゃんとあるのがヘッドライトに照らされて解る。

そしてその奥に、シマカゼタービンの弱いライトがちらちらしているのも見えた。だが一瞬、自分はハンドルを切り損ねて谷底に落ちる

幻想が見えた。

「しまった…!?!」

車体がブレてハンドルが暴れるのを何とか押しとどめながら坂にタイヤを張り付かせ直す。

真つ暗なコースに心を奪われすぎた、だが気を入れ直せば問題は無い。いや、むしろここが、自分の逆転するポイントになると彼はすぐに考えついた。

R33のアクセルを踏み込み坂道を一気に駆け下り、登りと降りの境目に入つてすぐさま切り返して登りに頭を突っ込む。

(そこだ!!)

真つ暗な道でヘッドライトに照らされた上り坂の向こうに見えたシマカゼタービンの脇に向かってアクセルを踏み込んで一気にR33を加速させる。

すでに登りに集中しているシマカゼタービンにフェイントブロックをする余裕はない。R33とシマカゼタービンでは、登りは圧倒的にこちらが有利なのだから彼も必死に上っている。

それこそ小細工に気を割いている余裕なんてないのだ、すべてを足に集中させて一秒でも早く上り切ろうとしているはずだ。

「悪く思うな、俺も負けたくねえんだよ!」

横を抜けるシマカゼタービンの馬体をチラ見しながら一気に急こう配の上り坂を登っていく。

R33が上り切り再び下り坂に飛び込む、そこから数秒遅れてシマカゼタービンが坂を上り切るのがバックミラーに見えた。

相手の息が大分上がってきている、だがまだ油断はできない。彼は目の前に迫る新しいコーナーに、馬が入る隙間がないインベタでコーナーを抜けながら自身も息を入れ直した。

## 第10話

大接戦だ、スタート地点でレースの趨勢をトランシーバー越しに聴き入るギャラリーたちの沸き立つ声を聞きながら、敏則は愛車のAE101GT-Zのバンパーに腰を添えたまま腕を組んでただ成り行きを見守っていた。

次のバトルは自分と隣の良助のタイムアタックだが、やはりシマカゼタービンのバトルがひと段落しなければ準備にも身が入らない。

「あいつ、食らいっついてるな」

シマカゼタービンとR33の位置は二度入れ替わっている、今でこそR33がまた先行を取り戻したがそれだけでも驚異的だ。

だからこそこの峠を走る走り屋たちも熱を上げているし、知らない新人はその異常さに目を白黒させている。

隣で同じようにコーヒーを飲みながらトランシーバーからの実況を聞く良助の言葉にうなずく。

「粘るな、タービン。だがこの分だともうすぐガス欠だ」

何度もシマカゼタービンとバトルをしたからこそ理解している彼の『限界』を知る良助の言葉に敏則は頷く。

シマカゼタービンのスタミナは競走馬の中では桁違いだ、しかしこの峠ではあくまで走り切れる最低ラインを超えているだけに過ぎない。

普段のタイムアタックならばこのスタート地点からゴール地点のふもとまで走り切る体力はある、自分のペースで自分のプランで悠悠自適にコースを攻めていけるから体力のロスは少なくコントロールもしやすいから持つのだ。

普段相手にしている新人や新顔相手のバトルもそれは同じ、たとえば相手が『車』でも走り屋としての経験やコースへの習熟度などで分が大きい分シマカゼタービンが有利であるし途中で相手がギブアップすることもあるから走り切る。

だがそれは今回通用しない、相手のR33は峠にあったカスタムで

こそないがドライバーにマッチしたカスタマイズをされたモンスターマシンだ。

それを手足のように操るドライバーもまたここでは新顔だとしても運転歴や経験はけた違いであってこの峠の走りにもすぐに適応してくる熟練者、激しくキレた走りを何度も見せてきている。

まず生半可なバトルでは相手は手を挙げたりしない、多少の不利やデメリットは構わず確実に最後まで食らいついて走り切ってくる。それなら確実に負けだ。

「ああ、持たないな。おそらく最後の3連ヘアピン、そこまでが限度であとは垂れるだけだ」

この下り道で足が垂れてふらつくということは一発で事故につながる、シマカゼタービンもそれは重々承知で足が本当に危険なことになる前に速度を落とす。

彼は走り屋であってこの峠を走ることには執念を燃やす、己の全てを注ぎ込むような熱もある、だがそれがすべてではない。

命のかけ時を誤らない、危険すぎることは絶対にしてはならない。そうなれば勝負はR33の勝ち、シマカゼタービンはリタイアだ。

「それはあいつだって重々承知だ、あいつのバトルは形式上タイムアタックだが事実上は変則デスマッチに近い。どっちの足が先に垂れるか、どっちがギブアップするかの子キンレースだ」

しかもそれはR33に大きな分がある変則戦だ、シマカゼタービンが勝つにはどうあろうとR33をギブアップさせる必要がある。

タイムで上回る、相手を千切る、といった車ならできることはR33相手ではシマカゼタービンには到底できたことではない。

しかもクラッシュシユといった走行不能状態に陥らせるのではなく、相手に『負け』を認めさせなければならぬ。そうでなければ彼も納得しない。

対するR33はシマカゼタービンがギブアップするか、いつものように千切るか、タイムで上回れば勝ちとなる。

「あいつの差し脚と煽りでどこまでR33を乗せられるか、勝負の決め手はそこだ」

「さしずめあいつのオールカマーか」

今回は場所も相手も違うが、勝ち筋はそれしかない。ツインターボはそれをレース場でやり、そして見事に勝った。

だがあいつはどうだ、R33とそのドライバを騙して自分の勝ちをもぎ取れるのか。

「仕掛け所はいくつかある。だがあいつが仕掛けるとしたらおそろく終盤、3連ヘアピン前の最終コーナーだろうな」

「同感、俺もあのR33とやるならそこで一発仕掛けるね。あそこは『今』なら絶好のポイントだ、問題は相手がそれに気づいているかだ」

「気付いていたなら意味はねえな、タービンの奴は負ける」

「でもうまくかかれば、解らねえ」

これは地元の連中にしかわからない、地元の自治体がやっていることを知らなければ理解できない、期間限定のスペシャルトラップだ。

しかも一度相手に使えばこの罠は二度と使えない、単純で、対策が簡単な、意識しないからこそ効果を発揮する。

もしあのベテランがそこを理解していればそれだけでこの罠は効果を発揮しない、文字通りの賭けだ。

「性能もスペックも桁違いのモンスターマシンにドライバーもベテランだ…ますます似てるな」

「ならR33はライスシャワーか？シスタートウシヨウか？それともイクノデイクタスカ？」

「いや、全部だ」

だってそうだろう、爺さんと同じようにあいつは勝つ。敏則も良助もそう信じている、だから二人で顔を見合わせ、微笑みあった。



意識が朦朧としている、もうどれだけ走っただろうか、まだ目の前にテールランプがあるからまだ食いついてる。

足が痛い、胸が苦しい、頭が回らない、こんなハイペースなのは久しぶりだ。キツイ、こけそうだ。

そらそうだ、相手はR33なんだからエンジンの馬力がやばい。音だと多分300くらいでぶん回してる、俺300頭分。

こいつについていくにはいつもよりハイペースで食らいつくしかなかった、俺のペースで走れないんだ、そりやもうスタミナ切れだ。

いつもなら、最後まで体力はもつけど今回ばかりは相手が悪すぎる。R33のエンジンはやっぱり化け物だ、とんでもないハイペースで引つ張り回されちまう。

一度抜いて俺のペースに少し持ち込めたから足を溜めることはできたが、L字カーブでアドバンテージが取れなかったのは痛い。

賭けには勝って真つ暗なL字カーブに突入できた時は俺も少しビビったが、あつちはそれ以上にビビっただろうにすぐに立て直してきやがった。

ビビり倒して急停車してくればそれこそ最上だった、そこまで行くとは俺自身も思っていなかったがさすがベテランだよ。

もう上り坂を抜けた、R33がまた前にいる。ハイペースでまた引つ張り回されてもうスタミナはすっからかんだ。

最後の勝負所の3連ヘアピン、もうそこまで足はもたない、その先はもうどうしようもない。

そんなの分かってただろ、分の悪い賭けなのはいつもの事だろ。ここでダメなら本当にもうだめだ、そんなときや笑って泣いてやれ。

相手はR33、スカイラインだ。負けたって誰も笑いやしない、そもそも俺が勝てる見込みがまずない相手だ。

クソ悔しいだろうな、デイクープに情けなくて会いたくなくなるだろうな、だから勝ちたい、だから、やることは全部やってやる。

体感時速90km、100kmなんてもう無理だがそれは相手も同じだ。あつちもだいぶ足が鈍ってるように見える。

あつちも重い車体をここまで振り回してきたんだ、ブレーキは熱々でタイヤも削れてるんだろうさ。

視界の端に欠けた道路の端が見えた、近い、この先は3連ヘアピン



前の緩いコーナー、修復したばかりの新しい路面だ。

ブチが教えてくれた『勝負所』への最後の合図、ここで仕掛けなきやあとはない。ふらふらの足に活を入れる、すべてを振り絞って前を向く、これがすべてだ。

行く先はあいつの車体、その向こうに抜けるぎりぎりのイン突き追い抜きライン。前に、出る！

「ブウン、ブウンーぶうあああああ!!!」

声を張り上げながら足を回す、イン側のギリギリルートに思いつきり突っ込んでいく。

ここで仕掛けてくるなんて考えつかねえだろうな、来るなら次の3連ヘアピンが常道だろうよ。

R33のタイヤがより深くステアリングを切った、ここまでさんざん『俺』をブロックするために深く使い込んだタイヤでだ。

この瞬間だ、これでダメならもう勝ち目はない！力を抜く、足の力を抜いて距離を、置く！

『かかった、うまく立て直せよ!!』

荒れた路面なら路面がそのタイヤに食いついた、だがここは補修したばかりの綺麗な路面。その使い込んだタイヤだったらどうなる!!



足元が浮くような感触がした時、彼は一瞬自分に何が起きているのかわからなかった。

滑っている、俺のRが、外に膨らんでいく。制御できなくなっている。馬鹿な、あり得ない、一体何が起きたんだ!?

「な、にいいい!!?」

ズルズルと滑っていくR33のハンドルを切りながら彼は自分が今どうなっているのかを理解した。

タイヤだ、今までR33を走らせてきたタイヤが急に食いつきが悪

くなつた。路面状況がこの区間だけ、まるで違うものになつたかのよう

に。咄嗟にブレーキを少し踏み減速、アクセルから足を放して減速しつつシフトダウンでエンジンブレーキ、ハンドルを切つてタイヤを食いつかせてグリップを取り戻す。

永遠のように長い時間ズルズルと滑つて外側のガードレールに向かつていた車体がガードレール寸前のところで安定した処で、彼がようやく一心地着いて前を見たときすでに目の前に栗毛の馬の姿があつた。

「今のはフェイント？これを狙つたのか、嘘だろおい」

もう彼も限界だろう、徐々にペースダウンしているがそれよりも今のタイミングをすべて読んだフェイントを仕掛けた頭の良さに舌を巻いた。

抜けるか？そう思ったがすぐにその思考は消えた。何とか姿勢を立て直して車を車線に戻しながらステアリングを切ればすぐにタイヤの様子が分かつた。

もうズルズルだ、曲がるし走れるがもう先ほどまでの攻めができるグリップ力が残っていない。

もしコーナーで攻め込めば確実にタイヤが滑つて車線は膨らむ、もしアクセルを踏み込めばタイヤが空転して制御不能になる、完全に使い切つた。

(ダメだな、ここで勝負を仕掛けても、次の3連へアピンを抜ききれない、また抜かれるか：勝負あり、か)

時速60キロ、シマカゼタービンの後ろについていくだけが精いっぱいだ。もう自分は戦えない。

アクセルを吹かすだけできつと今のシマカゼタービンは楽に抜ける、前に出てしまえば3連へアピンも楽にコースを取つて抜けられるし勝てる。そのように見えるだけだ。

自分はこのコースを最後まで全力で走り切れず、最後の最後でシマカゼタービンに前を許して先行された状態で力尽きたのだ。

(俺のRが負けた、いや、俺が負けたのか)

相棒の性能は絶対に負けてない、だとすればあの馬が最後まで狙っていたのはドライバーの認識。

あいつは最初からこれを狙っていたのだ、タイヤがぎりぎりになる瞬間を狙って、コーナーで深くステアリングを切るように誘導した。

ここまでも馬すら入れないぎりぎりのラインを切ってきたのだ、考えてみれば当然だ。タイヤにはいつも以上に負担がかかっていたのだ。

「なんてこった、俺としたことがこんな初歩的なミスで負けるとは：やられたぜ」

そこを突かれた、自分がそれを見逃すわけがない。対策はできる限りしてきた、その走りもできる限りこなしてきた。

だが目の前の馬はそれすらも読んで、それすらも利用して、最初から仕掛けてきていたのに自分は気付かなかったのだ。

笑いがこみあげてくる、清々しいスカツとした負け方だ。自分の力不足でミスがでた、自分が完全に騙されたそれだけだ。俺の負けだ。

しかしわからないことがある、どうしていきなり路面状況が変わった？それもあの区間だけ一瞬。

「すげえよ、お前…」

地元の奴にしかわからない何かがあったんだ、それをこいつは理解したうえで罠にした。

そうでなければあの自殺まがいのツツコミをする意味がない。そこまで考えて馬が走るなんて、恐ろしいこともあったものだ。

今回は完全に自分の負けだ、そう思うと不意に笑いがこみあげてきた。



今、何が起こった。大竹は目の前で起きた一瞬の競り合いと逆転の瞬間をカメラで捉えながら目の前の現実が信じられないでいた。

シマカゼタービンのスタミナが限界ぎりぎりだったのは大竹にもはつきりと見て取れていた、今までディーブインパクトと一緒に追い掛け回してきた彼が息を荒げて失速しかけているのは初めて見た。

R33のパワーに引つ張り回されて既に抜きにかかる力はない、そう考え始めていた矢先にシマカゼタービンが仕掛けた。

最後の仕掛け時になるだろう3連ヘアピンカーブの前の、何の変哲もないコーナーで仕掛けるシマカゼタービンは仕掛け時を誤ったかのように見えた。

だがそれは間違いで、シマカゼタービンに反応してブロックに掛かったR33はコントロールを失いまるで何かに引つ張られるようにアンダーを出して、その隙にシマカゼタービンが抜き去ってしまった。

「決まったな、あいつの勝ちだ」

「でも、まだ——」

「いや、もう終わりだよ。タービンの勝ちだ」

何をバカな、大竹は信じられなかった。まだコースは残ってる、まだR33の逆転する機会はあるはずだ。

だが目の前のR33は茂三の言う通り、さらに勝負に出る様子はどう見られない。

先ほどまで気が狂ったような攻めをしていた挙動は鳴りを潜め、シマカゼタービンを追走したままだ。

時速60km、今までのシマカゼタービンたちからは考えられないスローペースだ。

「ハザードランプ…降参？」

前を走るR33のハザードランプが灯った。茂三に教えられた走り屋の中のルールのようなもの、この場合は降参という意味に近いはずだ。

「だな、でもこのまま下まで一緒に行くぞ。ここじゃ次の邪魔になるしそのほうが下でギャラリーしてる奴に勝敗がわかるからな」

今頃、シマカゼタービンが先行している状態でR33がハザードランプを付けているのにギャラリーたちは大いに沸いている。

それはR33の後ろを走る大竹からも見るだけで分かった。みんな口々にシマカゼタービンとR33の敢闘を労っているのだ。

まるでウイニングランのような光景だったが、その様相は明らかに違う。どちらかといえばカーレースの雰囲気だろう。

「今回の勝敗、騎手のお前にもわかるように説明するとな。R33は足を使い切ったのさ」

「足を？燃料ですか？」

「タイヤだよ、Rのタイヤはもうズルズルだ。走ってるだけで精いっぱい、ここから踏み込めばまともに制御できんくらい消耗してんのさ」

茂三の言うタイヤを大竹は一度凝視する、だが傍目では全く理解できない。ちゃんと走っているように見える。

「素人にやわからん、でも走ってるあいつにはしっかりとわかってるだろうぜ。あいつはタービンの仕掛けに引っかかって思いつきり滑っただろ？」

あそこから持ち直すのにタイヤを使い切っちゃまったのさ。あいつはこれ以上アクセルを踏めん、踏めばグリップが弱ってズルズルになったタイヤは簡単に地面を手放しちゃう」

「…まさか、最初から？」

「それしか勝ち筋はないよ、あいつは最初からこれに狙いを絞ってた。相手がそれに対応できるところも含めて賭けてやがったな」

思えばその兆候はあった、最初にR33を抜きにかかったときからずっと、彼はかなり攻勢に出ていたように見えた。

それはこのためだった、R33のタイヤを狙ったフェイント攻撃だったのだ。

「ついでに言うと、あいつはここでの勝負も決めてた。なんでかわかるか？」

「いいえ」

「さっきの一区画、最近補修されてるから路面が綺麗なんだよ。今までの路面は荒れてたからな、酷使したタイヤでも荒れた路面の方が食いついて安定してたんだ。」

でもさっきの一区画、あそこはきれいでタイヤに食らいつくような荒さがまだなかった。一時的に滑りやすくなってたんだよ。

それでも普通に曲がれただろうが、R33のドライバーはタービンのフェイントにまんまと乗っちゃまった。

結果、アンダーでズルズル滑ってクラッシュ寸前。かろうじて持ち直したはいいが、その過程で残ってたタイヤは使い切ってツンツルテェンというわけだ」

あり得ない勝負の掛け方だった、少なくともきっちり整備されたレース場ではまずありえない路面状況であるのにその中でもこの一点を勝負所に選んだというのか。

「こういう勝ち方もあるのさ、普段から手の入ったコースしか走らないんじや養われない勝負スキルだよ」

最後の勝負所になると思われていた3連ヘアピンコーナーを抜け、ゴールまでの直滑降を比較的ゆったりと抜けていく。

そしてシマカゼタービンを先頭に2台の車がゴールになっている麓の境を抜けると周囲からひととき大きな歓声が沸いた。

だがシマカゼタービンはまるで反応せずにゆっくりと減速すると路肩の電柱の前に体を寄せると体を横たえる。

大竹はその近くに茂三がAE86を駐車すると同時に彼の元に駆け寄っていた、すぐに酷使しただろう両足に目をやる。

蹄鉄がひどく消耗しているが、そこを除けば疲労しているだけで大きな損傷はないように見えるが油断はできない。

「ほら水だ、ゆっくり飲め。大竹さん、足が見たきや見ればいい。こいつに蹴り癖はないぞ」

車内に常備していたのだろう水の入った2リットルペットボトルを持ってきて、シマカゼタービンの口に突っ込む茂三の言葉に大竹は頷いて彼の右前足をそつと手に取った。

思い返せばこうして彼の足を触るのは初めてだ。触ってみて感じるのは違和感、いつも触ってきたサラブレッドとは違う足の逞しさが目を引いた。

足の筋肉がほかのサラブレッドよりも発達していて足を覆い、触診

で分かる滑らかな感触は走る衝撃を緩和するようになっていようように感じる。

今まで見てきたことのないようなバランスだ、専門家が見れば不適合と言われそうなバランスだ、だがその足がアスファルトにかみ合っているのだ。

ほかの足を手に取っても同じだ、どの足も蹄鉄の摩耗は激しいのに足自身に残っているのは極度の疲労ばかりで異常は見られない。

「どうだ？」

「頑丈な足ですね、蹄鉄の摩耗具合がすごいのに足には全く問題が見られない…羨ましい限りです」

「それがこいつの持ち味だ、こいつ自身無駄に頑丈だからな」

本当に羨ましい、こんな足はディープリンパクトでさえ持っていない。いや、今の日本中を探してもこんなサラブレッドはいない。

こんなに酷使して、車と戦って、アスファルトの上を9キロも駆け下っているのに残っているのは疲労だけなのだから。

もちろん自分は専門家ではない、もしかしたら医者に見せたら何かしら言われるかもしれない。

でもサイレンススズカを見送ったときからこの手に残る骨折の感触は、彼の4本の足からは全く感じなかった。

恐ろしい足だ、魅力的な足だ、速くて力強くて頑丈な足なんてどんな競馬騎手も欲しがる。

「…帰ります」

「いいのか？明日は何もない、夜は好きなだけ走れるぞ？」

茂三は分かっているのだ、自分がディープリンパクトの元に帰ろうとしているのが。大竹は首を横に振った。

もう無理だ、見ていられない、どんどん欲が強くなるから。乗りたいと今も思った、でもやはり彼を思うならそれはだめなんだ。

目の前で体を休める彼に触れているとその思いがどんどん強くなってしまふ、でもそれではだめだ、こんな思いではだめだ。

だって今自分が見ているのはシマカゼタービンであって、今まで乗せてくれていた相棒たちの誰でもないのに、重ねてしまっているのだ

から。

シマカゼタービンはまだ水に夢中だ、もうほとんど飲み切っている。今離れるのが一番だ、そう思って大竹は足を静かに降ろして立ち上がろうとした。

「ムフツ」

「なんで…」

その矢先、あまりにも懐かしい感触がして引き戻された。右袖が掴まれていた、服の袖を、ペットボトルの水を飲み干したシマカゼタービンが食んで引き留めていた。

なんでお前までそれをするんだよ、なんであいつまで思い出させるんだよ。スーパークリークと同じようにできるんだよ。

振り払うべきだ、振り切るべきだ、そうしたいのに、あまりにも懐かしくて振りほどけない、いや振りほどきたくなかった。

何もかも若返ったようだった、昔の自分に戻ったような、そんな熱までもが戻ってくる。

「ムフナー」

俺を見ろ、そういわんばかりにシマカゼタービンが強く鼻を鳴らす。今ここで走ったのは誰だと言いたげだった、あのR33に勝ったのは誰だと聞きたげだった。

ここに居るのは誰だ、今ここで自分を見つめているのは誰だ。シマカゼタービんだ、俺が勝ったんだ、そう言いたくて仕方がない色だった。大竹は彼の瞳をじっと見つめて、胸の奥に湧き出る欲が抑えきれなくなった。

彼に乗りたいたいのだ、彼を走らせたいたいのだ。サイレンススズカでも、ツインターボでも、スーパークリークでもなくシマカゼタービンとレースを走ってみたいのだ。

あのR33とのバトルで見せつけた知性を、末脚を、根性を、スタミナを、競馬の世界で輝かせたいのだ。

「茂三さん、やっぱり、ダメですか？」

「ん？」

「やっぱり、私はこいつに乗りたいです。ディープは最高ですよ、だれ



にも譲らない。でもタービンも…やっぱり譲りたくない」

シマカゼタービンを大竹はまっすぐと見つめた。シマカゼタービンだけをまっすぐと、だれも重ならない、彼だけの姿をはっきりと見た。

「僕は彼とも走りしたい」

「最盛期には間に合わんぞ」

迷わずに頷く。そんなのは今更なんだ、でもこうして出会ってしまっただんだ。それを無視するなんて、やはりできない。

「こいつ次第だ。お前がディープリンパクトでやること全部やってから、こいつがまだ走れたら、その時は頼んでみる。

良いと言えば、中央にでもどこにでもお前を乗せて出してやる。敏則も会社でやることあるしな」

「茂三さん」

「もちろん俺の会社からだ、群馬のここから行ける所だけだ。他所様にはや扱えねえのは分かるだろ。だがこいつが『嫌』だと言ったら諦めろ」

息が止まるような気がした、茂三は今までよりも優しくただ微笑みを浮かべていた。

「前のお前はこいつに重ねてた、サイレンススズカも、ツインターボも、スーパークリークだって、全部重ねてただろうが。

それが俺には我慢ならなかった。こいつはシマカゼタービンだ、ほかのどの馬でもねえんだよ。それができないやつを乗せるなんて冗談じゃねえ。

だが今のお前はこいつを見てた、ちゃんとその目でシマカゼタービンだけを見て乗りたいて思ってただろうが。

お前は自分で背負って、それでも乗りたいて言っただろうが。それを断る理由にはならねえ」

茂三はそう言ってから一拍置く。

「ディープリンパクトでやること全部やって、あいつを史上最高の競走馬にしてきな。今の相棒をあきらめる気だっただねえんだろ？」

「はい」

最盛期に乗ることはできないかもしれない、それでも彼ならばもつと活躍してくれそうな気が大竹にはしていた。

シマカゼは驚く程に頑丈な馬なのだ。もしかしたらそれこそ、一年や二年の遅れなんて気にもしないくらいに暴れてくれるかもしれない可能性がある。

そうなたらおもしろいことになる、日本競馬会は大揺れだろう。そう思うと、また明日が楽しみになる大竹だった。

「やれやれ強欲な奴だぜ。タービン、明日は思う存分振り回してやれ。お前に乗るかもしれんぞ、こいつ」

「ブルツ…ブウン！」

## 第11話

2005年12月25日、中山競馬場『第50回・有馬記念』最終コーナー、ハーツクライの騎手、ポール・ルベルは困惑の只中にいた。なぜだ、おかしい、耳朵を打つ蹄の足音の波の中から聞き取れる、今一番聞き取りたくない足音が聞こえてきている。

シミュレーションは完璧だった、調教は完璧だった、作戦も詰めるだけ詰めてきた。ああそうだと、前準備は完璧だ。

何もかも完璧な準備と対策をしてきた、今日こそあの連勝を食い止める日なのだ。と心の底から決めてきた。

(なぜだ?)

そのために己は完全に仕上げてきた、相棒も完全な仕上げをしてきた、俺たちは完璧に走れているのだ。

なのにいる、俺たちの後ろに奴が来ている、見なくても分かる、あの黒い怪物の足音が近づいてきている。

追い付けないはずだ、追い抜けないはずだ、そのはずなのに悪寒が止まらない。

近づいてきている、そのペースが速すぎる。

(なぜそこにいる、デーブインパクト!!)

愛馬のハーツクライが限界まで足を酷使して先行策から押し上げてトップを取っている、その鞍上でルベルは戦慄に背筋を凍らせていた。

十分なマージンは取れたはずだった、これまで得たデータから見れば、デーブインパクトの追い込みを躲せるはずなのだ。

後ろにつくりンカーンならばともかく、一番この策に嵌めるつもりだったデーブインパクトと大竹が追い付いてきている。

あり得ないはずだ、見破られても問題ないくらい飛ばしてきた、デーブインパクトが追い込みきれない距離を稼いでいたはずなのだ。

(速すぎる、本気ではなかったとでもいうのか)

いやあり得ない、そんな舐めたことをしている連中ならこんな大舞台に立てるはずもない。

ならば答えは一つ、自分たちの想像以上にあのコンビは走りをしてきたということ。

(真後ろ、食いつかれてる。上げろ、ハーツクライ！)

もう最後のコーナーは中盤に入っている、すでに最後の直線までわずかだ。無理を承知でルベルはハーツクライを加速させる。

(勝つのは俺とハーツクライだ。頑張ってくれ、相棒！)

ここまで来て負けを認める気はない、このまま逃げ切ってみせる。相棒ならばそれができるとルベルは信じていた。

それをさせる走りを指示できると信じているし、ハーツクライもそれに応えてくれている。速度が上がる、ハーツクライも意地で足の回転を上げてくれた。

(抜けるなら抜いてみろ！)

追いつがるリンカーンと追い上げてくるディーピンパクトに向けて心の中で啖呵を切る。

自分たちは先頭の内ラチ沿いを走り抜けている、追い抜くなら外側から行くしかない。このコーナーで抜けなければ最後の直線。

そこでの加速勝負ならハーツクライはディーピンパクトに負けない、粘れるはずなのだ。

(外からこの速さでさらに加速、ディーピンパクトか!? オーバースピードだ、膨らむぞ!!)

ディーピンパクトの足音の重さが変わったのに気づいた、速さも上がっている、明らかにスピードアップの兆候だ。

あり得ないことだ、こんな加速はデータになかった。ディーピンパクトの末脚はもう研究し尽くしていたはずなのだ。

なのに加速している、このコーナーを曲がりながらどんどん差を詰めてきている。リンカーンを抜き、すでに並びかけている。

その音から感じ取れるコースは馬にできるライン取りには見えないう円を描いている、無茶苦茶な走りにルベルはすぐに気付いた。

速度が乗りすぎている、曲がり切れるわけがない、曲がり切れるはずがない、大竹もディープインパクトも必死だ、賭けに出たのだ。

(分の悪い賭けだ、このまま前に——)

「行けーディープ!!」

思考が大竹の掛け声に遮られる。瞬間、鹿毛の馬体が自分の真横をすり抜けていった。その動きは馬のする動きではないように見えた。余りにも自然に、わずかに下半身部分が外側に膨らんだままするとスリップするような挙動できれいにコーナーを抜けていく。

前足と下半身がまるで別の馬が動かしているかのような足運び、その動きにルベルは思わず目を疑った。

(翼、だと…)

それは幻覚だった、そのはずだ、でも確かにルベルの目には一瞬だけが映っていた。

飛ぶように芝を駆けるディープインパクトと鞍上の大竹の背中から、大きな翼を広げているのが。

最後の直線に入る、すでにディープインパクトが前に入り込んでいた。

ふぎけるな、ルベルはハーツクライにもう一度鞭を入れる。ハーツクライの目にも火が灯っていた、ふぎけるなと嘶いた。

負けてたまるか、行かせてたまるか、このまま勝ち続けられてなるものか!!

(縮まらない!!)

追いつがる、追いかける、なのにあの黒い馬体が大きくなならない。速すぎる、速すぎる、格が違いすぎる、

まるで別の何かを追い求めて鍛え上げたような、まるで別物の末脚だ。

ディープインパクトが目の中のゴール板を抜けていく、続いて自分たちが抜ける。2着だ、1馬身差だった。

1着『6番・ディープインパクト』2着『10番・ハーツクライ』3着『14番・リンカーン』4着『4番・コスモバルク』5着『13番・ツバキプリンセス』。

目の前のディープリンパクトと大竹が駆けていく、ウイニングランを行うコンビの姿はあまりにも遠くに見えた。

会場が大きくどよめいている、歓喜に沸いている。無敗の四冠、皐月賞、東京優駿、菊花賞、そしてこの有馬記念。

ディープリンパクトはかの伝説にどんと近づいていく、新たな伝説が今日の前にいるのだ。

それに喰らいついて行ったライバルたちには健闘を讃えるエールがこだまする、だれも貶すことはない。

「負けた、な。ハーツクライ」

悔しさに目頭が熱くなるのをルベルは感じて、それを振り払いながら頑張ってくれた相棒の首を撫でる。

ハーツクライも悔しそうに声を発して、顔を俯かせてしまった。お前が落ち込むことじゃない、ルベルはそう思いながらやさしく微笑みかけた。

この敗北はハーツクライのせいではない、ディープリンパクトと大竹の技術向上速度を見誤った自分たちのせいだ。

もつと実力を上方修正しながら調教をするべきだったのに、それを怠ってしまったのだから。

だからこそ気になった。ディープリンパクトは一体どんな訓練をしているのだろう、もしハーツクライも同じような訓練をさせたらもつと強くなれるだろうか。

(そういうえば、群馬競馬のトレーニングセンターによく行っていると聞いたな)

まだディープリンパクトが弥生賞を勝ったばかりの頃、そこである噂が立ったのを覚えている。

曰く『ディープリンパクトが模擬レースで地方競馬の競走馬に全敗した』という与太話だ。

大きく話が広まることなく風化したと記憶しているが、そのころからディープリンパクトは最終調整には必ず群馬に遠出するらしい。

そういう噂になる何かがそこにある、と考えられなくもない。

今度掛け合ってみるか、ルベルは次こそはあの黒い馬体の前にハー

ツクライを導く決心をして、歓声に沸く中山の観客席を目に焼き付けるために目を向けた。

次こそはこの声を相棒に向けさせるために。



お仕事は何も峠道ばかりを使うわけではない、芦名市街地をゆつくり練り歩く形でやることもある。

今日はその日だ、背中に未熟成のウマ練りを背負って敏則に引き紐を握られながらゆつたりと歩く。

『いい天気ですなー』

『だなあ』

『うむ』

ブチとコマツが俺の仕込みに散歩がてらついてくるのも日常だ。もうご近所さんも慣れたもので一目見ると普通に挨拶してくれたりする。

「あ、シマカゼだー！」

「うまー！」

住宅地をカツポカツポしていると、公園前に差し掛かったあたりで近所の幼稚園児たちのお散歩に出くわした。

こいつらの幼稚園にはふれあいの一環で何度か顔を出してるからもう顔見知りだ。

うちが瀬名酒造一行だとわかると引率のお姉さんが挨拶してきて、敏則がそれに応える。

そして近くの公園に一緒に行くと、敏則がいったん酒を下ろしてくれと同時に一齐に園児たちが突撃してくるのもいつもの事である。

こういう触れ合いも社会で生きるためには必要なこと。しかし芦名の子供たちは元気だ、男女問わず俺の足をよじ登ろうとしてきやがる。

『あぶないからやめーや』

「わー!」

服の背中を食んで軽く持ち上げてから引き剥がして背中に乗せるのものいつもの事。園児たちも慣れたもの、背中に乗せたらしがみつただけで暴れない。

「けんじずっけー!おれもおれも」

『そこでおとなしくしとき、ほらほら順番な順番!』

一人乗せると俺も私もとやってくるから順番に乗せてやって軽く広場をくるくる回ってやる。

プチ乗馬体験だ。タダで、しかもサラブレッド(兼業)に乗れるとかそうそうできることじゃねえぜ。

もちろん落とすようなことは絶対にしないし、ただ歩いてるだけだからそうそう落ちたりもしない。

「ぶちー!」

『おいおい嬢ちゃん、力持ちだな』

ブチも慣れたもので、女の子に抱き上げられてきやいきやい振り回されても全く嫌がるそぶりを見せない。

顔は仏頂面しながら心の中では笑ってる、尻尾もぶんぶん振ってるし。

「ぶーちゃ!!」

『俺は豚じゃねえ!!』

「ぶー!」

『むきやー!』

コマツが子豚扱いで猫みたいな威嚇してるのもいつもの事、ぶーぶー言ってる男の子にだけで他の子の撫でる手には何もしないから分別はついてるって思われてる。

実際何もしない、ブーブー言ってる男の子にだって襲い掛かるとかしないし。

コマツ、お前は猪豚だから豚の一種なんだけど…こんな触れ合いも日常、時々こいつらの幼稚園にも行ってふれあい体験するしな。

「いけー!でーぶいんぱくと!!」



『ちやうねん、シマカゼタービンやねん』

と思いつつ少し速度上げて走る振りしちやう俺、子供の夢壊すわけにはいかんよね。この年齢のお子さんは可愛いこと可愛いこと。

デーパーやっぱ人気なのな、こんな小さな子供も名前知ってるんだもんな。友人、もとい友馬ながら鼻が高いぜ。

でもなけんじ少年、俺はそのデーパーより実は速いんだぜ？模擬レースでだけだな。

「おうまさんおうまさん、ニーー！」

「ヒューー！」

早歩きしてると追いかけてきた女の子が足元でニッコリ笑ってくるのに、俺もお返しでにっこり笑う。するとキヤツキヤと笑う。

『『やっぱ、子供は可愛いなあ…』』

偶然ブチとコマツの呟きと重なった。なんだかんだ言ってみんな子供は好きよ、このまま健やかに育ってくれと願うばかりだ。人生は厳しいもんだがな。

そんなひと時の触れ合いもすぐに終わり、幼稚園児たちがお散歩の時間が終わると同時に俺たちも仕事に戻る。

元気にバイバイしてくる幼稚園児たちに、俺たちはその場でお座りしたまま右前足でバイバイしながら見送った。

『可愛かったな』

『うむ』

『ま、そだな。しかし豚じゃねっての、猪豚だつての』

「お前ら、顔がにやけてるぞ」

敏則の奴が困ったように言ってくる。しょうがないねん、可愛いは正義だぞ。

幼稚園児たちを見送ったらお仕事再開、お酒を背負って街中を再びかつぽかつぽ。

途中、敏則が商店街で夕食の買い出し、俺は商店街に入るにはデカいから外で待機。自販機で飲み物を買ってブチとコマツに分けながら外で待つ。

この時、商店街の外に位置する家電屋のショーウィンドウに展示さ

れるるテレビを見るのが楽しみだ。

路肩の端つこに座り込んで、リラックスしながらお茶を飲みつつテレビ鑑賞である。

『おー、頑張ってますな』

偶然にも有馬記念の中継、最後の方だけだけどどうやら勝つたらしい。

ま、2500メートルなんざ3000メートルを走り切ったあいつなら楽勝なんだろうけどな。

しかし強いよなあこいつ、これでG1…だっけ、4連勝じゃん。向かうとこ敵なしだ。

あ、よく見るとツバキプリンセスもいる、5着か。大健闘だなこれ。

『ふうん、面白い馬だな。後ろから一気につてことはモンズニーのヤツの言う追い込みつてやつか』

『追い込みがどうかは知らんが、結構ギャンブラーだなこいつ』

俺の背中に器用に乘って一緒にテレビを見てるブチとコマツの言う通りだ。

ディープは強いしやるときはやる、あいつほんと強いからなあ：

あ、リプレイ始まった。

なんかすごいことやらかしたとか…あ、こいつ尻を振って曲がってやがる。いつの間に覚えたんだ：

「タービン、終わったぞ…ん？有馬か」

くいくいと引き紐を引っ張る敏則もテレビのほうを向く、見慣れた馬が走ってりやそうなるよな。

しかも俺の走りを身に付けてやがるし、俺も覚えるの苦労したのにコイツときたらもう実戦で運用してるとかホント天才だわ。

「おや、こんなところで道草とは…うん？競馬を見てるといいうのも珍しいな」

「あ、マサさん、どうも」

歩道の端に横たえていた体をよっこいせと起こしていると顔なじみの厳つい中年お巡りさんがこつちを見て声をかけてきた。

顔なじみのおまわりさん、小さいころからずっと近くの交番にいる

雅孝さんだ。

わが社のウマ練りリピーターでもある雅孝さんとはなじみ深い、仕事用の自転車が悪れたときなんかしばらく貸し出されて乗せてたこともあるくらいだ。

すまんね、お巡りさん。今日は仕込みと夕食の買い出しですわ。

「珍しいこともあるものだ、いつもは車の時くらいだろうに」

「最近仲のいい奴が出てたもんですからね、それで見てたんでしようよ」

「ブルツ！」『そだね、それ以外ないっしょ』

俺が競馬見るなんてそれこそめつたにない話である、そもそも興味ない。この店で足を止めるのはカーレースの時くらいだ。

俺の馬房にもテレビが欲しいぜ、ラジオもそうだがなかなか手に入らん。

「それならいいがな。タービン、興味を持つのは良いがギャンブルはだめだぞ。ああいうのはすぐ身を滅ぼしてしまうからなあ」

「何言ってるんだよ、こいつは賭けられるほうだぞ」

「お前こそ舐めちやいかん、こいつが金勘定できるのはみんな知ってるんだぞ？ちゃんと教えにやならんだろ」

分かっているよお巡りさん、賭け事するのは俺も好みじゃねえから安心なつて。俺がニッコリ笑ってやると雅孝さんも満足そうにして、そのまま巡回に戻って行った。

「馬が馬券買えるわけ…いや、買えるのか？馬が禁止とかいう条項あつたっけ？」

『知らん』

競走馬が自ら馬券を買っちゃだめってルールがあつたかは覚えてねえが。普通に馬券売り場に並ばせてくれるとは思えんよな。

馬券の自販機とかあつたっけ？そこらへん行ったことないからわからんが…ま、買わないからいつか。

しかし、すげえ歓声だな。観客席一杯だしみんなデイープのこと見にきたっばいし、これが有馬記念か。

『そっういや呼ばれなかつたな、お前』

『ブチさんや、普通あんな場所に俺みたいな輓馬が呼ばれるわけねえっしょ』

モンズニー爺さんの言う暮れの中山ってのはこれの事なんだろうが、まあそんなの奇跡が起きてもありえんね。

こいつは文字通り一生に一度の晴れ舞台、ツバキプリンセスが出てたみたいだし俺よかダイオーかノルンのほうが可能性高いよ。

それにみるよ、この観客の数、これ金を賭けてる奴ら大半だろ？そんな期待背負って走るなんて考えたくもないぜ。

『お前だつてはえーじやん』

まあ菊花賞の後もあいつはこつちに來たしな、その時も3000と2500で走ったから勝ちはしたさ。

だがね、コマツ。やっぱり俺には縁のないお話だよ。

## 第12話

新年気分も抜け始めた2006年、今日も今日とて群馬トレセン。俺はアルバイトに：ではなくて健康診断に来ております。

俺こう見えても競走馬、ドーピングとかしてないかの検査は定期的にあるのよね。

とはいえまだトレセンの中には入ってない、まだ社用の古い一頭用馬運車の中でボケっとしてる。

なんか妙に車が多いのよね、いつもならするつと入れる受付の正門に先客が2台いるし。

『すげえな、駐車場が埋まってやがる』

古くなって壊れたところを補強した窓から外を見れば、群馬トレセンの正面口にある一般用駐車場に車がずらり。

普通の乗用車ばかりだけどこうやって並んでる光景。うわ、一列ハイエースで埋まってやがるどころあるぞ。

「やっぱあの2頭目当てか？」

「ブルルツ」『じゃね？』

ダイオー達もだいぶ今年は暴れたって聞く、ダイオーはジャパンカップ、ノルンは秋の天皇賞を取ってるし。

今日はいないツバキも有馬じゃら着だったが、その前にエリザベス女王杯とかいうので一着だ。

G1のでかい大会ってことしか知らんが、そこら中強い奴らばかりだったろうによくやるぜ。

この前の有馬だってデイープの走りもすごかったが、そのデイープにずっと張り付いてるツバキもすごかったそうさ。

最後の最後で引き剥がされた上に割り込まれてら着になってたが、最初から最後まで徹底マークでへばりついているのがすごいらしい。

俺にはいつものことだったけどな、模擬レースだとダイオーとノルンも同じことしてたし。

特集されて知ったがデイープの応援もそうなんだけどツバキへの

声援もすげーのなんの、白い稲妻とかなんのことかわからんが愛されてんのは理解できたぜ。

「よう、今日は盛況だな。あれか、やっぱあの2頭か?」

「ええ、こつちに調整に来てるのはもう周知の事実でしょうからね。あの2頭で来年も中央と張り合う気満々発言の後に海外路線ほのめかしてましたし」

順番が回ってきた、親父さんが守衛さんに問いかけると肯定が返ってくる。そういやそんなことも言ってたな、海外遠征するのかなんとか。

「中央で暴れた地方馬で次は海外か：マスコミ、中まで入れてねえだろうな?」

「もちろん、前の時に嫌ってくらい思いましたからね。今日のマスコミはみんな騎手と調教師たちのインタビューだけですよ」

ああ、俺がデイトプと最初にやったときか。あの時はマスコミうざかったもんな、さすがに会社までくる奴はいなかったが。

馬運車が馬の搬入口近くの駐車場に止まると、親父さんがドアを開けてくれたので暇つぶし用の雑誌と小物が入ったクローラーボックスを啜えて外に出る。

係員の指示に従って親父さんの後ろにカポカポついていくと、見慣れた馬房に案内された。どうやらここで順番待ちらしい。

親父さんが話を聞いてくるので俺はそこで自分の番が来るまで待つ、これがまた暇だからいつも暇つぶし用にいろいろ持ってくるのサ。

綺麗に掃除された馬房の日当たりがいい場所で横になつてのんびり車雑誌を読んでもと再び馬房のドアが開けられる。

親父さんが帰ってくるには少し早い、目をやるとそこには見慣れた流星がまぶしいあいつがいた。今話題のホクリクダイオーである。

『ダイオーじゃねーか、脱走すんなよお前』

『ニシシ、今更たかが門一つで僕が閉じ込められるわけないよ』

たぶんここの連中は分かってやってると思うがな、開けたところでお前はこうしてちよっかい掛けに来るだけで逃げるとかしないし。

『で？本音は？』

『最近僕の部屋の鍵が変えられちゃったから…カードでピツとするのは反則だよ』

どうせいたずらしたんだろ、それもしようもないことを。カードキーとは奮発したな、こいつにナンバー式は効かんから大当たりだが。

『んで？何の用？』

『僕ね、次は大阪杯に出るんだって！デイープとおんなじレースだよ！』

『するとまた中央か？すごいな』

地方競馬の場合、中央レースに出るには踏む手順が多いと聞くがそれをやるあたり本気か。

『でしょ！ツバキの仇は僕が取る!!』

おお、やる気十分って感じだな、気負ってる様子もないし良きかな良きかな。

『やる気があるのは結構、だが怪我だけはするんじやねえぞ？』

『ダイジョーブ！毎日快眠！ぐっすり眠ると気持ちいいよね！』

『ならよし、健康診断は？』

『終わった！』

『なら…これ飲むか？』

駄弁るんなら飲み物あったほうがいいだろ、絶対顔合わすと思ったから用意してあるんだよ。

持ち込んだクーラーボックスを開けて、中から2リットルペットボトルに入ったジュース『はちみつレモネード』を啜ってダイオーに向けて差し出してやる。

大好物だろ？これ。おうおう、尻尾フリフリしてやがるぜ。

『アリガト。でき、タービンは？どんなレースに出るの？』

器用に受け取ったダイオーが、はちみつレモネードの蓋を器用に開けて飲みながら聞いてくる。

『俺は高崎のオープンと榛名特別、そこから白蛇記念』

高崎オープンはダート1000、榛名特別はダート1200、白蛇

記念がダート1600。ま、いつものコースだな。

これの賞金で半年分の登録料は賄える、うちが地方競馬に払ってる登録料と保険料だけだから安いんだわ。

教えるとダイオールの顔色が渋くなる、というかすごいつまんなそう  
だ。ま、そうだろう。

『いつものじゃん…そのあとは？』

『特にないな』

『そんなのじゃなくてもっと先！白蛇から高崎記念とか、選抜でステップ踏んで大阪とか！春の天皇とか！』

『無いな、公式は。あとは…あ、そういや赤城の若いのがFDで最近来てるからまたやるかも』

かなり前に赤城遠征したときにやりあつた若いヤツ、前は180  
だったが今はRX-7・FD3Sに乗り換えてやがった。

RX-7とはいえ不慣れな道で乗ってる奴もまだ馴染み切つてないから楽勝ですわ。

あれなら車を乗り換えたイケメン弟のほうが断然強い、延々と煽り  
散らしてぶつちぎつてやったわ。

『また車…強いのか？』

『車は強い、運転手はまだまだだ。でもロータリーエンジンが良い音  
してたな、次はどうなるか楽しみだぜ』

あの気持ちのいいくらい詰まりがないエンジン音、あれは気合い入  
れて整備してなきや出ない音だ。

親父さんのハチロクや敏則のトイチのエンジンに負けなくらい  
愛されてるつてのがよくわかるよ。

それを俺がコーナーでインから追い抜く。あのエンジン音が一瞬  
真横にきて一気に後ろに抜けていくあの感じ、あの達成感…いかな  
な、うずうずしてきた。

でも平日だしな…週末が待ち遠しい。

『むう…良い顔してるし、レースだって面白いんだぞ！いっぱい応援  
してくれるのうれしいんだぞ！』

『んなこた知ってるよ、でも仕事もあるからそこらが限界だ』



それ以上行くとレース主体になっちゃうからな、それじゃ酒造りをやめなきゃならんし峠を走る暇もなくなりそうだ。

走るのは趣味だかんな、仕事はあくまで酒造りなんだよ。そういう血筋ってだけだ。

何の因果か地方競馬に繋がったから金になってるだけ。お前らみたいなのとつるめるのは面白いからいいけどさ。

『そろそろ戻らんと騎手さん迎えに来るんじゃないやねえの？見つかったらカードキー式どころじゃなくなるかもな』

『うげげ!? そりゃマズいヨー! じゃね、また今度走ろうね!』  
『いつでも相手にしてやるよ』

慌てた様子で馬房から飛び出すダイオー。やれやれ、馬房のカギ閉めずに飛び出しやがった。

開いてたら開いてたで厩務員さんに迷惑になるから閉め直さなきゃならん、まったくあいつは。

馬房のドアを閉めて、門を差してすっかり固定しなおして…おや、さつきまで向かいの馬房は空だったはずだが？

『タービン? お久しぶりですね』

なんとなくドアの上から首を馬房の廊下に出してまじまじ見ると向かいの馬房に馴染みの顔がいるのが見えた、ノルンファングだ。

どうやらダイオーと駄弁ってる間に来ていたらしい。群馬トレセンの厩務員、やっぱわかってやってんな。

俺とダイオーが駄弁ってるの見たのに何も言わずに仕事だけしていきやがった。こりやダイオー、向こうで怒られるな。

『おう、久しぶり。随分暴れたらしいじゃねえの? ますます強くなってるじゃん、ダイオーといいツバキといいどうなってやがる』

『そういうあなたはますます速くなってませんか? 聞きましたよ、最近はまだシビツクと張り合ってるのかなんとか』

『勝ってるがな、今のところ』

俺だって負けてらんないぜ、最近はいケメン弟とがつつりドッグファイトしてるからな。

あいつもEJ1からタイプRに乗り換えますますます強くなってき

てるぞ、前のEJ1が限界になるまで振り回してたしな。

最近はコーナーの際の際までべったり張り付けるインベタやるようになったから外から抜くしかなくて苦労するぜ。

やりがいあるけどな、おかげでだいぶ足が速くなったし。

『そういうお前も強くなっただろ、中央のG1を取っちまうんだからな』

『負けられませんから、ここまで来てしまったのであれば』

なんか顔つき違うなあ、なんというか気負い過ぎてる感じがするな。なんか昔に戻ったみたいだ、最初にあったころはもつと思ひ詰めて機械みたいになってた。

まあしようがないか、去年の競馬は大波乱だったとかテレビの特集で言ってたもんな。

ダイオーはジャパンカップ、ツバキはエリザベス女王杯、こいつが天皇賞・秋、全員次に狙うは中央G1からの海外重賞だっけか？

確かディープ達もそうだとか言ってたが…よく知らんから何とも言えんがすごいことなんだろう。

海外遠征といえれば前世で誰だったかな…あ、ジャスタウェイだ。漫画読んでたから覚えてる、ニュースでやってたな。

『気合い入れるのは良いが、気負いすぎんなよ？』

『大丈夫ですよ』

『そうは見えねえな、寝れてないんじゃないか？』

目の下にうつすらクマが…とかわからんけど疲れた顔してるぞ。お前はだいぶ前から夜はぐっすりタイプになってたはずだがな？

『よく見てますね、最近は少し昔に戻ったみたいで…』

『寝れてないじゃないか。アス…じゃなくて競走馬は体が資本だぜ？』

俺の健康のコツは『よく食ってよく走ってよく眠る』だ。

俺は人間と同じように夜はぐっすり、馬になってからは超健康的な早寝早起きができるからな。

馬の睡眠って結構頻繁に起きるタイプらしいね、最初は親父さんも変な顔してたっけ。

まあ体が慣れれば普通に寝れる、瀬名酒造のみんなも俺がちよいちよい教えてやったら寝れるようになったしな。

こいつとダイオーも同じ、ツバキも最近教えてやってからすこぶる体の調子がいいらしい。

ディープ？ 教えてたら一発で寝てたらしいぞあの天才、大竹さんがガチでビビって電話してきたとか親父さんが笑ってたわ。

『みんな期待してくれてるんですよ、父の背中を超える私を。そう思うと寝てられなくて…つい自主トレを』

『何やってんだお前？』

『空気椅子を少々』

『何やってんだお前』

馬の体でできる自主トレで足を軽く鍛えるならってことで相談には乗ったけどよ…この分だとやっぱ入れ込み過ぎてんな。

確かミホノブルボンだっけ？ こいつの親父、昔の中央競馬でクソ強い競走馬だったとか。

でもいくら親父が強くてもこいつはこいつだしな。

こりゃ、ツバキもおんなじことになってそうだな。たしかあいつらもいいとこの血筋だったはず。

誰だっけ、た、たま…タマモキヤット？ タマモナイン？ タマモノマエ…いやトモエクロスだったかな？ 稲妻だし。

『バカやってんじゃねえよ、ただでさえ昼間はギリギリまでやってんだろうにそれじゃオーバーワークじゃねえか』

『わかつてはいるんですけどね。でも最近はちよつと足りない気がして』

馬鹿野郎が。俺は思わず右前足を強く打ち付けた。その使命感は美德だが、行き過ぎりやただの毒だ。

そういう風にやる気を出して仕事に向かった人間の新社会人がどれだけぶっ潰れてると思ってる。

前世の俺の仕事場にだっっていたぞ、純情で気のいい努力家だがちよつとおつちよこちよいな好青年がな。

でもその努力が認められてもつと重要な職場に転属してから、連日

連夜の仕事三昧に潰されてそのまま病院送りだ。

そいつは死んじまったよ、酒におぼれてギャンブルに嵌って最後はぼろくそになって自殺しちゃった。

俺はそいつと顔見知りで、ただの仕事仲間でしかなかった。相談に乗ってやってるつもりになって、結局何もしてやれなかった。

そいつは馬だって同じなんだ、人間の期待に応えようと無茶してケガする馬はどこにだっている。

走れない馬の行き先なんて決まってる、そんな風になるお前を見たくない。

『自惚れんな、たかだかG1一つ勝っただけでそんなこと言うなんて百年はえーわ』

『あなたは向こうの競走馬がどれだけすごいかわらないでしょう。こっちの馬だって知らない、だからそう言えるんですよ。』

それに今年はずうまくいけば海外に行く予定になるっていうんです。もっと強い馬がうじゃうじゃいるっていうじゃないですか、いくら練習しても足りませんよ。あなたにはわからない』

『そうだな、俺はそんなもん知らん。ここで走った連中しか知らん、で？』

俺の相手はなんだよ？お前は分かっただろ、ミリオタお姫様。

『…あなたは強いじゃないですか』

『だからだよ、俺みたいな競走馬もどきの輓馬になんて負けてる馬がそんな風に気負うんざりはえーって言ってんだ』

俺は所詮『酒屋の輓馬』だ、それを越せなくて何が偉大な父だ。

お前たちはこれからどんどん上に行くんだぜ？それなのにこんなところで気負い過ぎてちゃ話になんねえよ。

そんなんじやお前は潰れちまうだろうが、知り合いの葬式に二度も顔出させんな。

『お前、俺に勝ったことここ最近あったっけか？』

無いだろ、お前も、ダイオーも、ツバキもディーブも、この一年は俺に勝てたことないだろうが。

『無いです…』

『だろーよ…今度の模擬レース、疲れ残してたら承知しねえぞ。弱っちいお前がもつと弱っちいとか話にならんわ。』

まずその親父の前にここにいる俺に勝ってみせろ。じゃなきや中央で勝とうが海外で勝とうが、偉大な父を背負う権利なんてサラサラねえ、覚えとけ』

だからちゃんと自愛して休みやがれ、この馬鹿もん。

## 第13話

芦名市街地、夜も更け始めたころ瀬名茂三は繁華街の一角にある行きつけの居酒屋にシマカゼタービンを乗り付けてやってきていた。

時々何も知らない観光客からは変わったモノを見た目で見られるが慣れたものだ、仮に飲み過ぎても自動で家に連れて帰ってくれるのできのいい息子は自慢である。

一度車が使えなくてシマカゼタービンで飲みに出かけてからというもの、こういう酒の席ではシマカゼタービンに乗ってくるのがいつものことになっていた。

いつものように店の前の駐車場の一番端つこの枠に停めて、近くの電柱に手綱を結ぶ。

シマカゼタービンはそれを見てからごろりと駐車スペースの中で横になって、尻尾を振って行くように促してきた。

「へいへい、じゃ、また後でな」

「グツフ」

飲みすぎんじゃねえぞ、と咳払いしてくる彼に茂三は確約できんと答えて店に入る。

「よう、大将。あいつきてるか」

「そこにいるよ、今日は？」

「駐車場にあいつがいるから、頼むわ」

知り合いの店の店主はあいつといえはシマカゼタービンだとわかる。あいよ、と答えると同時に彼の後ろから少年がメニューとニンジン片手に飛び出していった。

まだ小学生の店主の孫だ、おそらく店の手伝いに駆り出されていたのだろう。茂三の来店を目ざとく聞きつけたに違いない。

シマカゼタービンもこの街ではそこそこ有名な馬だ。行儀が良くて物わかりもいいから馴染めばどんどん仲良くなれる。

「食わせすぎんなって言つとけ」

「解ってんよ」

この場合、金勘定ができるシマカゼタービンより孫のほうが心配だ。主に興奮しすぎて怪我しないかで。

ほら行った行ったと目で訴えてくる対象に肩をすくめて応対しつつ茂三は、店主が教えてくれたカウンター席の隅に向かう。

そこには昔から馴染みの中年男が、一人で焼き鳥をつまみに熱燗を飲んでいた。香りで分かる、瀬名酒造の馬練りだ。

「相変わらず好きだな、甘口の熱燗か」

「今月もいい出来じゃねえか、この仕込みはタービンが？」

「どれ瓶を失礼…ああ、そうだな。良い具合になつてるぜ。翼、テレビで随分と大きく出たじゃねえか」

「しようがねえだろ、そうなつちやつたんだよ」

茂三は隣に座った親友、群馬地方競馬の理事を務める親友の桜葉翼は照れくさそうな笑みに微笑み返す。

「俺は本気だよ、あいつらを3頭、今年の成績いかんでは海外に挑戦させる。中央と張り合うことになるがな」

「面白いじゃないか。だが俺が思うに、それで終わるぞ、今のままじゃ」

茂三がそういうと翼は目の色を変えて、我が意を得たりとばかりに笑った。やっぱりそうだ、こいつは本気だ。

自分がツイーターボに熱を上げていたように、こいつもかつての伝説にお熱で、それを地方競馬でやりたくてしようがないヤツなのだ。

同じ田舎者同士、最盛期の中央競馬を生で見るとは少し距離があつて難しかった時代を生きてきた。

その少ない機会に恵まれてみてきたレース場の熱気と輝かしい伝説は今でも焼き付いている。

それを身近な競馬場でやりたい、もっとあの夢を見せてやりたい、そう思つて親友は本気で動いているのだ。

「そうだな、あいつらの実力は本物だ。だがこのままじゃその後が続かない。いずれ飲み込まれるか、一瞬の輝きで終わるな」

「どうすんだ？お前のことだ、流行りのサンデーサイレンスやほかの奴はできれば入れたくねえんだろ？」

翼は頷く。

「すげえのは認める、別に嫌いってわけでもねえ。俺が目指したいのは楽しい競馬だ、あいつらがいるともっと楽しいに決まってる。」

でもまだ駄目だ、もっと幅が欲しい。俺はみんなであいつが強いコイツが強い、顔突き付けあつてもっと考えられる昔みたいなやつがやりてえんだ。

あの走りならやれる、いやあいつが追い込む、逃げて逃げて逃げまくる、あの血だこの血だ、そんなん知るかこいつだこいつ、そういうあーだーこーだか欲しい。

今だつて楽しいんだろうがよ。なんか聞いたことある血筋が多くてちよいとつまらんとと思うだろう?」

「まあな」

だから自分は中央競馬を見なくなつた。確かに盛り上がっていた、でもそこには何か欠けてる気がして乗り切れなかった。

戦術もどこかスローペースで、最後のところでみんな全力で走るばかり。駆け引きはやっているのだが、一気にガツンと来るものが足りない。

翼の言う通り血筋が似通いすぎててなんか違うと思うところもあつた。

ブライアンズタイム、トニービン、サンデーサイレンス、この血統が強い馬と聞くとどういうわけか目についた。

彼らが悪いわけではないが、強いとどの馬も同じ親の血を引いているのではどこか機械的に均一化された感じがして嫌だつた。

その点でいえばまだ地方競馬のほうが考える余地があつて、番狂わせがあつて、見て面白かった。

有名で強い馬の血を引く有力馬が血縁もくそもないただの馬に千切られる、その瞬間があるかもしれないわくわく感がもっと欲しいのだ。

懐古主義だと笑うならば笑うがいい、それが自分は欲しいのだから恥ずかしくもなるともない。

「だがどうする? ダイオー達の活躍でほかの奴らは警戒してるぜ、今



から準備するのはちよいと面倒だ」

何しろ中央競馬と群馬地方競馬では財力も何もかもが違う。もし彼らが過去の有名馬の血を独占しようとするばできてしまうだろう。

店内に戻ってきた少年が焼き鳥とコロツケとサラダとウーロン茶を注文するようにホイホイとできるようなものではない。

いつかあの時の夢を全部群馬競馬に集めてやると豪語して、それを実行しつつある彼にも難しいことは難しいだろう。

「実はな、もういるんだよ。ひよんなところからぽろつとな」

「ほう？走るのか？」

「いや、走らんそうだ」

かつての伝説たちの没落はどうにもならない理由がある、一つがその産駒の戦績がどうにも伸び悩むことだ。

こればかりはその馬の個体差だからどうしようもないとは茂三も思っている、走る馬は走るが走らない馬は走らない。

競走馬は血統の競技である、もしその血統にケチが付けばそれをどうにか雪がなければ後は廃れるだけだ。

「どうせ走る気にもできん連中の評価だろ」

だがそんなものはくそくらえだ、血統の大切さは知っている、しかしどんな血統だろうが強い馬は強い。

速くて脆い馬もいれば遅くても頑丈な馬もいる。どんな馬を掛け合わせようが、どう生まれるかは天に任せるしかない。

茂三には持論がある。長年、馬と接してきて多くの競走馬たちを見て、多くの馬を引き取って、一緒に酒造りをしてきた経験から言えることがある。

馬を走る気にさせられないのにグダグダと文句を抜かす連中は三流以下だ。馬も生きているのだ、感情があるのだ、だから走ろうと思えないなら走るわけがない。

だがやる気さえあれば馬はその馬なりに走る。人間もそうだ、やる気がないならそれこそ何にもやらないのだ。

教えれば酒造りだってできる、出来ない馬だって別の仕事ができる、やり方次第でどんな風にもなれるはずなのだ。

どこまで行けるかは未知数だ、馬の努力と才能にもよるだろう。しかしまだ子供の時の体格や血統で決める連中が競馬では多すぎる。

頑張つてダメならしょうがない、どうしようもない時だってある、でも挑戦せずして諦めるか？否だ。

「俺に任せたいんだろ、写真はあるか？」

「ほら」

翼が見せてきたのは栗毛の綺麗な牝の仔馬だった。細身でサラブレッドとしては華奢、どこか緩いふわふわな雰囲気である。

写真を裏返すと父と母の名前が書かれていた、その父親の名前で思わず懐かしさがこみ上げる。

「親父はセイウンスカイ、母親がアレンフオート、母母がイルドルチェだ」

「牝馬か、最近多いな」

「しょうがねえよ、まだ牝は生産者も希望持つから値が張つてな」

「相手は地方馬か？どこの馬だ」

「北海道の地方馬だが勝ち星無いまま繁殖入りだ。まだ先の話なんだが、やってくれるか？」

「構わん、ダメならうちで引き取つていいな？」

「助かるよ」

瀬名酒造は常に馬の労働力を募集中である。今年はこの子が最初の採用馬になるかもしれない。

例えば競走馬としては成功しなくても、酒造りの才能を持つ馬かもしれない。そうでなくても活用法はいくらでもある。

とはいえ調教となるとどうするか、シマカゼタービンの時のようにハチロクの後部座席に乗せて走り回るのも悪くはない。

茂三のやり方は翼も分かっているだろう、ならば彼が望んでいるのはそれに加えてシマカゼタービンとのふれあいの方だ。

「うちのあいつを先生役にするんだ、逃げさせたいんだな？」

「当たり前だ」

「逃げるかどうかは馬次第だが、やらせてみよう」

シマカゼタービンは頭のいい馬だ、金勘定もできれば車の整備も理

解してて、走り方の教練もほかの馬に対する教え方が無駄にうまい。彼に先生役を任せれば、例え走れなくても頑丈で理解力のある馬に成長してくれるはずだ。そうなればほかの職種で十分働いていけるスキルになる。

少なくとも馬肉になることはない、仮に競走馬としてはだめでも酒屋の輓馬で決まりだ。

「言っとくが多くてもうちでは2頭が限度だ、それ以上は自分でやれ」  
「ダイオー達に任せてみるさ、あいつらも頭いいいな」

「そうしろ」

かつて一世を風靡して消えていった伝説の末裔にポケットマネーまでつき込む親友のことだ、見る目は確かだ。

茂三はもう一度セイウンスカイの娘の写真に目を落として思った、こいつも峠を走らせたなら面白そうだ。

夜の峠を並走するシマカゼタービンとこの馬の大きくなった姿を想像して少し微笑む、悪くない。

「後悔すんなよ、そいつにも俺の技術叩き込んで峠でバリバリ走らせてやるからな」

「頼もしいね。ならいつそシマカゼにも子供が欲しくないか？ちようどいいのが3頭ほどいるんだが？」

「それはあいつに頼むんだな」

いくら親父でも嫌がることはさせられん、茂三は酒を呷りながらにやにや笑った。



「しかし、ディープもすごい癖馬になったな。大竹さん」

「どうしたんです急に？」

夕刻、栗東厩舎駐車場、本日の調教を終えて帰ってきた馬運車の中で暢気に欠伸をするディープインパクトを見ていた調教師の言葉に

大竹は首を傾げる。

癖馬といえれば気性が荒かったり気難しかったりする扱いが難しい馬の事を差す。

だが今のディープインパクトは癖馬というほど気性が荒いわけではない、競走馬らしく対抗心は強いがどちらかといえれば温厚なほうだ。

よくわかっていない大竹の事を見て調教師は肩をすくめて苦笑した。

「実力もそうだが、うちらとしては物わかりが良くて扱いも簡単になって逆に怖いくらいだ。馬房もきれいに使うし、夜だつて寝たら朝まで減多に起きない。」

その上、口で言えばいろいろわかつてくれる頭の良さときた。今まで癖馬は腐るほど扱ってきたがこれは別の意味で癖馬だ」

「そうですかね、こいつとは長いですからそんな風に思ったことありませんでした」

「大竹さんはこいつとずっと一緒だから気付かないだけだよ。最初の頃と今じゃまるで別の馬だ。」

考えてもみろ、これまでの馬は栗東から競馬場までの移動だけでも結構なストレスなんだぞ。

それがあれだ、今なんか群馬どころじゃない長距離移動だつて暢気に居眠りしてる余裕を見せてやがる。普通は考えられんぞ」

そういえばそうだ、大竹は馬運車で外に出る合図を待ちながらうとうとし始めているディープインパクトに目をやる。

ディープインパクトの主戦騎手になり、シマカゼタービンたち群馬競馬の馬たちと交流するようになってからだいぶ慣れてきていたがやはり利口になつてきている気がする。

思い出せば今まで走ってきた馬たちも利口なところはあつたがここまでじゃなかったはずだ。

「…あいつも成長したな」

「この馬バカめ…所で、次は阪神大賞典だが、ディープの調整はやはり群馬で？」

「はい、そのつもりです」

「シマカゼか」

「彼ほどうちのディーブが本気になれる相手はいません。菊花賞の後でも負けましたからね」

今思っても信じられなかった。菊花賞を制した実力を持って挑んだ模擬レース、そこでは大差をつけられて負けた。

でもそれだけではない、群馬にはディーブインパクトと競いあう馬がほかにもいるし彼らも乗り気だ。

だがだからこそ、全力で逃げる相手を差す研究と追われても絶対に乱れない度胸を付けてきたのが有馬記念では生きたのだ。

もしシマカゼタービンと瀬名親子がいなければ、自分はハーツクライたちが仕掛けた先行策を見抜けなかったし、見抜いたとしても足が間に合わなかった。

常に全力で大逃げするシマカゼタービンを追従する脚力を培ったからこそ、あの追い込みの爆発力を得たといってもいい。

「勝てそうか？」

「解りません、俺たちは勝ちに行くつもりですが相手が相手ですからね」

ブロックが効かないくらいバカ逃げするか、それとも普通はやらない奇特な走りをしてくるか。どちらにしる怖くもあり楽しみだ。

「…正直、ちよつと控えたほうがいい気がするんだ。これ見てくれ」  
「雑誌？」

大竹は調教師に出された雑誌を手に取り、記事に目をやって首を傾げた。

「ハーツクライが群馬に？なぜ？」

「探りに来てるぞ、お前らの秘密をな」

「秘密なんてないんですが…」

「今話題の馬を探ると不思議なことが見えてくる。読んでみる、次の海外遠征を目指す地方馬のコラムだ」

「ダイオーにノルン、ツバキも海外遠征を表明…これならもうみんな知ってることじゃないですか？」

「まあな、実力は地方馬じゃ頭抜けしてるから夢物語じゃねえ。しかも全員血統が夢見させてくれてる」

トウカイテイオーを父に持つホクリクダイオー、ミホノブルボンを父に持つノルンファング、タマモクロスを父に持つツバキプリンセス。

どれも日本競馬を語る上では欠かせない名馬たちの血を引いていて、それで力強い走りを見せる重賞馬。

それも全馬が地方競馬所属で、並みいる中央競馬の強豪を薙ぎ払って今年の秋のG1を搔つ攫っていったのだ。

「それだけじゃない、地方はあの時代を蘇らせる気だ。群馬競馬の理事長自ら四方八方で昔の血筋をかき集めてやがるのはそこそこ聞く話だっただろ？」

結果があの大当たりだ、まだまぐれの可能性があるしみんな慎重だが次のレースで暴れたら怖ろしいことになるぞ。

しかも世界でも走らせてあつと言わせる気だぜ、できると思うか？」

やれる、何故ならこの3頭の実力は身をもつて知っている。同じシマカゼタービンの背中を追い続けて横に並んできた3頭なのだ。

有馬記念のツバキプリンセスも、最後までディープリンパクトに食らいついてきた。今でもあの追い立てられる恐怖は覚えている。

ハーツクライの背中に食らいつきながら、自分たちはずっとあの芦毛のライバルに追い立てられ続けてきたのだ。

最後に引き剥がせなければ、コスモバルクとリンカーンが意地を見せなければ間違いなく3着にいた。

そして少し運がツバキプリンセスに寄ってれば、自分とディープリンパクトもハーツクライと同じ運命だったはずだ。

あの時、自分とディープリンパクトは無茶をした。ツバキプリンセス達はそれをしなかった。

急激なカーブで発生する遠心力を後ろ足でカウンターを取って打ち消しながら曲がるドリフト走法、まだ未完成なドリフトもどきのそれはツバキプリンセスもできるのだ。

一緒になつてあの馬の尻を追いかけてきたからこそわかる、ツバキプリンセス達も理解していたはずだ。

だがその走りは馬の足に大きな負担をかける、一レースに一回が限度である。慣らしていても自殺行為、まさに賭けなのだ。

あの時ツバキプリンセスは賭けに出なかつた、自分たちは無茶をして賭けた。

二頭そろつてドリフトもどきに賭けていたらもつと厳しい戦いになつていた、運が良かっただけでしかない。

「彼女達ならばできますよ、あれはフロックでも何でもない」

実力は十分だ。模擬レースで何度も走つた大竹だからこそ、それは断言できた。

ホクリクダイオーは第25回ジャパンカップを、ツバキプリンセスはエリザベス女王杯を、ノルンフアングは第132回天皇賞・秋をそれぞれ取つた。

どの競争にも海外からの出走馬が出てくる中央シリーズ重賞G1、それを地方競馬から勝ち上がつてきた彼女たちが取っている。

ツバキプリンセスに至つては本気のディーパインパクトに最初から最後まで食らいつく意地の追走で有馬を沸かせた。

世間ではまだ注目され始めたばかり、業界では生産者たちに波紋が広がりざわつき始めているというところだ。

「だらうな。で、そいつらの事を調べると、そこも群馬トレセンに行きつく。ダイオーとノルン、ツバキも今は群馬だしな」

「…群馬に偏つてるんですね?」

「その通り、今年騒がせた奴が大体群馬に縁があるんだ。そりや目を付けるさ。お前、次の模擬レースで勝ちに行けるか?」

「もちろん、そのためにディーブとぼっちり仕上げてますからね」

本番のための模擬レースで勝つために仕上げるというのもおかし話だが、最近はその形でより一層ディーパインパクトと大竹は力がついているのが実感できた。

そのデータをもとに栗東厩舎での調教はより向上力を高めている、これからへのノウハウも着実に蓄積しているのだ。

「解つてんだよ、今のデイープも最高だ。でも俺は不安なんだ、また負けんじやねえかってな」

「負けるのもいつものことでしょう、タービンと瀬名親子に勝てたことがない」

「そうだよ、いつも俺たちは最高の状態にしてる。それこそ実戦並みに仕上げてんだ、でも勝てん」

それは群馬トレセンでいつも顔を合わせるほかの3頭とその騎手も同じだ。

芝でもダートでも、シマカゼタービンに勝てる馬がない。どんなに追いかけても逃げられてしまったら最後なのだ。

「勝てるって自信はあるんだ、でも勝つときの姿が全く浮かばねえ」

「私もそれはありますね、いつも彼の後ろ姿ばかりを追いかけてる」

「だからやべえんだよ、たぶん日程がかぶる。お前、ハーツクライがいる前で負ける気か？」

「それは言わせないください、負けたくて負けてるわけじゃない…でも彼の実力は本物だ」

「それも知ってるから困るんだよ、お前らは本気でぶつかって、あいつらも本気でぶつかって、あいつはお前らを千切る。」

やらせもなんもないのは俺だつて生で見てるんだから知ってるさ」  
でもな、と彼は少し物憂げな表情になって言葉を吐つた。

「お前らは四冠馬とその主戦騎手なんだ、それが地方オープン以降はまともに走らん地方馬に負ける？そんなんどう見ても異常だ。」

俺は怖いよ、これから先このままでいいのか不安なんだ。このままじゃ、なんか取り返しをつかないことになりそうな気がしてよ」

「まさか、考えすぎですよ。勝つてると言っても、ただの練習じゃないですか。誰も本気にしませんよ」

「みんなお前みたいなのやつならそれでもいいんだが、人間はそうじゃねえからな。」

あいつは走り屋じゃねえか、それも怖ろしく強いやばい奴だ。そんなの普通の人間が見たらどう思うよ」

大竹が収集してきたシマカゼタービンの本気の実戦、スカイライン



R33とのバトルとそのあとに取るだけ取ってきた記録映像はまさに栗東厩舎では全員が知る秘宝のような扱いだ。

その峠のバトルは競走馬の常識を鼻で笑う現実が納められていて、それを少し解析するだけでもシマカゼタービンの異様さと競走馬の調教に対するヒントが得られる。

何よりその映像は見るだけである種の光が見える、競走馬は突き詰めればスポーツカーにさえ勝てるという夢を見せてくれるのだ。

大竹自身、彼に乗って走った峠を下る感覚は身に焼き付いている。平地競争ではありえない速さ、ナイター以上に暗い峠道を駆け下る恐怖、シマカゼタービンが加減してくれても身が竦んだ。

「峠の話じゃあいつは十分話題性あるだろ？ R33をテクニックで勝ちに行く馬だ。俺は何度見てもゾツとするよ」

「確かに、でもうちのデイーブだつて負けてませんよ。今は無理でも、もっと訓練すればできるかもしれません」

それは確信でもある、あの映像はデイーブインパクトにも見せた。その時の彼の目には闘志が燃えていた。

あのシマカゼタービンが、自分を芝で散々負かした最大のライバルの本当の走りは彼に火をつけていた。

大音量のエンジン音も、スキル音にもまったく動じることなく彼はつぶさにシマカゼタービンの走りに集中していたのだ。

そしてその片鱗が有馬記念のドリフトもどき、アレを突き詰めていけばいずれはシマカゼタービンのドリフトにたどり着くだろう。

「臆病なはずの馬があんなとんでもない速さで真夜中の峠を走って、あのやかましいスポーツカーに挑みかかること自体普通は無いよ。

でもあいつはそれをやる、しかも足場は普通のアスファルトで、走り方もハチャメチャだ。なのに、あの速さであるの強さ、何よりあほみてえな技術があつて頭もいい。

四本足でドリフトしまくって平気な顔してるって何だよそりゃ？ 頑丈なんてもんじゃない、ドーピングしてるほうがまだ納得がいく」

「してないんですよ、それがまた」

群馬地方競馬から取り寄せている健康診断の結果はいつも正常で

ドーピングの形跡は一切ない。

栗東厩舎の疑り深い人間が、許可を取って血液を採取した後、精密検査に持ち込んだがそれでも白と出てこの世の終わりのような眼をしていた。

茂三に聞いてもいつも好きに走らせてる以外は、せいぜい普段の食料がほかの厩舎と違い所帯じみててバリエーション豊富ということくらいだ。

それもいい意味ではない、瀬名酒造で出されていたのは普通の飼料や近所の農家から格安で買い取っている屑野菜、瀬名酒造の社員食堂の残り物だ。

ドーピングどころか、競走馬たちの健康のために計算されて作られた飼料や飼料葉などと比べれば栄養価としては数段劣るものが主食なのだ。

「茂三さんの言う通り、アレは育ちからしてまるで別物だ。あんなに強けりやそういう育て方もあるんだって納得も行くが、だから怖い。

あれは一種のブレイクスルーだ、競走馬の調教の仕方を変えちゃうかもしれない」

まさか仔馬の時からスポーツカーに乗せて峠で振り回すなんて荒業を普通は考えるわけがない、けどそれをやった結果がああなのシマカゼタービンだ。

だから怖い、加熱していくこの競馬の中で大きな何かになっていくように怖い。調教師はそう言って口を噤んだ。

## 第14話

今日も今日とて群馬トレセン、トレーニング場はまだ朝8時と少し早いにもかかわらず騎手や調教師たちの掛け声と馬たちの嘶きに包まれている。

俺もいつも通り最近はずっと常連状態の芝コースを走行中、ノルンファングを相手に逃げ足のトレーニングである。

鞍上は敏則、親父さんはモンスニー爺さんのほうに乗ってるからな。今頃、一緒に次世代の仔馬どもをシゴいてるはずだ。

「相変わらずタービンはきれいな走りだな、敏則」

「そうですかね？」

「ああ、なんか気品あるんだよな。乱暴なのに」

「ブルツ？」『なんぞ？』

敏則とノルンの騎手さんが軽く言葉を交わす。それならノルンファングのほうがきれいな走りしてると思うけどな。

芝とダートで正攻法やってるこいつに比べたら、俺はほぼ自己流だし。

モンスニー爺さんに一通り習ったけど、そこからかなり自己改造加えてっから原型ないと思うぞ。

「ま、うちのはモンスニーと走り屋仕込みっすからね。そろそろ行きますよ、タービン」

敏則が合図をすると同時に走りのギアを上げる。慣らしは十分、全開走行開始だ。

『やっぱり速いですね、相変わらず！』

『まだまだこんなもんじゃねえぞ？』

体感時速60km、スタートから走行距離500メートルくらいでまずまずの立ち上がり、そろそろ一つ目のコーナーだ。

朝の気持ちいい空気を吸い込みながら、芝のコースを俺たちは全力疾走で駆け抜けていく。

後ろにノルンファンクがついてきてるのを確認するため少し振り向く、いつもの白い馬体が相棒の騎手さんに乗せてしつかりついてきている。

俺の逃げ足にどこまで付いてこられるか、今回の訓練はそれだ。

『ついてこい、まずはインベタだ』

コーナーに入る直前、一歩さらに踏み込んで加速を入れながら柵のぎりぎりまで体を寄せてインベタをがつつり踏み込むグリップ走行で走る。

距離は3200メートル、右回り、次にノルンファンクが挑戦するレースの距離らしい。

4月の大阪杯でダイオーが暴れた場合、たぶんいつもの走りだとマークされそうだから戦法を増やしたいんだと。

こいつの親父さんも逃げ馬で、逃げ自体もできないわけじゃないから磨けば光るかもということらしい。

『キツツイですねー！』

『まだまだ、たった時速65だぞ？』

まだまだ速度に乗れてない、俺の場合はな。内側の柵にきつちり7センチほどまで寄せる、それに伴って敏則も体を内に傾ける。

それに合わせてノルンもゆつくりと馬体を寄せてきつちり止める。すぐ横で柵がビュンビュン言ってるのが気持ちいい、もう少し飛ばせば馬体も安定するがそれだとノルンをおいてつちやうから無理だ。

ノルンの鞍上の騎手さんが若干青い顔してるがこれでもだいぶマシになったほう、敏則なんか平気な顔してるしな、こうなるくらいには慣れんとインベタグリップなんて習得できんぞ。

『このまま一気に曲がり切って、コーナー終わりに立ち上げて再加速、踏み込みに遅れるな』

『了解』

インベタグリップできつちり回るとどうしても推力を逃しがちになって速度が気になるからな、立て直しに1加速入れると安定する。

コーナー終わりに後ろ足を思いつき踏み込んで加速を入れなが

ら直線に突入。さーて2本目、直線で速度を稼ぐ。

体感時速70kmまで増速だ、上げられるだけ上げて距離を稼ぐ。逃げ馬が逃げ切るには、ちゃんとリードを取らなきゃな。

『上げられるだけ上げろ、後ろを見るな、前を見ろ』  
とにかく出せる速さで走りまくる、前には誰も入れさせない、取れる限り最小限のルートを取る。

俺が教えられるのはそれくらいだ、追い付かれたら終わりだと思え。抜かれたら疲れた足じゃ追い抜くのは難しい。

『できるだけ内回りに、ギリギリまで詰めて最短ルートだ。足場は気にするな、そんな余裕はないだろ?』

『あ、ありま、せん!!』

内側は荒れてる場所が多いというが、逃げを取るならそんなものは誤差だ。俺の場合、荒れてようが踏み込んで無理やり走る。

そのためには不整地にも慣れてなきゃならんから、これ終わったら次はダートな?ダートと芝と裏山のローテだ。

走れ走れ、とにかく走って体力付けながら自分の走れるペースを体にしみ込ませろ。

3200で逃げるなら速さと一緒とにかく体力だ、走って走って追い込んで、体を作らにや話にならん。

『次のコーナー、このままツッコむ。インベタできつちりついてこい』  
遅れたらその時点で訓練は中止だ、バテバテでもいいからきつちりついてくること。

これくらいできるようになれば、次のステップに行ける。

『2000メートル、まだいけるか?』

『行けますー!』

その割には足が鈍ってきたな?時速70で飛ばしてこれか…本番は65くらいで走る予定らしいが、それでもちよいと厳しいかも。

敏則も少し怪訝そうにしてる、本番は60くらいにしたほうが現実的か?騎手さんもそんな顔してるし。

でもそれだと不安なんだよな、敏則曰く大逃げさせたいらしいんだが…うーむ?ダメかもしれないな、これ。

『加速入れるぞ』

ま、いいか、そこはおいおいだ。今は限界をギリギリまで突き詰める、そこから判断しよう。

『なん、で、よゆうある、んですか!?!』

『無駄口をたたくな』

時速75km、今の俺が巡航速度で振り回せる限界速度だ。この場合は芝コースを二周で限界。結構ギリギリだぞ。

それ以上はスタミナ一気に持ってかれるからラストスパートにしか使えん。

『前だ、前だけ見て、ゴールだけ見て走れ、逃げ馬やりたきや見るのはゴール板だけでいい。どれだけきつくなろうがどんなことがあってもそれだけは忘れるな』

逃げ馬はいつでも先頭だ、ずっと先頭で駆け抜けるのが逃げ馬だ。だから気にするのは後ろの奴らじゃない、他の馬は抜かれたときに考えりゃいい。

『難しいことなんざねえよ。逃げ馬が気にするのはゴール板とタイムだけだ、だれよりも早く走り切っちゃまえばいいだけなんだ』

本気でひた走る、だれよりも速く、だれよりもうまくコースを攻略して走り切る自分勝手なタイムアタック、それが許されるのが逃げ馬だ。

前に馬が居なきゃいいんだ、後ろにいる連中なんか勘定に入れる理由もない。ほかの奴らが2分で走る、なら俺は1分50秒で走ればいい。

相手が1分50秒だったら、俺は1分48秒で勝てばいい。自分が遅けりゃ負ける、速けりゃ勝つ、極論テクもくそもねえのが逃げつてやつだ。

「タービン、墜とせ」

『まだダメか』

残り800、敏則の合図でスパートをかける。一瞬後ろを振り返ると、ノルンは限界といった感じで騎手さんも首を横に振っている。

完全にバテてる、しかも足元がふらついている、ダメだな、普段から

逃げやっつてないからしようがない。でも最後まで手は抜かない。

今の俺の全力を見せよう、時速80、距離750からのロングスパート、俺の走りをよく見てろ。

ノルンフアング、親父に憧れるお前にもできるはずだ。逃げの走りは目に焼き付いてんだろう？お前の糧になるはずだ。

「飛ばせ」

「ブウン!!」

体感80、そこから腹に力を込めて踏み込む。残り700、息を吸い込む、姿勢を整える、鼓動に集中、筋肉の動きを感じる、走りに神経を研ぎ澄ます。

一歩、ダメだ呼吸が合わない、もう一歩、ダメだ筋肉と鼓動が合わない。ここではエンジンの回転とギアがうまく噛み合わない。まだ、まだ……ここか。

「ヒヒツ…ブウン!!」

680、一瞬の減速、体から力を抜いて連動をすべて切り惰性に。イメージはクラッチだ、そこから体の全てを最終加速に合わせて切り替える。

半クラッチにしてシフトレバーを切り替えて4速から5速、エンジンとギアの回転を合わせてクラッチを入れ、がっちり体の全てをつなぎ合わせて最高の状態につなげる。

全てがうまく繋がる、さらなる高速域へ踏み込める準備が整った、アクセルペダルをベタ踏みに、体の全てを走る速度に、目指す先はゴールのみ、一気に限界速度まで！

踏み込む足が芝を蹴り上げる、最大推力で体を前へ、前へ、体を前へ、とにかく前へ。

ラストコーナー、インベタにきっちりつけつつ速度をさらに上げる。オーバースピードだ、敏則がいる分、遠心力がかかって足が滑る。だがコーナーに入るのに合わせて敏則も柵に向けて体を寄せさせて、片足が柵にぶつかりそうなくらいギリギリまで重心を寄せながらしがみ付いてカウンターを取る。

コーナーが終わる、ゴール目掛けて一直線だ。

距離400、再加速、体感速度88、敏則が背中に戻ってきてがっちりしがみつく、それと同時に一気に加速してゴール板の前まで駆け抜けた。



人のざわめきが聞こえてくる、その耳障りな音に俺は重い瞼を開けて気付いた。いかん、寝ていたようだ。

朝からノルンと一緒に走りまくってたからな、そのせいか。居眠りはあんまり好ましくないのだが…今何時だ？

「ヒンヒンヒンヒン!!」

「うーむ…もう一周!」

練習場に目をやると芝コース近くの練習場に一直線に置いた赤いパイロンを左右交互に避けながら駆け抜けるスラローム練習をするホクリクダイオー。

レースで追い抜きとか垂れてきた馬を避けるための練習で、群馬競馬の連中が良くやるお手軽な練習だ。

パイロンとほどほどに広い場所があればいつでもできるからな、費用もさほど掛からん。

その向こうではツバキプリンセスがジムカーナ練習、練習場一面全てを使ってパイロンを置いてその中に作ったルートをひたすらに回ってる。

回避練習とレースでのコーナリング、コーナーの入りと出での加減速の切り替えの総合訓練だ。

コーナーを確実に曲がり切り、かつ素早く加速して足を取り戻し、前をふさがれば他の馬の隙間を抜くという感じだな。

どっちともいい感じだが…ダイオーがもたついてる、今日は半テンポ遅い。

練習場近くの時計に目をやる。どうやら居眠りといってもほんの



20分程度らしい、まだ午後2時だ。居眠りする前より足のキレがわずかに鈍いな。

『お目覚めか?』

『デープ?来てたのか』

不意に横から声を掛けられてそちらに目をやると、デープインパクトが俺と同じように座り込んで寛いでいた。

『ああ、ついさっきな。居眠りとは珍しい』

『今日は朝から走りまくってたんだよ、お前だって遅かったじゃねーか?』

とはいえ寝たおかげで元気にはなったけどな、軽くあくびしながら大きく伸びをして体のコリをほぐす。

『ああ、ちよつと面倒事だな』

『なんかあつたのか?』

『ああ、あれ見てくれよ』

デープインパクトが顎で指す先、練習場の端っこだ。そこには見慣れない厩務員と調教師とスーツの女、外国人の騎手と一緒に見慣れない馬がいる。どつかで見た気がするが…あ、ハーツクライだ。

騎手は大竹さんと何か喋ってるな、あ、親父さんとモンズニー爺ちゃん、桜葉理事長までまでいるぞ。何やってんだ?

『ありやハーツクライか。なんで群馬にいるんだよ』

『珍しいな、知ってるのか?』

『有馬でお前とツバキ相手に騎手と一緒に目ん玉ひん剥いてたら、テレビで見てたよ』

『そうだったのか!?!どうだ?俺のレースは』

『見事なもんだ、さすがだよ。まさか俺の真似してくるとは思わなかったがな』

『あの時はああするしかなかったのさ、じやなきや負けてた。お前こそ、俺のスタートを真似しやがって』

あ、ということはこいつも俺のレースを見やがったな。

『バレたか、参考にさせてもらったぜ。おかげでいい食いつきができた。お前こそどうだ?俺のバトルは?』

『ああ、イカレたヤツだなお前は。まさかあんなレースをしてたとは思ひもしなかった、道理でバカみてーな走りしてると思ったぜ』

『言いやがったなこのやろー』

互いに顔突き付けあって笑う。馬鹿とは何だ馬鹿とは、お前のあのドリフトもどきこそバカみたいな走りだぞ。

あんな中途半端な加速じゃ結構足に負担掛かっただろうに、まったく無茶しやがるぜ。

『で、お前次は阪神だつて？ダイオーから聞いたぜ』

『ああ、長距離レースだつて言つてたな。3000だ』

『大阪杯つて長距離だったのか？珍しいな』

確かダイオーは2000とか言つてた気がするんだが…俺の記憶違いだったのかな。だがそうなると思つてた気がするんだが…俺の記憶

ダイオーのレースプランは基本的に適正距離以上の走りはさせないことにしてるはずだ。あいつに3000はきつい、長くても2600くらいだったはず。

それ以上はばてるし垂れるしで危険なだけだからあんまり走らせたくないって、プラン作つてる調教師が話してんの聞いたぞ。

『え？大阪杯？』

『そう、大阪杯、僕も出るんだぞ！』

会話を割り込んできたのは汗だらだらホクリクダイオー。なんだ休憩か？騎手さん、まずは体拭いてやれよ。

ええと…あ、騎手さん居ない。なんか遠くで喋ってる、こいつ勝手にこつちに来やがったな？まったく。

『ディープ！君の不敗神話も大阪で終わりだよ！大阪は僕が勝つ!!』

『はいはい、まずは体拭け。風邪ひくぞ』

クーラーボックス横に置いておいたバスタオルを啜えてダイオーの体に掛けてやる。まったく、体は大切についていつも言つとるだろうに。

ほら、あと水も飲む。さつきまで散々走り回ってきたんだからクルダウシなさい。

『こいつから聞いたんだよ、次は大阪杯とやらだつてな。ま、頑張る』

な』

『それには出ないぞ。俺が次に走るのは阪神大賞典だ』

『んぐっ…なぬ!?!』

うん?なんかおかしいぞ、俺はダイオーからそう聞いてたが?

『は、阪神競馬場行くんだよね?!当然産経大阪杯に出るんだよねえ!!』

『いや、同じGⅡだがそっちじゃないんだ』

『ウソダソンナノオオオ!!』

ダイオー…お前勘違いしてやがったな。大方どつかでデイープが次に走るのを阪神競馬場つて聞いて思い込んでやがったんだろ。

あーあー、すっかりしょぼくれやがって、泣くな泣くな。たぶんあちこちに喋ってたんだろうなあ、これ。

『ぞんな、ぜつがぐ、だのじみにじでだのに…れんじゆう、いっばい、じでだのにいい…』

『なんか…すまん』

『こいつが思い込んでただけだ、お前が悪いわけじゃねーよ』

『じぐじょー』

あーあー鼻水垂れ流しやがって、ほらタオル、GⅠ競走馬が情けねえぞ?むしろ良かったんじゃないやねえか?勝てる可能性が増えたんだし…いや、違うか。

トロフィーよりもデイープとやれるの楽しみにしてたんだ。この四冠千切つて勝つて気合い入れてたもんな。

『づぎいい…』

『天皇賞だ、春の』

『にやがiiiiiiii…』

ありやりや、よりにもよって長距離か。こいつは出走できねえな、絶対負けるわ。

『お前はまた今度だな…つてかデイープ、まだGⅡとか出るんだな?少し意外だ』

『いや出るだろ、これステップレースだし』

『中央競馬のGⅠ走って勝ちまくってるお前にはもう縁遠いもんだとばかり思ってたからな』

というか、ぶつちやけGⅡじゃお前が蹂躪するだけで終わるだろ。同じレース走る奴ご愁傷様じゃねえか。

そんなん經由しなくてもお前なら直で次のGⅠ出られんじゃねえの？ほかの大会の優先出走権とかあるって聞いたけど。

『お前がそれを言うか？聞いたぞ、地方のオープンと条件戦だと？お前が？』

『俺はそれくらいでいいんだよ』

オープンと条件戦だけで十分、白蛇記念の賞金も入着で100万くらい出るから狙うだけだしな。仮に5着でも稼ぎにやなる。

中央GⅠの賞金額と比べたら雀の涙、獲得賞金額だって全く届きやしない、かすりもしない。

『高崎のSPI、白蛇で優先出走権取れなかったか？』

『あるな、使わんが』

白蛇記念は上半期と下半期に各2回あってな、開催時期に合わせて上のレースに走る出走権を争うステップレースになってんだ。

去年はその両方を俺が搔つ攫つて宝の持ち腐れにしちまった、元から出ないつもりだったからいらんのだがね。

大きな話題にはならんかったけど一緒に走ったヤツラからの視線はしばらく痛かったつけな、模擬レースで黙らせたが。

『出ればいいだろ、SPIなら賞金はもつと多いぞ。お前の親父さんも楽させてやれるだろうに』

『重賞はおまけも多くなるからめんどくさい、地方でも重賞クラスなら動く金がでけーんだ』

そうなると色々面倒なんだよな、勝てば勝つだけ次だ次だつてさ。しかも勝手に期待して勝手に裏切られた気分になって、そこに金が乗るとかも最悪だ。

俺はそういうのが嫌いだね、いらんもん背負わされて走るのをキライになりたくねえんだ。

デイープ、お前は生まれながらの競走馬だからそういうのは慣れてんだらうけどさ。俺はだめだ。

それに親父さんにも会社にも負担がデカくなっちゃう、うちはほど

ほどこに稼いで気楽に気儘に過ごしていきたいんだよ。

『それよかダイオー、スラローム少しもたついでたぞ。足悪いのか?』

『うじゅじゅ…あ、バレた?』

分かんわけあるか、こちとらお前と何度訓練してると思ってる。

『あれでもたついてんのかよ、うちの連中が新馬に見えてくるぜ』

『うー…きつきから足に視線感じてやりにくいんだよ。足は元気なんだけどさー、ほらほら』

俺の前で泣き止んだダイオーが左右にひよこひよこステップを踏んで歩いてみせる。

すると遠くから驚きの黄色い声が…って、ハーツクライのところのスーツの女だ。

なんか手帳持つてるけど…どつかの記者かあいつ。なんだ、テイオーステップって?

ダイオーがステップ踏んだら驚いたってことはずっと見てたってことだな、随分とまあご熱心だ事。

『ほんとか?我慢してないだろうな、医者に行ったほうがいいんじゃないか?』

『ホントホント、悪かったらちゃんど厩務員の人にお問い合わせするもん。それに変な感じなの、ついさつきからなんだよね』

心配そうにダイオーの足を見つめるティープにダイオーは不思議そうにする。

『ティープ、ダイオー、あいつのせいじゃね?ハーツクライのところの記者』

『え、あ、あれかーなるほど謎は解けた』

乙女の生足をじろじろ見るとは無粋な記者だ、ほれ見ろ後ろでモンスニー爺さんが呆れた目をしてるぞ。

そりや自分が取材する陣営からよそ見してこつち見てははしやいでりやそーなるわな。

あ、なんか理事長から話を聞いて感極まったように震えてるぞ。しかもすげえ締まりのねえ顔、なんだありや、変態か?

「すうんばらしい!!」

変態だった。

## 第15話

自分の選択は正解だったのだろうか？ポール・ルベルは何度目かの自問自答をしているところだった。

有馬記念を終えて、優秀な成績を残したことから予定通りドバイへ海外遠征に向かうハーツクライの最終調整のために群馬競馬の総本山ともいえる群馬トレーニングセンターに協力を依頼したのは決して間違いではなかったとは考えている。

群馬地方競馬は2005年に第2のメイセイオペラを一気に繰り出して名声を勝ち取った時の地方競馬だ。

一頭だけならばまだしも三頭同時に、かつ狙いを定めて中央競馬のGIレースを一気に搔っ攫っていくのは誰がどう見てもマグレとは思えない。

偶然居合わせた栗東厩舎の厩務員などは呆れた顔で『あいつらやりやがった』と、現場で唯一心の底から感心した顔で認めていたのだから。

日本競馬を知る誰もが困惑し、驚愕し、興奮した。デイープリンパクトの無敗四冠と同時に起きた地方競馬の強襲はそれほどのモノだったのだ。

だからここに来た、相棒のハーツクライをより強くできるヒントを得るために、群馬地方競馬の異様な強さを探るためにだ。

しかし何かあつてゴシップ記事に変なことを書かれてはたまらない、デイープリンパクトのような模擬レース連敗の噂はあまり立てたくなかった。

そう考えて調教師や馬主と協議して信頼のおける一流紙の記者を同行させる密着取材としたのだが…

「うへへへ、こりやたまりませんわあ…」

（こうなるよなあ…）

高性能一眼レフカメラを構え、今にもよだれを垂らしそうなほど溶けた表情で写真を撮りまくる女性、稲波記者。

若手ながら優秀な記者で、自分の記事は裏付けを取ったネタしか使わない真面目な仕事人だ。

だがこの世界に入った理由が競走馬と競馬が好きすぎたからで、こうして時々変態と化してしまうのが玉に瑕。

今日も話題の馬たちの生写真と生取材ができるとあつて朝から怪しかったが、予想通り興奮して中身が飛び出てしまった。

(いい娘さんではあるんだよ、フランスでも見ないくらい真面目な良い子なんだよ？普段は)

しかし若い女性で競馬好きで競走馬大好きなお馬さんオタクなのである、しかもアイドルオタク張りに怖ろしい熱の入り方で変わり者。

オタク故に、ファン故に、好きなもの扱う仕事に真面目に向き合つて納得いかなければ上司にも噛み付く気性難だが信頼はできる。

つまりいろいろ難しい女性なのである、彼女は。それを理解しているのかは知らないが、案内をしてきている群馬トレセンの職員は苦笑いするだけだ。

気を使ってくれているらしい、もしくは同類がこの群馬にもいるのかもしれない。

「いっしょ」

ルベルは稲波の頭に軽いチョップを落とす。来日時からハーツクライとルベルの専属として出版社から派遣され、たびたび顔を合わせてきたからにはや慣れたものだ。

興奮してる彼女には軽い衝撃が正気に戻すには一番いいのだ、こうして叩かれても一眼レフカメラの矛先は全くブレないのは筋金入りである。

カメラの矛先にあるのは練習用の広い練習場で、一頭の馬が練習場一杯に広げられた赤いパイロンの間を縫うように走っている。

決められたコースがあるらしく、一定のルートをたどっていてパイロンの合間を縫うスラロームからパイロンを回り方向転換するターン。

走っているのはホクリクダイオー、血統はかつて持て囃されそれゆ



えに研究され尽くされたはずのパーソロン系、栄華を誇り今なお語り継がれる皇帝シンボリドルフの孫であり奇跡の復活を見せたトウカイテイオーの娘。

母は群馬競馬にて繁殖牝馬であったホクリクメイヴ、祖母にフジカワ。古くから日本を走ってきた競走馬の血統だ。

トウカイテイオーの産駒は2001年のヤマニンシユンクルとトウカイカムカム以後、中央G1競争での勝利どころが中央オープン競争勝利からも遠ざかり、人気も徐々に落ち込んでいた。

その後は地方重賞馬こそ出せど中央では目立った産駒もなく、ホクリクダイオーも地方重賞で勝てる程度のまあまあな馬と思われていた。

だが皇帝の孫娘はその力を受け継いでそれを超えてきた、入念に鍛え直したその神威は2005年の第25回ジャパンカップで猛威を振るう。

中央の競走馬や海外出走馬と堂々と鎬を削り最後の直線で抜け出し、2着のアルカセットに半馬身差をつけた上にレコードタイム『2分21秒0』と文句を言わせぬ見事な勝利。

自分もそこにいたのだ、相棒のホクリクライと共にルベルも第25回ジャパンカップを走っていた。

レースの序盤から中盤は凡走と言えた、中盤を超えたあたりではよくいる地方競走馬にしては強いという程度で順位は9位、馬群の中で囲まれていて脅威とは思えなかった。

しかし最終コーナーで中段の馬群に埋もれていたはずのホクリクダイオーが、その中をすいすいと泳ぐように抜け出して最終直線では我が物顔で勝負の場に躍り出てきた。

当時はアルカセットとの勝負になるとしか考えなかった自分の真横からホクリクダイオーがわずかに鼻を前に出すまで気配も足音も感じなかったことに驚愕し、次の瞬間には自分はタイムスリップしたように感じた。

ラストの直線、残り200メートルで3頭が並ぶ。内にアルカセット、外にホクリクライ、そしてその間に挟まれたホクリクダイオー。

自分は相棒に鞭を入れ、アルカセットも騎手から鞭が入り、ホクリクダイオーの騎手は千切れと叫んだ。

壮絶な叩き合いとラストスパート、だれもハナを譲らない、だれも前に抜け出せない、互角の走りだった。

最後70メートル、ホクリクダイオーの速度が緩む、勝ったと思つた、次の瞬間には彼女の馬体が自分たちの間から半馬身抜き出ていた。

一瞬の減速の後に見せつけてきた猛烈な急加速によりハーツクライとアルカセットの間を抜け出し、彼女は自分たちの前に躍り出る。

残り50メートル、ホクリクダイオーにじりじりと離される。アルカセットが追いつがる、ハーツクライも無理を承知で速度を上げるがアルカセットにわずかの遅れをとり、勝負は決した。

その走る姿は牝馬であることを除けば父であるトウカイテイオーの生き写し、戻ってきたのだと往年のファンの声が嫌にも聞こえてくるようだった。

(それだけじゃない、今年はあまりにも異様すぎたな)

ルベルは練習場の脇にある芝生で寝っ転がり、なぜか戦車の模型を前足で突きながらぶんぶんと唸るノルンフアングとその横でどこか諦めたように水の入ったペットボトルを叩るツバキプリンセスの白い馬体に目をやる。

まるで買ったばかりのおもちゃを自慢しているようなノルンフアングだが、彼女も2005年の天皇賞・秋で2着から1馬身差をつけて勝ち切った立派なG1タイトル持ちだ。

最終直線、中段馬群に潜んで接戦を制して先頭に躍り出たヘヴンリーロマンスを待っていたかのように急加速、先頭集団を丸ごと差し切って勝利を奪うという、狙撃手の放った銃弾のような一撃に場内は騒然となった。

鼻息を荒くするノルンフアングの横で少しうっとうしげに水を叩るツバキプリンセスもエリザベス女王杯を勝ち抜いた立派なG1馬。

その走りは王道の差しか追い込み、奇抜さはなくともしかしその走りもかつての白い稲妻を蘇らせるには十分すぎる威容を放っていた。

2005年の有馬記念で最初から最後までデイープリンパクトに追従してみせた足でエリザベス女王杯では最終コーナー手前で後方集団からロングスパート、コーナーを曲がりながら馬群を縫って前進し最終直線で先頭に躍り出てそのままゴール板を突き抜けた。

(なぜ彼女たちは走れるのだろうか)

どれも古い血だ、この3頭すべてが研究され、戦い続けて、それで多くの馬主から徐々に興味を失われてきた古い血統ばかりだ。

それも主戦場は地方競馬、地方競馬のコースはダートコースで群馬競馬もその例にもれずほとんどの競馬はダートで行われている。

彼女たちは芝での勝負もできるように訓練されているが本業はダートコースでの競走馬だったはずなのだ。

だが彼女たちの走りは本物だった、ダートから芝に戦場が移ってもなおその脚力は衰えることがなかった。

(血ではないのか、ならば変わっているのは練習方法か？いや、だが…)

一見すれば意味不明な練習だ、ルベルの祖国フランスでもこのような練習は全く見たことがない。

いや、それを言えばこの練習場で行われている調教の一部は明らかに異質なものと言えた。

群馬トレーニングセンターを訪れて驚いたのは練習光景の異様さであった。

騎手や調教師たちがさも当然のように馬たちに喋りかけていて、馬もそれを聞いているようなそぶりがあった。

その光景がまずオカシイ、馬も動物ではあるが犬猫とは違うのだ。犬猫でも人間の言葉を理解しているわけではないと思うが。

それに練習メニューもおかしい、見慣れた基本調教や併走訓練に平然と車両競技用らしきメニューが紛れ込んでいるのだろうか。

なぜ馬運車に馬を乗せて道路をひた走るメニューがあるのだろうか、なぜ裏山に曲がりくねった練習用坂路コースが作られているのだろうか。

なぜ平然とジムカーナ(第3駐車場)やスラローム(第2馬房裏)と、

アスファルトの上で馬を走らせているのだろうか。

中央競馬と比べれば地方競馬のレベルは低いはずだ、今でこそ去年の快進撃で注目を浴びつつあるといっても設備までは変わらない。

古い設備、少ない人員、古い知識、地方競馬会も日夜進歩を目指しているも中央競馬会に比べたら進歩へのハードルは高いはずだ。

事実、ここの設備は中央競馬のトレーニングセンターと比べたら一世代は前の古い設備ばかりだった。

いや、だからこそこの異様な光景なのだろうか？あるもの全てを使つたなりふり構わない応用が強さの秘密か。

だがわからない、理解ができない、自分が悪いのか、それとも群馬競馬が突飛なだけか。レベルは何とも言えない引つ掛かりを胸に覚えていた。

ならば自分もやってみるしかあるまい、何事も経験だ。依頼した模擬レースの前に軽く歩く程度ならば問題もないだろう。

「うん？あれはデーパーインパクトか？その後ろにいる馬は…そうか、あいつがか」

「うひょほ!!彼がシマカゼタービン！噂のツインターボのお孫さん!!」

調教師を帯同して現れたデーパーインパクトと専属騎手の瀬名敏則に手綱を引かれる栗毛の牡馬、シマカゼタービン。

群馬競馬ではやや有名な看板鞍馬だ。頭が良すぎる鞍馬、酒造りの匠の鞍馬、謎のローテーションで走る副業競走馬。

おそらく唯一ツインターボの血を引く成功例であり、望まれなかった産駒。

SPIなどの重賞こそ取ってはいないが、昨年の出走レースは12戦12勝の逃げ切り常勝馬。

群馬競馬の重賞ステツプレースである白蛇記念にて上半期と下半期各2回行われるこのレースの全てで一着を奪うが、上のレースに向かわない謎のローテーションをする馬だ。

白蛇記念は1着と2着の馬に、開催時期に合わせた高崎競馬場のSPIへの優先出走権を与えられるがその2着が該当重賞の優勝馬で

あつた。

(うわさが絶えない不気味な馬か…)

所属厩舎の瀬名酒造がある芦名市ではよく街中に現れる見慣れた存在で、町中によく出没する人懐っこいアイドル的な馬だという。

そんな彼には噂が多い。曰く、彼は頭が良すぎて金勘定ができる。彼と一緒にいると馬の知能が高くなる。

馬なのに人間並みに何でも食べる。無駄に頑丈。肝が据わりすぎている。酒の仕込みに対する熱意が異常など。

そして彼は現在唯一、デュープインパクトに勝てる馬とも噂されている。眉唾物だがスポーツカーとの違法レースで勝ったという話も聞いた。

こればかりはただの噂だろう、彼はダートの競走馬で適正距離もマイラーかスプリンターという話だ。

なぜかその後ろからデュープインパクトがついてきており牝馬2頭の手綱を引く若手の厩務員がぞろぞろと続く。

向かう先は新設されたばかりらしい真新しいダートコースで、やや使い古された発走ゲートがスタンバイしていた。

ルベルは少し気になって案内役に問いかけた。

「あれはゲート訓練ですか？」

「今日は新馬の訓練が入ってて、タービンが教官役してくれるんですがね…デュープのヤツ離れないみたいだな」

「尾花栗毛と黒鹿毛の牝馬が二頭…ハッ！もしや噂のアイネスフウジン産駒ですか？」

「よくご存じで、栗毛の方がアルトレーネ、黒鹿毛の方はアルトアイネスです」

「うひょほお!？」

まーた始まったよ。



『イヤなのです!!』『イヤだー!!』

新品の練習用ダートコースに引つ張り出された古いゲートの前で二頭の牝馬が駄々をこねてこねまくってる、もうこれで何度目なんだろうな。

ゲートの前でイヤイヤと駄々をこねてるのはアルトアイネスとアルトレーネの双子姉妹、今年で3歳。

次の群馬競馬の新馬戦で初出走の予定なんだが、どうにもこうにもゲートが苦手ですつと駄々をこねてる。

調教師さんたちは相変わらず苦笑、いじらしくイヤイヤされるだけで暴れるわけじゃねえのは自制できてる証拠だからな。

担当のイケメンも困ったように笑って俺を見てくる。いやお前がやれや、担当だろ、そんな風に睨み返す。

「落ち着けアイネス、あれは怖いもののワツ、ぬわあ!？」

「ヒヒン!ヒイン!!」「兄ちゃん!どうしてあいつのまえにつれてこうとするのさー!」

「ヒヒッ!」『なのです、アイネスの言う通りなのです!今日はお山で遊ぶのです!』

あーあー、アイネスに頭擦りつけられてぶっ倒れた。しかもレーネにまで加わってもみくちやにされてサンドイッチ:群馬じゃなけりや死んでるな。

馬体に挟まれてうごうご若干苦し気にしながら2頭を落ち着かせようとするイケメン、峠とサーキットの時とはまた違う顔するよね君。

顔が良くて優しいから女性にも牝馬にもモテモテ、仕事もできて意外と高収入の高スペック。プロレーサー資格も取ったイケメンシビック乗りで有名になって名前も売れてる。

ここで働きながら兄弟で世界レベルのレーサー目指すんだって?しかも極小規模だけどチームにまで所属して本格的にやってるし。

最近はなんか触発された親父さんまで資格狙い始めてるし:~:というかスポンサーに桜葉理事長と親父さんいたな確か。

イケメンハイスペックのプロレーサーとかなんやねんお前、仕事が

できて女性にも動物にもモテモテってなんやねんお前。

『でもお前、あいつより速いよな?』

『峠ではまだ俺のほうがハイスペックだぜ…お前なんで考えてること分かった?』

『なんとなく』

くつ…ここにも天才イケメンホースがいたか! いいもんね、俺のほうがあのイケメンどもより速いんだもんね!

でもなんであんなハイスペックでお馬さんに負けてんだ? あいつ今も峠で俺に負けとんのよ?

この前もあいつのタイプRにハナ差で逃げ切ったぞ、最後の下り直滑降で思いつきり競り合いになったし手加減されてるってわけじゃないのに。

ガツチガチにチューンされてるしターボ車だし、サーキットでも滅茶苦茶速くてうまいんだけどなんか峠だと精彩欠くんだよな。

『ゲートか、懐かしいな、俺も嫌だった』

『そうなのか? というか大竹さんはどした?』

『あっち』

なぜか担当調教師さんと付いてきてたディーブが視線で示す先、ジムカーナ練習コースになぜかモンスニー爺さんに乗った大竹さんがいた。

さすが現役、モンスニー爺さんとすぐに折り合いつけてすいすいとコースを回ってやがる。

モンスニー爺さんもなんか嬉しそう、いつもと目の輝きが全然違う。普段から年の割に元気だけど今日は一段と元気いっぱいだ。

というかなんでモンスニー爺さんに乗ってんのあの人…そりゃ休憩時間は自由だから乗っててもいいと思うけどさ。

あとハーツクライ、なんで騎手さん乗せて親父さんに手綱持たれてスタートラインにおるん? 慣熟歩行か? いきなりジムカーナはきついだろうに。

『何やってんだよ大竹さんと爺さん』

『あのメジロモンスニーさんだぞ、乗れるなら乗るだろ。俺もまさか

こうして話せるとは思わなかった』

なんかディープも感動したような感じ、いつもと全然違うなお前。

『そんなにすげーの?』

『伝説のすぐそばを走った英雄だぞ、できれば栗東に来てほしいくらいだよ』

『ふーん、実感湧かねえな…ってかお前もゲートとか嫌だったのか?』  
『当たり前だろ、あんなせまつ苦しくてガチャガチャいうの』

普通の馬ってこういうもんなのか?わからん、うちの馬には元競走馬は爺さん以外にも何頭もいるけどこういう話はあんまなかった。

俺もそういうの余裕だったしな、所詮どっちも道具だ。ゲートの中とか人間の頃は見たことも入ったこともなかったし最初はむしろ興味津々だったもんだけど。

みんなゲートとか余裕でクリアしたって自慢してたし、確か馬具付けんのも褒められたって言ってたんだが…

『なんかさつきからずいぶん変な反応を…お前まさか』

『わからん、全然気になんなかったから』

『お前らしいと言えばお前らしいな』

そうなの?たかがゲートと装備品だ、大したことないと思うだけだな。あ、だからあの時試験官の人がおかしなやつ見る目してたんか?

「やつばダメか?」

「ダメです、敏則さん。たーすけてー」

「へいへい、タービン、まずはアイネスから頼むわ。レーネの方は預かつとく」

「ヴッフヴフ」『そうだな』

俺から降りてレーネの手綱を手に取った敏則が、レーネを諭して落ち着かせてからゆっくりとゆっくりと移動させるとイケメンが抜け出す。

そこで敏則がやれやれとレーネの手綱を引いて少し離れたのを見てから、俺は今にも泣きだしそうにレーネを追いかけるイケメンを捕まえようとするアイネスの鼻先に顔を突き付けて話しかけた。

『暴れるなアイネス。見てたぞ、あんまり困らせちゃダメじゃないか』



『師匠!? どうしてたすけてくれないのさー!!』

『んなこと言ってもサラブレッドになる為にやこれ必須なんだよ。どうして嫌なんだ?』

『だって…食べられちゃうじゃないか』

はい、楽勝ですね。アイネスの場合はゲートが生き物かなんかだと思ってるらしい。

『師匠たちは強いから外に出られるけど、僕たちみたいな弱い子なんて食べられちゃったら出てこれないよ』

それに加えて生産牧場での扱いね、こいつらもあつちこつちたらい回しにされてたタイプだかな。

親父さん曰く双子で生まれた上にいつも二頭でべったり、成長してもそれは変わらずで無理に引き剥がすと暴れる気性難扱いだったらしいな。

その上に、血筋に中央重賞を勝った産駒がいるからこいつらもそうなるって期待されたがうまく走れず失敗作認定されて繁殖行き。

しかしそこでも互いに引き剥がすと暴れる、牡と引き合わせると反撃する、繁殖もダメで乗馬に使おうと思ったら人間と同業の牡馬を警戒してまともに乗れやしない。

どうにも使えないから馬肉行きで出荷待ちのところを理事長が安値で搔つ攫つたそう。理事長が好きそうな癖馬っぷりだしな。

群馬競馬じゃ競走馬デビューに年齢制限ないから走れるようになったら走るし、走れなくなるまで走れるからデビューできるまで長い目で見てもいい。

調教法もうちのやり方で馬に合わせるほうだからな、二頭をセット運用にして少しずつ慣らしていったらもうこつちのもんよ。

『アイネス、怖いのは分かるがな。はつきり言うとおれ生き物じゃねーよ?』

『嘘! がたがた動くし、バツコンバツコン口を開けたり閉めたりしてるもん!』

『ありや馬運車みたいなものだ。よし、俺も隣に入るからお前も隣入れ、そこで教えてやるよ』

『師匠と一緒に?』

『お前の隣にな、何かあったら助けてやるから』

『むー…:わかった』

よし、いい子だ。

『デープ、敏則を手伝ってくれ、レーネの方頼むわ』

『わかった』

アイネスが落ち着いたのを確認してから敏則にアイコンタクト、敏則は頷くと練習用ゲートの係員に合図を送ってドアを開けてくれる。

俺はアイネスを連れ立ってゲートの前まで行くと、中を確認してから一足先に中に入った。

『レーネ、妹を応援しなくていいのか?』

『がが…頑張るのです!』

『うう…』

デープに促されて応援するレーネの声に背中を押されるように、のそのそとアイネスが隣のゲートの中に入る。

ゲートの仕切りは穴あき鉄板だから向こう側が見える、中に入った途端アイネスが一気に縮こまった。

『せ、せまいい…:たべられちゃうよお…』

『落ち着け、隣にいるから。両目かっぴらいてよく見てみる』

『し、師匠は何で堂々としてられるのさ…:ヒイ!?!』

風がゲート内を抜けて少しだけ音が出る、呼吸に聞こえんのかなこういうのも。アイネスの奴、ビビッて目をつぶって座り込みました。

『アイネス、目をつぶるな。俺のほうを見て、周りを見てみる。そうすりゃ理由がわかる』

ヴーヴー唸りながらアイネスが目を開ける。何も起きないゲートの中をおっかなびつくり見回した。

『何にも起きない?』

『だろ、前足で周り軽くつつんしてみ』

『ヒイン!?!』

『ビビらんでもいいよ、これ鉄だから』

『ほ、ほんと?』

隣でコツコツゲートの中を蹄鉄で叩く音がする。アイネスがゲートの内側を叩いてるんだろ。

全方位をコツコツ叩く音がするとともに、今まで怯え切っていたアイネスの様子が徐々に平常に戻り始めた。

『なんにもないや、お部屋の超狭い感じ?』

『そんな感じ、だから怖がる必要ねえんだよ。ただの機械、壊れた時は扉を蹴飛ばして出りゃいい』

さすがに怒られやしねえだろ、閉じ込められてんだし…しねえよな?』

『でも狭いの嫌いだよ、ずっと居たくはないね』

『でも怖くなくなったら』

『あ、ほんとだ』

ほら、キョトンとしてつけどもうゲートが平気になってんだろ?やればできんだよ、やんなきゃわからねえんだからな。

落ち着いたのを見て、俺は嘶いて発走ゲートの前扉を何度か叩く。それで何がしたいかわかってくれた係員がゲートを開けてくれた。

一足先に飛び出してアイネスのいるゲートの前に立つ、そしてキョトンとしながらそろそろと出てくるアイネスに俺は笑って褒めた。

『よしよし、よくやったな。えらいぞアイネス』

『えらい?』

「えらいぞ、頑張ったなアイネス」

『私えらい?』

アイネスのゲート嫌いつぷりをよく知ってるゲートの係員も拍手して褒める。その優しい誉め言葉に、アイネスの目じりが少し緩むのが見えた。

## 第16話

びしやりびしやりと音を立てる水音、水滴を浴びて青々と茂る芝、そして水を吸いまくって膨張する土。

踏み込むたびに蹄が芝と土にめり込んで、水がにじみ出る。うーん、実に走りにくそうだ。

俺の背中に乗る親父さんもこれには少し苦笑い、ここまでびしよ濡れの芝コースなんてめつたに走ったことないからなあ…

『今日は快晴群馬晴れ、しかし大変な重馬場となりました群馬トレセン芝コース、解説はシマカゼタービンでお送りします。』

本日のメインレース、なんと先方からの依頼で模擬ドバイシーマクラシックというわけで、左回り、距離2410メートル6頭立てとなっております。

レース直前でありながら盛大に水撒きをしているコースですが…ご覧ください、もうびしよびしよです』

『何言ってるんだお前?』

『いや、なんか言わんとならん気がして』

一緒にコースを確かめるディープのツツコミが入るくらい思わず解説みたいな独り言が飛び出す始末、それだけひどいコースなのよ。

ディープに乗ってる大竹さんも顔をしかめてるし。というか、なにこれ? こんな水気あるコースで走るの? 海外のレース場って整備性悪いんかね。

ジャスタウェイが勝ったやつもドバイだったからコイツなんか? こんなので走ったジャスタウェイのイメージが崩れる。

あのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲のご立派なヤツ付けたり起爆したりする憎めない変なヤツってイメージだったのに。

爺さんが良く言うミスターシービーとかそんなレベルのヤベー奴になってるぞ。

『ディープ、お前の経験からしてどうだ? これ再現になってんの?』

『どうだろうな、俺も最近たまに走る芝がこんなだけど似てる感じはする。普通の芝と違って足に絡む感じで走りにくいんだ』

『ふーん、いつものに慣れてるとつらいな』

『どうせお前はたいして違いが分からんとか言うんだろ?』

『失敬な、それ程鈍感じゃねーわ』

普通の芝に比べて随分と沈むしまとわりつくしで走りにくいっただらねえよ。この場合、芝が邪魔だ。

これがなければ雨降ったばかりの畑とかあぜ道に似てる、あれもねつとり絡みついて走りにくいっただらねえ。

あつちは土だから思いつきり蹴散らしゃいいけど、芝コースだと芝が絡みついて邪魔してくるぞ。

『この手の沈むタイプは慣れてっけど芝コースがこうなると厄介だ、絡みついてきて足を引っ張りやがる』

『なんだと?お前がそんなこと言うなんて…明日は大雨か?』

『お前、俺のことなんだと思っただよ』

これはあれだ、近所の小学校の行事に参加して田んぼを耕すの手伝ったときそっくりだ。あの時は耕すために踏み込みまくってたから気になんなかった。

そもそも耕すためにかき回すことが主体なのと走るのが主体なのじゃ勝手が違うっただ、今度ダートラリーコース走るときの参考にしよう。

『とはいえ、硬いところもあるにはあるか…ふーん、滑りやすそうだな』

『俺もそこは厄介だと思う、深い所じゃ邪魔なのに、硬い所だとツルツルだ、うまくつかめん』

『厄介?これなら少しずらすだけで滑るし足の負担も軽くできそうだけどな』

使いやすいドリフト起点になりそうじゃないかね?車みたく荷重移動だけで足を滑らせられそう、コーナーにあればだが。

海外芝って上にうまく乗ればツルツル滑るのか?滑りやすい芝ならドリフトし放題だな。

『なるほど、滑るんなら滑ればいいってことか。確かに、無理に掴むより足も楽そうだな』

『工夫は必要だがな、これでアンダーでしたら確実にコケる。間違ってもあんなスローペースで仕掛けたりなんかするなよ?』

『解ってるって』

ホントかなあ?お前、有馬でやったじゃねえか。あつちはカツチカチだけどこつちは滑るとはいえもこもだからそこは工夫が必要だし、言うほど簡単じゃねえぞ。

いつか海外に行ったときぶつつけ本番でやったりしねえだろうなコイツ。

いやそれを言ったらこれから海外行くって話を聞くダイオー達も言えるか、俺は芝コースにすでに設置されているゲートの前に目をやった。

そこにはホクリクダイオー達がいて、足踏みしながら今日の芝の踏み込みを確認している。

『うわ、ぬつとぬとだ、ぬつとぬとだよこれ』

『思ったより沈みますね、それでいて乾いた砂よりも引き抜きづらいと……ふむ』

『懐かしい、こんなダートもたまにあつたねー』

『芝が張ってる分、盛大に蹴散らす走りができませんから注意しなければいけないですね』

あの2頭は問題なさそうだな、ダイオーもノルンも芝を踏みしめながら足場の特性を掴んでる。多少手間取っても走りだしたらすぐに修正してくるに違いない。

『でもこれ走りやすいかも、ダートに似てるし』

ツバキプリンセスも意外と合うらしい、地方じゃ普段からダートで暴れてるからな。

ダートは乾いてると結構沈むからこれと似てるっちゃ似てるか、絡みつきっぷりが半端じゃないけど。

『あいつらは問題ないみたいだな』

『あいつらはダートも走るからな、力のいるコースは慣れてんだよ。』

最近は裏山コースで鍛え上げてるぜ』

『散歩道の裏山でやってた工事が終わったんだって？曲がりくねった坂路だってダイオーから聞いたぞ』

『おうよ、桜葉理事長肝煎りの群馬スペシャルだ。あとで案内するよ』  
前は散歩道しかなかった裏山を改造した坂路コースで開設したのは今年だ、前々から作っちゃいたがだいぶ規模がでかくなったからな。

天然の坂路がそこら中にあるんだから使わない手はない、っていうのが群馬競馬の考えらしい。群馬は山ばっかだからな。

車のダートラリーコースを参考にしたコースとか、普通の坂路、てっぺん辺りの開けた場所のアップダウンコースとかいろいろある。

峠道を再現したコースもあるけど、あくまで競走馬の訓練用だから俺としては勾配もコーナーもゆるいし短いからいまいち。

バトルできるほどでもないし本当に練習用、だけどミソは裏山のコースは全部が砂でも芝でもなく土って所だ。

整備車両用の一部道路を除けば全部土道だから、水気吸うとこれに近くなるっちゃなるんだよな。

『そりや楽しみだ、しかしダートか。俺もダートレースを経験してみたほうがいいかな？実戦は走ったことがない』

『いいんじゃないの？経験するのは大事だ。なんなら群馬でやってるか？中央でやるより目立たないいい練習になんたる』

中央から飛び入りとか驚かれるが嫌がられることはないだろうし、確か出れない制限もなかったはず。

なんだダイープ？なんか変な間抜け面しやがって、ダイオー達が中央で走れんだからその逆だって普通にあるぞ。

『ダイープインパクト！』

今度はなんだ？後ろから小走りで近づいてくる足音が一つ、振り返ると群馬じゃ見かけない有名なあの馬が騎手さんに乗せたまんま俺たちに追い付いてきているのが見えた。

『ダイープインパクト、有馬以来だな。まさかここでお前に会うとは思わなかったぞ』

ハーツクライに騎手のルベルさん。ルベルさんが軽く会釈すると、大竹さんと親父さんも軽く会釈して何か喋り出す。

ふむふむ、ルベルさん、なんでディープリンパクトを群馬に寄越すのか気になっていないと？

『俺もだよ、なんだって群馬くんだりに来てるんだ？』

『さてな、ルベルさんやテキには何か考えがあるらしいが俺にはわからん。でも、お前に会えたのは幸運だ』

うるせえな、聞こえづらい。ハーツクライは好戦的ににやりと笑ってる、そんな気がする。その目に映っているのはディープリンパクトただ一頭のみだ。

ま、やるならどうぞご勝手にしてな。そこんところは俺部外者なもんで。んで、親父さんなんで意味深な含み笑い？遊んでんなあ。

『ホクリクダイオーにリベンジのつもりだったが：気が変わった。お前にも有馬の借りがあある、今日は勝たせてもらおうぞ』

『俺とダイオーだけかい？俺よりやばい奴がここにいてぞ』

おいディープ、巻き込むな。これ見よがしに視線向けるな親父さんたちの会話に集中できねーじゃん。

『君は？』

『シマカゼタービンです、群馬で副業競走馬やってます』

『こいつは俺よりずっと速いぞ、有馬の前も全然勝てなかったんだ。

俺は、こいつに勝つためにここに来てんのさ』

『ほう？君、戦績は？』

『群馬で12戦12勝、白蛇特別あたりが最大ですかね』

『：地方じゃまずまずといったところか』

俺はダイオー達と違う田舎もんだからね、いうほどでかい記録なんざ持ってねーよ。

『ディープ、友を持ち上げるのは良いがああいう根も葉もないうわさを利用するのは良くないと思うぞ？』

『ア？？』

値踏みするように俺を見てすぐ興味を失ってディープを諭すハーツクライ。それにディープの目つきが鋭くなった。



なんだなんだ？根も葉もない噂って。ディープが噂を流して遊ぶようなやつとは思えんが。

『お前、厩舎のみんなに自慢してるそうだな。群馬には俺より速い馬がいるって』

『え、お前そんなこと言ってたの？』

初耳、世間じゃもうアングラな噂だから気にも留めてなかったぞ：でも言うななんて一言も言ってねえな。

『本当のことだ、俺が嘘をついているとでもいうのか？こいつだぞ、弥生の後に負けてから勝てたためしがないんだ』

『最初は負けたのかもしれないが、ずっと負け続けなんて信じる奴はいない。そんな顔しないでくれ、お前の友達をバカにするつもりはない。』

だが地方と俺たちの勝負は別物で、お前は無敗の4冠馬なんだ。そういう噂はお前だけじゃなく彼や群馬競馬にも迷惑になるぞ』

『嘘じゃない、こいつは俺よりずっと速くて強い、お前よりもずっとだ』

『やめろよ、それ以上はお前のことを見損なうぞ。みんな心配してるんだ、お前がまた昔の悪い噂を気にしてるんじゃないかって』

『それは関係ない!!』

悪い噂？ディープも有名になったし、いろいろあんだらうな。なんも言わんほうがよさそうだ、こいつはこいつだし。

ハーツクライも悪気があって言ってるわけじゃなさそうだしな、どっちかっていうと先輩として心配してる感じが。

そういう噂が立って困るのも事実だ、変に騒がれるのもメンドクサイから。

『シマカゼ、世間じゃ変なうわさがあるみたいだが君は君のレースをしろ。慣れてない芝で無理して友達を悲しませるなよ』

『ご忠告どうも、俺は俺の走りやらせてもらいますわ』

『それでいい。ディープ、今度こそ勝つぞ』

それだけ言うとはーツクライは速度を速めて俺たちを追い抜いていく。見事なベテランの風格、ああいうよくできた先輩に俺はなりた

かったぜ。

世間ではデイープの群馬連敗記録は根も葉もない悪い噂か、下手に騒がれるよりもずっといいからそのまんまのほうがいいな。

どういわれようが何ともないっちゃないし、油断してくれるなら大いに結構。

『あの野郎…タービン、あいつに目にももの見せてやれ』

でも、親友に点火したままいなくならないでほしかったなあ。お前も一緒に走るってこと忘れてないかね？

『落ち着けよ、ここは俺のホームコースなんだぜ？』

俺にも地元の意地つてのがある。群馬の走り屋を舐めてもらっちゃ困るぜ、ハーツクライ。

ホクリクダイオー達とずっと併せ馬してきたのは誰か、あいつらを鍛え上げたのは誰か、それを教えてやる。

『でもいいのか？お前ごとぶつちぎることになるぞ』

『…訂正だ、俺が1着でお前が2着だ。今日こそ俺が勝つ』

『言つてろ、セーフティリードで千切つてやるよ』

今日のレースも面白くなりそうだ。距離2410、ハーツクライは未知数だが走り切れないでバテるなんてことはないだろ。

中距離だからみんな怖い、いや長距離でもクツソ怖いくらい強いのは知ってるんだが特に中距離だと怖い。

ダイオーは張り付いてくるだろうし、ノルンはどこで仕掛けてくるかわからんし、ツバキは正攻法を極めてくるから隙がない。

それにデイープ、お前は一番別格だ、本当に何してくるかかわからんお前はいつも怖い。追い込みしてくるか、それとも出鼻を挫いてくるか？

でもそれでいて面白い、こいつらとやりあえるだけで競走馬でいてよかつたと思うよ。さて、今日はどうやって逃げてやるかな？

## 第17話

まるでこれからG1のレースが始まるみたいだ、周囲を圧倒するよ  
うな静かな熱気を体中に感じながらトレセンの芝コースを一望でき  
る観客席で稲波は、愛用の一眼レフカメラに一番良いフィルムを入れ  
ながら興奮を抑えきれずにいた。

一緒に帯同しているテレビクルーのような大型ビデオカメラを右  
肩に構えるカメラマンもそれには苦笑していたが彼も撮影に余念は  
ない。

録画はしていないが電池の充電とカメラの射角、レンズの汚れや光  
の反射などを確かめながら最高の位置で撮るために今も調整中だ。

この録画映像から切り出された見どころは絶対に次の特集号にス  
クープとして使われる。

うまくいけば、この映像は今週の競馬専門チャンネルに流せるス  
クープの一つになる。そうでなくても日本中央競馬会とフランス  
ギャロが値段を付けてくれる。

フランスギャロも日本で成績を残しているポール・ルベルとハーツ  
クライを軸に、沸き立つ日本競馬に海外も注目しているのだ。

「ぐふ、グフフ…」

なんと甘美な瞬間か、運が良ければ一大スクープ、そうでなくても  
愛しいサラブレッドちゃんたちの生写真撮影し放題。

しかも練習とはいえ、すべての陣営が実戦形式の本気で挑むのだと  
いう。

事実、芝のコースに出ている5頭の馬たちの出来栄はG1レース  
にでも挑むのかというような完成度を誇っている。

(皆ガチガチのガチですよ！こんなのG1レースそのものじゃないで  
すか!!それを専属取材できちゃうなんて!)

ハーツクライの調教師、担当厩務員がせわしなく見定めているのは  
4頭。

ホクリクダイオー、ノルンフアング、ツバキプリンセス、そして

デーブインパクト。

前者3頭は地方所属でありながらそれぞれが05年秋の中央G1レースの冠を持つ話題の牝馬軍団であり日本地方競馬の星だ。

長年の人気低迷と赤字、引き起こされた汚職などのスキャンダル、賭博に対する厳しい視線などでこれまで多くの地方公営競馬場が廃止されてきた。

そして閉鎖された競馬場で生きてきた競走馬たちもまた、次の職も引き取り手も探せずに悲運を迎えることも珍しくない。

オグリキャップを輩出した笠松、メイセイオペラで一発を掘り当てた水沢、ハルウララで耐久を図った高知、独特過ぎて比較できないばんえいなどはまだ良いが他に目玉のない地方競馬は動こうにも動けない厳しくも寂しい時代だ。

この群馬も理事長の方針故に各地の名馬の末裔たちが集まりほどほどの人気はあれど厳しい時代であったはず、だが今はこうして胸を張れる成果がここにいる。

(良いわあ、良い顔してますよお！マジでやる気満々、すうんばらしい！！)

そして人気沸騰の無敗4冠の怪物、サンデーサイレンスの最高傑作であり日本中央競馬会の回答と言われるデーブインパクト。

彼もまた完璧な仕上がりだ、それこそ『今からG1を取りに行きます』と言わんばかりに仕上がっている。

一部を残して観客席に上がってきた厩務員や調教師たちの視線もそれらしく引き締まり、レース直前ということもあつてか先ほどまでの和やかな空気が消し飛んでしまっていた。

(カーブ……!!たまりません、たまりませんわ！歴戦の皆様方、圧が、迫力がたまりませんわああ!!)

レース直前ということもあり邪魔をするわけにはいかない、動き出したい欲求を押しえながら稲波はできる限り観客席の写真も静かにとる。

フラッシュ無しの静穏撮影でカシヤカシヤと着られるシャッター音は、おそらく稲波にしか聞こえない。聞こえたとしてもわずかなモ

ノだ、迷惑にはならない。

(ああ……こんなレースが、去年のクラシックの頃からずっと行われてきたなんて、こんなの、残酷すぎます!!)

その4頭はこの群馬トレーニングセンターにてほぼ恒例と言えるくらい毎回のようによくやってきたらしい。

見たかった、未来の猛者たちが切磋琢磨して力を付けていく姿を納めておきたかった。気付けなかった自分が大変恨めしい。

日本競馬会の歴史においてとんでもない損失であるとする稲波は思っていた。そこで仕上げられたのがこの4頭、本当に恨めしい。

それに比べれば、歴戦のベテランであるが未だG1未勝利のハーツクライはやや見劣りしてしまうのが残念ながらというしかない。

相手もそうだがそもそもハーツクライは群馬になじみが薄すぎる、ほら他の皆様が見るのは他の牝馬らやデイーパインパクト……と考えた稲波はふと違和感を覚えた。

(あれ、皆さん、視線おかしくありません?)

稲波は周囲から感じるぴりついた空気と、彼らが見る視線の方向に違和感。みんな一定のほうを見ているのである。

(ハーツクライを見てない……いや、互いすらも見てない、みんな、視線がおかしい)

隣でピリリとした空気を醸し出すデイーパインパクトの調教師、栗東厩舎の小泉調教師の視線、そしてほかの3頭の馬主や調教師たちの見る視線の先にいるのは一頭の栗毛の牡馬だ。

サラブレッドにしては筋肉質でやや太めなことで鬣を短くライアンカットにしている以外は、特徴という特徴がない普通のサラブレッド、シマカゼタービンだ。

デイーパインパクトの前をゆったりと歩き、模擬レースとはいえないささかも緊張せず不良馬場の芝を踏む足腰は異様にがっしりしているように見える。

しかしそれ以外に警戒するような要素はない、しいて言えば祖父譲りの逃げ足でもしかしたら逃げ切ってしまうかもという期待がある程度だ。

彼を悪く言うつもりはない、比較的的地方では強くツインターボ産駒の地方馬として種牡馬にも成れるだろう強さだ。

しかし血筋はやはりまいちとしか言えない、ツインターボ系譜で唯一の成功例と言えるがツインターボの血筋そのものはぱつとしない、そして生まれたツインロックは走らなかつた。

父母の血をさかのぼればカブラヤオーという名馬に行きつくといえ遠い祖先であるし、父父のイシノファルコンは群馬地方競馬があつたからギリギリ種牡馬に成れたケースでわずかな産駒も全滅である。

そんな血でありながらそこそこ強いというだけでもすごい、だから今日のレースではあくまでも数合わせの出走だと思つていた。

そもそも彼の主戦はダート、それも短距離かマイルだ。

ドライシーマクラシックを模した水濡れの重馬場の芝コースは脚質に全く合わないし、2410メートルはあまりにも長い。

だが周囲の雰囲気は明らかに違う、シマカゼタービンを最大の敵として見ているような雰囲気すら感じられた。

(「ディーピンパクトとは関わり深いみたいだけど：うーん?」)

最初の出会で負けたから因縁がある、というだけではないのは知つている。少なくともディーピンパクトとシマカゼタービンはとても仲がいい。

顔を合わせてからずっとディーピンパクトのほうから一緒にいようとしているし、どういうわけかシマカゼタービンの仕事を手伝つている姿もあつた。

終始和やかな雰囲気であり、互いに顔を突き合わせてはゲラゲラと笑つているような雰囲気でもマブダチという感想がしつくりくる。

馬同士の仲がいいのは良いことだ、一緒にいて安心できる仲間というのは人でも馬でも得難いものであり彼の存在はディーピンパクトを運用するにあたり大きな助けになるはずだ。

今後予定されているらしい海外遠征に帯同馬として付ければ、余計な心労なくレースに挑めるのではないだろうか。

(うーん、ツイントーボの孫だけど馬体は標準でちよつと肉付き良すぎかなあ。確か体重は520キロ…待って、体格的には480くらいが妥当なはずなのに重い?)

シマカゼタービンのルックス、足腰、全体像をつぶさに見て脳内のデータベースに照らし合わせてふと違和感を覚えた。

ダート競走馬らしく筋肉質なのはわかるがどうも体形と重さが合致しない、まるで筋肉を圧縮して詰め込んでいるかのような数値だ。

太り気味か? いやそれにしては感覚が狂っていると告げている、太っているのではない、何かおかしいと。

「君、どうかしたの?」

「あ…」

不意に声を掛けられて意識が現実に戻ってくる、デイープリンパクトの調教師、小泉が少し怪訝そうな顔で見つめ返してきていた。

一瞬、謝って場所を変えようかと考えたが小泉の方から声をかけてきたのはむしろチャンスだ。

今はファンではなく仕事できた記者である、自分たちの属するハーツクライの味方をするくらいでちよつどいいはずだ。

「すみません。皆さん、どうもハーツクライを見てくれていないように見えます」

自分はハーツクライについてきた専属記者だ、多少の毒があるくらいでちよつどいい。稲波はあえて少し不機嫌さを出しつつ問いかけてみた。

すると小泉ははつとした表情で驚き、申し訳なさそうに表情を歪ませた。

「すまない、私としたことが。群馬にくるとね、つい彼に勝つことばかり考えてしまうんだ…悪気はなかった、すまん」

「え!? すみません私、別に怒ってるわけじゃ…で、なんでシマカゼタービンに?」

小泉は周囲を見回す、周りには稲波のほかに記者はいない。そもそも今日の練習で群馬トレセンに入場してきた記者は稲波とカメラマンのみだ。

外で出待ちをしている連中は山ほどいるのだが、中に入ってきているマスコミ関係者は稲波とカメラマンのみ。

行儀の悪い記者が入っていたら巡回中の警備員や警察官につきまわり警察署一直線である、比喻ではなく群馬競馬は本気だ。

軽く考えて早朝にやらかし、不法侵入で本当にパトカーに押し込まれた連中がいて見回りと陣容が強化されているのでよほど覚悟が決まっていなければ入ってはこれないはずだ。

「オフレコでいいかな？」

「回してませんよ、ねえ？」

カメラマンもこくりと頷いて、カメラが録画していないことを示す消えたままのランプを指差した。

「ならいいか…シマカゼだよ、みんな彼に勝ちたくて仕方ないんだ。うちとしてもね」

「その話なら聞いたことがあります、あの時は中央競馬会の圧力で大変でしたよ。でも皐月賞前の話ですよね？」

ディープリンパクトがシマカゼタービンに模擬レースで全敗した、というのは記者をしていれば嫌でも一度は耳にする話だ。

だが確実だと言える敗北は05年の弥生賞のあとだけで、それ以降は話を聞かない。

群馬の牝馬たちもシマカゼタービンに勝ちたいと思う気持ちは理解できる、群馬競馬でのレースでは3頭とも彼に敗北したレースがいくつもある。

だがわからない、それでここまで警戒し、確固たる決意を持った目でシマカゼに挑もうとしているほかの陣営が理解できない。

群馬競馬ではほどほどに強い馬でしかなく、血筋もツインターボの孫であるという以外はぱつとしない。

戦績と証明した実力で言えば、ホクリクダイオー、ノルンファング、ツバキプリンセス、ディープリンパクト、その誰もが確実に上のはずだ。

ほかの4頭と比べて見劣りするハーツクライですら、シマカゼタービンと比べたら月とスツポンで負ける要素が見当たらない。



それに比べたらシマカゼタービンの能力は地方でもそこそこくらいで伸び悩んでいるが、かといって先に行きたいというはつきりとした意思があるわけではない。

マイペースで馬に無理をさせない瀬名酒造の運用のスタンスからしても、もうシマカゼタービンを恐れる必要はないはずなのだ。

「そういうことになってるが事実が違う、有馬の前の最終調整でも負けたんだ。模擬レースで良くて2馬身差で逃げ切り、完敗さ」

「無敗三冠が負けた？」

「それもここにいる間に何度もやって、全敗だよ。俺たちはあいつに千切られっぱなしだ」

「小泉、どういう意味だ？冗談にしては笑えんぞ」

「あ、大橋さん」

ハーツクライが所属する栗東トレセン所属の厩舎、大橋厩舎の責任者だ。

栗東トレーニングセンター所属の厩舎でもディープインパクトが所属する栗東厩舎とはライバル関係であるが関係は良好だ。

しかし今日の大橋はどこか疑い深そうな視線をしており、疑念の視線を小泉に向けている。

「最近、お前のところが妙なことをしてるってのは見ていた。それと関係があるのか？」

「妙な事？」

「あんたも見ただろ？赤いパイロンを躲す練習とかそんな奴だ、馬群避けにはいいかもしれんが、それをこいつら突然やり始めやがった」

「あはは、あれ、ここの真似」

「真似だろうが意味は理解できる、手軽で試しやすいしな。だがわからんこともやってる、ディープインパクトを夜に散歩させてるんだって？」

「寝る前のちよつとした運動だよ、ああやると寝つきが良くなるからね」

「わざわざ警察に許可を取って、厩舎周りの道路を歩かせるのがか？」  
確かにそれはおかしい、ただ夜の散歩をさせるだけなら栗東厩舎内

部のコースで十分足りるはずだ。

わざわざ厩舎の外に出る必要がない、そもそも周りの道路となればほとんど舗装されたアスファルトだ。

わざと歩かせているというならば意味が解らない、わざわざ公道に連れ出すというのはそれだけでも危険な行為だ。

デーパーインパクトは温厚で利口な馬だが放馬の危険はないではないし、車との接触や不意の怪我に繋がっては全てがだいなしになってしまう。

「ここ最近、栗東厩舎がおかしいのは他の厩舎でも言われてるぞ。いったいどうしちゃったんだ？」

「どうと言われてもな……口で言うのは難しい。いや、信じてくれるとは思えない」

「どういうことでしょうか？」

「デーパーに関係することか？あの馬、随分寝るそうじゃないか」  
「いつも練習熱心なんだよ」

「それで朝まで熟睡するなら先代の努力は全くの無駄骨だな。排泄する以外はぐっすり、人間並みだそうだな。」

しかも小便もボロも馬房の便所にするから綺麗だと？馬に犬猫みたく教え込むなんてよく考えたもんだな」

その話は競馬雑誌の編集部でも聞く話だ。

デーパーインパクトの強さの秘訣は、練習熱心で、よく食べて、良く寝て、綺麗好きで健康だから強いのだ。

綺麗好きな馬はこれまで多く見てきたがデーパーインパクトはそれに当てはまらない、人間並みとは言わないが犬猫並みだ。

排泄類は馬房内に作った犬猫用便所を馬用にしたモノを使い、寝藁も自ら綺麗に整え、身なりも清潔を保つ。

睡眠時間に至っては極端だ、これまで世界中の競馬会で研究されてきた睡眠時間の研究を一気に覆すようにデーパーインパクトは唐突に眠り始めた。

馬というのはたとえ野生ではない競走馬であつても基本的に本能で浅い睡眠と覚醒を繰り返す、そのサイクルは種の特性でありどうし

ようもないものだ。

過去に何度も睡眠時間の延長を試す試みが世界中で行われたが、結果はどれも芳しくはなかった。

05年の皐月賞前までは他の馬と変わらなかつたはずの彼がある日の夜、起きているにしては妙に静かな馬房に気付いた当直厩務員が見たらまるで起きた様子もなく眠りこけていたのである。

それも普段の精悍な姿とは真逆のだらけにだらけた親父のような仕草でモガモガと寝言のように口を動かしていたらしい。

最初こそ今日はよく寝る日程度にしか思っていなかつたそうだが、それが朝までぐっすりとなれば大騒ぎだ。

「別にお前らの秘訣を教えろとか言うつもりはない。お前らができたんだ、いつか俺たちも見つけてやる。でも、同業者としてお前らが心配だ」

「馬を潰すような真似はしてないよ」

「お前らが潰れちゃ話にならん、なんかあつたなら相談に乗るぜ？」

少し照れくさそうな大橋の目的は結局のところそれなのだろう、ただライバルの小泉たちが心配なのだ。

思わず稲波は無言でカメラのシャッターを切った。ちよつと困つた顔の小泉と照れくさそうな大橋のツーショット、日本競馬の調教師でも大物の二人の熱い男の友情、これもまた良し。

「…なあ、条件さえそろえばサラブレッドはスポーツカーに勝てる、そう言ったら信じるか？」

「何寝ぼけてやがる、あり得るわけねえだろそんなもん。そもそも馬が怖がつて勝負にならんわ」

「だよな、そうなんだよな、それが普通だよな…」

困つたように笑う小泉はどこか諦めたような顔色だ。少し悩んだ末、ちらちらと小泉の視線が泳いでは一つのほうを見る。

視線の先にはゲートインが始まっている練習コース、それに大橋も気づいた。

順番は内側から枠番無しだ。

1番・ハーツクライ

2番・ホクリクダイオー

3番・ツバキプリンセス

4番・シマカゼタービン

5番・ディープリンパクト

6番・ノルンフアング

ディープリンパクトとノルンフアングが外枠側なので不利に見えるが、6頭立てなのであまり差はない。

むしろレースの動き次第では、一番内枠で囲まれやすいハーツクライが一番不利と言えそう。

「シマカゼか、確かにすごい馬みたいだな。がっしりしてるが体つきがアンバランスだ、うまく矯正してるが骨格が歪んでた証拠だ。セリに出てきても良い値はつかんかっただろうよ。」

あれでそこそ速いんだから見かけによらん。だが信じられん、群馬の3頭でなく、あいつにディープリンパクトが全敗だと?」

「そこそこね…そんなもんじゃないんだよな、あいつの逃げ」

「おや、どんな足なんです?」

「失速しない破滅逃げで最後に差す、3000メートル余裕って言うて信じるか?」

「ははは、そんな馬鹿な」

「菊花賞前、模擬レースをやったがディープリは追いつけなかった。影さえ踏めなかった」

普通の騎手なら絶望してしまいたいような光景だろう。当時であれば無敗2冠のダービー馬に乗り、その上で地方のそこそ強い程度の馬に負けたのだ。

それも本来ならば相手が不利なはずの長距離芝コースという、自分たちが有利な条件で影さえ踏めない大差の敗北だ。

「ありえませんか」

「だと思ふよな…なあ、彼の最近の戦績は?」

「え?ああ、小泉さんか。ちよつと待ってくれ…」

唐突に小泉は、隣でじつと真剣なまなざしをノルンフアングに送っていた担当厩務員に問いかける。

虚を突かれた厩務員だったが、小泉に問いかけられて稲波と大橋を見ると納得したように頷いて自前の手帳を取り出した。

「直近だと9戦3勝1引き分け5敗、全部芦名だ」

「おや？稲波は疑問に思った、戦績がおかしいのだ。シマカゼターピンの戦績は、昨年が12戦12勝、すべてオープンと条件戦である。今年の戦績はまだ0のはずで、次に出走予定なのは高崎のオープン戦、ダート1000メートルのはずだ。」

しかも負けている、逃げの常勝馬のはずだが9回走って5回負けているらしい。しかも引き分けとはいったい何なんだ？

そもそも芦名に競馬場なんてあっただろうか？いくら思い出そうとしても出てこない。

「エフデューに2勝、シビックに1勝。アールサンサンが2戦で同着と負け。残りはワンビアとトイチ、ハチロクに全敗、知り合いにも確かめたから確かな情報だ」

「マツダのロータリーか、あんなのともやりあったつてののか」

「使いこなすだけで結構な腕だよ。乗ってたのは赤城の中堅どころだったが、芦名に慣れてない所で軽く千切られて勝負にならんかったそう。映像あるよ？一部だけだが」

「もちろんですよ」

「一体どういう話をしているのか理解できない。今すぐにでも問い詰めたいところだ。」

「お前ら何の話してやがる」

「こつちの話だ。レースの後で説明する、そのほうが多分わかりやすい」

「なんだそりゃ？まるきり想像できんな…せめてお前の見るあいつをわかりやすくしてくれねえか？」

「シマカゼターピンをか？言うなれば…失速しないツインターボと折れないサイレンススズカを混ぜてできた超頑丈で気を抜かないスーパークリーク」

「バカみたいに速くて体力自慢の大逃げステイヤーだあ？馬鹿言ってるんじゃない、そんな血筋じゃねえだろ」

「しかもとてつもなく賢い、大竹の袖を引いて引き留めたって言った  
ら信じるか？」

「冗談にしてもそこまで行くと嫌味というか…馬鹿にされてるように  
しか聞こえん」

スーパークリークの逆指名、本来選ばれる側の競走馬が逆に騎手を  
選んだ競馬界でも珍しい例として有名な話だ。

ここまではつきりというのだから小泉は本気なのだろう、しかし稲  
波にはいまいち信じきれない。

大橋が表情を引き締めた。小泉と関係が長い大橋は、彼のことをよ  
く知っている故に気付く何かがあつてそれで信じる理由になつたの  
だろう。

コースではすでに6頭がゲートに収まり、今か今かと出走のタイミ  
ングを計っている。

そこで稲波はおかしなものを見た、シマカゼタービンの落ち着きが  
明らかにほかの馬よりも良いのだ。

デーブインパクトやホクリクダイオー達も歴戦らしく落ち着き  
払っているが、それとは別の異質なほどに平然としている。

妙に感じて一度視線を遠くに向けると少し妙なモノが見えた、芝  
コースのコーナー部分に暇な群馬トレセン職員が集まっているのだ。

見物にしては場所がおかしい、他にもコースを見渡せるいい場所は  
いくらでもあるのになぜかコーナーが人気のようなのだ。

「良いだろう、まずはこのレースを見てからだ。しっかり説明しても  
らうぞ」

「質問する余裕が残つてりやいいがな…俺はなかつたよ、あの時は」  
景気づけに群馬トレセンが用意したファンファーレが響き渡る、日

本中央競馬会から許可を経て群馬競馬が重賞レースの際に使用して  
いるアメリカ軍の信号ラツパ曲だ。

かつて中央競馬で多くの名馬たちを出迎え、そして送り出してきた  
レースの始まり。

『Fire Call』が終わると同時に、群馬競馬のゲートが大きな  
音を立てて一斉に開いた。

## 第18話

ゲートが開く。瞬間、俺は一瞬だけ出遅れた、今回は一度出遅れてから大外に逃げて思いつき飛びす大外逃げのつもりだった。

足場が悪いとはいえ慣れたコース、デイープにも発破かけられたしここはあえて先に行かせてからぶち抜いてやる。

「ゲツ!」「ファツ!」

そのつもりだったんだけど：なぜか前にいるのがハーツクライだけ。俺の右後ろにホクリクダイオー、ノルンファンング、それから少し離れてデイープインパクト、ツバキプリンセス。

おかしいな、初っ端でわざと出遅れて一番後ろを取るつもりだったんだが：

「見抜かれたか、さすがだな」

「ヒヒ…」『マジかよ、どーすっかな』

プランではほかの5頭が前に行ったら外に逃げる算段だったが：ダイオーが近い、この状態で外に出したら走行妨害だ。

こいつら、間違いなくわざと出遅れて俺の後ろに入りやがった。出走の一瞬で相手の出方を読み取ってたってことだ。

だから怖いんだよこいつら、こんなの毎回実戦でやってるってことじゃねえか。

「後ろにダイオー、その次にノルン：ダメだ、隙が見当たらん。あいつら避けてもデイープとツバキが狙ってるぞ」

『大外はだめ、オーバーシュートで行くか』

馬群抜き逆、あえて遅く走って後ろの馬に避けてもらって前に行かせる。そして後ろに抜けてからコース取り直して大逃げかます。

前世で戦闘機のゲームでよくやった急減速で相手に追い抜かせてからのカウンターアタックだ、ミサイルと機銃の代わりにぶち抜いてやる。

峠だと互いに返しあうこともするがレースだとまずない、だから嵌ると気持ちいいくらい嵌る。あとは好きにコース取り放題だ。

走行妨害にはならん、まっすぐ走りながら少し遅くなるだけだもの。いきなり逃げ足潰されてコース取り辛かった白蛇で何度かやった。

とりあえず親父さんにアイコンタクト、親父さんは首を横に振る。「やめとけ、あいつらだけならそれで引つかけられるかもしれないがハーツクライがいる」

『逃げに入られちまうか』

ハーツクライ、俺たちの勝負に入ってこないから普通に前で戸惑ってるがちゃんと逃げを打ってやがる。

ここでこいつらとやりあってたらさっきとリードを取ってくるだろう。そうなるとまずい、こいつも立派な中央のベテランだからな。後ろを取って大外に逃げるまでにきつと誰かがブロックに入ってくる、ちよつと勝率低いわ。

速度落として後ろに出る案も無し、プランは全て捨てたほうがよさそうだ。

『前だな、行くぜ親父さん』

「好きに走りな、コーナーで度肝抜いてやれ」

親父さんが手綱を握り直すと同時に加速開始、足場は悪いが速度に乗ればどうにでもなる。

やっぱり足が取られる感じがするが何のことはない、それに見合った走りをしてやればいいだけだ。

ドバイ想定だから左回りでコーナーは三つ、もうすぐ一つ目、スピードを上げるか。

『今日は逃がさないから！』

『ついてこれるもんならついてこい』

加速を入れるとこれまでブロックを狙っていたホクリクダイオールの気配が真後ろにつく、いつも通りの忍者戦術か。

ダイオールの足音が俺の足音と重なって聞こえる、でも少し違うな、芝の音が少ないような…なるほど、俺の足跡に合わせてやがんな？

芝の裏は土、ダートみたいなんだから足の温存にはちようどいいわな。相変わらずとんでもねえ走りしてやがる、熊かお前は。



幸いハーツクライ以外はいるからルートは取り放題だ。セーブしていた足を速めて加速する、まだ体は一速だがその間の加速なら自由自在だ。

『なっ!?無理をするなど言っただろ!!』

「シマカゼ?」

『逃げしかないからこうするしかないんだよ、許せ』

「お先に、フランスの兄ちゃん」

上げられるだけ上げながらハーツクライに距離を置いて並び、追い抜く。心配してくれるハーツクライには悪いが、俺の戦法は逃げだけなんぞでな。

『馬鹿野郎!こんな足場で無理するな!!』

すまん、本気で心配してくれてんのはうれしいけどな。一応ここ俺のホームコースだし、群馬だし、地元だし、なあ?

『そこまですておけよ、ハーツクライ。こいつは模擬レースだがみんな本気で走ってんだよ、無理するな?聞けねえな、そんなもん』

ハーツクライが絶句したように息を呑む。悪い、本当に申し訳ない、ご厚意はうれしいんだけどもさ、ここで甘えるわけにはいかんのだよ。

本気でお前ら全員千切って勝ちに行くんだよ、俺だって本気だ。

『地方を舐めんじゃねーよ』

さらに加速してハーツクライを引き剥がす、今の感じだとこれ以上は負担がでかい。もう少し温まってからギア上げるか。

でもそうなる後ろのダイオーが邪魔だな、一瞬減速するからダイオーを巻き込みそう。引き剥がしたいんだが…そうだ、こいつを使えばいいな。

『ゲッ!?ハーツクライ邪魔!!』

『今度はなんだ!?!』

「しまった、放されたか…!」

「…まさか壁にされた?」

距離を作ってハーツクライの前に入って左にイン、けど後ろにいたホクリクダイオーは走行妨害になりかねないから俺を追えない距離

で擦り付ける。

俺はちゃんと距離をとったよ、後ろの奴は知らんけど、ってな。まあぶつかる馬鹿は全くないけどね、ダイオーも気づいてついでくるのやめてるし。

うまい具合に引き剥がせたな。もうすぐ最初のコーナー、足場はそこまでよくないな：まだスピードが足らん。

内側も水が溜まってえらいことになってるが、ここはダートの走りだな：インベタグリップでがつり回るには十分か。

コーナーに入る直前、まずは一速から二速にシフトアップ、一瞬の減速のあと一気に両足のギアを上げて加速する。

「よし前を取った、まずはインベタだ!!」

「相変わらずスレスレを速度も落とさず抜けてくのかよ、足場も関係ないってか?」

逆やねん、速度落としたら足持つてかれるねん。いやはや芝と泥の絡みっぷりが予想以上だわ、絡みすぎる前に足回さんと。

でも踏み込み浅いと滑るからなかなかムズイ、左両足で蹄をがつつり食い込ませて軸に、右両足で普通に走ってカウンターで走ってるがこれは最初だけだな。

『な、なんだその足は!!?』

「ピッチとストライドを同時にだど!」

お、ハーツクライと騎手さんが驚いてる。峠仕込みの足だよ、4つ足があるんだから別々に使ってカウンター取るくらい余裕だぜ。

コーナーを加速しながら抜ける、体は十分温まった、次の直線の前に立ち上がりで3速に入れる。

コーナーでハーツクライを突き放しながら直線に入りつつ2速から3速にギアを上げる。

時速65、先頭のハーツクライとホクリクダイオーからおよそ3馬身差、どんどん上げるぞ。ついてこれるかな?ハーツクライ。

「ん?ノルンが来てるぞ」

『何?これは...ここから逃げをやるつもりか?』

親父さんの言葉に後ろに耳を傾けると確かに聞こえる、ハーツクラ

イの足音に紛れていてわからなかったが確かにノルンファングの足音だ。

加速してる足だな、追い付いてくる気か。悪くはない、この直線で抜ききれば残りは2000メートル無いからな。

最近では鍛えてるノルンなら、マイルくらいならペースを上げた状態でも最後まで持つだろう。

とはいえこの足場でそれを狙ってくるとはな、やっぱりもう慣れてきやがった。仕方ない、ペースを上げるか。

「ちつ…見つかった」

『気付かれたならかくれんぼは終わりですね!』

「行け!」

綱のしなる音にわき腹を小突く音、上げてきたな。ノルンの騎手さんは西部劇みたいな掛け方するからな、よくわかる。

問題はショートスパートでの加速力はノルンのほうが俺よりも速いってこと、詰め寄りの速さはティープ以上で一気に距離を詰めてきやがる。

直線での加速はノルンの十八番だ、このまま差し切って次のコーナーで前を塞ぐつもりか。

先に行かせてみるか? いや、抜かせたら不味い。後ろにはまだダイオー達がいる、後ろが詰まって抜け出しづらくなる。

『お先に失礼します』

『なっ!? こんなハイペースでか?!』

『ノルン!』

『すみません、仕掛けさせてもらいますよ!!』

ハーツクライとホクリクダイオーをノルンファングが追い抜く、ダイオーはあえて控えた…ちやうな、ハーツクライを警戒して仕掛け損なったか。

もうすぐ後ろにノルンが来てる、まずいな、もうスパートに入つてやがる。ここを勝負所にしてきやがった。

時速74、加速を入れて引き剥がす気で走るが足音がどんどん近づいてきているのがわかる。まずい、加速力勝負じゃあつちのほうがあ

んだぞ。

コーナーまで逃げきれば振り切れそうだが：そうは問屋が卸さねえよな、もう真後ろに聞こえてきやがる。

「来た、ギリギリの横を抜ける気だ！」

『やつぱりかよ！』

ブロックしたいと唸る衝動を抑える、ここは峠じゃねえから直接的なブロックはいかんしフェイントはこの状態だと意味がねえ。

一度抜かせるしかない、そう思った瞬間、俺の右横に白いノルンフアングの馬体が一步前に飛び出した。

これだよ、こいつの怖さ、こいつ抜くときは獲物のほんとギリギリ抜いて一気に前に飛び出していくんだよ。

下手に動くところちが走行妨害とられそうなところをさ、自分もやべーのに嬉々としてぶち込んできやがるから面白い。

「はえーな、随分と鍛え直しやがった」

「今日こそ勝たせてもらいますよー」

親父さんも心底楽しそうだ、ノルンの騎手さんも声の上擦ってる。でもこれで勝てるなんて思わんことだ。もうすぐ2本目のカーブ、インコースがノルン、俺がアウトコース。

ハーツとダイオーは少し離れてて、その後ろにツバキとディーブ、時速78当たりか：いや、ダメだな、ノルン。この足場で、その走り方じゃインベタはハイリスキだ。

ノルンフアングが先にコーナーに入る、間髪入れず俺が外側から並行ラインを取る。

ノルンの尻が外側に少し出てカウンターを取る、教え込んだ通り高速度でやってきたな。でも、まだカウンターが少し甘いぞ。

俺も前足を芝に突き刺して軸にしながら尻を外に出してカウンターを取りつつ曲がる。

さてどうなるか、少しだけ様子を見ると案の定、ノルンフアングのインベタドリフトラインが膨らんで馬体が外に滑った。

「ノルンが膨らむ!？」

ギョララーを決め込んでた職員たちが息を呑む声が聞こえる、この

ままだと直撃衝突大クラッシュだものな。避けるが。

膨らんでくるノルンファングの馬体を一瞬だけ減速して躲し、その足でラインを一気に内柵に寄せてインベタラインを横取りする。

ノルン、良い作戦だったが今日の芝が濡れているのは誤算だったな。最初は流して慣らしてきたんだろうが、この高速域でのコーナー勝負では想定が甘い。

いつもよりも水気のやばくて滑るこのコースで普通に走るだけじゃ、インベタラインのコーナーだと遠心力にグリップが負けて滑る。

かといって突き刺すように走るのだとインベタは足の負担がでかすぎるからそれしかなかったんだろうがな。

この程度でノルンはコケるほど鍛えてないから大丈夫だ、普通に立て直してるし、足音もアンダー出ただけで変な感じはしないしな。

「前足ピッチで後ろ足ストライドかよ、道理で足音がおかしいわけだ…ノルン、下がれ」

『了解…相変わらず変態ですね』

『誰が変態だ』

ノルンファングの雰囲気や和らぐ、勝負は捨てていないが様子見に戻ったな。またどこかで仕掛けてくる気満々って視線が怖いぜ。次の直線、次が最後の左コーナーか…今は時速80、85当たりまで上げて5速からのラストスパートだ。

そう考えながらフェイントラインを作りながら加速し続けていると、後ろからまた追いついてくる足音、2頭だ。あいつ等だろうな。

「大トリが後ろについた」

足音で分かるよ、ツバキプリンセスとディープリンパクト、有馬の実力者がダブルでだ。互いににらみ合いながら仲の良いことで。

すぐ抜かずに真後ろについて、2頭で一度息を入れてやがる。しかもかなり近い、となると直線で仕掛けてくることはない、コーナー勝負だな？

なら直線は速度を稼がせてもらう、俺のスリップストリームから出ないようについてきてみる！

「ついてきてるな、良い根性だ」

時速83、ツバキとディープの仕掛けの対応を考えるとここで一度様子見だ。

最終コーナー、インベタグリップで加速しつつ俺は走る。あいつらの気配が背後からアウトラインに併走？なるほど、そう来たか。

テール・トウ・ノーズからのサイド・バイ・サイドでオーバーテイク狙い？カーレースみてえなことしやがって！

遠心力を使って省力でライン変更からの比較的大回りな走りです。タミナ消費を軽減しつつ加速、俺の後ろで休めた足で一気に抜き去るってか？

何よりコーナーで抜けば、直線に入るときブロックしやすい。あとで何か言われてもインに入るときに目測ちよつとミスつたで言い訳しやすいもんな。

『どうやあ!!ブンブンうるさいレースの技や!!今日こそ勝たせてもらうでえ!!』

ゆつくりと俺の前にじりじり出てくるツバキプリンセス、向こうのほう 가속しやすい位置にいるからな。

ヒートアップしちゃってるねえ、こいつはテンション上がりすぎるとこうなるんだよな。無意識らしいけど。

『そいつはどうかな?』

それ、考えてたのはお前だけじゃなかったばいぞ。だって俺の横におまけがいるから。

『遅かったな』

『やつと並んだぞ、誇れないがな』

『使えるもん使って何が悪いってんだ』

勝つためにルール守った上であるもん全部使って何が悪い、正々堂々は美徳だけどこだわって勝ちを逃しちや意味がねえ。

『だからなんや!知つとるわ!!あんたたち2頭とも千切つたる、特等席でよう見ときい!!』

いい啖阿だが息が荒れてる。ロングスパートはきついだろ、悪いなツバキ。良い作戦だったが、それだけじゃまだ甘い。

デーパーもツバキの後ろにあえて潜み続けたのはよかったが、ありていに言えばコーナー序盤からのロングスパート仕掛けじや速すぎだし加速の伸びがちよいととろい。

というわけで加速しつつ逃げに入らせてもらう。

『んなあ!?!』

前ががら空きだぜ。仕掛けるならコーナー終わり、一気に抜いて間髪入れずに前に突っ込まねえと。

じやなきやこうなる、コーナーが終わる前にちよいと鼻先を奥にねじ込んでやればお前はインに入れない、あとは真正面に空いた花道をただ加速するだけだ。

ツバキと並走して首を前に出したところで最終コーナーが終わる、立ち上がり加速で一気に抜け出してさらに加速、時速85だ!

「デーパー!!」

『ここだな!』

「行くぞ! ツバキ!!」

『まだまだあ!!』

後ろの二頭に鞭が入る音がした。だが、ツバキプリンセスの足の回しが重い。さっきのスパートでだいぶ足を使ったな。

ツバキの足の回転をデーパーインパクトが上回る、やはり最後にこいつが来たか。やばい、また加速力あがってやがる。

『来やがったな!!』

『今日こそ勝たせてもらうぞ』

そうは言うがな、後ろの足音からするとほかの連中もスパート掛けてきてるんだわ。うかうかしていると俺たち両方ヤベーぞ。

「ヒヒッ」

笑いが出る、ああ楽しいな、こういうレースは何度やっても飽きねえよ。息を整える、血流と筋肉の動きを感じ取り、鼓動のペースでタイミングを計る。

まだ、デーパーが来る、まだ、ノルン達が追い上げてくる、焦るな……ここだ。クラッチを切る、一瞬の減速、シフトを5速に入れて一気に繋ぐ。

「スウ…ブウン!!」

アクセルべた踏み、エンジン全開、ラストスパート!! 後ろからディーブも上がってくる、おおよそ8メートル、加速についてきている。その後ろから全員やってきている、だが、だからどうした、今は俺が前なんだ、捕まえられるもんなら捕まえてみる!!

8 6、7、5メートル、8 7、7メートル、8 8、6メートル、8 9、5メートル!! 息が苦しい、足がもつれそうだ。

「残り、60!!」

9 0、5 0、9 1、4 0、まだか、まだか!! 前に誰もいない、まだだれもいない、もっと速く!!

前しか見えない、ゴールしか見えない! 走れ、回せ!! 走れ!! 俺たちの前には誰もいねえ!

「踏ん張れ!!」

「ブウン!ぶううああああ!!」

9 1、2 0、9 2、1 0!!

「よくやった!」

親父さんの疲れ切った、けれど喜んでる声で前だけ見ていた意識が戻ってきた。減速しながらクールダウンしつつ走って、切り返す。

後ろを見るとみんな走り切っているようだ、やっぱりあんまり差はなかったらしい…中央G1、恐るべし。

息が苦しい、足がプルプルしてる、体感時速93、全力で走り切った。どうなった? 勝てたか?

コース脇に引っ張り出された移動式の簡易掲示板を見る。

1着・4、シマカゼタービン

2着・5、ディーブインパクト・2馬身

3着・3、ツバキプリンセス・クビ

4着・6、ノルンフアング・1馬身

5着・1、ハーツクライ・1馬身

6着・2、ホクリクダイオー・ハナ

2馬身、2馬身差?…あ、勝ったか? よかった、周りなんも見えなくなってたから負けたかと思った。



全部出し切る最終加速、あれに入るともう走ることしか考えなくなるから隙だらけになって仕掛け放題なんだもの。

芦名じゃそれで何度ぶち抜かれてきたことか…ここもなんとかしないと本気でやばいよな。

『負けたああああ!!』

『仕掛け損ないました…』

同じように掲示板を見上げてツバキプリンセスが悔しげに嘶き、ノルンフアングがブスツとした顔で鼻を鳴らす。

お前ら、最後までやっぱ狙ってやがったか。最後の加速で集中しきってたところ狙われてたら終わってたわ。

『ウワアアア!?勝負所ミスったああ!!』

『ふ、ふぎ、ふぎけ…ゲツホ…』

ダイオーの奴め、注意を俺に向けたままハーツクライの競り合いになってやがったな?そりゃ負けるわ。

ハーツクライは息切れで苦しそうだ、ラストスパートで踏ん張りすぎたかね。ルベルさんは…え、目、怖!!

『なんだ?ハーツクライの騎手に睨まれてるぞお前』

『なぜだ、俺なんもしてない…わけでもねえか』

ダイオーを擦り付けたの怒ってるのかねえ…いや中央の重賞レースならこの手のテクニクは日常茶飯事じゃね?

同じことはしないまでも、うちの先輩方もこういうことされたとかいうので盛り上がったけどなあ。

『ま、いいか。どうだ、タイプ。勝ったぞ』

『ああ、今日こそ勝てると思ったんだがな…』

『ほんとだよ、どこであんなの覚えてきやがった?マジでひやひやしたわ』

『大竹さんと一緒に研究したんだ。シューマツハとアロンソつてやつすごいな、ドキドキしたぞ』

マジでF1見てたのか…やっぱり中央は魔境だわ。

## 第19話

「おい…おいおいなんだよこれ…なんなんだよこれ…!!」

カメラマンの動揺しきった眩きが耳朶を打つ蹄の音に紛れて聞こえる、その動揺を隣で聞いていた稲波はまるで遠い声のように聞こえていた。

レースの内容があまりにも意味が解らなかつたからだ、目の前の光景がまったくもって理解不能だつたからだ。

2410メートル、左回り、水濡れで重馬場になつた芝コース。

出走馬全てが馴染みのない、海外芝を模すために作られたコースだ。ゆえに誰にでもチャンスはある、練習とはいえディープリンパクトに勝つこともできるかもしれない。

それは理解していた、理解していたはずだ、なのに稲波の意識は必死に目の前の現実を否定したくて仕方がないのだ。

「千切れシマカゼ！俺が勝つまで負けるなんて許さねえぞ!!」

「まだだ！まだツバキは終わらんよ!!」

「行けえ!!捉えろ!!ディープ!!」

「な、何やってんのダイオー!?!」

「仕掛ける、ノルン!!」

最後の直線、観戦スペース前のホームストレッチに帰ってきた最初の馬、鬣を短く切り筋肉質な特徴のない栗毛の牡馬。

シマカゼタービンだ、群馬競馬のダート競走馬のはずの彼が、濡れた芝の上を全身の筋肉をフルに使った全力疾走で後続を振り切りにつなげ掛かっている。

何の冗談だ？馬好きを自負する稲波でさえ目の前の馬を信じたくなかつた、これは悪い夢だと思いたくて仕方がなかつた。

最初のスタートでハーツクライに先頭を取られたときに彼は終わったと思っていた。その後ろに控えた4頭はそういう作戦なのだと考えていた。

それは間違っていなかつた、だが狙いはディープリンパクトでもほ

かのライバルでも、ましてやハーツクライでもなかった。

4頭が狙っていたのはシマカゼタービンだった、初めから彼を抜き去ることだけを考えていたに違いない。

彼が加速してハーツクライの前に出ようとしたときはやはりツインターボの孫だったと感嘆した、それだけしか見ていなかった。

彼は逃げられるから再び前を狙った、そこからは延々と加速し続ける大逃げだ、最初から最後までペース配分なんて無視した全力のスピード勝負だ。

それはセオリーを無視したバカバカしい走りに見えて、同時にかつてのツインターボを彷彿とさせる走りでもあった。

勝つかもと思いつつも最後は恒例の逆噴射だとも考えた、考えて楽しんでしまった、悔っていた。

「…GIだぞ」

呆然とした大橋の呟きが妙に耳に入る。彼も大逃げを見たときは喜んだ、血筋は血筋かと納得していた。

スプリンター顔負けの加速からのハイペース、すべてを置き去りにする大逃げ、しかしノルンフアングが仕掛け始めたときから奇妙に感じ始めた、

シマカゼタービンの加速がまったく衰えない、彼特有の自動車の変速のような一瞬減速する加速でどんどんペースを上げていく。

それについて行こうとハーツクライ以外の馬は当たり前のようにペースを上げて食い下がり、それにつられてハーツクライもペースを上げざるを得ない。

そこからはシマカゼタービンの檜舞台、次々と仕掛けてくるノルンフアングやツバキプリンセス、ディープリンパクトを躲けずずっとトップを譲らない。

止まらない、緩まない、垂れない。加速する、ただ加速する、まったく速度を落とさない。ただただ速く先頭を駆け抜ける。

「みんな、GIクラスなんだぞ。無敗4冠だって、いるんだぞ」

群馬地方競馬の星、すべて2005年のGIホース、中央所属競走馬たちをすべて抜き去って手に入れた日本中央競馬の頂点の一つを

持った地方の競走馬たちが走っているのだ。

クラシック三冠を達成し、05年の有馬記念を制して無敗四冠を達成した新たな伝説が目の前で走っているのだ。

彼に、彼女らにハーツクライがまだ及ばないのならば納得はできよう。それを糧に精進できよう、だがこれは何の冗談だ？

「ハーツクライだって、ずっと頑張ってきてるんだぞ」

それはハーツクライの実力を誰よりも信じている大橋がよく知っている、稲波もハーツクライの実力は理解している。

G I未勝利とはいえ、いつG Iに手が届いてもおかしくない、それ程までに仕上がってきていた。

G Iクラスの競走馬が5頭、競い合うならこの5頭しかない。残り一頭は偶然いただけの数合わせ、多少追いつがれば十分なはず。

だが目の前のこれはなんだ、ラストスパートをかけて何とか上がったってきたハーツクライだがホクリクダイオーとブービー争いだ。

それどころか最初の飛び出し以後はまったくもって競り合うところがない、ずっと後ろについたまま前へ上がれないでいる。

走りに違和感はない、有馬記念並みに思いつきり走っている、故障の様子もない、なのに最下位争いをしている。

「あり得ないだろ…嘘だと言ってくれ…嘘にしてくれ…」

あのシマカゼタービンが前をひたすらに走り続けているからだ。先頭でバカみたいな大逃げを行い、レースを頭のオカシイハイペースにしているからだ。

自分たちの努力がすべて無駄に終わっているような気がした、今まで行われてきたレースがすべて否定されてきたような感じがした。

常識外のスピードでラストスパートをかけ始めるシマカゼタービンにデーブインパクトとツバキプリンセスが迫る。

デーブインパクトが優勢だ、ツバキプリンセスは足の伸びが足らずに少し遅れてきている。

「勝て、勝ってくれ」

大橋が願う、じりじりとシマカゼタービンに詰め寄るデーブインパクト。その速度はいつもよりもはるかに緩慢でじれったい。

なのにその姿は完璧だ、足の動きもキレにキレている、完璧に最高の追い込みを見せている。なのにじれつたいと思ってしまうくらいにゆっくりとしか詰められない。

「嘘でしょ…」

現実是非情だった、デーブインパクトの加速が止まった。残り60メートル、残り1馬身、そこまで迫ってデーブインパクトとシマカゼタービンの差が僅かにまた開いていく。

デーブインパクトが捉えきれなかった、垂れた？いや、まだ全力で仕掛けつづけている、なのに差が開く？

「デーブインパクトが…!!」

届かない、無敗四冠の伝説が全力で走ってなお突き放される。彼らは諦めていない、でも届かない、距離が縮まらない。

セントライト、シンザン、ミスターシービー、シンボリルドルフ、ナリタブライアンに並んだ生きた伝説が、最盛期の彼が全力を出してなお、届かない。

「嘘だ」

誰か嘘だと言ってくれ、大橋の呟きにはそんな願いが聞こえた。

「あり得ない、こんなの嘘だろ？」

誰でもいいから余興だとバラしてくれ、ドツキリでしたと言ってくれ。

「あいつらが…日本のGIホースたちが、あんな趣味の道楽馬に負けるっていうのか!!」

速いのだ。ハーツクライよりも、ホクリクダイオーよりも、ノルンファンクよりも、ツバキプリンセスよりも、デーブインパクトよりもシマカゼタービンのほうが速いのだ。

差が広がる、デーブインパクトが置いて行かれている。

残り30メートル、2馬身、巻き返す余力はない、デーブインパクトはもう全速力だ。なのにシマカゼタービンはまだ加速し続けている。

バカみたいに速くて体力自慢の大逃げステイヤー、脳裏に大橋の言葉が蘇る。嘘ではなかった、本物がそこにいる。

地方競馬の星が、2005年の秋GI戦線を暴れた猛者たちが、地方競馬に光明をもたらすはずの光が、その地元で負ける。

無敗四冠が、2005年中央競馬のクラシック覇者が、日本競馬会に刻まれた新しい伝説が、この群馬で負ける。

ホクリクダイオーを振り切つて、ノルンフアングを躲して、ツバキプリンセスからも逃げて、ディープリンパクトすらも置いて行く。

最下位でなければならぬはずのシマカゼタービンに、完全に実力差で負ける。

あり得ない、信じられない、あつてはならない、こんな現実が間違っている、不正だ、間違いだ、無敗四冠の伝説がこんなところで負けるなんてありえない!!

「ちつ…まだダメか。だがF1テクはうまくいった、まだまだいけるな」

小泉の悔し気な、しかし納得した呟きが非情なくらい耳を通り抜けていった。

シマカゼタービンの馬体がゴール板の前を駆け抜ける、終わった、シマカゼタービンが1着だ。

ディープリンパクトが負けた、日本中央競馬会の秘宝であり日本近代競馬の解答と言われてきた彼が、地方重賞すら出ていない馬に。

それもぐうの音も出ない決定的な敗北、主戦場がダートであり短距離かマイル辺りしか走ったことがないはずの相手にだ。

「また速くなってるな、最終速度は？」

「ラストスパートで93、平均では85辺りですかね」

「またハードルが上がったか」

余りのショッキングな光景に大橋を筆頭としたハーツクライ陣営が声も出せない状態の中で、周囲は当たり前のように弛緩した空気に包まれていた。

小泉は肩の力を抜いてやれやれとかぶりを振り、自分の隣で馬たちの最高速度を計測していたホクリクダイオーの調教師と一緒に肩をすくめている。

「ダイオーが最初から仕掛けに行つたのは作戦だな？」

「ご明察です、あいつの加速には癖がありますからね。真後ろに付けばある程度はこっちの土俵に引きずり込める。」

：ハーツクライが無防備に前に出たのは予想外でしたよ、しかもそのまま逃げに移るとはね」

「あの動きは予想外だったか?」

「見事なモノですよ、おかげでうまく嵌められちゃった」

まるでいつものこととでもいうような空気に稲波とカメラマンは声すら上げられなかった。

明らかに彼らはこの光景に慣れていて、負けたのは悔しくても、あり得ないと否定していない。

彼らが一番憤慨しておかしくないはずなのに、丹精込めて育て上げたG I競走馬たちがあんなふうに負けたのを見てうろたえて当然なのに、それが無い。

「おい、小泉! 今のは一体何なんだ! いったい、あの馬は!!」

「あいつがシマカゼタービンだよ。酒屋の輓馬で走り屋、芦名の名物ダウンヒーラーさ」

「走り屋? 馬鹿な!! あいつは馬だぞ!!」

「嘘じゃない。あいつは幼駒の頃から、ハチロクの後部座席で峠の走りを体に叩き込まれた規格外だよ。それも当時、芦名最強と呼ばれたハチロク乗りにな。」

大竹曰く、あいつにとってレースは車とやるのが当然なんだ。平地では馬と走る、峠だと車と走るんだよ。

さっきの話聞こえてただろ? FDとシビックに勝ってるって」

そんな馬鹿な話などある物か、稲波は否定したかった。だがそれを知った上で彼の走りを見れば何かと納得できてしまう。

彼の癖だと思っていた一瞬減速する加速は、文字通り車のシフトチェンジを模したモノだとしたら?」

コーナーで見せる恐怖を置き忘れたかのようなインコースの走りは走り屋特有の攻め込みの模倣だとしたら?」

体を傾けてカウンターを取る特異な走りの元が峠の走り屋が行うドリフト走行だとしたら?」

なにより、その常軌を逸した走りとテクニクを可能とする頑丈な足と強靱な筋肉をどうやって鍛えたのか？

「競走馬になる前からずっと、瀬名酒造で仕事をしている時も芦名を峠も平地も仕込みの酒を担いで走り回ってんのさ。」

雨の日も風の日も、雪の日だってよほどじやなきや仕事はやる。だから体の出来からしてまるで違う。

日常的に負荷がかかった生活の上に繰り返される坂路の往復してんだぞ。

当然、日常的に車ともすれ違うから車のエキゾーストも全く気にもしない。騒音だってなんのそのだそうさ。

あいつほどストレスに耐性のある馬は他にいないんじゃないかな。

噂で聞いたことないか？ スポーツカーが違法レースで馬に千切られて負けたってやつだ」

その噂ならば稲波も聞いたことある、カーレースを題材とする編集部にいる友人が馬に関係しそうな噂だからと教えてくれたことがあった。

だが峠の違法レースは自分の専門外であるし、噂を調査する編集部もアングラな峠の違法レースのことなのでうまく信憑性のあるネタとして扱いきれなかったと聞いている。

もしそれが真実だとしたら、それは『馬』と呼べるようなものではない。文字通りの『化け物』ではないか？

「あいつだよ、首都高で腕を磨いたガチガチチューンのスカイラインR33を負かした馬はな。それもただ千切るんじゃない、地元でしかできない戦術とテクで、鞍上も無しにな」

「あり得ん、スカイラインって言ったら立派なスポーツカーじゃないか！ それも首都高といえは高速道路だろうが!!」

それを鞍上無しだと？ そんな放馬状態で、馬の判断だけで勝ったっていうのか！ 証拠でもない限り——」

「証拠を見せてもらうか、うちのでもいいが…いいかな？」

小泉がホクリクダイオーの調教師に目配せする。彼は上に聞いてみると言っって携帯電話を取り出した。稲波は背筋に悪寒が走った。



「許可が取れたら見せてもらえろぞ。ただし他言無用、一切の口外無しだ」

不用意に開けてはいけない扉を開けてしまったような、そんな気がした。



体を温めてくれるはずの温かいシャワーのお湯が、まったく芯まで伝わってこない。

それ以上に、ルベルは心の底から湧き上がる寒気を感じていた。群馬トレセンのシャワールームで頭からシャワーを被りながら何度目かもわからないレースのリフレインが脳裏をよぎる。

勝てて当然の相手に負けた、勝てるわけがない相手が勝った、そこにははいけないはずの相手が前にいた。

口で言えば何とでもいえる、でも現実は違う。さつき一緒に模擬レースをした馬たちは全頭が超の付く一流であったのだ。

それを完全に侮った、一頭だけ完全に意識から外して甘く見ていたから自分たちはあっけなく負けた。

そう思っている、解っている、ルベルの心の中はずっとざわついていて収まらない。

(あそこまで速度を上げて相棒を走らせたのは初めてだった)

自分の限界すらも超えた超ハイペースレース、今思い出しても一歩一歩が寒気のするレースであった。

自分は怖かった、落馬すれば確実に死ぬ、踏み込みを間違えれば相棒が死ぬ、どこを間違えても確実に死ぬ。

そんな光景がありありと脳裏に浮かんでは消えて、浮かんでは消えるのだ。

狂っている、あの馬も、あの騎手も、みんな狂っている、レース中何度もそう悪態をついていたほどに、自分は恐れを覚えていた。

いつハーツクライが足を滑らせてしまうか怖かった、あのハイペー  
スレースは彼にとつても未知の経験だったのだ。

それも洋芝を模倣するために水を撒いて滑りやすく重くした重馬  
場の芝コース、踏み込み損ねたら芝に足を取られるのではなく芝の上  
を滑ってしまうくらい濡れていた。

その足場でほかの馬は、あの化け物の大逃げに追い付かんとハイ  
ペースを維持しながら狂ったテクニクで延々と勝負を仕掛け続け  
ていた。

(足が震えそうだ…)

こんなに自分が情けないと思ったのは初めてだ、母国フランスでの  
レースでも経験したことがない恐怖が自分を打ちのめさんとしてい  
る。

それも日本中央競馬の大舞台でも、日本地方競馬の大舞台でもな  
く、たかだか海外遠征前の最終調整で行った模擬レースたった一度で  
すべての運を使い果たしたかのように疲弊しきっている。

この日本の地で母国フランスを代表するような立場になつてし  
まったとはいえ、それを背負って堂々と走り栄光に向かって走る自分  
が、恐怖に負けかけていた。

走りたくない、もうやめたい、そう思ったのは久しぶりだった、こ  
んな練習では初めての経験だった。

それでも音を上げようとしなかったのは意地だった、情けない姿を  
見せるわけにはいかないと思ったからだ。

でもそんな意地も吹き飛ばような光景が自分の目の前で連続して  
いた。

3度目のコーナーを曲がった時、前を走るノルンファングが明らか  
に頭のオカシイ速度で内ラチ沿いにギリギリまで寄せながら走り抜  
ける光景は明らかに異常だった。

目測で10センチも離れていないような超インコースを、綺麗に安  
定しながら抜けていったのだ。

そしてそれを上回る、その前を走っていく馬、シマカゼタービン。  
あの馬は異質すぎだ、あまりにも奇妙すぎた。

二つ目のコーナーで見せたデーパーインパクトが有馬記念で見せたものが兎戯に見える完璧なドリフトは、模擬レース中でありながらつい見入ってしまうほどに怖ろしく魅力的であった。

前足をピッチ走法で走りながら軸にして、後ろ足をストライド走法で芝の上を滑るように走りながらカウンターを取りつつコーナーを減速せずに抜けていく恐ろしいテクニック。

そして同じようにドリフトを模倣しながらも、遠心力に耐えきれずコーナー途中で外に膨らんだノルンフアングを躲してさらにピーキーな内側にラインを攻めこむ度胸。

そしてそこから魅せた安定した走行とコーナー終わりのさらなる加速、どこをどうやればあんな風にテクニックを磨けるのか全く予想ができない。

それに自分はいいていけないと悟っていた、無理について行けばハーツクライが持たないと、自殺行為でしかない。

だからまだ行くべきではない、そう言い訳をしていた。

だがそれに群馬の競走馬たちはついて行った、騎手たちもそれを恐れずについて行った。デーパーインパクトでさえ挑みかかった。

ツバキプリンセスは大逃げするシマカゼタービンの後ろに恐れもせずに入り、その後ろをデーパーインパクトが追従した。

その走り自体目を疑うようなものだ、馬が嫌がって騎手も絶対に避けるような劣悪な状況下にあえて彼らは飛び込んでいったのだ。

こんな重馬場で、大逃げで走る馬の後ろは巻き上げる水しぶき、泥、千切れた芝などが嫌というほど舞い上がる。

当然、ツバキプリンセスやデーパーインパクトはそれを真正面から食らいながら駆け抜けることになる。

言わずもがなだが彼らもドロドロの泥まみれになっていた、なのに彼らの闘志は萎えることなくただ前を向いて走り続けていた。

悪辣な状況下にわざと突っ込んでいながら駆け抜け、勝負時を待ち、そして最高と思えるタイミングで仕掛ける。

それができる馬と騎手、その通じ合ったまさに歴戦のコンビネーションがこの競馬界にどれほど存在するだろうか。

だがそれでもシマカゼタービンには届かない、それも躲して彼は前へとさらに体を押し出して差を広げていく。

そこで自分は悟ってしまっていた、ハーツクライと自分では勝てない、シマカゼタービンと瀬名茂三に追い付けない。

ふざけた事実を認めてしまっていた、中央競馬に出走経験のない競走馬と騎手ですらない馬主のコンビに負けを認めてしまった。

(情けない、なんて情けないんだ自分は!!)

思い返せば情けない自分の姿に怒りがこみあげてくる、諦めてしまっていたのは自分だけだったという事実が余計に自分の情けなさを増幅させてくる。

彼らに全員が食らいつこうとしていた、隣を走るホクリクダイオーでさえ最後の最後まで加速を止めようとしなかった。

まだレースは終わっていないかった、まだゴール板をシマカゼタービンは抜けていなかった、なのに自分は諦めてしまっていた。

それでも何とか最下位を免れたのはハーツクライの意地でしかなかった、彼は自分が諦めてしまった後もただ一人で走りぬいてくれた。

レースが終わって自己嫌悪した、自分はただの重りになっていただけだ、ただの重いリュックサックになってしまっていた。

思わずシマカゼタービンを睨みつけさえして、それにも恥じ入るばかりだ。

これがポール・ルベルの限界か？あのハーツクライの相棒か？フランスギャロからはるばるやってきた外国人騎手の姿か？

「Erreur…」

違うだろう、こんなもんじゃないはずだろう？なのに、頭から彼の背中が離れない。勝てるビジョンが浮かばない。

何もかも置き去りにしてただ前へと走り去っていく時代遅れの大逃げ、その嵌り切ったときの恐ろしさがどうしようもない。

速すぎて何もできない、ついていけば馬がバテる、様子を見れば置いて行かれる、体力任せで最後まで突っ走ってしまう。

追い付くのに最も簡単なことは自分も速く、そして長く走ること。

だがそんな簡単なことがこの競馬の中では一番難しい、だから駆け引きというものがある。

自分は駆け引きというものすらさせてもらえなかった、競り合うことすらかなわずにただ後ろをついていくのに精いっぱい、最後はこんな醜態をさらして相棒に失望されたかもしれない。

足取りが重い、ルベルはシャワーを浴びても拭えぬ気持の悪さを抱えながら、重い足取りを何とか持ち上げながら服を着替えてシャワー室を出た。

「随分長いシャワーだったじゃないか？」

自分が望んだわけではないが、話をしたかった彼が待っていた。

「大竹さん：：ちようどいい、話をしたかった彼が待っていた。」

「私も少し話をしたかったんだ、ちようどいい」

シャワー室の前で壁に背を預けて待っていた大竹に促され、近くの休憩スペースに座る。

大竹もシャワーを終えたばかりのジャージ姿で、慣れたようにベンチに座る。実際に慣れているのだろう。

何か自分に用があったのかもしれない、だがそれは後にしてもらいたかった。最初に自分の質問を聞いてほしかった。

「大竹さん、あの馬と：：シマカゼタービンとはずっと走ってきたんですか？」

「うん、弥生賞の後に負けてから群馬にくるたびに何度もね」

「：：負けてたんですか？」

「負けてた。クラシック3冠の同じ距離を同じようにレースして、逃げられてた」

聞きたくはなかった、そんな事実を聞きたくはなかった。

「ルベルさん、こんな風に言うのは誤解されるかもしれないけど：：あんまり気を病まないほうがいいよ、彼は少し特殊だから」

「ワカラナイ。なぜあんな馬が、重賞レースに出もしないでこんなところにいる？」

もしあの走りが中央シリーズに飛び込んできたら、そう思うと震えが出てきた。

大竹の言っていたことに誤りはなかった、デュープインパクトは無敗四冠を達成してなおシマカゼタービンに届かなかった。

これまでも本当に負け続けてきた、デュープインパクトが強くなるように彼もまた強くなっているということ。

伸びしろもあり、実力もあり、扱いもしやすい賢い馬だ、むしろ出さないほうがおかしい。

「ちよつと訳ありでね、馬主の意向もあるし大きなレースは避けてるんだよ」

「信じられない…あんな足を持つてたら普通は…」

競走馬の馬主ならば是が非でも夢を追う、馬主の瀬名茂三は酒造会社の社長でもあるから資金面でもある程度余裕もあるはずだ。

群馬地方競馬ではなく中央競馬に登録して、今年のクラシックを走らせていれば歴史が変わっていたかもしれない。

「うん、彼は強い。こういうの瀬名さんたちは嫌がるけど、おそらく群馬最速の競走馬はあいつだ。群馬最強、馬のダウンヒラーだ。」

芦名の峠道なら、彼は条件付きとはいえ走り屋のスポーツカー相手に競り合って勝ちに行ける実力があるんだから」

そんなことあるものか、と一蹴するのは簡単だっただろう。だがルベルにはとてもではないができなかった。

騎手としての経験が、実際に走ってあの走りを見たから、その身をもって実力を知ったから、あり得ると納得してしまった。

「なぜ彼は一緒に出てこなかったんだ？あの3頭と一緒に中央に挑戦していてもいいはずだ」

「仕事があるからダメなんだってさ、中央でGⅠに挑戦となると色々時間も手間もかかるだろ？」

シマカゼは副業で競走馬してるだけで本業は酒を仕込むための輓馬なんだ、仕込みの主力を外せないってわけさ」

競走馬の本業はレースを走ること、という常識がシマカゼタービンには通用しない。ルベルは改めて、彼が群馬地方競馬に所属していることを理解した。

競走馬とはいえただ走るだけではない、有名どころとなればテレビ

取材に応じたり、牧場で静養中などの場合ファンが見学に来たりするのでファンサービスを行う場合もある。

競馬業界内ではいえアイドルとしてもはやされてレースとは別の人気を博す競走馬もいないわけではない。

シマカゼタービンの場合、所属である瀬名酒造の看板馬であり酒の仕込みを行う面がそうなのだ。

「Je n'arrive pas à croire qu'un cheval qui court si fou soit un cheval brasseur de sak.」（信じられない、あんな狂った走りをする馬が酒造り用の輓馬だなんて…）」  
思わず母国語が飛び出してしまふ。あの馬がもしフランスにいたら…と、つい考えてしまふ。

瀬名酒造は一体どんな仕事をあの馬にさせているというのだ。

ただの調教だけであんな力強い走りができるわけがない、普段の仕事から自分たちとは何か違っているはずだ。

（これが日本か、どこからともなく化け物がポンポンと。それも専門の厩舎ですらない場所から当然のように！）

これは模擬レースであって成績には一切響かない、そのことが救いだ。だが同時に、ルベルの胸に心残りができた。

シマカゼタービンは自分たちと同じレースに出ることはまずない、彼がいないレースで自分たちはこれからも走る。

あいつがいないから勝てたんだ、そんな風に思ってしまうのは無理からぬことだった。

なぜなら彼の走りは大逃げだ、テクニクや駆け引きではなく純粹な速さとスタミナだけで勝たれたようなものだから。

今まで自分が走ってきたレースにそのまま当てはめても違和感なく、彼が前を千切っていくのが容易に想像できてしまったから。

「悔しいかい？」

「ええ」

「なら何度でも挑戦すればいい、一度でダメなら二度、二度でダメなら三度、何回でもね」

きつと茂三さんなら大笑いで承諾してくれるし、シマカゼタービンは乗り気で相手をしてくれるだろう。

そうだ、これは練習なのだ、何度だって挑めばいい、相棒と一緒に乗り越えられるまで挑んでいい勝負なのだ。

だがそれは敗北を積み重ねる行為にもなりえる、今の自分にシマカゼタービンに勝つビジョンが浮かばない。

「そうさせてもらいます、負けたまま帰るのは喉に骨が刺さったみたいで気持ち悪い」

なにより、相棒に地方の輓馬に負けたなんて噂を立てさせるわけにはいかない。せめて一勝、勝ちをとらなければ取材に来てくれた稲波達に申し訳が立たない。

ハーツクライは快調だ。予定しているドバイミーティングにて、別レースを走るツバキプリンセス以上の成果を必ず出してみせると大声で言える實力を見せねばならない。

だからその前にシマカゼタービンには必ず勝つ、そう気持ちを引き締めるしかなかった。



## 第20話

鼻腔をわずかに酒の匂いが混じった甘く優しい香りがくすぐる、眼下にはじつくりコトコト人肌に温められた真つ白な液体。

言わずもがな、甘酒だ。年明けの風物詩と言ったらやっぱこれだろ、うちじや結構な頻度で出されるし、群馬トレセンにもちよくちよく出してるけど年明けはやっぱ格別なんだわ。

前世も正月はこれを一杯は飲まなきゃ正月って気分はしなかったもんだ。正月賑わいの寺や神社の出店で飲む甘酒って格別なのよ。

今生になつたらそんなことできなくなるかと思ったが、なんと運のいいことに生産者側に回ってしまったわけで、今年もいい甘酒を仕込んでおりますわ。

模擬レースの後、シャワーで泥を落としてからトレセン職員に引かれて向かったのは、群馬トレーニングセンターの施設内にいくつかある芝の休憩スペース。

厩務員や騎手が担当馬との絆を育んだり同僚と遊んだり遊ばれたりするいわば遊び場、担当のほか常に係の人がいるから牡牝一緒に使ってるのは普通だ。

そこでいつものようにミニサイズの仮設テントを立ててテーブルを置いて、その上に業務用のカセットコンロを置いた敏則がでかい大鍋を弱火でじっくり温めながら中身をかき回してる隣でじつと補佐をしております。

なんでって？ 周りでお行儀よく待ってる群馬の競走馬たちのお目付け役よ、みんな担当厩務員の人と一緒におやつボウルを啜えて待ってるけど中にはまだ慣れてないやつもいるからな。

「…こんなもんかな？ ほれ」

味見をした敏則が差し出してきた小皿の端を啜えて少し傾けて吸い取り、口を窄めてしつかり味わう。

「ヒヒン」『うまい』

バッチグーだぜ、熱すぎず温すぎずでいい感じ。首を縦に振って

ニツコリ笑う。これならあいつらも喜ぶだろう…遅いな、シャワー長くね？

「ほらおいで」

「みんなゆっくりな」

まあ配つてるうちにくるだろ、みんなの分はちゃんとあるんだし。

休憩スペースにいた馬たちを厩務員の人が手綱を…というか厩務員の人を引き摺る勢いで鍋の前に列を作る。うむ、ちゃんと理解してるな。

前は大変だったぜ、みんな一齐に来るから苦労したよ…あ、二頭無視ってくる。さては新入りじゃな？

「このわあああ…」

おい担当、そんなやる気のない悲鳴上げてわざと引きずられてんじゃねえよ。目が笑ってんだよ、怪我しないように引き摺られてんの丸わかりだぞおい、仕方ねえなあ…

「ヒーン！」『並べや！』

「ヒヒーン！」『知るかボケエ！』

「ヒヒツ!!」『何ター？やっちゃう？やっちゃう？』

テントの前に出て進路を塞いでから一喝するも聞かず…そんなこととして良いのかな？ちらりと並んでるみんなのほうを見る、これで大体わかってくれるぜ。

ほら、気付けばじつと二頭を見つめるお歴々の目、目、目、目、列にならんだぎつと十頭と十人が全員お前ら見つめてるわけよ。

無表情、無感情、ただただモノを見る目、出荷される養豚場の豚を見る目のほうがまだ温かみがあるってもんだぜえ!!

ほら見ろ、さつきまで我儘やってた二頭が気づいて真っ青になってブルってやがる。わかる、わざとやってるのは知ってるけど俺も怖いもん。

『おら、並べよ新米』

『ハイ…』

すっかりわからされた2頭が大人しくなって、わざと引きずられた厩務員にやさしく怒られながら列の最後尾に連れていかれる。

それをみんなは最後まで無感情なままお見送り…というか厩務員の方々までやらんでいいわ、そこまでやらんでもいいわ。

そう視線を送るがなぜか否定のアイコンタクト、マジかよ。結局しつかり並ぶまで視線が切られることはなかった、これが教育か。

可愛そうに、しばらく悪夢を見るだろうな。自業自得とはいえ。

『なかなかないボスマつぷりじゃないか』

『爺さん、見てたなら手伝ってくれよ』

『悪いな、僕はこいつらの世話で手いっぱいであ』

休憩スペースの片隅から出てきたモンズニー爺さんが後ろに引き連れた二頭の仔馬のほうを見る。

『見ない子たちだな、新入りか？』

『ああ、今年から群馬競馬で世話をする事になったそうだ』

なるほど、新世代ってやつね。また増やしたんか…まあうちもシャツタードスカイとメジロジョンソンが来たからと同じようなもんか。

『ハルナイナリつす！よろしくつす!!』

『ポケットクリーク、よろしく』

おーおー元気な仔馬だこと、両方牡か…ってさらに後ろにもう一頭、いや二頭…片方でかくね？

普通に大人だろコイツ。なんで小さい奴と一緒にいるんだ？

『なんかいい匂い！何何？』

『えっと、君は？』

『私？ハルウララ！』

…おい待て、なんでお前がここにいんねん。俺でも知ってる有名馬じゃアないかい！高知だろ!!

『へえ…爺さん、ちよいと』

『気付くか。みんな、ちよっと待っててな？』

『『はーい』』』

敏則にアイコンタクトしつつモンズニー爺さんを連れて少し離れる。

『おい爺さん、あいつ新入りじゃないだろ。どう見てもどっかで走っ

てた雰囲気あるが?』

『聞いた話じゃ高知の有名馬らしい』

そうね、俺も名前だけは前世で聞いたわ。高知のハルウララ、生涯全戦全敗だけど頑張って走る姿でアイドルになったやつ。

でもなんでそんな高知のアイドルがこんなところにいんだよ、ニュースにもなるくらいだったんだから高知競馬でVIP扱いされてるだろ普通。

『有名ならなんで群馬なんぞに?』

『有名だからだよ、昔っからいるんだよ人間には。お前も働いてんだから見たことあるだろ?』

『…なる、いつぞやに親父にブチ切られた自称大手通販商社の糞野郎みたいな感じ?』

『そんな感じだな』

爺さん曰く、有名になったハルウララの権利を買い取って荒稼ぎしようとした馬主初心者のボンボン野郎がめっちゃくちゃやって高知から栃木に移送、そのまましっちゃかめっちゃかにしやがってるのを新年早々に仔馬探しに出た桜葉理事長が発見したらしい。

関係者から話を聞いた理事長がプツツン、高知競馬に連絡したらガチ泣き寝入り寸前状態でさらにヒートアップ、親父さんにも協力してもらうために話が行って当然プツツン。

高知競馬、群馬競馬、瀬名酒造のトップが弁護士を連れてボンボン野郎を強襲、ガチで実弾（札束トランク×3）を叩きつけて買い取ってきたそうなの。

金の話ならうちの独壇場だわな、高知も稼いでただろうが群馬競馬も去年荒稼ぎしたし、競馬ブームでうちの酒も飛ぶように売れてて珍しく少し増産体制に入ってるくらいだし。

群馬競馬の客入りも去年から半端じゃないって話だから売上が凄いい、俺らの年収も右肩上がりってわけよ。

もちろん限度はあるが、金ってやつは使うときは使ってこそだ。金を使い方で最高のトラブル解決アイテムに早変わりだからな。

『親父さん、こりゃ完全にキレてたな』

『ああ、あんなふうになったのはお前の生まれ故郷が潰れたとき以来だよ』

『そういわれてもあそこにはなんも思い入れないけどね。まあそれは置いといてだ。』

俺、そんな大金が動いた話一切聞いたことない。下手やったならお袋さんがブチ切れて俺を召還するはずだからな、お袋さんもグルで即決即断即行動で終わらせてきたんだろ。

バレてないわけなのに会社でも話題になってない辺り、会社ぐるみで全部承諾済みだわ。みんな馬大好きだし。終わったことだからみんな流してやがるな。

で、なんで爺さんが知ってるかっていえば輸送の時の帯同馬について行つたからだそう…爺さん、口にできんくらい怒ってる親父さんにビビってたらしい。

『しばらく群馬で預かってここで復帰戦、その後高知だそうだ。お前、こいつを鍛えてやれ』

『ええ？爺さんじゃねえの？』

『チビ共で手いっぱいだよ。エースやスズカ達のガキ、リンドホーユーの孫もいるんだぞ』

『ポルンガ先輩は？』

瀬名酒造で先輩のトミシノポルンガ、ポルンガ先輩もこつちじや教導役よくやる馬だ。今日は来てないけど。

『あいつは息子で手いっぱい、酒造りまで仕込んでやがる』

『そーいやポルンガ先輩の息子さんも見つかつたんだっけ』

『でつかくなつて感無量って感じだったな』

『そういうことなら任せんしゃい。面白い練習なら俺のほうがネタあるし。』

『悪い悪い、戻つたぞ。ハルウララだっけ、これからよろしくな』

『よろしく！で、あれ何？』

『群馬競馬の名物だよ。あの列に並んで順番が来れば貰えるぞ』

『解つた！』

『よろしい…で、じつと見てる君は誰かな？』

元気にブンブン尻尾を振りながら甘酒の列に行ったハルウララの後ろからじつと俺を見つめる茸毛の仔馬。

なんだろう、こいつだけ他の奴となんか違うな。

『…ディープリンパクトに勝ってた、すごい』

『見たなの？そりやどうも、お名前は？』

『ブニーキャップ、父さんはオグリキャップ。笠松の鷲峰から来た』

ブニーキャップね、可愛いけど見たところ牡だな、年の割に立派なのあるわ。でも体がちよつと小さめで細かいか…うん、それしかわからん！

『笠松っていうとツバキが前に走ってたところか。小さいのに大変だな、家族は？』

『兄さんがいる、会えないのは寂しいけど…テキに会えたからいい』  
ん？なんで俺をじつと見るのかね？

『あなたの事をお爺さんに聞いた、一緒に走ってた牝の先輩に走り方を教えてるんでしょ？教えて』

『気に入られたみたいだな？』

『毎日来るわけじゃないんだがねえ…ま、暇があつたらな』

『よろしく、テキ』

『シマカゼでいいよ、テキは別にいるでしょ』

とうかテキって何だっけ？いかん、忘れてるわ。うちだとそういう呼び方しねえもん。

『人間は私たちに仕事を教えてくれる人で一番すごい人間をテキって呼ぶ。私はあなたから学びたい、私のテキはあなた』

『ほーん…ま、いいか。好きに呼びな』

『うん。ところでテキ、おなかすいた』

『甘酒、貰いに行きなさい』

列が大分捌けたテントの前を顎でしゃくつて示す。みんなお気に入りの場所で飲みたがるから、一部の馬は厩務員の人と一緒に馬房に戻っちまったらしい。

『解った』

『じゃ、俺らも行くか』

ブニーキャップの後を追うようにモンズニー爺さんたちも仔馬たちを連れ立って敏則のほうに。ま、モンズニー爺さんがいるんだから問題ねーだろ。

『なんだこれ、良い香りだな』

『嗅いだことのない…いや、どこかで?』

お、やつと来たか。担当の厩務員に連れられてのそのそと休憩スペースに入ってきたのはハーツクライとディープリンパクト。

どこかで嗅いだことあるって、そりゃ酒の匂いは甘酒だからするわ。アルコール成分1%未満とは言え、酒粕使ってるし。

『…シマカゼ、さつきはすまなかつたな』

『なんのこっちゃ?』

『君を侮っていた。君の言う通り、舐めてかかってしまった』

『別に普通でしようや、それが』

『いや、違う。活躍の場が違うと私と君は同じサラブレッドだ。私はホクリクダイオーに負けて、実力のある馬は確かにいると知っていたはずなのに言い訳をしていたんだよ。』

君はダートの短距離、重賞もとっていない、だから負けるはずがない。馬鹿な話だ、君は彼女たちと共に走ってきた馬だというのに』  
別に気にせんでもいいんだがね、そう舐められんのは慣れてんだ。

『あんたの心配はもつともなことだ、気にしてねえよ』

『そうか…ところで少し聞きたいんだが、君はどうして振り向かず後ろの様子が分かったんだい?』

おや、足使いとか聞いてくるかと思っただけそんなことを?

『逃げる馬はどれだけ経験があっても必ず振り向きたがる癖があるものだ。君にはそれがなかった。』

まるで見なくても分かるみたいな感じだったな、なぜだ?上に乗っていた人間の鳴き声がわかるのか?』

そりゃ言葉も文字も理解しとりますがな、だがまあそういうこと聞きたいんじゃないだろうな。

『言葉は分かるが、一番は音だよ。相手の足音とか息遣いとかをよく聞くんだ、それで大体のことは分かる』

足音、息遣い、振動、踏み込み、その他もろもろの雑音、走ってりや抑えようがない部分だ。

それを聞き分けて当てはめれば、後ろの位置関係、距離感、各馬の速力と状況、仕掛け具合などいろいろいとわかる。

せつかく人間よりも感度がいい馬の耳なんだ、活用しなきや損つてやつだ。

例えるなら対潜水艦用音響ソナーみたいな感じかな、まあこの程度じゃ海自の本業の方々に笑われそうだけど。

親父さんか敏則のナビゲートが一番なんだが、峠じゃそうもいかんからな。

ダウンヒルじゃ振り向くなんてありやしない、バックミラーなんて便利なもんもないからやつてるうちにいろいろ聞き分けできるようになったのさ。

『驚いたな、よくそんなことができるものだ』

『やろうと思えば案外できるもんだぜ。まずは——あ、どうも』

俺たちが一緒になつて遊んでると思つたのか、デイープの厩務員さんが気を利かせて俺たちの分の甘酒を持ってきてくれた。

大きめのおやつポウルに注がれた甘酒にデイープとハーツクライの視線が興味津々に注がれる。

馬からすれば舐める程度の量だけどこれくらいが一番いい、飲み過ぎはいかんからな。あくまでおやつだし。

『これが甘酒？ミルクじゃないのか？』

『乳成分ゼロだよ、元は米だ』

『米!?!あの粒粒がこうなるのか!?!』

『おうよ、俺が仕込んだ』

驚くデイープに、俺はふんすと鼻を鳴らす。うちの甘酒は自家製の酒粕と米麴を使ったスペシャルブレンド、大人にも子供にも大人気の一品よ。

酒米で作った麴と同じ酒米からできてる酒粕を混ぜて、焦げ付かないようにとろみがつくまでじっくり煮込むのさ。

酒粕主体で酒の風味が強い辛口と米麴主体で酒粕は風味付けの口



当たりがいい甘口って感じで売り出してる。

敏則が大鍋で温めてくれてるのは甘口、米粒が残ってて粒粒感がい  
い感じだぜ。

『大変だったぜ、酒粕と米麴はうまくできるんだが配合割合と馴染ま  
せる漬け置き、仕上げの時間とかいろいろな』

ただ酒粕が強いだけじゃダメ、ただ甘いだけじゃダメ、どっちも同  
じように馬練りの味がするウマイ甘酒にするのは骨が折れたぜ。

酒粕と米麴も時期によって出来が変わるから、暮れなんてずっと試  
作と試飲の連続よ。合わせて煮て詰めて背負って走って試飲して、い  
やあ悩んだ悩んだ。

杜氏さんたちと一緒に試作品の没の山を作っては頭をひねりま  
くってやつと満足できるのができたのさ。

甘酒のアルコール成分は飛んではいへ、酒粕の匂いプンプンさ  
せてるから酔っ払い扱いされたっけな。

『あの粒粒がこんな風に…確かに粒粒が残ってるな。腐ってないか  
？』

『あ、バカそれは——』

『腐ってない、発酵させてるんだ』

ハーツクライをまつすぐ見つめて唇を結ぶ。よく考えろハーツク  
ライ、俺はいま冷静さを欠こうとしているぞ。

腐敗と発酵を同列化するのとはたとえ馬でもやっではいけない、特に  
生産者の前ではな。

この甘酒は俺たちが試行錯誤して仕込んだ今年の一級品だ、配合か  
ら出来上がりに至るまで夢の中でも試作と試飲を続けてたんだ。

それを腐っているだと？おまえを馬刺しにして甘酒のおつまみと  
して食ってやろうか？

『そんな目で睨まないでくれ、悪かったよ』

『よろしい。ま、飲んでみればわかるって。こいつの酒精は飛んでる  
から気にすんな』

『う、うむ…：ディープリンパクト、シマカゼって…』

『酒と車のことになるとな』

聞こえてるぞディープ君、ニツコリ笑ってやるとディープはそつぽを見てぺろぺろとボールに注がれた甘酒に舌を伸ばす。

それにつられてそつぽ向きながらハーツクライも甘酒に舌を伸ばす。別に本気で怒ってるわけじゃねえよ、でも腐ってるって言われちゃうと反応しちゃうからね。

あとよく舌で飲めるよな、俺それできないんだよ。ブチたちも完全に匙投げてきたし。

『敏則、ストロープリーズ』

「わーってるよ、ちよつと待つてな」

口を窄めて吸うジュエスチャーをすると、敏則が俺のボウルにタピオカジュース用の太いストローをさらに一回り太くしたようなのを差してくれる、そうそうこれこれ。

『甘い：初めて感じる甘い味だ、砂糖？いや、それだけじゃない』

『なんだろうな、優しい甘みだ。でもこの感じ：そうか、たまに競馬場で嗅ぐ匂いだ』

こいつの味は酒粕と米麴から出るうまみだ、この味を最大限に引き出すために何度も配合と仕込み、熟成させて走りこんだことか。

そのままでも十分うまいが、やはり最後の仕上げにお好みで砂糖を少しとわずかに塩を投入して味を調えることも重要！基本中の基本だがそれが甘酒の黄金比よ。

もちろん牛乳で割る、フルーツを混ぜるなんてのもありだ。でも最初は必ずこの黄金比で飲んでもらいたい！店売りの箱にもちゃんと宣伝してあるからな。

『そういえばそんな感じがするが：違くないか？あれ嫌なきつさあるし』

『あれはきつい香りがするが、おそらく同じだ。出来が違うんだろう』  
出来が違うんだよ、大量生産大量販売の安酒とはな。うちは丹精込めた手作り酒造、技術は進化させても基本は大昔から変わらん。

甘酒だって全部最高の出来になるように努力してる、材料もうちの酒造で扱う純正品、作りから違うわ。

手作業が一番なら手作業、機械を入れて味がよくなればそこは機械

で、手順ごとに一番いいやり方を常に模索してるんだ。

清潔さと精密さが必要な手順なんかは人の手よりも機械のほうが格段に良かったりするし、かといって機械にやできんところは腐るほどある。

ベテランの杜氏だけが持つてる匙加減、舌の正確さ、時期によつて手順や仕込みを変えるスキルなんかは人間にだつて覚えにくいんだぜ？

だから機械を使つても頼ることはあつても機械だけに任せるなんてことは絶対にしてない。互いに補い合つてこそ至高、それが瀬名酒造のやり方だ。

俺たち輓馬が今なお現役で仕込んでるのもそれが理由よ、馬練りは馬でなきゃ仕込めねえのさ。

『確かにこれは気持ちのいい感じがする香りだ。こういうのなら気分も悪くならないんだけどな』

『えッ：ハーツククライって酒ダメなのか？早く言つてくれ、別の用意してもらつてくる』

『いや、そういうわけじゃない。ただあのきつい匂いが好きじゃなかったただけだ、体が受け付けないとかじゃないよ』

『そうか、そりゃよかった』

危ない所だった、甘酒とはいえ酒が匂いだけでダメな奴はいるもんだしアレルギーとかあつたらやばかった。

食品を扱う会社に勤めてるとそういうところは敏感になるんだよ、ミスしたら取り返しかねえから。つと、どたどた向こうから足音が

：

『甘々！甘々の香り!!』

『甘々ですか！』

『甘々やあ!!』

甘酒な。何度も教えてるのにこいつらの中じゃずっとこれだぜ。こらこら、厩務員さんほっぼつて来るんじゃないよ全く。

『ほらほら慌てなさんな、量はあるから並べ並べ』

自分の取り分け用のボウルを軽く小突くと、ダイオー達も敏則から

ポウルを貰って行儀よく受け取る。

それを器用に啜えて俺たちの近くまで寄ってくると、目の色を輝かせながらがぶがぶ口に含んで嘶いた。

『オイシー!!』

『品質の向上を検知、去年よりさらにおいしくなっています』

『これこれ！有馬じゃ変なのしか飲めなかったのよ!』

なんだ、ツバキの奴向こうで別の甘酒飲んだのか。そりやどこでも売ってるようなのとは比べものにならないわな。

年末年始はよく売れるから大目に仕込むが基本的に地元の酒屋と契約先にだけ卸してるから、群馬の観光案内所と高崎競馬場以外だと芦名市内にしか売り出さん。

県外じゃうちの甘酒はまず見ないだろうよ、酒の方は少し出回ってるだろうがよ。

『味わって飲んでくれよ、たっぷりあるけど。そういや次は海外だったか、ツバキ』

『そうよ、ドバイっていうところのダートレース。甘々美味あ…』

確か招待されたんだよな、ドバイの運営から。ドバイのGⅡに申請してたらGⅠにお呼びがかかったって、桜葉理事長がうちにきて自慢してたぞ。

有馬記念で実力を示した地方競走馬、しかもダート主戦って所が認められたらしいね。かなり異例らしいけど。

ドバイって芝しかないもんだと思ってたが砂もあるって初耳だったが：よく考えりやそりやあるわな。

中央じゃ芝ばっかだがダートやってるし、地方はほぼダートだけど芝もあるっちゃある。

去年の東海ダービーでダイオーとツバキ相手に競り勝って一着だからな、なかなかいい線行けるんじゃないか？

向こうに行ったらの甘酒の差し入れ送ってやるか、ドーピング検査通すのってどうやるんだっけ？

『まさか私が世界なんてびっくりよ。ねえタービン？ドバイのGⅠダートってどんなレースするのかしら?』

『俺に聞くなよ。ディープ?』

『俺も知らないぞ。ハーツクライ?』

『さすがにドバイは知らないな…』

そりやそうか、ディープもハーツクライも芝が主なレースだからな。知ってるわけないわ。

うちの連中も地方はダートで中央は芝の走り分けに現状なってるから実は中央ダートは知らんというし。

『なら備えるしかないわね。次はダート2000、そのあと3200、頼むわね。あ、あと山道もよー!』

『へいへい』

どうせお前らが次に走るレースの模擬戦、全部を走るんだから言われんでもわかってるって。

新コースだって明日みんなで回る手はずになってるからそんな時に相手してやるよ。

『いいな、GⅠ。僕も走りたいよー』

『まずはGⅡで様子見てからのはずでしたよね?』

『そのはずだったんだけどね、いや有馬で頑張った結果ってヤツ?』

『ちつくしよう、有馬出たかった!』』

スケジュールの関係だからしょうがない、高崎の方に出てすごい盛り上がったただろうが。

いつもの連中と思いつきり競り合ってくそ楽しそうにしてたくせによく言うよ。ひやひやした場面何回あったことやら…

ダイオーは大阪杯で様子見して海外、ノルンは日経賞でうまくいけば天皇の春を狙ってから海外だったか。

『ま、頑張ってこいや。でもちゃんと帰って来いよ?生きてりやどうにでもなる』

これは前にも教えたよな?ツバキ。お気に入りゲームのひねりだし、大したことじゃないが大切なことだ。

『三つだ。死ぬな、やばそうになったら一度抑えろ、そんで周り見ろ、もし隙があったらかまわずぶつちぎれ』

『解ってるわよ、お土産に期待してなさい。有馬の代わりにドバイの

トロフィーを持ってくるわ』

『どうか、それじゃ4つじゃないか?』

それも含めてネタなのだよ、ハーツクライ。気分和らぐし自然と印象に残るでしょ?

ちなみに模擬レースは全部逃げて千切ってやりました、勝ちたきやまたおいでつてな。

## 第21話

日常というものはかけがえのないものである、今日の天気は晴れだとラジオの天気予報が言っていた絶好の洗濯日和の空を、我が家の物置馬房の和式ボットン便所にお座りして用を足しながら、窓から見上げながらなんと無しにそう思った。

何でかって？デュープ達の調教に付き合っ走りまくったせいで昨日は全身筋肉痛で馬房から動けなかつたんだよ！

一週間やぞ一週間！ハーックライの野郎の滞在期間ぶっ続けた。休みは入れているとはいえ、まさかトレセンに酒の仕事をもち込む日が来るとは思わなかったわ。

おかげで昨日は飯食うのも辛い、部屋の掃除できねえ、当然峠なんでもつてのほか…ストレス溜まりまくりだぜ。畜生、俺が何したってんだ。

「ブルルツ…ファイ」

ま、そんな愚痴は置いといて、今日は仕事があるからちやつちやつとシートと毛布を干すのだけでもやってしまおう。

馬房裏に位置する便所ですっきりして、尻尾を丸めたまま隣のシャワールームに。

水道が使えるから困っただけの手作りシャワールームの水道にくっついたままのシャワーヘッドがちょうど尻の部分の高さにあるのを確認してから、掛け金に蛇口を開ける。

「ヴァア…」

冷たい水が気持ちいい、足元も濡れるけどそこはしょうがない。綺麗になるまで流して、足元も流して…便所に戻って常備してるポイ捨てできる再生紙を尻尾で何枚か絡め捕って尻を拭く。

こうやって尻尾でいろいろ掴むのも今や慣れたものだ、元人間故にする事したらキレイにしたいんだもの。

踵を返して物置馬房に戻る。元々は入るはずの馬房が使えなくなつて急遽あてがわれた古い物置の改造、玄関部分から入れば土間と一段上がった板の間。

寝床は土間にあつて干し草の上にシーツをかぶせたヤツと毛布が一枚、最初は干し草だけだったけどちくちくして落ち着かんの教えたらこうしてくれた。

思えばこの物置馬房とも付き合いが長い、そもそも本当は新しく作った馬房に入るまでの間に合わせのはずだったのにいつの間にか俺の定位置になつてた。

板の間には古いちやぶ台と小さな棚、ちやぶ台には古い年代物のラジオが一つ。敏則のおさがりの電池式だけどまだまだ現役。

拾つたり貰つたりした小物や道具が置かれた棚、雅孝さんを手伝つたときに群馬県警から貰つた賞状の入つた額縁。

たぶん冷蔵庫がある馬房に住んでる馬なんて俺だけじゃないかね。

『コマツ、シーツを干すからどいてくれ』

『えー？しゃーねーな』

俺の寝床でまだ暢気に寝息を立てていたコマツにどいてもらつてからシーツの端をトングで啞えて持ち上げて、物置馬房の前に立つたままの古い物干しにつっかけた物干し竿に引っかけける。

引っかけたら馬房にもう一度首を突っ込んで、玄関横が定位置の布団干しセットが入つた籠を引っ張り出して、その中の洗濯ばさみを一個トングでつまみ出してから中心点に挟む。

本当は人間みたいにしつかり止めたいけども、そこまで行くと馬の身にはメンドクサイしどうせシーツと毛布しか干さないからこれでもいいのだ。

最後に尻尾で布団たたきを掴んで、一通りバンバンぶつ叩いて埃とかその他もろもろを叩き落としたら終わり、これだけでも結構綺麗になる。

毎日交換から三日に一度でいいくらいには長持ちになるから世話係の負担も軽くできて言うことなしだぜ。

あとは掃き掃除をしたいところなんだが…もう飯の時間か、仕事終わったらにしよう。

馬房の柵を閉めて門を閉めたら朝飯を食いに、放牧地の向こうにある第二馬房のほうに行く。



前は俺の馬房まで飯を持ってきてくれたけど、今年からこっちの馬房にも新入りの馬が入ったから飯はこっちに食いに来るように言われてるからな。

『おはよー、きつきバンバン音したけど何やってたの?』

『シーツ干してたの』

『ふーん、干し草のほうが気持ちいいのに』

立派な第二馬房前の餌場に行くと、もう今日のエサやりが始まって担当の社員さんがせっせと軽トラに積んだ各種エサを馬房前で待つ動物たちの餌桶やカップに配膳していた。

新入りの馬にいつものメンバー、ブチに配下の会社猫数匹、混ざってる会社狸の夫婦。

仕事の都合で引越したご近所さんから引き取ったウサギにミニじゃなくなったミニブタ。

みんなうちで飼育してるから首輪と名札付けてるから余計にカオス、まるで動物園だ。

ここ馬房のはずなんだけどね、入ってるのは馬だけじゃないっていうか、俺らのテリトリーだったせいでほぼ会社で飼育してる動物の雑居房と化してるのよね。

『バウバウ!!』『こら、静かに食べる!』

そしてドッグフード喰いながらじゃれつく子犬と子狸に注意するでっかい黒い犬、ドーベルマン先生。瀬名家の飼い犬で会社の警備犬のリーダーを務める雌のドーベルマン。

なんで先生なのかっていえば、モンスニー爺さんがレースの先生なら、年長者というかまとめ役としての先生がドーベルマン先生だから。

先生が仲立ちしてくれたからみんな今は仲良くやっていけるのよ。

「ふふふ、やっぱり動物はみんな可愛いですね」

で、かかりつけ獣医さんのドクターがなぜかいるのもいつものことね。相変わらず青っぽいラインが入ったフード付きジャンパーを着て、変な黒いフルフェイスヘルメット被ってる。

言動が不穏だし実際ちよつと変わり者だから胡散臭いんだけど：普通に良い人だから恰好で損してる人なんだよな、このドクター。しょうがないんだけどね、獣医さんなのに動物の毛がダメな呼吸器官系アレルギー持ちでその対策用マスクだから。

そのまんまだと毛とか吸っただけで喘息の発作を起こして死にかけるらしい、でも常時ガスマスクとか物騒だからおしやれなのにしたそう。

『おっはー…なにやってんぎやー!』

『コマツ!?!』

暢気に飯食いに来たコマツがターゲットに：ありやりや、べろべろされてドロンドロン。

『あらあら、コマツったら相変わらず気に入られてるのね』

何食わぬ顔で俺の頭の上に留まるカラスのレッド。

『朝から頭はやめーや』

『いいじゃない』

良くねーわ、飯食いづらいんだよ。

『素晴らしい、実に素晴らしい…!』

『あ、まだここにいたんですかドクター!もう遅刻しちやいますよ!!』  
『おや?もうこんな時間ですか、これは申し訳ありません』

『今日もみんな待つてるんです、休んじやダメですよ』

『これも愛、愛ですよ』

ドクターが助手の女の子に引きずられていく、いつもの光景だな。

あー癒されるんじやア…

『何を黄昏ている?』

『ここも大所帯になったなーと』

やつと日常に戻ってきた感ありますねえ。おかしいな、俺は輓馬なだけで最近やけに競走馬と走らされてる気がするぞ。

しかも走れば走るほどハーツクライとかルベルさんとかの視線がすごい事になってくるし、目が怖いんだよハーツクライ陣営。

酒を担いで走っただけで悲鳴上げてたんだぜ?たかが3200を全力疾走して仕込んでただけなのに。

『社長にも困ったものだ、おかげでまた手間が増える』

『親父さんだからな』

『お前もだぞ、向こうで一頭引っかけてきたそうだな？近々、預かりの馬が増えると社長が言っていたぞ』

『何それ知らん、どこソース？』

『社長が桜葉理事長と電話で話していた』

マジか？マジかー？心当たりねえぞ、ほんと。

『んー？何々？』

飼い葉が入った桶から顔を上げて不思議そうに声をかけてくるさっきの仔馬。やっと入ったピカピカ第2馬房の新入り一頭目。

栗毛の可愛い雌の仔馬ちゃん、まだ1歳のシャッタードスカイ。まだまだ可愛い盛りの子供だが、なんでか知らんがマイペースなお昼寝好き。

走るよりもブチたちとゴロゴロしてるほうが性に合ってるって感じだ、実際結構な頻度でブチの群れに混じってる。

だけど走り屋の素質は十分だ、親父さんのハチロクに乗ってた時も面白がってたしな。

『兄さん、仲間増えるの？』

『スカイ、その話は俺も今聞いたわ』

『そっか、騒がしくない子がいいなー』

『誰が騒がしいだって？』

『げえ…出たな軍曹』

俺の隣に並んで朝飯の飼い葉を食い始めた新入りの二頭目、黒鹿毛の逞しい牡の2歳、メジロジョンソン。瀬名酒造厩舎所属の地方競走馬第二号予定。

体毛の上からでもわかるくらい全身に裂傷や火傷の傷跡や手術の痕跡がある上に、鼻先にもナイフで切られたみたいなきずがあるのが特徴。

全体的にムキムキでまるで歴戦の軍人がそのまんま馬になったみてえなヤツ、前世で地底人とか宇宙人と戦争してそう。

そんな歴戦の強面が受けてついたあだ名が軍曹ってわけ、性格もそ

れっほいしな。

モンズニー爺さんの生まれ故郷と同じ牧場生まれで将来は障害競走？とかいうのをやるはずだったらしいけど、本格調教直前に事故に巻き込まれて重傷を負い、病院で一年丸々棒に振って全部おじやんになっちまったそうさ。

事故で亡くなった厩務員の遺族からの懇願もあつていろいろ牧場が扱いに困つてたところで、新入馬探して手ごろなのがないか打診してた親父さんに白羽の矢が立った。

色々訳ありで匂も逃した馬を、障害でも平地でもいいからできれば走らせてほしいとかいうリクエスト付きで買うモノ好きなんかそうそうおらんわな。

で、それに『名前そのまんまでもいい？』とかとぼけた許可を取つて格安で引き取るのも親父さんよ。登録したら名前変えられないつて爺さんが言つてた気がするが？

『おはよう兄貴、昨日は大変だったな。もう平気なのか？』

『おはようジョンソン、問題ねーよ。こつちこそ悪かったな、お前の練習に付き合えなくてよ』

『しようがねえよ、兄貴の体のほうが大事だ。俺も親父みたいにぼつちり走つてくるから心配すんなつて』

『お前もうちの輓馬なんだけどねえ…』

『俺も走りてえんだよ、親父みてえによ』

こいつの親父、メジロパーマーとかいう馬もたいそう強かつたとかで瀬名酒造から群馬競馬に出す競走馬第二号に抜擢されたつてわけだ。

別に競馬を走るなどは言わんが、俺としては酒造りのほうに比重を置いてもらいたい。次世代は長々と育てないと後が困る。

近場の峠ならいつでも走つていいから、欲求はそこで発散させてもらいたいもんだ。

『ならこの前に教えた混ぜない走り方、できるようになったのか？できるならテストに移るように指示するぞ』

美味しい馬練りを作るには相応の技術が必要だ、そのためにはやはり

練習が肝心。ジョンソンにも仕込み方つてのを教え始めてるところだ。

今は炭酸水を入れた一升瓶で練習中、まずは炭酸水を背負って振りすぎないように走ること、衝撃を制御する練習をさせてるところだ。仕込みと同じ距離を走って、栓を抜いたときある程度炭酸が残ってりや上出来だ。

普段の練習でうまくできれば、頃合いを見て一升瓶の中身を炭酸水からサイダーに中身を変えてテストを実施する。

これが馬にはよく効くんだ、できるようになればシユワシユワで美味しいサイダーをご褒美に飲めるが、失敗したら開栓で盛大に嘔き出して少なくなる上に炭酸が抜けたゲロアマの元サイダーを飲まされる羽目になる。

普通の馬ならそれでも喜ぶつていうがうちは違う、最初に普通の美味いほうを舐めさせて味を覚えちゃうからな。

上手くやらなきゃこうなる、つて身をもって分からされるわけさ。テストの時は、当日の昼飯一品が自分の技術で良し悪し決まるから必死だよ。

俺も最初は苦労したぜ、何度ゲロアマ炭酸抜きサイダーを飲まされたことか。中身人間だと余計辛いぜ。

『勘弁してくれよ、そんなすぐにはできねえつて』  
『ならまずうちの走りを覚えてからだ。競走馬としてガチにやりたきゃこつちのスキルも磨け、そのほうがお前のためになる』

走行時に体に走る振動をある程度制御できるようになれば走りがいぶ楽になる、自分の走りが体のどこに負担を多くかけるか理解できるとなるからな。

怪我をしたときの対処にも打ってつけ、怪我の部分をカバーした結果過負荷のかかる部位がわかればケアも楽だ。

できるようになれば働くのに困らんし、よほど大怪我しなきゃ酒がダメでも乗りやすい乗馬馬として人気が出るだろうよ。

そういうセーフティネットがあると馬としてもやりやすい、爺さんも苦労したそうだしな。

『解ったよ、頑張るって。それより兄貴、新入りが気になるぜ、どんな奴が来るんだ？』

『軍曹、それは機密事項だ』

『知らんのね』

知らんもん。



どんな日にでも夜は来る、そして夜は居酒屋の稼ぎ時。ポール・ルベルは客の笑い声や喋り声が聞こえる居酒屋の個室の端で、御猪口に注がれた透き通った清酒、馬練りを一口で飲み干す。

熟成期間を置いて濃縮されたアルコールの熱さ、口の中に広がる芳醇で複雑な旨味、間違いなく一級品だ。

瀬名酒造で働くシマカゼタービンが仕込んだ馬練りの味、フランスのワインと比べても決して劣るものではない。

だからこそもったいない、だからこそ悔しい。これは敗北の味である。

(勝てなかった、シマカゼタービンに)

ルベルとハーツクライは滞在期間ギリギリまでシマカゼタービンに勝負を挑んだ、そして負けた、最後まで負けた。

芝で、ダートで、各種距離で、ハーツクライが得意とする距離から不得意とする距離に至るまで全てで負けた。

長距離3200メートルでは影すら踏めず、中距離2000でようやく希望が見え、マイル1600で何とか射程距離に収まり、芝の短距離1200で半馬身差まで詰められた。

一番苦手の短距離スプリント、温存もくそもない開幕からの全力疾走が唯一の勝ち星といえるくらいに惨敗だ。

それでさえ高揚は一瞬で終わり、彼を射程に捉えてから味わうフェイントや煽りといったテクニクに絡め捕られて恐怖に変わってし

まう。

いくら仕掛けても抜けない、どこを走ろうとしても必ずシマカゼタービンが前にいる、まるで自分の考えが読まれているように射程距離から逃げられない。

最終的には自分の判断力すら疑ってしまいグロッキーになって勝負にすらなくなる始末、まったくもってお話にならなかった。

彼の武器は逃げ足とスタミナだけではない、競馬だけではありえない長い年月をかけて熟成された公道の走り屋から得たテクニックが備わっているのだ。

惨敗である、デイーパインパクト、ホクリクダイオー、ツバキプリンセス、ノルンフアング、群馬に集ったGIホースとジョッキークリーダら束になって掛かり、酒造会社の馬主が乗る趣味の競走馬に惨敗した。たった一日で実力を見せつけられ、次の日にはとんでもない回復力に圧倒され、その次の日には本業を持ち込まれて驚愕させられる。

そして鞍上を乗せずに一升瓶を10本担いだシマカゼタービンにさえ自分たちは負けた。簡単に千切られた、ダート3200メートルを悠々と。

さすがはスポーツカーをその足で下した生粋の怪物である。彼の『実戦映像』を見せられた時は、大橋や稲波も含めてしばらく放心したほどだ。

ここまで鮮烈な印象を残されてしまえば調教へ懸ける熱意は半端ではいられない。

自分たちが目指せる上が見せつけられたのだ、実例がそこにいるのだ、目指さない理由がないのだ。

(大逃げはリスクイだが…考えてみれば結構応用が利く。これは海外遠征での作戦に使えるぞ)

馬練りを飲みながらルベルの思考はハーツクライの初の海外遠征のプランに寄っていた。

何もかもを無視して先頭を突っ走る大逃げはリスクイな戦術だが、慣れない遠征地でのレースでは頼れる技だ。

海外レースは日本競馬に慣れた日本競走馬には負担が大きい、輸

送、気候、慣れない馬場にコース、慣らしていても不安は残る。

ならばなんだかんだと試行錯誤するよりもとにかく先頭を突っ走らせてさっさとゴールする大逃げは、シンプルで馬にも騎手にも実に優しい。

競り合いも駆け引きも一切合切無視してさっさとゴールする、それだけを考えて調整するなら余裕もできそうだ。

「大橋さん、ドバイでの戦術、案があるのですがいいですか？」

「あとでな、今はあいつ——」

「没って言われましたああああ！」

向かい側に座る大橋が顎で示す先、ルベルの思考は聞き慣れた稲波記者の滂沱の涙を混ぜた鳴き声に中断される。

個室の向い側の席、少しずれた場所に座る稲波はぶー垂れながらお酒の力に身を任せていた。

稲波記者が丹精込めて執筆した記事の原稿、まだ下書きであり肉付けするための型枠程度のものだがそれが編集部で没にされたのだ。

それも局長から直々に謝罪と模擬レース全部抜きで書き直してほしいとの命令付きである。

向かいに座る大竹と茂三は苦笑い、隣に座る小泉は耳を押さえて隣の大橋に寄りかかる。

「だから言ったでしょう？レース部分は抜いたほうがいいって」

「でもでも！こんなの記事にしないなんてありえないじゃないですかあー！」

稲波がバンバンと叩くのは編集部に提出した記事の草案、シマカゼタービンとのレース含めた調教の様子と参加した馬たちの精細な様子を熱く語った記事だ。

特に模擬レースに至っては恐ろしい熱の入りようで、シマカゼタービンとディープリンパクトたちの熱戦の様子が事細かに描写されている。

「だから没って言われんだよ、そんな記事許されるわけねーだろ」

「茂三さんも茂三さんです！なんでこんなことされて怒らないんですか？」



「別に目立ちたいとか思ってたねえもん、むしろケツ持ちに感謝してるくらいだぜ」

事も無げに微笑を返す茂三、中央競馬会に隠蔽の圧力を掛けられているはずなのに全く堪えていない。

むしろ嬉々としてそれに乗り、ニヤニヤしながらありがたいと自社製品をお礼の品として送っているくらいだ。

強い馬、面白い若手、面白いレース、しかも巨大組織のバックアップ付きで現役競走馬相手を好き勝手に千切り倒して目立たない。

彼や瀬名酒造にとっては笑いが止まらないとはこのことらしい、まったくもって理解できない感性である。

「そもそも中央も中央ですよ、ここまで実力を見せつけられて手を出さないってあり得ません」

「あいつらも後に引けねえんだよ、デイープに思いつきり進退を賭けちゃってる状態だからね。今更今更」

お金がかかるって怖いよねえ、と暢気に焼き鳥を頬張る茂三の姿はどこにでもいるただの親父である。

それを聞いて何とも言えない表情でビールを口に含む大竹と小泉、件のデイープインパクトを扱う身としては身につまされる思いだろう。

デイープインパクトは世界に誇る日本近代競馬の結晶であり解答である、それは比喻ではないし、実力も確かで怖ろしく強い。

中央競馬会のバックアップとタイアップはデイープインパクトの名声を大いに高め、競馬に対する認識とファンの増加に大きく貢献しているのだ。

しかも何の因果か、この時代に中央競馬が意図しない復活劇を持って戻ってきた過去の伝説の血を引く末裔たちが挑みかかってきたのだ。

対抗馬として鎬を削るのは中央だけでなく地方競馬に所属する伝説の末裔たちともなれば、古いファン層をも復活させて収入増加と人氣復権に歯止めがかからない。

皇帝の孫であり帝王の娘、復活の白い稲妻、坂路と努力と根性の第

2世代サイボーグ。それがネームバリューに負けない強さを持つ、これで熱くならない競馬ファンはいなかった。

中央競馬や地方競馬の懇意にする生産企業が販売するファングッズの復刻生産に追われ、日本競馬会を中心にバブル状態がスタートしつつある。

その過程で競馬の歴史と歴代の伝説たちのエピソードに触れることになれば嵌るものは大いに嵌る。

涙あり、笑いあり、競走馬たちの歴史にはなんだかんだとドラマが存在するからだ。

今年の日本競馬会は熱狂に包まれつつある、それもデーブインパクトたちの活躍で大熱狂に成長する可能性が高い。

その中にシマカゼタービンはいるべき馬なのだ、付き合いの浅いルベルでさえもそう考えるほどに彼の影響は大きい。

だが現実として、シマカゼタービンの活躍も実力も中央競馬が圧力をかけて隠蔽している。

本来ならば憤っていいはずの瀬名茂三やシマカゼタービンはむしろその圧力に嬉々として乗って気楽な立場を維持、群馬競馬も当人たちが納得しているのであればと静観している始末。

しかし競馬界に生きる騎手や調教師たちからしてみれば、それはあまりに不条理で異常な光景でしかない。

「うちの方にも中央競馬の知り合いから連絡があったよ、黙っててくれて。いいのかい、瀬名さん」

「俺からも頼むよ」

「マジかよ」

「マジだよ」

苦虫を押しつぶしたような顔になる大橋が言うには、ハーツクライの今回の最終調整についてはシマカゼタービンのことは一切口外しないでほしいと懇願されているそうだ。

それも悪意のある隠蔽工作というよりは、やりたくないけどやらなきゃいけないということなく悲壮感に満ちた様子だという。

気楽な笑みを浮かべる茂三とは全くもって真逆だ、信じられないモ

ノを見たような顔になる大橋。

群馬競馬を訪れてからもうお家芸のように板についた驚きの視線である。

「コップがカラだぜ、大橋さん。次はこっちの馬練りステイヤーにしてみるかい？ さっきのスプリンターよりもコクがある」

「…いや結構、今はやめとく」

「そういわずに飲んでみな、嫌なことは酒で流すのが一番だぜ？」

茂三が差し出した仕込み方が違う馬練りを断る大橋に、茂三は自分のコップに馬練りを注ぎながら諭す。

「グイッとやってパツと忘れちまえ」

「そういう風に考えられるあんたが俺は理解できないね。あんなすごい馬に仕上げてるのに、その欲の無さは一体何だってんだ？」

「俺に欲がないって？ 馬鹿言うなよ、俺だつてほしいもんはたくさんあるわな。こんな風に現役最強とやりあえるなんてめったにあるもんじゃねえ、欲張つてでも逃がさんぞ」

「なら何でもつとあいつを活躍させないんだ。あいつなら狙えるはずだ、もつと大きな賞を、それこそ公道レースなんてものじゃなくてもつと価値のある賞をとれる」

「そつちの方には興味ないな、俺ら田舎もんには田舎もんの生き方が性に合う」

「だが——」

「少し気になってたんですが聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「なんでシマカゼタービンなんです？」

ヒートアップし始めた大橋を遮るように割り込んだ稲波の問いかけに茂三は首を傾げる。唐突な問いかけにルベル達も首を傾げた。

「なんか変かな？」

「ちよつと気になつちやつて、お名前の由来つてこれ、船ですよね？ 自衛隊の」

「自衛隊のつてことは軍艦かい？」

ルベルの問いに稲波は頷く。

「えと、最初は車とエンジンから取ったのかなって思ったんですけど、シマカゼなんて車聞いたことないし、調べたら自衛隊のホームページに行き当たることが多くて。」

それに護衛艦しまかぜのエンジンもタービンが特別らしいんで、そうなのかなって」

「なるほどね、俺の趣味は車でツインターボの孫なのになんで船か？ってことか」

「そういうことです」

「なんというか…こいつの名前の発案は親父なんだよ、親父が大好きな駆逐艦の名前なんだ」

「お父様の、なるほど道理で…ってあれ？年代が合わないような…まさか旧日本軍？」

「そ、うちの親父のお気に入りの駆逐艦が『島風型駆逐艦一番艦・島風』で、実は少し縁があってな？」

常日頃から言ってたんだ、世界は大和ばかり見てるが一番速いのは島風だって」

曰く、瀬名茂三の父が心底惚れこんでいた駆逐艦だそうだ。世間が日本の軍艦で言えば大和だという戦後でさえ、かたくなに島風を推し立てて、自分の書齋には常に慣れない手つきで作ったプラモデルを飾っていたほどだという。

「タービンを連れてきた時はさ、突然だったから実は名前を決めてなくてな。あーでもないこーでもないってうだうだ悩んでたら不意に死んだ親父の思い出話を思い出したんだよ」

瀬名酒造の歴史はかなり古い、確認できる限りでは戦国時代初期から酒類の販売を商っており歴史の文献でも散見される超が付く老舗である。

当然ながら戦前も存在しており、当然ながら取引先に旧日本陸海軍も含まれていて、わざわざ群馬から遠出して横須賀の軍港まで荷馬車で配達していたそうさ。

事件はその配達で起きた。時は太平洋戦争の只中、1943年5月の事であった。

本来は軍港の納品担当に届けて終わりなのだが、その日に限って港の中は洋上訓練に船を出すということで大賑わいで暇がない。

納品担当官もてんでこまいであり、見慣れた業者という事もあり今日は特別という事で入港許可をもらい直接船に届けることになった。

その納入先が訓練で寄港していた『島風型駆逐艦一番艦・島風』であったのだ。だが当時の祖父はその船がどんな船かわからず、広い軍港の港で船を探して迷うことに。

何とか話を聞いて島風を見つけ、警備の海兵に声をかけると話が通っていたのであっさりと乗り込めた。

そこでまた事件が起きてしまった、島風に乗り込んだはいいが納入先の酒保に行くまでに艦内で迷ってしまい時間をかけてしまったのだ。

軍艦の中は一見見分けのつかない通路の連続で、一般人にとっては迷路である。たとえ軍用船の中でも小さい駆逐艦であっても例外ではない。

何とかたどり着いたが酒保も忙しくしており、倉庫にそのまま持つて行ってほしいと頼まれてしまう。

倉庫にもっていくとその中にはまた備品や商品でさながら迷路、迷いながら酒置き場を見つけて、帰り道にまた迷ってしまい…

「何とか倉庫から出てきたときには、すでに島風は訓練で海に出ちまっていた。親父は運悪く降り損ねちまったのさ」

アクシデントで無断乗船してしまったことに気付いた祖父はすぐに海兵に声をかけて出頭、正直に話して謝った。

島風を統括していた広瀬駆逐艦長はむしろ自分たちのミスを詫びた上で、訓練の邪魔をしないようにと言い含めた上で非公式ながら乗艦と見学を許可してくれたのだ。

既に海を出て沿岸での訓練に向かう島風をわざわざ一人のために港に戻すわけにはいかない。

日程が狂うし重油の無駄、さらに言えば責任問題が大きくなり過ぎる。内緒で見学させてあげるからなかつたことに、という事だ。

幸い訓練といっても機関の試運転だけで、日没後に軽い夜間訓練を

やりつつ港に戻る日帰り訓練であったこともあり、終始和やかに事は終わったのである。

そこから茂三の祖父と島風の縁が始まり、数少ない偶然で出会えば馬練りや群馬の名産品を差し入れ、返礼に南洋土産や戦地で手に入れた珍品類を交換し、艦長以下乗組員たちとも互いに親睦を深めていたそう。

その温かい親交は1944年11月、島風がレイテ島のオルモック湾で作戦中に撃沈された後も続いたという。

「たぶん業を煮やした親父が提案してきたんだ、『シマカゼだ、軍隊さんの船で一番速くて強い船の名前だ!』ってさ。

それがなんだかすとんと胸に来ちゃった、こいつにはこれがいいってね。で、船のエンジンはタービンかボイラーだろ?タービンのほうが聞こえが良さそうだから、そいつにしたんだ」

「なるほど…なんか、そういう話を聞くとますますシマカゼタービンを走らせてくれないのが惜しい気がします!」

「なんでだい?」

「ディープリンパクトとシマカゼタービン、深海の怪物と海原の韋駄天!こんな組み合わせ、燃えるじゃないですかあ!」

茂三さん、出しましょうよ。今年はみんな海外行っちゃうっていうから寂しくなりますしい」

「ははは、残念だけど難しいねえ。仕事も忙しくなるし、今年のうちもちよつと予定があるからね」

「なんですと!どちらに!」

これは聞き逃せない、どこのレースにエントリーするつもりなのだろうか?

「ちよつと嫁探しついでにいろいろなコースレコードにタービンの名前を乗せてくる、バトルはさすがに無理だからタイムアタックだけだけど。」

まずは近場で赤城、榛名、妙義、碓井のコースの歴代ランキング10位内、それでうまくいけば次は栃木辺りでいろは坂辺りを攻略してみるのがよ。

ダイオー達も外に出て行ってるからな、あいつも遠征くらいしないと仲間外れだぜ」

「公道じゃないですか…ん？嫁探し？」

「うん、あいつ牝馬に惹かれた試しがねえんだわ。あんだだけダイオー達に絡まれてんのに仲間としか見てねえよ。」

スペシャルウィークほどじゃないが、たぶん『馬』は『馬』としか見えてない。

下世話な話で悪いけど、あいつが興奮してんの初めて見たのってどっかの走り屋が連れてた彼女っぽいエロい姉ちゃんを見てた時だな。

普通に会わせただけじゃ無理、だからのんびり気儘に探すなら早いほうがいい」

「種牡馬には？」

「しないよ」

瞬間、稲波記者の絶叫が個室内に響き渡り同席者の鼓膜を直撃した。

## 第22話

群馬トレセンにある今年になって開設された新坂路コース、親父さんたちがふざけて群馬スペシャルと呼んで以来それが通称になったコースは簡単に言えば、元からあった山の散歩道を整備して色々整えた程度のポン付け坂路だ。

群馬は内陸で山だらけだから小さな山はそこら中にある、群馬トレセンの裏山もその一つで新坂路は元から敷地の裏山を整備しただけ。デュープがいる中央の栗東トレセンみたいな立派な施設が作られているわけでも無し、最新技術も全くなしだ、向こうを見たことないけど。

山の頂上にトレーニング用設備やコースを作って、そこに向かうルートも複数作って土道の練習コースにしている。

普通の調教用坂路のほかにはいくつかは親父さんと俺が監修した峠道レースコースがある、意外とクールダウン用の散歩道に使われることが多い。

ぶつちやけ、スキーマの山道コースって感じかな。距離は全コースちよいちよい違う、傾斜の緩い初級コースが一番長くて大体3kmちよつと、距離も競走馬用だな。

平地コースにはなかなか無いヘアピンとかいろいろ作ったから所々にある変則傾斜も最大傾斜が高低差2メートル程度の初心者用の初級コースでも機敏な足裁きが要求される場所ってことになっている。

当然道幅も狭いからレース運用なんて論外だが、先行後追いバトルなら余裕があるからよくやってる。まったく、だれが広めたんだか：初級コースから中級、上級とあって、本物の峠道をできる限り再現した高難度コースもあったりするが：どれも俺としては少し物足りん。

それに今日は雪も一度雪掻きしてある道だしな、まだ2月だしある程度雪掻きはしてるけどした後にもぱらつくからちよこちよこ積も



るが整備されてたら大して苦にならん。

『足を踏ん張れ！体が流れてるぞ!!』

「うわ、うわつとと!？」

『わわッ！うわわッ!!』

「尻です！古海さん、尻踏ん張って足しめて！」

ちなみに俺が今走ってるのは初心者コース、モンズニー爺さんに任されたハルウララの強化調教でダウンヒル真つ最中、左コーナーでハルウララと騎手さんがわちゃわちゃしとる。

俺は体に馬練りの代わりに粉リンゴジュースを入れた2リットルペットボトルを4本と敏則、ウララも体に500グラムの砂重りを身に着けた上で高知競馬の騎手さんに乗せて俺の下りに追従してきてる。

正直、こうやってジュースくらい背負ってやらないと俺の訓練にならないからなあ…ほんとは酒の仕込みしたいが、これも仕事だからしょうがない。それにしても…

「結構やるな、危なつかしいけど」

「ブルルッ」『そうねえ、見込みはあるか』

敏則の言う通り、ハルウララの足はなかなか完成してる。コーナーの入りはスムーズでも、直線に入るところでもたつく癖はあるがこれもなんとかできそうだ。

彼女、もたつくのは直線入りの前に前方を観察する癖があるせいみたいだな。差しか追い込みの馬が持つ観察眼、集中しすぎて判断が一瞬遅れてるんだ。

この道だと結構顕著に出る、でもその分立ち上がりからの回復は自然と早い。ちゃんと自分に合ったコースに自然と乗って走れてる。

あとかなり力任せに踏ん張ってるのにピンピンしてる足がいい感じだ、これがコーナーで活かせれば十分コーナーで勝てる走りができるはずだ。

微妙に乗せた重りで走りの感覚をちよいと狂わせてる上にべつとついた土道で足をとられてるつてのに、それをしっかりと御している足使いだ。

『いい足持つてる、あれで全敗とはな…やっぱ競馬ってのは厳しいもんだね』

その負けの経験が今の彼女にはうんと詰まってる、とんでもないことだぜこういうのは。

走りまくってずっと負けたってことはそれだけ走ってきた経験があるってことだ。長年の経験が無意識に補正入れて、このコースにもきっちり対応しようとしてる。

カーブでぐらぐら揺られてるのに追従ができてるあたり、こりやなかなか出来上がってるって言ってる良い。

それがあの観察眼にも顕著に出てきてるわけだ、たぶんどこを走れば勝ち筋に上がれるか無意識にわかってんじゃねえか？

でもそれが逆にもたつきに今はなっちまってる、集中しすぎなんだろう。下手に考えないで経験則に任せて走るのがよさそう、あとで教えてやろう。

「ウララ、右！」

『右右!!』

「ケツ踏ん張れ!!」

『ふんぬあー!』

騎手さんともしっかり馴染んでる、小走りで併走といっても慣れないコンビじゃそれだっておぼつかねえことは多々あるしな。

ダイオーなんかひどいもんだったぜ、最初なんか。無理して俺についてこようとして何度藪に突っ込みそうになってたことやら。

『走りにくーい!』

『まだ今日は恵まれてるほうだぞ!今日はじきにまた雪だ、そうなたらもつとひどくなる』

『雪の中もここ走るの!?!』

『走る』

そりやそうだ、競馬でも雪の中雨の中だろ。ここでもそうだ、このコースもよほど大雪じゃなけりや普通に使って良いしな。

俺だっけ仕事ができるなら雨の中雪の中、延々と峠と街をグルグルよ。むしろそういうときだから仕込める味もあるからレアだぜ。

「タービン、ハルウララに寄せて」

「ヒビン」『あいよ』

コーナーを抜けて直線、このコース一番の勾配がきつい坂道の先にこのコースの終わりが見えた。全部の坂路コースは一番下で共用休憩スペースに安全柵挟んで直結してるんだ、そこで休むなり馬運車に乗り降りしたりする。

コースの下で今日走ってる馬を待つ馬運車や休憩している馬達が見える、見てる奴には俺たちが走ってきてるのも見えてるだろうな。

「この直線でラストスパートです、速度上げますよ！」

「マジかい!？」

「行け！」

『あいよお！』

敏則の合図と同時にほんの少しだけ速度を上げる。少しだけ、実のところ体感時速で2くらい差をつけたただけだぞ。

『わー！まってよお!!』

『ついてきてみる！坂道じゃ俺にかなうやつはいねえ！』

『なんのおお!!』

『うお!?!別世界!?!』

よしよし！こいつしつかり足残ってやがる！これなら最後の追い込みもばつちしだろう。やるじゃねえか、ハルウララ。

直線といってもゆるゆる下り坂が100メートルもない、すぐ終わる。

一気に走り抜けて下まで降りたら、クールダウンしながら速度を緩めて柵を開けて休憩所に入る。

ウララと古海さんが入ったら閉めて門をかけてっと…これでよし。

「あー…しんど…」

「お疲れ様です、もう一周行きますか？」

「いや、おじさんにはきついよ…」

『ふええ…へろへろはらひれ…』

ありやりや、騎手さんもウララもふらふらだ。まあさすがに短距離専門と群馬初挑戦じゃ当たり前か。

でも彼女もだいたい良くなってきた、慣れた騎手さんとの走り方も取り戻してるみたいでいい感じに仕上がってる。

この分ならマイル戦に出しても体力的には楽勝だろうよ、勝てるかどうかはレース次第だが悪くはならんやろ。

これ、たぶん栃木の連中も途中まで良い仕上げしてたみたいだな。腕のいい担当に当たったらしい、それも立派な仕事人にだ。

「ぶるぶるっ…ひん!!」『タービン凄いなー!私へロへロなのにすっごい元気!』

『そりやそうだ、群馬じゃペーパーのお前より先にへばっっちゃ先導役はやれんわ、峠じゃ俺にかなうやつはいねえぜ』

『うわあ!この前もデュープ君にたっくん勝ってたし、群馬ってちゅーおー?とかいうところよりすごい所なんだね!』

『いや、それはちやうで』

あいつらに俺がどれだけ勝とうが群馬は地方競馬よ、最近は中央勢が苦戦気味とはいえ来る連中が弱いだけで規模も勢力も何もかも向こうが上だわ。

この前の高崎のSPⅢ『高崎マイルチャレンジ』、ダート1600で重賞初挑戦のアルトアイネスとアルトレーネが、大竹さんが乗った中央のタイムパラドックスとかいうのに大逃げかましてた。

一着アルトレーネ、二着アルトアイネスでワンツーフィニッシュ、一馬身差でタイムパラドックスが三着だったな。

テレビで見たがありがた、タイムパラドックスがああ姉妹を甘く見過ぎて乗ってた大竹さんの追走指示に半信半疑で乗り遅れてやがった。

中央の馬だからよく知らんが大丈夫かねえ、こっちに來るんだから中央だと上手くいってないのかもしれないかもしれんしお肉になっちゃわないか心配。

あの姉妹、連戦での限界を見るために新馬の後に、あえて条件、オーブン、SPⅢの3連戦っていうチャレンジミッション中で勝利度外視だったのなあ…

『ねー、私ももつと強くなれるかな?』

『そりやお前さん次第だ』

敏則が乗るのに邪魔にならないように、前足と後ろ足の上あたりにくるように追加したホルスタールから引つ張り出した2リットルペットボトル。

入れたときは水道水にリンゴジュースの粉と粉末しようがを一つまみ入れただけだったが走り終わればあら不思議、ほっこりするのいきりつと冷えた馬用ジンジャーアップルジュースの出来上がり。

ちなみに人間も飲める、人間にはただのアップルジュースだがな、隠し味のしようがが馬基準で足りんだ。

『ま、ジュースでも飲んでリラックスしな』

『解った、頑張るぞー!』

「：何度見ても、シマカゼタービン号の頭の良さは慣れないな」

おろ、どうしてそんなこと言うんだい？古海さんよ。ただウララにジュースをあげただけじゃないか。こいつにこのジュースがダメだって話は聞いてねえが？

「なんでそんな不思議そうな顔するかねえ…」

だって不思議だし：ま、ええか。ちなみに俺たちはもう一周行きます、まったく仕事は楽じゃないぜ。

『タービン！オソイヨー!!』

ウララたちと別れてから待ち合わせ場所のもう一つのスタート地点になる出入り口近くに行くと、ホクリクダイオーがヘンなステップしながら走ってきた。

『そんな遅くねえだろ、そっちのウォーミングアップは済んでるのか？』

『バッチリだよ！ほら、ツバキはもうスタンバってるからはやく行ってあげて!』

『へいへい、今日はどれでやるって?』

『中級コース!』

『あいよ。ところでそれ、気に入ったんか?』

『パドックとかでやるとみんな喜んでくれるから練習してるの!』

中級コースか、あいつが流しをするなら妥当なところだな。といっ

ても、俺の背中にはまた2リットルペットボトルが新しく4本装備されるわけですがね。

おい、ダイオー、またやってるよって顔すんな。ノルン、お前も呆れた目すんな。お前らのおやつやぞ。

「お待たせしました、桂井さん」

「いやいや、こつちもウォーミングアップが終わったところだからそんなに待ってないよ」

「で、どうします?」

「いつも通り軽めの流しで頼む、最後に一本勝負、先行後追いも今日は頼んでいいか?」

「先行後追いバトルですか?まあこのコンディションなら出来なくはないでしょうが…どうだ、タービン」

あ、相変わらず鬼畜!!この後ダイオー達とも流しで何本も走るつてのに…そんなこと言ったら…

ほらあ!あいつらもやる気になっちゃったじゃん!めっちゃやる気でこつち見てんじゃん!!

敏則、お前も親父さんに似てきたな!そういう無茶ぶりするところとかほんとそっくりよ。

わざとだなこの畜生飼い主め、さすがにそんだけ走れば俺も疲れるもんな!!

「なんだタービン、その目はまさか中級を流す程度で疲れるとか言わねえよなあ?」

いや、実のところマジで嫌つす。流すつつたつてこのあと何本往復すんのよ、10や20じゃねえだろが。

その後に大トリで往路の先行後追いやるんだろ?今夜は予定が…

「…今日の帰り、確井に寄るつて約束だったが…ん?なんか重要な用事があったような?」

「ヴィツ!」

な!?なんて無体な、それが人間のやる事かよお!適当な理由付けて直帰する気だな!

「…」

「…」

「ヴッフ…」

「よしよし、じゃ、頑張ろうか」

ぐぬぬ、碓井チャレンジを逃すわけにはいかぬ。碓井峠のコースに残る歴代タイムランク、そのトップ10に割り込んで親父さんを喜ばせてやりたい。

だが今生わが身は馬、故に好きにチャレンジする事叶わぬ。練習だって限られた機会しかないんだ、無駄にはできん。

敏則め、ホント馬の扱いがうまいんだから。今回だけだからね！



雪が降り始めた群馬の坂路レースコースはたとえ中級コースだとしてもかなり難しいコースになる。

変則的に現れる高低差3メートルの坂、そして延々と続く坂道。

それはツバキプリンセスの鞍上に乗る桂井も同じだ、何度走っても新しい難所が見えてきていつも別の道を走っているかのように感じる。

(やっぱりすげえ、こんな悪路だったのに、あんな重り背負ってるってのになんて安定感だ)

自分たちの前を力強く駆け上がるシマカゼタービンの逞しい足使いは一線を越えた美しさを感じた。

普通ならあり得ないシビアな調教メニューで、慣れたツバキプリンセス達でさえも息を荒げるといふのにまったく乱れず自分たちを先導し続けている。

コースの終点は頂上の練習施設であり、その手前には馬がそのまま切り返せるように広く場所をとられている。

これも瀬名茂三の発案だ、登りと降りを連続でやる往路調教がしやすいようになってる。

これを最初に見たときは桂井も首を傾げたが、いざ使い始めると必要性を理解せざるを得なかった。

「来たぞー！」

「やっぱシマカゼ速いなあー！」

施設には当然ほかの馬や騎手たちが今日の調教で使っており、休憩中だったであろう馬や騎手、調教師たちが邪魔にならないところに陣取って見物に出てきていた。

練習施設を使っていたほかの騎手や馬たちが銘々に応援する中で、桂井は敏則に合図を送った。

「連続で頼むー！」

「解りました、タービン」

「ヒヒン!!」

練習コースを登り切った先は頂上の訓練施設、開けたところでUターン。先行するシマカゼタービンに続けて下りに突入する。

走り屋風に言えばダウンヒル、先ほどまでのヒルクライムとはまるで違う恐怖がすぐに襲い掛かってきた。

山を丸ごと使って作ったこの坂路コースは、登りと降りではまるでコースが別物に切り替わる。

この差異は決して小さなものではない、それこそまるで別のコースに一気に切り替わったような変化がある。

この違いをどうやって相棒と共に乗り越えるか、時間帯、季節、その日の天候でまったく別の性格を持つこのコースを攻略する臨機応変な対応力が培われる。

(速い、それに、やはり、キツイ！)

坂を駆け下るという特性上、どうしても平均的な走行ラップが速くなることに加えて走行姿勢が騎手と馬ともに頭が下を向く。

上がりすぎる速度、平地のストライドよりも長く伸びる足、襲い掛かってくる自重による慣性、それらをすべて御したうえで駆け上ってきたコースを攻略するのだ。

グネグネと左右に振られる連続ヘアピンカーブにシケイン、わざと緩く作られたコーナーからいきなり逆に切り替わるブラインドコー



ナー、そして上がるときも苦労した変則的に配置されている坂に至るまで。

登りでも苦労した難所が、下りではさらに厳しい場所となって襲い掛かってくる。変則傾斜高低差3メートルの坂に差し掛かった時なんて今でも、股座が涼しくなる。

不意に襲い掛かってくる浮遊感、伸びるツバキプリンセスの足、ただ走るだけで上がる速度、どれもこれも平地競争だけでは感じない経験ばかりだ。

(やはり、降りは速度帯が違う、景色がまるで違うってんだからなあッ)

右に左に体を振られる3連S字カーブが登りの時とはまるで違う牙を剥く、通常のレースコースにはない左右に連続で曲がるコーナーはブレない体幹を鍛えるのに適しているがそれでもつらい。

中級コースと言えど降りはシャレにならないと言われるこのコースを、ツバキプリンセスと自分が毎日挑んでなお苦労するコースをシマカゼタービンと瀬名敏則は涼しい顔でクリアする。

事実、楽勝なのだろう。彼らはこのコースよりも長く、勾配もきつく、コーナーも厳しい本物の峠道を、真つ暗な夜間に駆け下る走り屋なのだ。

まだ昼下がりの明るい時間であり、丁寧に手入れされているレース用コースを攻略するなんてことは彼らには簡単すぎるのだろう。

(これでまだ軽い流し程度、俺たちじゃそれだけでも持つていかれるってのに！)

「!?!」

左に曲がるコーナー、そこに入る寸前でシマカゼタービンの下半身が右にブレて外側に膨らむ。

体が斜めに傾いた加減されたドリフト挙動、足はバカバカと土道を派手に蹴りつけながら挙動はすいーツと土道を滑るようにして走り抜けていく。

よく見ればすべての足がバラバラに動いてバランスをとり制動をかけているのがわかるので、いつ見ても狂っているとしか思えない。

それを2連で行うのだ、右にブレたと思えば返す刀で左にブレて連続コーナーを抜けていく、左右連続のドリフト挙動を可能としているのだ。

そしてその馬体の上で見事に手綱を操り、自分の自重で狂うシマカゼタービンの走行感覚を補佐する瀬名敏則の細やかな手腕にも目を見張る。

自重の掛け方、足の挟み方、手綱の引き方から引く強さ、すべてがシマカゼタービンの走行に合致し、噛み合う身のこなしだ。

あれが馬の走りか？あれが騎手の乗り方か？いや違う、あれは車の走りとドライバーの運転に他ならない。

まったく別種の走りと乗り方ができるほどに、あのコンビは完成され進化している。

そこまで行けるのだ、競走馬はそこまで磨き上げられるのだ、騎手はそこまで行けるのだ、そんな夢が目の前にいる。

(悔しい限りだ、たまらねえなあ…負けてられねえぜ)

調子に乗ってなんかいられない、次走の高崎のオープン戦ダート1400、彼のローテーションが崩れた今なら出てきてもおかしくない。

今年は昨年から続く競馬ブームのおかげで瀬名酒造の売り上げは右肩上がり、商品の仕込みで予定していたローテーションに添えない可能性がある、茂三から聞いている。

保険料と登録料くらいは走って稼がなければならぬ方針である以上、普段は出ないレースも視野に入れていくという事だ。

群馬競馬関係者の中では知らぬ者はいない『無冠の王』、彼は昨年から一度も負けていない、出たレース全てで勝ってきた。

重賞の冠を持たずに重賞馬を蹴散らす酒屋の韋駄天、彼に泣かされた有力馬と騎手は数多い。

例えば条件戦やオープン戦、あるいはステップレースであっても、重賞を勝ち取りながら彼に追い付けない馬と騎手は群馬では珍しくない。

自分たちも負けた。ステップレースである白蛇記念で敗れ、その先

のSP1レースで一着を取り、またどこかのレースで再戦すればまた負ける。

群馬地方競馬のGIの冠を持つ競走馬は全て彼に必ず負けているのだ。

「ツバキ、ペース上げるぞー！」

「ヒヒイン!!」

だから奮起する、お前の持つ冠のレースに出れば勝ってたのは俺だと言わんばかりのあの背中を見て飲む酒はいつも苦い。

負けていられない、これでも笠松からずっと走ってきた地方騎手だ。まだ若い瀬名敏則とは経験が違う。

お前にだってできるだろう、ツバキプリンセス。やりたくて仕方ないんだろう、今は無理でも、いつかあいつの連勝を終わらせてやろう。

## 第23話

2006年3月25日、ドバイ、ナド・アルシバ競馬場には前年の喧騒に負けないほど人にあふれていた。

世界各国から集まった歴戦の競走馬たち、選りすぐりの猛者たちが走り抜けてきたドバイミーティング。

そのオオトリである第1レース・国際G1『ドバイワールドカップ』が出走するまであと30分というところなのだ。

ドバイミーティング最後のレースにして最高峰のダートレース、これを一目見ようと世界各国の競馬ファンがこぞって乗り込んできており、ナド・アルシバ競馬場内外の熱気は留まるところを知らない。

まさに青天井というべき盛り上がりを見せている、世界中から集まった世界各国の競走馬たちの鎬の削りあいは今か今かと待ち望んでいる。

そして祖国を背負って走った自国の勇者が、このレースの冠を被る瞬間を待ち望んでいた。

そこに彼はいた、北川勝昭は一人観客席に座り、予想くじを握り締めながら一人で静かに出走の時を待っていた。

仕事先の好意で有休を貰い、一人異国の地へ飛んだ彼の瞳の先にいる馬はただ一頭。父の面影が重なる芦毛の牝馬、ツバキプリンセス。

2005年の有馬記念での実績を理由に、群馬地方競馬から招待されてこのレースに出走した変わり種だ。

(あれがツバキプリンセス、良い仕上がりだ)

背格好は父であるタマモクロスよりも大柄で肉付きが良い、ダート競走馬らしく筋肉が発達し、一步一步歩く姿がそれだけで芯の強さを見せつけてくる。

周りを見慣れない競走馬に囲まれ、異国の言葉と人々に囲まれ、見たことのない競馬場に降り立ってなおその姿は全く乱れない。

恐ろしくいつも通りに、マイペースに歩を進めて周囲を見渡しながら意気揚々としている。

群馬という地方の田舎からドバイという異国の地に飛んでも乱れぬ精神力、何とも豪胆な肝っ玉お嬢様だ。

タマモクロスから受け継いだ父そっくりの芦毛がなければ、自分でも外観から血縁を思い浮かべる事はなかっただろう。

「おお、今日もツバキは仕上がってんじやん」

不意に前方から聞こえた日本語が耳に入って意識がそちらを向く、ちやうど自分の前列右斜め前、そこには4人の日本人が座っていた、一人は50代に見える中年男性で、その隣に20代前後に見える3人の男性グループ、偶然となりあつてから話が合ったようでも仲良くしゃべっていた。

よくある競馬ファンのグループに見えるがよく見ると4人とも持っているものが妙に田舎っぽい。

中年男性は昭和染みた古臭いファツションで、3人組のツバキプリンセスのグッズと思しき人形やキーホルダーも古びていて、手作り感あふれるものだ。

現在、群馬地方競馬が公式販売しているものや中央競馬が親馬グッズと抱き合わせで特別販売したモノともデザインが違う。

「いやまさかあのツバキがドバイとはねえ、おじさんびっくりだよ。笠松にいた時から結構強かったけどねえ…あいつに絡んでたからさあ」

「見てた見てた、うちらもツバキが群馬に移ってからちよくちよく見てただけど…最初は不安だったよねえ、初戦であいつだったし」

「まさかここまでするなんて思いもしなかったよ！初戦があいつだったからさあ…」

どうやら彼らはいわゆる古参のファンというモノらしい。それならば身に着けているツバキプリンセスのグッズが少し年季が入っているのも納得だ。

「だが今日の勝ちももらったな、何せ群馬最強のツバキプリンセスが走るんだからな！シーマクラシックでハーツクライが勝ったんだ、流れは日本に来てる！」

「ばーか、群馬最強はホクリクダイオーだろが」

「いえ、ノルンフアングでは？努力と根性はすべて解決するのです」

「…シマカゼ」

「『おい馬鹿やめろ、そいつは反則だ』」

口々に推しを自慢する若者。そこから一糸乱れぬ突っ込みに、最後にボソツとつぶやいた中年男はわざとらしく頭をかく。

よくしゃべる親父だなあ、と彼は思った。自分は最近の連中のノリというモノにはついていけないタイプの親父なのだ。

競馬という物は、いつも真剣に最初から最後まで黙ってみる、熱くなつてもぐつとこぶしを握り締めて見守る。

今もなお、自分の中には競走馬たちへの熱情は燃えている。

彼女は強い、ツバキプリンセスの中には確かにタマモクロスの血が流れていてその能力は疑うべくもない。

それを群馬競馬はダートと芝の両方で通用する仕上がりにして中央競馬に我が物顔で送り込んできた、それを知ったときの自分は思いつきり荒れた。

チャンスはあつたのだ、彼女の素質を知っていれば知り合いの馬主に直談判でもして我が厩舎にお迎えしていたというのに。

北川勝昭、かつてツバキプリンセスの父であるタマモクロスと共に中央競馬の激戦を潜り抜けた元騎手、そして今は未来の名馬たちの運命を預かる調教師だった。



「なんだかずいぶん遠くに来ちまったもんだな」

思わず口を出てくる言葉は、ここ最近いつもそれだった。事実、ツバキプリンセスの主戦騎手である桂井の頭はこの1年の躍進がどこか夢の中みたいに感じていた。

もちろん努力はした、やることはなんだってやった、それは確かだ、だがそれがすべて思った通りに実ったとしてもこんな風になるなん

て夢にも思わない。

桂井は群馬地方競馬三強を駆る主戦騎手であり、れっきとしたGIジョッキーでありながら、まだ精神はただの地方騎手のままであった。

当然であろう、ほんの一昨年辺りまで笠松競馬場で走るところにでもいる普通の地方騎手であった30過ぎのしがないおっさんだったのだ。

馬とは縁のないただの乳牛牧場出身の三男坊、ただ競馬が好きで騎手になりたくて単身でこの世界に乗り込んで、ほどほどにそれ相応な立場にいた普通の騎手。

ただの地方騎手、ただ競馬とタマモクロスが好きで騎手になって、偶然タマモクロス産駒のツバキプリンセスを任されただけの男だ。それが桂井という男だ。

愛馬のツバキプリンセスも笠松での成績は可もなく不可もなく、笠松ではステイヤールとしての資質も宝の持ち腐れになっていて勝ちからは遠かった。

それでも最高の時間であった、ツバキプリンセスは最高の愛馬であって鞍上は他には絶対に譲りたくないと思うほどに愛着があった。

自分は彼女が強いと確信していたし、勝率は低かったが勝つときは勝っていた。当時の笠松競馬場でも一応は勝つときには勝つ馬として認知されていた。

だが乗り始めてしばらくもしないうちに所属厩舎が経営不振で潰れ、馬主もそれを機に引退してしまいツバキプリンセスは宙に浮いた存在になった。

騎手である自分は別の馬に乗ればいいが、放置されれば廃用の可能性が高い彼女を見捨てることは絶対にできない。

元馬主も引き取り手を探すのに手を尽くしてくれたが結果は惨敗、地方競馬の馬主は経済的に余裕がなく無い袖は振れず、中央競馬の方もそれほど強くなく血統も古い当時のツバキプリンセスには見向きもしない。

さてどうするか、いつそ自分が買い取って故郷の牧場に連れて帰る

うかと悩んでいたら、救いの手を伸ばしてくれた群馬競馬の理事長。その理事長の手を取って、笠松から群馬の高崎に一緒に移り住んで、彼に出会った。

シマカゼタービン、そして瀬名酒造の面々。隠れ銘酒の老舗酒造と未確認生物ども。彼らと実戦で走り、模擬レースで競い、そして延々と負け続けた。

趣味で競走馬をしているというあの馬の、技術もへったくれもないただの大逃げに千切られ続けて、わずかにあったプライドは自分もツバキもぼろ糞にされた。

それが悔しくてシマカゼタービンの尻を追って自分も彼女も必死になって走っていた。走って走って、あの尻を追いかけて一年で、気が付けばここにいた。

笠松の頃から目指していた東海ダービーを取り、中央競争で腕試しにGⅢを走ればあれよあれよと勝って、ちよつと欲を出して手ごろなGIレースへのステップレースに出てみればそれも勝って、馬主と一緒に記念受験気分でエリザベス女王杯に出てみれば冠を頂いた。

続いて挑んだ2005年の有馬記念ではぎりぎり5着となった、地方競走馬としてみれば上等どころの話ではないが悔しかった。

でもふと我に返れば思うのだ、どうしてこんなところにいるんだろう？　なんで自分はアラブのナド・アルシバ競馬場にいるんだろう？　と。

この成績ならば普通なら群馬地方競馬のSPIIレースに出ているのが地方騎手と地方競走馬だ、まじめに馬と向き合いながらしつかりレースに挑んで夜は我が家でゆつくり眠るのだ。

アラブ首長国連邦のドバイで国際GIのレースに出て覇権を競ってホテルに泊まるなんてのは、中央競馬所属の文字通り競馬と馬に狂った連中のお役目である。

自分はあるそこまで狂いきれない、競馬も馬も好きだがそこまで命をかけようとは思えない。

桂井は周囲の喧騒も我関せずとばかりにリラックスしたツバキプリンセスの鞍上に乗ったまま、ぼやつとしながら競馬場を見回す。



どこを見ても高崎競馬場の年季の入ったコースではない。最新式の設備、見慣れない言語、時々聞こえる厩務員や係員たちの言葉も様々な異国の言語である。

ああ俺はいま海外にいるんだな、今更そう思うがやっぱりどこか現実味がない。これも世界中の競馬狂いの集まった熱意に乗っていないが故か。

(おんなじこと、田島と新坂も言ってたなあ)

ノルンフアングの騎手である田島、ホクリクダイオールの騎手である新坂、彼らもまた自分と同じ普通の地方騎手でしかなかった。

競馬と競走馬が好きでこの世界に入った点は同じ、二人は代々競馬に縁がある家柄ではあったが中央の猛者や伝説たちと比べれば普通に一般家庭。

そんな彼らも今や立派なG I ジョッキ、三人で顔を突き合わせて現実味がないとボヤキながらレースの研究をしたのは数知れずである。

それが今や国際G I レースに出てきてしまっている。笠松の頃から着続けた深緑の胴に稲妻をイメージした黄色の山形襷柄の騎手姿の自分が場違いに思えた。

そもそも、この海外遠征自体が金銭的にギリギリラインなのである。騎手が騎手なら馬主も馬主、今の馬主は群馬の一流観光ホテルの経営者である。

金持ちではあるが中央競馬で軒を連ねるような大馬主ほどではないし所有馬もツバキプリンセス一頭のみ、趣味でロマンを楽しむタイプで己の進退に影響がない範囲でしか金は動かさない。

その分どこまでも純粹に勝敗を楽しんでくれるいい馬主さんではあるが、群馬競馬のバックアップがなければ海外遠征なんてする金はないと普通に無理だと首を横に振っていただろう。

自分だってそうする、同じ立場だろうが騎手であろうがそうする、喧嘩など起こるはずもなく満場一致で否決、あまりに無茶が過ぎるというものだ。

(事実、俺、ここに來てから完全にお上りさんだしな)

初めての海外遠征である、文字通り人生初の海外がこのドバイである。

田舎の牧場育ちでそれで満足していた田舎坊主から、地方騎手になってでそつなくやっていた桂井に海外旅行などというおしやれな経験などない。

現地に着いてからというものの、言葉も右も左も分からないから大人しくしつつ身振り手振りも交えて意思表示だけははつきりするのが精いっぱいである。

それを言えば群馬競馬から派遣された人員は通訳を除いてみんなそうなのであるが。

せめて馬でも見れば何か変わるかなと思って見回すが…

(ウイルコ、ブラスハット、スーパードロップリックに…あれはエレクトロキューションスト!?なんてキレた体してやがる)

エレクトロキューションスト、ゴドルフィンが誇る競走馬のうちのー頭、芝もダートも力強く走り抜ける強さは一級品だ。

日本中央競馬でも2005年のイギリスG1レース『インターナショナルステークス』で、大竹が乗るゼンノロブロイを破り一着を取っている。

普通に考えればこんな自分たちが一緒に走れるような存在ではないのだ。

でもこれから、自分たちはここで一緒に走り、ドバイミーティングの大トリであるドバイワールドカップの冠をめぐって競い合うのである。

(これ世界だねえ…わー、なんかもう、ゲームみてえ)

どこを見ても見慣れた馬がいない、いつもの連中がいない、中央競馬のレースに出走したときも感じた寂しさではあるがここはドバイ、より一層寂しい気分だ。

何しろ、そもそもここにいる日本人関係者自体ほぼ僅かである。さらに言えば群馬住まいの田舎者となれば身内以外皆無、寂しいにもほどがある。

観客はほどほどに來ているがそれはまた別計算だ、たぶんほとんど

は中央競馬から出走している馬のファンでこちらのファンはちらほら見える平成初期ファッションのおっさんどもであろう。

ツバキプリンセスの父であるタマモクロスファンだった連中が、当時の一張羅を着込んで応援してやろうとでも意気込んでいるのだろうか？ただのコスプレ（本物）である。

「ヒヒーン！」

「ふぬあ!？」

不意に背中を揺られて桂井はツバキプリンセスのほうに目をやる。そこには少しむすつとした雰囲気、ツバキプリンセスが桂井をじつと見ていた。

情けない顔するな、気合い入れろ、とばかりに鼻を鳴らす12番のゼッケンをつけたツバキプリンセスに、桂井は後頭部を搔きながら謝った。

「あー…悪い、なんかいろいろありすぎて考えすぎてたわ」

「ブルルツ!!ヒヒーン！」

「お前はほんと、元気だよな」

「フイー！」

前走が高崎のSPⅡダート2000、その後に行った当日に輸送され、検疫を終えてナド・アルシバ競馬場近くの厩舎に入ったのが僅か一週間前。

普通に考えたらさぶんな強行軍であるが、日ごろから訓練で輸送慣れたツバキプリンセスからしたらなんてことはないのだ。

この馬、飛行機が高度を上げるのに合わせてわざとらしく唾を飲んで耳抜きできるし、ジェット機のエンジン音にも全く動じず暇を持て余して昼寝をするくらい余裕なのである。

輸送は瀬名酒造に倣って日常的に馬運車に乗せて走り回ったり、道路を散歩させる事で慣らしたが耳抜きまで教えた覚えはない。

せいぜい検疫期間中が暇で暇で暇すぎて、四つ足バーピーテストもどきをやり始めたりひっくり返った亀のようにわざと空中に足を向けて走ったりと自主練という名の奇行に走っていたくらいだ。

どう考えてもあの未確認生物の入れ知恵であろう。群馬周辺にし

か行ったことがないはずなのに、なぜか不思議な知識をどこからか仕入れてきては仲のいい馬に伝授してどんどん仲間を癖馬に仕上げている。

(これで扱いづらくなるどころか強くなるんだからなあ…)

馬が人間を理解するのか、はたまた人間が馬を理解しやすくなるのか、とにかくその効果は大体良い方向に向いてくるからある意味厄介なのである。

この海外遠征でもツバキプリンセスは全く動じることがない、ここが日本ではないことに怯えるどころか興味津々なくらいだ。

「やるか、なるようにしかならんもんな」

「ブフブフ…カーツペツ！」

「汚いからやめなさい」

まあ、来ちやったならいつか、考えたつてもうしようがない。この際だからツバキプリンセスの強さを世界に知らしめてやろう。

負けたところでなんだというのか、負けるつもりはないがこんなでたらめな状況なのだ、負けてもそれほどやかくは言われまい。

鞍上はしがないおっさんだがこれだけは言える、俺がツバキプリンセスに一番うまく乗れる、最高の相棒なんだ。

「桂井さん」

観客席前に行きたがるツバキプリンセスの好きなように歩かせていると、後ろからもはや聞き慣れた中央競馬の大物騎手の声が聞こえた。

現地到着から一週間、ツバキプリンセスの慣らしと自分たちの慣らしでいっぱいだったためにドバイミーティングに出走しているほかの日本グループとは顔を合わせる機会があまりなかったのだ。

振り向くとそこには日本では砂のディーパインパクトと言われる中央競馬のダート競走馬カネヒキリに騎乗した見慣れた大竹騎手が朗らかに手を振っていた。

(うわ、カネヒキリもすっげ…)

大竹が騎乗する中央競馬きつてのダート競走馬、カネヒキリの筋肉

質ですっかり出来上がった体を見て思わず息を呑む。

ツバキプリンセスも負けなくらいに仕上げてきたのは事実だが、やはり日本中央競馬に所属して中央ダートのトップと言えるカネヒキリはどこまでも別次元の馬に見えた。

まず毛艶からして違う、キラキラしている。一体どんな高いシャンブー使ってるんですか？うち？スーパールの安物ですが何か？そんなレベルである。

さすがは日本中央競馬の競走馬、有力競走馬を何頭も持つ大馬主が所属する巨大グループのバックアップでどこまでも仕上げてきたに違いない。

「おや、大竹さん。今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ、ツバキプリンセスの調子は良いみたいだね」

「ええ、昨日も無駄にグースカ寝てましたよ」

厩舎到着初日の夜、自分が緊張で寝不足になりそうな時に、こいつは検疫と長距離輸送の疲れなど全く見せずに馬房で気持ちよさそうにすやすや寝ているのだから逆に腹が立ったのは内緒である。

しかもそのおかげで同じ厩舎にいた別の騎手や厩務員から変にまくしたてられて訳も分からず、ずっと日本語しかわからんと身振り手振りで説明し続けて逆に疲れたものだ。

群馬競馬が地元で雇った通訳担当もその勢いにすっかり混乱してまともな話にならなかった、彼女も語学が達人なだけで競馬には興味がない雇われただけの日本人であるゆえに。

ずっと眠っているので不審に感じた現地厩務員が相談したのが話の分かる通訳で、競馬には知識がない彼女がそのまんま別に病気ではないと説明したのが引き金だった、それで安心かと思ったら相手が急にヒートアップして大騒ぎである。

そうは言われても、群馬競馬では新世代の馬がこうなのは大体常識である。理由はあの未確認生物だとか言えない。

「ははは、厩舎で大騒ぎになったって？私の方の厩舎にも話が回ってきたよ、日本じゃこれが普通なのか!?!って」

「中央さんのデーターパックも良く寝るじゃないですか、カネヒ

キリだつてそうでしょ?」

「ははは…それ本気で言つてる?」

「さすがに冗談ですよ」

とはいえ、群馬競馬では一部の競走馬と新世代の競走馬はほとんどが夜はぐつすり眠るようになっていたので今更ながら狂つていると思わされた桂井である。

同じ馬房で仲良く隣り合つて眠る姿が愛らしいと評判のアルト姉妹は群馬競馬の厩務員の間では人気だ。

他にも彼が教育に関わつていづるブニーキャップ達も夜はぐつすりであるし、リハビリ中のハルウララも最近は起きてもすぐに寝る習慣がついてきているという。

おかげで厩務員たちの苦労はだいぶ軽減されているらしい、綺麗好きも移っているせいで催すとトイレに連れ出されるのが少し手間になるが。

「ほら、みんな君たちのこと見てるよ」

「…せっかく忘れてたのに」

大竹め、余計なことを。桂井は内心この恨み晴らさしておくべきかと唱えながら大竹を睨む。

ツバキプリンセス爆睡の大騒ぎがほかの陣営、騎手達の耳に入らないわけではない。なんなら検疫の時から爆睡の様子は見られていて検疫官が目を丸くしていた。

おかげで日に日に白衣の連中が見学に来る日が増えていたが、向こうもマナーは守っていたのでいろいろ凶太くなったツバキプリンセスからしたらむしろいい遊び相手であったのが幸運であった。

こちらに移つてからは巨大やら中央競馬の重鎮やら、海外ならゴドルフィンなどの連中からも見られる始末。じつとり睨みつけてくるようなことはしてこないが、それでもチラチラ見られて針の筵である。

話しかけてこないのは、自分が日本語しかできないただの地方騎手だという必死の説明が効いてくれたからだと思いたい。

大逃げしたい、こんな時にあの未確認生命体に乗つて大逃げしたら

絶対気持ちいいだろうなー、とそんなことを考える桂井であった。

## 第24話

ナド・アルシバ競馬場、関係者用観戦スペースの一角。そこで大橋は片耳にイヤホンを差して日本のラジオ局のドバイワールドカップ生中継を聞きながら目の前のレースに集中していた。

このレースに自分が関わっている馬はいない、だがここには彼女が走っている。そう考えると見てみたくなりここにきてしまった。

ここに集った関係者全員が自分の手掛けた馬が最強であると信じてここにいる、しかしそれとは別に視線を一身に集める馬が今年はいた。

渋みのある白い芦毛の牝馬、群馬地方競馬のツバキプリンセス、群馬地方競馬の常識破りがここでも常識を破っていた。

(そりゃ見るよな、明らかに狂ってんもん……)

実は背中にチャックあるんじゃないかと笑い飛ばすしかない、というかした。それくらい彼女のここ一週間の生活はドバイのみならず世界から集まった競馬関係者の常識を揺らがせたのだ。

当初は彼女を招待したドバイミーティング組織委員会に不平を募らせていたものすら、ほとんどが掌を返して呼んだだけでも大成果だという始末である。

真面目に練習に取り組み、群馬地方競馬関係者には従順で騎手にも懐いている、ストレスにも負けずによく食べ、よく遊び、夜はよく寝る。この異国の地に来ても彼女は何も変わらない。

そんな彼女の實力やいかに、関係者が考えることはそれだけだろう。

少なからず好走して不甲斐ない姿さえ見せなければ彼女の名前は世界中の繁殖牝馬リストに乗せられる、勝ち負けは重要ではないとすらいえる。

長時間睡眠による回復力と長距離輸送に強い肝つ玉を持ちながら気性は優しく人慣れして賢さもある、これが遺伝すれば競走馬運用の根本が変わると言えるのだ。



「バカみたいな走りしても入着は固いだろうなあ…」

世界がカネヒキリではなくツバキプリンセスに興味を示すせいで警戒が薄いことに不快感を隠せないカネヒキリの調教師である丸井には申し訳ないが、大橋は彼女の実力を理解している。

彼女は間違いなく強い、普通に考えれば地方競馬で走っている実力ではないと思っている。

少なくとも今回の祭りは長引きそうだ、大橋は確信をもって憂鬱な気持ちになる。

いつともう帰り支度をしようかな？そんな風に考え始めたとき、聞き慣れたゲートが一斉に開く音が鳴り響いて場内に大きな歓声が満ちた。

《スタートしました。スターキングマンとカネヒキリが勢いよく飛び出す、全馬いいスタートを切りました。

先頭はマグナグラジュエート、2番手カネヒキリおよそ半馬身といったところ、続いてスーパーフロリックがぐんぐん上がって3番手。

その後ろにブラスハット、すぐに続きましてウイルコ、やや後ろに陣取りますが前を狙っているか？その次にマラーヘルが追走。

続いて後方7番手エレクトロキューシヨニスト、8番手にツバキプリンセス、かなり外側を回ります》

実況の言う通りツバキプリンセスは後方8番手、馬群から一目でわかるくらい距離を空けて他の馬よりもかなり外側に出て走っている。

馬群に押し出された感じはない、騎手も馬も承知の上でそのコースを走っているとしたか思えないほど安定してその位置をキープし続けている。

《さらにその後ろにシャフツ、スターキングマンはこの位置です。再び先頭、マグナグラジュエートとスーパーフロリックが競り合っている、カネヒキリはやや後退して4番手》

（前ではわちやわちやしてるがツバキは我関せずか、何か狙ってやがるな？だがそんな大回りしたところで何の意味がありやがる…）

ドバイワールドカップの距離は2000メートル左回り、ツバキプ

リンセスの位置ではほかの馬よりも長い距離を走ることになりレースについていくためにはその分速く走らなければならないはずだ。

早く走らなければならない以上、当然ながら負担は重くなるはずであって不利でしかない。

利点は他の馬に悩まされないといい点だが、そのためにそのコースを使う理由はないはずだ。

それをあえて好む理由はなんだ？大橋はそこが疑問だった。距離的不利、速力的不利を呑み込んでそこを走る理由は？

（群馬の連中がいれば聞いても良かったが：やっぱみんな引きこもっちゃまったよな）

この場に群馬地方競馬関係者は一人もいない、彼らは通訳以外の関係者全員が日本語しか喋れないためだ。

元々田舎の群馬で地方競馬場とトレセンの職員、厩務員である。かろうじて英語が少しわかるくらいが関の山なのだ。

ツバキプリンセスの一件で何がどうあれ騒動が起きやすいと判断した彼らは、大会運営に掛け合って競馬場の一室を借りてそこでテレビ中継を見ている。

ここまでできてこの大舞台の空気を生で感じないというのはホースマンとしては納得いかない気持ちはあるが、当人たちは極めて真面目に面倒事は避ける姿勢であった。

ここは日本でもなければ群馬でもない、いざというときのバックアップが不完全という事もあり常に退路を確保しているような感じで、別な意味で大逃げする準備を整えているのだ。

《そこから少し差がありましてプラスハット、一馬身差でエレクトロキューションニスト追走、ツバキプリンセス後方大外八番手。

その後ろにマラーヘルですがここから各馬徐々に差を詰めていく展開、スターキングマンは後方から二番手大きく離されている。

各馬さらに差が詰まるがツバキプリンセスが大きく外にはみ出す、外に取り残されたか？このまま最終コーナーカーブに向かっていきます》

飛び出していると言えればツバキプリンセスの馬主。彼に至っては

最初からドバイにすらない、開催日程と仕事がかぶっていたので仕事を優先したらしいのだ。

日本であれば仕事が終わってから顔を出すなどできたであろうが、残念なことにこのドバイでは距離的にも間に合わない。

愛馬の大舞台だから隙を見てラジオに齧りついているというが、この大舞台より仕事優先というあたりスタンスから違うのがわかる。

この際、大橋より幅広く競馬界の外を知る稲波記者がこの場にいれば色々聞けただろうが、彼女はハーツクライとルベルの取材のほうに行ってしまうている。

自分の代わりにこの一戦を見守っていてくれ、あと解説も考えておいてくれと念を押された、いろいろ変態とはいえやはり仕事のできる女性なのだ。

《マグナグラジュエートとスーパーフローリックがまだ競り合っている、その後ろにウイルコとカネヒキリ、三番手争い、その間からブラスハットが前を狙っているか？

その外後方にエレクトロキューシヨニスト、スターキングマンは変わらず後方二頭目。最終コーナーカーブに入ります》



最後のコーナーに差し掛かる、自分たちは8番手、馬群外に位置しているが普通に考えれば前のほかの馬が邪魔で勝負所に出るのはなかなか難しい位置だ。

自分たちの走りは完璧だった、プランは完璧だった、普通に考えりややつぱここまで、そう昔は思っていただろう。

(いい位置だ、空気も悪くない、行ける)

ここしかない、最後のコーナーこそが自分たちの勝負所だ、この大技が一番嵌るのがこの瞬間だと桂井は直感していた。

「行けるなっ！」

ツバキプリンセスに思わず尋ねる、返答はない。だが、彼女の馬体はそれに応えるように、さらに外を抜けて馬群から離脱するコースに自ら乗って加速し始める。

そうだ、それだ、何度も一緒に彼女の父の走りを見た、ライバルたちの走りを見た、何度も彼と練習した。

これは父の走りではない、偉大な父のライバル、芦毛の怪物から学んだ自分にできる最高の勝負。

王道の差し、王道の追い込み、されどその足は群馬の化け物を差し切るために延々と磨き続けた大技。

「まだまだ、まだまだぞ」

最終コーナーまであとわずか、前方に行く馬たちの体がコーナーに備えるのを見ながら桂井は鞭を握り締める。

先頭のマグナグラジュエートが入る、次いで後続がどんと入っていく。自分の番になる瞬間、桂井はすぐさま合図を出した。

「行けっー」

一発だけ鞭を尻に付けてツバキプリンセスに合図を出した、同時にツバキプリンセスが待つてましたとばかりに加速。

コーナーで加速しながら馬体をさらに大外に引き出しながら自分たちだけしかいない専用のラインに乗り、馬群に割り込むギリギリに攻め込んで曲がる。

いつものようにあの馬を追い立てるがごとく加速、砂の地面を大きく踏みこみ砂を盛大に蹴散らしながら追い抜き駆ける。

(日本の芦毛の大外一気、止められるもんなら止めてみやがれ!!)

8番手から一気に順位を繰り上げる、一気に真後ろから追い上げる。前に邪魔者はいない、この場面でわざわざ自ら大外を好き好んで走る奴はいない。

この瞬間を待ち望んでいた、ずっとこうして外を狙える場所を狙って、自分たちのレースをするためにあえて外気味に回り続けてきた。

普通の馬ならばそんなことをすればスタミナが持たない、だが自分たちは違う。なぜならドバイワールドカップは海外競馬であり、レース距離が2000メートル程度だからだ。

海外の競馬は日本の競馬と違いレースの展開速度そのものがやや遅いと言われている、それはこのドバイワールドカップでも似通っていた。これは日本の競馬が高速化しつつあるからである、桂井たちはそこが盲点ではないかと感じていた。常に全力疾走するような大逃げ戦術や逃げ戦術でない先行、差し、追い込みといった戦術では足を溜めるために抑えて走る。

この際に周りを見てレース展開に合わせた走りをするようになるが、レース展開が遅めの海外競馬ではそれが日本競走馬に無駄に体力を使わせている気がした。

人間でもマラソンなどを走った人間ならば感じたことがあるかもしれない、単純に長距離を走り切る目的のマラソンでは全力疾走などまずしないがといって極端に遅く走ったりもしない。遅ければ体力が温存できるというわけではないからだ。

むしろ遅すぎる走りを体に強要すると無駄に体力を使ってしまう、故に速すぎず遅すぎない経済速度という物がある。それと同じ事が起きているのではないか？

ならばどうするか、それはすでに群馬の走り屋が目の前でやって見せてくれた。自分の速度で走れる場所を走ればいい、相手より長い距離を走るならもつと速く走ればいいじゃない。

それが答えだ、速度ではなくて距離で合わせてしまえ。

普通に見ればあえて余計に走る愚策と言えるがこれも単純な方法で解決できる、それを走れる体力があればいい。

前のツバキプリンセスでは無理だった、だが今のツバキプリンセスにとって2000メートルという距離は息も切らさずに走り抜ける距離でしかない。

常日頃からあの犬逃げの走り屋相手に3200メートル模擬レースを行い、走り屋の犬逃げに追従するために鍛え上げたツバキプリンセスの体力はもはや並ではない。

だから大外で回った、懸念していた邪魔をする相手はいなかった。そしてこのコーナーでこちらを気にする余裕がある連中はもういない。

すべて整った、自分のできることはすべて整えた、あとは全て天に任せるのみ。

最後の直線に入った瞬間、真横の馬群は視界から消える。先頭に自分たちが立った、だがここからまだ長い直線がある。

言葉はいらない、ただ桂井はいつものように、ツバキプリンセスの尻に最後の合図を入れた。ムチがしなる音、そして叩かれる音が響いて、一気に彼女の加速力が上がる。

これでも十分殺人的な加速だ、競走馬としては一級品のモノで昔の自分ならば御しきれずに振り落とされていたかもしれない。

今はそんなことはない、この程度の加速では群馬スペシャルの下りで鍛えた己の体幹を崩すには至らない。

前へ、前へ、ただ前へ、もう何も考えることはない。ただまっすぐに、他の馬を邪魔することのないこの自分たち専用のラインを全力で駆け抜けるのみ。

諦めない、自分たちが勝つ、自分たちが勝つ、それだけを考えて桂井はツバキプリンセスに発破をかけた。



会場はどよめきに満ちている、目の前のレースに誰もが目を疑っていた。当然だ、このドバイワールドカップで予期せぬ大番狂わせが起きているのだ。

《ツバキプリンセスだ！ツバキプリンセスが来た！！大外からツバキプリンセス！！》

片耳に突っ込んだイヤホンから流れる日本のラジオ中継の放送席も興奮と驚愕を隠せない。

最終コーナー、そこで仕掛けてきたのは群馬地方競馬のツバキプリンセス。群馬という日本の田舎からやってきた芦毛の牝馬、当然ながら人気はあまりにも低い。

国際社会で幾度となく挑んできた日本中央競馬ではなく、日本の群馬地方競馬に属するド田舎からの出走馬。

最大勝ち鞍は日本中央競馬のGⅠエリザベス女王杯、地元群馬でダートを主戦としても国際基準での最大勝ち鞍が芝コース。

一般的に見れば彼女は芝の猛者である、この場ではお門違いとみられても仕方ない。

ただの一般観客であればその程度、ツバキプリンセスが勝つとは思ってもないはずだ。

それがどうだ、最終コーナーに入った瞬間からさらに大外を回り一気に加速、コーナー内で順位を一気に繰り上げ先頭に躍り出て最後のコーナーから直線に最初に躍り込んできた。

恐ろしいまでの脚力でスピードに乗り、最終コーナーで前8頭を大外から丸ごと追い抜いて我が物顔で先頭を奪った芦毛の牝馬に場内は騒然となり驚きと驚愕で満ち溢れている。

「あれはまさか……」

それは日本勢も同様、しかしそのどよめきは質が違う。驚き、驚愕、そして郷愁、それは日本競馬にとっては伝説。

北川にとっても同じだった、それはライバルの姿と同じに見えた。日本競馬の伝説、地方から現れた怪物。

それは何度も何度も夢に見るまで研究し警戒したあの映像が重なった、1988年の毎日王冠の光景が蘇ったかのように見えた。

《ツバキプリンセス先頭、しかしまだ600メートルある!! 2番手はマグナグラジュエート、3番手スーパーフローリック! カネヒキリは遅れて5番手大丈夫か?》

外からウイルコ、プラスハットも追い込みをかける——いや外からエレクトロキューションニスト! さらにエレクトロキューションニストが仕掛けてきた!!》

直線に入りすべての馬がラストスパートに入る、エレクトロキューションニストがぐんぐんと後ろから追い込んでくる。

他の馬よりもはるかに加速力が違う。早すぎたか、ツバキプリンセスとその鞍上は早く仕掛け過ぎたのか?

いや、あんな大仕掛けをしておいて、あっけなく抜かされるような走りを今までしてきたのか？

(違う)

直感ではない、経験がそう言っている、相棒と共にあったときから鍛え続け今尚冴える騎手としての感覚がそれを見抜いた。

《エレクトロキューションストが迫る、鋭い追い上げ！しかしツバキプリンセスも粘る、粘る!!ツバキプリンセス逃げ切れるか!?!》

一気に距離が詰まる、逃げるツバキプリンセスをエレクトロキューションストが追う。残り一馬身、そこでエレクトロキューションストの加速が鈍ったように見えた。

それは目の錯覚だ、エレクトロキューションストが鈍ったのではない。ツバキプリンセスがさらに加速を始めている。

ツバキプリンセスの足はまだ残っている、奥の手をまだ残している、最終コーナーの仕掛けはまだ序の口でしかない。

加速をまだ続けている、馬も騎手も必死になって走っているのがわかる。まるで別の何かを追っているかのように。

《残り300メートル!!ツバキプリンセス一番手、だがエレクトロキューションストも追いつがる!!》

既に2頭が先頭争いで頭一つ突き抜けている。エレクトロキューションストも諦めない、必死で追う。

北川は両手を握り締めた、まるで自分が彼に乗っていた時のように感じる胸の熱さがたぎってくる。

心臓がバクバクと音を立てていた、喉がカラカラになったような気がした、目をそらすことができなくなっていった。

《エレクトロキューションストが届くか!届くか!!》

ツバキプリンセスの体が弛緩する。次の瞬間、彼女の後ろ脚がより一層強く地面を踏みしめて馬体を前に押し出した。

芦毛の馬体がさらに加速する、エレクトロキューションストを突き放し、さらに加速しながら一気に残りを走り抜く。

力強い走りだ、本物の足を彼女は持っている、彼女の实力は本物だ。思わず北川は心の中で2003年に旅立った相棒に向かって叫ん



だ。見てるか！見てるか！！走っているぞ、お前の娘が世界を相手に先頭を走っている！！

《届かない！届かない！！ツバキプリンセス突き放す！！そのまま！押し切って！！ゴールインツ！！》

場内のどよめきが一齐に歓声に変わる、大番狂わせだ、期待薄であつた田舎の牝馬がまさかの勝利だ。

それもマグレではない、アクシデントもない、真っ向勝負で世界に打ち勝った。その力強い姿に観客は大盛り上がりだ。

それもドバイミーティングのGIを二つ、芝とダートの両方を日本からの出走馬が持つていくという大珍事だ。

《何という事でしよう！！またもや群馬がやりました！！中央競馬に加え世界の一冠、日本勢初のドバイワールドカップ優勝！！》

ツバキプリンセス、桂井が中央競馬より先んじました！！地方競馬が世界を取りました！！

2着はエレクトロキューシヨニスト、3着にウイルコ、4着プラスハット、5着マグナグラジュエート、カネヒキリは6着です！》

場内は総立ちだ、この大番狂わせを見事に勝ちとつたツバキプリンセスと騎手の桂井に万雷の拍手が送られる。

その歓声に答えながらウイニングランを堂々と走つていくツバキプリンセス、その姿にその中で北川は熱い目頭を片手で拭った。

相棒、お前の娘が世界で勝つたぞ。ああ悔しいよ、どうして俺はあの子のそばにいてやれないんだろうなあ…

## 小ネタ・20XX年・ウマ娘プリティーダービー緊急告知

何も変わらない毎日、朝起きたら朝ごはん、そして通勤、電車で10分の会社へGO。

務めているのは一流大企業の地方支社、やることやって御上の機嫌を見てれば気楽な風通しのいい部署で私は今も務めている。

私の席は事務所に入つてすぐ近くだった、そこに座ると私より少し後に部長が来る。時間通りだけど少し遅い、それで仲のいい同期や後輩に弄られて社内を明るくする30代の自称中年オヤジ。

仕事は可もなく不可もなく、正直に言えば私のほうができるし彼よりすごい部下はたくさんいる。でもこの部署も私も彼のことを認めていた。

もういい年なのに独身で、自分がオタク気質なのをネタにしてもう親も兄弟もないから独身のほうが気楽だと豪語していた。

仕事に真面目でも付き合いを間違えない割り切りの良さがあつて、それでいて頼りになった。

彼は自分が困っていた時に助けてくれた、頼りにしてくれた、そんな人がこの部署には大勢いたの。

学歴信奉の家に生まれて物心ついたときから勉強一択、友達も作らないで学校生活では空気と一緒になって乗り切つて、一流大学に入つて良い成績で卒業した私は社会では頭のいいお荷物だった。

この会社の本社、第一線で活躍する部署に鳴り物入りで配属されて、理論派頭でつかちな仕事をして社会の荒波に揉まれて大失敗した。

見た目も頭は良くても使えない女、そう言われてここに流された私に彼は笑いもせずにかう言つてくれた。

〈これ出来る？俺…じゃなくて私と一緒に〉

それは規模こそ違うけど私が失敗した仕事と同じタイプのプロジェクト、何度もどうして失敗したのか考えて、どうすればよかった

のかずつと頭の中で答えを作り続けていた過去とおんなじ。

知っているはずなのにいきなり仕事を任せてきたこの男は一体なんだ？何様だ？私はそれに少しムカついてできると啖呵を切った。

〈できません、簡単です〉

〈んじや、やろうか〉

そして仕事は大成功、でも危ない所がなかったわけじゃなかった。でもそこは部長が補佐してくれたり、私の経験が生きて無事に乗り越えた。

正直に言つて終わった時は腰が砕けるかと思った、そんな私に彼は短く褒めてくれた。

〈やったじゃん。次もお願いね、頼りにしてるよ〉

あとから聞けば彼は配属される私の事を調べて、私の失敗と同じ仕事を探してまで任せたそうだ。

失敗したら学ぶはず、できないはずがない。そう言っていたらしい、自分の汚点だと思っていた失敗を経験という武器に変えてくれたのだ。

そんな人間がここにはたくさんいた、だから彼の事を慕っていた。でももう来ない。

〈部長さん、亡くなったってさ…〉

ある日突然そう言われた、出社したら社内の空気がおかしくて変だなと思っていたけど自分には関係ないと思つてた。

部長は何の前触れもなく、特別な理由もなく殺された。帰宅途中におやし狩りの若者に襲われて後ろから頭を金属バットで殴られたそうだ。

警察から話を聞いた同僚によれば即死、彼は何もわからないまま死んだだろうとのこと。どちらにしろ最悪だ。

そいつらは奪った荷物から部長の家も見つけ出して漁って盗んで好き勝手にしていたらしい。

何より最悪だったのはその犯人がうちらよりでかい会社の社長の息子、絵にかいたようなバカ親と20代のでっかいクソガキだったこと。

そのうちよりも良い噂のない企業でも規模も財力もデカイあつちの圧力にわが社は簡単に屈して、身寄りがいないことを良いことに細々と処理して、優秀な人食い弁護士の元で見事に執行猶予付き懲役、その後保釈金で自由の身だ。

部長を襲って命を奪って、挙句金品も尊厳も奪って、最終的には親の権力に継る典型的な糞野郎、世も末だ。

まあ、その後両親の急逝で社長になったその馬鹿が会社をしつちやかめつちやかにして完全ドブラック企業に変えて、ついに過労死出して一年経たずに倒産して盛大に自爆したけどね。

日本経済に微震起こすくらい滅茶苦茶ほかの企業に悪影響が起きたけど、部長の一件で取引を一切合切お断りしたうちには関係なかったし。

「おはよう、今日もよろしく」

今は私が部長の席にいる。私はうまく彼の後釜を務められているだろうか？ 出来ていると思いたい。

・  
・  
・  
・  
・

時間はあつという間に過ぎて夜、疲れた、今日も仕事はいつも通り。だけど気が抜けるわけじゃないからね。

一応終わったけど、ちよつと休んでから帰ろ。にわか雨来てるし、ウマ娘でもやりながら様子見ますか。

今日こそウララでディープインパクトぶち抜いてやる、待ってる有馬記念。

そんな時にふと気づいた、会社の資料作りで調べていたネットサイトの脇に出ている広告記事だ。

（ウマ娘に大型アップデート？新イベントと新キャラ実装？へー、ディープインパクト達に続いてすぐってことは…いいじゃん）

ウマ娘プリティーダービー、私もちよこちよこやってるソシヤゲ。

ちなみに微課金、部長の教えで賭け事も課金も遊びで済む程度にして  
る。

どんなウマ娘たちが来るんだろう？ちょっとワクワクしながら、室  
内に誰もいないことを確認して広告をクリックした。



新シナリオ『来襲、地方ウマ娘!』実装!!

心地よい日差しの入る夕方、仕事も時期に終わるといふ頃。

普段ならば大分ダレた理事長が最後の仕事に取り掛かるときだが、  
今日は違った。

「緊急告知!!」

「ど、どうしたんですか理事長!」

仕事終わりの紅茶を入れて戻ってきた緑の悪魔…もとい秘書の駿  
川たづなにどう見ても子供にしか見えない猫搭載帽子合法ロリ、もど  
い秋川やよい理事長が扇子を突き付けて宣言した。

「たづな、知つての通り我々はURAFINALズという新レースを  
立ち上げた。結果は極めて順調、そうだな?」

「はい!新レース設立の後の成績の伸び率は前年の比ではありません  
ん、生徒の皆さんもトレーナーさんたちもみんな奮起してくれていま  
す!」

「うむ!だがこのままではいかーん!!」

「え!?な、なぜですか!!」

「狭隘!なぜならばURAFINALズのまだ一番の目的を成してい  
ないのだ!!」

「それは一体?」

「制限!URAFINALズには日本ウマ娘トレーニングセンター学  
園所属のウマ娘、すなわち!中央所属のウマ娘しか出場できていない  
!

なぜか、それはこのレースがこのトレセン学園主催のURAFINAL公式新  
レース故に、出走登録に大きな制限があったからである!!

それではすべてのウマ娘が活躍できるレースを作ったというにはさすがに不足!! 故に!!!」

理事長が扇子を広げる、そこには『大幅拡張』の文字!!

「この度、各地地方トレセン学園と連携し、URAファイナルズへの出走登録基準を再指定し、より多くのウマ娘達がチャンスを得られる祭典に大幅拡張した!

これにより日本ウマ娘トレセン学園生のみならず、地方トレセン学園および一般からの出走者も見込まれより面白いレースになるはずだ!!」

「り、理事長!...え、もうしちゃったんですかあ!?!」

「うむ、さらに!」

理事長が新たな扇子を開く、そこには『留学』の文字!

「URAファイナルズのみならず中央および地方主催レースでの交流を大幅に増やすため、短期および交換留学制度を導入した!!」

これは中央から地方に、地方から中央へ、あるいはトレセン学園から一般校への短期留学による人材交流をより盛んにするものである!」

「それはいい刺激になりそうですね、しかしなぜ一般校への留学が?」「進路!我がトレセン学園は学び舎である、しかし現状ではウマ娘レース関連以外の進学ルートがいささか乏しくなっているのが現状である!

故に在校生たちの進路をより多様化するためにこの制度に追加枠で設けられた。しかし!それだけが目的ではない!」

「そ、それは一体?」

「聞けば、一般校に通いながらも実力では引けを取らない在野のウマ娘達がいると聞く。そんな彼女たちを私はぜひとも見つけ、新たなチャンスを与えたいと思っている!!」

「おおっ!」

「すでに各地の有力ウマ娘達が次期URAファイナルズに出走登録および短期留学希望をしてくれている。さあトレーナー君もぜひその目で見てくれたまえ!!」

そういつて突然カメラ目線になる理事長、そして差し出された書類が：

新ウマ娘、実装!!

「ひとーっ！油断禁物、競争ウマ娘たるもの相手を侮ることなかれ！  
…守れてないよお？」

月明かりに照らされた竹林、その中を音もなく疾駆する現代戦闘装備を纏ったくノ一姿のウマ娘が背中に背負った大太刀（梟のアクセサリー付き）を抜刀する。

無言で大太刀を構え、鋭い視線でこちらを見つめてわずかな羽音もなく一瞬で突進してくる。

☆☆☆「ハイドオウルラン・ホクリクダイオー」

「作戦開始。指揮官、命令を」

完全に隠蔽された掩体、その中で左ひざを立てて座り込み両腕をクロスさせて狙撃銃を構え、気配を殺し狙いを定めるタンクトップミリタリールツクなシルバードロンドのウマ娘。

彼女の視線が一瞬鋭さを増し、一瞬の息止めと同時に引き金を引き、スコープから目を離して息を吐く。

☆☆☆「スナイピングホワイト・ノルンフアング」

「巴の雷、お見せしましょう」

晴天の天守閣、緑を基調としたやや露出の多い和装ドレスに稲妻の家紋が描かれた近代化軽鎧を付け、アサルトライフルを背負う芦毛のウマ娘が腰に梳いた日本刀を抜いておもむろに鯉口を切りゆつくりと抜く。

すると空が曇り雷雲が立ち込め、天守閣は薄い雲に包まれて外の雲から一筋の稲妻がすらりと抜かれた刀に吸い込まれ、その刃が雷を帯びたと同時にカツと視線が鋭くなる。

☆☆☆「稲妻一闪・ツバキプリンセス」

「迷えば敗れる、平地も峠もビビったら負けだぜ？」

暗闇に包まれた山を走る峠道、そこを攻めるスポーツカーを猛追する白黒のスポーツウエアを纏った青髪のウマ娘。

コーナーをドリフトするスポーツカーに自身もドリフトしながら追従、次のコーナーに入る直前、スポーツカーが見せた一瞬のスキを突いてさらにインコースをぶち抜き追い越していく。

☆☆☆「本物の仮想敵・シマカゼタービン」

さらに新サポートカード実装!!

青いスポーツカーをドリフトさせながら獰猛に口を吊り上げて楽しそうに笑うシマカゼタービン、その横で悲鳴を上げて涙目なディープリンパクト。

SSR『峠の走り屋・シマカゼタービン』

スキル・インベタグリップ

自分の前を走るシマカゼタービンの背中を見つめ、悔しそうに息を乱しながら走る泥だらけのディープリンパクト。

SSR『次は負けない!・ディープリンパクト』

スキル・全身全霊

その他、SR、Rサポートカード多数実装!!



「攻めたな…ついにこの世代実装か、日本競馬の天国と地獄」

実は中央組だけ実装してこの話題は避けるかなって思ってたけど…この世代の先を深くすると避けて通れない道か。

地方競馬を取り上げるにしたって、群馬地方競馬の躍進が地方競馬



再起と海外重視のターニングポイントだから絶対逃せないところだもん。

アルト姉妹とかシャツタードスカイも出したいだろうし、ブニーキャップ、ハルナイナリ、ポケットクリークもイベントあるし。

メジロジョンソンとハルカゼサカツキなんか絶対逃せないっしょ、群馬と高知の凱旋門賞馬とかさ。

そもそもハルウララ初期実装なのに他が遅すぎなのよ、もう未実装のお友達のことを話すウララちゃんを見なくてもいいのは非常に気が楽だわ。

でもよく許可が下りたな。中央競馬とフアンのトラウマを相当挟むと思うよ？またやらかすんじゃない？前科あんじゃん。

「とはいえシマカゼタービン、マジで出すのか。産駒も弟子もヤベー奴だけどシナリオどーすんのよ？」

キャラ紹介を見る限りウマ娘の中じゃ珍しいタイプ、一般校所属とかなんでやねん…洞屋シナリオとか勘弁よ？

お試しボイスは…なんか妙に部長っぽいなあ。

## 第25話

2006年ドバイミーティング、日本出走馬が芝・ダートの両GIレースを制覇。

地方公営競馬初の海外GIタイトル獲得にしてドバイワールドカップ日本馬初優勝。

日本中央競馬から数々の日本タイトルを背に出走してきたカネヒキリが6着、その後の審査で失格馬が出たことによる繰り上がり5着入着に滑り込む中ですべてを抜き去ったツバキプリンセスが各国の有力出走馬を見事に下した大勝利。

それもかつての伝説を彷彿とさせる文句なしの大外一閃、日本競馬の伝説を世界の目の前で再現してみせた。

同じく芝のGIDバイシーマクラシックにてハーツクライもまた大きく取り上げられた。

日本馬初のドバイシーマクラシック制覇でありながら国内GI未勝利、そこから勝ち取った海外でのGI初勝利。

昨年のステイゴールドを彷彿とさせるその物語は日本中を沸かせ、世界に日本競馬とは何ぞやと興味を抱かせた。

その大ニュースが日本中、そして世界中の競馬ファンに知れ渡るのはすぐであった。

結果は言うまでもない、国内国外問わず大荒れである。日本中の競馬メディアのみならず大手メディアがこぞって取り上げるのは当然、さらに世界中の競馬メディアも群馬地方競馬と日本中央競馬シリーズを取り上げた。

結果、世界は日本中央競馬と日本地方競馬の歴史と実力格差を知り、そして05年で群馬地方競馬・秋の中央戦線での異様な大暴れを知った。

ツバキプリンセスとほぼ同格と言える同競馬所属牝馬3頭、主役となる馬たちの血統と歴史、小さな島国で繰り広げられていた競馬を世界が興味を持つのは当然だった。

ジャイアントキリングを国内のみならず国外でさえ成し遂げた群

馬地方競馬は、日本だけでなく世界各国からのメディア取材が殺到して地獄絵図になっていた。

この世の春を謳歌できたのは僅か勝利の数時間、勝利の美酒で口を湿らせた後は群馬県議会も巻き込んだ全世界メディア及び競馬ファンVS群馬地方競馬および群馬地方行政の第2バトルである。

群馬地方競馬、ツバキプリンセスの担当厩舎、そして群馬地方競走馬トレーニングセンター、そこかしこで日本語外国語の大攻勢だ。

いやはやこんなド田舎まで皆さんご苦勞様ですわ、群馬の青空の下、5月初めの陽気に満たされた瀨名酒造第2放牧地でキョロキョロ右往左往するツバキプリンセスを見ながら瀨名茂三は、隣で放牧地の柵にぐでつと身を預ける親友の桜葉翼を見てかかと笑った。

「何笑ってやがんだよ」

「いやはや、我が瀨名酒造としては主力商品その他もろもろがよく売れてうれしい所だよ。」

しっかしまあ驚いたぜ、急にうちの馬房開けてくれって言ってきたときにやあなんかあつたかと思つたが…」

「しようがねえよ、ツバキン所の敷浪爺さんにやありや酷つてもんだ」ツバキプリンセスが普段寢床にしている厩舎は群馬地方競馬の競走馬を代々預かつてきた家族経営の歴史ある零細厩舎である。

手数料はほどほどだが多くて3頭ほどしか預からず、その分手厚く大事にしてくれる小さくも信頼されているところで、空きが出ればすぐに馬主が聞きつけるくらいには人気である。

しかし所詮は地方競馬向けのこじんまりとした厩舎であり観光施設でも何でもない上に、大手厩舎のような見学設備もほとんど用意してない群馬トレセンから徒歩十分の競争馬のお家なのだ。

旅行でどういうわけかやってきた家族相手にお茶を出しながら、従業員ともども馬とのんびりする程度である。

地方競馬を取り扱う記者を相手にした経験は彼らもあるが、それだって預かっている馬が勝った時の地方記事やちよつとした季節特集などであるし担当記者も一流記者のトップレベルとは程遠いのはほんとした連中ばかりで互いに理解のあるやりとりししかない。

そんなのどかで喧騒とは無縁な厩舎にドバイワールドカップのトロフィーと大金を啜えたツバキプリンセスが帰ってきたのだ。

元々金銭的な理由で長期滞在は論外なのでドバイミーティング終了後の翌日には日本へフライト、歴史的偉業の余韻もくそもない定時退社で直帰である。

当然ながら現地取材などの申し込みは全てお断りであり、現地メディアもすべてシャットアウト、通訳一人では無理であるから群馬地方競馬陣営としては当然の措置のつもりであった。

祝勝会は日本でいい、その他もろもろまずは群馬に帰って一息ついてから、そんな風に考えて帰国した群馬地方競馬勢をメディアが追跡してくるのは当然であった。

ツバキプリンセスが05年の中央GIレースであるエリザベス女王杯を取ったときも蜂の巣をつついたような大騒ぎであったが、今回はそれをはるかに超える取材陣が押し寄せたのだ。

当然ながら処理しきれず、メディアのあの手この手の取材攻勢に経営者である老夫婦はひどく消耗しながら桜葉に相談してきたのである。

その取材攻勢は群馬トレセン内部にも侵攻しており、件のツバキプリンセスの度重なる奇行で日本の競走馬研究者たちも巻き込み更なる混乱が予想された。

これでは群馬の3強のみならず、ディーパインパクトをはじめとした中央や高知などの他の競走馬たちの調教にまで支障をきたす。

それに今はまだ取材メディアばかりだが、大荒れな群馬が落ち着けば次は正直考えたくもないゴドルフィンや巨大といった競馬界の大家連中が軒を連ねてくるだろう。

とにかく落ち着かせるしかない、一度火を消さなければ自分たちが焼身自殺してしまう。

結果、脳内に閃いたのがメディアの目標である3頭の瀬名酒造厩舎緊急避難計画であった。

「参っちゃまうぜ、こんな中年野郎まで追っかけてんだぞ？公営競馬の管理職の尻なんか見て何がおもしろーってんだ？」

「そりやお偉いさんが無様に転げまわってる尻なんておもしろーもんだろ」

「ははは…笑えねー」

「そう言いたいのはこっちだよ。まったく、人の会社を騒動に巻き込みやがって」

「悪いな、ああいうのをシャットアウトできるのつつたらお前んとこ以外考えつかんかったのよ。」

「ここなら取材とか全部断ったって問題ないし、会社の経営にも支障は出ないだろ？」

「うちはあくまで酒造会社だからな。取材なんざ受けなくても会社は回る、当然社内は関係者以外立ち入り禁止だし一般見学もやってねえ」

「ついでに馬にも知見がある、お前がいてくれて助かったよ。日本メディアもすっかり海外メディアに熱されて、オグリの件が頭から吹っ飛んだらしいしな」

「おかげで現在、各種メディアの取材陣の横暴に群馬地方競馬のみならず群馬県全般が迷惑している、というのが警察の見方だったりする。」

「もし何かあれば実力行使してでもつまみ出せ、責任は自分が取る。と警備員にはお願いしているし、群馬県警吾名署にも話を通して会社の周りを狩場にしてもらった。」

「おかげで評価を稼げると芦名警察署の地域課の制服警官や暇な私服警官がそれとなく散歩やパトロールに来てくれるし、仕事終わりの警官たちが瀬名酒造の直売所でお酒を買っていくので瀬名酒造もウハウハである。」

「なおその光景を警察の怠慢だと取り上げたゴシップ記事もあったが、群馬県警が公式な事実否定声明を出したあとと名誉棄損で裁判所に訴えた。」

「当然ながら無作法な記者は山ほどいるので、芦名警察署のみならず群馬県内の主要競馬施設近辺の警察署の拘置所は多種多様な人種が放り込まれ異例の満員御礼状態である。」

「中央が大見得切った砂のディープリンパクトがまさかの6着、しかも失格が出たから繰り上がり入着となりや顔面真っ青だったろうな」

「俺たちがその立場なら大喜びだが、中央の連中は泣きっ面に蜂だろうよ。長年うちらを下に見てた連中からすりや特にな」

「で、どうすんだよ？今はこれでいいが、今後ともとなるとうちでもきついぞ。ダイオーとノルンの目標だつてあれだろ？」

「ダイオーは大阪獲ったし予定通りドイツのバーデン大賞狙うつてよ。うまく行ったらフランス直行で凱旋門賞だ。」

ノルンは天皇賞・春で暴れたからな、休養挟んで先にアメリカだ。ステップ踏んでうまくいけばアーリントンミリオンステークス。

ツバキもうちで何度か稼いで調子がいいならコックスプレート狙いだ、芝とダートで海外GI制覇やつてみるだよ。

そんで帰ってきたらみんな有馬で一勝負して、群馬で調整しつつ引退レース、繁殖入りだな」

「ドイツとフランス弾丸旅行に、アメリカとオーストラリアかよ。ぎりぎりだな。大変だねえ、どこもビッグタイトルじゃねーか」

「仕方ねえだろ、うちは自由が売りのちんまい公営競馬だぞ？そこに出してエンジョイ馬主が思いつく賞つて言ったらどこも有名所だろ。」

それにでかければでかいほど負けても大して痛くねーしな」

「チャレンジャーゆえの特権か、あいつら楽しんでんねえ」

「シマカゼも出したらどうだ？まずはうちのSPIで叩いて、ゴールドカップでも狙ったらどうだ？」

「悪いな、次走は碓井に決まってる。そういうのはハルウララでも招待してやれ、この前の白蛇で2着だったろ？」

4月中盤に行われた高崎競馬場、距離1600メートルダートのマイルレース『白蛇記念・第一回』。シマカゼタービンはこれに出走して余裕をもって勝利。

そのレースの2着は復帰戦の一つとして出走したハルウララ、長年弱い弱いと言われてきた彼女だがその経験はやはり伊達ではなかつ

た。

10頭立てで行われたこのレース、出走馬は群馬地方競馬と他県地方競馬中堅勢で成績はほぼ同等の団子、総合戦績はハルウララがダントツで悪い。

レースもそれを絵に描いたように、大逃げのシマカゼタービンがトップを独走しその後ろに団子となった馬たちが潰しあい、そこから少し遅れてハルウララ。

その団子の中に彼女はいつもの差しで走り恐れもせず終盤で突っ込み、まるで分っているかのようにするりと抜け出して団子の中から首位に身をひねり出した。

結果、それよりはるか先にレースを終えたシマカゼタービンに続いた2着で着差は大差。だがそのハルウララも、3着に半馬身差で勝つて十分にベテランの実力を見せつけた。

「優先出走権獲ったんだ、高崎サマースプリントカップに出られるじゃねえか。そこからJBCあたりにでもねじ込むってのはどうだ？」

高崎サマースプリントカップは群馬地方競馬の重賞スプリントレースで区分はSPI、7月に行われる距離1200メートルのダートレースである。

そこで勝利するあるいは好成績を残したならば、日本地方競馬全ての強豪が集まるJBCシリーズに出走も可能だ。

JBCシリーズと言えば地方主催重賞であり中央競走馬も多く参加する交流重賞、各地の有力競走馬たちが鎬を削る魔境である。

高知競馬のハルウララが地方重賞からJBCシリーズに突っ込むとあれば、かつてのハルウララブームの再加熱もあり面白いことになるだろう。

放牧地の中でキョロキョロ右往左往するツバキプリンセスに、猫のように後ろからじりじり迫るシャッタードスカイの左耳に揺れる表青裏白のリボンを見ながら茂三はくすくす笑う。

シマカゼタービンの馬房から持ち出したのだろう小さなカエルの帽子をちよこんと耳の間に乗せ赤色灯を啜えたシャッタードスカイ

は、器用にツバキプリンセスの視界に入らないようにじりじりと距離を詰めていく。

楽しそうなことになりそうなのところだが、予想に反し翼は首を横に振って少し悩ましげに答えた。

「それがな、ちよいと変なことになってよ。高知の連中、ハルウララを宝塚に出すつもりらしい」

宝塚記念、中央競馬が主催する初夏のGIグランプリレースだ。

距離2200メートルの芝コース、中央競馬の強豪たちが軒を連ねる上半期の総まとめである。

このレースの特徴は何といっても、特別登録を行った競走馬の中からファン投票によって選ばれた上位10頭の馬に優先出走権が与えられることだ。

つまり成績が伴わなくとも人気があれば出られるレースと言えるが、これが適用されるのは中央所属競走馬のみだ。

地方競馬所属の競走馬も出走可能ではあるが、この場合は従来通りの『通算取得賞金+過去一年間の取得賞金+過去2年間のGI競争での取得賞金』の総合金額で判断される。

既に高知地方競馬と馬主の立山は連名で、ハルウララの宝塚記念出走登録を高知地方競馬公式ホームページと地方紙に大々的に告知する最終段階に入っているらしい。

「ほーん、随分思い切ったな。確か次はディープリンパクトも出走するはずだ、なるほど…向こうは相当トラウマになってるらしいな」

「もう二度と忘れさせないってか、そりやそうだろうな。気持ちはおかろよ」

何かのファンであれば、時代の流れで推しが徐々に忘れられていくのはつらいものだ。

ましてや高知地方競馬はハルウララによって救われたといっても過言ではない、彼女を良いように使った負い目はあれど彼女には感謝し愛していた。

そんなハルウララが自分たちの手を離れて無作法な馬主に振り回されているのに助けられず、目を追うごとにハルウララはファンから



忘れられて、取り戻すための署名活動の成果も減っていく。

世間から自分たちの英雄が忘れ去られていく日々は身を削られていくような日々だったであろうことは想像に難くない。

「宝塚の運営もまさかハルウララが登録してくるとは思わんだろうな。賞金額は足りてんのかい？」

「運任せ、出ないやつは出ないし」

「おいおい、そりゃただの宣伝じゃねえか」

一時引退するまでのハルウララの戦績は未勝利、それは今でも変わらないが通算出走数は116戦であり取得賞金も直近の白蛇記念2位入着により150万円を受け取って約300万円になった。

絶望的である、宝塚記念出走を考える強豪陣営にとって300万円程度は端金だ。文字通り桁が違う賞金を稼いでいる馬ばかりである。「ハルウララを潰すような真似は絶対にしないでだろうが、かといって大事にするにもちとはやい。

高知競馬からの恩返しってことだろうな。十分稼がせてもらったんだ、将来のためにもう一度売り込む気だよ」

「それで満足するような馬と騎手じゃねえぞ？あいつら競走馬と騎手だ、勝つために走ってる」

「そうだ、まさか本気で出れるなんざ古海も思っちゃいねーよ。本命は予備プランのエルムステークスのほうだ、そっちも登録してる」

エルムステークスは中央競馬が北海道で主催するダートレースであり、GⅢに分類されるれっきとした重賞レースだ。

距離1700メートルのダートであり、今のハルウララならば十分走り切れるマイルレースである。

しかしこれも中央重賞であるからして強い馬がそれなりに出てくる、ハルウララの戦績からすれば厳しいチャレンジだ。

ツバキプリンセスにちよつかいを掛けるシャッタードスカイのように気楽な戦いにはならないだろう。

後ろから近付いてきたシャッタードスカイの気配に気づいて後ろを向いたツバキプリンセス、しかし後ろには何もいない。

振り向く向きに合わせてシャッタードスカイは後ろに回り、体も後

ろを向くのに合わせてお尻の位置をキープして楽しげに赤色灯を振る。

その音に何かいることに気付いたツバキプリンセスがもつと鋭く速く振り向くが、シャッタードスカイもそれに合わせて後ろに回り儀式のようにグルグルその場で右回転。

その足音で即座にツバキプリンセスは振り向き返すがやはり誰もいない、すぐ脇を抜けてそそくさと後ろに回り込んだシャッタードスカイがフヒヒと嘶く。

「GⅢか、なら勝機はあるな。次は北海道か？ハルウララも大変だな、むこうはまだ結構冷えるぞ」

「そーいやお前、北海道でいい馬見つけたとかなんとか言ってたな、どんなのなんだ？」

「まだ話聞いてないのか？向こうで面白そうなやつ見つけたんだ。馬主に聞いたら次走でダメなら、未勝利のまま転用だっていうからつい買っちまったぜ」

「その口ぶり、奥さんにこつてり絞られたな？どんなもんなんだ？」

「滅茶苦茶鍛え上げられててでかくて筋肉ムツキムキだぜ、ちっこい重機に馬の皮を被せたのかってレベルだ。」

俺の見立てじゃマイラー、50万ポンドと出しちまったが惜しくな  
いって思ってる。

酒造りも結構筋がいいぜ、今も部長がせつせと仕込んでるところ  
だ」

「へえ、そりやよかったな。ところで…あいつらどこ行つた？」

フェイントをかけてようやくシャッタードスカイを視界に収め、悪戯大成功とばかりに逃げ出す彼女をプンスコ追いかけて回すツバキプリンセスに微笑ましく笑いながら翼は不思議そうに周囲を見回す。

ツバキプリンセスより少し前にこの放牧地に入れられたはずのホクリクダイオーとノルンフアングの姿が見えないからだ。

ああそういえば、そこで茂三は彼女たちがシマカゼタービンについて行っていることを思い出した。

今頃はタービンが最近熱心に取り組んでいる新酒の仕込みテスト

を見学してる頃だろうな。

## 第26話

俺の仕事は酒作りだ、ここ最近やけに競馬に連れ回されてた気がするが本業は瀬名酒造で酒を仕込み、背負って仕込んで熟成させておいしい馬練りを作る事。

当然ながら新製品の研究も仕事の一つ、昔ながらの味を継承するのもそうだが常に新しい技と味を追求するのも忘れてはいけない。

人馬が一体となって時代に合った酒造りの研究を怠らないのもこの瀬名酒造が長く存続してきた強みの一つだ。

だから瀬名酒造の馬練りの仕込みや制作には必ず人間と馬が力を合わせるし、馬と人間が一緒になって仕事をする工房もある。

今日の仕事はその工房、端つこの日当たりのいい窓際に作られた俺用のデスクに座って今日の研究に集中する。

デスクつつても市役所からのお下がりデスクを置いて、椅子の代わりに座布団敷いて其処にちよこんと座ってるだけだけどね。

デスクの上にはメモ帳とボールペンと鉛筆、種酒と酵母の状況が書かれた書類、電動鉛筆削り器、そして利き酒用の赤と白の盃。

トクトクと真つ白なぐい飲みの中に透明な液体が注がれる、何度見てもこの瞬間はいつも緊張するもんだ。

何しろ俺たち職人の成果が試されるときなんだからな、この試作品の味見の瞬間ってやつはな。

「スンスン、ブルウ…」(香りよし、色よし)

いつもの馬練りよりもだいぶ甘みの強い香り、その香りを持ちながら透明に透き通っている見た目。

ここまでは良い、ここまではこの配合でもうまくできているんだ。ぐい飲みを口で咥え、ゆつくりと傾けて馬練りを口に含む。

口の中で転がして舌で味わい、分析する。悪くはない、材料は厳選した酒米、仕込みに使った酵母も適量だ。

熟成前の状態も良好、そこから俺が練り上げて、しつかりと熟成させて落ち着かせた。

『ぶきぶき』

『わくわく』

甘さの強い酒米を使い、酵母も甘さが出る3番、配合は米多め、発酵が進んだら米を注ぎ足して濃縮したのも正解だろうな。

発酵時間も適正、甘さの中にえぐさもなければ苦みもない、酸味が心地よく甘さを引き立てているのかと行って自己主張もしない。

考えていた通り、甘くできている。酒精も通常のモノよりも強い、狙い通りに熟成過程での濃縮がうまくできている。

口に含んでいた酒をバケツに吐き出して、赤い盃の水で口を濯いでから一息つく。

『見たことない顔してるねー』

『真剣というか、厳めしいというか』

外野は無視。結論から言おう。

「バーボツ」『ダメだ』

「ほーん、どこら辺が?」

「ぼーは、ぼーは、はーじ、ぼは、ワーマ、ブルフィン!」

口をくちやくちやさせてからボディランゲージ。うん、これはダメだ、方向性は間違ってるが中途半端になってる。

そんな俺をダイオーとノルンと一緒に見つめていた酒職人の師匠である杜氏、源次郎さんの問いに感心したように頷いた。

いい味だが味にバラツキがある、米のうまみとアルコールが微妙にずれちまって雑な味が出てきてんだ。

それにこの配合はコメの甘さも強い、アルコール成分も甘い奴が出てくるからこの程度の酒精では足りない。甘さに負ける。

まろやかでコクがある味というには深みがないし重みが足りないからどうも舌の上で滑つちまって、思ったような重みがない。

『そんな味って変わるもんなの?』

『解りません、どう違うんですようか?』

外野は無視、無視したら無視!!

「ブルツ、ブルル」

「そうか、やはり味のバラツキはお前も気になるか」

『うんうん』

面目ない、俺の力不足だ。やはりまだまだ若輩という事、ざまあねえぜ、不甲斐ない。

やはり上手くはいかんのか？ブレンド用濃厚甘口馬練り生産企画は…

「馬鹿野郎、しよげんな。お前は最高の仕事をしてるよ、お前の考えた配合比率と酵母選択は間違つてなかった。

仕込みだつてお前はきっちりしてんだろう？ここまでの過程は良い、たぶんまだなんか足りねえんだ、この酒にはな」

「ブルツ…ブルルツヒン？」『ぐぬぬ…だとしても一体何が足りない？』

一体何がいけないんだ？酒米の分量と酵母の種類、源次郎さんの言う通り配合は間違いない。

計算通りならまるやかでどっしりしたより重みのあるアルコール度数の高い甘口ができてるはずなんだ。

だが出来上がったのはこの甘さも重さも中途半端な出来損ない、これだと味が負けてブレンド前提では売れない。

かといってここからひと手間…どうするか、酒も生モノだから長々と手を入れ続けても腐っちまう。

ここまでも結構手を入れてるからおそらく次が最後の一手、決まらなきゃこの酒はダメになっちまうだろう。

ここまで育て上げたこの酒を没にするには惜しい、何かねーか？なんか一つ…パンチ？

ただ甘い求めてんのにパンチ…まあないよりましか。右前足でパンチパンチ。

「パンチ？キレを付けるつてか？この配合にパンチ付けるのは…いや、考えてみるか」

『パンチ？食べ物にパンチするとおいしくなるの？』

『うーん、人間の考えることは分かりませんね。でも甘々を作るのは人間ですし』

すまん、今はこれしか思い浮かばぬ。もうちよい考えさせて、

なーんか引つかかりはあるけど出てこないのよ。

『はちみつジューズもパンチしたらもつと甘くなるのかな?』

さて、そろそろ現実見ようか。そろそろあつちも変なこと考え始めてるっぽい。

「ブフブフ、ぶほう!」『なんでお前らがここにいるねん!ノルン、ダイオー』

『あ、やっと気づいた。おひさー』

『お久しぶりです』

確かに久しぶりだ、ツバキがドバイで勝ってからというものの日本競馬界はお祭り騒ぎ、うちらも人気沸騰の中で売り上げ伸びて増産してかかりきりでトレセンにも最近行ってないし。

高崎競馬場に行ってもお前らいなかったからなあ、あれも行って走って帰っただけだから半日もいなかったけど。

でも客が去年とはまるで違ったな、人入りが半端じゃない上に外国人も結構見るようになったし。

人気はこいつらとハルウララのせいだろうな、ハルウララ復帰で高知競馬と群馬競馬が一気に一般トレンド入りしたとかテレビでやってたし。

外国人はツバキのせい、ドバイでやばい勝ち方したらしいじゃないか。ラジオの言ってることはちんぷんかんぷんだったがアナウンサーズゲー興奮してたぞ。

それをなんで源次郎さん連れてきちゃったの?そもそもなんでここにいんの?

「なんでここにいてのかって顔だな。群馬競馬の方から預かってくれて社長が頼まれてたんだよ、ほら、外騒がしいだろ?」

『そういう事ね、でもなんでこいつら入れちゃったの源次郎さん、ここに仕事場よ?』

「休憩だよ。酒はこつちで考えてくるから、お前はこいつら相手しちゃれ」

『えー?それ、俺の仕事なんだけど?』

メモ帳に『仕事』と書く、それを見て源次郎さんはけらけら笑った。

「お前のダチだろう？案内でもしてやってリフレッシュしてこい、行き詰まってんだろ？」

あ、解る？そーなのよね、実際結構悩ましい所よ…

「ヴッヘー」『しよーがねーな』

「待つて待つて！タービンちゃんヘルプ!!」

立ち上がって尻を尻尾で叩いていたら工房に飛び込んできたのは經理の良子ちゃんじゃありませんか。

うむうむ、今日も大変良いお胸であります。ビジネススーツで隠しても魅惑の揺れる震源地、このお馬さんアイは見逃さない。

そばかす童顔でスタイルのいい巨乳ちゃん、性格の純朴でちよつと警戒心薄いわが社の隠れた人気者、前世の会社にいたらそっちでも隠れた人気者だっただろうね。

これはあれじゃな？なんとなく察しがついて黄昏ると、目の前に經理の決算書類の下書きが突き付けられた。

うん、期限先だし重要度は低いけどさつきと済ませなきゃいけない面倒な書類だねこれ。

最近よくあんのよね、売上良くなってきたから時々經理部の仕事がパンクするの。戦力増強はしてただけどすぐにはよくななんないからなこれ。

「これ分かる？計算が合わなくてさ！」

『ほいほい、ちよいまっちー、これ片付けるわ』

「良子ちゃん？なんで經理部のお仕事こっちに持つてくるかねー？」

「しようがないじゃないですか、営業からなので新人に任せるには難しいうちも手一杯なんですよ」

「でもあいつ、經理部じゃないんだけど？」

「むしろうちに欲しいんですけど？」

「営業と一緒にのこ言わないでよ、あいつはうちのエースなんだからはいはいこういうのは任せなさいな、伊達に前世で部長やったりやしねーよ。この手の仕事は慣れたもんだぜ。」

『え？あのペラペラで何やんの？』



『??』

鉛筆を用意してトングで書類をぺらり…ふむふむ、新しい小売業者との定期納入契約に関する費用の決済ね。

場所は高知、相手は地元密着型のホテル、ローカルチェーンで何店舗かまとめてやるのか。

計算式は合ってる、けど目算通りの計算とズレる。ってことは、あーこれ最初の計算式が違うね。

ここを修正して、数字が689になるから割り算挟んで…よしできた。

これで答えが変わるから総計算も変わって…よし、想定内の変動に収まつてるぞ、ダレやねん計算式初手でミスったやつ。

こう見えて元人間、大企業の地方支社とは言え一応部長をやったたのよ？これだけなら5分かからんわ。

うーん、でもこれまだアラあるな。もう少しクオリティアップできそうなんだが…あ、いいところめっけ、ちよつと試案書いてやる。

この部署の仕事を統合して…この輸送費、2回に分けないほうが安い、見た目高くなるけどまとめたほうが総合的には二重丸。

この輸送ルートは…理由は予想付くけど信頼だけで橋本運送使っちゃダメだって。あの会社は大手の中でも地域密着型サービスが売りだ、各地の地方支社の影響範囲内だとパフォーマンスは最高だがそれを超えると動きが悪くなる。

この資料だと橋本運送の支社間配送ルートに乗せるつもりみたいだが、こいつは社内での物品運搬が主だから線が細い、俺たちの酒を運ぶには力不足だ。

ここは俺たちで別の会社を用意して一気に運ぶのが吉、そこで長距離輸送で大量配送可能かつ安全性に定評があるファーストアメリカントラックの出番だ。

この会社は大型トラックでの長距離輸送が持ち味、見かけはアメリカンだが仕事は繊細かつ丁寧だぜ。

こいつらで向こうに運んで橋本運送高知支社の配送ハブに納品、そこから橋本運送の個別配送で一気につてのがいいと思う。

「ヴフヴフ、ブウンブーブー」『良子ちゃん良子ちゃん、これ見れ、ここ、ここ』

「え、また何か妙案が…おお!!新しい輸送ルート!?しかもちよつと安くなってるのに安全性向上してる!」

当たり前だ、フーストアメリカントラックは長距離専門でこつちのノウハウは橋本運送よりも上。

専門家の分仕事を選ぶから、高そうに見えて総合的な観点を加味するとだいたい安値で済むんだよ。

反面、橋本運送みたいな小回りが利く配送ではだいたい劣るからそこはこつちで橋渡しすりゃいい、元受けとしてな。

で、それを連結させるとあら不思議、実は微妙に安くなる。でもこれ以上安くすると必要な仕事の質に響くからダメよ。

まあまだ試案だがたたき台にはなるだろ、あとで営業部長に進言してみてくださいよ。

あとは資料をもう少し鉛筆で修正、ここをこーして…こうで、こうじゃー!

『でけたよ、ついでに改良案もおまけ』

「ありがとう!早速部長に見せてくらあ!」

再びかっつんで行く良子ちゃん、元気で大変よろしい。スカート越しでもわかるお尻が大変ベネ!

「まったく、馬の前では走るな暴れるなど教わらんかったんかあやつは…」

「ブヒブヒ」『ここにいる馬なんてそんなじゃビビらんつしよ』

「それもそうか、じゃ、また後でな」

「へーへー」

うんうんと頷きながらデスクから離れる源次郎さん、大変理解があつて私大変助かつてます。

おかげで馬房に溜め込んだ言い訳用の古い教科書類は全く役立たなかつたけどな。俺の事疑問に思う人、もうこの会社にほとんどいないもの。

家庭ごみの収集前にちよつと探れば意外とあつたりするから取っ

といたけど…まあ教材として使ってるからいいか。

『さて、待たせたな。久しぶり。聞いたぜ、お前ら中央でまた暴れたらしいじゃねーの』

『う、うん、いま何やってたの？』

『仕事だよ、うちは酒造業だからな』

『ふえ〜…お酒造りって大変なんだね、背負って走るだけだと思ってた』

『仕込むだけでならそれでもいいけど、売り込んだりするなら色々面倒なことはあるのさ』

ただ作って軒先に置くだけじゃ売れねえかな。ちゃんと売り込みはしていかんとね、今は向こうから寄ってきてるがずっと続くもんじゃないしな。

この好景気、がつつくんじゃなくていざって時にすぐ出せる伏線と  
いうか繋がりが作りするには大変美味しい時間であります。

実のところ面白いようにあの手この手を仕込めるので大変有意義  
なんですよ。

しかも相手の営業メソッドは06年基準だからちよつと古い、俺の  
20年代のスキルと知識が面白いように刺さるんだよね。

こちとらリーマンシヨックとその他もろもろ、地震津波不景気など  
などで嫌でも鍛えられたからな。

うちの営業と経理部にも技術は流してるけど…あの書類が来るつ  
てことはまだまだだねえ。

『ま、うちのことはどうでもいい。それよりお前らのことだよ、ここま  
でお前らだけできたわけじゃないだろ』

『うん、ここの馬にタービンは今日仕事だって聞いてね、案内しても  
らったんだ。あのおじさんとはさつきそこであったの』

『酒取りに行った時か』

見知らぬ会社ってのは迷路みたいなもんだからな、この瀬名酒造な  
んか結構敷地広いけど歴史ある分いろいろ詰め込んでっから新人は  
よく迷う。

お前ら2頭だけでさまよってたら絶対迷ってるだろうからな、だが

いつたい誰だ？

『そういえば群馬競馬で走るみたいなこと言ってた！いきなり先輩とか呼ばれてびっくりしちゃったよ！』

お前らとは初見で先輩って呼べるくらいには知ってる…あ、ちょうどいい所に。

『あいつだろ、バターナッツ』

背中にブチを乗せたまま厩務員と一緒に工房の中にのっしのっしと入ってきたうちの新人、北海道岩見沢から来た身長160前後の茶色い筋肉もりもりマツチョコ馬。

まず体つきからして違う、訓練用に瓶ホルスターを体に巻き付けている体が太すぎる。競走馬がアスリートならあいつはボディビルダー、見た目は速そうには見えないけどインパクトがやばい。

筋骨隆々で鍛え抜かれた体はまさに筋肉の葦名城、実は中はサイボーグですって言われても信じられるくらいキレツキレの筋肉してるのが見て分かる。

足もゴン太、元が太い上に筋肉で出力アップと重装甲化を施してやる。競走馬のすらっとした足が小枝みたいに頼りなく見えるくらいだ。

俺も足は普通の競走馬よりも太くしてるはずなんだが、それよりもはるかに太い。

歩く足音からしてのっしのっしって音が違うってんだから推して知るべし、体重もそれに見合った堂々たる860キロ。

正面から見る胸筋と腹筋は動く一戸建て二世帯住宅、ミニミニハルの動く肉！

仕上がってるよ、仕上がってるよ！中にちっちゃい重機詰めてんのかい？トモがいいね、チョコランマ！

『古巣じゃあれで小柄って言われてたらしいぞ』

『マジで!?どこなのそんな魔境』

『北海道、前は岩見沢競馬場で走ってたそうだな』

『北海道ですか、どちらで？』

『ダートで短距離、ばんえいと聞いている』

『なに？そのばんえいって』

『小山のあるダートコースで重りを積んだソリを引いて走るらしい、重いと一トン近い重りをソリに乗せるらしいな』

『何その悪夢のレース、ワケワカンナイヨ!』

そりや俺たちとは基本関わり合いないし、あいつだつて親父さんが気まぐれ起こさなきゃうちに来ることも無かつたらうよ。

でも親父さんの見立ては間違つてない、あいつは走る才能あるぞ。最初がトロいっていう癖はあるけどスピードが乗り始めたらず止まらん暴走機関車だ。

直線での加速と突破力は正直言って計測不能なレベル、競り合おうとしただけで勝手に弾かれるってんだからパワーがダンチだ。

でもその足腰がクソ重たい重りとソリを引くつて競技には向いてなかった、あいつ自身のケツの踏ん張り方がレース向きだったんだよなあ。

『まさかそれ、群馬でやるだなんて言わないですよね?』

『いや、うちからは普通にマイル専門で出すはずだが：おーい、ブチ!』

ちよつとブチに訓練の成果を聞いてみよう。

「にやふ?」『なんだ?』

『ヴッフヴッフ』『あいつの具合はどんな感じ?確かマイル専門のはずだったよな』

「にやはは」『おうよ、才能はピカーじゃねえかな?茂三の言う通りこれは加速がつくと手が付けられんな』

とはいえ、速く走れるだけじゃいかん。バターナッツの体に巻き付けたホルスターから、担当厩務員がパンパンに膨れ上がったペットボトルを抜き出すのを見て俺はすぐに分かった。

『まだまだだな、乗り心地悪かつただろ?』

『そこはしようがねえさ、走り慣れてねえ。おいおい何とかしていくことになる。安定すりやマジで寝られる背中になりそうだけ』

「ほらバターナッツ、こいつをよく見てろ」

バターナッツの目の前でペットボトルの蓋を厩務員が捻ると、気の

抜ける激しい音と同時に振り回された炭酸水が爆発するように吹き出した。

それを見てバターナッツは目を見開いて少し後ずさる、それを見た厩務員はすぐにバターナッツの手綱を引いて押さえながら落ち着かせるように頭を撫でた。

「ほらな？まだ加減がなってねえ、おまえもあいつがやった時のことは見てただろ？飲んでみる」

「ぶるるツ…ぐえ〜」

「そうそう、すっかり炭酸抜けちまって不味いだろう？半分でもしゅわしゅわが残るくらいには頑張ろうな」

「いやあれで嘔き出さないのタービンだけじゃね？ 僕何度やっても爆発しちゃうよ」

『俺はできるぞ』

俺だって毎日毎日訓練に訓練を重ねてできるようになったんだからな、簡単にクリアされたら自信無くなっちゃうぜ。・

あいつはまず、走るときの衝撃を逃がすスキルを覚えないとだめだ。じゃないと足が先に悲鳴上げちゃうぜ。

『ふうんだ、できなくっても勝てるもんネー』

『お前が言うと言得力あるな』

『へっへっへー、大阪杯で勝ったからね』

ホクリクダイオーは大阪杯でしっかり勝利、確か次から海外だって親父さんたちが言ってたな。

どこだったか…ドイツかフランスだったな。いやはや、馬にも海外出張があるって聞いたときにはびっくりしたもんだわ。

『次は海外って聞いたぞ。気をつけな、向こうは日本と全く違うからな』

『分かってるヨー』

うわ、すごい楽しみって感じ。本当にわかってんのかこいつ、ツバキと一緒に海外と日本の違いを教えはしたけども…不安だな。

俺、海外出張となると苦い思い出あつからどうもな…だって前世じゃイラク出張で紛争真つただ中に放り込まれちゃって拳銃握って

たんだぞ俺。

営業用のサンプル持ったままスーツ姿で、居合わせたPMCの皆様たちと逃げ回らにやならんかったとか普通トラウマになるわ、ならんかったが。

『ノルンも天皇賞お疲れさん』

『ありがとうございます。みんなの期待に添えなかったのは残念ですが…』

『何言つてやがる、デュープと張り合つて2着だろうが。それともなんだ、まさか手を抜いたとでもいうんかい?』

『そんなことありません!全力で走りました、ですが…』

ノルンフアングは天皇賞・春で2着、がつつりデュープインパクトと競り合つた。

レースを見てたわけじゃないが、その口ぶりだと親父さんの言う通り相当惜しいところまで追い詰めたつてのは事実のようだな。

ノルンだつて何の作戦も無しに挑んだわけじゃなかったし、実際がつつりデュープをハメたらしい。

いつも通り失格スレスレの作戦でな、相変わらずルールギリギリ攻めるの好きよねお前ら。嫌いじゃないぜ。

親父さん曰く、デュープと大竹さんは見事なオーバーシュートを食らつて大層ヤベー状況に置かれたそうナ。

あのデュープ達をまんまとハメたこいつらがスゲーのか、それをまともに食らつた状態で強引に勝ちに行つたデュープがスゲーのか…

『届かなかったか、悔しいか?』

『悔しいに決まつてるでしょう、次は絶対に千切つてやります!』

『ひーっひっひっひ!!ヴフ』『なら何も問題なんてありやしねーよ。なら、どこで勝敗が決したかも研究してんのか?』

『もちろんです…とはいえ、まだ具体的な対策は思いついてないんですかね』

『相変わらずノルンは頭いいよねえ』

自信ありげにノルンフアングが笑う、こりや相当悔しい思いしたんだらうなあ。わかるぜ、作戦がうまく嵌つたのになぜか抜けられた

時、その技が力技とかなんだよそれって思うよな。

『そうだ、もしあなただったらあの場面でどうディープに対処して  
ましたか?』

『ディープに? そういわれてもそのレース見てたわけじゃないんだが  
…』

『今からお話ししますよ、ダイオーも何か案があったら教えてください  
い』

『いいよ! ドントコイ!!』

『待ってくれ、ちよつと準備すつから』

デスクの上を片付けて、メモ紙のでかいヤツを何枚か出す。鉛筆も  
電動鉛筆削り器で削って…よし。

凶案も何もないとちよつと想像つきづらいからな、こうしたメモの  
用意は必須だぜ。

『何今のガリガリするやつ! かっこいい!!』

『鉛筆削りだよ、あとでやらしてやる。悪いな、続けてくれ』

『では始めましょう、まず当時のコンディションなんですがね…』



## 第27話

2006年4月30日、京都競馬場は前年をはるかに超える人々がごった返し大賑わいを見せていた。

どこを向いても人人人、いつもの競馬ファンや賭博好き、競馬には縁がなさそうな子供連れに若いカップル、そして最も縁がなさそうな外国人観光客御一行。

京都競馬場及びその周辺はまさに人であふれかえっていた、そこに突撃を掛けるのは日本を代表する一流メディアたち。

誰もかれもがこぞって取材を敢行し、テレビカメラを振り回して中継映像を看板リポーターと一緒に垂れ流す。

そこに世界各国から派遣されてきた海外競馬メディアたちも加わってそこかしこで中継を流し、今日の大イベント前の京都競馬場を取材しまくっている。

その喧騒を近くのビル内部にある喫茶店の窓際に座る彼は、慣れた目つきで品定めしつつ自身も同じメディア関係者でありながら心底面倒な気分でそれを眺めていた。

「すつごい人ばかりですねえ、こんなの初めてですよ。ほら見てください、シユバツと！の取材スタッフですよ。」

朝ニュースの連中まで来てますし、あれ！アメリカの有名テレビ局もいる!!うちらも取材しに行かなくていいんです?」

「あんなの取材したってうちの記事にやそぐわんね、あれの大半は競馬のけの字も知らんど素人ばっかだぞ」

「それがいいんじゃないっすか?今や空前の第3次競馬ブーム真つただ中っすよ?」

「話になんねえよ、オグリん時もそれで痛い目にあつたからな。俺たちは普通の雑誌記者じゃねえんだ、やめときな」

第3次競馬ブームの到来、競馬メディアに属する彼もまたそのことは理解していた。

昨年のデイーパインパクトが見せた無敗3冠、そこからの無敗GI 4勝。

群馬地方競馬からやってきたかつての伝説たちの後継者たちが見せた日本中央競馬での地方競走馬によるGIレース勝利の3連発。

そして先月、3月のドバイワールドカップでツバキプリンスの勝利。日本出走馬初にして、地方競馬初の海外GI勝利。

その波乱中の波乱、大躍進の中の大躍進、初づくしというビッグニュース、それが日本中のお茶の間を席卷し、競馬ブームに火をつけるのは当たり前だった。

今日の天皇賞・春もそうだ、昨年の天皇賞・秋の優勝馬である群馬地方競馬の『ノルンフアング』が相棒の地方騎手と共に出走を決めている。

もちろん狙うは優勝、それが意味するのは地方競馬所属競走馬による日本初の実績だ。

競馬を知る者ならばこれがどれだけ難しい事か、挑戦できるだけでもとんでもないことだとわかる異常事態だ。

競馬を齧ったことがない一般市民でも『天皇賞』という単語からして国内でも由緒ある賞であるとわかりやすいこともあり、地方からやってきた田舎者が世界にも誇れる大会に出走するというカタルシスに酔っている。

しかも今回も今代の天皇が出席して直に観戦する天覧試合だ、解りやすいインパクトも十分である。

「オグリの時もこんな感じだったんすか？」

「そうだよ、俺もお前みたいな新入りの時にオグリキャップが来てな。あん時もどえらいブームだったもんだ。」

当然、いいネタががっほり拾えるって思ってたよ？先輩と一緒にうきうきして準備したもんだぜ。結果は惨敗だったがな」

「そりやまたなんでです？」

「相手がド素人すぎて話にならなかつたんだよ、どいつもこいつもオグリオグリでそればっかだ」

考えてみれば当然なのだ、若かった自分と先輩が取材した相手はオ

グリキヤップの活躍まで競馬に一切興味がなかったような一般人ばかりだったのだ。

当然ながら対抗馬のことも、レース場のことも分からない。天気の影響、馬場のコンディション、そして出走馬たちの健康状態からくる期待度なんてまるで理解していない。

まるで狙ったかのようにオグリキヤップ、オグリキヤップを見にきた、オグリキヤップが勝つ、と言うだけだった。これでは取材のネタにもなりやしない。

その上、当時のメディアが無作法なことをしでかして中央競馬全体に響感を買ってしまい、いい意味で向こうが見知った自分たちまで仕事がつぶらくなる始末だ。

「でもうちの雑誌、その時もいつも通りの濃さだったじゃないですか。出版部数も増えてウハウハだったんでしょ？」

「馬鹿野郎、俺たちみたいなのが競馬専門紙ってのはな、一般人にやまってく向いてねえの。読み手に知識がないとちんぷんかんぷんでな。」

あん時はひどかったんだぜ？俺らは普通に書いてるだけだったのに、苦情の電話がなぜか鳴りやまねえときた。

おかしいと思って今でいう炎上か？それ覚悟で問い返したらな、書いてることわかり辛いから返金しろとかほざきやがる」

かといって、注釈入れたりわかりやすい表現にしてみたら今度は常連の購買層から不評を買って踏んだり蹴ったりだぜ。

と、当時を思い出して彼は胸糞悪くなって鼻を鳴らす。昔を思い出してしまおうとどうしてもこういうノリには乗り切れない。

どうしても『あ、嫌な流れだ』という冷めた思考が過って自然と距離を置きたくなってしまったのだ。

「ほどほどに収まったら家族連れとかに話を聞いて終わりでもいいよ、写真はさつき取ったので十分だ。」

あとはいつも通り、各騎手と馬のコンディションを調べ上げて、いつもの連中回って情報を集めるぞ」

「了解です……ところで先輩、今回も出ませんでしたね」

「あの馬か？」

「ええ、あの馬です」

ふと思いつく昨年、皐月賞前の最終調整、日程の食い違いでデイー  
プリンパクトが古い地方競馬向けの群馬トレーニングセンターで最  
終調整をしなければならなくなった時のことを。

当時から強者の風格を持っていたデイープリンパクトを真つ向か  
ら叩き潰した気色悪い目の栗毛の牡馬。

あの時の模擬レース映像は今も編集部に封印されている、中央競馬  
からの圧力以前に当時の上層部が全く信じてくれなかったのだ。

あれ以来デイープリンパクトは最終調整以外でも群馬トレーニング  
センターを訪れる半ば常連状態、帯同取材はほとんど断られている  
が理由は分かり切っている。

そして流れてくる話を聞く限り、デイープリンパクトは一度も勝て  
ていないという。

「秘密兵器のつもりか、それともほかに理由でもあるのか…でも向こ  
うじゃ出てきてんだよな、輸送に難があるって話も聞かねえし。いつ  
たい何なんだ？このノータッチ」

「まあ馬主が酒屋ですし、案外ほかの仕事があるからってだけだった  
りして」

「競走馬でそれはねえだろう、そろそろ行くぞ」

「ういつす！あ、途中のおもちや屋に寄っていいいつすか？」

「なんだ？息子のおもちやなら仕事終わりにしとけ」

「うちのじゃなくて取材相手にお土産つすよ。群馬のノルンファン  
グってユニークなヤツで戦車のおもちやがスゲー好きらしいつす。

戦車のミニカーとか持ってたら気に入ってもらえんじゃないつ  
すか？」

「あの馬主にしてこの馬ありか…気に入られんのも大事だな。5分で  
済ませろ」

コーヒーの残りを飲み干し、上着を整えながら立ち上がる。愛用の  
カメラとボイスレコーダーを抱え、彼は記者として意識を切り替えて  
店を出た。

店の外にはいまだに観戦客たちの喧騒が広がっている、この歓声と

熱気が最後にどうなるのか、彼にもまだ予想できなかった。



「ブウンブウン、ブルルッ！」

「お前、相変わらず好きだねえ」

馬房の中で器用にちよこんと座りこみ、両前足でお気に入りの戦車の模型を走らせて遊ぶノルンフアングのいつも通りの姿に、主戦騎手である田島は同じように座り込みアンパンをかじりながら眺めていた。

中央の厩務員や騎手達からは変な目で見られるが、愛馬と一緒に飯を食らうというのは群馬地方競馬では当たり前のことなのだ。

同じ釜の飯を食らうというわけにはいかないが、こうして並んで飲み食いしているだけで不思議と一体感のようなモノが湧いてきて相手がより理解しやすくなる…気がするのである。

「ノルン、知ってつか？ 今日も天覧試合になっちまったぞ、正直俺実感わかんわ」

「ブルル？」

おもちゃの戦車から目を離して首を傾げるノルン。

「天覧だぞ天覧、陛下が見にくるんだよ？」

「ふいーは？ブルルッ？」

「去年の秋天、あの偉い人、覚えてんだろ？」

「ブルッ!? フィー! ふえーは! ふえは!!」

「そう、変な話になったもんだよな。そういうもんは中央の連中の仕事だったのによ」

悪い気はしないがやはりいざとなると現実味がないものだ。田島とて人間である、一度はこの手の大成を夢見たことはあるがまさかいきなり転がり込んでくるとは思ってもいなかった。

ましてや件の魔境である中央競馬に移籍して中央所属の素質豊か

で最新の調教を受けて仕上がったエリート競走馬たちに乗って挑むのではなく、勝手知ったるド田舎の群馬地方競馬に所属したままこれまた勝手知ったるノルンフアングに乗っての出場である。

ノルンフアングも中央所属の名馬たちには負けない強い馬であるのは理解しているが、田島の中ではノルンフアングは群馬地方競馬の戦車好きな愛される癖馬だ。

「ここら、何やってるんだい健介君」

「あ、西さん」

ノルンフアングに話しかけていた田島が振り返ると、ピシツとしたカーキ色の軍服に身を包み背筋をピンと伸ばした老男性がしわくちゃの顔を困ったように笑わせていた。

ノルンフアングの馬主であり群馬でも有数の米農家であり資産家である西竹一その人である。

既に齡100歳を超えながらピシツと自らの足で立つその姿を見てノルンフアングが目の色を変えて小さく嘶く。

そして馬房の柵を自ら器用に開けて、戦車の模型を口に咥えたとトコトコと彼に歩み寄って顔をすり寄せさせた。

それを西も手慣れた手つきで受け止め、優しく頭を撫でつけながら朗らかに笑う。

流れるような脱走であるが田島は何も言わない、やっていい時と悪い時くらい彼女も重々理解しているのは知っているからだ。

「よしよし、今日も元気そうで何よりだよ」

「相変わらずお前は西さん大好きだねえ」

「なんだい、嫉妬しちゃったかい？」

「馬鹿言わんでください」

食べかけのアンパンを口に放り込み、一口で処理しながら田島も のっそりと起き上がって西を出迎える。

「そんな格好してこんなとこ来てよかったんすか？ また変な雑誌が騒ぎ出しますよ？」

「過去は過去だ、それに私は軍人としてあの戦争を戦ったことに後悔はない。陛下の拝謁を賜るならこの服以外は考えられんよ」

「でもそれでこんなところに来なくてもいいでしょ、汚れちゃったら不味いって」

「軍服つてのは汚す時はとことん汚していいのさ、それに今はクリーニング屋に出せば大体平気だしね、大丈夫大丈夫」

「ならいいっすけどね。で、なんかありました？」

「なあに、ちよつと様子を見にきたただだよ。緊張しすぎてやしないか心配だったけど…この様子だと平気そうだね？」

あ、これ自分も心配されてるわ。田島は少し照れくさくなった。

「正直、緊張するほど理解してないって感じですよ。ノルンと一緒にいると、なんかいつものレースと同じみたいな感じしますし」

「それでいい、その平常心こそ大切だ。人も馬も、勝負事で冷静さを欠けばうまくいかないのは目に見えてるからね」

さすが硫黄島の戦い経験者は違う、田島は西の何気ない一言に感じる重みに思わず背筋が伸びるように感じた。

「私も正直緊張してるんだ、まさかこんな機会に巡り合えるとはな…君のおじいさんのおかげだよ」

「また始まった、老けちまいますよ？爺様」

「もうとつくに老けとるよ」

「海兵隊の連中を余裕でぶん投げる100歳がどこにいますかっての」

「硫黄島で戦った連中よりはるかに温かっただけだよ」

「うちの爺さんとおんなじこと言ってるぜ…」

田島は苦笑する。硫黄島の激戦の中で西の背中を守り生き残らせ、最後の指揮官として降伏を選択させたのは彼の部下であり仲の良かった彼の祖父だった。

主戦場となった第2陣地にて米軍を相手に徹底した持久戦による激戦を田島祖父も繰り返していたが、次第に劣勢になる中で想定よりも敵の動きが良いことを察した彼は持久戦継続のために西に『包囲殲滅されるのを回避するため頃合いを見て転進』を提案し、一時的に機動戦を行いつつ栗林中将のいる本隊へ合流を決めさせたのだ。

そこで動かなければ死んでいただろう、と戦後西は米国のインタ

ビュアーに答えていた。

2月終盤、置き土産の罫でてんこ盛りにした陣地からの撤収は成功したものの米軍の追撃により合流できず無線を失って本隊との連絡手段を失いながら丸一日かけて島内を迷走、躍起になる敵を引き連れながら僅か5両にまで減った戦車で目の前の敵をなぎ倒す撤退戦が幸か不幸か米軍全体を引つ掻き回した。

そして迷走二日目に部隊が突破口を求めて偶然にも摺鉢山に近づき米軍はさらに大混乱、それを好機と見た西は摺鉢山麓を敵中突破してさらに引つ掻き回して活路を見出そうとするが、それを奪還部隊と勘違いした米軍の抵抗に足止めされる。

嫌にしつこいので抜け出すために集中攻撃を仕掛けて追い払ったら米軍の摺鉢山守備隊が総崩れ、いつの間にか摺鉢山を奪還してしまった。

想定外にも成功をしてしまった摺鉢山の奪還だったが、機動戦による部隊の消耗に休息が必要と判断した西は一晩だけ摺鉢山に籠城を決意。

だが一夜明けたら立て直した米軍が顔を真っ赤にして完全包囲しており、米軍が補強した摺鉢山陣地にて完全に敵中に孤立した。

再び奪還に躍起になる米軍相手に摺鉢山の地形と鹵獲した米軍の集積物資を使用して戦い、米海兵隊の摺鉢山奪還攻撃の戦術を逆手にとつて逆に焼き払いながら戦い続けていたが戦況は好転することなく、摺鉢山の元米軍施設及び物資鹵獲によって補給と水に困らないが状況は終わりの見えない迎撃と殲滅を続けるばかり。

自らも負傷しながら陣頭指揮を執り、自分たちよりも碌な補給もなく追い詰められていく栗林中将率いる本隊とは鹵獲無線の不調で連絡が取れず、当然救援にも動けず、やがて最後の攻勢に出た本隊が放った大本営への訣別の電文を傍受し自らも打って出ようとするのを田島祖父は決死の覚悟で押しとどめた。

自らも本業は競馬騎手であり、馬関連の話で馬が合った彼は西の愛馬であり帰国を待つウラヌスを理由に迫ったのだ。

相棒に満身創痍の部下たちに突撃を命じて散ったとあの世で話す



つもりか、こんな有様で胸張って死にましたなんて言えるのか、そんなあんたを相棒は一体どう思うだろうな。

度重なる激戦と苦難の中で意固地になりかけていた西の心にこれが効いた、大きく狼狽えた西の姿に張りつめていたものが切れてしまったほかの部下たちも涙を浮かべて懇願した。

生きて帰りたい、家族に会いたい、高潔な世界のバロン西、自分たちを生きて帰らせてくれ。

その返答はすぐにはなかった、できなかつたのだと田島祖父は孫に語った。彼も悩んでいたのだ、当然だと当時の誰もが納得したという。

そして3月25日、返答を控えた彼は一人で遠くから響く激戦の音とあわただしい米軍陣地を眼下に見ながら一晩黙考し、最終的に度重なる降伏勧告の一つに応答する事を決意した。

その後米軍の奪還部隊を撃退しながら籠城しつつ決死の伝令を出し、西の言葉に呼応して各地から集まった2000名近くの将兵と共に降伏を受諾。

1945年4月3日、西竹一の戦争は終わった。

「田島中尉のおかげだ、彼が止めてくれたからウラヌスにまた会えた、こうして、あいつの孫の晴れ舞台に巡り合うことができた」

「またそれだ、聞き飽きてますぜ」

ノルンフアングにはウラヌスの血が流れている、遠い祖先、数いる祖父の一頭に過ぎないとはいえ、彼の血は今もここにある。

そして今や日本競馬の時の一頭、群馬地方競馬3強の名を持つ名馬となつてここにいる。

「西さん、今にも死にそんなこと言わんでくださいな」

「何を言うか、まだこいつの子供を取り上げるまでは死なんぞ」

「そつすか」

一体いくつまで生き続ける気だ、でもやると言ったらやりそうだと田島は呆れた。

未だに大好きな馬に関わり、馬主として違法にならない程度であるが馬に密接にかかわる彼は全く衰える気配がない。

そうでなくてもいまだに世界各国の軍から話を聞きたがって若い衆が顔を出してくるのでこの爺、常にバイタリテイ溢れすぎである。「そういうお前こそ、いい顔しとる。こんな大舞台なのにほほ自然体とはなかなかできん」

「でも正直、ちよつと緊張感ないとやばいとも思うんすよ?」

「気の抜きすぎも行かんのは確かだ、キミの気持ちも分かる。しかし陛下のご高覧を受けて走るというのに変な緊張をもったままじゃあ、お前もノルンも持たんよ?」

陛下は君たちの全力勝負をご覧になりたがっているんだ、緊張でいらんミスしてそれに応えられなきや死んでも死に切れんと思うがね」「そんなこと言っても、変にいつも通りだとパドックに陛下が見に来たらナチ式敬礼やりかねませんぜ。

こいつ、前の秋天で陛下には敬礼するもんだって覚えちまっていますから」

田島が思い出すのは去年の天皇賞・秋、自分たちが破ったヘヴンリーロマンスの騎手である榎本騎手が退場前にヘヴンリーロマンスともどもメインスタンド前に赴き、陛下に向けて帽子を脱いで最敬礼したのを見てしまったのだ。

それでその場の主役は一気に搔っ攫われたのだが、そんなことより重要なのはノルンファンクが感じたのは『自分だつてできる!』という対抗心を覚えたことだ。

何分、西の影響で戦車好きという趣味に目覚めている馬である。ミリタリーの知識に関しては妙なほど理解している。

そして気晴らしもかねて映画をちよこちよこと見せるようになってしまったのもあり、馬でもできる敬礼としてアレを覚えてしまったのだ。

「ピーヒ、ヒヒンツ!」

「やめやめここでやんな」

「…見事なナチ式敬礼だな」

後ろ足で立ち上がり、右前足を前にピンと張って突き出し左前脚はピシツと下ろして制止する敬礼。ナチスドイツのアレである。

常日頃からホクリクダイオーと押し相撲をしているせいで立ち上がるのも慣れていているからか、およそ3秒は楽に立っている。

戦車好きな彼女にとって戦車が大活躍する欧州戦線を題材にした映画や歴史番組は貴重な娯楽、その中の記録映像でドイツ軍人がこれをするのを見て覚えてしまったのだ

つまり奇行だ、彼女は真面目腐って真似をするから余計にシニールなのであるが、この場合は恐ろしく不敬極まりない上に問題行動ととられかねない。

群馬地方競馬のパドックなら冗談で済むが場所が場所、場合が場合であるので非常にまずいのだ。

しかもノルンフアングはそれを理解していない、彼女の中では所詮数ある敬礼のひとつなのである。

シマカゼタービンに頼んでも変わらなかつたのだからどうにもならない、馬に人間の歴史を説いてもしょうがない、種族が違うのだ。

これで陛下の前でも万全だぜ！と氣勢を上げるノルンフアングがやる気に満ちているからなお困る。

「うーん、それは困るなあ：田島君、何とか曲げさせられない？それか頭を手のほうにもつてくとか」

「無理っす、敬礼じゃなくて『ごめんちやい』になつちまうんで」

「ぶえッ☆」

「ていつ」

スムーズに四足歩行に戻ったノルンフアングが舌をだらんと出してわざとらしく変顔を決めてウインクしたので田島は軽く額をはたいて突っ込む。

まったくもって調子に乗ると愉快的相棒である、それだけ緊張していないのは良い事が悪い事か…

「うーん、さすがにここでは笑えんなあ：かつこよく決めたいっていう気持ちは理解できるけども」

「下手な対策は愚策ですかんね、あとが怖い」

「ヒヒーン！フンスフンス！」

誇るように鼻息を上げる彼女、普通の馬のような奇行の対策をしよ

うものならば確実に機嫌を損ねていけない知恵を働かせてくるだろう。

仕事後のプライベートでの仕返しが怖い、また馬房の出入り口に落下トラップを仕掛けだしたり調教の後で帽子やタオルを奪われて隠されたり、いつの間にか服や車に泥のひづめ跡が付けられてたりするだろう。

なので田島は普段通り、ノルンファングに話しかけて何とか説得しようとした。

「ノルン、高崎でならいくらでもやっていいからここじゃ我慢してくれない?」

「ヒンヒン」

「首を横に振らないでくれ、それはちよつとダメなんだよ、デリケートな問題だから、ね?お願い」

「ヒンヒン!」

「ダメなものはダメなのです、とな?決心は堅いか…良い馬に育ったものだ。ならば全力でやってこい!」

「いやちげーでしょ爺様!!今回だけはヤベーって!」

「陛下も馬のやることに変な勘繰りはするまいよ」

「陛下はそうでもメディアがいらんことするのが目に見えてるんでダメです」

「…今も昔も変わらんな、あのお調子者ども」

「ふえでい?…ぶあー…ふあつく」

「誰だ今の?」

「おや、なんか分かってくれたみたいだよ?」

「うそだろおまえ…」

「フン…」

先ほどまでのやる気が少し失せ、心底残念そうにケツと鼻を鳴らすノルン。どうやら自重はしてくれらしい。

「すまない。今、よろしいですか?」

不意に声を掛けられ、全員の視線が一緒に声がした馬房入り口のほうに目が向く。

そこにいる人物に田島は思わずびっくりした。なぜなら彼を田島はよく知っていたからだ。

「小峠騎手!？」

「知り合いかい？」

「あ、いや、一方的に知っているだけとか…」

「もう騎手じゃないよ、お初にお目にかかります田島君、西さん。彼女の父に乗せていただいております、小峠貞治と申します」

小峠貞治、ノルンファングの父であるミホノブルボンの主戦騎手だった男。その唐突な登場に田島は思わず興奮を抑えきれなかった。

## 第28話

京都競馬場は空前の満員御礼だった、人がみっちり詰め込まれたよ  
うな観客席を見上げながらジョッキーの田島はノルンフアングに騎  
乗してコース上に出ていた。

既にコース上には出走馬全頭が出てきておりゲートも引き出され  
て最終調整の真つ最中、万事すべて整えばいつでもゲート入りが始め  
られる状態だ。

天候は晴れ、芝の状態は良好、素晴らしい競馬日とでベストコン  
ディションと言えるだろう。

周囲から感じる視線を無視して18番のゼツケンを身に着けたノ  
ルンフアングを気儘に歩かせ、集まってくる視線をどこ吹く風と袖に  
して挑発し返しつつ周囲を自らも今日の相手の馬体を見直す。

このレースで地方競馬から出走しているのは自分たちだけで、交流  
服姿の自分は実に目立っている。

(やっぱ中央はやばいわ、どの馬も仕上がりが半端ない。群馬もだい  
ぶ変わったけどまだここまでじゃないなあ)

最近は粒ぞろいの新入りが育ってきて群馬地方競馬の幅もだいぶ  
厚みが出てきているのだが、やはりこういった仕上がりの馬が軒を連  
ねるのはさすが中央競馬といったところであろう。

どの馬も非常に怖い、ノルンフアングに出会う前の自分ならばいの  
一番に騎乗拒否している魔境っぷりだ。

『1枠1番	ストラタジエム
1枠2番	マッキーマックス
2枠3番	チャクラ
2枠4番	ローゼンクロイツ
3枠5番	トウカイトリック
3枠6番	トウカイクカムカム
4枠7番	デーパーインパクト
4枠8番	ビッグゴールド
5枠9番	デルタブルース

5 枠10番 アドマイヤモナーク  
6 枠11番 リンカーン  
6 枠12番 ハイフレンドトライ  
7 枠13番 ファストタテヤマ  
7 枠14番 アイホツパー  
8 枠15番 シルクフェイマス  
8 枠16番 ナリタセンチュリー  
8 枠17番 ブルートルネード  
8 枠18番 ノルンフアング』

しかも18頭立てである。地方競馬ではまずない大所帯のレース、これにはさすがにノルンフアングと田島はまだ経験が浅い。

地元群馬でも多くて10頭くらいが最大で、それ以上は全て中央に出張してからの経験しかない。

(危険なのは大体：11番リンカーン、1番ストラタジエム、14番アイホツパー、6番トウカイカムカム、13番ファストタテヤマかな?)  
地方競馬騎手からすれば全頭が超の付く危険牌なのであるが、その中からこのレースでいかにも頭を出しそうな相手を選別する。

9番デルタブルース、4番ローゼンクロイツ、8番ビッグゴールド、17番ブルートルネードあたりも十分仕上がっているように見える。鞍上にいる今日の相棒たちもやる気一杯だ。

16番ナリタセンチュリーも怖い、前走のGⅡ京都記念では同じ鞍上を乗せて一着を取っている。

その勢いでここでも暴れられたら面白くないだろう、なんだか騎手に親近感が湧くのだが。

(怖い怖い、とはいえマークすべきはこいつらじゃないから、考えすぎないようにしつつ警戒しないとな)

いくら強敵とはいえ、無視しては痛い目に遭いそうな敵とはいえ、今回はそうもいってられない。

絶対には口には出さないが、まだ走ったこともない彼ら彼女らよりもいつも走っているライバルの見知った実力のほうがどんな前評判よりも田島には怖いのだ。

ノルンフアングも分かっているようで、彼女の足は自然とお目当ての馬に近寄っていく。顔見知りか居るから近づいているだけなのだろうが。

「ヒーヒーン！」

「ブルル、ヒヒーン!!」

ノルンフアングの声に気付いたディープリンパクトがいつものように答えてあちらも近づいてくる。

大竹もそれに気づいて田島の姿を見つけると、にこやかに手をひらひら振って答えてくれた。

「ういっす、大竹さん。これまたヤベー具合にしてみましたね？」

「どうも田島君、仕上がりには自信があるよ」

すっかり顔見知りになった大竹と、彼の跨るディープリンパクトからほとぼしるオーラのようなものに田島は気圧されそうになった。

彼らは本気だ、最初から全力でこの勝負を取りにかかってきている。いつもの笑顔の裏に音を立てて燃え盛る闘志が見えるようだ。

特に大竹から感じるやる気がすごい、ディープリンパクトもいつも以上にやる気に満ちているが大竹のそれはさらに上をであろう。

彼はカネヒキリと共にドライブワールドカップに赴き、群馬地方競馬の桂井とツバキプリンセスに負けた、この敗北はやはり大きい。

特に大竹に限ってはその前に競い合った2005年の有馬記念での敗北をそのまま返されたような形になったのだから。

だからここでは負けられない、ホームである日本の中央競馬で、最高の相棒であるディープリンパクトに騎乗して負けるなど言語道断といったところであろう。

(怖いねえ、うれしいねえ、そうだよ俺たちに注目しときな、それが一番やりやすい：とはいえちよつとガス抜きしとこ)

変な空回りされていけないミスをされても困る、大竹とディープリンパクトの走りは自分たちの戦術に多大な影響が出るのだ。

大竹ほどの大ベテランに入らないおせっかいかもしれないが、これも友でありライバルとしての誼だ。

「そんなに見つめないでくださいよ、イケメン過ぎて恥ずかしいっす



：俺ノン気なんで」

「ホワツ!？」

「フンスフンス!」

「はッ?! いやいやそんな気毛頭ないからね僕!! あとディープもなんで尻尾でお尻抑えるの!？」

「ははは、冗談ですよ」

「…君、緊張つてもんがないのかい? 前もそうだったよね?」

自分がからかわれたことに気付いた大竹が若干げんなりしながらも笑い声をあげる。

彼が言っているのはアルトアイネスに騎乗していた時のことを言っているのだろう、あの時は大竹の乗るタイムパラドックスを相手にアルトレーネに乗る桂井と共に大逃げをかましてやったのだ。

周囲の空気がなんだか一変している気がするが田島は気にしなかった。そんなものどこ吹く風である。

「うちには一つ家訓がありまして、それを実践してるんで緊張してる暇ないっす」

考えるのをやめない、動くのをやめない、見るのをやめない、田島の祖父が掲げた我が家の家訓のようなものだ。

最後まで考えろ、どんなに怖くても動くのはやめるな、耐えがたい現実でも目を逸らすな、でなければ死ぬ。

思考停止したら死ぬ、動きを止めたら死ぬ、現実逃避したら死ぬ、だから現実を見て常に考えて最善を尽くせ。

祖父が第2次大戦を通じ、硫黄島の戦いで得たどんな世界でも通じるありがたい教訓である。

ただ頭を働かせるのに忙しいだけで、緊張というのは意外と忘れられるものだ。

「そういえば君の家も結構歴史あるんだっけ」

「瀬名家には負けませんがね、戦前から競馬騎手ですわ。今日は負けませんよ、うちにある秋が春を待ってるんでね」

「残念だけど今日は諦めてくれるかい? ディープには公式だけでも無敗でいてもらうんだ、これからもずつとね」

「ヒヒーン！」

「フヒヒーン!!」

「フフフフ…」

多大ににらみ合って笑いあう、互いにもう気心知った競争相手だ。負けないとも、負けてなんかやらないとも、だから勝つ。

二人と二頭の考えは同じだ、こいつらが今日の相手だ。大変恐縮だが、他の連中には退いててもらおう。

「そろそろ時間だ、行こうか」

「もちろん、あ、ここらこらまだ順番じゃねーよ」

「あつ、ディープもダメだよ。群馬じゃないんだから待つて待つて」

「ハッ!?」

つついっついっもの調子で二頭が順番無視し、自らゲートに突っ込もうとしたのでどうにも締まらなかった。



《ゲート入りで少々アクシデントがありました、全頭発走準備が整いました。どうでしょうか?》

《そうですね、ゲートを嫌がらないというか率先して入ろうとするっていうのは珍しいですね》

解説と実況の声が流れる関係者席、その最前列でよく見える位置に陣取った小泉は隣に控えて一頭の馬に注視する彼に少し笑みを浮かべていた。

「どうだった、ノルンフアングは?」

小峠貞治、元騎手であり現調教師。同じ栗東トレーニングセンターに厩舎を持つ自分の同業だ。

「思いのほかブルボンに似てたよ。すまないね、変なお願いしちゃって」

「いいんだよ、こういう機会でもないとなかなか難しいんだしな」

後学のためにディープリンパクトの天皇賞春出走に同行させてほしい、小峠にそうお願いされたときに小泉には彼の目的が分かった。た。

この大一番、同業としてその理由は理解できるし嘘ではないのだろう。同じ調教師としてさらに先を見据えるために勉学を怠らない姿勢は実に感動だ。

しかしそれと同時に彼は、どうしても会いたかったに違いない。あのミホノブルボンの娘に、堂々と触れ合いたかったに違いない。

小峠は調教師としてはまだ発展途上とはいえ、元騎手として馬も見る目は確かだ。ゆえに人気はほどほどにあつて暇な時間は少ない。

昨今はノルンフアングの活躍もあり、父のミホノブルボンに乗っていた騎手がやっている厩舎として人気も上がって小峠は忙しい日々を送っていた。

どうにかして触れ合いたいが仕事は放っておきたくない、どうにかして理由を付けたい……と考えた結果がこれなのだ。

「すごい馬だったろう」

「あいつより表情豊かだったけどね」

「確かにな、ダイオーほどじゃないけど似てる」

「うん」

心なしか小峠の口は重い、嫌なことがあつたというより感慨深くて口数が減っているといったところだ。

「正直、びつくりしちやつたよ。まさかブルボンの娘がG1取っちゃつて、しかも地方競馬からとかね。」

で調べたらあの西竹一さんが馬主やつてるし、母馬にまさかのウラヌスの血でしょ？目を疑つちやつたよ、嘘だろ？ っつて」

《スタートしました、おっとディープリンパクト出遅れまして最後方からのスタート。》

先頭はノルンフアング大きく逃げる、まさかの逃げです。2番手から先行、トウカイトリックとビッグトルネードが競り合つて、外からブルートルネード。

一気に逃げたノルンフアングをほかの馬がそれを追う形になつて

います。右回り3200のこのレース、縦長の展開になりそうです」  
「自分の知らないところでとんでもなく立派に育っちゃってさ、正直もう驚く以外ないよホント」

もはや言葉にならない、といった具合にハナを切って逃げを打つノルンフアングを見つめる小峠の目はいつに無く優し気だ。まるで祖父が孫の活躍を見ているかのようだ。

「実際彼女は強いよ。でも今回は逃げか、なかなか大胆に出てきたな」  
「彼女、逃げはできるの？」

「できるね、群馬で練習してるの何度も見たし」

だがこの大一番で得意の先行策をやらない理由はあるのだろうか？と考えて小泉はため息をつく。

何分群馬地方競馬の競走馬は主にあいつのせいで普段から大逃げペースで先行やら差しやら追い込みをやらされるのだ、普通の逃げならば素のままできるのである。

《向こう正面からぐるっと回って一度目のホームストレッチ、先頭は変わらずノルンフアング、白い馬体を弾ませて悠々と逃げています》  
》

《蠶が金にも見えて綺麗ですね、最初はどうかと思いましたが案外イケるかもしれませんね。坂に負けない力強い走りです》

《2番手は少し遅れてブルートルネード、3番手にビッグゴールド、さらにその後ろにシルクフェイマスとローゼンクロイツときまして縦長のレース、みんなほぼ一直線に駆けていきます。》

おっと後方からじわつと加速してきたのはディーピンパクト、トウカイカムカムと並んで6番手、ここで先頭を捉えるつもりか？》

《これは少し勝負を急いたかもしれませんね》

「いや、これでいい。ノルンに好き勝手させていたら怖いぞ」

小泉は実況の言っていることに小声で否定を入れる。一般的な解説としては間違っていない、ディーピンパクトは一般的な競馬ならば明らかに仕掛けが早い。

しかし今先頭を走っているのはノルンフアングだ、群馬地方競馬であのシマカゼターピンの大逃げを相手に常に戦っているノルンフア

ングだ。

3200メートル一本程度の距離を、一般的な大逃げの範疇で走るならば十分に走り切れるスタミナはあるとみていい。

それをはるかに超える爆速大逃げをする相手が群馬にはいる、それと比べたらこのレースはいささか悠長だ。

ここにあの馬が居たらこんな風に悠長な構えはしてられない、あれを知っていたら逃げ馬のスタミナ切れを待つなんてやってられない。

「それはどういうことだ？」

「逃げ馬は逃げきれぬ自信があるから逃げる、逃げきれぬなら初めからやらない」

「逃げ馬は捕まれば終わり、でも捕まらなきやレースの主導権を握って自分のペースを作れる。どの馬にも先手を取れる」

「だから捕まえに行かなきやダメだ、自分のペースが故意に壊されちゃうんだし。特にノルンファングはあいつの後ろ突っ走れるからな。」

でも今回、先行組はそれをやるヤツが誰もいなかった、ノルンに仕掛けを匂わせてすらいない」

「なるほど、ノルンファングは逃げきれぬ、途中でばてて落ちると思いついて入ると？」

「決めつけてると言ってもいい、地方をまだ舐めてる。群馬競馬はそんな甘くないぞ、常識が全く通じないから、あそこ」

現に昨年から群馬地方競馬に賞を取りに出かけた中央競走馬のことごとくが入着できれば御の字という大苦戦をしてばかりだ。

あのタイムパラドックスでさえ調整不足ではあったモノの、当時デビューしたての双子姉妹に負けていいところなしだったのである。

「だが逃げはそう簡単な走りじゃない、ブルボンだってあの走り自身に着けるまでずっと努力してきたんだ。」

ノルンファングが努力をしていないとは言わないけど、彼女の戦法は今まで先行型が主でときどき差しだ。いきなり逃げをやるうとしたって体力が持つわけが…」

それが普通、まずはそう思う。でもまず前提が違うのだ、と小泉は笑った。

《さあ再び向こう正面に入って一番手はいまだノルンフアング、しかしやや苦しいか後続との距離が大分狭まってきている。

2番手は何とディープリンパクト、一気に距離を詰めて先頭集団に食い込んできています。

3番手はブルートルネード、続いてビッグゴールド、シルクフェイマス、そして早めにリンカーンも上がってきた。後ろは徐々に馬群が詰まってきて混戦模様だ》

《これはなかなか見ない展開ですね、ディープリンパクトがだいぶ早く上がってきているのを見るにノルンフアングを警戒しているのでしょうか?》

《しかしノルンフアングここにきて足が徐々に鈍ってきている、馬群も徐々に徐々に団子になってきているぞ!》

《これは作戦を間違えたのかもしれないねえ》

やはりノルンフアングと言えど逃げはやや厳しいか、このまま逃げ切られる可能性は十分にあるがこの状態だとディープリンパクトと大竹なら十分に差せる。

勝負に乗った、このままいけば自分たちは十分に勝てる。ほら、今ノルンの速度がさらに落ちた、チャンスだ。

「:おい待て、今なんて考えた?」

「どうしたんだ?」

「私はノルンの姿をなんでこんなに受け入れているんだ?なんであつさりディープリと大竹が前に行くのを見てるんだ?」

「え、何を言ってる?」

背筋に嫌なものが伝う、それは背中を通り、背中全体に広がり、そして全身に寒気となって駆け巡った。

自分たちは今まで何を見ていた、このレース展開で何を感じ取っていた、このレースで走っているのは一体誰だ?

十分勝てる?勝負に乗った?おい待てよ、そもそもノルンフアングは見慣れた走りをしているのか?

「…やられた」

「小泉さん？」

「よせ！出るな！狙いは最初から、お前達だ!!」

《おつと出た、ディープリンパクト早くも先頭!!ノルンフアング  
徐々に遅れていく!!》



白い馬体があつさりと後ろに流れていく、自分とディープリンパクトが先頭に立ったというのに大竹の脳裏には焦りが浮かんでいた。

余りに簡単すぎる、余りにあっけなすぎる、あまりに順調すぎる。そう、あまりにも簡単に事が進み過ぎている。

いきなり逃げを打たれたときはもしやと思った、だれも彼女を止める気がないのを見てやばいと思った。

こんなこと前になかったか、いや、こんなこと何度もされてなかったか？思い出せ、今自分たちは何をされた？

「しまった、誘い込まれたッ」

「ヒヒン!？」

「忍法・馬群隠れの術ってな」

してやったり、そう言いたげな含み笑いが僅かに聞こえる。咄嗟に大竹は振り返り、すべてを理解した。

逃げ場がない、後ろにはすでに横にも広がり始めた後続馬群、その中に不気味な笑みと闘志を浮かべて膨らんだ馬群に埋没していく田島とノルンフアング。

ノルンフアングが馬群に飲まれた瞬間に後ろの馬群からにわかには湧き上がる殺気、そして一縷の望みをかけた覚悟のスイッチが入った踏み込みが聞こえてきた。

まだ向こう正面の中間点、距離はまだある、そんな中途半端な位置でポツンと先頭に放り出された自分たち。

長いレースで思考力が徐々に切り取られ始めてくるこのタイミングで、このレースで最大の勝機をノルンフアングと田島は見事に全参加者の前で演出してみせた。

それを見逃す騎手はいない、それを見逃す馬もない、彼がそれを見逃させるわけがない。今まさに、あのディープリンパクトと大竹に一泡吹かせる絶好の機会が降って湧いた。

しかも大逃げでそれを演出した張本人たちはスタミナ切れで自爆、これが天祐でなくて何だというのか。

(まずい、これはまずい!!畜生、こんなのありか!!?)

だが大竹にはわかった、ノルンフアングと田島はあえて後ろに逃げた。後ろに逃げてすべて仕切り直す機会を作った。

シマカゼタービンと茂三が良くやる力任せな仕切り直しだ、競馬で敢えて最後尾に抜けてからコースを取り直してまた上がってくるなんて普通は誰も考えない。

でもノルンフアングと田島はできる、あの二人は茂三からも警戒される突破力がある。しかも最後尾で一息入れて足を休めて、その機会を伺う余裕すら持っていたのだ。

最後尾の芝はきつとボロボロだ、土と芝が混じった悪路だ、群馬スペシャルで鍛え上げたダート競走馬であるノルンフアングの足には実に走り慣れた素晴らしいコンディションになっている。

しかもこの先には淀の坂がある、自分たちには関係ないが他の競走馬たちからしたらキツイ登りと降りだ。

後ろには逃げられない、自分のペースには戻せない、ここから仕切り直すには何もかもタイミングが悪い。

(逃げるしかない、やるしかない!)

ここで捕まればディープリンパクトとはいえ終わりだ、馬群に飲み込まれればそれを抜け出す機会はない。

ならば、大竹はすぐさま手綱を緩めてディープリンパクトに合図した。

「このまま千切れ!任せる!!」

「ヒビン!!」





デーブインパクトが加速していく、それは馬群を抜けて最後尾に抜けた田島には加速していく馬群の姿で分かった。

どうだい大竹さん、俺たちだってやるもんだろ？いきなり逃げに変えさせられてどこまで持つかな？

種は十分仕掛けた、馬群に抜ける途中で『デーブインパクトと大竹のせいでミスった』とぼそぼそと独り言をつぶやけば効果覷面だった。

それにほかの連中だって気付かない。やばいぞ、大竹さんとデーブインパクトが遮二無二になって逃げだしたらしこたま鍛えたスタミナで振り回されるんだからな。

「俺たちはしばらく高みの見物と行こうか、ノルン」

「ふあひん」

「最後の直線だ、そこまで休もう。全部ぶち抜くぞ」

「ひひん」

他の馬に、他の騎手に聞こえないようにこそそと喋って機会を伺う。

足場は完璧な悪路、ノルンファングには走り慣れた柔らかいデコボコ道だ。足を休めて一息つかせるには十分。

自分たちの後ろには誰もいないから急かされることもなく、馬群を風除けにしながら余裕をもって息を整えられる。

飛んでくる土なんて何のその、淀の坂？お前群馬で同じこと言えんの？

（悪いな、お前らとまともに遣り合ったらかなり分が悪いから一案練らせてもらったぜ）

逃げを打ち先頭を切るデーブインパクト、それを追いかけるほかの馬たち、自分が考えた通りの結果になった。

ディープインパクトのスタミナと末脚の強さは何度も一緒に練習したのだからよく知っている、自分たちがいつものように走っても正直に言えば勝てるかどうかは微妙だ。

追い込みでしっかり速度に乗った状態で突っ込んでくるディープインパクト相手にノルンフアングの末脚はおそらく持たない、速力では確かに上回るであろうが持続力となるとディープインパクトに軍配が上がる。

仕掛け所を間違えなければ勝機はあるが、問題はこの京都レース場が自分たちには完全なアウエーでありレース距離も3200メートルと長い所だ。

京都レース場に馴染みのない自分たちではどこが仕掛け所か見分け辛いし、長い距離は末脚を使い体力もそれなりに削られるから余計に不利だ。

中央競走馬としてこの手の競馬場を多く走ったディープインパクト、そして中央騎手として何度も京都競馬場を走って身にしみ込ませた大竹相手では自分たちはどうしても劣る。

京都競馬場に対する理解はもうどうすることもできない、ならば距離でその差を埋めて相手に近づくほかないと田島は思っていた。

だから逃げたのだ、他の中央競走馬にはない自分たちへの理解がある大竹とディープインパクトだからこそ、あの大逃げの怪物を知るからこそ絶対に放ってはおけないはずだから。

(いいぞ、そのままディープに削られちまえ)

根性で逃げを打つディープインパクトにほかの馬たちがどんどんつられていくのを見てほくそ笑む。

3200メートルを大逃げで走り切れるわけがない、ましてや強いとはいえ地方競走馬なのだから絶望的だ、普通の中央騎手ならそう考える。

それは甘い、非常に甘い、3200メートルを日に何本も大逃げする馬にしこたま鍛え上げられるのが群馬地方競馬所属の競走馬だ。

芝で、砂で、左回りで、右回りで、そして曲がりくねった山道を往復して、自分たちとディープインパクトは鍛え上げてきた。

もう少ししだ、もう少し待つ、他の馬が削れるまで、デュープリンパクトが削れるだけ削れるまで。

最後のカーブが終わる、すでにほかの馬たちはデュープリンパクトと大竹に振り回されて息も絶え絶えだ。

最後尾に落ちたと思いついでいる自分たちに意識を割く余裕などない、目の前にはすでにばて始めたデュープリンパクトが居るからだ。

デュープリンパクトの足並みは乱れ、息も乱れ、すでに限界を超えているように見える。チャンスでしかない、ここで踏ん張らなければ意味はない。

そんな風に考えてるから、どこかで自分たちを舐めてるからこうなるんだ。最後の直線が終わる、がら空きだ、みんな隙だらけだ。

馬群がいい感じにほどけて隙間だらけになっている、ちょうどいい。

「ビンゴ。ノルン、突っ込め！」



もう足が棒のようになっていた、走るたびに何かがそぎ落とされていくような感じがした。

息をするたびに胸が痛んだ、いくら吸っても苦しいままだ、吐いても吐いても楽にならなかった。

心臓が早鐘のようになっていた、体中に血を行きわたらせても行きわたらせてもまだ足りない。

まだ止まらない、まだ止まらない、ゴールはまだ先だから止まらない。いつに無く遠いレースの終着点、走れば走るほど遠くなるような錯覚すら覚えるゴール板。

なのにもう今にも崩れ落ちそうだ、もう走るのをやめたくて仕方がない。もう立ち止まろうかなんて考えたこともない事さえ過つて来る。

『な!?!お前!!なぜ!!』

『お、終わったはずやぞ!どうして上がれるんや!!』

『馬鹿な、その隙間を通るのか!!』

やはり来た、思った通り奴が来た、馬群の中をすり抜けていつものように上がってきた。畜生、完全にあいつの思った通りになっちまった。

後ろから近づいてくる聞き慣れた足音、どんどん距離を詰めてくる聞き慣れたライバルの足音が耳障りだ。

(負けるのか)

いくら力を込めても速度が出ない、いくら走っても距離が縮まらない、長い、長い、苦しい、苦しい。

あと何メートル走れば終わる、終わりはまだなのか、考えることすら億劫だ。

大丈夫だ、自分は強い、自分は速い、自分はタフだ、何も考えなくても:いや、それはただの逃避だろう。

分かっているのだ、このままでは自分は負けるのだと。この距離と、相手の速さでは相手のほうが速い。

自分はよく知っている、自分たちをこの罠に引き摺りこんだ彼女たちの実力をよく理解している。

(苦しい、つらい)

自分はまだ限界だ、もうこれ以上足が持たない。でも相手はどうだ?ラストスパートを残しているに違いない、現に彼女の足跡に淀みはない。

それに比べて自分はどうか、こんなフラフラで、足並みもぼろ糞で、呼吸もままならなくなりかけている。負けるのか、負けるんだ、この俺が負けるのか?

無敗の馬が負けるのか?この俺が負けるのか?この大一番で?この京都で?あいつのいないこんなレースで?

(あいつ以外の馬に負けるのか?俺が?)

負けましたって言うのか?天皇賞であいつに負けたというのか?無敗じゃなくなりましたって?

(ふざけんなよ)

脳裏に栗毛の馬が駆けた、ぼやける視界の中に栗毛の馬体の後姿が見えた、忘れたことはない、彼の背中だ。

いくら走っても自分をいつも負かしてくるライバルの、あの頼もしくて憧れる大逃げの後ろ姿だ。

何度その姿に焦がれたか、何度追いつがって突き放されたか分からない。その姿に茸毛の馬体が重なっていく。

瞬間、彼の中で我慢ならない怒りが込み上げてきた。違う、そこにいるのはお前じゃない、俺の前にいる馬はノルンフアングじゃない。

(どけよ、あいつの姿が見えないだろうが)

シマカゼタービン、自分のライバル、自分がずっと勝てない最大の目標、俺の親友。そこに割り込む？塗り替える？ふざけるんじゃないやねえ!!

瞬間、ディープインパクトは体に稲妻が走るような衝撃を感じて、すべてがスローになったような感覚にとらわれた。

(あいつを負かすのはこの俺だ、それまで、負けてらんないんだ!!)

張り裂けそうな息を止める、息をする意味がない。ゴール板が見える、もう少しだと理解できる、だから全部、全部走るために使え!!もつとだ、もつと出せるだろ？

寄越せよ、全部。中央競馬の結晶とやらの血の全てを出せよ、俺の全部はレースのためにあるんだろ？俺は全部出し切ってやる！だから何もかも吐き出せてんだよ、サンデーサイレンス!!

聞いたことしかない父、見たこともない父、その血がすごいと常々言われてきたその父の全てと自分の全てを、ディープインパクトは全て一緒に吐き出した。

『邪魔だ、どけえ!!』

『っ!』

風になる、加速する、空を飛ぶ鳥のように体がふわりと浮くように軽くなる、まるで羽根が背中に生えたみたいだ。

そしてそれを抑え込み、地を這うように駆ける、羽を広げて吹き抜

ける突風を受けて飛ぶ鳥のように。

走れ、走れ！走れ！！俺の前においていいのはあいつだけだ、あいつを倒すのはこの俺だ！！

『こんな所で負けてたまるか！俺が勝つんだ！』

前に出る。栗毛の馬体が離れていく。

『いいや私です！！』

ノルンフアングが前に出る。それでもあいつとの距離は離れるばかり。

『俺が先に勝つ！』

『私が先に勝つ！！』

また俺が半馬身出る。もうシマカゼタービンの背中中は遠い。

『馬鹿な、加速する、だとお！！』

『こんな長いレースで、どうして！！』

『バケモンかよお前らあ！！』

うるさい、後方がうるさい、もう気にするだけ無駄だ。もう敵はこいつだけだ、ノルンフアングさえ振り切れればいいんだ。

『私が！先に！！彼に！！勝つんです！！また、勝ってみせるんだ！！』

『あいつにだけ勝ててない！勝てないまま負けたくない！！負けた姿を見せたくない！！』

ノルンフアングの馬体を追い抜く、ノルンフアングが抜き返す、それに自分は喰いつく、前のめりになって加速しながらノルンを追い越す。

束の間にも前を走る栗毛の馬体がさらに先を行く、競り合う相手なんていないからどんどん加速する、まだ追いつけない、まだ追い越せない。

あいつはもつと速かった、3200メートルなんて長距離はシマカゼタービンの庭みたいなものだった。

引き離される、置いて行かれてしまう、まだ駄目だ、まだ俺のほうが遅い。だって、このレースのタイムは明らかに彼の大逃げのペースを下回っているから。

やっぱりまだかなわない、だから、だから！！あいつに勝つまで負け

てなんかやれねえんだ!!

『俺が、勝つんだああああッ!!』

『私だああ!!』

ゴール板が迫る、自分は前に体を傾けた、ライバルも体を傾けた、加速はもうできない、そんな余裕はない。

ほんの少しでも前に出ていたほうが勝利する、もはや実力ではどうにもならない。デーパーインパクトは歯を食いしばって、己の幸運に賭けた。

## 第29話

『お手上げだな』

『同感』

『そんな!?!』

何度も頭の中でレースを再現しながら、俺は結論付けた。だって、話を聞けば聞くほどディーブが勝った理由なんて理由が一つしか浮かばんのなもの。

最初はどうにかなるんじゃないかと思ってたけど、最終的にディーブがやる気出しちゃうと大体力業でぶち抜かれる結果になるんだよ。

どうもいかん流れなんで気分転換でノルン達と第一馬房前の練習場へジョギングに連れ出して走りながら考えてたけど、うん、無理! 『お前の策は完璧だ、ディーブと大竹さんは完全に術中に嵌ってやがる』

『でもそれで負けたんですよ?何か穴があったとしか思えません』 『どうしようもねーよ、そこまですなったらもう対策がどうのこうのって次元じゃない。必要なのは運と根性だ、根性は負けてねえから最後の最後に運がディーブのほうに向いた、それだけだ』

頭の上に乗せた盃に入れた水をこぼさないように軽く走りながら並走するノルンに言うと、一緒に走るダイオーもうんうん頷く。

そもそも最後のところはディーブの体力切れを狙ってるんだろ?それをあいつはド根性で凌ぎ切って競り合ってるやがる。

3200メートルをノルンのハイペース逃げでペースを狂わされた上に、仕掛け時もミスらされて、最後は基本戦術も変えさせられてんだぞ?

普段追い込みとか差しやってる連中を、レース途中で無理矢理逃げにするよう強要するとか普通は相手が潰れないほうがおかしい。

それをあいつは土壇場のド根性でやり遂げちまったんだ、むしろそこから巻き返せるディーブのほうが異常だったの。



やっぱあいつの強さは底知れない、いろんな意味でヤベーわ。中央競馬もやばいヤツ生み出したもんだぜ。

『ならあなたならどうします?』

『逃げる』

だつて俺は逃げしかできないんだもの。聞いた話じゃ、俺の芝3200最速タイムよりその時は遅かったらしいじゃん。

単純な計算なら俺は十分勝てるわな、まあ実際走るとなればそうはいかんのだろうけども。それでも戦術は変わらない、それしかできないからね。

どんな戦術を仕掛けてこようが、その馬たちよりも速く走つちまえれば勝ちなんだ、要はルール守って抜かせなきゃ勝ちなのさ。

競り合つたら同じく根性勝負だ、小手先の対策はむしろ隙を作ることになりかねんから最初から最後まで体力と根性勝負よ。

『とはいえ、先は分かんないね。うかうかしてられねえな』

『お?なにになに?いつになくやる気っぽいね』

『ちよつとこつちは足踏み中でな。最近、碓井のタイムアタックランキングに挑戦してるんだが伸び悩んでんの』

『碓井って...あ、あのグネグネ道か』

『知ってるんですか?ダイオー』

『前レースに行くときに通つたよ!崖沿いの道でグネグネしてる道でね、夜走つたらすごい怖いだろうなあそこ。』

人間つてすごいよね、僕たちみたいに夜は見えないはずなのにあそこでレースしちゃうんでしょ?今どんくらい?』

お、ダイオーの奴が知つてるとは話が早い。ちなみに俺もライト無しじゃ見えないな。

『やつとトップ10の尻が少し見えてきたあたりだ、それ以上はなかなか縮まらん』

『6着7着つて所?』

『10位のランサーがトップで射程圏内が入着とすればそんな感じかな、正直ここで無茶しても絶対に届かねえ』

正確に記録されてんのはトップ10までだから大体だけだな、この

前いい成績出したって浮かれてたやつらは追い越したけどそこからがなかなかうまくいかん。

安定していいタイムを出してる腕のいい連中がそこからうようよいるんだもの。そこ抜けないとあのランサーには挑めない。

あの10位の青いランサー、見た目は地味でもなかなか速い。まだまだ俺じゃ太刀打ちできん。

それなのに親友が世界クラスのレコード更新だつて? そんなのやる気が出てくるに決まってるじゃねーか。

でもなんか足んねえんだよ、なーんか今一つ踏み込みが足りないっていうかそんな感じが今あるのよね。

『なんかいま一つ足りない感じがしてな、酒と同じだよ。パワーが足んねえのかな、バターナッツのトレーニング俺もやってみようかな』  
『なんか特別なことやってんの?』

『あれだよ、あれ』

顎でしゃくって運動場の端っこを差す。そこにはバターナッツが古巣から持ってきたソリに1トンの重りを乗せて大汗を掻いて引つ張っている姿が!!

『ナンジャアリアヤー!!』

『ばんえいだよ、毎日一回は引くのがあいつの日課。やらんと次の日は調子が出ないらしい』

いつ見ても大迫力だねえ、よくあんなのが引けるもんだよ。ほらダイオーとノルンなんか目ん玉ひん剥いて愕然としてやがる、ほらほらペース落ちてんぞ。

『ひ、ひひいん』『お、お先に、失礼!』

『ブルルツフィィィイン!!』『声が小さいーい!!』

あ、モンスニー爺さんに追い掛け回されるジョンソンに抜かれた。モンスニー爺さんの奴、ジョンソンが来てからすっかり元気になっちゃって自分の技術を軒並み注ぎ込もうとしてやがるぜ。

ただのランニングのはずなのにすっかりスタミナと根性作りのマラソンになつちまってやがる。

『じ、爺様! さすがに、8000メートルは、きつい!! もーむり!!』

『口が開けるならまだいけるな！もう一セット追加だ!!』

『ひよええ!?!』

『頑張れよ、俺はできるぞ』

『止めて!!』

『ガンバ!』

もし手があればグッドラックと親指を立ててやったんだが、馬は蹄だからな。ほらジョンソン、そんな絶望した目をすんな。

遅くなってるからどんどん爺さんの目が嬉しそうに輝いてんぞ？

同じメジロ一族が鍛え甲斐あるとか燃料にしかならんぞその馬。

一周800メートル10本、まだまだ青いジョンソンには厳しいだろうね。

『鬼だ、鬼がおる』

『何を言うか、これくらい普通よ普通』

『イヤチョットチガウトオモウナーボクアンナレンシユウシテナイシニンゲンモシテナカッタシ』

『これはアメリカ軍式ブーツキャンプですね!!かのキャプテンが毎朝やってたっていう!!』

『イヤソレモチガウトオモウヨ!?!』

『原型なんて残っちゃいねーよ、世界中のが混じってるからな』

『イミワカンナイヨ!!ドウシテソウナッタ!?!』

『俺が教えた』

瀬名酒造は馬に関しちや古今東西ありとあらゆる知識を集めてんだよ、うちの資料室を漁ればものすごい出てくるぞ。

この前も新入社員にポーランド陸軍騎兵隊の教本を日本語訳したやつ読ませてたしな。

それも第2次大戦直前の最新バージョン、一体どこから引つ張り出してきたんだよあんなの。

他にも大日本帝国陸軍の奴とかアメリカ陸軍の奴とか普通にあるし、武田騎馬隊の兵法書とかも普通に出てくる。

もちろん全部合法的に手に入れたもんだ、親父さんやその先代が各国のいろんな古本屋とか骨董市をめぐったそうさ。

爺さんに教えたのは俺、人の文字読めると知ったら全部翻訳させやがった。

そういう知識も追加されたモンズニー爺さんのプログラムはキツツイのなんのつたらない。

メジロモンズニー式ブートキャンプは、爺さんが長い年月をかけて組み上げた対ミスターシービー仕様の超スパルタだかな。

俺も最初の頃はあんな感じだった、いやはや懐かしいわ。あんな風に追っかけ回されてひたすらスタミナと根性を鍛えたんだよ。

『うわ、モンズニーさんのあれって対3冠馬訓練？ますますえぐくなってる？』

『あ、ツバキ！』

『え、ツバキ？』

『おつ？ツバキ、久しぶりだな。なんでこんなところに？』

ジョンソンを追っかけ回すモンズニー爺さんを見送っている俺たちのジョギングに割り込んできたのは今や世界に名だたるツバキプリンセスちゃんではありませんか。

まさかホントに世界大会で勝っちゃうとはねえ：群馬の馬として俺も鼻が高いぜ。

『今帰ったのよ、人間ってめんどくさいことするわよね。さつさと血液検査なりなんなりすればいいのになんで隔離なんてするんだか：』

『医者にはキライじゃなかったか？』

『理由を知らされないまま注射器ぶっ刺されたら誰だって嫌でしょ、理由を教えてくださいれば採血くらい我慢くらいするわ。私だって病気を持ち込みたくないなんて思ってるじゃないし』

『そうはいっても一応規則らしいし無理じゃね？　そういう検査やつても出ない時は出ないから経過観察するんだって聞いたことあるしな』

実は前世で俺もそれは考えた、実は出張の時に空港の検疫官と雑談できる機会があつて聞いたことがある。

あの時はやればできるけどその後が大体問題になるからクソめんどいのでやらんとかなんとかか。

犬猫ならまだしも馬とか牛だとそれやるだけで危険だし下手すりゃ大暴れして検査どころじゃないってな。馬なんか特にデリケートだとか。

そういうやそんな時も言ってたな、競走馬だと調教師がうるさいだの馬主がせっついてくるだの。

『しかしさすがはドバイの巴御前、すごい勝ちっぷりだったらしいじゃないの?』

『あんたのアドバイスがなきゃ体調崩してたわよ。飛行機で長いこと移動するなら、向こうだと時間感覚が狂うってのは本当だったわ』

『マジデ!』

『マジよ、ダイオー。飛行機の中も大変だったわよ? 足元が妙にふわふわするし、体が上に行く感覚がざわざわするの。』

しかもそれに合わせて頭と耳がツーンと来たりするしさ、そういうもんだって知ってなきゃあれだけで結構きついわよ。

あと向こうにいたら時差ボケっていうやつ、体の感覚と向こうの時間が合わないのはなかなかきついわね。

向こうの時間感覚に合わせるには、向こうの夜に合わせて寝るのが一番ってというのは本当だった』

『なるほど、ではやはり気候や環境も違うのですか?』

『そうよノルン、あっちとこっちじゃ人間も違うわ。アラブの人間は鹿毛が多いのと言葉が全く違う、日本の言葉と響きが全然ね。』

他にもブリテンとかいう国から来たっていう芦毛の人間とか、尾花栗毛の人間もいたわね。黒鹿毛よりもっと真っ黒な人間もいて面白かったわ。

もちろん環境も違うけど、一番は水とご飯よ。味が全然違う、最初は良いけど続くと嫌になつて来るわね。

タービンの言う通り日本からご飯はできるだけ持っていったほうがいいわ、時々慣れた味を食べれば不思議と喰えるし。

水もペットボトルの水以外は飲まないほうがいい。水道水だっていうのに全然味が違うし、口の中イガイガするのよ。

飼い葉と同じで時々薬臭いのがあったからそういうのは絶対食べ

ないようにしないとおなか壊すしき』

向こうは食糧事情が違うからな、向こうじゃ普通でもこつちからしたら香辛料とか使い過ぎとか平気である。お国柄ってやつだ。

そういうのは食品保存用の保存料にもある、そのせいで人間だって腹壊すんだから警戒して損はない。

こいつらは競走馬、アスリートなんだからその程度の我儘くらい聞いてもらってもかまわんだろ。

『お世話してくれる人間が言ってたわよ？あんだ、散々しつこく追い掛け回して教え込んだって？』

『なーに、簡単な根回しよ』

ツバキと練習した後には、あいつの厩務員付け回して散々訴えてやったからな。役に立って何よりなにより。

『へー、じゃあ僕とノルンのお付きの人間にやってるのってそれかー』  
『あとちよつと体臭がキツイわ。向こうの人間、余りいい洗剤がないのかしら？ たまに変なおいがする人間もいるのよ？』

『そいつは文化の違いだ、風呂じゃなくてシャワーが主だろうし仕方あるまい。別に滅茶苦茶臭いってわけでもなかっただろ？』

臭いとおっそろしく匂うからな、しかもそれに対抗してオーデコロン使うと最初は良いけどそのうちやばくなったりもする。

しかもそのオーデコロンの匂いがまたキツいのだったらそれだけで…ねえ？

『逆に慣れなかったわ、あくまで我慢できる範疇だったもの』

『そつかり、じゃあ僕たちも気を付けなきゃね。ドイツってどんなところなんだろ？』

『ドイツは欧州で白人系、芦毛の人間が多い国だな。今はいろいろな人種がいるが、衛生面なら日本に近いと思うぞ。』

治安も悪くないし比較的安全な国だ、ちよつと拗らせてるのとかあるからそういうのには注意だけだな。ま、ほつとけ』

ここじゃないが、未来のドイツはちよつと拗らせてるところあったかな。ナチス否定しつやつてることと言ってることが、元が違ってもおおよそ変わらんとかね。

『ならアメリカはどうなんでしょう?』

『ノルン、お前が大好きなターミネーターとダイハードの国だぜ? 最近の映画見てれば大体わかると思うぞ。』

芦毛、栗毛、鹿毛に黒鹿、尾花栗毛にツルツパゲ、基本何でもありだな。安全性もピンキリ。

映画でスラムとかギャングとか見たか? ああいうのは裏路地に行けば居るから、旅行者は表の大通りで過ごしましょう』

これも前の世界と変わらなければいるね、変に近道しようとするとなんな奴らが品定めしてくんの。俺はまだ運がよかった。

『ま、とにかく普通に競馬するなら注意するのは水と飯、あと環境変化だ。そこに注意しときゃ何とかなるだろ。』

海外の競馬場は日本より整備が雑だとか言われてるが、そういうのはお国柄だしお前らにや関係ない話だ』

『荒れてる道は慣れてますからね』

『裏山ほどじゃないでしょ』

『走つてないけど、見た限りアラブの芝は裏山に比べたら完璧な整備してたわね』

ほらな、だから体調面とメンタル面しっかりしときゃこいつらは心配いらんね。

『ところでタービン、どうしてそんなこと知ってるんですか?』

『悪いなノルン、そいつは機密事項だ』

『どうせ雑誌とかテレビでしょうが』

かっこつけさせるよツバキ…



《戻ってきた、戻ってきた!! ノルンファンク最後方から鋭い末脚で

再び先頭!!後方集団を一気にぶち抜いた!!》

《まさか!?!どんな足してるんですかそれ!!》

《最終コーナーを回って最後の直線、ノルンフアングが前に、前に抜けぬい!!デイープリンパクト抜き返す!!ノルンフアングさらに前へ!二頭がさらに加速して後続を突き放す!!》

実況の中に相当驚いていたらしい観客の音が混じる、当然だろう、デイープリンパクトとノルンフアングがやっていることははっきり言って狂気の沙汰だ。

片やただ一頭を引きずり出して罨に嵌めるために逃げを打ってレースを騙し、片やそれにまんまと嵌って狙い通りに体力を浪費した。

もう勝負はついている、デイープリンパクトが垂れるだけ、そのはずなのにそうならない。

そこからさらにバトルが始まり、2頭だけの意地の張り合いで破滅的な加速勝負が始まっている。

普通なら完全な暴走だ、しかし2頭の騎手は止めない。これが暴走ではなく勝負に出ているのだと理解しているからだ。

《デイープリンパクト粘る!!ノルンフアング粘る!!加速する、加速する!!残り200メートル、2頭の加速がまったく止まらない!!》

ゴールまで残り200メートル、3000メートルの長距離を走り抜けてきた先頭2頭以外の馬たちはほぼいっばいいっばいなのはド素人の見物客でさえ理解できる有様だった。

《トップは中央と地方の鏝迫り合いだ!!どっちも譲らないデッドヒート!!3番手リンカーンは大きく離されてもう届かない!!》

だからこそ、先頭で競り合いながらも加速する2頭の超加速で差がどんどん開いていく。

もはや3番手は全く勝ち筋に乗れないまでに絶望的な差が開いている。

完全な二人旅、このレースは中央競馬と地方競馬の一騎打ち。会場がどンドンヒートアップしていくのが小泉にはわかった。

2頭は全く譲らない、ただ前を見て、互いに勝利を目掛けて邁進す



る。

デー・プイン・パクトの大竹騎手、ノルン・フアングの田島騎手も必死の形相で相棒と同じく前を睨んで手綱を握る。

《残り100、差は広がらない!!後ろがどんどん離される、また加速だ!!どんどん2頭が前に行く!!》

後続はもう無理か、もう20メートルは突き放されている、懸命に追うがもう届かない!!そのままゴール!!》

新しい伝説か、古の奇跡か!!どちらもハナを全く譲りませんでした、両騎手もリアクションはありません!!》

《何キロ出してた!!最後の：いやタイムじゃなくて最高速度!!え、なに、時速83km!?機械の故障じゃないのか!!?》

一気にゴール板を駆け抜けていく2頭、どちらの騎手もリアクションはない。互いに顔を見合わせた後に、相棒に減速を命じてゆっくりと速度を落とさせる。

掲示板には順当に着順が一着と二着を残して点灯、トップ争いには写真の文字が点灯した。

写真判定の審議を行うとの会場告知がなされた、無敗の中央GIレース5連勝の達成か、それとも地方競馬の天皇賞春秋制覇か、会場の期待とボルテージが否応なく高まる。

どっちが勝っても歴史的一幕、伝説の偉業、それが作られる現場にここにいる全員が立ちあうことになるのだ。

《おっと、先頭2頭に現場係員より指示が出ました!このまま2頭でコースを一周してからホームストレッチに戻るようにとのことです!!これは異例です!!これは一体：あの?》

《だから何なんだその数字!3200だぞ!!時速83kmとかおかしいだろう!!何?みんなわけわかんなくておかしくなってるだあ!?!》

《：どうやら取り込み中のようなです、こちらはこちらで続けましょう。おっと指示の内容が今届きました、両馬とも激しい競り合いをしたため、急な停止は危険と判断しクールダウンを行うとのことです。

えー、二頭の計量は一番最後に行うとのこと。あ、今審査結果が出

ました！準備でき次第、発表とのことですよ！！」

数分の沈黙、そして写真判定の結果が掲示板に表示される。瞬間、会場内が歓声に包まれた。

一着、デイープインパクト、二着・ノルンフアング、着差はハナ差。激戦を制したのはデイープインパクトだった。

しかしノルンフアングの健闘も凄まじいもの、僅かな差の敗北ではあるがその健闘を大いに讃えられる。

《やりました！レコードですよ！！デイープインパクト、ワールドレコード勝利で無敗のGI5連勝！！ノルンフアングは惜しくも2着、天皇賞春秋制覇ならずしかし彼女もワールドレコードを更新！

二頭が帰ってまいります、デイープインパクトの後ろにノルンフアングが：おっとまた現場係員の指示が飛んでますね。これは：2頭でウイニングラン！これはサービスが利いているぞ！！》

《ぜえ、ぜえ：ど、どちらも立派なワールドレコード保持者と言えますからね、いい判断と、言えるのでは、ないですか？ぜえ：ぜひゅツ》

「ここにいたんですか：：不満そうですね、小泉さん」

「わかる？」

「怖い目してますよ」

昼下がりの優しい日光に照らされた栗東厩舎の資料室、自分たちのデイープインパクトが勝利を収めた天皇賞春の生中継録画を見ていた小泉は、仏頂面を決め込むトレーニングウェアの大竹を見て無言で自分の顔を揉み解す。

あのレースは間違いなく天皇賞・春のコースレコードである。しかしそのタイムは自分たちが知る芝3200コースの最速タイムには及ばない。

自分の知る最速の馬はもっと速く走った、3200メートルの芝コースを今日のコースレコードよりもはるかに速く走った。

もちろん本戦と練習では比べても意味がないとわかっているが、それを加味してもやはり比べてしまうのだ。

「少し期待していた、最後の直線のあの走りは今のデイープが何もか

も振り絞った全身全霊の末脚だった。正直、痺れたよ、今まで見てきた馬のどんな馬よりもね。

群馬では勝てない、群馬トレセンのあのコースでは勝てないが…中央の競馬場なら、経験のある京都競馬場での実戦ならば上回れるかもしれない。

ほんの一瞬でもいい、時速93kmを超えることができると…だが結果は時速83km、まったく届かなかった」

世間では競走馬の常識をはるかに超えたスピード勝負に大賑わい、日本のみならず世界中にこの衝撃は広く伝播している。

それを制したディープリンパクトに関する問い合わせは国内国外から後を絶たない、きつとそれはノルンフアングを擁する群馬地方競馬も同じだろう。

中央競馬界は空前の怪物の出現でディープリンパクトとサンデーサイレンスの名前は不動のものとなり、それに対抗するかつての名馬たちの血筋もにわかになり盛り上がりを見せ始めた。

「小泉さん、考えすぎは逆に良くない。私も正直、あの加速には驚いてます。まんまと騙されて、あんなふがない騎乗になってしまったのに…」

ノルンフアングの大逃げに見せかけたレースを支配し、ディープリンパクト一頭だけを攻略するためだけにほかの馬を払い落とす大ナタ。

そして自分たちだからこそ引掛かる『逃げ』に対する危機感の利による陽動、そして終盤にばてたと見せかける見事な演技。

全部がディープリンパクトと大竹を騙すため、他の馬が粘る可能性を眼中に入れていない自殺行為染みた戦略だ。

それに対して自分が取れたのはディープリンパクトにすべてを委ねて逃げさせて、彼が走りにくくならないように体を制御することに終始した。

それにはもちろん理由がある、ディープリンパクトはもともと差しか追い込みを主体とする馬であって、逃げの戦術を取る馬ではない。そもそも彼の走りは逃げに向いていないし、逃げの練習も騎乗スタイ

ルの合わせもしていない。

大逃げで走る馬の乗り方は熟知しているが、その手綱の握り方ではディープインパクトの見様見真似の大逃げにはむしろ毒だ。

サイレンススズカのような訓練された逃げではないがむしろ大逃げは、一見立派ではあるが下手に手を出せば一瞬で崩れる脆さがあった。

だからあくまで自分は体の制御に徹し、ただの重しになることを受け入れて勝負に挑んだ。

それが最善だとはわかっているが、それは自分に何もできることはないと逃げているのだ。それが不甲斐ない以外のなんだというのか。そもそもそんなことになったのは自分の力不足故だ、だから今度は失敗しない。大竹の頭の中にはすでに次のレースに挑むための調教プランと自分の自主練プランが練りに練られていた。

「ディープは速かった、とてつもなく速かった、最悪の状況であいつは自分で考えて最高の走りをやってみせたんですよ。」

これはあなたが教えた走りだ、ディープに走り方を教えたのはあなただ、ならやる事は一つしかないでしょう?」

「まったく…少しは休ませてくれたっていいだろ」

「次が待ってます、宝塚前の最終調整までにもっと仕上げておきたいでしょう?」

大きいため息をつく、仮病作戦大失敗である。どうせ次の事を考えて突き進みたくて仕方ないに違いないと大竹の姿を見て、自分の年齢を考えて肩をすくめた。

「この前から電話が鳴りっぱなしで電話線引っこ抜いて、外に出りや質問攻めだぞ?しばらくこの資料室から出たくないね」

「僕も厩舎前でさつきもみくちやにされましたよ、ディープが助けてくれたからよかったですけど」

「ディープが脱走するなんて相当だな」

群馬と栗東の違いを理解しているディープインパクトは、基本的に栗東厩舎では厩舎から勝手に出てきたりすることはない。

群馬トレーニングセンターとは違い、自分たちが勝手に厩舎をうる

つき回ったりしたらここの人間が大騒ぎするのを理解しているからだ。

群馬地方競馬ではポピュラーになってきた電子ロックなどよりも遥かに簡便なモノが主流のここの馬房から抜け出るなんて、彼にとってはお茶の子さいさいなのである。

「次も気が抜けないな、群馬の連中は出走登録しないと聞いているが注目度は天皇賞に負けてない」

「ハルウララ効果が出てきますか…」

デーブインパクトが次に出走する第47回宝塚記念には、大竹にもなじみ深いあのハルウララが出走を決めていた。

群馬地方競馬で復帰し、高知地方競馬に鍛え直して舞い戻ってきたハルウララ。

未だに勝利はできずにいるが、群馬地方競馬での戦績は復帰戦の最下位を除けば出走5回のすべてで掲示板入りをしているシルバーコレクターだ。

シマカゼタービン、ホクリクダイオー、アルトアイネス、アルトレーネ、タイムパラドックスを相手にして得たとすれば怖ろしい上達ぶりと言える。

そんなハルウララの高知地方競馬復帰の第一戦目が、中央出張の宝塚記念となればハルウララファンは驚くと同時に温かな声援で彼女を後押ししている。

その人気とファンの数はすでに引退前をはるかに上回っていて、群馬地方競馬のツバキプリンセスによるドバイワールドカップ制覇によって日本地方競馬全体が世界の注目を集めたことにより海外ファンも徐々に増えている。

それが宝塚記念に押し寄せるといふのだ、その注目度は考えるまでもない。それが無謀な挑戦でも、それがまた彼女たちを彩るのだ。

大竹もハルウララの宝塚記念出走登録の話は古海から直接聞いて、無謀な挑戦だと素直に答えた。

しかしその無謀さが余計にハルウララが競争心を失っていないという事を実際立たせて人気を押し上げた。

大竹自身は抽選で落ちるものだと考えていたが、ディープインパクトが出走登録を行ったことで状況が一変してしまった。

「凱旋門賞前の国内最後のレースだ、失敗はできないぞ。残った連中は本気でお前らの首を狙ってる」

ディープインパクト、クラシック無敗3冠であり、これまで無敗の日本中央競馬の絶対王者。

それを相手にして勝ち目が見えないと考えた馬主が居て、勝ち目がないレースに出すのは意味がないと避けるのはおかしくない。

それが2006年の宝塚記念では起こっていた、出走登録を取り消す陣営が続出し結果的にハルウララ出走までの道筋ができてしまった。

「気を引き締めてかからないといけませんね。行きましよう、もうディープはコースで準備運動をして待ってます」

「だから少し休みたかったのに…」  
またしばらく忙しい日々が続くのだろうな、そこにまた横から呼び止められるんだろうな。

最近では栗東トレーニングセンター内でさえ奇異な目で見られ、よりディープインパクトを鍛えるために思いついたことを試行しているとすぐに疑念の声が飛んでくる。

仕事をするなら集中したい小泉は思わずため息をつき、いろいろなチャレンジにも動じないで肯定的な群馬トレーニングセンターが少し懐かしく思えた。

小ネタ2・20XX年、新育成ウマ娘を語るスレPa  
rt1939 ※改訂版

72：名無しのトレーナー  
たった今メンテが終わった。

73：名無しのトレーナー  
新規実装4人、同時にくるぞ！

74：名無しのトレーナー  
遊馬「俺は？」

75：名無しのトレーナー  
▽74、途中でやめた。  
いつお迎えする？私はもうした…ウララちゃんをな!!

76：名無しのトレーナー  
運営はたまに訳が分からんことをする…同時4人実装、全部☆3、  
あんたらに人の心は無いんか？

77：名無しのトレーナー  
▽76  
運営「あ？ねえよそんなもん」

78：名無しのトレーナー  
ま、まあ、当たりやすさはFG●よりはマシだから…（震え声）

79：名無しのトレーナー

しかし時間かかったな、初登場はSeason2だべ？

80：名無しのトレーナー

◇79

正確にはSeason2のOVA『カノープスのオールカマー』な、一時間のやつ。

第10話のカノープス側の裏話で、ツインターボの話にこいつらが出てくる。

81：名無しのトレーナー

オールカマーのために特訓…の前に下準備という話。全体は学園に残ったネイチヤたちの下準備やら仕込みで、合間にツインターボの特訓が挟まる感じ。

最初の下準備でトレーナーがかかりきりになって自主練が続いたときに何か閃いたターボが「特訓だーッ！」って言って学園飛び出して、向かった先が群馬の瀬名酒造。

裏手のでかい家に我が物顔で飛び込んで、直でシマカゼタービンの部屋なんよ。しかしその日は平日、部屋の主は高校で授業受けてたっというね。

セリフはあんまないけど何気に群馬のヤベー奴とかどつかで見た連中が登場してんだ、しかもEDも群馬地方競馬仕様の特別版。

82：名無しのトレーナー

あの平日と休日の感覚が違うって演出が地味に憎い、やっぱトレセン学園は世界が違うんやなって。

EDは喫茶店部分がオールカマーで勝ったカノープスの打ち上げになって、どんちゃん騒ぎ。その中でターボのスマホに着信があつて場面転換。

BBQがツインターボのオールカマー優勝記念で祝う群馬地方競馬メンツと+αで全部新キャラなのはびつくらこいた。

◇81



最初は分かんなかったけど、よく見ると劇中でツインターボをレース場に送ったのが瀬名の兄貴と親父で、あいつらオールカマーの観戦してんのね。

劇中でハチロクとトイチが駐車場にあるし、シマカゼ一行はカノープスの面子とニアミスしてて背景にいたりしてる。

あとふつーにターボが『送ってもらった』って言うてるの、サラツと言ってる最初なんも思わなかったわ。

### 83：名無しのトレーナー

ワイ、イニD勢。にぎやかに騒ぐ群馬トレセンのウマ娘とトレーナーとか芦名高校勢の中にどっかで見たことのある男連中が紛れんのも憎い演出。

バターナッツと思わしきムキムキウマ娘に振り回される池谷先輩っぽいガソスタの店員とイツキっぽいアルバイト、それ見て馬鹿笑いするガソスタ店長と健二先輩。

瀬名の親父の横で隠れてタバコ吸ってる糸目の親父、その横に眠そうな目をした豆腐屋の倅が肉頬張ってめっちゃうまそうにしてるか。

テイオーとルドルフのシーンも、タービンたちと一緒にトレセン学園に通ってるターボの夢に変わってて、最後はベッドで幸せそうに眠るターボで締め。

### 84：名無しのトレーナー

∨83

しかも向こうの作者も公認でOK出してるっていうね。

劇中でも秋名があつて、ちよこつと登場してる。藤原豆腐店に行ったりガソスタ行ったり。

### 85：名無しのトレーナー

まさかウマ娘で『監修・ドリフトキング』を見ることになるとは思わなんだ。

86：名無しのトレーナー

∨∨85

それな、しかも普通に峠レースでWRX（シマカゼ&ターボ）とレクサス（ダイオー）がダウンヒルバトルしてるしな。

あそこだけ完全にイニDでBGMもユーロビートガンガンでテンションと雰囲気が増えるんだわ。

でもすっごいかっこいいのよ、いつものウマ娘と全く違うもの見せつけられてるのに世界が広がる感じが。

87：名無しのトレーナー

この時代に安田ハッピーを聞く事になるとは思わなんだ：レース物とユーロビートの組み合わせって嵌るとマジでシャレにならんわ。

おかげで今イニD全部見てる、ブルーレイ買ったけど悔いはない、何度でも見れるぞこれ。

88：名無しのトレーナー

∨∨87

いいぞ、そのまま嵌っていい。

89：名無しのトレーナー

世界が広がると言えばノルンフアング主導でサバゲに突貫してるシーンあったね

止め絵シーン多めだから動き少ないけどフル戦闘装備でエアガン構えてるウマ娘って新鮮…っていうかあのシーンもこだわりはんばねえぞ？

90：名無しのトレーナー

装備もエアガンがガチだったもん、あれもある漫画家の監修受けてやったそう。お礼に漫画のキャラ出演しとるで、フル人間の敵チームキャラがそいつらや。

あいつら何気にEDにもいて盛大に酒かつ食らってるぞ、運転手も含めてるから泊まりサバゲだなありや。

91：名無しトレーナー

◇90

だから止め絵の敵キャラが見覚えあつたんか、それっぽいなと思いつつ偶然かと思つてたが：そりやニコさんたちならつえーわ。

そしてあのキヤラ一人一人の装備に時間かけた拘りっぷりだ、動かせねえわ。動かなくても絵になるわ。

92：名無しのトレーナー

◇90

なるほど納得、よくあるそれっぽい絵で誤魔化してないガチ装備なんでウマ娘制作陣がやったにしては不思議だったがそれで納得いった。

ノルンがT&Sの三八式騎兵銃、ダイオーがミシユラン改修キットで改造したカクイのP90改造M6Sサブマシンガン、ツバキがカクイのガスブロ89式小銃曲銃床モデルのカスタム、タービンはカクイの電動AK-74改造RPK-74：セレクトがニツチ過ぎるわ。

それでツインターボがAK-47の次世代電動ガンでバラクラバ被った反乱軍ゲリラスタイル。実は伏線、あれが本編のあの格好にながるとは思わなんだ。

装備もショップで吊るされてたり雑誌で見たことあるのばっかだったしな。

◇91

次のシーンでフルウマ娘チームのノルン達がその人たちに負けるんだよね。

93：名無しのトレーナー

人間はウマ娘にかなわないなんて嘘だつてよくわかるシーン、そりゃ共存できませんわ。

愉快な奴らだし方向性は違ってもガチなサバゲーマーだからな。しかも互いにめっちゃ楽しんでいるから推しがやられてもクツソ笑う。

94：名無しのトレーナー

でもなぜか日本兵スタイルのノルンとゲリラターボ以外ほぼ私服にタンカラーAKチェストリグっていうちよつと不釣り合いな感じなのなんでだろ。

そりやマガジンは入れればいいんだろうけども、いやまあノルンとターボがガチ装備過ぎるっただけか？

◇◇92

ターボの部屋で装備借りたマチタンがリグ着込んでAK抱えてエイエムンしたのは笑った、トレーナーが止めてたけど。

95：名無しのトレーナー

普通のトレーナーにはまずAKリグとやらが分からん。あと金髪ブルボンが日本兵装備って違和感凄かったわ

96：名無しのトレーナー

◇◇95

胴体に付けてるマガジン付けた防弾チョッキみたいなやつ、群馬組がノルン以外みんなおんなじの使ってたわ。

ノルンのあれは原作リスペクトな、馬主が西さんで騎手が西さんの部下の孫、しかも血筋がウラヌスでもろ旧日本軍の流れなのよ。

相手の装備と比べるとレパトリー少な目でどこか貧相で雑多な感じ。なんか別のポーチの色がズレてて浮いてたりするし。

あとターボ以外みんな胸でかかったぞ、あれマグチェンジできんの？ってレベルで乗っかってるように見えるぞ。

97：名無しのトレーナー

◇◇94

そのまんまじゃね？あいつら車にも金掛けてっから、エアガン本体

買ったなら金ないべ？ガスブロ89は言うに及ばず、他の銃も本体の改修費考えたら目を疑う金額注ぎこんどるよ。

それにAKリグも安いほうだけどそれなりにするし性能面では結構使えるほうだし、ワゴンセール品引っ搦んで合わせたといつても配置に工夫見られるしこだわりはすごいぞ。

98：名無しのトレーナー

◇95

それな、雑多なのに動きが完全に別もんなんだよ。動かしたと思つたら超作画の戦闘やりやがる。

ツバキの戦闘スタイルが本職並み、リロードがクソ速いし手際がまったく迷い無し、ガスブロのロマンと性能活かし切ってる。

ダイオーは身軽に飛んで跳ねての機動戦、武器の元ネタがSFだから非現実っぷりが様になってるし、それを生身でやる事でプレイヤーがウマ娘っていうことがよくわかるようになってる。

ノルンフアングは的確な指示をする司令塔旧日本兵、万歳突撃は勝つ突撃で妙に年季の入ったいぶし銀。でも中身金髪美女、アメリカ人？

ターボは猪突猛進テロリストで、タービンはその支援で撃ちまくりコンビネーション。二人ともコンビネーション抜群、メインが弾切れになっても異様にサブへの持ち替えが速くて隙がない。

：いややっぱズレてね？あいつら、一部はともかくほかはほぼ地味な私服なんでなんか笑える光景になってるんやが?!

99：名無しのトレーナー

あのRPK、カクイならいつかコラボモデル出してきそうで草。バイオとGGOで当ててるから戸惑う理由ないし。

100：名無しのトレーナー

ワイ、ウマ娘から入った競馬ニワカなんで中央以外よく知らんのだがいいつらって有名なん？しかもシマカゼってトレセン生じゃない

のなぜ？

101：名無しのトレーナー

◇ 100

0506で地方競馬復活の先駆けになった5頭で、日本の有馬が世界の有馬になった歴史的事件の当事者やぞ。

今と違って地方と中央はれっきとした格差があつて、あの快進撃と復活劇には日本競馬に激震走つたんよ。

あいつが一般学生なのは…まあ、ヤツだからな。

102：名無しのトレーナー

海の方の始まりの五隻に習つて始まりの五頭とか呼ばれてるわね。

この一件で日本地方競馬は強制的に海外デビューしてしまつたわ。

群馬地方競馬の育成メソッドも世界各国に知られはしたけど、結局中央も世界も大失敗して確実にものにしてるのは群馬だけよ。

103：名無しのトレーナー

砂の巴御前・ツバキプリンセス

古の白い奇跡・ノルンフアング

不屈皇女・ホクリクダイオー

未勝利最強・ハルウララ

公道伝説・シマカゼタービン

104：名無しのトレーナー

◇ 102

これ以降日本のウイポとかダビスタだとヒストリーモードでやつてると群馬競馬とガチでやりあうと大体05年あたりから中央NP Cはボコスカにされ始めるのよね。

下手すると丹精込めて作り上げた血統が、とんでもない雑種の群馬馬に手も足も出ないとか。

海外ゲーでも日本陣営実装なら中央と同等に群馬地方競馬が並ん

でるなんて常だし、そうでなくても辺鄙なところで手に入った変な馬が無駄に強いつていうのが必ずある。

105：名無しのトレーナー

◇104

かといってその馬をトレードしようとしてもめっちゃガード堅いってのも追加ね、普通のプレイじゃどんだけ金積んでも馬主は了承しない。

そりゃ原作でもどれだけ金を詰まれようがお断りだったけどゲームまでそれやらんといてよ…

106：名無しのトレーナー

◇105

でも不興を買いでもしなけりや群馬トレセン使えるようになるのは簡単やぞ、世界で唯一峠調教ができるヤベーところ。

ここに預けるとまず馬の賢さが爆上がりして、いろんなステータスにバフがかかる。費用もそれなりに掛かるけどな。

107：名無しのトレーナー

群馬地方競馬が技術を教えて世界で大失敗したアレな、馬に負担がかりすぎる上にできる場所も実は少なくてで世界で爆死が連続した。

栗東トレセンが唯一部分的に継承成功したけど、それだって大竹と小泉とタイプが全面監修してようやくだったかんな。

しかも大本はただ裏山を簡単に整備しただけのポン付けを公言してて専門技術は使っていないとか抜かしてやがる。

108：名無しのトレーナー

とある海外リポーター「そんな調教すんのかよ、引くわ…」(原文ママ)

群馬地方競馬理事長「だよね」(原文ママ)

ガチトーンのリポーターに普通に笑ってる理事長が怖かったんだ

わ。

でも実際、群馬トレセンではちゃんと立証されてるからなあ：ほん  
とあそこ走れるようになるよと駄馬でもOP馬クラスに一気にグレイ  
ドアップするんやで？

109：名無しのトレーナー

そしてその立役者のシマカゼと言えば軍艦シリーズの始祖だぞ。

110：名無しのトレーナー

出た、軍艦シリーズww

111：名無しのトレーナー

血筋問わず、馬主がわざわざ日本に持ち馬を輸入して群馬地方競馬  
で調教を受けさせた馬。

あるいは日本で買って群馬で育成、調教して自国に輸入した馬に、  
馬主が願掛けで自国の軍艦たちの名前を付けたのが始まり。

とにかく大本に群馬が関わってる競走馬に多い、しかも名前はとも  
かく成績はシャレにならん。

112：名無しのトレーナー

イタリア競馬の守護神のCLアブルツツイ、CLガリバルデイが群  
馬メソツドの有用性証明したものな。

癖馬だが、イタリアGI降格事件の後に大暴れして格付けを再び取  
り戻す道を作ったヤベー奴よ。

113：名無しのトレーナー

▽ 112

癖馬⇨金勘定して競馬場の売店でジュース買って知り合いの応援  
馬券を買ってテラスで和む、ファンサも完璧。放馬？群馬じゃこれ普  
通だから。



114：名無しトレーナー

脱線しとるので修正しますね、答えは聞いてない!!

まずこいつらの登場に当時の中央競馬は阿鼻叫喚やったんよ、何しろ唐突に中央GⅠ搔っ攫わせ始めた上に勝負になるのがディープリンパクトただ一頭だぞ？

しかもディープと言えば日本近代競馬の回答と言われたサンデーサイレンス系の最終兵器、それに群馬地方競馬がかつての名馬たちの子孫で待ったをかけて乗り込んできたのよね。

しかも実力は本物で強いのである、当時の日本競馬にまさかの飛び蹴り食らわせとるんよ。

115：名無しのトレーナー

ちなみに銅像も全頭立ってる。ハルウララが高知競馬場。高崎競馬場にほか4頭。シマカゼがトレセンにいないのは原作再現やね、本業は酒の匠だし。

116：名無しのトレーナー

しかもシマカゼタービンは世界で唯一スポーツカー相手に勝ち星が認められてる公道の伝説ぞ。

芦名峠の走り屋にして競走馬最強のダウンヒラーとしてギネスにも乗ってる。

シマカゼタービンは群馬地方競馬に所属してたけど、馬の方でもほぼほぼ瀬名酒造の社員で酒の匠で峠の走り屋なんよ。

さつき脱線した話題だけど、いま世界中にいる軍艦の名前を持つ馬たちの始祖つてもマジ。アブとガリの師匠がこいつ。

しかもこいつ、素でとんでもなく頭がよかつたらしい。

117：名無しのトレーナー

頭はマジでよかつたぞ、瀬名酒造の経営メソッド改革の立役者で2006年代なのにこいつだけ2022年くらいの先進的経営技術を練り上げてた。

こいつが関わった仕事の書類とか高崎競馬場の資料館に行けば見れるぞ、中に人間は入ってなきやできんってレベルで洗練されてやがる。

118：名無しのトレーナー

生まれつき障害持ちつてのも追加な。体歪んでるし夜目も効かないって馬としちゃ不利、走り屋としても不利だろうにあの強さよ。

119：名無しのトレーナー

所でキャラデザは誰が好き？俺、タービン。アズレンのチャパエフに文太さん足したような感じが好き。

お胸でつかい親父系姉御、たばこ代わりの棒菓子がいい味出してる。

120：名無しのトレーナー

◇119

エアグリーブに藤原文太足した感じでは？全体的に丸くなった胸のでっかいエアグルツインターボカラーって思ってた。

でも他にはない色っぽさは同意。あとおっきいの、実は気にしてるっていうのもくるものあるよね。

121：名無しのトレーナー

群馬組みんな胸でけえじやねえか：でも同意、胸の話題で小町ちゃんに弄られるタービン可愛すぎるんじやあw

122：名無しのトレーナー

声はベラルーシア寄りだからチャパエフに一票

123：名無しのトレーナー

◇121

貴様、お迎えしたな!! (50連敗)

124：名無しのトレーナー

◇ 121

殺してでも奪い取る!! (90連敗)

125：名無しのトレーナー

素晴らしいな、感動的だな、だが無意味だ。我、4人すべてお迎え  
セリ。(諭吉5人生贄)

126：名無しのトレーナー

◇ 125

うわあ…

127：名無しのトレーナー

うわあ…

128：名無しのトレーナー

◇ 125

さすがに引くわ…

129：名無しのトレーナー

フルボッコでワロタwちなみに性能どうなん？

130：名無しのトレーナー

◇ 129

我ながら引いたんで同意する。性能は運営の公表と変わらんね。

芝・ダート適正を例にすると

ホクリクダイオー・芝A ダートB

ノルンフアング・芝B ダートA

ツバキプリンセス・芝B ダートA

シマカゼタービン・芝B ダートB アスファルトA

でも全員、継承で芝とダートの因子が☆一つあればAにできるから  
実質両方Aに近いぞ。

131：名無しのトレーナー  
お前らのような地方ウマ娘がいてたまるか。

132：名無しのトレーナー  
アスファルトwww

133：名無しのトレーナー  
アスファルト適正あるwwwどこで使うんやそんなもんwww

134：名無しのトレーナー  
フリーバーやろ、こいつに限ってはこいつがないと始まらない。

135：名無しのトレーナー  
適性の話じゃないけど、ぶっちゃけシマカゼだけキャラデザちよい  
と違う不気味さあるよね。

136：名無しのトレーナー  
◇ 135  
それな。

137：名無しのトレーナー  
◇ 135  
ワカル。

138：名無しのトレーナー  
でもキャラデザの人は同じなのよね？

139：名無しのトレーナー

作者のブログ曰く

トウカイテイオーの成長版Ⅱホクリクダイオー

金髪欧州美女のミホノブルボンⅡノルンファンダ

タマモクロスカラーのカワカミプリンセスⅡツバキプリンセス

クリーク＋スズ＋ターボ＋藤原文太Ⅱシマカゼタービン

140：名無しのトレーナー

原作者でさえ文太さん混ぜてんのかwww

141：名無しのトレーナー

どうしてそこだけみんな一致してやがる…

142：名無しのトレーナー

マヤ「解っちゃった！つまりクリークさん＋スズカさん＋ターボちゃん＋エアグルーヴさん＋ライアンさん＋チャパエフさん＋ベラルーシアさん＋天龍さん＋龍田さん＋文太さんⅡタービンちゃんなんだね！」

143：名無しのトレーナー

待て、天龍と龍田とライアンはどこから出てきたwwwあとカメラが過ぎるぞ。

144：名無しのマヤちゃん

∨ 143

自分は天龍・龍田に文太さん＋メジロライアンがそれっぽいつて思ってたのよ。

145：名無しのトレーナー

∨ 144

いきなり素になんなwでもカメラ過ぎるぞ、マジで。

146：名無しのトレーナー

こうも感想がばらけるなら不気味に見えんのも納得、原作でもなんか不気味って言われてたみたいだし。

147：名無しのトレーナー

でもそのこいつ自身はすごい頭のいいやつで群馬競馬の縁の下の力持ち、こいつに救われた競走馬は数多いのよ。

性格も理知的で初対面の人間にも鷹揚、こいつに競馬を教わった馬はすべからく自分の道を見つuckerキングメーカーや。

148：名無しのトレーナー

ワイ、武装紳士。こいつのおかげでアルトアイネス、アルトレーネがGI馬として競馬界に名を残したことに感謝しかない。

おかげで武装神姫たちの姿は永遠になった、公認イメージキャラとして群馬も中央も認めたからな!!

ウマ娘でもあの姿を拝めて満足、あとはブキ屋がモデルアップしてくれればなおよし!!

149：名無しのトレーナー

出たな日本競馬の狂気wなんで時々噴き出すんだよ。エロゲとJWCよりもまともなのがまた腹立ったぞあの企画。

150：名無しのトレーナー

アルト姉妹の馬主、これに願掛けして後々持ち馬全部武装神姫の名前をコ●ミに許可取って付けてたかな。しかもコンプしてから馬主辞める筋金入り。

151：名無しのトレーナー

しかも全頭シマカゼが師匠、こいつらも安定して強かった。中央G Iは厳しくてもGII GIIIは余裕で掻っ攫ってたかな。

152：名無しのトレーナー

ワイ提督兼任、当鎮守府の島風が友達に渡すお土産で悩む理由を知って号泣。ついでにシマカゼのラストランに泣く。

あんなに頑張ってみんなに慕われてたのにあんなのってねえよ…

153：名無しのトレーナー

◇ 152

それは言うな。あれをいきなり直視して受け入れられる競馬ファンはまずいない、というかマジ狂ってんよあの時代。

154：名無しのトレーナー

◇ 152

ワイ、当時7歳。中山競馬場で狂ったように両親が暴れる姿を見て必死ではあちやん家に逃げた。

155：名無しのトレーナー

◇ 152

ワイ、中央競馬厩務員。あれで部下と騎手がファン嫌いになった。

156：名無しのトレーナー

それが巡り巡ってあんなことに…

157：名無しのトレーナー

脅迫文が来たら警察に相談するのが普通のこと解らんかったやつが悪いのに逆恨みしやがって…

158：名無しのトレーナー

◇ 157

ワイ銀英ファン、ほんとにそれ…だからフィクションだと言ってくれ

159：名無しのトレーナー

◇ 158

残念ながら現実、ナシヨジオとデイスカバでも取り上げられてる。これはフィクションではなく、公式の記録に基づいて作られております。

160：名無しのトレーナー

ワイガンダム民、あれはアニメだけにしとけよクソが。

161：名無しのトレーナー

シマカゼの一件で空気が一気変わったよな、今の群馬競馬なんか遠征の時は必ず馬用防弾チョッキ着せて輸送してるし。

ダイオー達は言うに及ばず、ディープ達でさえファンを見る目が変わったっていうし：

162：名無しのトレーナー

あの事件で幸せになった奴なんざ死んだ犯人以外おらんよ。あの後すぐに仲の良かった馬や弟子たちがエグい位に体調崩してたし。

犯人の家族も一族郎党みんなまとめて巻き添え喰って全滅。あれも超胸糞悪かった、あのバカのせいでみんな不幸になっちゃったよ。

群馬地方競馬は警備部門設立して武装全部取っ払ってインパルス放水銃付けたM2ブラットレーを警備に配備しようとしてましたねえ：結局フルアーマーハンヴィーになってたけど。

163：名無しのトレーナー

なお群馬警察はフルで装備転換してガチタクティカル化したね：いや新規生産の9ミリ拳銃と89式などを全面配備し始めるとか、軽装甲機動車をパトカーに採用とかはまあ分かる。

だが日本で平然とハンドDを飛び回らせてんじゃねえよ！どうやって政府の許可取りやがった!!

164：名無しのトレーナー



とある事故でドクターヘリが足りなくなつた病院が警察に応援頼んだら、巡り巡つて群馬のハインドDが来てお医者さん達がクツソたまげたつて言うあれな。

それはそれとして群馬競馬の輸送車列は日本とは思えん物々しさなんよな、群馬地方競馬の中央遠征とか群馬競馬の警備部が本領発揮しやがる。

車列組むのもそうだけどあれホントに競走馬の馬運車かよつてレベルで警備が固い。

165：名無しのトレーナー

あれ実銃持ってないだけで練度と装備は一流PMCレベルって海外の評論家が太鼓判押してたぞ。

ハルカゼサカヅキの時なんてガチでフランス軍全面協力してたんやで？

166：名無しのトレーナー

中央のキセキ陣営が相乗りして肩身が狭かつたつてやつね、あの酒屋の人脈どうなってんねん：

167：名無しのトレーナー

いやマジで何があった、まるで意味が分からんぞ：ニワカですんません、どうしてなのですか？

168：名無しのトレーナー

君は良いニワカだね、知らないことを知らないと言って、素直に教えてほしいと言える。

とても素晴らしい、あの頃の糞野郎どもとは大違いだ。

169：名無しのトレーナー

そうか、知らない世代がいるのか、良いことだ。

170：名無しのトレーナー

06年の有馬は日本競馬史上最低最悪の結果になってね：アニメで言えばライスシャワーのアレを国際規模にしてさらに煮詰めてどす黒くした感じだよ。

人間の悪い部分がすべて噴き出してきたような感じだ、あれほど人間の唸りが恐ろしかった日はない。

171：名無しのトレーナー

つ競馬MAD『ウタカタ（ディープリンパクト編）』

この世代の有馬はラスボス化が止まらない。

172：名無しのトレーナー

06年のレースで、有馬記念は世界の有馬記念になったのは確かかなだよ。

日本からみた凱旋門賞みたいな感じだ、今でも挑戦してくる外国の馬は多いだろ？

でもそのために失ったものはあまりに多すぎた：主に人として大切なものがな。

173：名無しのトレーナー

余りの発狂ぶりにマスゴミすらドン引き。どこまでも糞ぞ。

174：名無しのトレーナー

世界のお偉い大学の先生はこの現象を『SAN値直葬による発狂』と認めたよ。あ、これは簡易的表現な。

175：名無しのトレーナー

群馬県芦名市コンビニ穴山前散弾銃無差別発砲事件でググレ、不幸になれる

176：名無しのトレーナー

あれは本当に不幸というか不運というか…あれほんとどうしろってんだよ…

177：名無しのトレーナー

SAN値直葬された世界のニワカどもがやつと大人しくなった矢先にこれだよ、世界中で警察のお偉いさんがFワード連発したって聞いたぞ。

178：名無しのトレーナー

もし犯人の親父がもう少し冷淡だったら、犯人を気晴らしに観光旅行に連れ出さなければ、観光旅行ついでにクレー射撃大会に出ようと銃を持ち出さなければ、

クレー射撃のために銃を新調さえしてなければ、大会前に練習しようとして散弾を買い込んでなければ、

クレー射撃大会が芦名市で行われてなければ、コンビニ穴山で昼飯を買いに行かなければ、眠い息子が車に残るのを容認さえしなけりゃ、

眠いんならさっさと寝ればよかったのに、後ろを歩くタービンに気付かなきゃよかったのに、あの逆恨み野郎…

179：名無しのトレーナー

脅迫文送ったら警察に相談されることを知らなかったあいつが悪いのにと根に持ってぐちぐちぐち。

逮捕されて前科ついて彼女に振られて仕事を首になって、新しい仕事も長く続かなくて転々としてそのまま30過ぎた出戻り子供部屋オジサン化した結果があの様、害悪でしかねえ

180：名無しのトレーナー

あの日タービンが酒の仕込みをしなければ、茂三さんがコンビニ穴山前を通るルートに決めなければ、コンビニ前道路の先に知り合いの警官が居なければ、

知り合いの警官が新人二人の研修中でなければ、女の子の落とし物を探すのを手伝ってなければ、それをタービンと茂三さんが偶然見つけてなけりや…

181：名無しのトレーナー

親の銃を勝手に持ち出したバカは警察に取っ捕まって終わりだったろうな…なんであんなつまつたんだよ…

182：名無しのトレーナー

犯人の親父がもう少し競馬の事を知ってさえいれば、芦名はやばいって気づけただろうに

183：名無しのトレーナー

それは無理よ。親御さん、理由はともかくギャンブルで息子が狂ったからそういうの嫌ってたんだもの。息子が100%悪いのは認めてたけど。

184：名無しのトレーナー

親の愛を食いつぶして何もかもぶち壊してくれやがったよな、デカくなっただけの甘ちゃんボーイめ…

185：名無しのトレーナー

あれで親御さんは立派な人だったから余計に屑な所が際立つのよ、更生させようと四苦八苦してたんだぞ？

186：名無しのトレーナー

つファンアート『1944オルモツク湾／2017芦名市街地』

187：名無しのトレーナー

◇ 186

ヤメロー!!!

188 : 名無しのトレーナー

∨ 186

I STD!!

189 : 名無しのトレーナー

∨ 175

新聞が出てきた、警官2名死亡、重軽症2名、犯人は銃撃戦の末に射殺つてマジかよ…

190 : 名無しのトレーナー

∨ 189

読み進めてみる。

諸君、精神分析の準備だ。

## 第30話

2021年某月某日、群馬県・芦名市・瀬名酒造社内・社長室。

とあるゲームを運営するプロデューサーの一人を務める彼は緊張でおかしくなりそうな思考を何とか修正しながら目の前で企画書を読む初老の男性を見つめていた。

長い年月をかけて刻まれた手や顔の皺、だが老いが見える風貌には不釣り合いなほどに気力に満ちた双眸をもつ瀬名酒造の長。

瀬名茂三が目を通す企画書は自分たちが誠意を込めて作った最高の代物だという自信がある、普通の会社になら自信を持ってお勧めしてセールストークを行えるだろう。

しかしやはり馬主という肩書を持つ人たちが持つ一種の雰囲気という物は、そのような軽い自信など一気にかき消してしまう重さがあるのだ。

その上相手は瀬名茂三、群馬地方競馬の隠れた重鎮にして世界トップクラスの怪物競争馬を何頭も輩出してきた瀬名酒造のトップ。

彼とはすでに面識があるとはいえ、

(やはりだめなんだろうか…)

無理もない、自分自身望み薄なのはわかっている。

自分たちが手掛けるこの『ゲーム』の趣旨はこれまで、彼らが協力したそれとは全く別のものだ。

日本競馬界は中央・地方問わず、2017年の散弾銃乱射事件のせいで大きな衝撃とダメージを受けた。

馬主と競馬関係者からファンを見る目は大きく変わったし、牧場や生産者の安全意識も大きく変化せざるを得なかった。

そしてそれ以上にファンという人間そのものに対する信用が失墜した。

それは自分たちのプロジェクトにも大きなダメージを与えた、自分たちには関係ない事でも。

『一人がやった、しかも何の計画性もなくやった、他の奴もやるときは

やるだろうよ。想定外に備えなきゃならん』

かつて群馬県警察のトップをしていた男性が、警察官の重装備化に関する取材を受けた際のコメントだ。

事実、その後の議会演説の帰り道、その彼はシユプレヒコールの中でトマトを浴びて『ほら見ろ』とばかりに笑って宣言した。

『これが火炎瓶だったら死んでるな。見ろよ、やる馬鹿いるじゃねえの？俺は死んでもいいが部下は死なせたくないね』

その宣言通り、群馬県警の警察官負傷件数は犯罪発生率の増減に関わらず常に低調なものになった。

重装備故の防御力で『受け止めてやり返す』ことによつて正当防衛として公務執行もできるようになったからだ。

その発端となった事件の当事者である瀬名茂三に、自分は場違いな仕事の話を持ち掛けているのだ。

あの事件で許可を得ていた多くの馬主から待ったが掛けられ、中には許可を取り消すと言ひ出す馬主も出てきた。

そんな彼ら彼女らに面と向かつて誠意を込めて説得をして回り、やつとのものでリリースしたこのゲームだ。

その存続をも揺るがしかねない爆弾が瀬名酒造。2005年、2006年の日本競馬界を語るには外せない存在だ。

彼らからは不気味なほどに例の事件でのアクションはなかった、許可の取り消しに関する問い合わせも、キャラクター使用に関する是非も何もなかった。

まるで関係がないと言わんばかりに何も言つてこなかった、だから自分たちもどうしていいかわからず放置するしかなかった。

でもやはりだめなのだ、彼ら無しでは自分たちの作品は限界が見える。そしてそのためにももう一度彼らと話をする必要がある。

「なるほど、キミたちがどうしたいのかは理解できたよ」

「はっ」

言葉は不要だ。不安で仕方なくて、いらぬ口が回りそうなのを押し返してただ肯定を返す。それでいいのだ、やりたいことは全て企画書に書いてきた。

それを彼はちゃんと読んで理解してくれたのだ、そうであってほしい。もう自分と彼とは以前とは違う。

2015年のプロジェクト始動時、熱意のままにアプローチを掛けて意気投合できたあの時とは何もかも変わってしまったと言っている。

あの時のままでいられたらどれだけよかつただろうか、二人でシマカゼタービンにラフ画を見せてあんぐりと呆れられて偶然いたハルカゼサカヅキがゲラゲラ笑いだしたあの時のままならばと。

「良いだろう、使っていいよ」

「…はい？」

「約束を違える気はないよ、前の時も良いと言ったじゃないか」

先ほどまでの厳めしい雰囲気は掻き消え、朗らかに微笑む茂三。そこにはかつて意気投合した時と同じ温かみがあった。

「実は結構やきもきしてたんだよ？あれ以来音沙汰なかったじゃないか…もうちは無視するんじゃないかと思っていたよ」

「…我々のゲームは他とは毛色が違いますから」

「確かに。レースゲーム、育成ゲーム、ホラーにアクション、いろいろあいつは引つ張りだこだったが…まさか女の子にされるとは思わなかったみたいだしなあ」

ウマ娘プリティーダービー、新キャラクター草案と書かれた資料をテーブルの上に置く。

そこには紫を基調としたセーラー服を着たウマ耳と尻尾を持った美少女たちのアニメ絵が載っており、名前と詳細設定のあるページがその下に記載されていた。

その中には青髪でオッドアイの少女も居て、彼女の下にはシマカゼタービンと名前が紹介されていた。

「それに、あんなことになりました。私どもは——」

「それは関係がないことだ。あれをやったのはあのバカで、キミたちには一切関係がない。それともなんか協力でもしてたかい？」

「そんなわけありませんよ、あれは寝耳に水でした」

「なら関係ないじゃないか。私は何でもかんでも同一視するような輩



ではないよ。

そもそもうちが扱ってるのは酒だよ君い？ああいう手合いなんてそれこそ創業当時から付き合ひさ」

なんでこう、この人はこういう一番言っしてほしいことを軽々と当然のように言ってくるのだろうか。

犯罪者がアニメを見ていればそれが原因と罵られ、ゲームをしていたと言えば蔑まれる。

理解のない人間から心ない罵声を受けたことは一度や二度ではない。

「それにこちらこそすまないね、迷惑を掛けちまっただろ？」

「いえ、あれは茂三さんたちが悪いわけではないですし：関係ないですよ」

「ふふふ、ならお互い様だ：でもなぜ今なんだい？」

「それは：少し前、栗東トレセンがあるデータを公開したのはご存じですか？」

「ああ、あの時のか。もう10年以上も前のバトルのヤツな、まったく懐かしいもん見たぜ」

「あれです、あれを見て、堪えきれなくなりました。やはりこのゲームにはこの世代が必要です、シマカゼタービンが居なければ成り立たないよ、そう思いました」

栗東トレセンが2021年の末に一般公開に踏み切った極秘資料は、文字通り世界の競馬・生産者、そしてモータースポーツを揺さぶった。

『シマカゼタービン・2005年』と題された記録映像には、2005年の芦名峠で行われた非公式な競走馬調教と峠レースが納められておりそのメニユーは明らかに狂っていた。

その「競走馬」こそがシマカゼタービンだった。

2005年代の整備が満足にされていない山の峠道で行われる往復坂路調教、走り屋譲りの攻め込みとフットワークを見せるシマカゼタービンの姿は恐ろしく完成されていた。

そして同じコースで行われた併走調教では相手がスポーツカーで

あった。往年の名車であるAE86GT—APEX、そして主戦騎手の愛車らしいAE101GT—Zと行われた併走調教は圧巻に尽きた。

騒音や喧騒を嫌う競走馬が、まるで当たり前のようにスポーツカーに追従し、その動きを真似て峠道を爆走し続けるのだ。

馬でありながらドリフトを巧みに行き、コーナーでは内側の壁に本当にスレスレになるまで寄せて超高速で曲がり、直線では思い切り加速して速度を稼ぐ。

そして映像資料の中には一つだけ実戦映像が含まれていた。日本競馬界では伝説の一人となった大竹騎手が自ら記録した峠レースだ。

スカイラインGT—R33対シマカゼタービン、普通に考えれば負け戦だ。どうやっただってシマカゼタービンには勝ち目がない。

さらに言えばこの時、シマカゼタービンの鞍上には誰もいない。無人の放馬状態であったのだ。

大竹騎手がシマカゼタービンの馬主である茂三の操るAE86の助手席から余すことなく撮影したそのレースは、まるで別世界のような光景であった。

その速度とテクニックは明らかに競走馬のそれではなかった、その姿は明らかに馬としては異常であった。

明らかに競走馬としての限界を超えた速度で降り道を駆け下り、まるで走り屋が馬に乗り移ったかのような攻めこみでR33に追従するシマカゼタービンの姿が映し出されていた。

彼はレースを理解し、コースを理解し、勝敗を理解し、峠レースを理解して走っていた。彼は一頭でレースができるのだ。

しかもそれだけではない、彼はそのレースに見事な勝利を飾った。競走馬としてではなく、走り屋としての勝利を見事に勝ちとっていた。

「彼が居なければ今の日本競馬は成り立っていません、中央と地方の実力差は今尚隔絶していて今のよう互いにライバル視しつつ切磋琢磨できるような間柄には到底なれなかったでしょうね」

「なるほど、確かにそれなら君たちのプロジェクトには欠かせないか。

なら…一つお願いがある、できればあいつには自由にさせてやってくれ。やりたかったことをやらせてやってほしいんだ」

「と、言いますと？」

「あいつにできなかつたことを存分にやらせてほしい」

茂三は少し愁いを帯びた表情で息を吐く。

「走り屋も、酒造りも、やらせてやってくれ。銃も撃ちたがってた、サバイバルゲームとやらにも興味津々だった、何とかできないか？」

「ちよちよ、ちよつと待ってください。落ち着いて！」

「ああ、悪い…あいつがあんなふうになつたのは俺のせいだ、俺がバカな夢を見ちまつたからああなつた」

「それは…」

違うと言いかけて口を噤む。否定するのは簡単だ、しかしただ否定するのは茂三に失礼なだけだ。

否定するなら否定するだけの理由がなければならぬ、そしてその理由を彼は持ち合わせていなかった。

「俺はツイインターボが好きだった、だから一度でもいいからあいつにはあそこで走ってほしかったんだ。」

別に勝てなくたっていい、どんな結果になろうが構わない、ただ走らせてもらえれば、あとはただ無事に帰ってきてくれるだけで…」

競走馬と騎手にとってそれは蔑みにも聞こえるだろう、しかし彼とシマカゼの間ではそうではなかった。

彼の気持ちは本心だった、シマカゼタービンにあのレースを走ってもらえるだけでよかった。

それだけで本当に満足だったのだろう、だがあんな結末はだれも望んでなんかいなかった。

「隠してるつもりなんだろうが…気づかねえはずないだろうがよ。あいつ、後輩が峠を走ったり酒の仕込みをしてるところを見るとたまに羨ましそうにしてるんだ。」

走りたい、走りたいって思ってるのが見え見えなんだよ。それがずっと目に焼き付いてんだよ。

痛かつただらうに、苦しかつただらうに…あのせいであいつは走り

屋も酒造りも引退しなくちやならなくなつたんだ。

俺も走り屋だ、酒造りも好きだ、もし歳でだんだんできなくなるなら納得できたかも知んねえさ。

でもそれがある日突然奪われたとなりや…それがどれだけ辛いか、想像もできん」

「だから、ですか？」

「ああ、俺の我儘だ。聞き流してくれても構わねえ、でもできればあいつには自由にやらせてやってくれ、好きなこともやりたがったこともうんとやらせてやってくれ」

「解りました、できる限りのことはします」

全てできるかはわからない、しかしこういうしかなかった。それが条件というならやってやろうじゃないか。

むしろすすきりとする、そういう条件付きで使わせてくれるというのなら正々堂々好きなことやらせてやろうじゃないか。

「悪い、湿っぽい話しちまったな…そうだ、お礼に一つ、いいネタを教えてください。あ、もちろん許可は取ってるから大丈夫だよ」

「ネタ？」

これはうれしい、シナリオ担当者にインスピレーションが与えられる話ならば大歓迎だ。

それも群馬地方競馬の許可もとっているのならちよつとした機密なのだろう。

「君は学校にテロリストがやって来る的な妄想をしたことあるかい？」

「あー…まあ学生の頃に少し」

「あれできるよ、たぶん」

「はい？」

「だからできるよ、学校にテロリスト。これはゴドルフィン殿下が群馬トレセンに見学に来た時の話なんだがね…」



自画自賛は好きではないが、自分たちはフリーの暗殺者としてはトップクラスだ。自分たちはそうは思っていないし、上には上がいることは自覚していたが、傍から見れば十分トップ層だ。

故に仕事には困ったことがない、顔見知りの同業はいくらでもいるし、いざとなれば手を借りるくらいには親しい連中もいる。もちろん仕事ではお互い様だが。

武器装備のツテもたっぷりとあるからどんな時でも金さえあれば完璧だ、もちろん仕事のための輸送だって顔が利く。

元KGB、元グリーンベレー、元GIGN、果てはSWATやらFBIやらの警察や軍人崩れの連中とも張り合った。

仕事の最中に腕の立つボディガード達のみならず、各国軍の特殊部隊とかち合い、付け狙われたことだって1度や2度ではない。

(だからあり得ない、あり得ないはずなんだ!!なぜだ!!)

そんな自分たち4人組は日本というアジアの片隅で絶体絶命の危機にあった。こんなことは予想していなかった。

周囲を野原に囲まれた道路の片隅で横転した逃走用のミニバンの助手席から転げ落ちるように降りた自分、血だらけの変装厩務員姿は情けないありさまだった。

それでも何とか持っていた銃を見やって歯噛みする、撃つ前に壊れてしまっていた。

何とか国内で調達した数少ないサブマシンガンであるステアーツMPは事故のせいで弾倉が折れて壊れていた。

マガジンキャッチを押すと壊れた弾倉がずりりと取れたので交換すれば撃てるかもしれないがギャンブルだ、何よりそんな暇などない。

「フリーズー！」

自分よりも前に何とか這い出た仲間の二人を見やるがすでに決着がついていた。

一人は腹を押さえてうずくまるようにして倒れ、もう一人はあおむ

けになって完全に気を失っている。

二人を倒した日本の制服警官は忌々しい栗毛の馬に慣れた様子で騎乗し、槍のように物干し竿を携えて睥睨した。

彼らが持っていたマカロフPMとトカレフTT-33はすでに弾倉と初弾を抜かれて警官のズボンに挟まれている。

マカロフが妙にてかてかしているように見えて気分が悪くなった、トカレフは警官がやってマカロフをやったのはあいつなのだろう。

運転席で完全に気を失って伸びている長年の相棒が目覚める気配はない、むしろ出血がひどくなっている、病院に行かなければ死は免れないだろう。

「フリーズー・りりーずー・ユーウェポン!!」

簡単な仕事ではない自覚はあった、だが少なくとも目的を達成できずに失敗することはないと思っていた。

日本という国は平和ボケした国だ、それは事実ではあるがだから仕事がいやという意味ではない。

まず入国・出国に関する危険性がほかの国とは違う、仕事道具の密輸に始まり密入出国の難易度が桁違いである。

自分たちのようなフリーの暗殺者チームにはそこでとん挫する例が後を絶たない。

国内ではギャップに苦しむ、まだ日本での仕事を経験したことがない若手は中に入ってしまえば楽だと思われるようだがそれも違う。

例を挙げれば普通の警察官だ、確かにこの国は警官さえも一般層は平和ボケしている。

故に普通の警察は簡単に違和感を感じ取って来る、そして平和ボケしているゆえに何の気なしに声を掛けてくる、裏の人間からしてみれば無防備かつ不意に来る。

自分たちはもともと裏の人間で戦うことが仕事だ、それゆえに居るだけで鉄火場を連想させる連中は目立ってしまうのだ。

ヤツラからしてみれば不良っぽい外人が居るから一応声かけてきた程度なのだが、行く先々でいちいち声を掛けられたらたまらないだ

ろう。

しかもこの国では武器の類を正式に持っている風に見せるのには大変骨が折れる、拳銃なんて忍ばせていれればすぐに御用であろう。

それでも自分たちならやれるはずだった、中に入ってしまったえば外遊中のゴドルフィンのおっぱ暗殺は十分できる仕事のはずだった。

「フリーズ!!」

のしのしと歩いてくる蹄の足音と片言ですらないジャパニーズイングリッシュの鋭い掛け声に体がこわばる。

「ドントムーヴ!!マイネームイズマサタカオニワ!!アイアムポリスマン!!」

いつでも首をはねられるとばかりに寸止めされた馬の香りがする金属製の物干し竿、それを向けてくるPP-19ビゾンサブマシンガンをスリングで首に掛けた栗毛の馬に跨った青い制服を着たやや歳の警官。

この警官と馬に自分たちはあつという間に負けた、この馬に仕事を邪魔されてこの有様だ。

一人と一頭から向けられる鋭い視線は余すことなく自分を警戒し、周囲でうずくまる二人と運転席で気絶した相棒にも注がれている。

忌々しいことに馬に至ってはステアーターTMPにまだ初弾が装填されているのを理解している節がある。

こいつらにやられたのだ、自分たちはこいつらのせいで失敗した。遠くからサイレンの音と蹄の音が聞こえ、一人と一頭の意識が僅かにブレる。

(逃げ道はない…ね。ごめん、みんな)

物干し竿を跳ね除け、驚く馬の顔にステアーターTMPを投げつけて気を逸らす。

仕事人としてやるべきことをするまでだ、こうなる覚悟は常にあつた、みんなあつた、ただやる機会がなかっただけだ。

腰のシークレットホルスターからスミス&ウェットソンM40を抜き、気絶した相棒の頭を狙う。長年連れ添った夫の顔だ。

最初の一発が撃てれば後は楽だ、あとは仲間も同じようにして自分

を撃つ。そんな未来を、顎を下から殴られて上を向きながら綺麗に空を舞うM40を見上げながら幻想した。



### 第31話 ※おまけ改訂版

2006年某月某日、日本国・群馬県・某所・群馬競走馬トレーニングセンター……

今日も今日とて群馬トレセン、最近はアグレッサー役が板についてきたシマカゼタービンです。

確かに俺はアルバイトみたいな感じで併走とかに付き合ってたよ、何ならツバキたちを散々千切り倒してきましたよ。

ついでに言えば一応競走馬ですよ、まあ趣味程度が許される地方でしか走りませんけども。

でも競馬の仕事で呼び出されることが多いってのもちよつと困っちゃうわけさ。

競馬は副業で本業は酒造なんだよ俺、アスリートじゃなくてマイスターなの、ついでに言えばアングラな走り屋なのよ。

だから本来かなりフリーなの、フリーハンドなの、自由な時間多いの、ずっとトレセンにいてもいいきれいな馬じゃねーのよ。

「ブルツ、ヴー……」

「うひっ……」『うわ、師匠不機嫌……』

不機嫌にもなろうよ、アイネスちゃん。アグレッサー役はあくまでアルバイトなのよ。それが本業を喰うようじゃあかんでしょ。

そりゃツバキたちの相手とか、ディープ相手とかならまあしようがない部分もありますけどもね。

あいつら本気になったら並みの馬じゃ歯が立たないし、かといってうちの一流連中は自分のことで忙しいから今は無理だしね。

けどほかの馬だったら別にできるでしょうよ、なんで俺が相手してやらにやならんのだ。

あくまでアルバイトだから今までOKしてたのよこの仕事、あくまで俺は数合わせなわけ、本格的なのは本業の奴らにお任せなんだよ。

なのにここ最近ときたら何かあれば呼び出される、拳句俺を指定し

てくる調教師や騎手までいる始末だ。それも中央の知らん奴らまで。俺は員数外のアルバイトトレーナーなわけですし、当然名簿には載ってないしトレセンに毎日いるわけじゃありません。

だから普通ならそういうのはお断りなんだが、そうもいかない大物も普通に指名してくるから：最近だとルベルっていうんだけどね。

「ブルル」『どうしたのです？いつもよりすごい不機嫌ですが』

「ブルルツ：」『レーネか。当たり前だ、そもそも今日は休日だったんだ。なのに呼び出しやがって』

馬に休日なんてあるのかって？うちにはあるんだよ、決まった日にちに休めるわけじゃねえけどな。

今日は近所のフリマに行けるはずだったんだよ、ちようど親父さん達も甘酒の屋台やるからそれについて行って遊ぶ予定だったんだ。

今回は理由が理由なんで無下にできんかったが、普通ならお断り案件だわ。いや、こんな有様なら絶対嫌だったね。

デイープたちならまだわかるよ。あの野郎、ことあるごとに俺を指名して呼び出しやがるがまああいつの相手ができるのはダイオー達以外だと俺だけだからしょうがない。まあ、俺も面白いからよし。

ハーツクライも：まあしょうがねえ。最近すっかり味占めてきやがって、ちよいちよ顔出してくる。

キングジョージとかいうのに挑戦するらしいから同じ距離でぼろ糞にして、ちよつと喉が調子悪そうだったからドクターに丸投げした。

鍼マツサージしてシロップ薬貰ってすぐに完全復活してたから大したことなかったんやろ。あれなら勝つね、よほどのことがなきや。

まあそういう事もね、まあ俺に仕事が回ってくるからやってる。仕事だからやるし、あいつらと一緒にバトルするのは楽しいし、暇しねえし。

だが今俺がやってんのはなんだ？ただ休憩スペースで寝そべってグダグダしてるだけじゃねーの。

暇なんだよ、時間無駄にしてる感じ半端ねえんだよ、ほんと何でここにいいのかわかんねえのよ。

『俺は仕事しに来てんだよ、休日返上してんだよ、なのに放牧地に放り出されてほったらかしだあ？こういうの一番嫌いなんだが？』

くそ、前世で無理矢理本社の関係各社交流パーティーに放り込まれた時を思い出すぜ。あの時も休日返上で引つ張り出された挙句、何のやる事もなく放置プレイ食らった。

いや、あん時より悪いか。あの時は飯が豪華だったからな、それとなくお替りしまくってさも食うのが好きな下っ端で凌げた。

飯はうまかったしな、高級ワインに高級料理、まさに上流階級のお食事会って感じでいいお味であった。

でも今回はそんな暇つぶしのもんすらねえ！変に遊んだら今日は迷惑掛かっちゃうから静かにしてるしかないので暇なんだよ。

『今日は人間のとつても偉い人が来られてるわけですし、なら群馬トレセンのボス馬がいないと締まらないってわけじゃ？』

『俺はボスじゃねーし、ボス馬がどうかなんてこれにはかんけーねーな。お偉いさんなら桜葉理事長が相手すりゃいいだけだ』

『なら師匠が一番強いから！走るのも速いけど喧嘩も強いんだし護衛に最適じゃん！』

『それなら雅孝さんたちと自前の護衛で何とかならあ』

俺が休日返上で呼び出し食らった理由、それは海外のとある王族がわざわざ群馬トレーニングセンターに見学に来るからつてのが理由だ。

放牧地の外、見学用のテラスで仕立てのいいスーツ姿で大手マスコミの取材を受けてる外人のいい男がそうだよ。

しかもご丁寧な群馬競馬のツバキたちの騎手も全員と一緒に合同インタビューときた、何でも地方競馬から出てきた稀代の名騎手達というお題目だ。

全員が騎手姿で気合入っているように見えてるけど違うなありや、主に緊張で変な顔になりそうなの必死でこらえて真面目な顔してるだけだ。

濃緑に稲妻マークの桂井さんが一番自然かな？いや単純に隠してるだけか、ツバキを認めてくれるのは分かるけどもつていこうとした

から内心嫌ってんだろあれ。

カーキ色で背中と正面に丸に縦矢印の騎手服を着た田島さんも、まあ天皇賞で西さんと一緒に御上の人たちと会談したらしいから多少慣れてるっぽい。

でもどつちかかっていうとめんどくせえって思っただけで、そりやそうだが、生きてる世界違いすぎると面と向かうだけでこつちに迷惑降り注ぐんだよこういうの。

分かるよ、俺も経験あるから。しかもそういうのに限っていくら他意はないって言っても全然信じてくれんのだ。

例えば前世、美味しいクラッカー見つけてついつい多めに食ってたら偶然良いところのお嬢さんとそれで話が合っただけで数分盛り上がったことがあった、それだけでそのお嬢様に気があつたらしいお偉いさんに目を付けられて難癖付いたかん。

まあそのあとすぐにイラク行きが決まって、死にかけてたが帰国したときにはうやむやだったから気分クソ悪かった以外に害はなかったが。

ダイオールの騎手の新坂さんは特に酷い、ライトグレーの下地に左肩から青い二本線を襷掛け勝負服が煤けて見える。

あれは何も考えてないな、考える余裕ないんだ。とにかく話に合わせるだけで精いっぱいって感じ。

新坂さんもこれから大変だつてのに今からプレッシャーかけるんじゃないよ、ダイオールのドイツ戦がかかってんだぞ。

『ありやりや、頼信さんが固まつてる』

『社長が大喜びしてそうなのです』

『ありえるね、いい経験だとか言っただけで笑っただけ。ニヤニヤしながらひよっこり顔出して来たりして』

『外人さんが好きそうな格好だし、いいんじゃない？』

三郎社長、お仕事以外だと基本的に由緒正しき和装が基本で見た目はジャパニーズヤクザなんよね。本人は全く意識してないけど。

ついでに言えば新坂頼信騎手も若手ヤクザっぽい私服、中身は普通の人なんだけどセンスが親譲りなんだよなあ。

新坂一家はみんなそうなんだよ、というか会社も含めて丸ごとそう。やってることは普通なのに格好と雰囲気はヤクザ。

しかもそれ、嫌がるどころか面白がってる節あるからなあ。

『それにしてもわざわざアラブから殿下が直々にとはね』

アラブのどかい：なんだっけ？ゴドルフィンだかゴンゴルドンだかレオパルドンだか知らねえが、まあそういう競馬界のどかい組織の重鎮である殿下がご苦労なこった。

見ろよ、群馬トレセンの調教師も厩務員も、居合わせて見物してる馬主の人たちだっつて顔は笑ってるが内心では超厄介そうに思ってるのがバレバレだぜ。

まああのボンボンがいるせいで今日の調教はいろいろ邪魔が入ってるかな、主に殿下の護衛のせいで。

一緒に来てる雅孝さん率いる群馬県警特別選抜警官隊の人たちなら全然気にもしないこといちいちごねてきやがって、おかげでスケジュール台無しらしいじゃん。

制服のおまわりさんの目も糞剣呑だぞ、こいつら邪魔って意味で。まあ向こうもおんなじ感じで、互いに雰囲気悪いんだよなあ。

え？目上の人だから敬愛とかないのかって？ねえわ、余りに上過ぎて迷惑でしかねーわ。

『あいつら邪魔しにでも来たんか？ツバキの馬主に散々アプローチして袖にされて頭でも来たにしちゃせこいねえ』

『え、ツバキ先輩いなくなるの？』

『ならねえよ、断つたつて言っただじゃん』

ツバキ曰く、アラブのとんでもない大金持ちな馬主からオフアアがあつたらしいけど、馬主さんまったく興味なしで袖にしたそうさ。

それこそ金銭面も、営業面も、あの手この手で誘惑してきたらしいけど全部お断りしたらしい。

親父さんのダチだからそういうところ凄い人なんだよな、こうと心に決めたらテコでも動かないし下手に攻めたら道連れ上等で反撃してくるタイプ。

おかげで今日の調教はほぼほぼ軽いのしかできてねえ、アイネス達

だって安田記念だとかいうのに挑戦するから追い込みの時期だつてのにこの有様よ。

練習コースは芝でハルウララが足慣らししながらブニーキャップ達の先導してただけだし、ダートの方はバターナッツが群馬競馬の連中にソリ引き練習のお手本見せてるだけ。

ジムカーナとかオートストップ訓練とかも周りでやつちやいるがこれも軽く流す程度、まあ追い込み時期じゃねー奴がやってるつてもあるけど。

いつもやつてる本格的なヤツは軒並み中止だよ、殿下はともかく周りがうるさくて仕方なくね。

午前中の裏山コースも完全封鎖、午後の予定で安全に使うために護衛の方々が丸ごと山狩りしてるだろーよ。

もしくはいい機会だから敵情視察か：まあ、あのポン付けにご苦労なことだ。やろうと思えばどこでもできる施工だから無駄骨だと思うがね。

『見ろよ、ダイオー達も暇そうにしてるぜ』

見学用テラス近くで出番を待ってるダイオー達、あいつらも滅茶苦茶暇そう。

ダイオーとツバキは○×ゲームして遊んでるし、ノルンは：なんだ、T-72のプラモか？器用に前足を使って、ピンセットを啜えながら作ってる。

随分愉快的な改造してんな。オプションキットの爆裂装甲版くっ付けてドレスアップとは羨ましい、どこにあったそのオプション。

あいつも器用になったもんだ、教えた甲斐があるつてもんだ。まあ正直形ができてるだけだけでいろいろ歪んでるけど：まあそんなもんだろ。

俺もしたかったなそういうの、今日そういうのできる日だったんだよ本当は！！

『師匠、そんな切ない顔しないでよ』

『今日は部屋の掃除して、近所の公園でやってるフリマに連れてつてもらはずだったんだ。』

こんな暇な時間じゃなくてもつとにぎやかで穏やかな日常を送ってるはずだったんだ。

もしかしたら古いモデルガンとか買えるかもしれないし楽しみにしてたのにこれだけ、めったにない機会だったのによお』

『相変わらず師匠は変わったものが好きですね、町で暮らしているとそうなるんでしょうか?』

『好きな奴は好きだぞ、ノルンとか見たまんまじゃん』

『ノルン先輩の戦車キチガイは特別だと思うよ僕は』

『同じだよ同じ』

前世でミリオタであった俺にとってエアガン類は部屋のインテリア、あるいはサバゲの相棒。

今は馬だからショップに行くわけにもいかんしそもそも体が入らんしで、新しくお迎えできることは滅多にない。

だからこういう野外フリーマーケットは超貴重な機会なんだよ、もしかしたら古いヤツを売りに出してる人がいるかもしれないから。

この前も古いモデルガン売りに出してる人がいたから、何とか買い取ったんだぜ?ボロボロのM1911。

古いヤツで長年放置されてたから埃だらけで錆まみれだったがあれは良い物だ、整備し直すのに苦労したがそれもまた楽しみよ。

さすがフリーマーケット、運が良けりやホントに良い物が安く買える。前世で俺をサバゲにのめり込ませた銃もフリマで買ったんだ。

前世のCA870みたいにエアガンがあればなおよかったが、その時はそのモデルガン以外良い物がなかったんだよなあ…そもそもエアガン自体なかったし。

しかしまあ、あいつらもすっかり時の人。いや馬か、住む世界が違う感じになつてんな。立派になっちまって、まったく。

「にやあ?にやああ」『なんだよ、まだ拗ねてんのか?』

「ヒヒーン!」『あ、ブチさん』

『見回りしてきたぜ、みんな大人しくしてら。しっかしなんだよその顔、まったく情けねー』

『だってよー、また見つけたかったんだもんよー、長物もほしいんだ』

よー』

『あるかどうかも分からんだろうに：お前はほんと変わったやつぢやな。人間のおもちゃなんかバラして何が面白いつてんだ？』

『全部！』

車の整備と同じでガチャガチャやってんのが楽しいんだよああいうのは！という風に仕上げるかとか、気になった個所にどう手を加えるかとか、そもそもどこまで磨き上げようかとかそういうのな。

『ばらすって師匠何やってんの？』

『別に特別なことしちやいねーよ？古いガバちゃんを使えるようにしただけ』

大変だったぜ、完全に錆びついてたかな。バラシて、ゴミ拭って、錆取って、バリもとってグリスアップして：むへへ。

細かいバネなんかはダメになってたからガレージの車用予備部品から探して改造してとつ変えて、ついでにスライドもリフィニッシュよ。

グリップも木製だったからダメになってたんで、バラした廃棄酒樽から端材を貰ってフルスクラッチ、亜麻仁油も塗ってがっちり仕上げたぜ。

組み上げたら当たりを取って、部品のかみ合わせを確認してから気になったらまたバラして仕上げ直す。

満足な仕上がりになるまで何度も組んでバラして直してまた組んで、いやあじつに有意義な時間でしたなあ。

『よく言うぜ、騙されんなよアイネス。錆だらけゴミだらけの油くっさいヤツだぞ。』

しかも細かい部品だらけで訳の分かんねえやつ。よくもまああんなだけばらばらにして組み立て直せるもんだぜ。

どれがどの部品かなんて俺じゃ覚えてられんわ、というか分解からできんわ』

『慣れりや楽だよ、組むのは苦労したけど』

人間の手足みたいにはいかんからね、前足と口とトングとピンセットフル稼働で何とかよ。まあその不便さもまた面白いんだが。



まあ興味ない人間もおんなじこと言ってたからねえ、バラして組み立てるくらいパズルと同じようなもんなんだけど素人にやわからんもんなのよ。

それにあの程度、この前仕事用の軽トラがトラブった時よりずっと楽だったかな。

あれは半日ずっと車の下に潜り込んでクラッチ弄って漸くだよ、一つ直したらまた別ん所が悪くなる典型、もう買い替えなきゃだめだ。こういう時に限って親父さんも敏則も別件でいないってんだからなあ…

『慣れってお前な、舌で水飲めねえくせにどうしてそういうところは器用なんだか』

『そういえば師匠って子供でもできることできなかつたりするよね、夜も明かりないとだめだっけ』

『見えないからな』

別に困らんけど、人間と同じだから違和感なくて助かってるし。

『そういやお前、耳もあんま動かないよな』

『そういえば機嫌が全然わからないのです』

『動かせっつっても動かせないから仕方ない、そもそも感覚が分からん』

だって人間の時から耳をくりくりさせるなんてやったことねーもん。馬になつても動かし方分からん、ぴくぴくできるくらい。

別に人の時より良く聞こえるんだからいーじゃん、俺の耳はフィクスドイヤーってことで。

『そういえば鬣ハムハムさせてくれないのです』

『鬣噛むのマジやめろ、それだけはマジ勘弁。櫛で梳いてやつからそれで許して、嫌ってるわけじゃねえんよ』

『そういやお前そういうのもてんでダメか。馬としてどうなんだそれは』

どうなんだといわれても困るわ。そもそも馬の習性とは何ぞや？模倣しようとしても知らないもんは知らんねん。

教えてもらおうにも、さすがに説明し辛いつて先輩にも爺さんにも

言われたし。まあそりや無意識な仕草を説明しろっていう俺も変な質問してるんだが。

野生の本能？んなもん生まれてこの方感じたこともない。そもそも野生として生きたことないし生まれはともかく育ちは芦名の瀬名酒造だ。

つまり根っからの群馬つ子で峠つ子、放牧地より街角の駐車場のほうが気が休まるくらいには人慣れしてらあ…というか中身元人やねん。

正直、他の馬とずっと一緒にいるほうが俺としてはストレスかもしれん。馴染めるんだけど…ねえ？

蠶噛むやつも親愛の印としてやってるらしいんだけど俺には無理っす、やりたくないしやってほしくない、だってやられるとよだれでびちゃびちゃなんだもん。

思えば親父さんに引き取られなかったら、仮に競走馬になれても多分ストレスで大変だったかもなあ。

だって今の高崎競馬場の厩舎はトイレ別になってるし、こいつらもちゃんと毎日綺麗にしてっからいいけどさ。

昔は普通に垂れ流しだったじゃん、それで綺麗判定でしょ？今も中央の連中ってそうじゃん？臭いんだよ、ひどい奴はマジで。

馬房も糞尿垂れ流して、掃除はしてくるけどしてくれるまでは放置でしょ？下手すりやそれで寝るんでしょ？いやー無理っす。

デイープ達はそうでもないけど、ちよこちよこ高崎競馬場で見かける見慣れない連中とか独特な臭いしててねえ。

しょうがないつつつても気になるもんや気になるからしょうがないじゃん、そんなところで暮らす自信ねーわ。

知り合いのPMCの人たちとか陸自のダチとか海兵隊の連中とかならまだしも、俺は一般ピープルサバゲーマーですもの。

それもあくまでエンジョイ勢で、24時間とかやるガチな連中とか無理っすよ。

『ご飯も野菜とか人間の食べ物が好きなんですよね？』

『喰えないってわけじゃねえんだがな、やっぱホクホクの白いご飯最

強ですわ』

『あ、カリカリはダメだつて言つてたね』

『コーンフ레이크知つてるとなあ…』

うん、飯もそうね。普通の飼い葉とかも食えるけど、やっぱ草。食えなくはないんだけどもやっぱり草、特別うまいとは思えん。

やっぱり炊いたご飯が一番、付け合わせにお肉か魚があれば最強。みそ汁付きならなお良し、一般家庭料理なら全部良し！

あとアイネスが言つてた馬用のフ레이크餌とかはまず無理、まずい。昔間違えて喰つた鹿せんべい思い出したわ、あれに薬臭さミックスした感じで喰えたもんじゃない。

会社だとそれ分かつてくれるから大体社員食堂の残り物とかサラダを付けてくれるんだよね、飼い葉はご飯替わりだ。

だから高崎競馬場とか行くとたまに飼い葉だけドカツと出されてちよつと気持ち沈む、厩務員さんが慣れてないとそうなる。

そういえば最近競馬場に可愛い新人さん入つてたよなあ、年の割にちつこいのに胸だけドカンとでかくて…むへへ。

『あ、なんかいやらしいこと考えてるのです』

『どうせ人間の雌のこと思い出したんだろ、確か高崎の新人が人間基準で美人だったはずだぜ』

『うーん、よくわかんない』

『俺も人間見て判断できるだけだしなあ』

そりゃ猫と馬にはわかるまい。人間の色気というのは人間にしかわからないのだ、ほら俺は元人間で中身そのまんまだから。

『タービンよ、お前がどれだけ器用で賢くても馬なんだぜ？人間にはなれやしねーぞ』

『何当たり前の事言つてやがる』

モンスニー爺さんもそうだが、たまに変なこと質問してくるよな。馬が人間になれるわけねえじゃん。

どーせ、この生涯でも生涯童貞のチェリーボーイですよーだ。前世で捨てたくても捨てらんなかったからそこまでシヨックでもねえわ。どうせ馬の風俗があつたところで前世と同じで碌なことにならない。

だって前世じや散々悲惨な結果になったもの。

予約しても大体土壇場でハプニングだし、飛び込みで入っても順番くる前にハプニングあるし、アパートに呼んでも事故ってたし。

呪われてんのかっていうくらい運がなかったからなそっち方面、金は戻ってきたし業者さんが全部悪いわけじゃないからなおさらどーしよーもねえもん。

相手が階段でずっこけたり、待ってたら電気トラブルで急遽閉店だったり、デリヘルは事故に巻き込まれて病院に行き先変更だもん。

『…分かってんだからお前は質が悪いよ』

『ん？そりやどういう意味だ？』

『何の意味もありやしねーよ、この悪ガキが。うちに来た時から何も変わりやしねーじゃねーか』

『そりやそうそう変わらんわい、これが俺だ』

『飼い葉喰わないで俺の昼飯強請ってきた悪ガキがえらそうな口言ってるじゃねえよ、馬なら草だろ草』

『いやああの時はお世話になりました先輩、猫まんま大変美味しゅうございました、お詫びに草差し上げます』

『低姿勢になればいいってもんじゃねえんだよ、このこの！』

『あうちあうち』

『あの時茂三の奴にどんな顔して頼めばいいか本気で悩んだんだぜ？まったくよー』

『うへへへ、ゴチになりやした先輩』

『敬意が足りん』

『あうち』

ブチにむかって土下座っぽい土下寝で恭しく頭を下げると額にポカポカ肉球が当たると感じる。

瀬名酒造に落ち着くまでほんと苦労したかなあ、主に飼い葉で。ミルクも動物用で変な味だったし。

だから瀬名酒造で見たブチの猫まんまがもう美味しそうで美味しそうで：我慢が限界でした、マジで。

ブチはキャットフードよりそういうのが好きだったんでもうね、あ

の鰹節と醤油を混ぜた白飯がもう輝いて見えちゃってもう溜まらなかつたのよ。

あ、思い出したら喰いたくなってきた猫まんま、猫まんま…ごはん、白いご飯……

『飯…白いご飯と唐揚げ…唐揚げ喰いたかつた、焼き鳥、お好み焼き、かき氷、ケバブ、タコス、たこ焼き、出来立てホカホカ美味しい屋台飯』

『あ、やべ』

『フリマ行きたかつたな、行きたかつたなあ！出店で美味しいもの食べるチャンスだったのにい！』

特に肉、魚！俺は喰うんだよ、喰えるんだよ！だから堂々と喰いたかつたのにい！！顔見知りだから買えるのにい！！

王族だとか競馬の重鎮だとかそんなもん興味ないわい、仕事じゃなけりや！仕事じゃなけりやよお！！

『あーあ、また機嫌悪くなっちゃった』

『まあ仕事にはなつてんだしいいだろ、もうこれで』

『師匠が機嫌悪いからみんな大人しくしてますしね』

畜生！休日出勤なんてクソだ！！仕事ってやつは結局馬も人も変わらんという事か！！世の中ホントにままならんももう！！

### 第32話

芦名市中央公園で行われているフリーマーケットは規模こそこじんまりとしているが、いろいろな品が並んだ露店や市内の飲食店からの出張出店が並び賑わっていた。

休日の夕方近くになっても人の行き来は絶えず、このままであれば久々に開催期間ギリギリまで客足は絶えないだろう。

その理由の1つはフリーマーケットに来てるのが地元の間人だけではなく、芦名観光に来る外国人観光客の数が以前より多くなっているからだ。

このフリーマーケットは元から芦名観光に来た旅行者がちよろちよろ見物に来るためそれなりに人でにぎわうのだが、今年の高崎競馬場を見学に来たついでに芦名を見にきた観光客も加わっていつもよりもにぎやかだ。

それこそ『日本のフリーマーケット』という未知との遭遇に目を輝かせる外国人客も多い。何しろ元の地元民向けスタンスを維持したままなので何かと緩くご当地色が強いのだ。

その片隅、瀬名酒造からの出店であるこじんまりとした酒・甘酒屋売屋台も売り上げは好調。

地元の由緒正しき老舗酒造で、しかも馬に深いかわりがあるとなればそれなりに客が集まった。

午後になつても客足はほどほどに絶えず、売り上げを伸ばす甘酒屋台の裏に停めたバンの運転席で、茂三は午前中の売り上げをダブルチェックしながら携帯電話を手に駄弁っていた。

「ああ、売り上げはいつも以上だよ。この分だと全部捌けそうだから、迎えに行くのはもう少し先になりそうだ」

《そうか、解った。悪かったな、無理言っちゃって》

全くだよ、と大きく出そうなため息を何とか飲み込みながら茂三はやれやれと肩をすくめる。

今日、群馬トレーニングセンターからの急な呼び出しで、休日返上

で仕事に出たシマカゼタービンがどんな気分にいるかは考えるまでもない。

「そういうのはタービンの奴に言ってやれ、休日を潰されたのはあいつだ。機嫌悪かっただろ?」

《いつになく、顔には出てねえけどずっといらいらしながら放牧地に――》

「なにい? 放牧地だあ?」

聞き捨てならないことを聞いて思わず茂三は声を荒げる。

「お前まさか、呼びつけといて放牧地にほっぽりだしたんじゃねーだろうな?」

《そうだよ、今日はさすがに初っ端からあいつを本気で走らせるわけにもいかねえからな》

「馬鹿野郎、ますます怒らせてんじゃねえか。休日返上で呼び出してくるだろうが、仕事させろ仕事」

《そうはいつでも相手はゴドルフィンの殿下だぜ? さすがにいつも通りにとはいかねえよ、それとなくやり過ぎさねえと後が怖いじゃねーか》

「何言ってるんだてめえ? 俺が言いたいのはいつがそういう事をされるの嫌い: ああ、だからか。お前、あいつを番犬代わりにしたな?」  
《: この頃、うちの馬たち頭良くなっちゃってるからよ。この前なんて、馬房抜け出して自販機前でジュース飲みながら駄弁ってやがった。》

あんなの教える奴らなんざてめえんとこの連中以外居ねえだろ? 当然、抑えられんのだってな》

思わず笑いが飛び出そうになるのを茂三は抑えた。シマカゼタービン達があまりにも頭のいい馬なのはわかっていたが、どうやら影響力という意味では想像以上だったようだ。

そうなる瀬名酒造の中でも古参の三毛猫、瀬名家のブチが気まぐれか何かで馬運車に相乗りしていたのは幸運だったかもしれない。

彼はただの三毛猫だがシマカゼタービンを一緒に育てた親代わりの一面もある。当然賢いのだ、桜葉の狙いにいち早く気付いていても

おかしくはない。

「なんでそう言い切れる？生憎俺は、お前んとこに迷惑かける気なんざないぜ？」

《分かってんだよんこた、あいつはあいつが正解だと思いう仕事をしてるだけだ。実際、おかげでうちらもだいぶやりやすくなってるよ。かつてるよ。》

うちの騎手達も驚いてんだぜ？シマカゼに習った馬とはコンビを組みやすいつてな。具合が悪けりや隠さないで素直に見せてくれるし、大人しく治療も受けてくれるしよ》

「ならよかったじゃねえか」

《内輪だけの話ならな、いきなりあんなもんゴドルフィンの殿下に見せられるわきやねーだろ。しかもメディアまで一緒だぞ？国内と国外両方のな！》

いつも通りなんて今回ばかりはご法度だ。大人しくしてもらわんと絶対にややこしくなる、考えなくても分かるぜ》

だから不機嫌になるのを承知で置物にしたのかよ。茂三は親友が考えた対策に思い至って嘆息した。

シマカゼタービンがイライラしながらも腰を落ち着けているうちは安心だ。少なくとも大親友の3頭や極一部を除けば大人しくしているだろう。

しかしそれでもあいつが変に動けばすべてパーだ、何か別のモノに気が削がれて自ら動き出せばほかの馬も安心していつものようになるまい始めるに違いない。

そうしないように言いつけて仕事をさせたとしても同じだっただろう、そうなるとボス馬であるシマカゼタービンの言う通りほかの馬は大人しくするだろうがその分シマカゼタービンの異様さが浮き彫りになる。

放牧地や練習場をせっせと練り歩いて目配り気配りを欠かさない完璧な仕事をするだろうが、その姿自体が殿下には異様に映る。

ただでさえツバキプリンセスのドバイ出張での立ち振る舞いにてんてこ舞いになり、今なおツバキプリンセスの腹すら狙う連中が見れ



ば一体何が起こるかなんてわかり切っているのだ。

なるほど、こいつなりに一応気配りはしたわけだ。これならば変な気配りをシマカゼタービンにさせることなく自分が恨まれるだけで済む。茂三はやれやれと肩をすくめた。

「この野郎、嫌われるぞ?」

《《こうでもしないと来ねーだろ、お前ら》》

「当然だ」

誰が今まさに修羅場の群馬トレセンに好き好んで首を突っ込もうと思うものか、そもそも殿下が襲来することすら直前まで知らなかったのだ。

かのゴドルフィン、アラブ競馬の重鎮でありトップの直接交渉と視察は相手方の特殊事情によって関係者の中でも一部にしか知らされないトップシークレットであった。

そんな機密事項を関係はあっても基本的には外野の瀬名茂三が知るはずもなく、知っていれば絶対に避ける事案にシマカゼタービンをホイホイ貸してしまったのである。

去年も同じようなことがあったな、茂三はなんとなくディープリンパクトとの初対面の時の事を思いだした。

《《覚悟の上だよ、あとでしつかり謝つとくさ》》

「一発位覚悟しとけ」

《《勘弁してくれ、今度一杯おごるからよ》》

「タービンにもな」

《《じゃ、今度の休み、うちでバーベキューでもするか。肉と飯をたんまり用意しとくぜ》》

「そうしてやれ。だがな、理由は分かったがこういうのはもうこれっきりにしとけ。そうじゃねえとマジでこのアルバイトやめるって言いだしかねんぞ」

《《なんだよ、藪から棒に》》

「藪突いて蛇出すどころか、逆鱗に触れる寸前だって言ってるんだ。ここ最近、あいつ指名で合わせする連中増えてんだろ」

2006年に入って以降、シマカゼタービンを指名して練習を行う

競走馬は右肩上がりが増え続けている。

それも群馬地方競馬に所属する見慣れたメンバーだけでなく、中央競馬で噂をかぎつけて遠征してきた連中までだ。

栗東厩舎や中央競馬協会は情報をできる限り秘匿しているようだが、それでも聡い陣営は群馬に何かあると嗅ぎつけている。

最近ではホール・ルベル率いるハーツクライ陣営も、最終調整には群馬トレセンに遠征するのが常なのだ。

そこから考えを巡らせ、少ない情報を手繰り寄せて群馬にたどり着く陣営は意外と多い。

ディープインパクトやハーツクライがご執心の相手がシマカゼタービンであるという事までたどり着くものはまだ少ないが、群馬地方競馬自身はあまり隠匿もしていないので広まるのは時間の問題だ。「このまま増えると、アルバイトが本業の邪魔になるのは時間の問題だ。言っとくが、そうになったら切るのはそっちだ」

《おいおい、勘弁してくれ。今タービンが辞めちまったらブニーたちの仕上げが遅れちまう》

「ならきつさと別の手を打て、人の口に戸は立てられねーんだ」

《そう言ってもな、気付いてる奴は気付いてんだぜ？半信半疑で探りが浅い奴らは煙に巻けるにしても、ディープインパクトに煮え湯飲まされた連中は調べ上げてきてる。

それに栗東の小泉経由で話が来ることもあるし、そいつらは断れねえだろ？少ししたら池永がスイープトウショウ連れてくることになるってんだ》

「断れねえのはしょうがねえが、せめて頻度は前のアルバイト程度に済ませるようにしてくれ。本業がおざなりじゃ、あいつの足も鈍っちゃう」

《そりやマズいな、峠の時間まで削る寸前か？》

「仕込みの話だよ、うちの酒は常に仕込みをやってんだ。知ってたんだろ？」

瀬名酒造の馬練りには特定の季節で大量に仕込んで一定期間を置いて一斉放出するような形ではなく、常に年間を通して一定の量を常

に仕込んで生産する形だ。

故に年間シーズン通して常に酒造は稼働しており、常に新酒の仕込みが行われている。もちろん季節に応じた商品の販売も手掛けているので、季節による仕事の増減はあるが基本的に仕事が途切れることはない。

例えば会社が休日になっていたとしても、酒の仕込みと熟成は続いている。だから年間を通して瀬名酒造は忙しいのだ。

「あいつはうちの酒造りに欠かせねえ、今じゃうちの中でもトップクラスの腕前なんだぜ？あいつ自身も新酒開発のプロジエクトを抱えている。」

これ以上競馬に時間を取られたら本業にまで響きかねん、そうしたら縁切りだ。てめえがどう言おうがな」

《おいおい、あいつも競走馬だぞ？》

「副業でな。あいつは賢いからな、自分の本業がなんなのか理解しちまってんだ。忘れたのか？あいつの新馬戦後のゴタゴタ、あれでとつくに察してるよ」

競走馬という存在に大切なものは実力、しかしそれと同じように血統が重視される。

茂三は血統を重視するほうではないが大事なものであるという事は重々承知していた。

『血統』とはその馬が競走馬であるという証、かつて競走馬として走ってきた先祖たちの末裔であるという証明だ。

車で言えばシリーズだろうか、自分が今なお愛して乗り回すプリンタートレノAE86GT-APEXも前に、そして後に世代がつかっている。

その後継であるAE101GT-Zが息子の敏則の愛車となったのもまた、どこか運命のようなものを感じていたほどだ。

その大切な『証明』にシマカゼタービンはケチが付いた、シマカゼタービンの競走馬としての土台そのものが大きく揺ぎ、ひび割れたのだ。

《それはもう終わっちゃった話だ、お前達にはなんも非がない。う

ちらだつてなんも処分もしなかつたじゃねーか。

悪いのはあの牧場で、あそこの経営者共だ。それにシマカゼの出生を誤魔化してた主犯格はみんな豚箱行き、他の連中もこの世界から足を洗つてる。

あのまま続けてりや、何言われようがどうつてことなかつたらう。それこそ、お前の人生が変わつてた》

「笑わせんなよ。出す出さないの問題じゃねー、見えてる地雷がでかすぎらあ。社長が会社振り回すわけにや行くめーよ」

《だが…お前の夢だつたじゃねえか、ツインターボの産駒で有馬に勝ちたいつてよ》

「ああ、そうだったな。懐かしいぜ」

桜葉の言葉にふと昔の気持ちがあつて茂三は懐かしさを覚えた。今でもツインターボが走つたレースで感じた興奮をしつかり覚えてる。

青い面子を付けた小柄な競走馬が、狂おしく懸命に先頭をひた走り大逃げする数々のレースが。そこにあつた期待と、胸の高鳴りが。

ツインターボが引退したときは、自分が自分ではないように使えるツテを辿つてツインターボの種牡馬化を支援する小規模な後援団体にもぐりこんだ。

だが何とか紡いだ血筋はほぼ全滅、ツインターボも早くに亡くなりすべてが終わつたかに見えた。

ツインターボの血を引く産駒を手に入れて、それこそあのナリタブライアンのような3冠馬を寄せ付けない大逃げをさせてみたい。

その夢はもう叶わないとあきらめていた、そこに彼が現れた、本当にひよつこりと、予想もしなかつた場末のブラック生産牧場から。

思わず体が震えた、運命といわずしてなんだという、あの彼の血を引く馬がまだいたのだ、それも自分目掛けて一直線にやつてきた。

迷いはなかつた、貯め込んでいたヘソクリをすべてはたいて、それこそ妻に土下座して金をかき集めて、一括払いの即金で支払い彼を手に入れた。

結果は言うまでもない、最高だ。シマカゼターピンは最高の馬だつ

た、他の誰が何と言おうと今まで見た中で最高の素質を持った馬だった。

確かに見てくればよくなかった、しかし彼は幼駒の頃から賢く、素直で、それでいて努力を怠らなかつた。競走馬としての調教ではあまりの覚えの早さに、飛び級したかのようなスピード合格をもぎ取つた。

そんな彼は競走馬としてだけでなく、走り屋としての技術も貪欲に吸収していった。自分はそんな彼に何もかも教え込んだ、自分がこれまで培ってきた峠の走り屋としての技術を。

いけるかもしれない、彼ならば自分の夢をかなえてくれるかもしれない。あの青い面子を付けた彼のように、そう思っていたのだ、あの時までは。

《つたく、七夕賞とオールカマーの出走依頼を即答で蹴つたって聞いたときは耳を疑ったぜ?》

「なんだよ、あいつらそっちに話持ってたの?それは別件、その日は仕事があるから無理なんだよ。ちゃんと説明したはずなんだがな」

《競馬一本やりの中央競馬職員だぞ、そんなド素人にお前らの都合がわかるわきやねーだろ。大体言い訳だろそんなん》

「事実でもあるがな。ま、縁がなかつたのさ。あいつが勝てば勝つだけ、活躍すればするだけ、どうしようもないことが起きる。賭けてもいいぜ?」

少なくとも、今も刑務所で臭い飯を食べているシマカゼタービンの生産牧場の面々は、シマカゼタービンが活躍しだせばいらぬ声を上げて暴れ出すだろう。

それを聞きつけたマスコミが、それを取り上げて面白おかしく脚色する。それを見たファンや一般人が感化されて耳障りな声を上げて行動しだす。

その後は堂々巡り、最悪の場合シマカゼタービンが上げた功績を全て捧げて命も絶たねば止まらない、それこそ自分たちの会社まで、ということまでありうる。

今の中央競馬で出走すればあり得る、なんとと言っても去年からホク

リクダイオー達3頭というかつての名馬の娘が大活躍しているからだ。

中央競馬に所属する超馬主たちもかつては皇帝、黄金世代、世紀末霸王などの名馬たちに心を焦がされたのだ。当然ながら推してあつた名馬たちの復権を狙うものも少なくない。

その流れもあつてか日本競馬界は現在大復刻祭り、往年の名馬グッズなどを皮切りにテレビ特番や特集雑誌など数多に手を伸ばしてブームをでかくしている最中である。

そんな中に訳ありのシマカゼタービンを、ツインターボに縁のある2レースに出走依頼枠で出そうものならどうなる事やら…想像するに難くない。

そして至極面倒臭いことになること確実、見えてる核地雷とはまさにこのことである。

被害妄想といえましょうなのかもしれないが、長年酒造という『酒』を造る仕事に携わってきた経験則上『ありうる』のだ。

人間とは天才で知恵者で分別のある者もいるが、愚かでバカで分別の付かない者もいるのだ。そして関わるだけで碌なことがない連中も。

そんな人間の愚かしさとどうしようもなさは身に染みている、それこそ瀬名酒造という歴史そのものに染み込んでいるのだ。

今日この時にいたるまで『酒のせい』にされて会社から自分自身にまで及んだ身に覚えのない中傷を、それこそ幼少のころから嫌というほど受けてきたのだから。

《やめろよ、お前がそういうこと言うときは絶対当たるんだ》  
「お前だつてわかつてんだろ、公営競馬なんてギャンブルを運営してんだからよ」

《耳が痛いぜ、今は特に。その通りだよ、競馬はギャンブルだ、最近はそれをわかつてねえニワカが多い》

「なんだ、ついに群馬の馬主にもニューエイジが出たか？」

《生憎馬主の方は先輩方が厳しく指導してるからねーよ。問題はファン層だ、うちの連中が強くなってきたからいやに中央挑戦を押し

連中が増えてやがる》

「バカ相手は疲れるな」

群馬地方競馬全体の實力は確かに底上げされてきている、地元の高崎競馬場であれば遠征してくる中央所属競走馬でも負けないだろう。

しかし實力面で言えばやはりツバキプリンセス、ノルンフアング、ホクリクダイオーは別格だ。

まかり間違っても群馬地方競馬に所属するすべての競走馬が有望である、強い馬であるなどとは思ってはいけない。

全体的な戦力増加はただの結果だ、件の3頭の躍進に感化されて気合いを入れた調教が多くなり、そしてそれをさらに後押しできる存在が群馬地方競馬に顔を出しているからだ。

地方競馬とて競馬、地方騎手とて騎手、目指す相手が居て、その力を目の当たりにすれば奮起するものは奮起するのだから。

《どう思う？ぶっちゃけ、上の方も迷ってたんだ。このまま加熱させてホントに良い物かってな。うちはあくまで公営だ、中央みたいな馬狂いばかりが集まった場所とは土台が違いすぎらあ。

やれることにも限度がある、中央みたいにイケイケどんどんなんてやれるとは誰も思っちゃいねえんだよ》

「ならどこかで水ぶっかけて酔いを醒まさせにやだめだな。まだ身動きできるうちに距離取らんと足抜けできなくなるぜ」

《本音は？》

「迷惑だからさっさと元に戻せ、最近ほとんど高崎で落ち着けた試しがねえ」

常に満員御礼で観光客と競馬ファンでぎゆうぎゆう詰めの高崎競馬場を思い出して顔をしかめる。

ホクリクダイオー達が活躍しだしてから片鱗はあったが、もはや高崎競馬場は中央競馬の主要競馬場並みにホットな競馬場と化したのだ。

特に目玉のレースが行われているわけでもないのに連日大勢の客でにぎわうようになり、年収は右肩上がりだがその分高崎競馬場の運営や勤務する人々の疲労はたまるばかりである。

さらに地方競馬のこじんまりとした競馬場であるのは変わらないため、加速度的に施設にダメージが蓄積されていると来ている。

それ程までに人の往来が激しくなった高崎競馬場は、もはや一昔前の鄙びた地方競馬場ではなくなってしまったのだ。

ゆったりと腰を据えて、似たり寄ったりな所属馬の様子をパドックで見て新聞片手に頭をひねりつつ、これという馬に応援馬券を賭けて一喜一憂するような遊びが最近はできないのである。

峠攻めと同じくらい自分には必要なストレス発散法なので、ほんとうにかしてほしい所だった。



夕刻間際の執務室、群馬競走馬トレーニングセンターの理事長室の執務室に座る桜葉は受話器を電話に戻しながらため息をついた。

ここ最近はため息しかついてない気がする、それも当然か。なぜなら自分はかなり疲れているし、常に気を張っているから。

今や一世を風靡し始めた日本競馬界の中でも注目されている群馬地方競馬のまとめ役である桜葉の胸中は陰鬱であった。

(終わった話か…んなこと分かってんだよ。あんだけあいつの凄さにほれ込んだお前が、あれ以来一切アレを口に出さなくなってるからな) せっかくゴドルフィン of 殿下相手に厄介な話を終わらせて、一息ついていたらというのに嫌な思い出を掘り返してしまったものだ。

シマカゼタービン、彼の实力は調教が始まってからいかに発揮されていた、群馬地方競馬の経験をもつてして史上最高のものだと担当者が豪語するくらいに。

担当した調教師はあまりの賢さと飲み込みの早さに息を呑み、厩務員はあまりの神経質さと賢さに頭を抱えたが实力を見れば誰も見惚れた。

戦術もなくそもなく、ただただ大逃げする。たったそれだけの競馬で、彼は調教での練習レースでは、のちに中央GIを奪取する2頭と並ぶ無敵ぶりを見せていた。



彼は文字通り強くて賢い馬であった、できることとできない事の分別もきつちりしていて、管理面でも注意する点さえ飲み込めば非常に楽な部類であった。

学べば学ぶほど強くなる、戦術こそ一辺倒ではあったがそれを苦にしないほどに、これは群馬競馬の目玉になるとその時は感じたものだ。

デビュー戦も順当に勝利、ホクリクダイオーとノルンフアングを置き去りにして3馬身差の圧勝、すべてはここから始まるはずだった。

だがそのデビュー戦のすぐ後に、すべてをぶち壊す事件が起きた。シマカゼタービンの生産牧場が倒産し、そこからうじゃうじゃと隠していた不都合な事実が噴出してきたのだ。

その中にはシマカゼタービンの出生の秘密、牧場内での放馬事故によつて受胎した産まれるはずのなかった望まれない産駒であったことも含まれていた。

当時の群馬競馬は今のように世間に注目された地方競馬ではない、営利こそトントンであるがそれ以外ではほかの潰れていった地方競馬と大差がない地方競馬であった。

当然ながらこのことに関しては問題視された、馬主である茂三でさえも知らない事であり彼らも被害者とはいえ競走馬としての登録抹消の寸前まで話が行った。

事件の全貌が明るみになるにつれて完全な被害者である茂三やシマカゼタービンを処分するほうがおかしいという事になり、処分は免れたがその騒動はこういった『アクシデント』に鼻が利く茂三の気持ちを折るには十分だった。

シマカゼタービンの競走馬運用に積極的ではなくなり、目標に掲げていた有馬記念への挑戦も口に出さなくなり、やがてシマカゼタービンが気に入っている同期に会える機会を作るために地方競馬へ籍を残している状態になった。

シマカゼタービンを競走馬としての道から酒造用の仕込み馬として、そして峠の走り屋としての道に変更して、彼が競走馬でなくとも生きられる道に進ませたのだ。

（あの野郎の、ああいう対人リーダーは本当に百発百中だかなあ：本気でやばいって思ってたんだろうな）

瀬名茂三という男は瀬名家が代々受け継いできた家業である『酒造』とそこから作り出される『酒』というファクターを通して、人間という存在の良さと悪さをよく知っている。

故に彼は昔から人間に対する価値観に独特なところがあった。人間不信ではなく人間諦観というべき価値観、人間に対しては絶望もしていないが希望ももっていないというべきか。

彼は人を信じるといふ事を知っている、それが正しいことだとも理解している。しかし信じ切ってはいいない、茂三という人間には信頼の中にも必ず一定の距離感が存在する。

それはひとえに人間というモノの正しさと同じくらいに悪さというモノを『酒造』や『酒』を通して直に見てきたからだ。

幼少期の頃から見せつけられてきたために、関係性というモノには実はかなりシビアである。

「元に戻せか、戻したいのは俺も一緒だよバカ野郎。でも負けろだなんて言えねえだろうが、あいつらきつとまだまだ勝つぞ」

容赦のない茂三の言葉に桜葉は毒づきながらも苦笑いを浮かべるしかできなかった。

できることならそうしたい、昨年の大躍進前の資金繰りに頭を悩ませていた時期に戻るのならぜひともそうしたいところだった。

群馬地方競馬は日本国内に数ある地方競馬の一つでしかなかったのは、今群馬地方競馬を運営している行政もそこに馬を所属させている馬主も周知の事実である。

そして昨今、去年まで地方競馬業界を騒がせていた各地地方自治体における公営競馬の廃止の波も、徐々に近づいてきているのが聞こえていた。

群馬地方競馬は廃止になった地方競馬に比べると資金面では困らない程度には業績を上げている公営競馬場であり、いきなりの廃止はないまでも何かあれば影響を受けるくらいであった。

それはひとえに群馬地方競馬の業態、有名な競走馬たちの子孫を受

け入れて走らせることによる中央競馬ファン層の定期的な取り込みを常に行っていたためだ。

トウカイテイオーの娘であるホクリクダイオー、ミホノブルボンの娘であるノルンフアング、そしてタマモクロススの娘であるツバキプリンセス。今一世を風靡している3頭も、客寄せパンダとしての役目もあつた。

もちろん調教や育成には絶対に手を抜かない、集めてきた馬たちには誠意をもって接して、今まで良好な関係を気付いてきた。

無駄に大きな宣伝は行わず地元密着型の基本運営を心掛け、地元に限差した愛される競馬になれるよう常に努力してきた。

そこにあつて当たり前といえるちよつとしたスリルを味わえ、家族連れでも安心して競走馬たちの真剣勝負を見て一喜一憂できるような敷居の低い競馬場として心を砕いてきた。

その結果もあつてか業績は良くも悪くもトントン、圧倒的黒字とは呼べないが行政がニツコリと花丸をくれるくらいにはクリーン。

場合によっては赤字を計上することもあつたがあくまで何か要因があつてのことなので理解も得られた。

それでも近隣の地方競馬やかつて名を馳せた地方競馬場がどんどん閉鎖や廃止されていく現実に心を痛めていないわけではなかった。

群馬地方競馬はとんでもない赤字を出しているわけでもなければ、運営に問題を抱えているわけでもない。

当時の状況で言えば極めて珍しい、良い意味で時代に取り残された地方競馬といえたが、所詮は公営ギャンブルである。

一つバランスを崩せば壊れてしまうような薄氷の上の存在という事には変わりはない。

かつてかかわりのあつた地方競馬が消えていく、競走馬たちが引き取り手に会えずに消えていく、そんな光景に自分たちは何もしなかつたわけではない。

しかし圧倒的にできることが少なすぎた、曲がりなりにも手を差し伸べたが故に現実をまざまざと見せつけられてどれだけ自分たちが弱く儂い存在かを見せつけられたのだ。

宇都宮競馬場、足利競馬場、三條競馬場、益田競馬場、そして上山競馬場。直近でもこれだけの競馬場が廃止、休止になった。

親友の推しであったツインターボが最後に所属した上山競馬場も時代に飲まれて消えていった時には、茂三と同じように次は我が身と感じて桜葉自身もかなり堪えた。

それこそ余裕があるうちに完璧な終わらせ方をするために群馬県議会に相談しに行ったくらいだ、当然ながら親身になってくれた議長に病院に放り込まれた。

ショックによる精神錯乱と診断された、大事を取って入院になった、隣のベッドに茂三がいた、上山競馬場を買い取ろうと暴走したらしい、その夜は久しぶりに学生時代に戻った気分になって親友と愚痴りあった。

(…もうあんなのは御免だぞ、胃潰瘍とかのほうがマシだ。何せ全然自覚症状ないからな)

事が事だけに退院した後の周囲の反応は優しいものであったが、それがまた心に響いた。だが、今はそんな馬鹿をやりながら運営できていた時代が懐かしい。

桜葉は大きなため息をつきながら、机の上に放置されている書類の束を見下ろして、さらに大きなため息をついた。

今机の上にある書類は大手新聞社や競馬雑誌、あるいは東京の大手テレビ局や海外の競馬チャンネルなどからやってくる取材申し込みだ。

(みんなブームに乗っかろうと必死つてわけだ。しかもゴドルフィンが来たからなあ…もつとひどくなるか)

アラブのゴドルフィン、日本競馬の中心といえる日本中央競馬でさえしり込みするような世界競馬のトップ争いをするやばい組織である。

それこそ群馬地方競馬なんて木っ端のような扱いをされて当然、それがまさかトップでありドバイ首長のジエイク・ラシード・マクターム、通称『マクターム殿下』が直々に見学とちよつとしたご相談にやって来るなんて思いもしなかった。

当然当たり障りなく歓待し、慎重に慎重を重ねて失礼がないように気持ちよくお帰り願った。ツバキプリンセスの馬主にはそつげなく袖にされたので、試しにゴドルフィンの持ち馬を一頭預かってほしいと言われたが、当然ながらNOである。

アングロアラブなら扱っていてもアラブのサラブレッドを扱った経験はない、そんな超有力馬なんてスケールが違いすぎて群馬地方競馬には一切ご期待に浴えません。

まかり間違つてその馬に何かあれば群馬地方競馬だけでなく群馬地方行政そのものが吹っ飛びかねないのだ、そんな爆弾は間違つても背負いたくない。

結論から言えばその手の話はすべてお流れになり、差し障りのない普通のファーストコンタクトで済んだのは幸いであつた。

良くはないのだがあつちの護衛とこつちの警察の空気が最悪だったのが功を奏した、できる上司でもある殿下はその剣呑な様子に長居はできないと悟っていたらしい。

何しろ殿下が帯同してきた護衛と群馬警察が特別編成した警官隊の空気が最悪だったのである。

今は後々のコネクションを作る為か、今回の訪問とマスコミを含めた大移動の後始末に少数の職員を残してすでに殿下は次の訪問地へ向かつている。

(そっぴやなんであんなことしたんだあいつら、殿下の感じみると変なことしそうにはなかつたんだがな。なんかわざとらしい様な、らしくねーような…)

群馬県警曰く、今回の電撃訪問での少ない時間に折衝を続けて互いに納得のいく警備プランを制定していたのに土壇場でゴドルフィン主導の強引なプランにすげ変わって滅茶苦茶にされたらしい。

それも群馬県警の能力を鼻で笑うようなのけ者っぷりであり、競走馬を扱う群馬トレセンで普通の馬なら怯えさせかねない剣呑な警護と行動を強行されたのだ。

いくら言葉で説得しようとしても耳を傾けない、こちらも配慮していた調教や練習にさえ口を出して止めさせる。

ゴドルフィンの殿下が直々に『申し訳ない、勘弁してくれ』と言ってくるなど、確かにいろいろと強引なところはあった。

2005年以前の競走馬たちであればそれこそこの後まで引きずったに違いない、今日はボスが苛立っていたのでそつちにビビっていて気にも留めていなかったが。

おそらくゴドルフィンの方で何かあったのだろうか、なぜか剣呑なあの様子だと何も話さないのは明白なのでさっさとお帰り願うのに利用させてもらったのだ。

どのみち自分たちにゴドルフィンが抱える問題を何とか出来るチカラなんてないのだ、邪魔しないに限る。

(今頃、警察は怖くないって説明してる頃かね…たぶんみんな気にしちゃいねーだろうがね)

むしろ体よく遊ばれていそうだな、主にブニーキャップとかの仔馬勢に。

脳裏に通常スケジュールに戻って調教を再開したコースの横で、仔馬たちに寄って集られて遊べ遊べとせがまれる制服警官達の姿が容易に想像できて思わず笑みが浮かんだ。

群馬トレセンで育成中の仔馬たちも昼間はあまり好きにさせてあげられなかった、そうなっていたら好きだけ甘えさせてあげよう。きっとそれで群馬県警も、特に問題ないと納得できるであろうし。(とりあえず、この場合は凌げた。あとはそれとなく中央のほうに擦りつけよう…うん、そうしよう)

いくら今が旬の群馬地方競馬とは言え所詮は地方競馬、その群馬競走馬トレーニングセンターもド田舎の旧式である。

あのディープリンパクトを擁する栗東トレーニングセンターのほうがよっぽど見るべきものがあるはずだ、そこからゴドルフィンの意識を中央に擦り付けてやろう。

幸いなことに、中央所属の競走馬の中でも真新しい伝説を持つディープリンパクトの主戦騎手と調教師には個人的にもつてがあるのだ。

ここはしつかり活用しなければ、ちようどまだゴドルフィン側の職

員もいることだしそこから話をもっていけばいい。

残っているゴドルフィン職員の中には、日本の気候が合わなくて顔に蕁麻疹ができたので頭に包帯グルグル巻きの人もいるが、少し我慢してもらおう。

これを理由にそれとなくこの競馬ブームからもそれとなく距離を置けるように動こう、制御できる程度におこぼれを貰えば十分だ。それでも十分、群馬地方競馬には大金になる。

そうと決まればさっそく電話だ、そう思って作話場は再び受話器に手を伸ばすとそれを待っていたかのように電話が着信ベルを鳴らした。

「ん？…はい、もしもし」

《理事長、ドバイ国防軍首長警護隊のライール副隊長よりお電話です》

おいおい、殿下のおつかない護衛のまとめ役その2じゃないか。桜葉の脳裏に褐色肌のいかつい中年の顔が思い浮かんだ。

言葉遣いは理知的であつたが見るからに強そうで筋骨隆々、実戦経験があつて人も殺してますと立ち姿で語っているような男だ。

とはいえ、無法者ではなくいたって真面目な護衛といった仕事ぶりではあつたので必要以上にビビらないで済んだ。

「なんだ急に…回せ」

嫌な予感がする、すぐにそう感じた。これまでゴドルフィン相手のやり取りは向こうの事務官を通じて行われていた。

それが急に警護部隊の副隊長という物騒な役回りから直接の連絡、これで嫌な予感を感じるなどというほうが無理だ。

そもそもなんでうちに電話がかかってくる？そう考えて、桜葉は嫌な方向に流れていた空気を何とか一新しようとした。

そうだ、うちは地方競馬なんだ、何か忘れ物をしたとかに違いない。もしくはただの挨拶だ、そうだ、絶対そうに違いない。

《ライールです、突然のお電話ですみません。緊急のご用件が!!》  
うわ、聞きたくねえ!!とはいえそう言えるわけもなく。

「はあ、いったいどのようなご用件で?…はあ?!殿下の車が襲撃され

ただあ  
!!?  
」



### 第33話

事の発端は、本国にいるドバイ首長国軍諜報部のある諜報員が手に入れた緊急報であった。

日本に訪問しているマクターム殿下に対する暗殺計画が進行中、フリーランスの暗殺者が雇われてすでに暗殺工作を行っているという情報だった。

依頼主は不明、情報は諜報員が潜伏している裏の暗殺コミュニティ内の暗号通信を傍受し解析したものだだった。

ドバイ王族という身の上である以上、こういった暗殺騒ぎは表沙汰にされないだけで幾度となく経験しており、良くはないが慣れたものだった。

問題はその情報入手したのが群馬地方競馬訪問直前であったという事、そしてその暗殺計画はこちらの外遊計画に沿って作られていたことだ。

明らかにこちら側の護衛計画や移動計画が漏れている形跡があり、その流出経路も確実な証拠はつかめていない。

時間的に日本警察との合同警護計画を秘密裏に練り直す時間もなく、下手すれば日本警察に相談する段階で情報を抜き取られている可能性すらある。

危険な状況であった、故に思い切った作戦変更が必要だと考えたのだ。

そのために日本警察や群馬県警に連絡を入れず、勝手に警備計画を変更した。

今後の関係に大きなひびを入れるモノであったが背に腹は代えられない、今後のことは今後考える、というのがドバイ国防軍の見解だった。

「と、いうわけだよ。迷惑をかけてすまんね」

「いえ、しかしそんなこと一厩務員の私に話すことではないのでは？」  
そうだね、長いしかったるいな。マクタームは自分の案内役につ

いてくれた群馬競走馬トレーニングセンターの厩務員である彼の困った表情に頷いて答えた。

好意で今も馬が身を休めている練習コース横の休憩スペースを案内してくれる彼には、まったくもって理解の及ばない話ではあるだろう。

「すまない。事が起きたからもう機密というわけではないし、そのうちよつと罪悪感がな」

アラブ首長国連邦を構築する都市の一首長でもある自分は当然ながら腹芸には多少の心得はある、黒いモノもさんざん見てきて慣れているつもりだった。

しかし改めて、文字通り何の関係もない人間や組織を巻き込んで自分たちの目的を達成しようという瞬間に立ち会ってしまうと、どうしても罪悪感が勝ったのだ。

現に今、四作戦であえて襲撃させることによりあぶりだすなんて強引な解決法を取っている。

流れ弾などの物的損害以外は死者も怪我人も出ていないとはいえ、国家間の信頼関係にも輝を入れる蛮行だ。

この件に関する影響は長く続くに違いない、それを呑み込んででもやる必要があったわけであるが。

「ま、適当に聞き流しておいてくれ。あとでこの国にも一切合切報告して、後始末するつもりだ」

「勘弁してほしいんですがねえ、うちはただの厩務員ですんで」

「ならやっぱりうちの馬を預かってもらおうかな？　そうすればもう無関係ではないだろう？」

「勘弁してくださいよ、うちとドバイじゃ何もかも違いすぎますぜ。うちは冬になりや大雪が降るんです、中東の馬には厳しいですよ？」

思わず顔から笑みがこぼれる。この群馬地方競馬独特の遠慮のなさのせいだ、こんな風に気安く喋って遠慮なくぐちぐちというなんて相手は、ドバイ首長となってから新しくできた試しがなかった。

ゴドルフィンのトップであり、ドバイ首長であり、世界有数の大富豪のやり手、

しかしそんな自分に、群馬地方競馬が掛けてきたアプローチは普遍的な飾らない丁寧な対応と、隠しきれない厄介な相手を見るような困った空気。

何より打ち解けてみれば彼らは気負うことなく困った顔をして素直になってくれる、この自分に素のままを着飾らない姿で声を掛けてくれるのだ。

「まったく、うちに来るお偉いさんってなんでこう…しかし殿下、随分と日本語がお上手ですね？通訳いらなかったのでは？」

「実はこれも護身の一環だったりするんだよ、君たちも顔を包帯で隠しただけで変装した私をハザンだと思い込んでいただろう？生の姿を見ていただろうに」

「いやはやそういえば、なかなか気づかんもんですね」

日本語通訳として同行していた部下のハザンには、日本の空気が合わなくて顔に蕁麻疹が出たという仮病で顔を包帯でグルグル巻きにして仕事をする一芝居を打ってもらった。

自分も仕事中は常に通訳を介して会話をするよう徹底し、日本語を扱えることを隠して仕事をする。自分の事を調べればすぐわかる欺瞞工作であるが、こういう事はやれることは全部やるのが普通だ。

最初から理由も説明していたので群馬も日本も受け入れてくれたので、群馬トレセン出立直前にこっそりとハザンと入れ替わってしまったと不思議と誰も疑わない。

よくよく見れば体格も声色も少し違うが、群馬地方競馬の認識では『殿下は日本語で喋れない』『包帯グルグル巻きの通訳はハザン』という認識が先行して気付けないというわけだ。

「あと通訳は必要だよ、一見流暢に聞こえても本職の通訳ほど精通してるわけじゃない。私生活レベルじゃ仕事では通用しないからな」

「あまり想像できませんなあ…そこまでの話は門外漢だ」

「だろうね。じゃあわかる話をしようじゃないか、こいつの名前は？」  
話題を変えるために近くにいた馬を指差す。何の変哲もない栗毛の馬だ、鬣を短くしているのが一番の特徴だろう。

「シマカゼですよ、シマカゼタービン号です」

「シマカゼ…風、なるほど！速き事島風の如し、だね？」

「ははは、まあそんなところっす。こいつ速いし強いですよ、ツバキのライバルでうちの最強ですからね」

「おや、それはなかなか聞き捨てならないことを言うねえ？」

群馬地方競馬最強は、ドバイワールドカップの覇者であるツバキプリンセスでなければならぬ。

今はそういわれてしかるべきだ、これが同格といわれるノルンフアングやホクリクダイオーだったら笑って流せるものだが。

「何しろ、今年も今まで全戦全勝、出れば勝ってますからね。この前もツバキに勝ってます」

「ふうん、一体どんなレースでだい？」

「この前はダートの1200、無差別チャレンジレースですね」  
「スプリントレースか」

考えてみれば何もおかしいことはない、群馬地方競馬は世界的にも名のある日本中央競馬とは別の公営競馬で、レースは主にダートのマイル、短距離が主だと調べはついている。

おそらくシマカゼタービンは群馬地方競馬のトップスプリンターなのだろう、得意分野ではないレースならツバキプリンセスが負けるのも頷ける。

むしろ中距離、長距離に適性があり、ダートだけでなく芝にも対応できるツバキプリンセス達のほうがここでは異色なのだ。

（彼女が強いのは確かだ、今やツバキプリンセスは世界タイトルを持つていて、世界的にも価値が認められている。

だがそんな馬に地元ならばライバルが勝つ…燃えるじゃないか。ホースマンならば、それで燃えないはずがない）

強い馬も絶対ではない、それでもあきらめないで勝負を挑む、そんな相手が居るからこそツバキプリンセスはキングではなくチャレンジヤーでいることができる。

彼女は強い、しかし本当に勝ちたいと思った相手には勝っていない。ホームグラウンドで勝てないから遠征して勝ってきたようなものだ、極論ではあるがただの代償行為でしかない。

だから仮に世界の頂点に立つても、彼女は満足することはない。なぜなら一番勝ちたい相手に勝てないから、だからもつと上を目指すことができる、そう考えるとこういった仲のいい相手は得難いものだ。(なるほど、互いに認め合ったライバル関係か、これは私たちの競馬でも使えるかもしれないな)

「とすると…ん？なんでツバキたちと一緒に中央に遠征しなかったんだい？確か日本のスプリントにはGIがあるはずだが」

「こいつは扱いづらいヤツでしてね、予定が合わんとやる気出さんのですわ」

「ブルツ!?ブルルツフィン！」

「馬鹿言え、お前は十分気性難扱いだぞ、変態って意味で」

「ふあ!？」

「お前、マジでそういうところ茂三さんとそっくりな。マジで敏則の弟なんじゃねーの？」

「フア〜バハハ」

「褒めとらんわ」

なんだ、彼は一体何をしている？馬と喋っている？そんな馬鹿な。

マクタームは唐突に始まった厩務員とシマカゼタービンの不可思議な言動と行動が理解できなかった。

まるで馬が人間の言葉を理解しているかのように話しかけ、それに馬が反応している。それも会話に応じるような形だ。

馬が人間の言葉を理解しているはずがないのに、余りに自然と通じているかのようにやり取りする彼らはあまりにも不可解で、それでいて当たり前のような雰囲気であった。

「ま、こんな奴なんで意外と扱い難いんすよ。賢いやつでしてね、下手なこと喋れんのですわ」

「…なんか普通に会話してなかったかい、わたしつかれてるかな？」

「こいつ、考えてること表情に出やすいんですよ。ほら、見りやわかります」

そういう問題なんだろうか？マクタームは首をひねりながらシマカゼタービンの顔を見た。

普通の栗毛の馬、流星もなければ特徴といった特徴もない馬面である：が、確かに表情を見るとなんとなくわかる。

シマカゼタービンが『俺のどこが変態だコノヤロー』といった具合に考えていそうな顔をしている。

非常に奇妙な感想かもしれないが、この馬が人間の顔をしていたら絶対そんな顔している、そんな気がする表情なのだ。

思わず自分の専属護衛官であるハキムに母国語でぼやいてしまった。

『ハキム、私は頭がおかしいのか？どうにも、こいつが気性難とは心外な、みたいなこと思ってるように見えるぞ』

『私もです、殿下。なんて表情をしているんだ、馬の表情筋の使い方ではない。こんな風に動かすなんて普通あり得ませぬ』

それはそうだ、普通の馬がこれをできたなら世界はもっと表情豊かな馬が多くいることだろう。

興味をひかれたらしいハキムがまじまじとシマカゼの顔を見つめると、シマカゼはこれ見よがしに目じりと口元を吊り上げて笑うような表情を作った。

『なんて柔軟な表情筋だ、天性のモノか？ いや、それでも幼駒の頃から使い込んでいなければこうはならぬ：そもそも、人間の感性に嵌る表情を作ってみせるなど、どうすれば覚えるというのだ？』

「えーと、護衛の方が何言ってるのか理解しかねますが：乗ってみます？」

「いいのかい？」

「いいですよ、こういうこと自体は何度かやっていますし変なことさえしなきゃこいつの馬主は気にしませんから。

こいつ賢いんで人間に合わせて走れるもんだから、うちらとしても安心して任せられるんですわ」

「そこまで賢い馬は聞いたことがないですが…」

『殿下？』

『乗せてくれるらしい、何でも乗用馬並みに扱いやすいようだ』

『競走馬ですぞ？それでやっていけるのですか？』

ハキムも首をひねる。競走馬は大なり小なり闘争心が強く、気性が荒いのが通例だ。

もちろん例外がいるのだろうが、目の前の馬はその例外に例外が掛け合わさっているような状態である。

「こいつが異常なだけっすよ。タービン、OK?」

「は?」

「殿下乗せてダートコース流しで頼むわ、無理ない範囲で殿下のリクエストにもこたえてやってくれ」

「:ヴッフヴッフ、フィンフィン!」

「ヒヒーン?ヒン!」

「にやあ!?!にやあにやあ、な?」

「ヴッフ、フヒン」

「なあ〜:」

しょうがないなって言ってる、しかも寄ってきた馬同士だけでなくいつの間にか猫まで混じって喋ってる、確証はないのにそう確信できる。

というかこの猫、さりげなく自分を危険物扱いしてそうなんですけどねこれ!?

感じるはずがないのに頭脳の奥底にかすかにかゆみを感じるような光景に目を白黒させるしかない。

自分はもしかしてとんでもない場所に來てるんじゃないか?今更ながらそう思う、気のせいだと思いたい。

頭が痛くなつてきそうだ、自分はもしかしたらとんでもない場所に手を出してしまったのではないか?

「じゃ、ちよつと装具持つてきますんで。タービン、変なことすんなよ?」

「ひひーん」

しねーよ、と言いたげな嘶きであった。国に帰ったら病院に行く、きつと自分は疲れてるんだ、マクタームはそう思った。



作戦は簡単だ、単純な陽動作戦による抹殺対象の釣りだし作戦で行こう。そうチームリーダーが決めたときは耳を疑ったものだ。

まず最初に自分たちが殿下の暗殺を企てていることを相手に気づかせ、警戒を促して行動を制限する。

これは依頼主の知る殿下側諜報員に意図的に気づかせ、あたかも偶然察知したように思わせることが重要だ。

こちらが殿下たちの行動を知り、それを踏まえて作戦を作り、あたかも作戦が失敗したかのように見せかけるための第一歩といえよう。殿下たちの対策がどう出るか、これによって作戦は大きく二つに分けられる。もし思い切った策に出る、予定を変えるなどといった根本から覆るのならば接触を図りつつ超長期戦に移る。

この依頼の達成の難しさは依頼主側も理解している、少なくともひと月ふた月で遂行されるとは考えていない。

だがあくまで予定をそのままに対策を取って来るといふのなら、勝負はここで決める。

殿下側の対策はあくまで予定はそのまま、その中で何かしら対策を取るというモノだった。

そのやり方はお粗末なものではあったがそれはこちらがその情報を知れる位置にいたから言えること、我が標的ながらあつぱれな対策の早さである。

そんな単純でいいのだろうか？その時はチームリーダーの決定を疑ったりもしたが、今となつては慧眼だったと言わざるを得ない。

何しろ今回は、普段の仕事とは前提条件があまりにも違いすぎたからだ。

極東の平和で浮世離れた国での活動、その中でもド田舎の山奥の競走馬育成機関への潜入と潜伏。

それだけでも外国人は目立つ、アジア系の顔立ちをしている自分でもかなり神経質に偽装しなければならなかった。



それだけではない、日本の競馬関連知識はできる限り頭に詰め込んできたつもりであったがここではその常識がことごとくズレる。

このトレセンは一体どうなってるんだ?! 身分を偽って新米厩務員として入社して一週間、ほどほどに馴染んできた身ではあるがそれでも目を疑わずにはいられない。

これでも悪辣な現場での活動には、自分はチームで一番慣れていて今回も偵察と主力を担っている。その自信が一気に揺らぐのだ。

「ハルナは可愛いですね。ほら、こっちを向いて」

厩舎で便所用の猫砂を入れ替えている横で仔馬の検診を行っているこの男、この群馬地方競馬でかかりつけの医師をしている仮面の獣医なのだが全身が怪しいのだ。

年がら年中コートを着ており常にフルフェイスマスクをかぶって仕事をしており、仕事場では素顔を見ることがすら稀で、言動もなぜかいちいち胡散臭い。

見るからに怪しい、言動も妙に怪しいこの男だが、この群馬競走馬トレーニングセンターでは厚く信頼されている獣医だ。

はつきり言って自分よりはるかに怪しい、恰好も言動も何もかも変態のろくでなしのそれだが、腕は本物である。

「ふむ、目ヤニはないようですが少し血行が悪いようですね。今日は鍼マッサージを行います。亜美ちゃん」

「はい、ドクター。お香は?」

「今日はいらないでしょう、粘膜類には異常は見られませんしとても落ち着いています。このまま施術します」

ドクターの助手、と思しき少女もどこか浮世離れしたような雰囲気がある。年齢的に未成年に見えるが、日本生まれだと西欧系に見える顔立ちも幼く見えるのだろうか?

少し疑問に感じてしまうが、あまり多く探りを入れると怪しまれるのでぐっと抑える。

この群馬トレセンに来てから何度と無く行った我慢だが、正直に言ってもまだ慣れない。ここには明らかに異常な光景が多すぎる。

(ん…消毒液の香り)

部屋内に漂い出す薄い消毒液の香りに、ちらりと視線をドクターたちのほうに送る。

そこには気持ちよさそうに体を横たえ、亜美という助手に膝枕をされたままドクターに太もも部分へ細長い針のようなものを差し込まれている仔馬の姿があった。

日本競馬では一般的な笹針を使った鍼治療ではない、人間に行うような細長い針を何本も差し込む鍼治療だ。

「次は少し痛いかもしれませんが、できるだけ我慢してくださいね？」

「ひひいん…」

「よしよし、いい子ですね。今は疼くでしょうがすぐに収まります、じっとしててくださいいね」

（いい子ですむかよ！馬だぞ！！馬に鍼治療ってどんな状況だよ！！しかも全然暴れ出さねえってどうすればそうなる！！）

自分の頭の中にあるモンゴルの馬と日本の競走馬、これが根本的に違うのはよく知っているがそれでもこれは予想外過ぎる。

入社当時から今まで、顔に出さないようにするのが精いっぱいであるほどに。

最初の仕事は馬への触れ合いから始まった、それ自体は慣れたもののはずだった、自分は幼少期から馬には慣れ親しんできた家系だったからだ。

その経験と技術はこの裏家業の中でも身に染みついてるし生きてきた、正直に言えば日本の競馬関係者よりも自分のほうがずっとうまく馬を操れる自信すらあった。

だが結果は他の新入りと同じ、馬を手懐けるのではなく合わせられていた。それも自分が気づかないほど自然にだ。

自分の試験担当馬だったメジロモンスニーという馬は老齢らしからぬ精悍さと賢さを持っていたが、それに気づいたときには怖気が走った。

「おや、グエンさん、もしやこの施術に興味がおありで？」

くそ、気付いてやがった。偽名には気付いてないみたいだが、どうしてこう鋭いんだ。誤魔化すのが大変なんだ！話が長いから！！

「ええ、その、そういうのは他のところだと見たことがないので」  
「それはそうでしょう、この鍼治療は私がタービンと一緒に作り上げた最新の治療法なのです。」

「笹針治療と東洋医学を元にして、強力な薬品には頼らず患者の体への負担を極力抑えて行う画期的な方法です」

「へ、へー、すごいですね、タービンさんと先生」

「ええ、彼の献身のおかげでこの鍼治療は格段の進歩を遂げたとも言ってよい。特に幼駒への施術に関するデータは大変得難いものでした。」

「彼ほど医療に理解を示し、協力してくれた馬はいません。彼の口利きのおかげでみんな快く協力してくれましたよ」

（聞きたくねえよそんなマッド理論!!落ち着け、今日を乗り切れればこんな魔境とはおさらばだ）

「興味がおありならば、どうですか？我が病院に見学に来られては？歓迎しますよ」

「い、いえ結構です。次の仕事がありますので!!」

「おや、振られてしまいました…」

「ドクター、やっぱりマスクが怪しいですよ」

「今度からコミカルに光るものに変えましょうか、あのI字のモノは受けがいいですよね」

真後ろで行われる奇妙な施術と会話から目を背け、手早く馬用便所の猫砂を張り替えると、自然な挨拶と会釈をしてから張り替えた猫砂を入れたカートを押して厩舎を出る。

その厩舎の裏手にあるゴミ箱に猫砂を捨ててカートを元の場所に戻すと、彼女は自分の休憩時間になるのを時計で見てから二つ折りの携帯電話を取り出して登録された番号に連絡を入れる。

すぐに電話が取られるが問いかけはない、彼女はすぐにあらかじめ決められた暗号通りに口を開いた。

「休憩時間だよ、どう？今夜飲まない？」

《ダート練習場で馬を乗り回してる、護衛がいる付近で合流しそうだ》

「あいあい、じゃあいつもの時間にいつもの飲み屋でいい?」

《了解、仕事の後はすぐに離れる。長くは援護できない》

「OKOK、じゃまた後で」

電話を切ると自然な足取りで足をターゲットのいる地点に向ける。

電子ロックが一般的になった厩舎の通路を抜け、厩舎裏の自販機前で担当馬におねだりされている厩務員の横を足早に通り抜ける。

ここで変なことに巻き込まれてはたまらない、暇な馬に目を付けられて引つ張り回されたりしたら丸一日潰れる。

下手に拒むと先輩厩務員か調教師のお世話になってしまうので目を付けられないようにするには避けたいところだ。

(見つけた、暢気に馬なんか乗り回しやがって)

ダート練習場に着くと、ちょうど練習場脇のスペースで殿下が乗り回していたウマから降りている所だった。

周囲には殿下が乗り回していたという事で若干人ばかりができており、居残っていた警察官の姿も見られる。

周囲にいるのはほとんどが居合わせた調教師と競馬の騎手、これは一般人だ。

暗殺目標のマクターム殿下、何が琴線に触れたのかしきりに乗っていた馬に対して厩務員に質問している。

これは僥倖、完全に意識が馬に向かっている。いつもなら彼自身も警戒しているところだが今回はかなり楽に撃てそうだ。

警官は3名ほど、さほど警戒している風に見えないので対処は容易だ。戦力外とみていいだろう。

一番警戒すべきは殿下の護衛だ、一名だけだが手練れである。たとえば殿下の暗殺が成功しても十中八九あの護衛につかまるだろう。

(だがそれだけだ、この人だからの中で真正面からぶつ放されたらどんな人間でも反応が遅れる)

普通なら自殺行為だ、一般人だらけで警察官や護衛の人間もいる中で堂々と銃を抜いて突きつけるなどという事は。

ほかの国ならば、そのそぶりを見せただけでこちらに護衛の銃口が向く。

しかし今ならばできるのだ、一難去つたと殿下も護衛も無意識に弛緩しているなら、そして所詮は赤の他人でしかない日本人共の群れの中では。

強いて注意するべきは、唐突な発砲による轟音で競走馬たちが確実に恐慌状態になるという事だ。

それも逃げるために使う隠れ蓑にできると思っているが、やはり相手は馬、ただ暴れるだけで十分人を殺せる巨体である。

何よりこれに関しては本当に運頼みでしかない、自分目掛けて突っ込んでこないことを祈るのみだ。

(逃げられますように逃げられますように逃げられますように……)

それとなく殿下の近くまで歩を進めた、まだ誰も自分に注目していない。

殿下は今まで乗っていた馬に心底ご執心であり、護衛もまだ背を向けている。距離は十分、これ以上近づくのは怪しまれるだろう。

隠しホルスターを最終調整して武装を抜きやすくしながらグロツク26を抜き、体の陰に隠しながらスライドを引き、銃口を殿下たちに向けた。

まずは、仕事をやり遂げて逃げる上で一番厄介な護衛の男からだ。

### 第34話

正直に言えばただの反射的な行動だった。突然銃声が鳴って、お付きの人が背中から撃たれて、一度とはいえ乗っけてた人に変な輩がグロックなんて物騒なもんを向けてりやそりやそうだろ。

こんな所でいきなり拳銃をぶっ放してくる輩がいるとは思ってなかったし、そもそも日本でそんなもん見る機会はそうそうない。

けどまああれだ、一度は背中に乗せた人が殺されそうになってたらさ、助けるじゃん？

「What!?!」

もうね、ほんと咄嗟だったね。殿下を背中後ろに押し出して、今にも次弾ぶち込みそうな厩務員もどきのグロックに噛み付いて組み付いた。

あつぶね、あと一寸スライドを押し込むの遅かったら撃鉄落ちてたじゃねーの。っていうかグロックなんかどこから手に入れてきたこの姉ちゃん！

なんで新入りの姉ちゃんが殿下を殺そうとすんのかは知らんがね、とりあえずここはそういうことする場じゃねえんだよ。

思いつきり銃をひねって奪い取りながら振り回して、体勢が崩れた新入りの足を自分の右足で後ろから引っかけてーの！

「ヒーヒーヒー!!!」『CCCC!!!』

見様見真似のCCC、馬アレンジ!!

「あぎやあ?!」

フン！他愛なし。前世のイラクではこれでいろいろ乗り切ったかな、さすがビッグボスだけ。見様見真似だけだ。

ここが休憩スペースでよかったな、背中から思いつきりいったから痛いだろうが許せ。まあ手加減したし、本物の馬に殺しにかかられたらこんなんじや済まねえからな。

っていうか、もぎ取ったの改造銃とかじゃないマジもんのグロックじゃん。これ26か？初めて見たぜ。こんなトレセンに似合わないも

ん持ち込みやがって、何したかったんだ？

とりあえず無力化しとくか。口の中で噛む位置を直してグロックのスライド後部のセレクション部分を噛んでグリップが右にくるようにして、そしたらグリッパ後部を右足で何度も押しして銃弾を排出。あとでなんかあると嫌だからね、弾拾いの面倒は増えるけどそこはしようがない。

全弾出たらスライドストップがかかるから、マグキャッチを右膝で押ししてマガジン抜き、もう一度グリッパを押ししてスライドストップを解除。

撃鉄も落としておきたいところだけど、さすがにグロックは馬のこれじゃ操作しにくいわ。グロックはトリガーセーフティー付きだし。

「確保!!」

「県警本部！県警本部!!緊急連絡!!」

「Fuck!Police!」

オーオー吠えとる、でもさすがに日本警察相手に近接格闘は分が悪いだろ。がつつり組み付かれてるし。

お巡りさん一人が背中から抑え込んで、もう一人が県警に通報で雅孝さんは…あ、別のところの警備してた人に連絡ね。

さすが警察の格闘術、えぐい位完璧に犯人を無力化してんねえ。

撃たれた殿下のお付きの人は…ああ、無事みたいだな。防弾チョッキ着てたのね。殿下に介抱されてる。

…ん？待てよ、どうしてこんなところで銃撃？一人で？

「ヒヒーン…」『師匠！すごい音したけど一体何!!?』

『なんなのですか?!花火みたいな音がしたのです!!殿下が来たから花火の日ですか?見たいのです!!』

近くの休憩スペースにいたアイネスとレーネが来た。待て、待て待て待て、そもそも狙われたのって殿下だよな?殿下ってドバイの首長やってなかったっけ?

そんな人狙うのが単独犯?しかもこんなお粗末な鉄砲玉戦法?イヤイヤそんなわけがねえ、そんなの今のヤクザ映画だってやらないだろ。

嫌な予感がする、これは嫌な予感がするぞ。そもそも殿下を狙うならそれ相応の奴がやるよな？当然、腕前も相応の奴だすよね？それでこんな鉄砲玉やらないよな。

周りを見る、この周囲にはほかに不審な人影は見当たらない。じゃあ、ちよつと遠くの、トレセンの事務所とかが入っている建物の方は？

「ふあー…」『やつべえ…』

見つけた、見つけちゃまった。建物からダート練習場を見渡せる練習用放送室、その中に見覚えのある光がキラキラ、どう見ても狙撃用スコープの反射光。

それに施設の倉庫から練習場に機材を出す為の搬入路にもう一人、真つ黒のBDUに同じく真つ黒のタクティカルベストでバラクラバのテロリスト。手には…冗談じゃねえ、どこからそんなもん持ってきたやがった!!

「フアアアアア!!」『アーウエン37だとお!!?』

「ヒヒ!?」『何それ!?』

「フヒーン!!」『グレネードランチャーだ！全員伏せるか隠れろお!!』  
冗談じゃねえ、ふざけんな!!狙撃に煙幕の支援付きだど!?なんでそれを最初に使わんのだアホんだらあ!!しかもあのグレネード野郎、短機関銃まで抱えてやがったぞ!

あの特徴的なヘリカルマガジン式のダットサイト付き短機関銃、P-19ビゾンとかなんであんのさ!!

咄嗟に近くにいた殿下と護衛の人の首根つこを啜えてダートコーラス脇のでかい金属製物置の裏に押し込んで俺とアイネス達もゴミ箱裏の地面に伏せる。

瞬間、気の抜けるような音が2回したと同時に何かが打ち出されてシウルシウル音を立てて飛んでくる音が聞こえて、耳をつんざく炸裂音が響き、閃光が周囲を一瞬だけ照らし出した。

「ヒイイーン!!」

「ブルアアアア!!?」

うるせえ！耳がおかしくなりそうだ!!フラッシュバン? いやグレ



ネード用の閃光弾か。なんでそんなマイナーなヤツ撃ってくるんだよ、グレネード撃つ前の事前射撃とでも言いたいのかこらあ!!

『し、師匠おお!!これなんなのさああ!!』

『怖いのです痛いのですうるさいのです嫌なのですうう!!』

『頭を上げるな!グレネードで吹っ飛ばされるぞ。そのまま伏せてろ!!』

アイネスとレーネは完全にパニックになってる、このままだと暴れて立ち上がりそうだったんで前足で無理矢理頭を下げさせて伏せさせる。

遠くからパンパン音が聞こえてきた、狙撃手も撃ち始めやがった。ますます頭上げられねえぞ。

「ヒヒン!」『アイネス、レーネ、お前たちは絶対に立つなよ、頭も上げるな』

「ヒヒン!?!」『師匠?!』

「ヒヒイン」『言う通りにしろ!!狙撃されるぞ。収まるまでここでじつとしてろ、殿下たちもここから動かすな。頭上げそうだったら抑え込んで伏せさせろ』

言うが早いか恐る恐る顔を上げようとしたお付きの人の頭を左足で優しく下げさせる。あんたが目立ったら殿下がここにいるってバレでしょうが!

くそう、人間の体なら匍匐なりなんなりでそれなりに自由が利いたのに、馬の体じゃ匍匐前進でも目立つから動けねえ!!

あ、だから殿下も顔出すな!!ほらじつとして、アイネスとレーネみたいに頭抱えて伏せとくんだよ!!

『ひよえええ!!』

『あつぶねえ!!』

ぬわああ!ゴミ箱がカンカンいっとるう!!この野郎馬が寄り添ってるだけなんだから撃つて来るんじゃないやねえ!!

前世のイラクに比べりゃ密度は薄いけど撃たれるってのはやっぱり怖い!クソが!!

「ヒヒイン!!」『くそッ、弾がへなちよこじやなきやぶち抜かれてたぜ。

ブチ！まだ生きてるかあ!!」

「うにやッ！にやにや!!」『運良くな！まったく、厄介なお客さんが来たもんだ!!』

「ヒヒン!!」『まったくだ！どこにいる!!』

「ニヤーツ!!」『コースの端つこだ。頭から突っ込んで砂塗れだぜ！ウララちゃんたちはこっちで回収した、こっちは任せろ!!』

了解了解！そのまま砂に隠れてろ、そうすりやそうそう狙うやつはいねえだろ！

「???!!」

あ、何だって護衛の人？え？グロック!?あ、引つ張んなよ放すからあわてんな。でも悪いな、弾切れだ。

そういえば啞えたまんまだったグロック26を護衛の人に渡すとびっくりしたように目を見開く。

そうね、マガジンないもんね。そんなにチャンバー見たって一発も残ってねーよ。

「??  
?????  
?????」

なんて言っただかわからんが：まあいいや、どうせお前何やってんの？とかそういうのだから頷いて知らん顔しちゃれ。

しょうがないだろ、こんな風になるって分かってたら弾を入れっぱなしにしてたよ！

「ぬわ!!」

「いっでえ!!」

「GOOD!」

ん？今悲鳴聞こえなかった？しかもなんか見覚えある感じの。

「今野、島岡!!」

雅孝さんの声からして、新人厩務員を抑え込んでた警官と本部に連絡してたが撃たれたのか？放送室にいたあの狙撃手か。

あっちも隠れただろうにいい腕してやがる。まさかこれ、仲間を守るための援護射撃か？随分と心優しい暗殺者仲間だなあおい!!

何が起きてるのか確かめるために、ゆつくりと顔を上げて物置の陰から顔半分だけ出して様子をうかがう。

「止まれ、止まらんと撃つぞ!!」

やっぱりだ!新人の姉ちゃんを押さえていたほうの警察官と県警に連絡を入れていたほうの警官が撃たれていた。

あのグレネード野郎が次に撃ってきたのは煙幕弾だったらしく、ちようどこつちと逃げる新人の間を遮るように白い煙が出始めている。

県警に連絡を入れていたほうは左足を撃たれたただだったみたいで、ニューナンプを撃ちまくったけど…ダメか、あの煙幕じゃ当たらん。

「畜生!」

「逃がすか!タービン!!」

『おうよ!』

雅孝さんの呼ぶ声に応じて俺はすぐに雅孝さんのそばに駆け寄って体をかがませて乗りやすくする。

思った通り雅孝さんが俺の上に跨って手綱を握った、追いかけるつもりなんだろう?お供するぜ、昔みたいにな!

「ヒヒーン!!」『ブチ!!連中を追いかける。まだどっかに仲間が潜んでるかもしれないから、他の連中に怪しいヤツを見かけても手を出させんな!』

「うにゃあ!」『マジかよ!!そんなんどう抑えろってんだ!!?食って掛かるに決まってるぞ!』

「ヒーン!」『任せる!絶対に殺すなって言っとけ!!』

「先回りするぞ!進路は任せた!!」

「ヒヒーン!!」『了解!ブチ、任せたぞ!!』

「ギャース!!」『絶対もう手遅れなパターンじゃねーか!!』

逃がさんぞテロリストども、こんなことやらかした罪は刑務所でたっぷり支払ってもらおうぞ。



襲撃は失敗した、そう即座に理解した瞬間、襲撃のバックアップを担っていた彼はすぐに撤退する態勢を整えていた。

こんな仕事だが命あってこそ、失敗したらそれを呑み込んで生き延びて、恥を呑み込んで次の仕事で挽回する、それが自分たちのチームのやり方だ。

「くそッ！くそッ!!痛てえ、痛てえぞチクショー!!」

「そうだそうだ！思う存分喚け、口が動くうちは生きてる証拠だ!!」

とはいえ、ロジューが足を撃たれたのは想定外だった。狙撃されると理解させれば日本警察の警官は及び腰になると思っていたのだ。しかし肝が据わった警官もいたらしく、煙幕で見えないにもかかわらず撃ってきたのだ。

その内の一発が、本当に運悪く全力で逃走していたロジューの右太ももを貫いた。

弾切れのアーウエン37を捨てて、厩務員服のロジューを左肩で抱きかかえるファイヤーマンズキャリアで抱えて小走りで逃げながら先ほどの戦闘を反芻する。

何とかカバーして室内に引つ張り込んだはいいものの、右太ももの銃創からにじみ出る血痕が廊下に明確な痕跡を残している。

きつと持ち直した警官たちが自分たちを追いかけてくるに違いない、血痕は十分な痕跡だ。

だからといって、自分たちは敵の懐に飛び込んでいるのだから気にするまでもない事なのだが。

日本警察の主装備は38口径のリボルバー式拳銃が主だ、予備弾薬を持ち合わせていないはずだから火力は自分たちよりはるかに乏しい、抵抗はたやすいはずだ。

そんな風に勘案していると、予定していた合流ポイントの廊下で先ほどまで援護用の狙撃ポイントにいた仲間のチームメイトが慌てた様子で駆け込んできた。

「ロジュー！なんてこった、傷の具合は？」

「足に一発、38口径だ。大丈夫、血管は傷ついてない、しばらくは大

丈夫だ」

「何が大丈夫だ!! マツケイ! もつとちゃんと撃てつての!!」

「無茶言うなって、お前も納得してただろ? こんなボロライフルでまともに当たるか」

マツケイは抱えていた狙撃仕様M1ガーランド半自動小銃で通路の向こうに射撃しながら怒鳴った。

丁寧に手入れはしてあるが金属部位に所々錆が残り、木製のストック部分もボロボロなところが目立つ銃はこの日本で何とか調達できた唯一の狙撃銃だ。

当然ながら射撃精度は良くない、長年酷使されたせいで部品にガタが来ており銃身のライフリングも薄くなっている代物だ。

国外からの密輸が難しいなら国内で流れている物から調達する、というリーダーの発案は名案ではあったが、思いのほか警察は有能で裏で流通している銃は少なくえり好みはできなかった。

そのせいでほぼジャンクなM1ガーランドだけでなく、閃光弾と煙幕弾しか在庫がなく非殺傷弾しか調達できなかったアーウエン37もなんとか活用できないか考えるしかなかった。

まともな狙撃銃やグレネードランチャーが入手できなかったこの一件から、今回の仕事では遠距離狙撃や圧倒的火力による力押しなどによる依頼達成は候補から外されていたのだ。

「こつちだ、ここなら時間が稼げる」

「くそつたれ!! あの馬、なんなんだ!! あたしの銃を、あたしの銃を!! くそつ!! あとでぶつ殺してやる!!」

「そんな暇があったらな」

マツケイが蹴り開けた窓の付いた両開きの金属扉の先は倉庫のようだった、中には古い機材や飼料の入った袋などが置いてあり動物の匂いが染みみついている。

出入り口は三つ、うち一つはロジの偵察で決められていた退却ルートにつながるものだ。もう一つはロジが事前工作で壊したカギがかかっており、修理しなければ開かないようになっていた。

その先の部屋には別の出入り口もあるが、そこも事前工作で経年劣

化による破損に見せかけて封鎖済みだ。

もう一つの扉の先は使われていない厩舎で、その先に搬入通路があり撤退用の車が来れば無線に連絡が来る手はずになっている。

この施設内にはロジューが細心の注意を払って施した破壊工作でいくつもルートや死角が作られており、潜入ルートや仲間の潜伏先に使われていた。

彼がロジューを運び込むとマツケイは入ってきた扉を乱暴に閉じて、近くにあったコンテナを乱雑に引き倒して扉をせき止める。

扉の向こう側から日本語の喚き声とどたどたとかけてくる足音が聞こえてきた。すぐに扉の近くにいたマツケイが、金属扉上面についた窓から応戦する。

しかし、すぐにマツケイの使っていた狙撃仕様M1ガーランドは嫌な金属音を立てた。

「クソッ、ボロめ」

「使え!!」

咄嗟に自分が持っていたPP-19ビゾン短機関銃を投げ渡す、マツケイがそれを受け取ると同時に放り捨てた狙撃仕様M1ガーランドはスライド部分が中途半端に停止して固着しているようだった。

マツケイの足元に予備弾倉を滑らせて渡し、彼はロジューを撤退路ではない扉近くの手ごろな物陰に降ろして、メデイカルポーチからメデイカルキットを取り出した。

まだ撤退用の車が来る連絡はない、自分たちを見捨てるはずがないからおそらくほかの要員を回収しているのだろう。

この位置ならばマツケイの姿は見えないが、マツケイ側からの射線は流れ弾も来ない位置だ。

「くそ、ああくそー悪い、しくじった」

「しょうがないよ、あんなの予想できるわけがない」

手早くロジューの右太ももの銃創を止血して、包帯を巻きながら彼女の言葉に返答する。

そうだ、こんなこと予想できるはずがない。まさか初動で一番速かったのが馬だったなんて、その馬が銃を怖がらないどころか熟知し

ていただなんて。

援護のために観察していたからこそ自分には理解できた、そして怖気が走った。

あの馬がロジューのグロック26を奪った後、明らかにそれが銃だと認識したうえで的確に無力化してみせたのだ。

「悪いと思ってるなら、帰ったらあのレストランで飯おごれよ、全員にな」

「おま！金ねーよ!!」

「失敗しなきゃ入ったんだよ、ね！」

「あだあ!!わかったわかった!!じゃあ——」

ロジューの言葉は最後まで紡がれることはなかった、何故なら彼の後ろで唐突に大きな音を立てて何かが開いた音がしたからだ。

ロジューの視線はなぜか自分の後ろに向けられて、その瞳孔はまるで恐ろしいものを見たかのように収縮した。自分の首筋を生暖かい息が撫でた。

自分には後ろに何がいるのかわからなかった、何故なら自分の後ろには壊れたカギがかかった扉しかないはずだから。なら、今の音はなんだ？

警察ならとつくに拘束されている。なのにそれが無い。まるで撫でまわすように自分を見て、息を吹きかけている。恐ろしい。

「アダム!!」

自分が振り返るよりも早く、アダムは何か横に突き飛ばされた。乱暴に壁に叩きつけられて息が詰まり、視界が明滅する。

マツケイが扉の向こうに応戦するのが一瞬見えて、ロジューに目を向けると、そこには血だまりと何かに引きずられたような跡しかなかった。

「アダム!!マツケイ!!」

咄嗟に空いていなかったはずの扉に目を向ける、そこにロジューがいた。必死の形相で扉の縁にしがみつき、今にも引きずりこまれそうな彼女の上半身の姿が。

咄嗟に彼女にしがみつき、引っ張り出そうとした。だがロジューを

引つ張ろうとする何かの力はあまりにも強く、咄嗟に右わきの下に抱え込むようにして自分を取っ掛かりにして何とか固定する。

それでも引つ張り込もうとする何かの力は強い。自分一人では長く抑えていられないのが彼にはすぐに分かった。

レッグホルスターに収めてあるマカロフPMを抜く暇もない、両腕でしつかりと持たないとロジューはすぐに連れていかれてしまう。

一人では無理だ、そう直感してアダムはマツケイに向かって叫んだ。

「マツケイ！マツケイ!!」

「今忙しい!!」

「助けてくれー早くー!」

咄嗟にマツケイに助けを請うが、マツケイにはこちらが見えておらず警察への応戦で手いっぱいだ。

おそらく警察が来たと考えているのだろう、そんなものではない、得体のしれない何かにロジューが連れ去られかけているなんて思いもしないはずだ。

「マツケイ!!ロジューが連れてかれる!!」

「何い!?!」

「アダム！アダム!!」

マツケイの声が愕然とした瞬間、今まで以上に大きな唸り声と同時にロジューの体が揺さぶられ、アダムの右脇の下からロジューの腕が引き抜かれた。

ロジューの腕が抜けたことでアダムはその場で尻もちをつく、すぐにロジューを捕まえ直そうとして、廊下の先を見てしまった。

暗闇の中の大きな何かに、細長い管のようなものをはやした黒い影に服の首根っこを啜えられて喚きながら暗闇の中に引き摺りこまれていくロジューの姿。

ロジューの助けを請う声が響く、咄嗟にマカロフPMを抜いて暗闇の向こうに発砲したが、遅かった。

巨体の影はまるで何もなかったように消えて、ロジューも暗闇の中に消えた。



「アダム！なんで一人で…ロジューは!!？」

「連れてかれちゃった…」

「何？」

「連れてかれちゃったんだ!! 訳が分からねえ!! 警察じゃないぞ!! 追いかけてねえと!!」

「馬鹿やめろ、もうここは持たない」

「でもロジューが!!」

追いかけてなければ、そう言いかけたがその声はマツケイが守っていた大扉が大きくなったかかれる音に遮られた。

見れば、扉の前に警官と警備員達が押し寄せてきており扉に体当たりして無理矢理こじ開けようとしている。

「もう間に合わん、来い!!」

「畜生！」

マツケイが撤退路の厩舎に繋がる扉に駆けるのを、アダムもマカロフで大扉に向けて牽制射撃しながら追いかける。

アダムが厩舎内通路に飛び込んだ途端、真後ろで盛大な破壊音と同時に扉が乱暴に蹴り開けられる音が響いた。

「嘘だろ!? 無理矢理突破してきやがった! なんつーバカ力だ!!」

「足を止めんな! ほら! アイリスたちだ!!」

後ろからどたとたと追いかけてくる警察官たちの足音に冷や汗が噴き出るが、アダムは厩舎の先の搬入通路に白いワンボックスが荒っぽく停車したのを見て何とか息を整えた。

撤退支援のために後方支援を担当していた我らがチームリーダーは、最高のタイミングで助けに来てくれた。これだから彼女はとても信頼できる。

「早く乗れ！」

「言われなくても！」

マツケイが開いたドアに飛び込み、自分が体半分まで身を車内に飛び込ませたところでワンボックスが急発進して、アダムは近くの座席に転がるように倒れた。

何とかなつた、そう思うがすぐに車内の異常に気付いた。静かすぎ

るのだ、自分たちより前に撤収した潜伏部隊の雇われ傭兵たちなども居なければならぬはずなのに人影がない。

よくよく不思議に思ってから後ろを見れば、後続の車もない。万全を期すために車2台に分かれて、目立たないように潜入したとはいえないざというときの撤退プランは全員と共有していた。

今回雇った傭兵たちは顔見知りの連中ばかりで腕前は信頼のおける連中だった、それが誰一人残っていないというのはあまりにもおかしすぎる。

「リーダー、他の連中は？」

「やられた」

「マジか？」

「お前達こそ、ロジューはどうしたの？」

「…やられた」

正確には連れ去られたというほうが正しいが、そういったところでもう迎えに行くことはできない。

こんな仕事だ、生き残るために最善は尽くすがそれでもだめならば割り切るしかない。ロジューは運が悪かった、それも強烈に。

「日本の警察にか？」

「…何が言いたいんだアイリス？」

「ロジューをやったのは警察か？ほかの連中は馬にやられた」

「何の冗談だ？」

「冗談ならどれだけよかっただろうね…」

もう笑うしかないとはかりに乾いた笑いを漏らすアイリスが言うには、撤退のための下準備に取り掛かっていた傭兵たちはみんなロジューがしくじった後すぐに行動を起こして返り討ちにあっただけらしい。

潜伏のために厩舎を利用したのがまずかった、中にいた馬たちを警戒しなかったのもいけなかった。

「あつという間よ、みんな後ろが空気でそこを馬に抑え込まれてね。私は運よく逃げられた、壁際にいたから」

「なんてこった…じゃあ下準備も中途半端か？」

「そんなミスはしない」

後ろからけたたましいサイレンの音が鳴り響き、赤い赤色灯を煌々と光らせたパトカーが猛然と追いかけてくる。

それを見たアイリスは、ダツシユボードを開けて中から無線機のような端末を取り出してアンテナを引っ張り出す。

その間に、加速力に勝るパトカーがどんどん近づいてくる。車内には警官が二人、助手席の若い男性警官がリボルバーを抜いているのが見える。

今にも撃つてきそうな姿を見ながら、アイリスは電源が入っている端末のスイッチカバーを押し上げると慌てずに躊躇なく押し込んだ。

瞬間、施設のそこかしこで爆発音と噴煙が巻き上がり、背後のパトカーがまるで何かに地面から押し上げられるように真上へ宙を舞い、空中で発火し火だるまになりながらそのまま施設の外に落ちた。

「施設の車とパトカーには全部に確実に壊れるくらいの量のTNTを仕込んでいたわ、もう私たちを追ってこれる車はないはず。ダニエル、このまま一気に逃げるわよ」

「壊れるだけか？吹っ飛んだぞ」

「後輪が吹っ飛ぶ程度のはずだった、運が悪かったわね」

運転席で今の今まで黙ってハンドルを握っていたダニエルがアクセルをさらに踏んでワンボックスを加速させる。

いくつもの乗用車が黒煙と火災に包まれている駐車場の脇を潜り抜け、爆破されたパトカーが突っ込んだトレセン施設の真横を通り過ぎる。

そこを通り過ぎた先はちようど正面出入り口の目の前だ、昼間は開いている鉄扉が閉められている。周囲に人影はない。

開けに行くか？アダムはふと考えたが、ダニエルが一瞬だけバックミラーを見て目を見開き何も言わずにさらにアクセルを踏み込むのを見て異変を感じ取った。

ダニエルが自分から強行突破するのは普通だが、後ろを見て一瞬嫌な顔をしたのが見逃せなかった。後ろに何かいる、アダムはそう思っ

て振り返って、思わず目を疑った。

「まさか持ち直してくる連中がいるとはね、無謀なことを」

黒煙を上げる廃車をよけ、火災に包まれる施設を背景に、まるで騎士のように物干し竿を構えて鬣の短い栗毛の競走馬を駆る初老の警察官があつたのだ。

アイリスの言う通り無謀な光景だった、いくら自分たちの車がワンボックスカーとはいえ、乗っているのが競走馬とはいえ、馬が車に勝てるはずがないのだ。

すでに馬で車と戦える時代ではない、軍の騎兵隊も、警察の騎馬警官も、今や戦力的価値はないただの儀礼種目でしかない。

それでもその心意気は本気なのだろう、警官と馬からは本気で自分たちを捕まえようとしているからこそ感じる覇気というモノが感じられる。

恐れを知らぬとばかりに加速してくるその警察官と競走馬の姿はアダムに何か嫌なものを感じさせた。

## 第35話

「おいおい、マジかよ!?!」

眼下の国道で戦闘を繰り広げているのはまさにハリウッド映画染みた逃走劇であった。

もし自分たちが仕事で慣れ親しんだ警察へりに乗っていないければ、群馬県警を揺るがす大事件の只中でなければ、きっと思考停止してただの映画の撮影だと思っただろう。

群馬競走馬トレーニングセンターから少し離れた山際の曲がりくねった国道の只中で行われているカーチェイスは、日本のそれとは似ても似つかない過激なモノであった。

それを群馬県警察本部より派遣された警察へりを操る操縦士と副操縦士は目の当たりにして、思わずこの大事件の事を忘れて現実逃避したくなった。

《GK02、こちら群馬県警本部、現状を知らせよ》

だが現実是非情である、まじめに事態を收拾しようと必死になっている県警本部からの催促がさつそく飛び込んできた。

「こちらGK02、現在群馬競走馬トレーニングセンターより南下、高度100メートル付近、芦名市方面へ向け飛行中…」

こんなものなんて言ったらいい、ふと副操縦士は逡巡して言葉を切った。

どうすれば信じてもらえる、そもそもどう表現すればわかりやすい?こんなこのこれまでの実戦でも警察学校でも習わなかったぞ。

「県警本部、逃走車両及び追跡警察車…いや、追跡騎馬警官を確認。逃走車両より銃撃を受けつつも追跡を続行中」

《…こちら県警本部、電波が悪い、再度報告せよ》

「GK02より県警本部、当該逃走車両および追跡中の騎馬警官を確認!現在、群馬トレーニングセンターより南下、芦名市方面に逃走中!!

逃走車両から多数の銃撃を確認、騎馬警官はその銃撃を受けながら追跡中!!」

《こちら本部！通信状態が悪い、繰り返し》

「だあら!!テロリストの逃走車両を制服警官が競走馬に乗って追跡してて、絶賛銃撃有りのカーチェイス中なんだよ、通信障害じゃねえ!!」

《嘘だろ…》

俺だってそう思いたいよ！副操縦士は内心で叫んだ。しかし現実はそのなのだ、護衛に派遣されていたらしい制服警官が群馬地方競馬所属と思われる競走馬に乗り、マクターム殿下を襲ったテロリストたちを追跡しているのだ。

それも曲がりくねった山道を逃走車両のワンボックスカーの中から盛んに撃ち込まれる銃撃を掻い潜りながら、じりじりと距離を詰めて追い詰めている。

その姿はさながらバイクだ、二つの車輪ではなく4本足で道路を蹴っているでなければ、鋼鉄の体であればそれで通じただろう。

その背中に乗る警官は、テロリストから放たれる短機関銃と思しき激しい銃撃を右に左にと体を揺らしながら避ける競走馬の背中を手綱を握り、慣れた手つきで鉄製と思しき物干し竿を携え、時に振り回しながら乗りこなしている。

いくら競走馬が俊足とはいえかなり無理をさせているはずだ、そう長くは持たないだろう。

《了解、至急近隣の車両を急行させる。安全を維持しつつ、引き続き該当車両を追跡せよ》

「GK02、了解、当該座標を送信…完了。引き続き…あれはなんだ？」

県警本部からの命令を復唱しようとしたとき、副操縦士はバンの後部座席から大きな筒状の何かを抱えた男性が上半身を乗り出すのが見えた。

その円筒形のモノを肩に背負い、筒先を自分たちに向けて構えるそれ。日本国内ではまず見ない、映画の中でしか見た覚えのない兵器に、副操縦士の脳裏は一瞬思考停止した。

《G K 0 2、変化があつたのか？状況を知らせよ》

「あ…」

なんていえばいい、どう警告すればいい、あれはなんていうんだ？  
思考が全く定まらない。

そして本能的に、地上から突き付けられた筒先から白煙が噴き出す  
と同時に映画のセリフが口から飛び出した。

「R P G、R P G!!」

「何!?!」

《何?》

操縦士は副操縦士の切羽詰まった警告に咄嗟に操縦桿を左に捻り  
左急旋回の緊急回避行動に移る。

瞬間、後方から強烈な炸裂音と衝撃がコックピット全体に走り、二  
人の意識は消滅した。



「なん…だと…」

『おま…おま…』

目の前で起きた余りにも頭のオカシイ光景に俺と雅孝さんの思考  
は停止寸前だった。

目の前のワンボックスからによつきり伸びた細長い筒状の兵器、目  
の前で撃墜された群馬県警のヘリコプター。

いやいや、いやいやいやいや!いくら何でもそんなもんどうやった  
ら日本に持ち込めるんだよ!!

「ロケット砲だど!?!」

『9 K 3 8 だあ!?!』

驚いている俺たちに向かって容赦なく P P - 1 9 を撃つて来る連  
中の射線を避けながら思わず嘶く。

9 K 3 8 携帯式地对空ミサイル・イグラ、N A T O コード『S A -

18・グロース』旧ソ連製携帯地对空ミサイル。

2006年代において東側対空兵器の中では現役の携帯式対空ミサイル発射機、なんてもん持ってたきやがった!?

っていうかはじめっからそれ使えよ!!地对空ミサイルで吹っ飛ばないくらい殿下の車は硬かったとでもいうのかこいつら!?

「なんてこった、ヘリが!!」

『あれじゃもう助からない…』

思い出したいくはないがあれは完全に直撃だった。ヘリの後部から熱源目掛けて突進、そのまま機体に突き刺さってやがる。

警察ヘリは回避行動をとったように見えたけど相手は2波長光波誘導ミサイル、ただの回避運動なんて意味がない。

そもそもただの警察ヘリが、こんな状況でフレアも無しに回避するのは至難の業、撃てば当たると所か。

まあ、こんなところで9K38なんて現用の携帯地对空ミサイルなんかぶっ放されること自体異常なんだけども。

『なんてこった、あんなもんまで持ち込んでるなんて!…こんなの、次に何が出てくるかわかったもんじゃねえぞ!!』

見た限り連中の装備は充実してやがる、何しろ短機関銃が増えてやがる。9K38をぶっ放した奴が撃つPP-19に加えて、見る限りPPS-43とステアータMPが増えてやがる!!

車に乗ってた連中が持つてやがったんだろうな、ふざけやがって!しかもそれを盛大にバラまいてきやがるときたもんだ。

今の速度は時速85kmほど、こんな速度で振り回されてんだからあっちも狙ってる余裕ないんだらうけども。

それに対してこっちの武器はニューナンブM60と物干し竿、しかもニューナンブの弾は5発だけでさすがに俺の上からじゃまともに狙えないから実質物干し竿だけときた。

『くそッ、これ以上近づけねえぜー』

山道特有の鋭いカーブでドリフト気味に曲がるワンボックスに追従しながら俺もドリフトしつつ追従、体を揺らしてフェイントをかけて射線を躲しながらなんとか曲がり切る。



それでも危ない射線がいくつもあつて生きてきた心地が全然しない、耳元でビュンビュン風を切っていくのは本当に肝が冷える。

次は3連ヘアピン、ドリフトからのインベタ、カーブで切れる射線を利用して何とか直撃弾だけは避ける。

「タービン、連中の狙いが良くなってきたぞ!!」

『分かってんよ!』

でもこれ以上どうしろってんだ!!フェイントはまだまだあるが、これ以上武器が出てきたら対処のしようがない。

フルオートショットガンでも持ち出してきやがったらもう避けようがねえぞ、それが手榴弾とかな。

このままじゃ千日手だ、しかも俺たちがすこぶる不利な、どうする…どうする…!!?

「ん!?あれはシゲとナオか!」

悩んでいたら何かに気付いた雅孝さんが声を荒げた。この先は別の道が山のふもとから合流していて、少し坂になった別の道路が俺から見て右に並行している。

そこから一台、赤色灯とサイレンを鳴らさないまま勢いよくパトカーが飛び出してきた俺たちに合流しようとしてきていた。

あの車は山内さんと河原田さんのだ。雅孝さんの同期で所属は確か妙義方面、俺も何度かあったことがある。

きつと急いで駆けつけてきてくれたんだ、それはうれしいけどあまりにも無防備だ。

パトカーは一般的な白黒セダン、普通のパトカー、装甲のないソフトスキンじゃ荷が重すぎる。

しかも連中は人と殺すことに何の躊躇もないスペシャリストだ、それをあの人たち分かってない!

『その白いワンボックス!すぐに止まりなさい!!さもなければ発砲する!!』

《マサ、タービン!遅れちゃったな!!あとは俺たちに任せろ!!》

「シゲ!ダメだ!下がれ!!!」

雅孝さんが叫ぶ、遅かった。俺たちの少し前に飛び込んできたパト

カーに気付いた、車内の銃口の一部分がパトカーのほうを向く。

止める事はできなかった、できることはなかった。俺たちに向いていた銃口の内二つ、PP-19とステアーTMPが放ったフルオート  
の銃撃が山内さんと河原田さんが乗ったパトカーを蜂の巣にするの  
に5秒もかからなかった。

「シゲ!!マサ!!」

『くそつたれえ!!』

ボンネットからフロントガラスまで一瞬でハチの巣になって制御  
不能になったパトカーが横滑りして俺たちのほうに流れてくる。

横には避けられない、ならば上だ!!

それをとつさに跳躍して飛び越え、着地で崩れかけた姿勢をパワー  
スライドで体を左に流しつつ立て直しながら俺は吐ききたいだけ悪態  
をつきまくった。

そんなに顔を合わせたわけじゃない、けど確かに顔見知りだったあ  
の人たちはもう死んだ、こんなことさえなけりや死ぬはずなかったの  
に!!

性懲りもなく撃ってくる銃撃を何とか躲しながらワンボックスに  
向かって加速する。時速86km、もう許さない、絶対にとつ捕まえ  
て後悔させてやる!!

『加速すんぞー!歯あ食いしばれ!!』

「行け!!」

息を吐く、体を弛緩させる、そしてもう一度大きく息を吸い込んで  
一気にシフトチェンジ、ギアを上げて加速!!時速88!!一気に詰める  
ぞ!!

「なぬ!?!」

『ふざけんな!!?』

PP-19の銃撃を何とか避けた先にばらまかれたキラキラ光る  
円筒形の金属、小ささまざまな空薬莖。そりゃあんだだけ車内でぶつば  
なしてりゃあ溜まるよな。

連中、やつぱり手練れじゃねえか!!撃ってダメなら面制圧、そりゃ  
道理だろうがまさか空薬莖をばらまいてマキビシ代わりってか?

今の俺にはマキビシなんてちやちなもんじやねえ空中散布地雷のミニバージョンに見えてんだけどね!!

「避けきれんか…!」

『まったく!これだから鉄火場ってのはキライだ!!』

つまりさつきの激しい銃撃は途中から囿、本命は路面にばらまいた空薬莖、いつつもこういう連中は素つ頓狂なことやってきやがる!!

進路上にバラまきやそんなもん理解できん普通の馬なら確実に踏んでお陀仏、仮に理解できてもタイミングが最高過ぎて避けられん。

変な悪知恵働かせやがって、大正解だ、ここからじゃ避けられねえよ。どう動こうが、どう走ろうが避けようがない上に余計に危険だ。

避けるには距離がない、飛び越えるには範囲が広い、何より慣性でまだ散らばりながら動いてるから捌ききれない。踏んじまうのは当然だ。

いくつかは蹄鉄と体重で潰れる、けど耐えたヤツにうまく乗っちゃまって足が滑って姿勢が崩れる。コケるな、うん、普通ならな。

『しつかり掴まってるよ!』

「避けない!?!ええいままよ!!」

バラまかれたから薬莖の中に自分から速度を上げて突っ込む、当然ながら空薬莖を踏みつぶしてバランスが崩れて姿勢が崩れた。

コケる寸前に足を踏ん張って一瞬ブレーキ、姿勢がぐらついて後ろ足が左回りに回って姿勢が崩れる。

後ろ脚が前に出始めたらステップを踏んで後ろを前に、前を後ろにしながらさらに後ろ走りにステップ、からの前足で左回りに連続ステップ。

推力を消さない連続タップで姿勢が崩れるのを先延ばししつつ荷重移動で体を滑らせて回しつつ360度ターン!

『おっしやあ、抜けたあ!雅孝さん!!』

「うや二!」

ワンボックスから撃ち込まれる銃撃を、理想的なスピン軌道を描きながら避け、ばらまかれた空薬莖の残りを避けて姿勢を立て直す。

峠の走り屋をなめんじやねえぞ、スピンからの立て直しなんざ何度

も経験してんだ!!

一気に立て直して加速、時速92キロ、ワンボックス左側からじりじりと寄せる。さあ追いついたぞこの野郎、雅孝さんの物干し竿を食らうがいい!!

今頃目をひん剥いているはずの逃げるテロリスト共のほうに意識を戻した瞬間、さっと背筋が凍るのが分かった。

『あんのかよ、二発目』

ワンボックスから身を乗り出して9K38を構えるテロリストと目が合った。油断一つしてない、俺たちを確実に狩るつもりで見定めている冷たい目だ。

なるほど、全部か、さっきのやたらしつこい銃撃も、絶妙なタイミングの空薬莖も、ここに誘い込むためか。

舐めてたのは俺の方だったかもしれん、こいつら本気で俺たちを狩る気だ。

「まずいー!」

雅孝さんが手綱を引いて進路を変えようとする。それを無視して、雅孝さんを一瞬だけ睨みつけた。

『堪えろ、こいつは逃げたら負けなヤツだ!』

「タービン!?!」

『まだだ、まだ!俺を信じろ、まだだ!!』

とつくに俺たちは9A38の射程内、しかも運悪く直線、下手な動きをすれば撃たれて終わる。今から距離を取ろうとしたって後ろから撃たれて終わりだ。

まだだ、チャンスは一瞬しかない、一瞬だけだ。まだだ、堪えろ、テロリストとにらみ合う。

一歩間違えれば爆死確定、糞怖い、逃げたい、けどここで逃げたら絶対死ぬ。直撃して死ぬ、爆風で死ぬ、破片食らって死ぬ、とにかく終わる。

これしかない、向かってくるミサイルと確実に向き合えるここしかない。

さあこい、俺たちに向けて行ってこい。俺はここだ、狙いやすいだ

ろ！さあ来い！撃って来いよ！！

「南無参!!」『今だ!!』

テロリストが引き金を引く。9K38の筒先からミサイルが飛び出してくるのがスローモーションのように見えた。

発射剤がミサイルを発射筒からはじき出し、一瞬の空白の後にミサイルの推進剤が点火。急加速と共に飛翔し、弾頭の誘導装置が標的へ向けて進路をつける。

瞬間、もう一度ブレーキをかけて一瞬だけつんのめるように速度を落とし、バンの後ろにもぐりこむように右にスライドして進路を一気に切り替える。

スローモーションだった視界が一気に元の速度を取り戻して、ミサイルは俺たちのすぐ左横を突き抜けて僅かな誘導の痕跡を残して後方の道路に突き刺さった。

背中を爆風の生暖かい風が撫でる、だが爆風の加害範囲は真後ろ、俺たちに危害を加える可能性は低い。

確かに生きた心地がしない、前足がくそ痛い、蹄鉄から嫌なにおいがした、でも生きてる!!ケツも背中も破片一つ当たってない。

3秒やったんだ、俺たちをしっかりと狙うために3秒くれてやったんだ、しっかりと狙ったのが敗因だテロリスト共。

この距離と相対速度なら直撃を避けさえすれば意外と何とかなる、誘導性能にも限度があるからな。親父さんの知り合いは、これを戦車相手にやったって聞いたぜ!!

「What!?!」

真後ろで起爆したミサイルの爆風を尻に感じながら加速、目を見開くテロリスト共のワンボックスに思いつきり寄せて並走する。

さあ、追い付いたぞテロリスト共。鞍上の雅孝さんが物干し竿を思いつきり振り上げるのを感じながら、運転席の兄ちゃんに笑ってやる。

「フリーズ!!」

物干し竿が振り下ろされてフロントガラスが輝だらけになる。瞬間、ワンボックスの挙動が一気に乱れて車内が阿鼻叫喚の声で満たさ

れた。

咄嗟にフロントガラスをたたき割って視界を確保する運転手のテロリスト、だがまだだ、まだ終わらんよ!!

さらに車間を寄せて、一気に加速。一気にそば付けして併走!!

「シット！モンスター!!!」

『いただき!!』

「もらい受ける!!」

ぐらつく車体にしがみつくので精一杯なテロリストの9K38に、雅孝さんは物干し竿を叩きつけて道路に弾き落す。

グラついたその隙を突いて俺もそいつが無防備にスリングで体に掛けていたPP-19ビゾンに噛み付いて思いつきり引っ張った。

咄嗟の短い抵抗を感じたが、馬に人間が勝てるわけないだろう？思いつきり首をひねってやれば、ほら、落ちちやうぞ？

テロリストが取り返そうと腕を伸ばしてくる。ダメじゃないか、そんな隙だらけだ！

『ビゾンも寄越せい!!』

テロリストが袈裟懸けにしていたPP-19もスリングから奪い取り、軽く放り投げてスリングに首を通してPP-19を首に掛ける。

ふむ、うまい具合に通ったな。こんなあぶないものはいけないなア、仕舞っちゃおうねえ。そんな場所無いけど。

「ぬうん!!」

ビゾンを奪って隙ができたところに雅孝さんが再び物押し竿を叩きつける、強烈な遠心力を伴って叩きつけられた物干し竿はワンボツクスの車体を面白いようにへこませる。

そのたびにとんでもなく車体が揺れるので中にいたテロリストたちは翻弄されてまともに反撃できない、反撃しようとしても無理だけどな。

その兆候があるたんびに、そいつを狙って物干し竿を車内に突っ込んで突き上げて黙らせるんだこの人。

それを狙って掴もうとしても無駄だよ、アーウエン撃つてた兄ちや

ん。掴んだら皮膚ごと持ってかれっから。

普段は優しい雅孝さんを怒らせちゃったらこうなる、昔は原付のひったくり相手にこれをやった。

酷かったぜ、あの時は。なんせ、原付に真正面から警棒叩きつけてつんのめらせて止めたんだよ。

「終わりだ」

雅孝さんがひと際は大きく物干し竿を振り上げて構えを取るのを背中から感じた、それに合わせて加速してちよっどいい前寄りの位置につける。

時速90ちよい、ワンボックスから左前方ちよつと前、いい位置だろ？

瞬間、大きな風切り音と風圧をもって横なぎに薙ぎ払われた物干し竿が、ワンボックスの正面下部を直撃して、車体前部を一気に押し沈めて前につんのめらせた。

車体が前につんのめり、回転しながら宙に浮いて縦のまま何回か転がって、やがて横転して火花を散らしながら滑走、近くの電柱が支えになるようにして止まる。

うわ、元々速度がやばかったからつんのめったら勝手に吹っ飛んだよ。

「ふう…タービン」

『おうよ』

だがこれで終わったとは思わない、軽い残身の後に構えを取り直した雅孝さんが合図すると同時に横転したワンボックスに向けてできる限り警戒しながら駆ける。

これで死んだかもしれないが、こういう奴らは得てしてしぶとい、どういうわけかしぶとい、だから確実にとっ捕まえる。

案の定、派手にクラッシュしたにもかかわらずせいぜい擦り傷くらいしかおつてないテロリスト共が二人、ワンボックスから転げ落ちるように出てきた。

咄嗟に俺たちに向けてマカロフとトカレフを向けてくるが、馬の足で一気に近づいた俺たちには反応が遅すぎる。

俺が何かする必要もない、雅孝さんが素早く二人を無力化して、器用にマカロフとトカレフを空中に弾き上げた。

雅孝さんがマカロフを掴んだのを見て、俺もトカレフをキャッチ。手っ取り早く無力化するためにマガジンを抜いて、薬室内の弾もスライドを引いて排莖。

初弾とマガジンはとりあえず道路の端に蹴っ飛ばして、鞍上の雅孝さんが取りやすいように軽く空中に放る。ナイスキャッチ。

おや、マカロフを持つてたのはアーウエンぶっ放してた奴か…よくもまあ派手にやってくれたもんだなあおい。

「フリーズ！」

アーウエンの奴にもうちよつと痛い目を見てもらおうかと思つてたところで雅孝さんが叫ぶ。

二人から遅れて車から転がり出てきた見覚えのないテロリストの女、おそらく逃走用の車両担当だったって所か。

手にはステアーTMP、マガジンは底部が砕けて破損してるが銃自体に破損がないから初弾は残ってるな。

破れかぶれで撃つて来るかもしれないからゆっくりと警戒しながら近づく。

他に運転手もいるはずだが…ああ、運転席で伸びてやがる。

「ドントムーヴ!!マイネームイズマサタカオニワ!!アイアムポリスマン!!」

目の前まで近づいて雅孝さんが物干し竿を彼女の首に向けて突き付けた瞬間、女は一瞬だけ達観した笑みを浮かべて物干し竿を払いのけ、俺に向けてTMPを投げつけてきた。

咄嗟にTMPを銜えて受け止め、隠しホルスターに持っていたらしい小型リボルバー、おそらくスミス&ウエッソンM40を抜いた女性の右手に目掛けて右前足で軽くアップパーを食らわせた。

俺の蹴りでリボルバーが真上に吹っ飛ぶのと同時に雅孝さんが弾かれた物干し竿を切り返して勢いよく側頭部をぶん殴って、テロリストの女を気絶させた。

「危なかったな」



『まったくだ、まだやる気だったのかよ』

TMPを排莖してから雅孝さんの放ってから落ちてきたM40を口でキャッチ、弾倉が出てくる左側を下にして、グリップ部分を噛んで下あごを前後させてラッチを操作しスイングアウト。

弾倉が出てきたら、エジエクターロッドを左足で押し弾倉から残弾を抜いて、雅孝さんのほうに放る。

「これで終わりかな？ まったく、この年になってこれは堪える」

『そう思いたいぜ』

こんなの普通の馬の仕事じゃねーや、前世も同じこと思ったな。まったく…

## 第36話

2006年6月24日、今年もじめじめとした6月の終盤、群馬競走馬トレーニングセンターの理事長室の応接間で現実逃避をしていた。

戦後日本にて初ケースといえる日本国内での他国首長暗殺事件、後に『群馬ドバイ首長暗殺未遂事件』として世界に記録される大事件は多くの被害をまき散らしながらも類稀なケースで幕を閉じた。

文面にすれば何のことはない。襲撃は失敗、実行犯は返り討ちで全員逮捕、それだけの話だ。

一般への情報開示もそのようになっており、あくまで現地の群馬県警と居合わせた職員が一丸となって反撃して返り討ちにしたと発表されて一躍世間を賑わせた。

それは間違いではない、事実である。しかしすべてを発表したわけではない。

その詳しい内容が国際犯罪界隈では評判のいい暗殺集団による綿密なテロであり、情報かく乱による綿密な前準備などもあって日本とアラブ双方の公安や諜報機関を欺いていたこと。

情報かく乱と事前工作によって手薄になったマクタム殿下の守りを見事に果たし、実行犯である暗殺集団と文字通り交戦して打ち勝ったのは群馬県警の警察隊と群馬地方競馬の警備員達、そして所属競走馬や職員たちであったこと。

そして逃走した主犯格を一網打尽にしたのが一番活躍したのが普段は交番勤務の制服警官とある競走馬であり、全力で逃走する実行犯たちの反撃をすべて掻い潜り派手なカーチェイスの末に全員を捕まえる大立ち回りだったこと。

このことをいち早く知った日本政府は当然困惑した、これは本当に事実なのかと、これは本当に現実なのかと。

群馬県警や現地職員たちが対応したのは間違いないにしてもいろいろ盛りに盛ってるんじゃないか？頼むからそうであってくれ今な

らただの冗談で笑えるからと願ったが現実是非情である。

だからこの事件の詳細は機密として厳重に封印されることになったのだ、余りにも荒唐無稽であるゆえに。

そして群馬県警や群馬地方競馬といった一番の功労者達もそれを望んだ、多少の褒章はうれしくてもそれ以上となると今後に差し障るのだ。

何より一時の過大評価による不相应な評価を引き摺ったらひどいことになる、こういうモノはあぶく銭として考えるのが一番だ、パツと使つてはいおしまいと終わらなほうがいい。

何より本件はそもそも一地方の抱える案件としては重すぎるし面倒臭い案件だ、そういうのは慣れてる奴らに振ってやるのが一番である。

よつて世間一般の認識では『群馬県警が大金星を挙げた』といった程度の認識で収まっている。

行儀の悪い記者や勘の良すぎる記者は何か裏があると勘づいているようだが、今のところは大人しい。

「んで、なんでまた来てるんですか、殿下」

もう終わったはずだった、殿下はすでにアラブのドバイへ帰り、残る問題はぶち壊された群馬競走馬トレーニングセンターの修理と代替要員の手配だけのはずだった。

幸いながら中央競馬の栗東トレーニングセンターとのつながりがあつたおかげで臨時の人員は確保、施設修理は長い付き合いの大工や施工業者を軸に募集をかけて目下再建中である。

群馬競走馬トレーニングセンターは施設に大きな被害を受け一部は焼失、職員に怪我人こそ出たが死傷者はなく所属競走馬たちにも影響は見られなかった。

さすがに直近のレースは全て延期になり、最近になつて高崎競馬場でのレースが再開されたがすべて元通りになつたわけではない。

これからすべて元通りにするところなのだ、すべて直ればもうあの鄙びた地方競走馬用トレーニングセンターとしてやり直せるはずだったのだ。

国と国のどーしようもないすったもんだは勝手にやつてると問題は丸投げだ、再建費用と給与補填と保証がされれば群馬地方競馬側は何も言わない。

何故なら群馬地方競馬に死人は出ていないし、金で解決しない不可逆な問題は残っていないからだ。

群馬地方競馬の競走馬たちは今やみんなタフで分別が付いている馬ばかり、むしろこれで無駄な自信すらついている。

襲撃された怪我をしたという程度で心を病むような新人はあの日には休みにしていたのでいなかった。

あの日、群馬トレセンで勤めていた職員たちは馬という猛獣を相手に中央に比べれば低賃金で日夜命を懸けて挑み鎬を削ってきた猛者たちばかり、多少荒っぽいことがあっても一晩寝れば大体元通りである。

あとは一般公開用の資料館に事件の資料や回収された武器の模型、装備のレプリカあたりを端っこにおいて少しだけ花になってもらうと手配したくらいだ。

広場にはこの事件で犠牲になった警官達の名を刻んだ慰霊碑を置いて、いつものお坊さんに頼んで供養しており今は立派な広場のモニュメントである。

故に、もうどうでもよかったのだ。もう馬狂いの顔を表に出したマクチーム殿下と顔を突き合わせるなんて二度とないと安心していただ。

現実には非情である、考え方が甘かった。

「うん、実は——」

「馬なら預かりませんよ」

「いや、そうではなくて招待状を——」

「授与式とかも行きませんよ」

「ならばせめてシマカゼを次のドバイミーティングに——」

「それはうちの管轄じゃありません」

「…貴様あ、私を誰だと——」

「いらぬから持って帰りなさいと言っているんだ王様、関わんな」

「君たちどうしてそんなに塩なの!？」

めんどくさいんだよアンタラ!!とはさすがに言えないので桜葉は内心罵倒する。

最近は良く出没するのだ、このマクチーム殿下、しかもご丁寧に完璧すぎるお忍びで。

目的はもちろん群馬地方競馬の技術とシマカゼタービンを筆頭に賢い馬たちである。

賢い馬たちは確かに他と比べれば賢いのでそりやそうだろうとは思いますが、技術に関しては否定しかできなかった。

なぜなら峠坂路を作った以外、特に特異なことをしている自覚なんてないのだから。ただやれることをいろいろしただけで

「この前も説明したでしょう、この件に関してうちのことは記録には残されませんが公表は控えさせていただきます」

「だから勲章とかは何もいらない、どうしてもというなら郵送で送ってくれって?」

「そういう事です、瀬名酒造のほうもそうでしょう?別にアラブの特産品詰め合わせでもいいですよ?というかそっちの方がみんな喜びます」

この件に関しての群馬地方競馬のスタンスは『ただの被害者』であり『善意の協力者』である。

決して凶行を阻み、英雄的活躍で事態を収拾した立役者などではない。

事件の詳細な資料は残されるが、表向きの報道では群馬地方競馬はあくまで解決に少し助力しただけとされる。

当然ながら、居合わせてしまったシマカゼタービンの一連の活躍も資料にはされるが後は保管室の深い闇の中に封印される手はずになっっているのだ。

実際黒歴史である、当人たちも当時のテンションが過ぎ去れば、あとは恥ずかしいやらやらかしたやらで忘れたがった。

少なくとも口に出すとシマカゼも雅孝も同じ渋い顔をする、思い出させませんなど。

「あくまで群馬県警の活躍による事件の解決、そうなる国の方で話が付いたはずでは？」

「いやしかしだね、やはり一番の功労馬と功労者に何も与えないなんて我がアラブの威信にかかわる」

「そんなもん誰も知らなきや無いと同じでしょ」

「だからなんでそんな塩なの!?今回は私達のミスだし、信用されないのは当然だけでも!!」

若いつていいなあ、健全つていいなあ、真面つていいなあ、思わず桜葉はそんな風に思つて優しいほっこりした気持ちになった。

こんな指導者を持つた国は幸せだ、まだまだ経験が足りないところはあるだろうけどもこういう人には得てしていい人材が集まるというモノだ。

「殿下、私たちは殿下たちを信用してないわけじゃないんです。それらにも理由はあつたんでしよう?うちらにや理解できませんが。」

ただ今回の件は表沙汰になったら面倒なんでうちもなかつたことにしたいんですよ、利害も一致してるんでそれに乗つただけです」

「なぜそんな風に袖にするんだい?」

え、なんでつて?そりやあこの自分がよく国というか行政というか権力者というクソつぷりを理解してるからだよ。

あとついでに黒歴史はやつた本人も普段は絶対に忘れていたい、無かつたことにしたいことだから。

「地方自治体と国の溝つてやつを舐めちやあいけませんよ」

まあ地方自治体にもクソみたいなのは山ほどいるからどっちもどっちだから苦労はお互い様だが、素直に同情できないのも事実である。

これでも最近の群馬はマシな方なのだ。戦国末期から飛び出してきたような昔気質のしつかりした若い男性が、しつかり県議会を運営しているので風通しは良いのである。

本人曰く育ての親である祖父に比べたらまったく才能がないと自分を卑下しているのだが。

「桜葉さん、目、怖!!」

おつといけない、ついつい闇があふれ出てしまったようだ。

「殿下、こちらが何で今回の事件でさつきと引つ込んだとお思いですか?」

「うん、それは分かっているよ。だが…」

「タービンはあいつの馬だが、一応はうちに所属してる競走馬だ。そんな風にあんたらが扱ったらメディアの格好の餌だよ。」

群馬地方競馬は競走馬を育成してるんじゃないやなくて軍馬を育成してるのか? つて大見出しになるでしょうな」

この日本における狂信的な軍事アレルギー、それは金を稼ぎたいメディアにとっては『書けば売れる』という絶好の稼ぎ頭だ。

何でもかんでも尾ひれはひれつけて書きなぐって、信じるかどうかは読者次第だと投げて、金だけかき集めてへらへらしている大手メディアの腐り切った編集部や記者たちの顔はよく覚えている。

腐ったミカンになった大人の姿、日本を代表するメディアのきれいな皮の腐った中身、まったくもって度し難い。

さらにああいふ連中はたとえ世間的に潰したとしても次が出てくる、次から次に、次から次にとキリがない。

瀬名茂三とその手の連中を相手ににらみ合う機会があったからこそ自信をもつて言えるのだ、相手にするほうがバカバカしい。

そういう連中には仲間なんていない、放っておけば勝手に共食いを始めて同類同士で潰しあうのだ。

腐り切った体液をまき散らして周りを汚染しながら取っ組み合うさまは見ているだけで目が腐るといふモノだ。

そんな連中に一生好き勝手されるくらいなら、平穏な日常を失うというなら、一生に一度の栄誉なんでもものは捨てたって惜しくないと言馬競馬も瀬名酒造も同じ思いだった。

「まさか、国の英雄だよ?」

「持て囃すより貶してバカにして笑いものにしたほうが金になるんですよ、この場合。だってそのほうが万人受けして売れる、嫌がるのは競馬関係者だけ」

「言わせておけばいいだろう? どうせ口だけ達者な週刊誌の戯言だ」  
「生憎、その戯言に乗っかって好き勝手する連中がこの日本では覇権を握ってたりするんでね。絡まれたらそれこそ面倒だ。」

しかもああいう連中には、お題目がすっかりすり替わってはき違えた解釈してるのに、全く理解しないで正義面してくるどうしようもない奴らがいる。

ああいうのは面倒ですよ、何しろ自分が見たい聞きたい都合のいい事しか理解する気がないからこっちはいくら説明しても無駄なんです。

筋が通ってない事だって声高に提言して、それを常識と道理で否定しても『それはそっちが間違ってるから無効、こっちは正しいから認めろ』って素で言う連中ですよ?。」

桜葉が心底うんざりした様に答えると、思い当たる節があったのかマクタム殿下は表情を渋くさせて言葉を詰まらせた。

文字にするだけでも明らかにイカレた連中だが、残念なことになんかあった生態系を持つ『人間もどき』とも言えそうな人種は世界各国にいる。

それこそ国境も、人種も、思想も何も隔てなく、必ず存在するのだ。しかも非常に面倒臭いというところまで一緒である。

普段は相いれない主義主張を提言する人間たちの間でも、その話題になると互いに話が合って同情するくらいには共通の敵だ。

実際、公営競馬なんてやっていると賭博を悪とした社会正義を気取ったイカレポンチを相手にすることはザラである。

そしてそういう連中の中でも手に負えない奴はとことん手に負えない、思考回路に互換性がなくて通じないのだ。

「うちもだいたいぶでかく顔が知られました、これ以上変に顔が売れたら今後の営業にも差し障ります。」

もし殿下の言うように国を挙げての式典を行うというのなら、それを最後に群馬地方競馬は畳まなければならんでしよう」

「…え、桜葉さん本気?。」

「いかに、一公営競馬のできる域をはるかに超えちゃってますから



ね」

苦肉の策だが致し方あるまい、これ以上は一地方競馬の手では御しきれない、ひどい暴走の末の破滅よりもきれいな有終の美を飾るべきだろう。

そのほうがのちの再建でも角が立たないし、今も尽力してくれている職員たちの経歴にも傷がつかない。

もしそうだったら瀬名酒造も店仕舞いであろうし、いつそ茂三と一緒にまたどこかの僻地でやり直すというのも悪くない。

（いや、むしろそのほうがいいかもしれない。何の取柄もない中年には、群馬地方競馬理事長の席は豪華になりすぎた）

思えばこの一年で遠くに来たものだ、思い付きでいろいろやってきたらどうしてだかこんな有様だ。

いつそ、自分の身の丈に合った一介の中間管理職として再出発、なんていう理想的な夢だ。

「…解せない、どうしてそんな風に拒むんだい。君達はまるで人間を信じてないみたいだ」

「ははは…道理ですな。こんな仕事をしてますと人間っていう本質とどうかどうしようもなさっていいのか…とにかく見えてくるもんです」

「だがそれあつての人間だ、違うかい？」

「さすがですな、殿下。若くして国のトップに上り詰めるだけあつて御強い。私はそういう風には見れんですよ」

自分は深く見過ぎた、耐えられもしないのに深入りした、その自覚はある。

まったくもって羨ましい、馬狂いだけど。こんなきれいな瞳をした為政者が日本のトップになればいろいろと変わるだろうか…いや無いな、桜葉はすぐに思い直した。

たとえマクターム殿下が良い為政者であつても周りが腐つてるので汚染されるかいいようにされるだけだ、むしろ彼が不幸になるのでアラブに生まれてくれてよかつたとすらいえる。

「とにかく、うちらはできることをしただけですわ、私なんて右往左往

してただけだしね。茂三もそう言ってたでしょう?」

「うん、瀬名さんどころか群馬県警にもそう言われたよ。仕事をしただけだからってね。だが：君たちは英雄として讃えられるべきだ、違うかい?」

自画自賛は好きではないが、キミたちはアラブ首長国連邦のトップを見事に守り切って、あまつさえ下手人を全員殺さずに捕縛した。

これを讃えずしてどうするというんだい? シマカゼと雅孝警部補を国賓として我が国に招待して勲章の授与式を行う、これのどこがいけないんだ」

「英雄ねえ…そりやすげーや、映画の中ならな」

いや、映画の中でもいずればそんな英雄が出てくるかもしれない。

桜葉は思わず、本気で鼻で笑ってしまった。英雄なんて飾られた日には自分たちは終わりだ、そう桜葉には直感でできた。

ましてや国が讃える『英雄』などという称号の薄っぺらいものを喜んで受け入れられるような夢を見てはいなかった。

都合のいいそんな称号は、都合のいい人材にしか与えられない。本当の英雄といわれる存在は、どこまで行ってもそういう権力者たちには目の上のたん瘤なのだから。

市販されている歴史書を紐解けばそれこそ素人にだってわかる。

ベトナム戦争を戦い抜いたアメリカの軍人は何と言われただろうか。軍人として戦い抜いた結果、祖国でどんな扱われ方をしたのだろうか。

アフガニスタンの戦いで生き抜いたソ連軍人たちはどうだっただろうか、ソ連崩壊後の彼らはどんな扱いを受けただろうか。

エルネスト・ゲバラの最後はどうだった、一国の首相にまで上り詰めたが最後はボリビアでゲリラとして死んだ。

かつて英雄だった西竹一はどうだ、今でこそ彼の人生は持ち直したが戦後の彼の人生はどこまで行っても苦難の連続であった。

世界にはそんな話をごまんとある、それこそ身近にだってある。

かつて中央競馬の一世を風靡した競走馬たちはどうだ、後継に恵まれずやがて諦められ、今やサンデーサイレンス一強の時代になりつつ

あった。

時代の流れだ、といわれればそうだろう。だが後ろを見てみると思  
うのだ、自分はこうはなりたくない、仲間をあはしたくない。

「そんな仰々しいもん、あいつらも鼻で笑うでしょう、自分には不釣り  
合いだとね、もともとそういう連中です。」

それこそ感謝状と一緒に勲章を宅配便で送ってやった方が喜びま  
すよ、きつと額縁に入れて大切に保管してくれるでしょうや」

身分相応で十分、身の丈に合った報酬をもらって身の丈に合った生  
活を、ちよつとしたボーナスでちよつとした贅沢ができたら大喜び、  
それでいいのだ。

「もしかして見てたのかい？」

「よく知ってますからね、想像がつく」

「うん、雅孝警部補のところにも行ってきたんだけどね。この話をし  
た時にすごい優しい顔で断られてね…」

「あの人も出世にや興味ない現場一筋人間ですからねえ」

瀬名茂三の同級生として、同じ芦名で育った桜葉は御庭雅孝という  
男がそれこそ学生時代から芦名の交番にいた事を覚えている。

自分が10代の時には交番のお巡りさんとして芦名市で活躍して  
いた、思い返すと彼もずいぶん長いこと現場にいたものだ。

現場主義で出世欲がなく常に地元に寄り添って職務に励んできた  
故に、出世の話が来なくとも全く気にも留めずに今まで仕事に取り組  
んできた。

そんな彼の持つまともな警察官像は清濁併せ呑む事を覚えるしか  
なかつた群馬県警上層部には眩しすぎた、故に敬遠されてもいた。酒  
の席で悲しそうに愚痴っていた先代県警本部長の顔は今も覚えてい  
る。

悲しいことに上層部にそう思われていたことを知らない雅孝はか  
なり上層部には好意的であった、ぶつかるとはあっても仕事はま  
とにもやっていた県警上層部を憎む理由が全くなかったのだ。

というか、この殿下は芦名の交番にまで顔を出していたのか。フツ  
トワーク軽いなおい、まあ驚かんが。

(フットワークが軽いと言えば茂三のヤツ、もう向こうにはついたんかねえ?)



京都競馬場は京都府京都市伏見区にある競馬場であり、日本中央競馬に属する競馬場の一つである。

その中に作られた馬房近くの関係者用駐車スペース、馬房に一番近くこの競馬場のレースに出る馬を輸送する馬運車が主に使う駐車場にその車は止まった。

年代物の古びた一頭乗せの馬運車で、中央ではもはや使っている場所はない旧式中の旧式。そこかしこにへこみや傷の後やそれを塗り直したり修復した箇所がある、年季が入ったなどというよりまさにオンボロといった風貌だ。

きつと白くてきれいだっただろう車体には擦れている文字で『瀬名酒造』と書かれており、どこかの厩舎が使っているというよりも別会社の業務車両といった方がふさわしい。

ましてやその車が止めた駐車スペースにいる馬たちの馬房は、翌日の宝塚記念を走る今年の日玉競走馬たちが寝泊まりしている馬房なのだ。

当然ながらそこを出入りする人も車も業界の有名所であり、車にもかなり気を使っている所ばかりである。そしてすでに競走馬たちは搬入を終えているはずで、この時期に馬運車が入るとすれば土壇場でのアクシデントによる出走回避が出たときしかない。

そんな話なら京都競馬場に勤めている者ならずぐに耳が入るのでそれがないとすれば、このギリギリでの馬の到着だ。

それゆえにその車はあまりにも悪目立ちしていて周囲から視線を集めていた、変なスケジュールを組んでギリギリでやってきた連中は一体どこの連中だ?

まさか不法侵入か？ここまで来るのに警備の検問が二つあるはずなのに？と警戒して足を止めた職員だったが、オンボロ馬運車のフロントガラスから見えるステッカーを見てすぐにその考えを改めた。

それはこの京都競馬場で行われるレースに参加する競走馬を輸送するためにあらかじめ発行され関係者に配られる通行許可証だ。

それがあるという事はあらかじめ出走予定の競走馬を積んだ馬運車であるという事で、途中の警備員達の検問も堂々と抜けることができる。

そのオンボロ馬運車の運転席から降りてくる男性が二人、一人は年季が入った作業服姿の瀬名茂三、もう一人は調教用の作業服を着た高知地方競馬に所属する古海騎手。

二人は居心地悪そうにしながらすぐに馬運車の後ろに回り、ドアを開けて馬運車から馬を引き出す。その馬を見て、周囲で観察していた職員たちはすぐに納得してむしろ同情した。

降りてきたのはハルウララ号、近年になって復帰した高知競馬のアイドル、そして最終調整中にテロに巻き込まれてしまった不幸なヤツ。

ちよつとしたチャレンジで宝塚記念に出走登録したら、同レースに出るディープリンパクトが強すぎて回避が相次いだので枠が空いて出られることになったという話は聞いていたのだ。

レース自体はその後の運営の努力のおかげで何とか普段通りの実力馬ぞろいの馬を揃えることができたが、それでハルウララ号陣営が出走を取り消すことはなかった。

正規に登録され、それで出走意志を示し続けているのならば運営がとやかく言う理由もない。

しかし実力が実力であった上、最終調整中であつた群馬競走馬トレーニングセンターでのひと悶着のせいで到着が遅れるとの話があつたので、このまま流れるのだろうかと誰もが思っていたのである。

しかし彼女たちは来た、前日入りというギリギリであるが来た、絶対に勝てなくても頑張るといふならば何も言うまい。

なぜならハルウララ号だから、彼女は走るだけで十分価値があるの

だから。

そんな周囲の温かい歓迎の雰囲気を用意に介す余裕もなく、物珍しそうに周囲を見回して嘆息した二人は一晚とはいえ世話になる立派な馬房や立派な施設を見回してお上りさんそのままの気分だった。

「茂三さん、来ちゃいましたね」

「やつと着いたぜ：まあ、夜にならなかつただけマシか」

本当ならばもっと早くにハルウララを京都競馬場に送らなければならなかつたのだが、今の群馬競走馬トレーニングセンターは絶賛人手および車両不足であつた。

その上、ハルウララの最終調整もマクターム殿下暗殺未遂事件という大ハプニングのせいで予定が狂いかなりずれ込んだのである。

その結果がこの前日入り、しかも早朝から高速道路を延々と走る長い旅、何とか夕方には着いたがそれも道中の渋滞でそれすらも怪しくなりそうな雰囲気であつた。

道中はハルウララには渋滞やサービスエリアなど目新しいものばかりで退屈しなかつた上、スピード違反ギリギリで茂三が馬運車をかっ飛ばすレースじみた運転で大はしゃぎし、むしろ元気になっているのが儲けものだろう。

「今回は本当にありがとうございます、ここまでご迷惑かけちゃつて」

「いいんだよ、ウララの面倒見てたのはうちのタービンなんだ。あの野郎が苦労すんのは当たり前だし、ついでだついで」

何を隠そう、この馬運車を長距離輸送できるまでに調整しなおしたのはシマカゼタービンである。

何分オンボロであるゆえにどこもかしこもガタがきていて、最近はおっぱら群馬トレセンと瀬名酒造の往復でしか出番がなかつた車だ。

その程度ならばこの車も十分使えたのだが群馬トレセンで起きた事件で状況が一変、群馬トレセンの馬運車がマクターム殿下暗殺未遂事件ですべて損傷してしまい、放っておけなかつた茂三は会社の馬運車を貸し出してフォローした。

瀬名酒造の社長という肩書で重要な仕事以外では暇な茂三も自ら

運転手を買って出て、車の整備にはシマカゼタービンが何かを忘れた  
い一心で取り組んだ。

しかしそれでも足りず、ハルウララの宝塚記念出走のための馬運車  
も運用ペースが崩れていて間に合わない、という事になってこれが  
引っ張り出された。

今頃、徹夜でこの馬運車を調整しなおしたシマカゼタービンは馬房  
で大騒をかいていることだろう。

なお茂三は運転手だったので昨日はたっぷり9時間睡眠である、運  
転手の仕事は過酷なのだ。

「それに俺も京都競馬場は久しぶりなんだ、観光がてら久々に中央の  
馬券を握ってみるのも悪くない」

どうせ帰りも自分が運転するのである、何が起きようが京都から高  
知まで、そして高知から群馬までの長い道のりを走るのだ。

このくらい息を抜いてもばちは当たらないだろう。

「というか、俺の方こそ謝らにやならん。昼過ぎの予定だったのに結  
局夕方になっちゃった」

「仕方ないですよ、事故で渋滞が起きてるなんて予想できません。  
まあ、なるようにしかならんでしょう」

「フヒーン！フイフヒーン!!」

「ほら、ウララも大丈夫って言ってますよ」

「そうか、そう言ってくれると助かるぜ。明日は頑張れよ、期待してる  
ぜ」

「フヒーン!!」

「いい返事だ。古海さん、気合いで負けんなよ?」

「ええ、忘れてませんとも。あ、こらウララそっちじゃないって」

元氣よく『任せてー!』と鼻を鳴らしたハルウララは、当たり前の様  
に馬運車に戻ろうとして古海が咄嗟に手綱を引っ張って止める。

なんで?と不思議そうにキョトンとするハルウララに、古海はすっ  
かり肩の力が抜けたようにため息をついて馬房のほうを指差した。

「ふひん?・フヒイーン?」

「ウララ、お前はこっち、今夜はここで泊まるんだ」

「ヒヒイイイン？ヒヒン!!」

「お、やつぱ気付くか。そうとも、あいつもいるぜ」

「あ、こら、まったく…じゃ、また帰りに」

「ヒヒン！」

ここが今日のお宿ならば話は早い、とばかりに馬房に向かおうとするハルウララ。

それを呆れた顔で手綱を引いて押さえ、茂三に向かって軽く頭を下げる古海。それをマネして頭を下げるハルウララ。

いいからいいから、はよいけはよいけと手ぶりで茂三が示すと、古海はハルウララを引いて馬房の中へと入っていった。

「やれやれ、渋滞があつたとはいえ高速であんまり稼げなかつたのはやはり響いたな…もうちよつと自信あつたんだがなあ…」

馬房の中に消えた古海とハルウララを見送つて馬運車に背中を預け、茂三はそれを見上げながら独り言ちる。

今日は全力で先を急いだはずだ、しかし思い返すと改善点や昔ならばしなかつたミスがいろいろと出てくる。

高速道路でタイムアタックなどはしない茂三であつたが、テクニクという面ではいくつもふがいないと感じる所があつた。

シマカゼタービンの整備にはまだ改善点こそあるが、この馬運車の今のポテンシャルを最大限引き出していたのでこれは自分のミスである。

やれやれ、年は取りたくないもんだ。そう思いながら空を見上げる、競馬場の敷地の外に見えるビルの上に少し嫌な黒い色をした雲が見えた。

「こりゃ明日は雨になりそうだな」

じめじめした暑い空気、ぐちやぐちな地面、濡れて滑って重たい芝、そして無駄に強くてヤバイ馬。

ハルウララのほうはたいして気負いはしていない、騎手の古海は若干緊張気味ではあつたが過敏になつていいる所もなかつた。

最後までシマカゼタービンに群馬トレセンの峠コースで体も心も鍛え上げられたのに疲れも見せない、なかなか目を見張るポテンシャ



ルである。

「もしかしたら、もしかしたらがあるかもしれないねえぞ？なあ、てめえが教えたんだからよ」

明日はなかなか波乱のレースになりそうだ、そうでなくっちゃ面白くない。

「久々にワクワクするな」

久しく感じていなかった高揚感だった。若い時はこの高揚感に身を任せて、この熱狂の中で声を上げて応援して、そして一喜一憂した。

久々だ、本当に久々だ、湧き起こるワクワクとしたこの感覚が、何が起こるか分からない競馬が本当にたまらなかったんだ。

忘れたことはなかった、この輝かしい熱を帯びた日々を懐かしく思わない日はなかった。

明日のレースが楽しみだ、茂三は久方ぶりに若返ったような気持ちでクスリと微笑んだ。

## 第37話

2006年6月25日、日本国、京都、京都府、京都競馬場。

既に正午を過ぎ、目玉の第1レースが迫る頃合い、京都競馬場は  
今年の動員数を超える大盛況であった。

(うへえ…なんつー混み方だ。しかも随分顔触れが変わったもんだ  
ねえ)

その馬券売り場の片隅、かつて自分が好んでいななお残っていた  
雨に濡れて座れないお気に入りのお古のベンチ横で馬券売り場のサイ  
ネージを眺めていた茂三はどんどん込み合う周囲の状況に内心呆れ  
かえっていた。

時代は変わろうとも、顔ぶれがいかにも変わろうとも、やはり中央競  
馬のGIとなれば人々の熱気はいつも変わらず燃え上がる。

自分の世代でも熱気の質は凄まじいモノで、若いのも年配もみんな  
して競馬場にくる人間は齧りついてレースに釘付けになった。

この時代になってさらにファミリーやライト層なども取り込んで  
さらに人の熱気は膨れ上がっており、さらに言えば今期は海外からの  
目も増えているのだ。

その上で今回の目玉である第1レースの『第47回宝塚記念』は、  
日本中央競馬の新しい伝説であるデイーパインパクトが次に走る予  
定の凱旋門賞に旅立つ最後のレースとなる。

日本中央競馬クラシック3冠馬、今季日本中央競馬の粋を集めた最  
強が、日本競馬の長年の夢に挑むのだ。

その前段階、今のデイーパインパクトの実力を見るにふさわしい大  
舞台である。注目を浴びる大レースとなれば人も多くなるというも  
のだ。

『1枠1番          リンカーン

2枠2番          ハルウララ

3 枠3番            アイホツパー  
4 枠4番            ダイワメジャー  
4 枠5番            ハットトリック  
5 枠6番            コスモバルク  
5 枠7番            ナリタセンチュリー  
6 枠8番            デイープインパクト  
6 枠9番            カンパニー  
7 枠10番          シルクフェイマス  
7 枠11番          ファストタテヤマ  
8 枠12番          チャクラ  
8 枠13番          トウカイカムカム    』

出てきている馬も歴戦の粒ぞろい、そして世間を賑わす人気馬ばかり、これで熱くならない競馬ファンはいないだろう。

とはいえ、このデイープインパクトのせいで宝塚記念運営は大変な苦勞をしたというのはご愛敬だ。

小泉から愚痴交じりに聞いた話では、この列強陣営でさえ最初は回避しようとしていたらしい。

（久々過ぎて人酔いしそうだが、こりやパドックよりも先に席取るか）  
そうと決まれば話は早い、まずは売店で飲み物と暇つぶし用の新聞を買おう。いつもの売店はまだやってるだろうか。

目の前を通っていくヨーロッパ系白人たちの一団を避けながら茂三は歩きなれた道を歩いて、周囲を散策しながらかつて行きつけであった売店に足を向ける。

人ごみの多い好立地な場所から少し離れた従業員通路に近い所にある売店は昔と変わらずきれいな姿でそこにあった。

古びた駅の売店のような小屋スタイルで昔と変わらず様々な出版社の競馬新聞が無造作に売り場に突き刺さっている。

その中にはお婆さんがのんびりと商品を補充しており、今も空になったガムの箱を引っ込めている所だった。

「お婆さん、今大丈夫かい？」

「少しお待ちをっ」と

カウンターの足元に置いていたらしい新しいガムの紙箱を持ち上げて売り場に設置したお婆さんが顔を上げる。

するとどういいうわけか、目を真ん丸く広げて驚いたように声を上げた。

「おや、なんだい!?!あんたもしかして茂三かい!!」

「ん?なんで俺の名前を…どこかであったか?」

「馬鹿、あたしだよ!この売店といえばこのあたしき、覚えてないのかい!」

なんだこのなれなれしい元気な婆ちゃんは…といぶかしがる茂三だったが、その姿に見覚えがあつて脳裏にかつて自分が競馬にめり込んでいた若い日を思い出した。

そういえば京都競馬場によく来ていたころ、この売店の店員はいつも同じ女性だったような…いやそうだった、いつも同じ元気なお婆ちゃんだった。

そう思いだして茂三はまじまじと売店のお婆さんを見つめる。そういえば、よくよく見るとそのお婆ちゃんの面影がそのお婆あちゃんにはあつた。

「…え、まさか売店のお婆ちゃんか!?!あんたまだやつてたのかよ!!」

「当たり前さあ! この売店はあたしの城、死ぬかこの競馬場がなくなるまであたしやここにいろよ。」

なんだいなんだい? 急に姿見なくなつたと思つたらひよっこりと来ちやつてき、急にどうしたの?」

噂じゃ、あんたツインターボ追っかけて地方競馬に河岸変えたつて聞いたけど?」

「なんだよ、知ってんじやねえか。ま、俺も年喰つたからよ、地元でドラダラすんのがお似合いだと思つてな」

「馬鹿なこと言うんじゃないよ、あたしまで歳考えちゃうじやないのさ。で?その年寄りがなんだつてまた京都に?」

「ちよつと縁があつてな。これ終わるまで暇だから久々に観戦しようと思つてね」

「宝塚かい？なんだい、じゃああんた馬主になつたつてのホントだったのかい。偉くなつたもんだねえ」

「俺の馬じゃねえよ、俺が運ぶ馬が出てるんだよ。ただの運転手さ、それよりいつものあるか？」

「それでも結構じゃないか、おまんま食い上げになんないだけでさ。ちよつとまつてな…はい、いつもの」

売店のお婆さん改めおばちゃんは間髪入れずに茂三の前に麦茶のペットボトルとあたりめ、そして京都競馬場の競馬新聞を差し出す。

若いころ、この京都競馬場に来るときはいつも買っていたお決まりのセツトだ。

昔はペットボトルではなかったがこれも時代だろう。

「まいったな、覚えてんのかよ。懐かしすぎんぜ」

「婆の脳みそ舐めんじやないよ、あんたほど綺麗な博打打ちはあの時は珍しかったんだ。嫌でも忘れないね」

「馬鹿言え、博打打ちにキレイも何もあるもんか」

「時代さね、今はともかくあの時代はあんたみたいなのは少なかったよ。いつも買うのは一口だけ、いつも単勝勝負。」

しかも酒は飲まない煙草も吸わない。勝つても負けてもオケラにならないで楽しそうにしているようなやつはあんたくらいしか記憶にないね。そんで？今日はどいつに賭けるのさ？」

「ん？ウララに単勝、一万」

「ほっほー？ハルウララ、確か八番人気だったかねえ？こりやまた面白い張り方したもんだ。しかし一万なんて大盤振る舞いだね、いつも千円だったろ」

「宝塚しか賭けてないからな、それとちよつとした応援だよ。しかし八番人気？」

ハルウララが八番人気？一瞬茂三は耳を疑った。あのハルウララである、今も未勝利のハルウララである、ダート競走馬で芝初挑戦のハルウララである。

それが13頭立ての内で八番人気、つまり中央競馬の芝の猛者たちを差し置いて人気があるという事だ。妙に高くないか？

「随分高いな」

「そりやそうさ、ほら」

売店のおぼちゃんが顎をしゃくる、その先には競馬場には少々不釣り合いな親子連れ。

長くポリユーマーなツイントールを揺らした女の子を連れた特徴のない男性と私服の上に白衣を重ね着した茶髪の女性。

昔は競馬場と言えば子供連れで入るのは勇気のいる場所だったはずだが、今は完全に時代が変わったという事か。

というか何で奥さんは白衣を着ているのだろうか？しかも袖が余っていないか？

「ママ、なんでウララちゃんは1番じゃないの？みんな応援しに来てるのに」

「うーん、それは難しい問題だねえ。ハルウララはこのコースで走るのは初めてだからかな？」

「でもみんな応援してくれてるよ！私の前のおじさんも1枚買ったもん！！」

「うーん…パパ？」

「光…そうだね。朱美、残念だけどそれでも人気じゃ8番目になっちゃったんだ、やっぱりみんな強いお馬さんばかりだからね」

「でもウララちゃんもいっぱい頑張ってたもん、100回もかけっこしてるもん…」

「そう、でも忘れてないかい？さっきのは人気であって結果じゃないんだぞ。かけっこだとわからない。」

「どうだろう？朱美はかけっこの時、応援してくれる人が居たらどう思うかな？」

「がんばって1番！」

「そう！いっぱい応援すればウララちゃんは1番になれるよ、だから大丈夫」

「わかった、じゃあいっぱいおうえんする！！」

何とも微笑ましい家族の温かい団らんである。同じころの敏則はちよつとませてたつけなあ、と思わず過去が懐かしくなった。

「なるほど、みんな買ってるのか」

「そういう事さ、いつもここらを屯してるとどうしようもない連中すら一口乗ってる。なんだかんだでみんなウララちゃんのことには応援してんのさ」

おそろく宝塚記念に賭ける人々は本命のほかには必ずハルウララを一枚合わせて買っている人間が多いのだろう。

いわゆる応援馬券というモノだ、それならば納得がいく。一枚一枚は小さくても数が数だ、それ相応の人気にはなるだろう。

それでも50倍ほどなので望み薄といったところであるが。

「そういや神憑りもウララちゃんにぶち込んでたねえ、相方にどつかれてへらへらしてたよ」

「げっ…あいつも来てんのかよ、というかまだやってんのか？」

神憑りの勝負師とは茂三がまだ若く中央競馬に出入りしていた時によく聞いたある賭け事好きな外国人の通り名だった。

世界を股に掛ける中規模貿易企業のトップで、本社である貿易船で世界中を行ったり来たりしてはその場その場で本人曰く『軽いギャンブル』で遊ぶという。

そのやり方というのが問題で、ふらつと賭場に現れては少し品定めした後ポンとそれなりにデカイ賭けをして当たりを引くというのだ。

曰く、彼の挑む勝負はよく当たる。賭け事も仕事でも神憑りのな成功率を誇ると評判だった。

茂三も2度ほど顔を合わせたことはあるが、妙な求心力を感じるどうにも胡散臭い男だった。

ついでに言えば相方の小柄な白人のほうはいろいろ危うそうにも見えたが…まあ今なお健在ならどうってことないのだろう。

「確か五十万ポンとやったとか聞いたねえ、オッズカードみんなに配るんだとか言ってるさ、どっさり抱えてたよ」

「うへ、相変わらず微妙にデカイ額でやりやがる」

「ま、あいつがそう賭けるってことは何かピンと来たんだろうねえ…なあ？ハルウララの運転手さん？」

「あんたがまだいるってことはもしかしたらと思ったが…やつぱ知っ

てたか」

茂三がわざわざこの売店に来た理由は一つだけ、情報収集である。この売店は京都競馬場の従業員や関係者が多く通る通用口に近いのでお客は競馬観戦者だけでなく従業員や競馬関係者たちも多く来る。

故に京都競馬場の各所に顔が売れて交友関係を広く持てることに加え、軽い小話から引き出したちよつとした情報から何気ない雑談の盗み聞きまで広く浅く色々な小話を仕入れやすいのだ。

故に茂三が若い時にいたこのおばちゃんは、知る人ぞ知るちよつとした情報屋として有名だった。

最新の発表や競馬新聞などの情報には載らないちよつとした機微、新鮮な情報をここで仕入れることができたのだ。

故におばちゃんは知っている、茂三がハルウララを連れてきた馬運車の運転手だったことを。今まであえて軽く振舞っていたのはちよつとしたお茶目と探りといったところか。

「実際のところどうなんだい？噂の群馬競馬で仕上げたウララちゃんのほどつての、あの男がピンとくるようなものかい？」

「さーてね、やるだけやったのは確かだが勝負はしてみんとわからんよ」

「冷たいこと言わんでくれよ、今日の宝塚は面白くねえんだ。バルク以外、あんまやる気なくてねえ」

「ふうん？」

言われてみればそうだろう、元からやる気があった陣営以外はこの宝塚は回避しようとしていたはずだ。

ましてやこの空模様、しとしとと降り続ける雨でレース場の芝はぐちやぐちやでかなり重くなっているだろう。

この状態は今後フランスに飛ぶ予定のデューピンパクトには洋芝の予行演習として願ってもないチャンスであろうが他の陣営からしたら願い下げな極悪状況だ。

そんな状態で日本中央競馬最強のデューピンパクト相手に戦えというのだ、それも自分が負けるとわかっていて。



勝負してやると意気込んで負けるならばいい、それはそれで納得ができる。だが勝負にならないと避けようとしていたのに、それを引き留められたとなればやる気なんてない。

つまりは無理をして勝ちに行くつもりはない連中が多い、そんな状態でディープインパクトを止められるモノか。

「ま、怪我しないように走ってなあなあで終わらせても誰も怒ったりしないさ。」

事情通はそこんとこ知ってるし、ニワカ連中はディープが勝つことしか見えてないしね」

「そこはどうでもいいんだが…ほかの連中も頑張れば行けると思うんだがな」

「そうか、あんた興味ないのはとことんだったねえ。今の中央はディープインパクト一強っていう派閥が強いのだ。」

絶対王者ディープインパクトが出るレースはディープインパクトが勝つのが常識、そう考えてるそういう風潮を作りたいって連中ばかりさ」

「そんなのよくある話じゃねえか、上も万々歳だろ？」

「問題はそうしなかった上層部が思ったよりヒートアップしてるってことだよ。実のところ、制御できてないって噂さ。」

何しろその絶対王者に競り合えると思われてる競走馬は中央にやからうじてハーツクライが上がるくらい、他の連中の姿勢もこの宝塚で知れた。

あいつには真つ当に中央にライバルと呼べる存在がない、常勝無敗の帝王様が走れば勝ち目がないと避けられちまう」

「マルゼンスキーの再来とでも？言い過ぎだろ」

「それよりひどいさ、あの時は隔絶し過ぎでいい方向に転んだが今回は違う。」

ハーツクライだって海外路線続行で、ディープインパクトとかち合うかどうかはまだ不透明、今はイギリスだ」

ハーツクライはイギリスのGI『キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス』に挑戦するために今もイギリスにいる。

そういえば出立前に相変わらずシマカゼタービンに挑んできて、模擬レースでボロボロに負けていた。乗っていたのは自分である。

「一番の難敵って言われてんのはあんたん所の群馬の3強、言っとくけどこれだって頭痛いんだよ。」

そいつらに勝ち星あんののはデープだけ、他の連中は惜しいが格落ちって認識さ」

「そうだな…まあハルウララならこんな雨、何とも思わんだろうよ。」

「ほほう？そりやまたなんでだい」

「こんな雨、ウララなら何度も経験してる。今更ビビるようなもんじゃねえのさ」

「へえ、じゃあウララが勝つ目はあるってのかい？未勝利地方競走馬の彼女が？」

そこは何ともいえねえな、茂三は素直にそう思っただけで顔を横に振った。どう逆立ちしてもハルウララは才能豊かなほうではない。生まれ持った才能、恵まれた育成環境、そしてそれを手にする強運、それらを兼ね備えた日本中央競馬に属する競走馬には逆立ちしても敵わない。

宝塚記念に出走する中央競馬の才能豊かで最高の調教を受けてきたエリートたちに勝てる所はただ一つ、経験だけだ。

宝塚記念に出走する競走馬たちの中で、ハルウララにあつてほかの馬にはないものは通算100戦以上という出走経験に他ならない。

たとえばそれが未勝利戦や条件戦で地方競馬という格落ちと称される場所であろうともそれはまぎれもない実戦だ、その中で地道に走り続けてきた彼女はまごうことなき百戦錬磨のベテランに他ならない。

あとはそれをどう生かせるか、どう使うか、それは彼女とその相棒にゆだねられる。結局のところ、勝つも負けるも、やってみなければわからない。

彼女の実力は重ねてきた経験にこそあると見たタービンは、それに体がついて行けるように入れ知恵していたが今のところは勝利には結びついていないのが未知数という事に拍車をかけている。

群馬地方競馬で過ごしていた時は本番レースや就寝などといった

時を除いて常に重りを巻いて暮らし、調教の時も外さずに行って日常的に体に負荷をかけて体を高負荷に耐えうるよう鍛え上げた。

彼女の性格に合わせて、複数の練習メニューを用意して飽きないうちに次々とメニューをこなして量を補う高回転ローテーションでやってきた。

だから現在の高崎競馬場ではある程度通用したのだが、それが芝で通用するかはわからない。

体が慣れたら重りを増やして負荷を上げるアップグレードを重ねていたのでそれなりにはなっているはずだが、生まれ持った小柄な体軀で見栄えはさほど変わらなかったのを見た目では判断し辛い所だ。

しかし、それでも確実に前よりも実力は付けてきている。タービンの目は間違いではなく、鍛えれば鍛えるほどに彼女の動きは良くなっていた。

勝てるかといわれれば十中八九勝てない、それが常識的な見方だし茂三自身もそう思っている。

「やってみないとわからんさ、勝負は時の運だろ？」

「はッ：変わんなくて安心したよ。相変わらず楽しんでるじゃないか」

「そりやそうさ、せつかく買ったんだから楽しむよ」

「ホント、昔っから変わらんわ」

しかし自慢の愛馬が手塩にかけた馬なのだ、ならば迷う事なんてありはしない。

ハルウララには勝機がある、勝負に絶対はないとしても試す価値は十分にある。

例え勝算が一割に満たなくても勝算は0ではないのだ、たとえそれが小数点以下の確率であっても賭けるには十分すぎる。

「うちも貯金全部突っ込んでみようかね？」

「おい馬鹿やめろ」

「冗談さ」



雨が徐々に強くなっている気がした、リンカーンの鞍上に腰を落ち着けるその騎手は憂鬱な気分を隠しもせず、ふと頭上を見上げてそう思った。

京都競馬場、芝コース、宝塚記念出走間際でありながら騎手の気分は陰鬱でしかなかった。

本当ならばこのレースには出る気はなかった、馬主もそれは納得していたのだ。

この夏はとにかく体を崩さないように放牧とその後の調教により仕上げに専念し、デイープリンパクトの帰国後の一戦に向けて鍛え上げる。

本当の勝負は年末の有馬記念、そこで宿敵のデイープリンパクトを待ち構えるのだ。そう決めていたはずなのだ。

それは他の陣営も同じ考えだったのだろう、デイープリンパクトと鎬を削った競走馬の馬主は勝負所を下半期の大勝負に絞って、宝塚記念には食指を伸ばしていなかった。

それがまずかった、デイープリンパクトがフランスへ旅立つ前の最後の一戦として宝塚記念への出走を表明したとき、この宝塚記念への優先出走権を持っていた強豪たちはほぼ不参加の方針だった。

余りに変な状況なのでリンカーンの騎手も自分なりに少し調べたのだが、それで知ってしまった現実には知らなきやよかったと後悔したほどだ。

グランプリである宝塚記念の目玉である人気投票において、堂々一位のデイープリンパクト以外の馬が出走を回避していた。それ以外の強豪たちでさえも。

そこから迷走が始まった、順当に宝塚記念出走の機会が回ってきた中堅どころもその異常事態を敏感に察知、相手がデイープリンパクトでありかつ上位層が軒並み回避という情報を経て『これ、やばい?』と思われるてしまい出走拒否。

最終的にお鉢が回ってきた面子も『うちが？あり得ない』笑って拒否するくらいに警戒され、ただただデイーパインパクトの独り相撲に付き合うのを嫌がられて数がそろわないという異常事態になった。

名誉ある宝塚記念出走権はその名誉を認められたまま腫れもの扱いでたらい回しになり、出走してもいいという話が来てもそれは中央競馬でも重賞にもまず出られない実力不足の競走馬ばかり。

出走拒否祭りの初期段階で正式に出走権に巡り合ったハルウララほどの知名度さえあればそれでいいのかもしれない、もしくは少し足りないから数合わせ的にならまだ許されただろう。

しかし仮にそれを認めた場合、デイーパインパクトに勝ち目がある馬は最初から出走表明を上げていた強豪はコスモバルクのみ。

他の馬がGⅢも危うい様な大舞台にそぐわない馬ばかりとなれば、それは最悪デイーパインパクト陣営の裏工作すら疑われかねない。

だからこそ、この大舞台に似合う実力者たちが絶対に必要であった。

その結果が宝塚記念運営の全国土下座巡業であった、まったくもって笑えない話である。

「困っちゃうよなあ…理解できちゃうからなあ…」

結局その土下座行脚に多くの陣営が折れ、絶対に無理をさせないという条件付きで2006年の宝塚記念の出走メンバーは出そろったのである。

相変わらず雨が強い、こんな状況で走れというのだからやる気も何もないというモノだ。もう相棒を無事に走らせることしか意味がない。

「フランスフンス!!」

「くら」

こちらの憂鬱な気分など知る由もなく、今度こそ勝つてやると鼻息荒くデイーパインパクトに闘志をぶつけるリンカーン。

それは他の馬たちも同じなようで、デイーパインパクトに向けられるほかの出走馬たちからの視線は熱いものが多い。

しかし悲しいかな、その上に乗っている騎手や陣営は勝利を求めて

おらずただの威力偵察程度の認識である。

乗っている騎手の表情には勝負つ気はなく、むしろ周囲をそれとなく見回して情報収集にいそんでいる状況だ。

今のディープリンパクトにはまだ勝てないと理解しているからだ、無理に出てきたのだから多少は活用しないと腹の虫がおさまらないといったところだろうか。

「よしよし」

そんなリンカーンの首を軽くたたき騎手もまた、今回の宝塚記念は最初から捨てている一人である。

今はまだリンカーンでは勝てない、だから今回は今のディープリンパクトの実力を肌身感じて糧とする。

それをもって自分たちの戦術的勝利としよう、でも2着は頂こうどうせなら。

そんな風に考えていると不意に、後ろから不思議な足音が聞こえてきた。

ギユピツ…ギユピツ…ギユピツ…ギユピツ…

(ん？なんだこの足音、まるで芝が擦れているような…)

ギユピツ…ギユピツ…ギユピツ…ギユピツ…!!

(!?)

スツ…と背中に冷たいものが走った気がした。まるで真後ろに馬ではない何かがいるような呼吸音、そして異様なほど力強い足音と威圧感。

背後から感じる途方もない威圧感に、思わずリンカーンと一緒に後ろを振り返って息を呑んだ。

そこにいたのは小柄な牝馬と地方騎手、ハルウララと古海であった。

「ウララ、お前変な音だして遊ぶなよ。中央の芝がすごいのは分かるけどさあ」

「ふっひひくん♪」

なんだその筋肉は、なんだその足使いは、自分の記憶の中にあるハルウララとは乖離した力強過ぎる足使いに思わずじつと見つめてし

まった。

妙な音を立てながら芝に適度に減り込ませる緻密な操作性、それを可能にする馬自身の力加減と知能、それを実に楽しそうに行う表情の豊かさ。

そしてそんな行動に困った顔をしながらも否定せず寄り添う騎手との信頼関係、なんだこいつら？これがあのハルウララと地方のどこにでもいる騎手か？

(なんだよ、なんなんだよここ最近の地方は…何かおかしくなってるじゃねえのか?)

自分の中にあつた地方競馬に対する認識はどうに崩れ去つていたが、それでも長年心に沁みついてきた『格下』という風潮は中央競馬の中では根強い。

群馬地方競馬が去年から頭一つ抜けた実力を発揮し始めたのはもう否定できないが、それでもほかの競馬場を見れば格下であるとは何か精神の均衡を保たせている状態だ。

群馬地方競馬の躍進に影響されたのか、どこの地方競馬も徐々に手強くなってきているので現実はそう甘くはないのは自分もよく知っているのだが。

しかしここにきて高知競馬のハルウララ、別の意味での伝説がこうして蘇ってきた。見るからに鍛え上げてきた状態だ。

「ひひん？」

「あ…あーもう、お騒がせしてすみません。ほら、あっちいくぞあっち」

リンカーンと自分がじつとガン見していることに気付いた古海が、少し気まずそうに愛想笑いを浮かべてハルウララを人目に付かない端に移動させる。

その背中に思わず安堵している自分に心底腹が立った。

(な、なんだったんだあのゾワツとする威圧感…本当にハルウララなのか？くそ、気圧されたなんてなんて情けない)

近くで見たからこそわかる違和感、それに思わず身震いした。ハルウララは見た目こそ変わらない、体重は重くなっているようだが許容

範囲内だった。

だが走る前になって明らかに違う、他の馬たちと違う何かがあるように見えた。小柄な体軀で見た目こそほとんど変わらないが、このレース直前になってその異様さがはつきりと分かった。

体の出来上がり方が違う、小柄な体軀の裏には限界まで鍛え上げたであろう筋肉が今にもハジケそうにみっちりとしているようだ。

自分たちの目の前を通り過ぎていく彼女と古海は気負った様子もなく足を鳴らしている、どうやらさっきの音は踏み込みを試している音だったようだ。

(しかし…なんなんだありやあ、ニツポータイオーの亡霊か?)

「フヒヒン…」

「…あ、てめー」

なお、相棒の目がとてつもなく魅力的な存在を目にした色になっていたのに気づいて何ともげんなりした。

ちちゃんと場をわきまえているのであろうがそっちかよお前…



## 第38話

彼女との出会いは十年も前のことだった。ふと出走直前のゲートの中で、ハルウララの鞍上で古海は思い出した。

8年前、1998年11月17日、高知競馬で行われた何の変哲もない新馬戦。その敗北から結ばれ、主戦騎手を離れてもなお繋がっていた腐れ縁だ。

何の因果か、どんな神の気まぐれか、巡り巡って手に入れてしまった夢の舞台に立ちながら古海はとても落ち着いていた。

何度夢見ただろう、なんと待ち望んだだろう、騎手であるならば非でも立ってみたいG1グランプリ『第47回・宝塚記念』に今まさに一人の騎手として走ろうというのに。

雨がひどくなってきた、風も吹いてきている、いつもならこんな天気は嫌だっただろう、陰鬱な溜息の一つもついたらだろう。

ずっと競馬場で走ってきたからわかる、この風の方角だと最後の直線はきつと地獄の向かい風だ。

いつもならとことん嫌になる最悪の状況だ、ひどい雨と強い向かい風は年のせいでガタが来た上、キツイ減量をした体には堪える。

だが今はそんな気持ちは一切ない、不思議な気持ちだった。あるのは心地よい高揚感、胸を焦がす勝利への渴望、そしてそれを抑えて向きを定める冷静な理性。

現実味がなく浮ついているのではない、地に足を付けた一人の騎手として古海はこの宝塚記念で勝つために覚悟を決めてここにいる。

自分たちが勝つのだ、この宝塚記念で一番になるのはこの古海とハルウララなのだ、そのために今日までずっと努力してきたのだから。

そうと決めてしまえば何を恐れることがあるものか、何を浮つく必要があるものか。

「なあ、俺は騎手をやめるつもりだったんだ」

小さく独り言ちる、どんな偶然があったのか、どんなめぐりあわせ

があつてこんなことになつたのか、きつと誰にもわからない。

自分の記憶にある彼女は弱かつた、デビュー戦で負け、未勝利戦で負け、それから短いスパンでレースに出続けては負け続け、自分が主戦から外れてもなお負け続けた。

自分が主戦騎手を離れた後も負けに負け続けて、それを自分にはなんとなく気にかかつてずっと見守つて、気付けば彼女と関わつてきた騎手や厩務員たちの中にいた。

そして負けに負け続けてなお走る姿がクローズアップされていつしか『負け組の星』とすら呼ばれるようになって、それを自分や厩務員、担当調教師は齒噛みしつつも納得するしかなかつた。

勝つことがほめたたえられるはずの競馬の中で、負けて褒められるなんてことは、それがどれだけ好意的なことであれ屈辱であつた。

どれだけ後世において功績を認められようが、彼女のおかげで高知競馬が存亡の危機を救われたと讃えられようが、彼女は肝心のレースで一度も勝っていない。

そうだ、自分はある時悔しかつたのだ。今度こそ勝たせてやろうと息卷いたじゃないか。今度こそ勝たせてみんなをあつと言わせてやろうじゃないかと。

なのにそれをいつしか忘れてしまつていた。いつしかそんな声にも慣れて、ウララの体に配慮した調教しなくなりなつて。

それをハルウララのためだという言い訳を信じ込んで、それに縋つて目を背けてきた。

これは自分を今まで一端の地方騎手として走らせてくれた、高知競馬への最後の奉公のつもりだつた。

このところの自分は騎手として限界だつた、年齢も最盛期を過ぎ、すでに騎乗のための減量すらきつく感じる年になつた。

これまで多くの馬たちの鞍上を乗り継いでやってきた地方騎手人生であつた。いつか夢の大舞台で走る夢を見て、地方重賞のみならず中央のGIや世界に羽ばたく夢を見て走り続けた。

だがそんな夢は破れ、ついで中央や大舞台での晴れ晴れしい時代は訪れなかつた。やがてそんな初々しさを忘れ、世間に揉まれ、当たり

前のように結婚して、仕事として騎手を続けてきた。

そんな騎手生活もだんだんきつくなってきた、体がもう言うことを聞かなくなってくる歳になってしまった。

もうこれで終わりにしよう、まだ体が動くうちに新しい仕事を見つけて騎手としての人生を家族に誇れるいい仕事だったと笑って終わらせよう。

知り合いの寿司屋に転職する話はすでにしていた、今後はただの寿司職人になろう。そう考えていた時期だった。

(お前が復帰したなんて、正直最初は信じられなかったよ)

あのハルウララが群馬競馬で復帰した、主戦騎手として君に乗ってもらいたい。お世話になった高知競馬の理事長が直々に頼み込んできたのだ。

かつて彼女のデビューを共に走り、最初の主戦騎手だった自分が、復帰した彼女の最後の主戦騎手として再び手綱を握る。

そんな話題性を見込んで舞い込んできた話に自分は、最初は冷めた気持ちで頷いた。これは仕事だ、高知競馬への最後の奉公だと自分に言い聞かせて群馬で走った。

きつと彼女は今も昔も弱いままだ、勝てるわけがない、勝つ必要がない。気楽な仕事じゃないか、久しぶりに懐かしい顔に会える仕事じゃないか。

そんな腑抜けた気持ちだった。だからショックだった、群馬で再会した彼女はまるで変わっていかなかったのだ。飽きっぽい性格も、愛らしい人懐っこさも、そしてレースに対する情熱も。

彼女は弱かった、一度引退しその後は人の思惑に翻弄された彼女の体は鈍り切っていた。それでも彼女は走った、厳しい調教に負けじと挑んだ。

かつてのような矢継ぎ早な出走に合わせ、彼女の体に配慮した壊さないための調教ではない。ハルウララがハルウララとして強くなるために作られた専用メニューで、勝つために徹底的に扱き上げる群馬地方競馬の全力調教であった。

そこには限界を見定めて彼女に合わせた配慮はあっても、それで強

度を誤魔化すような遠慮はなかった。群馬地方競馬の調教師陣と担当となった相方の彼は徹底的にハルウララを扱き上げた。

彼女はそれに嬉々として挑んだ、勝つための調教に逃げることなく勝つために、次こそは勝つために。

最初から彼女は勝つために挑んでいた。負けるためでも、楽しいからだけでもない、面白くて勝ちたいから嫌がるなんてしなかった。

一度引退し、競走馬として一度は終えた体をさらに磨き直すそれはどうやっても辛かっただろうに、彼女はかつてのような嫌がり方をしなかった。

8年前に最初の担当厩舎で聞いたような手のかかる様子はなく、レースのためだと理解させればそれこそ嬉々として調教にやる気を見せた。

それでも初戦ではぼろ負けだった、それが悔しくて調教では熱が入った。次走では掲示板に入った、思わず驚いて大声を上げてしまった。

そしてそれからは怪物ども相手に何とか二着に食らい付いた、タイムパラドックスに、メジロジョンソンに、ツバキプリンセスに、ホクリクダイオーに、ノルンフアングに、アルトアイネスに、アルトレーネに、シマカゼタービンに。

負けて負けて負け続けて、延々と一着の背中を見せつけられて、何度も何度も苦汁を舐めた。

いくら快拳と叫ばれようが、最高の復活だと認められようが、自分は悔しくて悔しくてたまらなかった。ハルウララと一緒に悔しくて悔しくて仕方がなかった。

あと一頭抜かせれば、あの怪物どもさえ抜かせれば、あともう少しで夢の一番を手に入れられたのに。

そう思うと仕事への熱意が徐々に変わり始めた、寝ても覚めてもハルウララと勝つためにどうすればいいか考えるようになった。

荷重を増やしたり、スタミナ調教を増やしたり、根性論で何でもかんでもやってみた。

いつしか自分は若いころの熱い気持ちを思い出していた、そして愕

然とした。こんなにも自分が変わり果ててしまっていたことをまじまじと思い知らされた。

好きな仕事で言い訳をして、ずっと自分を誤魔化してきた自分を思い知らされて、それが嫌になった。負けたくなかった。

だから自分を苛め抜いた、減量が苦しいなんて言い訳にもならない。血反吐を吐くように群馬で用意できるカリキュラムに参加し続けた。

元から行っていた騎手としてのトレーニングにさらに負荷をかけ、中央競馬のトレーニングも参考にして体を虐めて苛めてイジメ抜いた。

群馬地方競馬のカリキュラムの中でも一番厳しいモノにも進んで参加して、元軍人だという外人の教官の怒号に歯を食いしばり、汗と泥と擦り傷に身を塗れさせ徹底的に心身ともに体を鍛え上げもした。

水泳もした、格闘技もした、山登りもした、走り屋の車に乗って徹底的に振り回してもらったりもした、そして群馬の秘蔵の彼の本気のシゴキにも耐え凌いだ。

顔を見に来た家族に『前よりかっこよくなった』と言われたときは、どれだけそれが嬉しかったことか。

家族と撮った新しい家族写真に写った自分は、ハルウララに負けないために必死であらゆる訓練に参加して磨き上げた姿。

群馬に来る前に取った家族写真の自分とは比較にならないほどに鍛え上げ、精悍な顔つきになった自分がいた。

(お前のおかげで俺は変わったんだ、お前はずっと変わらなかったんだな)

そうだ、彼女はずっと変わっていないなかった。どれだけ負けても、どれだけ負けても、ずっと走ってきた。

負けるとわかっていても出走料を稼ぐために、休む間もなく何度も何度も高知競馬場を走って走って走り続けてきた。

どれだけ多くの馬達に追い抜かされて、どれだけ多くの馬達の背中を見送っても、ずっとずっと走り続けてきた。

それはなぜだ？そんなことは簡単な話だった、この世界で生きるの

ならば単純明快なことだった。

(お前は勝ちたいんだよな、ずっとそうだったんだよな)

ずっと彼女は勝ち上がった、だって彼女だって競走馬なのだから。世間がどれだけ彼女を持ち上げても、負けることに意義を持たせていたとしても、彼女は最後の最後まで勝つために走り続けてきた。

どれほど弱い馬だと思われても、あの天才騎手にさえ遅いと断じられてもなお、一生懸命に小さな体でずっと先頭を夢見て前を睨み続けてきた。

最初からずっと、昔も、今も、この絶望的なレースでさえも、彼女の目は変わらない。今日こそ勝つ、絶対に勝つ、そのために彼女はここにいる。

なんで忘れていたんだろうか、なんで目を背けていたんだろうか：きつとそれは歳のせいだ、人は歳を取れば取るほど守るべきものが多くなる。

(そろそろ歳だし…って思ってたけど、やっぱりダメだ。俺だって勝ちたいんだ)

それに気づいてしまった、また火がついてしまった、年甲斐もなく取り戻してしまった。もうだめだ、知ってしまえば堪えられない。

自分だってそうだ、俺だってそうだ、勝ちたいから騎手になった。馬に乗って、競馬で勝って、デカイ世界で一旗揚げたくてここに来た。重賞を取りたい、G1を取りたい、世界に挑みたい、世界で勝りたい、当たり前のような夢をもってこの世界に入ってきたんだ、そのためにずっと頑張ってきたはずじゃないか。

もう自分は昔の自分ではない、昔のような活力も向こう見ずさも残ってない。守るべきものはたくさんあって、背負うべきものもたくさんあった。

時間というのは誰にでも平等で、そして平等に残酷だ。昔の自分には戻れない、だがそれならここからまた始めたっていいだろう？

高知競馬の騎手として、一人の男として、ハルウララの相棒として、一人の父親として。

「負けて終わるなんて、できないよな？」

ファンファーレが鳴り響く、ゲートの中の空気が一段と重くなり、言葉にならない無言の重圧が体を押しつぶそうとしてくる。

だからどうした、こいつらがどう考えていようが気持ちは自分たちだっけ負けていない。

逃してなるモノか、この大舞台を逃してなるモノか。こんな奇跡はもう絶対がない、ハルウララとこんな素晴らしいレースに堂々と走れる機会なんて絶対がない。

もう目の前に夢がある、あと一步踏み出せば手に入る目の前にそれがある。勝つのは自分たちだ、この宝塚記念に名前を残すのは自分たちだ。

相手がどれだけ強豪だろうが構うものか、相手がデイープリンパクトだろうが構うものか。

このレースで勝つんだ、絶対に勝つんだ、未勝利で終わってなんぞなるモノか。

もう覚悟はできている、最後に笑うのは俺たちだ。勝って終わるならここで終わってもいい、ありつたけど、自分たちの全てを賭けよう。

ゲートが開く。瞬間、芝のコースに勢いよく躍り出るハルウララの背中に古海は歯を食いしばって食らい付いた。



《スタートしました。正面スタンド前、先行争いに入ります。外から内に向かうように、やはりバランスオブゲームが先手を奪いに前に出ました。

続きましてダイワメジャー、シルクフェイマス、少し遅れてハットトリック、その後ろにコスモバルク、そして内にリンカーン中段馬群の内》

快調なスタートだ、関係者席で出走の瞬間を見ていた小泉は室内に流れている実況中継に耳を傾けながら満足げに頷いた。

デーブインパクトの出走は極めて順調であった、出遅れが多い彼であったが今はそんな様子もなく周囲を見てその場その場に適したタイミングでゲートから飛び出せている。

自分の戦法である追い込みのため最適な後方位置を取るために少しずらして意図的に遅らせる小技もしているのだからもう完璧としか言いようがない。

《そのあとにアイポツパーが行っています、さらに外からカンパニー、後ろにチャクラ。

ナリタセンチュリーとトウカイカムカムと続きましてデーブインパクトこの位置につきました。

これを見るようにファストタテヤマその後ろにハルウララ、ぴたりとついて殿です》

ハルウララもぴたりと後方に付いた、これくらいならあのハルウララでも朝飯前だろう。そこからどう動けるかはわからないが。

デーブインパクトも狙った通りの位置に付いた、大竹はこの雨の中でも完璧な騎乗でデーブインパクトと折り合っている。

「相変わらず良いフォームで走り出すな、羨ましい」

「ふん、そういうお前のリンカーンもいい足してるじゃないか？」

「謙遜はやめてくれ。あれじゃまだお前のデーブインパクトには勝てん」

含みのある言葉をかけてきた同業の鼓笛調教師に、小泉はそこはかとなない嫌味を感じたがそれを顔に出すことはしなかった。

この場において、真面に自分を扱ってくれる陣営はほぼ皆無に等しかった。

理由は分かっている、デーブインパクトのためにこの第47回・宝塚記念は開催されているようなものだからだ。

そしてそれに自分たちはほとんど拒否権無く、中央競馬からの圧力と泣き落としで無理矢理自分の所有馬を走らせることになった。

はつきり言えば最悪も良いところだ、これなら回避しまくりで出走最低数での寂しいレースになったマルゼンスキーの一件のほうが救いがある。



あれは出走馬陣営が出なければならぬ理由があつて逃げられなかった、なので覚悟を決めて蹂躪されたのであつて思うところはあつてもしようがないと考える余地があつた。

だが今回の件はどうだ？いくら馬を集めてもGIレースという肩書に見合う馬が集まらず、デイープリンパクトが勝つ出来レースになつてしまうからという理由で集められてしまった。

他陣営がデイープリンパクト迎撃のために練つていた計画全てをおじやんにして、フランスへ旅立つデイープリンパクトのための箔付レースに宝塚記念を変えてしまった。

恨まれないはずがない、勝つために策を練つていたのに盤外戦術でおじやんにされたのだ。それも中央競馬という一番敵にできない相手によつて。

どれだけ温厚で理解のある同業だとしても、嫌味の一つも言いたくなるに違いない。

《各馬第一コーナーを曲がりまして先頭はバランスオブゲーム1馬身半、シルクフェイマス2番手、3番手にダイワメジャー。》

そのあと三頭並びましてリンカーン、外にコスモバルク抑えきれない感じか？さらにハットトリックが並んできました固まっています。2, 3馬身離れてアイポッパー》

「謝るなよ、小泉。お前らが望んだわけじゃねえのは知つてる」  
「…ッ」

「だが感情は別だ。お前らだけ特別扱い、ああこんな気持ちだつたんだらうな？やつとわかつたよ、巨大の運動会の意味…ふざけやがつて」

鼓笛の言葉には言葉にならない複雑な感情があつた、それは自分たちに向けられた憎悪とも呼べる代物。

こんなレースに出す気はなかつた、こんな風に愛馬を消耗させる気なんてなかつた、もっと最高の馬である怪物と戦わせてやりたかつた。

騎手も馬も万全な状態で、完璧な布陣をもつてあの怪物と戦う準備を整えるはずだつたのに、すべてがデイープリンパクトと中央競馬会

の意思によって狂わされた。

《そこからバックスドレツチ、4馬身、5馬身と離れましてナリタセンチュリー、そこからポツンと離れたカンパニーとチャクラ。

さらに2馬身離れましてトウカイカムカム、ディープリンパクト後方から3頭目、後方2頭目にファストタテヤマ。ハルウララすぐ後ろで最後方、しつかりついていきます》

「…リンカーンは悪い馬じゃない、他の連中だって」

「じゃあなんでやらせてくれねえんだよ…今回ばかりはうんざりだ」

「…俺たちは何もやってない」

「だから質が悪い。せめてそのまま胸張ってる、今度こそぶちのめしてやる」

そう乱雑に言葉を切つてレースに再び目を向ける鼓笛に、小泉は何も言葉を出すことはできなかつた。

最悪だ、かつて感じていた懸念が最悪の形になって自分に降りかかつてきやがった。

《前のグループと後ろのグループが分かれたようになりまして、各馬が3コーナーの坂へと入ります。

バランスオブゲームのペース、3馬身のリードを取つて快調な逃げ、2番手にシルクフェイマス、ダイワメジャーが後ろから2番手に接近じりじり詰める。

コスモバルク4番手、その後ろにリンカーン、ハットトリックが並んで残り800通過、3コーナー坂の下り!》

ハルウララの調教担当であつた群馬の調教師やシマカゼタービン、高知競馬の何某や競馬場内のどこかにいるだろう瀬名茂三でもいればきつと空気は違ったのだろうか残念ながら孤立無援である。

瀬名茂三は探したが見つからず、群馬の調教師たちは忙しくて現場に出てこない。大穴で高知競馬の面々だが、こちらもハルウララのお迎え準備でんでこ舞いで誰もここにいない。

終始、真面に闘気を発してヒートアップしているのはコスモバルク陣営のみ、ひどく浮いているが助けにはならない。

《あとはナリタセンチュリーとアイポッパーが来て、ディープリン

パクトが後方外を回ってジワツジワツと上がってきて後方から4頭目、3コーナー中間です」

場内が一気に盛り上がる、一般客の歓声がここまで響いてきて熱気に当てられそうになるが室内の空気は冷たいままだ。

やはり来たかという諦めたようなため息、これだから嫌だったんだという落胆の息、そしてこの勝負に対する諦観の空気。

勝負に挑んでいるコスモバルク陣営のみ、ハラハラとした様子で見ているがそれ以外はみな確信を持っていた。

やはりあの馬が勝つのか、ディープリンパクトが勝つのか、当たり前のように勝つのか、決まっているように勝つのか。

「さらに内からカンパニー、チャクラ、ファストタテヤマと続いて最後にトウカイカムカム。」

さあ、ディープリンパクトが飛ぶように、飛ぶように3、4コーナー中間から外から一気に好位に取り付いてまいりました」

最後の直線に馬たちが帰ってくるのが見えた、雨と風はどんどん強くなっている。完全な向かい風の中を馬と騎手は掻き分けるように駆けていく。

その中で飛びぬけて力強く走るのやはりディープリンパクトだ。他の馬たちの走りと規格が違う、先ほどのコーナーで一気に順位を押し上げて外からまくって上がってきた。

加速力がまるで違う、まるで別の生き物が走っているかのよう、実況の言うように飛ぶように加速して上がってきた。

「《バランスオブゲームが1番手粘っているが、ディープリンパクト単独2番手の位置に上がっていた。」

ダイワメジャー3番手の位置、その後ろにリンカーン、4、5番手の争いだ。」

「バランスオブゲーム粘れるか？外からディープリンパクトが来た、外からディープリンパクト！」

決まり切った展開だ、これ以上は無理をしなくていい。ディープリンパクトにくれてやれ、つまらないレースなんかくれてやれ。

「《外からディープリンパクト！楽々と抜けました。そして内から

ハルウララ2番手、バランスオブゲーム3番手：ハルウララ2番手え!?」

場内が静まり返った、室内の空気が一気に変わった、全員がそれを見ていた。小泉もその光景が信じられなかった。

最後の直線、思った通りデイープリンパクトが大外を苦もなく加速して馬群を追い抜いて先頭に立った。

激しい雨の中でも耐え、強い風にも負けずに力強く前に加速する黒い馬体はまさに今の日本競馬が誇る頂点だ。

この中央競馬で最も新しい生ける伝説、最強無敗の3冠馬、そしてこれから世界に挑む今年の日本最強競走馬。

このレースは最初からこの展開が望まれていた、最後はデイープリンパクトが勝つことを望まれていた。

だからそれを追いかけてくる馬はいないと思った、追いかける馬はいないと思ひ込んでいた、だが違った。

「ばかな…」

《ハルウララ!? ハルウララ上がってきた!!? 内にハルウララ! 外にデイープリンパクト!!》

デイープリンパクトが辿って行った大外からの捲り上げの真逆を行くかのような超超インコース。

最後の直線に入る直前に少し開いたその隙間を通り、内ラチを削るかのように攻め込んで馬群を抜けて、荒々しく芝を抉るように蹴散らし土を巻き上げながら、たった一頭だけデイープリンパクトに挑みかかっている馬がいた。

他の馬たちがやってこない、やる意味がないと誰もが考えた最後の全力捲り上げ、挑むことが当然とでもいう顔で内ラチギリギリをじりじりと前へ詰めてくる。

やってくる馬はいたかもしれない、けれど勝つ見込みはない無駄な行為だ。この勝負はデイープリンパクトが勝つことを望まれている、誰もが願っているのだ、誰もが当たり前だと思っているのだ。

でも彼女はここに来た、当然のようにそこにいた、あの小柄で栗毛の牝馬がそこにいた。

《バランスオブゲームが粘っているが苦しいか!!後方三番手ぐんぐん突き放して残り200メートル!!

ハルウララ詰める!!デイープリンパクト行けるか!デイープリンパクト粘るか!!ハルウララ!!ハルウララ並ぶ!!

残り100メートル!!並んだ!!ハルウララデイープリンパクト!!

》

「馬鹿な!!」

ハルウララがそこにいた。

## 第39話

ハルウララのことは知っていた。知らないはずがない、彼女には自分も一度騎乗したことがあった。

彼女は遅かった、体の出来も何もかもが他の馬よりも劣っていた。それでも競走馬であった、負けを美化されて喜んでいるようなアイドルではなく一生懸命走っていた一端の競走馬だった。

自分が乗ってきた中では一番遅かっただろう、それでも立派な競走馬であったと大竹は彼女の姿を記憶していた。

そんな彼女が今自分たちに追い付かんとしている、それは予想をしていても決してあり得ない未来だろうと内心では決めつけていた。

彼女はすでに一度引退し、人間の欲望と勝手な都合に振り回されていた。たとえあの群馬競馬で復帰しようとも、現役以上の働きはできないと思われていた。

真面に走れるだけでも価値がある、奇跡ですらあるそんな馬に彼女はなってしまうはずなのだ。

デーブインパクトは全力を出している、今も超えようとしている。君はここに来られないはずだ、付いて来られるはずがないのだ。

きっと自分以外も、誰もが、このレースで走る騎手の誰もがそう思っていたに違いない。

(…どうやら僕が間違っていたようだ)

だが彼女は来た、彼女はここまでやってきた。ハルウララはすでに10歳だ、引退して競走馬もやめていた。

彼女の姿を大竹も見ていたからわかる、既に彼女は競走馬として走れるような体ではなかった。

全力を出せば最後、彼女を見てきた調教師たちが言うようにそれで壊れてしまうような体になっていた。

どれだけ厳しい調教を超えようとも、加齢による老化は多少誤魔化せても消すことなんてできない。

事実、彼女の走るフォームはぐちゃぐちゃだ。無理に無理を重ねて、もうただただ走る事しか見えていない、走ることしか考えていない。

このまま走れば死んでしまうかもしれない、この場で転倒してしまえば騎手も馬もどちらも死んでしまう。

いつかハルウララの調教師から聞いた、ハルウララには確かに勝てる素質は十分にあると。十分に調教して、念入りに調整すれば未勝利戦程度は十分に勝てる強い馬に成れると。

だがそれをすればきつとハルウララはそこで終わってしまう、その全力で彼女の競走馬としての生は終わってしまうと。

(そうだね、来ないはずがない。君はあの時もそうだった)

ハルウララは競走馬だ、競走馬はなんのために走る？何のためにレースに出る？勝つためだ。

芝でも、ダートでも、競走馬の居場所は競馬場のコースだ。レースで一番になって、たった一頭の勝者になるためにここにいる。

アイドルになる為なんかじゃない、伝説になる為なんかじゃない、ただ一着になるために全力で命を懸ける。

彼女は全てを賭けて走っている、彼は全てを賭けて挑んでいる、何もかも投げ打って、何もかも全力で。

あの時の彼女にはそれは許されなかった、高知地方競馬のハルウララとしてそれは許されなかった。

それを今、全力でやり切ろうとしているのだ。ハルウララも、古海も、かつてできなかったそれを成し遂げようというのだ。

(命さえも惜しくない…わかるよ、その気持ち)

だってそれは僕だって同じなのだから。一人の騎手としてこの世界に身を投じて、幾度となくレースを走った。

競馬とは、レースとは、未勝利戦であろうがGⅠであろうが常に命懸けだ。

楽な勝利なんてありはしないのだ、望んだ結末を得るためにはどんな結果であれ努力をみんなするものだ。

ハルウララと古海は勝ちに来た、命を賭けて勝ちに来た、デイープ

インパクトと自分に堂々と勝負を挑んできたのだ。

それに何を言い訳する必要がある、何を余計なことを考える必要がある。

(ディープ、行くぞ)

『だろうと思っただ、あいつの弟子だ』

残り100メートル、出し惜しみは無しだ、買ってやろうじやないかその勝負。自分たちも全力で彼女たちに応えよう。

フランス遠征も、凱旋門賞も、今はどうだっていい。重要なことではない、ここで手を抜くなんて恥でしかない。

日本中央競馬最強の3冠馬と自身の全力をもって、あのライバルをねじ伏せよう。

(『抜けるモノなら抜いてみる、中央を舐めるなッ！』)

ディープインパクトがさらなる加速を開始する、いつにもまして強く感じる加速に体が持っていられないように大竹は手綱を強く握りしめて姿勢を前に傾ける。

体感時速84km、ディープインパクトの足並みに迷いはない、迷う必要なんてありはしないのだ。自分たちは負けない、負けられるはずがない。

自分たちだって同じようにいろんな期待を背負ってきた、それ以上に自分自身が勝ちたいと思っただけにここにいる。

勝ち続けなければならぬのではない、勝ち続けたいからここにいる。

(『ついてくるか!!』)

離れない、右横から聞こえてくる不格好で乱れ切った力強い蹄の音は後ろに全く離れていかない。

見なくても分かる、肌で感じられる威圧感だ。逃がさない、逃がしてなるものか、勝つのは自分たちだと、諦めていない彼らの気迫を感じる。

自分たちを捉えて離さない勝利への渴望だ、絶対に抜いてみせるという勝利への執着心がハルウララから発せられている。

背後から鞭がしなる音が聞こえた、新しく追ってくる蹄の音が混ざ



る。

『もう一頭、この足音、コスモバルク!!』

思わず笑みがこぼれた、予想もしなかった新たな敵、自分たちよりもはるかに後方とはいえないまだに闘志を失っていないコンビがもう一組。

これが嬉しくないわけがないだろう、やりがいを感じないわけがないだろう。

必死になって追いかけてきているコスモバルクの闘志が背中からビンビンと感じている、自分たちに匹敵する競走馬としての本気を彼らは出している。

『さすがだ、僕たちの動きに合わせてきた。だが、まだ遅い!』

残り70メートル、ディープインパクトのギアが一段上に入る。体感時速88km、コスモバルクの気迫が徐々に遠ざかっていく。

諦めずにそれでも挑みかかろうとさらに加速をかけているが、今のコスモバルクでは自分にも、ハルウララにもまだ届かない。

ハルウララはまだ横にいる、まだ横に並んでいる。息遣いは乱れ切り、泡を吹き、馬のそれではないような荒々しさを感じ、走る足音はさらに乱れて胸を打つような美しい音色を奏でていた。

どこまでも走れるだけ走りまくってやる、そう心に決めていなければできない本気の走りだ。

やはりこうだ、こうでなくてはならない、初めから勝つような出来レースなんて最初から存在しない。

勝つのは自分だ、負けるのはお前だ、そういう競り合いがあつてこそレースだ。そしてどんな物語があろうともレースにあるのはたった一つのシンプルな結果のみ。

それを求めて最後の最後まであきらめない、終わるまでどこまでもどこまでも食らいつく、そうでなければ競走馬は務まらない。

『60!!』

まだ離れない、さらにディープインパクトが加速を入れてもハルウララも負けじと速度を上げてくる。

当然だ、上がらないはずがない。上げないはずがない、上げなければ

ば負けを認めることになる。

ここまで来てついてこれないはずがないのだ。こいつを鍛え上げたのはシマカゼタービンで、こいつはハルウララだぞ。

ここにいる誰よりも敗北を経験してきたハルウララだぞ、敗北の悔しさを心に刻んできたハルウララだぞ、それでも走り続けてきたハルウララだぞ、一度身を引いてもなお戻ってきたハルウララだぞ。

ここの誰よりも、悔しいことにこのレースで一番負けたくないと思っているのは絶対にハルウララなんだ。

ここについてこないはずがない、諦めるはずがない。俺たちさえ抜けば勝てるこの状況で自ら諦めるわけがないだろう。

『50！ もっとだ、もっと！ 付いてこられるか!!』

体感速度時速90km、デーパーインパクトがさらなる加速をかけ、姿勢をさらに前のめりにして足を大きく踏み込む。

笑いが止まらない、楽しくて仕方ない。食らい付いてきている、まだ食らい付いてきている、もっとだ、もっと追ってこい!!

『30:!!』

残り30メートル、目と鼻の先のゴール板、その向こうに大竹とデーパーインパクトは壁を見た。

弾幕だ、ひと際強い雨と風が作り出した水と風と土の弾幕。水と風と土の壁が目の前にあった。

(冗談だろ!!?)

強烈な向かい風となった最後の直線、最後の最後で吹き荒れた突風が雨と一緒に踏み荒らされた地面の芝と土すら舞い上げたのだ。

これは観客席にいる観客から見たら怖いものではない、ただの強い突風だ。だがそれに自ら全力で突っ込んでいく自分たちからしてみれば、これはあまりに危険な突風となる。

自分たちの速度は時速約91km、全速力での競り合いの只中だ。その前に現れたのは対抗速度不明の強風と目に見えるほど大きな雨粒、そしてその中に混じった土と芝。

弾幕だ、文字通りの弾幕だ。自然発生した弾幕が、レース場そのものが自分たちを殺しに来た。こんなものは大竹の騎手人生の中でも

初めてだ。

避けられない、避けきれない、大竹の脳裏に最悪の光景が過った。デイープリンパクトの脳裏にも過った。

血の匂いがした、土の中に染みついた競走馬と騎手たちの血が鼻先を擦ったような気がして体が竦んだ。

ターフの向こう側に最悪の未来が見えた。砂と土に巻かれてバランスを崩し転倒、血みどろで倒れて動かない自分たちの姿を垣間見た。

(畜生――)

或いは、また置いて行かれた自分の姿を。避けることはできなかった。自分も、デイープリンパクトも、ここまで来て逃げられるわけではない。

耐えるしかないんだ、何とか走りながら不幸が起きないことを祈るしかないんだ。その最後の最後の運頼みに大竹は悔しさに歯を食いしばるしかなかった。

突風が体を吹き飛ばそうとする、雨粒と砂と芝が体を叩いた。

咄嗟に左手で顔面をかばい、突風に備えて身をかがめる。体全面を一気にはたかれたような激痛が体中に走り、大竹は悲鳴を上げないように両目を瞑って唇をかみしめて耐えた。

デイープリンパクトも体を叩く砂と小石で激痛に顔を背けそうになりながら耐えて速度を維持して突き進んだ。

一瞬でそれは終わった、長い一瞬であった。耐えた、耐えきった。体中が痛い、全身が痛い、今までのレースで被ったどんな雨や土よりも効いた。

それでも何とか耐えきった、大竹は両目を開いてすぐに手綱を握り直し、ミスを悟った。

自分たちは耐えたのだ、耐えてしまった、堪えてしまった。ゴールの直前、僅か数メートル、デイープリンパクトと大竹の加速は止まった。

想定内であれば、それでも勝ち揺るがなかった。ハルウララというイレギュラーが、自分の想像をはるかに超えてきていなければ。

(踏み込んだのか、あの状況で、あんな危険な状況で!!)

ハルウララと古海は踏み込んでいた、弾幕の中に自ら飛び込んで加速を続けながら突き抜けていた。

自殺行為だと思った、事実彼女と彼は傷だらけであった。ハルウララも、古海も、体中に無理矢理突破してできた傷が増えていた。

彼女には突風を超えてできた傷よりも多く厳しい訓練の中でできた傷があった、幾重にも刻まれた歴戦の傷がそこにあつて、無理な全力疾走で血が滲み一部は再発していた。

古海も傷だらけであった。ゴーグルは小石の直撃を受けたのかレンズが砕け、額からは出血し、騎手服を赤に染め、体は危なっかしく左に傾いている。

それでも彼らは後ろを見ることはなかった、砕けたゴーグルの奥に見えた古海の瞳も、ハルウララの両目も、後ろを振り向くことなく前を向いていた。

ゴール板までもう5メートルとなかった、そしてハルウララの栗毛の馬体は一步、前に出ていた。



永遠に感じた一瞬だった。突風に向けて吹き込んだ瞬間、目の前に平たい円盤のような小石がまっすぐ突っ込んでくるのを古海は確かに見た。

避けようとはしなかった、避けたらせつかくここまで来たハルウララのラストスパートの邪魔をしてしまうから。

避けなければ死ぬかもしれないとわかっていて、けれど命を懸ける意味はあると思った。

ここまででいいなんて思いたくなくなった、出し切ると決めていたから、ありつたけを出し切って勝負すると決めていたから。

頭を突き抜けるような一瞬の灼熱の痛みが脳裏を焼き、視界が真っ

赤に染まって痛覚が一気に消え去り感覚がなくなり、上半身から力が抜けるのを感じた。

不思議なことに両目は見えていた、直撃しただろう左目の視界は赤く染まったが右目は罅割れながらも見えた。

まるで無重力になったみたいに体が浮いたように感じた、ふわふわと体が浮いて今にもここから離れてしまいそうに思えた。

思考もまるで定まらない、昔のことを思い出しては消えていく。家族との何気ない日常、初めての騎乗訓練、同僚との飲み会、息子の笑顔、妻へのプロポーズ。

そんな思い出の向こう側で自分のやる事は終わったのも見えた、もう何もかもやり切ったのだとわかった。

(落ちるな、これ)

一瞬で過ぎ去った今までの思い出がよみがえってきた鈍痛で掻き消え、半分赤く染まった視界が蘇る。

姿勢はすでに崩れ、今にも自分は落馬しそうになっているのだと左に傾いた視界の角度で分かった。

当然だ、文字通り脳天に一発食らっている。もしかしたら貫通したかもしれない、それくらい感覚がない。

けれどももう十分じゃないか、高知地方競馬の騎手として、一人の騎手として、ハルウララの最初の主戦騎手として、最後の主戦騎手として。

自分は何もかも燃やし尽くした、何もかもやり尽くした。すべて流れに身を任せてもいい。そう思うだろう、自分はやるだけやったから。

誰かがそう囁いているように感じた、何かが自分を引っ張っていくように感じた、それもいいかもしれないと思う自分がいた。

(ダメだろ、それじゃ)

自分を引っ張る何かを振り払う、答えは最初から決まっている、あり得ないのだ、まったくもってあり得ないのだ。

このまま落ちれば奇跡に悲劇という注釈が付く、ハルウララの勝利に自分の血でケチが付く、なにより家族を置いて行くことになる。

子供が最前列で応援しているのを見た、その横で茂三が見物しているのを見た、家族が競馬場の端っこで見ているのも見つけた、このレースを多くのファンたちがテレビやラジオですつと見ているのを感じた。

小さな子供に悲劇を見せるわけにはいかない、ハルウララの勝利はハルウララらしくみんなを笑顔にできるハッピーエンドでなければならぬ、家族に迷惑をかけるわけにもいかない。

ここで落ちたら一生後悔する、死んでも死にきれないくらい悔いが残る。だから死んでたまるか。

今までずつと思ってきたじゃないか、負けてたまるかって。たかが小石くらいで、この思いを諦められるわけがないだろう。

弛緩しかけていた体に火を入れる、肉体に浸み込ませた生存本能が生きるために必死で足掻く。

両足でハルウララの鞍上にしがみ付き、全力で締めあげて固定する。ハルウララには悪いと思った、きつと痛いはずだ。

だがそれに古海が落ちかけているのに気づいたのか、こわばったハルウララはそれに応えるように大きく息を吸い込んで腹に力を入れて力んだ。

風圧で負けそうになる上半身の全筋肉をもって支え、鍛え上げた筋肉をもって力任せにハルウララの鞍上に復帰した。

「意識飛んでた…いったいなあ！整備不良だぞ中央、石混じってたじゃないか」

「古海さん!!」

「大竹さん？」

鈍痛の走る頭に触れようとすると、すぐ横からかけられた聞き慣れた大竹の声に気付く。

そうだ、必死過ぎてすつかり忘れていた。自分とハルウララはディープリンパクトと競り合っていたのだ。

ゴール板を抜けてからすつかり意識が飛んでいたが、やはりディープリンパクトと大竹は最後の最後まで横にいたらしい。

横を見るとハルウララに併走したディープリンパクトの鞍上で大

きな口を開けている大竹の姿が見えた。

「大丈夫、ちよつと意識飛んでた」

「それ大丈夫って言わないよ!?すごい血が出てるんだけど!!」

「大丈夫大丈夫、ゴーグルがやられたただだよ。交換すればいい」

激痛が走る顔から割れたゴーグルを外してみると、武骨で大きいそれは見事に右目部分が割れて全体にクラックが走っていた。

これは群馬地方競馬に出張してから渡された支給品だ。高知競馬で使用していたものは経年劣化が見られたから交換しておいたのだ。

高知競馬で使っていた物のままだったらもつと悲惨なことになっていただろう。

高知にいる同僚に見せたらずいぶん羨ましがっていた、彼の言っていることは半分も理解できなかったが地方競馬としては高級で頑丈な品という事らしかった。

今まで使っていたタイプや中央などで使われるシャープなスタイルとは違う、大きくて丸っこいスタイルのレンズが厚いゴーグルの性能は本物だったようだ。

予備は群馬地方競馬に来てからつけようになつたポーチに入っているが、もうレースは終わっているので付け直す必要はないだろう。

「大竹さん、変なこと聞くけどレースはどうなつたのかな？実は最後のほう、記憶がすつ飛んでてね」

実際はデイープリンパクトのほうを見ることすらできず、最後はその存在もすつ飛んでただけだが。これくらい恰好を付けてもいいだろう。

周りを見ればわかりますよ、と大竹が少し悔しそうにつぶやく。その言葉に、古海はやつと周りに目をやる事を思い出した。



《ハルウララ！ハルウララ！！1着1番ハルウララ！！ハルウララ1

着!!」

静寂が観客席を満たしていた、次第に小さくなっていく雨の音だけが場を支配していたその静寂を突き破る実況席の声が枯れるような大絶叫。

それを皮切りに競馬場内が拍手喝采に満ちていく。奇跡だった、これは奇跡に他ならなかった。

不思議なほどに晴れてきた空模様の下で会場の全員がハルウララを讃えた、そしてこのレースを走ったすべての競走馬と騎手達を讃えた。

《2着ディープリンパクト、3着コスモバルク!!初夏の京都に春一番!!春の嵐が最後方からすべてを薙ぎ払いました!!!》

「一番!!ウララちゃん一番だよパパ!!やったやったあ!!やったねー!ウララちゃん!!」

「まだ次があるぞー!バランスオブゲーム!」

「惜しかった、惜しかったな…ディープリンパクト…次で巻き返せ!凱旋門が待つてんぞ!!」

「バルクー!次、次で頑張れ!おつかれさーん!」

「良い走りだったぞリンカーン!」

「かむかむー!かむかむー!!」

「次は頑張れよーダイワメジャー!!」

「勝っちゃったか…なかなかどうして、これだからレースはやめられん」

ハルウララがすべてを変えた、ハルウララを応援する子供の声が場の空気をすべて変えたのを茂三は間近で見ていた。

最後の直線でハルウララがディープリンパクトに食らい付いた瞬間に場内を覆った一瞬の静寂と、それを知らぬ存ぜぬとハルウララに向けて応援する少女の言葉が空気を変えた。

自分たちは何をここに来た?競馬を見るために来たんだろう?好きな競走馬を応援しに来たんだろう?ならばそうしなきゃダメじゃないか、子供ができて大人がしないなんて変じゃないか。

気が付けば最後の直線では、誰もかれもが別々の好きな馬の馬券を



握り締めて声を上げていた。ディープインパクトを推す声は一番多かった、ハルウララを応援する声も多かった。

しかしそれ以外の競走馬たちを応援する人々も確かにいた、たとえばそれが殿で勝てそうにない馬であっても堂々と応援の声は最後まで響いていた。

ハルウララがすべてを変えた、そう思える一戦であった。

「あ、おじさんもウララちゃんのカード持つてる！ウララちゃん凄かったよね、一番すごいよね!!」

「おっと、うんうん、そうだね。まったく今年は驚かされてばかりだよ」

「あ、こら朱美！すみません、いきなり」

「いいんですよ、ほんとに凄いレースになっちゃったんだ」

「そうでしょそうでしょ!!ハルウララ一番!!一番だよおじさん!!」

ハルウララが勝てたのは運がよかった、最後は一気に大きな向かい風と雨が最後の直線に襲い掛かりハルウララ以外の馬の足並みが乱れた。

あのディープインパクトと大竹でさえその弾幕を含んだ突風に加速が鈍った。しかし、ハルウララと古海の加速は最後まで途切れなかった。

それが勝負を分けたのだ。ディープインパクトは突風に堪えるために踏ん張った、しかしハルウララはなおも加速して踏み込んだ。結果、僅かに一步前へ進んだ。たった一步でも、僅かなハナ差であっても、彼女は確かにディープインパクトを超えていた。

(あいつらは悪くねえ、運が悪かったただけだ)

同時にディープインパクトと大竹を襲ったであろう恐怖はよくわかる。自分自身大雨や猛吹雪の中、峠でハチロクを駆りレースをしたときは常に死を覚悟していた。

敵は相手だけじゃない、道路も、空気も、雨粒、風、巻き上げられる土や石や小枝、雪、すべてがありとあらゆるアクシデントとなって死を呼び込む。

ハチロクの車体が土や小枝でボコボコに、擦り傷だらけになるなん

てそれこそいつものことだった。自分自身がそうなることだって何度もあった、先行車のタイヤが蹴った小石がフロントガラスをぶち破り血まみれになったことだって一度や二度じゃない。

死にそのような場面に直面して、走馬灯やら最悪の未来の幻覚やらを見たことも一度や二度ではない。そういうモノは何度見ても慣れない、恐ろしきでいつも体が竦む。

シマカゼタービンでさえ同じようなことで体を傷つけたことは多々あった、恐怖に竦んでいた。それを制御し、認めた上で今も走り続けている。

だがそれは整備されたレース場ではめったに起きない事だ、あったとすればそれはカーレースの本番の時であろう。

それこそ競馬場でなんてまず起きない、そもそもスピードも状況も何もかも違いすぎる。

(あいつらはまとも過ぎる、あの状況でビビったってなにもおかしくなんかない)

今回は違った、ひどい突風が競馬場を襲った。それだけならまだしも、最後の直線で向かい風に突っ込まざるをえない競走馬と騎手たち目掛けて、自分たちが踏み荒らした土と芝が巻き上げられて一緒になつて襲ってくるという最悪の物だ。

傍から見えていた観客たちには全く害はないただの突風だが、それに向かい合って突っ込むしかない彼ら彼女らは文字通り死ぬ可能性さえあった。

突風が巻き上げた中に小石でも混じっていて、それが自分や相棒の脳天をぶち抜いていた可能性も十分にあった。

事実、その小石はハルウララの鞍上にいた古海を直撃してゴーグルを破壊した。運が悪ければそのまま眼球を撃ち抜き、騎手を即死させる天然ヘッドショットの完成である。

誰だって怖いに決まっている、誰だって痛いに決まっている、誰だって嫌だし背筋も凍るような恐怖を覚えて当然だ。

そこで経験が生きたのだ、ハルウララの100戦以上からなる経験が、そして古海の耐えた地獄のような特訓の成果が。

ハルウララは恐怖に負けなかった、経験からこの程度なら突き破れると確信していた。古海は肝が据わっていた、例え小石が脳天をぶち抜こうがもうどこまでも覚悟ができていた。

突風による風圧も、雨粒による威圧も、そして土と芝が体を叩く激痛も、あのコンビはすでに経験済みだった。伊達にシマカゼタービンが峠調教で扱いていない、伊達に元軍人の徹底的な訓練を乗り切っていない。

雨の日も風の日も関係なく扱いて扱いて扱きまくり、それこそ多少の銃撃戦ならば巻き込まれても一日寝ればケロツとしている頑丈な連中になったのがあのコンビだ。

だがデーブインパクトと大竹はまだそれに関しては浅い、彼らは群馬地方競馬に所属しているわけではない。群馬トレーニングセンターでの調教はあくまで仕上げだけだ。

こんな悪天候の時にわざわざ来る必要がなかった、そもそも彼は群馬地方競馬の騎手として訓練を受けた事すらない。

群馬地方競馬の特徴であり自慢の騎手訓練課程、かつて西竹一が創設し世界中から集めた元軍人訓練教官が考案して今もアップデートを続けている地獄の高難易度訓練はさすがに中央の天才と言えど無条件で受けられるものではない。

皮肉にも本物のテロまで経験して凶太くなつた古海とハルウララにこの程度の悪天候は恐れる理由がなかった、それだけだ。

(まったく…無茶しやがって。こりゃトンボ帰り確定だな、こんなあいつ以外にや診せられんわ)

しかしそれでも余りにも無茶苦茶だった、茂三から見てもハルウララのこの一戦は無茶苦茶が過ぎた。

勝てる要素なんて微塵もなかった、それこそ奇跡がなければ勝てなかった、最後の突風がなければハルウララは前に出ることはできなかった。

歳を取った体は最盛期ではなかった、どれだけ過酷なトレーニングでもそれを補いきれるものではなかった。

彼女の素質は芝には向いていなかった、ダート専門であり、短距離

中心で無理をしてマイルが限界だった。

このレース場は初めてだった、コースは芝で相性は最悪であった、GIと言うだけあって敵はディープリンパクト以外にも強豪ぞろいだった、天候も最悪中の最悪であった。

最後の無茶苦茶な加速なんてもう目も当てられない、滅茶苦茶なフォーム、でたらめな踏み込み、何もかもかなぐり捨てた捨て身の走りだった。

道中の前の馬を利用したスリップストリームを用いた走りさえかなり無茶をしていただろうに、その後最後の限界を超えた全力疾走と捨て身の突貫、どれだけ体を痛めつけたかわかったモノではない。

レース後の面倒事が片付いたらすぐに検査、場合によっては入院が必要だ。そうなると茂三にはいつもの仮面ドクターの所しか思い浮かばない。

彼は恰好こそ怪しいし言動もいささかすっ飛んでいるが獣医としてはとても優秀で信頼がおける。

それでも彼女たちは走り抜けたのだ、全てを賭けて。

そして1%もあれば奇跡だっただろう確率の勝利を彼女たちは掴んだ、この悪条件を味方にして、無茶も無謀もすべて押し通して、最後に奇跡をつかみ取った。

「ま、生きて終わったただけ上等か。やっぱ住む世界が全然ちげえわ。ほんときすがだよ、マネできんわ」

ウイニングランを終えて戻ってきたハルウララと古海が、誰かを探るように観客席を一瞥する。

それを避けるように茂三は人ごみに隠れて背を向け、まるで祝福するかのように青空を見せた空を一瞥してから小さく肩をすくめた。

少しだけ羨ましかった、本当に少しだけ。

小ネタ3・20XX年、ウマ娘で雑談するスレPar  
t2014

1：名無しのトレーナー

このスレはウマ娘について単純に駄弁るだけの雑談版です。

皆さん気楽に気長に緩やかに楽しくおしゃべりしましょう、荒らしはスルーせよ。

深い考察や行き過ぎた愚痴などは専用スレにお進みください。

2：名無しのトレーナー

◇ 1

縦乙

3：名無しのトレーナー

◇ 1

立て乙

4：名無しのトレーナー

◇ 1

乙

5：名無しのトレーナー

いやあ雑談版も伸びましたな。

6：名無しのトレーナー

◇ 5

ホントそれな、スプストイベントでどこもかしくもお祭り騒ぎよ。

7：名無しのトレーナー

今期のイベントは大盤振る舞いでみんな大騒ぎなんだわ、特に新規勢なんか血眼よ。

8：名無しのトレーナー

06年ハルウラシナリオはクツソ熱い。スプストをアプリに落とし込んだ設定がこれまた熱い!!

9：名無しのトレーナー

しかも配布がサポカじゃなくて☆3群馬ウララちゃん、ノーマルと比べると若干大人びてる感じがたまんねえ（ゲス視線）

ホームに出てくるとなんか違うとか違和感感じてたりやり取りに違和感が出て互いに首傾げたりしててスコスコスコピオン。

10：名無しのトレーナー

容姿がちよつと大人びて髪も少し伸ばして、でも昔と変わってないように見えてちよこちよこ感じる愁いを帯びた空気がね、もうね、ふふふ…下品なんでやめときますね。

11：名無しのトレーナー

◇◇10

はい、ウマ娘曇らせおじさんは群馬地方競馬ブートキャンプに連行よー

12：名無しのトレーナー

◇◇11

そんなー

13：名無しのトレーナー

これで一月後には屈強な群馬スペツナズとして生まれ変わってるだろう。良し！（現場ネコ）

14：名無しのトレーナー  
良し！…でいいのか？

15：名無しのトレーナー  
スプストイベントの4人が病院に迎えに来る最後のスチルとウラ  
ラちゃんがぱつと笑うヤツがエモすぎるんじや。

あの場面だけは何度も見られるんじや、見るたびに胸が熱くなっ  
てくるんじや。

◇◇9

アプリスプスト後からアプリ世界に迷い込んでる感じのホームイ  
ベント、いいよね。

16：名無しのトレーナー

普段のノーマルウラちゃんの裏では着実に何かが溜まって蓄積  
されてたつてことだもんな。

迎えに来たタービン、ダイオー、ツバキ、ノルンの4人に面影を感  
じた4人が重なる一瞬の演出がえぐい。

スプスト時空だとみんな引退してるからなおさら。

17：名無しのトレーナー

◇◇16

考えて見りや当然も当然なわけよな、普段からあんだけ仲がいいキ  
ングハイローとライスシャワーも普通に強いGI馬モチーフで、他の  
みんなもエリートばかり。

スプストでもトップロードにメイショウドトウ、テイエムオペラ  
オーなどなど普通に成績がヤベーキャラばつか。

ファル子ストーリーやってればわかるけど、中央の基本は昭和と平  
成世代のちゃんぽんだからダートは人気薄な上にピンチな連中の  
セーフテイみたいな扱い。

その中で勝てなくてもここにこなウラちゃんしてたらそりや

否応なしに闇を知る、それを一切発露させることなく無意識でも抱え続けた結果がコレよ。

18：名無しのトレーナー

やっと追いつけたよ…これは泣くわ。

19：名無しのトレーナー

勝ったとかやり遂げたじゃなくて、一勝してみんなと同じ場所に立ってやっと追いついたことが一番うれしいんだよなあ…ウララちゃんらしいから泣けるぜ。

20：名無しのトレーナー

迎えに来たみんなも戦績ヤベー奴で、そこに堂々と並ぶことができないわけで…いやでもこの後輩共もいろいろ怪物ぞろいだな!?

21：名無しのトレーナー

◇◇20

そう言っても、06年だとデーパーインパクト破ったハルウララも十分その怪物の一頭やぞ。

というか、一度に達成した偉業の数もえぐいことになってるからなウララちゃん。

22：名無しのトレーナー

◇◇20

当時高知地方競馬に勤めてた人間はすべからくハルウララに足を向けて寝られないという嘘のようなホントの話。

ソースは自分、だつて明らかにオーラが違うんだよ!!立派なGI馬になって帰ってきちゃうんだもん!!

23：名無しのトレーナー

◇◇22



お、貴重な当時職員がいるとな？詳しく話せ、逃がさんぞ。

24：名無しのトレーナー

◇◇22

困め困め!!リアル情報源だ!!

25：名無しのトレーナー

◇◇23◇◇24

困まんでも話すわい、退けよ肉が暑苦しい。でもそんな面白い情報なんてないぞ。

足向けて寝られないってのは言葉の綾だし、彼女なら足向けて寝たら添い寝してくれるから考えるだけ無駄やモノ。

あとは神様仏様ウララ様とか言われてるくらいやで、負けられん時に大体拝む。

26：名無しのトレーナー

◇◇25

添い寝とな!?!なんと羨ましい!!

27：名無しのトレーナー

◇◇25

己そこ変われ!!

28：名無しのトレーナー

どうぞどうぞ、寝返りうたれたら圧死するかな？（経験有）

29：名無しのトレーナー

圧死は勘弁、成仏してクレメンズ：とところで出たわね素手よりなんか握ってたほうが輝いてる奴!!お前のことやぞシマカゼタービン!!

30：名無しのトレーナー

海外兄貴姉貴大歓喜。

31：名無しのキヴオトス民  
姐さん、キヴオトスへ帰りましょう!!

32：名無しのロドスオペレーター  
何やってんすかインプレッサさん!!

33：名無しのグリフィン指揮官  
：（ハイライトオフ）

34：名無しのカルデアのマスター  
うう：タービンちゃん、ごめんねえ：

35：名無しの新米  
ターボさん、タチャンカさんが呼んで：なんじゃあこりやあ!!?

36：名無しの走り屋（首都高）  
ふむ、キャラ違いだな。あいつは四足歩行で高速道路を走る怪物  
だ。

37：名無しの走り屋（峠）  
だな、ヤツに峠を攻めさせたら右に出る生物はいない

38：名無しのDD兵  
無駄に頭のいいあいつが女の子なわけがない：ってミラー司令そ  
の小瓶で何やってんだあんたあ!!

39：名無しのラクーン市民  
この世界だったら：いやでもあの子巻き込むのもなあ：

40：名無しのトレーナー

はいはい、異世界のみんなは帰りましようね。

41：名無しのトレーナー

改めて見るとすげえクロス経歴だよな群馬連中、特にタービン。

42：名無しのトレーナー

◇ 41

ぶっちゃけこいつらもゴルシ枠だしね、ウマ娘の宣伝及び出張担当  
と言えばゴルシか群馬組ですよ。

あつちはハジケリストでこっちはリアルチート系だからだいたいぶ差  
があるが。

43：名無しのトレーナー

まあ群馬地方競馬自体、もう最初からコラボしてるようなもんで  
そっち関連にノウハウ有りすぎるってのがな。

群馬競馬取り上げたら最後、必ず宣伝担当の美少女ロボが顔見せす  
るんだぞあの競馬。

タービンに至っては馬の時から四方八方に出演してるから。

44：名無しの武装紳士

武装神姫は滅びぬ、いつまでも世界を盛り上げるさ!!

45：名無しのトレーナー

◇ 44

出やがったなウマ娘の遠征部隊その2!!フィギュア関連で大体出  
てきやがって、スケールとクオリティがすげえし本気なのはわかるか  
ら少しは自重しろ!!

46：名無しのトレーナー

確か虹6だとゴルシはキーホルダー、タービンもといターボさんは  
群馬県警からやってきた最新日本勢オペレーターだしな。

群馬県警スペツナズ装備だから一見ロシア勢っぽいけど。

47：名無しのトレーナー

群馬県警特注ODゴルカ4、ODアルファAアーマー、スメルシユハーネス、バラクラバでK6―3ヘルメットとかいうタチャンカモチーフ。

群馬県警歴史編纂室所属の特殊技能検定取得者としてスペツナズメンバー、スペシャルウエポン枠で刀まで装備してるっていうね。

性能もかつちりピーキー、スペシャルアクションの葦名流を使いこなすとえらい強いっていう…

48：名無しのトレーナー

リアルでも日本刀持ち群馬スペツナズはガチだからな、映像残ってる。なんでAK74の弾切ってただよこえーよお巡りさん。

49：名無しの新米

うちら基本閉所での接近戦なんで出だしが早くて高火力な刀を使って高速近接戦が嵌ると狙う前にぶった切られるんです。

しかも一文字で壁ぶち壊すし、指切り射撃程度だと弾はじきながら突貫してくるとかヤベーつす。

50：名無しのトレーナー

なのお何気にタチャンカが天敵なので若干ピックアップ率に貢献してる。

51：名無しのトレーナー

機関銃とグレネードの両方がターボメタなんだよ、突撃体勢に入っても撃ち払えるからマジ便利。

52：名無しのトレーナー

◇ 46

また、ターボの本名は瀬名巽でウマ娘ではないぞ。

53：名無しのトレーナー

よく見ろ、瀬名は馬主の名字だ。ついでに瀬名巽をローマ字に直して苗字と名前の頭文字だけにしてみる。

54：名無しのトレーナー

SenaTatumi、S・T：はッ!?

55：名無しのトレーナー

∨∨ 54

とうか声優さん同じだし、どんなところでも絶対に脱がないバラクラバから見えてる両目は赤と青のオッドアイでもうあからさまなんだよ。

56：名無しのトレーナー

なおロシア勢の救世主である。

57：名無しのトレーナー

∨∨ 56

それな。

58：名無しのトレーナー

向こうのプロ「タチャンカがない虹6は虹6じゃないしタチャンカはタチャンカなので問題ないというかゲームにリアルを持ち込むな」

59：名無しのトレーナー

「いい大人なんだから空想と現実の区別付けましょう、子供のころさんざん親に言われたんですけどね？」と我が国のプロも申しております。

60：名無しのトレーナー

しかしそれができないいい歳をした権力者がやけに多いのだ、もう嫌だこんな現実。

61：名無しのトレーナー

ゲームのほうの子供の頃に教わった現実してるの草。

62：名無しのトレーナー

これが現実!!

63：名無しのトレーナー

有識者とかそういうのって顔の面が厚くて、恥知らずで、現実と空想が区別できないがつつきじゃないとなれないってよの子供に知らしめてどーすんだよと。

64：名無しのトレーナー

つ我が息子「なんでカプカン使えないんだよもー!」

「は、この人何言ってるの?ゲームはゲームじゃん一緒にしちやだめなんだよ、ママが言ってたじゃん」(ネットでニュース見ながら)

「よくわかんないこといってるけどこのひとゲームと現実一緒にしてるの?」(今ここ、ちなみに小6。ゲームは一日一時間)

65：名無しのトレーナー

世の中には泥ママなんてのも身近にいるんだ、そりやそうなるさ。

あいつら凄いで、思考回路が人じゃねえよ (経験談)

66：名無しのトレーナー

急に所帯じみて草も生えぬ、あいつらマジでぶっ飛んでるからな

(同系統経験者)

67：名無しのトレーナー

公式ページでキャラのプロフィールを消して（キャラ自体は続投）様子見したけど着火したから、ストーリーでカバーして謹慎という事でいったん外して息を潜めてたけど有識者の助言という名の脅迫で除名の危機。

そこから新キャラトレーナーの発表と時勢をあえて利用してうまく転がして逃げたよな。

68：名無しのトレーナー

運営の意地というかうまく処理したよなホント、しかもそれで群馬の株を上げさせて恩を恩で返すパーフェクトコミュニケーション。

現状を受け止めつつもキャラクターと作品に対して紳士でネタに敏感な運営ととにかく騒ぐだけの有識者（笑）の対比が面白すぎたわ。

69：名無しのトレーナー

群馬県警「梃子摺っているようだな、手を貸そう」

70：ゲド

尻も貸そう。

71：名無しのトレーナー

◇70

帰れ

72：名無しのトレーナー

◇70

帰れゲイヴン

73：名無しのトレーナー

◇70

時代遅れのゲイヴンか、今さら何をしに現れた。もうゲイヴンの時代ではない。

74：ゲド

時代など関係ない、我々はゲイヴンだ。理由など一つ、尻を貸そう。

75：名無しのドクター

∟74

変態め、異世界から来た男の匂いを嗅ぎつけたか…なに？我々だと？

76：名無しのトレーナー

増wやwすwnwww

77：名無しのトレーナー

懐かしいもんを持ってきやがるwww

78：名無しのオペレーター

新たな機影を感知！これは…フォックスアイです!!

79：ジャック・O

そうだ、我々はゲイヴンだ。それ以上でも以下でもない、必要なのは漢と漢の絡み合いだ…ハメさせてくれ。

80：名無しのドミナント

∟79

何をしに現れた、ジャック。

81：名無しのトレーナー

エヴァンジェwww



82：名無しのトレーナー  
懐かしのキャラオールスターでもやる気かwウマ娘達が死んだ目をしてるぞ。

83：名無しのドミナント  
◇79

ここはゲイヴン来るべき場所ではない。ドミナントである私が守るスレなのだ、好き勝手はさせせん。

84：ジャック・O  
◇83

必要なのは真の強者（漢）のみ

85：ゲド

◇83

表で尻を貸そう

86：名無しのドミナント

◇84◇85

笑わせる：これがゲイヴンとなったレイヴンの末路か：お前たちは出るな。こいつらの相手は任せろ。

87：名無しのトレーナー

◇86

エヴァンジェ…

88：エヴァンジェ

◇87

お前達ならやり遂げられるはずだ…後は頼んだぞ、スレ民！

89：名無しのトレーナー

：満足したかい？

90：名無しのトレーナー  
いやーすつきりした。

91：名無しのトレーナー  
ドミナントも帰れwww

92：名無しのトレーナー  
急に話題までタイムスリップしてんじゃねえよwww懐かしすぎておなか痛いわ。

92：名無しのトレーナー  
話を戻そう。ワイあのトレーラーホント好きよ、本部に来たターボの車のキーについてるキーホルダーがさりげなくゴルシのヤツ。  
受付で待っているときに遊んでる携帯画面がウマ娘、育成キャラはやっぱりゴルシ：トレーラーの頃からウマ娘推してるわ。

93：名無しのトレーナー  
やらかす祖国のせいで編成から外れるしかなかったロシア勢。祖国の蛮行には反意を示し批判して、帰国命令も無視して大使館の人間もタチヤンカが殴り飛ばした。

かといって組織と防人としての誇りも捨てられず、間違いを犯した祖国の姿と愛国心に苛まれ、かつての輝かしい古巣を思い出しながら射撃場で燻っている毎日。

いつものように射撃場で憂さ晴らししてるところにターボがやって来る。タチヤンカがターボの顔見知りなことに草生えたわ。

94：名無しのトレーナー

まだまともだった頃に元FSBやら元SOBRやら元山岳兵やらを教官に招きまくって、古い装備をしこたま買い込んで今も使ってる

群馬県警の設定をうまく使った回避策よな。

というか群馬県警に居付いた元F S B教官が帰国要請を蹴って、舐めた口を利いた大使館の人間を殴り飛ばしたってのは群馬県警でリアルにあった話ぞ。

余りにキレて布団で簀巻きにしてガチで裏の林に吊るしたまである。

95：名無しのトレーナー

まあ今では正統スペツナズ扱いされてる群馬県警スペツナズのやる事だから。あいつら邦人救助に行ったら空挺を叩きのめしてお持ち帰りしやがったからな。

96：名無しのトレーナー

ターボ「アレクサンドル、あんたは今でも正しくアルファだよな？」

タチヤンカ「そうだ」

ターボ「やるべきことは理解してるよな？」

タチヤンカ「片時も忘れたことはない」

ターボ「ほかのみんなも？」

タチヤンカ「ああ」

ターボ「なら問題ないな」

満足そうにうなずいたターボがバックに入れていた包みを引っ張り出して渡す。

タチヤンカがそれを開くと真新しい群馬県警の警察手帳。開くとそこには自分の顔写真と名前、他のも開くと仲間たちの分だった。

「あんたらは群馬県警が預かる、今日から現場復帰だ。またしばらく頼むぜ、センパイ」

97：名無しのトレーナー

あの信頼を込めた先輩がかっこよすぎるんだわ。いつのまにか所属元に戻ってたけどwww

98：名無しのトレーナー  
しかしタチヤンカはターボの天敵である。

99：名無しのトレーナー

◇98

そりゃ先輩が後輩に負けるわけにはいかねえもんな。所属は時勢が落ち着いたら戻ってたな、いつの間にか。

100：名無しのデイトナレーサー

しかも虹だけじゃなくてほかのゲームでも強いしかっこいいからな。

デイトナレーサーだと高難度隠しキャラで乱入してきてぶつちぎってきやがるし。

101：名無しのラリーレーサー

あれは馬がラリーしてるのか、ドライバーが馬にラリーさせてるのか：

102：名無しの銀行強盗（ロスサントス在住）

サイドストーリーで助けたら携帯で呼べる馬になった、最初はキチガイ扱いされたが呼んでみたらどえらい有能で今やすっかり馴染みな件。

103：名無しのトレーナー

良くも悪くも印象あるから海外トレ兄貴姉貴達やコラボ兼任トレにはタービンたち群馬組が人気なのよね。

ビジュアルも性格も決まってるし日本的なアイコン背負ってるから、向こうでは主役級だと思われるたってね。

本家シナリオだとデーパーインパクト加入後のXX期にやっと顔を出す、つまり相当後にならないと出てこない数いるキャラの一部でしかない。

しかも仲間じゃなくて敵キャラ、トレーナーのパートナーがデ IPP  
プだから群馬は最初ライバルなのよ。

104：名無しのトレーナー

しかもシナリオだとその後で鬱展開ブッコンできやがる…悪意がないから厄介極まりないっていうね。

105：名無しのトレーナー

そのせいでコラボ先と原作のどっちが幸せなのかで感情がバグった海外勢の多いこと多い事。

◇104

あの世界観ならではの話だからな、鬱というかお世界柄？的なヤツだろ。ノーマルウラちゃんストーリーで片鱗見せてたからどこかでやると思ってたよ。

106：名無しのトレーナー

それな。ゴルシ系列で展開とかコラボ先はお空とか社内コラボか大体はつちやけ系ギャグが主流だけど、群馬勢はそれ以外のシリアスなタイプとかちよつと激しいヤツに出るし。

世界そのものが終わってたり終わりかけたりしてる世紀末系にも普通に顔を出してくるしな。

107：名無しのトレーナー

まあ、原作が首都高突っ走ったり峠突っ走ったりラクーンシティの生存者だったり伝説の馬の傭兵だったりいろいろはつちやけてるから…

108：名無しのトレーナー

ぶつちやけ使いやすすぎるのが悪い、中央系だとNG出されるシリ  
アス系とか世紀末系にもよほどのことがなけりゃOK出してくる。

戦闘も負傷も色恋沙汰もよほどやりすぎなきやOK、必要以上に苦

しめるとか意味不明じゃなきや途中退場すら認めてる。

ウマ娘運営が渋っても馬主がGO出して調整に苦労したとかいうアホみたいな話もあるぞ、普通は馬主がNO出して拗れるんだが？

109：名無しのカルデアのマスター

◇ 108

その件についてはうちの菌糸類が大変ご迷惑をおかけしました！

110：名無しのトレーナー

あれは仕方ない、あの人がシナリオを描いたときから予感があった  
：でも燃えただろ？俺は燃えたぞ。

111：名無しのトレーナー

汎人類史を守る戦いなのにその汎人類史の意思がカルデアに牙を  
剥いてきたっていうカルデア特攻シナリオだったからな。

何が何でもこいつだけはぶち殺すっていう覚悟が感じられたゾ

112：名無しのトレーナー

なお菌糸類はこれ書くためにガチでカルデアぶっ壊す方向でプ  
ロットを汲んで設定組んだ模様：なお逃れる手段はタービンを差し  
出せば丸く収まるというね。

というか前半と後半の温度差が軽く引くレベルなんよ。年末のお  
祭り系イベントが一気に本筋シリアスになるとかどうすりゃああな  
るんだ。

113：名無しのトレーナー

◇ 112

ホントそれ、イベント前半はゴルシのハジケ祭りペースで畳んで、  
タービンとゴルシを迎え入れてひと段落かと思ったら後半戦でガチ  
シリアス。

汎人類史がカルデアを後ろからぶっ刺す怒濤のアゾット展開よ、し  
かも実はカルデアはアウトオブ眼中。クソどうでもいいけど邪魔し

てくるからひき殺してただけっていうね。

114：名無しのトレーナー

仲間を見捨てるわけがない、けど何も打つ手がないって所にタービ  
ンが何の変哲もない散弾銃片手に現れたときの絶望感と高揚感がや  
ばい。

115：名無しのトレーナー

人間の技術を超えて神秘を得た走りとその神秘を破壊した神秘殺  
しの散弾銃という最新神話の合わせ技っていうロマン攻撃。  
これに燃えないマスターは専任にも兼任にもいないのよ。

116：名無しのトレーナー

最終決戦で単身ツツコむ馬鹿に『あいつについて行けるのは自分た  
ちしかない』って言って言っただけの根性振り絞ってくっついてくる  
ダイオー達とディープちゃん。

あの滅茶苦茶泣きそうになりながら人類悪の攻撃を必死で陽動し  
てるスチルがもうね、言葉にならないくらいハラハラする。

117：名無しのトレーナー

なんだよ…みんな楽しんでるじゃねえか…おれもだよ

118：名無しのトレーナー

そしてついたあだ名が『素手よりなんか握ってる方が輝いてるウマ  
娘』だよ!!

他の場所でも大体なんか握って走ってるか戦ってるかだからな!!

119：名無しのトレーナー

中山じゃなくて鈴鹿サーキットが似合うウマ娘なんてのもあるぞ

120：名無しのトレーナー

トレセン制服が絶望的に似合わないウマ娘

121：名無しのトレーナー  
学園にいると弱体化するウマ娘。

122：名無しのトレーナー  
芝と砂よりオイルと鉄が馴染むウマ娘

123：名無しのトレーナー  
キラキラドレスより汚れた作業着が似合うウマ娘

124：名無しのトレーナー  
公道最強伝説

125：名無しのトレーナー  
汎人類史最新にしてイレギュラーな英霊。

126：名無しのトレーナー  
血と硝煙が香るウマ娘

127：名無しのトレーナー  
ゴルシはハジケリスト、タービンはダイハード

128：名無しのトレーナー  
ハジケニウム完全耐性持ちウマ娘。

129：名無しのトレーナー  
剣聖ウマ娘（葦名流剣術免許皆伝）

130：名無しのトレーナー  
ゴルシのボケにガチで答えて黙らす女



131：名無しのトレーナー  
単体火力がヤベー奴。

132：名無しのトレーナー  
ハジケリストの天敵、理由？ハジケリストがいつもの調子で絡むと殺しちゃうか殺されるから。

133：名無しのトレーナー  
羽生田村大災害の生存馬

134：名無しのトレーナー  
▽ 132

ハジケリストの天敵www：そっかイベントでファルコン関連でやらかしてたか、そら死ぬわ。

135：名無しのトレーナー  
勝負服より戦闘服のほうが馴染むウマ娘

136：名無しのトレーナー  
勝負服よりレース用スーツが似合うウマ娘

137：名無しのトレーナー  
勝負服より体操服着てたほうがレースになじむウマ娘。

138：名無しのトレーナー  
芝踏んでるよりアクセル踏んでる方がずっと楽しそうウマ娘

139：名無しのトレーナー  
デストランディングでも平気で生きてる変な馬。

140 : 名無しのトレーナー  
舞台上で踊るより戦場で戦ってる方が輝いてるウマ娘。

141 : 名無しのトレーナー  
ラクーンシテイの生存馬

142 : 名無しトレーナー  
ロスサントスで銀行強盗をした馬

143 : 名無しのトレーナー  
カリブ海で傭兵やってた馬。

144 : 名無しのトレーナー  
異世界に飛ばされても平気でサバイバルしてた馬。

145 : 名無しのトレーナー  
地球防衛軍にいた馬。

146 : 名無しのトレーナー  
ウマ娘化MODを大量生産された馬。

147 : 名無しのトレーナー  
シマカゼタービンの異名ばかりでワロタwww

148 : 名無しのトレーナー  
見返してみると異名がやばいな、ほんとに生物かこいつは。

149 : 名無しのトレーナー  
タービン：お前トレセンをやめろ。

150 : 名無しのトレーナー

◇ 149

安心してください、正史では入学してません。

151：名無しのトレーナー

でも入学してくれないと困るという定期。トレセンだと唯一のメカニックで意外にも替えが利かない人材なんよ。

アグネスタキオン、エアシャカールが持つてない機械関連技術に強いんだ。自分で車整備できるし、各種整備器具にも精通、何だったら改造まで行けちゃうからな。

まあそのおかげで理事長プランで改良に手を貸したウマネストが変な風に強化されちゃって酒に酔った416が電波受信しちゃうんだが。

152：名無しのトレーナー

◇ 151

あのコラボは驚いたよな、どうやっても接点ないと思ったらヴァルハラ方式でコピー、サルベージされて向こうに行っちゃうつていうね。

でもあれマグラシア経由で416は隠れ蓑だったんじゃないかっ  
たっけ？

153：名無しのトレーナー

いるとマルゼンさんがガレージ入り浸ってて、タツちゃん弄つてもらってるストーリー見れるんだよな。

154：名無しのトレーナー

SP隊長が拳銃整備してもらってるシーンもあるぞ、タービンは文句言ってたけど顔見知りだから特別にやってんの。

あのSP隊長がチクチク取扱いに指摘されて、それをファインモーションがニコニコしててエモい。

155：名無しのトレーナー

あいつなんでも直してんだよな。ファルコのマイク、デジタルのカメラ、ノルンのエアガン、ウオツカのスキットル、オグリの髪飾りまで。直せないのは直せないが直せるなら何が何でも直すし。

156：名無しのトレーナー

あのゴルシがガチで頼み込んでセグウェイを改造してもらってタコメーターつけさせたのは笑ったわ。

しかもまじめにやってるからガチで11000回転きっちり回る怪物セグウェイが爆誕してる。

ゴルシが真面目になって乗りこなそうとしてなお暴れるモンスターセグウェイだぞ。改造した本人はあっさり乗りこなすけど。

157：名無しのトレーナー

なおそれに偶然豆腐屋の親父が乗ってきっちり乗りこなすっていうね。

158：名無しのトレーナー

豆腐屋「ふむ、この感じはタービンの仕事だな。悪くないが、まだまだ調整が甘いな」

159：名無しのトレーナー

あの親父、イベント配布カード持ってるって何気なくトレセンと契約して豆腐納入してやがんだよな。

気分転換にちょうどいいとか言ってるハチロクで高速かつ飛ばして納品して、ついでにちよつとトレーナーに助言してくれる。

160：名無しのトレーナー

タービンのヤツ、レース以外だと一応トレセンに馴染んでるんだよなあ：本人くっそやる気なさそうにしてるけど。

161：名無しのトレーナー

∨ 160

それな、育成キャラにいるのはIFの姿っていう珍しいパターンな  
んよこいつ。

育成難易度はちよつと高めだしストーリーも完全オリジナルだから逆に面白いんだけども。

162：名無しのトレーナー

他の地方勢に比べて明らかに難易度高めなんだよな、シマカゼター  
ビン。育成しても使い道ほぼないっていうのもあつて育成が完全に  
趣味っていうね。

素で継承の相性がいいヤツは0なのは正直笑つたわ、群馬勢も  
デイープとウララちゃんできえ△とか振り切れすぎだろタービン。

163：名無しのトレーナー

まああいつの場合、産駒も弟子も血で勝負っていうよりスキルと練  
習で勝負っていうパターンだったかな。

ある意味継承システムとの相性はクソ悪っていう原作再現ヨ。  
良し悪しは作つてあるけど普通にやったら○にならんように元から  
なつてると公式も証言してる。

164：名無しのトレーナー

なお極まったトレーナーはそれを上回る育成を行つて見事に二重  
丸を達成したやつがいた。

継承に使うウマ娘から厳選して継承相性のいいウマ娘から作りだ  
すと言う苦行をな。

165：名無しトレーナー

しかしサポカで登場した場合の強さはその分伊達じゃない、なん  
じやあの育成率爆上げスキルてんこ盛りSSR…たまげたなあ。

166：名無しトレーナー

友人サポカも使い方間違えなければガチだしな、本当にうまくいくと育成ウマ娘の成長にガンガンバフが乗って草なんよ。

167：名無しトレーナー

なおこの有能具合はコラボ先でもいかになく発揮されている模様。

168：名無しトレーナー

本当にレース以外で無駄に輝いてるから草。

169：名無しトレーナー

モブを操作キャラに格上げするヤベー奴。

170：名無しトレーナー

マジな話、シリアスになると異常に強いからなタービン、他の連中があたふたしてもこいつだけ異様に冷静だし。

171：名無しトレーナー

ウマ娘ワールドで唯一最初から実戦経験持ちで突発的な事とかにはめっぽう強いという荒事担当メカニックだからな。

原作でもいきなりテロられても普通に対処した上に反撃までしたとかいうトンデモだぞ。

172：名無しトレーナー

なお本人は大変不服の模様。まあ本人は酒の研鑽を積みに行ったのに行く先々で不幸に巻き込まれて碌な目に遭ってないし。

173：名無しトレーナー

不幸っぷりはジョン・マクレーンに負けず劣らずだしな、死神よりはマシと言っても慰めにすらならん。

174：名無しのトレーナー  
ゴルシに宇宙連れてかれたらこいつだけデッド○ペースになるともっばらの噂。

175：名無しのトレーナー  
ああ、こいつメカニックだもんな。アイザックさんよりも鋼メンタルしてるけど。

176：名無しのトレーナー  
さすが原作で実戦経験済みなだけあるミサイルを避ける馬。

177：名無しのトレーナー  
しかも途中退場してもシレつと戻って来る。

178：名無しのトレーナー  
＜177  
ここは任せて先に行け、あとで追いつく。で、本当にぶっ倒して追いついてくるパターン。

179：名無しのトレーナー  
銃を認識し、形式を認識し、的確な対処をもって無力化できてそれを伝授できる馬だもんな…こいつホントに馬かよ。

群馬県警の警察犬にオートマチックの無力化とか分解の仕方とか教えてる動画見たけどマジなんなんだよこいつ。  
しかも銃の種類に合わせてしっかり教えてやがる、マグキャッチの部分まで見分けてるのホント何なの？

180：名無しのトレーナー

＜179  
群馬テレビがやってた動物番組企画か、そこらへんもうあきらめてそういうもんだとしか言えんよ。

海自だどちよつと悪戯（制作と馬主は了承済み）で9ミリ拳銃とP226を両方出してみたら見事に見分けて分解しやがったし。

まだまともな頃のロシアで国内軍予備役射撃訓練（基地祭みたいなやつでゆるゆる、家族連れもいる）に余興でお呼ばれして、向こうの好意で射撃訓練に参加したと思っただら器用にAKだのPKMだのぶっ放す。

運悪くジャムつたら言われてもいないのにその場で復旧、フィールドストリップングまで器用にやるから担当さんの目がヤベーのなの。

なおノルンもアメリカで同じことやらかして大ファイバーしたし、ドイツでウィンナー作ったダイオーとかドバイでカレー作ったツバキのほうはまだ大人しいねん。

181：名無しのトレーナー

というか引退したとはいえGI馬そんな風を使う群馬も大概頭おかしいぞ、馬主もなんでもいい顔でOKするんだ。

巨大みたいにガチガチじゃないし馬で稼いでるわけじゃないからって自由すぎんだろ。

182：名無しのグリフィン指揮官

へへへ、いつもタービンさんにはお世話になってます

183：名無しのドクター

：（無言で首を縦に振る）

184：名無しのシャーレの先生

いつもお世話になってます：とところで次のイベントでもお願いね。ツナギちゃんとスケバンちゃん、ヘルメットちゃんが待つてるよ。

185：名無しの新米

ピーキーですけど結構使われていますもんね。やっぱり刀の特殊技



が皆様には刺さったようで。

186：名無しのトレーナー  
なおコラボ先では必ず愛車が爆破される模様…俺の愛車が!!

187：名無しのトレーナー  
俺の愛車が!!

188：名無しのトレーナー  
俺の愛車があ!!

189：名無しのトレーナー  
俺の愛車があああ!!

190：名無しのトレーナー  
ちなみに元ネタのイベントムービーは声優さんのアドリブという  
かミスらしい。このムービー収録の前にアルバム用のうまぴよい伝  
説の収録してたらしくてつい出ちゃったとか。

191：名無しのトレーナー  
アメリカのゲーム番組で言ってたから确实だよ、声優さん笑ってや  
がんの。

本当は英語で愚痴るところだったけどどうっかり飛び出して、NGか  
と思ったら監督がOK出した。

監督曰く『咄嗟に日本語が飛び出すのが日本人キャラらしい』せつ  
かくバイリンガル声優さん起用したんだから使わない手はなかった  
とのこと。

192：名無しのトレーナー  
いつの間にかコラボ話で盛り上がって草

193：名無しのトレーナー  
ええやん、雑談版やもの

194：名無しのトレーナー  
この流れを作った虹は戦犯であり神である。なおタービンからは恨まれる模様。

195：名無しのトレーナー  
そらコラボするたびにWRXが蜂の巣、爆散、無断解体、部品盗難などなどで基本碌な目に遭わない上に直すのは自分でやらされるかな。

なおテラではその発端であり原因のアップルパイと肉Tが弁償を渋って逃げようとしたらガチギレして泣いたり笑ったりできなくなるくらい叩きのめした模様。

196：名無しの採用担当  
文句なしのエリートオペレーター採用ですよ、あの人たちを見るとペンギンの奴ら一瞬で大人しくなりますからね。

197：名無しのシャーレの先生  
本当に助かるんだよね、いろいろと。シャーレでもいつの間にか車庫がタービンちゃんの定位置になってて、いろいろ整備してくれるし。

198：名無しのトレーナー

◇ 197

オノレ先生!!よくもうちのタービンをタラシこんでくれたのう!!

199：名無しのトレーナー

◇ 197

騒動を収めて仮住まいにシャーレを提供してくれたのは感謝しよ

う。

学生として身分を保障してくれたのも感謝しよう。物騒なことはあるけど仕方ないだろう。

しかしまさかのガレージデートだった？あんたに教師の心は無いんか？

2000：名無しのトレーナー：

汗っかきで蒸れ蒸れの上はだけツナギタンクトップタービンちゃんど車整備のお仕事スチル、しかも動いて笑ってプルンプルンのLIVE2D。

こんなの本家にすらないんだよお!!なんでトレーナーって呼んでくれないんだよお!!トレーナー、無理しなくていいんだぜ?とか慣れてない割にうまいな、とかおやおや?どこ見てるんですかあ?トレーナー?とか言っってほしいよお!!恨めしい妬ましい羨ましいいい!!  
(血涙)

2001：名無しのトレーナー

トレセンでそういう話があっても形式上結構制約あるんだものね、汎用背景で制服か私服かしかねえんだよ。

2002：名無しの先生

諦めるな!!キヴォオトスに来ればきつと会えるぞ、たぶん、きつと、メイビー。

2003：名無しのトレーナー

いうて、イベント復刻の予定は未定でしょう？

2004：名無しの新米

なら一緒にレインボーに入隊しましょう、優先的に解放すればすぐにターボさん使用可能ですよ？

205：名無しのドクター

おっとロドスを忘れてしまつては困るね：イベントはサイドストーリー枠で解放されてるから物語を進めれば絶対にお迎えできるぞ。

206：名無しのキヴォトス民

：ダイオー先輩とツバキ先輩とノルン先輩のことを誰か思い出してあげてください。どこのコラボも当てやすさ重視の注文入ってるから中レアなんで当てやすい部類つすよ。

うちらもみんなお世話になつてる大先輩ですよ。

207：名無しのトレーナー

せやかて工藤、なんだかんだ言つてイベントの主軸はタービンなんやもん。というか、配布がタービンやもん。

分かるか？イベント完走さえすればタービンちゃんをお迎え出来て、育てれば個別イベントだったり可愛い特別スチルだったり特殊衣装とか必殺技とか見られるんだぞ。

なのに俺たちトレーナーは忌まわしきガチャでキャラとサポカの両方☆3を引き当てなきやあ全部見られないんだ!!

208：名無しのトレーナー

トレーナー知ってるよ？コラボ先だと必ず手に入る配布とか最初から有料DLCとかで運に左右されないんだつて。

導入すれば絶対に手に入るようにできてるんだつて、ねえ？ねえねえ？ねえねえねえ？なのはどうして本家は最悪天井まで課金しなきゃお迎えできないの？

209：名無しのトレーナー

本家が一番の苦行状態なのはあまりにも草なのだ。

210：名無しのトレーナー

ガチャは悪い文明。

211：名無しのトレーナー

さすがゴルシに続いて関係者が『まだ足りない、盛れ』とGOサインを出した連中だ、濃さが違うぜ。

## 第40話

群馬県某所、市街地からちよつと離れたお安い土地、ちよつとした裏山があり建設には普段は向かないという事で大変お安かつたらしい土地を切り開いて隠れ家的に建設されたそこに動物総合病院『イドフロント・ロドス』はある。

瀬名酒造馴染みのかかりつけ獣医であり、俺の幼駒時代からずっと診療を続けてくれた恩人であり、幾多の難題にもめげずに研究を重ねるに重ねてきた獣医師、ドクターの愛称で知られる度し難いフルフェイスマスク野郎の居城である。

たぶん群馬県最大の面積を誇る敷地内には大小どころか陸生水棲すら問わないあらゆる環境に適した病室と設備を備えた施設が点在し、そこで勤める医師や看護師たちも世界中から集まってきた癖のある腕っこきばかり。

その一角にある馬用病棟の一室に、俺は白衣を模した馬着を着た姿でいた。

理由は簡単、馴染みのドクターからのお手伝い要請だ。まああの人にはお世話になってるからね、当然やれることはやりますわ。

なんならあの人の研究とかにも昔から色々協力してきたし。

(とはいえ、こいつよお…)

でもまあ、今回ばかりはちよつとお灸を据えなきやダメね。うん、たぶんそれも含めて俺が呼ばれたんだろうよ。

あのバカ、本当にやらかしやがった。確かに凄いなだろうな、俺は競馬のことはあんまり分らんがG1ってのがでかい大会で賞金とかもやばいってのは知ってる。

前世では競馬場とかほとんど行ったことなんてなかったが今生で木っ端でも競走馬やってりや嫌でも耳にするわい。

世間様も大賑わいやってるし、高崎はお祭り騒ぎだしテレビでも高知競馬場が大騒ぎとかやってたしな。

というか今も記者どもがあいつ探して探し回ってるし…だがな、そ

れとこれとは話が別よ、なあ？ハルウララちゃんよ？

「フヒヒン？」『俺が言いたいことは分かっているよな？ウララ』

「ふえ〜…ヒヒン!!」『えーと…ただいま!』

いえいえわたくしも一応怒っています事よ!!

「ヴェヒヒーン!!」『ただいまじゃねーわこのアホ!!』

「へひん!!」『アホ!?私はアホじゃないよ!!』

「ヒヒーン!!ヒーン!!ブルルツ!!ヴァフツ!!」『いやアホだよ、愛すべき馬鹿っていうアホだよお前は。信じて送り出した仲間がボロボロになつて帰ってきて即入院しましたなんて聞かされた身にもなりやがれ!!』

高知に送っておくはずのお前を乗せて親父さんが帰ってきたと思つたらドクターの所直行で即入院からの緊急オペだのその他もろもろだの心臓止まるかと思つたわ!!

「ヒヒン?ひひーん!」『でも私今は元気だよ!』

「ひーん?ふえーん?」『お前その姿でそう言える根拠はなんだ?』

全身包帯でぐるぐる巻きミイラ、点滴ぶつ刺さつてるし心電図モニター用機材も設置されてシート敷いた抗菌ベッドの上に毛布被つて寝てるガチ入院スタンスやないかい!!

しかも絶対安静でトイレとかならしうがないけどもそれ以外は絶対寝てなきやならんっていう重病人区分だし。

初っ端からこの特別病室で俺が呼ばれるくらいってお前、どんだけヤベー怪我したらそうなるんだよおい。

そもそもこの特別病室はこの病院で一回は通常診察を受けて『治療行為を理解していて落ち着いて受けてくれる』つて認められてから初めて案内できる病室なんだ。

ちゃんと理解して行動してくれるつて分かんなきや、点滴キットやら検査キットやらごちゃごちゃ置いて、人間の個人病室ばりに整えるなんてできやしねえ。

俺がいるのはお前が変なことしないように見張つて、治療の意味を言い聞かせるためにここにいるんだよ。

普段は説明担当の奴がいるけど今回はハルウララと面識があるつ

てことで俺が特別に担当ってわけだ。

ドクターの治療が初めての連中はこういうの絶対嫌がるからな、ヤベーケガしてもなぜかじっとしてられんだ動物ってやつはよ。

犬も猫も鳥もトカゲもちゃんと治療して言いつけ守って安静にしてりや現代医療なら大体は直るってのに経験しないとてんで理解しねえ。

馬なんて時折動かなきゃならんからずつと寝かせるわけにもいかんってんで散歩に連れ出すと走りすぎやがる。

点滴嫌がるしギプス取ろうとするしむやみやたらと歩こうとするしで手がかかってなあ…説明担当増えるまではほんと出ずっぱりだったもんだよ。

「ヴッフヴッフ」『言つとくけど、そうやって口だけでも回るのは奇跡だかな？ドクターが治療してくれなきゃこうはいかんかったかな？』

恰好はおかしいけど腕はガチでいいんだよドクター。最近またマスク変えてどんどん度し難い雰囲気になってるけどさ。

「ひひん？ひひーん？」『あの黒くて光ってる顔の人間ってそんなにすごい医者さんなの？』

「ヴフ」『少なくともそこらの獣医とは比べ物にならねえよ、ファツシヨンセンスはろくでなしだがな』

本当にそこよね、前世の俺もセンスは正直なかったけどあそこまでガンギマリにはならねーわ。

どこまでも医療に真摯でまともなものになんというか、独特というか…ろくでなしで度し難いんだよなああの人は。

「ふあく」『確かに雰囲気は違ったかな、前の所の白い服のお医者さんより変な感じしなかったし』

「ぼふぼふ」『いろいろ度し難いがな…腕はいいんだよ』

でもまあ今はドクターのことはどうでもいいんだよ。お前だおめえ!!

「ひひん、ブヒブヒ！ブツフン！ヴィーヴィーシャーシャー!!ばーはばっふ!!」



『両前足に極度の負荷で疲労骨折寸前、両後足に複数の亀裂骨折、おまけにすべての足の筋肉に炎症の兆候。』

蹄もボロボロで亀裂多数、落鉄しなかったのが奇跡。おまけに極度の全身疲労と一時的な神経の麻痺も発症。

内臓へも極度の負担、横隔膜は断裂寸前の極度の疲労と肺内部にわずかな充血と化膿。

心臓に至っては一步間違えれば崩壊寸前、酷使しすぎて重要筋肉に痙攣と不整脈の兆候、表面には内出血。

重要血管にも派生して複数個所が疲労断裂寸前、血管自体が収縮と拡大を繰り返して過ぎて自損しまくってる箇所多数。

毛細血管に大ダメージで内出血箇所複数、同時に末端神経へのダメージで破損個所に軽度麻痺で自覚ができないとききた。

他にもエトセトラエトセトラエトセトラ、生きて帰ったのが奇跡、退院しても元のように走れるとは限らん。お前は怪我を運ぶダンブか何かか?』

「は?」『え、いきなり何?』

「ヴあほかーへへー?」『てめーが運び込まれたとき発症してた症状や怪我のことだけど?』

言つとくけどこれまだ氷山の一角な、それ以外にも細かいの出すとほんととんでもない数になってやがる。

「ヴいー?」『…それ全部私の怪我?』

「ヴュー」『全部今回のレースでお前がした怪我』

「ぼほっふ?」『多くない?』

「ヒヒヒーン!!」『多すぎだよ、あり得ねえよ今のお前の体。何?なんなの?お前自壊しながら走ったの?自分壊しながら走ったの?』

馬鹿なの?宇宙世紀にでも生まれたつもりなの?エンジンでも暴走したの?ガンダムどころかツダじゃねえかおい!!』

「ファっ!?」『後半意味わかんないよ!』

「ファッヒュー!!」『俺だってお前が意味わかんねーよ!一步間違えりゃ古海さんはアムロになるところかデュバル少佐になるところだったわ!!』

そもそも生きてるのが不思議なんだわマジで。よくもまあこま  
でやって走り切ったもんだ、痛くなかったんか?』

「ヴヒヒーン…ヒンヒン?」『いやー無我夢中だったから全然。ところ  
でくーちゅーぶんかいしてたらどうなるの?』

「ツバ」『宝塚の亡霊にでもなりてーかお前?』

「?」『?』

あかん、わかつとらん。こんだけ言ってもピンとこないとかどんだ  
けよ?。

「ヴーヴ、ぼっはん!」『古海さんほっぽりだして芝と泥の上であの世  
にグツバイ、たぶん古海さんも一緒に道連れ』

「ははは…ひはいー?」『ま、まさかー、だってほら、今生きてるよー  
?』

「ひへふ」『ならもう一回羅列してやろう。なに安心しろ、もつとわか  
りやすく説明してやる』

ドクターから見せてもらったカルテを羅列してやるとどんどんハ  
ルウララが引きつった笑みを浮かべて視線を明後日の方へ向ける。

そうだよね、言えばさすがにわかるよねえ考える頭あるんだからハ  
ルウララちゃん。まったくもって競走馬ってのはレースになるとこ  
れなんだからもう!

「ばっふーべほばへほほひふ!!」『さて、申し開きはあるかねハルウラ  
ラ君?いくらまだ怪我の区分が理解しきれていなくても、数くらいわ  
かるよね?』

いいかい、シヤレにならん自壊の傷だけでも28か所あるのよ。2  
8か所だ、28か所の自壊箇所だぞ!!

それだけじゃない、そこから派生した大きささまざまな傷がお前の体  
のそこかしこにあつて傷だらけだ。

君の体に、今言った数の怪我が、ぎっちぎちに詰まってるわけよ、ボ  
ロツボロなわけよ、一歩間違えばその体はグズグズなのよ、OK?』

「お、おーう?」『お、おう?』

ははーん、まだわかってないんだねえ?ならこうだ。ならばこう  
だ、おい持つてこい!!

「ヴュー」『よく見ろウララ、ここに吸水ビーズがあるだろう?』

視線で外に合図して、待機してもらったコマツとブチに押しつけてもらった台車の上にはお皿に乗った吸水ビーズ。

台車と一緒に乗ってるレッドに頼んで院内の使用済みの除湿剤から拝借してもらっておいだ。

「ふひふひ…ふん…」『ここに丸々したピースがあるだろう、これを、こ  
うだ』

そいつを蹄で押しつぶしてぐしゃっとな。ついでにブチたちがそれを  
を見てわざとらしく両目を瞑って表情を渋く窄める。

「ヴュー」『こいつがお前のあり得たかもしれない未来の姿だ』

「ぼひー」『ごめんなさい、無理しすぎました』

「ヴッフ…ひひん?」『よろしい…つたく、でどうだったよ?』

「ふえ?」『ふえ?』

何わけわかんないって顔してやがる、この大馬鹿野郎。言うべきこ  
とは終わった、こいつはいわばルーチンワークだ。

馬鹿やった馬鹿には馬鹿野郎と怒鳴りつけて何が悪いのか教えて  
叱らにやならん、当たり前のことだろうが。それは今終わった。

あ、みんなありがとね。え、捨てといってくれんの?さんきゅー。

「フヒン、ヒヒン、ブッルルッフォウ?」『初めて一番最初にゴールし  
た気分はどうだ?』

「フヒ…ヒヒーン…ヴッヒヒーン!!」『えーと…うん、最高だった!!』

「ヴム…」『なら良し!』

本当にこいつはやりやがったよ、よくやったとしか言えん。こいつ  
は馬鹿だがいい馬鹿だ、こういうのは強いし教えがいがあつてとても  
面白いんだ。今回は悪いほうに転がりかけたが。

本当に良く生きて帰ってきてくれたもんだよ、この大馬鹿野郎。こ  
んな滅茶苦茶な体になってまで、平気な顔して歩ける頑丈さにや感服  
しかねえわ。

競馬の只中でそんな風になりや、扱けたり落馬したりで最悪なこと  
になるなんて茶飯事だ。俺だつて何度もそんな場面は見てきたさ。

こいつが走ったGIとかいう大舞台じゃない条件戦なんかでも一

歩間違えれば普通に馬は死ぬし人も死ぬ。

最悪なもんだぜ、そんな光景を前に見て走るってのは。戦争でもないのに人が死ぬ、馬が死ぬ、命が消える感覚ってのはどんなどころでも一緒だ。

それこそ書類一つで何かが切り替わる会社の中でもそうだ、命が消える時は必ず同じ感触がするんだ。命の取り合いってのはみんなそうなのさ。

こいつらはそれを覆して走り切りやがった、しかもよりにもよってデイープの野郎を公式戦で初めて負かしやがったときなんだ。

普通ならこんな風にベッドでけらけら笑ってなんかいられないだろうに、こいつは見事にやり遂げて見せた。

居るんだよな、こういうなんか持つてるヤツってのはどこの世界にも。

「ふへへ…ひひーん？」『えへへ！今ならタービンにだって勝てちゃうかもね？』

「フアー？」『お前人の話聞いてた？』

「ヒンヒン！」『聞いてた！』

「ハホヴァ」『なら何でそうなる…』

思わず呆れた、だってこんだけ脅しかけてなおこいつ全然懲りてねえ。理解はしただろうけど懲りてない。

競争能力喪失は競走馬人生の終わりだ、特にこいつはもともと引退してたからまた引退したら二度と復帰は叶わない。

高知競馬に就職が決まってるから少なくとも肥育とか廃棄にはならんだろうが、少なくとも競馬には出られん。

ドクターはそんなことはさせないって息巻いてるが、あの人の腕前でもかなり高い確率でそうなるとは言ってた。

あの人嘘はつかないから、結構な確率でお前は引退なんだけど？

「フヒン！ふひふひ、ふっひーん！」『でも治るかもしれないじゃん！だから治ったらまた勝負!!そんで勝つ!!』

「おーう…ふあーあふあーあ…」『あーもう…お前ってやつは…悪いがそいつは無理だな、てめえはしばらく練習も全部禁止だ。』

その間に俺はもつと鍛え上げる、すまんが今のままで足踏みする気は俺も毛頭ないんでな』

「ひーほ!?」『あ、ずるい!!』

「ヴォンン」『ずるくねーわ、てめえは勝ったんだから休養してろ。俺は次の勝負に備えにやならん』

「フヒヒン?」『次?何のレースに出るの?』

「フスイ」『そろそろ碓井での勝負を決めようかと思ってるな』

いやあ、なんてーの? この前のカーチエイスでいろいろ見えたからさ、そろそろ碓井攻略に本腰入れようと思ってるのよ。

あんな真昼間から公道を突っ走る機会なんてそうそうなかったし思い返してみれば新たな発見が山盛りでさ。

そりやひでえ思い出だけだからって糧にしないのとは違うじゃん? 腐らせるなんていくら何でももつたいなさすぎるのですよ。

それも踏まえてここ最近はずつと研究してるんだけどこれがなかなかいい塩梅に精度が上がってるんだよね。

「ヴッフヴッフ、フヒヒ」『まだ勝負を仕掛けるのは先の話だが、俺もそろそろ芦名以外のコースに名前を乗せる。

その次は妙義、その次は赤城、いずれは群馬のコース全てのランキングに俺の名前を乗せてやるさ』

最近はお前らどんどん上に行ってるしな、仕方ない話だが住む世界が変わっちゃった。

それがどうかという気はないけどな、俺も峠でくらいは強者だと胸張って名乗りたいじゃん。

確かに平地ではお前ら強いんだろうよ、でも山なら俺が強い。

「ヴォヴォ?ふおへ〜」『おー…タービンやる気だね、目がギラギラしてるよ』

「はひ?はーあ?ふあつく」『なぬ?そりやマズいな、お仕事なのにその目つきはいかんのよ』

いかんね、どうも気持ち先走り過ぎちゃったみたい。ダメだねえ、まだまだ俺も修行が足りんわ。

「タービン、定期検診の時間だよ。もう大丈夫かな?」

不意に後ろから声がして振り向くと、ドクターのそれとはまた違う度し難い仮面をつけた医者：「なんだよグっさんじゃん。という事はもう定期健診の時間か。」

「はむはっふ、ふはは？フヒピン、ほーへー？」『おっと、もうそんな時間か。ウララ、俺はもう行くが分かってるよな？ちゃんと医者の言うこと聞いて安静にしてるように』

「ほへー！」『もう、わかってるよ。お願いします、変な顔のお医者さん』

よろしい、ちゃんとお辞儀であいさつできたな。偉いぞ。

「さすがタービン、ちゃんと言い聞かせてくれたな。あとは任せな」

「ひひーん!!」『タービン！また一緒にレースしようね!!』

「ふえいふえい」『へいへい、運が良ければな』

ウララに見送られて病室から出る、やれやれ、ドツと疲れた：まあ悪くない気分ではあるが。

「ふあほはー…はっふ」『まったく…また、ね…あいつなら何とかしそうな気がするの、不思議なもんだな』

「こんだけ口酸っぱく言っただ、あいつだってわかってるだろうに…まったく、これだからああいう奴は強いんだ。」

自分がもう昔のように走れないなんて本当はあいつがよく分かってるはずだ。

「ブモブモ、ンモ？」『なんだよ、難しそうな顔して。ウララちゃんがあれなのはいつものことだろうが？』

足元に駆け寄ってきたコマツが慰めるように言ってくる。

『変わらなすぎる、見てるこっちはハラハラするよ。あいつ、まだ走る気満々だ』

『だろうなあ、あのドクターが変な声上げるくらいだったのに強いヤツだ。下手すりゃ走れなくなっても走りそうじゃね？』

『勘弁してくれよ、そうになったら見てるこっちが気が気じゃねーよ』  
『よく言うわ、レースなんざほとんど見ねーくせに』

『だって仕事は仕事だしな…』

というか、誰がお前らの抜けた穴を埋めてると思ってやがる。最近

は大イベントとなるとこぞって主力が抜けやがるぞうちの会社。

親父さんたちはともかくこいつらやお袋さんまで本番レースの生中継の時だけ仕事抜けてテレビに齧りつきやがる。

その間を埋めてんのが俺たちみたいに興味が無い勢だからな、ほんの30分前後くらいだし楽しそうなの邪魔すんのもアレだからみんな気にしてないけどさ。

『やめてくれ、その視線は俺に効く。だって意外と面白いんだもん』

『お、おれは休み時間だったからだし？』

『わ、私は野生だし？』

ん？何を言ってるんだい？君はうちのカラスだろう。知ってたんだぞ、とつくにうちの屋根裏に巣を作ってるよな？

親父さんがためえの事どっかに相談してんの見たし相談されたんだがね？お前いつの間がいい相手作ったの？

『あ、これ全部知ってる目だ』

『すみません調子乗りました』

『あ、はいすみませんでした！』

『よろしい』

まあみんなやるところはかっちりやるから信用はしてるけど、あんまり頻度が増えると考えちゃうぜ？全く。

さて、次の患者さんの所に行こうか？まだ見慣れた顔の患者が残ってんだからよ。

フランス行き前だったのにわざわざ群馬で検査入院やって、しかもすっかり凹んでるとかいうあの野郎とかな。

## 第41話

栗東厩舎の資料室、最近はより研究熱心になった栗東厩舎の厩務員や調教師、調教師見習いが入り出す資料室は方々からかき集めた資料が集積されている部屋である。

かつては閑散としていた何の変哲もないただの資料室に過ぎなかったこの部屋は、2005年以降すっかり様変わりし最新の研究機材やパソコンと言ったモノも運び込まれた研究室じみたものとなっていた。

その資料室の一角に今日も栗東厩舎がかき集めた新しい資料が運び込まれる、それを見ていた厩務員たちは全て運び込まれると同時に我先にとその資料に飛びついた。

「こいつがこの前の…」

「ああ、例の足跡の型と関係資料だよ。テキがすつこい目してた奴だ」それはずぶ濡れになった芝を文字通り抉り取るようにして踏み抜かれた足跡から丁寧にとられた樹脂の型と現像された写真、そして映像資料であった。

発見されたのは京都競馬場、宝塚記念が終わったすぐ後、芝コース最内の内ラチギリギリの場所で第4コーナーの始まりからゴール板を抜けた先の5メートルほどまで。

ハルウララの走法を遠方で見っていた小泉が目ざとく見つけ、会場責任者と素早く話を付けたうえで自ら採取したティープインパクトに敗北を刻んだ馬の痕跡である。

その足形を取り出した初老の厩務員は虫眼鏡を取り出して熱心に内部を見つめ、関係資料を整理したファイルを開いてそれを見比べ始めた。

「恐ろしい足跡だ、完全に芝を踏み抜いて土を走っておる。こんな足跡を付ける競走馬なんて見たことがない」

「昔、オグリキャップがダートで似たような足跡を付けてたって聞いた」



たことはあるが……こりやそれ以上か」

「この深さを見る、力が入った程度でできるもんじゃねえ。意図的に芝を抉り取ってやがる」

小さめのメジャーを取り出し足形に突っ込み、深さを計った調教師補佐は嘆息してその計測したメジャーを見つめた。

まだ若い青年の彼はメジャーに刻まれた数値を見て目を輝かせた。「すげえ、こんな風に競走馬が蹴りこめんのかよ。こりや世界が変わるぜ、先生」

「馬鹿野郎、そうそうできる馬なんか出てこねえよ。それこそ群馬のあいつ位だ、真面な馬じゃ足が逝かれちゃうわ」

「だからそうならないように体を作るんです。筋肉だけじゃなくて脂肪もつけて、衝撃に強い柔軟な足に育て上げる。」

彼の足がそうだった！そうすれば老齡のハルウララ号ができたのに中央の競走馬ができない理由がない！

「落ち着け若いの」  
「あいたツ」

目を輝かせて力説を展開しようとした調教師補佐の背中を軽くたたいて口を噤ませ、筋肉質な練習場管理者の男が青年の肩に腕を回す。

「焦るなよ、そんなんじやお前の熱意に馬が付いて来れねえ。ハルウララは老齡だが同時に多少の傷にはへこたれない生来の頑丈さがあった。」

今のサラブレッドはそういった頑丈さは捨ててる、競争のために品種改良を重ねてきた速く走るためのガラスの足だ。そう簡単にできるものじゃねえよ」

「おやっさん、でも——」

「落ち着け、急激な変化は時に正常な神経を蝕むものだ。今急に方針を変えたところで自滅するだけだよ」

「あの馬の足は何を間違ったかガラスはガラスでも防弾ガラスになっちゃまつてるがな、みんなそうなれるわけじゃない。」

そもそもそうするには俺たちだけじゃだめだ、牧場のほうにも協力

してもらわねえとな」

「おいおい簡単に言ってくれるなや、うちにそんなことするノウハウなんざねえぞ?」

栗東厩舎と縁が深い育成牧場から派遣されている厩務員が無茶言うなど首を横に振る。

「お前ら学校で競走馬の歴史は頭に叩き込んできただろう? 競走馬は経済動物、長い歴史の中で競馬のために特化してきた品種だ。

あの馬のような扱いははつきり言っつて異常でしかないんだよ、大体なんだよあの瀬名酒造つて会社はよ?」

あの馬育てるのにやったことと言えば必要最低限の練習と見学させて参考書読んだだけ、他は仕事と日常生活。幼駒時代は峠レース好きなただのペット扱いしてたつて?」

なんでそれであんな怪物生まれてんねん!! そもそも馬に参考書読ませて試験合格させとるんじゃア!!」

「落ち着けよ、あそこがやべえのは今に始まったことじゃねーだろ。そもそもうちの太竹をなんも考えず峠レースに呼びやがったんだから。」

それより高知が考えたダート馬を芝で走らせる方法だ。芝でダメならその下の土を走りやいってか…なるほど、分からん」

「高知じゃなくで群馬だよ。所属は高知競馬になつてたが群馬を拠点にしたままだしな…まあ、それでも意味わからんが」

「道理つちや道理ですよ、芝で走れなくても土ならダート、芝よりかは砂に近いっす」

「そもそも芝ぶち抜いて突っ走ることこそとも異様だ、どんな脚力をすればそんなこと考えるつてんだ。

普通嫌がるか加減して芝に対応しようとするのが馬つてもんだ、見ろよ、この踏み込みを変えるタイミング」

厩務員の一人が足跡の写真と競馬場の地図に足跡のあった箇所を記したものを並べる。

「どう見ても古海の加速指示で自分から踏み込みを深くしてやがる、録画を見たが明らかにやべえ足使いだつたぜ。」

今までのストライドからピッチに切り替えてやがるんだ、それも意図的に掘り返す気満々に蹄の角度まで考慮してな。

それまではずっと最後尾の殿、一般的なストライドで他の馬の後ろ、偽装と体力温存してやがったんだ」

「第4終わりから最後の直線はただのピッチじゃない、完全に山登りの足に変えてやがる。完全に馬が考えて変えてやがるときたもんだ。まるで登山家のピッケルみたいに足を地面に突き刺して、思いつき蹴飛ばして超加速。そこから小刻みに足を刻むのではなく超加速を生かしたロングストライド、ストライドとピッチを混ぜた荒業だ。

そりゃガッツリ足を土に食い込ませれば脚力を推力に変換するには効率もいいだろうが…普通は足がダメになっちゃう」

「ハルウララちゃんの体が頑丈なほうだからこそできた事、だろうな」  
「そもそも馬がそんなことしようなんて考えるもんか、普通ならな…」  
室内にいる全員の脳裏に、群馬トレセンのコース脇で車雑誌に夢中なあの馬の姿が蘇る。

「あいつの入れ知恵つすよねえ、蹄の角度から足の切り替えなんて普通教えられねえつすよ」

「そもそも土となっっちゃディーブ以上に走り慣れてるだろ。群馬の峠坂路、あれ全部土だ…悔しいな、完全に見抜けなかった。

あの状況に限って言えば、ディーブ以上に脚質にあつた最高のコンディションだったわけだ」

「タイムパラドックスが土だと妙に走り慣れてるってあいつ言ってきたけど…マジで遠征させるかもしれないですね」

「半端じゃねえのは脚力もさることながらそれを支えた体幹もだな…内ラチギリギリでここまで力を込めて踏み抜くなんざ自殺行為も良いところだぜ、少しでもブレたらラチに突っ込んでしまう」

「自殺行為、ねえ…」

事実、そうだったのだろう。そうでもしなければディーブインパクトには勝てない、そう踏んで彼女たちは命を懸けたのだ。

宝塚記念を終え、その日の日程を終えたハルウララが騎手と共にその日のうちに群馬にとんぼ返りしたのは記憶に新しいのだ。

理由は無茶な競争による負傷、その治療と入院のためだ。その容態と詳しい状況はディープリンパクトと共に同じく群馬のとある動物病院へ向かった小泉たちから栗東厩舎には報告されていた。

騎手である古海の許可を得て知らされたハルウララの体に刻まれた傷は、聞いただけでも並みの調教師や厩務員なら身の毛もよだつような負傷のオンパレードであった。

もし彼女が中央系列の動物病院に入院でもしたら、おそらく大パニックからのすったもんだが起きて治療どころではなかっただろう。

彼女はそれほどまでの負傷を抱えながら、平然と我慢してみせていたのだ。

「ウララちゃん、大丈夫なんですかね。あんな大怪我のオンパレード聞いたことないっすよ」

「テキ曰く、とつくに峠は越えて快方に向かつてるっていう話だが：まさかあのバケモノが群馬に拠点構えてるなんざ思ってもみなかつたぜ」

獣医師としての憧れを止められず人として大切なものを捨ててしまったような男、その覚悟ガンギマリゆえに凄腕である仮面の獣医、日本の獣医会に精通していれば一度は耳にした都市伝説だ。

彼は名前すら普段は忘却しかけているらしく、覚えてはいるがさつと頭に出てこないのでまず名乗る事が無い。故にドクター、そう呼ばれる人間の成れの果てである。

「信じるしかねえだろう、あの野郎の腕前は一流なんだ：腕前はなー」  
「それは聞いたことありますけど：ほんとに良かったんですか？  
ディープの遠征前検査って理由付けてわざわざ群馬に放り込むなんてことして」

「あいつの検査に文句言う奴はいねえよ」  
「そういう意味じゃなくて：ディープ、負けた後あんなに落ち込んでたじゃないっすか：」

「正直みているこっちも辛かったよな、チップ埋め込みの時も心ここにあらずって感じで無反応：最近はご機嫌な姿しか見てなかったから違和感しかないのよ」

「まああいつもいろいろあったからな」

やや歯切れが悪そうに厩務員は頭を搔く。デイープリンパクトはひどく落ち込んでいた、勝負に負けた以前にまるで何か別の物に押しつぶされそうになっているように見えた。

理由は彼らも知っている、とても信じられない話であり極めてオカルト的な話ではあるが現実に行き来していることだ。

「あれですか、デイープリンパクトに勝つ馬はみんな大怪我しちまうってヤツ」

「偶然なんだろうが…実例がなあ」

デイープリンパクトは勝利の女神に愛されすぎている、故に彼に勝つ馬は押し並べて勝利の女神に嫉妬され呪い殺される。

デイープリンパクトを育て上げた育成牧場の厩務員や従業員たちの間にはそんな噂が流れていた。

曰く、デイープリンパクトにかけついで勝った馬は必ず怪我をする。曰く、デイープリンパクトに喧嘩で勝った馬は必ず気性難になり競走馬に成れなくなる。曰く、デイープリンパクトよりも健康な馬は必ず病気を患う。

曰く、曰く、曰く、そんな噂がその牧場内にはこそそこそとささやかれており、厩務員や従業員の間では不運なヤツとして苦労人というカテゴリーであった。

そのためか厩務員たちからは目を掛けられることが多い反面、不運を直接見ることの多かった牧場内のほかの馬からは孤立気味であった。

もちろん栗東厩舎ではそんなことは全くない、そんなものはただの偶然に過ぎないのだ。しかしデイープリンパクトの周囲ではそういった事例が起きていたという事は頭の片隅にはおいていた。

かけついで勝った馬は次の日にかけてで派手に転倒しこの世を去った。喧嘩で彼に勝った馬はそのままどんどん気性が荒くなり過ぎて制御不能となり殺処分された。

デイープリンパクトより健康的と言われた馬は本格調教目前に骨折、調教もままならず厳しいリハビリもむなしく用途変更からの肥育

コースに入った。

全部偶然だ、何故なら栗東厩舎に入ってからそんなことは一切起きていなかった。彼は常に練習でも全力で、常にトップの成績で栗東厩舎の競走馬を牽引する馬であった。

「まったく…なんでこういう時に限って…」

だからこそ、これまで実戦の場においては全くそのふざけたジンクスが発揮されることはなかったと言えるのだろう。

なぜならデーブインパクトは勝っていたからだ。クラシック3冠を制し、先の宝塚記念での敗北までずっと負け知らずでここまで来たからだ。

だがこれはどうだ、ハルウララの無茶な自滅は結局のところデーブインパクトの持つ不快な噂の通りになってしまっている。

「そうは言ってもよお…あんなん見たら、何とかしてあげたいじゃないか。ウララちゃんが元気な姿を見れば、多少は気分も晴れるだろうよ」

「だといいがねえ」

厩務員のその言葉に調教師はやや齒切れ悪そうにして天を仰ぐ、そうやってほしいがそうならなかった場合のことも考えなければなるまい。

ともすれば安全面を考えてフランス遠征を取り止める方向もある。せっかく日本最強ともいえるデーブインパクトで挑める凱旋門賞を回避する、そんな悪夢を思うと少しばかり陰鬱な気分になった。



自分は呪われている、そう生まれ故郷の同族からは陰で言われているのは知っていた。

自分より速い馬、自分より賢い馬、自分より強い馬、まだ小さなころは同じ場所にたくさんいた。

自分は確かに強くて速くて賢いほうと言われていたが本当に飛び

ぬけていた馬は自分より多くいたのだ。

だからそんな馬に得意分野で勝負を仕掛けられたら当然ながら負けた、負けて悔しくて、次は勝ってやると努力した。

だが前より実力が付いたと感じた頃には、その馬はいなくなっていた。最初はただの偶然だと思って気にしなかった、突然昨日までいた馬がいなくなるのはままたあることだ。

もう二度と顔を合わせないこともあれば、次の日には戻ってきてたり、ひよんなことで別の場所に居るのを見たりする。

最初はそんないつものことだと思っていた、自分が負けた馬がどんどん消えているという規則性に気付くまでは。

それを気付いた馬は当然ながら自分以外にもいて、同じ牧場で暮らす同年代から先輩まで広まるのはそうかからなかった。

初めは偶然だと反論しても、結局は誰も信じてくれず噂を聞いて遠巻きにしていくことが多くなり、精神的にきつい日々が増えた。

それは人間たちも気づいていたが、気味悪がるどころか逆に手を焼いてくれることも余計にほかの同族には面白くなかったのかもしれない。

自分はある意味孤立していた、それならばいつそ一人である方が気楽だと思いたくなるくらい中途半端に。

だからどんな時でも自分は勝つために必死だった、勝っていれば自分の友達は傷つくことがないから。

どれだけ足が痛くても常に先頭に立って走った、足が痛くて血が出ても絶対に足を止めるわけにはいかなかった。

勝っていればそんな噂は消えていく、勝っていれば仲間外れにされないで済む、勝っていれば心がきつい日も無くなる、勝っていれば。(勝って勝って、なのにこの様…なんでいつもこうなんだ)

俺は悪くない、俺は何もしていない、そう訴えても無駄だった。結局はみんな自分がおかしいと噂をする。

だからそう言わせないために強くなった、勝って当たり前だと思われて、負けると何かが起きるそんな自分を隠したかった。

勝っていればそんな噂は消えた、勝っていれば見る目が変わった、

勝っていれば何も問題はなかった。

今更ながら、これが今の日本最強と言われている馬の姿か。

(泣けるな…)

だらしがない、もしこんな状況でなければこの病院の馬房を見ただけでとても興奮したかもしれないのにそんな気すら起きない。

綺麗で清潔な床に真っ白な壁、眩しくない天井の明かり、普段の寝藁とはまるで違うふかふかの寝床に真っ白い布を掛けたモノ。

何より用足し用の砂が入った場所も元から完備で匂い消しの機械もついているらしいからこれほどすごい部屋はないだろう。

それなのに全く心が動かない、そんな自分がとても薄情なヤツの思えてなおさら嫌になる。

『ちわーす、三河屋でーす』

『なんだよミカワヤって…病室なんだから静かにしろよ』

『なんだよ連れねえな、わざわざ顔見にきた親友になんて物言いだ』

病室の扉を何の遠慮もなく押し開けて入ってきた親友、シマカゼタービンのほうを見てムスツと一言いうと彼はやれやれと言った様子だ。

まったくもって変わらない、そんなシマカゼタービンの姿を見て少しだがデーブインパクトは気分が軽くなった気がした。

『で？なんだってそんな落ち込んでやがる、そんなに負けたのが悔しいか？』

『…』

『ほほう？その顔はそれだけじゃないって感じかな？なんだ、なんかあったんか？まあ話しづらいなら無理には聞かんが』

本当に察しがいい、少し自分の顔色を感じただけで簡単に察して、なおかつあまり不快にならないように気を利かせてくれている。

こいつになら話してもいいだろう、こいつのことは信じている。

『話を、聞いてくれないか…』

『長くなるなら嫌だぞ』

『すぐ終わる、俺のちよつとした身の上話だよ』

『ほーん、そーいや聞いたことなかったな。いいぜ、聞かせてみるよ』



やっぱりお前は良い奴だよ。



なるほど、こいつが何言いたいのかは大体わかった。うん、良くある話だ。

つまりなんだ、まあ生きてりやよくある誹謗中傷が今回はちょっと悪いほうに入っちゃったわけね。

『つまりお前はウララが怪我したのは自分に勝ったせいだって言いたいわけだ』

無言で頷くディープ、うんうんわかるわ。そういうのって陰で言ってるって思ってるの本人だけで、実は後ろにその人いるってのに気付いてないだけってあるのよ。

そりやそうだろ、同じ職場なんだから偶然そこに居ることくらいあるわい。いや懐かしい、前世じゃこんな連中ばかりうちの部署に集まってきたからな。

みんな仕事できるからやつかまれてたり必要なのに地味で理解されてなかったりで大変そうだった、まあ根は良いしタフな連中ばかりだったから少しケアしてやればすぐ元気になってくれたね。

支社長曰く本社でもちよつと目に余るとか上層部でも問題視されてるって話を聞いたことがある、うちの部署で引き取った連中の履歴書見てた支社長が相談したそうな。

ちなみに同じ部署なのにそういうこと言っちゃう男はそれとなく自分の存在アピールするとちよつどいい仕返しになる、大体その場のノリで口に出るタイプだから『あ、やっべ』って顔するの、いやー良いお顔です事よ。

あ、でも女性は逆恨みしてくるからダメね、本当のこそこそってやつ意味を教えてやらなきや。

『俺はぐあー!』

『ぼつかじゃねーの』

しよげたまま力なく笑うディープの頬に右足をぐりぐりしてやる、

ほれほれそんな馬鹿なこと言う口はこの口かあ？

いやあ懐かしい、そういやうちの中途採用の人もめっちゃ苦労したとか言ってたなア：愛嬌のあるおっさんでしたよ？ラノベみたいないケメン美女なんてそうそうおらんわ。

あの人の場合ちよつと酒勧めて発散させたら最近発足した海外輸出部門で活き活きしてる。

語学関連がそこそこ得意なんだってさ、ただ前職だと役に立たない国内営業職に放り込まれて四苦八苦したそうだな。

今はドバイルートしかないけど細々ゆつくり増やすって計画したら目ん玉キラキラさせてたっけ。

『あばばば』

『じゃあ何か？あいつはお前が負けたから死にかけてたでも？』

ディープインパクトは何も言わない。まったく：なに悩んでんのかと思っいたら下らねえ。

『ばーか、そんなもんあるわけねーだろ』

『だが…！』

『だがもダガーもねえんだよ、忘れたのか？お前らのいる世界はそういうもんだらうが』

俺はすつかりしよぼくれたディープにもう一度右前足を上げて蹄の先を突き付ける。

『お前ら競走馬はレースに命かけてんだらうが、そりやそうなることもあるうさ。お前らはそういう世界で生きてんだ。』

仮にそうなったとしてそれを他の馬のせいにするなんざ逆恨みも良いところ、何がどうあれレースに出たってんなら腹あ括ってんだらうがよ。

そうじゃねえならそんなもんやめてさっさと肉にでも何でもなっちまえて話だ。聞く価値も無い、見る価値も無い負け犬の遠吠えよ。

それなのにお前ときたらわざわざそんなもんまで勝手に背負うよ。うなこと言いやがる。馬鹿なことしてんじゃねーよ』

『お前に何が分かる、俺は三冠馬だ、何頭も馬を蹴落としてきたんだ。』

あいつ等だつて強かった、俺が居なきやあいつらが勝つていたかもしれないんだ。

だが俺が勝つたんだ、あいつらの先を俺が奪つて、俺はここまでやってきたんだ!!』

『はん、そんなもん俺だつて見たし感じてきたさ。だがよ、生憎俺の知つてる競走馬にはそんな馬鹿なこと言つてくる連中はいねえな。

勝負事つてのはそういうもんだ、勝つた負けただであーだこーだうだ言つてんじゃねーよ』

負けたヤツの思いを背負つて走る、自分が勝つた相手に思いを背負つてその先を走る、確かに言葉はきれいなもんだろうさ。

事実そういう事はあるんだろうさ、互いを思いやつてのやり取りならこれほど尊いもんはねえだろうよ。

だがそうじゃねえならそれは結局ただの重り、ただの自己満足、自分で背負うと決めたならそれでいいが自分勝手に背負わせるなんざ言語道断。

それ以上に、その思いを自分から背負つて走つてるとか思いこんで自己満足に浸つてる目の前のこいつはもつとダメだ。

何様のつもりだよディープリンパクト、てめえはそんな特別なスペシャル様かよ、ふざけてんじゃねえぞこのバカ、そんな寂しいだけだろが。

『お前になんか分かるもんか、人間とだつて対等に勝負できるようなお前にはわかるもんか。俺たちのことなんてわかるわけがねえだろうが!!』

お前は俺たちのレースを走つたこともない、俺たちと一緒にレースを走つたこともない、好き勝手走つてるだけじゃねえか!!』

『分からんね、こちとらお前さんみたく世間を賑わせる大スターなんてもんじゃねー普通の輓馬でただの走り屋よ。

毎日毎日レースのために走つて走つて走りまくるてめえらみたいな生活なんざ分からんさ、どんなふうに生きてるかなんて皆目知らんわ。

俺は毎日毎日会社で汗水たらして働いて賃金貰つてその日を暮ら

し、夜の峠でひとつ走りするのが趣味の一般人よ。

そんな俺でもわかるような単純なことに気付きもしねえ有名人様の考える事なんざあ皆目見当つかねえな』

『なんだと？何が分かってないっていうんだ！』

はつはー！そんなんだからお前はダメな奴なのだー！！：いや本気じゃねえよ、こいつマジやばい凄い奴だし。

『分かってないよ、俺ちゃんホント悲しいぜ。おうお前、お前の前にいる俺は誰だか忘れたか？俺の名前を言ってみろ』

『なんだよ急に』

いいから言えよ、ちよつと恥ずかしいんだから。

『俺の名前を言ってみろ！』

『一体何だつてんだよ！シマカゼタービン!!』

『そうだよ、俺はシマカゼタービンだ。てめえにいつも連戦連勝!!お前が全戦全敗してるライバル様だぜ!!』

なあ、全戦全敗勝率0%の中央最強三冠馬様？どうだい、そのしよげかえつてる理由は本当に言い訳になるのか？』

ディープは茫然としている、当然だぜ、俺らしくもねえ中二病発症してんだからな。クツソ恥ずかしいぜ、だが、俺、負けない!!

『そんでなんだつて？お前に勝った連中はみんな怪我してるんだつて？じゃあ俺はどうなんだよ、ん？怪我なんてしたように見えるか？』

てめえの言い分じゃあよお、俺はお前に勝つたびに大怪我してなきやいけないんだがなア？』

よく見ろよお前、お前の目の前にいる俺は一体どうなってるように見える？

『生憎、てめえをけちよんけちよんにした後も俺は怪我一つした覚えがねえなあ。』

むしろ気分良くて常に8時間快眠、次の日は体の調子が絶好調、便通よろしく気持ちよくなって具合だぜ？』

俺はな、知ってたんだよ。あいつの中にあるああいう怖いヤツを、お前の中にもあるああいう怖いヤツを、ずっと前から、人間だった時から分かってたんだ。

でもそれでも、俺はずっとやらせないようにしてきたつもりだったんだよ。ああいう奴が持つあの力は、時にどんな働きをするかわからないから。

『どうだい、なのにお前はそんなこと気にして本気で走ってけちよんけちよんだ、おいおいなんだよ情けねえ。』

それがほんとに中央最強の超人氣競走馬様の実態かよ、俺の最高のライバル様のお姿かよ。

こんなの見たらみんな失望間違いなしだ。あーあー、これじゃあ大竹さんもみーんなどうってことないって言われちゃうなあ』

『んだとてめえ！てめえにそんなこと言って良い権利はない!!大竹さんやあいつらまで侮辱するんじゃない!!』

激昂したデイープが俺を睨んで立ち上がり、耳を後ろに引いて睨みつけてくる。まったく、手間かけさせやがって。

『だったらそんなの気にしてんじゃねえよ、そんな根も葉もない噂だの呪いだのなんだの、背負ってきた覚悟だの、あほらしい。』

お前はお前らしく、全部ぶつちぎって最強になりやいいんだよ。勝負は勝負だ、勝ち負けは当然なんだからよ』

『なに?』

全く、お前は天才でバカだなあ。前世の部下たちを思い出しちゃうぜ、今のお前はあいつらと同じだよ。

『気にすんなよ』

やるときはやっちゃもうんだ。ここで終わってもいいって本気で思ったら、ああいう奴は平気で身を差し出しちゃうんだ。

何人いたと思ってるんだよ、俺の部下にそういう連中が。そいつらを何度ぶん殴ってやめさせたと思ってるやがる

俺みたいな平凡な男に出来ないことをあいつらは平気でやって、満足しながら散ろうとしやがる。

馬鹿でいい連中ばっかき、あいつらはみんなそんな頭のいい馬鹿ばっかだ。ああいう奴らこそ、馬鹿みたいなのんびりやるべきだったんだ。

『何勝手に背負いこんでんだ、お前が勝ってきたレースのそいつらが

そうお前に願ったのか？そうお願いされてきたか？』

『それは…』

『されてねえんだろ、誰も背負わそうなんざ考えてねーよ。あいつだって、お前のせいだなんて毛ほども思っちゃいねーよ』

するわきやあねんだよ、次ぶつ倒してやるとかそんなバツカに決まったら。俺が知ってる中央の連中はみんないつもそうだしな。

お前が自分を責める理由なんてない。勝手に背負いこんで勝手に気負うなんて、そんな馬鹿らしい。

『お前が走ってた時にあいつが無茶してケガした、それだけだ。お前のせいじゃねーよ』

お前はお前が勝ちたいから勝てばいい、勝って勝って勝ちまくれ、思う存分暴れて自分勝手に笑えばいいのさ。

だからよ、そんなしよげ返ってんじやねえよ。

『お前、お前、まざがあ、おばええええ!!』

「おっフ!？」

急に体当たりしてくんじやねえ!! ったく、鍛えてなかったら転んでたぜ。あーあーそんなくしゃくしゃにして泣いちゃって、イケメンさんが台無しだぜ…

イケメンだよな？馬基準のイケメン度合いなんて一切分からんから普通に前世基準で見てるだけだが。

あ、ここら、グイグイ来るんじゃないよ全く。ほらほら背中ポンポンしてやるから…あ、届かん。しょうがないからわき腹ポンポン。

『泣け泣け、いっそ泣いてすつきりしちまえ。すつきりしたらほら、練習付き合っつてやるから』

『ヴアアアアア!!まげだああああ!!』

おーよしよし、やっぱ必要な時は大泣きした方がすつきりするよ。ま、周りの目は気にする必要あるけどね。

## 第42話

20XX年某月、春麗らかな風の通りマンションの一室、外の天気も良く快晴で気持ちのいい空気が部屋を駆け抜け実に良いお昼寝時。しかしその部屋の主人たる女性はまったくもって穏やかではなかった。

散らかり放題になってしまったデスクに突っ伏すように身を預け、スマホを片耳に当てて会話する彼女は終始気が気ではなかったのだ。それはもう今後の進退窮まったかのような絶望感に打ちひしがれていたのだ。

「…プロデューサー、マジで言ってます?」

《マジで言ってます》

電話越しからでも感じる真面目な雰囲気、それには温厚な彼女も愛想笑いを引つ込めて普段はしちやいけない鬨め面をした。

プロデューサーさん曰く『声優さん、人気だからお仕事追加です』とラブコール。クソである。

「プロデューサー、解って言ってますよね?今期直近、私、シマカゼ役、ゲームだけで何作やってるか」

《…3作?》

「6作だよ!!アニメにゲームに音楽CDその他もろもろ含めたら二桁余裕だよ!!直近元ネタシマカゼのキャラで6作!!」

昨日だって吹き替え、収録、音声作品その他もろもろがつつりやっただじゃアないですか!!

ここで何?バイオと本家でまだ増やせと!!明日はイニDアーケードの収録あるって知ってますよね!!」

それだけでも多いのに自分の場合、作品一つに対して作品配給地域の言語の数だけ増えるのだ。

それは彼女が声優としてやっていくために磨きに磨いた特技が関係している。彼女は声優という仕事に希望と夢を以て踏み入れた普

通の社会人である。

テレビ番組に芸能人のようにたびたび出演できるくらいにはビッグな声優になりたいと夢を見て頑張ると決めた夢多き若者であり、故にその夢がどれだけ甘い物かも最初から予想はしていた普通の女であった。

事実、声優としての世界は甘いものではなく苦難の連続であり、最初は自分よりはるかに才能豊かな同期や実力の確かな先輩たちに圧倒され続ける日々であった。

演技は才能豊かな同期に届かない、それでも現実に抗う執念とほどの実力は備わっていた。だからこそ自分には一つの特徴が必要だと最初から考えていた。

先輩にも天才にもなかなかマネはされないであろう特技、それは学生の時から自慢であった。

「しかもそれも海外に売り出すんですよ!!それがどういう意味かわかりますか!!わからないとは言わせませんよ!!」

それは語学であった、彼女は他の学科の成績に比べて英語の成績は一段上の秀才レベルであった。そしてそれが自慢で勉強にも熱が入り、その熱は他の言語にも波及して興味の赴くままに学習していた時期があった。

その昔取った杵柄ともいえる特技は声優となつてから花開いたと言つて良い。英語だけにとどまらずフランス語、ドイツ語、中国語、韓国語など様々な言語を会得して声優業に持ち込んだ。狙いは受け持った作品を海外に売り込む際に行う『吹き替え』と『翻訳』だった。

ハリウッド映画や海外作品を日本で放映する際に作られるのは原語に日本語字幕を付けたものと日本語声優で日本語訳で音声を差し替えた吹き替え版だ。

その吹き替え版だが音声を差し替える都合上、どうしても元の役者演技を犠牲にするのが欠点と言われている。その作業を当然だが日本製のアニメや映画にも行う。

そのアニメ部門、とりわけ自分の担当した自分のキャラクターに絞って売り込んだ。



元作品の声優が元作品の演技をそのままに別言語で吹き替える、セリフの意味やストーリーを別言語版声優に教えた時にその国にあつた言い回しやジョークを提案してもらいグレードアップを計る、結果はすぐには出なかったが大成功と言えた。

声優としては並みでもこの特技のおかげで一流と胸を張れる、何より言葉のおかげで仕事は日本だけにとどまらないから仕事にあづかることもない。

濡れ手に粟のようなウハウハ人生は望んでいないが、好きな仕事を気の向くままにやれてあぶれないで金に困らない人生を手に入れた、そう思っていた。

「しかもその後だってアメリカの番組に出なきゃならないし、その流れで向こうの声優さんに作品のレクチャー、その次は向こうの作品で声の収録に映画の日本語吹替作業…やる事が、やる事が多い!!」

しかし彼女は失念していた、その特技が世界的に見ればどう見えるか、会社からしたらどれだけでもないお宝であるか。

彼女はできるのだ、その作品のシーンの意味や売り、話運びの機微、キャラの性格やストーリー、それを外国人の声優に、翻訳担当に、配給会社にきちんと説明できるのだ。

日本のアニメという独自性の塊であるそれを彼女はそのまま演じて自分を見本にできるのだ、実力で証明しできるのだ、片手間に助言できてしまうのだ。

故に、彼女の仕事は作品を一つ受け持っただけで普通の声優のそれをはるかに上回る量となった。

仮に英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語と六つだけに絞ったとしても7倍である。

そして現実はその数で終わらない、もつと広範囲に供給することになって軽く二桁を超えるのだ。

苦痛である、とにかく数の暴力が苦痛である、演技が嫌だとかそういう感覚を通り越してただシンプルに多すぎて終わりが見えず嫌になる。

《さすがローカライズが完璧な女》

「ああ神よ、作品の終わりが見えれば一区切りついてやりがいと達成感に満ちながら次の仕事に邁進できたあの頃はいずこ」

《神様なんて当の昔に休暇中でしょ、立川でルームシェアしてる。バイオは一応元からあるし。ウマ娘イベントは本家だからシマカゼカウントは——》

「おんなじだよお!!バイオは馬がいるのにコラボDLCとか正気かあいつら!!」

持ち味を生かせよ!!馬がいるだろバイオさん!!なんでこの期に及んでウマ娘を地獄のラクーンシティに放り込もうとしとるんじゃない!!

何?なんなの!!?いくら時代がゲームに追い付いたからって、やってみたら爆当たりしてから挑戦的すぎませんかねホントにここ最近!!  
そりやOB:Reの形態ならDLC方式が輝くんだろうけど、おかげでラクーンシティさんの拡張と生存者陣営の強化に歯止めかかりませんが!?

それでも死んでると言われればそりや死ぬよねっていう地獄がラクーンシティなわけですが!!人が増えればクリーチャーも増えるからそりや死ぬんでしようよ!!

だけどいくら売れてるゲーム同士だからってこんなお遊び要素受けるわけないでしょうが!!

そもそも客層が違いすぎるのにこんなDLC買う奴がいるかあ!!ウマ娘ちゃんたちにこんな覚悟を要求するんじゃない!!

「っていうかウマ娘もおかしいでしょ、あそこ突っ込むってことは敵キャラになるのも承諾してんでしょ?」

ゾンビOKなの?エンディングもきついのあるよ?あのゲーム追加キャラにだって容赦しないしかなり作りこんでくるからガチなんだけど」

《第一弾は群馬だよ?むしろノリノリ。ゾンビどころかリツカーとかサスペンデッドとかのラフを向こうから提案してきたし。

エンディングもペアエンドはむしろ重要事項とか言ってる、というか高知の方にも声かけちゃってウララちゃんが:あ、OKでた》

「もつと中央見習おうよ地方!!大切にしようよ!!みんな伝説だよ!!」

《大切にしているから活躍してもらいたいんだよ。根本的に思考回路が違う》

むしろ子供の活躍を喜ぶお父さんお母さんの思考回路だよあそこの馬主さんたち、というプロデューサーに彼女は頭を抱えた。

事実である、馬に命を懸けている中央シリーズの馬主は当然ながら馬の稼ぎが生活や生業に直結するため色々シビアである。

しかし群馬地方競馬の強豪馬主は一樣にしてそうではない。ほとんどの場合は生業を別を持っていて主力の稼ぎが馬ではないが故にいろいろと緩く、思考回路からして気安いのだ。

活躍した彼ら彼女らは家族である、社員である、当然生涯の面倒は自分で見るが無理のない範囲で仕事してもらおう、ある意味で中央より自由で活き活きしているかもしれない。

大切だからこそもつと活躍してもらおう、無理のない程度には嬉々として協力してくれる、もちろんやりすぎると食い殺されるのだが。

だからってゾンビ化ホクリクダイオーやらサスペンデッド化ノンファンクとか誰が得するんじゃない!!あ、クリムゾンヘッド出すの?え、シマカゼは直接これになるの?あーもうめちゃくちやだよ。

《ちなみにだけどこれがうまくいったら中央組も仕事増えるよ、そろそろなんか出ないと偏りすぎるから》

「よしやろう」

《相変わらず即答だね》

「ふへへ、何言ってるんですかプロデューサーさん…みんな幸せになりましょうよ」

燃えろ、みんな燃えちまえ…みんな仕事と言う煉獄の中でホットなチャチャチャを踊るがいい!!

お金が入ってもそれを使う機会がなくて膨らむ銭袋つてのはなあ、なんだかすごく空しい気分にもなるんだよ。

寡黙で不愛想な人間だって大金みると思わず笑みがこぼれるのはそいつの使い道があるからなんだ。

《予想はしてたでしょ?ただでさえ群馬は明太子方式でウエルカ

ムだし」

「ちつくしよー…そりゃ一回やるかもとは思ってましたし、いつかやるだろうなってのは分かってましたよ。

ええその時は自分の出番だつてのもまあ期待はしてましたよ、これで別の人に振られてたらまあ制作の頭疑いますよ」

「というか自分にしかできないのだ、同じ声で、同じ演技を、同じように別言語でやれる声優は所属事務所にはいない。

ついでに演技も本家に似せるように多言語版声優に教えられるのも自分しかない。

このレクチャー代金もほどの値段設定なのだが意外といい稼ぎになるのだ、分母が多すぎて。

《ならもう一つもいいよね？ブルアカの追加オフア——》

「良くねーよ!?忍術研究部ってシマカゼじゃなくてダイオー担当だったでしょ、テイオーかダイオーでやるもんじゃないの普通?」

「なんでシマカゼが主軸やつてんの?そもそも担当は三女神SOSできちつと決めてましたよね!?増やさないって言っていましたよね!!」

《アニメのせいだねえ。パヴァーヌ編後半からすっかり板についてちゃってるでしょ?あれであっちとのつながりもシマカゼって括りになっちゃってるみたい》

あの透き通る世界観は今も人気であり彼女も好きなのだが、なぜかその最新アニメに自分の持ちキャラが作品の枠を超えて出演しているのである。

理由は単純、アニメ化故にだ。元ストーリーを時系列から含めて再構成し、これまでの行われたイベントストーリーも含めててんこ盛りな豪華ゴールデンバージョンなのが件のアニメなのだが、その過程で当然ながら進行過程で問題が出たのである。

元々ゲーム用のシナリオであり、またその形態上仕方のない部分や当時はそれでよかったか無理を通せた部分、運営も正直テコ入れた部分などがより顕著に立ち塞がってきたのだ。

しかしだからと言って下手な取り繕いやアニメオリジナル展開やキャラクターを安易に作りその場を凌ぐというのも考え物だ。

その場しのぎの変更は時に取り返しをつかない矛盾になりやすく、アニメオリジナルキャラクターの追加はよく考えなければたやすく炎上するか嫌われ者となる。

それは日本アニメで散々取り上げられやらかされてきた負の遺産が証明している、故に舵取りには細心の注意が必要であった。

固有のキャラの出番を増やして体裁を整えるのも難しい。これは既存のキャラの多さと作中の勢力図、すでにその手のフォロワーにキャラを動かしている点、そしてアニメ化初代制作時の経験を鑑みての結論だ。

一定のキャラクターを鼻肩すればそのキャラクターの所属する勢力を多用することになり、現実世界のファンからのリスクトにも影響を及ぼす。その気はなくとも変に優遇しているように見えたら面白くないだろう。

全て平等に、とはどうやってもできないのだが露骨にスポットを当ててしまうのは良くない。

主人公を固有ファンの多くいるキャラクターや勢力に大きな肩入れをすることなく無理がある部分を補佐する役割ができて、それでいて下手に既存ファン層を刺激しないくらいには認知もあり、必要な時に引つ張り出せる裏方として納得できるような主要勢力ではない第三者な人気キャラ。

そんな都合のいいキャラクターなど都合よく：居たのである。原作において何気ない人気を誇っていたコラボキャラの彼女であった。

恒常化されたイベントをクリアすればすぐに手に入る新規プレイヤーにも優しい入手性の良さ、癖はあるが使い勝手の良いキャラステータス、異世界出身という既存キャラとは違う視点と能力を持った特異性、何よりイベントキャラなのでいろいろ気合いが入った演出を見られるので何かと使用率の高いキャラであったのだ。

その人気に目を付けた運営が会社間協議と権利者にも許可を取り、さすがに無理なので省いていたコラボイベントをストーリーに突っ込んでみれば意外としっくり来てしまう始末。

既存キャラにはない思考や言動、趣味の酒と車があの世界ではめっ

たにない特技が光り、ビジュアルと性格もなんだかんだと人気を帯び、それでいて目標が別設定されてるから変に自己主張せず既存キャラの出番を侵さない。

今ではすっかり馴染みのアニメ版キャラと化した異世界ウマ娘の誕生である。

《これと一緒にコラボ勝負服もお披露目ってことで。良いんじゃない？シマカゼ、勝負服無いし》

「だからってあっちの制服かい、それ着て走るなんてそれこそ想像つかないんだけど…」

まったく、どうしてこうなった。異世界出身だから敵解説のテコ入れに利用されたあとはただの背景の予定でしょ？」

《お願い蹴ってボロクソに言ったよね？あの啖呵、アドリブってバラしてから余計に評判よかったよ》

「それはアドリブでいいからなんかやってって言われたからで、声が付いたら余計にそう感じちゃってつい…ってそれは関係ないでしょ。

あれだつてなくていい出番増えただけの横やりなのに…なんでセリフ増えてんですかね？」

《それが意外と印象良かったみたい》

「私としては演技に難儀してるんですけどね！」

ウマ娘を収録するときにはミスると別作品の演技が出そうになつて冷や汗が凄いのである、この手の同時期制作の辛い所だ。

《そうかな？あのキャラ、ウマ娘でもナチュラルに物騒なセリフを吐いてると思うけど？腕つぶしなら最強だし》

「言ってるだけなのとそこからガチで刀を振り回すのじゃ含ませる意味が違うんだつの…とりあえずイベントのほうは了承しました、できればスケジュールを配慮して頂ければ幸いです」

《あはは…了解、収録タイミングはこつちで何とかするからこれ以上過密スケジュールにならないように釘刺しとく》

「お願いしますね、ほんとに」

《解った、そこは任せて。収録、気を付けてね？次あの国でしょ？例の連中、そろそろ金がなくなってきた危機感募らせてるらしいん

だ。引き金軽いんだからさ、あの国」

「ありやただのガキよ、生憎見知らぬガキの癩癩に付き合ってる暇は私にはない。まあ自分の意見が通らなくて癩癩起こして銃ぶつ放す厄介なガキが権力握れるとかスゲーけど。」

嫌なら見んなつてのよ、それが自由って言っただけで言葉詰まるとか荒らし以下だよ、もう少し煽り耐性と会話身に付けろっての」

あのなんだかんだ言ってヤベーけど夢のあった国が今やあんな様って世知辛い世の中だ。

積み重ねてきたものと言うのは、積み重ねるのには気が狂うほど時間がかかるのに崩壊する時は一瞬である。

それを知っていると有名大学を出ていて頭がいいはずなのに積み重ねなどをしないであほに生きる人間がいるというのは納得の話だ。

《うちの新人まで調べ上げてネタにしてきた努力は凄いと思うんだけどね、まあ一応賛同してくれたあの王国にまで牙剥いてボコボコにされておいてよくやるよって話だけ》

「相変わらず不思議な人種だよああいうの、あたしやノーマルな日本人でよかったですわ。フレッドとメリッサにや気にすんなって言うって」

《お強いことで》

「チョッキ着てたからノーカンノーカン、45口径のボデイブローは次の収録に生かさせてもらいましたよ」

まったくもって不思議な話だ、自分に都合の良い世論に作り替えて国すらも自分好みにしたというのに、結果的に敵がいなくなったから自分が生きられない環境になつて四苦八苦だ。

第2の禁酒法時代とも言われるクリエイター暗黒時代となり数多くの巨匠や原石たちは国を出て、残ったのはイエスマンと事なかれ主義、今や寛容と自由という名のデイストピア。

平等に名のもとにあらゆる面で性差別や人種差別に極端に配慮しなければならなくなり、かと思えば自分勝手な理論をまき散らしてダブルスタンダードを繰り返し、一挙一動でどんな難癖を付けられるかわからなくなつたあの国は良さであった自由な色彩を失つた。

平等ではない、人種差別的である、性差別的であるなどの正義の名のもとに様々な恣意的解釈や拡大解釈が行われ自由を失い差別が横行し、自由な発言も何もかもが自主規制する羽目になってしまった抑圧社会である。

毒は国家の中枢や司法関連にまで浸食し、人権を侵害し公序良俗を乱す表現を規制する法が可決され、新たに発足した委員会が行う法を恣意的に拡大解釈した検閲が常に国民の平穏を苛むのだ。

かの国の誇る自浄作用もキャパシティーオーバー、今回の禁酒法時代は長く続きそうである。

アニメーションではアジアに負け、実写映画ではヨーロッパに負け、ハイテンションではインドに負け、火薬量ではかつての自分に負けている。

栄華を極めたハリウッドやテーマパークなども本家本元はかつての輝きを失い各国の支部が必死に盛り立てて延命し、日本語吹き替え版コマンドーやダイハードなど吹き替えの帝王が逆上陸して大ブレイクする現状を自分で作っておいて何を言わんや。

その有様にまともな国は『こうなつては叶わない』と防備を固める根拠になってくれたのはある意味で怪我の功名か。

《ま、対策はしているけど一応ね？やばくなったら図書館か警察に逃げてね》

「解ってますって」

現実には醜いものだ、自分達がやる手口を相手にやられないなんてそれこそアニメの世界でしかありえない。目には目を、歯には歯を、古来からの言葉通りだ。

ましてや第二の禁酒法時代となったあの国の様相は時代が遡っている。ジャズと酒がゲームやアニメなどに、トンプソンマシンガンがM4カービンとAKに。

煌びやかで、下品で、面白くて、色とりどりだった夢の街の看板は無味乾燥な文字や絵ばかり。

シックなスーツの宣伝はモデルがボンレスハムで粘っこい笑み、ゆったりサイズのダボダボ部屋着にスマートマッチョが真っ白い歯



でスマートな笑み。

隠れ酒場が無修正モノショップや隠れシアターに変わり、輸入監査をすり抜けさせた物品を割高で販売し見せて稼ぐ。

それを規制しようとするればそこはあの国だ、銃火器が一般的であるがゆえに引き金が軽くすぐに銃撃戦になり流血沙汰になる。

当然ながら規制する側は重武装化に走り、権力的にも強化されてより過激な取り締まりに走り出す。

そんな姿と強権的な態度に図書館が危機感を持った末に表現の自由を守るために武装化、委員会の検閲部隊と激しく衝突するという小説が現実化する事態にまでなり世間を震撼させた。

死人が少ない以外は焼き増しどころか悪化しているのである、死人が少ないのは銃と同じく防弾装備も流通が増えてありふれているのと同時にファン根性ゆえにという変な噂もあるが、あの国は小説の舞台であった日本よりも武器にあふれかえっているのだから奇跡だ。

この時代、真つ当な警察をやろうとするのも大変なのがあの国である。いやそこは別によくね？と言うところまでうるさい奴らがいるのだ。

(どーしようかな、いやマジでどーすりゃいいのよこれ、結局また増えちゃったよお仕事お…)

なかなか考えが纏まらない、悩み続ける思考にさらに頭を悩ませながら電話を切る。

ため息が止まらない彼女は何度となく見直した資料を取り出そうとして、別作品の資料ともごっちゃになった机を見てため息をついた。

「…まずは片づけるか、こんなんじや演技もごっちゃになっちゃうよ、もうっ」

何はともあれ今は直近の作品であるウマ娘に集中しよう、彼女はそう切り替えて『R6S・The Animation』や『ブルーアーカイブ＋P・V013』と題された台本を丁寧な手に取って分別して元々入れていた足元のボックスに戻す。

それを何度か繰り返し、机の上には必要な資料しかない綺麗な状態

になったのを確認してから探していた資料を手にしてページを開いた。

表紙に『ウマ娘プリティーダービー・ウマ娘キャラクター資料』と書かれたそれには、これまで発表されてきた多くの擬人化された競走馬たちの姿がある。

自分の先輩たちが描いてくれた先代の英雄たち、皇帝、タブー破り、影を乗り越えし者、黄金世代。中央が誇る伝説であり精鋭。

皇帝の血を引き不屈皇女と呼ばれたトウカイテイオーの生き写し、古より継がれてきた奇跡と呼ばれた金髪碧眼のウマ娘、砂の巴御前と世界で叫ばれた葦毛のウマ娘。

鋼鉄のソリのようなものを担ぎ場違いな筋肉を持ったウマ娘、ぼんえいという他業種からやってきて中央を驚愕させた群馬の暴走機関車。

軍用パトロールキャップを被る顔に傷を持つ色黒なウマ娘、不幸続きな生い立ちをもともせず走り抜き名を馳せた最後のメジロ。

片耳に青と白のリボンを飾りフライトジャケットを手にした小柄で猫のような栗毛のウマ娘、見た目は凡庸、中身は猫、されど実力は猛禽類（Ace）。

今や中央に負けぬ一大勢力となった日本地方競馬界、その先駆けとなり牽引してきた群馬地方競馬から放たれた第2世代たちが、世界を舞台に駆けた次世代たちが後に続く。

それは競走馬の世界だけの話ではない、軍民間わず様々な分野での怪物から薫陶を受けた新世代たちがその実力をもって証明し続けたのだ。

そんな彼女らの原点であり育て上げた先駆者、青い短髪にオツドアイの一人だけ明らかに場違いな一般的なセーラー服を着こんだウマ娘。

あの世界でさえ唯一『スポーツカーに足で勝つことができるウマ娘』として生み出された公式公認の野生ボス。

自分が魂を吹き込む相手であり、それでいて今の自分を苦しめる要因である彼女。さてどう演じるべきか、どう演じ分けるべきか…

(うーん、もうちよつと資料を見直そうかな)

彼女の演技に必要な資料は数少ないが、彼女の周囲を知るための援護はごまんとある。

幸いにも彼が活躍した時代はメデイアが発達した2005年周辺からだ、集めようと思えば意外なところからもボロボロ出てくる。

(次の話から06年になるんだよねえ：2006年かあ、あれはやばかったなあ…)

2006年は日本競馬の世界進出に大手を掛けた年であり、世界の競馬が日本に強襲されて涙を呑んだ一年だ。

あの年、日本は競馬ブーム真ただ中であつた。それこそ普段は競馬に興味のない自分でさえ、ある意味オリンピックを見るような気持ちでテレビを見ていたのを覚えている。

それだけに衝撃的な一年であつた、衝撃ばかりの一年であつた。この国はこの年、競馬では異常なまでに強かつた。

『逃げた逃げた！逃げ切つた!!去年に続いてまさかの群馬!!群馬が中央2連勝、群馬のアルトレーネがもぎ取つたあ!!』

2006年10月29日、日本・東京競馬場、第136回天皇賞(秋)

一着・3枠6番・アルトレーネ・半馬身

『アルトアイネス！アルトアイネスが取つた!!粘つて粘つた大逃げ勝負、姉妹揃つて逃げ切つた!!逃げの双子座、ここにあり!!』

2006年11月19日、日本京都競馬場、第23回マイルチャンピオンシップ

一着・7枠13番・アルトアイネス・ハナ

『ブルームブルームを躲してコスモバルク先頭が変わつた!!内からボーバンズ、外からキングアンドキングが上がるが縮まらない!!コスモバルク堂々の先頭だ！』

鞭が一つ二つ入って先頭コスモバルクさらに加速!!1馬身2馬身、いや3馬身開いてガッツポーズだ五辻!!シンガポールでついに念願のG1制覇!!』

2006年5月14日、シンガポール・克蘭ジ競馬場、シンガポール航空インターナショナルカップ

一着・1 枠 2 番・コスモバルク・3 馬身

『ハルウララー！ハルウララー！！1 着 1 番ハルウララー！！ハルウララー 1 着！！  
2 着、ティープインパクト、3 着コスモバルク！！』

初夏の京都に春一番！！春の嵐が後方からすべてを薙ぎ払いました  
！！』

2006 年 6 月 25 日、日本・京都競馬場、第 47 回宝塚記念

一着・2 枠 2 番・ハルウララ・クビ

『ハリケーンランが迫る！ハリケーンランが来る！！ハーツクライ粘るか！？粘れるか！！行けるのか！！逃げ切るか！！逃げ切つてくれ！！そのまま行けハーツクライツ！！』

2006 年 7 月 29 日、イギリス・アスコット競馬場、キングジョージ 6 世&クイーンエリザベスステークス

一着・3 枠 4 番・ハーツクライ・半馬身

『内からツバキプリンセスが躍り出て先頭、ぐんぐん伸びて止まらない！！フィールドオブオマージュも粘るが届かないか！！』

ツバキプリンセス先頭、ツバキプリンセス先頭！！そのままゴールイン！砂の巴御前はやっぱり芝でも強かった！！』

2006 年 10 月 28 日、オーストラリア・ムーニーヴァレー競馬場、コックスプレート

一着・5 枠 8 番・ツバキプリンセス・3 馬身

『ノルンフアングに届かない！！ノルンフアング！！ザティンマンを引き離して前に伸びる！！』

止まらない止まらないどんどん差が開いて余裕の走りですゴール！！親譲りの逃げは本物だ、父の努力は娘に宿っている！！』

アメリカよ！ウラヌスと西が帰ってきたぞ、孫と弟子を連れて帰ってきたぞ。これがバロンの育てた新世代だ！！』

2006 年 8 月 12 日、アメリカ・アーリントンパーク競馬場、第 23 回アーリントンミリオンステークス

一着・2 枠 2 番・ノルンフアング・大差

『第4コーナーを回ってホクリクダイオーが来た!!後方からホクリクダイオーが大外から回る、ものすごい加速で前を狙って上がってきた。』

プリンス粘るか!ホクリク躲すか!プリンスか!ホクリクか!!ホクリクダイオーだ!!最後に一気に突き放したあ!!

ホクリクダイオー!ホクリクダイオー一気に差し切った!シリウスよ!ルドルフよ!!彼女がついにやったぞ!!』

2006年9月3日、ドイツ・バーデンバーデン競馬場、第134回バーデン大賞

一着・3枠3番・ホクリクダイオー・1馬身

2006年の日本は異常なまでに強かった、文字通り世界を相手に蹂躪して見せた、出走すればただけ勝つような状態であった。

それだけ強く、たくましく、そして日本の競走馬たちは世界から見ても美しかったのだ。

彼女たちには物語があった、一頭一頭に知れば知るほど惹き込まれる歴史があった。それが世界の競馬ファンをも魅了した。

「日本競馬界の頂上決戦、ねえ?今思えば、この流れがいけなかったのかもかもしれないわね」

凱旋門賞、デーブインパクトとホクリクダイオーが鎬を削り、世界に日本の競馬を知らしめた大転換点。

そしてのちに起きる惨劇の最後の一手、彼女は今まで作品の中で感じ取ってきた時勢を鑑みてそう思った。

自分の演じるキャラクターはその時代の流れの主流にいるが、それを制御する立場にはいないしする気もなければ興味もない特異点だ。

徹頭徹尾自分らしく走り屋であって、どこまで行ってもただ強いだけの馬であり、何にも縛られる事がない故に守られない、ただの第三者。その身が朽ち果てるまで良き隣人であり続けたただのお人好しだった。

その決定的瞬間がこの凱旋門賞だ、皮肉が利いている話だろう。物語の主人公でありながら、物語の盛り上がる部分にことごとく自分の声は存在しない、なかなか滑稽――

(いや滑稽とかそんな感情すらわからないな、だって興味すらないんだもん。初手で知らない、知って驚く、すごいなって褒めてうまいもん食おうとか何の気なしに誘う…見事にただの友達、それがこいつだ。

考えて見りやそうだよね、こういう何の変哲もない普通な感じがこいつっぽい。そっかさっか、何にも知らない感じでやればいいんだ) 主役級の役どころなのに徹底的に物語の転換期とかにはほぼ関わらない一般人のフリした裏のラスボス、とはいえ当の本人は特に何か思惑なんてあるわけもない。

何もないから自然体なのだ、こいつはそこまで考えてないから勘ぐったって無駄なのだ。空の袋は逆さにしたってなにも出て来やしない。

物語でこれならば現実であんなことになるのも納得はできないが理解はできる。

この戦いを先輩たちはどう魂を吹き込むのだろうか？

主役でありながら主人公ではないその戦いをどう迫真の演技で描いてくれるのだろうか？

それを見てどう自分は彼女を演じてやろう、どう忌憚なく演じて見せるべきか、そしてその先に繋がる有馬記念にどう私は魂を吹き込むべきだろうか？

考える、ただ考える、それでいて自分の心に従って、自分が演じるべき、自分がこれだと思う彼女の姿を。

「…こいつの性格だと絶対一切見てないな」

いらなかったなこの工程、そんな無慈悲な結論に至ったがやらなければ思いつかなそうなので問題はない。

公式レース？何それ知らん、へー、そんなことあったんだ凄いなお前。そんないかにも別世界の偉業を聞いて素直に驚く一般人みたいな演技のほうがちょうど良い。

(実際、あの馬も当時の競馬を見る暇はなかったって言ってたし)

存命中に取材したときは驚いたものだ、芦名は猿が異常に賢い地域と有名なのは昔から知っていたが他の動物も相当なもので特に彼は

頭一つ抜けていた。

きれいに掃除された馬房で如何にも懐かしそうにフリップボードに書いて答えてくれた彼は当時普通に会社の仕事をしていたと答えてくれた。

むしろ競馬本番になると会社の社長を含めた主力が一気にサボりだすのでそのフォローをしなければならず、酒造から事務到他社との契約まで様々な仕事を片付けなければならなかったらしい。

群馬地方競馬永世ボス馬と言うにふさわしい人生2回目と言わんばかりに無駄に人間味のある知的な彼は、穏やかな顔で仕事に疲れた中年男性のような悲哀を背負っていた。

同じような苦労話がこの当時は様々な業種と企業からも出ているので瀬名酒造も多分に漏れず競馬ブームに社員が乗っかっていったというわけだ。同じような苦労をした会社員はこの世代には多くいて、その共通点から世代の特徴と言われている。

その競馬の主役が競馬の事なぞ知らぬ存ぜぬで会社を回す素っ頓狂な状況だったのは後にも先にも瀬名酒造だけであろうが。

契約をまとめる商談に女性社員を部下として連れて乗り込んで真っ当にやり切って見せた馬は後にも先にも彼しかない。

まさか特注スーツでビシッと決めた競走馬に真っ当な商談とプレゼンをやられたとなれば、当事者は開いた口が塞がらなかったことだろう。

その商談とプレゼンが非常によくできていて、先の先を読んで様々な事態に対する対応も組み込んだ堅実な一流企業並みの仕事でいちやもんを付ける隙も無く首を縦に振る以外なかったというのだから。

(…リアルでこれならウマ娘でもハチャメチャなのはありなのか)

元からなんか別の世界からやってきたような彼だったのだ、これくらいやらねば再現にならないのかもしれない。

好きなだけ好きなように生きた変わり馬、競走馬でありながら競走馬ではなかった酒蔵の輓馬。

称賛されるべき築いてきたモノ全てを置いて、世代を彩ったライブ

ルたちの中で唯一、そして一番最初にこの世から去っていった大馬鹿野郎だ。

ストーリー的に本編までどれだけ経験を積んでも原作再現には足りないかと太鼓判を押されただけのことはある。

そりやスピノフやノベライズでもゴールドシップに並ぶ異色な話になるわけだわ、妙に納得してしまった彼女であった。



## 第43話

駆ける、駆ける、駆ける、ただひたすらに駆ける。夕暮れに差し掛かった曲がりくねった山道を、土道を蹴り上げながらディープリンパクトは駆け下る。

目の前にはいつもの栗毛の馬体、自分の最大のライバルであるシマカゼタービンがいつもの親父を乗せて前を走っている。

いつもの練習だ、今では自分の住処の練習場である『リットウ』よりもよっぽど慣れたように感じる群馬の練習場の山を丸々使ったレース場。

シマカゼタービンが走る『トウゲ』を模した曲がりくねっていて視界も足場も悪い山道をレース形式で上り下りする練習試合だ。

もう半日この練習を続けていて相棒の大竹も自分も息が上がりやすくなっていたが、前を走るシマカゼタービンはまだ余裕と言わんばかりに前を走る。

(まだ、まだまだ、まだ…)

右に左にブレる肉体を何とか制御し、自分よりもはるかに滑らかに左右に曲がりながらコーナーを抜けていくシマカゼタービンに追いつきながら彼を追い抜く隙を探る。

自分の相棒よりも恰幅のいい『オヤジさん』は、自分の相棒のように自分に合わせた最高の乗り方をしているようには見えないのにまるでシマカゼタービンは堪えない。

(ここならどうだ!!)

登りの右コーナーから急激に左に下りながらこのコースで一番短くかつ急激に曲がるS字コーナーが見えた瞬間、ディープリンパクトはすぐさま加速してシマカゼタービンに攻めかかる。

シマカゼタービンが右コーナーの登りをコーススレスレの攻め込む後ろにピタリとついて登り、下りの左コーナーに入った瞬間に加速をかけて体に遠心力をかけてインからアウトに体を持っていく。

鞍上の相棒が重心をインに寄せ、その重心で体幹を維持しながら前

足を大きく突き刺し、流れる下半身をタッピングするように地面を蹴散らしながら制御して流す。

尻が流れ過ぎないように制御して、倒れないように姿勢を正しつつ、体が持つていかれる推力を止めることなく横に駆ける。

やる事が多い、一つ間違えれば大惨事な走法をしり目に、インベタでがっちり固めて加速するシマカゼタービンの馬体が自分を置いていくのが見える。

(足りないか!!)

短いコーナーはあつという間に終わる、体が滑りすぎないように姿勢を立て直しながらディープリンパクトは悪態をついた。

想定ならばインベタで加速する前に、自分は遠心力を使って速くアウトを抜けて前に滑り込む算段だった。

だが足りない、まったく速力が足りていない、むしろアウトラインに出て距離が伸びた分だけ不利になってしまっている。

しかし彼に勝つにはこれしかないとも思うのだ、彼はこれで簡単に自分を何度も追い抜いているのだから。

(くそッ…また俺の負けだ)

林を抜けると坂道が終わり、広い放牧地の中に出来た踏み固められた土コースに出る。

その先には無造作に置かれた赤色コーンと言う△の置物があり、そこに向けてシマカゼタービンは駈けながらチラリと自分の向けて視線を送ってきたのをディープリンパクトは感じた。

いつもながら呆れるしかない冷静な視線、余りにも現実離れたクソ体力、そんな風にみられて自分が負けを認めるなんて当然彼らも思っただけはない。

(まだまだ…まだやるぞ!!)

ディープリンパクトはシマカゼタービンに向けて大きく嘶いた、体はどうに疲れ果てていた、相棒も疲労困憊のようだった。

それでも俺は負けてない、相棒も負けてない。ほら相棒も笑っている、笑って手綱を握って尻を叩いてくる。

もう一勝負だ、この勝負はどちらかが負けを認めるまで延々とやる

のが流儀なのだと教えてくれたのはお前なんだ。

自分よりも早く赤色コーンのそばに着いたシマカゼタービンは速度を緩めることなくコーンの横を走り、そのままさらに加速を掛けながらその場でコーンを軸にぐるりと回る。

前足を地面に突き刺し、遠心力で尻を前に流しながら体を反転、コーンの周りを走りながらにして滑って180度ターン。

『ついて来れるか?』

『上等だ!!』

見事なターンで戻ってきたシマカゼタービンとすれ違いながら啖呵を切る。

赤色コーンに差し掛かる、デーパーインパクトはシマカゼタービンのやったように尻を大きく振り回すようなターンを決めようとして、前足を強く踏み込み後ろ足を大きく蹴り上げた。

硬い金属質な地面を蹴り、気持ちのいい乾いた金属音が耳朵を叩いた。

『又ウツ!?!』

スカーンツ!という金属のいい音が鳴り、デーパーインパクトはその音で眠たい目をぼつちりと開いた。

白いシーツを敷いた寝藁に横たえた姿のまま首を上げて天井を見上げれば、最近は見慣れてきた見慣れない天井。

音のしたほうを見れば、足元に置きっぱなしだった空のバケツがカラカラ音を立てて転がっている。

何のことはない、寝ぼけて足元に置きっぱなしだったバケツを蹴ってしまっただけだ。

(夢か……)最近、群馬に行けてないからな……)

とうかここは日本ですらない。眠い目をシバシバ瞬かせ、寝転がったまま大きく伸びをして残った眠気を取りながら起き上がる。

ここはフランス、シマカゼタービンの話では日本という国から大きく離れたヨーロッパという地域の国だという。

ホクリクダイオーが行くらしいドイツやハーツクライが行ったイギリスと近く、ツバキプリンセスやノルンフアングが行くというオー

ストラリアやアメリカとは遠い。

黒鹿毛の人間ではなく葦毛や尾花栗毛の彫りの深い人間の多い地域だ。人間の鳴き声も日本のそれとは大きく違う、おかげでコミュニケーションが取りづらくてこの国のお世話係にいつも変な顔をされてしまう。

一緒に日本から来たお世話係が用意してくれた、壁に掛けられた人間が時間を見る『時計』という機械を見ると『短い針が6で長い針が12』だ。

この時計の読み方もシマカゼタービンから教わった、おかげで時間配分も上手にできるようになって苦労しない。

(6時か、俺も良く寝れるようになったな。やはりぐっすり眠ると疲れが取れる)

昨日寝たのが夜の9時、一度催して起きたのが12時、そこからまたぐっすりだ。長く寝るおかげで昨日も厳しい練習をしたのにすっかり元気いっぱいだ。

昔は何かあると起きてうろろろするような生活だった、それが普通だった、周りの同族も大体そうだった、今一緒にいる馬たちもそうだ。

だが今はこんな生活サイクルが自分には普通だ、シマカゼタービン曰く『アスリートなら健康第一、良く食ってよく動いてよく寝るのが一番』だという、その通りだ。

すっかり疲れの取れた体を持ち上げ、立ち上がったから何度か伸びをしてから、部屋の隅にある水桶に足を運ぶ。

頭が丸々浸かる大きい水桶にはたつぷり水が張られているが、日本ではないここではディープリンパクトはこれを飲む気にはならなかった。

「ブルル…スウ…フン！」

フランスの水は口に合わない、しかし顔を洗うなら特に問題ない。ディープリンパクトは水桶に頭を突っ込んで何度かザブザブ潜らせて顔を洗う。

朝一番に顔を洗うと気持ちがいいのだ、残った眠気も取れるし気分が良くなる。昔はお世話係の人間がいなくてできなかったが、これは

群馬で覚えた。

何かの拍子に顔が汚れたとき、我慢できなくて水桶に顔を突っ込んで洗ったら不思議と気持ちがよかったのだ。のちにシマカゼタービに聞けば、人間も同じことをやるらしい。

ならば自分たちがそれをやっても問題はない、日本では別の桶を用意してもらっていたがここでは飲み水は別だからこれでよいのだ。

気が済むまで顔を洗ったデイーパインパクトは水桶に向かつて軽く首を振って水気を取ると、お世話係が壁に備え付けてくれたタオルに顔を擦り付けて残った水を拭う。

『ふう…さっぱりした』

『相変わらず変わったことしてんな』

『気持ちいいぞ、お前もどうだ？』

『濡れるのヤダ』

向かいの部屋からこちらを除いていたフランスの馬が少し変なものを見る目で見えていたが、デイーパインパクトは特に気にしなかった。そんな目で見られても良い物は良いのだ。

さっぱりしたら喉が渴きを訴え始めたので、デイーパインパクトは顔を拭うのもそこそこに部屋の隅に置かれたボックスの前に足を運ぶ。

四角い木のボックスには開けやすい取っ手が付いており、それを啜えて蓋を開けると中には透明な一リットルペットボトルに入った水がたつぷりと入っていた。

これもフランスの水だが人間の店で売られている『ミネラルウォーター』なので味は日本の物とそう変わらないから飲みやすい。

昨日は半分ほど飲んでしまっていたはずだから、お世話係の人が夜のうちに追加してくれたのだろう。

「ヴム」

ペットボトルを一本啜えて取り出し、前足で取っ手を引っかけて蓋を閉めてその上に置く。

そして散々彼と練習したように前歯で蓋をしっかり啜え、両前足でペットボトルを軽く押さえながら首をひねった。

パキツと心地の良い音を立てて開いた蓋を上あごと下あごとでくるくる回して蓋を外し、箱の横にあるごみ箱に入れてペットボトルの口を啜って大きく呷る。

まるで幼駒が人間から乳をもらっているようにも見えるが考えるとこれはなかなか楽だ、いちいち吸わなくても水がごくごく喉を通っていく。

相棒や人間たちがやるのと同じようにやってすっかり気に入った、これなら人間たちが水桶を使わないのも当然だ。

「ふい〜…」『やはり朝の洗顔の後の一気飲みは格別だな』

飲み終わったペットボトルを潰して平べったくしてからゴミ箱に入れて、すっかり目が覚めたディープリンパクトは部屋の隅に体を預けて座りながらふと思った。

『今日は何日目だ、いつレースがある。大竹の感じだと、大分近いはずだが…』

このフランスの地に立ち、フランスの練習場で練習を始めてから一週間くらいだろうか。

退屈ではないがやはり異国の地と言うのはやりづらい、見慣れた人間がないのと同じように同族たちもまるで違う。

あまり大きな声では言えないが、この同族と人間は日本に比べて結構に刺激的な臭いを纏わせている節があつて困る。

ツバキプリンセスが言っていたようなお国柄であり、シマカゼタービンが言っていた『オーデコロン』なる香水なのだろう。

余り騒ぎ立てるようなものではないし我慢できる物なのだが、やはり気になるときは気になるのだ。

(外国と言うのはやはり日本とは違うんだな、知らなかったら余計に気になって仕方なかった。やっぱりあいつはすごいな)

もし彼が教えてくれなければこのフランスで万全な態勢を整えておくなんてできなかつただろう。

やろうと思っても雑念が混じってしっかりとした練習が積み重なったはずだ、ただでさえ練習時間が取れないらしい外国遠征のレースなのだから致命的である。

しかもこのフランスのコースは日本と違って芝が深く地面も柔らかい、その上で日本ほど徹底的にならしておらず自然のままにしているそうなのだ。

練習で走ってみて特性はある程度理解したが、なるほどあの足場では歴代の先輩たちが苦労するのも頷けるというモノだ。まして自分たちは遠征と言うペナルティを背負っているのだから。

飛行機による輸送、時差ボケによる睡眠障害、日本とは違う空気感によるストレス、何より前情報など何もない外国レースと来ている。

シマカゼタービンと言う助っ人がいて人間のあれやこれやから情報を引き出せている今の自分ほど恵まれた状況ではなかっただろうから不利も不利である。

だからこそ、ここでは勝たなければならない。前走ではハルウララに一発かまさされて負けた、次でも負けたら恥も恥だ。

凱旋門賞にはドイツから転戦してきたホクリクダイオーも走るのだ。彼女の強さはよくわかっている、油断はできない。

(自主練習がしたいところだ……ここがフランスじゃなけりやなあ……)

柵で仕切られた馬房の入り口に目を見やる。ただ門が掛けられただけの柵だ、門を抜いて開けて閉めて門を戻す、それだけですぐに出られる。

練習場までの道も分かっているし、いつそひとつ走りして戻ってこようかと考えたが初日の事を思い出すとあまりよろしくないだろう。

フランスに来てうすうす気づいてきたがそれをやって自由にできるのは群馬か栗東だけで、他の所でやったらすぐに大騒ぎになってしまう。

日本よりも競馬先進国らしいフランスなら自分のやり方程度普通だと思っただけで初日はそれで大騒ぎになってしまった。

暇な時間に部屋から出て誰もいない練習場を軽い準備運動で一周走り、馬房近くの水道で軽く汚れを落として帰ってきただけで体に負荷も何も掛けていないのにフランスの人間が変に騒いで大変であった。

やればまた無駄に騒がれてフランスの人間が相棒たちに迷惑をか

けるだろう、日本とは違う鳴き声であーだこーだ鳴く連中に相棒たちも対応に困っていた。

アレはきつと相棒たちもフランスの人間の鳴き声が分からなかったのだろう、人間の鳴き声が全く分からない同族も同じ表情をしていたからわかる。

そういえばホクリクダイオーも同じようなことができるはずだが、あちらもこのくらい騒ぎになってるのだろうか？

『難しい顔してるね、デイープ。何してんの？』

『うん？ダイオーか』

噂をすればなんとやら、入口の方からのそつと首を突っ込んできたのはホクリクダイオー。

どうしてこんなところにいるのだろうか、彼女の部屋は別の厩舎であつてここではないはずだ。

『お前こそ何してるんだ？勝手に部屋を出たらダメだろ』

『だって朝早く起きちゃったから暇なんだヨ、だからお散歩と自主練に行くの。デイープも行く？』

『馬鹿、人間に見つかからないうちに戻れ。ここは日本じゃないんだぞ、お前の相棒が迷惑する』

『ダイジョーブ！もうドイツの時とは違うからネ！ちゃんと説明したつて頼信も言つてたし!!』

それは大丈夫なんだろうか？日本とフランスは言葉が違うとシマカゼタービンは言っていたしそれは自分で感じた。

いくら彼女の相棒が言葉の限りを尽くしていてもそうそううまくいくわけがない。

『それにそんなボケツとしちゃっていいの？凱旋門賞、明後日だよ？』

『だから？』

明後日なのはいい、それがどうしたというのか。準備は万全だ、心も体も完璧だ、いつでも最高の走りをしてやれる。

特別に気負う必要なんてない、気負つていては勝てる所でミスをしたりするものだ、自分達の先輩の姿がそうだったからデイープインパ



クトは良く知っていた。

『ふうん？そっか、でもさあ——』

ホクリクダイオーの声色に何かが混じる、その猛烈な闘志の塊に  
デーパーインパクトは即座に立ち上がり彼女を睨んだ。

『それで勝てるほど海外は甘くないよ』

『それはお前がドイツで走ったからか？』

『ご明察、ドイツのレースもすごかったよ。日本と全然、雰囲気も仕様  
も何もかも全然違う、聞いてた通りタフでラフなところが多いんだ』  
『だろうな、お前が走ったレースも一番強い奴が出るレースって聞い  
た。ドイツの強いヤツから勝ちを奪ったってな』

『みんな強かった、一瞬でも気を抜いてたら僕も危なかつたよ…』

感心したように、それで懐かしむようにホクリクダイオーは硬い表  
情で見たこともない真面目な表情をした。

『勝てる自信あるの？海外初めてでしょ』

なるほど、こいつは心配してくれているのか。デーパーインパクト  
はホクリクダイオーの表情に隠しきれない優しさを感じて合点が  
いった。

同じレースを走るライバルだというのに、同じウマに勝ちたいと競  
うライバルだというのに、それ以上に自分を仲間だと思ってくれてい  
る。

『人間みんな最初は初心者だ。ま、初心者らしくうまくやるさ』

『あ、タービンの真似？馬でしようが』

『あいつは時々変なこと言うからな。ま、そういうところもいい所  
はあるんだが』

何しろアホっぽくて肩の力が抜けるんだ、そういうとデーパーイン  
パクトとホクリクダイオーはそろってくすくすと笑った。

『心配無用。宝塚でしくじったんだ、ここではしくじらん』

『それならいいけど。デーパー、君とやり合えるのも楽しみだったん  
だから情けない走りしないですよ？』

『変わった奴だな、2位になるのが楽しみなのか？皇帝の孫と言われ  
るお前が情けねえ』

『はっはっは!!…言うね、海外初挑戦のビギナーが良く吠える』

それはこっちのセリフだ、ディープリンパクトはニマニマ笑うホクリクダイオーに睨み返した。

『たかが一戦、俺より早く走っただけでいい気になるなよ。フランスとドイツは別の国だろ?また芝が違うはずだ、お前も俺と同じ初心者だ』

『おっと、こりゃ一本取られた。良く知ってるね』  
『教えてもらった』

正確には調べさせようとしたらあっさり答えてくれたが正しいが同じようなモノだろう。相変わらず変な知識ばかり身に着けている親友である。

『ま、ならのんびりするのもありだね。じゃね、アディオース!ひとつ走りしてくるねー!!』

『…騒ぎにならなきゃいいなあ』

たぶんそんな願いは届かないんだろうな、ふとそんな予感がしてディープリンパクトは黄昏た。

タービン、こいつらに振り回されてるお前が感じていたのはこんな気持ちなんだな。

味わいたくなかった、ついでにこのお転婆は本当に牝馬なのか疑問に思う。本当は牡なのではないだろうか?

『柔軟体操だけでもしとくか』

もう少ししたら大竹たちも顔を出してくるだろう、その後は軽い練習をするだろうからそのために体を解しておけば練習に時間をさける。

ディープリンパクトはその場で前足をグイツと伸ばして曲げる屈伸運動をしながら今日のメニューに思いを馳せた。



フランス、カルロス・ラフォンパリアス厩舎、エーグル調教場。

まだ朝で人気のない調教場の練習用コースにもぐりこんだホクリクダイオーは軽いランニング程度に抑えて自分の身にもコースの芝にも配慮しながら走っていた。

自分の足でしっかりとフランスの芝を踏みしめて感じるのには、やはり日本の芝とはまるで違う上にドイツの芝とも微妙に違うという事。今日は朝から晴れていていい天気であるにもかかわらず、芝はどこか湿っているように絡んできて踏み込むたびに足を取られる感触がある。

この感触はなかなか慣れない、もし練習もそこそこにレースに放り込まれたらこの僅かな違和感が足を引っ張ることになるだろう。

(ふーん?)

だがホクリクダイオーは少し考え、足の踏み込みに少し力を入れて踏み込みを変えながら再び走る。

日本の芝のようにしつくりは来ていない、しかし最初の時と比べると雲泥の差ともいえる走りやすさになった。

(うん、こんな感じかな?あとは頼信たちが来たらすり合わせて——)

「Quelle chose... Vraiment les chevaux pratiquent leurs propres courses...!!」

「Qu'est-ce que tu fais!!」  
「Et puis le leader!! Son jockey dit que c'est normal de les laisser libres...」

「Ne faites pas trop de bruit. — bas. Je n'arrive pas à obtenir de données。」

「Wow, c'est comme cheval. Du ba...!」

「Est-ce que ce Rubell disait  
t・tait vrai!!」

(またやってる…)

周囲に集まってきた人間たちがコースの外でワイワイとやり始めているが、練習の邪魔をしないというのなら特に気にはしない。

いつも自分を助けてくれる敏則やお世話係の人間たちが丁寧にフランスの人間に説明していたし、ドイツでも同じように過ごしてきたのだ。

ドイツでも同じように騒がれたが…と、ふと思い出して変に気を回されるよりも自分がちゃんと考えて練習しているのを伝えてようと思いついた。

人間からしてみれば変に運動をして自分たちが怪我をするのがたまらなく心配なのだ、心配してくれるのはうれしいし悪いと思う、だから安心してもらったほうが早い。

「Mais encore et encore… Hmm?」

「Oh, h・, je suis l・」

「tes-vous satisfait? Non, mais…」

「Ne pas fuir ne signifie pas fuir. Sa agitation vrainement d'autofornation?」

ホクリクダイオーはおろおろするフランス人の前まで行くと、小さく鼻を鳴らした後に前足で外ラチ下の前ですっかり身に馴染んだステップを踏んで体を見せつけた。

(見ろ！僕は大丈夫だ!!)

「Quelle cheville molle」

「Une tape pour matriser pleinement votre cheville・ votre disposition… Il faut tre moi pour le comprendre」

「Tei-o-step, tei-o-step! Je n'ai

j a m a i s v u l a v r a i e c h o s e !!」

フランス人の前を小刻みにステップを踏みながら歩いて見せて、体が万全であることを見せつける。

これで彼らも自分が体の事を考えて軽い運動をしているだけなのは理解してくれただろう。

（絶対に勝つんだもん。勝って強くなって、高崎で今度こそタービンに勝つんだもんね!!）

だから練習はやめない、ホクリクダイオーは騒ぐフランス人たちへの対応はそこそこに再びコースを走りだした。

自分はこのまで来た、こんな外国にまで来て多くのレースに出るまで強くなった。なのに、どうしてもあの栗毛の牡馬に勝てない。

自分よりはるかにマイルや短距離は苦手なのに勝てない。だから、今度こそ、ここで勝って力を付けて、ホームコースである高崎で勝ってみせるのだ。

「ヒビーン!!」（頑張るぞー!!見てろよタービン、フランスがなんぼのものじゃーい!）

彼のことだ、人間の便利な機械でフランスのレースを見ているかもしれない。

フランスのレースで一番になって、このホクリクダイオー様がどれだけ強くなったかを見せつけてやるのだ。

そう思うと俄然気合いが入るホクリクダイオーだった。

## 第44話

2006年10月1日、フランス共和国・パリ・ロンシャン競馬場。夕暮れに差し掛かった競馬場は、一日のレース日程をほぼ終え大目玉となるレース直前の熱狂の渦の只中であつた。

第85回凱旋門賞がもうすぐ行われようとしているのだ、世界中から集まつた競馬ファンが収まるはずもない。

国際競馬統括連盟の年間レースレーティングに基づいたランキングでも何度もトップを飾るほどに栄誉あるレースだ。とりわけ日本においては特に。

その日本から来た二人の男性記者は、日本国内の中堅雑誌の記者ながらそれなりに良い席を陣取って記事の目玉となるレースの発想とネタ集めに余念がなかつた。

中年の先輩男性とまだ20代の後輩男性記者の二人組は、それぞれ手に持ったパンフレットを見直したり双眼鏡でネタを探りながら凱旋門賞を待つ。

出走表の枠順を見る先輩記者は、何度見ても今は飽きないそれを再度舐めるように見る。

- 『1枠2番・ハリケーンラン  
2枠1番・デーパーインパクト  
3枠8番・ベストネーム  
4枠5番・レイルリンク  
5枠4番・プライド  
6枠3番・シロツコ  
7枠7番・ホクリクダイオー  
8枠6番・シツクステイーズアイコン  
9枠9番・エレクトロキューションスト』

パンフレットを見ていた先輩記者はこの大勝負に胸が高鳴った、この凱旋門賞という舞台に日本は中央と地方から二頭もの精鋭を送り出したのだ。

それも中央は今まさに旬のサンデーサイレンス産駒の最高傑作を、地方からはかのシンボリルドルフの孫でありトウカイテイオーの娘である国内産馬の奇跡をだ。

シンボリルドルフの傑作とサンデーサイレンスの傑作、日本競馬を語る上では外せない二つの血がこのロンシャンでしのぎを削ろうというのだからこれで興奮しない競馬ファンはいないだろう。

これでもし、それこそトップを争う好走を2頭がしたらたまらないはずだ。皇帝の血は健在であるし、サンデーサイレンスの力もまた本物である。

夢が広がるばかりではない、現実的にも実りあるレースになるのだ。次の世代への期待が高まるというモノだ。

出走表にあるハリケーラン、エレクトロキューシヨニストの名前にも心擦られる。

どちらの陣営もこのレースにはただならぬ様相で挑んでいるとは中堅でしかない自分たちの情報網でさえ耳に入っているくらいだ。

エレクトロキューシヨニストの所属するゴドルフィンなどはかなり気合が入っていると聞く。

思わず表情がにやける記者だったが、それを見た少し怪訝そうな表情をしているフランス記者の視線に気づいて自然に咳払いをする。

「周りの目が痛いですね…」

「気にすんな、俺らはやってない」

会場発表では入場者は6万人を記録しているとなつているがその中での日本人はかなり多く見られた。

詳しい発表がなければ分からないが記者の目には日本人がかなり多く見える、妙に年季の入った古いデザイン一張羅の年配の姿もちらほらとありおおよそ5分の1は日本人のようだ。

だが日本人が多い分、その中にはいささか空気が読めないか国の違いを理解していない層も居たのが現実だ。

日本の競馬場の雰囲気は抜けない者が開場と同時に走り出したのを目撃したときはこの目を疑ったものだ。

日本とフランスでは競馬場のマナーが違うというのが理解できてない、フランスでは競馬場は社交場でもあるためマナーには厳しい面があるのだ。

他にも日本では問題なくともフランスだとマナーが悪いとされる行動が散見されたせいで日本人観光客への視線はややキツイものになっている。

しかし当の日本人たちは、このフランス凱旋門賞に日本から二頭も出走するという榮譽と期待感に酔いしれていて気付いていないのが大半だ。

せめてもの救いはこのマナー違反が開場直後の開幕ダッシュなどだけで済んで落ち着いているという事だろう。

「外でも同じことやってなきゃいいんですけどねえ…」

「怖いこと言うなよ、終わったたら奮発する予定だろ。飯までこんな調子なの嫌だぜ」

「男二人で本場フランス料理フルコースですか…空気以前に寂しいっすね」

「嫌なら別にいいぞ」

「食います！本場もんなんて一生食べないですし」

「そうだろ、さてさて向こうさんはどうなってるかな？」

記者たちがこのスタンド席にいるのはレースを見るためであり、同時に馬主席を少しでも観察するためだ。

馬主に直撃取材できるほど上等な雑誌ではない自分たちは身の程をわきまえて外周から紙面作成用資料としてこの手の資料を集めておくのである。

この場所もベストなアングルではないが程よく見られる場所である。中堅どころの自分たちにはちょうどいい。

どこにもある双眼鏡で馬主席を見れば、馬主席には最近よく見る紋付き袴のヤクザめいた初老の老人が厳つい秘書と女性記者を引き連れて入って来るところだった。



今が旬の群馬地方競馬から日本中央競馬を荒らしまわった3頭の競走馬の1頭であるホクリクダイオーの馬主、新坂三郎である。

競馬界隈ではホクリクダイオーの馬主という事で有名になり始めたばかりだが、軍事界隈からは『レイテの怪鳥』などとも呼ばれて知名度は以前からあつたようだ。

軍事関連は専門外のため触り程度にしか知らないが昔の海戦で大暴れをして乗っていた空母を守り切り終戦まで生き残った事からそう呼ばれているようだ。

その後ろに控えるのは秘書の武村という男で、女性記者は某大手競馬雑誌の稲波だ。

ルベルとハーツクライの群馬訪問からすっかり群馬関連の仕事を任されるようになった業界記者期待の新星である。

「ヤクザだな…」

「ヤクザですね、あの変態がインテリヤクザに見えますよ」

真つ当な会社の全うな社長で完璧な堅気のはずなのだが絵面はどう見ても古き良きジャパニーズヤクザそのもの。

妙な恰好なんてしていないレイスーツの稲波でさえ、その雰囲気背後にしたらやり手の女性秘書に見えてしまう。

映画から出てきたようなヤクザの登場に馬主席に座っていたフランス人やイギリス人などがやや目を見開いているが、そこは凱旋門賞に馬を出すような馬主の貫禄で見事に耐えていた。

「さすがフランス。ヤクザの登場程度じゃ顔色一つ変えませんか」

「本物じゃないけどな。あんな雰囲気どうやって出せるのか聞いてみたいぜ」

「それ面白そうですね、帰ったら編集長に提案してみませんか？」

「うーん…ま、やってみつか」

うまくいけば群馬地方競馬に伝手ができる、話題の群馬地方競馬に伝手を作れるのは中堅どころとはいえ所詮は木っ端雑誌な本誌には大きい。

「おい見ろ、隣にいるの」

「ついに競馬にまで手を伸ばしたか」

「新坂の社長の隣に居るのは噂のTERAグループの連中か」

新坂頼信が案内されて座ったすぐ横には、この場にそぐわない初々しきがある馬主が目を白黒させて新坂を見ては周囲に目をやって居る。

初老に差し掛かったその男性馬主は周囲に助けを求めているようだが、周囲は困った表情を浮かべて反応しない。

嫌われているような雰囲気ではないので単純に手出し辛いのだろう、運が悪かったのだ。

「すげーよな、馬主になつてそう長くないのに末席とはいえもう凱旋門賞とか。俺もあやかりたいねえ」

「どうでしょう…急成長には裏があるとも聞きますよ？あの会社」

「会社の話だろ？馬とは違う」

「でもあそこの馬、会社の専属医師がついてるって話じゃないっすか？そいつ評判悪いらしいっすよ？確から、ら…ラザニアブルーガ？」  
「評判云々なら日本も負けてねーだろ。あのヤベー黒いの、群馬に根を張つてやがったし」

「…まああの人は違法なことはしませんから、違法なことは」

「目を見て喋れ、な？」

日本が誇る最高の獣医の成れの果てであるドクター、競馬の世界でもそのとんでもない扱いにくさという悪名と腕前は無駄に良いという偉業は轟いているのだ。

中央競馬界ではその扱いにくさゆえに敬遠されていたし獣医の世界でも腫物扱いされていたのに、気付けば群馬内で獣医としてすつかり定着していたのだから世の中は解らないものである。

「そ、それよりすごいですね今回も、みんな世界の新進気鋭や精鋭ばかりっすよ！こりゃ外野を取材してるだけでもいい記事になりますねえ！」

「まったく…まあ俺らみたいな雑誌にやそれくらいがちようどいいのも確かか。せいぜいおこぼれ貰おうや」

「そうですね、そろそろパドックが終わるでしょうから…あれ？」

自分達が担当していないパドックが終わり、凱旋門賞を走る馬たち

が厩務員たちに引かれて次々と入って来る。

その中の目当ての馬の一頭、二人の年老いた日本人男性に綱を引かれて大人しく入って来るホクリクダイオーの姿に会場の日本勢、とりわけ年季の入ったベテランたちが大きくどよめく。

それはその馬がかの帝王の生き写しであり、長きにわたって夢に見て実現しえなかった奇跡を目の当たりにしているからだろう。

だがしかし、記者の目はそれ以外の者を見つけてしまい目が離せなかった。冗談だと思いたかった、だがしかし、この場所であえてそれをしたという事なのだから、そうなのだろう。

「…冗談キツイぜ。群馬ってやつはどこまで俺たちの予想を超えてきやがるってんだ」

心の底ではどこか甘く見ていた、これはどう記事にすりやいいんだ。



ガチャリ、静かな厩舎の中で音が響く。音のしたほうに彼が目を向けると、壁際の出っ張りにおいていたプラスチックケースが落ちて、中に収められていた蹄鉄用の釘が散らばっているのが見えた。

一つ一つ釘を手にとって箱に収めようとして、ふと掌にある釘が群馬から持ってきたものだ気づいた。

どこにでもある蹄鉄用の釘だ、中央競馬のGI馬が使うような高級品などではない。

一束いくらで売られている程度の代物、それなのに場違いにもこのロンシャン競馬場の厩舎にある。

「随分と遠い所に来ちまったな、こいつらも」  
「何ボケたこと抜かしてやがる、じじくせえな」

騎手服姿で愛馬のチエツクに来ていた新坂頼信がどこか呆れたような口ぶりなのを、彼は釘を入れた箱を元の場所に戻して小さく笑って受け入れた。

「俺は立派な爺だよ、なあ？ テメエら」

「そだそだ、だからこのしわくちや爺をいたわってくれんかい？」

「坊主、そういうならもうちよい加減しろや。この年で海外遠征はつらいぜ？」

「あーたたた、こしがー」

「ひひーん、ふひひーん」

「こらこらマネしちやいけません」

ホクリクダイオーを世話し、フランス凱旋門賞に挑むために帯同してきた年配の厩務員や調教師たちが次々とおどけて笑う。

全員がしわだらけの老人だ、よぼよぼとした弱々しさはないまでも行動の節々には老いを隠せない。

しかしそれでも彼らの目には一端の光が、その奥に燃え盛る命の輝きがある、何かを成さんとする意志がある。

その燃える炎は彼自身も自覚していた、去年まで忘れていた昔の自分が心の中で燃やして夢に向けて中津競馬場で邁進していたころと同じだった。

(俺はまだ終われねえんだ、まだ俺達は…)

いつからか忘れていた思いだった。まだ中津の競馬は終わっていない、まだ6月1日を迎えていない。

あの日、あの時、あの時代、中津競馬場の最後を迎えたあの時から、自分の時間はずっと止まったままだ。

満足のいく形でせめて最後のあだ花を咲かせることすらできないまま唐突にすべてを取り上げられて、荒むことすら考えられないままあの時の自分たちは四方に散り、自分は群馬に流れた。

感じた怒りも憎しみも長い時の中で燻り風化して、じりじりと自分をあぶり続けるナニカも次第に慣れて考えることも無くなってしまう。

そこでただ生きるために馬の世話をして、機械的に生きて、そして自分は新坂三郎に拾われた。

どうしようもなく腐ることもできないときの止まった自分に何かを彼が見出していたのか、それともただ見ていられなかっただけなのか、真意はわからない。

それから新坂三郎が所有する馬の世話を引き受け続けて、勝って負けてを繰り返しながら惰性で生きて、でも何かを着実に変わっていった。

そんな折、彼の息子でどうしようもないチンピラだった頼信をも任された。仕事でうまくいかずぶらぶらし始めたチンピラ、こいつを地方騎手にして腰を据わらせてくれと。

無理だろうと思いなながらも馬主の三郎に逆らえず仕方なく付き合ううちにその不甲斐ないにしても、挑戦心とガッツだけはあつた頼信の姿にやつと心が動いたのだ。

昔の新坂頼信は確かにチンピラだった、それも仕事で失敗して色々不貞腐れたチンピラだった。そんな彼だが止まることはしなかった。

失敗して失敗して失敗して、泣いて喚いて言い訳ばかり、同期に負けて悔しがつて突っかかって、それでも止まることはなかった、前に進もうと足掻いていた。そんな次を望む姿が自分とはまらなかった。

時間が止まってしまった自分たちにはない光がそこにはあつた、自分達が望んで仕方なかった『次』への僅かな道が見えていた。

だから手を貸した、力を貸した、手助けして世話を焼いて悪い事したら頭をひっぱたい、気付けば自分たちの時もまた動き出していた。

「なら勝ってくるぜ、それだけのことだろ」

それがどうだ、今や群馬を代表する一端のG1騎手だ。かつての地方競馬では考えられなかった、望んでも望んでも手に入れることが叶わなかったあの頂に上り詰めた存在となった。

昔は自分たちが手を引いてやっていた若造が、道楽で買われた落ち目の姫が、今では自分たちの手を引いてここまで連れてきてくれたのだ。

まったくもって情けない、まったくもって不甲斐ない、おかしいじゃないか、こんな若造に手を引かれる老人が、こんな昔の叶いもしない我儘を未だに引き摺っているのが。

そんな馬鹿な自分のために将来を切り開きつつある若造が手を差し伸べてくれているなんておかしいじゃないか、その手はお前が未来

を掴むために使うための物だろうに、こんな老害の手を引つ張るためのものではないだろうに。

「はッ、まだまだ若いな。バカヤロー、そうじゃねー」

「じゃあなんだってんだよ？」

「口に出すようなことじゃねえのさ、なあ？中津の」

ホクリクダイオーの蹄鉄を叩いて確認していたがからからと笑う。かつて上山競馬で多くの馬を世話していた蹄鉄職人である彼は手慣れた手つきで蹄鉄を微調整しながらにかりと笑った。

「そうだな…だがまあ、馬鹿なお前さんにやあまだ口でいわんやわからんか？」

「んだと？」

「カカカツ!!そんな風に目くじら立てるから若造なんだよ頼信坊ちゃん」

「年寄りの話はなげえんだ、少し付き合えや」

「全く最近の若いもんは気が短くていかんねえ？」

「腰が浮いとる、一流ならどっしり構えろ」

益田競馬場から流れてきたお調子者が、足利競馬場から流れてきた皮肉屋が、仙台競馬場の寡黙な仕事人が、いろいろな経歴を持った各々胸に何かを抱えた者達ばかりがここに集まっていた。

そういう人間たちを放っておけない三郎がそうしてしまった、情けない大人の集まりだ。だからこんな時くらいは若者にいいかっこをしたいのだ。

「爺様、あんたら全く…」

「頼信、お前が思ってるようなのはな、俺達のわがままだ。俺達が勝手に背負って勝手に背負わせてる勝手な呪いだ」

「よく世間様は祈りだなんだと綺麗事にしたがるがよ。所詮はただのわがまま、死にぞこないの戯言にすぎねえな」

「そんなもんにお前さんらが悩む理由なんざないね、考える必要も見る必要もない。そもそもなんだ、親の因縁を子供に押し付けるなんざ恥でしかねえだろ」

「こいつは俺達だけの問題だ、俺達で終わらせるべきもんだ、お前は運

悪く居合わせちまっただけのことよ。気にする必要はねえ、見て見ぬふりして知らぬ存ぜぬでいいのさ」

「俺達だけで背負いこんで、後生大事に墓場まで抱きかかえて、地獄の底まで持っていく、だから気にする必要なんかない」

「だからよ、お前らは楽しんで来い。馬鹿みてーに突っ走って、馬鹿らしくやりたいことやって、目一杯楽しんで馬鹿笑いしてこい。

いつも高崎でやってたじゃねえか？ じっくりも4頭、勝って負けてで馬鹿笑い。お前ら4人はじっくりもそうだろう？」

「どうせこいつは道楽だ、金持ちがやってるただの賭け事よ。真面目にやるのもいいがそれだけじゃつまらんわい」

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損損ってな」

勝てるならそれでいい、だがしかし、だがしかしだ。自分たちに必要なのはそうじゃない、これは競馬で仕事だが、根本的には道楽だ。

新坂三郎という老人が自分の金で遊ぶただの道楽、ただ楽しみたいから自分たちはここまで来た、それを自分たちが楽しんで何が悪い。

勝っても負けても自分たちはただ楽しめばいい、すべてを出し切ってやり切ったと胸を張ってやればそれでいい。

言葉はいらなかった、頼信はただ頷き、踵を返してホクリクダイオーの元に駆け寄っていく。その背中は一端の騎手の風格がありながら、いつも通りのチンピラな頼信でもあった。

彼はどうしようもないチンピラだった、今もチンピラである、だが彼は新坂頼信という一本筋の通った男でもあった。

「そうだ、それでいい。お前らは俺たちのようになるな、俺達みたいな年寄りになつてくれるな」

俺達の道はここで終わるが、その先にお前たちの世界はずっと広く開けているのだから。

彼はホクリクダイオーと一緒にレース場へ向かう彼の背中を見送り、かつての職場だった中津競馬場のキャップを被り直した。

仲間たちを見れば全員が一張羅のスーツ姿で思い思いの思い出の品を引っ提げていた。

それは手拭いであったり、ジャケットであったり、あるいは古びた

騎手用の帽子などで、そのすべてに今は亡き競馬場の名前が記されている。

函館、仙台、上山、足利、上諏訪、春樹、益田、どれも手入れこそされているがボロボロの物ばかり。

捨てられなかった形見のようなものだ、どんな困難があつてもこれだけは捨てられなくて肌身離さず持ち続けていた最後の縁だ。

それを一張羅の正装の上から被り、羽織り、身に着ける。

「ダイオーは任せるぞ、俺らは先に行くぜ」

「おうよ」

ホクリクダイオーの引き綱を担当する自分ともう一人を残して、他の関係者はみんな関係者席に向かう。自分たちが一番注目させるのだ。

「最後の確認だ。行くのか？」

厩舎から出ていく直前、厩務員の一人が声を掛けてきた、群馬地方競馬で知り合い気心しれた友人だ。その言葉は敵意一つない穏やかなモノ、これは最後の選択だ。

これは忠誠であり、仕返しであり、恩返しであり、裏切りだ。自分たちを拾ってくれた群馬地方競馬への裏切りであり、かつての職場への恩返しである。

もしここから先に行ってしまうえば自分たちは後戻りすることはできない、行くところまで行くしかなくなる。その先には破滅しかまっていけないとしても。

群馬地方競馬は暖かい場所であつた、寄る辺を失った自分たちを迎えてくれたし自分たちの思いを否定せずに尊重してくれた場所であつた。

自分達のしたいことをすべてと言わずともやらせてくれたし、それ以上に大きな夢や現実を教えてくれる場所でもあつた。

誇りも希望も何もかも失い、職も金も失つて家族も失いかけた自分にすべてを繋ぎ止めさせてくれた恩人たちがいる場所なのだ。

この場にいる人間たちの半分はそんな人間ばかりだ、職場を失っていく場所もない所を拾われた者達ばかりだ。



それを自ら捨てる、本当は間違ったことなのだ、本当ならば心の底に押し込めて封印してしまうべき衝動であつたはずなのだ。

「俺たちはずっと待ち望んできたんだ、ずっと、ずっと、この時を。あいつらと一緒にここにたどり着きたかつたんだ」

「儂らは本当なら互いに顔つき合わせて戦うはずだつた、ここを目指して戦うはずだつた。だがそうはならんかつた、そこまでなれなかつたのさ」

「私たちの知る時代は、世界は、もうどこにもありやしない。もうとうの昔の過去のもんだ」

「俺たちに残されたのはこいつらだけさ、不思議なこともあつたもんだ」

それでも自分たちはここまで来た、来られてしまった、それがどれだけ奇跡的な事か、どれだけ待ち望んでいたことか。

だからやるのだ、戦うのだ、消えていった地方競馬の力を、残された自分たちの技術を、力を合わせてこの戦いに挑むのだ。

「そうかい。行ってこい、馬鹿野郎ども。後悔は残すなよ」  
「解つてるとも」

全員で見せつけてやるつもりだつた、今回だけは恩知らずと言われなくてもやめるつもりはない。今は亡き故郷に最後の恩返しをするつもりだつた。

やるならド派手にかまして散ってやろう、堂々と世界に見せつけてやろう、世界の歴史に刻んでやろう。

このために自分たちは最後のすべてを賭けてきた、何もかも注ぎ込んでやってきた。

ここしかないと思つたからだ、あの怪物の意見も受け入れて普通ならあり得ない練習も全部試して、行ける所まで突っ走るために。

(やるだけやつた、やり残しはもうないよな？なあ、あつたら教えてくれよ)

心の中だけで問いかける、かつての恩師、かつての先輩、そして率いてきたかつての部下や後輩に教え子たち。

もうここには自分達しかいなかった、隣にはみんな誰も居なかつ

た、同期も先輩も後輩も誰一人いなかった、自分一人だけがここまでやってきてしまった。

空しかった、悲しかった、寂しかった、こんな場所に辿り着きたくはなかった。

憧れた場所に、気心知れた仲間たちと一緒に辿り着きたかった、もつと若い時に生形と一緒に来たかったのに、なぜこんな風になってしまったのか。

中央と地方、それだけでこうも変わってしまったのか。自分たちには実力がなかったからか、時代が悪かったのか、思い当たる節はそれこそ無数にある。

自分達には力がなかった、チャンスがなかった、立場がなかった、出会いがなかった、どこまで手を伸ばして背伸びしても届かなかったのだ。

「行こうか、ダイオー。長話に付き合わせて悪かったな」

きつと自分たちが何をやっているかも理解できていないに違いはない、ただただ待たせてしまったホクリクダイオーの頭を撫でて謝り、彼は手綱を握り締めた。

手綱が重い、彼はふと手に握ったホクリクダイオーを引く手綱を見た。

何本も、何本も、自分の手から伸びる手綱が見えた気がした。自分の手に絡みついて離れない、自分の手を雁字搦めにした無数の手綱、それを彼はすべて覚えていた。

本当なら連れてきたかった、一緒にここまで走ってきたかった、走らせてあげられなかった、かつて手塩にかけた名馬たちに繋がる手綱だ。

忘れるわけがない、一本一本がどこの誰に繋がっているのか今でも鮮明に覚えているのだ。

自分に絡みつくその手綱に、自分を引き込まんとばかりに感じる重さに、彼はひどく安心した。

(ああ…ずっと一緒にいてくれたのか…)

ずっと不甲斐ない姿を見せてしまったな、ずっと心配をかけてし

まったな、

すでに手綱の先には皆にはいない、けれどもずっと共にある。魂だけでも連れてこられたのだ、そう思えた。

「どうした？」

声を掛けられて向かい側を見ると、上山のジャケットを被った蹄鉄職人がこちらを見て怪訝そうにしていた。

手元を見る、一本の手綱しかない。その手綱を握り直して、彼は何でもないと言を横に振った。

「行こうか、パドックの時間だ」

自分たちはたどり着いた、フランスに、フランス凱旋門賞に、このロンシャン競馬場に実力を示しに来た。

時代も、世代も、何もかも自分たちが待ち望んだ世界はそこにはなかった。迎えてくれたのは変わらぬ空気と大地だけ。

それでも自分たちはここに立った、凱旋門賞の舞台に立ったのだ。



「はっはっはー野郎ども、まったく面白いことしやがるぜ」

ロンシャン競馬場、パドックを一望できる馬主席。その一つに腰かけていたホクリクダイオーの馬主、新坂三郎は愉快気に笑い声をあげる。

目の前のパドックで今まさに自分の馬が回っている、その周りにいる信頼してきた厩務員たちがかつての職場のジャケットを着て手綱を引いている。

それだけではない、関係者席で取材をしているカメラマンからも報告があり、そこにも廃止や閉鎖した地方競馬場の帽子や手拭いを持った老齢の調教師たちが現れているというのだ。

それを見て目を見開く日本中央競馬の関係者、その反応に面白がったフランス競馬関係者に問いかけられては拙いフランス語で答えて

愕然とさせているらしい。

当然目に入ると思っていたのに馬主はまさかの大笑い、その声にまさにあつけにとられた稲波は信じられないといった口ぶりで新坂に問いかけた。

「止めなくていいんですか？新坂さん」

「うん？なんで止めるんだ？そんな必要ねえな。あいつらは自分のすべきことをした、ただそれだけのことよ。」

それがどうした？この程度が群馬への、俺への裏切りか？」

挑戦的に、挑発的に、そして思い切り悪どく顔をしわくちやに歪めて『ヤクザ者』の顔をした新坂三郎は高笑いしてみせた。

「バカあいうんじゃねーや、これくらい何の問題もありやしねえ。マナーなんたら言ったって、ただジャンパー着てるだけじゃねーか」

どこがですか、稲波は普段らしからぬムスツとした気持だった。

ここで群馬地方競馬の何かしらを宣伝するというならまだわかる、だが今は無い地方競馬のそれを身に着けてくるというのは違うのではないか。

特にブーイングなどはなく好意的に周囲は見ていたとはいえ、もしまかり間違つて悪感情を持たれていたらどうするとかいうのか。

これが裏切りじゃなかったら何だというのだ、そう問いかけようとして稲波は新坂のほうを見て息を呑んだ。

「俺はな、見てきたんだよ。ずっとずっと、ああいう馬鹿野郎どもを、あんなふうにならなくてよかった連中の後姿をさ」

第2次大戦では真珠湾から終戦まで、ずっと最前線を見てきた生き残りの顔に稲波の背筋は思わず凍った。

これまで多くの馬主の顔を見てきた、多くの金持ちの顔を見てきた、だがその中でもひとときわ際立つ『戦場帰り』の貌。

あの西竹一ですらしなかった『人殺し』であり『軍人』であり『死に損ないの残党』と言うにふさわしい凄惨な言葉にできない表情がそこにはあった。

「ミッドウエーじゃ空母がボカボカやられてこりやダメだつて思ったもんさ、事実そうなつちまったしな。」

赤城も蒼龍も俺の加賀も、最後は飛龍も沈んじまって、その後はグダグダと戦争が長引いてよ。ただのパイロットだってこりやあかと肌で感じたもんさ。

しかもズルズルと惰性の戦争なんかしやがってレイテで瑞鶴を囮にまでしやがった、あいつら自分がどんな戦争してたか忘れてんのかって話だ。

しかも作戦の要の大和が日和りかけてたとかほんと何考えてんだ、俺らが囮してる理由忘れてんじやねーって話だぜ。

拳句の果てには特攻だ。特別攻撃隊ってのは糞みてえな高難度任務をやる変態共って意味だったのに、いつしか自爆突撃の代名詞よ。

真珠湾で雷撃やったあの変態共が浮かばれん、あんな狭くて浅い湾内で航空雷撃なんざやれっていう上も上だったがな」

思えばそんな無茶ぶりをやらかす思考回路だったからこそあんな滅茶苦茶な論理も狂気が極まってやってしまったのかもしれないが、と茶化すように彼は笑う。

しかし稲波は全く笑う気なんて起きなかった、三郎の笑みは文字通り目が笑っていかなかった。顔だけが笑い、目つきはどこまでも冷え切っていて乖離が酷すぎて言葉にならない。

「鍛えりやそれなりに出来そうな若い連中が爆弾抱えて片道で突っ込むなんざ軍の作戦じやねえよ。

そんな奴らに飛ばせたところで落ちるだけだったのに、考えてみりや意味がねえってのにどいつもこいつも決定事項だの一点張りよ。

鍛え上げたベテランだってボカボカ落ちる弾幕に若造共が死ぬ気で突っ込めば突破できるなんて奇跡でしかねえってのにな。

それが理解できたと思ったら今度は一トン爆弾仕込んだロケット機に人乗せて突っ込ませますときたもんだ。

俺は今でも理解できんよ、どういう思考回路すりやああなるんだ、むしろワザとか？対艦ミサイル作るために人間を部品にしちまいやがった」

心底呪ったよ、こんな戦争をおっぱじめやがった馬鹿どもも、それで気が狂っても気づかないバカ共も、全部全部呪ったよ。

そういう三郎は、それでも戦うしかなかった。生き残るには戦うしなくて、彼にだつて故郷で待っている家族がいて、死ぬわけにはいかなかった。

「戦果なんて俺が見た限り一回だけ、最後の攻撃くらいだ。ロケット技師を目指してた若い兄ちゃんが桜花に乗って突っ込むのを見届けたとき、それだけさ。」

あれも酷い戦だった、真珠湾からは考えられない参加者全員に死ねって言ってきたような作戦だ。

桜花を乗せた一式陸攻に護衛戦闘機、桜花のせいでもともに逃げられん陸攻に最後まで付いて来れる零戦が足りなくて半分が紫電ときた。

敵空母艦隊目前にや護衛が自然と半分になつてる計算さ、紫電は零戦より航続距離が短くて最後まで付いてくると帰れなくなっちゃうからな。

まあ、紫電の連中は帰れなくなるのを知つて最後まで一緒に来てくれたがね。

字面じゃ作戦は成功だ、珍しく空母も沈めて大戦果さ。だがみんな死んだ、どっちも死んだ、広島の日だったなあ確か。

生き残ったのは俺含めて護衛の零戦3機だけ、帰れたのなんか2機だ。俺も鳳翔が近場に居なきや海の藻屑だったろうよ。

みーんな死んじゃった。狂つてたのさ、敵も味方もみんなみんな、あの時代は狂つてやがった」

それは第二次世界大戦末期の8月6日、日本海軍最後の戦果でありアメリカでは『TF58の悪夢』と語り継がれるエンタープライズ撃沈のことだろう。

日本軍の徹底した持久戦で長引く沖縄を巡る戦いを援護するため佐世保港空襲を企てたTF58の完敗である。

構成艦船のほとんどは日本側の攻撃によって撃沈され、僅かな生存艦と救助された負傷兵は佐世保港に収容された。

その主力であり要のヨークタウン級航空母艦『エンタープライズ』は新坂が守つた特攻部隊から放たれた桜花によって撃沈されたのだ。

公式記録では一発の直撃で大破し炎上、得意のダメージコントロールもままならないまま佐世保空襲のために過積載されており格納庫にも散乱していた陸用爆弾に引火し轟沈している。

確かに目的は果たしていたかもしれない、だがその結果があつた。そういう時代だったのだ、そうだとしても、余りにも悲惨な記憶が積み重なっていた。

「解るか、稲波さん。俺は見てきたんだよ、ずっと、ずっと、見てきたんだよ、ずっと見送ってきたんだよ、何度も何度も、いつも死ぬ準備はできていたのにな。」

「ずっと生き残っちゃってよ、持て余しちゃってよ、だから気に食わねえアメリカで一旗揚げてやろうと思ったら大成功しちゃったのさ」  
「何度死にたいと思つたのだろう、何度終わらせたいと願つてきたのだろう。だが彼は生き残ってしまった、だからここまで生きて生きて生きながらえてきた。」

「あいつ等だつて同じだ、ずっとずっと捨てられない何かを抱えて今まで生きながらえてきたんだよ。解るんだ、辛えんだ、ああいうのはな、重てえんだ」

「ですが…」

「稲波さんよ、あいつらは確かにバカ共さ。昔に固執した老害で年喰つた年寄り連中、昔のようにはいかねえしなんもかんも時代遅れで古臭いもんばつか引き摺っちゃまつてる」

でも、それでも彼らはそれを捨てなかつた。捨てられなかつた。それがどれだけ重く自分を傷つける毒物であつても大切にずっと抱えてきた。

大切だから、捨てたくないから、間違いではないのだから。友のために、先輩のために、後輩のために、理由はいくらでもあつて、それが全て一緒くたになつても彼らは背負い続けた。

「連中は強いんだ、連中はみんな背負わされて、ずっとずっと今の今まで引つ張つてきちまつたんだ。」

自分達と一緒に勇敢に立ち向かつて敗れていった仲間の全てを背負つて、破滅にも恐れず立ち向かつて倒れていった勇敢な連中の無念

を背負って生き地獄をずっと見てきたんだよ。

叶いつこない夢抱えて、残酷な現実にも何度も足掬われて足蹴にされて、何度も地べたに這いつくばってそれでも立ち上がってきてんだよ」

きっと見てきたのだろう、ずっと見てきたのだろう、ずっと見上げてきたのだろう。

地方競馬の停滞と衰退を、中央競馬の躍進と栄光を、そしてその時代を駆け抜けてきた名馬達や名騎手達の活躍を。

その長く苦しい時間を、厳しすぎる残酷な時間を、彼らは耐えて忍んだ。そして彼らは奇跡を掴んだ。

彼らはずいに運命に出会い、現実には振り回され、それでも持ちうる全てを投げうち死に物狂いでやっとなんかここまで辿り着いたのだ。

想像などできなかつた、ただ感じることにしかできなかつた、稲波には三郎の言っていることが何一つ理解できなかつた。

ただそこにある凄惨な現実がそれを語り、その事実を成功の道を辿ってきた若輩の自分にまざまざと見せつけていたのだ。

「稲波さん、あんたが言うバカな行為はな。あいつらの夢だ、手の届かなくなつた憧れの姿なんだ。」

今やつとその憧れに手がかすつたんだ、やつとだ、止める理由は俺にはねえな。武村ッ」

「はっ」

いつも従えている精悍な中年男性秘書が、いつものようにきびきびとした仕草で三郎に向きなおる。

だがその顔色は普段の彼とは違つた、それは覚悟した男の顔で、それを見て三郎のことを憂う目で見つめていた。

「連中に伝えろ、存分にやれとな!! ケツは全部俺がもってやる、存分に楽しめ、やりたいことぜーんぶやつちまつてかまわん!

それから動かせるコネ全部使つて手回ししろ、カメラと記者に情報を流しまくれ! あのバカがやりやがつたつてな!!」

「社長…本当によろしいのですね?」

「おうよ、男に二言はねえ。悪いな、武村。俺も覚悟が出来ちまつた、



付き合う必要はねえぞ」

「ご冗談を。この粗忽者でよろしければ最後までお供させていただきます」

「そうかい。茂三に連絡しろ、上山の連中がやらかしたつてな。あそこん所の連中を引つ張り込んだのはあいつなんだ、少しは骨折つてもらうぜ。」

騒がせたら詫び酒にあいつんとこの酒を関係者に配る、最高の酒を在庫全部買い占めてうちのプライベートジェットで持ってこい」

「銘柄はどうします?。」

「決まってるんだろ!あいつが仕込んだ馬練りだ、新酒のシャンパンみてえな奴も全部だ。」

金に糸目なんぞ付けんじやねえぞ!言い値で買い取れ、蔵を空にしてやれ!!」

「かしこまりました」

こんな老骨が欲しければくれてやる、散々待たせてくれた死神がやつと自分の元に来てくれたのだ。

その三郎の笑みに稲波は寒気を覚えるしかなかった。満面の笑み、死に場所を見つけて喜ぶ武人の笑み。

彼は西竹一とはまるで違った、彼が時代を生き延びた生存者ならば、彼は時代から取り残された死に場所を求める亡霊だ。

故に彼が望むのは一時の狂宴、この身全てを賭けた大博打、あとで何があるかと知ったことではない。

「やつちまえお前ら。意地を見せてやれ、お前らの本当の強さつてやつを見せてやれ。」

恐ろしさを思い知らせてやれ、幸運を思い知らせてやれ、あの時代にお前らがいなかったことの奇跡を噛み締めさせてやれッ」

望んでるのは最高の勝負、一世一代の大勝負、全てを賭けて挑むことただそれのみ。

ここで倒れ朽ち果てるのもまた本望、生きて帰る事なんて、最初から考えてなんかいないのだ。

## 第45話

2006年、10月1日、夜10時ちよつと過ぎあたり、やつと必要な書類の作成を終えた俺は重たい足を引きずって愛しい我が家である馬房に帰ってきたところだった。

鍵開けて、ドア開けて、中に入って、電気付けて、ポケット付き馬着のベストを脱いで今朝整えてシーツを敷いておいた寝蓐に飛び込むようにして横になる。

今日も今日とて残業でしたのよ、ここ最近本当に忙しくて、酒作って書類作って営業してと目も当てられないハードワーク真つ最中のよ。

前世でハードワークにや慣れてるけどさ、経験済みだけでもさ、経験あるから平気ってわけではないわけよ。

もう動きたくない、もう書類見たくない…仕事だつて分かってんだけどさ、やっぱりうんざりするんだよこーいうの。

『あー…眠い』

いかん、眠い。シャワー浴びねえと…朝シャンする余裕をもって起きられる自信ねーよ。

『…つてか、馬にも残業ってあるのね。いやまあ、競走馬よりはマシなのかもしれないけど?』

残業代出るんじゃないか…いや親父さんの事は信じてますがね?仕事にはしつかりとした対価が欲しいのは普通なわけです。

前の会社も残業代だけは渋らなかつたから会社まわってたんだよな、仕事が溜まりすぎてブラック化する時はあれどその分通帳は潤つてたし。

多少なりとも通帳がほくほくしてると多少は気楽なのよねえ…あれ?面白いや今生預金通帳なんざ見たことないぞ。つてか作つてねえじゃん。

『…あしたつくりに行くか、ひるめしんとき、ぎんこーいこ』



放牧地抜けて、そのまままっすぐ家のほうに行って裏口からお邪魔しまーっす…あんれ？

「ひひいん？」『なんぞこれ？』

庭に行くといえるわいるわ、軒下に親父さんがテレビ持ってきててブチたちとかモンスニー爺さんやらが釘付けだ。

なんだなんだ？見せたいのって映画か何かか？そんな面白い奴こんな時間にやってたっけか？

『どれどれ…って競馬じゃねーか』

「おう、来てくれたか。どうだ、凱旋門賞だぜ？見たくないか？」

『いや全然』

期待して損した、てつきりなんかレースの生放送かと思ったのに競馬かよ、なんでこんなの見せたがるんだ親父さん。

「ヒンヒン、ふあああ…」『帰っていい？明日もお仕事だから寝ないalmazいんよ』

「おいおい、凱旋門賞だぜ？デイープとダイオー出てるんだぜ？見ない？」

「エエエ…？」

いや、だから何？凱旋門賞でしょ、そんな雲の上の出来事に元々ミリオタの木っ端競走馬に一体何を感じろと？

名誉ある賞なんでしょうが何のかかわりもない俺からしてみれば悪いけど所詮はただのG1レースにすぎません事よ。

結果なら明日の朝刊でも見ればいいよ、リアルタイムで見る必要はないと思うんだ。

それよか眠い、眠いのよ親父さん、眠らないと明日のお仕事に支障でちやいますわよ。

「まあまあ、これだけでいいからよ。明日半休で午後からでいいからさ」

なんと？これ見るだけで明日半休とな？

「ひひいん」『そういう事なら、まあ…』

「にゃあ…」『相変わらずボケた顔してんなお前』

ブチ、んなこと言われても興味ないもんはねえんだわ。明日半休…

寝るぜ！

『おいおい、せつかく茂三が気を利かせてんだ？喜んでやれよ、凱旋門賞見れるなんてもう一生無いぞ』

『あんだだろ、わがまま言ったの』

こら、そつぽ向くな爺さん。口笛吹こうとするな爺さん。ブーブー汚いぞ爺さん。

それとなく爺さんの視界に入ろうとすると気づくたびに顔と目を全力で背ける爺さん。

俺は親父さんと一緒に仕事してんよ、その親父さんがわざわざ夜中に呼び出すわけがないじゃない!!

ほら、こつちを見ろメジロモンスニー。見ろ、こつちを見ろオ、そつぽ向くな、コツチヲミロオ…。

『なんのことかな?』

『こつちを見ろ、こつちを見ろオ…』

『な、ナンノコトカナア?』

『コツチヲミロオ!!』

『そこまでにしとけ』

俺と爺さんの間に親父さんが割って入る。仕方ねえ、ここは親父さんの顔を立ててやる。

「悪いなタービン。お前がいないとわからんってゴネられてよ。ほれ、これで納めてくれや」

『しようがねえやつちやなあ…』

親父さんが持つて見せてくれたのはバケツと中に入った氷に突き刺さったゴン太ストロー、そしてウイスキーのビン。

ふむ…メーカーズマークか。しようがねえな、普段一緒に仕事してるんだからそりゃ親父さんが無理言うはずねえもんな。

小さく息を吐いてからそれなりに見やすい位置に陣取って座り込むと、親父さんがバケツを置いて中にメーカーズマークを注いでくれる。

瓶一本丸々、人間だったころならこれ見るだけで何とも贅沢だと思っただことか…馬に成るところしてやっとな人間でロツク2〜3杯く

らいなんだよな。

しかも洒落たグラスなんかないから何とも間抜けというか、罰ゲームめいた絵面にしかならん。まあうまいから飲むけど。

ストロー啜えて一混ぜしてから一口、口の中で転がして風味を味わう。うーん、この口の中に広がる芳醇なコクとスモーキーな感じがいい。

「つまみ、どっちがいい？」

『ジャーキー』

親父さんが左右の手に持って差し出してきた右手のビーフジャーキーと左手の飼い葉から右手のジャーキーを喰う。

それに頷いて親父さんは天狗のお面がトレードマークの大袋から皿一杯に盛ったビーフジャーキーをバケツの横に置いてくれた。

人間だったら目を輝かせてただろうなこの山盛りジャーキー、馬の身だとなかなか慎ましい量よ。

うーん、デリシヤス。このどこにでもある天狗のお面のビーフジャーキーはやっぱおつまみにぴったり。

『しつかし……こりゃ本格的に教育カリキュラム組んで覚えさせた方がいいかね』

『肉を食うお前に代わる奴がいると思うか？』

『そりゃいずれはそうならにやならんだろ、ずっと俺がいるわけでもない』

どうにも最近、文字とか映像となると俺に頼りがちになる傾向があるんだよな群馬競馬もこつちも。

そりゃ仕事量が落ち着いているならやれもするが今は忙しいし疲れてるから負担なんだよなあ。

ましてや爺さんなんか、俺に散々教本とか資料とか翻訳させてくるくらい熱心だよ。

元気なのはいいことだがこの調子がずっと続くのはちよつと困るな、俺にだって仕事があるしずっとは付き合えん。

うちはともかく、群馬競馬のほうは本業も忙しいしあいつらも引退って話だし俺も足洗うべきだと思うのよ。

『戻ったぞ…あ、兄貴！なんだ兄貴も見に来たのか！』

『あれ？兄さん珍しい』

やれやれとため息をついていると裏手からのそのそと入ってきた軍曹とシャット、なんで家の裏から？

『なんだ、お前らも見らんか。どこに行つてたんだ？』

『出すもん出してきたぜ、ここって場面を見逃したくないからな』

『人間さんも見逃せないところはそうするんでしょ？』

便所か、まあそれならば馬房のほうに行くのが近いわな、さすがに家の裏でなんてやれんし。

『便所か、ちゃんとケツ拭いてきただろうな？』

『そんなことするの兄貴くらいだぜ』

聞いた俺が悪かった、まだこいつらの衛生観念そこまでじゃなかったわ。ケツむず痒くならんのかね、俺なるから無理だわ。

『兄貴が翻訳してくれんならもつと面白くなりそうだな、実況してくれ実況』

『アレやつてくれるの!!やった、楽しみ!!ナッツも居ればよかったのに』

『トレセンで夜間練習なんだしうがねえよ、帰ってきたら自慢してやろうぜ』

『やめてやれよ』

この野郎、こつちの気も知らねえで。いくら家族とはいえ感じるもんはあんだぞこんやろう。

実況は…ええ、あの青川じゃねーか。前世のテレビ珍プレー好プレーでおなじみのあの人じゃん。

『勘弁してくれ、実況吹き替えなんぞしねえぞ』

『どうしたんだよ兄貴、ダイオー先輩とあのデーブインパクトがやり合うんだぜ？』

『どつちが勝つのかはともかく…今日も疲れてんだよ、解らねえか？お前さんらみたいに競馬重視のスケジュールじゃねーんだわ』

『今日も滅茶苦茶瓶担いで走ってたもんね、峠何回行ってたっけ？』

『10超えてから数えんのやめた』

眠いんだよ、こちとら最近完成したスパークリング馬練りの増産で毎日朝から忙しいんだよ。

朝から晩まで延々と上り下り、さすがに街中をグルグルしまくるのも迷惑だから昼間でもある程度人氣が無いと言えば峠なもの。

最近は両脇で20、上面10の30本背負いで峠を延々と走るのさ、大事な仕込みだから気が抜けねえんで余計疲れるのよ。

アレを仕込めるの俺だけだしまだまだ発展途上だから研究は欠かせない。仕込みに改良に書類仕事と朝から晩まで登って下って走り回って机に齧りついてんのよ。

いくら俺だつてなあ、最近はかなりハードワークしてる自信あるんだ。夜はしつかり眠らないと明日に響く、居眠り運転とかシャレにならないよ。

「フアアアア…」

『本当に眠そうだな…』

『だからそういつてるだろーが…お前もやってくれりや少しは楽になるんだがな』

『無茶言うなよ、酒の機微とかまだ全然わかんないんだって。この前失敗しちゃったし』

あの時は傑作だったな、ステイヤー仕込みのはずが派手に振り回し過ぎてスプリンターとミドルランナーのハーフになっちゃったもんな。

逆にあんな器用に混ぜられる奴は見たことねえぜ、やっぱ才能はあるんだよな。

『失敗したらそれで覚えりやいいって前も言っただろ。次やるときは気を付けりやいい』

『自信ねえなあ…レースしてたほうが気楽でいい。凱旋門賞とか兄貴出れたんじゃねえの？ダイオーさんより速いだろ』

『見たくもない競馬を解説させようとしておいてそれに出ると申すか…不名誉除隊ものだぞ軍曹!!』

『ふめいよじよたいって…なんだ?』

『馬にや早いか…』



ウイスキーを一飲みして気分を落ち着ける…ふう、やっぱり酒は偉大だぜ。これがアニメだったらしい気分転換になったろうよ。

深夜アニメは残業の良いオトモだった、30分休憩の気分転換にちょうどいいんだ。良い現実逃避にもなるし。

『粹入りが始まったな。さすがロンシャン、豪華なゲート使ってやがる』

『見る所そこかよ兄貴、やっぱり弄れると見る所変わるもんなのか』

『細かい所を見るのも大切だぞ、機材の調子如何ではスタートに支障が出る可能性もあるんだぜ？』

もし土壇場でゲート不調で自分だけ取り残されたらお前冷静に対処できるか？』

『そんなことあんのか？』

『ないとは限らん、機械は万能じゃない。整備がしつかりされてるか否か、古すぎないか草臥れてないか、なんとなく見てるだけでも準備ができるもんさ。』

実際弄つてりや、いざって時どこの部分が弱点かもわかるから対処もしやすいしな』

なんか調子悪そうだなって分かればその分身構えられるからね。高崎で実際ゲート不調で閉じ込められたことあったし。

頭突きでゲートこじ開けて走ったがそんな時はさすがに負けたわな、まだ未熟だったから力技で頭から血も出たし。

その後もアクシデントで開かんことはあった、暴れたバカのせいで故障して今度は全員閉じ込められた。そんな時は俺まで中から配線弄らされてよ。

そんな時は敏則の代わりに新人の姉ちゃん乗せてたから大変だったぜ、馬と一緒に姉ちゃんまでビビってるもんだから世話しなきゃならんのだもの。

『整備も行き届いてるみたいだな、感心感心』

『あの機械弄ってるの兄さんくらいだよ』

『ん？なんだ、フランスのレースってのはあの音はないのか？』

『フランスのレースはファンファーレがないらしい、本で読んだ』

『まったく、何腑抜けたこと話してやがる。よく見ろ、シリウスシンボリの野郎だつて散々苦戦した海外だぞ？お前解つてんのか？』

そうカツカすんなよ爺さん、そんなんじや持たねえぜ。

『あいつらのどっちかが勝つ、実力は大体拮抗してるからな。9割9分、ハナ差で決着。1分で大穴だな。』

少なくとも他の連中が弱いとは言わないが、勝てるとは思えん。ルベルさんのかエレクトロクトロなんちやらがかるうじて、奇跡で大穴だ。

海外のレース場ってだけでGIだろ。日本でもやってるじやねえか、ジャパンワールドカップとかダイオーが勝つたんだろ？』

『何も知らん若造が言いやがるな』

『海外だからなんだつてんだ。俺がどれだけあいつらの練習相手に走つたと思つてんだよ、今のあいつらに負ける理由がねえ』

ま、それは今のアイツらだからできた事か。爺さんたちの世代じや無理だ。

『日本には郷に入れば郷に従えつて諺はあるが、いちいちそれに則つてりやあ勝てるもんも勝てねえよ。』

フランスの競馬場で、フランスの流儀に則つて律義にやり合うんざ、日本のやり方が身に沁みついてる日本馬にや不利も不利。

峠の交流戦で相手の地元へ乗り込んだ上に、自分達は断食して徹夜してルート把握もしねえで特殊ルール戦ぶつつけ本番やりますつてんだ。

そんなデバフにデバフかかった状態で勝てるわきやねーだろ、しかもあんな特化型走法だよ』

何だっけか、ガムテープデスマッチだっけ？どつかのバカが漫画の真似して事故つたつて聞いたな最近、それやろうつてんだろ。

そんなもん勝てるわきやねえんだよ、地元の連中が強いなんざ当たり前なのにセルフ縛りしてどうするつてんだ。

『はーん、またお前の変な見方が出てきたな。言ってみろ、お前の見解つてやつ』

『あいつらアスリートに特化しすぎて普通の歩きにも出てたからな。だから普通の足の使い方つてやつを教えてやる事から始めたよ』

『なんだと？てめえ、あいつらになに仕込みやがった？』

変なこたあしてねえよ、睨むなよ爺さん。ただ練習の前にトレセン周りをフラフラ散歩しただけさ。

道路を走って、農道も走って、河原も行ったし公園にも行った。泥だらけのあぜ道に林の中、神社の境内もなんかもな。

あいつらにやあそれが必要だったのさ、競走馬じゃねえ普通の馬としての普通にどこでも歩ける足腰の使い方を覚える必要がな。

競走馬なんてのは中央も地方も変わらん、とどのつまりは競争のエキスパート、走って競い合うために生きるアスリートだろう？

競い合うために走り、レースに勝つために生きる、走ることに生涯を懸けるならそれ専用の足しか必要ないしそれを突き詰めなきゃいかん。

しかもあいつらに関しちや生まれてから今までずっと競馬の世界でしか生きてねえ、だから抜け落ちるのさ。

速く走ることに特化して、芝やら砂やらに特化して、複雑な外の道に適応する柔軟性を失っちゃまってる。

それが普通の歩き方にも出てんだ。普通に生きる分なら別に大したことはないが、こういうところで顔出しやがる。

サイズがあつてない靴を履いてるようなもんだよ。

『別になんも、ただ散歩増やしてあつちこつちふらふらして、いつも通り峠コースでぶっちぎってやっただけであとは前情報教え込んだだけ…あ、思い出した。』

爺さん、仕込んだどうか言うならあんたもだろ。あいつらにいらんこと吹き込みやがって』

お陰様であいつらに散々海外レース場の特徴が載った資料を延々と読み聞かせる羽目になったんだ。

散々千切ってやった後で疲れてんのにそんなことやったもんだから互いに寝ないように必死で起きてる羽目になったぞ。

『できること教えて何が悪いってんだ、お前さんが翻訳すりや人間の資料から少しでも知れるんだ、無いより全然マシじゃねえか。それよりもお前の見解ってやつを教えろ』

『こつちの労力考えろってんだよ…そもそもな、日本の競走馬がこれまで勝てなかつた理由なんて明白じゃねえか』

『ほう？…じゃあその理由は？』

『そうねえ…まあ所詮はド素人の浅知恵ですがね、仕事してりや多少は理解できる程度の事だけでも。』

『まず騎手さん、何かない限り絶対変えるなって念押しした』

『ほう？…外国だと向こうに慣れてる知らん奴乗せるって聞くが？』

『理屈としては正解なんだ、フランスに慣れてない日本人乗せるより地元のフランス人のほうがレース場をよく知ってる。』

理屈は通るさ、だがこれは理屈じゃねえんだよ。ぶっちゃけ精神論だがバカにできねえ』

『そもそも競馬つてのは、騎手だけでやるもんじゃねえからな。俺が言う事じゃないんだらうけども。』

『例えばそうだな…そういうや軍曹のヤツ、敏則以外によく乗ってる中央の騎手を気に入ってたよな。』

『この前スイープとかいう生意気なやつ連れてきたの、確か…池永だったか？』

『軍曹、お前がもしロンシャン走るなら相方は誰がいい？』

『え、俺？…そうだな、敏則兄貴は悪くないけどやっぱ池永だな。楽しいし頼りになる、いざって時は心強いぜ。』

『この前だって、しくじりかけた俺に気付いてすぐ修正してくれた。解りやすく助かってるぜ』

『だろうな、ぶっちゃけ敏則って良くもないし悪くもない。大竹さんやラルベルさんやらと比べたら二流、正直親父さんより少し上って程度だ。』

『それに比べたら中央の池永は経験も技量も段違い、スイープのわがままには苦勞してたがありがやそういう星の下に生まれてきたんだろ。うな。』

『じゃあ池永としばらく組んでたとして、凱旋門で急に敏則と組んだらどうよ？』

『うーん…キツイだろ。敏則兄貴だつてうまくやるだらうけど、正直』

池永じゃねえと勝てると思えない』

『うまくやるのがサラブレッドだろうが』

『爺さん、そういうがあんたはそれで苦労した覚えはないんか?』

『む…』

あるんじゃねえか。そういう事だよ、そこが肝心。

『いくら向こうのレースに慣れてるからって少しのレースで仲良くなるほど異種間交友が楽なもんか?』

向こうのスペックが良くてもな、所詮は互いに良く知らねえ馬の骨、いざって時に頼れるもんかよ』

慣れない海外、初めての環境、初めて見るレース場、同じ芝なのにまるで違うフィールド、どれもこれももない尽くしだ。

こういうので前世でも散々苦労させられたもんだ。イギリスの仕事を振られたから現地に慣れたコンビを向かわせたら向こうで急に組む相手替えさせられたって悲鳴が来たの。

向こうの頭でつかちな命令で現地の秀才と急に組ませて見事にしつちやかめつちやかだよ。そんな即席コンビでうまくいくわきやない、ましてや外国でだぞ。

いくら海外慣れしてる奴らを送り込んだからって限度がある、しかもよりにもよってどっちも優秀ではあったから表向きはうまく回してみせたのがまずかった。

致命的でも何でも無い些細で見えないズレが積み重なって致命的ミスにつながったパターンだったよ。

俺らはすぐに是正を提言したけど向こうは渋って、その間に大敗して大損。

これまでも散々煮え湯を飲まされてきた向こうのエース相手に即席チームが勝てるもんか。

うちら是对策してたから被害は抑えられたけど向こうの秀才は面目丸つぶれな上に責任押し付けられてうちに左遷だ。

才能豊かな秀才だったよあの二人、うちで引き取ってマジで向こうの連中終わってるわって痛感したわ。こいつらでコンビ組ませてうちの共同させりやよかつたのに。

『確かにスペックは大事さ、経歴も、経験も、データで見てやるデジナルなやり方は悪い事じゃねえ。

でもそういうのはな、できる余裕があつてこそ最大の効果を上げる采配だ。

こういう余裕がない時は、互いに背中を預けられる信頼が大切なんだと俺は思つてる。いざつて時に何も考えず『任せた!』つて背中を預けられる感じにな。

爺さん、あんたにだつてそういう騎手さんはいたろう?』

『確かにもし自分が走るなら：俺はあいつしか思い浮かばん、奴なら信用できる』

『それが大事なんだよ、馬鹿にならねえ。あんたがレースでもし迷つたとき、凱旋門賞でどうしようもない位追い詰められた時、相棒に任せろつて言われたらどうする?』

『…ああ、そうだな。相棒の事なら信じるだろうよ、あいつならやつてくれる、それで駄目ならしょうがない』

それだよ。

相棒ならこうしてくれる、こいつなら任せられる、これでダメならしょうがねえ、こうやつて割り切れると思いきつた手段が取れたり行動に迷いがなくなるんだ。

そういう行動の爆発力つてのはバカにできない、阿吽の呼吸でやられるとなんのこともない普通の反撃がキレイに嵌る。

そもそも全幅の信頼を置く相棒の咄嗟の判断に逡巡しないで即体が動くつてのはアスリートにとつちやデカイぜ。

『理屈じゃねえんだよ、こういうの。経験だの、才能だの、結果だの、大切なのはそこじゃねえんだ。』

今現場で戦つてる連中に必要なのはな、自分がピンチの時に支えてくれるつて信じられる仲間なんだよ』

『確かにそりゃ理屈じゃねえな、ならその点はお眼鏡に：いや、聞く必要ねえな』

もちろん、満点さ。デイープと大竹さん、ダイオーに頼信、完璧な布陣だぜ。でもねえ：

『それくらい仕事してりやわかるもんだと思ってたんだがなあ…なあんか調べるといろいろやらかしてんねえ、俺から見ると。』

『そもそもF1カーにダートラリー走らせちやいかんというにそんなことしてちや勝てんわな』

『……すまん、もつとこう、俺らの種族的にわかる言葉にしてくれ』  
『舗装道路用カスタムしたレーシングカーでオフロードレース走るよ  
うなもんだよ、バギーだのハマーが適正車種なところにFD突っ込んでやがんの。』

『タイヤ、セツトアップ、そもそもの適正まで全然マッチしてねえ。  
そんななんいくら時速何百だのでかつ飛ばせるって速度自慢も意味がねえ、きつちり性能を引き出せるコース走ってねえんだから。』

『どんだけ乗り手が努力したって無理があらあな、馬も騎手も走るだけで苦勞してただろうよ』

『走り屋基準で話さんでくれんか、オフロードだのなんだのはさっぱりだ』

『そう言ってもなあ…まあアレだ、フランスの競馬場つてのはまるで道路を切り取ったような感じだろ？あの地点で日本のそれとちげえわ』

『俺としちやそうとしか言えんのだが…あいつらは芝が芝がつて言つてたがそうじゃねえよ、俺に言わせりや芝なんざ気にするのは後だ。』

『それよりもつと気にすべきはさらに下、フランスのあれはもさもさの芝で覆い隠されてるがその下の地面もまるで馴らされちやいない。』

『見た限りありやあ整地されてないか敢えてそうしてる、自然のままっぼいぞ。田んぼの脇道とかのほうががっちり踏み固められて走りやすそうだ。』

『きつちりレース用に整備されて競争するために作られたコースしか知らん連中に、あんな山道みたいなコンディションのコースは足に負担がでかすぎる。』

『そもそも日本の競馬場はレースをするために最適化されたコース、きつちりかつちり整備して入念な審査と検査をしてる。』

郡サイとか鈴鹿とかのサーキットと同類だよ。それに対してロンシャンはラリー用、WRCとかの類だな。

そりゃ走るほうも走りにくくてしょうがねえだろうよ、普段はアスファルトで舗装された上にきっちり整備されてるレースコース走ってるみたいなものなんだから。

『完全に合ってねえんだよ、日本競馬とフランス競馬はまるで違うのっけから不利だ、そりゃ向こうも承知だろうけどな。』

馬は車みてえにはいかない、車はタイヤが合ってなきやタイヤを変えて、セツトアップがかみ合ってなきや調整できる。

極端な話、幅が利く。その場凌ぎの小手先で何とか出来る余地が広いんだよ。

だが馬は蹄鉄を履き替えてハイ終了とはいかんذار、蹄鉄替えても動かすのは自分で走るのも自分なんだ。

部品を取り換えるとかドライバーのテクニクとかとは違う。馬そのものの応用力、それを御する騎手の技術、そして互いの信頼関係、そんな小手先の調整だつて一朝一夕になんて無理だ。

ま、だからさつきも言った通り普通の足使いを思い出させたんだ』  
『何言つて…いや待て、なんか覚えがあるぞ。どこかで聞いたような…』

うん、なんか爺さんの様子が…なんだ？前にもおんなじこと言つた奴がいたのか？お、そろそろレースが始まるかな？

『思い出した！ルドルフだ!!』

『昔の仲間か？』

『ああ！中央にいたとき、たまたま顔を合わせることがあったんだがあいつがそんなこと言つてやがった。』

確か、あいつが海外で足やった時だ!!土の道に入った途端走り方が分からなくなつたとかなんとか言つてたんだ!』

『なんだそりゃ？土道つて練習場でしくじつたのか？』

『いいや、海外のレース場には芝コースをぶった切つて土のコースが横切つてる場所があるんだとよ。』

そこに差し掛かった途端に形容しがたい違和感がして、足の感覚が



まるで別物になって頭が追い付かなくなったらしい。

何とか乗り切ろうとしたそうだが、そんなんじや足運びもくそも無くてうっかり土と芝の切れ目に足突っ込んでやっちゃまったそうだ』

爺さんの知り合いなら芝だろ、そらキツイわ。急にコンデイションも足場もがらりと変わるんだ。

俺も峠で何度もそういうの見てきたけど解つても走りにくいんだぜ？足の食いつきも変わるし蹄の掛け方も変わる。

『あいつですら惑わされたんだ、こりや気が氣じやねえだろうな。孫が同じようなことになってやがる』

『何言つてんだ爺さん、心配いらねえよ』

『お前は心配じやねえのか、あいつらはお前よりも弱いんだぞ』

『やつてのけるさ、あいつらの強さは良く知ってる。あとな爺さん、その言い方は良くねえな』

まったく、爺さんめ。久々に高ぶってやがんのか？柄にもないテンパリ方しやがって。

『あいつらが弱いんじゃない、俺が強いんだ』

あいつらは強い、それ以上に俺が強かった。それだけのことだ、そしてあそこに俺はいない。

そもそも、あいつらの実力は俺が良く知ってる。俺がいつも相手してるんだから当然だろ？

普段の仕事もあるってのに雨の日も風の日も練習に付き合わされたんだ、そりや嫌でも理解させられるさ。

そもそも自分の友達だぜ？なら俺が言う事なんざ決まり切ってるだろうが。

『心配すんな、勝つさ。負けるわけがねえ』

テメエの友達を信じない友達がどこにいるっていうんだよ。

《スタートしました!!第85回凱旋門賞!!》

始まったな、お手並み拝見と行こうか。ガチャコンとゲートが開いてロンシャン競馬場にあいつらが飛び出した。

《まずまずのスタートを切りまして、まずは大竹満騎手とデイープインパクト。外目に付けてそろりそろりと後方に下がります。》

続いて新坂頼信騎手とホクリクダイオーは前目に付けました、先頭にシロッコ、ハリケーンラン、少し遅れてレイルリンク、それに続く形です。》

ディーブと大竹さんはいつも通り追い込み狙い、ホクリクダイオーもいつもの先行策だな。

《このあたりから坂の登りに入りますが馬群は固まったまま、後方も離されずしつかりついてきています。

後方シックスステイズアイコン、エレクトロキューションニスト、プライド。プライドからわずかに遅れてディーブインパクト最後方からの競馬です》

『どう見る?』

『いつものだ、ダイオーもディーブも』

ダイオーのヤツ、初っ端からしつかり足を先頭の連中に同期させて足音と気配を消してやがる。大忍び戦法は健在だ。

その上で敢えてディーブと大竹さんにその姿を見せつけて牽制、相手が良く自分を分かっているからこそできることだな。

《長い坂がまだまだ続きますが先頭シロッコ、ブレずに前へ進む強い走り。

続くハリケーンラン、レイルリンク、ホクリクダイオーはその内側でラチ沿いに進んでいます》

坂：坂? 競馬場の坂っていつも思うけどあの程度なんか? ただのスロープやん、あんなのもうブニーだって軽く走るのだが…いや、みなまで言うまい。

《坂を上り終えまして残り1400メートル、ここから坂の下りに入っていきます。

先頭にシロッコとハリケーンラン、3番手にレイルリンクすぐ横にホクリクダイオー。

ディーブインパクトは後方2番手、外目に付けて滑らかな走りを見せています》

『…外に出過ぎじゃないか?』

『ダイオー先輩、囲まれちまいそくだ…』

『ぶきぶき』

『ヤーて?』

ダイオーは相も変わらず先行策で息を潜めて前を狙う、後ろに付けている奴は恐らく気づいてないか忘れそうになりそうで四苦八苦し  
てる。

これがホクリクダイオーの怖い所だ、勝負時まで粘るとあいつのこ  
とが騎手からも馬からもすっぽり抜ける時がある。だって気配も足  
音も消えるからな、見ないとわからん。

ディープはいつもみたいに後方、外目に出してペースをいつも通り  
に調節して体力と足を溜めてる。いいぞ、速度を距離で合わせてる。

しかもそこは穴場の特等席だ、馬群の流れも警戒する相手もよく  
見える絶好の位置だろうよ。

《残り1000メートルを切りました、もう間もなく偽りの直線、  
フォルスストレートに突入します。

どの馬もまだ仕掛けない、大きな手ごたえのないままフォルススト  
レートに入ります——!?》

そら来た、動くぞ、あの2頭が。

《ホクリクダイオーが抜けた!?ホクリクダイオーここで仕掛けた  
!!》

フォルスなんちやらに入る直前に先頭3頭の意識が前に集中した、  
その隙と緊張をホクリクダイオーが逃すわけがない。

どれだけ意識を集中していてもできちまう一瞬の意識の偏り、それ  
がフォルスなんちやらに入って大きくなっている。

経験者だとそこが怖い、しかしダイオー共はそうでもない。先の見  
えないコーナーなんて散々トレセンで走ってる。

その緊張と隙を狙えばタイミングも多い、好きな時に前にちよいと  
出して、隙間に鼻先突っ込んでこじ開けちまえばこっちのもの。

ギア上げて、素早く前へ、そして柔軟な足で芝を踏み、土に足を喰  
い込ませて前へ飛ぶ!

《ホクリクダイオー先頭!!残り750でホクリクダイオーが仕掛  
けた!!ぐんぐん前に伸びていきますが持つのか!?!》

そしてホクリクダイオーの仕掛けに呼応して馬群全体の意識がダイオーと頼信に集中、これを待ってたあのコンビが動くってわけだ。あいつらならこうやるだろうって、大竹さんとディープリンパクトは良く知ってるからな。

《ホクリクダイオー先頭!!まさかのロングスパートでペースが上がっている!!ディープリンパクトは大丈夫か?7番手ディープリンパクト:どこだ?!いない!?

ディープリンパクトが消えた!!?ディープリンパクトが後方から消えた!!》

後方?馬鹿言え、とつくに大外から追い上げてきて4番手のプライドを抜かしておるわ。

そらそら来たぞ、黒い鬼さんが大外まわって前に来てるぞ。ロングスパートの鬼がぐんぐん上がってきているぞ。

《ディ、ディープリンパクト4番手!!いや2番手!!ディープリンパクト大外からぐんぐん上がってまくり上げて来たああ!!》

ディープリンパクトが得意の追い込みで大外捲り上げだ。恐ろしく力強い踏み込み、芝の深さと食い込みやすい地面を逆に利用した力任せの超加速。

それについて行けるのは:へえ、エレクトロキューション。ディープリについて上がるか、面白いが:踏み込みが浅い。付け焼刃だな、そういう動きだ。

《抜けた!抜けた!!上がってきた!!突き抜けた!!ホクリクダイオーに遅れてディープリンパクトが抜ける!!

伸びる伸びる!!ホクリクダイオー目掛けて突き進む!!日本対日本の頂上決戦か!伸びる伸びるあつという間にすぐ後ろ!!

エレクトロキューションが追う、レイルリンクも追う!!後方はさらに仕掛けるが伸びるか!!伸びないか!!

前に行く前に行くこれはすごい末脚勝負!!直線に入って後ろをどンドン突き放す!!レイルリンク落ちる!!エレクトロキューショント届かない!!

届かない!!届かない!!日本両馬で決戦だ!!残り200、並ぶ!並ぶ

!!日本の馬が並んでいる!!

ディープインパクト先頭!!ホクリクダイオー先頭!!ディープインパクトか!!ホクリクダイオーか!!》

『ほらな?』

2馬身、3馬身、ダイオーとディープがどんどん差を広げて突き進んでいく。

テレビの中がより一層色めき立つ、興奮しまくる解説がすっかり意味を為していない画面を見ればゴール直前、予想通りの展開だ。

いくら海外レースが初めてとはいえあいつらが『初見さん』程度に捕まるもんかよ。

ゴールまであと少し、直線勝負はあいつら2頭の独壇場。ディープとダイオーが大差をつけて突き放して潰し合いの真っ最中。

2頭で並んでどっちが先に垂れるかを懸けたチキンレース。残り100、時速87辺りだが…

ハナを伸ばして抜いては抜かれてを繰り返す、意地の張り合いだ。他に敵はいない。

ギアを上げろ、お前らだってできるんだろ?散々見せたじゃないか。

《ディープインパクト先頭!!ホクリクダイオー先頭!!》

息を吸う、4つ数える、息を吐く。姿勢を整え、体の力を抜いて半クラッチ。一瞬の減速、力が抜ける体を制御する。

そして息を、鼓動を、血流を、筋肉の動きを、関節の角度を、崩れる前に最高のタイミングで繋ぎ直す!

《は、速い!はやい早い速い!!さらに加速、加速してなお纏れ合う!!決まらない決まらない決まらない!!!》

残り70、時速87、互いに譲らない。

残り50、88、変わらない。もうあいつらが見てるのは前だけだ。残り20、89、譲らない。後ろの連中の目が怖いもの見る目してんぜ、舐めてたか?ざまあねえな。

《そのまま!纏れ合って!!ゴール!!!ゴール!ゴールゴール  
ゴーーーーール!!》

『ふむ…まあこうなるわな』

互いに譲らない競り合いをしたままゴール板を通過、最高時速90って所か。途端に言葉にならない歓声と悲鳴がスピーカーから鳴り響く。

おいおい実況と解説が仕事放棄しちゃったよ…これ年末の珍プレー好プレーとかに長年取り上げられるタイプじゃね？

『勝った!!どっちが勝ったんだ!!』

『解らん、同時にしか見えんかったな。向こうの判定待ちだ』

『すげー!!スゲー!!先輩たちスゲー!!』

『ふーん…これがレースかあ…面白そう』

受けは上々なようで、同じように走れる奴なんざそうそうおらんけどね。

お、審議…じゃねえな写真判定だ。あいつらの後が先着エレクトロキューションリストで次がレイルリンク…クビ差ね。

『おおよそ90か、あのコンディションで初コース、あいつらやっぱバケモンじゃねえか』

すげえ奴らだよ本当に。危なっかしくて見てらんねえくらいに全身全霊って感じで、何度もやれるもんじゃないうつてのにいつもそうだ。

解ってるだろうに、それが自分の命を削る行為だつてことくらい。なのにホント、良い顔してやがるんだよな。

「無茶するねえ、怖い怖い」

『親父さんもそう思うか?だよなあ』

怖い怖い、怖くて危なっかしくて…すげえかつこいいじゃねえか。ほんと、お前らはいっつもそうやって輝いてさ。

本当にさ、すごい事ばつかしてるんだ。俺はそうは生きられなかった。

最初の仲間はまだお前らだけだぜ、みんな用途変更で消えちまったよ。俺もお前らももう会ってないだろう?高崎だけでもそうなんだよ。

走れなければ競走馬としては生きられない、そのまま別の道が見つ

かればいいが大半は肉になるんだ。

経済動物なんだ、牛や豚と変わらねえ。でもよ、それで納得して殺されろってのか？俺は嫌だ、喰われるのなんか嫌だ。

そんな怖がって生きるのなんて嫌だろ、生きるんならたとえ苦しい時はあつても笑って楽しくなくちや嫌だろ。

『おま：それをお前が言うのか』

『忌憚のない意見ってやつすよ』

「モンスニー、ああいうのは見る分には面白いかもしれねえが実際当たると怖いんだよ。」

遊んでる時ならクツソ面白いんだろうけど、仕事の時にやられるとたまつたもんじゃねーや」

『おいおい、茂三までそんなこと言うのか。タービン、そういう割に高崎じゃ楽しんでるんじゃなかったか？』

違うよ、それは登録継続のために最低限義務的に走ってるだけだ。あいつらと一緒に居たいから、それに必要な資格の更新作業でしかないんだよ。

あいつらと一緒にいるのは楽しいんだよ、ただ駄弁ってバカするのが凄く楽しいんだよ、競い合えるときなんかすつげえ生き生きしてたよ。

でもそういうの、競馬そのものには見れなかった。むしろ峠と酒造りにそういうのが見えたんだ、それだけさ。

『ま、それなりにな：だがまあ、そろそろ潮時かね』

『まさかテメエまで引退する気か？まだ早いだろ』

『馬鹿言え、そろそろ本業に専念する頃合いさ。酒造りはそう甘いもんじゃねえって知ってるだろ？二足草履はそろそろ卒業だ』

あいつらがいない競馬に興味なんてねえよ、走る意味なんてないんだ。俺もやめ時を見極める時期に来たわけさ。

『せいぜい来年いっぱいかね、それで畳むさ』

『あー：そうだな、お前はそういう奴だよな。まったく、ただかしこぶってるだけじゃねえのが質が悪いぜ』

『やるときはやる人間だと言ってくれ』

『人じゃねえだろ』

言葉の綾だよ。

『さて、終わったなら俺あ帰るぞ。さすがに眠いぜ』

『待て待て、結果見なくていいのか?』

『明日のニュースでも見りやいいだろ。どの結果であれこの大騒ぎだ、明日の朝刊でいいよ』

結果は逃げんだろ、さすがに眠気に耐えられなくなりそうだ。集中切れちまったな。

しっかしまあ、みんなすごい所に行っちゃまったなあ…でももう俺と当たることはない、ラストランは中央だ。

こんなの中央の連中が黙ってない、俺が入る隙なんか残ってないさ。最後は勝ち逃げできたのだけでも良しとするかね。

楽しかったなあ…本当に去年から楽しい日々だったよ。引退すりゃ、もう会うことはないだろうな、特にディーブなんざ。

『そうだタービン、ちよいといいか?』

『なんぞ?』

なんだかてんやわんやしてるテレビの向こう側の審議がどうにも決着が付きそうにないので馬房に戻ろうとしたら親父さんに止められた。

え、まさか親父さんまで勝敗まで見てろってのかい? あんまり長いとガチで寝ちやいそうなんだけど。

『眠そうだな、そんな時間がかかんねえよ。次のレースの話だ』

次? なんかレース走る気か? そんな暇あんのかい?

『勝手なこととしてすまん、嫌ならそれでいいから話だけでも聞いてくれ。うまくいくかもわからねえ、ダメ元だ。』

あんなこと起きるわけがねえし、こんなのうまくいってもきつとろくなことにならねえ、お前は最初から最後まで笑われるか嫌われ者の道化になる。

俺らはお前の爺さんの様な愛される馬鹿じゃない、どう転んでもきつといい方向には転ばねえ」

親父さんの言っていることがよくわからん。何を言ってる、あいつ



らはもう高崎では走らんだろうに。

来年はあいつら引退だ、俺はたぶん少し走るだろうがそれだつてまだ先の話、ここで話すことじゃない。

《同着！同着です!!なんと日本の競走馬が！凱旋門賞同着ツ!!》

「でもな、あいつらのラストランなんだ。最後だ、ならやつぱりお前がいねえと締まりがねえだろ？お前がいないと俺らには話にならねえ…

いや違う、俺は見たいんだよ。俺が見てえんだよ、あいつらにはお前が居なきや面白くねえ、お前がいないと俺は納得できねえ。

あいつらもろとも、お前が中山をぶっちぎってるのが見てえんだよッ」

《夢は終わらない!!夢で終わらせない!!決着は日本、暮れの中山！有馬記念に持ち越したああああッ!!》

「次走の予定は中山、有馬記念だ。そいつに登録した、頼む。あいつらに勝ってみせちゃくれないか？」

「…Why?」『…Why?』

一体何がどうなっているんだ？それってありなのか？

## 第46話

人気の少ないロンシャン競馬場の厩舎に人影が伸びる、祝勝会を抜け出してきた大竹は何とも言えない気分のまま馬房の中に居た。

理由は特にない、祝勝会の空気の中でられたのか、ついていけないかったのか、ただ居心地が悪くて気分転換に散歩をしていたらここに居たのだ。

どうせなら相棒と一緒に乾杯するのも悪くない、デイープリンパクトの馬房なら飲み干さない限り水はある。

そんな気持ちでデイープリンパクトのいる馬房に近づいていくと、向かいの馬房から小さく鉄を打つような音が聞こえてきて大竹は首を傾げた。

「おや、今日の主役が何をしてんだい？」

気になってデイープリンパクトの向かいの馬房、ホクリクダイオーにあてがわれた馬房を覗き込むとそこには体を横たえてリラックスするホクリクダイオーの右後ろ脚の蹄鉄を金槌で小突く老男性がいた。

ホクリクダイオーをこの舞台にまで引き上げた立て役者の一人である蹄鉄職人である彼は、慣れたように滑らかな手つきで蹄鉄を叩いてそれを微調節している。

大竹がのぞき込んだことに気付いた蹄鉄職人の彼は、人のいい好々爺とした笑みを浮かべて問いかけてきた。

「それはあなたもでしょう、何をしていますんです？」

「いつもの仕事さ、今日もかなり無茶してたからな」

コンコンと蹄鉄を小突き、その音の反響具合で何かを見定めている彼はどこまでも自然体であった。

どこか田舎っぽい、牧歌的なゆったりとした仕草だったがその手つきは並みの蹄鉄職人ではない凄みがある。

その姿と、彼が日中手にしていたモノを思い浮かべて大竹は聞いて

みたくなって問いかけた。

「失礼は承知でお聞きしたいのですが：以前は上山に？」

「おうさ、無くなる最後の日までな。聞きたいことは分かっとなるからいいよ。俺を拾ったのは茂三さ」

「やっぱり」

「何を隠そう、ツイインターボの蹄鉄を付けてたのはこの俺だからな。中央の芝馬にダート走らせようってんだ、気が抜けない仕事だったが悪かかった。

それが縁であいつとはちよいと縁があった、ツイインターボにゾッコンだったからな」

彼は昔を思い出してとても愉快そうに微笑む。彼曰く、茂三の入れ込み具合は相当であつたらしい。

曰く、上山競馬場でツイインターボが走るときは必ずいた茂三をこっそりツイインターボに会わせたり、放牧中に見学させたりしていたそうだ。

引退した後も頻繁にはないが節目には顔を見せ、養育牧場にも顔が利くようになるくらいに仲良くなつてもいた。

「ターボが死んで、縁も切れるかと思つたがああの野郎、ちよこちよこ会いに来るんだよ。」

聞けば墓参りは毎年するし、牧場のほうにもあいつは自分の所の引退馬を預けて世話焼いてるって話だ。

そんな縁がまさかまさかだ、上山が終わつたその日に俺を拾つて群馬競馬に放り込みやがつたんだ。

あの野郎、引退させるには惜しいとかなんとか抜かしておだてやがつてよ。知つてんだぞ、上山を残そうとしてかなり動いてたらしいじゃねえか。

不採算なのに目を付けて、買い叩いて私設競馬場にしまおうとかまで考えてた辺り相当イカレてるよ」

「あの人らしいですね、タービンの時もかなりぼったくられてたのに即金で払つたとか聞きましたよ」

「あれも最初はバカなことをつて思つたもんだ。聞けば聞くほど胡散

臭い、あんなぽつと出、普通あり得ねえだろうが。

だつてのにあの野郎、あそこがまともな育成してねえって知つてながらダチを信じてサラツと金払いやがった。

知つてるか？あそこの牧場、タービンを育てる金すら惜しんで職員すら騙して育成してたんだぞ。

賞味期限切れの赤ちゃん用粉ミルクを幼駒用の安物粉ミルクとすり替えてたなんて聞いたときはふざけんなって思ったもんだ」

それは大竹も知つている、深く調べてその話を聞いたときはこんなふざけた経営者のいる牧場があるとは信じられなかった。

そう考えるとやはり自分は騎手として幸せな道を生きてこられたのだと思わざるを得ないのだ、出会う馬も出会う相手もすべて幸運なことにもまともであつたのだ。

「殺す気だつたんだよ、茂三の話なんざ本気にしてなかつた派閥がいたのさ。だから殺して経費を浮かそうとしやがったんだ。

競走馬を育てようつてんだ、そりや安いもんじゃねえさ。それを惜しんだんだよ。

育成しようとしたけど死んじゃつたからしょうがないってか？しかもその費用まで浮かせようとした？牧場経営主どころじゃねえ、人として終わつてる。

結果としてタービンは他より安く育つて無事売れて、事が明るみに出るのを恐れて隠蔽してたがな。だがそんなふざけた環境で育つた馬がまともなわけがあるかってんだ」

実際にまともではなかつたのだ、しかしそれは極めて良い方向にすべてが向いている辺り本当にシマカゼタービンという馬は分からない。

馬の神に愛されているのか、憎まれているのか、そんな波乱万丈な生誕を迎えて今や峠の走り屋である。

「世の中、不思議なこともあるもんだ。その馬が今やこの大騒動の裏の立役者ときたまもんだ、まったく」

「フヒヒン？」

「おーそうだな、お前の自慢のダチだもんなあ。あいつ凄いやなあ、こ

の前なんか碓井でプロ相手にやりあったってよ。いい勝負はしたらしいが」

「フヒツ!」

「ヒヒイン!」

「なんですかそれ!?聞いたことないですよ!!」

「く、喰いつきいいなあお前ら!?!っていうかデイープ放馬放馬!!」

蹄鉄職人が指さす方を後ろを見ると、自分の馬房の柵を開けて真後ろにいるデイープリンパクトの姿が。

いつもの事である、大竹はすぐに前に向きなおった。

「ヴツフ?」で、どうなったんですか?」

「慣れてやがる。さすが中央…俺だってシビック野郎から聞いたただけだよ、この前の定期連絡でちよろつとな。」

なんか碓井峠に行ったらプロになったOBが顔見せしてるのに出くわして、面白がられて勝負吹っ掛けられたって話だ」

「聞いたことないんですけど…」

「群馬にいるアイツが連絡してくるはずねえだろ…言つとくが負けたぞ、5秒差つけられて完敗だ。」

相手は不慣れな後輩の車で今の碓井に慣れてなかったからいい勝負になっただけ、っていうのがあいつらの言い分だとさ。

だから自慢なんかしてこねえだろう、あいつらの中じやいい勉強つてことらしい…やっぱズレてるよな?あの馬鹿ども」

親友を褒められているのに気づいたホクリクダイオーは自慢げに鼻を鳴らす。それに呼応してデイープリンパクトも嘶く。

「フヒン、ヒヒン♪ヒヒイン!!」「ヒヒーン!!ヒンヒン!!ヒヒーン!!」

「ダメだからな」「ダメだからね」

「フア!」

行くぞ行くぞやるぞやるぞと見るからにやる気を出して鼻息を荒くするデイープリンパクトとホクリクダイオーに、大竹と蹄鉄職人はぴしやりと止める。

この二頭がやらせろと言っていることは目を見ればわかる、シマカゼターピンを負かしたプロレーサーとやらせろというのだ。

(公道の峠道を走る走り屋とは違う舗装された平地を主戦とするプロレーサー、跨ってるのが機械か馬かの違いだけとしか考えてないんだろうな)

大方『プロならば仕事で都合が付く、帰国したらそいつらのレースに登録しろ』とでも言いたいのだろう。散々違いを教わっているだろうに懲りない奴らである。

相手がどのレースのレーサーをしているのかもわかっていないというのに。これでF1レーサーだとしたらどうやって勝てというのだ、シマカゼタービンでも無理というだろう。

「ダメに決まってるだろうおてんば娘、あれはあいつだからできることだったの。」

中央の重賞馬の足を見る事になっちまってビビったもんだが、お前は昔と変わんないな」

「ディープもだよ、たまにネジ外れちゃうのは治らないね。ほら、帰った帰った」

少し不満げな様子で踵を返して馬房に戻っていくディープインパクトを見送りながら大竹は肩をすくめる。

「まったく、中央ってのは規格外だねえ。あんなふうなのがいっぱいいるのかい？俺が言うのもなんだけどさ」

「ははは、まさかまさか」

「本当かよ…ま、いいわ。そろそろ行くぞ、みんな待ってるからな」  
「おや、どちらに？」

道具をしまった彼はホクリクダイオーの手綱を握ると立ち上がった。

「レース場だ、明日は朝から馬運車に飛行機にと日本まで缶詰めだからな。気分転換させてやりてえのさ。」

夜にレース場使つて良いか運営様に掛け合ったら撮影と引き換えに特別にOK貰えたんだ」

「また直帰ですか!?群馬の皆さん何でそうなるんです、いつも強行軍じゃないですか」

「中央さんみたいに金が潤沢つてわけじゃねえんだよ。うちらだつて

結構カツカツでやってんだ、こうじゃねえと遠征できんのよ」

「しかしいくら何でも…それじゃ馬だけじゃなくてあなたたちにも負担が大きすぎる。せめて数日は余裕を見たほうがいいと思いますよ？」

「残念ながらそんな金もないんだよ、あの新坂とはいえ会社でやってるわけじゃねえからな。うちの社長のポケットマネーはカツカツさ。

それに長々してたらその分うるさいだろう？うちらみたいなのはそういうのはキツイし帰れなくなりそうさ。うちら老骨の気力が切れんうちに帰れるなら強行軍もいいもんさ。

それにアイツの入れ知恵のおかげでこいつらは輸送平気だかんな、こんな強行軍できねえし遠征なんか到底無理だったよ。お前さんらもそうだろう？」

大竹はその問いに頷くしかなかった。確かにデーパーインパクトの長距離輸送による消耗は、今まで多くの海外遠征で経験した中でも異次元の健康体であった。

飼い葉の吸い込みは変わらず、睡眠や生活リズムも時差ボケを自力で修正して以後は狂いもない、輸送中のストレスもほとんど感じさせず馬体はまるで変化がない。

日本にいたときとまるで変わらないデーパーインパクトが、国内のポテンシャルをそのまま維持して飛行機を降りてきたのだ。

現地に慣れてからはむしろ環境の変化に興味津々で好奇心を掻き立てられるほどに元気いっぱいだった、本当に長距離輸送したのか疑わしいほどだ。

「ブルルッ！」

「おうおう、なんだお前は今日の復習したいってか？さすがに全面は無理があるぞ」

「ヒヒインッ！」

「無茶言いやがって…解った解った。あとでカメラさん乗せて走ってもらおうか、それならあっちも言い訳付くだろう」

「ヒヒーン！」

「まったく…そうさ、どうせならお前んこのヤツの話でも聞いてや

れ」

「とぅーとぅー」

「今のお前さんと同じさ。まーったく、お前ら揃って似たもん同士だな。顔に出てんぞ、消化不良だつてな」

上山の蹄鉄士はどこか懐かしそうに微笑み、ホクリクダイオーの手綱を引いて馬房を出ていく。それを見送る大竹は少しばつが悪そうに頬を搔いた。

こりや勝てないな、年長者というだけあつてお見通しといつてもいい口ぶりは明らかに大竹満という人間を見抜いていた。

さすが年の功というべきだろう、地方と中央の違いはあれどまったくもって油断ならない。

しかし似た者同士とはいったいどんな顔をしていたのだろうか、大竹は馬房の中に戻って素知らぬ顔で水を飲むディープリンパクトのほうを覗き込んだ。

先ほどの事なんてなかったようにふるまう彼は、ちらりと大竹のほうを見てから飲み干したペットボトルを踏みつぶしてゴミ箱のほうに放る。

口から器用に飛んでったペットボトルはきれいな放物線を描いてゴミ箱の縁に当たり跳ね返った。確かにどこか不満気だ。

「ディープ、君も納得いかないのかい？」

「ブルルツ？」

「そんな顔しなくても分かるよ。あれに反応したのってずっと聞き耳立ててたんだろ？」

「…ヴッフ」

バレちまった、とでもいうようにため息をついたディープリンパクトは馬房の壁に背を預けるようにして身を休めると少し物憂げな眼差しを大竹に返した。

普段ならばもう少し喜んでいる雰囲気を見せてくれるものだが、今回のレースは嬉しくとも思うところのあるレースだったのだろう。

(それもそうか…奥の手を出してなお届かなかったからね)

ディープリンパクトは強い、ホクリクダイオーは強い。そして自分



たちはここにきて、ついに日本競馬界の悲願を達成してみせた。

しかしそれ以上に彼らや自分が相手にしてきたシマカゼタービンが化け物過ぎる。

確かに鍛え上げてきた、確かに実力もつけた、すべてを出し切って追い立ててやれば彼の速度にも短時間ながら拮抗し、わずかに上回れるだろう。

勝てる道筋はある、勝てる道理はある、しかしそれがどれだけ難しい事か。その一瞬で勝ちをかすめ取るのにどれだけ苦労することか。

自分達は時速90キロまで達した、しかしそれを長時間維持することなんてできない。あの一瞬到達するので精一杯なのだ。

もし同速度で彼が自分達より速度を維持して走れるのなら勝ち目はない、そして彼はそれよりも速く走れて長く息が続く。

最初から最後まで延々と加速し続ける大逃げに食らい付きながら、なお最後の局面で最高速度に達してなお長く続く末脚を越えなければ勝てない。

デーパーインパクトの目には常に彼の背中が見えているのだろう、憧れる強い彼の走る後姿が思い出されているのだろう。

自分がどれだけ持て囃されようとも決して追いつけない背中がずっと頭から離れない、この自分のように。

「それにあんな話聞かされちゃったらなあ…」

「やっぱここに居た、主賓がいなくなりやがって全く…勝ったにしてはお前ら揃って浮かない顔だな。あいつ等か？」

「小泉さん、よくわかりましたね？」

「そりやそうだ、一緒にやってきたんだぞ？」

会場から大竹を追いかけてきたらしい小泉は、デーパーインパクトと大竹が顔を見合わせているのを見て苦笑いした。

「まったく、凱旋門賞とっておいてそんな顔するのはお前らくらいなものだ。頼信君を見習ったらどうだ？きっぱり切り替えて大酒飲んでるぞ。おかげでしばらくもつ」

そう言えば抜け出す前に自分も頼信の大酒飲みとムードメーカーっぷりを利用していたのを思い出した。

彼は自身も大酒を飲みながら、フランスやイギリスの重鎮相手に外人受けの良さそうな一発芸やら大酒飲みの宴会芸やらをやっていた。自らも酒に酔って気が大きくなっていくが故であろう、元チンピラらしい暴れ酒や周囲の目を顧みない下品なネタではない辺り彼も丸くなっているようだ。

「ははは…そうはいきませんよ。ああいう性格してないもんで」  
「ま、あれはあれで才能だからな。だが考えすぎるのもダメだろ、お前は最高の走りをしたんだ。」

日本競馬ここにありって世界に知らしめたんだぞ？我ながら思いつき熱くなつたんだからな」

「ええ、それは分かってるんですよ。私たちは最高の走りができた、間違はなく今できる最高の走りで凱旋門賞を取った。」

あそこまで絞り出しているの同着なら悔いはありません、互いにそこまです実力が拮抗していたという事です…でも…」

「お前らが望む走りにはまだまだ遠い、か」

小泉の答えに大竹は頷く。今回のレースに悔いはない、最高のレースをしたと自慢できる、しかしそれだけだ。

完璧に自分の望んだレースではない、個人的な欲望はまったくもって満たされていない。

自分の仲にある栗毛の背中の中の幻影が自分たちを捉えて逃がしてくれない、まだまだやれるだろ？と鼓舞してきて終われない。

「小泉さん、僕たちは彼らを超える走りができるのかな？超えてやっただって言えるのかな？」

「今回は超えてないな、ぼろ負けだ。最後の直線、お前らは僅かに踏み込みが深すぎた。良い走りだが、速度を殺してる」

「そうですね」

「ダイオーは逆に浅すぎた、うまく掴めてないから空転してる。良い走りだったがそれだけだ、勝てないな。どっちも最後は垂れて振り切られる」

勝てない、ここまでやってなお勝てない。日本の、世界の競馬界が大騒ぎをするこの快挙をもってしてもあの馬とあの社長に、あの走り

屋に届かない。

こんなことあつていいのか、こんなこと許されていいのか？とんでもないことだ、挑んでも挑んでも終わらないチャレンジなんてとんでもなく燃えるじゃないか。

「向こうも同じだったぜ、向こうの連中に聞いたんだが競馬場見ながらみんなして静かに酒呷ってるってよ」

「聞きましたよ、ダイオールの復習に付き合ってるそうですね。向こうのカメラマンさんも居るとかなんとか」

「知ってたのか。ま、あの爺様たちからしたらある意味肩透かしだったのかもな、勝つても負けても骨を埋めるつもりだったはずがまさかの引き分けときた。

勝つても居なけりや負けても居ない、まだまだ戦いは続くし決着はまさかの有馬でつてんだ」

「そりやそうですよ、いくら有馬記念と言っても僕たちとしてはある意味で見慣れたG1ですもの。」

それが今年是世界中から注目されてる決戦とか宣伝されちゃってるっていうんです、僕たちだって現実感がないですよ」

「あの実況には参ったよ、一体どうするつもりなんだか…：そうだ知ってたか？実況の連中、興奮しすぎて病院に担ぎ込まれたってよ」

「そりやあれだけ大騒ぎしてればそうなりますよ…：」  
とはいえそんな大騒ぎをするのも分かる。

この凱旋門賞をも巻き込んだ日本競馬の決着が年末の中山競馬場で決まる、それを盛り上げない理由は無いし否が応でも盛り上がる。

しかし、大竹にとつてはいまいち納得がいかない面もあった。  
「でもさ、僕たちの決着はもう付かないかもしれないんですけど…：」

「次はジャパンカップ、その次は有馬だ。さすがに群馬に足を延ばしてる暇はないぞ、そもそも周りが許さない。」

今年のライバル馬3頭の本拠地だ、今まではディーブのお気に入りってことで誤魔化したけど今度ばかりは難しい」

きつとこれまで以上に厳しい目がマスコミやファンたちから送られるに違いない。

そんな中でわざわざ群馬という『敵地』にひよこひよこ練習に行くなんて、中央競馬が許しても世間が許さないだろう。

いくら練習という建前とは言えどこぞの木っ端馬とされている彼と本気の勝負をしようものなら、無駄な消耗をさせるなど大バツシングされかねない。

そしてそれは同じ群馬地方競馬に所属する3頭も同じことだ、たとえシマカゼターピンが彼女たちの初代ライバルと認識されていても今や彼女たちは世界屈指の強者達になってしまった。

未だ地元で負け無しとは言え所詮はなんか強い変な奴でしかないシマカゼターピンは、一般的に見れば全く釣り合わずお呼びではないのだ。

そして何より、彼女たちもまた有馬記念をラストランとするため今年最後まで主戦場は中央競馬への遠征である。

「うん…残念だな、一回でいいから直接勝ちたかった」

本当の決着はもうつかないかもしれない、最後のチャンスは逃してしまったのだ。そう思うと胸の内がモヤモヤしてしまう。

騎手生活の中で幾度となく経験してきた感情であったが、今までがあまりに気楽な存在であったがゆえに急に取り上げられてしまつてやり場が見つからなかった。

都合が付けばいつでも勝負を挑めた、負けて負けて負け続けていつまでも壁でいてくれた彼を取り上げられた、本当に倒したかったのに。

「できるかもしれないぞ」

「ヒビン？」

「お忍びで群馬に？うまく行きますかね…」

「違う、堂々と勝負できるかもしれないぞ。暮れの中山でな」

大竹は眉を顰めた、小泉にしては笑えない冗談だった。あの彼と茂三が有馬記念などという大舞台にわざわざ来るわけがない。

その手の名誉や賞金には一切興味がない超が付く変人馬主な茂三に、それによく似て競馬自体にはさほど興味がないシマカゼターピン、どちらも言い出すとは思えないのだ。

「瀬名酒造が有馬に登録してる、出走馬はシマカゼタービンだ」

「そういう冗談はやめてよ」

「このままじゃただの冗談だ、茂三さんもダメで元々の博打なんだろう。馬鹿正直に、真つ当なルートで選考に応募してきてる。」

それを見た理事長のヤツ、泡喰って俺に問い質してきたんだよ。お前ら何しやがったてな、あの人がそんなことするなんて上も思ってたないもんよ。

身に覚えねえから茂三さんに聞いたらあつさり答えてくれやがった。

そんで『ダメで元々だから俺の踏ん切りがつく結果出るまで内緒で頼む』とき。茂三さんめ、それで済むなら俺たちはこうなってないの」

「まさか…」

「ああ、桜葉理事長のほうも知ってるだろうし群馬のほうも知れ渡る。でもな、このままじゃだめだ」

「そうですね、普通に考えて賞金額で撥ねられる」

まさに博打、当たるも八卦当たらぬも八卦というよりまず無理だ。それでもやらないよりはマシ、といった願掛けの類である。

その程度ならあの茂三は笑ってやりそうだ、当たればでかいが当たらないならそれでいい。ちよつと残念なだけで痛くもかゆくもない。

しかし、もしかしたらあり得るかもしれないと期待する話を知ってしまう自分の身にもなってほしい、99パーセントとダメでも1パーセントに賭けるのもまた騎手なのだ。

「落ち込むな大竹、デイープ。このままじゃタービンは絶対に出られない。選定馬に残っても賞金額で真つ当な状況じゃふるい落とされる。」

だからちよつとやってみないか？真つ当な状況じゃだめなら真つ当な状況じゃなくしてしまえばいい」

「まさか八百長をしろとでも？それとも裏工作？そんな伝手は僕にはないしやるなんて御免だ」

「早とちりすんな、そんなことしなくていい。というか、する必要がな

い。真つ当な、合法的手段で、やれることがある。他の奴らにやご愁傷様だがな」

小泉は愉快そうな笑みを浮かべ、実に気の毒そうな声色で言葉をつづけた。

「俺たちはもう見たはずだ、あんなことがあったからお前らはあのハルウララに当たって負けたんだ」

「ハルウララ?…そうか、マルゼンスキー!!」

「どうしてハルウララが宝塚に出られたのか。お前らが強すぎたからだ、だから連中は一旦引いて出直す腹だった。」

マルゼンスキーとの違いは逃げは逃げでも反撃するための逃走だったところだな、それもおじさんになったが」

小泉の言葉にすぐに大竹は思い出した。そうなのだ、宝塚記念でハルウララが出走できたのは出走登録していた競走馬たちが軒並み回避を選択し、追加登録する競走馬がおらず巡り巡って出走権が回ってきたからだ。

デーパーインパクトと大竹のコンビがあまりにも強かったから勝ち目がないと、ここで戦う意味がないとあの時はそう思われたからだ。

その結果、大竹とデーパーインパクトはハルウララと対決することになり。そして負けている。

「こいつは俺たちにとっても賭けだ、だが前例はある。お前らはジャパンカップで勝て。他の連中が戦いたいとか思わない圧勝で蹂躪しろ。」

並みの中央GIクラスじゃ手も足も出ねえ怪物だって、お前とデーパーが走る有馬は出るだけ無駄な出来レースだって思わせてやるんだよ」

そうすれば出てくるかもしれないのだ、あの馬が暮れの中山に姿を現すかもしれないのだ。

もし出走権が実際に巡ってきたならば彼らは無下にすることはない、きつと笑顔でやってくる。

「理屈は分かります、でも僕たちの一勝でそうできるでしょうか?ラ

ストランになったらきつと気合いの入り方がみんな違う」

「そいつらはいいいんだよ、やる気があるならそれでいい。でもな、宝塚ごときでやる気失つてたようなやつらには十分だと思わないか」

「いやいや、待って。有馬はディープ達のラストランですよ、最後の勝負になる。挑まないなんて考えるわけが…」

「それさえ我慢すれば来年からはお前らに当たることはないんだぞ」  
小泉の言葉に大竹は反論できなかった。それは自分も感じていたことだったからだ。

「何もディープだけの話じゃない。あの3頭やハーツクライも居るんだぞ？特にあの3頭は正直ディープよりも理不尽だ。」

今まで群馬の3頭が出ていたのは中長距離主体の芝だが、連中はそれが得意なだけで他もいける。

お前というライバルがいて、馬主がただそこがいいから走らせていただけに過ぎない。あいつらはどこでも走ることができる。

芝も、砂も、土も、短距離も、マイルも、中距離も、長距離も、そして海外でさえも、あの3頭は経験済みで実績を残しているんだ。

わかるか？逃げ場がなかったんだ、どこに行っても、どのレースに行っても、あの3頭のうち誰かがいるかもしれないなかったんだ」

絶対に回避できる場所がなかった、安心して挑めるレースが存在しなかった、そのことがどれだけの陣営のストレスになっていたんだろうか。

それこそ対抗できるディープインパクトやハーツクライを擁していた自分たちは恵まれていたにすぎない。

そんな連中がもう少し待てば自分から消えていくというのだ、待つという選択肢は十分ありうる。

「俺たちはタービンがいたから気楽でいられたが、あの3頭もほかの連中からしてみれば十分怪物だ。」

あんな素質馬、地方が持つていくなんて相当あいつらを扱ってた連中の目は節穴だったんだろう。

お前たちが去れば後に残るのはいつもの連中だ。いつもの重賞馬ばかりのレースが始まるんだ。

お前たちを迎え撃つために蓄えた知識と研鑽で築いた技術で、寄り合い馬達を鍛え上げて次のレースに挑むことができる。

俺達がシマカゼタービン相手に鍛え上げてきたのと同じように、俺達がタービンと茂三に勝つ方が難しいと考えるようにな」

「でもそれで諦めるわけがない、そんな人たちばかりなら僕は騎手やってない」

大竹は栗東厩舎専属であり、小泉の手掛けた馬だけに乗る騎手ではない。デイープインパクトを主戦として乗っているがそれでもほかの馬主と調教師を手掛けた馬に乗る機会が多い。

「誰がお前らだけでそれができると言ったんだ、自惚れるな。たかが凱旋門取ったクラシック3冠一頭と騎手一人だ」

「どうするつもり？」

「話聞いてなかったのか？ダイオー達にも話を持ち掛ける。あいつらの実力でさらに広範囲を黙らせる、有馬前に前走でどこか使うって言ってたからな」

「それ違法じゃない？」

「いいや？そういうなら学校からやり直せって話だぞ。これは談合なんかじゃない、ただ『圧勝してこい』ってライバルを応援するだけなんだからな」

圧勝は圧勝でも『こいつらとは例えどんなことがあっても二度とやりたくない』と思わせる圧勝だがな。と小泉は意地悪そうに微笑む。

彼は自分たちと知り合いがただレースで勝つだけでハルウララの再現をやる気なのだ、ダメで元々で失敗しても痛くもかゆくもないのだから。

しかしそれで成功したらその結果は計り知れないのだから、自分達で彼らを暮れの中山に迎え入れる。

そのための露払いをして、申し訳ないが邪魔者には自発的に身を引いてもらうのだ。

自分達の領域で、自分達が慣れたホームである中央競馬場で、自分達が絶対有利なルールの中に彼らに勝負を挑むのだ。

「それでどうにかなるとは思えないけど…」



「いいや、今回ばかりはそれでいいんだ。だってそうだろ？デイープインパクトクラスの怪物が着内分まとめて出るんだぞ？」

「あ…」

「賞金すらも望み薄ってわけだ」

小泉のニヤニヤした微笑みに大竹は思い至った。競馬において上位5頭までは賞金が支払われ、着外は賞金がない。

5着となればかなり少ないが着外よりもはるかにまし、そして有馬記念では、その5着に割り込むにはデイープインパクトとタメを張ってきた怪物たちとタメを張らなければならぬ。

出来なければ絶対に着外に蹴落とされる、そうなれば手に入る金額は奨励金や出走手当の僅かな額だ。

GI出走に掛かる費用は安いものではない、それくらいはできれば回収したいというのが馬主の心情だ。

つまり2006年の有馬記念は相手が悪すぎるのだ、生半可な馬では出走するだけ大赤字になりかねないといんでもないレースになっている。

「お前らに拮抗出来る馬、あるいは大赤字でもお前らに挑む気のある陣営なんてそれこそ少数だしそれだけ手練れだ。その少数があいつらだよ。」

リンカーンやコスモバルク辺りも絶対に出てくるだろうが、逆に言えばそれくらい実力がないと歯牙にもかからないんだよ。

ファン投票に出てくる連中は出るだろうが、それも絶対とはいえない。通常出走組は勝ち目がないなら絶対に引く、下に行けば下に行くほど確実に。

そりやそうさ、お前らに加えてお前らぶつ倒そうっていうガンギマリも一緒に相手にするんだ、手に負えねえよ。

有馬に集中するとなれば他の重賞が安全圏になるんだ、勝負になるならそつちに流れるだろう。むしろこっちの枠がから空きになりかねんよ」

「宝塚の悪夢再来、それは上も絶対に避けたいと思うところですね」「だから上は大喜びだって話だ、宝塚の悪夢を見たくない。その点で

言えば瀬名酒造はいわば最高のキープボトル、枠が回れば確実に来る。

それどころかおつりが付くぞ、何しろあいつはダイオー達の地元最強格、あいつらに勝ち星がある初代ライバルだ」

「オグリキャップのラストランにマーチトウシヨウが乗り込んでくるようなもの、インパクトは十分。」

しかもあの3頭の得意距離にわざわざ乗り込んでくる、ダートのスプリンターかマイラーのはずなのに。

まるで最期を見届けるために来ているみたいだ、物語性も完璧なわけですね。世論もこれなら見方も甘くなる」

「そうだ、たぶんあの人はそんな世間の目も加味してんだ。あの人は確かに人間というモノを分かっている。」

しかもシマカゼタービンの血筋がここで生きてくる、あのツインターボの血を引く最後の1頭だぞ。

ツインターボと言えば大逃げと逆噴射だが、あの有馬に惨敗と言っても2回出ている上にナリタブライアンとやり合ってるんだよ」

「祖父の忘れ物を取りに来た、祖父に出来なかったことをやりに来た、とも取れるわけですか」

確かにこれは競馬ファンならば誰もが好みそうなストーリーだ、これほどまでにできた話になるのはなかなかない。

祖父が取れなかった中央GIの有馬記念の頂を取りに来た、クラシック3冠を討ち取りに来た、どちらも為せなかった祖父のために。

祖父と同じ大逃げで、一心不乱の全力疾走を磨き上げてやってきたとなれば、確かにファンからも期待はされる。

「出てくることには多少のやっかみはあってもこのストーリーに競馬ファンは酔うだろうよ。」

もしかしたらがあると思わずにはいられない、競馬好きならベテラン共ならなおさらな」

さしずめツインターボの幻影といったところであろうか、そんな大イベントともなれば中央競馬も逃がす気はないだろう。

それが多少乱暴な蹂躞劇の末に奇跡的に手に入った切符だとして

も、それはルール違反でもなければイカサマでもないのだ。

ただ自分たちの強さを勝手に恐れて相手が回避を選択しただけの事、その結果で彼らが偶然有馬記念への切符を手にしてやってくる。

どこにも不正は存在しないし、不思議な縁はあってもそれは単なる偶然、そして運営の定めた規則による出走選定に過ぎない。

ただ運が悪かっただけ、ただ運が良かっただけ、この時代に自分たちがいて大暴れしたから出ることができた一発屋。

でもそんなのがいい勝負してきたらどうだ、きつと面白いに違いない。

大竹は暮れの中山競馬場で自分たちを千切らんとする彼らの後姿を思い浮かべ、武者震いを感じて笑った。

小ネタ4・20XX年、アニメ版ウマ娘を語るスレN  
0.230

400：名無しのトレーナー  
ついに来てしまったか…

401：名無しのトレーナー  
ついに辿りついてしまったか、すべての始まりに。

402：名無しのトレーナー  
は、始まってしまうのだな…！

403：  
∨ 402  
落ち着け、まだ時間はある。それまで駄弁ろうではないか。

404：名無しのトレーナー  
今度こそ本当にウマ娘ロスが始まるのか、ブルアカの仮ロスですら  
辛かったというのに!!

405：名無しのトレーナー  
つ円盤  
さあ歴代視聴準備を始めるんだ、今年からは変わり球もあるから困  
らんど

406：名無しのトレーナー  
こんな肝が冷える有馬記念編は初めて…!!

407：名無しのトレーナー  
だ、大丈夫だ。問題ない。

408：名無しのトレーナー  
まーこんな形の有馬記念会なんざ歴代でもそうそうねーわな

409：名無しのトレーナー  
歴代見てもねーんだよ！

410：名無しのトレーナー  
グロウアップシャインからのロストシャインやぞ。

411：名無しのトレーナー

◇410

やめないか！

412：名無しのトレーナー

◇410

自己犠牲ENDはやめてクレメンス

413：名無しのトレーナー

果たしてそうだろうか、初期も初期から意外と容赦ない時は容赦ないウマ娘運営だ。やるかもしれないぞ。

414：名無しのトレーナー

もともと容赦ないやんけ。まず初代主人公のスペの設定がですね、今頃になって相当闇が深いっていうのが見えてきてましてね。

415：名無しのトレーナー

初期勢だとオグリ以上に相当闇なのよなスペちゃん。父不明母死別で育ての親はその友達、あれ親戚筋どうなった？

416：名無しのトレーナー

闇、語られない闇、それに尽きる。それなのに本人はあんない子つてのが拍車をかける。

417：名無しのトレーナー

たぶん制作陣そこまで考えてないだけだと思うよ

418：名無しのトレーナー

原作強めにするるとタービンは犯罪一家の生き残りとか凶悪犯罪に巻き込まれたとかになりそうだから加減しとるやろ

419：名無しのトレーナー

今でも十分闇なのでは？

420：名無しの先生

そうなれば私は覆面水着団を投入せざるを得ない。

421：名無しのトレーナー

∨ 420

座つてろ巨乳先生、それだけじゃすまねえだろ。

422：名無しの相棒

そうなれば私はアビ・エシユフを起動せざるを得ません。

423：名無しのトレーナー

∨ 422

メイドもお呼びじゃねえ、座つてろ。

424：名無しのトレーナー

でもそれくらいぶっ飛んでくれてたほうがいいと思うの

425：名無しのトレーナー

L・ARC編がなあ…大蹂躪がなあ…

426：名無しのトレーナー

すつごい持ち上げてたけど最終的に国内大蹂躪の最初の一步だったのよなこれ、前走宝塚で発破かけて盛り上げてからのあれだよ。

427：名無しのトレーナー

負の空気取っ払ったら陽の空気で突き抜けんのホント草

428：名無しのトレーナー

これがウマ娘板地均しですか

429：名無しのトレーナー

まさにアンリミテッドインパクトが刺さっててな、よくできとるわ。

430：名無しのトレーナー

原作でも被害が恐ろしすぎて歴戦陣営が軒並みドン引きしてた神話生物召喚儀式はやめてくれ。

431：名無しのトレーナー

ディープとハーツでぶつちぎりワンツーフィニッシュ、絶望の始まり。

432：名無しのトレーナー

ツバキプリンセス追い込み一閃、最後方から薙ぎ払い。

433：名無しのトレーナー

ホクリクダイオーニンジャステルス、最終直線超加速ブッコ抜き。

434：名無しのトレーナー  
ノルンフアング大逃げ一直線、前にポツンと一頭。

435：名無しのトレーナー  
こいつらマジでワンサイドゲームしてんだよな、全部大差勝ち。実  
力とやる気が明らかに異次元過ぎた。

436：名無しのトレーナー  
やられたほうの連中のセリフが妙に絶望感たっぷりですごかった。

437：名無しのトレーナー  
ウマ娘にしてはやけに場違いなくらい悲壮感たっぷりだった。で  
もあり得ない話じゃないってのがね。

438：名無しのトレーナー  
このためにこういう演技得意な声優さん集めたんだよね。

439：名無しのトレーナー  
おかげで往年のオタクには聞いたことのある絶望ボイスたっぷり  
で草

440：名無しのモブウマ娘  
速すぎる！追い付けない！！

441：名無しのモブウマ娘  
何としてでも食らい付け！！地方に何度もやられてたまるか！！

442：名無しのモブウマ娘  
やってやる！！前に出させなければ何とかなる！！



443：名無しのモブトレーナー  
後ろに付け!! 奴らの速度を利用するんだ!!

444：名無しのモブトレーナー  
怪物だとしても無敵ではない、奴らの戦法の弱点を発見した。まだ  
解析中だがそこを突けば奴らも苦しいはずだ。

そのままお前の土俵に引きずり込んで徹底的にあいつらの嫌がり  
そうなことをして消耗させてやれ、お前ならやれる。

445：名無しのモブウマ娘  
焦るな、チャンスを待て、一瞬でいい、あいつ等よりも前にゴール  
板を抜ければ私の勝ちだ。  
ここが私たちのホームだという事を思い知らせてやれ!!

446：名無しのモブトレーナー  
舐めるなよ、中央のレースを舐めるなよ田舎者があ!!

447：名無しのモブトレーナー  
この程度、想定範囲内です、名家が名家たる所以を教えて差し上  
げましょう。

448：名無しのモブウマ娘  
な、速い!?!情報よりも速いぞ!!

449：名無しのモブトレーナー  
なんて加速能力だ!!

450：名無しのモブウマ娘  
この先は力こそがすべてだ、私を超えてみる!!

451：名無しのモブウマ娘

も、持つの!?!この速度を保てるというの!!なんてスタミナしてるのよ!!

452：名無しのモブトレーナー  
ばかな、バカなバカなバカなあ!!

453：名無しのモブトレーナー  
大逃げは…まずい…!!

454：名無しのモブウマ娘  
しまった、スリップストリームが!!体勢を——きやああああ!!

455：名無しのモブウマ娘  
外された!?!私のマークから逃れるとは、化け物があツ…

456：名無しのモブウマ娘  
なんで、なんでえ!!なんであんたがそこに居るんだよおお!!

457：名無しのモブウマ娘  
そんな、これで止められないというの？

458：名無しのモブウマ娘  
勝って勝って、最後に負ける。これもレースか。

459：名無しのモブウマ娘  
動け!動いてよ!!やだ、このまま終わるのなんか嫌だあ!!

460：名無しのモブウマ娘  
ははは…何が天才だ、笑わせる。こいつじやねえか。

461：名無しのモブトレーナー

いいか、俺達は全力で挑んで負けた。俺がそう言っていたと本誌に書いておけ!!

462：名無しのモブトレーナー

このコースが終わりとはなあ…ウチらしいな、つくづく…

463：名無しのモブウマ娘

私はいつも強くあろうとした、それが私の走る理由だと信じていた。

464：名無しの名トレーナー

そうか…お前も…ここまで来たのか…

465：名無しのモブ当主

だがもはや、我々に君たちは止められない。挑み続けるがいい、君達にはその権利と義務がある。

466：名無しのモブトレーナー

ば、バカな、私達は中央だぞ。馬鹿なアアア!!!

467：名無しのトレーナー

うわあ…改めて見るとうわあ…いやセリフと雰囲気的にありなんだろうけどさあ

468：名無しのトレーナー

蹂躪のセリフってなんというか、地球防衛軍というかマ●ラヴというか…

469：名無しのトレーナー

進撃の巨人でなんども見た奴なんよ。

470：名無しのトレーナー  
あふれ出ている存在しないセリフ：ACかな？体は逃走を求める。

471：名無しのトレーナー  
俺はガンダムで見た。イグルーシリーズはよくできてる。

472：名無しのトレーナー  
それ毎回主人公が死ぬシリーズじゃないですかヤダー。

最新作のモビルワーカーVSグレイズは最高でしたね、最高にヤクザしてた。

473：名無しのトレーナー

∨ 471

原作は実質イグルー

474：名無しのトレーナー

セリフだけ別ゲーに乗せ換えても違和感ないからなこの前の回、ある意味異色。

475：名無しのトレーナー

もう戦闘音おつかぶせたヤツ作った人がいるよ

476：名無しのトレーナー

これまでのシリーズでもやられたほうは内心こんな絶望してたとなるとなんかきついだよ。

477：名無しのトレーナー

テイエムオペラオーとかマジでこんな状況だったんじゃないかな、上澄みはともかくもモブにとっては地獄の時代。

478：名無しのトレーナー

過去の地方勢もこれやろ、散々中央に舐められて交流重賞もとられっぱなしでさ。

ファル子地方巡業なんざ、あの時代だったから『かかってこい、相手になってやる』だったわけで。

479：名無しのトレーナー

世紀末霸王やってたらたぶんオペラオー陣営とその他モブとの間でえらい擦れ違いつか起きそうだよな。

480：名無しのトレーナー

やってたらトプロとかアヤベさんは普通にオペラオー側でドットさんも普通にオペラオー側だな、他世代もたぶんオペラオー寄りになる。

そりゃ絶望突き付けられてるモブにしてみればなんやおめえらつて言われそう。ドットさんとかさんざんやられてんの普通にそばに居そうだし。

481：名無しのトレーナー

ありそう、オペラオーが楽しんだりするわけじゃなくてちゃんと努力した結果って理解してるだろうし。

というかそういうところまで理解できる連中って大体上澄み連中じゃねーか。

482：名無しのトレーナー

▽ 479

とはいえドットさんもオペラオー居ない所では奪う側だから：

483：名無しのトレーナー

ある意味アニメにしないで正解だったか、そんなトレセン見たくな

いわ。

484：名無しのトレーナー

今回の場合はとにかくこの世代の中央は地方にも一般にもぼろ糞にやられて後がない状態だからしゃーない。

現状対抗できるディープリンパクトだって所属は中央でも立ち位置的にはぶっちゃけあっち側。

レースでバチバチにやり合ってるのに平気な顔で群馬トレセンとか顔出して仲良くしてんぞあの3冠。

485：名無しのトレーナー

なおこの時代からアルトレーネとアルトアイネスの双子姉妹が強襲、GIを取られてる上に天皇賞・秋を地方に2連覇された。

コスモバルクがどんどん仕上げてきて並みの中央勢ではかなわなっていう状態でありました。

486：名無しのトレーナー

∨ 485

？  
そういや後詰もいたんだった、ほんと群馬は何考えてやがったんだ

487：名無しのトレーナー

∨ 485

しかも珍馬名なのに普通に強い双子牝馬、アニメでもまんまアルトアイネスとアルトレーネのロボ娘勝負服。たまらねーぜ。

488：名無しのトレーナー

さらにメジロジョンソン（メジロパーマー）シャッタードスカイ（セイウンスカイ）が投入されるし。

ブニーキャップ（オグリキャップ）ハルナイナリ（イナリワン）ポケットクリーク（スーパークリーク）など続々出てくる。

極めつけはバターナッツ。なんだよ元ばんえいって、中央だろうが世界だろうがいつも自前の櫓持ってたって何？

現地でばんえいするって何？アツプなの？あれが準備運動って何なの？おかげでタルマエちゃんがなんかかわいそうなことになっちゃってんじやん!!

489：名無しのトレーナー

シマカゼタービンが直に面倒見てた連中だ、当然のように地方馬にしてはえらい強いよ。

当然この後も要所要所で中央はこいつらに苦しめられ続ける。ナッツに至っちゃドバイで勝つ始末、二度目がばんえいってなんやねん群馬。

490：名無しのトレーナー

お気に入りの職員（テロリスト）を助けるために鉄火場突っ込む子馬だ、覚悟が違う。

491：名無しのトレーナー

配慮してんだかただその時興味ないだけなのか知らんけどホントに読めないんだよなあこいつらの挙動。

492：名無しのトレーナー

アニメだとさらにドン!!他媒体から出てきてさらに倍ドン!!

◇486

493：名無しのトレーナー

完全にトウインクル現役勢だけ集中砲火喰らってる状態なんでもう精神的にもドギツイ状況だ。

494：名無しのトレーナー

地方遠征でも軒並みやられてアマチュアにも負けて誰が呼んだが

中央最弱世代（比較相手が悪すぎる）

495：名無しのトレーナー

あの時代から地方に散々燃料投下されてそこから中で練度上げてたし、群馬経由で有力馬が供給され始めて余計に実力底上げされてたし。

ウマ娘だとそもそも峠に流れ着いた連中とか対抗馬増えちゃって余計においたわしい状態に。

496：名無しのトレーナー

今思えば本当にこの時代の群馬は何考えてここまでやらかしてんだ、中央が諦めた血筋でこれとかほぼほ下剋上でクーデターじゃねーか。

497：名無しのトレーナー

◇496

群馬はそこまで考えてないと思うよ

498：名無しのトレーナー

ホントね、群馬はそんなこと一切考えてない。

499：名無しのトレーナー

馬主が『強くなつたぜ、勝負するぜ！楽しんでくるぜ!!』ってやつただけなんよ。

500：名無しのトレーナー

みんな楽しくバトルしようぜ！っていうポケモン染みた思考の馬主が解き放たれちゃったんだよ。鍛えりや強くなれるって証明されてたし。

おかげで中央の有力馬主とか大手とかの血統研究が揺らいで大変なことになった。



◇◇430

何が怖いってその神話生物召喚儀式、法律に則っても競技ルールに則っても違法じゃないから止めようがない。

フィジカルで勝手にビビらせてすべてを解決する究極の脳筋だからね。

501：名無しのトレーナー  
筋肉、やはり筋肉は全てを解決する。

502：名無しのトレーナー  
イエー！イエー！！やっぱり暴力サイコーだな！！

503：名無しのトレーナー  
そんで出てくる特級呪物。

◇◇503  
504：名無しのトレーナー

マジで草

505：名無しのトレーナー  
峠の14番、ウマ娘でも見ることになるとはな。競馬ゲームじゃそれ見るたびに胃がキリキリしたもんだ。競馬ゲームじゃそ

506：名無しのトレーナー  
ワイ、競馬ゲームでこのレースだけは勝つの諦めたんだわ、どれだけ育てても絶対届かない。

理論上届く数値に持ってけばいいんだけどそれが恐ろしく難しいんだよな。

507：名無しのトレーナー  
モンスニー来い、モンスニー来い！！…お前じゃねえ！！（50連敗）

508：名無しのトレーナー

◇◇507

仮にモンズニーが来たところで別系統のバケモンやぞそいつ。

509：名無しのトレーナー

14番って辺り運命だろ、14と言えば走り屋には絶対的な意味を持つアレになる

510：名無しのトレーナー

ACで例えるなら9に相当するのよな、あの番号は。

511：名無しのトレーナー

公道最強が14を背負うって辺り競馬の神様は皮肉が利いてるよ。

512：名無しのトレーナー

不思議とこれを付ける逃げ馬は強くなるらしいと騎手の間では有名ね、ソースはワイ

513：名無しのトレーナー

ワイ新人騎手、先輩があやかりたくて中古探してるの見たことがある。

514：名無しのトレーナー

今や世界の有馬を一レースで作り上げた伝説の14番、今なお不動のコースレコードは競馬ファンの心を焼く。

515：名無しのトレーナー

あの数字自体もはや呪物だと思うのですが？ジャパンカップよりジャパンカップしとるやんけ今の有馬

516：名無しのトレーナー

マジで呪物なんだよなあ、原作知れば馬産の深淵を覗く羽目になるマジなんなんだこいつ!!

517：名無しのトレーナー

それでも手に入れて育てた馬主も馬主だよ、やり方も相当イカレてやがる。

518：名無しのトレーナー

◇◇ 517

馬主「失礼だな、純愛だよ」

519：名無しのトレーナー

しかもウマ娘世界だとある意味原作より救いがなくてね、広範囲曇らせの理由がアレとかどうしろというのだ。

520：名無しのトレーナー

あの時代はとにかくスピードが狂っていた、熱量も狂ってた、一桁も二桁も狂ってたんだよ。

521：名無しのトレーナー

狂ってる…どいつもこいつも、みんな狂ってやがるツ!!

522：名無しのトレーナー

◇◇ 519

大丈夫だ、歴史はすでに変わっている、かの山本五十六も暗殺免れて空白の未来を生きたことあるし

523：名無しのトレーナー

それ2時間くらいしか生きてないしそのあと死んでるじゃないですかヤダー!!

524：名無しのトレーナー

◇519

大丈夫だ、歴史再現はすでに終わっているとみている。そのため  
の  
コラボ逆輸入!!

525：名無しのトレーナー

リアルメタでカワカミンは草なんだが？

526：名無しのトレーナー

タルコフキヴオトスってこと？

527：名無しのトレーナー

向こうのコラボ編最後に、アイツが頭に蹄鉄浮かべて出てきたとき  
は肝が冷えたんですがそれは。

528：名無しのトレーナー

まああつちでも意外と人気だかね、がつつり出てるのはあくまで  
外伝だけ。

今期元ネタのIFコンシューマー版でも当たり前のようにDLC  
第一弾で投入だぞ。

529：名無しのトレーナー

頭にあれは向こうのコラボじゃ当たり前だから、ストーリー中のこ  
いつが異質だっただけで他メンバーは持ってたし。

IFコンシューマー版はあれやりたい放題やんけ、ミクもレールガ  
ンも居るし潔い位全部ブツコンでんじやん。

あれもかなりメタなことと言うと原作再現からの無効化っていう術  
式なのかもしれない。

530：名無しのトレーナー

そもそも原作でそこに行つてたのが入院するためなのよ、けど紛争でおじやんになった上に巻き込まれた。

治療がうまく行つてればもつと長生きできたはずだからな。

531：名無しのトレーナー

リアルレスノフしてから行方不明、からのお土産引つ提げて生還とかお馬さんのやり方じゃねーって。

532：名無しのトレーナー

ぶっちゃけどうして運営があそこで他作品取り込むのかわからん新米がここにあります…

533：名無しのトレーナー

スレ違になるから簡潔に言うとか苦労した運営が原作再現のためにやったウルトラC、こいつ再現しようとしたら群馬テロとかタルコフ遭難とかヤベーのがネックになる。

作中にそんな物騒なもんでできる限り生やしたくないし作りたくもない、けど好意的な馬主さん故に妥協したくない。なのでこうなつた。

534：名無しのトレーナー

別にスレ違でもええやろ、時間つぶしの雑談やし。

所有馬すべてに初期からOK出してくれてる瀬名酒造つて所もあるか、あそこ最初から超好意的だったらしいね。

そんな初期から実装決定してるんで公式サイトだとキャラ紹介が初期組の中に追加されてる。

535：名無しのトレーナー

追加当初は行方不明ってネタになって、落ち着いたら初期勢っぽいのに初期にいない謎キャラって話題になる美味しい奴ら。

ファン層取り込みもこれで引き込むから面白いゲームだよウマ娘、

ちよつと気になって調べるといつの間にかキャラにも原作にも詳しくなつてゐる。

536：名無しのトレーナー

他作品にぶつ飛ばして生きて帰ってきてきてその設定を引っ張って来ること、作中世界観に変に生やさず鉄火場設定付与してね。

シマカゼタービンの場合、原作が無駄に落ち着いてた大人感あったりどこで仕入れたかわからん謎知識とかもあるからその再現もなつて一石二鳥。

537：名無しのトレーナー

コラボ先がゲームだから印象軽い、ゲーム自体は学園GTAだけど設定関係で物騒なサバゲーやつてゐるようなもん。

叡智ではあるけどギリ健全、多少の流血・怪我描写はウマ娘でもやつとるしむしろウマ娘のほうが中身がヤベー（完治不能、後遺症などなど）まである。

まあそこら辺の運用も向こうさんきっちりしてつから問題起きてないし、あと美少女ゲームだからタービン関連で必要な時は変なむさいガチムチとか生やさなくていい。

コミカライズでこいつの鉄火場要素の時に使えば謎の武装美少女つてことで花になる。資料検索がクソ楽、資料集買つてゲームやればいい。

顔出し程度なら原作知り尽くす必要ないからね、キャラ崩壊に細心の注意を払えばいい。

538：名無しのトレーナー

ウマブル全巻読んどきや最低限扱えると聞いた。

539：名無しのトレーナー

略すな略すなww

540：名無しのトレーナー

カフエ漫画の廃洋館編でメイド服タービンの回想にいた謎の武装メイド、今更ながらC&Cの連中だと知った私でした。

メジロとかサトノのメイドを同等とか言うあたりウマ娘もヤベーの抱えておりますな。

541：名無しのトレーナー

あの専門外詐欺のせいでヤエノ師範とかSP隊長の隠れた実力が凄いことになってるんですがそれwww

542：名無しのトレーナー

そういう手法か、そういえばサブゲでもニコさんだし走り屋はどっからどー見てもDな連中居たから今更か。

逆に思いつき振り切ってキャラの特色に変えとるんやな。どっちも気合入ってるから違和感ないしクツソ面白い。

543：名無しのトレーナー

そういえば登場初っ端からコラボぶち込んでたわコイツら、最初からそういうキャラ付けなんだね。

あれ？あのタービンたち制圧できるあの世界のニコさんたちって実はとんでもねーのでは？

544：名無しのトレーナー

そもそもコラボ手法とか取り込み技術は群馬に勝てんぞ。

武装神姫は今やすっかり群馬競馬の初心者先生とか広報担当で定番化してるけどその本元まで行くとみんな驚くし。

545：名無しのトレーナー

武装神姫アフターデイズは群馬ローカルアニメにしとくにはもったいない出来なのよな。

546：名無しのトレーナー  
でもローカルでのびのびゆるく作ってるから神になってるともいえる、あの緩さとのんびり感はなかなか出ない。

547：無しのトレーナー

コラボウマ娘シリーズ発売で人気凄いのよね。群馬競馬系列にか置いてないのがつらい。

あくまで群馬競馬グッズだから普通のプラモ屋とかにないってのがなあ：

548：名無しのトレーナー

コラボがうまい群馬所属の再現って面もあるか、多方面に突っ込んでおきながらうまく回しているいろいろ取り込んでるもんな。

群馬地方競馬が元々客取り込みに昔の名馬の血筋集めて走らせてたって経緯もあるから。

そういやシーズン3にタービンは影も形もないの残念だった記憶ある。ちよい役でゼルノグラードいたし、後世代だし出てくるもんかと思ってたのに。

549：名無しのトレーナー

548

確かに、アスランも居たしな。

550：名無しのトレーナー

しようがないやろ、ウマ娘じゃ当時はまだ面識ねえしその方面テイオー様やネイチャ先生で埋まっておる。

あとキタサンブラックは峠調教の経験あってもタービンには会ってないんやで。

551：名無しのトレーナー

550



ハードトレーニングはあるもので群馬の峠特訓の再現みたいなところあった。

黒沼式ハードトレーニングにブルボン登場とか十分に面白い出来だったやんけ。

552：名無しのトレーナー

◁550

トレーニング関連で群馬行の理由になつたのでは？ウマ娘時空なら群馬トレセンで無双してるこいつに会えそうやん。

過去に何かあったわけでもないしバリバリ現役で扱きまくってるのに参加できそう。

553：名無しのトレーナー

メタ的に言えばスケジュールで決まってるから、登場順とかは決まってるからそれに沿ったパターン。

ストーリー的には相談相手が沖野トレだったから、群馬に伝手は無いしトレーニング自体は中央で完結させられる人脈がある。

あと群馬トレセンにこいつはいないし群馬でもかなり扱い慎重だぞ、居る所にたまたま出くわせるとは思えん。

554：名無しのトレーナー

なおのちに自分のレコードを2Pカラー師匠に目の前で更新されてしまうキタサンブラックという結果に：原作だと届かなかつただよなこれ。

555：名無しのトレーナー

2Pカラーwww

556：名無しのトレーナー

言いて妙www

557：名無しのトレーナー  
似ているのがこの時代3人も居るって草。

558：名無しのトレーナー  
あの時代、更新不能と思われていた天皇賞春のレコードにギリギリ迫ったキタサンブラックも真の怪物よ。

最後の末脚の加速力が明らかに狂つとるかな、逃げでやっちやあかんよあんなの。

559：名無しのトレーナー  
実際馬体にはアホほど負担掛かってシツプべたべた張って丸二日寝込んでましたがな

560：名無しのトレーナー  
それに並ぶサトノのクレイジーダイヤモンド、あの二頭は頭抜けておったわ。

561：名無しのトレーナー  
逆転現象3期と言えばアニメ版だからできた逆転現象が熱かった、ウララちゃんのラストランとゴルシのラストランをあそこで絡めるか。

562：名無しのトレーナー  
現実だとウララちゃんの後にはゴルシだからウマ娘ゆえのIF、先にキタサト世代やってたからできたことだよなあ。

563：名無しのトレーナー  
ホントに周りが走れば走るほど評価が上がるハルウララってスゲーわ。

564：名無しのトレーナー

届いたウララちゃんと届かなかったゴルシの対比がね、ほんとにね、泣くのよ。

あの場面転換であの位置にいるシリアスゴルシがもうね、ほんともうね。

565：名無しのトレーナー

ウマ娘の名場面はほんとに良い。

566：名無しのトレーナー

でもそんな名場面作ってた連中が軒並み0506世代にぶつちぎられるんだよなあ!!

567：名無しのトレーナー

◇◇ 566

今期そういう面多いな、闇鍋してんのがいい感じになって草。

568：名無しのトレーナー

◇◇ 566

というか下に見てた地方どころか意識すらしていない一般校のウマ娘にボッコボコやぞ。

おかげでお歴々が皆さん群馬で大変良い空気吸っておいましてもうアップが止まりません、お前ら自重しろと。

569：名無しのトレーナー

◇◇ 568

それはしゃーない、いろいろぶっ壊れの0506世代をすっ飛ばして後ろの世代を先にやっちゃってたから。

その分、本来の後輩ひつくるめて0506世代のぶっ壊れ具合に巻き込まれて目ん玉ひん剥く面白演出になってる。

570：名無しのトレーナー

弟子たちの前で師匠が最盛期の姿でガチをやる怪獣大決戦だもの、そらそーよ。

571：名無しのトレーナー

往年のレジエントたちも居るからそいつらに技術流れてる描写あつてヤベーつてなった私がいる、元からやばいのにやばいの与えんなよ…

572：名無しのトレーナー

0506がぶっ飛びすぎてただけで後の世代はほぼほぼ元に戻ってたからね、時々出てくるけどもアレほどじゃない。

レコードもキタサトが例外だっただけやし、そもそもあのレベルがまず頭おかしいのですわ。

573：名無しのトレーナー

ワイ純度100パーセントウマ娘民、今回のフランス編でやたら凱旋門賞持ち上げてたけど日本そこそこ持つってなかったっけ？

去年は笠松がフジマサマーチで分捕つて騒ぎになったじゃん、ウマ娘由来の珍名馬で馬主のシングレシリーズ作者が頭抱えたヤツ。これも時代？

574：名無しのトレーナー

◇573

原作見とるやんけ

575：名無しのトレーナー

原作ネタにして書く人が原作で原作作っちゃったパターン…ウマ娘ヤベーな、永久機関じゃん

576：名無しのトレーナー

長年漫画の付き合いで馬が好きになって金ができてつい出来心で

買った200万の馬があなりましたとかだれが想像できるかいな。  
これネタにして巻末ネタちよいと描いてみようかとか超軽々しく  
買い取ったんやぞ。

577：名無しのトレーナー

∨ 576

軽々しくって言ってもプランはちゃんと練ってたぞ、ダメならすぐ  
乗馬用にするつもりで優しい子選んでたくらいだ。

走らんでも最後まで面倒を見る覚悟はあつたぞ、無駄な覚悟であつ  
たが。

578：名無しのトレーナー

巻末どころか連載行けちゃうね。しかも馬も馬主さんが大好きだ  
そうな。

579：名無しのトレーナー

そりやできる限り常に応援してくれて勝ったら喜ぶしちゃんと  
労ってくれるし負けたら一緒に悔しがってくれるんだぞ、惚れるわ。

580：名無しのトレーナー

名前も完全に話題性だけ、茸毛だからって理由で漫画から引つ張り  
出してきて、縁もあるからって出したのも笠松。

可もなく不可もなく強くて中央でもそれなりに通用して最盛期の  
終わり見えたから奮発してフオワに突っ込んだら勝っちゃった。

ダメで元々泡銭だからフオワの賞金突っ込んで凱旋門に出してみ  
たら普通に持って帰ってきた。

解るか？こいつらどいつもこいつも覚悟も気負いもなく記念受験  
気分で作ってたよ。

たぶん馬もそう、調教は付けたけど馬任せで気分良く走らせる目的  
にやったら大爆発だ。

581：名無しのトレーナー

それは全体で見えた場合な、日本の凱旋門賞馬は実はほぼ地方なのよ。中央が凱旋門賞をとったのデイープだけ、しかも同着。

それ以降は惜しい所まで行くけど届かない。持っていく地方の横で善戦マンだったり惨敗しとるから羨望というか脳焼き具合は昔よりはるかに強い。

騎手はそこそことってるけど、それは地方で乗せてもらえたからやしグランプリ男が規格外すぎる。

582：名無しのトレーナー

グランプリ男「オルフェ、おれ、勝っちゃうよ?」

583：名無しのトレーナー

◇582

出たな中央の凱旋門賞特攻グランプリ野郎：いい加減その時だけ地方馬とか海外馬に乗るのやめろや!!フジマサ乗ってたのお前やる!!

584：名無しのトレーナー

◇583

それは中央陣営の判断が遅すぎるから地方とか海外に予約取られてるだけやで、あの人は先にオフアー来たのに乗ってるだけやぞ。

つまりオルフェの時から学んでない中央陣営が悪い、今年だってドイツに持ってかれてシュペーで2位に食い込んだる。

中央?言うな。地方?今年は出してない。

585：名無しのトレーナー

ホントに動きが読めんわ地方:

586：名無しのトレーナー

◇583

気性難の駆け込み寺と言われるだけあって扱いうますぎなんだよ、一着取れなくてもあいつが乗ると着内は固い。

凱旋門賞になると日本のどんなレジェンドよりも人気だし、何気認知度高くて海外でも癖馬に乗せられて見事にやるから。

587：名無しのトレーナー

世界的にみると日本はめちゃくちゃ強いけどそれ以上に読めないから怖いってよく聞く話だわな。

安定して強い中央所属、当然怖いけどある程度常識は通じる。たまに変なのも居るけどそれはそれ。

爆発力が怖い地方所属、平均の実力はやや中央に劣るがとにかく爆発力が怖い。そうなると中央より強い。

騎手も同じで中央が一流、地方は少し劣るけど土壇場の爆発力がかくやばいのばっか。

588：名無しのトレーナー

地方馬は中央GⅠだとライバル善戦マンしてることが多くて海外遠征だとしれっと持って来るとはよく聞いた話だわな。

例のフジマサマーチも中央GⅠ未勝利だし、GⅢはそこそこ勝つけどGⅡは毎日王冠だけ。

ただの出来心のもりがこれだけでもスゲー、凱旋門賞だって本当に気まぐれの記念受験のもりがうまく滑りこんで持って帰ってきちまった。

海外のレベル低いかって言われれば全然そんなことないし、中央はむしろ苦戦してる。

海外遠征で苦戦してない所なんかどこの国探してもないけど。

589：名無しのトレーナー

むしろ平気で弾丸日程ぶち上げて勝って帰ってきたりする地方が世界的に見ても異常すぎる。あれで馬のコンディション悪化しないとか普通ないから。

あの技術は中央も知ってるけどそれでも細心の注意払ってんのに地方だとほんとに気軽にやりやがる。

そのやり方一番最初にやってあんだだけ世界を荒らしたこの時代の群馬はクソぶっ飛んでた

590：名無しのトレーナー

まさに時代だな、それこそ当時じゃこんな風になるとは考えもしなかったわけで。

そりや当時の浮かれ具合と脳焼き具合は半端なかったわけだわ

591：名無しのトレーナー

◇590

そりやもうカリツカリツよ、海外製のベーコンを焼いてカリツカリツしたような状態で超うまい所。

そしてその流れの大本になったのが件の馬なのよ、こいつが群馬で活動してなかったら歴史は変わってたってレベルや。

592：名無しのトレーナー

その脳焼き具合がウマ娘でも怖いほうに反映されてんだよ、こいつの事件無しで地方躍進世代出しちゃったから。

地方競馬の躍進と成長になるとこいつは絶対欠かせないのにこれまで何かと表に出てないんだよ。

593：名無しのトレーナー

地方躍進世代に軍艦シリーズとか群馬に関わってるその他大勢にがつつり食い込んでるからなコイツ。

よくもまあここまでリアルとウマ娘世界の認識を誤魔化して作り上げてきたもんだわ。

594：名無しのトレーナー

まあ言うて、こいつどこまで偶然そこにいただけの善意の第三者



だったからな。

大盛り上がりした後報告したくて主人公が探すとそこにもういな  
い系で余計に焼いてる。

595：名無しのトレーナー

止めて引く大量発生案件

596：名無しのトレーナー

漫画、ラノベでもできる例のアレ。止めて引く挿絵。

597：名無しのトレーナー

さすがウマ娘のスナフキン。

598：名無しのトレーナー

行動範囲自由度高杉問題、居てもいいけどここに居るのかお前って  
ギャグするのに効果がシャレにならん。

599：名無しのトレーナー

無駄に幅広い暗躍を見るとこいつがトレセンにいないのはある意  
味英断だったとすらいえる。

トレセンにいと縛られるからな、ゴルシやボノトレクラスじゃ  
ねーと自由になんか動けんぞ。

600：名無しのトレーナー

こっち側からだとよく知ってる奴だけどウマ娘世界だとほんとに  
一切表に出てきてない陰の功労者というか実力者。

601：名無しのトレーナー

なお本人は基本酒と車と峠のことしか頭がないというか、漫画も書  
籍も『ウマ娘の本題』はこいつにとって『ついで』でしかない。

というかすべて終わった後は思い出として普段は忘却してんぞ。

602：名無しのトレーナー

◇601

本当に文字にすると本当に最低の屑野郎だよな。

603：名無しのトレーナー

実際クソボケではある。

604：名無しのトレーナー

地に足付けて真面目に生きてる奴なんだけどね。酒は仕事、車と峠は趣味、人生謳歌してる学生さんだよ。

ただし字面と言葉面が本当に悪いっていうかウマ娘にはそぐわないパワーワードが過ぎる。

605：名無しのトレーナー

ウマ娘アニメは中央所属が基本的にメインのストーリーになってから絡みがなくても不思議じゃないってのもな。

606：名無しのトレーナー

中央レースだと躍進世代からの地方は善戦してくる侮れない相手だけど勝てない相手じゃないって感じなのよな。

元ネタ調べるリアルは『あ、地方なんだ』ってなるけどその程度で誤魔化された。

その割に海外遠征でやってくれるのだけれど、それもリアルでは『これ原作か』で誤魔化せてる。

うまくやられたわ、リアルじゃ地方もそこそこやるからあり得ない話じゃねーもん。

607：名無しのトレーナー

主人公してたウマ娘も躍進世代とぶち当たった場合勝ってるからなあ：負けは大体あっさり流しにしてるし。

608：名無しのトレーナー

これまで大活躍してきた怪物どもの師匠枠がこいつってバレる形になって余計にやばいことになったやんけ。

しかもその理由が弟子枠大暴走もあつたわけで曇り具合が半端ない。

609：名無しのトレーナー

◇608

あれはタービンのうかつさもあると思う、あんな思いつきり姿現したらそりやみんな沸き立つでしよ。

なんやかんやあつても憧れの彼女が公式関連に姿出してるわけで、実力はパワーアップしててヤベーことになってるの。

上澄みの上澄みの競争ウマ娘なら燃えないわけがねえし同時に誇らしくて仕方ないだろ。

610：名無しのトレーナー

うかつ言うても当時のタービンはガチでただの女子高生やぞ、アマチュアですらないただの走り屋。

走り屋だからむしろアウトローなわけでプロと同列に行動しろとかまず無理。

611：名無しのトレーナー

そもそもウマ娘レースに興味がないからなこいつ。初期で知ってるのルドルフ、シービー、オグリ、ゴルシくらいやったんやぞ？

612：名無しのトレーナー

◇611

マルゼンも居るぞ

613：名無しのトレーナー

◇ 612

そういやあそのレミントンも使ってたなタービン。クアツドリロードの作画はうまかった。

614：名無しのトレーナー

◇ 613

そつちじゃねえwww

615：名無しのトレーナー

ウマ娘なら知って当然って感じの知識もこいつにやないって状態だったのは新鮮だけど『あ、そうね』ってスウッと覚める感じあったよね。

そりやあの世界にだって人の好みはそれぞれだもの、ましてや原作からしてアレならなおさらやんけ。

616：名無しのトレーナー

一応知識自体はあるぞ。友達付き合いだからいろいろ穴だらけなんだけど、それがこいつのスタンスの表れでもある。

617：名無しのトレーナー

興味がない事にはとことん反応薄いんよなコイツ。

618：名無しのトレーナー

◇ 615

そういう面でもコラボに抜擢されやすいんよなコイツ、ウマ娘の中ではある意味使いやすい。競馬の知識がいらん。

619：名無しのトレーナー

そして知らなかったから起きる初対面での大蹂躪、未来の3冠をボッコボコ。ついでに帯同の先輩もボッコボコ。

臯月前の時点でディープは割とやばい強さのはずが手も足も出な

いし、歴戦の彼女達すらまとめて潰すイカレ具合よ。

620：名無しのトレーナー

そのせいでディープだけじゃなくてそいつらも思いつきり焼いてトレセンにいらん噂流れたけどな。

621：名無しのトレーナー

なおそいつらももれなく強化されてさらなる阿鼻叫喚を生み出すことになる、ついでにみんな脳を焼かれる。

622：名無しのトレーナー

歴代の怪物どもに地方大躍進の自家本元の訓練ぶち込んだらさら更なる怪物に仕上がりますって

623：名無しのトレーナー

そのせいで曇つちやつて大変だったのを忘れたか。

624：名無しのトレーナー

ウマ娘側も所詮は良い所の箱入りお嬢様ってことだな、レースにどっぷりでファンの力を見誤ってた。

625：名無しのトレーナー

まあこの世界だとファンのやばさ身をもって知ってるのって案外少なそうではある、基本的に善性ゆえに。

626：名無しのトレーナー

◇625

おい待てい、ファル子とかカレンチャンとか気付いておったぞ。

627：名無しのトレーナー

ヒシアケボノとビコーもな、問題はそこらへんが今回の騒動にあん

まり接点がないってことだ。

628：名無しのトレーナー

何が怖いかって善性ゆえにひどいことになるって話よ、良い人のまま悪いことしてる自覚がない

629：名無しのトレーナー

完全な擦れ違い起こしててギャグの領域なんだよ、海外飛び出して蹂躪したこいつらの本心を一切合切理解しとらん。

630：名無しのトレーナー

見たいものしか見ない連中がねえ…ウマ娘にしちや珍しく超辛辣になつてる。

631：名無しのトレーナー

やっていいことと悪い事が分からない現代人の風刺みたいになつてるんだよね。

自覚がないから怒られても理解できなくて何度やらかす馬鹿多いだろ。

案外運営にそれで苦労した人がいたりして無意識にリアルにしてたりしてな。

632：名無しのトレーナー

たぶん原作のほうでもかなり苦労した時期あったからじゃないかね、レジェンドの努力ファイにしたことあったし。

633：名無しのトレーナー

調整室の件はもうどうしようもねーだろアレ、レジェンドが努力して緩和したら新人がやらかしておじゃん。

あの群馬でさえ絶対緩和しなかった結果がこれやぞ、必要な事だつて諦めるしかないわ。

634：名無しのトレーナー

別に監禁されるわけでもなし、恒常的禁止にされるわけでもなし、その時だけは我慢しろってことだ。

それで健全な運営を保てるならやる意味あったんだよ、そもそも公営賭博なんだからいろいろ厳しくて当然だろうが。

635：名無しのトレーナー

ウマ娘だと来年に繰り広げられるだろう大接戦とか、来年の重賞予想とかめっちゃ期待してて草。

その中に普通にシマカゼタービンぶち込んでてなお草、こいつら彼女に何したかなんも理解してないの。

現実とまるつきり正反対でめっちゃいい雰囲気に見えるがクソオブクソ。

636：名無しのトレーナー

突き抜けすぎて逆に見れるってのが凄いや、面白いからウマ娘は本当にいい作りしてくれる。

クソだクソだで笑って罵倒できるなんてめったにねーわ。

637：名無しのトレーナー

絶賛我が世の春が来た状態だもの、何を言っても無駄だよ。ある意味無敵の人状態。

世界相手に苦戦してた日本ウマ娘が世界を圧倒的に蹂躪して、それをさらに蹂躪する怪物がいるんだし。

638：名無しのトレーナー

はてさてどうなる事やら：時間だ

639：名無しのトレーナー

OPもついに見納めか：

640 : 名無しのトレーナー  
見せてもらいましょう、競争ウマ娘が峠の走り屋を捕まえられるの  
か

641 : 名無しのトレーナー  
親の貌より見た中山

642 : 名無しのトレーナー  
親の声より聞いたファンファーレ

643 : 名無しの母親  
たかし！ごはんって言ってるでしょ！！

644 : 名無しのたかし  
かーちゃん!!??

645 : 名無しのトレーナー  
草wwww



999：名無しのトレーナー

やってくれたな：やってくれたな貴様らアアアツ!!

## 馬 IF・番外編

### シマカゼタービン、タルコフ遭難記録

走る走る走る、傷が引きつる体に鞭を打って、訛り切った体に櫓を飛ばして、俺はただひたすらに走る。

前を走る装甲列車、周りは銃声轟く市街地、四方八方から撃ち込まれる銃弾、列車から撃ち返される銃弾、荒れ狂う跳弾と火花。

俺は背中で必死に体を丸めてる親父さんに弾が当たらないようにと祈りながら列車を追いかけて走り続ける。

もう少し、もう少しで追いつく。もうすでに息切れしかけてて、正直今までにないほどに本気で平地を走ってる。

けど限界が来てるのは分かっていた、どんどん加速する列車に俺の足は追いつけない、いずれどう加速しても置いて行かれる。

だから装甲列車が完全に加速する前に追い付かなきゃならない、列車に乗ってる人たちも俺たちに気付いてくれて最後部のドアの前で護衛の軍人が待っていてくれる。

親父さんが追い付いたらすぐに乗り込めるように、速く来いって急かしてる。

「タービン！無茶するな！止まれ！！止まれ！！ああクソ！！」

悪いがその願いは聞けねえよ親父さん、俺が術後で無理してるのは親父さんも分かってくれてる。

けどな親父さん、あんたはここに居ちゃいけねえんだよ。瀬名酒造には親父さんが居なきゃダメでしょうがよ。

もう少し、もう少し、足が重い、息が苦しい、昔のようにいかない、老いてるし怪我もした。

加速を続けてる列車に何とか食らい付いてるが時期に追い付けなくなる、これでは間に合わない。

もっと速く、もっと強く、足を深く、力強く地面を蹴って加速する。

加速するたびに体中が痛む、バラバラになりそうな痛みが走る、頭が割れそうに痛い、心臓が破裂しそうで痛い。

だからどうした？

限界なんてとつくの昔に超えている、自重なんてとつくの昔にやめている、今やるべきことは走る事。

走れ、もつと早く走れ、走れ、進め、前へ、前へ前へ前へ!!俺の命が燃え尽きる?そののどこに問題があるってんだ!!

くれてやるよ、この命は親父さんがくれたもんだ、親父さんが拾ってくれて、俺に今をくれたんだ。

親父さんに返すってんなら本望なんだよ、ここで命を張らないでどこで張るってんだ。

「J e s t e m t u t a j !! (来たぞ!!)」

「C o z a k o ! Z a k r y j s i !! (なんて馬だ! 援護しろ!!)」

加速を続ける列車の最後尾に何とか追いついて併走する、それに呼応して列車の中に居た軍人たちが飛び出してきた。

ポーランド語、青いボディーアーマーとヘルメット、白い『UN』の文字、国連治安維持部隊のポーランド陸軍だ。

列車後部の僅かな軒先からアサルトライフルの銃口を突き出して、後ろから狙ってくるどこぞの傭兵や暴徒たちに牽制射撃。

その援護の中で数人の軍人たちが親父さんのほうに手を伸ばしてくる、親父さんはそんなの目もくれない。

俺は軍人たちの手のほうに体を寄せて、親父さんの体を彼らの手に掴ませた。

「M a m t o ! (掴んだぞ!)」

「P o d c i g n i j t o , p o s p i e s z s i !! (引つ張り上げろ、急げ!!)」

「なんだテメエら!」

いくら親父さんとは言え屈強な軍人に捕まればなすすべなく列車の上に引つ張り上げられた。これでいい。

これで少し荷が下りたか…なんで手綱が突つ張ってんだ。

「待てタービン！早く、早く乗るんだ!!」

どうして手綱を離さなかったんだ、親父さん。前の俺ならやれただろうな、でも悪い、ここまです。

もう走ってるだけで精一杯だ、足を使い切っちゃってる。

「引っ張れ、引っ張ってくれ!! いつも一緒に!! 飛べ、飛んでくれタービン!! お前ならできる、やれるだろ!!」

親父さんが叫ぶ、けど周りの人は分かかってない。そりやそうだ、全員ポーランド人だ。日本語が分かかってない。

それどころか親父さんの持つてる手綱を手放させようとした、そりや俺がこけたらあぶないもんな。助かるぜ。

軍人の手に妨害されて親父さんお手が緩む瞬間、俺は無理矢理親父さんの手から手綱を引っ張ってもぎ取った。

その様子に全員の目が丸くなった、何驚いてやがる、当たり前だろうが。速度が上がる列車が離れていく、もう追いつけない。

後は頼んだぜ、軍人さん。俺は親父さんを助けてくれた軍人さん達を見つめる、それに一人が頷いた。俺も頷いた。

「何やってんだ！やめろ!! 行くな!!」

しばらく休暇を貰うよ、有給を消化しなくちゃならないからな。



『…またこの夢だよ』

目が覚めるとそこは見慣れた天井、たぶん第2次大戦の頃に作られただろう防空壕のボロボロの天井。

マットを固めた粗末な寝床から身を起こせばそこは粗末な我が隠れ家、とはいえ一通りの設備は集めたぜ。

粗末ながら最低限の器具を揃えた簡易作業台、苦勞して集めた素材を押し込んだ空輸コンテナ。

苦勞して設置した非常用燃料発電機とそれに繋いだバッテリー、そ

してそのバッテリーに繋いだノートパソコンとアウトドア用冷蔵庫ボックス。

同じく苦勞して再稼働した換気扇、その下にはドラム缶で作った簡易コンロ兼ストーブなどなど、生活には困らない程度に整った室内。

「ヒヒーンー」

両足を踏ん張って、思いつきり両手を上げて背伸び！馬の体とはいえ、背伸びすると少ししやんとするよね。

今日の朝飯は：MREにするか、栄養は大切。イスクラは昨日食ったし、三つくらい喰おう。

まずはストーブに火をつけて、鍋を持ってきて水入れて沸騰させる。意外とすぐ火は入るし湧くのを、コツさえわかれば。

前世でも中東では寒さ対策は死活問題だったから覚えておったわ。しかし馬の欠点はこの食事量の多さよねえ、単独行動してると嫌でも感じちやうわ。やっぱ、日本は恵まれてたのね。

『お、ピザ』

分厚い茶色の袋をガバって開ければ、なんと珍しいペパロニピザ。日本人からしたらどっちかっていうとピザパン系だけど。

とりあえずほかに二つ袋を開けてメインを出して、付属のコーヒーはまとめていつものボウルに開けて鍋からお玉でお湯を投入。

馬サイズインスタントコーヒーの出来上がり、湯気が立ってていい香りだぜ。

その後でピザとマカロニとミートボールを鍋に投入、ぐつぐつするぜ。

最近のMREはよくできてるよな、昔はあんなゲロまずって言われてたのに一応食べる味だもの。

まあ食べるだけでうまいかって言われると絶対にそうは言えんけどね、日本人の舌にはどうしても合わないのがあるし。

でもFRH、ヒートパックお前はダメだ。同梱されてるのに温まらない外ればつかとかどうなっとなるねん。

『パンうまあ』

メインを温めてる間に火がいらぬスナックパンやクラッカー食

う、食いながら待つつて感じ。

そこらの草とかタンポポ食ってるよりはずつといい、あれは飼い葉よりずつとまずくて気が滅入る。

最初はそこらに逃げてた牛とか馬の真似で喰ってたけど、オートミール見つけたときにもう絶対やらんと心に決めたわ。

ほんとにそれしかないとき以外は遠慮したいねあんな食生活、オートミールそのまま食ってるほうがよっぽどうまいねん。

だからこうやってパンにジャム付けて食えるってのはありがたいもんなんだよな。

クラッカーにピーナッツバター付けてバリバリやるのだってそうだよ、そもそも食えるだけありがたいって話だ。

そうおもうと紛争真つただ中故に色々漁り放題なタルコフは多少俺向けなのか？いや好んで来たいとは思わんが。

常温放置されてた紙パックの牛乳を喜んで飲んでるPMCの奴らを初めて見た時なんかビビったぞ。

ここのPMCは大概が鉄の胃袋とはいえ限度がある。パッキングが日本のとは違うから飲めるってこと俺は知らなかったからな、あとで知って後悔したわ。

『戦闘糧食が食いたいな、たくあんとか』

一緒に作っておいたコーヒをボウルからストローで啜る。うーん、このわざとらしいインスタント感、パンとクラッカーによく合う。でもやっぱり日本食が恋しい。

ここでも陸自の戦闘糧食が投下されたらいいのにな。難民支援用つてことでそれくらいできないもんかね…いや無理か、合わんか。空中投下の難民支援物資、なぜか武器弾薬ごっそり入ってたりするもんな。思わず写真撮って送っちゃったぜ。

温まったメインのピザを食い始めながら昨日開けた支援物資の身を思い出す、どうも誰かさん宛ての補給だったみたいで西側系武器弾薬詰め合わせだったのよね。

M4やらM14やら各種アタッチメントやら、ピカピカの弾倉に弾薬、おまけに整備用品とオイル類などほんとに銃に関するもんががつ

つりでしたわ。

俺としては外れ、回収はしたけども整備用具くらいしか使い道がないから暇があつたら闇市のトレーダーに流そう。金か情報、物資に化けてくれた方が役に立つ。

だからどうせならみっちりMREが詰まっつてくれた方が嬉しいんだよな、食料は死活問題だもの。

『おつとそうだそうだ、報告報告』

準備の前に一仕事、ノートパソコンを開けて蹄でカタカタ一本指打法。メール開いて朝一番のメールで瀬名酒造に報告だ。

このインターネット時代、紛争地帯だつて多少苦労はするけどグローバルにつながってるんだぜ!!おかげで助かった。

今日も元気です、これからちよつと探索に行きます。近況報告と現地情報、写真、最後にパソコン備え付けのカメラで自撮り写真を撮影して添付、ヨシ!

え?馬がこんなことしていいのかつて?こんな非常時に四の五の言つてられるか、そんなことより親父さん達の心労軽減よ。

あと大竹さんの所にもメールだな。今日も元気に生きてます、デバッグに見せてやってください、と同じような感じで。

添付に親父さんに送つたのと同じ食糧確保に行ったモールで知り合つたご兄弟と一緒に撮つた写真を添付。

現地情報と近況報告、タギラさんに乗せてモール内をパトロールする俺、キラさんに乗せて駐車場を走る俺、添付、ヨシ!

他にもその他にもろろ書き加えて、写真付けて:作成ヨシ、電波よし、送信ヨシ!うーん良し!!

ネット環境が多少なりとも生きてるってホントいいよね、信号増幅器は必要だけどこの手の機械は何故かよく一緒に投下されてる。

いやーなんでだろーなー?だれむけなんだろーなー?おいちゃんおうまさんなんでわっかんないよー?

ま、とはいえ豊富だからよし。おかげでネットワークの維持が楽で助かる。

しかし近況報告は良いとして現地の情報っているのかね、親父さん

が群馬県警からそれとなく言われたらしいから両方送ってるけど。

『これでよし、あとは何か…ないな』

じゃあ、そろそろ行きますか。早くここから出るには、今のところとあるケースが必要らしいからな。

脱出する手段はずつと考えていたし情報収集は欠かしてない、馬だからって無条件で逃げられるほど軍の封鎖は甘くない、むしろ厳しい。

犬猫とかならまだしも、馬とか牛はロシア軍や国連軍の封鎖線に近づくと問答無用で撃たれる。しかも威嚇射撃無し、辛い。

そうなると正規の手段が必要だけど、調べた結果現状は港を占拠してるロシア軍経由が今のところ有力。

何度かPMCの連中が設置してある有線電話で取引してるのを見た、専用のカードとボックスがあれば少なくとも基地内に入れるのは確認してる。

トレーダーの副業やつとるロシア軍のプラパーおじじにも渡りが付いたから鍵になるアイテムさえ揃えば問題ない。

やはり友の力は偉大だ、群馬警察の伝手で軍に渡りつけたら一発でロシア軍の士官に話がついたぞ。

でもそれで無条件脱出と行かんのはそううまくはいかないってわけよな、あくまで理由を付けて脱出しないとならん。

そうじゃないと政治的云々の前に言葉だけデカいあーだこーだうるさい連中がうざいらしいのよ。

わかるわ、大変だよねえ色々、ああいう連中変に無敵だったりするから手が出せないし。

必要なアイテムの一つであるカードは偶然手に入れた、道端で死んでたTERRAの研究員が隠し持ってたのよ。

近くに闇医者のがゲがいたから多分そういう事、あいつ見つけれなかったのな。それでつながるのも確認済み、ラボでも使える凄いやつ。

あとはケースだがこのケースがなかなか見つからない、まあそれは分かってた。



けど形状が似てるT E R Aのセキュリティケースくらい見つかると思ってたんだけどね、それも全然だめよ。

何度ラボに忍び込んでもそれっぽいのすら見つからん、書類とか試薬とかはかつぱらってるけど使える場所が遠すぎて現状お土産だ。

俺は馬なのだ、ケースに何が入ってるかなんて知らん。最悪似てるケース持ってきた賢い馬アピールで乗り切るしかないと思ってたのにそれもできない。

これが物欲センサーっていうヤツか、発動するのはゲームだけにしてほしいもんだよ全く。

「フーン！」

まずは装備、上半身はロシア軍の6 S H 1 1 2、限界まで広げたヤツを3着繋げただけのタクティカルベストだ。共通の留め具でつなげるだけで改造もしてない。

ポーチは軽機関銃用を4つ付けてボックス弾倉を携行、他は取りやすい位置に発煙筒やら信号弾を入れたポーチ類。

L型軍用ライトに単眼タイプのナイトビジョン、ケミカルライト、暗所対策も完璧。

回収した物資を入れるプットバックも4つ、デカイユーティリティポーチを複数付けてある、バックバックは背負えないから数で勝負だ。

こいつは着るだけ、防弾チョッキ？馬用の防弾チョッキなんかあるわけないだろ。

ポールハンガーにかけてたのをマントを羽織るみたいにバサツをやって、腹の下で留め具を固定し装着。

人間の肩辺りになる部分が非常に不格好になるけど仕方ない、無理矢理着込んでるんだもの。

下半身にはこれまた限界まで延長したのを3つ繋げたモールベルト、オリーブグリーンのT V 1 0 6。これも留め具でつなげただけ。

実物装備はやっぱり具合がいい、お値段相応の価値はあるってもんよ。前世じゃオスプレイM K 4一択でよくネタにされたっけ。

いいじゃん、安いし本物だしいい年季も入っててさ。臭いとかいう奴はまず一言、洗濯をしろ、話はそれからだ。

ここでも俺は洗濯を欠かさないぞ、基本は部屋干しだけだな。112も昨日しつかり洗濯したぜ。

『防弾装備が欲しい…』

防弾性能のあるなんかが欲しい、オスプレイで思い出しちまった。ここでも見つけたけど着れなかったんよ。

タクティカルベストって大体防弾性能0だから、映画みたいにはいかんよ。着てるPMCやスカブが羨ましい。

まあ：なんか思いつかない限り保留かな。さて次はヘッドセット改造イヤホン、改造SOLDIINを気合いで耳に嵌める。

有線イヤホンみたいな感じ、ちよつと圧迫感あるけど便利。良く聞こえるし音も明瞭になって気づきやすい、改造するのは手間だったけどその甲斐はあったってやつだ。

コードは頭の後ろに垂れる感じ、鬘に挟まる感じになればグッド。短くしてるのがいい感じに刺さる。

『そろそろ髪を切るべきだな』

コードを垂らしてたら気になった、少し長くなってる。帰ってきたら切るとうか剃る、馬だと気軽に散髪はできんから気合い入れなきゃな。

配管にバリカンを添えて擦り付けるように気合でゆっくりやるんだ、失敗するとその部分がハゲるから注意。

次の予定が決まったところで後は自衛用の武器だ、馬の身である以上どうしても制限がかかるが偶然にもいいやつを見つけた。

「ひよっほいせ」

簡易作業台横のガンラックにかけておいた愛銃のPKPペチエネグ軽機関銃。

でかい図体、重い重量、でもその図体に似合った高火力、弾薬も大口径だから火力こそ正義って感じ。

構造的に使いやすいんだ、馬の体だと弾帯式のこいつがリロードを少なくできていい、どっちみち時間食うからな。

トリガーに適当な金属部品を付けて蹄を引っかけやすいようにしてやれば撃ちやすくてできたし、デカくて重い分反動もマイルドでちゃんと構えなくてもある程度撃てる。

銃も弾倉もデカくて重いせいで不人気なので程度が良いものが拾いやすい、部品や弾倉も同じで維持しやすいんだよ。

でかい図体も細かい作業が苦手なこの体には有利に働いてる、ロシア製の頑丈さのおかげで整備も楽だし。

弾薬の競合も少ないから手に入れやすい、7.62×54Rライフル弾を使うのは主にモシン・ナガンとドラグノフとかの狙撃銃だから使うやつが限られてる上に、狙撃銃だから狙撃向けの高級品が人気だ。

俺は機関銃だから普通のFMJとか民間向けでも十分なのよ、肝心なのは必要な時に撃てればいいわけでき。

取り合いにならないのはいいことだ、他の奴らが漁った後でも残ってるんだよねコイツ。

大量に確保しようとするのはせいぜいモシン教の人たちくらいだ、俺もモシン・ナガンは使うから喧嘩にはならん。

ハレルヤハレルヤうるさいが宗教の押し売りはしないし、ある意味精神的に強いから話を通じるだけマシだ。

モシン・ナガンを崇めるのは勝手だしタルコフにはもつと質の悪いカルトがいる、あつちは話を通じないから嫌いだ。

『弾薬は…うん、大丈夫だな』

大体450くらいか。目一杯持つてくが基本的に銃撃戦に付き合う気はない、逃げるために撃つだけだ。掃射を仕掛けりや大体ビビるよ。

機関銃掃射を当たらないとタカを括って飛び出すのは映画の中でやる事だ、実際ここでは何人も蜂の巣になってるの見たよ。

装填はまず100連発ベルトリック弾帯を入れたオリーブグリーンの金属製ボックス弾倉を簡易作業台に用意。

簡易作業台の上にPKPのスリングを口で食んで持ち上げ、そのまま金属製ボックス弾倉の上に、そしてクレーンのようにゆっくりと降

ろしてはめ込み部分にうまく入るようにして自重ではめ込みます。

ボックス弾倉を装着したらそれを支えにしてゆつくりスリングを下ろすとストック部分が尻を落としてそのまま立つので、倒れないよう支えつつストックと機関部の付け根辺りにあるスイッチを押してカバーを開ける。

丈夫カバーを開くと給弾口が出てくるからボックス弾倉からちよこつと出しておいた弾を付けてないベルトリックを口で掴んで引き出し給弾口に乘せてカバーを閉める。

後はスリングを首に通して持ち上げて保持、右前足でスライドレバーを引いて初弾を装填し、安全装置を掛けて準備良し。

『さてと…今日は見つかるかね』

いざゆかん、地下研究所。今日こそケースを見つけてここからおさらばしてやるぞ…そう思ってた気合い入れていたのが今朝である。

『うわあ、こわ、近寄らんとこ』

通ろうと思っていた工場地帯でPMC同士がド派手に撃ち合いをやり始めたので遠巻きにして偵察する自分、まあ当然よな。

戦災難民のスカベンジャー、略してスカブが狙撃されてたからもしやと思つて偵察に徹してよかったよ。

欧米系PMC『USEC』とロシア系PMC『BEAR』の小競り合いはこのタルコフじゃ日常茶飯事、迷惑千万極まりない。

何がしたいんだか何を探してるんだか知らないがそこかしこで派手にドンパチしてるし地元民ともいざこざ起こしてやがる。

しかも見た感じ連中の装備が良かった、今更投入された部類かね。潜り込むの遅くなりそうだけど命には代えられない、しかたないね。

でもそうなる、施設内の連中が殺気立ってること多いんだよなあ…なんか他の連中も潜り込んでみたいでさ。

「うへえ…」

木陰に隠れてお座りスタイルで遮蔽に隠れつつ双眼鏡で銃撃戦を眺める、前足で挟んでるだけだからスコープみたいになつてるけどよく見える。

AR15系アサルトライフルのUSECとAK系列アサルトライ

フルのBEAR、典型的な感じよな。

嫌だ嫌だ、なんかあるんだろうけど皆様こんな地獄で元気なこと  
で。迷惑千万極まりない。

しょうがない、遠回りだ。不幸中の幸いだが、この手の大規模戦闘  
の時はPMC以外は大体逃げに徹するから安全になる。

アレに突っかかったり漁夫の利狙おうとする連中は相当のアホか  
筋金入りだ、普通のスカブは逃げるんだよ。

ほら、今もヤベー空気察知したスカブの男二人が警戒しながら道路  
を通って外の林の中に逃げ込もうとしとる。

うーむ、甘い、そこ激戦区からスナイパーの射線が通る。狙われて  
るから撃たれて終わる、ってか今まさに撃たれたぞ。

「ヴヒンヴヒン！」『こつちこつち、そつちスナイパーの射線通るぜ』

「Извините！ Товарыш!!（すまない！同士!!）」

「Выжил！（助かった!）」

咄嗟に物陰に隠れた男二人にあっちあっちと身振り手振りですナ  
イパーの存在と道を教えてやればそこは地元民、すぐに危険を察知し  
てくれる。

普段は狙ってくる連中も居るけどこうして顔が知れてれば意外と  
役立つ、見つかっても撃たないでくれるとかね。

「Товарищ. Заметьте, ребята из  
ВКНовички в технике. Яновичо  
к, что-то есть(同士。注意しろ、PMCの奴ら装備が  
新しかった。新参だ、何かあるぞ)」

「Я собираюсь сделать это. Я не  
милый человек(これやるよ。俺、甘いのだめなんだ)」  
ほらね、さっきのPMCのちよつとした情報は実に嬉しい。こいつ  
らから見てもそうってことは俺の予想は当たりだ、新参ってことは  
どっかが派遣したってこと。

確定情報じゃないにしても一考に値する、あの連中には絶対近寄ら  
んところ。

もう一人はお礼に角砂糖、貴重な食糧だろうにすまねえなあ。足早

に逃げて地下通路に入る二人を見送り俺も移動する。

『あのUSECども、もしかして手当たり次第にしてきたんか?』

途中も路上で何人かスカブが転がってる、残った足跡の数と進路からしてきつきBEARとやり合ってたUSECに違いない。

とはいえ無傷つてわけじゃなかったんやろな、スカブの中にキレイなPMCの仏さんもいらっしやる。

確かに装備がいいなこのUSEC、ここに取り残された連中は大なり小なり草臥れてるんだがこいつは服も肌もピンシヤンしておる。

右見て、左見て、ぐるつと周囲を確認してスナイパーに注意、激戦区は未だドンパチに夢中：よし、今ならいけるな。

下手な隠蔽はいらん、速攻だ。素早く遺体の所まで行つて両前足で抱えられるだけ抱えておさらばよ。

二足歩行は不格好だしちよいと無茶をするが仕方ない、鍛え直した甲斐があるってもんだ。

『南無阿弥陀仏、すまんがこれで勘弁してくれ』

さすがに放つておくのは惜しいけどそれでハイさよならは夢見も悪い、やれるときは自己満でもやるさ。

とりあえず近場のスカブの死体と一緒に近場の建物に引つ張り込んでできるだけきれいに仰向けで寝かせて並べてやる。

装備や物資類を回収したら眼と顔をできる限り眠るようになり、両手を腹の上に組ませて顔に布切れを掛けてやった。

最初は銃器でバトルクロスにしてたけど銃は資材としてもトレード品としても有用だから、布切れを常備しといて出来る限りこうやってやる。

せめてもの供養よ。こいつらにだって親も居れば家族も居たんだろうさ、だがこんな所でくたばったら骨一つ帰らんし墓の場所も分からんのだ。

墓穴があるだけマシな世界つてわけさ、棺桶用のザクは存在しないがね。

『まったく、世の中思い通りにならない事ばかりだよな』

こんなんだから俺は遊びは全力で遊びでやりてえんだ、現実を厳し

いんだから遊びは遊びなのだよ。

撃ち合いなんざバゲで十分なんだ、つたく。USECの装備だつてこんなかつこいいのに：まったくもう。

そもそもこんなことが起きなけりゃこいつらはここで死ななかつたかもな、俺も病院で食つちや寝出来てたのに。

とりあえず使えそうなやつは貰ってPUTTバックやポーチに手早く押し込んで、銃は：USECはベクターSMGでスカブはハンターと：MDRウ？

『随分良いもの持つてるなおい』

・308口径タイプ、USECからの鹵獲品か？：ふむ、状態は良くないな。コッキングがじやりじやり言つとるし中身も真つ黒、碌な整備してないんだらう。

USECのベクターとはえらい違いだ、こいつはしつかり整備されてる。まだ新しいガンオイルの香りがするな。

まあスカブにそんな知識なんてないから仕方ない、元々普通の一般人が整備できる代物じゃないからな。

しかし手入れされてないだけで酷使されたつて感じでもないな、少し手入れしてやれば十分使える。

しかしMDR、変な所で縁があつたもんだ。弟子にもいるぞ、エムデューアール、ツバキが目を付けて連れてきやがつた牝馬。

馬主が海外勤めの時この銃を愛用してたとかなんとか、確か有馬の後のGIダートレースで最近勝つたはずだ。

とりあえず持つてくのはベクターとMDRだけでいい、ベクターは短く畳んでスリングで首に掛けとけば邪魔にはならんし、MDRは弾倉抜いてPUTTバックの蓋で挟んでおこう。

MDRはあれだ、次のメールの時写真送つてやる。お前の元ネタ見つけたつて教えたやつらびつくりすんぞ絶対。

荷物をまとめたらさつさと出発、激しい銃声を背中に聞きながら俺も脱出。スナイパーに注意しつつ林の中にもぐりこんでおさらばだ。

『荷物増えたな、いったん隠してから行くか。日本までは遠いねえ：』  
いつそボックスだけでも買い取らせてくれないかな、話を通じるな

らだけど。通じねえよなあ…  
いつになったら抜け出せるのかな、先行きの見えない現実ってのは  
つらいね。



# Pretty Derby

## 第一話

いつもの夢だ、私はいつものようにアスファルトの上を必死で走る私を空中から見ている光景で我に返って自覚する。

黒髪のアスリート、浅黒い褐色系の肌、整ったお嬢様然とした顔立ち、右耳に着けたお気に入りのお赤色リボン、白いフリル付きスカート、青色の袖の黒を基調としたドレス型勝負服に黄色のミニマントを羽織った姿。

この夢の私はいつも走っている、なぜか山道、それも峠の坂道を、焦燥と、憧れを持って走っている。

小さなころからずっと見ている変な夢、毎日ではないけれどふとした拍子に夢に見る。

(居た！)

前のカーブ、自分の進行方向を見るとほんの一瞬だけそこに見えた後ろ姿に胸が高鳴った。こいつだ、こいつを抜きたい、こいつに勝りたい。

その一心だけが私の中を駆け巡る、狂おしいほどに胸の奥が熱くなる。

私の前を走る青い短髪のウマ娘はこれまで走ってきたどんなレースにいたウマ娘とも違う走りをしていた。

まるで車だ、そう思ってしまう。レース場の平地よりも速度が乗る坂道を恐れなく飛ばしていく背中はあまりにも遠い。

コーナーへの突っ込みも異常だ、ガードレールに体を擦るくらいのインコースを攻めて攻めて攻め抜いて抜けていく。

それに私は追いつけない、必死に追いかけているのに速度もコーナーも負けてる。

真つ暗な峠道を、走行用のライト一本で照らしているだけでどこまでも遠い。

見たことのない走り、噂に聞くウマ娘の公道レースなのか。見たことがないのに、やったことがないのに、どうしてこんなに胸が高鳴るのか!!

(誰なの、あなたはいったい誰ー)

こんなにも強いと思つたウマ娘は見たことがない、シンボリルドルフの再来と期待された私の胸を高鳴らせるウマ娘、私の渴きを癒してくれるライバル。

トレセン学園に強いウマ娘がいないわけじゃない、憧れる先輩がいないわけじゃない、負けたことがないわけじゃない、対抗心を感じたことがないわけじゃない。

それでもどこか冷めた気持ちのあつた私をここまで高鳴らせるウマ娘はいなかった、ライバルと言えるウマ娘がいなかった。

ナリタブライアン先輩でさえそうだ、先輩の渴きを私が癒せないように私も癒されなかった。

でも彼女は違う、求めていたライバルだつてわかるんだ。でも誰なの？彼女はただの私の妄想なのか？

欲しくても欲しくても見つからない勝ちたいと思えるライバル、私の前を走り、何が何でも抜きたいと思うライバルは…こんな儂いものなのか。

それでもいい、夢の中だけでも、そんな何もかも忘れて『走りたい』と思わせる存在が、私は欲しい!

私はふと振り返る、後ろには誰もいない、前を見る、いつの間にか私自身が走っていた。

それがどこか懐かしい、まるで前もここを走つたような気がする。はるか昔、遠い昔に。

「今度こそ!!」

足に力を入れる、ターフとも、ダートとも違う、アスファルトの硬い路面に足が跳ねそうになる。

とても蹄鉄を付けた靴で走る道じゃない、なのに、同じ条件のはずなのに彼女は迷いなく坂を下っていく。

夜の道が怖い、街灯が少ない峠道を走る怖さは普通のウマ娘じゃわ

からない、私も走ったことがないはずなのに、私はなぜかわかる。

前が見えない闇に自ら突き進む恐怖に足がすくむ、怖い、怖いのに、あいつは全く怖がりもせずには抜けていくんだ。

下る速度が怖い、ターフやダートよりはるかに硬いアスファルトの地面を、平地ではなく坂を全速力で下るから当然速度がもつと出る。まるで車にでもなったかのような感じた。でも私は勝負服一つ、転べばケガなんかじゃすまない、確実に死ぬ。なのにあいつは怖がらない。

「このお二！」

弱気を振り切る、いや、押さえつけて走る。怖い、いつ足がもつれるかわからない、坂道で足が軽く感じて怖い。

もし足がもつれたら？滑ったら？アスファルトの上で転倒するだろう、骨折するくらいならいい、下手をしたらガードレールの下に真つ逆さまだ。

怖い、もしかしたらアスファルトですり下ろされるかも、怖い、もう走れなくなるかも、怖い、死ぬかもしれない、怖い、でも怖がっちゃ追いつけない。

カーブに消えていくあいつを追って私もひた走る、何度も曲がる、加速する、前へ！前へ!!もつと速く!!もつと鋭く!!!

もつと内側へ寄せて曲がれ、減速なんてするな、鋭くカーブを突っ切れ、グリップを効かせて走りぬくんだ!!

直線で足を稼げ、転ぶことなんて気にするな、私は今何をしてる？それだけを考えて、必要なことだけ考えろ!!

またコーナーが見えてきた、あいつの背中が近づいてきた。ここはS字カーブ、ここでこいつはいつもあれをやる!!

「曲がれえええ!!」

私はレースと同じように曲がろうとしてしまう体を押さえつけて、あいつの真似をして体を傾ける。普通なら追える、普通の走りをあいつがするのなら。

あいつは体を倒れるぎりぎりまで前に体を傾けて、内側ガードレールぎりぎりまで体を寄せた状態で、速度を保ったまま、不思議なくら

綺麗なドリフトで抜けていく。

二つの足でわずかに跳ねるようにステップを踏んで、蹄鉄で面白いように滑っている、一つ目のカーブでこれなのに二つ目もまるで流れているみたいにきれいに抜けていく！

その時の体の動かし方がまるで違う、足の動かし方がまるで違う。まるで体の重さすらも移動に使っているように見える。

それに私はついていけない、無理な曲がり方でバランスを崩した一つ目のカーブから立ち直り切れない私はどうしても速度が落ちる。そこで突き放されてしまう、そのバカみたいな走りに置いて行かれてしまうんだ。

いつもはそこで終わってしまう、離れていく背中にくら走っても追いつけない、だけど、今日は違った。

『嫌だ！』

誰かが叫ぶ、遠くなる彼女に向かって誰かが叫ぶ、気が付けばその背中は見ることのない生物になっていた。

ウマ娘のような耳と尻尾を持つがっしりとした細身の牛のような後姿、4足歩行の彼はどこまでも駆けていく。

『嫌だ!!』

峠道を、ダート道を、そしてターフ道を、私は追いつけない。わかる、このままでは追いつけない、まるで経験したことみたいに胸の中を悔しさが駆け抜ける。

追いつけていない、俺はあいつをずっと追いかけてきた、今度こそ、今度こそって!!

『まだ終わってない!』

追いつきたい、追い越したい、お前に負けっぱなしなんて絶対に認めたくない!!

『お前を倒すのはこの私だ!!』

どんどん加速するその後ろ姿に私は手を伸ばした。体が加速する、カーブを曲がろうとするそいつの尻尾に手がかかる。

尻尾を掴んだ、気が付けば犬のリードのようなものだった、かまうもんか、思いつきり私は引っ張ってそいつの、彼女の顔を私に向けた。

「こつちにこい！勝負しろ！！シマカゼタービン！！！」

## 第二話

デーパーインパクト、それが今年チームに入ってきた新人の名前だった。

中央レースの世界においてメジロ家に並ぶ強豪であり重鎮の秋月家出身のお嬢様。

メイクデビューにて4バ身差で勝利、次に京都若ゴマステークスで大差の圧倒的勝利。

弥生賞ではトレセン学園内でも今期最有力と言われたマイネルレコルトとアドマイヤジャパンを2バ身引き離して快勝。

まさに堂々たる戦績と言えた、次代の傑物だという声も多い。チーム・リギルのトレーナー『東条ハナ』もその評価には同意であったが、同時に不安もあった。

彼女は強い。努力家で、誠実で、一本筋が通っている。しかしその中に、自分にはない何かを求めている。

それを探して多く同期達や上級生とのレースを望む傾向にあった、練習試合としては良い傾向かもしれないが彼女の場合は違う。

勝っても負けても、彼女のどこかには満たされない何かがあって、そのせいか冷めたようなどこかぼんやりと捉えどころがないところがあった。

「私の勝ちです」

「わ、笑えねえ強さ…」

今もそうだ、練習相手を願い出てくれた群馬トレセン学園の生徒を相手に大差の勝利。実力の差を見せつけた上で、残念そうな雰囲気を漂わせてしまっている。

これまで戦ってきた生徒全員に、デーパーインパクトが本気では走れない『ダート』で圧倒的な価値を見せつけ続けたのだ。

地方ウマ娘の多くが走るダートレースにおいても、彼女の強さは歴然としていた。

お前では相手にならない、お前では自分は倒せない、そういう王者の風格だどとらえるものは多いが、どこか危うい。

だからこそ、彼女の求めているナニか、足りない何かを見つけなければならない必要があった。だがそれが何なのか皆目見当がつかない。

圧倒的強者ならば用意したが駄目であった、チーム・リギルのシンボリルドルフやマルゼンスキーといった格上にコテンパンにしてもらったが奮起はするだけで埋まらない。

他チームの『チーム・スピカ』『チーム・カノープス』などのメンバーに引き合わせたこともあったが、交友関係が広まって生活に花が出るだけで駄目であった。

最近では周囲の先輩に感化されて強くなって、それにさらに引つ張られた同級生が自主練で潰れかけるなどという実害も出始めて、呪いだの才能の暴力だの悪い噂が立ち始める悪循環。

(周囲の目が痛い)

日本ウマ娘トレーニングセンター学園、通称トレセン学園でのデイープインパクトの評判もそうだが、この群馬トレセン学園での目も時間を追うごとにきつくなってきている。

何も知らない純粋な憧れを持つ生徒たちの送る声援と純粋な憧れの中から感じる周囲の目は敵意と猜疑心に満ちていて、しかもそれは自分ではどうにもならない。

「群馬トレセン、ここに何かあるように感じたのだが…間違い？いや、それにしては…」

ナリタブライアンは理解していてもそんな空気も気にせず少し考えこむ。群馬トレセン学園に合同訓練という名目で来たのは、ひとえにヒートアップしたマスコミからの退避であった。

デビュー戦からの連戦連勝、さらにそこから向かうクラシックでの並みいる強豪との対決に心躍らせるファンは多い。

ましてや今期はタイミングが悪い、前期にはサイレンススズカの悲劇と復帰、トウカイテイオーの奇跡、スペシャルウィークの大躍進などが起きて元々ファンの中でも熱が高い時期だった。

それに伴い多くの雑誌や新聞がこぞってネタ集めに奔走と同じくヒートアップ。

その結果、トレセン学園に記者が群がることになり対応によって業

務の逼迫が発生。その対応と火消しのために、ディープリンパクトはトレーナーとほか数名とともにほとぼりが冷めるまで学園を離れることになったのだ。

そこで訪れたのが群馬から地方エンターテイメントレースである『ローカルシリーズ』へ出走するウマ娘たちを教育する群馬トレーニングセンター学園だ。

ここに到着したときは普段と変わらなかったディープリンパクトが、このコースを見た途端に目を大きく広げて息をのんでいたのだ。まるでほしかったものを見つけたような、そんなキラキラした瞳で。

「ハイーディープの反応が明らかに違いマシタ！」

「私もそう思います、この訓練場を見てからなんだか…驚いているような、期待しているような感じがしました」

まだ裏のドロドロとしたものには感じていないエルコンドルパサーとグラスワンダーもディープリンパクトに関しては同じように感じている、ということは何となく間違いないのだろう。

しかし今、こうしてダートコースを走り回る彼女はいつも通りどこか落胆している。

ここに来てから何人かのウマ娘に声をかけて模擬レースをお願いしていたが、だれも彼女と競り合うことはなかった。

この群馬トレセン学園一のステイヤーと言われたツバキプリンセスでさえも。

そのツバキプリンセスは疲労から復活したかと思えばどこか浮ついた様子で周囲を見回し、ほかの生徒に指示を出して何かしている。「そういえば、変な夢を見たとか言ってましたね。何でも誰かを追いかけている夢だとか、名前とかは覚えてないみたいですけど」

「いつもの話か…」

幼少期から見ている不思議な夢、起きると大体忘れてしまうというソレはハナも知っている。このチーム・リギルにチーム入りした当初にディープリンパクトから相談されたことの一つだ。

はつきりといえば東条ハナ自身もトレセン学園の誰もが彼女の見



る不思議な夢に関しては何の役にも立っていない。

そもそも、この世界において『ウマ娘』という存在は昔から当たり前のように存在しているがまだ謎の多い存在でもあるからだ。

科学が発達した現代でさえ解明されていないことは数多く、最高の頭脳を持った科学者が最高の設備をもって研究しウマ娘自身が学問に身を投じてその解明に尽力しても謎があまりにも多い。

ゆえに通説では別世界に存在した気高い魂がこちらで生まれ変わった存在と言われて、昔から一般ではそんな認識だ。

(こういう話はいいつのほうが得意だつていうのに…また相談してみようかしら)

脳裏に浮かんだのは『チーム・スピカ』のトレーナー、ウマ娘に対してのアプローチの仕方が違う彼ならばもしかしたらデイープリンパクトの異変に何か気付くところがあるかもしれない。

現に元リギルのサイレンススズカはそれで立ち直った、アクシデントこそ発生したもののそれでも彼女は走り続けるくらい強くなった。

足への負担を考えて海外留学は取りやめたものの、様子を見ては出やすい海外レースに参加して旋風を巻き起こしている。

自分のやり方では発揮できない強さを持つウマ娘だっている、もしかしたらデイープリンパクトもそのたぐいの何かを持っているのかもしれない。

(あいつは、何を求めているんだろうな…くそ、解つてやれない自分が恨めしい)

完全管理型の訓練形式で冷めたような印象を受けがちなのは知っているが、ウマ娘に対する愛情やレースに対する情熱は誰よりもある。

だからこそどかしい、悩む生徒の力になれない自分の無力さが。「見つけたああ!!」

唐突にグラウンドに響き渡る大声に思わずびくりとして声のするほうに目を向ける。そこには先ほどまでナニカしていたツバキプリンススが指をさしており、その先を追っていくとグラウンドの入り口に立っている一人のウマ娘が目にと留まった。

見慣れない緑色の野暮ったいジャージを着こんだ青い頭髪をしたウマ娘が、大きなクーラーボックスと折り畳み式の椅子を抱えて、今まさにどこからか戻ってきたような感じで入ってきていた。

ボーイツシユに切った明るい青の頭髪、赤い左目と青い右目のオツドアイ、冷静そうに整った顔立ちだが活発そうな印象がある。

『群馬県立芦名高校』と胸に名前が入ったジャージを着こんだ彼女は群馬トレセン学園の生徒には見えない、明らかに一般校の生徒だ。

口に火のついていない煙草のような棒を咥えた彼女はキョトンとした様子で、指を向けていたツバキプリンセスのほうに顔を向けていた。

「え、俺？」

それしかないだろう、現にロケットダツシユで彼女のもとに駆け寄ったツバキプリンセスがそのウマ娘に詰め寄った。

「タービン！あなたどこをほつつき歩いてたの！！散々探したのよ！！」

「何だよツバキ、藪から棒に。ココアシガレットを切らしたからひとつ走りして買いに行つてただけだよ」

「…しまった！今日は昼寝じゃなかったのね！！」

ツバキプリンセスの大仰な落胆にタービンと呼ばれた少女は肩をすくめる。

「よくあることじゃねえか、一体どうしたつてんだ？」

「とりあえず、その荷物下ろしてご挨拶してきなさい」

「もう来てるのか？まだ一時間前だぞ、レース前じゃないノルンにしちや珍しい」

「騙して申し訳ないけど午後の予定なんて元からないのよ、ノルンもダイオーもカサマツに遠征中。そのトレセン学園から来たチーム・リギルの皆様がシマカゼタービンの次のお相手よ！」

「りぎ…はあ？」

ツバキプリンセスの言葉に目を丸くするシマカゼタービン、どうやら彼女にも寝耳に水の事らしい。

どうやら自分が騙されていたことに感づいたシマカゼタービンが怖い目でツバキプリンセスを睨みつけると、彼女は少し気まずそうに

眼を逸らしたが一度目を閉じてまっすぐと見つめ返した。

「今日はトレセン学園のチーム・リギルの皆様と…その、合同で練習する話になってたの、午後から」

「お前、あれターボが言ってたトンデモチームじゃねえか…なんで初めから言わないんだよ」

「言い訳はしないわ、あなたなら絶対嫌がると思ってたから。でもあなたは間違いなく群馬でもトップクラス、あなたの走りが必要なのに」  
「勘弁してくれ、俺はそっちにや興味ないと…まいったな、いいのかよ本当に」

少し照れ臭そうに顔を背けるシマカゼタービン、その様子はまんざらでもなさそうだ。そこにディープリンパクトに敗れた群馬トレセン生徒やトレーナーもやってきて声をかけた。

「姐さん、あたしらモータースポーツ部からもお願いします！マジ強すぎてシャレにならないっす!!」

「すまない、頼む。さすがにこうも暴れられちゃな…先輩の目がやばい」

すっかり敵認定されてしまっている、解っていたことだが改めて感じるとハナは気が遠くなるようなショックを感じた。

見た目はディープリンパクトとエルコンドルパサーに惨敗したチームとその担任の懇願だが、その裏にあるものがハナにはわかってしまう。

中央と地方の溝と軋轢は深い。いつも中央と比べられ、格下扱いされてきた地方のウマ娘は常に忸怩たる思いを感じていたはずだ。

華々しい中央レースでの活躍を夢見て、挫折して地方のトレセンに転校したウマ娘も何度も見てきた。

地方トレセンで大きな成果を上げて、それを認められて転入してきたウマ娘が潰されていくのも見てきた。

(それにルドルフもやってしまった、おかげで地方トレセンは余計に窮屈になった)

地方レースでとんでもない活躍をしたのを見つけられたらオグリキャップの二の舞、そうなると地方のトレーナーたちもかなり慎重に

なる。

中央からの目が届かないレースで成果を上げることがなかなか難しい、だがかといつて大きなレースには中央トレセンの目が有って育ちのいいウマ娘や才能のあるウマ娘をかつさらっていく。

かのシンボリドルフ、トレセン学園の生徒会長であり伝説とはいえ一生徒が、カサマツトレセン学園のトレーナーからオグリキャップとベルノライトを奪い取ったのは関係者には悪い意味でも有名だ。

そのせいで当時の担当トレーナーは受け持っていたウマ娘をすべて失った、トレーナーとしては心を通い合わせて頑張るはずのウマ娘にすべてを終わらされたも同然なのだ。

その当人は別の目標を持って動いていると聞くと聞くとそれでも事実とは変わらない。それがもう周りには漏れているのだ。

(それにオグリキャップは…六平トレーナーのもとで成功している。してしまっている)

オグリキャップは成功した、今もトレセン学園で担当トレーナーとサポートのベルノライトとともに躍進を続けているがだからこそ悪かった。

当の本人たちの間では美談で終わっているらしいが傍から見ればなんとも悪辣で無遠慮な強奪劇だろうか。

これほどの才能がローカルシリーズのレースで走ってくれたらどれだけわくわくできただろうか、当時のライバルとシノギを削っている姿が見られたらどれだけレースに花があっただろうか。

地方の怪物などと囃し立てられて希望の星として一般からはちやほやされているが、関係者からしてみれば悪夢の一言ではないか。(悪いことに悪いことは重なる、悪意がないだけに歯止めがない)

それにオグリキャップと同じようにして夢を持ってやってきたほかのウマ娘がみんなそうとは限らない。同じように才能を見出されたがついていけず挫折した例はごまんとあるからだ。

そしてそれはオグリキャップの成功から一気が増えている。そのおかげでトレセン学園の評判は表向きでは最高ランクだが関係者からの評価は極端なのだ。

あまりに才能の上澄みばかりを揃えすぎていて人間もウマ娘も選ばれたものしか生きていけない別世界、そしてそれに一度でも浸ればそこから離れると待つのは惨めな人生ばかりだとも。

事実、以前活躍したウマ娘たちはまだトレセン学園で活躍するのだ。

ミホノブルボン、ライスシャワー、セイウンスカイ、ビワハヤヒデ、ナリタタイシン、ウイニングチケット、メジロライアン、メジロマツクイーンなどなど、だれ一人とっても地方からすれば怪物である彼女たちはまだまだ走る。

互いに切磋琢磨してより高みへと実力を昇華するだろう、それに追従できるウマ娘はこの先どれほどいるのだ：ハナには想像ができなかった。

東条ハナは地方のウマ娘を敵視しているわけじゃないし軽蔑もしていない、地方所属のトレーナーも仲良く切磋琢磨するに値すると思っっている。

だが現実はこのなのだ、今回の合同訓練も群馬トレセン学園からすれば中央の勝手で決まったことで反対はしなかったがそれだけで歓迎はされていない。

これまでもかなり針の筵で、それに耐性がありそうな者と軽く弾けそうな者を帯同してきたつもりだったが逆にそれが刺激してしまっただ。

デイープインパクトがそうであるように、同じウマ娘として配慮なんて無意味と断じるナリタブライアンやその手の事は知らないのも普通に元気にやってしまうエルコンドルパサーは平然とこの学園のトップチームを蹂躪した。

配慮ができるタイプのグラスワンダーでさえも普通の練習で実力差を見せつけてしまい、やっぱり練習相手を蹂躪する形になってしまっただ。

ただ併走するだけで、一回模擬レースをするだけで実力差が見せつけられてしまう。それでも笑ってられる純粋な生徒は多いがすべてではない。

まだ実害自体は出ていないがとにかく周囲の目が痛い。群馬トレセンのトレーナーたちにはどことなく疎遠にされ、中央を知る生徒には警戒される。

もし悪化したりしたら分かっていて毛ほどにも動じないナリタブライアンは逆に啖呵を切り悪化させるだろうし、エルコンドルパサーとグラスワンダーにはあまり見せたくないものを見せてしまうだろう。

それは群馬トレセン学園側も同じだから今はまだ表立っていない、彼らも無邪気にチームリギルを歓迎し応援する生徒たちに嫌なモノを見せたくないからだ。

だからあまり変なことをしないでできればさっさと出て行ってくれ、そんな視線がハナの背中にはビシビシ突き刺さっていた。あのウマ娘が帰ってくるまでは。

「姐さんいうな、お前ら…仕方ねえなあ、あの人？」

「そうよ」

「解った。でもその代わりお前今夜付き合えよ、足回り変えたから軽く流したくてな」

「ウゲッ…わ、解ったわ」

一瞬嫌な顔をしたツバキプリンセスが決心した表情で頷くと、シマカゼタービンは口に咥えていた煙草のようなものを口の中に押し込む。

口の中でもごもごかみ砕いているところから、おそらくお菓子の類だったのだろう。

それをしつかり飲み込むと、背筋を伸ばしてハナ達の前に立って頭を下げた。

「こんにちは」

「こんにちは。君は？見たところここの生徒じゃないようだが」

「シマカゼタービンです、今日の模擬レースのアグレッサ担当です。普段は芦名高校に通ってます、まあ地元の県立高ですよ」

「一般校か？」

「はい」

不思議なことがあるものだ、群馬トレセン学園がわざわざ別の学校から呼び出すほどの娘だというのだろうか。

ハナは疑問に思いながらシマカゼタービンの体を一度舐めるように見る。

野暮つたいジャージで詳しくは分からないが体はできており鍛えられてはいる、だがそれ以上はいまいちよくわからない。

トレセン学園の強豪たちや今横にいるグラスワンダー、エルコンドルパサー、ナリタブライアンのようなジャージ越してもわかる何かが見当たらない。

何より高校生にしては物腰の柔らかな仕草、まるで社会人経験があるかのような雰囲気がある。それが妙にミスマツチで気味が悪く見えた。

「トレセン学園、チーム・リギルのトレーナーの東条ハナだ。こっちはグラスワンダー、エルコンドルパサー、ナリタブライアン」

「よろしくおねがいます」

「よろしくデースー！」

「初めまして」

「お噂はかねがね、いところから中央のトップチームと聞いています」

どうやら彼女もチーム・リギルの事は知っているらしい。その割には随分と興味がなさそうなように感じる。

今までトレーナーとして働いてきた中では初めて見るタイプのウマ娘にハナは少し戸惑いを感じた。

「ダートコースのルールはご存じで？今日は1600二周の——」

「ねえ」

「うおわ!?び、びっくりさせんな嬢ちゃん、いつの間に?」

いつの間にかシマカゼタービンの後ろにディープリンパクトが立っていた。その声に驚いたシマカゼタービンが飛び上がる。

それをじっと見つめるディープリンパクトの立ち姿にハナは何か違和感を覚えた。何か違う、目つきがいつもより鋭いような?」

「勝負するの?」

「うん?お前さん…へえ、君も中央の?ならそうなるみたいだな。俺

はシマカゼタービン、よろしくな」

「ディープインパクト、ディープでいい。早くやろう、こっち」

「あ、おいそっちは芝コース…いいのかこれ」

「構わないわ、許可は取ってあるから！もう派手にやりなさい!!」

「用意のいいこつて」

やれやれ、とシマカゼタービンはポケットに手を突っ込んでそのまま芝コースへと足を向ける。信じられないことに受けるつもりだ。

「ちよつと待つデース！ディープ!!」

「待て、シマカゼタービン」

ディープインパクトにエルコンドルパサーが、シマカゼタービンにナリタブライアンが止めに入った。

エルコンドルパサーに止められたディープインパクトはなぜか不思議そうに首を傾げる。

「なんでしよう先輩」

「なんでじゃないデス！芝で走る意味、解ってマスカ!!」

「解ってます、でもあつちは本気でバトルするつもりだと思います。なら、こつちも本気でやらなきゃ失礼だと思えます」

「What!?!」

「解りませんが、そう思うんです」

おかしい、ディープインパクトが随分と熱を入れている。何か彼女に感じるものがあつたのだろうか。

止めるべきか、ハナはそう思ったが、ディープインパクトのほうに歩み寄ろうとしたところを後ろから服の袖をつままれて止められた。

「グラス？」

「止めなくていいと思います」

「なぜ？」

「詳しくは分かりませんが、でも何か感じるものがあるんです、それに彼女もやる気みたいですし」

グラスワンダーが視線を向ける。それを追うと、ナリタブライアンに呼び止められて飄々としているシマカゼタービンの姿があつた。

「本気でディープと芝でやるつもりか？」



「やめとけって？あいつの本業は芝じゃねえの？」

「そうじゃない」

「なら芝だろ、別に俺はどっちもでもいいよ。ダートも芝も変わらんから」

「随分と自信があるんだな、勇気と無謀は違うぞ」

「関係ないね。ツバキがあんなことするくらいだ、汲んでやるのがダチってもんだろ。それにあんな目をされちや逃げる走り屋はいねえよ、だから黙って見てな」

「…チツ、勝手にしろ」

二人の制止を振り切って芝コースのゴール板前まで行くと準備運動を始める二人。どういうわけかディープリンパクトは彼女を気にしてちらちらとみている。

準備運動を終えるとシマカゼタービンがコースの内側、ディープリンパクトが外側に並ぶ。右回り、距離は2000メートル、芝コースで足場は良好。

どこまでもディープリンパクトに有利な設定だ、なのにシマカゼタービンは全く気にする様子はない。本当に何も知らないのか？

本人はチーム・リギルの事は聞いていると聞いていた、知った上でこの余裕というのもおかしい気がする。

自画自賛はハナの趣味ではないが、チーム・リギルは粒ぞろいだ。一般校に通うウマ娘程度が勝てる相手ではないはずなのだ。

一般校の生徒ゆえにまったく情報がない彼女の様子に首を傾げていると、二人の前にツバキプリンセスがさっそうと歩み出して前に立った。

「私がカウントを担当するわ、良いでしょ？」

「スタートは走り屋スタイルでやろうってのか…いいじゃねえか、乗せてきやがる」

「その代わり、勝ちなさい」

その瞬間、シマカゼタービンの目の色が変わった。瞬間、ハナの背筋に電流が走ったような感じがした。

あれは明らかに強者の目だと、多くのレースを経験したウマ娘がす

るはずの目だった。今まで多くのウマ娘を育成したからこそわかる。だからこそ理解できなかった、なんで一般校に通う彼女がそんな見慣れた目をしているのかと。

「カウント0、私がGOと言ったらスタートよ。ルールはタイムアタック、良いわね？5秒前！」

奇妙な緊張感が場を支配し始めた。デイープリンパクトが身構える。シマカゼタービンは自然体、少し身構えた程度だ。彼女は右足のつま先を少し上げ下げして、少し深呼吸する。

「4！」

今まで見たことがない、奇妙なレースが始まろうとしている。不思議な感じがしてハナはむず痒さを感じた。

「3！」

ふとレース場の周囲に人気が増えたのを感じて見渡す、ギャラリが増えているのがわかった。

空気も変わっている、先ほどまで裏側に淀んでいた重苦しい空気が霧散してまるでお祭りのような雰囲気すら漂いつつあった。

先ほどまで顔をしかめていたトレーナーや生徒まで、話が伝わると途端に雰囲気明るくなってニヤニヤしているのである。

それも相手の醜態を笑おうなどという悪意などではない、純粹に何かを楽しむそんな明るさがあるものだ。

「2！」

次にギャラリーの配置が妙だった。なぜかほとんどがコースのコーナーに陣取っている、その表情は何か待っているような期待した瞳だ。

ゴール板前に二人、その手にはストップウォッチがありタイムを計測する係に見えるがなぜ二人なのだ。

みんなの瞳にあるのは確信、そしてその上で何を見せてくれるのかという期待、間違いなく群馬トレセン学園の全員が『シマカゼタービン』が何かやらかすと思っている。

「1！」

なぜだ、今までの練習で散々此処の生徒たちに力の差を見せつけた

デーパーインパクト相手にどうしてそこまで期待と好意の目を向けられる。

それ程までにこの一般校のウマ娘が強いとでもいうのか。ついには双方に対する声援まで聞こえてきた。

「GO!!」

ツバキプリンセスが妙に決まったスタートサインの腕を振り下ろす。瞬間、デーパーインパクトのスタートダッシュが炸裂した。

### 第三話

まさか本当にお前が来るとは思わなかったよ。この世界に生まれ変わっちまって十何年、馬がいなくてウマ娘とかいうのが居る世界で俺は生きてきた。

まさかツバキたちと幼馴染だったり爺さんのはずのツイインターボが従妹になってたりして、ここは本当に別世界なんだと実感したもんだ。

もしかしたらお前もとは思ったが、まあさすがにそこまでご都合主義じゃなかった。

前の生まれはこの世界でも作用するらしかったし、結局俺は酒屋の娘になってるからもしやご近所さんかもとか期待してたがそう都合よくはいかねえな。

この世界はいろいろと可笑しい、けど面白い。親父さんも敏則の兄貴もいつも通りだったし、俺はここでも酒を仕込んで走ってるよ。

車だって買ったんだぞ、酒造りは結構金になった。おかげで毎日楽しいんだ。お前がいけないのは寂しかったけど、いないのはしょうがないってあきらめてもいたよ。

不思議だよな、前もこんな出会い方だったよな。お前は俺の事なんて知らないんだろうけど、俺はうれしいよ。

前はあるな事になったけどそれはいいんだ。

なあデープ、お前はあの時みたいに舐めてかかるのか？それとも最初から本気なのか？見せてくれ、俺は全力でお前にぶつかるからよ。



シマカゼタービンの足は逃げ、それはギャラリーが叫んでいた言葉から分かった。だから私はスタートと同時に、シマカゼタービンの前

を取ることにした。

逃げタイプはまず出だしをつぶすのが一番手っ取り早いし、確実に走らせたらどんなふうにも走れるかなんて予測できないのが嫌なところだからだ。

サイレンススズカ先輩みたいな差す逃げ足だったり、パーマーさんみたいなスタミナ任せだったりしても、先輩たちほどじゃないだろうけどそれでも警戒するに越したことはない。

仮に好きに走らせて巻き返せなくなるくらい滅茶苦茶にされてそのままゴールなんてされたらやばいからね。

逃げタイプはそれだけやばい。だから前には行かせない、私も全力でまずはこのまま潰す。

そう思っただけは徹底的にブロックし始めた瞬間、怖気が走った。

「やるじゃないか」

いつの間になんか気が付けばシマカゼタービンが本当に真後ろに張り付くようにして走っていた。そのオッドアイの両目には、赤い何かが目ざついているようで、私を一直線に見据えている。

怒ってる？違う、喜んでる？なんで？意味わかんない。思わず私はペースを速めてしまった、怖い、こいつが何をしてくれるのかわからない！離れておかないと後が怖い！！

「待てよ、のんびり行こうぜ」

なんでいるの!!足音が聞こえないのに声だけははっきりとわかる。心配が消える、何とか安全圏まで抜けたのかと思っただけで後ろを見ても見えてしまった。

「よっ、さつきは悪い。ビビらせちゃったかな？」

「な、なんで!?!」

そこにはさつきまでの恐ろしい雰囲気や霧散していたはずの小僧のようにやりと微笑むシマカゼタービン。

凄く変わりようもさることながら、心配は全くなかった、足音も感じなかった、なのに真後ろにびったりくっついてきて離れない。

私の戦法は基本的に追い込み型、最初はそれほどスピードを出さないから後ろにつくくらいは普通のウマ娘でもできるかもしれない。

でもこれはあり得ない、相手を乱すために仕掛けを込めて走って私のペースにぴったりとくっついて離れないなんてどんな技術だ!!?

「離れる!!」

「つれないねえ」

「ディープさん頑張つて！煽られてるわよ!!」

「やれタービン！煽っちゃえ煽っちゃえ!!」

周囲がわめいてるけど気を割く余裕がない、こいつ邪魔すぎる！気にしないでいれば走れるのかもしれないけど、一度こいつが後ろにいるのがわかったらどうしても足並みが乱れる。

しかも気付かれたとわかったら今度は後ろでわちゃわちゃ動き回ってうざい！抜こうとしてフェイントしてきたり変にゆらゆら気配が揺れたり、すごく気になってしょうがない！

苦しい、私の走りができない、無駄に体力を持っていかれていく感じがする。落ち着け、足を整えろ、気持ちを整えて、いつも通りに戻せばいい。

もうコーナーの目の前、気にしすぎるな、気にしすぎるな――

「お先に」

「しまった!？」

気を落ち着けようと考えこみ過ぎた、その際にシマカゼタービンが私を躲して前に飛び出していく。でも速い、加速が速すぎる。それじゃ遠心力で外にブレちゃう。

私を追い越してどんどん加速していくシマカゼの体はやっぱりどんだん外にズレていく、彼女のコースがラインとして目に見える。それでもまるで気にしないで彼女は踏み込む。

最短距離を捨ててとにかく早く前に進むことだけを考えているみたいな走り、速くても体力のロスが大きいし距離も伸びるまったくもって不合理な走りだ。

普通のウマ娘なら、ましてやトレセン学園で走り方を学ぶウマ娘ならやらない失敗。やっぱり所詮は…

「え!？」

ただの一般人、そう思ってた。シマカゼタービンの体が横向きに見

えるまで。一瞬だった、どんな足運びをしたのかわからなかった。

目の前でまるでもつと踏み込む、バカみたいに加速する、そして次の一步でタービンの体が右回頭して、横向きに。

私の目の前を走っていくシマカゼタービンの体が明らかにおかしい角度で見えている、そう理解するのに時間がかかった。

横向きに走っているように見えた、走る速度をそのままにしてまるで芝の上を滑るみたいに、流れる力に身を任せて流しているみたい

に。  
でもそうじゃないのはすぐに分かった、彼女の足がそれを変えていく、踏み込む、走ってるようには見えない軽い踏み込みの度のその力がすべて前に行っている。

そのラインは今までのコースも何もかも全く無視で急カーブを描いていて、普通のウマ娘ならあり得ない急角度をもつてして作られた最短ラインの内ラチギリギリ復帰コース！

「マズッ!!」

分かったときには遅かった、私が加速しようとする前に、シマカゼタービンがドリフト走行から一気に立ち上がって加速して前を取る。

その姿はあまりにもきれいすぎた、こんなふざけた走りの後から魅せる加速がきれいに、それも強烈な加速力が付いていて一気に引き離される。

1バ身や2バ身どころじゃない、10メートル近く一気に突き放されるっておかしすぎるし今もどんどん置いてかれてる。

何が起こった、何をした、だれが考えるこんなこと。どう思えば二本足でドリフトするなんて考えになる!?

しかも何その加速力、カーブに入ったときから何をすればそんなふざけた加速になるっていうの!?

「うわ、いつ見ても強烈!」

「完璧な荷重制御と推力制御、ドリキン特集見てなきや見逃しちゃうね」

「ゾワツとするくらい綺麗な立ち上がりと加速、これやられると怖いよね」

コーナーでこの生徒がたむろしていたのはそれか!!これいつもやってんのか!!何だコイツらイカレてるの!?!ドリキンって何!?

待って、落ち着け、まずはこいつに追い付かなきゃ話にならない。今を見て分かった、絶対この人スズカ先輩と同類。

好き勝手に走らせてたらどこまでも前を突っ走るタイプ、しかも好き勝手にペースを荒らしてくる。前を押さえなきゃ話になんない!!

もうこれはいつものやり方とか言ってるんじゃない、とにかくもう一度前を押さえなきゃ絶対に逃げられる。

この直線で何とかしなきゃ、次のコーナーでまたあんな加速されちゃどうしようもない。

コーナーが終わる頃にはだいぶ距離ができてしまってる、でもこの直線で何とかするしかない。

一気に加速してあいつの背中めがけて突っ込む。しめた、さっきの加速であいつまだ体の軸が少しブレてる。

今なら内側から最短距離で抜けられる、よし、このまま一気にもう一度前に!!

「くっ!」

あいつの体が大きく横にブレる、たぶん軸の調節のためだ。そこが隙、抜けられる確信をもって内側に体を差し込もうとして、私の目の前にはあいつの背中があつた。

思わず体がつんのめりそうになるのを何とか堪える、見誤った?いや、まだあいつの体はブレてる、差し込みに気付かれたんだ。

でもしくじったね、無理してでも防ぎに来たのは良いけど足元おぼについてないしさつきよりもブレブレで内側に寄ってる。

これなら、外側から最短距離に一気に抜けられる。体を持ち直して、最小限のコースで一気に外に!!

「なんでえ!?!」

行ける、そう思ったコースにまた背中、ぶつかりかけて思わず体がつんのめって速度が落ちる。

まさか進路妨害!?!いや、でもこいつそんな風に走ってない。まっすぐ走ってる、私が誘導された?うそでしょ?



思わず足がもつれかけて進路が外に…いや、これなら邪魔されない。もつれる足を持ち直して一気に大外ラインに、そして加速してシマカゼタービンから距離を取って併走する。

もしかしたら、そう思っただけの顔をしてみる。やっぱり、ニヤニヤしてる！こつち見てるし！

「騙したな!!」

「ナンノコトヤラ?」

しかもわざとらしいカタコト!?くそ、まずい、これはまずい、ハメられた。もう直線を使い切ってる、最後のコーナーが近い。

シマカゼタービンの体がさらに加速するのが見える、ここでもどんな加速していくって言うの?くそ、このままいかせたらまたドリフトされる。

そうはさせない、私はシマカゼタービンのそこにくつついてあいつが内側から出られないように併走する。

何てこと、今気づいた、こいつどれだけ内ラチに沿って走ってるの?5センチくらいしか離れてないんだけど!?

私の併走に気付いたのかシマカゼタービンが顔を引き締めてまた加速する、私もそれについていく、まずい、足が持っていかれてる。

そもそもそのギリギリの状態でもっと加速ってどんな考えだ、腕が引つかかったら大けがで済めば御の字、最悪ちぎれちゃうって。

また速度が上がる、ついていくしかない。なんだか風景が流れる速度が怖い、いつもの走りができてない証拠だ。

怖い、ナニコレ、私はシマカゼを挟んで走ってるはずなのに、こいつは全く怖がってないのに私が怖い。足がすくみそう。

完全にあいつのペースなんだ、でもここで負けてたら話にならない。もうこれが最後のチャンス。

私だってトレセン学園の生徒なんだ、チーム・リギルのメンバーなんだ、一般校のウマ娘なんかに負けるなんて絶対嫌だ!!

ラストの直線、ここだ、ここで勝つしかない、いつもみたいに抜いてやる!!

「やああああアアアツ!!」

この頭のおかしい速度で、最後の末脚を切る。今までやったことのないタイミングで本気で踏み込む、あいつの背中めがけて、あいつの向こう側を目指して突き進む。

もつと速く！もつと速く!!シマカゼタービンの背中が近づいてくる、ゆっくりと近づいてくる、その遅さがもどかしい。

一瞬加速のために踏み込んだだけで差がまた開いた、それも取り戻さなきゃ絶対に抜ききれない。

あと3バ身、それだけあいつは速く走ってる。あと2バ身、あのカルストンライトオ先輩のレコード超えてるって思えるくらい速い。

あと1バ身、追い付ける、もうこれで差し切って前に——行けなかった。

嫌な音が聞こえた。シマカゼタービンの足がより一層踏み込まれる音、整った深呼吸、そして全身の筋肉がまるですべて切り替わるみたいなきさなカチリと嵌る音。

シマカゼタービンの足が踏み込まれる、瞬間、私の目の前でシマカゼタービンの背中が遠ざかりだす。私はもう限界なのに、もうこれ以上速く走れないのに、あいつはまだ加速する。

あり得ないと思った、あのサイレンススズカ先輩だって、逃げて差すなら足を溜めてる走りをするのにそんな風に走っているようには見えなかった。

逃げ方はスタミナに任せただ逃げ、パーマーさんやヘリオスさんみたいな感じだと思ってたのに、どんなスタミナしてるんだ!?

ここまで来たのに行かせてたまるか。もう一度、使い切った足に力を入れて踏み込む。少し縮んだ、けど、それだけ。

追い付けない、もうゴール板は目の前、時間も距離も足もない、シマカゼタービンの背中が遠のく、巻き返せない。

私の前を進むシマカゼタービンがゴール板の前を駆け抜けていく、そのあとに続いて私はゴール板を駆け抜けて、へろへろになりながら速度を落としてから地面に身を投げ出した。

息が苦しかった、思い返せばこんな風に全力で走り切ったなんてレース以外ではなかった気がする。もう全然動けない、大の字に体を

投げ出して空を見上げると、もう憎らしい青空。

「あ、あはは…」

笑うしかなかった、これはもう完敗だ。どこをどう見ても私の負け、なのに、私は全然落ち込んでない、むしろ清々しい。

これなんだ、私が欲しかったのはこれなんだ。この完璧な負け、ルドルフ先輩たちみたいに強いとわかってる先輩たちに負けるんじゃない、これが欲しかった。

胸のつつかえが取れたような気分、こんなすっきりした負けは初めてだ。

「負けた、私の負け」

「そうだな、ま、でも練習だから黒星にやならんでしょ」

いつの間にかシマカゼタービンが私を覗き込んできた。少し息を切らしているだけでピンピンしてる、私はもうへとへとなのに。

私が上半身を起こすと、計測係をしてくれていたウマ娘の子が水のボトルを差し出してくれた。よく見ると、少し前に負かしたモータースポーツ部とかいうチームのウマ娘だった。

計測係のウマ娘が持つてきてくれた水を一口飲むと、冷たい水がおなかの中に入ってスーッと疲れが癒えるような感じがする。

シマカゼタービンも同じように水を一口飲むと。ポケットから藍色の紙箱を取り出して煙草を出すみたいに手首をポンポンたたいて中身の細い棒菓子を出すと口に啜えた。なんか親父臭い。

「うん、そうだね」

「…なんだよ、随分素直じゃねえか」

なによ、その気持ち悪いもの見たような眼は。事実なんだからしっかり受け止めて次に活かす、それだけでしょ。

「負けは負け、本気で勝ちに行つたのにこれだもん。シマカゼタービン、あなたは強いね」

「…そうかい、俺のことはタービンでいいさ。お前だつて強すぎらあ、これでも走りじゃ強いほうだと思つてたんだぜ？初っ端は負けてたし、自信無くすわ」

「なにそれ、私は一応トレセン学園のチーム・リギル所属よ。弥生でも

勝ってきた、GⅡよGⅡ。それぶち抜いておいてそんなこと言う?」  
「知るか」

「うわひど。ねね、もう一回勝負できる?負けっぱなしは趣味じゃないし、一回は勝たなきゃ胸張って帰れないよ」

「休み入れたらな、一服入れさせてくれ。そういやタイムは?」

タービンが思い出したように計測係のほうに問い返す。私も聞きたい、負けたけど結局どれだけ差がついてたんだろ?

「0.8秒です、0.8秒差!!」

「0.8秒!?!うわ…」

おいタービン、なんでそんな頭のオカシイ奴を見るような眼で私を見る。

## 第四話

一体何が起きたのか、目の前で起きた模擬レースの出来事に東条ハナはまったくもって理解できなかった。

コースを覆い尽くす歓声は互いの健闘を祝福し、勝者であるシマカゼタービンへのエールに満ちている。

シマカゼタービンがトレセン学園からやってきたデイーブインパクトを負かした、それも目に見える完全な勝利で。

歓声の中にいるデイーブインパクトはこなれた様子で歓声にこたえて両手を振り、シマカゼタービンは何かするわけでもなく棒菓子を啜えて頭を搔いているのが対照的だ。

「バカな、一体何が起きた…」

ナリタブライアンの呟きにハナも同意だった。

スタートはシマカゼタービンが負けていたように見えた、そして最初のブロックで確実に彼女の逃げを阻止できる態勢に入っていたはずだった。

あとは消化試合になるのが普通だ、一般校に通っているウマ娘にトレセン学園で実戦を走るウマ娘が負けるわけがないのだから。

だがそれがどうしたことだ、最初のブロックからシマカゼタービンの反撃が始まった。

まるで幽霊のように後ろにぴったりと張り付き、デイーブインパクトを焦らせ、しまいには煽り始めた。

それだけならばまだデイーブインパクトは耐えられただろう、だが彼女はシマカゼタービンをブロックする仕掛けをするつもりで走っていた。

その仕掛けを見抜いたうえでぴったりと合わせて煽っていたのだ、まったく初見の相手のペースを見抜いていくことだけでも驚異的な観察眼をしている。

「Silencio? あのウマ娘、今何したんですか、最初のコーナー、アレは？」

「見てのとおりだと思いますよ、驚きです」

「ぐ、グラスもそう見えたんすネ：Son juguet・n」

そして好きだけ煽った末にいと簡単にあっさりとディープリンパクトを抜いて、最初のコーナーで見せたふぎけた走り。

明らかなオーバースピードで突っ込んでいきながら、レーシングカーがやるようなドリフトでコーナーを一気に抜けていく。

足の動きは今まで見てきたウマ娘とはまるで違った、離れてみていたハナやナリタブライアンたちはすぐに分かったが理解できなかった。

どう表現したらいいのかもわからない、言葉にすればシマカゼターピンは芝の上を滑っていったように見えたからだ。

全速力でコーナーに入り、スピードを殺さずその勢いのままドリフトのように曲がり切ってさらに加速しながらスムーズに立ち上がる。

悪い夢でも見ているようだ、アレはウマ娘ではなく『自動車』の走り方だ。

「ますます強くなってるよ、一般校で何してんだ？あんなの教える先生がいるのかよ」

「居るわけじゃないでしょう。さすがですね、平地ドリフトのキレも上がっていますがああインベタグリップ走行、芸術的とすら言えます。

よほど走りこんでいなければあそこまでの突っ込みはできない、自分の体を良く知ってる証拠ですよ。良い指針ができましたね」

「どうかしてるわ、最終的にはたぶん3センチくらいにまで攻めながら一気に加速入ってる。少し体がブレるだけで死ぬわね、重心が内向きにいつてるから腕持つてかれて次は首よ。

この整備された環境だからこそうちのでもやれるかもしれないけど、あいつはそんなんじゃないだろうし…なんでこっちに来ないのよお」

「それも含めて走り屋なのでしょう、だからこそあの彼も注目しているのじゃないか。こんな面白いもの聞きつけないはずがない」

「参りましたな、あの高橋に根掘り葉掘り聞かれそうだ。これは彼女たちにいい刺激になりすぎてしまう、今夜にでも走りに行かせろとう

るさいですよ」

「ガソリン代やばくなるわね、トホホ…」

朗らかに語り合う群馬トレセンのトレーナーたちの会話も常軌を逸していた。何がいい刺激だ、刺激的すぎる。

しかも使われている単語の意味も分からない。平地ドリフト、インベタグリップ走行なんて走りは初耳だ。

インベタグリップ走行というのはあんな常軌を逸しているとは思えないスピードで、まるで内ラチにびったり張り付いているかのようなコーナーリングの事だろうか。

狂っている、その時点でスピードに乗っていた、見る者が見れば『破壊逃げ』というにふさわしいペース配分を無視した全開速力だ。

それもその中でも見たことのないくらいの速さ、その状態できつちりと曲がり切るなんてどれほど体幹を鍛えて走ってきたのか。

普通ならば垂れるだろう、ここまで来たら足が鈍ってくる、トレセン学園のどのウマ娘も思うはずだ。

だがそんな走りを最後まで続け、デイープインパクトの追い込みすらも千切ってさらに加速して抜けていく。

中央のGⅡクラスでも有力なウマ娘が集う『弥生賞』を勝ち抜いたウマ娘に目測で4バ身差をつけての快勝、何の冗談だ？

何がいけなかった、怪我をしていた？不調を見抜けなかった？それとも相手が何か奇策を使ったのか？考えれば考えるほどに、思考がこんがらがっていく。

「デイープ、大丈夫でしょうか？」

未だに混乱の只中であってわなわなしているエルコンドルパサーを介抱していたグラスワンダーの呟きにハナは熟考から引き揚げられた。

ゴール板の方に目を向けるとすでにデイープインパクトはいない、ゴール板の横に定位置のようにシマカゼタービンが折り畳み式のパイプ椅子に座ってスマートフォンを弄っている。

ゴール板には小型のホワイトボードがかかっており『休憩中』という文字と模擬レース再開時間が書かれていて、その下でゴール板に背

を預けてグテツと座るデイープリンパクトの姿があった。

ゴールした時はすっかりバテていたデイープリンパクトだったが怪我などはなさそうに見えるが、先ほどまでの走りからするとどうだろうか？

「デイープ、ちよつと戻ってきなさい！」

ハナの言葉に一瞬体を震わせたデイープリンパクトはハナとシマカゼタービンを交互に見てから小走りで戻ってきた。

「すみません、ついうっかり」

「デイープ、大丈夫なの？怪我とかはしていない？」

「はい？ええ、大丈夫です！まあ、負けちゃったんですけど…」

「そうか、よかった…デイープ、正直に教えて」

一度つばを飲み込んだハナは本気で走ったデイープリンパクトの感想を聞いてみるのが怖かった。

自分の努力が無駄になったとかそういうことへの怖さではない、何か得体のしれない恐怖が感じられて仕方がなかった。

それでも知りたくなってしまう、トレーナーとしての性なのか、あのウマ娘が彼女にどう映ったのかを。

「強かった？」

「めっちゃ速です、笑っちゃうくらい手も足も出ませんでした。仕掛けは見抜かれるし遊ばれるしで、優位に立てたのは最初だけです。」

「凄いうマ娘ですよ！最後なんかバビューン！って一気に置いてかれちゃいましたもん！でも次は勝ちます、もう次に走る予約もしてきました！良いですよね？」

走った本人がそう認めるならそうなのだろう。信じられないことだが、あり得ないことだが、シマカゼタービンはデイープリンパクトに勝ったのだ。

それも何が起きたのかわからないがデイープリンパクトの顔色はつい先ほどまでとは別人のように晴れやかだ。

何か燻っていたものが取っ払われて、レースなどでは押し込んでいた彼女本来の素である無邪気さが前面に押し出されてきている。

まさかあのウマ娘が彼女の求めていたものを持っていたというの



か、それをこの一戦で叩きつけて彼女の中の燻りを打ち払ったというのか。

圧倒的な負けなら経験させたのだ、シンボリルドルフですら満足させられなかったそれを、あの一般校のウマ娘が？

これはまぐれなのか、それとも実力なのか、やつと気持ちの整理が落ち着いてきたことで自分の中に高ぶる何かが芽生えた感じがした。らしくないことだ、だが、思ってしまった。ここにいるほかの三人はどうなんだ？あのウマ娘はこの3人にどこまでできる？

「そう…よく頑張ったわね。しっかり休みなさい。ねえみんな、走れる？」

「はい」

「モチロンデース！」

「誰からやるんだ？」

やれと言われれば走るだろう、でも今の3人はきつとそうじゃない。自分の担当の事はよくわかっている、彼女たちもあの走りに『刺激』されてしまったのだ。

今自分がやっているのはただ焚き付けているだけだ、それでやってこいと許可するだけだ。らしくないが、自分には今火がついている。

ここで今期最有力候補を一般校のウマ娘に敗北させた拳句におめおめと帰ってしまったら、トレセン学園のトップチームである『チーム・リギル』の名が廃る。

何より、目の前にポロリとダイヤの原石が飛び込んできて気にしないトレーナーはいないのだ。少しでもいい、見極めたいと思つてしまった。

「え!?待ってください、彼女は私が倒すんです!私のです!!」

「まあまあ、落ち着いてディープ。まずは相手の走りを外から見て考えるのも必要ですよ?」

疲れた体で目一杯アピールするディープインパクトをグラスワンダーがするりと背後に回って肩を抑える。

瞬間、ディープインパクトは肩をびくりと振るわせてがくがくぶるぶると震えた。

「せ、先輩がマジだ…なじえ？」

「あらあら…別に怒ってるわけではないんですよー？ただ、ね？」

「不転モード!？」

オーマイガ！と思わずタイキシャトルになるデイープインパクトをしり目に、ハナは手持ちのタブレットを起動し群馬トレセン学園のデータをもう一度さらう。

できればこの生徒であってほしかった、が生徒名簿にはやはり名前はない。その代わり、練習映像が一般公開されている中に見つけた。

どれもツバキプリンセス、ホクリクダイオー、ノルンフアングを相手にした模擬レースの記録映像だ。

どうやらツバキプリンセスやその友人たちが入学したときから、時折彼女たちの練習相手として呼ばれては暴れていたらしい。

しかしあまり参考にはならなそうだ、残っているのは短距離レースの物ばかりでいい勝負をしているがそれだけで見るべきものはない。

あのふざけた加速をしているような場面は残っておらず、逃げを得意としている以外は分からない。

むしろ相手のほか3人の追い上げの凄さが強調されているようだ。

「エルコンドルパサー、行ってこい」

「いいんデスカ？勝っちゃいますよ、ブライアン先輩？」

「それならそれでいい。だが油断するな、本気で潰せ」

「了解デース！あとで文句言わないでくださいネ！」

「せ、せんぱい、やめてください、おねがい」

「デイープ？」

「ピイツ!!」

そして次のレースはすぐに始まった、シマカゼタービンの怖ろしいスタミナは本物なようでエルコンドルパサーがデイープインパクトは疲れているから少し待ってほしいと伝えると、20分のインターバルを置いて模擬レースとなったのである。シマカゼタービンは少し渋ってはいたが。

距離は同じ芝2000、右回りでのタイムアタック。今度は中央で

も怪鳥と名高いエルコンドルパサーとの一騎打ちとなればさらに盛り上がるというものだ。

配置は同じ、シマカゼタービンが内側でエルコンドルパサーが外側だ。

先ほどとは違い、モータースポーツ部のウマ娘が行うスターターピストルの合図と同時にシマカゼタービンとエルコンドルパサーが一気に駆け出す。

少し走りシマカゼが逃げ特有の加速を始めたところでその後ろにするりとエルコンドルパサーが入って追走を始めた。

卑怯とは言わないだろう、事実その動きに群馬トレセンの生徒もトレナーも沸き立っている。本気で戦いに行ってるのだとわかるからだ。

「あ、ダメね、タービンにそれは」

近くで見えていたツバキプリンセスのちよつと落胆したような呟きがハナの耳にはやけに大きく聞こえた。

それがどういう意味なのか、それはシマカゼタービンとエルコンドルパサーが最終コーナーを抜けたときにわかった。

「エル？」

「嘘だろ」

ナリタブライアンの焦燥に駆られた、けれども己の高ぶりを抑えられないうめきはハナの気持ちを代弁しているように聞こえた。

シマカゼタービンの後ろを取る先行策を取ったエルコンドルパサーは最後の直線に入ってもまだシマカゼタービンの後ろから動かない、否、もう動けない。

涼しい顔で巡航するシマカゼタービンの後ろで、エルコンドルパサーの表情は鬼気迫る表情になりながら追走するだけで精いっぱいという状態だった。

逃げ足を差すために足を溜める、そのためにエルコンドルパサーは彼女の真後ろを取ってスリップストリームを使いながら相手のスタミナ切れを狙ったのだ。

だが誤算があつた、相手は全くペースを乱すことなくエルコンドル

パサーの追走を受け入れて完全に無視、そのまま加速をかけた続きで好き勝手に振り回したのだ。

最初の直線までは速いが普通の逃げだ、だがそこからどんどんペースが上がって二本目の直線中盤で先ほどデーパーインパクトと戦った最終コーナーほどの殺人的なスピードに乗って巡航し始めたことが追従するエルコンドルパサーには大きすぎる負担だった。

その巡航速度が目算で時速70kmあたりとあまりにも速すぎるのと、そしてそのペースについていこうとしたエルコンドルパサーは最後の追い込みに使う体力を完全に失ってしまったということだ。

また途中のコーナーは群馬トレセンのトレーナー曰く『インベタグリップ走行』という超インコース高速走法、狂ったような攻めに付き合わされたエルコンドルパサーの恐怖は計り知れず精神面も大きく揺さぶられただろう。

漏れ聞いた話では最終的には内ラチと体の間隔を3センチほどまで体を寄せる常識外の超インコース走行なのだ、そんな走りをするウマ娘はそうそういない。

「アアアアアアッ!!?」

そして最後の直線、限界ながらも食らいつかんとしたエルコンドルパサーが自らシマカゼタービンの背中から外側に飛び出し抜きにかかると。

スリップストリームの恩恵を失ったエルコンドルパサーは避けていた風圧に煽られ、疲れ切った体では抗えず失速。瞬間、デーパーインパクトにも見せた最終加速で一気に置いて行かれる。

結果は5バ身差の敗北、中央の怪鳥が突風にあおられて地に落ちた。

「後ろにつくのは良いけど無理はいかんぜ、他人のペースに合わせてるってのは案外きついもんだ」

何もかも使い切り天を仰ぐエルコンドルパサーに、先ほどよりも汗をかいているとはいえケロリとしたシマカゼタービンの言葉はやや辛辣である。

東条ハナは同意し辛かった、間違いじゃないのだが中央シリーズの

GIをいくつか取ってるウマ娘に掛ける言葉じゃない。

「ヤベーです、途中から速度の感覚無くなったデス、コーナー入って横見たら内ラチが目の前でビュンビュン言ってるデス。」

前見るとシマカゼと内ラチの間にほんの少ししか隙間ナイデス。同じ動きしないとすごい風圧で煽られて内ラチに突っ込みかけました：ついてかないと死ぬって思ったです。

二回目は記憶ナイデス、ナイデス、ない、な：ヒイ!？」

戻ってきたエルコンドルパサーの最初の感想がこれである。東条ハナはますます背中恐怖と胸に走る高ぶりを感じた。

恐ろしいスタミナと根性だ、おそらくまだまだ使い切っていない。少し時間を置けばまた走れるというくらいだ。

体力を完全に使い果たして生気を失ったような眼をしたエルコンドルパサーにより奮起し、次に挑戦したのはグラスワンダー。

「わたし、私！わたし！！次私！！」

「ダメデス、イッテハダメデス、死にます」

「最後だけ怖い！」

回復したディーパックトがごねる、が回復しきっていないエルコンドルパサーに抱き着かれて延々と止められる。

マスクをしているのにすっかり素が出ているから重症だ。ディーパックトには悪いが少し我慢してもらおうしかないだろう。

「えー：今度はあんたかい？ディープは？」

「すみません、ちよつとあれで」

「：あー、しょうがないね。じゃ、やるか」

グラスワンダーとの対戦、授業の関係で周囲の生徒やトレーナーたちの姿はまばらになったが皆興味津々だ。

3度目の挑戦、シマカゼターピンは内に、グラスワンダーが外に立って合図を待つ。グラスワンダーの表情は一見穏やかだが、背中には何かオーラのようなものが見える。

可愛い後輩が負け、実力確かな同期が完敗、そんな強敵を相手にグラスワンダーは燃えているとハナは感じていた。

残っていた生徒に頼んだスターターピストルの音が鳴る。瞬間、今

度は珍妙なレースがスタートした。

「邪魔するならあっちいくから、じゃ」

エルコンドルパサーの失敗を再現せず、ディープリンパクトと同じように逃げ足をつぶす選択に出たグラスワンダーだったがここで躓いた。

それを見たシマカゼタービンがスタートを故意に出遅れて後ろを取り、肩透かしを食らったグラスワンダーに一言置いて外ラチに向かって進路を取ったのだ。

そして一人外ラチギリギリに陣取ると、そのまま勝手気ままに走り出した。勝負を捨てているわけではない、内ラチに沿って全力で走るグラスワンダーの背中を捕らえた目は遊んでいるようには見えない。突然の進路変更とそのふざけた走りに一瞬気後れしたグラスワンダーだったが、すぐに前を向いて加速を始める。

何か企んでるとは感じていても傍目はどう見ても勝負を捨てているようにしかハナには見えなかったが、その予想は当たっていた。

序盤から中盤にかけてはグラスワンダーのほうが先行していた。だが中盤から様相が変わってしまう、差しの走りではないまでもラストパートの体力を残すグラスワンダーの足は中盤で安定した速度を保って溜めて走る。

その後ろから、外ラチギリギリをまんべんなく使って思いつきり加速をつけて飛ばしてきたシマカゼタービンが猛追。彼女もさすがに表情を厳しくしていたが、それでも異常すぎた。

グラスワンダーよりも長い距離を走って追いついてきたのだ、なのにその速度は落ちるところか乗りに乗っており足取りも全く衰えがない。

その恐ろしい猛追に気付いたグラスワンダーもすぐに速度を上げるがもう遅い。

延々と加速して速度の乗ったシマカゼタービンは外ラチに沿ったまま最終直線でグラスワンダーを追い抜き、速度を緩ませることなくそのまま2バ身差でゴールを突き抜けた。

「別にルール違反じゃないだろ、コースの中を走ってるし誰の邪魔も

していないし…絡まれたら面倒そうだったしな」

「ええ…う…えー…!?!」

すっかり意識されていたのにまったく相手にされていけないような勝ち方をされてはグラスワンダーも戸惑いを隠せない。

これも逃げの戦術と言えるのか？確かに逃げだ、相手の行動を見てさっさと迂回して避けたのだから逃げといえれば逃げだ、普通はしないが。

グラスワンダーも負けた。何もできないままで。ハナは思わず腹が痛くなるように感じた。ドツボじゃないかこれは？

「…やるじゃないか、これは、いいな!!」

「なんでそんないい笑顔なんかねえ!?普通に走れば勝てただろ!?!」

「そうは思わん」

「ええ…」

4戦目、ナリタブライアンはシマカゼタービンを外ラチに沿うコースで猛追する。

スタートと同時にナリタブライアンがブロックに出たのを回避して外ラチに向かうシマカゼタービンだったが、それをナリタブライアンが追いかけたのだ。

そしてエルコンドルパサーのように背後を取ってスリップストリームを用いて体力を温存しながら追走、しかし使い切る前に勝負に出るつもりで仕掛ける。

自分がバテる前に差し込んで自分のペースに強引に持ち込む、そのつもりだった。

しかしそれを見越したシマカゼタービンがフェイントを仕掛けた、デイープリンパクトも翻弄されたという読めないフェイントにナリタブライアンも機を逸してスタミナを使い果たして凡走。

延々とシマカゼに先行されたまま走りぬいて1バ身差で敗北した。シマカゼタービンの言う通り、超大外に逃げたシマカゼタービンのことは放っておいてナリタブライアンがインコースを全力疾走すれば勝てたかもしれない。

しかしナリタブライアンがシマカゼタービンを追った理由もハナ

には理解できた、あの戦術は一度成立すると妨害する手立てがほとんどないのだ。

「何しろ物理的に距離を開けて敬遠するコースであり、対処するなら同じ土俵に上がるしかない。無視すれば持ち前のスタミナとスピードで強引に勝ち筋に上がってくる。」

「分からないのだ、ナリタブライアンの脚力をもってしても埒外の速度で爆走してくるあのウマ娘から逃げきれるかどうかが。」

「それをわかっていただろうナリタブライアンは同じ土俵にあえて乗り込んだ。それすらも相手は想定していたのも怖ろしい話だ。」

「そして負けて火が付いたナリタブライアンは、肩で息をしながら実にイイ笑顔をシマカゼタービンに向けて負けを認めている。」

「こういう走り方をしてくる相手は今まで中央にはいなかった、初めての相手だ。あのナリタブライアンが燃えないわけがない。」

「タービン、もう一本だ!」

「先輩ずるい!次私、わーたーしー!!」

「ムガアーーー!負けっぱなしは悔しいです!!シマカゼタービン、R e i d e s a f ・ o デス!!」

「ノー!ネクストミー!」

「私も負けてはいられないですねえ…再戦をお願いします」

「ダメ!私が先!!さーきでーすー!!」

「なにこれ、増えた?うそだろおい…あ、抱き着くなディーブ!」

「あ、意外とおっきい」

「顔をうずめるな…」

「ディーブインパクトにがつつり抱き着かれ胸に顔をうずめられてがつくり肩を落とすシマカゼタービンの背中がすすけて見える。」

「さすがに何度も走らされて疲れているのだろう、そこまでしてやっとな疲れくるスタミナというのもおかしな話だが。」

「あいつ、また精度上げてきたわね…というかますますスタミナついてんじゃないの」

「ふと聞き覚えのある声がして顔を向けると、ツバキプリンセスがスマートフォンを見つめながらばやいていた。」



先ほどの模擬レースの映像を見ているらしく、その表情は悩ましいように見えて浮かれているような感じがする。

それはお友達が完勝したのはうれしいのだろうけども、と複雑な気分になったハナの目に真つ二つに切った『emperor』の文字ステッカーを封入したような透明なアクセサリーが目に入った。

ツバキプリンスのスマートフォンカバーにくつついていてゆらゆらと揺れている。

それを見てハナはふと気になった、アレはどこかで見た気がする。どこか身近な誰かが持っていたような…

(いや。そんなことはない。それより…)

つい熱が入って引っ込みがつかないうちの連中をどうしようか、ガラにもなく熱くなってしまうことを恥じる東条ハナであった。

## 第五話

俺は誰かに抱かれています、古い記憶だ、よく覚えていない、誰かが俺を憎々しげに見つめている、見慣れない男だ、なんか懐かしい。

空は晴天、無駄に青い、誰かが俺をどこかに置く、よく聞こえない捨て台詞を置いて去っていく。懐かしい匂いがする場所だ。

お酒の匂いだ、さっきの誰かから匂っていた不快なのじゃない、嗅ぎなれた懐かしいあの香。

誰かの足音がする、足音はすぐそばまで来て、抱き上げられ：鯉のぼりをバックに目覚まし時計になった誰かさんの顔が眼前に飛び込んできた。

「…かんどーのシーンがだいなしだぜ」

おのれ目覚まし、うつ伏せで寝たままの体勢で電子アラーム音のするほうに腕を伸ばしてアラームを停める。時計を持ち上げてみれば午前4時、仕事の時間だ。

眠い、夜更かししたわけじゃねえけど朝は昔からそこまで強いわけじゃねえんだよ。

ん、背中が重い。この感じはコマツだな、いつの間に上りやがった。「んんツ…ふひくん…おつといかん」

ベッドの上でついつい猫みたいなの四足の背伸びをしてしまった、つい四足歩行だった頃の癖が。コマツをとりあえず下ろす。

「ぶぎゅ…」

「悪い、降りてくれ」

背中に手を回して首筋を掴んで下ろすとコマツが眠そうに俺を見上げてくるが、謝るとすぐそっぽ向いて俺のベッドにまた潜り込む。

前と違ってちよつと淡泊な感じするなコイツ、今の俺にはちよつどいいんだろうけど。

ベッドから降りて背伸びをしながら何となく見回す。どこにでもある男子高校生の一人部屋って感じ、整理整頓はしてるけどな。

車の雑誌に漫画にエロ本…こいつは隠す。本棚にはお酒の書籍に

教科書、机の上には作りかけのカスタムエアガンとミリタリー雑誌、まるきり人間時代が再現されてる。

ちよいと違うのは部屋の隅、化粧台と姿見があつて女性ものの雑誌やらコスメやらが唯一存在を許される空間だ。

お袋が気にするから一応あるけどここだけ異空間。なんとなく姿見の前に立つて、今の俺の姿を再確認してみた。

普通じゃありえない青い髪、右青左赤のオツドアイ、きりつとした目つきの美少女な顔立ち、そして頭にくつついた馬耳と尻の部分にふさふさ尻尾。

緑チエツク模様のパジャマ姿のケモミミ美少女がそこにいる、俺である。馬の次はケモミミ美少女、ウマ娘ときたか、狂ってやがる。

しかも性別まで女でボンキュッボンのいい体、馬の時だつてオスだつたのに女だぞ、どーしろつてんだ。

「うむむ…やっぱりでかいほうなのか」

ウマ娘つてのは顔も体も美人で美形なことがほとんどだから極力意識しないでおきたかつたが、デイープに言われて再認識しちまつた。

確か90くらいだつたはず、服着てると目立たないけどやっぱでかいほうなのか…ウマ娘だと俺よりでかいやつ見るんだけど。

でも確かに馴染みの中じゃデカいほうだし…ぐぬぬ、昔は憧れたものだが我がモノとなるとやっぱり何も感慨が浮かばん。

デカくていいことはあんまないしな、服は選ばにやならんし下見えんし男どもの視線も…俺ホモじゃないから尻が寒くなるねん。

「うむむ、改めてみるとやはり不思議…」

パジャマを脱いで薄緑の下着だけになる、うん、ブラもショーツもさすがに慣れたわ…着実に男が死んでるのは考えんでおこう。

鍛えているのにすらつとしたスポーティーモデルボディ、腹筋少し割れてるかなくらいで女性的なまんま、がつつりした感じじゃない。

軍人みたいなマッスルボディには到底思えんのに、これでも体の出力はやばいんだよな。足なんか簡単に人殺せるし。

力加減を覚えるのが苦手なウマ娘もいるらしい、俺はそういうところ

完璧だけど。俺自身は特別なことしてる感じしないけどなんか褒められる。

つと、考え込んでちゃだめだな。朝の仕事があるんだ、早く着替えないと。パジャマは洗濯籠に押し込んで、学校の制服に着替える。

縁に白いラインの入った藍色の襟の白地の上着、赤スカーフ、藍色の膝丈スカート、形式はスタンダードなセーラー服だ。

一通り着たら、スカートの下にはスパッツを履く。スカートダメなんだよ俺、制服だから仕方ないけど。

「あ、カギカギ」

勉強机の横に掛けてあるキーケースから真つ二つの『emperor』のステッカーを封入した透明なプラ板アクセサリを付けた車のカギを手にとってポケットに突っ込む。

その時、勉強机においてある写真立ての写真が目に入った。中学時代の写真だ、ツインターボは入学したてだったが。昨日置きっぱなしにしてたか。

見慣れた無人パーキングエリアをバックに『emperor』のステッカーが貼られたボロボロのリアウイングをトロフィーのように掲げるツインターボ、その右に俺とホクリクダイオー、左にツバキプリンセスとノルンフアング。

全員手足に包帯を巻いて体中に湿布張りまくりと痛々しいが、その顔はとても自信満面の笑み。

この時はみんな筋肉痛で死にかけてたんだよなこれ、でもこれだけは撮りたくてみんなで死にそうになりながら集まった。

子供のころから暇を見つけては芦名山を駆け巡った5人の最高の思い出、今までの下りで一番の戦果だな。

「確かこれもつてくとか向こうでごねてたんだっけか？府中の部屋に飾ってたりしねえだろーな？」

まさかな、いくらツインターボでもランエボのリアウイングを持ち込んだりはしないだろ。あっちのミスでもげたとか見た目じゃわかんないし。

とりあえず写真は定位置に戻して、これで良し。部屋を出ると静か

に家の中を抜けて玄関を出る。さすがに兄貴と姉貴、お袋はまだ寝てるからな。

外を出れば昔懐かしの瀬名家の庭。さすがにまだ3月だから少し寒い、足早にそのすぐ横に見える車庫に足を運ぶ。

暗証番号式の車庫の勝手口を開けて中に入って電気を入れると、いつもながら壮観な光景が明かりの下に照らし出された。

手前から親父のプリンタートレノAE86GT-APEX、兄貴のプリンタートレノAE101GT-Z、姉貴のアルテツツアRS200、お袋のパツソTRDスポーツM、俺のリアウイング無しWRX-STIがずらりだ。

ダークブルーのWRX-STIは何というか場違い感があるよな、俺もトレノかレビンにすりやよかつたつたままに思う。

状態の良い中古のインプレッサが見つかんなくて、常用することも考えたら実用的で維持が楽なヤツって考えになったから奮発して新品のWRX-STIにしたのは後悔してないけど俺だけゴツイ。

ま、今更考えても仕方ないけどね。俺もこいつは気に入ってるしな、しばらく四足歩行してたせいか4WDが馴染むこと馴染むこと。ガレージのシャッターを開けてから運転席に乗り込んで、クラッチを踏み込んでキーを回しエンジンをかける。

EJ20は今日も良い音だ、力強くエンジンの回る振動が前から尻からびりびり来る。

バケットシート of 座り心地もいい、最近新しいのに変えたから硬かったがやつと馴染んできたみたいだ。

WRXを外に出して、シャッターを閉め直してから車を会社の倉庫のほうに回す。家と会社は繋がってるから楽なんだよな。

途中、前の世界で俺の馬房があった場所の前を通る。今は何も無い空き地だ、なんか寂しいな。ここも思い出がたくさんあるから。

そんなことを考えてるともう倉庫の前だ。もう親父が、瀬名茂三がうちの主力製品『ウマ練り』の入ったケースを準備してる。

この世界でもウマ練りは健在、いや俺の馬生で培った技術でより改良されたこいつは進化してるぜ。つまりもつとうまいのだ。

「おはよう親父、今日の配達は？」

「おはよう、いつも通り芦名プリンセスホテルな。ほら」

「さんきゅー」

運転席のスイッチを押してトランクを開けると同時に親父がプラスチックコップを差し出してくる、中は水だ。それを受け取って少し待つ。

後ろのトランクにウマ練りの入ったケースが入る振動がして、トランクが閉じられるのを見てからドリンクホルダーに置いた。

シートベルトを締め直して胸の位置を調整していると、後ろから戻ってきた親父がまた運転席を覗き込んできた。

「しかしお前も一端の走り屋になってきたじゃねえか。免許取り立ての頃とは大違いだ、芦名じゃもう敵なしだろ？」

「親父や兄貴にはまだかなわねえよ、ダイオー達が居たら解らねえしな。俺は隙間にうまく嵌っただけだ」

芦名の山を5人で駆け回った時はもつと騒がしくて面白かったもんだ、昔は無邪気だったこともあるがな。

それに外を見りや有力者はごろごろいる、妙義山ナイトキッズとか赤城レッドサンズの連中とか強いし。

親父の友達だってヤバイじゃんよ、あのハチロクに勝てる気しねーわ。

「何言ってやがる、伊達にその足で暴れてたわけじゃねえだろ。どうしたんだ？今日はテンション低いな」

「そうか？この前トレセンで暴れすぎちゃってさ。知ってるだろ？やりすぎたと思ってるさ」

思い返せば少し熱が入りすぎたかもしれない、こっちのディーブと会って少しテンション上がったな。

あのかそランエボ2軍どもをみんなでボコボコにした時はこうはんならなかったんだけどな。ま、キレてたし。

「中央の連中を撫で斬りにしたんだろ？いいじゃねえか。どうだ、面白い奴はいたか？」

「撫で斬りって…そりゃ勝ったけど言い方悪くないか？」

「いいんだよ、で？」

「ディープインパクトってやつ。アレは天才だよ、間違いないな」

あつちのあいつとは違うがやっぱり普通に強い、ほかの連中も強かったがあいつは初見で俺を自分の土俵に上げてきやがった。

あとが少しお粗末だったが、やつぱりどんな姿だろうがあいつはあいつだわ。怖いぜ、ゾクゾクしてくる。

「そうか。じゃ、行ってこい」

「いつてきます」

親父が窓から離れるのを待って、アクセルを踏んで発進させる。家から配達先の芦名プリンセスホテルまではそう遠くない。

通い慣れた芦名の峠道をあがつていけばすぐ、普通に行けば市街地10分で峠が20分の片道30分程度だ。俺は20分で行くけど。

やつぱりこいつに乗ると気分がいい、アクセルを踏み込むたびに感じるエンジンの振動が『走らせてる』って感じがする。

自分の足で走るのも気持ちいいが車を走らせるのはまた別の意味で気持ちがいい。

「やて…」

朝の市街地を抜ければ見慣れた芦名峠の入り口だ。朝っぼらのこの時間に走ってるのは俺くらいなもんで一般車はめったにいない、走り屋も帰る時間だから大体9キロから10キロのコースを独り占めだ。その先の道は車増えるからダメだけどな。

気合入れていこう、シートベルトを確認してもう一度周りを確認しながら登りに入ってすぐに、アクセルを踏み込んだ。

体を押し付ける軽いG、生身の時は到底できない速度で上がる上り坂だ。

最初のコーナーがすぐに見える、シフトレバーを操作しながらアクセル踏みっぱなしでハンドルを切る。

頑丈なだけで質は普通のタイヤを気遣いながら、インベタに限りなく寄りつつグリップ走行でコーナーを曲がり切る。

コップにも目をやるが水はこぼれてない、うまく車を制御できてる証拠だ。良い感じだ、荷重移動もスムーズだしちゃんとタイヤが地面

を掴んでる。

次のコーナーも、その次も難なく抜ける。ここまではまだいける、だが上に行けば行くほど難しくなる。

ついにL字カーブ、この芦名の特徴的な道だ。行きも帰りも下りと登りが一度に来るから感覚がブレやすい。

長さも非対称で上は短くゆるい、下は急勾配で長いから実は上より高く上る。エンジンからコーナーリングまで塩梅がめちやくちやむずい場所だ。今日はいけるかな？

アクセルを緩めて減速、坂道を下りながら速度を調節、不用意に体を振らないように、丁寧な曲がって登りでアクセルを開けて急な減速を打ち消して上りに入る。

「あー…また失敗だ、うまくいかねえなあ」

コーナーを抜けて上り坂に入る瞬間車体がブレたような感じがした。コップを見れば縁に水が一筋、わずかに垂れてる。派手に零してるわけじゃないけどだから悔しい。

下りから登りに入る直前、どうしてもアクセルを踏み込んで運転が荒くなっちゃうんだよな。

足でならもつと細かい調整できるんだが、まだまだ先は長いぜ。親父や兄貴ならここじゃ零さねえ、まったく俺はまだまだ下手だ。

結局、目的地の芦名プリンセスホテルの周辺まで付くのには3滴も水が溢れちゃった。昔みたいにびしょびしょにならない分考えさせられて悔しすぎる…

ままならんもんだ、芦名山の頂上にある芦名城周辺の観光街の静かな街並みをコップの水を飲み干しながら流し、気を取り直しつつ目的地の芦名プリンセスホテルの裏門まで車を転がす。

「瀬名酒造です、お酒の搬入に上がりました」

裏門の守衛所の前で顔を出して、発行されている搬入許可証のカードを見せる。ホテルの人たちとは顔見知りだけど仕事だからね。

守衛の警備員さんも見知った人だけど搬入許可証をカードリーダーにしつかり当てて確認してから中に入れてくれる。

そのまま搬入口まで直行し、そこで車を停めてトランクからウマ練



りが入った金属ケースを2往復に分けて運んで搬入。

ウマ娘パワーはすげえよな、一気に運べてすぐ終わるもの。

「あ、良かった。今日はあなただったのね」

搬入が終わって一息ついていると、聞き慣れた声がして搬入口のほうを振り返る。そこには群馬トレセン学園の制服姿で少し大荷物のツバキプリンセスが。あれ？なんでここにいるんだよ。

「ツバキ、なんでこんなところに」

「なんでこんなところって、実家にいるのが変なこと？」

そりゃここはお前の実家だろうがね、こんな朝っぱらにいるのはおかしいしそもそも自宅は近くに別にあつてホテルじゃないでしょうが。

そもそも今日は週末じゃない、平日である。お前は群馬トレセン学園の学生寮にいるはずだろうに。

「お前は寮に入ってただろ、今日いるのはおかしい」

「今日は府中に行く用があつてね、お土産とアドバイス貰いに来たのよ。芦名駅まで送ってくれない？」

「構わんよ、乗りな」

ちよつと駅まで足を延ばすくらいなら問題ない。ツバキを助手席に乗せて、WRXのエンジンを再び始動する。

助手席もバケツトシートだけどツバキも慣れてるから全く戸惑わない。来た道を引き返して観光街を抜けて山を下りながら何となく気になって問いかけた。

「で、なんで府中に？」

「中央からのスカウトよ、うちに来ないかって」

「ほー、この前ので目を付けられたか。演技がバレたな」

今のこいつが楽にデビューに千切られたなんて、目を付けられないように演技してた以外考えられんもんな。

伊達に一緒に走ってない、初戦じゃ負けでも次とかなら互角には渡り合えたはずだぞ。

「行くのか？」

「断るからお土産とアドバイスを貰いに来たのよ、じやなきやこんな

朝早く行くもんですか」

あ、こいつ始業と同時に突撃してきつさとお断りしたら東京見物するつもりだな。長々と施設見学とかできない時間を狙ってるんだろ。

ま、普通に行くなら自分の車で行くだろうしな。となるとツインターボにも会えねえな。下手に知らせたらあいつは絶対隠せない。

「さすがプリンセスクラウン。連中、面食らうだろうな」

「あなたにも手を伸ばしてくると思うけど？」

「行かねえよ、俺はそういうのに興味はない」

レースはともかくあのウイニングライブとかいうの、あれ絶対やりたくないし。滅茶苦茶走った後に踊らされるってなんの拷問？

普通に表彰式して終わりでいいんじゃないやねえの？そもそもの踊るの？これがわからない。

レースも勝負服とかなんか妙な服あったりするし結構意味わかんないけど、ライブが一番意味不明だわ。

「そうよね…ねえ、どうしてトレセンに来なかったの？」

「そんなの進路が違っただけの話だろ」

中学進学時から俺たちは別々だ、ツバキたち3人は群馬トレセン学園に、ツインターボも少し後に府中のトレセン学園に、俺は地元の中学から高校へ。

仲のいい友達や従妹が別々の進路に行くなんてよくあることだ、それで疎遠になるならまだしも俺たち結構遊んでるだろうになんてそんな寂しそうな眼をする。

「私はあなたもトレセン学園に入ってレースを目指すものだと思ってた。あなたは私たちの中じゃ一番速くて強かった、何より走るのが大好きだった、当然トレセン学園を目指すと思ってたのよ？」

「走るのは好きだよ、足でも車でもな。お前らと違ってよく勝負してるじゃないか」

「私はレースで走りたかった、競い合いたかったわ。みんなそう、今だってあなたがこっちに入ってくるのを待ってる。

ローカルでもトウインクルでもどこでもいい、どこかであなたと戦える日が来るって、あなたとライブを踊れる日を待ってるの」

踊りたくねえ、歌が音痴とかそういうんじやねえけどああいうのはやりたくねえ。知ってるはずなのにこの無茶ぶりですよ、あははは。「走るのに興味だ、俺の生きがいだ。だから仕事にはしたくない、知ってるだろ?」

俺は酒造の道に入るつもりで勉強してる、その進路にトレセン学園は入らない。ローカルシリーズもトウインクルシリーズも意味がない。

俺は走るのが大好きだ、車で走るのも、足で走るのも、どっちも捨てられない。けどそいつは趣味なんだ、仕事じゃない。

酒を仕事にしたいのは本心だ。親戚に子供を押し付けて蒸発しやがった実の両親の代わりに俺を育ててくれた親父たちへの恩返しもあるが、前世の知識をもっと生かしたいしな。

「そうよね、あなたは昔から変わらない。町内大会でもライブは絶対拒否だったものね」

ウマ娘のレースと名の付くものには公式は大体ライブが付きものっていうのがそもそもおかしいだろうよ。

まあ町内大会とか小さなやつはやりたくないなら拒否れるからいいけども、デカイのだとそうはいかねえ。

「そういうことだ、心配しなくても俺はここにいます。ところでツバキ?お前、この前に言ったこと覚えてる?」  
「え?」

「前に言ったら、足回り変えたから付き合えってよ」

この前は結局、夜まで走りまくらされたからな。全員千切ってダウンさせたけど俺もダウンで車中泊、おかげで夜の予定は台無し。

そして次の日は筋肉痛で運転して帰るのもやっと、前よりひどい。当然お前を連れていけなかったからね…だから付き合えよ、試運転。

「そろそろコースに入るから、そこから攻めてくぞ」  
「ちよ!?こんな朝っぱらから!?待て待て待て!」

ツバキのヤツ、相変わらず助手席だこのザマ…いや、それ言ったら大体そんな反応なんだよな、なんで?

自分で運転するときはキリツとしてんのにな。シートベルトがっ

つり締め直して、バケットシートに引っ付いて固定してるし。

「お土産なら心配すんなって、潰したりしねえから。さ、行くぞ」

「解ってるけど！うげえ!!」

パーキングエリアの横を抜けてコースに入ると同時にアクセルを  
一気に踏み込んで加速、一気に速度を上げると速度超過チャイムが2  
回だけ鳴る。

ポン付けした中古のキンコンチャイムだけど、やっぱり音ですぐに  
どれだけ出したかわかるってのはなかなかいい。

「ひい…」

さてまず右コーナー、ここはフットブレーキを一瞬軽く入れてタイ  
ヤを滑らせてから流してからアクセル全開でドリフトに入る。

うん、良い感じで滑ってる。タイヤが食いつきすぎてない、音もい  
い感じで不用意に削れてない感じだ。

次は左、うん、ブレがない。ハンドルも前よりいい感じ、ちゃんと  
思った通りのステアリングが切れるしラインを作ってくれてるな。

さて次の右コーナーも同じように…ってなんだよ、ツバキの奴なん  
でこんなところで目をひん剥いてやがる。悪戯してやるか？

「Gが…またななめからきよれつにい…ヴェ!」

次の右コーナー、勢いよく入りながらハンドルを切ってドリフトに  
入りつつ、安定させてからハンドルから両手放してスカートのポケッ  
トに入れてるココアシガレットの箱を探る。

大丈夫、このコースならステアリングはブレないからコーナー終わ  
りで自然と立ち上がれる。そういう簡単なライン取ったから。

4WDのドリフトは難しいっていうけどやっぱ俺には合うわ、なん  
か楽、FRとかFFだところはいかねえし。

ほら外の景色が絶景だぜ、目の前を流れる雑木林に助手席側は迫る  
ガードレール、その向こうは空中で街が見える、いい景色だ。

「ちよ、バカー！何やってんのお!!」

「チョットクチガサミシクテ」

「ワザとすんなあ!!」

情けない悲鳴を上げるツバキ。やれやれ、これが芦名の走り屋で上

位ランクに入るプリンセスクラウンだといつても誰も信じねえだろうなあ。

ココアシガレットの箱から棒菓子を一本口に咥えると同時にコーナーが終わって車が自然と立ち上がる、それと同時にハンドルを握るとツバキがまた情けない声を出す。

自分で運転するとキレイのいいハンドルさばきでえぐい攻めをバカスカする癖になんだその声、鈍ってんのか？

「うん、完璧。さて、もうちよつと本気で行くか」

「も、もうやめえ…」

「だーめ♪」

なんか面白くなってきた。次はインベタグリップ、アクセル踏んでぐいぐい行こうか…やっぱやめた、今日はドリフトやっていこう。さーて、ふりまわすぞー。

## 第六話

朝、通学路である。俺も今生は立派な女子高生、前世のような自由気ままライフの前に学業が必須。

瀬名酒造は街の外れにあるからちよつと学校からは遠いけどそこはウマ娘、足速いって便利よね、普通に少し走るだけで通学圏内だし。ちなみに学校の成績は上の下だから出来は良いほう、少なくとも先生からは目立たん安定飛行をずっとしてる。

さすがに前前世の学校とかうろ覚えだから色々覚え直してるし、元々平均ちよつと上の成績だからツバキたちと比べたらいつつもドベだった。

あいつらの成績はトップクラスだったからな、今更ながら自分はノーマルブレインなのを実感したぜ。

なので配達の後で眠い目をこすりながらの学校近くの住宅地を徒歩登校中である。いや今日はマジで眠い、朝からはしゃぎ過ぎたかね？

「おはよータービン、今日も眠そうだな！」

のんびり歩きながらあくびをした一瞬のスキを突かれた、背中に痛みが走りいい音が鳴り響く。

「あだあ!? やりやがったなコマツ!!」

「コマツ言うな! 私は小町だ!!」

後ろから元気よく平手をかまして走り抜けた茶髪と同級生、小塚小町。略してコマツ、うちのあいつと同じ愛称である。

種族は普通に人間、幼馴染の一人。人間だけどウマ娘の俺に一撃かませる位ウマ娘慣れしてる凄いヤツ。

「ったく、おはよ。今日も元気でちっさいな」

「うっせーうっせー! まだまだでかくなるんじゃない!」

「そうか、良助さん曰く最近は測りもしなくなつたようだけど?」

「ぬぐう!」

言葉にならないうめきを上げて隣に並んで歩きだす身長140センチちよいのミニサイズ、体軀も準ずるツルペタストーン。

で、口がこれだからすげー親近感あるんだわ。ちなみにこいつの兄貴が良助、うちの兄貴である敏則とダチだからその縁なんだよな。

「おのれ、このデカチチめ。女の眼にも毒なクールぶった我儘凶悪ボデイめ！」

「好きでなったわけじゃねーわ」

「歩くだけでゆさゆさしてるし、ちよりやあ！」

誰も見てないからって伸ばしてきた小町の手をはたき落す。

「残り僅かな二年生で警察送りになる気か、高校三年生は留置所で迎えさせるぞ」

「もうそんな年なんだねえ、高二が終わって高三。ついに高校最後の夏か」

おいおい、連休も終わって早々に夏休みとは随分と飛躍してんな？

もうすぐ高三とくりや大学受験だろうに。

「まだまだ18の夏は先だぜ、気が早いにもほどがあんだろ。というか受験どうするんだよ」

俺は専門学校通いながらうちで働くけど、お前は群馬大学目指してなかったっけ？浮かれてると落ちるぞ、落ちたって会社に口利きはしねえぞ。

「受験なんて恐れるに足らず、それよりついに免許取れる年になったからね…今年こそ男を捕まえてやる！」

そのやり方がかっこいい車に乗ってナンパとかどうも男子高校生のやり方なだけど意識してるかこいつ？しかも世代的に古くね？

そのせいでこいつの学校でのカテゴリーは普通に男子高校生区分されてるんだけども…ダチも男友達多いし。

「だからお付き合いよろしく」

「はいはい、で、何買うつもりだよ」

「はえーわ、まだきめてねーわ。資格オタク一家のウマ娘みたいに金はない」

ちなみに俺は免許自体は中学3年から持ってた、ウマ娘専用の限定

訓練用免許というやつ。

ウマ娘つて足速いだろ、それが怖くて走れないってやつもいるから速さに慣れるための訓練に限定して車を使えるようにしたつてのがこれな。

早ければ中一で取れるし取った後、所持したまま本来試験を受けられる年齢になる年度になれば自動更新で正規免許になるうれしい効果付き。

でも取るのに必要な試験は正式な試験と変わらないから取得可能年齢最低12歳にしてはクソみたいに難しい難易度な上に制限がキツイ。取らせる気がないからこんな難易度とか言われてたな。

普段使いできない上に車の個人所有もダメ、使用はサーキットか訓練施設のみ、公道はサーキットなどへの移動のみで保護者かそれに類するものの同乗が必要とかいろいろ。まあ当然だが。

だから訓練で振り回すなら、いつそご両親がぶん回したほうが早いとか専門家に依頼したほうがいいとかで自分で運転する必要性が薄いからほとんど埋もれてる資格よな。

有名どころじゃマルゼンスキーだ、一番多用してたっていうの。赤いカウンタックがナウいわよ。

なんでそんなの持つてるかっていえば、ランエボ2軍どもを芦名でぶっ潰したから。

あの時は1両対5人リレーの変則バトルで共同撃破したんだが、それが危なっかしいって言われて有無言わず教習所に放り込まれたのよ。

運転免許なら前前世で全部埋めたからみっちり復習して挑んだら楽々一発合格、そしたら呆れられた。

ほかの奴らも時期は違えど同じように放り込まれたけどツバキ以外は落ちまくったつてね、ツインターボが最後だな。

「ほれピカピカの正規免許だぞ、全部埋めてやったから戦車だつて乗れるぜ」

種類の欄が二枠増えて『ウマ娘限定』なんてある正規免許証は、限定免許からの更新じゃないと付かないレア仕様だ。



だからまだ17だけど今は堂々と車を乗り回せる、お巡りさんがたまに目を白黒させるけど。

「あんな何目指してんだ？」

「酒屋」

「教習所の人どんな顔してたのか目に浮かぶわ」

まー呆れた目してたね、中三が大型特殊受けに行つてペーパーと実技試験一発合格したから。前前世も埋めたからこつちでも埋めたくて、勉強しながら片っ端から取つたよ。

そんなことしながらじゃあつてるともう学校だ、あ、今日の朝の当番は校長だ。

「おはようございます、一心校長」

「おはよう。今日も元気だな、結構結構」

白くなった頭髪に髭、顔に刻まれた皺、結構お年に見えるしその通りなんだけど怖ろしく元気な一心校長先生。

日本刀と拳銃を握らせたなら日本一だとか。実際剣術はかなりすごい、体育祭の演目でガチなのやるからこの校長。

噂じゃ悪さした走り屋の車を真剣で一刀両断にしたとか、外国のマフィア相手に一人で無双したとか、恐ろしい噂もある。

でも生徒や教師たちからは信頼されてて頼りになるいい校長先生だ。

校庭を抜けて下駄箱で上履きに履き替えて廊下に行くと特徴的なウマ耳がちよこんと二人分廊下の向こうに見えた。

この学校にはウマ娘は3人だけ、街全体だとほどほどにいるけど県立一般校にいるウマ娘は少ない。

「おはよう、テューダー」

「おはようございます、シマカゼ先輩」

廊下の向こうからやってきた巨乳ウマ娘、滑らかな黒髪をウエーブロングに伸ばしたお淑やかそうな仕草のテューダーガーデン。

前は府中のトレセンにいた転校生の後輩の一年生。言い方は悪いがレースで勝てずにデビューできなかった脱落組ってやつだ。

普通なら地方トレセンか有名私立とかがこぞって拾うんだけど、前

期は脱落組のレベルが高すぎて抜け落ちてここに来た。

まあ転校してきたときはひどかったね、浮いてるし絶望してるしでいじめっ子たちですら手を出せない負のオーラまき散らしてたよ。

見かねて峠に引っ張り込んで振り回したから今はそうでもない：いや最近は中里を追っかけてるとかなんとか聞いたな。

「おつす、シマカゼ姐さん」

「姐さんいうな。おはよう、クイーンベレー」

ライトグレーの髪に左目の眼帯のウマ娘、クイーンベレー。テューダーガーデンと同じく元府中トレセンからの転校生で同じく後輩の一年生。

こいつも脱落組、デビューはしたけどその先が続かなかったタイプで天才に思いつきり才能で殴られた経験あり。

しかも在学中にちよつとやんちゃだったんで有名私立は手を引っ込め、群馬トレセンは欲しかったけど有望な脱落組を一杯抱え込んでやって取れなかったからここに来た。

おかげで完全に拗ねてグレかけてた、見てらんないからぶちのめして峠で引っ張り回したら治ったけどなぜか姐さん呼びになった。

ちなみに眼帯はおしゃれじゃなくて本物、生まれつき左目が見えないし動かない。ん、なんだ、急に神妙な顔になって近づいてきたぞ。

「姐さん、変なこと聞くんですけど、この前群馬トレセンでエルとグラスを潰したってマジですか？」

「…あ、この前のあいつらか」

エルコンドルパサーとグラスワンダーだからエルとグラスか、そういやそんな風に呼び合ってたな。こいつ面識あるんだ。

「ああ、この前群馬トレセンで千切ってきたけど？友達？」

「スぺのダチなんでそこまでじゃないですけど…やばいっすよ、向こうで騒ぎになってます。ツバキ姐さんが強襲したから余計に拗れたとか」

「はえーな、今朝送ってっただけどなんかやったのあいつ」

「スぺも他から聞いた話なんで詳しくは知らないですよ、何でも生徒会室に10秒といなくて開口一番お断り、お土産渡してそのまま

帰ったとか。

不確定情報つすけど朝から我が物顔で正門から帰ろうとした群馬トレセンの葦毛がいて、ちよっかい掛けようとしたブラツキーエールさんが一睨みで腰砕けにされたそうっすよ。ツバキ姐さんですよこれ」

そのブラツキーエールってやつが何しようとしたかは知らんが災難なこった。あいつの睨みは効くからな、吹かした連中なら一睨みで黙るぜあの眼光は、あとで聞くか。

「それならば私も気になる話を聞きましたわ。ブライアンさんがインベタグリップの練習してるのをジャラとナーヤが見たって」

「それ初耳だぜ。危ないだろ、トレセンに走り屋なんていないのに」  
「危なっかしいそうです、内ラチに何度も擦ってるそうで…ちなみにブライアンさんも千切りました?」

「えーと、ブライアンっていうとナリタブライアンであってるか?ならディープと一緒に千切って全員起き上がれなくなるまで振り回したけど?」

「あらあ…激やばですね、面子丸つぶれですわ」

最後は全員振り回して千切ったからな、それで覚えたか。普通にそこまでする必要ないけどやると少し速くなるし。

無茶するな、感心するが整備されたコースでやっても覚えにくいけどなあれ。

こつちだとまず車で走って覚えるもんだ、一番いいのは走り屋の車に同乗すると感覚が掴みやすい。

府中じゃ完璧にできるのツイスターボくらいだろ、あいつは俺たちの中じゃ一番体力はないが小回りが利いてインベタがうまいから。

「…嵐が来るわね」

小町、お前は分かってもいないのにうんうん頷くな。俺もさっぱり理解できたらんから何とも言えねえぞ。



午前中の授業が終わり昼休み、俺はよく屋上の一角で大体小町と一緒に、あとはその場その場で一緒になった気の合う連中と食べる。

理由はない。高校に来てから何となくそうなって今まで続いているだけだ、今日はテューダーと偶然会ったから3人。

クイーンベレーは別の友人のところに行った、そういう日はよくある。俺がそうなるときもあるし。

「相変わらず少ないですね、先輩」

「お前が多いんだろ、向こうみたいに走らんのだから減らさんと太るぞ」

「どっちも多いわ」

俺の飯は大型2段重箱、お袋監修の瀬名酒造社員食堂謹製『残り物ぎつちりウマ娘弁当』残り物と侮るなかれ、うちの社員食堂で出される日替わり定食の昨日の残り物全部乗せという超豪華弁当だ。

上が昨日の残り物とかおかずがてんこ盛り、下が白飯ぎつしりの言わば二段ドカベン。飲み物は麦茶、1リットル水筒に茶袋を入れてるから水を淹れれば補充できる。

テューダーは近所の弁当屋が作ってる超ウマ娘盛弁当、ニンジンジュース2ℓサイズ、量的には俺よりはるかに多い競技用。

小町はコンビニの種類別のコンビニ弁当3つと野菜ジュース、お前も少ないとはいえねえぞ。

「ケツ、どっちも栄養が胸に行くロマン仕様のくせに…」  
「そういうお前は燃費悪すぎじゃね？」

実際、人間の女子高生としてはえらい大食いなのにほとんど体形変化なしで太りもしない、腹も出ないというステキな体してるぞ。

裏じゃ人間オグリキャップとか言われてるじゃねえか。俺なんか食べば食うだけ胸に栄養が行ってる気がする…自分でいうセリフじゃねえな。

「良いことじゃないんですよ、最近またブラを買い替えなきゃならなくなってる」

「解るわ、おかげで店員さんと顔なじみになっていろいろおすすめされちまう」

「この前なんか試供品渡されましたわ、入らなくてお断りしましたけど」

テューダー…：心中お察しするが目の前でゆさゆさするな、俺よりでけえな。うん、マジででけえな。おお、男が戻ってきた。

「ナツ…：3けた、だど?!」

コマツ、だからお前はアホなのだ。周り見ろ、男は尊敬してるが女は軽蔑の目してるぞ。いつものことだけど。

「先輩、その目抉り取るのでじつとしててくださいいね?」

「え、ちよお!?!タービンヘルプ!!うわ、力つよ!!」

「ハハハハ…ん?ちよい待ち、電話だ」

小町に襲い掛かるテューダーを見ながらこのまま眺めてるのもいいかとか考えてたらスマホに着信、だれだ?

「ん、沙雪さん?」

画面には『シルエットイ・沙雪』の文字、碓氷峠で走り屋やってる知り合いだ、どうしたんだろ。とりあえず通話に出る。ボタンを押してスマホを側頭部に。

「はい、シマカゼです」

《あ、シマちゃん?いきなりごめんね、今大丈夫?》

「良いですよ、昼休みですし。どうしたんです?」

《うん、ちよつと聞いておきたくてさ。最近レッドサンズの事で何か聞いてない?》

「赤城の?いえ、特には」

《なんかレッドサンズがバタバタしてるらしいから、高橋と仲いいあんたならなんか知ってるかと思つて》

あいつとはちよいちよい会うけども…まあダチではあるけどそこまで付き合ひがあるわけでもなし、知らんな。

まさかほかの場所に喧嘩売りにでも行く気かね…理由がありやマジでやりそうだなあいつなら。

「ん…：知らないですね」

《そう、ごめんね邪魔しちゃつて。あ、真子が来た、じゃね》

「はいはい」と

沙雪さんが電話を切ったのを確認してから俺も通話を切ると、小町が呆れた顔してるのが見えた。

「相変わらずあんた良く聞こえるわね」

「何の話？」

「耳、あんたの耳はそこにはない」

ズビシツと擬音が聞こえるような指で俺の側頭部を指さす小町：あ、また人間の癖が出た。

でもこれで聞こえるんだよな俺。これやるとやってるほうの耳が横向きでペタンつてなってるから骨伝導とかそんな感じで聞こえるっばいぞ。適当だけど。

「んで、沙雪さんなんだって？」

「赤城レッドサンズの事でなんか知らないか？だと。なんか赤城山で騒がしくしてるらしい」

「なに、赤城レッドサンズがなんかやらかしそう？面白そうじゃん」

「そうでしょうか、私は心配ですわ。走るときは自由に楽しくないと面白くありませんもの」

確かになあ、唐揚げ喰いながら同意する。どう面白いかは個人差あるとして、やっぱりそこは大切だよな。

またスマートフォンが鳴る。画面を見ると今度はツイインターボからだ。

「今日は多いな、今度はターボだ。はい、瀬名酒造です」

「またしてるし…」

《あ、タービン！…あれ、何も見えない。またペタン取りしてるなー》

「あん？」

「あんたそれテレビじゃないの？スピーカーになってるからこっちまで聞こえるわよ」

おや本当だ、スマホを見ればなんか豪華な部屋をバックにした何とも今一乗り気でない言いづらそうな顔をしたツイインターボ。

いつもは寮の部屋とか部屋なのに変なところにいるな、なんだ、もしかしてなんかやらかしたかお前。

「おう、急にどうした？」

《えーと、その、そのね、会長がタービンと話がしたいって仲介をお願いされたんだ。今大丈夫？》

「昼飯中だから、長話でないならいいけど」

《あ、じゃあ替わるね。はい、会長》

おい、そこにいるのかよ。唐揚げ喰ってんだけど…

《初めまして、君がシマカゼタービン？突然申し訳ない》

「…こちらこそ、こんな顔で失礼いたします」

慌てて飲み込んでよかった、大物じゃんか。シンボリルドルフといえば俺も知ってるくらい有名人だ。

うん、前髪に月みたいなのメツシユの栗毛、皇帝みたいな自信のある感じ、テレビとかでよく見る彼女である。

「え、マジ!？」

コマツ割り込むな、あっち行ってなさい。

「あら、本物ですわ」

テューダー、後ろからのぞき込まない。あっち行ってなさい。聞き耳立ててるほかのみんなを見習えって。

場所変えたいけど…うわ、逃げられそうにねえなあ。

《ふふふ、楽しいご学友だね。あ、場所を変える必要はないよ》

「ご厚意に感謝します。それでどういったご用件でしょうか？シンボリルドルフ生徒会長」

確か7冠だっけ、ここだと。昔モンスニー爺ちゃんが言ったのは知ってるけど、詳しくは調べたことないからさわりしかわからん。

テレビでよく見るとは思ってたが…ほんとに高等部？引退したらしいけど大人びてんな。

《単刀直入にしよう。君をトレセン学園にスカウトしたい、トウインクルシリーズに挑戦してみないか？》

「いえ、結構です」

割とガチな声が出た、マジで嫌だけど…なんか前にもこんなやり取りしたな。あ、画面固まった。フリーズかな？

## 第七話

あ、これスマホじゃなくて画面の向こうで固まってるわ。そう気づくのに大体30秒くらいかかった、変な沈黙だった。

ターボ、後ろで「だよね」とか言ってるんじゃないやねえよというかわかってんなら電話を繋ぐな…ああ、だから繋いだのか。

俺が速攻で断るって分かってるから速いもんな、あいつも変わんねえ…いや、言いつけ守ってるみたいだから成長はしてるか。

オールカマー頑張ってたしもういい時期だが…いや、もうやってるかな？こうしてるんだし。

《理由を聞かせてもらえないかな？》

おっと再起動したけど顔が怖いぞシンボリドルフ、笑ってるけど笑ってないわ。でもなお嬢ちゃん、その程度じゃ痛くも痒くもないわ。

「もうそんな年でもありません、お話は大変ありがたいのですが」

俺は17で高校2年生、でもすこしすりゃ18で立派な高校3年生ですよ、進路もあるし時期最悪、なんもかんも遅いでしようよ。

フリフリ着て歌って踊るのは趣味じゃねえしな、うん、無理。

《諦めてしまうのかい？》

んん？

「どういう意味でしようか？」

《君の事は少し調べさせてもらった。とても走るのが大好きで、レースも好きだそうだね。ツバキプリンセス君たちと同じく。

現に群馬トレセンからの要望もあつて、時折模擬レースの相手として赴くくらいだ》

それね、俺のせいだわ。ツバキとダイオーとノルン、あいつら群馬トレセン中等部に入った途端、半年もせずに上級生含めて蹂躪して全部撫で斬りにしちゃったからなのよ。

幼馴染で従妹のツインターボより長い付き合いだからさ、一緒に芦



名の峠を駆け巡って鍛え上げちゃったのよね。

面白いように吸収してくもんだから俺もすっかり調子に乗っちゃってさ、俺も強くなれたからもうノンストップ。

その結果が群馬トレセン黒歴史の一つ『恐怖！新入生3人に!!在校生全員撫で切られたらさらに上がった事件』っていうわけだ。

んでどうしたもんかと考えた群馬トレセンの行き着いたのが俺、知り合いだから何とか出来るかもと思ってたのね。

だからあいつらに加減を叩き込んで、時々在校生含めてボッコボコにしてたってわけで：まあこんな特殊事情知るわけないし誰も漏らさんわな。

群馬トレセンの秘密その一だ、ツインターボも知らん。俺も含めて口止めは口酸っぱくお願いされてるから口にはしないモノ。

《ただ勉強だけはいつもツバキ君たちに負けていた。悪く言うつもりはないが、トレセン学園に入れる学力に届かなかったそうだね》あれれ？事実だけでもなんか変な方向に考えてないかいこの人？確かにそんな頭はなかったが、元々行く気なかっただけなんだけども。

《これは我々からのスカウトだ。もちろん試験は受けてもらうがそれは現段階での実力を図るためのもので、合否には関わらない》だろうよ、来てほしいとか誘ってにおいて試験にぶち込んで合格できなかったからさよならとか詐欺じゃん。

んで、そんな特別扱いして俺にあるのは足だけよね、勉強は今もちよつと優秀なだけの普通路線よ、そんなエリート学校の授業とか地獄しか見えんぞ。

《進学の事ならば心配はいらないよ、トウインクルシリーズへの出走期間中は高等部として在学することになる。》

思う存分力を試して、その後の進路は君の自由、地元に戻るもよし、残ってドリームシリーズに挑むもよしだ。

私は後者をお勧めしたいね、君とはぜひ競い合いたいものだ》

：それは留年のお誘いですか？え、ターボが息を呑んでるの聞こえるんだけど。まさかこれ無自覚で言ってるの？嘘でしょ。

「え、堂々留年しろってマジ…」

「先輩すぐ高3でしょ、そういう人いるみたいだけどさ…ええ」

「嘘だと言ってくれカイチヨ」

おっと、留年のお誘いがあらぬ方向に伝播してるぞ。でもテレビ会話ってスピーカーだから周りにも聞こえてるのよね、もう手遅れ。

ウマ娘のレースは人気だからな、素人でもどういう感じとかは大まかには伝わってるのよ。

まず訓練で半年くらい、そのあとデビューでジュニアクラス、クラシック、シニア、これがトウインクルシリーズの最初の3年間だっけ？

それ終わってトウインクルシリーズを引退したらシンボリルドルフみたいにドリームシリーズに行くって話だけど…それはあくまで『おおまかに』らしいな。

でもそれってき、もし行ったら最短で卒業するとき高校5年じゃん!?二十歳じゃん!活躍できなきや世間からしたら留年しまくりの問題児にしか見えねえじゃん。

レースに人生を賭けてるならいいんでしようけども、俺は趣味だから無理です。勉強だつてぜつてえついでけねえだろうし。

G1レースだとか、皐月賞だとかそういうので一着とつたところで世間に出るなら、人間だろうが馬だろうが働くスキルがなきや生きてけねえんだよ。

《当然、すぐに決められるはずもないだろう。どうかな、一度学園に見学に来てみないか?》

あかん、これ喋らせちゃあかん。

「申し訳ありません。わざわざお電話いただいて大変恐縮ですが、やはり辞退させていただきます。次の授業もありますので、失礼します」

電話を切る、これでいい。横を見ると何とも言えない顔した二人。「言いたいことあるならいいいな」

「相変わらず容赦ないなと思って。あのシンボリルドルフ生徒会長というか、トレセン学園の面子丸つぶれじゃんこれ」

むしろ感謝してほしいくらいだぜ、黒歴史が増えまくることになるぞ。今の時代、情報が進んでるんだしよ。

この話だつて、ここにいる連中からどんな風に漏れるかわかったもんじゃねえ。

「そのマイペースぶりは尊敬いたしますわ、真似はしませんけど…でもいい気味ですわねえ」

テューダー、実に愉しそうだな。周りの連中もすごい複雑そうな顔すんな、聞いちゃったんだからしようがないだろ、ほら散った散った。「つていうか、これ悪いほうの噂もそれなりに信憑性あるつてことだよね。じゃなきやあそこまでズレねえでしょ」

まあ、一応前段階で調べてこれなんだろうからな。普通この段階でスカウトされて動く奴はいねえだろ、リスク高すぎるわ。

ほかのウマ娘でもちらりと考えるだろこれ、18で高校生延長しませんか？いやこれで行きますつて即答する奴いる？俺、いないと思う。

「で、行くの？なんか見学しないかみたいなこと言ってるけど」

「行かんわ、今断つただろ」

「これで諦めるとは思えませんがねえ、オグリキャップさんの時はかなりえげつないことしたつて噂もありますし」

「地方の怪物、そういえばスカウトされたんだつて。例えばどんな？」  
小町の疑問にテューダーは少し考えて、見るからに黒い笑みを浮かべてにやりと笑った。あかん、アンチな面が出た。

こいつは基本的に良い奴だし信頼もされてるけど、トレセン学園が絡むとちよつと口が悪くなる。

しかもこういう場合、知ってる『事実』をそのまま一番いやなタイミングで話す嫌がらせするから…

「カサマツトレセンに行った同期から聞いた話なんですけどね、その当時のトレーナーさんもスカウトに悩んでいたそうすわ。」

当然です、彼女ほどの才能の塊をみすみす手放すなんてそうそうできるわけがありません。きつと東海ダービーを盛り上げる逸材になつたはずですもの。

でも中央と地方じゃ設備も何もかも違う、地位も名声も雲泥の差、人の良いトレーナーさんはオグリキャップさんのために悩み続けたそうですわ。

そこにこう口を挟んだそうです『自分の担当にとって一番の選択をお願いします』だそうですよ」

ほら、空気が死んだ。ターボに電話したい、癒されたい…



「ただいまあ…」

「お帰り、どうしたんだお前、元気ねえな」

夕方、家に帰るとなぜか玄関に兄貴がいた、今から外回りに行くつて感じのスーツ姿だ。でもなんでだ？まだ会社にいる時間なのにな。

「兄貴？仕事はどうしたの」

「忘れ物取りに來ただけだよ、それよりお前だ。なんか疲れてんな」

「あ…：なんかトレセン学園からスカウトが來た。断ったらテューダーがトドメ刺して学校の空気が死んだ」

おかげで残り半日、教室の空気がおかしいのなんの、変に気を使っちゃまっていつもより疲れたよ。

帰りに即ターボに電話したら癒されたけどやっぱり疲れた。

「意味わかんねえな」

「俺にもわからん、うちにも電話來るかも」

「もう來たけど親父はお前の自由にさせるって」

「ナイス」

あとでビールを差し入れしよう。

「今日はバイト休むか？」

「この程度で休まねえよ、着替えたなら会社行くから」

「あいよ、じゃ戻るぜ」

家のバイトといえは言わずもがな、瀬名酒造の主力商品である日本

酒『ウマ練り』の仕込みだ。大体週2〜3くらい。

まず手伝いに使う装備を部屋に取りに戻る、会社の支給品でもいいけど俺は自前のこいつがあるしな。

前は普通に背中に背負っていたが、この世界ではそれ専用の運送器具を使って体に酒瓶の入ったケースを取り付けて行うようになった。

親父さんのツテがある地元の運送業社『橋本運送』が運送業を営むウマ娘用に開発し、今じゃ男女共用品が出るまでに広がった『ポーターズギア』と名付けられた装備。

昔どつかで見たような気がするけどこれがすごい、背中の背負子が高性能なこともさることながらなんと両肩や両腿にもケースを固定できるアタッチメントがついてるしその固定力が強力でめったに取れない。

瀬名酒造でも会社が社用品として扱ってるし俺も前まで使ってたが、私物のこれはその最高級品。

軍隊向けに設計されたミリタリーグレードだ、ダウングレードされてるらしいけど性能は一番、でも滅茶苦茶高いヤツ。

社用の汎用モデルと比べて3倍はするけどそのお値段に見合った性能とフルセットだから買う人は結構いる。

専用ポーターズスーツはオリーブグリーンのツナギみたいな全天候対応型スーツとミリタリーブーツで構成されてる。

こいつは仕事にも練習にもいい、雨の時も風の時も完璧で雨が降ると自然にフードが出てくる機能もついてるし非常に頑丈。

山の天気は変わりやすい、峠だつてそれはあるからな。仮にコケてもこのスーツが身を守ってくれる。

ウマ娘流に言えば俺の勝負服になるのかね、仕事用だけど。

「いらねえか、暑いし」

でも欠点は厚着になるから蒸すこと、朝は冷えるけど日中はそうでもなくなつたし普通にランニングウェアにポーターズギアを付けて着るだけにする、シューズはいつもの蹄鉄付き、いつもの格好だな。

スーツも壊れたら金掛かるし、洗濯も結構手間だったりするから大体はここぞというときか秋から冬が出番なことが多い。

「あとは…水筒と発煙筒と…」

忘れちゃいけないのが水筒、これは普通のキャンティーン。米軍のお古、フリーマーケットで発見。安くて頑丈、気に入ってる。

中身は普通に水だ。専用カートリッジを入れておけば水を入れるだけでエナジードリンクにしてくれる水筒も売ってるけどこれがバカ高いんだよな。

発煙筒はいつものヤツ、ポケットに突っ込んで終わりだ。家を出て会社へ直行、会社の区画も我が家も同然だからどこに顔出しても顔なじみばかりだ。

すれ違う社員さんたちに挨拶しながら、今朝も行った倉庫の表ゲートに向かう。うちのアルバイトは大体そこが仕事始まりだからな。

朝は親父が準備していた場所には栗色の長髪を後ろでまとめたウマ娘、モンスニー姉貴が愛車のアルテツアのフロントガラスを拭いて待っていた。

敏則兄貴とモンスニー姉貴は夫婦なのだ、解っちゃいたけど自分には字面のインパクトがデカい。

「姉貴、軽トラは？」

「別で使ってる。ほら、最初の分」

「仕込みのオーダーは？」

「特に指定なしだけど…今日の売れ筋は甘口だったわ」

「んじゃ甘口仕込みにするわ」

姉貴が渡してきた大量の金属ケースを受け取って、一度地面に置いてから一つづつ手に取ってアタッチメントと背中に背負う背負子に分配する。

まず一升瓶が6本入ったMサイズケースを4つ背中に背負う背負子にしつかりと縛って固定、配送業じゃないから普通に持てる分だけでいい。

それから同じ瓶が3本入ったSサイズケースを両肩と両腿のアタッチメントに固定、めったに取れないがしっかりと固定されているのを確認する。

通りがかった新人社員のウマ娘さんが顔を青くしてるのが見えた

が当然だ。背中に24本、両肩両腿合わせて12本、合計36本の未熟成ウマ練りだ。

当然割れたら大損害、たぶん現在の貯金全部ぶっ飛ぶし俺はしばらくタダ働きだ。前世で一ケースダメにした時はしこたま怒られたから絶対にもうやらん。

最後に腰のトランシーバーの電源を入れて、ウマ娘用ワイヤレスイヤフォンを片耳に着けてから姉貴に向かって親指を立てた。

姉貴は頷くと愛車のアルテツアに乗り込む、姉貴がエンジンをかけると同時に俺は倉庫前から駆け出して瀬名酒造の正門から公道に出た。

走るのは公道のウマ娘専用レーン、それに沿うように併走中の看板を前後に着けた姉貴のアルテツアが車道側の俺の後ろについた。

《今日は外周ルートを1周でいったん戻る、お酒を付け替えたからもう1周ね。初めは25、体が温まったら30で流しなさい》

「25から30、了解」

外周ルートは市街地の外をぐるりと回るコース、山沿いの国道が一本ぐるりと走ってるからかなり気持ちがいい。

距離はルートにもよるけど大体15キロくらいで一度戻り、それなりにアツプダウンあるからきついところもあるランニングコースだ。

ちなみに走る速さとフォームとは別に、酒の仕込みのために揺らすことを忘れない。これも完璧に制御してこそ仕事人よ。

「姉貴、ところで今日の晩飯って何？」

《麻婆豆腐。あ、お豆腐まだあったかしら？》

「…豆腐抜き麻婆豆腐とか新しいな」

《ルート変えて藤原さんのところ行く？》

「やめて」

そんなロングコースやったら帰ってくる頃には飯食べる元気なあって、ここから秋名まで最短距離でも山越えコースだし。

美味しい豆腐は迷うけど、いやかなり迷うけど…いや行くか、行くか、うまい豆腐のためなら、うまい飯のためなら頑張れる。

《嘘よ、無かったら旦那に行ってもらうわ》

よかった、このまま山越え遠征ルートは避けられた。前にやったときは祐一さんの目がキチガイを見る目になったからな。

でも豆腐はうまかった、冷ややっこスープって夏場に運動した体にすげえ染みるのよ。兄貴には悪いが奥さんの言葉には従ってもらおう。

このまま市街地の外周をぐるっとひたすら走るロングコース。峠とはまた違う体力と根気が必要なタイプだ。

《忘れてた、さっき電話があったわよ。ジムカーナ、やつぱりやるってさ》

思わずガッツポーズ、行きつけのモーターレーシングコースのジムカーナ練習会、路面の再舗装が間に合わなくて開催危ぶまれてたもんな。

峠もいいけどジムカーナとかダートラリーも面白いんだ、次はどこまで攻め込めるかな。

《浮かれるのはいいけど足が下がってる、もう少し腿を上げて、もうちょい背筋伸ばして》

姉貴の指示に従って腿を少し上げて走るようにフォームを矯正する。重たい荷物を背負っていると無意識にいろいろ崩れがちだが、こうしてみいてくれると矯正しやすい。

酒の仕込みも考えて体を揺らしてるとどうしても、意識がズレてくるからな。

元中央経験者の姉貴は資格を持ってるしそういう面の知識量も強いから、うちでは欠かせない人材だよ。

《フォームが大分まとまって来てるわね、これなら次はもう少し重いので行けるわ》

「じゃあ、そうしよう」

夕焼けの綺麗な山に沿って気持ちよく走りながら答える、もう少し量増やせるならもっと金になる、夢が広がるな。

この時間は車の往来はそこそこある、ランニングしている連中もいるけど十分避けられる間隔は開いている。

常連のウマ娘だったりおばさんおじさんだったりに挨拶しながら



避けつつ抜けていくと、今日は前に人がいなくなり始めた。

《速度上げていける?》

「もちろん」

《時速40、同行者がいたらスラローム回避、外周トンネル抜けてオールクリアならスパートで50》

50か、まあ夕方だしな、平地で酒を背負ったまま時速50kmなら余裕で止まる。

この道に警察はいない、何故ならこのあたりから警察が潜める脇道が全くないから。

撮影装置とかもないから、警察のパトロールを警戒してれば多少速度を出しても平気だ。

そうこうしているうちに人気なくなり始めた、あ、これもしかしてオールクリア行けるかも。

「姉貴、行けそう」

《えーと…：いないわね。良いわよ、いつものところで30に落とすこと》

トンネルを抜けたら高速道路入口への分かれ道まで直線、脇道なしで距離800の傾斜五度の上り坂。

絶好のオールクリア、運がいい。気持ちよくいけそうだ。姉貴のアルテツアがスピードアップすると同時に俺は足を思いつきり踏み込んだ。



夜の9時、バイト終えて晩飯を食った後。俺はいつも寝る前に日課のランニングに行く、時間はいつもまちまちだがたいてい夜寝る前に峠を一本往復だ。

「行ってきまーす」

昼間のは別のランニングウェアに着替えて、玄関から軽く走りな

がら芦名山の峠道への入り口を目指す。

峠への入り口でいったん足を止めて体をもう一度ほぐす、ここからはノンストップで駆け上がる。約9キロ、いつもの日課だ。

一息入れて坂道を走る、時速45kmを基準にして速度を変えずに走るランニングだ。前は44が限界だった、これで余裕ができたら次は46だ。

バイトの時のような重りを背負っていない分足は軽い、だがその分速い、そして足取り、踏み込み、フォームなど全てががらりと変わる。まったく同じ走りはできない、それをすべて体に教え込んで染みつける。

上っていくにつれてどんどん息が上がってくる、でも速度は落とさない。携帯速度計を逐一確認しながら、速力を維持しながら登り続ける。

これができなければだめだ、これで体力がつかなければ下りでは全く勝負にはならない。

見慣れた無料パーキングエリアのゴールに上りきる頃には息も上がって辛い、へ口へ口にならないから成長はしてるが。

でも、これが今の俺の限界だ。まだ次の段階へはいけない。

パーキングエリアの自販機コーナーでスポーツドリンクを買って一気に呷り、一息ついたら近くのベンチで一休みだ。

「…今日も一人か」

夜になるとこちら辺は人も車も捌ける、だから週末は走り屋が溜まるんだ。最近はたまにマラソンしてるのがいるけどそれだってホントにたまにしか会わない。

そもそもウマ娘の方のたまり場はもつと下、最近できた展望台ルートの新道だからな。

あそこはここよりトイレや休憩所がしっかりしてるし、無人運転のロープウェイが24時間使えるから上りやすい。

街灯もそこそこあるから走りやすいし、何より距離が片道約2400メートルだ。レースを目指すウマ娘には魅力的らしい。

テューダーガーデンやクイーンベレーも、今頃は他のウマ娘たちに

交じってあそこで走り回ってるだろうな。

もう一人になって久しい、小学校の頃からたまり場にしてて、中学に入ってからは少しづつみんな離れていった。

解ってるさ、それでも俺はここにいるって決めたんだ。あいつらは向こうに求めたモノはあっちにあつて、俺にはこの先にある。

あいつらが自分の道を行ったように、俺も自分の道を行くだけだ。

「よし」

汗が引いて息が整ったら次、登りと違ってここから降り、仮想敵を脳内で設定しながらタイムアタックで駆け降りる。

仮想敵は俺、自分の運転するWRXが前にいる。俺の足は俺の車にどこまで追従できる、どこまでトレースできる、どこまで迫れて、どこを上回れる。

いくら全力で走ろうとまだ俺は追い抜けない、所々で迫れてもまだ俺の足は走り屋の車に本当の意味では及ばない、自分にすら負けている。

でもいつか絶対に並ぶんだ、追い抜いてやるんだ。

車と足のこの両方で俺は最高の走り屋になってやるって決めてんだ。新顔やら新人じゃなくて、この道のベテランに通じる走り屋に。(自分にも追いつけないようじゃ、胸張れねえっての)

そう思った瞬間、目の前の俺に白い車が重なった。そのリトラクタブルライトの美しいスポーツカーは、そのまま速度を落として俺と並走するように速度を合わせてきた。

ロータリーエンジン独特なエンジン音を奏でる『RX-7・FC3S』こんな車をこんな夜に乗り回しているイケメン野郎はただ一人！

「高橋涼介か！」

高橋涼介、赤城山最速の走り屋チーム『赤城レッドサンズ』のチームリーダーであり双壁である高橋兄弟の兄。

何か企んでると言われてた天才イケメン、高橋兄。

一体何のつもりだ、俺の練習を邪魔しやがって。隠さずに不機嫌な視線を向けると、そのイケメン野郎は面白そうに微笑んで人差し指を一本伸ばして見せつけてきた。

滾った、もう燃えてきた。こんな夜に、まだ少し早いのに、お前はわざわざこの芦名まで勝負しに来たつてのか。生身のウマ娘相手に？面白れえ！

「やったらうじゃねえかー！」

俺が啖呵を切ると同時に高橋兄はFCを加速させて俺の前に、俺も一段ギアを上げて追いつがる。

速い、エンジン出力もそうだが何よりドライビングテクニックが桁違いだ。ホームコースでもないのに簡単にすいすいとコーナーを抜けていく。

だがだからこそ燃えてくる、ここは俺たちの芦名だ。地元で簡単に負けてたまるかってんだ、諦めるなんて論外だつてんだ。

芦名の言葉にやこういうのがあるんだよ。迷えば敗れるつてなあ

!!

「だありやあああああッ!!」

もつとギアを上げる、速度を上げる、FCの後ろにびったり張り付いて追走して、今度こそお前をぶち抜いて千切つてやる。

明日の学校なんぞ知るか！今この瞬間をモノにできなきや走り屋を名乗つてられねえ！走る、コーナーを、勾配を、とにかく全速力で駆け抜ける。

右コーナー、こいつはインベタ、5センチ、いやもつと詰めて最小ラインで抜ける。抜けつつ加速、乗せられる速度は全部乗せる、いつも通りに。

次は左、ここは急だ。コーナーに入る前にもう一步、加速しつつインに寄せたまま体をひねって体を横向きに、蹄鉄で滑りながら一気に曲がり切る。

でも追い抜けない、直線で離されてはコーナーで近づいてを繰り返す、コーナーのドリフトに食らいついても直線ではどうしても差が開く。

抜きに掛かるスキがない、抜きに掛かる足がない、抜きに掛かる速さが無い、抜きに掛かるテクニックがない。

きつと向こうも本気じゃないんだろう、こつちに目もくれずに前向

いてやがる。見てやがれ、そのすまし顔を面白くしてやる！

「たあああああはあああしいいいいッ!!」

声にならない叫びになる、追い抜けない、でも置いて行かれないためにひたすらに駆ける。なのに…

「やつは速いなあ、車つてやつは…」

最後の3連ヘアピン前、高橋亮介のFCはほとんど俺から離れていく。俺の足はもう限界だ、これ以上は速くできない。

速すぎるよな、アクセル踏めば一気に時速100km、そこまで行くのに俺は必死で走つてとろとろだ。

コーナーを抜けるころにはもう次のコーナーに差し掛かっているFCが見えた、だめだ、千切られた。

「またダメか、くそつたれ、遠い」

それでも走る、全速力で残りのコーナーを抜けて、最後の直滑降。坂の下にあの憎たらしいFCが待っていて、ドアに寄りかかるイケメンがストップウオッチを構えていた。

情けない姿は見せない、最後まで、全速力で高橋亮介の目の前を走り抜けた。

「14秒、新記録だな。相変わらず無茶するやつだ」

「うる、せえ…」

よたよた戻つてくると憎たらしいイケメン顔の高橋兄がストップウオッチを見せてくる。計りながら走ってたのかよ、相変わらずむかつくヤツ。

「何の用だ、見てのとおり今日は車じゃねえぞ。あつても走らんがな」

「勝負しに来たんじゃない、話に来ただけだ」

「何か企んでんだろ？噂になってるぞ」

神妙な表情になる高橋兄、マジだよこいつ。イケメンで天才なヤベー奴が本気で何かしかける気だよ、愉快的な方面でありやいいんだが。

「まだ先の話だが、俺たち赤城レッドサンズは関東全てに伝説を残す走り屋を目指す。そのために群馬のコースというコースで最速になる、意味は分かるな」

はい、宣戦布告いただきました。面白いことするじゃん。だからわざわざ来たのか。

「…お前たちがうちのレコードを破りに来るってか?」

「まだ先の話だがな、シマカゼ。芦名の瀬名兄妹、ここのターゲットはまずお前、次は敏則だ」

この芦名で最も早いと言われる走り屋が誰か、それは俺たちだ。

A E I O I G T Z の兄貴が一位、その次が W R X — S T I の俺で二位、遥かに速い親父は引退してるからそういうことになってる。

でもそれは最速を名乗る連中にはないしチームもないから自然とこうなっただけ、結局ただ面白がって付けてる順位なだけだ。

大した箔が付くわけでもないが、それで一目置かれてるってもの事実なわけで…

「かかってこい、相手になってやる」

高橋兄をまつすぐ見つめて宣言する、受けて立ってやる。勝てるかどうかなんて問題じゃねえ、やらなきゃダメなんだこういうのはな。

ここは俺たちの芦名だからな。赤城じゃお前たちに勝てっこねえが、ここじゃお前たちよりずっと速いんだ。

「覚悟してくるんだな、次はこんな風にはいかねえぞ」

俺たちだけじゃねえぞ、良助やツバキだつて黙っちゃいねえよ。ランカー全員でお出迎えするかもな。

「そうしよう。邪魔して悪かった」

「いいって、こっちも気分転換になった。恐ろしい奴だよ、お前は」  
「お前には言われたくない。話はそれだけだ、また会おう」

高橋兄が F C を発進させると同時に、歩道に大の字に横たわる。もーげんかい、しばらく動けん。

「レッドサンズが動く。今年は荒れるな…面白いことになってきやがった」

ゾクゾクするね、あの F C と F D が攻めてくる、また本気のバトルができる。俺のホームで、混じりつけなした。

勝手に最強名乗るのは構わねえが、芦名で好きにできると思うなよ高橋兄弟。

## 第八話

故郷の群馬は不思議な所だった、なんとなくだがツインターボは東京に来てからそう思っていた。

昔からウマ娘がたくさんいた土地だから『群れ』という文字と、ウマ娘がたくさんいた事を造語にした4本足の『馬』で群馬。

東京と比べたらやっぱり群馬はすこし変わっていたが、一緒に遊ぶ従妹や仲間たちもかなり変わっていた。

レース場にいつでもいけるわけじゃないからと、人気の少ない峠道で彼女たちは遊んでいた。

一緒に山で遊んで、峠道を駆けずり回って、時には走り屋の車も追っかけて、それに自分も混ざって自分も一番後ろにいた。

いつもずっと後ろにいて、いつも一番槍で、いつも最初にバテて大笑い、そしていつも楽しかった。

へいいか、お前は向こうでレースを走るんだ。だからまずレースの走り方を学べ、ここでのやり方は少しの間封印な。

まずは平地のレースに慣れて、体の動かし方を学んでからバトルの知識を応用すること。じゃないと、体がもたねえからな

それに自信が付いたらやってみろ、トレセン学園に入学する時、最後にシマカゼタービンがしてくれたアドバイスはずっとやってきた。

芦名の峠でやってきた走りそのままでは平地の競技には通用しない、専門家の視点から考えられた無駄のない走りは自分たちにはないものだ。

最初は気に食わないところもあった、好きに走らせてくれれば自分は速い、シマカゼタービンたちと培ってきた強さで一気にのし上がってみせると。

でもトレセン学園に来て平地の競技と峠の走りの違いで洗礼を受けた。

得意のスタートダッシュがうまくいかなかった、芝もダートもうま

く走れない、ラストスパートでは足が痛む、何より息が続かない、ほかの新入生もどっこいどっこいとはいえショックだった。

彼女の言ったことは事実だった、峠の走りはそのままでは通用しない、だから最初からすべて覚え直してきた。

フォームの角度や足の差し方まで全部理論で証明された最新技術の走り方と最新のトレーニングは圧巻だった。

どれだけ最初は合わなくて成績が振るわなくても、南坂トレーナーや仲間たちの走りを知っていくにつれてどんどんと強くなっていくのが分かった。

平地では大好きな大逃げがうまい具合に嵌らないで何度逆噴射と言われようが、そのたびに手ごたえがあった。

ライバルもできた、憧れもできた、いろいろなことがあった。

午前5時、ツインターボは一人、ジャージ姿で練習場に忍び込んでいた。

いつもならまだ寝ている時間だが、ツインターボはどうしても走れたかった。なぜなら、このトレセンでも懐かしいあの名前が聞こえてきたから。

群馬トレセン学園に遠征に行ったチームリギルが全敗、たった一人で全員を千切って捨てた一般校のウマ娘。

群馬トレセンで暴れているウマ娘なら知り合いに3人いるが、そこに出入りしている一般校のウマ娘の話となれば彼女しかいないから。

自分の従姉、走りを教えてくれた先生、どこまでも我が道を行く自分の走りを持つウマ娘、シマカゼタービン。

シマカゼが本当に勝ったことを聞いたら、自分の中で我慢していたものももうこらえきれないところまで来てしまった。

(できるかな、今のターボに)

誰もいないのを確認してからダートの練習コースに立つ。脳裏には新入生当時の無様な自分が過る。

誰も笑わなかった、むしろ応援してくれたし筋がいいときえ言われた、でもやっぱり心にあっただちっぽけなプライドはズタズタだった。

芦名山で知られた5人のウマ娘の中でも、一番末席とはいえ名が



通った自分がこんな様で情けなくて、仲間たちに申し訳なかったから。

だから基本は全て押さえた、身にしみ込ませてきた、隠れてすり合わせもした、どれだけ苦しくても諦めないでずっとやってきた。

結果は出した、七夕賞を取ったし、オールカマーでも一位だった。今度はそこから応用に入る番、今ならそれでいいはずだ。

シマカゼタービンから教え込まれたテクニクを試してみたい、故郷で培ってきた自分の実力をここでも発揮したいのだ。

前よりもっと強くなっている従妹に負けてなんていられないから、自分も強くなったと胸を張りたいから。

(何事も基本から、それができて初めて応用。今日から応用、いいよね？タービン)

やれるはずだ、だからこうして抜け出してきた。本当ならカノープスのみんながいる前でやってみるのがいいんだろうが、失敗するかもと思うと恥ずかしくてやっぱ一人ですまは試したかった。

(距離2000、ダート、左回りで…よし！)

ゴール板の前で大きく息を吸ってから、体の重心を落とす。左足に思い切り力を籠める、息を整えて、体の力を左足に集中させる。

(GO！)

出だしは思い切り前傾姿勢で、エンジンについたターボが一気にドカンと来るイメージでダートの砂を思い切り蹴り飛ばした。その手ごたえは十分すぎるほどあった。

(できてる！ドツカンができた!!)

チームカノープスで教えられてきた基本、それと芦名山の峠で鍛えられたテクニクの応用の複合。

その二つが今、完璧に合致した。峠のテクニクは身に沁みついていて、レースの走りは前のオールカマーですべて嵌った。

初めのスタートダッシュ、体力のない自分にある長所の一つであるスタートのキレ。ランエボの立ち上がりを上回って頭を抑えるために究めた超加速。

唐突に加速を始める姿にドツカンスタートと言われた自分の切り

札の一つ、スポーツカーにも張り合える自分の技。

急激すぎる加速でブレるラインを調節しつつ、一気に稼いだ推力を体に乗せて一気に大逃げ体勢にもっていく。

ここでは今までついぞうまくいかなかった、芝ではスリップしダートでは不発、だが今日は成功した。

(足、軽い！走りやすくなってる!!)

加速で推力を手に入れたことで得た背筋がゾクゾクするような走りやすさ、トレーナーの指導の下で繰り返してきた走法が体を効率よく走らせてくれる。

そこに峠を走ってきた経験がアドバイスして補助をする、体が軽い、まるで坂道を駆け下っている時のように足が軽く回る。

コースを走るのが面白い、入学した時よりももっと早く、もっと深く攻められる。

もうすぐ左コーナー、ツイインターボは臆することなく内側に体を寄せて思いっきり飛ばしながらコーナーに入る。

コーナー際まで10センチ、少し様子見の攻め込みでコーナーを一気に駆け抜ける。

(コーナー)

コーナーを抜ける直前、直線に入る寸前で踏み込んだ右足を力強く踏み込んで、車のよう加速を立ち上げる。

峠では幾度となく行ったコーナーからの立ち上がり、ウマ娘のレースではやらない踏み込みだがそれももうまくいった。

芝ではいつも滑りまくっていた、ダートでは力が砂に取られて不発ばかりだったのが、ここにきてカチリと嵌る。

それに何より、二本目の直線に入ったのに少しも息がつかなくなってない。まだまだ走れる、昔みたいに走れるようになってる。

二本目のコーナー、5センチまで攻める本気の攻め、全速力でそのまま一気に内ラチ沿いを突き抜ける。

(行ける！)

コーナーが終わる、その直前に大きく踏み込んでラストスパート。鼓動と息を合わせ、意識を前に、体の全てをこの一步に。

今出せる最大出力で、右足を思いっきり踏み込んでさらにドツカンと加速し体力を使い切るまで走る、一気にゴール板の前を駆け抜けた。

「やった…やった。できる、これなら走れる！待ってるテイオー、ニューツインターボ誕生だー！」

「ああ、完璧なインベタグリップだったな」

「そうでしょ！インベタはターボ得意なんだから!!」

「うん、それにすごい加速だったね、タービンみたいだった」

「ふふん、タービンはターボの従姉だからな！ドツカンターボを混ぜて応用してみたぞ!!」

「ほほう？」

ドスの利いたうれしそうな声にやつと気づいた。ここにいるはずがない、ましてや声をかけてくるはずがない有名人たちの声にツインターボは疑問に思っただけの声をみるほうを見た。

そこには随分と腕の部分がほつれたジャージを着たナリタブライアンとデーパーインパクトが、コースの外で見物していた。

なぜこの二人がここにいる、なぜリギルの二人がここにいる？オカシイ、さつきまで誰もいなかったのに。

だが一つ分かったことがある、早く逃げないとまずいということだ。

「あ、練習？ターボもう終わったから、じゃね！」

「まあ待て、少し話をしないか」

「うんうん、ちよつとお話しよ？ね？」

ツインターボは逃げ出した、だがナリタブライアンに回り込まれてしまった、デーパーインパクトが後ろから羽交い絞めにしてきた。

ツインターボは逃げられない!!



シマカゼタービンに対するスカウトは行われる方針で決まった、シンボリルドルフからその言葉を聞いたときナリタブライアンの心には熱いものがたぎった。

もし彼女がそれを受けたなら、彼女がここへ来てまた私たちの前であの走りを見せるのだ。

ここで優秀なトレーナーの下で技を磨いて同じレースに出てくるのだ、そう考えるとウマ娘としての本能が刺激されてたまらない。

だが逆に、それに応えなければ夢物語だ。だからできる限りの手を打って、彼女をこちらに呼び込みたいところであった。

その一手を考えるナリタブライアン達の前に、シマカゼタービンの従妹であるツインターボという決め手が現れたのだから逃さない手はなかった。

登校するウマ娘が増えてきた時間帯の練習場横にある小さな休憩場で、すっかり観念したツインターボから聞いた話にナリタブライアンは確かな手ごたえを感じていた。

彼女が本物の従妹であることに疑いはもうなかった、所持品であるスマホには彼女の連絡先や一緒に撮った写真。送られてきた芦名高校の学園祭の写真などといった証拠が山ほど残っていたのだ。

「シマカゼは走るのには人一倍努力をするタイプなんだな、でなければそんなトレーニングはしないだろう」

ツインターボから聞いた片道約9キロの峠道を往復でするランニング、口で言うのは簡単だがトレセン学園でもそこまでする生徒はなかなかいない。

坂路の申し子と言われたミホノブルボンがそれに似たことをやっていたが、それでも異常の一言に尽きた。

だからこそだ、それ程の執念を燃やす彼女がこの話を無視するとは思えない。

走ることに、競うことにここまで執念を燃やしているのだからレースに対する執念も人一倍のはずだ。

「ツインターボ、相談なんだがシマカゼをスカウトするのを手伝ってくれないか？」

「え、スカウト？」

「ああ、会長はすでに乗り気だし理事長も動いている。今日にでもうちの学校から話に行くはずだ」

だが、とナリタブライアンは言葉を区切る。群馬トレセンでは全員がそれとなく連絡先の交換は断られていて誰も知らない。

幸い、公的な連絡手段は簡単に手に入った。瀬名酒造のホームページで得た会社への電話番号から学園がアプローチをかけていて、直に返事があるはずだ。

あれほどの実力者が一般の高校で燻っているのはもったいない。事情があつて中央にも地方にも入れなかつたのであれば、これがチャンスだ。

しかし突然そんなことを言われても不信感を持たれて話は進まない、何か一つ手を打って話をスムーズに進められるようにしたかった。

「会長も興味を示しててね、ぜひ話したいって」

ディープリンパクトがナリタブライアンの言葉をつなげる。ツインターボを通じてのシンボリルドルフからの直接勧誘、かの7冠ウマ娘からの誘いならば心が揺れないウマ娘はいないはずだ。

シンボリルドルフを知らないウマ娘はまずいと言つていいだろう、それ程の有名人からの直接オファー、少々ずるいが無下にするのは憚られるはずだ。

もし彼女がトレセン学園に入学し、トウインクルシリーズに乗り込めばレースはより刺激に満ちたものとなる。

もしかしたら今年のクラシックは、この前の物よりも白熱したものになるかもしれない。

何より彼女の走りが、実戦の場で現れる。限度を知らない加速と破壊逃げ、それを最後まで持たせる規格外のスタミナと頑丈な足、そしてインバタグリップ走法などのテクニク。

それが次のクラシックを沸かせるだろう、そしてシニアクラスも出場できる有マ記念や宝塚記念などでは自分と当たるかもしれない。

実戦であの狂ったように加速しコースを攻め抜く彼女と競い合え

るとなれば、今から闘志が湧き出てくる。

それは彼女と模擬レースを走った全員が考えることでもあった、それだけあの実力と走りには魅力があったのだ。

「スカウトは無理だと思う」

だがツインターボの真つ向からの否定に、ナリタブライアンの脳裏に過ったシマカゼタービンの姿が掻き消えた。

「どういう意味だ？」

「昔からタービンはそうなんだよ。走るのも競い合うのも大好きなんだけど、大きなレースとかはすぐに嫌がるんだ。踊りたくないって」走るのも競い合うのも好きで大会を嫌う、にわかには信じられないことだ。確かにウイニングライブに手間取るウマ娘は多いがそこはそれ、付きものである。

ウマ娘とは『走る為』に生まれてきたと言われるように、走ることに執念を燃やす者が多い。

その先にあるのはレースであり、国内では中央のトウインクルシリーズやドリームシリーズ、あるいはローカルシリーズであろう。

確かに彼女はそういった学歴を持っていない異端児であった。ブライアンは下調べの際に見た彼女の資料を思い出したが、それでは不可解だ。

走らない者もいるが何かしら理由があるのが大半だ。元からそういう性質なのもいるが数少ないし、そういうウマ娘はまずこんな練習はしない。普通の人間と同じように過ごすのだ。

「信じられんな、あれほどの実力者がレースを嫌うだど？ならなぜ群馬トレセンに入り浸る？」

「それはダイオーとノルン、ツバキに呼ばれてるからで普段からいるわけじゃないんだ。あの3人が強すぎるんだって。

だから本気で調整とかする時に呼ばれてるの。それにタービンは走り屋だから、芦名からここに来たいと思わないよ」

「走り屋って、あの車の？」

ディープリンパクトの言葉にツインターボは頷く。

走り屋といえれば暴走族だ、府中からほど近い首都高でも夜中

に騒音を鳴らして爆走するスポーツカーが走る時期がある。

その対策やらどうこう言う特集をナリタブライアンは見た覚えがあった。

地方の峠や山奥の道路を拠点とする走り屋は、それ自体は違法であるがどの地方自治体や警察からも必要悪として黙認されている状態だ。

特集番組の専門家曰く、理由としては多々あるが首都の動脈である首都高と違い山奥の旧道などを主体とする走り屋は事故が起きても経済活動に大きな負担にならない。

動かすだけでそれなりの騒音を出すスポーツカーが自ら山奥に行くので自然と被害が減る、首都圏から地方への人の流れができる。

居場所ができてガス抜きになり大人しくなる、昼間や市街地ではおとなしいのでかっこいい車を乗り回しているだけの連中になる。

人気のない山に車が走り回ること自然と人間の目が増えて、走りよりも陰湿なことを企む輩も減る。

古い走り屋からの伝統でルールに硬く、プライドを持っている。一般車には手は出さないし、自らがはみ出し者であることも理解している。

またすでに主要な走り屋のいる場所には、多くの企業やレーシングチームが原石を求めて目を光らせているということだ。

そこから生まれる経済効果も計り知れない、だから強く規制するよりも静観している状態だ。

「夜の芦名じやナンバー2だよ、とつても速いし強い。ここじゃ走る場所ないし、車も扱いづらいよ」

「まだ17でしょ？計算が合わないような…」

「免許は持つてるよ、マルゼンスキーさんと同じの。ターボも持つてる、ほら」

ツインターボはジャージに突っ込んでいた二つ折りの財布を取り出すと、カード入れのところから一枚のプラスチックカードを見せる。

それはウマ娘の訓練用限定運転免許証だった。だがそれでは公道

は走れないはずである、それでも走っていたのなら犯罪だ。

「タービンも前にとつて、今は普通の免許になつてるよ。それまでの時は時効だつておじさんが言つてた」

「なんだその理論は…だがそうなると厄介だな」

ツインターボの言葉が本当であれば、シマカゼタービンは地元の有名なで表面化していないだけの立派な犯罪者である。

日本トレーニングセンター学園は国内最大のエンターテイメントレースであるトウインクルシリーズやドリムシリーズに強豪選手を輩出する中高大学一貫のエリート学園なのだ。

当然ながら入学するウマ娘たちにはそれ相応の身分や実績、学歴などが求められていて常に入学前から努力してきている。

それを飛び越える逸材やある種の例外はあるが、往々にしてこのウマ娘はエリート揃いであると言つていい。

そんな中に暴走族まがいの走り屋がスカウトされるとなれば…絶対に面倒臭いことが起きる。

こういう政治めいたことには疎いし関わりたくないナリタブライアンですらすぐに思いつくのだから相当だ。

「それを考えても、やっぱりタービンはスカウトするべきだよ！あんなに強いのもつたない!!」

「それはターボも思うけど、嫌がつてるなら無理強いなんてしたくないよ。そんなのターボだつて嫌だもん」

食いつくディープリンパクトに、渋るツインターボ。

「無理強いなんてそんなこと私もする気ないけど…でも…」

「そりゃ強いよ、ターボだつてここで走つたらめっちゃ強いつてわかるもん。でも——」

ツインターボが言葉を続けようとしたとき、ナリタブライアンの耳に聞きなれない何かが割れる音が聞こえた。なんだ、この音は？

何かを握つて割るような音、聞くと自然と心が静まり返るような不思議な音だ。ディープやターボにもそれが聞こえたのか二人も耳を傾けている。

ディープリンパクトは不思議そうに、ツインターボはすぐに心当た



りがあったのか音のするほうに駆け出した。

「この音、種鳴らしだ！」

「なにそれ？」

「芦名の遊びー！」

どうやら通学路近くのベンチの方から聞こえてくるようだ、一気に加速するツインターボの背中を追って二人も走る。

「ツバキ！」

「あ、来た」

音を鳴らしている主は正門近くの通学路にあるベンチにゆつたりと座っていた。

群馬トレセン学園の制服を着たツバキプリンセス、袋に入れた何かの種のようなものを持っており、それを潰して音を鳴らしていた。

「残り一つ、これで来なかったら帰ろうって思ってた」

「なんでここにいるの？来るなら来るって言ってるよ」

「ごめんね、あんたに教えたらしいいろいろ伝わっちゃうしさ」

「そんなにターボは口軽くないぞ！」

「ほんとに？」

ツバキプリンセスの視線がナリタブライアンとディーピンパクトのほうに向くと、ツインターボはぐっと唇をかみしめて面白い顔をした。

それを見て何か理解したツバキプリンセスはけらけら笑うとツインターボの頭をポンポンと叩く。

「むー…何やってんの、種鳴らしなんかしてさ。電話すりやよかったじゃん」

「寝てたら悪いし、起きてたらこれで釣れるのあんただけでしょ。学校の後、暇なら東京案内してもらおうかとね。これから暇だから」

「えー、ならなおさら前に言ってほしかったな。今日は練習あるから無理」

おい待て、今何と言った。

「お前、今日は朝に会長とスカウトの件で面談のはずだ。なぜここにいる？」

「えー！ツバキもスカウトされたのか！すごいな！」

「あ、あれ断った」

「えー！?!断ったのか?!」

平然と、あつけらかなと中央からの誘いを蹴ったと返すツバキにナリタブライアンは自分の耳を疑った。

ツバキプリンセスへのスカウトは、シマカゼタービンとは全く関係のない純粋な実力を加味してのスカウトだ。

決しておまけやついでのようなものではない、それは彼女も理解しているはずなのに、それを断ったとはどういうことだ。

「理由は？」

「理由か、答えるのは簡単だけど…よし、シンボリルドルフ会長にしたのと同じ質問を二人にする、その答えが理由だよ。」

ターボは答えちゃだめ、せめて私が帰ってからね？」

「えーなんでー?」

「あんたは答えを知ってるからよ」

ツバキプリンセスはツインターボには優しく微笑み、そのあとでナリタブライアンとディープインパクトに向けて真面目な表情を作って静かに問いかけた。

「ここで走れば、私はハチロクに勝てますか？」

ツインターボが呆れた声を出す、何も答えない。ナリタブライアンは首を傾げるしかなかった、そもそもハチロクとは誰だ？どこのウマ娘だ？

ツバキプリンセスが意識しているということは群馬トレセンか、ローカルシリーズか、それともシマカゼタービンと同じか、だが答えは決まってる。

「勝てる」

「勝てます」

「それが理由よ」

どういう意味だ、ナリタブライアンはそう問いかけたかったがそれよりも早くツバキプリンセスは一度学校に鋭い視線を向けてから踵を返して背を向けた。もう話は終わりだ、そういうかのように。

「もし気になったら暇なときにも芦名に来るといいわ。この先、きつと面白くなるから。じゃあね、電車の時間がきちやった」

ツバキプリンセスはそれだけ言うと、休憩所から去っていく。その後ろ姿が見えなくなると、ツインターボはやれやれとため息をついた。

「意地悪だなあ、ツバキ。勝てるわけないじゃん」

## 第九話

早朝の生徒会室、シンボリルドルフは一人、これまで集められた『シマカゼタービン』の資料を眺めながら考えていた。(どうしたものか。これほどの逸材だ、私も一度話してみたいものだ……)

日本トレセン学園の生徒会長として、鎬を削るライバルとして、そして共に走る仲間として当然だろう。

しかし連絡先を知らない、東条トレーナーやディープリンパクトたちはそれとなく連絡先を交換しようとしたがすげなく断られたそう  
だ。

同じくスカウトに動いてくれているトレセン学園情報部、秋川理事長や駿川たづな秘書ならば知っているだろうが、まだ不確定な要素が多いという理由で共有してもらえていない。

何よりそれを含めても彼女の情報がまるでない。東条トレーナーとディープリンパクトたちが持って帰ってきたデータ以外、まともなデータがどこにもないのだ。

群馬トレセン学園に問い合わせても『シマカゼタービン』が在籍しているわけではないので取り付く島がない、生徒でないウマ娘のデータを残しているわけがないという建前で逃げられる。

かといって芦名高等学校は一般校なのでツテがなくトレセン学園としての要請も出しにくい、やり取り自体はできているが手に入ったのは表面的な差し障りのないプロフィール程度だ。

尤も、そこからさらに突っ込んでも手に入るのは普遍的な成績などでありレースに有用なデータなどではないのだろうが。

そして群馬内各地で行われている一般参加の短距離レースでも姿ははつきりしない。出ているレースは気まぐれそのもの、だが出走すれば確実に勝つ。

分かったことは彼女が走ると大会は早く終わる、賞金を貰ったらすぐに帰るくらいそっけないので地元でアイドルがいるとヒール役に

なるというくらい。

彼女の脚質は『逃げ』で規格外のスタミナを持っているということ、それだけでなく機転が利いて動きが読めないこと。

実家の『瀬名酒造』にて仕込みのアルバイトとして活躍していて、看板娘のような立ち位置にいることだ。

(確かスポーツカーに乗って配達をしているという記事があったな：マルゼンスキーが居ればな)

生徒会の一人であるマルゼンスキーは別件で学園を離れている、もしれば車好きな彼女ならなにかヒントが得られたかもしれない。

そうでなくても同じ車を趣味にしている者同士だ、シンボリドルフにはわからないシンパシー的なモノを感じてくれると話も弾んだだろう。

シンボリドルフもマルゼンスキーとは長い付き合いだが、車となると全くわからないから話にはならないのだ。

しかし、こうも何も情報がないとなると話を作ることもしできない。どうしたものか？

「さしずめ名前のない怪物か…」

オグリキャップがローカルシリーズで名を馳せた『地方の怪物』ならば、シマカゼタービンは在野で誰も知らない『名前のない怪物』。

その実力は折り紙付きだ、期待の新人であるディープリンパクトのみならず3冠ウマ娘であるナリタブライアンでさえ本人が本気で挑んだと豪語したうえで負けたというのだから。

帯同していたグラスワンダー、エルコンドルパサーもまた昨今の中央シリーズを語るには欠かせない強豪選手、彼女たちもまた負けを認めて今も練習に熱を上げている。

(何よりも、彼女はディープリップを縛っていた何かを拭った)

脳裏に思い出されるのは最近のディープリンパクトの明るい笑顔だ。

練習中や試合では一切封じられていた本来の無邪気さ、それが練習の中でも垣間見えるようになった。

どこか焦っていたような、何かを追っているような焦燥感も無く

なって、より一層練習に励む姿はまさに自分たちが見たかった彼女の姿だった。

やり方は何の変哲もなく、ただ圧倒的な実力でデューパックトを打ち負かすこと。それはシンボリルドルフもすでにやっていた。

自分だけではなく、リギルの先輩全員が一度はデューパックトを負かして揉みに揉んだといってもいい。

それでも拭えず、晴らすことができなかった何かを彼女は自らの走りで消し飛ばしたのだ。

(やはり、この目で見てみたいな、シマカゼタービンの逃げとやらを) ナリタブライアンやデューパックトたちからの証言や記録映像だけではない、生の走りを体験してみたい。

おそらくウマ娘と密接な関係を持つ酒造会社の家柄的に簡易的な指導は受けているのだとしても、やっていることはアマチュア程度の自主練だろう。それでここまで強くなったということは、秘めている才能は計り知れないはずだ。

この才能がトレセン学園のトレーナーの手で磨かれる、そうなれば何が起きるのか予想がつかない。

「会長、エアグルーヴです。ツバキプリンセスをお連れしました」「入りたまえ」

生徒会室のドアが叩かれ、聞きなれたエアグルーヴの声に返答しながら資料を机の引き出しにしまって本日最初のお客を出迎える。

ツバキプリンセス、群馬トレセン学園高等部。群馬トレセンにおいてトップクラスのウマ娘の一人、群馬を拠点とするローカルシリーズでもホクリクダイオーとノルンファンクを相手に常に首位を争っている。

群馬トレセン学園にて、車両競技を主体とするモータースポーツ部を創立した3名の一人であり部長。部活動は主にジムカーナ、ダートラリーで活躍している。

過去に日本ウマ娘トレーニングセンター学園を受験したものの不合格、そのまま群馬トレーニングセンター学園に入学している。

群馬トレセンから収集したあらゆるデータを脳裏に過らせ、目の前

の彼女の佇まいから感じる実力を比較する。

(大金星は2年前の東海ダービー優勝、なるほど、見逃していたのは痛いな)

その東海ダービーはまさに異例と異様の連続だったと言われている。

ダート、距離1900メートル、右回り、バ場は良好、出走ウマ娘たちにとってはまさに絶好と言える条件がそろっていた。

結果は一着『ツバキプリンセス』二着『ホクリクダイオー』三着『ノルンファンク』四着『フジマサマーチ』五着『サウスヒロイン』。

1位、ハナ差で2位、さらにハナ差3位、そこから2秒差をつけて4位、クビで5位、そのあと2バ身差で6位。タイムは1:57.9。

同じローカルシリーズとはいえ、群馬という僻地からの遠征出場者がいきなり上位を独占、東海地区の猛者たちを置き去りにした圧勝。

遠征者のみでウイニングライブのセンターをすべて奪った大混乱だ。もし中央のオグリキャップブームからなる日本ダービー騒動で注目が逸れていなければ世間を揺るがしていただろう。

その後は大きな大会に出場していないものの、ホクリクダイオーやノルンファンクと同じように多くの大会で安定した成績を残している。

(葦毛か、地方の葦毛は強いという法則でもあるのかな?)

ツバキプリンセスの髪を見て、なんとなくそんなこと思っちゃったりもする。

「この度は、早くに時間をいただき感謝いたします。どうぞ、粗品ですが」

「こちらこそ、遠路はるばる来ていただいてうれしいよ」

ツバキプリンセスが差し出してきた『菓子・平田屋』の達筆なプリントがされた菓子箱を受け取る。

かすかに香る甘いあんこの香り、どうやらおはぎのようだ。

「それで、返答を聞こうかな?」

「恐縮ながら、辞退させていただきたく思います」

即答、つまり答えは前もって準備していたようだ。稀にいるのだ、

こういうウマ娘が。しかしこちらもスカウトを試みた以上、逃がすには惜しいと考えているウマ娘なのだ。

「理由を聞かせてもらってもいいかな?」

「ここに私の求めるモノはなく、群馬にはそれがある、それが理由です」

「シマカゼタービンかな?」

ルドルフが口にした名前にツバキプリンセスがわずかに反応して呼吸が途切れる。

芦名高校に通う彼女の幼馴染でありライバル、そして群馬トレセンでナリタブライアンたちに一勝も許さなかった猛者。

それは彼女たちも同じ、群馬トレセン学園で整った環境下で適切なトレーニングを重ねてきた彼女たちに一般校で自己研鑽に励むシマカゼタービンは勝つ。

それがどれだけ驚異的で、それでいてプライドを揺さぶられるかは想像に難くはない。

「それもありますが、それだけではありません」

「ふむ：聞いてもいいかな?今後のためにぜひ参考にしたい」

この日本ウマ娘トレーニングセンター学園には、トウインクルシリーズをはじめとする中央のレースや海外での活動を主にするウマ娘たちのために様々な設備を揃えている。

最新式のトレーニング機材、熟達したトレーニング方式、各種バツクアップ、そして才能豊かなトレーナーとライバルとなる生徒たち。

それこそウマ娘たちのために必要なモノがすべてであると豪語して、だれもが納得する充足ぶりと言えるだろう。

ここでの成長は群馬トレセン学園でのそれとは比較にならないはずだ、それこそツバキプリンセスのようなウマ娘ならば。

だが彼女は『足りない』という。それが本心であるなら構わないが、かといって間違った認識ならば正さなければならぬ。

それに何より、彼女と同じ学園にいるほかの二人にも声をかけるのならば、その不満は共通するかもしれないのだ。

過去に目指したこの場所に、無いと断言するものとはいったいなん



だ？

「参考にはならないかと、これは個人の問題でこの学校に対する不満ではありません」

「なおさらだね、無理を言っているようですよですが頼むよ」

「では、質問で返すようで悪いのですが……ここで走れば、私はハチロクに勝てますか？」

おそらくは『ライバル』の名前だろうか。ハチロク、ルドルフは一瞬だけ考えて該当する名前のウマ娘を思い出そうとするがトレセン学園内には該当者はいない。

となればおそらく群馬トレセン内にいる誰かの愛称か、在野のウマ娘なのだろう。彼女が勝ちたいと思っているウマ娘、興味深い。

ツバキプリンセスの様子は悔し気で、それでいて憧れのようなものが見える。まるで手の届かない何かを見ているようで羨ましい。

「断言はできない、勝てるかどうかは君次第だ」

しかし、と心の中で言葉を溜めておく。この学園にはウマ娘を育成するために必要なモノがすべてそろっている。

最新のトレーニング機材、最新の育成理論、最高のトレーナーたち、そして最高のライバルたちがいるのだから。

彼女ならば楽にとは言えないが勝てるポテンシャルはあるはずだ。

「嘘ですね」

ツバキプリンセスの目つきが変わる。その瞳にある『憐みの色』にルドルフは虚を突かれた、その目つきはあまりにも場違い過ぎたのだ。

「私には勝ちたい相手が山ほどいる。エフシー、エフディー、シルエイティ、サンニー、ワンビア、トイチ、そしてハチロク。

これだけじゃない、もっとたくさん群馬には勝たなければならない相手がいる」

「ならばこちらで鍛え、自由な時間を使って群馬で勝負するといいいではないかな？

公式なレースへの出場は制約が付くが、ただ単に走り競争うならばいくらでもやれる」

調べ上げてきた群馬トレセンや地方トレセンの強豪たちの顔と名前に合致するウマ娘はいない。

では彼女が上げた名前は全て在野のウマ娘ということか？群馬にはそれ程の逸材たちが今も切磋琢磨し続けているというのか。

エアグルーヴは少し怪訝そうに眉をひそめているが、シンボリルドルフは俄然興味が湧いてきていた。

シマカゼタービンという実例がそこにいるのだ、あり得ない話ではない。

「解っていない…当然か」

「貴様…その口の利き方はなんだ？」

エアグルーヴが眉間にしわを寄せて怒気を発する。だがツバキプリンセスは涼し気に睨み返し、踵を返した。

「エアグルーヴさん、あなたにも質問するわ。私の部長の椅子、どんな椅子かしら？」

「どういう意味だ？」

「解らなければそれでいいですよ。話は終わり、ここに私が求めるものはありません。失礼します」

目つきを一変させてにらみつけるエアグルーヴ、それをツバキは怯みもせず鼻を鳴らして答えてドアの前に歩を進めた。

「待ちたまえ、話はまだ終わっていない」

「終わりです、シンボリルドルフ生徒会長。私は私の道を行く、邪魔はしないでいただきたい。」

それともう一つ、ダイオールとノルン、そして私が立ち上げたのはモータースポーツ部。何をしていると思います？」

「…まさか、貴様!!」

エアグルーヴが何か思い当たったのか、声を荒らげる。それを一瞥することなく、ツバキプリンセスは扉を開けた。

「さらばです、次はレースにて」

## 第十話

東条ハナは厳かな雰囲気を放つ理事長室で秋川理事長の険しい表情に背筋をピンと伸ばしていた。

理事長席に座る秋川理事長は、普段であれば理事長になるにはいささか若い容姿にたがぬ雰囲気を持ちながらも立派に責務を果たさんとする親しみやすい理事長である。

その傍らに控える駿川たづなもまた、時折とぼけたことを言うことはあっても仕事のできる敏腕秘書であり、トレーナーや生徒たちからの信頼が厚い。

（あのキーホルダーにもっと早く気付いていればこんなことには…）  
チームカノープスに所属するウマ娘『ツインターボ』が、前々から取得に挑戦していたウマ娘限定訓練用運転免許の取得に成功したというのは自分の耳にも入っていた。

職員室での書類仕事の時、チームカノープスのトレーナーである南坂トレーナーがそのキーの管理に関する悩みを相談されていたのだ。

最終的には職員室の席にミニキーボックスを置いて管理するとうことで落ち着いたので、その時に件のキーを見たのだ。

そのツインターボの車のキーについていたアクセサリーは、ツバキプリンセスのスマホについていたものと同じだった。

そのキーホルダーが偶然であるにしろ無いにしろ、一度話を聞くべきだと思った東条はチームカノープスの部室を訪れた。

そこにはすでに先客がいた。部室内にはすでにいつものメンバー、南坂トレーナー、イクノデイクタス、ナイスネイチヤ、マチカネタンホイザがいるのは当然だ。

だが上機嫌にニコニコとシマカゼタービンとの思い出話を話すツインターボと、それに耳を傾けるナリタブライアンとデーブインパクトは予想外だった。

曰く、自主練で朝練に出たらシマカゼタービンの走りと同じような

走りをするツインターボを偶然見つけてしまったらしい。

ここ最近、シマカゼタービンの打倒に執念を燃やしていたのは知っていたが、それがいい起爆剤になっているようで放っておいたのが間違いだっただ。

そこからはとんとん拍子だ。ナリタブライアンからシンボリルドルフに話が伝わり、ツバキプリンセスの一件から朝っばらから少々調子を外した彼女は即座に行動してしまった。

ツインターボからの繋がりで、独断でシマカゼタービンにスカウトを行ったのだ。

かつてオグリキャップに行ったことの焼き直しである、当時もそれでは大きな波紋を呼んで自分と理事長の胃に大きなダメージが入ったのは忘れていない。

その場で見染めてその場でスカウト、それも担当トレーナーを貴賓席に呼び出して関係者の面前で直接である。

さらにその後、悩む担当トレーナーにいらぬことを吹き込み迷走させてオグリキャップとトレーナーを苦しめた上にそれに苦言を申し立てた。

当時の担当トレーナー『北原譲』の叔父である現担当の六平トレーナーは、北原トレーナーの口から全貌を知ったとき表面上では平静を保っていたが心の中は完全にキレていた。

『ああなったのはあいつの弱さだ、弁解なんてあいつもする気はねえだろうさ。けどな、お前はあの小娘になに教えてんだ？』

それこそ当時、すべてを知った六平トレーナーから地獄の底から響き渡るような低い声で言われて本気で死にたくなっただ。

『ルドルフにてめえがやったこととてめえが言ったこととどうなったかよく考えさせろ』

ぐうの音も出なかったとはこのことだ。当時の北原トレーナーがどんな気持ちだったか、東条トレーナーには痛いほどわかる。

迷走したうえでアレを言われたら、よほど自覚がないトレーナーでもない限り効果覷面、潰れなかったのはひとえに北原トレーナーの強さだろう。

さらに言えば言い方が悪い、あまりにも悪すぎる。北原トレーナーは地方所属トレーナーなのだ。彼がそう思わなくても彼からこのことを聞いた第三者はどう思うのか、想像に難くない。

あの時もシンボリルドルフにはしつかりとお灸を据えたつもりだった。彼女も思うところがあつたのか素直に謝りに行つたのもう大丈夫だと思つていたのだ。

(…せっかく仲のいいマルゼンスキーを生徒会に引き込めたと思つたのに、まさか別件でいないときにこれなんて)

スカウトを試みるのは良いがその場でいきなりはもうするなというお達しも当時はあつたのだ、ゆえにそれ以降のスカウトは学園情報部との密な連携でうまく回つていた。

ツバキプリンセス以下群馬トレセン生徒3名へのスカウトも同じで、念入りの情報収集をしたうえでスカウトに踏み切つた。

シマカゼタービンにも後日日程を組んでスカウト担当が向かい、挨拶をしてからのスカウト交渉を行う手はずだった。

しかし初手のツバキプリンセスの応対で、ルドルフが窓口となつて相手の返答を受け取る立場になつていたのが悪手だった。

ツバキプリンセスに拒否された上に思いつきり弄られたことに感情的になつたシンボリルドルフの中から、昔のルドルフが顔を出してしまつた。

当然ながらツインターボは渋つた。どうやっても成功する見込みはない、それより模擬戦をしたいなどと別案件で誘つたほうが確実だと。

彼女は中央にも地方にも興味がない走り屋で、車で走るほうが得意な面もあるからそのやり方だとまず無理だと。

だがせめて一度やらせてほしいというルドルフに、ツインターボはどうせ失敗すると前置きしたうえで協力した。

結果は失敗、ツインターボはほれ見た事かと当然のような顔で特に何も言わなかつた。

「憂慮、彼女もまた我々と同じ志を持つものであり、この学園と全国のウマ娘たちの事を思つての行動だとはわかつているが…たづな」

理事長の声掛けに、秘書のたづなが用意していたのだろう一冊の雑誌を差し出してくる。

それを受け取った瞬間、東条の目に入った表紙の記事に思わず胃がキリキリとした。

『シンボリドルフまた引き抜き?!次はモータースポーツのウマ娘!!』

またこの手のゴシップ記事だ、相変わらず手が速い上にどんな情報入手経路があるのか見当もつかないシマカゼタービンの写真付きである。

どうやら小規模なイベント大会での優勝した時の写真のようだ、横断幕には『新年初走り・群馬ダートラリー大会』とありシマカゼタービンが優勝の表彰台の上に立っている。

イベントに呼ばれた地元のプロレーサーと笑顔で握手している写真もあり、将来有望な新人に見える構図だ。

記事も面白おかしく書き立てる文面で『期待の新人、また横取り』『他業界への宣戦布告か?』と騒ぎ立てていて過去のオグリキャップ騒動の事も蒸し返していた。

「幸い、この手の雑誌への根回しは間に合った。だが…」

「インターネット上ではすでに話が広まっています、当分はつつかれるでしょう」

「芦名高等学校も取材に迷惑しているそうだ。今回の場合、学校そのものが蚊帳の外であるからな」

ましてやURRの管轄から離れた他種目競技にまで手を出している、シンボリドルフがいかな伝説であつてもうまく話は進まない。いわばアウエーである。

シンボリドルフ以下3名には自分でも意外に思うくらいきつい口調で今回は厳しく叱りつけたが、それだけでは済まないかもしれない。

「申し訳ありません、私の指導不足です。私からも厳しく指導いたしますので…」

「うむ、その話はすでに聞いている。十分に反省してくれたならいい、

しかしそれだけでは済まないこともある」

やはり、大きな処分は避けられないのか。

「陳謝！東条トレーナー以下、今回の騒動に関わった者の代表を選定し瀬名酒造と芦名高等学校への直接謝罪をしましょう！」

つまり直接顔を出して、今回の事を一度平謝りして来いということだ。処分としては穏当である。

「日程はこちらで詰めて、決まり次第お伝えしますので準備をお願いします。」

現段階では臯月賞の後を予定しています。先方にはすでに承諾を得ていますが、先方の予定にもよりますので本決まりではありませんん」

クラシック最初の冠を競う戦いは間近に迫っている、それを無視はできない。そしてこれはルドルフたちへの反省をより理解させる期間でもあるだろう。

今年の臯月賞も大荒れになるはずだ、向こうで余計なことを言わないように気を配る必要がある。

連れて行くとしたらシンボリルドルフ、ナリタブライアン、デイープリンパクトの三名は確定だろう、主犯である。

エアグルーヴも連れていきたいところだが、生徒会メンバーとしては日が浅いマルゼンスキーのみに学内の雑務をさせるわけにはいかない。残ってもらわなければならない。

「芦名市内での案内と瀬名酒造へはチームカノーパスが案内とバックアップを立候補してくれている、決して粗相のないように！」

「カノーパスが？」

「顔なじみが仲介したほうが話は進みやすいだろうとの南坂トレーナーからの提案だ」

あり得ない話ではない、むしろ当然だろう。ツインターボがシマカゼタービンの話をしないわけがないのだ。

もしかしたらどこかで顔を合わせているのかもしれない。

「感謝します」

「うむ、この話はとりあえず以上だ…では、ごく個人的な話をしよう」

理事長が表情を一気に変え、心配そうに眉をハの字にした。仕事としてではなく、一介の生徒を愛する者としての顔だ。

「ルドルフの様子は変わりないか？」

「はい、表面上は」

「そうか…まだ抜け出せぬか」

シンボリルドルフは今、スランプに陥っている。それは彼女自身すらも気づいていない、それこそ気付いているのはトレーナーやベテランの教師陣くらいだろう。

シンボリルドルフはまごうことなき天才だ、そして優秀で、努力家で、勤勉だ。それがあまりにもできすぎた状態で彼女をここまで押し上げてしまった。

その中で培われてきた責任感と精神性が問題だ。トレセン学園生徒会長として、皇帝と呼ばれるウマ娘として、今の自分である責任が彼女自身を騙している。

それこそ、赤の他人がどう言おうとも自分では絶対に認められない雁字搦めの状態で、頑固さというよりも自己暗示に近い状態になっている。

そんな状態にしてしまったのは他でもない。このレースの世界で生きてきたからだ。

「驚愕、前期は我々も手に汗握った。彼女たちのレースはまさに白熱、まさに伝説である。」

故に、ルドルフの焦りを助長させてしまった。そのことに我々は気付かなかった…」

シンボリルドルフはまごうことなき天才だ。伝説の七冠を達成し、学園の生徒会長の座に座り、日本中から尊敬と敬意の視線を浴びて『皇帝』と呼ばれた。

だがその席に座った彼女は心のどこかで気付いてしまった、彼女自身が無魔化しているどこかで感じてしまった。

頂点の席に座った彼女の『上』には何もなかった。目指される立場に上った彼女に『目指すべき目標』が見えなくなった。

停滞してしまった、進めなくなってしまう、自分が成長している



感覚を得られなくなってしまっている。

目標は見方を変えればいくらでも見えてくるものだと知る人は言うだろうが、当事者はそんな風には見えない、考えない、どこまでも苦しめる自縛状態に陥るのだ。

そんな自分の前で、スペシャルウィークが、トウカイトイオーが、そして多くの後輩たちがどんどん活躍して駆け上がってくる。

その成長を喜んでいたのは他でもないシンボリルドルフであり、同時にふがいなさを自分に感じていたのもシンボリルドルフだったのだろう。

後輩たちが成長しているのに自分は変われない、焦りを感じないわけがない、足踏みをしている自分にいら立たないわけがない、でも打開策が見当たらない。

だから試した、やってみた、そして迷走した。

思えば二年前、北原トレーナーにいきなりオグリキャップのスカウトを持ちかけたときから彼女は一種の焦りを覚えていたのかもしれない。

「光闇。前期は素晴らしいレースが多かった、我々は多くを失った……」  
前期のトレセン学園退学者数は過去最高である、何しろ入学した数より出ていった数のほうが多いのだ。

理由は多々あるが一番多く語られたのは『ここで戦える気がしない』『彼女たちに勝てる気がしない』『現実がよく理解できた』という言葉だった。

理由が多すぎた、あまりにも『強者』が多すぎた。

スペシャルウィーク、サイレンススズカ、エルコンドルパサー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイ。

トウカイトイオー、メジロマツクイーン、ミホノブルボン、ライスシャワー、ナイスメイチャ、イクノデイクタス、マチカネタンホイザ、ビワハヤヒデ、ウイニングチケット、ナリタタイシン、マヤノトツプガン、エイシンフラッシュ、アイネスフウジン、ゴールドシップ。

オグリキャップ、タマモクロス、スーパークリーク、メジロアルダン、ヤエノムテキ、サクラチヨノオー。

メイシヨウドトウ、マチカネフクキタル、テイエムオペラオー、メジロライアン、メジロパーマー、ダイタクヘリオス。

エアグルーヴ、ナリタブライアン、ヒシアマゾン、タイキシャトル。興奮が少し冷めればなんと異様な光景か、気が付けばこの素晴らしき才能だけでレースが組めるどころじゃない超エリート層の完成である。

さらにさほど有名でないにしても強い、別方面でも有名というならさらに多くいるのだ。

ゴールドシチー、エアシャカール、キンイロリョテイ、ファインモーション、アグネスデジタル、アグネスタキオン、メジロドーベル、ツインターボ。

サクラバクシンオー、ハルウララ、ユキノビジン、マンハッタンカフェ、ビコーペガサス、ヒシアケボノ、カワカミプリンセス、スイープトウシヨウ、クラースナヤ。

ベルノライト、ジャスタウエイ、シーキングザパール、スマートファルコン、マーベラスサンデー、ジャラジャラ、サンバイザー、アドマイヤベガ、トーセンジョーダン。

さらにウオツカ、ダイワスカレット、カレンチャン、ゼンノロブロイ、デーブインパクト、ハーツクライなど将来有望な次世代まで名を連ねまくっている。

豊作である、そしてそれが問題だった。

昨年はその輝かしい光に焼かれて多くが挫折して出ていった、そこそ地方トレセンや有名私立の手が回らなくなるほどに多くの有望なウマ娘たちが学園を去った。

そして今年はあまりに上が輝きすぎている、入学志願者が増えてもその後の脱落者も増えるのは目に見えていた。

勝負の世界は厳しいものだ、レースの世界は情け容赦のないものだ、走れなかったウマ娘は去るしかない、それが普通だ。

それを理解していてなお恐ろしい格差がここで生まれるのが予想できた。

踏まれたウッドチップが割れるような音が学園中で聞こえると

言つて、精神衰弱に陥つたトレーナーがいるほどに。

しかも前期活躍したウマ娘たちはまだ走れるのだ、まだまだ全盛期なウマ娘は多くいる。

海外遠征狙いはともかく、G1、G2などといった上位レースだけでなく、それを目指すG3などステップレースにも出てくるのだ。

そしてそんな強者を求めて、海外勢も日本に乗り込んでくるのが予想される。より今期は激しい戦いが予想された。

かのブロワイエを破つたスペシャルウィーク、凱旋門賞で戦い迫つたエルコンドルパサーはまさに格好の相手だ。

活躍したいのならその中に否応なしに飛び込んでいかなければならないのだ、ウマ娘も、トレーナーも。

そんな只中で、精神的支柱になる伝説の『皇帝』が揺らぐなど、あつてはならないのだ。

シンボリルドルフもそれを理解している、だからこそ、彼女をどうにかしてやりたい。

「東条トレーナー、ルドルフの事を頼んだぞ。また何かあれば知らせる、下がってよろしい」

「失礼します」

秋川理事長の言葉に東条トレーナーは深々と頭を下げながら理事長室を後にする。

廊下を歩きながら、ふと窓の外に見える歩道を見下ろすとサイレンスズカが軽いランニングを行っているのが見えた。

前期のレースで負傷した足はすでに完治しており、そこからブランクを克服して復活し、今は海外路線に舵を切つても自慢の逃げ足を武器に活躍しているウマ娘だ。

彼女もまた、どんどん成長していく強豪である。かつては自分が指導していたウマ娘ということもあつて感慨深い。だからこそ、ルドルフがこれを見たらと思うと気持ちが悪わかつてしまうのだ。

（自分の席か…今のルドルフには効果覲面だったろうな）

この最盛期で、後輩たちがどんどん前に進む中で、自分をその先に進めることができずに皇帝という椅子に縛り付けられたまま藻掻く。

そんな状態のルドルフには深く突き刺さったはずだ。それも自身が気づいていない、無意識に自分を誤魔化して無防備になっている所に突き刺さったはずだ。

ツバキプリンセスがどんな意図を持っていたのかはわからない、今のシンボリルドルフの状態を見透かしたか、あるいはただの嫌がらせだったのか。真偽は不明だ。

しかし結果として彼女とのやり取りはシンボリルドルフを独断専行へと導いた。

(だから彼女を求めた？もしかしたら自分もディープのように、と?) シマカゼタービンは異質だ、一般校生徒でありながら地方トレセンのトップスリーを蹂躪し、3冠ウマ娘を有する中央シリーズの猛者に模擬レースではいえ全勝した。

その実力差は東条自身も分かっている。あの時の4人は模擬レースだから力を抜いていたわけではない。あの時の4人は模擬レー

スだけにシマカゼタービンのほうが強かったのだ、速かったのだ、自分たちのほうが弱かったのだ。

その強さに何かを求めた、ルドルフが自覚していない心の悲鳴が何かを見出しているのか。

気を付けなければならぬ、東条は走り去っていくサイレンススズカの背中を見送りながら気を引き締めた。



シンボリルドルフは強かった、3度の負けを語りたと言われるほどにそこにはドラマがあった。

負けても仕方ない、この負けでまたルドルフは強くなる、そういう言い訳ができる負けばかりであっただろう。

だからこそ、彼女には必要なのだ。秋川理事長はそう考えていた。「敗北、彼女には負けを知ってもらう必要がある。それこそすべてを

出し切って、それでも届かぬという完璧な負けだ。

ことさら、この手の交渉事では彼女は存在するだけでも大きいのだ。負ける要素が見当たらない、押し通せてしまう」

故に、秋川理事長は意を決した表情でシマカゼタービンの詳細資料を睨みつけた。

「好機、彼女は素晴らしいタイミングで出てきてくれた」

他業界が目を付けていても今はただの一般のウマ娘、車両競技の大会で芽を出しつつあってもまだまだ無名だ。

彼女が皇帝の誘いを断り、敗北を味わわせても、根回しさえ怠らなければシンボリルドルフの名前は揺らがない。

彼女は何も心配する必要なく、うるさいことは大人に任せてただ全力でぶつかっていけばいい相手なのだ。

「成長、この失敗は彼女の糧になる。また一つ、殻を破れるだろう」

群馬の山奥でシンボリルドルフには失敗をしてもらう、それこそ言い訳できない失敗をだ。

そこで潰れてしまえばそれまで、しかしそこから這い上がれる強さをシンボリルドルフは持っているはずだ。

シマカゼタービンには申し訳ないが、その大きな壁としての役割を果たしてもらおう。

「彼女はシマカゼタービンをスカウトできない、と?」

「今のルドルフでは無理だ、あの子はウマ娘の世界で生きてきている。それ以外の世界はまだ知らない事ばかりだ。現に彼女はハチロクをウマ娘だと思いついていたのだろうか?」

たづなの不思議そうな表情に秋川理事長は頷く、知らない世界は山ほどある。今の秋川理事長が仮にトレセン学園を辞職することになり、その経験に目を付けた陸上自衛隊が雇いに来て、ウマ娘部隊を統括し運用してほしいと言われてもできるわけがないのだ。

秋川理事長やたづなならば『ハチロク』と聞けばウマ娘の名前かと首を傾げつつも、もしかしたら車か?と考えるような知識がルドルフにはまだ足りない。

スプリンタートレノAE86、通称・ハチロク。旧世代のコンパク

トスポーツカーの一車種だ。

秋川理事長も以前、生徒の関係で調べていなければすぐには気付かなかっただろうと思うほどに嫌な問いだ。

「不足、彼女にはシマカゼタービンを靡かせる要素がまるで足りていない。今のルドルフでは余計に、な」

実力の問題ではないのだ、理事長は調べ上げたシマカゼタービンの資料を思い出しながら確信する。

「隔世、シマカゼタービンと我々では住む世界が違いすぎる。それを理解しきれぬルドルフがうまくやる見込みは少ない。

そしてシマカゼタービンと自分の立つ場所に決定的な差があることに気づいたとき、彼女は自ら理解するだろう」

それが成長につながる、理解して自らを納得させられないほどシンボルドルフは愚かではない。

彼女の聡明さは秋川理事長自身もよく理解している、だからこそ彼女の成長が待ち遠しい。

彼女がそれを理解したとき、それは客観的に自分を見る機会になるはずだ、それだけでなくも新しい道を見る機会になるはずだ。

それで気付いてほしい、理解してほしい、シンボルドルフの道はまだまだ上がある。皇帝の椅子なんてただの休憩用ベンチでしかないのだと。

「伝説、かつて群馬で恐れられた3人のハチロク乗り、その一人である『瀬名茂三』の愛娘だ。

当然、走り屋としての技術を仕込まれている。ウマ娘の常識で縛れる相手ではない」

今回の出来事はシンボルドルフの成長につながる大きなチャンスだ。モノにする必要が絶対にある。

「走り屋としての彼女は理解できました、しかしそれでも解せません。彼女は明らかに『走る』ことにも心血を注いでいるようにも見えます。

レースで走る為ではないとしたら、なぜでしょうか？」

「それは彼女自身に聞かねばわかるまい。もしかしたら、彼女はもつと上を目指しているのかもしれない」

「と、いうと？」

「例題、例えば車に勝つために走っている、とかな？」

「可愛いところもあるんですね」

荒唐無稽な話ではあるが、ウマ娘が子供の頃にはよく描く夢だ。だからこそ、秋川理事長も何の気なしにありえないと思った。

## 第十一話

芦名展望台新道、芦名市の走り屋ウマ娘のホームコースとなっている。この特徴はスタートとゴールがわかりやすいことだ。

展望台は下層展望台、上層展望台と二つあり下層は街から新道を使って僅か500メートルのところにある。

その下層展望台と上層展望台はロープウェイでつながっており上り下りは楽、コースはその下層展望台と上層展望台をつなぐ山道だ。

下層展望台から上層展望台までおよそ2.4キロ、2400メートル。

ダービー坂と呼ぶ者もいるが、道路はアスファルトだし路面状態は良好とは呼べないので少数だ。

常に枯葉や小枝、ゴミが散らばっているし砂も多くて滑るときは滑る。電灯も普通の峠道に比べれば多いが暗闇が少ないわけではない。ウマ娘用に短縮化された峠というのが妥当だろう、それでもウマ娘にとっては十分スリル満点の怖ろしい道である。

小塚小町はその上層展望台の駐車場側のところでストップウオツチ片手にベンチに座っていた。

上層展望台は週末の夜間ということもあり、走ることが好きな芦名のウマ娘とその関係者たちでそれなりに賑わっている。

(けっ…こんなところで盛ってんじゃねーよ！)

当然そういう関係のカップルもいる、というよりウマ娘とのカップルのデートスポットでもあるのだ。ここは。

夜間はガチな連中ばかりが集まるので昼間ほど多くないとはいえそれでも甘い関係のコンビはいる。

思いつきり走っていい笑顔の彼女を迎える彼氏の健全な二人組が目映るたびに、彼氏いない暦11年歳の小町は嫉妬の炎に包まれる。

ああ憎らしや裏飯屋、今日の晩飯はイタ飯だ。

視界の端々に見えては居心地悪そうにしている芦毛のもさもさほできる限り気にしないようにしつつ臍を噛む。



(いいもんね、免許を取ったらいい男をナンパしてドライブデートするんだもんね!!)

そんな風に内心啖呵を切っていると、ポケットの中に入れていたスマートフォンに着信が入る。

画面を見ればメールが来ており、迎えを頼んでいた兄が下層展望台についたと知らせてきていた。

(…ワンビア、いやシルビアかなあ。やっぱりデートカーなら、かっこいいし安いし)

まだ運転免許を取得していないが、それでも取ったときのためにどんな車を買うかは常に考えては迷走している。

この時代はスポーツカーが多く復刻して街を賑わせている、そうすると車選びはどんな人間も難航する。

どんな車種が自分に一番似合っていて魅力を引き出せるか、それを見極めて自分に合う車を選ぶのが重要だ。

それができなければ高い高級車に乗っていても、世間的には評価の高い外国産車を乗り回してもカツコよさは得られない。

似合わない外車を乗り回す金持ちボンボンより軽トラのキャリアを堂々と乗りこなすそこら辺の爺様のほうがかっこよく見えたりするのを小町は知っていた。

(でもS13はちよつとじっくりこなかった、180もそうだったし。WRXも違和感あったし…ハチロクは、ダメ。想像できねえ)

なお知り合いの車まで試した限り、ピンと来たのは瀬名家のパツソだった。可愛いがしつくりは来た。

しかしコンパクトカーである、ちっちゃい体躯がいささかコンプレックスな自分がさらに小型でかわいいコンパクトカーを乗り回したら余計にちっちゃく見える。

良い車もあるのは知っているが親友がゴツイのを乗り回しているのを知っているとちよつと悩みどころだ。

(というか知り合いに小さめの乗り回してる奴少ない…爺様のキャリアとお婆さんのパツソのほかには思いつかねえ)

ちなみに瀬名酒造の軽トラは論外だ、アレは社用車で会社の車であ

る。どうしたもんか、免許を取る前に車屋に行くのもなんか気が進まない。

あーでもないこうでもないと悩む小町。

「次が来たわ、誰かしら？」

臍を噛んでいると同じように仲間を待っているだろうウマ娘の声に意識が現実に戻る。

駐車場入り口のほうに目をやると、暗い峠道の奥から二人の人影が大きく肩で息をしながら走り抜けて駐車場に走ってくるのが見えた。

芦名高校のジャージに身を包んだクイーンベレーとテューダーガーデンだ。クイーンベレーが一バ身差をつけており、テューダーガーデンがその後を追ってきている。

その瞬間に居合わせた者たちから応援の声が上がると同時に、ゴールということになっている駐車場と展望台の境を抜けて二人とも一気に体を投げ出した。

「うっしやあーあたしの勝ちだ!!」

寝転がったまま右腕を突き上げるクイーンベレーだったがすぐにその手は頰れる。

隣で寝転がるテューダーガーデンはしゃべる余裕すらなさそうでひいひい息をしたまま首を横に振る。

その様子をストップウォッチ片手にベンチに座って待っていた小町は、タイムを見てやや不満を覚えながらも納得はしていた。

(2分35秒01、40、登りじゃまあ形になってきたか)

登りのタイムとしてはこの展望台ルートでは間違いなくトップクラスの速さと言えるだろう。

上には上がいるとはいえ、展望台コースを走り始めて一年も経っていないのにより長い経験を持つ地元ウマ娘にすでに並ぶこの成長速度である。

さすがは元中央シリーズ経験者であり元トレセン学園生徒というだけある凄まじい才能だ。

「二人とも、喜んでるところ悪いけど一回だけでぶっ倒れてるようならまだまだ体力が足りないよ」

とはいえ、まだまだスタミナ面では不安しかない。シマカゼタービンなら2400程度の登りで息を乱しはしないし、すぐに往復で降りて突っ込むのが普通だ。

シマカゼは極端な例であるが峠の走り屋と共存するウマ娘たちならば少なくとも一本で倒れるほど消耗はしない。

なによりコースによっては勝負がつかない限り、登りと降りを延々と繰り返すこともあるのだ。

「この分じゃ、やっぱりあいつらもシマカゼが相手かな？」

「姐さんは高橋兄弟に集中させてくださいよ。レッドサンズが動くなから、赤城の擬音もセット。そいつらはあたしたちが千切ります」

「その、とおり、です、ま、まけて、られません」

「テューダー、あんたはまだ喋んな」

走り屋にウマ娘がいるというケースは多いが生身で走る場合は別だ、元々車が主体で人間主体の走り屋と生身で走るウマ娘では走るステージが違う故の差別化と言えよう。

また小回りが利いて使える道が多い生身のウマ娘は走る道を選ばない側面がある、彼女たちは走ろうと思えば街中の裏路地もコースにできるのだ。

だが別チームとして交流が深い場合があるし、中には面白がってメンバーに加えているところもあるにはある。結局匙加減ということだ。

「赤城の知り合いからすれば陣容は変わらず、十中八九登りでトコトコ、降りてドカドカ。どっちもあんたたちより経験は上、歴も長い。正直、力不足だよ？」

トコトコ、ドカドカとはシマカゼタービンも何度もやりあったことがある赤城の走り屋ウマ娘の姉妹だ。

元々は水沢トレセン学園の生徒だったが、一身上の都合でやめざるを得ずレースの世界を諦めるしかなかった。

けど走ることはやめられず、引越して新天地となった群馬の赤城山で赤城レッドサンズと出会って今に至る。

赤城の擬音姉妹と呼ばれ、赤城の走り屋ウマ娘の中では頂点だ。

赤城レッドサンズのナンバー3に頼み込んで車と並走してもらうくらい気合いが入った練習をしていて、時折別のコースにも遠征してくるほど向上心が強い。

この芦名でも何度か顔を合わせてはシマカゼタービンに千切られており、その縁もあつて友人である。

その二人に比べたら彼女たちはやはり格下だ、彼女たちには走り屋と並走訓練をする技量すらまだないのだ。

「解ってますよ。でも先輩、それだと姐さんの二足草鞋が続きっぱなしになります。高橋兄弟相手にそれはまずいですって」

それも含めてあのバカは楽しんでるんだけどね。車で足でとどこまでも突っ走って、疲れ果てながら勝ちきって心底楽しそうな顔で笑うシマカゼを小町は思い出す。困った親友である。

「ま、あの兄弟相手じゃ絶対二足草鞋なんかさせらんねえってのも事実か。でもこれじゃまず、あんたたちには無理」

「だから、こうして、はしってます…」

「走れるだけじゃダメなの。まず体力をつけること、一回走るたんびに倒れてちや話になんない」

タイムは悪くはないのだ、普通のレースを目指すウマ娘ならば合格だ。中央に戻れば周囲をあつと言わせる脚力になっているだろう。

だが峠を走るウマ娘としては不合格、登りも降りも平地競争での走りをする傾向がクイーンもテューダーも強い。

そのせいで余計に体力を使ってしまうている、こればかりは数をこなして体にしみ込ませないとどうしようもないのだ。

「シマカゼ並みに、とは言わないからそうやってぶっ倒れないくらい余裕つけなきゃ勝てやしないよ。」

そんなバテバテになるんじゃないや、途中から頭回らないでしょ？」

「そ、その通り…」

「最後まで頭が回んなきゃ危なっかしくて走らせらんないって、死ぬぞ」

これには何の比喻もない、文字通りだ。ウマ娘が走るコースとみられているとはいえ、走るのがまぎれもない公道だ。

一般車や一般通過ウマ娘が上がってくる乱入は日常茶飯事、そうでもなくてもこの道にはレース場にあるようなセーフティーはない。

そんな場所で全力疾走するウマ娘がミスをしてクラッシュしたら大惨事だ。

コーナーを曲がり切れずに壁に激突、よしんばぎりぎり持ちこたえても生身の体を擦る。

ガードレールにぶつかって引つかかれる、あるいはそのまま向こう側へ真つ逆さま。

降りのレースでコケてアスファルトに四点倒置、最悪そのまま摩り下ろされて新鮮な挽肉の完成である。

車の走り屋よりもこういう面では生身のウマ娘のリスクは極めて高いのだ。

「登りならまだしも、降りでこけたらうまくこけなきや摩り下ろされるからね。ここらで死人は出したくないよ」

走り屋はどこまで突き詰めてもはみ出し者、何が起きても自己責任だ。それこそ走ってミスって死んだとしても、責任を問われるのは死んだ自分でなければならぬ。

そうして死んでいったウマ娘が何人になるか、だれも知らない。小町自身、そういった身内は見たことはない。だが、いるのは確かだ。

ある日を境に急にコースに現れなくなった常連は何人もいる、そしてそうした日の翌日にこの坂の交通事故の知らせがネットに上がる。

そんなことは理解してる、とテューダーガーデンは頷きながら顔を上げた。その目は真剣そのものだ。

「ここはレース場みたいに事故つても助けてくれるスタッフはいない、解ってます。でも、走りたいですから」

所詮は公道レース、違法なただの暴走行為、それを理解したうえで走り屋は走る。ウマ娘も人間も、どんな理由であれ走りたいから走るのだ。

「だったらもっと努力しなきゃね。もし事故つたらまたブン屋が戻ってくるよ」

「それはメンドクサイ」

でしょ、小町は頷く。最近は芦名高校周辺にゴシップ記者やら有名なウマ娘雑誌の記者がうろついて迷惑していたのだ。

最終的には一心校長以下教師陣の無言の圧力と鋭い視線、平平凡凡な断り文句から感じる殺気の前に退散していったのだがまだうちよろはしている。

そういうしつこい記者は大概二つだ、ただ仕事熱心で諦めきれないだけのまともな記者か、あるいは腐り切ったゴミか。

「ああいうのを見るとトレセン辞めてよかったって思っちゃいますよ、ああいうの苦手だ…」

無遠慮な2流雑誌記者に元トレセン生ということがばれて質問攻めを食らったクイーンベレーは顔を渋くして頭を振る。

彼女もトレセン学園ではレースに出ていた以上マスコミ対応には慣れているつもりだったが、その経験を超える無礼な質問には辟易していた。

それを他の生徒にもしている記者が複数いた、あの連中にとってはいつものことなのだろうがやられる側からすればたまったものではない。

「あー…あの佐瀬教頭が杖もって巡回するくらいだしね」

「エマ先生も怒ってましたね、生徒の精神に悪いって」

芦名高校の佐瀬甚助教頭が瀟洒なちよつと長い杖をつきながら校区周辺をパトロールしている姿は、知る人が見ればまず逃げる。

どこにでもいる教頭先生に見えるが、彼も芦名高校の例にもれず芦名流剣術・居合の使い手でれつきとした武闘派なのだ。

きつと素行の悪い記者を探して街を練り歩いていたら違くない。おかげで記者たちの暗躍はだいぶ収まった。

「やめやめ、いったん引いたんだからもうやめよ。そーいや、最近は秋名で亡霊が出るって聞いたつけねえ？真つ白な車の亡霊がさ」

いら立つ話題から話を変えるために小町はここ最近噂になっている幽霊の事を口にした。秋名山に出没する幽霊の走り屋という噂だ。

曰く、秋名の山では事故で死んでしまった走り屋の亡霊が自分が死んだのも気が付かないまま走り回っており、まだ生きている走り屋た

ちを見つけると勝負を仕掛けてくるらしい。

夜に走っているといつの間にか白黒でぼんやりとした車が真後ろにいて、いくら突き放そうとしても離れずあり得ない速さとスピードで追い抜いていく。

古い車という以外見分けられないまま追い抜かされ、次のコーナーを曲がる頃には前に何もいない。

そんな経験をした走り屋が何人もいるのだが、ほとんどが遠征者でなぜか地元の走り屋には経験者がいない。

良くある話だ、群馬じゃ走り屋やウマ娘が死んでもずっと走り回ってるなんて噂がごまんとあるのだから。

ちなみに芦名にもそういう話はあるが、正体は親友のシマカゼタービン筆頭の五人組である。

「ここにも出るかもね」

「怖いこと言わないでくださいよ、温泉行きづらくなるじゃないですか」

このままじゃあんたらがそれになる言うところんじや、そもそもこのコースだってもう何人の血を吸ってるかわかったもんじやないってのに。

「だったらまずは体力付けな、死んだら温泉になんていけやしないんだから。最後まで考えが回るくらいになったら走ってもらってもいい」

「ヤキはながいい…」

その通り、先は長い。この世界に年齢制限はない、好きな時に走り好きな時にやめる、そういう世界だ。

「ほら、少し休んだら行くよ？あいつの走りを見逃したくないでしょ、そろそろいい時間だしね」

「あ、ほんとだ」

小町がスマホの時計画面を見せるとクイーンベレーとテューダーガーデンは目を丸くする。

午後9時を回ったころだ、そろそろ芦名の峠には町の走り屋たちが集合し始める。

しかも今日は群馬トレセンのモータースポーツ部一行の遠征が行われており、群馬トレセン一行とのバトルも予定されているのだ。

今日はシマカゼタービンもバトルに参加する、相手は群馬トレセンモータースポーツ部の部員で車の運転はそこそこうまい。

下層展望台の駐車場にはもう兄の小塚良助が、愛車のワンピアカスタムで迎えに来てくれている。

このまま降りて、兄の車で芦名の峠コースに直行だ。クイーンベレーとテューダーガーデンも歩けるくらいには回復してのそのそと立ち上がる。

小町は二人と駄弁りながらロープウェイの乗り場のほうに足を向けて、ふとうろちよろしていた芦毛の髪がもさもさしたウマ娘を思い出した。

(…ま、いつか)

振り返るとやはり展望台をこそこそ歩き回っては顔を真っ赤にしたり居心地悪そうにしている芦毛もさもさ。

何を考えてあんな有名な有名人がうろちよろしているのかなんて知らないが、触らぬ神に祟りなしだ。

小町は特に彼女に声をかけることもなく、面識があるかもしれない二人にも特に教える必要も感じなかった。



## 第十二話

芦名山の峠道は週末の夜になると顔を変える。ただの寂れた峠道は走り屋たちのコースになり、そこには今日もその走りを見たがる好き者たちが顔を出す。

午後10時を回ったころ、その峠道をセンターラインなど知らないとばかりにはみ出して2台の自動車が駆け上がりつついくのを見てギャラリーたちは沸いていた。

前に行く一台はシツクな黒色のトヨタ『クラウン・アスリートV』。芦名山の走り屋のウマ娘、ツバキプリンススが乗る芦名の強者だ。

群馬のローカルウマ娘レースシリーズでも名の知れた彼女が芦名山でも力強い走りを見せることは、知る人は良く知る事実。

その彼女は、愛車の運転席の中で冷や汗を垂らしながら必死で登りの峠のカーブを内へ内へと詰めていく。

(相変わらず速い、走りこんでるだけあるよ)

ツバキプリンススは愛車のトヨタ・クラウンアスリートVのシフトレバーを操作しながらバックミラーに目をやる。

真後ろには相変わらずダークブルーの親友の車が張り付いている。

スバル『WRX—STI』。親友のシマカゼタービンが乗りこなす4WDスポーツカー。

これが芦名のナンバー2として認められる走り屋としてのシマカゼタービンの姿だ。

コーナーを抜けてすぐさま加速、短い直線だがシフトレバーを2速に入れて切り替える。

改造して取り付けたマニュアルトランスミッションは、自分好みにスムーズな変速を実現してくれているが、それでもまだ物足りない。

シマカゼタービンのWRX—STIのカスタムを自分もよく知っているが、それを理解したうえで異常な速さに感じてしまうのだ。

相手は自分以外にも何本かすでに相手をしているのだが疲弊して

いるとは思わない、彼女の尋常ではないスタミナは走り屋としても大いに発揮されている。

大の大人が疲弊するようなバトルをしても、彼女は最後の最後までいつも楽しそうにしながら息をほとんど乱さないのだから。

（笑ってんだろうな、きつと今も楽しくて楽しくて仕方ないって顔してんでしょ）

自分もそうだ、彼女とこうして走れるのは楽しくてしょうがない。競り合えているのが嬉しいくらいだ。

（張り付かれてる、こうなるとこいつはいつつも厄介なんだから）

芦名峠で走れなくても、群馬トレセン学園からのツテで近くのレーシングコースなどで散々走り回って技術は高めてきた。

それなのにこうも簡単に後ろにつかれて、その上でまったく引き剥がせない。

真後ろを走るWRX―STIの姿から感じる重苦しいプレッシャーに背中が押されるような感じがする。

速く行け、速く行け、速くしないと抜かれるぞ、とどこまでも追いつて自分を掛からせようとしてくる。

でもそれに乗ったら負けなのだ、例え登りの勝負でも一瞬の運転ミスが勝敗を分けてくる。

それは自分たちが走る平地のレースの世界と同じだ。

（くそッ、当たるか当たらないかでいつも冷や冷やする煽り、よくやるわよ）

自分の真後ろ、バンパーを小突くか小突かないかのギリギリの線でぴたりと止まるWRX―STIから感じる威圧感にアクセルをつい踏みたくなる。

親友の運転技術はよくわかってる、負けているのも理解できる、でもそれが当然だなんて思わない。

（次、右コーナー！）

エンジンを吹かし、思い切り加速しながら車体を一気にインコースギリギリまで寄せる。

続いて一瞬だけブレーキ、車体の遠心力で後輪を浮かせパワースラ

イドの状態でカウンターを取りつつ一気に抜ける。

登りでは少しでも気を抜けば推力を一気に失う、そこをエンジン全開の状態で抜けることでロスを少なくしつつ一気に立ち上がる。

一気に直線突き抜けて左コーナー、最大限、びっちりインコーズに寄せたグリップ走行で一気に曲がり切る。

どこまで寄せたかなんて考えない、限界まで寄せた全力の攻め込みだ。

(徹底的に振り回してやる、これでぴったりくっつけないでしょ?)

インコーズギリギリを攻めぬきながら、コーナーが終わる直前でさらにリアタイヤをわざと滑らせてバンパーを振りながら派手なパワースライドを演出する。

煽るつもりならこちらも対応するのみ、パフォーマンス重視のスキルもこういうところでは十分に役に立つ。

挙動が荒れるクラウン・アスリートVのバンパーフックを食らってはたまらないとWRX—STIが距離を空けた。

それでもギリギリ当たらない線まで後退したのを見て思わず安堵する、これで少しだけリードだ。

(リアタイヤを結構使っちゃった、しばらくおやつ抜きだわ…)

その代償にリアタイヤの消耗が激しくなる、今まで使ってきたタイヤはもう交換しなければならぬだろう。

当然、マイカーに使っているタイヤなのだから部費ではなく自腹である。タイヤの交換ですぐ素寒貧になるようなお財布ではないが、気になるモノは気になる。

余計なことを考えた、ツバキプリンスは意識を切り替えてハンドルを握り直す。

(今度こそしのぎ切ってみせる、さあ、どう——)

クラウンのバックミラーに目をやる。真つ暗なそれを見た瞬間、ツバキプリンスは背筋に怖気が走った。



聞き慣れたスキール音が峠に響き渡る。そのもつれ合う車が出す音を聞き分けたホクリクダイオーは愛車のメタリックグレーのレクサスRC・Fのエンジンルームから顔を上げて、その音に耳を澄ませた。

聞き慣れたスキール音は二つ、ツバキプリンセスのクラウン・アスリートV、シマカゼタービンのWRX―STI、おそらく併走しての纏れ合いに入ったところだろう。

今頃、内側に入ったクラウン・アスリートVが外側でぴたりと張り付くWRX―STIを振り切ろうと必死なはずだ。

「追い付かれたね」  
「ええ」

隣に駐車しているオリーブドラヴ色のSUV、パジェロVR―IIの運転席から顔を出した色白のウマ娘『ノルンファング』が頷く。

まるで白人のような白い肌にエメラルドのような瞳、真っ白なプラチナブロンドの髪をポニーテールにした彼女は、まるで海外の映画女優然としているが生粋の日本ウマ娘である。

少し外に身を乗り出すとB80の胸部装甲が窓枠に押しつぶされながら彼女を支える、常日頃のトレーニングでさながらゴム毬のごとき存在だ。

見た目と雰囲気から深窓のお嬢様っぽいとよく言われるがホクリクダイオーは知っている。

こいつはド天然ミリタリオタクのアウトドア派で、まるで外見とは似ても似つかない面白枠である。

「そろそろ…いえ、ツバキが粘ってます。タービンが一度離れて…いえ、仕切り直しましたが」

「でもそろそろL字…あ、タービンが飛び出した」

二つのスキール音の後に一拍空けて連続でなるエンジンを吹かす音。WRX―STIのEJ20エンジンの音のほうが早く、思いきり踏んでいる。

ツバキのクラウン・アスリートVのエンジンも踏み込んでいるのだろうがタービンの自殺まがいなの踏みには届いていない。

「ちよつと見に行きますか」

「そうですね」

調整を終えたエンジンルームから手を引っこ抜き、ボンネットを閉め直してオイルまみれの両手を濡れ布巾で拭くとノルンフアングも愛車から降りてくる。

二人並んで足を向けるのは、群馬トレセン学園のミニバスの横に設置された仮設本部、通称『野戦司令部』だ。

在日米軍の放出品を安く買い上げた軍用テントで構成されていて見た目は物々しい野戦司令部そのものであるからそう呼ばれるようになった。

その中にたむろしているのは群馬トレセン学園のウマ娘たち、モータースポーツ部の部員と見学者だ。

「トレーナー、ツバキ抜かれた？」

「トレーナーさんなら外してますよ」

「あ、クラちゃん」

設置されたモニターに映し出された中継映像に釘付けのウマ娘たちに向けて声をかけると、その言葉を返してきたのは中継映像を届けるドローンの操作の担当ウマ娘、クラヴァット。

ホクリクダイオーとノルンフアングの登場に、周囲から驚いた声が返ってきた。

「マジで音だけで当ててきた…」

「嘘でしょ先輩、解るんすか？」

「何の話？」

「いや、先輩二人なら音で分かるよって話してたもんで」

中継モニターの脇のコントロールスペースで、中継機材であるカメラドローンを制御しているクラヴァットが顔を上げる。

彼女の前にもモニターがあり、そこには中継映像を送ってくるカメラ付きドローンの精密情報が随時更新されていた。

「ついでに言うとL字でタービンがぶち抜いたね、バカみたいにエン

ジン吹かして」

「正解です、差し込まれて一気に。しかも一瞬ライト消してましたよ」  
「相変わらずやりますね」

それはシマカゼタービンの得意技だ、本気になるこそそれこそ狂ったように勝ちに来るから怖い。

群馬トレセン学園のミニバスの横に設置された仮設コントロールスペースに入り込み、後輩のクラヴァットが座るドローン操作スペースのモニターに映し出された映像を覗き込む。

全体的に緑っぱい映像は暗視装置を介した映像のためだ、夜間でありながら峠をひた走る二台の車をしっかりとらえている。

「画質はちよつとぼやけちゃうか、もうちよつと近くにできない？」

「無理ですよ、安全ギリギリです。これ以上上げるとドローンが振り回されて余計に乱れます」

「そっか、追従能力の方は？」

「そこはいい感じですよ、二人とも思いっきり飛ばしてくれてるんで他の走り屋でも通用するかと」

レースをする車に電波発信機を付けてもらい、それをターゲットに追従するようプログラムしたドローン2機の空中中継はまずまずうまくいっているということだ。

より細密な情報と映像は各車に搭載されているカメラと、各所に配置した映像要員たちの撮影を統合するよりほかないだろう。

クラヴァットが言わんとすることは理解できる、ダイオーもそれは理解していたがこういう技術を見るとつい夢を見てしまうのだ。

「しようがないか…ま、これでいつでも北原さん達を招待できるね」

以前のカサマツ遠征で世話になった北原トレーナーとサウスヒロイン、柴咲トレーナーとフジマサマーチの驚く顔が目に見えぬ。

走り屋でも何でもない彼女たちに自分たちの世界を垣間見せるならこれくらいはしないと相手が退屈でしょうがない。

カサマツトレセン学園の彼ら彼女らには大変お世話になったのだから、できる限りのお礼をするのは当然である。

「良いんですか？カサマツにうちの秘密教えちゃって」

「いいのいいの、この前お世話になったんだしお礼しなきゃ」

「さんざん千切って煽ってたじゃないですか」

「それはそれ、これはこれ」

カサマツ遠征に付き合ひ、ノルンファングとホクリクダイオーがカサマツトレセンで走る姿を見てきたクラヴァットが冷たい目線を送る。

別に悪いことはしていない、遠征の合間にカサマツトレセンでトツプのフジマサマーチとサウスヒロインを可愛がって千切り倒してきただけである。

それでいて仲良くなってくるあたりそれなりにうまくはできているのだが、やはり群馬トレセン学園の特殊性を広めるとなるとクラヴァットは少し気が引けるようだ。

「これ違法レースなんすけどね？皆さん麻痺ってません？呆れられそうで怖いですわ」

「そりやしようがない、それが正しいしね。クラちゃんは東京生まれだから馴染みないかもだけど、そういうもんよ」

群馬の田舎に生きるウマ娘ならば、大なり小なり一度は公道でレースをしたことはあると言われている。

どの自治体もウマ娘が自由に走れる小さなコースを整備しているものだが、それでも数には限りがあるし何より狭く整備もまばらで荒れたコースだ。

思春期真っ盛りの夢を追うウマ娘たちはそれでは満足しない、夢を追いかけるために多少の危険を呑み込んでより追い込める環境で走る。

それが群馬では走り屋たちというお手本を真似たスタイルだったという事だ。

「私も群馬には縁がありますよ、余所者じゃありません」

「解ってるって、じゃ、次もよろしく」

「見ていかないんですか？」

「そろそろ場所取らないとゴール地点が埋まっちゃうからね」

そういうとホクリクダイオーはノルンファングと連れ立って野戦

司令部を出る。

今日は群馬トレセン学園が遠征にきているということもあり、走り屋のレースだけでなくウマ娘たちの練習も見物と考えるギャラリ―も多くなっている。

宣伝などは全くしていないのに話が広まっている当たり、走り屋のネットワークも広くなったものだ。

「今日はどっちが勝つと思います?」

「あそこで勝負を賭けられちゃってるし…タービンかな?」

「ツバキが意地を見せるかもしれませんよ?」

シマカゼタービンはこの芦名ではナンバー2の実力者だ、ツバキプリンセスも上位に位置してはいるが実力ではシマカゼタービンのほうが上とされている。

事実ではあるがそれだけで勝ち負けが決まるわけではない、この芦名でもツバキプリンセスがシマカゼタービンを車で負かすことは何度もある。

だからわからない、ホクリクダイオーとノルンファングもシマカゼタービンとは常に張り合える。

今日はどうなるのかワクワクしながらホクリクダイオーはガードレールから少しだけ身を乗り出して、峠の出口の暗闇に目をやった。

「これは…すごいな。これが走り屋の世界というものか…」

「あれ?」

そこでふと、自分より少し前のあたりに陣取りながら周囲を忙しく見まわす芦毛のボリユーム満点な長い髪のウマ娘が目映った。

普通ならこのあたりでは見ないだろう、中央シリーズの有名人だ。眼鏡を変え、メイクと肩パッドで体格を変えてよく似た別人に変装しているようだがダイオーの目は誤魔化せない。

(ビワハヤヒデ?なんでここに?まさか妹の敵討ち?)

群馬トレセン学園で彼女の妹、ナリタブライアンたちがシマカゼタービンに全敗を喫したのは学園内では有名な話だ。

一般校のウマ娘がそれをなしたということもあり、多少なりともプライドのある学生たちはあまり校外では話はしないが。



そのナリタバライアンの姉がビワハヤヒデ、中央シリーズではライバルのナリタタイシン、ウイニングチケットと一緒に『BNW』と呼ばれるトップの一角である。

理由はどう考えてもシマカゼタービンだ、ホクリクダイオーは所在なさげにお上りさん状態のビワハヤヒデを見ながらふと思いついた。

ちようにいいから少しおちよくってやろう、意地悪そうな笑みを浮かべて声を潜めてニシシと笑う。

ビワハヤヒデに気付いていないノルンフアングに彼女の存在を教えてから、こつそりと視野の外から近づいて小さく軽い口調でビワハヤヒデに声をかけた。

「あれれー？中央のBNW様がなんでこんな田舎に？」

瞬間、なぜかぎよつとした顔になって振り向いたビワハヤヒデがさらに信じられないような表情でホクリクダイオーが一番言われたくない名前を出してきた。

「な!?!トウカイテイオー!?!」

トウカイテイオー、自分によく似た中央シリーズの不屈の帝王、いつも自分を偽物だのそっくりさんなんだのと話題にしてしまう有名な人。

おかげで自分は大迷惑だ、そっくりなだけで余所者には勝手に騒がれ、そっくりさんだとわかると余所者に勝手に落胆される。

不愉快だ、自分はホクリクダイオーだ、トウカイテイオーのそっくりさんでも偽物でも何でもない!!

「ちがわい！僕はホクリクダイオーだ!!」

ビワハヤヒデの驚きに一瞬周囲がどよめくが、ホクリクダイオーを知る常連はすぐに気付いて和やかな笑いに変わる。

「落ち着きなさい」

一番嫌いな間違われ方をしたホクリクダイオーの言葉に熱が入ったのを感じ、ノルンフアングはやれやれと肩をすくめながら彼女の頭にチョップを落とす。

その間にビワハヤヒデはホクリクダイオーの体を舐めるように見直す。

そして何度か全体を見て、胸部と顔を何度も二度見して信じられないといった表情で目を見開いた。

ビワハヤヒデの気持ちもよくわかるノルンはやれやれと首を振る、何故ならホクリクダイオーはトウカイテイオーを一回り大きくして年相応に成長している以外はほとんど同じである。

それこそ大きいだけで顔つきも体つきも似ていて、逆の耳に着けている髪飾りまで同種のものだ。

一番の違いは胸の大きさだろう、B82のロケットみたいにきれいにピンとそそり立つソレはまさに大量破壊兵器である。

「しようがないでしょう。あなたは似すぎなんですよ、髪型くらい変えたらどうですか?」

「な!?!」

「ミホノブルボンじゃありません。ノルンフアングと言います」

どうぞよろしく、と柔和に微笑んで会釈をするノルンフアング、肌色と髪色が全く違うこともあり目立たないが顔立ちはミホノブルボンそっくりらしい。

「これだから東京もんは…タービンならまだ帰ってきてないよ、今走ってる」

「やはりここにいるのか…」

「あー…そういうこと」

少し疲れたようなビワハヤヒデにダイオーは生温かい目を送る。芦名の走り屋ウマ娘がホームコースにしているのは展望台コースである為、噂のシマカゼタービンもこちらをよく利用すると勘違いする走り屋ウマ娘は実は多い。

彼女が車の走り屋だと知っていても、ウマ娘が優先的に使えるコースがあるのに車と同じコースを利用するとは考えづらいからだ。

理由としては簡単で、単純な住み分けと競合による場所取り合戦を避けるため、そして車両との併走が危険であるからである。

よって勇んで乗り込んだはいいがデートスポットでもある展望台でカップルの甘い雰囲気タジタジになり、出会えずにご帰る途中で車のコースに興味湧いて見学しに行ったら遭遇したという話

は多かつたりする。

「だったらいいところに来たね、タービンなら今走ってるから待たればすぐ来るよ?」

「そうか…ところでなぜ理由がわかった?」

「この前のことでしよう?それしか理由ないですよ」

群馬トレセン学園で撮影された模擬レースはノルンフアングとホクリクダイオーも見ていた。

さすが日本トレセン学園で学び、日本ウマ娘レースの最高峰であるG1戦線で鎬を削る猛者たちだ。

ツバキプリンセスが本気で当たっても2度目でデーパーインパクトに確実に勝てる程度、ほかの3人相手では厳しい戦いになるはずだ。

それはノルンフアング、ホクリクダイオーとしても同じ、目の前のビワハヤヒデが纏う強者としての雰囲気を実力を感じ取っていた。確実に勝てるビジョンが思い浮かばないのだ。

目の前のビワハヤヒデは一目見るだけで恐ろしく出来上がった肉体を持っていた。変装で誤魔化していない部分の筋肉の付き方、足腰の使い方、その節々から感じるオーラが違う。

レース前ではない休養中でさえこの完成度、本番となればさらに研ぎ澄まされて走るために生まれてきたウマ娘の理想となるだろう。

「勝負しに来たの?だとしたら今日はだめだよ、タービンはうちの部員と走る予定なの」

「そのつもりはないよ、ただ見物に来ただけさ。彼女の相手というのは?」

ビワハヤヒデの問いにダイオーは無言で駐車場の一角を指差す。

そこには群馬トレセン学園モータースポーツ部が所有しているスポーツカーが2台横並びに停められており、ドライバーの尾花栗毛のウマ娘が車の前で準備運動をしていた。

プロレーシングドライバーの世界を目指す先輩、グッドフェイスだ。

足での勝負では芽が出なかったが車両競技に切り替えるため

き腕を上げてきており、本人も自慢の兄と同じ道を目指して邁進している。

「彼女か。ん？後ろの車はS13と180SX…なかなか渋いチョイスだな」

「ほほう？」

ホクリクダイオーはビワハヤヒデの言葉に少し感心する。

「その通り。ここでクイズ、あの二車種に共通することは？」

「二車種は実は同型で部品が共通のものが多く整備しやすい、スポーツカー復活期を支えた名車という話かな？」

スポーツカーの歴史は栄枯盛衰、栄えた時期もあればすたれた時期もあった。

世界中で排ガス規制が叫ばれた時期は大排気のスポートカーは格好的、騒音被害となればぐうの音も出ない。

さらに法改正による製造基準や安全基準の再設定、燃料価格の高騰時期はお財布に大ダメージなど、様々な要因から人気が低迷。

また旧式化により多くの車種が生産終了していき、新製品の開発すら危ぶまれ、走り屋も暗黒期にあったという。

しかしある一社が世に送り出した名車からスポートカーの再興が始まり、さらにそれを走れなかったウマ娘たちが目を付けたことで流れが変わった。

ウマ娘は走るために生まれてきた、走ることに生きがいを感じる者がほとんどだ。

そして様々な理由で走れない、走ることがかなわなかったウマ娘たちもまたその衝動を抱えて生きている。

走りたい、走れない、でも諦めきれない、もっと早く走りたい、もっともつと競いたい、もつとあの世界に身を置きたい。

そんな焦がれる彼女たちの目の前に現れたのがスポートカーであり、往年の生き残りたちだったのだ。

エンジンを吹かせば自分の至れなかった世界に連れて行ってくれる新しい『相棒』だ、それに手が伸びるのは必然だった。

一度火が付けば後は広がるばかり、中古車市場は一気に売れたうれ

しさと一気になくなる在庫に恐怖した。

そしてその扱いに熟知した者たちも、見た目がキレイで心に熱いものを抱えたご同類の頼みとあっては手ほどきを断ることはなかった。

「日産が最初に再生産に踏み切ったスポーツカーだ、今なお売れ筋だそうだな」

「正解。多い分中古も安いしね、だからうちも使えるんだし」

そうなると今度は企業が困った、売れるのは良いがどうにも手札が物足りない。

新車種が売れるのは良いが、その種類が少なくて飽きられそうに見えた。中古車市場の大きな動きも見逃せない、新しい物よりこつちのほうがいまいとラインナップがあつて人気とすらいえた。

しかし所詮は中古車であり残弾は少ない、経年劣化などによる個体差も無視できない。

放っておいたら絶対に事故多発でせっかく盛り上がっている業界の火が消えるし、今ある需要も一気に消し飛ぶ。

どうしよう？と悩んでいたそんなときある社長がポロリといった。

『再生産してみるか？』

もちろん安全基準をクリアし現行法に合うようにする必要があるが、意外なことにすんなり終わった。

古い技術では不可能だったり難しかった強度の強化、新素材フィルターを用いた排気ガスの抑制などが、技術進歩と新素材の使用によって基準をクリアできてしまったのである。

さらに客層に合わせていくつかの別モデルも用意したうえで、リバイバル第一弾として売り出されたのがシルビアS13と180SXなのだ。

結果は大当たり、最新型よりも安く手軽で今の時代では失われているスポーツカーらしいスタイル重視の個性が受けた。

人気は180SXだ、ほかのスポーツカーよりも手軽な価格でリトラクタブルライトの古くも心擦るスタイルが大人気である。

「よく調べてきましたね」

「下調べは基本だ。すまないがそろそろ失礼する、シマカゼタービンが走る前に場所を確保しなければならぬのでね」

峠に観客席はない、自分でどこが一番見どころかを探って見つけて陣取るのが普通である。

彼女もそれに倣って観戦スポットを見つけに行くつもりなのだ、しかしこのままビワハヤヒテを送っても見どころのある場所なんてわからないだろう。

彼女は走り屋の世界ではズブのド素人だ。どこのコーナーが一番見どころか、今日のレースだとどこで勝負が決まるかなんてわからない。

せっかく親友の走りを見に来てくれたのに美味しい見どころを逃してしまうのはあまりにももったいない。

「ならいい所教えるよ、もうすぐ帰ってくるし待ったら？帰ってくるところも見どころだし」

「いや、妹の不始末の件もある。まだ走るのなら、変に気を使わせたくない」

「あなたが悪いわけではありませんし、気にしなくていいと思いますよ？もう終わった話です」

「というかあんたの顔をあいつ知らんよ、とはダイオーは言わなかった。

「そももいかない。ブライアンの奴、どうも諦めきれないようですね：実を言うと、一言謝りたいと思ってたんだ」

シンボリルドルフの電撃スカウトにおける一連の騒ぎに関する謝罪が、トレセン学園理事長から芦名高校や群馬トレセン学園など方々に行われたのはホクリクダイオー達も知っている。

それは瀬名酒造に対してもあり、騒動も収まった今ではシマカゼタービンたちの中ではとつくの昔に終わっている話だった。

しかし申し訳なきさそうにするビワハヤヒテを見るとダイオーは少し放っておけないと思う。

彼女の予定がどうなっているかは知らないがここに長居することはできないはずだ。

今日の走りもストレス発散もかねて夜通しで走りまくる予定になつている、シマカゼタービンもそれに応じてずっと走り続けるだろう。

そうなると彼女はシマカゼタービンに面と向かつて話す機会を見つけれない可能性が高い、それはとても気の毒だ。

「なら一緒に特等席でタービンのレースを見学してみない？トレーナーがOK出したらただけどき。それなら話すタイミングも掴みやすいよ？」

ホクリクダイオーは少し考えて、自分たちの野戦司令部に招待してもいいかと考えた。

自分のおすすめスポットを教えるのも悪くはないが、今日はちょうどいい機材がある。

使わない手はないだろう、秘密兵器というわけでもないのだしレースが終わったら引き合わせやすい。

「いや、そこまでしてもらおうわけには…」

「今日は夜通し走る予定なんだ、終わるまで待つとかなり後になるよ」

「そうなのか？それはまずいな。うーむ…良いのか？なら、お言葉に甘えようか」

「うん。ノルン、良いよね？」

「構いません、トレーナーが許可をしたらですがね」

ノルンファングは賛成だ、トレーナーもよほどのことでなければ許可を出すだろう。

それに次にシマカゼタービンが走るレースはテストだ、ビワハヤビデがどんな反応をするか見るのも一興だと思っていた。

## 第十三話

芦名峠、3連へアピンカーブの入り口のコーナー脇の雑木林は多くの人々で賑わっていた。

その人込みの多い雑木林の中を小町はクイーンベレーたちと一緒に観戦場所を目指して進んでいた。

これから見るバトルの見どころはおそらくこの3連へアピンの入り口、シマカゼタービンはそこで勝負を仕掛ける、そう小町は睨んでいた。

場所はレース場となる道から雑木林の脇道に入って奥まった場所にある高台、芦名名物の鬼仏がある場所だ。

この場所は少し道路から離れてしまうが、少し高い場所にある上に奥まっているから他のギャラリーも集まらない場所である。

多少遠くても観戦には十分であるし、遠かったり暗かったりが気になれば双眼鏡や暗視ゴーグルを使えばいい。

良助がリングをお供えした鬼仏に向かって一度両手を合わせてから小町達はめいめいに好きな場所を取りに向かった。

クイーンベレーとテューダーガーデンはウマ娘の身体能力を生かして近くの木の枝にするりと登り、枝をかき分けて視界を確保して特等席を確保する。

二人は双眼鏡を取り出して視界を調整しながら、どこで仕掛けるかを興奮気味に話し合う。

小町と良助も、その下でよく見える丘の特等席にアウトドア用の折り畳み椅子を置いて、そのわきに小型のクーラーボックスを置いた。

「良助さん、ジュースくださいー!」

「あいよ!」

木の上のクイーンベレーが手を差し出すと同時に、クーラーボックスを開けた良助が二人に向かってニンジンジュースのペットボトルを投げ渡す。



良助もニンジンをついでにワイルドに齧りながら、手に持ったトランシーバーのチャンネルバンドをモータースポーツ部の使っているバンドに合わせた。

簡易的な無線傍受だが、モータースポーツ部には許可をもらっている。これでモータースポーツ部が各所に置いた連絡員たちの実況中継が聞けるといふ寸法だ。

「お、ここにきたか」

「本山さん？お久しぶりです」

「おう、小町ちゃんにベレーちゃんにガーデンちゃん、久しぶり」

不意に後ろから声を掛けられて振り向くと、小町達もよく知る一人の男が片手を振って気軽に笑いかけていた。

一緒に振り返った良助が親し気にぺこりと頭を下げる。本山恒夫、群馬県内展開のカーレース系ローカル雑誌『月刊・走り屋』の編集者であり記者だ。

自分の記事には責任を持つ昔気質で、そんな彼だからこそその信頼で地元の走り屋たちとの接点も多くなりの情報通である。

「恒夫、お前もきたのか」

「ああ、よほどのことがなければあそこで仕掛けてくるだろ？」

そして小町の兄である小塚良助の同級生である。良助は腕を組みながら、3連ヘアピンカーブを指差す恒夫の横に並ぶ。

恒夫は紙巻きたばこの箱を取りだして口に一本咥えると、ジツポライターを取り出して火をつける。

「妙だな、小町は恒夫の存在に少し不思議に思った。」

「大丈夫なんですか？今は会社が忙しいとか言ってたじゃないですか」

「何とか落ち着いたぜ、おかげで次号の目玉が一つパーになっちゃったがな。ダートトラリーのシマカゼとサーキットの高橋兄弟で紙面を作ってたつてのによ」

「なんだ、使わねえのか？せっかく許可取ったのに」

「天下のURR A様がな…まさかこんな地方のローカル雑誌にまで声かけてくるたーよ。」

おかげで社長はカンカンだよ、畑違いに首突っ込んでくんなって電  
話越しに怒鳴っててうるさいのなんの」

月刊・走り屋は地方ローカルのニッチな車雑誌に過ぎない、取り上  
げる内容もカーレースや車、走り屋たちのへの取材記事ばかりでウマ  
娘の公式レースには一切手を出していないまったくの別ジャンルだ。

取材の過程でウマ娘と接することはあっても、そのほとんどが車両  
競技関連で元トレセン学園所属ということはあるにしてもほとんどかす  
りもしないので群馬トレセン学園との接点はあるにしてもURAなどに  
は全く接点すらない。

全く畑違いなので接点もない間柄なのに、いきなりの接触である。  
さぞ会社は右往左往しただろう。

「へえ、あの社長さんが珍しい」

「うちらも分相応つてのはわきままえちやいる、そこからいきなり土足  
で割り込まれちゃキレもするさ。」

俺たちも多少は話題にはするが、ああいうの少し取り上げるくらい  
だぜ？」

恒夫は坂路訓練で道路の端をかけていく群馬トレセン生徒たちを、  
双眼鏡で見下ろしながら言う。

周辺に散っていた計測係と撮影要員たちが交代して、訓練がてら上  
の野戦司令部に駆けあがって行っているのだ。

芦名峠では群馬トレセン学園のモータースポーツ部が来るときに  
よくみられる光景である。

モータースポーツ部が芦名峠を走るのは名目上では夜間坂路訓練  
でレース特訓の一環なので、ウマ娘ファンがこれを見たくて芦名峠に  
来る場合もある。

「結局、目玉は高橋兄弟一色、あの二人だけでも十分話題性はあるけど  
量が足りなくて四方八方で話題集めだ」

「なんだ、ならこいつは仕事扱いか？」

「そういうこつた、こうでもしねえとやってられん」

「では妙義の中里さんの取材なんていかがでしょう？サーキットでも  
R32で良いタイムを出していると聞きます」

「それも悪くねえんだが、次号はサーキット系の話で高橋兄弟と被っちまつてる。再来月に持ち越しだ」

「そんない」

「で、恒夫さんは今日のバトルをどう見てるんです？」

クイーンベレーの質問に恒夫は少し考えてから、手帳を取り出して中身を確認しながら答えた。

「相手はグッドフェイスって聞いてる。この峠は初めてだが、サーキットではなかなかいいタイムを出してる新人の有望株だな。」

ローカルシリーズじゃ目立たなかったがサーキットでは結構人気者だ。努力家でルックスもいい、レース上がりらしく負けん気が強い。

始めてまだ半年くらいって所だが、サーキットの連中にしつかり食いついてるから腕前もいい感じに仕上がってんぞ」

「グッドフェイスか、サーキットで俺も抜かれた記憶があるな。レース慣れしてる分目がいいし、追い抜き慣れしてるから結構ギリギリをするりとやってくんぜ。」

レース時代は差しでやってたらしいから見極めが良くできてる。車は何なんだ？俺の時は180だったぞ、トレセンの」

「学園のS13か180SXだな。個人で車は持ってないそうだが、今回もそのどちらかだろうね」

「どっちが勝つでしょう？」

「そりゃシマカゼちゃんだろ、間違いなく」

臆面もなく、解り切ったようにつぶやく恒夫に小町も苦笑しながら同感だと頷く。良助やクイーンベレーたちも、苦笑しながらも同意を示した。

グッドフェイスがルーキーとしてはうまいと言われても、ここは芦名の峠だ。そこに慣れ親しんだシマカゼタービンは走りでは一歩も二歩も上である。

「この前の騒動でしばらく足での勝負は控えてたから、もしかしたらはあるかもしれないぞ？」

「レースに絶対はないからな、もしそうならそうなたでまあ面白い」

な」

「いやいや、姐さんならぶつちぎり確定ですって！」

「じゃあ私はフェイスさんに今日は一票入れてみようかしら？トレセンのS13か180なら手も入ってるでしょうし」

一気に空気が騒がしくなる、全員が次の走りを話題にして和気あいあいと話し出すいつもの空気だ。

最近は本当にピリピリしていたからようやく元の生活に戻ってきた気がして、小町はふと気が楽になった気がした。

「基本ができて体力があればタービンだって普通に負けるし、車のセッティングもダイオー達がきっちり詰めてると思うから今日はワンチャンあるかもね」

「フェイス4票タービン1票か、おかしいな、タービンの味方少な過ぎね？」

わざとキョトンとした良助のツツコミの瞬間、空気が小爆発して5人の大きな笑い声に包まれた。



芦名峠の走り屋がたむろする無人パーキングエリア、その片隅に停めた愛車のWRX―STIの運転席で俺は次のレースの準備をしていた。

上着を脱いで、着てきたレース用スポーツブラを一度緩めてしっかり胸がカップに収まっているのを確認してから締め直す。

胸がこれだけでかいと走るときも一苦労だ、本気で走ると揺れるは擦れるはで一本走ったところには痛いなのなんの。

おかげで本業用のレース用ブラでしっかり補助しないとバトルなんてできやしない。

いつものどこにでもある緑色の半袖ランニングウェアを着直して、ハーフパンツのゴムひもが緩んでないか確認する。

その上から反射板を付けた無地の白ゼッケンを羽織る、ゼッケンの肩と腰には前後に反射板がついている。

肘とひざにサポーターを付け、走りを阻害しないようにしつつ取れないようにしっかりと締める。

頭にはヘッドセット型LEDライト、車のモノよりも出力は弱いが慣れたものだ。

トランシーバーをランニンググウェアのポケットに突っ込む、何かあったときに野戦司令部から連絡が来る。

靴も運転で使った普通のスニーカーを脱いで助手席の足元に、その手で助手席に置いておいた蹄鉄付きのレース用シューズを手にする。

一般販売されているレース用シューズで蹄鉄も店売りのノーマルだ。蹄鉄の摩耗を確認して、留め具が弛んでおらず嵌り具合に歪みがないか確認してから履き直す。

「そろそろ変え時かな」

いつもの履き心地だけどちよつと足と靴の間に隙間が増えてきた気がする。

最後にもう一度服を確認して、ダツシユボードからココアシガレットの棒菓子を一本口に咥えて外に出た。

車外に出ると一気に周囲の喧騒が耳に飛び込んでくる。ギャラリーたちの喧騒、車のエンジン、鼻にくる排気ガスと煙草の香り。

これだ、この空気、この喧騒、これが峠バトルの空気だ。

「タービン、今日は走んのかい？」

「見て分からねえか？ひとっ走りしてくるよ」

「そうかい、がんばれよー」

WRX―STIの横に停めてあるスカイライン・GT―R34の後ろで紙巻き煙草を吸っていた見慣れた34のおっさんに俺も気安く答える。

煙草の煙をそっぽ向いて吐く34のおっさんに見送られながら、スタート地点のほうに歩いていく。

「よう」

「姐さん、準備は大丈夫ですか？」

「姐さんいうな。もちろん、先にスタンバっていいか？」

「あ、ならこれお願いします」

スタート地点手前のガードレール手前に陣取っている係員の顔見知りの群馬トレセン学生が差し出してきたのは群馬トレセンのジャージの上着、これだけ出してくるってことはつまり…

「パドックか？構わんよ」

「よろしくおねがいます！」

いつものことだ、群馬トレセンのジャージに腕を通さないで肩に引っかけようにして羽織る。

まだ対戦相手が入っていないスタート地点の道路、俺は下りを見て左側の車線に入りスタート地点に仁王立ちする。

俺のスタンバイに気付いたギャラリールたちの視線が集まってくるのを見計らって、羽織っていたジャージの上を思い切り脱いで合図してきたさっきのウマ娘に投げた。

その瞬間、周囲のギャラリールたちから歓声の声が上がって場が盛り上がる。こういうのもたまには悪くないか。

「魅せてくれんじゃねえか、見ろよあの体、いつもながらばっちしだ」

「おいおい、なんてトモに仕上げてきてんだ。こりや、フェイスちゃん、敵しいんじゃねえか？」

「いや、今日はフェイスちゃんがやってくれろと信じてるぞ俺は！」

「上半身もしっかり鍛えてんな、筋肉の張りがヤベーぞ」

「おお、すっげえでけえな、まじででけえな、こらびつくりでゴルシ」  
体中に感じるギャラリールの視線がこそばゆい、町内レースでもやってるから慣れてっけども。

国民的娯楽がウマ娘のレースってだけあって男も女も競馬場の連中みたいな視線してんだよな、前世じゃ信じられん。

あとやっぱり胸に視線が行く連中が多いこと多いこと…やっぱ90はでけーよなあ、俺もそっちにいたらガン見だわ。

「出てきた、S13だ！」

「がんばれー！フェイスちゃん!!」

ギャラリーの野太い男声や女の甲高い歓声に包まれて、駐車場から群馬トレセン学園モータースポーツ部のステッカーを貼ったシルビアS13が道路にゆっくりと入ってくる。

S13はスムーズに徐行しながら右車線に入って、俺の横にするりと来て停車した。

運転席には尾花栗毛の綺麗なウマ娘、グッドフェイス。足でのレースじゃなくて車でのレースに舵を切ったプロ志望のアマチュアだ。

群馬トレセンの裏山は何度か走ってるそうだが、芦名峠での挑戦は初めてだそう。だがなかなかこつちも仕上げてきてんな、見ただけで分かるぜ。

かっちりきっちりS13を調整して、足回りも手入れしてきたな。こいつ自身もスキルを鍛えてきたんだろ、今の停車のスムーズさはい腕してる。

とはいえ、顔色は若干緊張気味だな。当然か、今日は峠初挑戦だもんな。

「良い音だ、きっちり整備してきたな。どうだ、公道に出てきた気分は？」

「不思議な気分よ、緊張感がまるで違う。あと悪いことしてるって背徳感がびりっと来るわね」

この程度、お前が走ってきた本物のレースと比べれば大したことないと思うがね。どうせ金も栄誉もない野良レースだ、かかってんのは意地と面子だけ。

「そのうち慣れるさ。あとその悪やってるって感覚は忘れんようにな、実際こりや悪いことだ。プロになったらこんなバカなことしないことだ」

ウマ娘のレースが国民的娯楽なせいなのか、走り屋のこういう集まりが前の世界よりも世間的に受け入れられているのは驚きだ。

首都高系は厳しい目で見られてるが、この田舎で弁えてやってる分にはひどい事故を起こして迷惑かけん限り警察もさほどうるさく言わんしな。

群馬トレセン学園も普通は止めるほうだろうに、やんわりやりすぎ

るなどお小言だけらしい。桜葉理事長、理解ありすぎだぜ。

しかし、こういうことに寛容なおかげか田舎から若者が消えるっていう前の世界じゃよく聞く話題がこっちじゃ出てこないから面白いもんだ。

夏休みでもないのに前の世界なら東京にいそうな若い奴らが今日もこんな田舎でゴった返してるんだしな。

「そう？別に否定してるわけじゃないんだけど」

「自分から法の庇護から外れて好きにやってんだ、何かあっても警察とかにや頼れん」

走り屋もピンキリだかね、良い奴もいれば悪い奴もいる。そういうのに絡まれたら警察呼ぶとかできんのよ。

前に妙義のガラの悪い連中に絡まれたことあるけど、もうイライラする連中でキレたテューダー押さえんの大変だったぞ。

ま、つまり自己責任、何かあつてそんな愚痴愚痴言うなら公道レーズなんざやめちまえて話だ。

「もし合わないなら今回だけでやめときな、考えておくといいさ」

「ご忠告ありがとう。それはそれとしてタービン、勝たせてもらうよ」

そう宣言してくるグッドフェイス、良い顔してるぜ。答えてやらなきゃな。

「できんならな」

今日が初挑戦だろう？初峠のルーキーに負けたことは前世の頃からあんまねえんだ。

足の勝負でも地元の意地つてのがあるんでね。もし勝てたらそれはそれで一興、今度は車で相手してやるさ。

「じゃ、お喋りはこっからでしまいとするか」

「OK、千切つてやるわ」

「やってみやがれ。準備OKだ！いつでもいいぞ!!」

周囲に待機してるだろう係の連中に聞こえるように声を張り上げる。

するとガードレールのそばに寄っていた係員のモータースポーツ部のウマ娘たちがトランシーバーとスマホ類で連絡を取り始める。



次いで通信先から届く返答に合わせて、周囲のウマ娘たちが声を張り上げて報告する。

「ゴール地点、一般車無し！」

「スタート地点、一般車無し！」

「コーナー各所、一般車無し、係員配置完了、ギャラリーは退避済み！」  
準備は整った、あとはスタートを待つだけだ。俺は右足を上げ下げして踏み込みを確かめながら待つ。

このスタート前の高まる緊張感がたまらない、心臓がじわりじわりと締め付けられるような、体中に静電気が走るような感覚。

息を吸う、4つ数える、息を吐く。思わず武者震いしちまいそうだ。

僅かな間のあと、ガードレールを颯爽と飛び越えてホクリクダイオーがスタート地点の前に立った。

「さーて二人とも、僕がカウントをするけどいいよね？」

異存はない、俺は頷く。フェイスも頷いた。

「よし、じゃあ始めるよ！カウント、5!!」

ダイオーが右腕を振り上げてカウントを開始する。S13のエンジンが唸る、それと同時に俺はやや前寄りに前傾姿勢になりながら腰を落としてスタートの姿勢をとる。

「4!3!」

息を整える、吸う、吐く、呼吸と心臓の鼓動をかみ合わせる、筋肉と血流を感じてすり合わせる。

一度力を抜く、そして入れ直す。シフトをニュートラルから一速へ、無理なく加速を進められるように。

意識が前だけに向く、周囲の喧騒が遠のく、ダイオーの一挙一動が、S13の駆動音に意識が集中する。

「2!!1!!!」

まずはスタート、どう出るか、フェイスのS13がどう動くかで俺の動きは決まる。意識が定まる、息を吸う、一瞬止める。

「GO!!」

ダイオーが腕を振り下ろす。瞬間、俺は思い切りアスファルトを蹴りつけて前に飛び出した。

## 第十四話

ダイオーの腕が振り下ろされる。真横のシルビアS13のCA18が咆哮すると同時に、俺は思いっきりアスファルトを蹴りだして前に出た。

一瞬、俺が先行する。ウマ娘の体は出力に比べて非常に軽いから、スタートダッシュでの加速なら車よりも速い。

でもそれは一瞬だ、車体が加速してタイヤが地面をしつかりとらえた車が本気を出すと一気に逆転する。

普段ならそれで俺が後ろに張り付くことになるんだが…

「シマカゼが先行！S13が後ろだ！」

加速が緩んだS13の真横を一気に突き抜けて俺は前を取る。スタートダッシュは悪くない、しつかりアクセルを踏んでるし迷いもなかった。

だが最後まで踏み込まなかったな、どうやらフェイスは自分で後ろを取ることを選んだらしい。

悪くない、初心者がいきなり先行を握るのはなかなかできることじゃないんだが車でその判断はさすがだ。

相手がウマ娘なら余裕をかます新人はいるが、ほとんどの場合は俺の前を取りたがるもんだ。

「最初は様子見って所ね」

「相手がシマカゼだ、群馬トレセンの連中ならそうするだろ」

ギャラリーの声に内心で同意する。そりやそうだ、そこらの走り屋小僧と比べたら群馬トレセンの連中はレベルが違う。

何しろ生身でも本物のレースを走った経験豊富な連中が、車でプロを目指して走ってるからな。

しかも俺の手の内も多分研究してきてるだろうしな、ここで相手の出方を無視して一気に先行を取るウマ娘はツインターボくらいだ。

後先考えないドツカンスタートの加速で一気に差をつけてからマウントを取ってゴリ押すのはあいつの得意分野だし。

もうすぐ最初のコーナー、まだ体が温まり切っていない。体を車線

の真ん中からコーナー内よりラインを取って追い抜きを阻害しながら普通に左へ曲がる。

後ろのS13も特に派手な音もなく曲がって来た、スムーズに曲がってタイヤもきれいに使ってるな。

ふうん、俺のラインを模倣してまずは様子見、と。悪くないな、先輩の真似をするのは良いことだぞ。

いいね、仕上げてきてんじゃねえか。体感時速は約70キロ、次のコーナー手前で一歩踏み込んで加速を入れつつ推力をそのままに空中で90度右ターン。

体を横に向けたまま着地、からの足首だけでわずかに支えながら飛んで浮く。推力を殺さないままサイドステップ、右足軸で高速タツプ、左足をピッチで推力方向変換。

蹄鉄がアスファルトを擦っていいスキール音を鳴らしながら、前をまっすぐ見た状態で視界が真横に流れる。

姿勢を変えて重心を前に、推力を少しずつ前に向けて誘導、まだ、まだ：よし！

「うげえ!?マジでか!!」

「こんな序盤でドリフトか、なんか仕掛ける気だな。運がいいな、葦毛のねーちゃん」

コーナーを曲がり切ると同時に体のクラッチを切る、一瞬の減速と同時にシフトを2速に、そして繋ぎ合わせて再加速。

そろそろいい感じに体が温まってきた、先に行かせてくれるならどんどん行かせてもらおうか。

悪いがこいつはバトルだ、勝ちにいかせてもらうぜ。

短い直線、時速75、左コーナーはインベタグリップ、次はインベタドリフト、加速しながらどんどん抜ける。

スピードは落とさない、コーナーはウマ娘特有の小回りの良さで勝負だ。いちいち速度調節してたらどうやっても車に追い付かれちゃう。

時速80、S13との距離が開く。うまく踏み込めていないのかS13のエンジンが不機嫌な音を立ててる、俺の加速についてこれなく

てラインを見失ったか。

「初っ端から飛ばしてやがる、このまま逃げ切る気か?」

「シマカゼに先を譲ったのが仇になったな。だがそれじゃ終わらねえだろ、加速してるぞ」

よく見てやがる。ウマ娘の聴覚だからフェイスがS13のシフトを2速に入れた音が聞こえた、加速して追いついてくる気だな。

次の左コーナーをインベタドリフトで一気に曲がり切って一度距離を稼ぐ、そのまま加速して速度を取る。

あつちもそろそろ最初の勝負を仕掛ける気に違いない。時速86、次のコーナーを抜ければ次はゆるい左曲がりの直線高速セクション、自動車の独壇場だ。

この世界でもこの車間は広くてウマ娘の体じやどこを走っても脇を抜けられちまう、加速勝負じゃ全く話にならんからな。

だからここで一度仕掛ける、俺とチキンレースをしてもらおうか。

「二人ともさらに加速!」

「次の直線で張り合うつもりだ!」

コーナーで計測を務めていた群馬トレセン学園生が叫ぶ。まったくもってその通り、最初の仕掛け所にさせてもらおうよ。

直線前の左コーナーに入る、インベタではなくアウトラインをとって遠心力も推力に変えて一気に加速。

時速87、目の前にオールクリアの直線、一気に踏み込んで加速、坂道を一気に駆け下りながらぐんぐんと速度を稼いでいく。

後ろでS13のエンジンが吠えた、あつちもアクセルを一気に踏んだ。良い踏み込みだ、迷いなくエンジンが吠えてるのがわかる。

時速90、あつちはもう俺を超えた、じりじりと詰め寄ってくる。時速93、もう真後ろ、そして横に並んでくる。

さすがトレセン生徒だ、ナイターレースで坂道は履修済みなだけはある。もう慣れてきやがったな、この暗さに。

「今日の奴は根性あるな、あのシマカゼ相手に張り合うのかよ」

「さすが群馬トレセン生、根性が違う」

直線中盤、もう少しで初見殺しのブラインド右折コーナー。ここ

事はフェイスももう知ってるから事故るなんてことはないだろう。でも問題はどうかやってここを曲がり切るか、だ。手加減はしない、そっちが舐めてこなかったようにこっちも舐めたりなんかしない。

俺も今見せられる最高の走りで曲がり切ってみせるさ。体感速度時速96、限界が近い、110以上はスタミナを多く食われて下まで持たない。

S13がゆっくりと前に出る、もう少しでコーナー、勝負所まであとわずか。

「フェイス先行!!」

完全に前に出られた、斜め前を先行するS13の後姿を見ながら俺は思い切り踏み込むがまだ離される。

時速100、まだ車間が開くのが止まらない。やはり加速では勝てない、フェイスじゃなけりやここで千切られてる。

峠初挑戦のフェイスはまだアクセルを踏み切れてない、あくまで初心者にはよくできてるがまだまだ甘い。

ケンタでも繊細に深く踏み込んでもつと速度を上げてくる、高橋兄弟や中里ならとつくに千切られてる。

ここら辺が勝負どころか、そう思った瞬間、S13の運転席に耳慣れた速度超過のアラーム音が鳴ったと同時にS13が減速した。

ただの減速じゃない、あくまで曲がる為、次のコーナーはブレーキングドリフトで対応するつもりだな。タイミングは悪くはない。

「踏み込み過ぎだな」

フェイスに教えるつもりで呟きながら真つ赤に光るS13のテールライトが残す残像を追い越して抜き返す。

ブレーキが強すぎて速度が落ちすぎている、おそらく80前後、うまく曲がれはするだろうがフェイスの腕では立ち上がりで俺の走りについてこれない。

現にブレーキを踏んだS13とほぼ減速無しで走る俺との差がこの一瞬で10メートルは開いている。

トレセンのS13ならうまい奴が使えば一瞬の減速から4輪ドリフトに入って対応できるはずだ。

ここは俺の勝ちだ、俺の走りをよく見ておけ、S13でもできるはずだ。

前に出た俺は限界ぎりぎりまで加速してラインを選ぶ、行くのは右折カーブの最短距離、インベタのラインに乗ってドリフト走行。

速度そのまま、コーナーに入る少し前に踏み込んでブレーキング、次でわずかに体を浮かせ尻を外に流してカウンターを取りつつ、荷重移動でバランスを取りながらそのまま突っ込む。

壁に5センチくらいまで顔面も含めて幅寄せしながら一気に体を滑らせながら曲がる。一歩間違えば顔面を削られて二度と人前に出られない顔の完成だ。運が良ければだが。

そんなミスはそうそうしないがな、体が前に進み始めると同時にカーブが終わる。さらに加速、最短コースを立ち上がりながらさらに距離を稼ぐ。

時速103あたり、次のコーナーにもこのまま突っ込む。このまま逃げ切っちゃうか、一瞬そう思いながら後ろを少し振り返ったらその考えは消えた。

S13がドリフトから立ち上がって一気にスピードを上げているのが見えた、まだ勝負は終わっちゃいないってわけだ。



ウマ娘として生まれたからには、どんなウマ娘にも一度はやって見たことがある。目指してみたことがある。

それは一番身近な強くて速い自動車に挑むこと、そして己の足で追い越してみせること。

ビワハヤヒデ自身もそれに覚えがある、子供の頃は飽きもせず妹のナリタブライアンと走り回っては無茶な勝負をしたものだ。

子供のやることだ、無邪気で無謀な子供の夢だ。そして年を重ねれば無謀だと気付いて辞めるのだ。

ウマ娘の足は自動車に勝てない、ただ街中を走行する車を追い抜くことはできるだろう。

本格的にレースを走るウマ娘であれば張り合うことも僅かならばできる、全身全霊の全力疾走で後先考えない走りで車と張り合うことも可能といえれば可能だ。

ただしそれはほとんどの場合、自らの足を痛めつけるだけで足の寿命をただむやみに削るだけの愚かな行為でしかない。

人間のような体で時速60キロを超える速さで走るウマ娘の足にかかる負担はあまりにも大きい、それこそ走るだけで足に大きな負担になるくらいだ。

走りすぎただけで足の骨にひびが入る、筋肉が炎症を起こす、悪化して屈腱炎や筋靭帯炎を発症するなど、ウマ娘を取り巻く怪我は実に多い。

ウマ娘の体はいまだに謎が多く、強靭であるが実に繊細にできているその体は時にはレースの中で限界を超えて自壊する例すらある。(だから普通はやらない、子供の時の他愛もない思い出話のはずなんだ)

その最たる例がビワハヤヒデの知り合いにいる。彼女はあるレース中に左足を負傷した。

今でこそ復帰した彼女は元気で走り回っているが、あの現場に居合わせた人々の肝は冷えただろう。

彼女の左足は原因不明の粉碎骨折、それがレース真っ最中で先頭を逃げる彼女に襲い掛かったのだ。

全力で走る彼女が負傷でバランスを崩し転倒しなかったのは、運と現場で即座に判断したトレーナーとチームメイトたちのファインプレーがあったからだと言われている。

レースを勝つために体を整え、最高のレースをするために万全を期したレース場を用いて行っているもそれがある。

時にはそれで選手生命を終えて引退することも当たり前だ。治つてもケガの前の走りができず成績を落とし、それをリカバリーできないウマ娘は多い。

或いは治ったはずの怪我が再発する、という例もある。筋靭帯炎や屈腱炎などといった症例に多く見られるが、骨折なども同様だ。

(だから普通はあり得ない、あってはいけないはずなんだ、足が壊れてしまうだけのはずだ)

だから公道で車に真っ向勝負を挑むなんてことをするウマ娘なんて無邪気な子供だけだ、子供の遊びでしかないはずなのだ。

「シマカゼ先行！フェイスがしくじった!!」

「何キロで走ってた!？」

誰にでもある子供の頃の楽しい思い出、そうあるべきだ、そのはずなのだ、だが目の前のコレはなんだ？

機材にかじりついてS13から送られてくるデータを読み上げる記録係の悲鳴のような言葉に周囲がどよめく。

直線からコーナーに入る前、グッドフェイスの乗るS13は確かにブレーキを踏んで減速した。

これは曲がるために必要なことだ、その証拠にS13はすぐにドリフト走行に移りコーナーに突入して見事に曲がり切っている。

その次のコーナーも勢いに乗ったままのドリフトで抜けた、見事なドライビングテクニックというしかない。

だがシマカゼタービンがやったことはなんだ？ビワハヤヒデは幻覚でも見ていたと本気で信じたがっている自分に愕然としながらもなんとか正気を保とうと大きく息を吐いた。

シマカゼタービンのやったことは単純だ、車が減速するその横をそのままの速度で追い抜いて、速度を殺さないままコーナーに突っ込んだのだ。

それはただの自殺行為でしかない、そうとしか見えないのにシマカゼタービンは苦も無くコーナーをクリアしてS13を置き去りにしていった。

そして今も苦も無く峠道を走り続けている、計測されている平均速度は時速90キロほど、だが現在の速度はそれを超えている。

レース場のようなバックアップもなく、コンディションも全く整えられておらず、夜間で視界も悪い上に街灯すらも少ない峠の下りを臆



することなくスポーツカーと張り合ってレースを続けている。

「ありえん、ばかな、なんだこれは…」

ウマ娘はそんな速度で走れないはずだ、そんな速度で走れば足が悲鳴を上げてしまうはずだ、なのにシマカゼタービンは走っている。

楽しそうに、全く苦でもないとでもいうように本当にレースを楽しみながら走っている姿が画面には映っている。

時速90キロで走るだけでも彼女の足には大きな負担がかかっているはずなのに、インベタグリップ走行やドリフト走行といった信じられない奇特な走りが掛ける負担なんて半端なモノではないだろうに。

言葉にならない光景だった、あまりにも現実離れた光景だった、何より周囲の空気があまりにもおかしかった。

「S13、コーナー突入時は時速80!!」

「前！」

「104！」

「いきなり3桁なのお?」

「飛ばしてるね!こりゃ面白くなってきた!!」

その異様なレースの光景を見て、群馬トレセン学園の生徒たちは驚くことはあれど受け入れてレースを楽しんでいた。

S13を運転するグッドフェイスに声援を送る者、またはシマカゼタービンに応援を送る者、どちらもレース場ではよく見る観客のそれだ。

そしてコーナーのたびに聞こえるどよめき、そこで見せた走りに対する考察もまた同じ。だが、目の前で行われているレースが異常すぎる。

それがまるで日常で、それが普通だと言わんばかりの光景で、ピワハヤヒデはクラリと頭がふらつくように感じた。

「どう?タービンのバトルは。楽しんでる?」

「ホクリクダイオー…これは一体何なんだ?」

「峠バトルの亜種かな?こここじや普通だよ、少なくとも芦名じや普通かな。僕もたまにやるし」

単身じゃ全戦全敗で勝ったことないけどね、体力持たないし。と苦笑いしながら頭をかくホクリクダイオーにビワハヤヒデの脳みそはすでに現実逃避寸前だった。

自分の中にある正常な何かがガリガリ削られていく感覚に意識を手放しそうになりながら、ビワハヤヒデは何とか質問を口にした。

「恐ろしくはないのか?」

「怖いっちゃ怖いけど、それ含めて楽しいよ?」

「なんて奴らだ…いったい、いま彼女は何をした。まるで理解できなかった…」

「単純だよ、フェイスはブレーキングドリフトでタービンはノンブレーキインベタドリフト、あのコーナーではタービンのほうが早かったんだよ」

「ノンブレーキ?まさか減速しないまま曲がり切ったとでもいうのか?いや、でも、たしかに…」

「正確には減速してるらしいよ?タービン曰く。こればかりは僕たちも全く理解できないけど」

一体どこで減速をしたというのか、ビワハヤヒデは自身の目と感性を以ってしても理解できない彼女の走りに頭を振るしかなかった。

シマカゼタービンとグッドフェイスの速度は直線での競り合いで乗りに乗っていた。

そもそも下り坂とはいえ本気でエンジンを吹かすスポーツカーと競り合いをする?そこから追い抜きをかけて成功させる?・

しかも体を擦り下ろされても不思議ではないほどにコーナーの際の際に迫りながら、走りながら滑っていると言えないドリフト走行で抜けていった。

そもそもスポーツカーと生身のウマ娘が併走し張り合うなんてどんな状況だ、どんなレースだ、やるほうもやられるほうも頭がいかれているとは思えない。

言葉にならない、言葉にできない、ビワハヤヒデは自分の経験則や方程式というものが無残に崩れ落ちるような感覚を覚えて身震いした。

(…ああ、ブライアンはこれを感じてしまったのか)

それは武者震いだった、胸の中で懐かしい熱さが蘇ってくる、年月を経て理論や経験に裏打ちされて埋もれていた初々しい感情だ。

自分の中にある勝利への方程式、理詰め理論、あらゆるものを使つても理解しえないそのウマ娘。

それはフィクションではなく目の前にいる、今そこで走っている。常識外れの限界を塗り替えたウマ娘がそこにいる。

ウマ娘の本能か、己の矜持と競争ウマ娘としてのプライドか。それともどちらも刺激されてしまったのか。

(今の私は彼女に勝てるか?)

そう自分に問いかける。答えは簡単だ、解らない。シマカゼターピンの実力は芝のコースであつても健在であると妹自身が証明している。

馬鹿げた話だ、実に不可解な話だ、自分は誰だ?自分はビワハヤヒデだ。

日本ウマ娘トレーニングセンターに在学し、日本中のウマ娘たちの中から篩に掛けられて、ライバルたちと競い合い切磋琢磨しながら上り詰めてここまでやってきた。

最高の教育と訓練を受け、トウインクルシリーズという実戦に出走して国内最高峰のG1レースで戦い抜いてきた。

自画自賛は趣味ではない、しかし実力は確かなモノだと胸を張って言える。それがどうしたことだ、地方トレセン学園にすら通っていないウマ娘に『解らない』と断言できてしまうのだ。

堂々と勝てると言える、そう言えて当然の相手であるべきなのに、あの走りを見せつけられてしまつてはそんな風に考えられない。

今の実力では、この状態では、たとえ自分の得意なフィールドに持ち込んで押し切られてしまうような気がする。

妹が彼女を欲する気持ちが理解できた。見ているだけなのに胸に湧き上がる疼きが止まらない、今にも走り出したくて仕方がない。

シマカゼターピンの走りを見て自分が感じたのは恐怖や絶望ではない、彼女と競い合いたい、勝ちたいという闘争心に他ならなかった。

(妹が目を付けるわけだな、実際に走って片鱗を見せつけられたならあいつの性格ではああもなるか)

ようやく思考回路に火が戻ってきたビワハヤヒデは小さく一息つく。妹の勝負への渴望を知る身として理解できた、シマカゼタービンの異次元の走りは妹にはまさに格好の相手に見えただろう。

だからと言っていろいろ暴走してしまったのは頂けないが、かくいう自分も焚き付けられてしまっているのだから笑えた話ではない。

予想もしないところからとんでもない逸材がポンと出てきたものだ。

(まいったな、こんな走りの事を知ったらブライアンはどうなるか：あ、ほんとどうしよう)

自分が群馬にいるのはシマカゼタービンへの接触も目的だが、単純にレースや練習で酷使した体を労う二泊三日の温泉旅行でもある。

休養中の自分の予定は親友たちも知っている、当然だが妹のナリタブライアンも知っている。

そもそも休養のための相談をして、群馬のウマ娘ご用達と言われている秋名温泉をおすすめしてきたのはツインターボから情報を仕入れてきたナリタブライアンなのだ。

姉が妹の事を知っているように、妹も姉のことをよく知っている。きっとこういうことをするのは予想しているだろう。

妹に今日の事を聞かれたらどうしよう、ふと素朴な疑問に突き当たって一番厄介な難題だとわかったビワハヤヒデは苦笑するしかなかった。

## 第十五話

(おおよそ時速90キロで巡航、そこから加減速調節で翻弄しつつリードキープ、か。ただの走り屋小僧ならこれに泡喰ってだいたい追い詰められてる。

さすが群馬トレセン、タービンにすっかりついてってるよ。冷静に事を運べてるってわけだ)

トランシーバーから流れてくる群馬トレセン生からの生実況を脳内で整理しながら、小町は今夜の対戦相手であるグッドフェイスの實力を上方修正しつつ今回のレースの行方を想定し続けていた。

頭の中でいくつも始まっては終わる芦名峠のダウンヒルタイムアタック、その中での勝率は70%の確率でシマカゼタービンの勝利だと告げている。

これは妥当な数字だ、親友の技術力を知っているからこそシマカゼタービンが負ける確率は十分にありうる。

相手がウマ娘相手だと舐め腐った他県やほかの峠からの挑戦者であり新参者であったり、まったく技術も経験もなっていない増長した走り屋小僧であれば100%で勝てるが今回の相手はそうではない。

群馬トレセン学園モータースポーツ部で馴染みの走り屋であり親友のホクリクダイオー達に仕込まれた立派なレーサーだ。

サーキットで培った経験と技術は決して侮れるものではない、それを十全に発揮できればシマカゼタービンを初戦で追い抜くことは理論上では可能なのだ。

《こちらL字コーナー！来ました、タービン先輩先行、フェイスさん後攻。降りで…変わらさず!!登りに入ってタービン先輩がブロック、フェイス先輩がぴっちりくつついた!!》

《タービン先輩が煽られています!!車間がほとんどない、一メートルもないのに涼しい顔!!》

小町の脳裏にははつきりとシルビアS13に背中を煽られながら

顔色一つ変えずにスピードを上げるシマカゼタービンの姿が思い浮かんだ。

「登りで抜かなかった、それとも抜ききれなかったか？」

「抜ききれなかった、だから煽ってる。じゃねえかな？」

「ミスったとは考えられんし：タービンがブロックか、ターボのやり方だな。徹底的に抜かせない気か」

「あえてそうして出方を見たんだな。で、フェイスちゃんはすぐ切り替えた。新人の技術じゃねえな」

さすがだねえ、いいネタゲット。恒夫は微笑を浮かべながら付箋だらけの分厚い手帳を取り出して、さらさらと何かを書き込む。

「先輩相手に煽りで仕返しとはフェイスさんもリスキーなことしますね」

「群馬トレセンやつぱ怖い、ウマ娘相手の煽り方を教えてんのかよ…」  
テューダーガーデンの感心したような声に、心底何かに安心した声色のクイーンベレー。

これでもかなりマシだけどね、小町は妙義山の走り屋にいるダーティな手段を好む知り合いを思い出す。

シビックEG6を操るその走り屋は、腕前はトップクラスに入るのだが勝負の仕方と態度が非常に悪い。

煽り運転に難癖、コーナーでこれ見よがしにバンパーを突つつきスピンさせる、挙句にガムテープデスマッチなどの特殊ルールで勝負を挑む。

特殊ルール戦では自分も真摯にそのルールを守って勝負するあたり走りにプライドはあるのだが、いかんせん評判は悪く嫌われている走り屋だ。

「そんだけ自信ありって所も評価できるな、こりや結構持ち直してきたんじゃねえか？」

「どうだろね、次が5連へアピンだから多分——」

《こちら5連へアピン！シマカゼ先輩がリード！へアピンにそのまま突入!!遅れてフェイスちゃん!!およそ5バ身!》

芦名峠の5連続へアピンは峠の中腹にあり峠道の例にもれず勾配

とコーナーがきつい場所になっている。

これをフェイスがうまく処理できるか、それがこのレースの流れに  
関わってくるはずだ。

《ヘアピン通過、依然シマカゼ先輩がリード！さらに離されてフェ  
イスちゃん!!》

《大差よ大差！突っ込みと立ち上がりで完全に後れを取ってる!!  
》

現状は変わらず、むしろシマカゼタービンがリードを広げている。  
相手はかなり手ごわいのだろう、シマカゼタービンの走りを見てきた  
からこそ小町はすぐに確信を持った。

「大差か？千切ってないならやっぱりここまで引つ張る気だな」

「だろうな、フェイスちゃんの腕は確かなもんってわけだ。確実に仕  
留める気だぜ」

面白くなってきたな、良助と恒夫が走り屋らしい好戦的な笑みを浮  
かべる。それと同じように、小町は己の頬が吊り上がるのを感じた。

いつもこういうのだ、彼女の走りに胸が熱くなる。たまらない、自分  
も早く親友と自分の車でこの峠を走りたい。

「先輩、また笑ってますよ?」

「あんなたちもね」

さて、シマカゼタービンはグッドフェイスのS13にどんな走りを見  
せる気だろうか。小町の脳裏にはいくつか案が浮かんでは胸が高  
鳴る。

どれも彼女が10年以上この芦名峠で磨いて身に付けてきた地元  
走りの粋、この芦名峠であればこそ彼女は足でスポーツカーと並び競  
り合える。

それをグッドフェイスがねじ伏せるか、それともシマカゼタービン  
がねじ伏せるか、小町の目に一筋のライトが峠道の先で光ったのが見  
えた。

「ヘッドライト、タービンだ」

「すぐ後ろにシルビアS13！やはり詰めてきましたよ!!」

「それくらいできて当然だ、だがここで抜ききれるか?」

いや、それは難しそうだ。小町はシマカゼタービンの後ろで乱れるS13の挙動を見やすく確信した。

S13の走行ラインが安定していない、右に左にと迷いが見える。そのせいで踏み切れないで隙だらけだ。

その理由はシマカゼタービンにずっと付き合ってきた良助や恒夫、小町にはすぐに分かった。

「タービンの奴、煽り返してやがる」

「姐さんもやっぱやべえ」

前を逃げながら後ろの相手を煽りかからせ妨害するシマカゼタービンの得意技、芝でもダートでも峠でも彼女に前を走られれば恐ろしく走りにくいと評判だ。

鍛えに鍛えた常識外の速さとスタミナは最大の武器だが、走り屋一家の瀬名家で父から受け継いだ技術をさらに自分なりに鍛え続けて磨いた技は同じ瀬名家の長男にも恐ろしいと言わせる。

違和感を覚えさせない自然すぎるフェイントモーションに騙されないのは本当にベテランの走り屋くらいだ。

自分の判断力を信じられなくなってしまうようになると言われるまでに完成されているのだ。

シマカゼタービンが一步先に3連ヘアピンカーブに入る。その瞬間、ブレーキングからのグリップで曲がろうとしたS13との車間が一気に開いた。

二つ目のカーブ、これもS13が一方的に置いて行かれている。3つ目、シマカゼタービンがカーブを抜けた後にS13がカーブに入った。

「勝負あったな」

「相変わらず恐ろしい走りしやがるぜ」

心底呆れたような顔で感心しきりな良助と恒夫の二人に小町も同意して頷く。

彼女がやったことは単純だ、この3連ヘアピンカーブまで乗りに乗せてきたスピードで走りながらラストスパートをかけたのだ。

「本気のラストスパートだな、今は何キロだっけ？」



「最高のコンディションなら116、ノリノリだから多分出てるよ」  
時速にしておよそ101kmほど出ていただろう所からのさらなる踏み込みによる加速、群馬トレセン学園の計測ではラストスパートの最大速度で時速116kmの超高速走行だ。

あまりに速すぎて走り屋のレースに慣れた小町にでも大まかにしかわからない、だがシマカゼタービンは確実に全力でのスパートをか  
けた。

ウマ娘の小回りを活かしたコーナリングに長けているとはいえ、生身でのその走りはもはや自殺しに行っているのに等しい。

ラストスパートほどの加速となるとシマカゼタービンの超人的なスタミナもすぐに枯渇するが、それを見せるくらいにグッドフェイスの腕前は良いのだろう。

きつとグッドフェイスには3連ヘアピンカーブに突入した途端、シマカゼタービンの背中が掻き消えたように見えただ。

二つ目のカーブで食らいつこうとしても躲かれ、三つ目に至っては自分がカーブに入る前にもうシマカゼタービンが曲がり切っている始末。

曲がり切った頃にはシマカゼタービンの背中には遙か遠く、生身のウマ娘相手に完全に千切られている状況になったのだ。

(この先はフェイスちゃんの引き際が試されるわね)

この3連ヘアピンの先には最後の勝負所、300メートルの直線直滑降、角度にして30度ほどの坂がある。

群馬トレセン学園モータースポーツ部に所属するウマ娘ならば理解できないはずがないが、ここも最後の勝負所だ。

一直線の直滑降に賭けるチキンレース、芦名峠の走り屋ならもつれにもつれた勝負で一度はやったことのある命懸けで一番危険な勝負。

しかし小町にはここではもうグッドフェイスは勝負にならないとわかっていた。なぜなら、彼女の技術はここで勝負できるほど完成されてい  
ないのだから。



三連ヘアピンが終わる、その立ち上がりで大きく息を切らしながら俺は一瞬後ろを振り返る。

体力がぎりぎりだ、さっきの3連ヘアピンでラストスパートの足は使い切った。これで千切れれば俺の勝ちだ、でもグッドフェイスはそう簡単には千切れない。

そして、やはり車は速いんだ。

「来やがったー」

速度を取り戻して俺が最後の直線、ゴールの麓までの直滑降に突っ込む直前にコーナーからS13のヘッドライトが躍り出てくる。

立ち上がりはなっていない、タイヤが路面を掴み損ねて空転気味、それだけあいつは思いっきり踏み込んで。つまりまだあきらめてねえ、最後の最後に差し切る気だ。

そうでなくちゃ話にならない、競争ウマ娘は最後まであきらめるわけがない。アクセルを踏み込んで、シフトを3、いや4に入れた音がする。

馬鹿な女だ、命知らずだ、角度30なんて下り坂はさすがに未経験だろうに。運転席で顔が引きつってるのが見える。

この先は芦名峠の最後の勝負所、直滑降での根性試しだ。話には聞いているだろうし怖いんだろ？それでも踏むのをやめねえんだろ？そうじゃなきゃ面白くねえ！

「私が勝つ!!」「俺が勝つ!」

何もいらぬ、最後の直線の下り、急加速してくるS13から逃げるように俺も足に鞭を入れて加速する。

ブレーキはいらぬ、坂道で重力を味方につけたままS13に押されるように俺も速度をどんどん上げていく。

もう下はゴール、緩い左曲がりでその先は市街地一直線だが、周囲は雑木林だ。

S13もラストスパートのつもりか乗ってきた、そうだ、そこからどこまで行けるんだ？

「あんのバカ!!」「フェイスちゃんがキレちゃった!?!」

横並びになる、もうゴールは目の前だ。ギャラリーの一部が顔色を変えて道路から離れていく。

全力で抜けてもゴールの先で停車できる安全マージンは取っついて慣れていく奴はそこまで怖がらないから慣れてない連中だ。

ここまで付いてきたやつは久しぶりだ……だからこそ、ウマ娘だからできる勝ち方つてのを見せてやる。

最後の一步、残り150、思いつきりアスファルトを蹴りつける!!  
「抜けた!」

「姐さんが抜いたあ!!」

半馬身、そして一馬身、前に出る。S13のエンジン音が後ろに遠のいていく、107、俺はまだ踏める、108、まだ加速できる。

だがあいつはもう踏めない。あいつも分からないはずがない、なぜならこのゴールの先には限界があるのを知っていないはずがない。

走ってみて本当の怖さに気付いただろうよ、公道バトルのゴールの先は公式レース場のソレよりもずっと狭く短い距離になっているってことにな。

止まれなかつたら終わりだ。最悪の場合、ギャラリーごと薙ぎ払って自分が路肩の雑木林に突っ込む。

自分がどうなるかなんて考えるまでもない、何よりその結果がどうなるかなんて考えたくもないだろうな。

一瞬だけ振り向いて運転席のフェイスと目を合わせる、グッドフェイスの表情が悔し気に歪んでいるのが見えた。悪いが、これが勝負だ。

S13の加速が止まる、フェイスは腕のいい奴だ。ちゃんとわかっている、たとえ安全マージンを取ったコースを設定していても、ゴールした後にはちゃんと止まるように考えて速度を出す必要がある。

車は急には止まれない、ウマ娘も急には止まれないが条件はまるで違う。完全にエンジンのパワーと車体重量が足かせになる。

それに比べたらウマ娘で生身の俺は軽くて小柄で小回りが利く、車が使う制動距離をより短く、そして小柄故に長くより細やかに使って減速ができる。

それだつて腕のいい走り屋は車をしつかり制御してきつちり使いこなすが、グッドフェイスはまだそれができるような技量ではない。だから俺の勝ちだ。

「シマカゼー！一バ身差でシマカゼが先着!!次いでグッドフェイス!!」

ゴール地点を突き抜けて、足の回転を緩める。背中に乗せていた推力を一気に逃がしつつ、ゆつくりと速度を落としながらゴールの先を目いっぱい使つて速度を緩め、ぐるりと回つてクールダウン。

周囲のギャラリータちの歓声が耳に響く、うるさいって言いたいくらいだが悪くない。俺とフェイスの両方を讃える大歓声だ。

立ち止まった瞬間、一気に全身から汗が噴き出てきた。さすがに息が苦しい、体が火照つて熱いったらないし、酷使した足ががくがく言つてる。

でもこれが気持ちいい、こうやって全力で走つた感覚が、この達成感がたまらないんだ。それで勝つたなら何も言うことはない。

今日は一勝、俺は勝つたぞ。笑みが抑えきれずに笑いながらこぶしを握つて右腕を突き上げた。

## 第十六話

入浴、それは命の洗濯である。ウマ娘になり、前前世のような生活ができるようになれば当然ながら風呂も昔のように入らねばならない。

まあ：最初は不便だった、女だし、昔は敏則とか親父さんとかがしっかり洗ってくれて楽ちんだったもの。

なんだかんだで馬の時代のほうが恵まれてたところってあるよね、生まれ変わってウマ娘になってからこう、人間社会に戻ってくるとさ。

衣食住完備だったし、仕事もあつたし、飯も出してくれるし、掃除洗濯入浴も当番の人とか敏則たちがやってくれたし。

俺、みんなと朝から秋名に日帰り温泉に来ています。食事処と温泉だけの銭湯みたいなもんだが、その分鄙びたゆったりできるいい温泉なんだこれが。

室内はサウナと昔ながらのでかい風呂に打たせ湯、外は露天風呂に坪風呂。ニツチな観光客のほかは地元の人だから人入りもそこそこ。静かすぎず、騒がしすぎず、夜に散々暴れた身としてはゆったりできりいい環境なんだ。

群馬県は地方の田舎、でも特徴がないわけではないし調べれば観光名所はいくらでもある。

芦名なら城と古戦場などの歴史遺産、先祖代々受け継がれてきたガチの戦国武術道場とオカルト話。個人的には峠道。

秋名といえば山上湖の秋名湖と観光地、麓の温泉街とゆったりとした街並み。個人的にはやっぱり峠道。

秋名の温泉は知名度こそ有名どころより一步譲るけど、その分ゆったりとした時間ができて親しみやすい優しい感じがするから俺は好きだ。

でも風呂場の洗面台で体を洗う俺は青髪でオッドアイの巨乳美少女：鏡で見るとまるでアニメの世界だよな。

なんか色合いとかそうだし、アニメ顔だし、美形多いし、胸でかい

し、髪色フリーダム：

「いや、深く考えんでおこう」

小さくつぶやく、気付いたらいけないことに気付きそうだ：まあま  
ずは体を洗ってリフレッシュだ、昨日は散々走ったからな。

デカい風呂になみなみ満たされた白く濁りのある天然温泉が待っ  
ている。そしてその中で体を癒す女性たち、人間もウマ娘もみな平  
等。

峠で走りまくった後の温泉は最高なんだよ。なんかいけないこと  
してるような気もしないでもないが：まあ事実、今生は生まれからし  
てウマ娘、女なわけで普通のことだ。

小さなときは堂々と男風呂に突撃してたけどな、小学校2年辺りで  
羽交い絞めにされながらやめさせられたっけ。

「男風呂行こうとか考えてないでしょうね？」

隣で体を洗うノルンファンクが仕切りの向こうから顔をのぞかせ  
る、相変わらず日本人離れした美貌とルックスだ。

というか外見はもろ外人だ、彫りは深いし金髪だし白人系の白肌、  
見た目は深窓のお嬢様といっても通じるか？

生まれも育ちも群馬の農家育ちでアウトドア派のミリオタって言  
われてもすぐ信じる奴がまずいないっていうね。

「昔を思い出してただけだよ」

ウマ娘って発育いいからダメだとかなんとかでな。確かに小学生  
にしては出るところは出て引っ込むところは引っ込んでたもんなあ。

それ以来ずっと女風呂、お袋にめっちゃ笑顔で連れていかれたとき  
はちよつと悪いことした気がしたな。それまでずっと親父と男風呂  
だし。

当然皆さん生まれたまんまなわけだが、今はもう見慣れたっていう  
かなんて言うか：昔はずいぶん邪な考えが浮かんだもんなんだがね。

「ふふっ、昔は恥ずかしそうにしてみましたもんね」

ついでにエロい視線送らないように必死でした、眼福過ぎてな！今  
はそんなことないが。

着替えとか見られたら悲鳴上げちゃうしさ：やっぱ、女になってん

だな。男に告白されるとまだ尻が寒くなるけど。

そりやそうだよな、今生は生まれたときから女、男で牡では前世の話なわけで…しかし長年連れ添った相棒がいないのが違和感というのも事実。

お馬さん基準でも大変ご立派な相棒は俺の自慢だったのに…女は女でメンドクサイし、現実は無常よな。

「あなたは女性ですからありませんよ?」

「蒸し返さんでくれますかねえ?」

頬が赤くなるのを感じた。ガキの頃、ついつい言っちゃった事まだ覚えてやがんのかコイツ。

「小四の修学旅行の時、お風呂セットに髭剃りセット入れてきたのはどこのどいつだったかしら?」

「シャンプーとかも全部男性用で揃えてきてたもんね」

ツバキにダイオー!?!いつの間にか?くそ、完全に囲まれちゃった。髭剃りは前前世の癖でついつい入れちゃったやつで、シャンプーとか単純に俺の好みだよ。

「それが今やこんな女らしく、大きくなったねえ?」

しみじみとしながらダイオーが両手をワキワキしながら後ろに回ってきたので、胸を守りながら躲して立ち上がる。

髪下ろすとやつぱ大人っぽくなるなお前、最近どっかで見たことあるのは気のせいかな?

小町達は…居ねえか、先にサウナに行つてなければ絶対にちよっかい掛けに来てたな。

「つたく…あ、そういえばお前ら、高橋兄弟の話ってなんか進展ある?」

「今のところはないね」

「うちと同じか」

まだ動きは無い。ま、あつちは大学生だし本格的に動くのはもう少し先になるか?弟の方とはともかく兄の方は医大の超エリート、がつつり動けるように下地を整えてる感じか。

一番動きやすそうなのは大学が夏休みに入ってから当たりか?で

もレッドサンズ全体で動いてるのは確かみたいだし、末端が偵察に来てもいい頃だがそれもないんだよな。

やること色々でかくなりそうだなあ…あの兄弟、特に兄貴は何しでかすかわかったもんじゃねえもん。

「そっか、準備は常にしといたほうがよさそうだな…お前らはどうする？」

「是非って言いたいんだけど、今年は忙しくなりそうであんまり顔出せないんだよねえ」

「あー…そういえば前に言ってたっけ」

そうだった、こいつら今年は中央のレースに殴り込みする予定だっけ。水沢とカサマツを巻き込んで暴れるとかなんとか。

たぶん地方で有名どころっていえばたぶんコスモバルクか、前世だと同時期にちよいちよい聞いた名前だ。

でもあいつって北海道じゃなかったっけ？…ここだと水沢かカサマツにいんのか？

「そういうあなたはどうなんです？次に出るレースは何か考えてるんですか」

「レースねえ…」

「珍しく年末年始の大会に出てたくらいなんだしなんか考えてるわよね？」

一応考えはある、URAFファイナルズ・一般部の地方予選トーナメント。2年か3年前辺りから、トレセン学園の理事長が年末に新レース作るとかでURAが主催してるヤツ。

なんでも主催のトレセン学園理事長がすべてのウマ娘にチャンスがあつてしかるべきとか考えてて一般参加のレースも組んだんだそうだ。

しかも本選では本物のレース場で現役の競争ウマ娘たちと一緒に走ることになる。レースは完全に分けられるとは言え、夢にまで見た舞台で走れるなら盛り上がるわな。

ウイニングライブは年末の本戦レースも含めて決勝戦まで基本的に無し、一般は最後まで無しだそうだ。



とはいえ一般参加型のレースの中では段違いに厳しいレースになりそうなのが大方の予想だ。

「URAファイナルズの一般の部、ベレーたちとエントリーしてる」「またまた微妙なヤツを、広報担当が馬鹿正直に言いすぎて逆に納得させられたヤツじゃん」

「上からはカンカンに怒られたらしいですがね、あのトウインクルが恐ろしく悪辣に扱き下ろすレベルですし当然ですが」

「見た見た、あの時だけゴシップと一流の論調が逆になっててみんな面白がってたわ」

そもそも応募するためには資格が必要だ。地方か中央かは問わずに元トレセン生だったり、一般のレースで何かしら結果を出していたりな。

その上で指定医療機関の健康診断を合格したら登録できる、俺は一般参加レースの方で資格は十分だった。

しかも地区別予選トーナメントで勝ち抜いた上位者は、開催時期と出走距離に合わせた本物のG2あるいはG3レースに特別出走枠で参加して結果を残さなきゃ本選にはいけないことになってる。

本業と競り合って掲示板入りしたら年末の本戦レースに出走できる、という流れらしい。ここも特別出走枠はライブ免除だそうだ。

普通に考えて勝てるわけがねえ、赤城の擬音姉妹とかの走り屋トップ層ならまだしも普通のアマチュアじゃ鎧袖一触にされてドベカルール違反で除外だ。

年末は本業の前座とはいえ肩を並べて走るから実力だけはしつかりしたやつを選びたい、大体こんなことを広報官は糞真面目に言ってたな。

向こうの理屈も理解できる。ウマ娘レースは世界共通の話題で文字通り国際イベントだ、日本は後進国って言われてるが世界からの注目度はだいぶ高くなってきてる。

今がまさに飛躍の時って感じな時に、わざわざお遊戯レベルのレースをそんな新レースでやらんでも……って所がURA組織内部でもあつたんだろうよ。

とはいえ、地方予選突破でも本物のレースを憧れの舞台上で走れる上にオープンすつ飛ばして重賞クラスなんだから、それだけでもう満足できちまうだろう。

本当ならそこまで行けなかった連中にも、そこから先がなかった連中にも、また夢が見たかった連中にも、ちようどいい塩梅だ。うまく作ってやがるゼホント。

デカすぎる大会はあんまし好みじゃないが、高校生最後だし、今後の進路のためにこういうのでいい成績を残せば箔がつく。

予定がかぶれば棄権すればいい、地方予選だけでも賞金額は良いから勝てば稼げて御の字だ。それが主目的じゃないけどな。

「でもタービン、良い判断だよ。実にイイ……」

あ、ダイオールの奴気付きやがった。ノルンとツバキはまだ理解しきってねえな？まああとで教えるだろ。

「どのレースにエントリーされたか、解ったら即教えてよね？無理にでもねじ込んでもらうから」

「試験と被ったら棄権するからそのつもりでな、さすがに将来とは代えられん」

俺の目的は優勝じゃなくて途中の選抜で走らされるG2かG3だ、うまくいけばこいつらの希望をかなえられる。

出るレースは本物の重賞、ダイオー達がエントリーしてれば当然肩を並べてバトルできるってわけよ。一緒に踊ることはできねえけど。

親友があんなに願うんだ、また一肌脱いだって罰は当たるまい。首を傾げるノルンとツバキ、うん、気付いて親友、さすがにちよいと気恥ずかしいしき。

「んじゃ、先に入るわ。ダイオー、あと頼むよ」

それでは風呂へスタコラサッサ。まずは部屋風呂、白く濁りのある天然温泉に満たされた湯船の昨日知り合ったポリューミーな長髪の葦毛のウマ娘の横に、周囲に迷惑にならないようゆつくりと足から入って肩までつかる。

熱すぎず、温すぎない湯音が体を包んでじんわりと体を温めてくれるこの感じ……ああ、たまらん。

「どうだ？旅館の風呂も良いが、こういうところも悪くないだろう？」  
「ああ、旅館の風呂とはまた別の風情があつて、静かで気持ちがいいな」

隣に入るビワハヤヒデも気に入ってくれたらしい、良きかな良きかな。昨日、ダイオーに呼ばれて野戦司令部に行ったら開口一番謝られたときは面食らったが。

なんでも前にディーブと一緒に来ていたナリタブライアンの姉らしい。妹が迷惑をかけたから謝りに来たんだと、良い姉さんじゃないか。

彼女も中央ではとんでもなく強いウマ娘らしいが全然知らんから何ともいえねえ、ウマ娘のレースはダイオー達とかターボが出てるのしか見たことがない。

「そりゃよかった。ゆつくり休んで、次のレースも頑張ってくれや。ほかにも気分転換にいい場所あるから教えるよ」

「そうさせてもらうよ、ところで聞いてもいいかな？」

「なんだ？」

「あんなとんでもない走りができるのにどうしてトレセンを目指そうとしなかったんだ？」

「きよーみなかったの、走るのに興味だけでね」

気持ちよくてたまらんわ、さすが温泉。群馬住まいでホントよかつたわ。

「周りから勧められなかったのか？群馬トレセンが放っておくとは思えん」

「趣味を仕事にする気はないって言ったら納得してくれたよ」

趣味を仕事にして爆死すんのはやーよ、ぶっちゃけたら学校の先生とかは納得してくれたし。

将来の目標は別にあるって言ったら群馬トレセン学園もしばらくしたら来なくなったしな。

「だが入学してみるというのはありだったのでは？物は試しだ」

「トレセンで酒造の勉強ってできる？免許取ったり、実習したりとかさ」

「…できんな」

「だろー？」

別に嫌いとかそういうんじゃないけどただ目標に沿わないから候補にならんよ。

トレセン学園って地方も中央も要はウマ娘レースの専門教育機関だろ？ 試す以前の問題やがな。自習で何とかするにも限度があるわ。前世の敏則だって酒の資格とか一通り取ってから騎手の資格取りに行ってたからな。

「それにレースはともかく、踊るのも趣味じゃないんだ。ああいうステージで踊るのはガラじゃねえよ。」

能力を買ってくれるのはうれしいけどもう18だし、今年は受験もあるからさ。落とすわけにやいかんのよ」

専門学校の試験はパスできるくらいは勉強してるけど万が一がなとも限らんから勉強はしつかりせんとならん。

第二志望に群馬大学、第三で就職だから企業めぐりもせにやならんし勉強もしなきゃならん。いろいろ準備が必要なのさ。

これでもし全滅したら校長の道場で迷えば敗れる師範見習い生活か犬童さんに丸め込まれて警察か…習い事で葦名流剣術を選ぶじゃなかった。

そう考えると今年はやっぱりいろいろ忙しくなるよなあ…しかもレッドサンズも仕掛けてくるし。

「受験…受験か…」

「ん？ どうした？」

ビワハヤヒデがすごく珍しそうな眼をしている、受験なんて珍しいことでもなからうに。

こいつだって、トレセン学園の試験受かって入ってんだろ？ あそこも小学生相手にえらくドギツイことしてるってもっぱらの噂だぞ。

ターボ曰くそんなことはないらしいけど、覚えてる筆記試験の問題を聞いたら小学生にやらせる問題じゃねーって印象しか出ねえわ。

ホント、ターボの奴よくまああんな試験突破して入学できたもんだわ。



シマカゼタービンは不思議なウマ娘だ、ビワハヤヒデにとって彼女はそんな印象だった。

彼女の技術と実力は明らかに全国レベル、中央シリーズで十分活躍が見込めるほどに出来上がっていて才能が光るところの話ではない。

もしトレセン学園に入学してさえいけば文字通り引く手数多であつただろう。だというのに、シマカゼタービンの姿はその才能とは全く逆にあまりにも普遍的すぎた。

秋名山麓の渋川市街地の一角で自分を先導してくれているシマカゼタービンの後姿は、どこにでもいる普通の人というよりほかにない。

夜の峠で走っていたG1ウマ娘も真つ青なあの姿と雰囲気は昼間になるとなりを潜め、どこにでもある量販店のジーンズと白いシャツ、春物ジャケットの飾り気のない田舎娘といった風情だ。

「あそこだよ、藤原豆腐店」

「ほう、なんとも風情がある店構えだな」

「ただのボロい店って拓海の奴は言うけどな」

秋名の街歩きで自分のおすすめを案内してくれているシマカゼタービンの足取りは軽く、自然体だ。

心なしかうきうきしており、昭和の雰囲気漂う風情のある個人商店を前に小さく微笑んだ。

その姿がどこまでも馴染んでおり、通い慣れているというのが見ただけで分かる。

「この豆腐はうまいぜ、山の上の一流ホテルがわざわざ契約してるくらいだ。でも値段は昔と変わらん街の豆腐屋価格、お財布にも優しいんだぜ。」

この商店街にはそんな昔っからの店ばかりだ、東京じゃもうあんなま

「見ねえだろ」

「トレセンの近くに商店街はあるが：それ以外だとあまり見ないな、確かに」

今は理由がよくわかる。彼女は一般人なのだ、ウマ娘で、走り屋であつて、その技術と実力がいかに優れていようとも彼女はただ走るのが趣味の一般人でしかない。

彼女は普通の学校に通い、普通の授業を受けて、普通の世界で生活を送ってきたのだ。

そして今も普通に進路を定めて、学校や企業などの採用試験を受験して社会に出ていくところなのである。

競争ウマ娘としてレースに生きる自分たちとは、生き方も立ち振る舞いも決定的なところで違っている。

「ん？ハチロクがない、配達かな？」

「留守か？」

「いや、店開いてるからどっちかはいるだろ」

シマカゼタービンは手慣れた様子で店の戸に手を掛けて開ける。中はまさに昭和時代の街の豆腐屋と言つて差し支えなかった。

店頭販売用の商品が入った棚やケース、レジがある入り口周辺から奥は作業場になつていてその奥が住居になつていているらしい。

住居スペースの戸が開いているせいで店の入り口から居間まですべて丸見え、こんな緩さも東京ではもう滅多にみられない光景だ。

店先のレジからしても年季の入った年代物で、呼び出し用ベルや電子マネー用の端末類もない。まるで時間が止まっているようだ。

「こんにちはー！すいませーん！」

「大声出すなよ、聞こえてるよシマカゼ。いらっしやい」

店の奥から出てきたのは同年代らしい少し眠たげな目つきをした青年、彼がシマカゼタービンの友人らしい。

「拓海か、文太さんは？」

「親父ならいねーよ、タバコ買いに行つてる。今頃、店長と駄弁つてんじゃねーの？寄るつて言つてたし」

「なんだ、スタンドの方が。あとで行つてみるか」

「そっちの人は？」

「ターボの知り合いだよ。お前：知ってるわけねえな」

「ビワハヤヒデだ、よろしく」

「どうも、藤原拓海っす」

住む世界が違う、とはこういうことを言うのだろうか。自分を見て目の色一つ変えない藤原拓海の表情をみてギャップを感じる。

自分がただのウマ娘『ビワハヤヒデ』としか見られていない、彼にはただシマカゼタービンが連れてきたお客というだけだろう。

トウインクルシリーズで活躍し、あのナリタブライアンの姉として、BNWの一人として語られる自分が全く存在しないのだ。

それを見てシマカゼタービンは小さく耳打ちしてきた。

「悪いな、あいつもウマ娘レースは見ないんだ。車すらろくに知らん」  
「聞こえてんぞ、別に普通だろ。こっちにいるってことは走ってたのか？イツキもそうだけど、峠なんか走って楽しいんか？」

「そりや趣味だもんよ、解らんならそれでいいのさ。お前だつてなんかあんだろ」

「そりやあるけどよ…ついこの前に免許取ってからアイツ車の事ばつかだぜ？そろそろ耳にタコができちまうよ」

「気楽に聞き流してやれつて、しばらくすりや落ち着くさ」

普通に男性と接して、普通に同年代の友人として気兼ねのない談笑に興じるシマカゼタービンの背中には、どこまで行っても普通だ。

日本ウマ娘トレーニングセンター学園ではまず見ない光景だ、ほかの学校に通う同年代の男性と友人関係にあるウマ娘はそもそも貴重だろう。

トレセン学園にも男性の教員やトレーナーは多くいるので男子禁制というわけではないが、こうして気兼ねなく気安なおしゃべりができる同年代の男子はいない。

学園周辺に出てもそれは同じだ、同年代の学生がいても彼らにはトレセン学園のウマ娘、競争ウマ娘として見られていて気軽な友達になれるような接し方はしてもらえない。

普通の世界だ、一般人としての世界がここにはある。その中で自分

がどれだけ異質なのか、それも理解できてしまう。

「でも良かったのか？お前、免許取ったから文太さんに配達手伝わされんぞ？」

「別に、いつものことだし…」

「その分だともうやらされてんな、朝っぱらから秋名山はきついだろう？」

「仕事手伝わされんのは今と変わんねーよ。それより、なんにすんだよ？」

「ま、そりゃそうだ。絹ごしと木綿を3つ、それから厚揚げと油揚げもな。それから：おからも二袋だ。ビニール二つくれ」

シンボリドルフにスカウトされても断られるわけだ、競争ウマ娘の世界は彼女の世界とは全く別なのだから当然なのだ。

身内が走っているからという程度でしかない、それ以外は知る気もないから無関心。

彼女にとってシンボリドルフは『ただの有名人』でしかなく、競争ウマ娘として生きる自分たちとは感じ方も見方もまるで違うから響き方や言葉の重さも全く別の捉え方になったのだ。

(会長も難物にぶち当たってしまったわけだ…)

彼女を普通にスカウトするのは難しいだろう、ビワハヤヒデは自室のベッドに座り、床に座り込んで目の前で豆腐に舌鼓を打つ制服姿のナリタブライアンとディープリンパクトにはつきり言った。

トレセン学園に帰ってきてからも二人にどう答えるか悩んだが、結局のところ正直に話すしかないと開き直すことにした。

どのみち口では彼女のレースを説明するのは難しい、それを踏まえて正直に答えるほうが彼女たちのためになると思ったのだ。

「なるほど。だから豆腐屋のお土産ってわけか、確かにうまいな」  
「ああ、ツインターボも喜んでいたよ」

自分も買ってきた藤原豆腐店の絹ごし豆腐に醤油を垂らした冷ややっこに舌鼓を打つナリタブライアンの表情は幾分か緩んでいる。

彼女の隣で同じように舌鼓を打つディープリンパクトもすつかりとろけた表情だ。



シマカゼタービンのおすすめ通り、この豆腐はうまいのだ。木綿豆腐はどっしりとして食べ応えがあり、絹ごし豆腐はきめ細やかで滑らかな舌触り、どちらもそのままおいしい豆腐だ。

残念ながらこの豆腐と比べると学園の食堂で出される豆腐はいささか味気なく感じるくらいによくできている。

「で、姉貴。あいつの走りはどんな風に見えた？」

「規格外だ、さつきも言ったが言葉では説明できん。あれは見るほうが手っ取り早いだろうな」

「映像とかは無いですか？」

「さすがにもらえなかったな」

群馬トレセン学園の超機密情報である、頼んでみたがコピーを貰うことはできなかった。

残念そうにしよんぼりするディープリンパクト、皐月賞を前にして追い込みも激しくなっているので何かしてあげたいが彼女の希望には添えそうにもない。

皐月賞の冠を取るために真剣に練習に励む彼女であるが、同時にシマカゼタービンに再戦を申し込みたくてうずうずしているのだ。

彼女に負けたままクラシック最初の冠を手にしても、皐月賞に彼女がいなかったから勝ただけと言えてしまつて素直に喜べないらしい。

シマカゼタービンはそんなことは思つてもいないし、レースを知る者ならばそういう話ではないと断言できるが当事者としては納得いかないのである。

「惜しいな、あれほどの強さを持ちながらレースに憧れを持っていないとは…」

「野球に憧れて必死で練習している非才に、才能があるからサッカー選手にならんかと聞くようなものだ、ベクトルが違う。」

それにウイニングライブが嫌だとも言っていた、ダンスは趣味じゃないらしい」

「割り切りがいいのも考え物だな」

彼女は普通のウマ娘であるが向上心がないわけではないし一端の

憧れというものも持ち合わせている。

しかし自分たちがレースにかける情熱を彼女は酒と車に注いでいる、相手からしたら聞く意味もない話だったのだろう。

例で才能のない野球選手の話をしたが、シマカゼタービンの運転技術は才能も努力もあるレベルだ。

故に即答だったのだ、きつぱりと断るのも彼女らしいと言える彼女らしい。

どうにかしたいと二人は悩んでいるようだが、なかなか難しいだろうなどビワハヤヒデは感じていた。

## 第十七話

群馬県芦名市、芦名駅、いかにも田舎路線的な電車から駅に降り立ったシンボリドルフはついにこの時が来たのだと身を引き締めていた。

私服姿で変装し、目立たないように行動するように言い含められているが、そうなると自分たちの知名度が凄まじく恨めしい。

日本の皇帝と言われるシンボリドルフは言うに及ばず、一番新しくシニアで現役の3冠ウマ娘であるナリタブライアン。

さらに新進気鋭のウマ娘であるディープリンパクト、今年のクラシック最初の一冠である皐月賞を見事に獲得した今一番の注目株。

そんな超有名ウマ娘、トレセン学園・チームリギルの精鋭の中でもトップが一緒になって歩いているのである。

気付く人間はすぐ気づく、ウマ娘レースを知るものが見ればすぐわかってしまう。注目されないはずがない。

現に、駅のホームに堂々と降りただけで周囲から視線が集まりつつある。観光客は目を丸くしており、こそこそとうわさ話をするようにしゃべり始めるのだ。

「会長、トレーナーさんたちは先に瀬名酒造に到着したそうです」「解った」

スマホで南坂トレーナーと連絡を取り合っていたナイスネイチャの報告にルドルフは頷く。

今回は瀬名酒造への謝罪とスカウトということもあり、お忍びなので関係各所には周知してはいるがマスコミは一切かかわらせていない。

万が一の肉体スペックに任せた逃走に備え、敢えて人間である東条トレーナーと南坂トレーナーと別行動にして身軽にするくらいには気を揉んでいる状況だ。

今回の件に関しては明らかに自分の勝手な暴走が原因、その謝罪を含めた面会となれば当然『その手』の話題が大好きなメディアがすぐに喰いついてくる。

まるで当然のように背後から感じるこちらを観察するような視線に、ルドルフは辟易しながらもまだアクションは起こさなかった。

「会長、諦める気はなさそうだ」

「だろ？ 見たことのある顔ばかりだ」

「え、え？」

名門生まれとはいえ、まだこの手のことには慣れ切っていないデーブインパクトが目を白黒させているがそれルドルフはさりげなく手で制して落ち着かせる。

実のところ、トレセン学園から有名なウマ娘を尾行するのは運も絡むとはいえ実は簡単なのである。

トレセン学園及びその周辺はURAが責任を持って管理、警備を徹底しており警察との連携を密にしている安全ではあるが完璧ではない。

例えばトレセン学園の車両用出入口、何の変哲もない通用門であり対ウマ娘鎮圧護身術を会得した筋肉もりもりの屈強な女性警備員が常に立っているような場所であるが基本的にザルである。

もちろん中に侵入するのが簡単という話ではない、その手のセキユリティは公官庁レベルで嚴重だ。

トレセン学園内部に入ろうとしたりやたらと写真を撮ろうとしたら、明らかな出待ち行為などをすれば、すぐにムキムキのメスゴリラたちに睨みを利かされステキなおしゃべりをすることになる。

だがそれは逆に、そうしなければいいという意味でもある。

通用門付近も周囲は普通に市街地であり、店があり、家がある。コンビニもあれば喫茶店もある、小さな会社、事務所なども当然にある。人通りも多い、天下の日本ウマ娘トレーニングセンター学園の周囲は文字通りの城下町と言えるレベルだ。

近くでただ数分立ち止まり電柱の脇でスマホを弄っているだけの青年がいるとする、それを自分が警備員で見つけたとして声をかけるか？ しない、ただいえることだけは覚えて静観する。それしかできないとさえいえるだろう。

何も問題がないからだ、たとえばそれがトレセンの周囲で嗅ぎまわる

情報屋であつても。

簡単な話なのだ、要は生きた情報収集装置として情報屋をちよいちよいと歩かせているだけでいい。

その手の情報屋は現場では一切怪しい行動はしないし、決して表には出てこない。情報を持ち帰って安全地帯でツテのあるマスコミに売り込み、金を貰ってそれで終わりなのだ。

周囲に喫茶店があればそこに入ってもいい、コンビニで立ち読みをしてもいい、それどころかコンビニのアルバイト店員になればもつといい。

遠出する場合、どんなに相手の目を気にしても必ず目に付くのが車、バス、あるいは電車などの公共交通機関を利用する場合だ。

車両での移動は駐車場をマークし、その周囲にさりげなく人を配置すればたとえ細心の注意を払って学園を出てもすぐに見つかつてしまう。

そこで情報屋の出番は終わりだ、ただ『●●が学園を出ている』『●●が〇〇にいる』と一本電話をすれば小金がもらえる。

その情報から記者がどこからともなく現れ、別の情報屋の情報を統合して追跡し、発見してくるのだ。

さらに付け加えるならば、取材の機会を狙ってたちの悪い尾行などをするのは基本的にウマ娘専門ではないゴシップ誌や週刊誌の記者である。

一つミスをすればありとあらゆる尾ひれを付けて大げさにしても売れば良しとする質の悪い連中だ。

今回の場合、あの皇帝ルドルフのスキヤンダルである。何かすつぱ抜けないか虎視眈々と狙っているのだろう。

「はいはい、ターボはスマホしまおうね」

「なんで？ ストーカーはいけないんだぞ？」

「後で撒けるからそこまで様子見でね…いやあ、ネイチヤさんもこういうのは初体験ですわ」

「そーなのかー」

尾行の事を悪いストーカーだと考えたツインターボがスマホで警

察に通報しようとしてるところをナイスネイチャが止める。

首を傾げて不思議そうな顔をするツインターボは、本当にただのストーカーと同じ程度に思っているようだ。

(ツインターボが手を打つとは言ってくれたが…何をするつもりだ?)

今回のお忍びプランはチームカノープス、というよりもツインターボに丸投げである。

前を歩くツインターボ、その後ろで同じように少し悩みながら歩くナイスネイチャ、今日のプランの提案者でありサポートだ。

いざというときの爆発力はすさまじい南坂トレーナーと百戦錬磨のベテランである東条トレーナーに頼れないのは少し不安もあるが仕方ない。

作戦は単純で、トレセン学園で二手に分かれて時間差で出発、トレーナーたちは車で、ウマ娘たちは徒歩で学園を出る。

行きは公共交通機関の新幹線と電車を使い芦名駅まで直行する。そこから市街地で尾行を撒く、それだけだ。

瀬名酒造のある芦名は田舎であり、排他的ではないが新参者は浮くため見分けやすいらしい。

またウマ娘レース界隈の情報網は少なく、また先のひと騒動でのマスコミ関係者の蛮行によって現地警察からの目が厳しい。

性質の悪い連中が引っ付いてきても、ここで振り切れればそう下手な真似はしないだろうという判断だ。

「お帰り、息災か? ツインターボ」

「ただいま野上駅長! ターボは元気だ!」

「うむ、で、そちらが…なるほど」

本当に大丈夫だろうか、改札を出てすぐに壮年の男性駅長がお出迎えしているのだが?

その光景自体はあり得なくもないといった空気だが、やはりルドルフとしては少し身構えてしまう。

地方ローカル線のみが使用する芦名駅は観光地の駅としては田舎っぼく、昭和時代の駅舎に最新の自動改札機をそのままポン付けし

ただけの駅なのでどうにも当たり前な牧歌的雰囲気があるとはいえ。

「ネイチャ先輩、大丈夫なんですかこれ？」

「あはは…まあ、大丈夫だと思うけどねぇ？」

「…そもそもできてるのか？」

「そこは問題ないと思いますよ、トレーナーも太鼓判押してましたし」  
デーパーインパクトとナリタブライアンの疑問に、ナイスネイチャは困ったように笑いながらも信頼をおいた肯定を返す。

そうは言うが…ルドルフは改めて目の前で駅長と親しげに言葉を交わすツインターボに視線を送る。

そうは見えない、ただ馴染みの人と談笑しているだけに見える。もしや駅長に連絡をして何か手段を用意しているのだろうか…わからない。

「敏則から話は聞いている。まあ急がなくても良からう、街を案内してやったらどうだ？」

「うん…そうする!!」

「久方ぶりなのだ、迷うなよ。あと母の店にもできれば寄ってやってくれ、きつと喜ぶ。伊之助も今日は帰ってきておるしな」

「ありがと、みんな…こっちこっち」

駅長との話を終えたツインターボに促されるままに芦名駅の正面ゲートから堂々と出る、そこは東京とは全く別のまさに田舎町であった。

どこか古臭い、昭和の時代が所々に残された古い町並み。そこにツインターボは迷わず踏み込む、その姿は普段見る彼女とはどこか違うように見えた。

そんな彼女の後ろについて、そのまま市街地を歩く。目的地がどこかは教えてもらってはいいないが、誰かが迎えにくるらしい。

ツインターボに先導されるがままに駅を出て市街地の大通りを、そして住宅地に入り、少し細い道に行く。

小学校の通学路に入り、住宅地の路地をいくつも曲がって歩く。同じような空間をぞろぞろ歩いているが、不思議と退屈にはならない。きつと所々でツインターボが街の案内として解説してくれている

からだ。

「ここが野上雑貨店、駄菓子屋だぞ！小学校の時はよく買いに来てたんだ」

「こりやまた、なんとも昭和テイストな…品ぞろえも懐かしいというか」

「テレビで見るとような品ばかり…」

野上雑貨店、つまりは駄菓子屋の昭和時代から時が止まっているような外観にナイスネイチャが嘆息し、軒先に出ている品物を見てデーパーインパクトは目を丸くする。

軒先の古いガチャマシン、都会では見ないローカルメーカーの自販機、吊り下げられたチープなおもちや、そして店内に陳列された駄菓子の子の数々。

おそらくデーパーインパクトにとって、この手の駄菓子屋はテレビのドラマの中にもかもう存在しないはずの絶滅した店というカテゴリだったのだろう。

「ツイントーボちゃん？久しぶりだねえ、里帰りかい？」

「ううん、ちよつと違うよ！どっちかっていうとお仕事だ！」

「おやおや！まだ小さいのにえらいねえ」

店先の話し声に気付いたのか、店の奥からやってきたお婆さんが親し気にツイントーボの頭を撫でる。

それにはほを膨らませながらも抵抗しないツイントーボは、お婆さんにされるがままに見上げて問いかけた。

「野上お婆あちゃん、ターボはもうトレセン学園生なんだぞ！小学生じゃないぞ!!」

「いくつになってもターボちゃんはターボちゃんさ。孫は日に日に息子そっくりになっていくが孫は孫、おんなじや」

「もー…そういえば伊之助さんは？駅長がいるって言ってたけど」

「奥でのんびりさせとるよ。最近、警察は大賑わいだっつらしいからねえ」

「そうなの、大変だー」

「ターボちゃんほどじゃないさ、あんたもお仕事大変だろう。あまり



気を張り詰めすぎるんじゃないよ?」

「うん!」

ツインターボの知っている店主のお婆さんに挨拶をしてすぐ横の裏道へ。

そこから裏路地に入り曲がりくねった道をグルグルと歩いて…そこでふと気づいた。追手の気配が消えていることに。

「みんなはぐれちゃだめだぞ、この道はとつても入り組んでるから迷うとなかなか抜け出せないんだ!」

「マジか…道理でなんか見たことのある道をグルグルしてるように見えるのにそうでもないというか…違和感バリバリなわけだ」

「大丈夫だよネイチャ、芦名はターボのホームコースだからな!こういう道は覚えてるぞ、みんなでよく追いかけてっこして遊んでたからな」

「つまり地元の間人しか知らない道を練り歩いてるわけ?」

「うん! 敏則兄ちゃんがね、土地勘のない都会の記者ならそれで簡単に撒けるって!」

地元民にしかわからない道順を練り歩くとなればそれこそ生まれ育った町でなければ不可能だろう。

なるほど、確かに有効な手だ。土地勘のある人物の協力がなければ対策は難しい。都会から来た記者であればこれで十分に撒くことができる。

「このあたりは全然変わってないよ、みんなとかくれんぼしてた時のまんま。この道を行けば待ち合わせのファミレスはすぐ、近道だからよく使ってたよ」

「みんなって、あのシマカゼタービン?」

「ううん、小学生の時の友達。ほら、あそこに鬼仏があるでしょ?よくあそこをスタートにして遊んだんだ」

ツインターボが指差したのは、裏路地にある小さな駐車場の片隅にある六つの腕で合掌して厳めしい顔をした地蔵。

群馬県内でも芦名周辺でしか見られない『鬼仏』と呼ばれる地蔵で、歴史文化遺産にも指定されているものだ。

芦名市街地およびその周辺にしか見られないもので、この地域のお地蔵さまは新しい物もこの姿で作られている。

「なんかすごい昔に感じるなー、そんな時間たつてないのに」

「相手って普通の人？さぞ無双かましてたんでしょーなあ」

「それでもないよ？ みんな強くつてすぐ捕まっちゃうの、曲がり角からタッチ！ つてさ」

「ほほー？そんなに強いならちよつと会ってみたいね。少し待ってたらみんな集まってきたりして」

「ないない、今日は平日だからみんな学校だぞ。あ、鬼仏には噂があるから気を付けてね？」

「というと？」

ナイスネイチャがその話に乗る、どうやら少し興味をひいたらしい。

「夜道に迷ったときにお供え物をして手を合わせると、気付いたら家の近くの鬼仏にワープしちやってるんだ。青くボワツて光るの」

「なにそれ、お化けとかはわかるけどなんでワープ？」

「芦名じゃそうなの、お化けなら三味線お凧とか有名だよ」

「ふーん、じゃあ私たちがやったら三女神像の前にワープできるのかねえ？」

「それは分かんないな。遊びでやると痛い目見るからやめなさいって、荒れ寺の仏師さんが言ってたからやったことないし」

「ふーん、さつき言ってた三味線お凧ってのは？」

「大昔に死んだ芸達者な女の人のお化け、和服を着た女の人で陣笠？とかいうのを被って泣きながら三味線をベンベン弾いてるの。」

その曲が何でか心地のいい曲で、三味線の音に誘われて路地裏に行くといつの間にか竹林の中に出ちやっつて、そこの柳の下に三味線を弾く女の幽霊がいるんだって」

「ほう、で、どうなるんだ？」

興味を惹かれたナリタブライアンが話に入る。

「最初は何ともないけど帰ろうとしたり邪魔すると刀で斬りかかってくるんだって、演奏が終わった後にお凧とお喋りして相談に乗ってあ

げるといいらしいよ。

一応力業でも何とかなるけど太刀筋が尋常じゃなくてマジでやば  
いってタービンも言ってたし…あ、ついた！」

裏道を出ると目の前に、敷地全体を駐車場にして店をロフトのよう  
に2階に置いた形式のファミリーストランが見える。

ツインターボは横断歩道を渡ってファミレスの駐車場に入り、中の  
車をじろじろと見始めた。

「どうしたの？」

「ここで敏則兄ちゃんたちと待ち合わせなんだけど…あ、あつた！  
アルテツツアとトイチ！」

駐車場の隅、目立たないところに並べて置かれていた2台の車を見  
つけてツインターボはすぐにスマホでメールを送る。

アルテツツア、トイチと呼ばれた車は普通に見かける乗用車とは少  
しスタイルが違う一昔前のスポーツカーのようだ。

どちらも4人乗りだが、4ドアのアルテツツアに対してトイチと呼  
ばれたほうは2ドアで少しコンパクトに見える。

「AE101にRS200？どちらもオリジナルで走り屋仕様って…  
どんだけ拘ってんだこいつら」

「解るの？ネイチ先輩」

「2台とも運転席と助手席がセミバケットシートに変わってるし、イ  
ンパネ周りに計器追加して確認しやすくしてる。

アルテツツアは少し手が入ってる程度みたいだけど…AE101  
のほうはかなり手が入ってんね、しかも相当こだわりがあると見た。

再生産品じゃないオリジナルだし、それをここまで使い込んでい  
るのに車体にはまったくガタがない。

ターボの中古車と比べたら一目瞭然、相当腕が良くなければ車が持  
たないって聞いてるよ」

「よくわかるな」

「最近ターボの車弄り手伝ってるからそれで覚えちゃったんですよ、  
所詮はにわか知識です。知識ならターボのほうがもつですよ、語ら  
せたらずつと喋ってますし」

「そうだぞ、敏則兄ちゃんとトイチは芦名の走り屋で一番速くて強い現筆頭なんだ。」

トイチってというのはこのスプリンタートレノAE101のこと、スーパーチャージャー付のGT-Zモデルは芦名じゃ兄ちゃんのトリードマークみたいなもんだぞ。

時代遅れのFF駆動だからってバカにしてきた他所の走り屋なんてすぐにボッコボコなんだから!」

まるで自分の事のように胸を張るツインターボ。実際、かなり誇らしいのだろう。

ということはこのアルテツアも芦名の走り屋の誰かの車ということだろうか、ルドルフはふと気になって尋ねた。

「ならこのアルテツア?という車の持ち主はどれくらいなんだ?」

「お姉ちゃん?お姉ちゃんは峠の走り屋じゃなくてサーキットの方だからそういうのは無いかな。」

アルテツアが走り屋仕様になってるのは仕事で走るからなのと、山道だとびったりかみ合うからそうしてるだけだし。

でもサーキットでかつ飛ばすとすっごい速いぞ!たまにしかいかないけど、いったらみんな見物しに来るくらい!」

「ターボ、褒めてくれるのはうれしいけど恥ずかしいからやめてって。そんなに速いわけじゃないわよ、ただ直線でかつ飛ばしてるだけだし」

聞き慣れた女性の声にシンボリルドルフは思わず胸が締め付けられるような気分になった。

他人の空似かと思っただがそんなことはあり得ない、本来ならば今も自分と学園にいるはずの尊敬する先輩の物だ。

慌てて振り向くと、ファミレスから出てきたのか車に向かってくる男性とウマ娘。その見覚えのあるウマ娘の顔にルドルフは絶句した。

「メジロモンスニー先輩?」

「久しぶりね、ルドルフ。だいぶ顔つき変わったかしら?」

メジロモンスニー、かつてミスターシービーや自分とトウインクルシリーズでしのぎを削りあったライバルであり先輩。

臯月賞2着、日本ダービー2着という好成績を持ち、高松宮記念1着のれっきとしたGIウマ娘だ。

メジロ本家でも世話焼きの優しい姉として、幼少のマックイーンたちの世話を焼いていたという。

だがその華々しい経歴の最後は勇退などではなく、故障の末のレース引退と学園の卒業、先代当主のメジロ家との決別。

トレセン学園卒業と同時に先代当主に勘当を申し入れ出奔、その後の消息は長らく不明だったのだ。

理由はメジロ家の方針に従えなくなったため、自分を壊してなお理想を求めるメジロ家に愛想が尽きたのだ。

ウマ娘レースの名門『メジロ家』は長年、初代当主の遺言を軸に天皇賞春秋連覇を目標に邁進してきた一門である。

それはメジロモンズニーが走っていた時期も同じ、そして彼女の足は短距離と中距離向きで長距離には向かなかった。

まだ先代当主がメジロ家を仕切っていた時代、過酷な訓練に身を捧げながらも思ったような成績を出せないメジロモンズニーに、周囲はひどい扱いこそしないが距離も遠かったという。

その理由は過酷な練習故に生傷が絶えなかったから、頑張っているのが目に見えても成績は同世代に怖ろしい化け物がいて比較してしまいい何とも言えないもどかしい状態だったからというものだった。

そして最後の成果である高松宮記念の優勝も当時はあまり評価してもらえず、その後の過酷な訓練で足を酷使した末にメジロモンズニーは連覇を狙った高松宮記念に敗北し、その後も故障がちになり走れなくなった足に見切りを付けられ引退することになる。

その後先代当主の方針に異を唱えたが聞き入れてもらえず、それにメジロ家への愛想が尽きたとモンズニーは、走れなくなった足を引き摺って家を出たのだ。

当時はメジロ家の圧力で大きな騒ぎにはならず、世間もミスターシービーのクラシック三冠達成とそのタブー破りの走りに魅入られて次第に忘れていった。

だがその騒動が元で先代当主はメジロ家内での影響力を落として

失脚、実権が現当主に移って風通しの良い今も良く知られたメジロ家となったのだ。

「どうして、こんなところに…」

「それは長い話になるし、関係のないことよ。まずは車に乗りましよう？ルドルフたちは私の、ターボたちはあっちね」

モンスニーに促されてアルテツツアの助手席に座ったルドルフは、運転席に乗り込むモンスニーに顔を向ける。

後部座席に少し身を寄せ合いながら乗り込んだナリタブライアンとデーブインパクトも驚きに声が出ない。

話には聞いていただろうナイスネイチャもAE101に乗りこみながら目を白黒させており、唯一平常運転なのは周囲の反応に首を傾げるツインターボくらいだった。

行方不明になっていたミスターシービーのライバル、歴史の中に消えたはずの人物が堂々と目の前に姿を現しているのだ。

トレセン学園で走るウマ娘にとって歴代の3冠ウマ娘は憧れそのもの、その消えたライバルが急に現れたとなれば当然の話だ。

「バケットシートは乗り慣れてないと変な感じするけど我慢してね」

「え、ええ…」

乗り慣れないセミバケットシートの乗り心地は違和感があつて良いやとは言えないはずだったが、今のシンボリルドルフの頭はそんなことに構っていられる余裕はなかった。

今まで探しても見つからなかった親しい先輩が、何の前触れもなくひよつこりと前に現れているのだ。

聞きたいことが山ほどある、知りたいことが山ほどある、一体何があのときに起こっていて、今まで一体何をしていたのか。

だが、あまりに聞きたいことが一度に頭に浮かびすぎて、ルドルフの思考はオーバーヒート寸前であった。

「先輩、いったい今までどこにいたんですか？いくら探しても見つからなかったし、メジロ家もなしのつづてで」

「別に隠れてなんかいないんだけどね…ただ少し一人になりたいから、すこし足取りを消してただけよ？ま、結果的にここに定住してる

けど」

「メジロ家は警察に届けも出さないし、体制が変わっても搜索も何もしなかった…シービーは今も探し続けてますよ」

「そう、シービーには悪いことしちゃったわね。アサマ御婆様…今の御当主様ならとつくに知ってる。前当主様の時は、どうせいらぬ意地張ってたんでしょけど」

「…だから資料になかったのか。どうして連絡をくれなかったんですか？せめて無事なことだけでも教えてくれたら」

「教えたら連れ戻しに来たでしょ？」

「当たり前です、どんなことがあってもあなたはメジロモンズニーであることに変わりはない。」

先輩の知識や経験は次世代の育成に大きな影響があったはずなんです、私だって教えてもらいたいことが山ほどあった…」

「だからよ、もうあの世界には関わりたくない」

ルドルフは出かけていた言葉が喉の奥に引っ込んでいくのを感じた、出るはずだった言葉が出てこない、それだけショックだった。

ぴしゃりとはつきり言うメジロモンズニーの声色には確固たる意志があった、見たことのないメジロモンズニーの姿があった。

自分の知るメジロモンズニーは不屈のチャレンジャーだった、ミスターシービーのライバルとして何度も競い合って、怪我をしても走り続けた逞しいウマ娘だ。

彼女はレースを愛していた、自分たちと同じようにレースに心血を注いでいた。そのメジロモンズニーが、はつきりとレースに忌避感を持って答えてきたのだ。

「このまま会社に向かうけどいいのよね？高校の方はその後って話だけど」

「はい、あの、この度はご迷惑をおかけしてしまつて…」

「そういうのはタービンにして、うちは別に被害ないし。高校の方も話が付いたならそれで終わりよ」

「はい…モンズニー先輩、今は何を？」

「兼業主婦、瀬名酒造で働いてる。うちはウマ娘と縁が深いからね」

「え、主婦？」

「瀬名敏則の嫁、私だもの。タービンは義妹よ」

「は!?聞いてませんが!!？」

「言っていないもの」

自分の先輩がすでに結婚していたことに驚きを隠すことができないシンボリルドルフであった。



## 第十八話

不思議なドライブになった物だ、メジロモンスニーは瀬名家の居間の縁側に腰かけながら見慣れた庭を漠然と眺めていた。

「お前は反対すると思っただけだな」

「…本当はそうしたいわよ、あの世界は厳しいからね」

後ろの居間から聞こえてくる瀬名敏則の言葉に、モンスニーは自分の太ももに手を這わせながら答える。

この足は自分の自慢だった、メジロ家の自慢の足になるはずだった。

メジロの大願の成就を断固として曲げない先代当主の方針さえなければきつとプリンターやマイラーでもっと活躍できたはずだった。

「不思議ね、スカウトが来たって聞いたとき、あいつが有マを取るのが目に見えたのよ」

「有マ記念を？・トレセンにすら通ってないあの車キチガイのあいつが？」

「あの酒キチガイのあいつがよ」

酒と車となると目の色を変える義妹のシマカゼタービン、言葉にすれば最悪だがただ仕事と趣味に真剣なだけのかわいい出来た妹だ。

走ることにとてつもない才能を持ちながら全く公式レースには脇目も振らず、家業の酒造と峠の走り屋に没頭する彼女はどこまでも公式のウマ娘レースにはそぐわないウマ娘だった。

そんな彼女がスカウトされたとき、自分が思ったのはシマカゼタービンが暮れの中山競馬場でレースの先頭を突っ走って勝利する光景だった。

ふざけるなどか、彼女は行かせないとかではなく、彼女がレースで勝つ光景だった。それがとてつもなく嫌だった。

自分はどういう風に生きようが、やはりメジロのウマ娘なのだと理解させられた。自己嫌悪しか浮かばなかった。

「全部断ち切りたかった、断ち切ったはずなのに…：反対すべきなのよ、あんな世界に、行かせたくなんかない」

自分を認めてくれなかったメジロが憎かった、どこまでも痛めつけてきたメジロが憎かった、そう思わないと言えば嘘になる。

そう思ってもなおレースは大好きで、メジロ家も愛していた。頑張り続けなければきっと認めてくれると信じていた。

だから何より自分の無力さが憎かった。期待に応えられない自分が一番憎かった、あの時まで。

最初はあるなに好きだったウマ娘レースも、今ではそんな純粋な目で見ることはできない。

現当主からはいつでも帰ってきていいと言われていて、帰ってきてほしいと親しかかった執事や主治医たちからも言われている。

でも分かるのだ、今メジロ家に帰ったところできつと自分は心の底から笑うことなどできはしない。上辺の笑みすら作れない。

(私は弱い、本当に何もできなかった)

自分の足を奪ったメジロ家を思い出してしまうから？いや違う、自分の足などどうでもいい。

自分を認めなかったメジロ家が憎いから？いや、それもはやどうでもいい。それ以前の問題だから。

大願のために、メジロという家のために、子供たちの未来を消費していくあの名誉に狂ったメジロ家を思い出してしまうからだ。

メジロ家は日本ウマ娘レースにおける名門、その家に生まれたウマ娘はレースの世界を最初から逃げることは敵わない。

なんであれメジロ家の基準はレースが基本であり、それが中心であった。

例え不慮の事故で有望なメジロのウマ娘が生死の境をさま迷っても、奇跡的に回復しても、走ることをあきらめていなくても。

〈彼女はダメだ、候補から外すように〉

〈よろしいのですか？〉

脳裏に先代当主の心底残念そうな、されど無情な声が蘇る。今も思い出せる瀟洒で掃除の行き届いた屋敷の廊下、そこから子供たちの遊

び場やレースの練習場によく使われるだだっ広い芝の広場が見渡せる。

自分はその廊下が大好きだった、大好きな姉たちの練習の全景を邪魔せず見学できる絶好の場所であり、可愛い妹たちの成長を見守れる場所であつたから。

その言葉を聞いた日、自分がそこにいたのは偶然だった。きっと前当主は今も自分があの廊下にいた事には気づいていない、自分は偶然廊下の隅っこに落としたヘアピンを取るためにかがんでいて、隠れた形になつていたから。

先代当主のことは嫌いではなかった。だれよりもメジロ家の事を考えていて、分家や本家といった形式にはとらわれない実力主義の彼女は厳しかったが差別はしなかった。

だから信頼はしていた、メジロ家の大願に命を懸けることを疑つてもいなかった、あの時までには。

へ足の関節がバタついている、走ることに向いていない足だ。それとあの子もだ、筋肉の成長が他より遅れている、このペースでは間に合わん、候補のサポートに回せ。

それからパーマー…あの子も障害コースに入れろ、平地競争ではついていけない

〈承知しました…それから…〉

へくどい、何度も言わせるな。いくら望もうとも彼女はもうダメだ

声が出なかった、怖かつたのだ、マックイーンたちを無機質に見下ろして選別する先代当主と側近のやり取りが。

そこでまだ幼いメジロマックイーン達と戯れる分家のウマ娘を、可愛がつているあの子たちを無機質に駒としてみる先代当主の瞳が怖かつた。

分家や本家といった家柄に囚われない実力重視の先代当主が見ているのは希望的観測ではなく現実的な見解。だからこそいまでも耳に残る。

実力を重視しているからこそ、切り捨てられるときの理由も単純である。彼女は育てても期待に応えられない、走らせる意味がない。

だから役立ててる方面に回す、より有力な候補のサポートに、はたまた家を切り盛りする側近や経営する会社に、憧れて望んだレースを走る事すらできずに。

へ傷が深すぎる、回復しても後遺症が残る可能性がある。そのような者を走らせるなど、言語道断、結果以前の問題だ。

早急に進学コースを見直し、この世界そのものからは手を引かせよ

へしかし…！

へメジロとてできぬことはできぬ、失ってからでは遅いという事が分からんか

事故で両親を失って、自分も生死をさ迷っていた彼女のボロボロの姿を知っていて、それでもなおレースを走ると夢を見てリハビリに励む姿を知りながらそれを言えるのか。

マックイーンたちのような才能を持たないとわかっていても、それでも諦めないで食らいつこうとする彼女たちに諦めろと促すのか。

当主は家を預かる身だ、時には非情な判断も迫られる。そこは理解していた、だがその立場に自分が座わる可能性があることをモンズニーは理解していなかった。

もしかして自分も未来はあそこにいるかもしれないのか？それを理解した瞬間、モンズニーは吐き気を催してトイレに駆け込んだのを今でも覚えている。

嫌だった、あんなふうに無機質に選別するような人間にはなりたくない、これがメジロのやってきたことならば自分はどうなんだ？

自分はこの家でいろいろなレースをしてきた、時には家族と競争をして勝って勝って勝ってきた…あれ？あの時の従妹は今どこにいる？

ふと思いついてしまふ、姉が、妹が、従妹たちが最初は一緒に走っていた愛する彼女たちは今どこにいる？

そう考えた瞬間、すべてが崩れ落ちていくように感じた。自分が走ってきた輝かしいレースの裏にある、芝の裏に見える、赤い血が自分を狂わせた。

練習に身が入らなくなった、レースに身が入らなくなった、あの世界に憧れが持てなくなった、もう誤魔化せなかった。

だからどうにかしようとして、失敗して、せめて同じようにはなりたくなくて足を洗ったのだ。

もう昔の話であるのだろう。大願を成したメジロ家、生まれ変わったメジロ家、確かに素晴らしい我が家に戻ったのかもしれない。

先代当主が失脚し、今代当主が全権を担い、以前とは違う輝きが戻ってきたとみんなは言う。

でも、でもだ、メジロのウマ娘たちの血と献身の果てに得たその名誉、それに何の意味がある？

メジロ家を出てから、自分はより厳しい世間の中に飛び込んで生きることの厳しさを知った。

高松宮杯を制して手に入れたG Iウマ娘としての称号はメジロ家での自分の発言力の足しにはならなかった。

レースの世界から世間に出てみればなおの事だ、称号も名誉も認められたが、それだけでは金にはならない。

レースの世界に関わったままならば十分なネームバリューがあっただろう、仕事も引く手数多だっただろう。

だがレースの世界から身を引き、距離を置きたかった自分はそれを利用することは叶わない。メジロ家という名家の箱入り娘が、得意な技を放棄してできる仕事なんてたかが知れていた。

それだっとうまくいかない、話が合わない、勝手に妬まれて嫌がらせ、仕事が長く続かない。

本当に、運よく瀬名酒造が社員募集しているチラシを見つけていなければ今頃どうなっていたことか…

「…まだ夜は冷える、中に入れよ。冷やすと体に良くない」

「頭を冷やしたいの」

「3度目だ、風邪引くぞ」

「ホント、嫌になっちゃいそうよ。いつかこの子にも、私は何か——」

「そうはならない、お前はそんな女じゃないだろ」

断固とした否定の声にモンスニーの震えた声がかき消され、その力の強さにモンスニーは咄嗟に振り返った。

瞬間、顔面に液体が投げつけられるように降りかかってきてむせ返った。水だ、それも冷蔵庫で徹底的に冷やした氷水。

「頭冷えたか？なら風呂行ってこい、お前が悩んだところであいつのことはあいつが決めることだ」

冷たくて染みる両目から水を拭って顔を上げると、そこにいるのは空のショットグラスを手にした瀬名敏則だ。じつとこちらを見据えているのは見慣れた夫であった。

ただそこにいるのは瀬名酒造の跡取り息子としての彼ではなく芦名の走り屋、自分が惚れた男の顔だった。

「何を思い出したのかは聞かねえが、考えすぎだって言わせてもらおうぜ」

「でも…」

「俺が惚れたお前はそんな女じゃない、お前はそんな風にはならない。もし間違えそうならぶつ叩いて、ボコボコにしても止めてやる。」

言つとくが、俺はやると言ったら本気でやるぜ？」

拳を握り締めてにやりと笑う彼には、今の時代には不釣り合いな頑固さと頼りがいがあった。その力強さにモンスニーは惚れたのだ。



群馬県立芦名高校の放課後は前前世と全く変わらない。帰る奴は帰る、部活する奴は部活、暇な奴らは校内で遊んだり宿題したりと代わり映えもしない。

入学当初はあまりに懐かしくも思っていたが、今となってはただ嘸み締めるように毎日を過ごして心に刻むだけ。

前前世で学校生活が何たるか、どれだけ幸福か身をもって知ったからな。退屈な日々だって十分いい思い出になるって。

いつもなら帰宅部の俺はさっさと小町達と帰るのが日課だ、いつもならな。だが今日に限っては、帰る奴はいやしな。

「何黄昏てんのよ、相変わらず老けた面しちゃってさ」

「こう見えてお爺さんなもんでな」

同じクラスの小町とのこんなやり取りもいつもの事、実際精神年齢的にはもう爺なんだよな、馬を挟んで人生二回目にしてやつとだけど。

「タービン…ま、いつも通りならそれでいっか。あんたどうすんの？」  
「何がだよ？」

まるで学園祭みたいな喧騒に包まれている教室の一角、通学鞆に荷物を押し込む俺に小町が話しかけてくる。

俺としてはさっさと終わらせて帰りたい、今日はターボが友達連れて家に泊まりに来てるんだ。

「明日の夜、こんな騒ぎになっちゃってるしやめる？」

「レッドサンズが動き始めてんだぞ、気は抜けねえ」

最近、赤城レッドサンズがついに動き出した。まだ本格的にやってきちゃいないが、そこそこなチームがいるコースにちよっかい出してはレコードを塗りつぶしてる。

まずは小手調べってわけだ、軽く暴れて話が広まったところで有名どころに仕掛ける算段だろうよ。

「確井か、妙義か、芦名か、どこが最初に狙われても不思議じゃない」  
「秋名でしくじったりして？」

「芦名の前哨戦としてか、ありうるな。でも目を付けられたとして池谷先輩たちに勝ち目があると思うか？」

「ないね」

秋名の峠で実力があると言えば、池谷先輩の秋名スピードスターズ。でも赤城レッドサンズ相手じゃまるで歯が立たないだろうな。

スピードスターズはレッドサンズみたいなガチじゃない、俺と同じで車で峠を攻めるのが好きなエンジョイ勢が集まっているグループだから根本的に違う。

赤城レッドサンズの本気ぶりは、いわばトレセン学園生徒がレース

に挑むのと同じレベルのガチだ。グループ全体を統括して、サポートチームまで作って挑む徹底ぶり、そもそもどこにそんな金があるんだってレベルで組織化されてやがる。

それこそ文太さんあたりの古株が出張らないと地元はや勝ち目ないだろう。文太さんなら高橋兄弟のどつちが出てきてもぶつちぎるだろうが…あの人はそうそう動かないからな。

前に芦名でやってもらったときだって、親父が頼んでくれたから一回だけやってくれたってだけだし。

まったく、これからって時にどーして彼女たちはこんな群馬のド田舎に足伸ばしてくるんだか…

「週末もきっちりやるぞ、ターボにもそう言ってるしな」

「ターボちゃんも久々だねえ、中央GⅡクラスの実力をどこまで発揮できるか楽しみだ」

「かっちり迎撃して負けんなら納得いくが、サボって負けましたなんてターボに怒られちまうよ。詰められるならきっちり詰めて挑む。」

あいつ等だってそれは同じだろうに…皐月の次はダービーなんだからそっちに集中しろっての、負けても知らんぞ」

「珍し、あんたの口からダービーなんて単語が出てくるなんてね」

「そりや毎年この時期だとテレビで特集組むじゃん、覚えるわ」  
この世界、ほんと競馬…もといウマ娘レースがお茶の間に浸透してっからな。とりま、厄介ことはさっさと始末するに限る。

通学バックに荷物を詰めて、向かう場所は職員室、その奥にある応接間、この大騒ぎの元凶がいる部屋だ。

職員室前の廊下の端で酷く不機嫌にしている見慣れた一行を見つけた。芦名高校の猫浏生徒会長率いる生徒会とチューダー達。

ちなみに生徒会長は普通に男である…誰に説明してんだ俺？

「どうしたんだよ、生徒会長。あいつ等なんかしでかしたか？まさかブチさん襲撃？」

「お前、親父の事なんだと思ってるんだ…」

ちなみに生徒会長の家は、瀬名家もお得意様の機械修理屋『猫浏機械修理工場』で車の修理と改良だけでなく文字通りできることは何で



もやる修理屋さんだ。

ブチさんはその社長で工場長、昔ながらの親父さん、普段は厳しいけど優しい人なだけに怒らせると一転して喧嘩っ早くなる。

昔は親父と肩を並べる走り屋だったが、その性格で一度火が付くとにかく車を破損させるからゾンビシルビアなんて呼ばれてたらしい。

勝つには勝つが走ってるのが不思議なくらい車はベッコベコ、どう見ても廃車確定なのに本人無傷。なぜか道路も損傷は軽微。

で、工場に持ち込めばボロボロなのは外装のみで車のシャーシ自体も無傷だからボディを付け替えてすぐ復帰、呆れた復活ぶりだったそうだ。

「動くだけで事をでかくする天才だな、世間の評価と現実はなかなか皮肉なもんだ。トレセン学園ってのは物騒なもんだな」

「えらくイラついてるな」

「あれを見ろ、葦名古武術を修めてるお前達ならわかるだろ」

生徒会長が顎で示す先、廊下の向こうの応接間の前。覗き込むとそこにはまるで映画見たいなゴリゴリのマッチョな黒服が二人、職員室に入るドアを手前で塞いでいる。

うん、見るからに普通の警備員じゃない。体つきがサバゲの知り合いにそっくりでいかめしいのにすごい自然体で威圧感を抑え込んでいる。

アメリカ旅行に行ったとき無駄に鍛えた観察眼がビンビン反応してやがるぜ：懐中電灯は効きそうにねえな。

「着ぶくれしてる上に丸腰じゃねえってか？随分と気合入ってるな」

「うわあ、厳重な警備：あれSPじゃん、しかも見るからに経験者。芦名高校なんだと思ってるのよ？」

同じように小町ものぞき込んですぐに見破る、さすが葦名戦忍術・狼の型の使い手だ。

サバゲでよく相手してもらおう陸自レンジャーやアメリカ海兵隊の連中が見たら感心する完成度。

じつとしてるだけで身のこなしが素人目でも半端じゃないし、グラ

サン越しに感じる視線にも隙がねえ、ガードマンのプロだ。

「まったくもってその通りだ、ここはただの学び舎だぞ。それをあんな物騒な連中を引き連れて…理由は分かるが、少し考えてもらいたい」

「一応お忍びって聞いてたんだが…」

「全部ひっくるめてお忍びってことか」

小町もうまいこと言いやがる、なるほどそれならお忍びだな。確かに学校の周りにマスコミはいねえし。

今回のことに限れば全校生徒に他言無用のお触れが学校放送から出てる、少なくとも2〜3日は漏れない。

あの連中を騒ぎも起こさず送り込む辺り相当やり手なんだろうなあ…いや目玉がシンボリドルフ達だから比較的隙をつきやすいんだらうけども。

「トレセン学園ってやつは何でもかんでも大騒ぎにしちまう性質でもあんのかね？群馬トレセンでも大騒ぎしてたぜ？」

「さすが世界を股にかけた競争ウマ娘の国立教育機関、いろいろぶっ飛んでやがる。」

あのシンボリドルフの発言も納得だな、デカイ学園の中で純粹培養じゃああもなるか」

「なんだ、生徒会長も聞いてたのか？屋上にいたのは見かけなかったが？」

「あの話を校内で知らない奴はいない。だが納得ができたよ」

「なんの？」

「中央トレセンからの転校生が有名私立か地方トレセンでしかうまくいかない理由、NAUが躍起になるわけだ」

なるほど、生徒の事を考えてる生徒会長らしい疑問だ。うちに来たあの二人に俺を誘導したのも会長だったもんな。

確かに中央トレセン学園生と比べて、地方トレセンをやめた生徒が一般校に馴染めないってのはあまり聞かねえ。

詳しく知ってるわけじゃないし考えたこともあんまりないが…まあ、やっぱ俗世との距離感と環境がまるで違うんだらうな。

群馬トレセンを例に挙げればうちと距離が近いし馴染みがあるって所か、俺が群馬トレセンに行くのと同じように向こうのウマ娘が授業を受けに来るときもある。

そういう時は大体俺に仕事振ってくるのが目の前のこの生徒会長……ぐぬぬ……ウマ娘の相手はウマ娘ってのは理解できるが、なんというか、納得いかん。

中央シリーズを運営する日本の代表的なウマ娘レース専門組織である特殊法人『URA』直轄の日本ウマ娘トレーニングセンター学園。ローカルシリーズを手掛ける特殊法人『NAU』（地方ウマ娘全国協会）の運営する地方トレセン学園。

一体どこにどこで差ができるんだか……やってることの規模は違えどたいして違いはないはずなんだがな？

というか、前世と同じく地方と中央は別組織の運営だからつながりはあっても立場は対等なんだよね。売り上げと人気はあっちが上だが。

「お前、スカウトを受ける気か？」

「あいつらは謝りに来てるだけのはずじゃ？」

「建前に決まってるだろ、だれも信じてない」

だろうな、そもそも謝罪なら前にあのちっこい理事長が方々回ってたからそれで手打ちでいいはずだ。

わざわざ話がでかくなるようなことする必要がねえ、つまりほかの目的があつてしかるべきってわけだ。

話がこんがらがりそうだがその価値はあるって思われてるわけか？まったく、買いかぶりも良いところだ。

「お前の足なら十分やれると思うがね、活躍すれば将来安泰だぞ？」

「俺がそういうの好みじゃないのは知ってるだろ、アイドルみたいなのは向かん」

そもそも俺は趣味だから走ってるだけだ、ツインターボたちとはスタンスがまるで違う。

好きだから走る、楽しいから走る、やりたいことを好きな時にやる、俺のはただ本気で遊んでるだけだ。

仕事として走るあいつ等とは違う、余計なの背負わされたくねーわ。ファンの期待なんて勝手に背負わされても困るわ。

「だろうな、お前のような隠れ不良にああいう洒落たところは似合わん。行つてこい、さっさと追っ払つてくれ」

「言われんでもやるさ、俺の詩いた種でもある」

「うまく断つてくれよ、うちもお得意さんを取られるのは御免だ」

こんな大ごとになっちまうとはな、こんなことならディーブのことは遠目で見て終わりにすべきだったかもしれないねえ。

いや、前世と同じようなことをツバキにやられちまったから運命みたいなもんなのか？だとしたらせめてそのあとのことも同じにしてほしかったもんだぜ。

前はこんな風になる前に中央競馬は全部ひっくるめて隠蔽してくれたつてのにURAは何やってやがる？

大事なディーブインパクトが振り回されちゃってんで、もっとしっかりバックアップしてくれ。

そうすりゃ俺だつて後腐れなく千切りまくれるのに。

「失礼、ここから先はお通しできません」

「ボスから聞いてないのか？俺だよ、シマカゼタービン」

あえて少し強気に出る、それでもしないとつり合いが取れない。こつちは何も悪いことしてないのにこうされちゃうとな。

「身分証を拝見します」

「学生証で？」

「構いません」

「あいよ」

通学バックの中のパスケースから学生証を出して渡す。目の前で見るとやつぱりこいつら只者じゃねえ、鍛え方が半端じゃない上に中に防弾チョッキ着こんでやがる。

しかも防弾チョッキは巷の警備員が使ってるようなちやちな奴じゃない、ちらりと胸元のロゴが見えたが軍用ライフル弾も受け止める最新型だ。7.62ミリクラスまでなら止められるって聞いたぞ。

外さないサングラスもおそらく戦闘用のコンバットグラスを兼ね

た代物、銃社会のアメリカの警察も目を見開く恐ろしく金のかかったセキュリティだ。

少なくとも前にお世話になった保安官事務所が羨む重装備、URAMもなかなか敵が多いと見た。

腰の僅かな膨らみもおそらく警棒か何かとみた：訂正、これたぶんテザー銃、マジかよ。

ホルスターをちらつと見せてきやがった。お前らホントに何に警戒してきてやがんだよ？ドバイの王族でも来てるってのか？

「ありがとうございます、少々お待ちください」

「こちらガード02、VIPが到着しました：了解」

「どうぞ中へ：失礼、関係者以外お通しできません」

俺の後ろに続いて小町が入ろうとしたら止められる、当然か。

「そいつは俺の連れだ、通してやってくれ」

「関係者以外はお通しできません」

「そういうなよ、ここはただの高校だぜ？こいつは俺のダチでただの生徒、付き添いくらい別にいいだろ？」

「お通しすることはできません」

おお、なんとも取り付く島もない真面目な仕事ぶり。感心しちゃうぜ。これぞガードマンだな。

セキュリティは完璧ってことね、まったく住む世界が違うってやっぱスゲーわ。

「なによ、このビビリの唐変木。タービン、待ってるからちやっちゃんと済ませてきな」

素晴らしいなさんなコマツちゃん、まじめにやってるだけなんだから。

「わーった、さっさと済ませてくる：悪いな無理言っちゃって、連れが変なこと言ってますまん」

「お気になさらず」

後ろのドアが閉められる、今は無人の職員室を抜けて、応接間に続くもう一人黒服がいるドアに足早に向かう。

黒服が開けてくれたドアを抜けると、一瞬で空気が切り替わったの

を感じた。

全く、好きじゃない雰囲気だ。堅苦しくて息が詰まる。

「お待たせしてしまい申し訳ありません、少々ホームルームが長引きまして」

意識を切り替え、軽く謝罪を口にしながら応接間でスタンバってた連中を見た。シンボリルドルフ、ナリタブライアン、デーブインパクト。

そしてその3人のトレーナー、東条ハナさん。うん…なんでこんな面倒なことになっちゃったんだろ？

## 第十九話

「姐さん一人でよかったのかな…」

「私に聞かれましても…」

正面玄関の片隅でスマホを片手に待つ小町を遠目で見ながら、気になって帰れないクイーンベレーとチューダーガーデンは二人そろって下駄箱の裏から覗き見ていた。

シマカゼタービンと小塚小町は二人にとって大切な先輩であり恩人だ、ウマ娘レースで華々しく活躍することを夢見て努力をしてトレセン学園に入学するまでに力を付けたのは事実だ。

だがそれでもレースの世界は厳しく残酷で、それについて行こうと必死になって食らい付いていたがゆえにレース以外を知る時間がなかった。

走っても走っても周りに置いて行かれ、学費で生活も苦しくなり、結果も出ないで在席していることすらきつくなり、トレーナーとの契約も切れて、終わった。

トレセン学園から遠く群馬のこの高校に転校することになって、レースの世界からも引き離されて自暴自棄になりかけていた時に二人が何かと世話を焼いてくれたおかげで自分たちは一般世間に馴染めているといつてもいい。

そのやり方が少々手荒で文字通り車で引きずり回すようなものだったとしても、それで自分の中にあつたこだわりと折り合いがついたのだ。

「ふむ、まあ確かに普通は一人ではいかせんな」

「ひよお!?!」

唐突に背後に現れた気配にクイーンベレーは思わず飛び上がった。振り返れば好々爺とした一心校長。

相変わらずおっかない校長先生である、ニコニコしながら自然体でウマ娘の敏感な聴覚を回避して背後を取ってくる。

トレセン学園のトレーナーにもそこまでの人間はなかなかない、

知っている限り似たようなことができるのはチームスピカのトレーナーただ一人である。

「校長!?驚かさなだけでくださいよッ」

「隙だらけである、感心せんぞ?気もそぞろでは暗い帰り道は危ない」  
一心校長の視線が向いた先にある窓の外には夕焼けの空が広がっている、あと少しもしないうちに周囲は夕闇に包まれるだろう。

そもそもこんな時に限ってシマカゼタービンたちのクラスのホームルームが長引いたのが原因ではあるが、それを言っても運がなかったというしかない。

「ここだけの話、小町を同伴させるつもりも最初からなかった」

「…え?元から随伴とかなかったんです?」

「最初は儂が付き添うつもりであったが…思いのほか相手が手ごわくてな。さすが皇帝というだけあるわ」

すこし、いや抑え込んでいるだけで大層気に入ったような小さなくつくつ笑いを見せる一心校長に二人はドン引きした。

あかん、本当にこの校長はシンボリルドルフの事が気に入ったらしい。

「君の言う通り、普通ならば儂ら学校関係者、あるいは保護者といった同伴者が不可欠。

じゃがな、今回の一件とあやつに関してはむしろ単身のほうがずっと都合がいいのじゃよ」

「とうとう?」

「簡単に言えば、同伴者がいるだけでタービンが不利になる」

一瞬、クイーンベレーは一心校長の言っていることが理解できなかった。

「あやつが悪癖じゃよ、シマカゼタービン自身は基本的に気儘で自由な気質じゃが、身内には甘い」

そういわれて納得がいった、シマカゼタービンが一般のウマ娘や走り屋から姉御と呼ばれて親しまれているのもその頼もしさがあるが故だ。

「儂らも教育者じゃ、自分の教え子が成長していく姿を見るのはうれ



しい、そしてそれが認められさらに次のステップに踏み込めるというならなおさらな。

親兄弟もまた同様、愛娘がよりよい生活を得られるチャンスがあり、より輝ける世界に挑めるといふのなら、それを喜ばんはずがない。自分がファンだったレースの大舞台を愛娘が主役で走るなんて、ウマ娘レースのファンであったならそれこそ、嫌でも考えてしまおう。君らもどこかではそう思ってるんじゃないかな？特に君たち二人は」

一心校長の視線がクイーンベレーとテューダーガーデンを射抜く。その視線に二人は全く否定できなかった。

事実なのだ、シマカゼタービンがそんなことを望まないとしても二人には、彼女ならそのまま名だたるG Iウマ娘レースに出場しても勝てるという確信すらあった。

きっとそれはツインターボも同じで、ここにはいない群馬トレセン学園の三人も同じであろう。

あのシマカゼタービンがレースで活躍する、地方、中央、そして世界に、どこにでも行ける、そんな希望は確かに見えた。

「だから弱点になる」

一心校長はそう断言した。

「彼女は優しすぎる所がある、儂らの願いに機敏に反応するじやろうな。自分が嫌であっても」

「でもそんなの無視すればいいはず…」

「できんよ、なんだかんだと付き合っているのがシマカゼタービンじやろ。そこを掘り出してくるのがシンボリドルフじや。」

皇帝という二つ名は伊達ではない、あの娘は教育者というものの心理をよく知っておる。

当然、親心もしかり、競争ウマ娘の心理もまたしかり。彼女はまさに逸材じやな、まだ若いというに儂とて気を抜けぬ難物に育っておるわ。

そして若い、掘り返せるだけ掘り返して武器にしてくるじやろうし、自身の言葉の威力を全て理解しきれておらぬ」

そこまで言われてクイーンベレーは合点がいった。

「姐さんが先生たちや私たちの意を汲んで悩んでしまうから、ですか」  
「ああ、個別に対応するだけなら仏頂面なりで誤魔化せる。だがタービンが真横にいるとなるとどうしようもない。」

十中八九、顔に出る。それをあの二人が気づかぬはずがない、下手をすればまた拗れる」

だからあえて職員室の奥の応接間を貸し出して、学校の職員たちを散らす言い訳に使えるようにした。

シマカゼタービンは芦名高校の名物だ、成績は可もなく不可もなくとはいえ何の変哲もない県立高校に普通に進学してきた異端児である。

容姿端麗でいるだけで華やかな存在であるウマ娘、レースに興味がない稀なタイプも本来ならば公立校ではなく私立高などに通うことが多いのにそれすらしない。

ならば中身がやばいのかといえば、いたって普通のどこか年喰った感じがする一般人、せいぜい少し親父臭いだけの普通の少女ときた。だからこの学校の教師や職員は大体彼女の事を知っている。

だからこそ散らした、彼女を知っているからこそ、教職に務める者だからこそ考える生徒の栄達を望む顔がでてしまう。

それを見てしまえば彼女がどう考えるか、手に取るようにわかる。

「なら小町先輩は何で大丈夫なんですか？」

「小町はタービンの危うさも理解しておるからな。あやつ自身、己の甘さのせいでタービンに無茶をさせたことがある」

「あ…：そういうえば、芦名のランエボ狩り、発端って」

「小町の兄、良助がその二流共にちよっかい出されて事故にあったからじゃ」

車狩りの5人衆、皇帝殺しのウマ娘、その異名は芦名峠で走る走り屋ならば知らないものはいない。

己の足だけでランサーエボリューションシリーズのワンメイクチームを、二軍とは言え一勝もさせず完封してみせた走り屋ウマ娘達。

シマカゼタービン、ホクリクダイオー、ノルンフアング、ツバキプリンセス、ツインターボ、彼女たち5人は地元の伝説だ。

その発端となったのは栃木県のいろは坂から群馬に遠征を目論む走り屋のチーム『エンペラー』が、芦名に二軍の偵察を送り込んだことから始まる。

新進気鋭のランエボワンメイクチームであり、栃木県のいろは坂では新進気鋭の走り屋チームである彼らはいわば調子に乗っていた。

そして運が悪かった、当時はまだシマカゼタービンは車を持たず、瀬名敏則が今代最強を担っていた時代だった。

エンペラー二軍が勝負を挑んできたとき、運悪く敏則のAE101GT-Zは改修作業の真っ最中だったのである。

車がなければ勝負はできない、一週間後に出直してこいと追い返されたエンペラー二軍は、出鼻を挫かれて腹を立たせた。

ガラの悪さも持っていた彼らは旧型の古臭いAE101乗りが勝負から逃げたと真っ向から吹聴してバカにして煽り始めたが、モノがなければどうしようもない。

反応は当然だんまり、話にならん阿呆は放っておけとそれこそ芦名中の走り屋からシカトを決め込まれてしまう。

そんな塩対応にますます彼らは激昂、そして悪夢が起きた。その日、良助が夜間の芦名峠に小町とともに出かけたのは何の理由もない、ただ食事に出かけた帰り道であった。

良助の運転するワンビアカスタムの助手席には小町も乗り、山頂の観光街のレストランで食事をして遊んだ二人は夜遅くに芦名峠のコースを走り、そこで待ち伏せていた走り屋チーム『エンペラー』の二軍に煽られた。

彼らの操るランサーエボリューションシリーズに対して、良助のワンビアカスタムは非力かつ旧式、さらに言えばガラの悪い連中という事も聞いていた良助自身、煽られても勝負する気もなくさっさと行くと相手にしない。

普通ならばそのまま相手が興味を失っていくのが常道だ、だがエンペラー二軍は良助のワンビアカスタムが無視してくる姿に逆上して

手を出した。

見るからにボロいニコイチの旧式にも袖にされた、そこまで強い走り屋でもないのに生意気だ、天下のランエボをバカにした、もう我慢ならない、やっちまえ。

「聞いたことがあります、確か三連ヘアピンのところでバンパーをぶつけられて…」

「制御を失ってとっさに崖に車体をぶつけて止めた、相手はそのまま走り去った。当時、車は大破して証拠は見つからず、小町の証言だけで向こうはしらを切って逃げていたな。」

それに良助も走り屋じゃったからな、当時は普通に走っていただけとはいえ警察に頼ることもできんかったよ」

まさか手を出してくるとは思わなかった良助は、制御を失った車体をとっさにスピンさせながら山の斜面に押し付けて停止させた。

その際に小町を守ろうと運転席側からぶつけたことで彼も傷を負い病院に搬送、命に別状はないものの頭部を深く切って激しい出血と右腕の骨折という重傷であった。

小町は事故で壊れた車内で、自らをかばって血だらけになる兄の姿を真横から見せつけられ、精神的なショックを受けて情緒不安定に陥った。

その時に彼女は頼んでしまったのだ。兄の仇を取ってほしいと、話を聞いてシマカゼタービン自身も憤っていてギリギリのところにご一番の燃料を注ぎこんでしまった。

その結果は後に知られる通り、シマカゼタービンは即座に行動を起こした、群馬トレセン学園に通う親友、そしてトレセン学園に入学したばかりの従妹に協力を願った。

良助はシマカゼタービンたちのいい兄貴分であった、信頼され慕われていた。その良助の仇を討つ、エンペラーの走り屋小僧どもをたたき出す、と。

話を聞き、激怒したホクリクダイオー、ノルンファンング、ツバキプリンセス、ツインターボも共に行動を起こした。

故郷の親友の兄が事故にあったから見舞いに行くと学校に休みを

届け出て群馬に急行、5人で顔を突き合わせてすぐさまエンペラーを足で追い返しに出る。

エンペラーの二軍を挑発して芦名峠でのダウンヒルバトルを承諾させ、五対一のハンデ戦でありながらランサーエボリユーシヨシシリーズを駆るエンペラーの走り屋たちを自らの足だけでコテンパンに叩きのめして追い返した。

勝つには勝ったがその分の代償も大きかった、全員が極度の疲労とオーバーワークで入院して家族の沸点をやすやす突破、全員が包帯とシップまみれで怒られることになる。

暴走族に自らの足で勝負を挑んでコテンパンにして入院した、当然それは退学待ったなしの暴挙である。

情状酌量の余地はあれどそれを加味しても普通は重い処罰は免れない、そもそも下手をすれば死んでいる、みんなカンカンであった。「だから小町はタービンが望んでいることを、真正面から受け止めて応援できるのじゃよ。迷うな、そのまま突っ込め、とな」

ここでは彼女だけが適任であった、それを最初から考えずに今回の件に挑んだのは一心校長の不覚である。

最初から小町の事を盛り込まなかったのは教職員たちと同じく弱点になると考えられたから。

もともと、目の前で事も無げにスマホをいじくる小町の立ち振る舞いから感じるシマカゼタービンに対する信頼感から杞憂であることが分かったのだが。



シマカゼタービンが応接室に入ってきた姿を見たとき、ディスプレイパクトが初めに感じたのは違和感であった。

普遍的な高校指定のセーラー服を着こんだシマカゼタービンのレース用に鍛え抜かれた立ち姿が、あまりにも場違いに見えて仕方が

なかったのだ。

最初に出会ったときは高校指定のジャージを着こんでいて詳しくわからなかった体つきだったが、それより薄手で露出が多いセーラー服越しだと手に取るようにわかる。

均整の取れた鍛え抜かれた体だ、磨き上げられたトモ、それに負けないように鍛え上げられた上半身、現役の競争ウマ娘が持ち得る要素を兼ね備えている。

完全な競争ウマ娘としての仕上がり、いつでもレースに出られると言わんばかりに鍛え上げられた体だ。

だからこそ違和感しか感じない、あまりにも中身と外観の差異が酷すぎる。その姿はトレセン学園の制服を着こんでいてこそ映える、そう断言できる完成度なのだ。

なのに、今の彼女は一般校の制服を身にまとい平然としている。ただの一般ウマ娘であって、走り屋であって、勝負服にも袖を通したことがない。

思わず口が出そうになった、自分が謝罪に来ているという事も忘れてしまいそうになるほどだった。

彼女と勝負がしたい、今すぐに挑みたい、ナリタブライアンと一緒に今回はなるべく口を挟まないように謝罪の前口上を行う東条トレーナーにきつく言い含められていなかったらそうしていたかもしれない。

それでもじつと口を噤むことができたのは、彼女に迷惑をかけてしまった負い目があるからだ。

もつといいやり方があったはずだ、それこそツインターボに頼って私的に会う約束を取り付ければよかったのに……なぜあそこまで焦つたのだろうか。

「このたびは、こちらの不手際で多大な迷惑をかけてしまいました、大変申し訳ありません」

東条トレーナーが起立し、同じようにシンボリルドルフも立ち上がる、デュープリンパクトとナリタブライアンも一緒に立ち、深々と頭を下げた。

「頭をお上げください。あの時は自分も大変失礼な態度をとってしまいました。そのことをこちらでも謝罪いたします」

シマカゼタービンも席を立てて深々と頭を下げ、互いに頭を下げあつてから席に着き直す。

シンボリドルフと東条トレーナーからの謝罪を受けつつ和やかに進む会話を聞き流しながら、デイープリンパクトはシンボリドルフが動くのを待った。

「それで、こんなところで聞く話題ではないかもしれないけど…」

東条トレーナーの気まずそうな言葉にシマカゼタービンは苦笑する。実際気まずいのだろう、今回の騒動の原因がこちらにある。

謝ったそばからその話の続きをしようというのだ、シマカゼタービンがいかにも理解しているといった素振りで促すだけ随分と恵まれている。

「…ま、わざわざこんな風に出張ってきてくれてるんです。理由は察してますよ」

「この前はあまりにも性急すぎたところからも反省している、すまなかつた。だが…改めて誘わせてほしい、トレセン学園に見学に来てみないか？」

東条トレーナーからシンボリドルフにメインが移る、東条トレーナーから感じる視線がシンボリドルフには痛い。

まずは見学、彼女を日本トレセン学園に招待してから考えてもらう。それを聞いた瞬間、デイープリンパクトは心の底から胸が高鳴った。

いきなりの勧誘ではなく、お試し期間を置いて彼女をその気にさせるつもりなのだろう。

それ以上に肝心なのは、シマカゼタービンをトレセン学園にわずかな期間だが堂々と招き入れることができること。

つまり、彼女とまた本気の勝負ができるかもしれないという事だ。

だがシンボリドルフが差し出した日本ウマ娘トレーニングセンター学園のパンフレットを受け取ったシマカゼタービンの目を見てその意識が掻き消えるのを感じた。

その目には何も変わらない、パンフレットを形式的に手に取って捲っているがまともに読んでいない。興味が無い、なぜか既視感のある表情であった。

パンフレットをきれいに閉じて、くるりときれいに半回転させてそつとシンボリドルドルフに向けて差し出しながら彼女は答えた。

「お断りします、自分はそれほどモノではありませんよ」

何しろただの走り屋ですので、と笑う彼女の姿はただの大人びた女子高生にしか見えない。

その姿がデイトープインパクトには信じられなかった、自分が知っている群馬トレセン学園で出会ったシマカゼタービンとはまるで別人だった。

レースを走るウマ娘だからこそ醸し出す強者の風格、以前は肌身に感じられたそれが全くない。

「もう本格化とやらが終わって久しいですし、伸びしろならツバキたちのほうが遥かに上、ターボみたいな頭の良さもない。

ついでに言えば、キラキラしたステージで踊るアイドルみたいなのも趣味じゃない」

「ライブは練習で何とでもなる、それを差し引いても強者との競り合いは心が躍るぞ?」

「ブライアンさん、それは同意しますがなににでも限界はある。そもそも自分とあなたたちではレースに賭けるモノが違いすぎる」

賭けるモノ? デイトープインパクトはシマカゼタービンの言葉に引っかけりを感じた。

シンボリドルドルフのほうを見ると、彼女もそれを感じたのか頷く。シンボリドルドルフも、デイトープインパクトと同じ引っ掛かりを覚えたのだ。

シマカゼタービンに尚も食い下がろうとするナリタブライアンを視線で一度制してから、シンボリドルドルフは口を開いた。

「ならば君は何を目指して走る? 君が走る理由は一体なんだ?」

「趣味だから、それだけです。ただ大好きな遊びだからです」

事も無げに言うシマカゼタービンの様子に嘘は感じられない、それ



ゆえにシンボリドルドルフは信じられなかった。

馬鹿なことを言うな、思わずそう言いたくなかった。ただの趣味で、ただの遊びで、ここまで技術と体を極めるウマ娘がどこにいるというのか。

何かを成したいがために走っているのではないのか？

「俺は峠を走ることが趣味なんです、走るからには速く強くなりたい、普通じゃないですか？」

「どんなウマ娘も最初の理由なんてそんなものだろう。私もそうだが、姉貴のように凄い奴と競い合いたいからトレセンに入ってレースを始めた。」

お前もその趣味でもっと活躍したいとは思わないか？トウインクルシリーズや、ドリームシリーズ、それだけではなく世界へ挑む。

世界中の強者達とその足で勝負したいと思わないか？

「思わないこともないですが…あまりやりたくないですよね」

「どういう意味だ？」

「趣味を仕事にはしたくないんですよ」

それはウマ娘にとって一番聞き覚えのない言葉であった。走ることが好きなのはわかる、走るのが趣味なのも理解できる、だがそれを發揮するレースを好まないというのは意味不明だ。

走らないウマ娘も少数ではあるがいないではない、ウマ娘にも個人差が存在するのだから当然だ。

だがそういうウマ娘はそもそも走るという事にも一般人程度にしか考えておらず、過ごし方は一般人のそれと同じか別方向に特化するかだ。

「さっきも言いましたが俺は趣味だから走るんです、全力で走ってただ遊んでるだけなんですよ」

だが、このシマカゼタービンというウマ娘はまったくもって理解できない。走ることが好きで、レースが好きで、そのために本気になれるのに、公式レースには興味がない。

ただの趣味、ただ好きに走って遊んでいてだけで満足している、そんなウマ娘もいないではなかった。

だがそれだけで、たったそれだけで今まで走り続けてここまで力を付けてきたウマ娘はシンボリルドルフと言えど見たことがなかった。「自分の体が自分の物でなくなる、なんてのは御免ですしね。こういう世界ではよく耳にする話では？シンボリルドルフ会長」

シンボリルドルフには覚えがあった、自分たちにまわりついてきたマスコミたちなどはその象徴だ。

トウインクルシリーズで成績を出し、ドリームシリーズで戦う自分の身は、時に自分だけでは決定を下せないところにある。

下手なことを言えば自分自身の株が落ちるだけでなく、トレセン学園全体、UR A、日本ウマ娘レース全般に伝播する。

文字通り、自分が自分だけのモノではなくなってしまうのだ。自分の進退すらも、自分で決められなくなるほどに。

シマカゼタービンの視線が僅かに色を帯びる。それはこちらを計る目、それを意識した瞬間、シンボリルドルフは胸を握りつぶされるようなプレッシャーを感じた。

シマカゼタービンに見定められている、それは一般ウマ娘という枠組みからは大きく外れた、いや競争ウマ娘という枠組みからも大きく外れた威圧感。

圧倒的強者、経験豊富な古強者、芦名峠の走り屋としての彼女が僅かに顔を出した。それだけで、これだ。

(これは…)

久々に感じる緊張感、自らが見定められる側になった背筋が自然と伸びるような感覚に、シンボリルドルフは不思議と唇が引きつりそうになるのを何とか抑えた。

試されているのは自分の方なのだ、彼女はシンボリルドルフそのものを見定めようとしている。そんな気がしてならない。

「随分な自信だね、まるで出れば勝てると言っているようなものだ」  
事実、であろう。シンボリルドルフは背筋に走る緊張を表に出さぬように挑発を投げ返す。

普通ならばこれはただのハツタリとして切って捨てていただろう。彼女がスポーツカーを相手に公道レースを生身で行い、勝ちをもぎ取

る規格外と知らなければ。

もし彼女がどこかのレースで冠を本気で獲りにくればどうなるか、完全に未知数だ。なぜならナリタブライアンがその実力を保証している。

トウインクルシリーズにてクラシック三冠を成し遂げ、伝説の一人となった彼女が本気で挑みかかった模擬レースで届かなかったというのだから。

そんな規格外相手に自分が勝てるか？ 改めて見た彼女の出来上がった体、東条トレーナーたちから聞いた実力、ビワハヤヒデがみた狂気、実際に目の当たりにしたトイチの正体、A E 1 0 1 G T - Z のスパックとそれに食らい付くという彼女。

そしてメジロモンズニー先輩からも受け継いだであろう技術、すべてを勘案して脳内でレースをシミュレートした。

「勝ちますとも、やるからには全力で勝ちに行かせてもらいます」

「私が相手をしようといっても？」

「レースとはそういうモノでしょう？」

その表情は懐かしいものだった、かつて多くのライバルたちが見せてくれた挑戦的な笑み、やってやると言っている、勝ってやるよと。

いつぶりだろうか、このシンボリドルフにこうもあからさまに闘志をぶつけてくるウマ娘が出てくるのは。

皇帝と呼ばれるようになって、尊敬の視線を浴びるようになって、生徒会長の座に座ってからには敬われてもここまであからさまな視線をぶつけてきたウマ娘は数少ない。

だがしかし皇帝は絶対である、シンボリドルフのレースには絶対がある、故に彼女には負けられない。負けてはならない。

これまで多くのレースを制してきた、多くの強者たちと鎬を削ってきた、そしてその足で芝を駆け抜けてすべてを蹴散らし積み上げてきた。

だからこそ威厳をもってこう返答しよう、かつてのように。君に私は倒せない。

「」

返答しようとした瞬間、シンボリルドルフの中で彼女をコテンパンにレースで叩きのめす光景が無数に展開され：不思議なものが無数に混じって言葉が続かなかった。

勝つことはできる、でも完全な勝利を描けない、彼女の大逃げに自分の差し脚が追い付く完璧な戦法が見出せない。

そう、絶対に勝てるレースが存在しない。すべてにおいて勝っている、負けてもいる。絶対的な自信をもって言葉が口にできないのだ。

あらゆるレースで、あらゆる状況で、タイマンで、知り合いを含めて、自らが走ったレースに彼女を加えて、得意不得意関係なく、自分は彼女に絶対の勝利を確信できない。

勝利したケースで、同じ状況を同じレースを再現しても、同じ結果にならない事すらある。

(あれ?)

おかしい、あり得ない、ド素人の彼女の大逃げに自分が置いて行かれて手も足も出ない光景がいくつもあるぞ。

どうすればいい?もっと速く走ればいいのか?それでは最後まで足が持たない、では溜めるか?そんなことしてたらさつき逃げられたよな?

え、領域に入ったときにレースが終わってるってどういう光景?

(あれ、私ってそんなもの?)

好きで走っているだけのウマ娘に?散々鍛えてきた私が?まだ実際に走ったこともないのに負けると考えているのか?

あつてはいけない光景が脳裏を離れない、シンボリルドルフが負けるなんてあつてはならないというのに。

だが、だが、どうしたことだろう、気持ち悪いとは思わない、ただただ、悔しい。そしてこうも思う、彼女と実際に走ってみたい。

想像でこれなのだ、確かめてみたい、彼女は実際どう走る、どう逃げる、どうなんだ、公道仕込みの足とはいったい何なんだ?

知りたい、ぜひとも知りたい、見たい、知りたい、ワクワクしてくるじゃないか。

「失礼、言葉が過ぎました：ですが、言いたいことは理解していただけ

ませんか？」

威圧感が薄まる、だがその視線は決して笑ってはいない。値踏みされている、完全に探りを入れられている状態だ。

落ち着け、一先ず全て仕切り直した。脳裏で展開されていた模擬レースを全て打ち消し、シンボリルドルフは乱れた内心を整えながら彼女に正対した。

「つまり君は自由に走りたいからレースをするつもりはないと？」

「そんなところですよ。俺の足は俺の物、分相応な生活とちよつとの贅沢で十分」

「それは酒造会社に入っても同じではないかな？ 美味しいお酒ができれば、酒の道でも同じように取材は来るだろう？」

「そりやね、でもそれとこれとは話が違う。取材されて雑誌に載ったとしても、こんなバカ騒ぎにはならんでしよう」

シマカゼタービンの視線が鋭くシンボリルドルフを射抜く。痛い所を突かれた、これに反論は難しい。

シマカゼタービンの言うバカ騒ぎとは今回のような雑誌記者たちの蠢行の事を差す、そしてそれを誘発したのは紛れもないこちら側だ。

「走り屋としてのその行為が違法だとわかっている、かね？」

「もし本気で規制が入ればやめるだけ、ラリーとジムカーナで暴れるだけです。でもそれだって趣味、ただの遊びでしかありません。

自分は皆さんのように何千何万のファンの期待を背負って走るなんてできません、考えただけでも怖ろしい」

「ほう、芦名では名が通っている走り屋にしては弱気な言葉だな？」

「それはそれ、これはこれですよブライアンさん。俺にとつてこういうのは、仲間内でワイワイするくらいがちょうどいいんです。

それにですね、あなたたちは根本的に誤解をしていますよ」

シマカゼタービンは人差し指を一本ピンと立てて、小さく笑った。「俺はアスリートではなくドライバー、メインは車です。この足は酒造りに必要な大事な仕事道具だ、下手に使ってぶっ壊すわけにはいきませんな」

「それは公道レースでも同じじゃないの？」

ディープリンパクトは口を挟んだ。ソレにシマカゼタービンは首を横に振る。

「違う。公道レースは極論、走るか走らないかなんて自分次第だ。地元の意地だろうが何だろうがな。」

あそこは走るのもやめるのも自分で決められる、絶対に走らなきゃいけないレースなんて存在しない。

そこまでしたきや自由に日程を組みなおして互いにできる時期を決めりゃいい、いつ走り、いつ辞める、全部自分で決めていい。

ほら、公式レースのように無理してでも走らにゃいけないことなんてないだろう？」

それで足を痛める連中だって多いじゃないか、シンボリルドルフにはなぜかそんな言葉が聞こえた気がした。

シマカゼタービンはそんなことは言っていない、なのに、そう聞こえたのは自分が卑屈に感じているだけか。

「それにあなたたちがレースに夢を見るように自分もなりたい夢がある、峠を走りたい理由がある。自分は酒造をやりたいんですよ。」

この足で仕込むウチのウマ練りをもっと美味しい酒にしていきたいんです、そのために進路も決めて生きてきた。

走るのだって峠が好きで走るんですよ、夜の芦名が大好きだから走ってるだけなんです。

トレセン学園で酒の勉強と資格の取得ってできますかね？芦名の峠、走れますかね？」

「…できないな」

「でしょう、だからあきらめるとかそういう話ではないんです、元から候補に入れる理由がない」

「そうか…残念だ」

シンボリルドルフはここでシマカゼタービンというウマ娘が理解できた。彼女は走り屋である、だが競争ウマ娘ではない。

走ることは趣味であって、仕事はもつと別にやりたいことがあってそのため努力をしている、ただの一般ウマ娘だ。

だから元から簡単だった、彼女と自分たちの道は交差することはあっても一緒になることはなかったのだ。

ただ悲しかった、今の自分が絶対を描けないウマ娘と走る機会はない、証明する機会は訪れない。

そう考えると気落ちするような気がした、取り返しのつかないことをしている気がしてならない。

ここで話が終わってしまえば、もう二度と会うことはないだろう。本当にそれでいいのか？

(良くないはずだ、良くないはずだが…私は…)

自分のわがままがどんな風になるか考えれば、もうできない。今の自分は、自分だけで責任が持てる身分ではない。

彼女の言う通りだ、自分は雁字搦めで自由に生きていけない立場にいる。今、完全に自覚した、自分は皇帝の椅子に縛り付けられているのだ。

「…東条さん、今夜はこちらに泊まりで？滞在予定は？」

「週末の予定は空けてるわ、街のホテルを取ってるけど」

「今夜と明日、ターボにちよいと頼まれてましてね。彼女のチームメイトの…ナイスネイチャさんでしたっけ、二人の練習相手するんです」

シマカゼタービンが何を思ったのか、シンボリドルフにはその時は理解できなかった。そして自分がどう答えたのかも曖昧だ、ただ肯定はした。

「あいつらにも聞かなきゃわかりませんが…一緒にどうです？会社と公道で軽くやるだけなんでお気に召すかわかりませんが」

それがどういいういみかもしらないで。

## 第二十話

いつものランニングコースである芦名の峠はいつものように暗い、その暗い夜の闇は不思議と気分を落ち着けてくれる。

俺はその峠をいつもより少し遅い時速40キロを維持しながらいつものように駆け上る。接待ペースだが、それでもやはり気持ちがいもんだ。

がつつと前世のようにアスファルトを叩く蹄鉄の音が心地よく響き、足に伝わる衝撃が心地よい。

澄んだ草木と土の混じる山の香り、そこに混じるかすかな排気ガスと焼けたタイヤの残り香は、芝や川砂の香りよりも身に染みる。

ここを走るとやはり気分がいい、この暗闇のアスファルトで舗装された峠道が俺のコース、俺の走るバトルステージだ。

後ろを少し振り返ってみると、まだこのあたりではまず見慣れない日本トレセン学園のジャージ姿の4人が息を乱れさせながらついてきているのが見えた。

3連ヘアピンで体力を持ってかれた程度でこれか…中央の連中といてもいきなりはきつかったか？

「だいぶ乱れてるな…もうぎりぎりか！」

「なに？」

「ギリギリかって聞いてんだよ、デーパー！」

俺の後ろ、およそ5メートルほどまで離されたデーパーに問いかけるが反応は悪い。走り始めて大体2.5km、群馬トレセンのピチピチ一年生なら全滅している距離だ。

「ターボから聞いているだろ、無理ならさっさと車に戻れ」

「ま、まだまだ!!」

「舐めるな!まだまだいけるぞ!!」

「威勢がいいのは認めるがね、ナリタブライアンさん。今2.5キロだ、残り6.5キロ、まだまだゴールまでは遠いぜ?」

「たかだか、2500メートル、こんなの、屁でもない!」



「さすが本職、鍛え方が違う」

たかが時速40キロ、峠道を登ってたった2.5kmだ。名高い中央ウマ娘レースで世界相手にぶつかり合う連中がこの程度で音を上げるはずもないか。

とはいえかなり厳しい表情なのは変わりない、走り始める前はかなり自信たっぷりな様子だったが：まあ、この道は左右に振られるからな。

俺から約3メートル後ろにはディープリンパクト、少し遅れてシンポリルドルフ、ナリタブライアンが一人分間隔をあげながら追走、そこから少し離れてナイスネイチャが並んで追走してきていたが、4人とも表情は余裕がないし呼吸もひどく乱れてる。

家で俺の靴を心配してくれたナイスネイチャさんはグロツキー寸前って感じ。

ツインターボの姿はない、慣らしが終わったらバックアップに回るよう頼んどいたんだ。たぶん、さつきドアが開いた音がしたから走りながらワンボックスに乗り込んだな。

あいつに任せときや問題ねーだろ、帰ってきたときに群馬トレセン連中と一緒にやったことあるし。

最後尾には瀬名酒造が貸し出した併走中の看板を前後に付けたワンボックスカー、運転手はツインターボのトレーナーだ。

俺についてきてもう無理ってなったら、無理せず並走しているワンボックスカーに飛び乗って休むんだ。

たまに一緒に走る群馬トレセンの連中が良くやる練習方法、まあ出来ないやつはバックアップ要員が引つ張り込むんだが。

いわば地上版フルトン回収：いや、フルトン使ってないから違うか。まあおおむねそんな感じの回収方法だ。

群馬トレセンに頼まれて新人たちを連れてここを走ると、確実に力尽きて道端がしばらく死屍累々になって見た目が悪いからいつしかこうやるようになったのよね。

「こちらシマカゼ、ツインターボ、どうぞ」

《はいはい！こちらツインターボ、どうぞ！》

いつものように持ち歩いているトランシーバーのプレストークを押し話しかけると、同じものを持つているツインターボが出る。相変わらず元気いっぱいだ、ちゃんと慣らしで終わらせたってわけだ。

「お前の友達、一番きつそうだが…大丈夫だと思うか？」

《ネイチヤならまだ大丈夫だよ、それよりディーブインパクトのほうが辛そうじゃない？》

「ま、だろうなあ…」

ディーブの顔色はナイスネイチヤに比べたらまだ余裕そうだが、たぶん根性で勝るのはナイスネイチヤだろう。

ツインターボから聞いている限りまず経験が違いすぎる、ディーブはまだレースの世界ではひよっこもひよっこだ。

だがナイスネイチヤはベテラン、クラシックを経てシニアでGIレースをいくつも走ってきた経験があると聞く。

たぶん前世のあいつの皃月賞後より少し強いくらいのディーブじゃ、根競べになれば手も足も出ねえだろ。

「いつでもピックアップできるようにしといてくれ、そろそろ誰か垂れるぞ」

《了解！》

これでよし、脱落してワンボックスまで落ちたらツインターボが車に引きずりこんでくれる。

我ながらこうもインスタラクター染みたことがうまくなるとは感慨深いねえ…ま、前世も同じか。

《ところで、トレーナーが聞きたいことあるみたいだけど代わっていい？》

「はい」

《…代わりました、南坂です。ランニングの最中に申し訳ないんですが…いいですかね？》

「構いませんよ、答えられることなら」

《何年ここで走ってるんです？…》

走って何年か…前世も含めるわけにやいかんよな。ガキの頃は

歩いてたし計算外として、走り出したのが小学生だから大体…

「ランニングは8歳くらいからですかねえ。ま、日課で軽くですけど」  
日課じゃガチ走りなんてできねえからなあ、いつもは体力づくり程度だよ。昔は走り切るのに2時間近く掛かったもんだ、いやあ懐かしい。

思えばよく親父が許可してくれたもんだわ、変なのはむしろ街に多いから峠道は逆に安全なんだが普通は許可しねえよな。さすが親父だけ。

《：ちなみに今おいくつで？》

「18」

《：じゅうねん…まいにち》

「毎日ですね」

そんなになるか、考えてみりゃ長いもんだ。峠自体は幼稚園の頃から遊び場だったけどな、親父たちの車によく乗せてもらって一緒に走ってた。

この道のことなら、それこそ染みの一つまで覚えてる。なのにまだまだ奥が深い、これだから峠ってのは面白い。

：そっか、最初はあんなに苦労してたのに今じゃ片道30分かかんないんだよなあ。

最初は夕方のランニングで、その内速く走れるようになって時間ができて遊ぶ時間も増えて、次第に時間も夜になって：なかなか感慨深いねえ。

「ディープ、もうすぐヘアピンだ。ここから勾配がきつくなる。しっかりと踏みしめないとコケるから気を付けろよ」

「うげえ…」

「3連ヘアピンよりはマシだろ」

ここを走って登ろうとするウマ娘に最初に襲い掛かってくる最初の難関が3連ヘアピン、それ自体はなんなくクリアした。

まあまだ麓付近の3連ヘアピンなら十分体力もあるし疲れてないからな、そもそもクリアできない難関というわけじゃない。

3連ヘアピンで持ってかれるのは体力と集中力、それとさらに上が

あるってことへのちよつとした焦燥感を芽生えさせること。

車じゃ大したことはないが、ここを初見で走り切った群馬トレセン学園生は大体がそういうんだよ。

3連ヘアピンを抜けた先はまた平凡な感じになるがここは峠、常に坂道だ。俺は慣れてるからちよつどいい中休みだけど、普通のウマ娘には休む場所なんてないように見えるらしいね。

ま、今日は運がいいよ。快晴だし、風もない、天気が崩れる予報も無し、良いランニング日和だわ。

「う、うそお!？」

「まだきつくなるというのか!？」

2連ヘアピンに差し掛かる。そこまで急じゃない手前のコーナーを抜けると勾配がさらにきつくなる坂道がお出迎え、さらにきつくなる坂を見て後ろからナイスネイチャとナリタブライアンの呻きが聞こえた。

これにビビる連中は多い、峠の名物である連続ヘアピンを抜けて息をつきながら身を削られてると、目の前で坂がさらに坂になるって感じだからな。

しかもこの道もこの角度のまままでカーブ、上りながらヘアピンを一気に攻略する必要がある。

2キロと少し走った後で疲れた体で、より勾配のきつい坂で曲がる角度のヘアピンカーブを走ろうとすればどうなるか。

ダイオー達曰く、ここまで来てるなら想像できない競争ウマ娘なんていないそうだ。

「こんなのまだ序の口だぞ。上に行けばもつときつくなる」

道の勾配も、荒れ具合も、そして山を登るといふその意味も如実に体を締め付けてくる。ゴールの標高はおよそ1200メートル、意味が分かる奴は分かる。

とはいえ、まだ序盤なのよね。実際このあたりならまだ整備がしやすい地域だし、補修頻度も多いからなあ。

「おわッ!？」

「ぬう!？」

「な!？」

「いい!？」

最初のヘアピンカーブ、右曲がり、俺がインベタできつちりつけて曲がると同時に後ろから悲鳴が聞こえてきた。

ちよいと見れば、コーナーでラインが乱れて車道に膨らんだ4人が見えた。

やっぱり、坂を上ろうと踏ん張っていたはいいがラインが乱れて曲がり切れない、そうなるたたたらを踏みながら外に膨らむ。

普通の人間ならそこまで出力が出ないからへばるだけだが、ウマ娘の脚力だとなまじ力があるからこうなるんだ。

あぶねえんだよこれが、体を制御できなくて車道に膨らむからそこからリカバリするのにワンテンポ遅くなりがち。

そこに一般車が通りでもしたら速攻で事故、弾かれて病院かあの世に直行便だ。ま、この時間に通りがかる車はあんまりないけどね。

走り屋が集まるのも週末でももう少し夜が更けてからだし、一般車が走り回る時間はもう過ぎてる。なんも知らん観光客も、この道より新しい道路を回りこんだほうが時間はかかるが走りやすいから。

「置いて行きますよー、早くしないと轢かれるよー」

：…なんだろ、これでいいのかな?もうちよい群馬トレセンの連中みたく、海兵隊ばりに声を張り上げたほうがいいのか?

いやでも一応大物だしな、軍曹モードでバリバリ言うわけにもいかんか。本職なら話は別だが俺一般人だし。

中央じゃ、中山の坂あたりが実戦の坂だものな。悪く言うつもりはないが峠と比べたら中山の坂は正直ただのスロープ、それもほんの一瞬で終わる距離だ。

平地純粹培養のお嬢様たちはどこまで持つだろうか、ちなみにクインベレーとテューダーガーデンは1キロでダウンした。

俺はこのペースなら余裕なんだが、果たしてこの程度の高さで息を切らしている中央の連中はどうかねえ?



一体何がどうしてこうなった？ ナイスネイチャは息絶え絶えで思考もぐらつきかける中必死で走りながら自問自答していた。

片道約9キロの峠道、往復18キロ、時速40キロを維持しながら休憩なしでランニング。言葉にしてしまえばそれだけだ、現場を知らなければ多少キツイ程度としか思えない。

なぜならそれをやっているのは一般のウマ娘なのだから。

軽くランニングにできるくらいの峠道なのだろう、一般ウマ娘が登って下ることができる程度なのだろう、いろいろと思い込んでタカを括ってしまった。

いくら相手がやばい奴と言われていようが普通はそう思うだろうとも、そう思わなきゃ何に危機感持ってんだという話である。だが違った。

(こ、れ、のー！どこが！軽い！ランニング!!だああ!!)

荒れて路面状態の悪いアスファルト、天然故に一定の角度の坂路ではない峠道、そして何より暗くて視界の悪い上にこの道路はウマ娘用のレーンが擦り切れている。

そんな状態の悪い道をヘッドライトで照らしながら、時速40キロを維持した状態で駆け上がる。

休みなどない、妥協などない、片道9キロの上り坂を走り切れるギリギリを見極めながら最後まで自分を追い込み続けるのだ。

これまで日本トレセン学園でやってきたどんなトレニングよりもハードで、科学的根拠も何もない根性論で、誠に狂ったこの狂気のトレーニングをツインターボはシマカゼタービンのルーチンワークとほざいたのだ。

実際毎日やっているというのは本当なのだろう、現に先頭を行く彼女の足は一切乱れていない。

「ぐッ、く、くそ……」

道が右コーナーに差し掛かる、シマカゼタービンが外側のガード

レールに沿って綺麗に曲がるラインを追従しようとして走っていた時、前方を走っていたナリタブライアンの足が乱れた。

同時に自分の走りも大きく乱れる、急なカーブに対応しきれずあっさりと路肩から車道のほうに向かって足が膨らんでいくのだ。

毒づきながらなんとか修正しているが垣間見えた彼女の顔つきは険しい。いや、今この場で平然としている見慣れた顔は存在しない、参加した全員がもはや限界だ。

あのシンボリルドルフでさえも足並みが徐々に怪しくなってきた。後ろから見ただけでもう限界が近いのが見て取れた。

もうかれこれ3kmを延々と駆け上がったのだ、普通のウマ娘なら既にギブアップしておかしくない。

あの坂路の申し子と呼ばれるミホノブルボンでさえ経験したことがないだろう、レース用に調節された訓練用坂路がただのスロープに今は見えてくる。

トレセン学園近くにある神社の急な階段を使った階段ダッシュのそれとはまた別の恐ろしいキツさがこれにはある。

この道は直線だけではない、コーナーも練習コースの比ではないほど急でかつ右に左にぐいぐい振り回されるように曲がらされる。

この左右に振り回されるようなコーナーがまた曲者で、レース場を模した練習コースに慣れていると右コーナーの次が左コーナーというだけで少し面食らってしまう。

なぜなら練習用コースでは走りが右回りならずと右回りだ、右回りを走りながら左に曲がることはない。

(ターボ、これ、知ってたんだ！)

あのツインターボが妙に素直にさっさと車に乗ろうとした時に、一緒に切り上げようなんてらしくもないことを言っていたのを信じるべきだった。

群馬慣れしている彼女はシマカゼタービンのことをよく知っていた、シマカゼタービンも無理しないようにと言いつつ含めていた。

いつものように元気で、自分たちに言われるよりも素直に頷く彼女はやはりシマカゼに懐いているのだとその時は微笑ましく思っていた。

たのだ。

自分は余裕だと思ってしまうていた、日課としてできるただのランニングだとバカのように信じてしまったのだ。

まだ3 kmほどだと自分の感覚が訴えている。菊花賞の距離で、たった3 kmしか上っていない。

数字にしてみれば長距離を良く走り切ったものだと思うだろう、けれどそれが恐ろしい現実を見せつけてくる。

まだ先が6 kmもある、この状態がまだ2倍続くというのだ。この真つ暗な暗闇の足場の悪い峠道が。

(なんで！彼女は平気な顔してんだ！なんで、そんな、余裕なの!?)

ちらりちらりと後ろをうかがうシマカゼタービンの表情に疲れはない、汗は掻いているが呼吸に乱れはなく足腰も安定している。

現役の中央競争ウマ娘である自分たちがかなり堪えているというのに、地方競争ウマ娘ですらない一般ウマ娘に体力で負けているという事だ。

(それに、なんで、蹄鉄付けてこの速度で、走れるのよ!!)

自分たちはアスファルトの上を走るのに適したゴム底のランニングシューズ、トレセン学園内で流通している物でウマ娘の足をしっかりと保護しながらアスファルトの硬い地面を走る反動をやわらげ、しっかりと吸い付く靴底の細工が売りだ。

URA傘下のスポーツ用品生産企業の中からコンペで選ばれた製品で、現段階では最新の技術が施されていて普通に買えば目玉が飛び出る値段の代物である。

トウカイテイオーやスペシャルウィークのような大きな華がない自分がそれを使えるのは、ひとえにトレセン学園生だから割引が利くためだ。

対してシマカゼタービンが履いているシューズは一般流通しているウマ娘用レーシングシューズ、靴底に別売りの蹄鉄を装着して使うタイプで今も彼女の足の底には蹄鉄がきっちりはめ込まれている。

アスファルトの上を、蹄鉄を付けて走るというのは極めて効率が悪い上に負担も大きく普通はお勧めされない。



硬い蹄鉄はアスファルトの上では滑りやすく互いに傷つきやすい、その上アスファルトの上を走る衝撃が足に強く掛かって怪我の原因になる。

蹄鉄付きシューズは芝や砂の上を走る物でアスファルトの上を走る物ではない、トレセン学園生ならば誰でも知っている常識だ。

当然ながら荒れた峠道を走るなんて誰も考えない、まともに走れないまま足を痛めるのがオチだ。

だが彼女は速い、彼女の足腰はしっかりとっていて、走る姿に乱れはまるでない。カツカツカツと小気味のいい足音を立てながら目の前を悠々と走り続けている。

(なんで、あんな、安物で、これができるの!?)

瀬名家を出る時に一応忠告はしたのだ、その靴を履く彼女を偶然見かけたので。だがシマカゼタービンは全く聞き入れなかった。

それでこの光景だ、あまりにひどすぎる、自分の思い違いがなぜか恥ずかしくなってくる。自分は正しいはずなのに。

あの靴が実は特別な代物だったならまだ納得できたかもしれない、だが、自分はしっかりとこの目で見たのだ。

シマカゼタービンの靴は一般流通している同商品の最新シリーズでもない。現行販売品だが一つ前のモデル、いわば旧式だった。

レースで勝ち抜くために靴から見直す機会があったから覚えていたことだが、その知識が今はとても恨めしい。

知識があったから見ただけで分かってしまう、シマカゼタービンの靴は紛れもない一般量産品で蹄鉄も量産型の何の変哲もない安物だ。

自分たちよりもはるかに足回りに掛かっているお金は貧相極まらない、それでも自分たちよりはるかに速く走れている。明らかに熟練度が違いすぎるにしても、あまりにも桁が違いすぎるのだ。

(それにいつもはもつと暗い所を走ってるわけ!?!あの靴で、あのライトだけ?普通じゃないわあ!!)

それに今は後ろに『ピックアップ用』という事で後ろからついてきているワンボックスカーのヘッドライトが道を照らしてくれているが、普段の日課で走るシマカゼタービンにはそれが無い。

街灯も少なく、電球が切れている街灯も多くて視界の悪いこの峠道をヘッドライトの明かりのみで走っているというのだ。

それがどれだけ危険な行為か、自分で走ってみて身を以って理解した。

後ろから照らされるワンボックスカーのヘッドライトすらも道路の先をはっきり見通すには至らない、ナイスネイチャは頼りないと感じているのだ。

「た、タービン、む、むりいい!!」

「お疲れ。ゆっくり減速して車の横につけるよー」

大きく息を乱しながら一気に減速して列から脱落していくデュープリンパクトをとっさに避ける。

そんな彼女に恐る恐る追従していたワンボックスカーが横に付けると、開いたスライドドアからツインターボがデュープリンパクトを捕まえて器用に車内に引っ張り込んだ。

(バックアップってそういう事ねー、これなら置いてけぼりを心配しなくてすむわ…ってなるかあ!なんであんな慣れてんのターボ!!)

もしや里帰りしていた時はこれやっていたのか!?

「シマカゼツ!お前!!いつも、これを!!」

「無理すんなよナリタブライアンさん」

「ブライアンと、呼べ!お前!なんでへいき!なんだ!!」

「そりゃここ、俺のホームコースだもの。走り方は熟知してるよ」

「り、理由に、なるかあああツ!!」

「初挑戦で上回られたらこっちの立つ瀬がねえんだけどねえ…」

肩をすくめるシマカゼタービンへのツツコミに力を使い果たしたナリタブライアンの足から力が抜けて足が垂れる。

立て直すこともできず脱落していく彼女は、ワンボックスの隣までふらふらと落ちていくとツインターボにピックアップされて車内に消えた。

「も、もう…」

限界だ、もう無理だ、そう言いたい自分を何とか堪えて、最後に絞れるだけ絞って速度を維持する。そこで、自分の足が終わった。

ふらふらと最後尾から離されていく自分。足が回らなくなって、体から少しづつ力が抜けていくのがわかる。

無理だ、もう無理、これ以上は走れない。まるで新入生時代に戻ったかのような気分になりながら、ナイスネイチャは足の回転を落とす。

「お疲れネイチャ、どうだった」

「…なにあれ、化け物？」

「あつはつは！よく言われるよ。はい！」

回収しに少し速度を上げてきたワンボックスカーのサイドドアから身乗り出してきたツインターボが、いつものように笑いながら手を差し伸べてくる。

それを取って、ナイスネイチャはワンボックスカーに飛び乗ると空いている席に崩れるように座り込んだ。

後部座席にはすっかり体力を使い果たしたディーパインパクトとナリタブライアンがすでに座り込んでおり、精魂尽き果てていた。

ディーパインパクトはまだ息を荒らげながらスポーツドリンクをがぶ飲みし、ナリタブライアンもスポーツドリンクのペットボトルを額に当てながら小さく笑い声をあげている。

「大丈夫？足は問題ない？」

「あ、はい、大丈夫です」

タオルとスポーツドリンクのペットボトルを心配そうに渡してきた東条トレーナーから受け取りながらナイスネイチャは頷く。

どうやら南坂トレーナーは運転に集中しているらしい、運転席のフロントガラスにわずかに反射する彼の表情はいつも以上に真剣な眼差しだ。

運転もそうだがそれ以上に食い入るように目の前で走るシマカゼタービンとシンボリルドルフの姿を見ている。

「そう、ルドルフは？」

「まだ走ってますけど…たぶんそろそろ」

「そうよね…なんて規格外なの…これだけ走っているのに、まったく足が垂れてないなんて」

「ふふーん！タービンは昔から峠を走ってるからな、これでもまだ本気じゃないぞ！」

「へえ…は？」

胸を張って従姉を自慢するツインターボから聞いてはならないことが聞こえた気がした。思わずナイスネイチャはツインターボのほうを見る。

車内の空気も急転直下、南坂トレーナー以外の視線がツインターボに直撃した。

「ターボ？今なんて言った？」

「うわ?! ネイチャ目怖!!」

「あたしの目はどうでもいいんだよ、本気じゃないってマジ？ちよつと冗談にしちや笑えないっていうか…」

「だって、まだ時速40じゃん。今年から45で走ってるもん」

そういつて車の速度計を指差すツインターボ、その顔はいつものツインターボであった。

室内で何かが削れるような音がする、タイヤの擦れた音だ。加速した？そう考えた矢先、ツインターボが真つ先に動いてドアを開けて中にウマ娘を一人引っ張り込んだ。

シンボリルドルフだ、ついに彼女もギブアップか。おそらく4キロ前後といったところだろう、大体半分ほどで全滅とはなんという光景だ。

トレセン学園の生徒会長を務める彼女からは想像できないような荒い息遣いで肩を上下させるシンボリルドルフに、東条トレーナーは汗だくの顔を拭いながらゆっくりと問いかけた。

「ルドルフ…どうだった？」

「…笑うしかないとはこのことです、恐ろしい足ですよ。彼女の足が全く垂れる気配がないんです、付いていくのが精いっぱい、喋る余裕すらない」

「そう…ルドルフ、今知った話なのだけれど——」

《ターボ、みんな乗ったよな？ペース戻すから遅れるなって言つとけー》

ツインターボのポケットから響いた息一つ乱れていないシマカゼタービンのトランシーバー越しの声に車内の空気が凍る。

唯一、ツインターボだけがうきうき顔で運転席の裏から顔を出して南坂トレーナーにアクセルアクセル！と催促した。

少し慌てた様子で南坂トレーナーが加速する、フロントガラスの向こうには相変わらず乱れず走るシマカゼタービンの後姿。

車間距離は変わっていない、走る姿も変わっていない、ただ確実に車の速度が上がっている。

恐る恐る車の速度計を見る、時速45キロを示した速度計にナイスネイチャは声にならない悲鳴を上げて固まるしかなかった。

## 第二十一話

前前世から俺はミリタリー系雑食オタクだった、馬の時に車と酒も増えたが基本は変わらん。

馬からウマ娘とやらになって人型になっちまったら昔の趣味にも前みたく手が伸びるのは不思議じゃねえ。

少しばかり暇を持って余しながら勉強机に座った俺は、なんとなく愛用のエアガンを分解整備して弄りながら暇をつぶしていた。

風呂はターボとナイスネイチャさん達が先だからな。

愛用のガスガンの一丁、カクイ製シングザウエルP226Rを分解しては組み立て直して、また分解して…

「むふうくん♪」

組み立てたエアガンを見てついつい悦に浸っちゃったり…いやあ、生まれ変わって3度目にしてこれなんだからもうやめられませんわ。

マジで日本のエアガンの出来は素晴らしいねえ！プラスチック製である以外は本物と手触り一緒、操作感まで一緒なんだから大したもんだよ。

そりゃ厳密な重量感とかその他もろもろ違うけど再現率スゲーんだこれが、発射機構も今考えればマジで凝ってるしガスブローバックの迫力も半端じゃねえ。

アメリカでぶっ放した時の事が思い浮かぶねえ、9パラをぶっぱなしたのなんて前前世の05年のイラク出張以来だぜ。

前前世の勤め先にいたアホ専務がおったたアホ企画の事前出張でえらい目に…：そういや、あの時も面倒事に巻き込まれたっけ？

「…うーん？」

なんとなくスマホを出して連絡帳のひ行を開いて…：やめた、あいつの国と時差何時かわからん。

そういや妹の方は日本留学だったっけ？どこかはお楽しみとか抜かして教えてもらってねえが…：どっちにしる夜か、やめよ。

…そもそも何やろうとしてんだ俺は、こんな風にこっちから理由も

なく電話する性質じゃねー。

やっぱりどうも今日は消化不良だ、走り足りねえ、全然疲れてねえ。おかげで暇すぎていらんことばっか考えやがる。

せっつかくあいつらと楽しく降りもランニングと思ってたのに一言もしゃべれやしないなんて思いもしないじゃん。

しかもトレーナーの監視付きだから変に冒険とかさせてやれねえし…久しぶりにターボと一緒に楽しく夜の峠攻めをと思ってたのによ。

まあターボがめちやくちや強くなつてたのが分かったが…うーん、しょうがねえ、車でも弄りに行くか。

「うおつと…」

そう思った矢先にスマホに着信が入った。相手はハルウララ、前世のあいつとおんなじ名前のウマ娘。高知に酒探しに行った時の知り合いだ。

ピンクの地毛っていう俺と負けず劣らずけつたいな髪色をしてたがそれ以外は前と大して変わらんかったなあ…そういやあいつも中央だっけか？そこは違うか。

「ほいほい、どうしたんだ…いやマジでどうした？」

テレビ電話になった画面が全面ピンクのもつさもさ…あいつの頭じゃねーか、というかかすかに聞こえるこれは…

「寝てんじゃねーか」

《ねてないよ…すぴー…》

「なんつー器用な寝言だよ、ったく」

《うえへへ…くかー》

さてどうすつか、俺に電話寄越したならなんかあったのかもしれないが…起きねーだろうな、これ。

《あらあら？ウララさんこんな夜中に…って寝ちやってるの？》

「お、その声はキングヘイロー？そうなんだよ、なんかあったの？」

もももぞと向こうで何か探る音がして、全面ピンクの画面が取り出されて困った顔のキングヘイローの顔が移る。

ハルウララと寮の同室のウマ娘だ、ウララの奴と話してるときたま

に話が振られてからたまにこうして話すようになった。

とはいえ、電話越しに話してるだけで実際に会ったことはないけどな。ウララとも高知で本当のごく稀に会うくらいだし。

《たぶん今日のことが嬉しかったのね。この子、今日が復帰戦だったの。ふふふつ、きつと高知の友達に教えたかったのね》

あれ？確かあいつのトレーナー、一身上の都合でやめたとか言ってたよな？

「トレーナーが見つかったのか？そりや幸先がいい」

《正確にはチーム入りね》

となるとウララの奴、電話かける相手間違ってるぜ。こりや完全に寝ぼけてやがる。キングヘイローが何かに気付いて、少し笑いながらウララの寝姿を画面に映してくれた。

あーあー、風呂上がりのまんまでベッドに飛び込んでそのまんまだなあこりや。幸せそうに寝てやがる、起こせないっていうか…起きねーなこりや。

「こいつらしーや、電池切れたか」

《そうね、完全に電池切れみたい。ごめんなさいね？こんな夜遅くに》

「構わんよ、俺も暇だったしな。ところで復帰っていえば、ウララの奴どっちで走ったんだ？」

《ダートよ？前からそうじゃないの》

なんとなくそんな風に話していると不思議と話に花が咲く。どうやらウララはこっちでも基本ダート路線は変わらんらしい。

向こうだと復帰したらたまに冒険してたりするしなあ…変わらんならダートで短距離かマイル、無理して中距離って所か。

そんな風に話に花が咲いていると、トントんと部屋のドアを叩く音がする。やれやれ、やつと上がってきたか。

キングに一言断って電話を切ると、ドアを開けて風呂上がりのツイインターボを迎え入れた。

ツイインターボがニコニコしながら部屋に飛び込んできたので、サイドステップで躲してやるとそのまま床に敷かれた布団にダイブ。



「変わんねーなお前」

相変わらずだなコイツ、中央で二回も重賞を取ったつてのに毛ほども変わつとらん。

んまあ、走りながらあんなこと叫ぶまっすぐさというか、そーいうところが変わってないのはホツとするがなあ。

「そんなことないぞ！ターボ強くなったんだから！」

「解ってる、けどやっぱお前がうちに来ると昔を思い出してな。久々に泊まるって聞いて準備したが：なんか久々な気がしねーよ」

昔はよく泊まりに来てたよな、家が近いからってなんかあると転がり込んできやがった。一緒に寝たのだから一度や二度じゃない。

幼稚園の時仲のいい友達と大喧嘩してわんわん泣きながらうちに来た時もあったっけな。ずーっと引っ付いて離れなくて結局学校まで来たし、まったく困ったもんだよ。

「そう？タービンの部屋、結構変わってるからターボは新鮮だぞ。昔より女の子っぽくなってるし」

「マジか？」

ツインターボがうんうん頷く、こいつが嘘つく理由ねーから多分そうなんだろう。マジで実感ないな、俺はいつも通り過ごしてただけだし。

どうしようしようって気はないけど無自覚に変わつてくのつていざ実感するとやっぱ複雑、いやまあ女だし当然なんだろうけどね。

さすがに性転換したいかと思ったこともないし、前世は前世で区切りは付けてるし。じゃなきゃ前世で発狂しとるわ。

嫌だねえ、もしこんな状態がずっと続くんだとしたら来世男だったらどーしよ、頼れるオカマになっちゃうしかないかしら。

「それにまた胸おつきくなっただんじやない？」

「なつとらんわ、風呂行つてくる」

「いつてらっしやーい」

「部屋漁んなよ？それとさっさと寝ろ、どうせバイトにもついてくる気だろ？」

着替えとバスタオルを引き出しから出しながら言うと言うと肯定が返つ

てくる。やれやれ、明日はこいつを叩き起こさんとやらな。  
どうせ爆睡して目覚まし程度じゃ起きんのだから…どうやって起  
こしてやろうかな？



ツインターボの故郷が少し変わった場所にあるというのは、ナイス  
ネイチャも彼女自身の口からよく耳にする話であった。

芦名市、群馬の険しい山間の峠の奥にある戦国時代から残る古戦場  
と葦名の山城、代々受け継がれてきた伝統的な戦古武術や逸話などを  
中心とした知る人ぞ知る観光の名所だ。

玄関口である芦名市街地、芦名に散らばる観光名所へのアクセス  
ルートの集約地で一部が繁華街として客を集めている。

ここから山に入り峠を越えた先には今も戦国時代の威容を誇った  
まま残る葦名城を中心とした観光名所が存在するのだ。

戦国時代末期に内府の軍勢と対峙し激戦の末に敗北しながらも完  
璧な姿で残り、戦災復興を目指した生存者たちの心の拠り所として修  
復され続け第2次世界大戦すら持ちこたえた葦名城。

死なずの術の研究に没頭し続け壊滅したとされる生臭坊主という  
よりマッドサイエンティストの巣窟であった金剛山の仙峯寺。

芦名の中でも危険地帯であり、今なお立ち入りが制限される場所が  
ある落ち谷、葦名の底。

戦乱の折途絶えたかに見えたが、そのすべてをなぜか修めていたと  
ある元忍が再興したとされる葦名流戦古武術の数々。

その元忍びが生涯を過ごし、やがて仏具工房となった荒れ寺を中心  
に各地におどろおどろしいオカルト話も多く残る。

存在は言及されているが見つからない源の宮、そこへの案内人であ  
り今も稼働しているという縄の巨人。

首なしや七面武者と言われる妖怪、獅子猿、白蛇、ヌシ、桜龍など

の未確認生物、近年増えた新手の妖怪に至るまで好きな人間には垂涎のネタばかり。

同室のマーベラスな目覚まし時計であるマーベラスサンデーに聞けば出るわ出るわ、行くと聞けば自分も行きたいと強請られもした。(まさか、そんなレベルの化け物ウマ娘が本当にいるとは…)

既に夜10時を回って真っ暗な庭先を見ながら、ナイスネイチャは瀬名家の昭和の風情が残る居間でぐったりと春なのに出しっぱなしの炬燵に寄りかかりながら思った。

ひどく疲れた二時間であった。

芦名峠往復18キロ、登り時速40kmを維持して登り途中で挫折。先導役の彼女はさらに5kmを増速して余裕で上り切る。

頂上で喋る気すら起きず少しのインターバルの後に走る降りへ備えて休み、そして地獄を思い知った。

降りの9キロも流しの時速40kmを維持して走ろうとして、今度は半分もいけないでシマカゼタービンとツインターボを残して挫折した。

降りの峠道はまるで別物だった、降りだから多少は楽になるかもという甘い考えはすぐに捨てなくてはならなかった。

まず速度を維持するのが難しい、同じように時速40kmを維持しようとしても気を抜くとすぐに足の回りが速くなる。

真昼の坂道ならばそれでも余裕をもって調整できたかもしれないが、夜の急な峠道で勝手に速度が上がる足というのはことのほか曲者過ぎて肝が冷えた。

そしてそれにかまけていると速度が逆に落ちる、下手をするとコーナーに到達する直前まで気が付かない。

山道故の変則的な勾配と、荒れたアスファルトの上は降りでも足を取られかねないが降りだとよりシビアに足へ負担をかけてくる。

何より登ってきたコーナーが降りだと余計に急カーブに見えてくるのだ、連続ヘアピンカーブのような左右に振り回されるところなど悪夢ではない。

後ろからワンボックスカーがライトで補助してくれているから前

の道が見えているという状況でこの状態、もしそれがなければきっと今頃は谷底であろう。

そんな風に悪戦苦闘していたらいつの間にかみんな消えていて、自分も肩で息をしながらギブアップするしかなくなっていた。

(そんで消えちゃうんだもんなあ…)

自分が最後にワンボックスカーに乗り込んだ後、シマカゼタービンとツインターボの二人は本気を出して文字通り消えるように夜の闇に消えていった。

最初は運転していた南坂トレーナーもついて行こうとしていたが、コーナーを曲がっていくたびにどんどん突き放されて最後は完全に振り切られてしまった。

その走りは異常の一言に尽きた、コーナーとコーナーの間の短い直線で一気に加速していく二人、それだけでも乗っている全員には目から鱗だった。

自分たちは車のヘッドライトの照らす範囲から出たくないと思っていたのに二人は恐れることなく飛び出していった、咄嗟に南坂トレーナーがワンボックスカーを加速させたがそれだけで自分たちは恐怖を覚えた。

何とか二人を視界内に納め直したかと思えばあつという間に左コーナーに差し掛かった。その速度は明らかに速かった、南坂トレーナーは咄嗟に減速をかけていたがその地点ですでに時速60kmほどである。

そんな状態で二人はさらに加速するように踏み込み、二人の姿がコーナーで消えるように曲がっていった。

シマカゼタービンの体が真横を向いたままドリフト状態で滑り出し、ツインターボはガードレールぎりぎりまで身を寄せて綺麗なカーブを描く。

アスファルトの上を蹄鉄で走りながらドリフトする姿のシマカゼタービンと、体を押し付けに行っているかのような超超インコースに身を押し込むツインターボ、そしてその二人はぶつかりそうなギリギリラインに身を寄せながら一切ぶつかることなく一気にコーナーを

攻略していくのだ。

あんなふうに加速していくツインターボの姿は見たことがなかった、ここが地元で走り慣れていると豪語していたがその通りだった。その後はあつけない、ワンボックスカーが曲がる頃には二人の姿はさらに道の先にあり、直線で何とか追いついても次のコーナーでまた消える。

しばらくしてツインターボがシマカゼタービンに何か言っただけで自発的に速度を落とすと、彼女はそのままさらに加速して突き放していく。

目測で時速70kmは一気に出していただろう、そのまま次のコーナーに差し掛かると一気にコーナーの先へ消えていき、ツインターボを回収してそのコーナーを曲がった自分たちの前には誰もいない道路があるだけであった。

「トレーナー」

「なんででしょうか？」

「トレーナーから見えてさ、シマカゼってどういう風に思った？」

思考の渦から戻ってきたナイスネイチャは居間に視線を漂わせながら南坂トレーナーに問いかける。

年季の入った棚、部屋の隅にまとめられた新聞や小物、やや年季の入ったファンヒーター、その前に置かれて自分が入る電源が入っていないくとももこもこでほんのり温かい炬燵の中に伸びるへこみがあるノズルホース。

瀬名酒造は豪商といっても過言ではないが、長い歴史に比べると会社の規模はつましく業績も大手企業のような派手さはない。

生活様式もつきり言えば田舎の一般的な家庭そのものだ。

瀬名の家自体もそこそこ大きな二階建て住宅だが、瀬名家は先祖代々ここで暮らしており家もだいたい百年季の入った年代物だ。

先代時代の昭和初期などかつては社員の寝泊りにも使っていたという名残で構造は大きめの民宿そのままの構造だ。

一階が食堂と住人の居住スペースで居間や客間まで一通りそろっており、二階は一部屋五畳の宿泊部屋が五部屋もある。

ツインターボの友人という事で案内された一階の客間も古風な和室で、本物のいぐさを使った畳の香りが鼻を擽る部屋であった。

故に、部屋の片隅で洗濯物をたたむメジロモンスニーの姿が妙に馴染んでいるのが不思議である。

そんな田舎の家に住むシマカゼタービンの自分はすっかり勝てる長所を見いだせないでいる。

だが自分のトレーナーはどうか、少しだけ希望をもって問いかけるが持ち込んだノートパソコンのキーボードをたたくトレーナーの顔色は優れない。

ちらちらとメジロモンスニーの方をうかがっている、それに気付いたメジロモンスニーが小さく肩をすくめて答えた。

「気にしないでいいわよ、あいつがいろいろ言われてんのは慣れてるもの」

「…化け物クラスかと。今のまま中央レースに挑んでも確実にGI戦線に食い込めますし、実力も上位でしょう」

「やっぱり？」  
「ええ」

それは自分でもよくわかる、ナイスネイチャは炬燵にもたれかかったまま頷くしかなかった。

「ターボのあんな足も初めて見たよ、あれが元かあ…」

「私もです、ターボさんがただのスタート下手とは少し違うのは前から知ってはいましたが…あれを見せられれば納得です」

ツインターボの脚質は大逃げ一辺倒、小柄で体力もいささか少ないながらスタートがうまいわけではない。

そのスタートの拙さが瞬発力とパワーがモノを言うスプリントやマイル路線では不利なので、それがリカバリーできる中距離レースを主な戦場としていた。

そのネットクのスタートもここ最近では改善されてきており、芝やダートを抉り取るようなロケットダッシュを繰り出すようになってきた。

その力強さたるや、踏み込んだ芝やダートにツインターボの深々とした足跡がきつちり残るレベルだ。

それができるようになった理由が『やつとコツが掴めてきた』という事、そしてこのスタートが自分の持ち味であるという事も言っていた。

中央トレセン学園に入学するまではこの峠で走っていたために走りに癖がついていて平地に適應できず、文字通り年単位ですり合わせてやつとしつくり来たのだという。

このこともあって次のレースからはマイル路線を試し、うまくいけば安田記念の制覇を目指すという。

(ターボの走りは前からコーナリングだけは妙にうまかったのも、ここでいっつも彼女の後ろを追っかけてたからって言ってたけど…)

「〜♪…おっと、まだ起きてたんですか。こりや失敬」

噂をすればなんとやら、お風呂上がりのホカホカした雰囲気を纏ったシマカゼタービンが鼻歌を歌いながら居間に入ってきた。

緑色の薄手のパジャマを着てタオルで髪を拭く彼女の立ち振る舞いは、気取らないどこにでもいるウマ娘に見える。

しかしナイスネイチャはそんな彼女から感じる言葉にできない凄みを感じずにはいられなかった。

(世界は広いつてよく言うけどさあ…こんなのあり?野生のラスボスとでもいうわけ?)

もし公式レースで走ることがあるならば絶対に相手にしたくない相手だ、何しろ彼女と走っても勝てる光景が全く浮かばない。

彼女が『接待ペース』と言っていたあの峠道ランニングで見せつけられた桁違いのスタミナと脚力、あれがほんの片鱗でしかないのだ。

そんな力をフルに使って行う戦法は大逃げ、ツインターボの得意技故に長所と短所はよく知っている。だからこそ怖さもよく知っている。

最初にハナを取って自分勝手に逃げて自分のペースにレースを持っていき、周囲のペースを乱してくるのが大逃げだ。

彼女の文字通り桁違いの速力でそんな好き勝手にされてしまったら、自分たちの走りなんて悠長なことはしてられないに決まっている。

それができる、ナイスネイチャはシマカゼタービンの後ろ姿を見ながらそう確信していた。

見知ったトウカイテイオーの不屈の精神から滲みでる凄み、そして競争ウマ娘の中でも上澄みの強者しか持たないオーラ。

それに似た何かを彼女は確かに持っている、競争ウマ娘ではないのに、本業である自分でも『絶対に当たりたくない』。未恐ろしいとはこのことだ。

そして悔しい、心の中でずつともやもやする。彼女がもし公式戦で走っていたらと考えたら嫌な光景しか思い浮かばないのだ。

彼女よりもずつと『実戦で走ってきた』自分が、自ら『遊んでいる』と認める彼女に負けるのを考えている。

だがそれと同時にきつと走れば面白いだろうとも。彼女のようなバカげた走りは、それはそれでとんでもなくレースを沸かせそうだ。

「トレーナー、もし彼女がスカウトに乗ってたらさ、担当してみたいって思う?」

「絶対嫌です」

「は?」

「タービン…これマジか!!」

なんとなく小声で南坂に問いかけると、なぜか断固とした口ぶりです否定が返ってきた。なんじゃそら? ナイスネイチャには理解できなかった。

もし彼女がトレセン学園に入ったとしてチームリギルに入らなかったとする、あのチームリギルが手を伸ばした逸材に次に手が届きやすいのはツインターボが属するチームカノープスであるというのに。

だがこのトレーナー、一瞬とはいえ心底嫌そうにしていた。なぜ? 内心首を傾げて問い返そうとして、どたどたと部屋に滑り込んできたツインターボの騒音に意識が逸れた。

彼女はなぜか興奮した様子で、キッチンから持ってきた麦茶を呷るシマカゼタービンに一枚の紙を突き付ける。

それはトレセン学園では普遍的な様式で書かれた、いわゆる出走



表。

一般参加で行われるアマチュアレースには何度か出ているらしいからそれだろうか？ナイスネイチャはなんとなくそう思ったが、なぜかがつつり固まった南坂トレーナーの視線に気づいてもう一度出走表に目をやった。

(…ん？URAFアインアルズ…一般地区予選!?)

URAFアインアルズ、中央トレーニングセンター学園主導で新たに創設された年末の大イベントレースだ。

日本で一番新しいレースであり、国際基準を満たしつつもあえて国際レース登録をしないことで自由度を高めた勝ち上がり形式トーナメントレースである。

今年から一般参加の枠も用意するという話は聞いていたが、まさかここでその話を聞くとは思わなかった。

瞬間、物音一つ立てずにその出走表はシマカゼタービンにひたたくられ、シマカゼタービンの右腕がツインターボの頭部に巻き付いた。

「あたたたた!」

「まーた勝手に部屋漁りおってからに!」

「久しぶりだったからつい!エッチな本どがあああ!!?」

「なおさら性質悪いわ!!従姉の性癖他人にばらすんかこのあほ!」

「ま、まだへっどろっぐばわーあっぷー!!?あ、やっぱりまえよりおつきッ!」

「なっとらん!」

「でもぎゆうじゆうよりあるじよおお!!」

余りの痛みに悶絶するツインターボに、ヘッドロックを一瞬解いたシマカゼタービンはにやりと意地悪く笑い、パジャマの胸元をつまんで強く捻る。

おそらくブラジャーのフロントホックを外したのだろう、バツンと良い音がして胸の輪郭が一気に解放される。揺れる揺れる、ナイスネイチャの目からして巨乳である。

本気では怒っていないのだろう、それなりにカチンと来たのであろうが。



なら彼女を相手に適切な指導ができるとは思えないからだ。

知識面、技術面、その他もろもろの経験といったものが、トレセン学園のトレーナーとしては若輩である自分に足りていないのは自覚しているが、それとは別に絶対にシマカゼタービンとは合わないだろうと確信が持てる。

シマカゼタービンの実力は確かなモノ、それだけならば彼女は十分にトレセン学園でやっていけるだろう。

しかし彼女の持つ実力と影響力はおそらく、シンボリルドルフどころか理事長ですら思い至らない枠外にある。

（もし彼女が公式レースを走ればトレセンの常識を、いやウマ娘レースの常識を変えてしまうでしょう）

ウマ娘レースはウマ娘だけでは行えない、ウマ娘と担当トレーナー、二人が二人三脚で歩んで初めて物語が始まる。

一人のウマ娘を担当する専属であれ、複数のウマ娘を担当するチームトレーナーであれ、それは同じだ。

歴代のクラシック三冠ウマ娘、シンボリルドルフ、ミスターシービー、ナリタブライアン、この三人もそうだ。

だがシマカゼタービンの場合はそれがない。彼女にはトレーナーと呼ばれる存在はおらず、根底は峠の走り屋だ。

彼女は父である瀬名茂三を筆頭とした芦名の走り屋たちから学び、それ以外は独力で、独学で、ほぼすべてに至るまで自ら鍛え上げてナリタブライアンを負かすまでに成長した。

これが何を意味するか、ツインターボを担当していたからこそわかる。南坂はツインターボのことをよく知っている、この峠で鍛え上げていただろう彼女がトレセン学園では長く苦戦し続けていたことを知っている。

それ程までに平地と峠の環境の差は激しく、素のままの互換性は皆無に等しい。それを改良し、落とし込み、平地での走りに転用するには平地競争での技術の再取得とすり合わせが必須。

そのためにはやはりトレセン学園に入学し、トレーナーとの二人三脚によるチャレンジが絶対に必要なはずなのだ。

しかしシマカゼタービンはどうか？彼女はそれを一人で成しえてしまっている。

恐ろしいほどの類稀なる走りのセンス、明らかな常軌を逸した意識がすべてを成しえてしまった。

（彼女にとつて、トレーナーは必須ではない。これは致命的です）

トレーナー不要のウマ娘、今のシマカゼタービンはそんなとんでもない存在になりつつある。

もし彼女がトレセン学園に入学してその実力をいかんなく発揮してしまえば、おそらく並みのトレーナーではついていくことすらままならない。

彼女に対して安定した関係性を築けるとすれば、南坂が思い当たるのはトレセン学園内でも一握りだ。

チームスピカの沖野、チームリギルの東条、桐生院やその同期、六平、黒沼などであろうか。

それ以外ではただの足かせにしかない、しかもそうなたらシマカゼタービンはトレーナーをフォローしようとするだろう。

足を引っ張っている自分という枷を背負いながら悠々と勝ち進みトレーナーに名誉を与えるシマカゼタービンの姿、それを見るトレーナーの黒ずむ背中、南坂にはそんな光景が容易に想像できた。

中央トレセン学園のトレーナーとして狭き門をくぐり、さらに厳しい下積みを積んだトレーナーたちからしてみればそれは屈辱以前にトレーナーとしての芯を折리카ねない現実だ。

そうなればトレセン学園の現状はさらに悪化するだろう、ウマ娘が挫折するのと同じようにトレーナーたちの挫折もまた深刻な問題なのだ。

むしろ実力が伴わず学園を去って新しい道を目指すウマ娘と違い、別の担当を取って学園に居残るトレーナーのほうがよくよほど精神的にきついものである。

競争ウマ娘となった彼女らは、トレーナーのお眼鏡にかなったときから自らの一生を担当トレーナーに賭けるのだ。その事実が発する重圧はあまりに重く、新人はそれに耐えきれずに壊れる者もいる。

担当ウマ娘が競争の世界から去るとき自らも共に去るトレーナーは毎年必ずいる、古くから問題として学園内でも議論されているが解策は全くない。

そんな真摯で不器用な姿を南坂は逞しいと思っただけで否定はしない、壊れてより破滅的な結果になるよりずっとマシなのだ。

そしてそんな風にならなかつたとはいえ幾重もの成功と失敗を得た歴戦のトレーナーとなると誰もかれもが何かと癖がある。

老体になるまですっかり身を浸している者、ウマ娘に対して紳士ではあるが恰好がおかしい者、無駄に頑丈な者。

時に新人時代から何もかもが担当ウマ娘を育成するヒントに変換される不可思議思考回路の者などもいるがそれはまた例外だ。

つまり、チームリギルの東条トレーナーなどは稀有なパターンであり、自分などはまだその域に達していないだけである。

(そんな彼女がURAファイナルズに挑む、ですか…今年の大会は覚悟する必要があるそうですね)

彼女がURAファイナルズに出走することを止めようとは思わない、それがどんな結末を迎えるかなんて今の自分には予想しかできない。

案外何事もなく大番狂わせだと賑わせて終わるかもしれないが…南坂の胸中は決して穏やかではなかつた。

## 第二十二話

いつも通り午前4時頃、俺は平日も休日もこの時間には起きる。契約先のホテルに朝一番の配達をするバイトは平日も休日もあるからだ。

昔は兄貴と半々でやってたが、兄貴が本格的に会社で働くようになってからは俺が全部引き継いで続けてる。

別に早起きは苦じゃないし、平日はともかく休日なら朝飯軽く食ったら昼過ぎまでダラダラ寝過ぎしたって怒られない。

ま、配達が私服か学校の制服かの違いだけだな。ぶつちやけ休日のほうがめんどくさい、あんまりだらしないとお袋の目がね。

とはいえ、今日は予定があるから学校のジャージでよし。

「んで、おめーは俺の武器庫漁って何やっとなじやい」

「あ、いや、開いてたからつい…」

手っ取り早く着替えていると、ターボが着替えもせず俺のガンロッカーを開けて中を物色してるのが目に入った。

ターボが着替えそっちのけで開いているのは武器庫、この部屋の中でも俺の趣味が詰め込まれた本物のガンロッカー。

またの名をおもちや箱。中身は愛用のエアガンとガスガン数丁、6ミリBB弾とペイント弾、各種カートリッジ、装填用エアポンプとガスボンベとかの周辺器具と整備用品、それとサバゲ用の戦闘用装備だ。

前前世じゃいろいろあった蓄圧式カートリッジもお上が『話にならん』という結果を出したから健在、そんなもんだから見た目はさらにごつついのよね。

まあ俺としては実に天国ですけど、9パラ型の専用カートリッジを弾倉に詰めてるだけでもうにやにやが止まらんよ。

しかし開いてた?…昨日閉め忘れたか、うっかりしてたな。

「タービンが勝負服着たらやっぱこれ担ぐのかなーってさ」

ターボがロッカーから出したのは愛用のRPK-203。だいぶ前だが奮発して買ったやつだ。

軽機関銃らしく撃ちまくるスタイルになるから前前世よりも弾代が割高なのが玉に瑕…でも一度使うとやめられない。

エアガンとはいえ軽機関銃だから重たいんだがウマ娘パワーで振り回すと軽いなの、ぐいぐい振り回せて気持ちいいんだよホント。

自然分解型プラスチックのBB弾、もう少し安くならんかな。アグネス社さん何とかありませんか？

「勝負服？何の話だ？」

「URAFファイナルズの本戦はGIと一緒に勝負服着用だぞ？」

「そういやそんなこと説明されてたっけ、まあ一般参加枠は希望者のみだし金もかかるからあんま覚えてないな。」

群馬トレセンの連中は模造武器込みの勝負服ばっかだしこいつがそう考えるのも頷けるか。

何しろみんな大なり小なり武器を担いでる、一見そう見えなくても仕込んでる、あるいは肉体が武器そのものだったりするとか恰好が武闘派。

「そういう伝統らしい、そういや向こうのサバゲ愛好会の連中は年がら年中愛用のエアガンを携帯できるとか自慢してたっけか。」

「ダイオーはくノ一だし、ノルンはスナイパー、ツバキは…なんだ？近代化武士めいた恰好だったな確か。」

「ああいう衣装を着て走るのは良いとしても小道具はレースにいらんだろ、ただのデッドウェイトじゃねーの。」

「俺としては意味わからん服装が不思議なんだがね、ダイオー達の後輩にいるアルト姉妹なんかそのまんまじゃねーか。」

「レース用にちよこちよこダウンサイズされたりオミットされてるけど武装紳士淑女諸君が居たら大歓喜な代物やぞ。」

「勝負服なら使わねーぞ、一般参加枠は自由だし自費で用意しなきゃならん」

「着ないのか!？」

「高えじゃんか、そんな金ねーよ。」

ダイオー達の付き合いで知ったけど、勝負服って全部オーダーメイドだからどれだけ安くても諭吉さんが10枚は簡単に飛ぶんだよ。

そりゃあんな奇抜だったり綺麗だったりするのに走るのに適した設計をしてるんだから技術も素材も選りすぐりだ、高いに決まってる。

下手したらその勝負服を着たウマ娘が海外にそのまま飛び出すんだから勝負服の職人だってみんな超が付くエリート、そりゃ人件費だけでたけえよ。

国家資格を持った専門職とはいえ同じウマ娘相手の商売だから面識あるんだけどストレスがマジでやばいらしい、敷居は高いし才能が必須だしでとにかく狭い門を抜けて待ってるのが地獄の釜というありさまだそうなの。

さっきのとおり担当したウマ娘が強くて海外挑戦したときに着た勝負服となればネームバリューが半端ではない、下手すりゃ大好きなウマ娘と服に潰されるそうなの。

お袋の知り合いはそれで自殺しちまったっていうしな、シビアな話だけ。

「じゃあレンタルで出るのか？タービンには似合わないと思うぞ？」

「高いよ、あれだってかなり上等じゃねえか」

だからレース場には勝負服のレンタルが必ずある、GIに出られても勝負服まで手が回らなかつたらみんなそこを使う。

あれもレンタル料は1レースで諭吉さんが最低でも2枚飛ぶ、上下の種類が分かれて別料金なんだよな。

前の一般参加レースで高崎競馬場…もといレース場に行った時に特別に着てもいいって言われたが高いのなんのつたら…迷ったけど結局ジャージで走ったよ。

いやはや、あんどきはみんな小綺麗な勝負服を着てる中でジャージだから浮いたのなんだ。ま、全員ぶっちぎったけどな。賞金美味しかったです。

そもそもターボ、みんなあまり言わないけどオーダーメイドの勝負



服を着てるってのは、相当すごい事なんだぞ？

中央と地方の違いはあれどいきなりクソ高いオーダーメイド勝負服を初戦からお披露目してくるとか、学園のバックアップがあってもなかなかできるもんじゃない。

モンズニー姉貴だつて昔の勝負服だけは後生大事に記念品にして持つてるくらいなんだからな。

そもそも本戦まで行く気もない、あれ年末の大イベントじゃないか。進学の準備で忙しいんだぞこちとら。

「あれ？レースの賞金一杯貰ってるんじゃないか？」

「お前らのと一緒にすんな。趣味と研究費に使っちゃったよ」

もちろん貯金と家に入れた残りだけだな。取り分は3分の1くらいか。

「ほら、遊んでないで着替えろ。俺は車持つてくるからいつもの倉庫でな」

「いつもの倉庫前だな！わかった！」

「親父が居るから手伝つてやつてくれ。んじゃ、お先」

車のカギを持つて部屋を出る。その足でまっすぐ車庫、中に入っていつも通り愛車のWRX―STIを車庫から出していつもの倉庫前に車を走らせる。

そういえばあいつと一緒に配達に行くなんて久しぶりだな、今日は休日だしツバキも帰ってきてるだろうからメールしてやる。

トレセン住まいは早起きだつていうけど休日は惰眠貪りたいだろうし、今夜はほぼ徹夜になるだろうしな。

「あ、そうだ、一応確認しとくか」

いつものルーチンで元馬房前のルートに向けたWRXのハンドルを回して別の道に入る、こっちは前世で第一馬房があつたほうの道だ。

当然ここには馬房はないんだがその代わりに併設されてた運動場が超拡大されてる、レース場を模した一周1600メートルのカプセル型コースだ。

見た目は学校の校庭みたいなもん、芝も無けりやダートもない。走

りやすく整地してあるだけの土道だ。

ここはうちに勤めてるウマ娘達が仕込み前の準備運動や仕込みそのものでよく使ってる。だから休日になると誰もいない。

今日はここでツインターボとナイスネイチャの自主練に付き合う予定だ。

車に乗ったまま運動場を見てコンディションを確認する、まあ普通だな、雨が降ったわけでもないし当然なんだが。

これなら問題ないだろ、あいつらが芝とかダートじゃないと練習できないうてなら話は別だがそういうのは聞いたことないしな。

「ありや?」

そのまま運動場横を通過していつもの倉庫前に車を走らせていくと、倉庫前に見慣れた青髪と見慣れない茶髪が見えた。

なんでナイスネイチャがこんな朝っぱらから起きてるんだ?しかもトレセンのジャージ姿で目を白黒させて…なんかうちで見ると違和感凄いな。

「ほらネイチャ!タービンの車凄いでしょ!!」

「おつ、スバルの新型じゃん。マジでスポーツカーで配達してんですか?」

「お得意先には、うちは昔からこんな感じだよ。ターボから聞いてなかったのかい?」

「いやあ…聞いてはいましたけど話半分だったというか」

「なんと!」

「ま、ターボだかんなあ」

「ええ!?!おじさんまで!!」

「ま、お前らしいよターボ。酒、準備してくるわ、タービンには話付けとけよ」

なんだなんだ?親父と一緒に仲良く話してるのを見る限り問題があったようには見えないがなんかあったんか?

親父が酒を取りに入った倉庫の前に車を停めて、いつも通りトランクを開けてから運転席に座ったまま顔を出す。

「ナイスネイチャさん? どうしたんだこんな朝っぱらから…何か

あつたか？」

「ネイチャでいいよ、堅苦しいし。ターボに起こされちゃってねえ、配達に行くから起きろー！ってさ」

ターボ：なんか想像しなかった俺が悪いって感じるくらいありありと思ひ浮かぶわその光景。こいつなら絶対やるわ。

横でニコニコしてるのを見ると悪いことしたとは毛ほども思つてねえんだろうな。

何やってんだよターボ、これからやるのはただの配達なんだから面白いもんでも何でもねえぞ。

「悪いな、朝早くに。ダメなら無理しなくていいぞ？どうせ行つて帰つて来るだけだし」

「ううん、むしろお願いしたいくらいだよ。朝の峠道も見ておきたいしき、乗つていい？」

「ならいいんだが…どっちが助手席だ？」

「ターボは後ろ！」

「んじゃネイチャが助手席な。バケットだからちよつと違和感あるが我慢してくれ」

ドアのロックを運転席からリモートで開けると二人が車に乗り込んでくる。

後部座席に乗り込んだツイスターは堂々と中央に腰を落ち着かせたが、助手席に乗り込んだナイスネイチャは案の定少し座り心地悪そうに顔をすくめた。

「なんか変な感じ、目線が低い感じが…」

「バケットシートは視線が低くなるからな、まあそのうち慣れるよ。シートベルトはシートについてるヤツ使ってくれ。」

助手席に座ったナイスネイチャがもぞもぞとバケットシートの中で尻の位置を調節しようとしている。

初めて座ると尻のおさまりが気にかかるのはよくわかるわ。俺もシートベルトだけはいつも気にかかる、うん。

「ホントにスポーツカーで配達してるんだね」

「東京じゃしないのか？」

「しないしない、普通はトラックだよ。じゃあ豆腐をスポーツカーで配達してる店もあるってのもほんど？」

「藤原豆腐店な、あるある。ハチロクで毎朝ぶっ飛ばしてるぜ」  
「ほら見ろ！」

ターボ、ネイチャの顔色から見るにお前の説明不足だろ。冗談だと思われてたぞ、らしいっちゃらしいが。

「毎日プリンセスホテルに卸してる酒は限定品の発泡日本酒が主だからな。配達にも気を使ってるのさ」

プリンセスホテルに届ける酒はうちで生産するウマ練り全種類とその他だが、毎日する必要があるのでその中でも繊細で賞味期限が短い限定品を扱ってるからだ。

一日に出せるのは多くても二ケースのみ、原材料、仕込み、熟成期間、そして配送、この全てを徹底管理して一番うまい時期に出荷する『限定生産品』だ。

ホテルに卸しているその名はウマ練りスパークリング改！前世で作り上げたモノを第一世代とするならば、こいつはさらに磨きをかけて味と飲み口をさらに成熟させた立派な第二世代だ！！

特にこいつの炭酸は第一世代よりも炭酸発泡の持続性をより長く保てるように強化した、これには気を使ったぞ。

例えるならば長いコース料理で、食前酒として一口飲んだ後うっかり忘れてずっと放置したとしても炭酸がしっかりしているって具合になあ！！

こいつは瀬名酒造が生産している酒類の中でも一番うまい酒の一つと言って過言じゃないが、一般販売に向かない致命的な欠点がある。

単純に賞味期限が短い、それと手間暇かかりすぎなんで生産数が少ないってこと。

賞味期限が短いといっても飲めなくなるわけじゃなくて、瓶詰めして冷蔵保存しても熟成が進むのが速くて一番うまいピークがすぐに過ぎちまうってのがミソな。

でもだからってそのまま売りに出して酒をダメにしちまったら元

も子もない、だからお得意先にしか出さない限定品なんだ。

それを簡単に説明すると、ナイスネイチャは感心したような表情になつた。

「ほうほう、なるほどそれでか。確かにお酒の中には結構、デリケートなもんもありますなー」

「お、話が分かるな」

「いやー実は実家がお酒を扱うお店でして、うちでも私には絶対触らせてくれない高いお酒があつたよ。

昔は何でかわかんなかつたけど、要は保管が難しくて下手に触るとまずいからだつたんだよねえ。温度に敏感なワインだつたよ」

「なるほどね。そのワインとはまた別だが、俺が運ぶのはそのデリケートなのがあるからなんだ。

こいつに一番いいのは瓶詰めして出荷したらその日に飲んじまう事、最長でも一週間が限度だ。ピークが過ぎて味が変わっちゃう。

それに加えて一度出来上がると結構、デリケート、冷蔵庫で保管しなきゃならんし大きく揺さぶろうもんなら瓶詰めで絶妙なバランスだつた気圧が狂つて栓が飛んじまう。

飛び切りうまいが気性難なじゃじゃウマ娘っぷりなんだ、俺の酒は」

とはいえ、ただの配達だから面白いもんでもないんだがねえ：そもそもターボが来たがるのだから要は峠の運転を見たいだけなんだろうしき。

ターボは面白いからいいだろうけど、ネイチャには退屈なんじゃねえかな。

「積み込んだぞ、今日は猿酒と濁酒も追加で頼む」

「あいよ」

「ほれ、ケツ重いから気を付けな」

トランクに酒を積み終えた親父が運転席側に戻ってきて水を入れたコップを差し出してくる。いつも通りに受け取って：おい、なんか多くねえか？

「親父、いつもより多くねえか？」

「二人乗っけてんだ、これくらい気い張って走れ」

「安全運転で、とかじゃねえの？」

「走るウマ娘に念仏だろ、つまんねー走りして退屈させんじゃねーぞ」  
「へいへい、行ってくる」

「おう、朝飯の準備しとくからな」

親父が車から一步離れると同時にサイドレバーを下ろしてゆっくり発進、ホルダーに置いたコップに多めに注がれた水がこぼれないように丁寧に加速させる。

いつもより二人も多く乗ってるから加速が鈍い、こりや荷重移動も気を使わんと速攻でミスるな。

会社の敷地を出て公道に出たらゆっくり加速、時速40キロ前後の安全運転へ。

「おお、すごいスムーズ、本当に運転がうまいんだね」

「走り屋やってればこれくらい普通だよ」

「走り屋って所が普通じゃないんだけどねえ。ところでターボ、おじさんの言ってたのってどういう意味？」

「タービンは配達の時、登りはいつもコップに水を入れて零さないように運転するんだ。すごいぞー」

「ええ？」

ターボ、それだとネイチャに難しさ伝わんない。まあこれに関しては車をよく知ってる奴じゃないと口で言っても分からんか。

それに俺も成功させてるわけじゃねえしなあ…零さないようにするなら楽勝だけど、それじゃダメなんだよな。

「ターボ、伝わってねえよ。ま、見てりや分かるさ。峠に入ったらできればあんま身動きしないでくれ」

「お安い御用だけなんぞ？」

「コップの水、バランスが崩れるとミスってこぼれる。朝からびしょ濡れは御免だろ？」

「なるほど、これをこぼさないように峠道を登ると…さすがに冗談だよね？」

「何を言うか、これくらい親父は鼻歌交じりでもできるぞ。あふれる

と盛大にぶちまけっから、掃除が面倒なんだよ」

「あはは、まさか：そうだ、動画とつて良い？マチタンとイクノにも見せたいし」

「どうぞ」

こりやふがない走りはできんな。本気でやるか。

「そういえばこの車カーナビとかついてないんだね」

「ナビの代わりにドラレコ積んでんだ、走り屋してるところこういう証拠がないといざって時に困るからな」

真昼間に普通に運転しても向こうから突っ込んでくるような事故は普通にあるし、その時どんなに相手が悪くても走り屋ってしられるとさすがに警察の目が変わるかんな。

こつちがミスってないって証拠残しとくのは重要よ、証拠があれば警察もにつこり笑ってくれる。

ま、峠で走るときは電源切ってるけどな。今だって電源は入れてないし。

あとナビは壊れると修理費が高い、走り屋の車はとにかく振り回すからカーナビって結構壊れやすいのよ。新米の走り屋がそれで泣くのはお約束だ。

そういえば置いてなかったな。ポケットからスマホを出して運転席の充電兼接続ホルダーに装着、これで電話がかかってきてもハンズフリーで会話ができる。

ケータイも便利になったもんだぜ、この年代を繰り返してるとすごい良くわかる。進化の仕方が異常だ、バージョンアップ速すぎるつての。

「今はこれの地図アプリで十分だし、必要なら別ので代用できるしな。そつちのダッシュボードを開けてみな」

「どれどれ…あ、なるほどね」

ダッシュボードから取り出したのは小さめのPAD端末、必要になつたらホルダーで固定してカーナビ代わりに使ってる。

頑丈なハードケースで保護してるから荒っぽい使い方しても安心、前にミスって派手に落としたけど壊れなかった。

「うわ、だれもない」

「芦名は田舎だぜ？当然だろ」

朝霧の若干煙る人通りも車通りもほとんどない市街地を安全運転で抜けていると、周囲を見渡したネイチャが呟いた。

そりや昼も夜も関係ないような大都会の東京と比べてもらっちゃ困るよ、24時間営業してる店はファミレスかコンビニくらいだつて。

でもこういう静かなのも悪くないだろ、俺はこういうところのほうが好きだ。少なくとも東京よりもずっと住みやすい。

あそこは昼も夜もごちゃごちゃで境目がないから俺としてはきつかった。前前世の時から東京は仕事する場所で、人間が住む場所じゃないって思ってたからな。

「さてと…」

町を抜けると峠道が見えてくる、いつも通り、いつもの道、でも今日は同乗者がいる。

一息入れる、せっかくターボの友達がいるんだしい所見せるってのは確かに悪くない。かつこいい従姉の姿見せてやるよ。

とりあえずできる限り全速力で、水は零さない、できる限り零さないようにいく。息を吸う、4つ数える、息を吐く。

頭の中が冷えて思考が明晰に回り始める、体の中を流れる血流と鼓動が良く感じられる気がする。

「目つきが変わった？」

「お、本気モード！」

うるさいよ。集中してんだからだまらっしゃい。

「行くぞ」

「ゴー！」

「うお！」

一速から二速にシフトを操作しつつアクセルを踏み加速、峠道に入る直前でクラッチ。衝撃を荷重移動で逃がしつつ上り坂へ。

コップは問題なし、加速も問題なし、ハンドルよし、タイヤもきつちり噛み付いた。



最初の左カーブ、インベタにきつちり寄せつつコップを見る。水が右に寄ってギリギリのところを持ちこたえている、予測通りだ。

このままハンドルを切つてるとこぼれるから、荷重移動で水を縁に沿ってくるりと回して：表面張力ギリギリのところを保って対処。

カーブが終わったらそのまま同じように衝撃を逃がしつつ、ラインを修正。車体が重いな、わずかに外にズレた。

だがこの程度なら十分対処できる、俺は内心で大きな手ごたえを感じながら次のコーナーに向かってアクセルを踏み込んだ。

## 第二十三話

朝早い芦名の峠は車通りがほとんどない、それは街の人間ならば誰でも知っていることである。

そしてそんな朝の芦名峠を我が物顔で猛スピードで駆け下り、朝からダウンヒルタイムアタックを行う走り屋の車がいるのも知っている人間は知っている。

芦名峠の走り屋ナンバー2、青いスバルWRX—STI。いつもの配達に出かけた帰りのシマカゼタービンはほぼ毎日、この朝の下りで日課として己の限界に挑むというのも知っている人間は知っている。

そんな彼女のWRX—STIは、今日はいつもよりもはるかに遊びのある楽な走りで、助手席のお客さんの痛烈な叫び声をまき散らしながら峠を駆け下っていた。

「うひゃー!!」

「うわあああ?」

後ろから楽しそうな声、真横から楽しさもかけらもないような叫び、余裕がないのが自分である。

ああうらめしや、こんなところで競争ウマ娘として鍛えた体がデメリットになるとは思わなかった。

気絶できればどれだけ楽だったろうか、こうやって正面が正面として機能していない光景を見せつけられることは一度で済んだだろうに、と。

バケツトシートの手席に身を押し付けられ、左右から襲ってくるGに翻弄され、すぐ真横までびつちりとくつつくガードレールや壁面に恐怖し、ギヤリギヤリと滑りながらスキル音を立てるタイヤに肝を冷やす。

拝啓、お父様お母さま、わたくしナイスネイチヤは今、本物の走り屋がやるダウンヒルタイムアタックを初体験しております。

(失態した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗したあっ!!)

目まぐるしく変わるフロントガラスの外の光景から目を離すことすらできず、何もかも投げ捨てた絶叫を上げながらナイスネイチャは後悔した。

登りはジェットコースターのような感覚で楽しめたのが判断の誤りだった。

本当にコップの水を一滴も零すことなく、素人目に見て分かるような攻め込みで素早く坂を駆け上っていくシマカゼタービンの運転技術には感心するしかなかった。

彼女が自称するように本業はドライバーというのは本当なのだ、前と周囲をつぶさに見まわしながら手慣れた仕草でシフトレバーを見ないで適宜操作し、両足でアクセルとブレーキ、クラッチを操作して、ハンドルをクイクイと捻って巧みに車を運転していた。

そのスピードには若干怖さを感じたが、あくまで若干でありむしろ初めての体験に興奮していたくらいだ。

それで見誤ったのだ、クライムヒルの後はダウンヒル、下り坂でも走り屋は全力で走ると聞いていたから期待をしていた。

普段は全速力で駆け下るといふそれを今日はやめとくという彼女に、つい口を挟んでしまったのだ。

『あれ、今日は普通に帰んの？』

『そのつもりだよ。お前だけならともかくネイチャも乗せてちやな…』

『えー…まあしょうがないか』

さすがに峠初挑戦であるナイスネイチャを乗せていてはやらないというシマカゼタービン、その言葉にツインターボは少し残念そうにしながらも理解を示す。

しかし期待していたダウンヒルとやらが体験できないことに残念そうなターボの顔に、内心では期待していたいつものナイスネイチャさんがついつい口を出してしまった。

『いやいや、これでもトレセン学園生のナイスネイチャさんですよ？』

多少荒っぽい運転で参るような軟な鍛え方してませんか？』

『素人にいきなりダウンヒルはきついぜ？良いのか？』

『もちろんですよ、この体験しとくのも悪くないっしょ』

『言ったな？んじゃ、ちよいと軽めに行ってみるか』

最初は余裕をかましていた、しかしすぐにそんな余裕は吹き飛んだ。

芦名峠のコースに入っていたため、彼女が小さく息を入れ直した途端、WRX―STIの挙動が明らかに荒々しいもの変わったのだ。

下り坂で、曲がり角がすぐに見える直線で、彼女はアクセルを思いつき踏み込んで加速していく。

その加速に最初は納得し、すぐに違和感を感じ、そして車内に響くキンコンチャイムの音に恐怖して、一気に視界が横を向く光景に身動きが取れなくなった。

(前で林が横スライドしてらううう!!)

横からくる強烈なG、横滑りするタイヤのスキール音、それに耐えながら正面を見れば横滑りしていく林の光景。

ハツとなって横を見れば、ぐんぐん近づいてくるガードレールとその先に見える芦名の遠景。

つまり車が絶賛ドリフト真つ最中なので、思いつき横滑りしているのである。

ナイスネイチャは初めて理解した、外から見ればドリフトする車はカッコいい、甲高いスキール音と普通ではありえない機動をする車体には素人でも息を呑むものがある。

しかし実際やっている車に乗ってみれば感想は変わる。

生きた心地がしない、普段は前に進むために地面を掴んでいるタイヤがその役目を放棄して地面を横滑りしているのだからそれだけで恐怖は倍増だ。

(お尻が、お尻が浮く、変な方向から押し付けられるうう!!)

「つてか逆、逆走!!」

「この時間なら大丈夫だよ」

「居たらタービンなら避けるからヘーキヘーキ」

「そーいうもんだい!」

バケットシートに押し付けられているのにお尻が浮いているよう

な感覚がして体が宙に浮くような感覚に陥る。

かと思えば斜め横からくるGにバケットシートに押し付けられ、体がグルグルと回るような錯覚を感じる。

ああ恨めしい、こういつた急激な変化に常に耐える競争ウマ娘にならないければすぐ気絶できたかもしれないのに。

コーナーを一つ抜けたらまたすぐに直線、当然アクセル全開で加速、そしてそのまま次のコーナーも迷うことなくドリフト。

「タービン、軽めって言ってたけどかなり手加減してる？二回ともただのパワースライドじゃん、攻め込みも駄々甘だし」

（軽め？マジで？これで軽めなの？駄々甘なの？）

「二人乗っけてんだから荷重移動の微調整してんだよ」

（攻めてすらいなかったあ!?!）

「修正できたからそろそろ行くぞ。次、2連、ドリフトからのインベタ、小手調べと行くか」

キンコン、キンコンと時代を感じる速度超過チャイムが車内に二度響く。

それにつられて、運転席のスピードメーターを見るとナイスネイチャは絶対零度の恐怖に背筋が震えた。

「超えてる超えてるまた105超えてるって!!」

「事故りやしねーよ、行くぞ」

「ひゅい…!?!」

ぐらり。

「あああああああああ!!」

峠ではやや長めのストレートでその先には右のカーブ、その遙か手前でシマカゼタービンはやらかしたような声を上げてハンドルを切った。

車体が再び横滑りのドリフト状態で滑走を始める、届かない、失敗した、事故る、そんな終末風景がナイスネイチャの脳裏によぎる。

しかし、そんな想像とは裏腹に面白いように直線をドリフトで滑り切った車はきれいにカーブを曲がった。

そしてすぐさまびつちりと左側面を壁に擦りつけるようなイン

コースに乗り、左カーブに車は全速力で突っ込む。

「ひゅっ」

シマカゼタービンの手元を見ない素早いシフト変更、一瞬のブレーキで感じる制動と同時にハンドルが切られて、急な左カーブを曲がっているのに、壁際ギリギリを舐めるようにぐいぐいと曲がっていく。サイドウインドウのすぐ外を見れば、目測で5センチも離れていない真横を風音を立てて壁面が流れる。

少しでも姿勢を崩せば壁面にこすりつけられ、ドアが削れて自分が壁面に摩り下ろされる光景を幻視してナイスネイチャは呼吸を忘れた。

「今のいい感じだったじゃん、自然とラインに入ったね」

（だ、ダメだ、わけわかんない、一体どうして私まだ生きてんのかかわかんない）

「簡単なラインだからな、これくらい弾食らってても余裕だぜ」

（これで簡単!?たま!?)

何とか理解できたのはシマカゼタービンの運転技術は明らかに常軌を逸していること、そしてそれで峠を一気に下る爆走を平気でやってのけること、それだけだ。

彼女が常にシフトレバーをガチャガチャやって、どんなテクニクを使っているのかは皆目見当もつかない、理解もできない。

しかし車はそれに呼応して、明らかに危険なスピードで下り道を車線関係なく攻めこみながらドリフトやらインベタグリップやらを連発させて最短距離を突き抜けていく。

「弾って何!?これ簡単ってどういう事!？」

「うん?前世で少々。あんな小口径弾では俺の筋肉は貫通できん!」

「前世って何!？」

「冗談だよ、ビール調べにアイルランドに行ったときちよつとな。これは機会があったら話してやるよ。」

いつもならさっきのところはもっと速く走りながらインベタで行くんだよ、ギリギリまで攻め込んでな」

「ぐい、ぐい、ぐいーん!って感じだよ!!こんなもんじゃないよね!!」

(に、人間じゃない、な、なんなのよこのウマ娘…普通じゃないよお) いくら朝であまり車が来ない時間だからと言って、いつ対向車が来てもおかしくないこの状況で平気でぐいぐいと反対車線に飛び込んで最短距離を突き抜けるその走りにナイスネイチャは恐怖しか覚えなかった。

いつ正面衝突を起こしてもおかしくない、それこそ次のカーブで出合い頭にぶつかってもおかしくないのだ。

だがそれでもタービンは平気でハンドルを切る、アクセルを踏む、そして臆することなく峠を攻めこんでハンドルを容赦なく切る。

怖い、その一挙一動が非常に怖い、思い切りハンドルを切るその姿が異様に怖い。

「タービンさあん!?!これカスタムしてるんだよねえ!!ちゃんとかつちりきつちり峠仕様なんですよねえ!!」

「弄っちゃいるが基本は純正パーツが主だよ、足回りとかラリー用クロスマッシュンとかは親父の真似てるけど基本は純正の再現だな」

「はあ?」

純正、ノーマル、つまり調整はしてあるけどよくある社外品も使いまくる極め切ったチューンではないという事。

つまりこの車は販売会社が出している対応部品のみを使用して仕上げられている普通のスポーツカーである、ナイスネイチャはそう考えた。

「下手に社外品を入れるより、メーカーのハイグレードパーツとか対応部品を入れてるほうが俺には合うんだよ。」

その分きつちりチューンもするぞ? 手間暇かけると一見性能が芳しくない部品もいい味出したりするんだ」

「高橋の兄ちゃん達も不思議がるカスタムというかチューニングだよね相変わらず。タイヤも普通のノーマルだし」

「高いのが悪いわけじゃないんだが結局これに落ち着いちゃうんだよな、まあ安いし替えが利くしタイム出るしで満足してるよ」

「タービンってそういうの多いよね、エアガンでも飾ってる時はごてごて付けるのにサバゲだとサイト付けるくらいじゃん」

「いざ使うとなると結局サイトとグリップ付けるだけでいいやってなるんだよねえ、そのほうが当たる」

「わああああ!?!じゃべりながらなんでもうごかせるううう!!?」

「まだまだライン取り攻めてないしね。あ、次インベタドリなんてどう?」

「伊達にこの峠で慣らしちゃいねーぜ? いいねーやってみよかー」

「あんぎやああああ!!?」

心臓に悪い、体に悪い、精神に悪い、とにかく悪い、ナイスネイチャの脳裏にはそれしか浮かばなかった。

今もシマカゼタービンは気楽に笑いながら右コーナーをインラインギリギリにまで幅寄せしながらドリフト走行で曲がってみせたのだ。

いつ事故を起こしてもおかしくない、笑った拍子にハンドルを少し切り損ねようものならばすぐに頭からガードレールに突っ込みかかない挙動だった。

そんな挙動の車と一緒に乗りながら、ターボは全く気にせず朗らかにニコニコ笑って楽しんでいる。自分がこんなに余裕がないのにだ。  
「んく…?今のはキレ良くないなあ、車体が重い。ターボ、お前太った?」

「何を?!ターボデブじゃないもん!!タービンの胸がおつきくなったんだよー!」

「で、でかくなってねーわ、90だし?」

「それ去年の身体測定の数値でしょ。タービンの胸なんだから…96?」

「ぬぐう!」

「うひい!?!なんか変な風に捻ったあ!!?」

「やつぱりサバ読んでた、タービン気にしすぎなんだって。どーせおつきくなる子はおつきくなるんだよ、小太郎もそうだったじゃん」  
「あいつみたく背丈だけならな。こっちは胸が余計なんだよ、ブラの出費がシャレにならねえ」

「まーまー、その分モテるといふ事で一つ、サバゲの時もみんな見てた



「じゃーん？」

「うるせー！乳しか見ん男なんぞ興味ないわい！！仕方ねえだろ、乗っちゃまうんだよ、でもプレキヤリとか相性悪いんだよ仕方ないじゃん。だいたいブラさえ壊れなきやハイグレードブレーキとガスブロAKMの両方がお迎えできたつてのによ。」

「よりにもよって走り用のが壊れやがったんでAK諦めるしかなかったんだよ、あれプロ用で高いんだからな？」

「あ、ブレーキも高グレード品にしたんだ。AKMなら買ったから貸してあげよつか？」

「いらん！ファイナルズ予選の賞金でリグ含めてフルセットお迎えするんじゃない！速攻サバゲに持ち込んでやるぜ！！」

「おー大豪遊、ターボまだ予備マグ買ってないからまだ投入は先だし…お揃いでやろうー！」

「お、いいねえ！」

「な、なんであんたらはそんな平気なんだああ！！」

手足と車の挙動は明らかに異次元なのに平気で世間話と悪ふざけに興じるこのクソウマ娘どもに、ナイスネイチャは思わず悪態をつきかけた。

内輪の話で盛り上がっている上に、あのターボが余裕の表情でスマートフォンを弄って音声を流し、それに突っ込みをいれるタービンに殺意が湧いたともいう。

尤も、そんな気持ちは自分が今走っている緩い右カーブの道に気付いて一気に沈下してしまった。

当然ながら車の加速は止まらない、この先は急激な角度で訪れる左カーブである。それなのにタービンはその遙か手前でハンドルを切って車体を右に傾かせた。

「ひえー！」

自然と右に傾いてドリフト状態に入った車体は右に傾いたまま滑走していく。

車の後部が左に流れて全部が右のドリフト気味に流れ、そのまま一気に左カーブに向けて突っ込んでいく車の姿が脳裏に過ってナイス

ネイチヤの意識は遠のきかけた。

「うわわわわああ…ああ」

左カーブに入る直前、シフト操作とブレーキング、アクセル操作が同時に行われ車体が一気に方向を変え左ドリフトに。

その急激な変化と襲い掛かる慣性にナイスネイチヤの視界は真っ暗になりかけ、横滑りする前方の風景に一気に引き戻された。

「あんぎやああああ!!?」



「朝から大変な目に遭ったわ…」

「油断したお前が悪い」

「なんも言えねえ…さすがモータースポーツっていうだけありますわ、Gがすごいなのなの、揺れるし、きつついし…ブライアンさんはなんか訳知り顔だねえ？」

「前にマルゼンスキーのドライブに付き合わされてな。首都高で振り回されたんだ、あの時は私も生きた心地がしなかった」

「マルゼンスキーさんはああいうのしない人だと思ってましたけど」  
「あいつは素でスピードを出すほうなんだよ、高速なんかに乗ったら好き放題にかっ飛ばしやがる。」

それにあん時はブラックバードとかいう走り屋を見かけてテンションが上ががちまって…他言無用だ、その日は姉貴と一緒に寝た」  
時は過ぎて日中、瀬名酒造の1600メートルトラックの片隅にあるベンチ。

早朝の顛末を聞いたナリタブライアンの容赦ない切り返しに沈むナイスネイチヤであった。

## 第二十四話

二人のウマ娘がコースを走っている。その速さは極めて普通、よくある練習走行と変わらない。

よく整備されたトレセン学園のウッドチップコースやダートコースとは比べるまでもない土のコースであるが。

先頭を経験者の先輩が走り、その走りを見ながら後輩の新入りが走って走り方を学ぶ、それと同じようなものだ。

言葉にすれば簡単だ、しかし詳細を知らなければきっと知る人は目を？くだろう。

後方を走るは日本ウマ娘トレーニングセンター学園のジャージを着たナリタブライアン、言わずと知れた一番新しい3冠ウマ娘。

先頭を行くもう一人は県立芦名高校のジャージを着たシマカゼタービン、実家が酒造を営む一般校に通うごく普通の一般人。

シマカゼタービンが先行し、ナリタブライアンが後ろからついていくそれは知る人が見ればちぐはぐだ。はつきり言ってしまうばかり得ない。

そして何より、走りに余裕のあるシマカゼタービンと明らかに余裕がないナリタブライアンのそれは異常事態だと思わざるを得ないだろう。

それは走りに対する余裕とフォームからも見て取れる。二人はそれぞれ瀬名酒造で練習用に使われているスメルシユリグと呼ばれる装備を身に着けていて、ある課題を背負って走っている。

その上でシマカゼタービンは余裕のあるスタイルで先頭を走り、ナリタブライアンを気にしてもいる。

対するナリタブライアンは余裕もなく走りにくそうにシマカゼタービンの後ろについて行っている。

ナリタブライアンが走りにくそうなのは装備のせいではない、課された課題が問題なのだ。

しかしそれを見て騒ぎ立てるような人物はこの瀬名酒造の練習場には誰一人としていない。

ダートでも芝でもない土の1600メートルトラックを使っているのは自分たちだけだ。

先に走ったナイスネイチャとディープインパクトはドキドキはらはらとした様子でそれを見守っており、ツインターボは熟知り顔でどんと構えて誇らしげである。

そして二人のトレーナー、東条と南坂は映像とデータを収集しながら何度も頭が痛そうな顔をして顔をしかめて、目を丸くして、何か言いたそうにしながらそれを呑み込む、そんな百面相を続けている。

(いや、それは私も同じか)

普段見られない自分のトレーナーの姿に少し面白いと思ったシンボリルドルフだったが、自分も同じ顔をしていると感じて頭を振った。

それだけ目の前で行われている練習は異常なのだ。彼女たちはただ走っている、というわけではないのだから。

二人がトラックを一周して戻って来る、ハラハラした様子のナイスネイチャたちの前を通過してクールダウンしながらゆっくりと速度を落とすナリタブライアンと、それよりはるかに短い制動でありながら滑らかに速度を殺すシマカゼタービン。

汗一つかいていない彼女はスメルシユハーネスの腰についているポーチの一つから砂糖棒菓子を詰めた青い紙箱を取り出して一本啜え、ナリタブライアンが戻ってくるのを待った。

いつもよりはるかにぎこちない様子でナリタブライアンが戻ってくると、見守っていたナイスネイチャとディープインパクトが彼女に駆け寄る。

一方で、シマカゼの方にはツインターボが駆け寄ってぴよんぴよんと飛び跳ねながら彼女にじゃれついていた。

「ブライアン先輩！手ごたえはどうですか!!」

「ああ、できる限りはやった。あとはもうどうにもできん」

「うへえ、あのナリタブライアンさんにこう言わせちゃうって…やつ

ばこれ狂ってるんですね、つまりあたしたちがダメだったのも当然と」

「どうだかな」

ナリタブライアンは慎重に後ろ腰のプットバックに手を入れると中からパンパンに膨れ上がったペットボトルを取り出す。

それを見てナイスネイチャとディープリンパクトが咄嗟に離れると、彼女は無造作に開栓して勢いよく噴出した水の水しぶきを浴びた。

それを見たシマカゼタービンも、自分のプットバックから炭酸水の入ったペットボトルを取り出して、それをナリタブライアンに渡す。

それを見て苦虫を噛み潰したような表情をナリタブライアンはしたが、一息ついて勢いよく栓を開けた。

一度勢いよく炭酸が抜ける音がして、中の液体が気持ちよく泡立ち噴出せずに発泡する様子を見てナリタブライアンは声に言葉にならないうめき声を上げた。

彼女たちがお互いに背負っていたのは炭酸水が入ったペットボトルで、それを揺らさないように走って一周回ったところで開栓、それで炭酸がすべて抜け出なかつたら合格という瀬名酒造では一般的なしい酒造の練習方法だ。

結果は言わずもがなだ、これまで挑戦したナイスネイチャとディープリンパクトは失敗、ナリタブライアンと同じく頭から噴出した炭酸水を被った。

ナリタブライアンのペットボトルに残った元炭酸水にはかろうじて細かな泡がわずかに残っているが、その横で元気よく発泡するシマカゼタービンのペットボトルに入った炭酸水があつてはもはや無いも同然である。

悔しそうな視線を自分の元炭酸水に落としたナリタブライアンは、ペットボトルに残った少ないソレを一気に飲み干した。

「まずいッ…」

「ブライアン、別に飲まなくてもいいんだぜ？」

「これは敗北の味だ、タービン！次だ!!」

「へいへい、ならやる事分かっただろうし今度はまとめてやろうか？」  
再挑戦するナリタブライアンを見てやれやれと肩をすくめるシマカゼタービン、シンボリルドルフはやはり自分の目には狂いはなかったと実感していた。

「ルドルフ、あなたから見てどう思う？」

「未恐ろしいですね」

それは正直な表現であった。シマカゼタービンの仕上がりはまさに、今までの常識を根底から覆しかねない怪物ぶりといえたのだ。

これは瀬名酒造で行われている日本酒の仕込みをするのに大切な感覚を養うための初歩的な練習であり、根本はレースのそれとは全く違う技術を養うための練習だ。

シマカゼタービンはそれを峠レースに応用し、身に着け、完璧に使いこなしている。

彼女が何の気なしに行っている完全な重心制御、ウマ娘レースを走る者として自らの体の重心を制御してフォームを矯正するなどといったことは当たり前前の技術だが彼女の技術はそれだけではない。

彼女のそれは制御するだけでなく自由自在に操りながら走る、走る衝撃も何もかもが彼女の手中にあると言える。

彼女曰く『荷重移動』と呼ばれる技術で自らの重心を細やかに移動させられるほどに完璧な制御を行って走っているというが、それだけでは説明がつかない。

そして走ればそれだけ体を痛めつける振動を制御する技術にもそれをかみ合わせ、自らの体に走る振動を制御し、振動の抜ける先までも自在に操る。

その気になれば、彼女は水を張った大きな盃を片手に持ったまま水をこぼさずに走ることができる。実際、彼女は最初にそれを頭の上に乗せた状態でやって見せ、自分たちにやらせようとしてきた。

無茶が過ぎると断ったときの彼女は心底不思議そうな顔をしていたが、彼女の中では中央トレセン学園生とはどんな存在なのだろうか。

「それにこれが彼女の全てというわけじゃない、あくまで一部でこれ

なのでしよう？・南坂トレーナー」

「ええ、ターボさんの言うことがすべて真実であったならばですが：昨日のことがありますから」

「目の付け所も知識も想定以上：これ以上に怪物、と考えるもよさそうね」

それも一端に過ぎない、シンボリドルフとて彼女の秘めたポテンシャルをすべて見抜けたわけではない。むしろのぞき込めばのぞき込むほど、底が見えないとすら感じていた。

バカバカしい、あり得ない、狂っている、常識的なトレーナーならばそう断言する自己流トレーニングをケロッツとした顔でやり切るのが異常でないはずがない。

実際に見てしまえば今まで培ってきたレースの経験から見えてしまうのだ。彼女はまだまだ本気で走っていない、まだまだ天井知らずの上がある。

現に彼女が日常的にやっているという練習にナリタブライアンたちは全くついていけないのだ。

末恐ろしいとはこのことだ、一体何が彼女をここまで鍛え上げさせるにまで至ったのか。

家族のサポートがあつたとはいえ、知人の件で多少地方トレセン学園に縁があつたとはいえ、ほぼ独学ですべてを学んで自分で今の彼女を鍛え上げた。

その結果、彼女は模擬レースとはいえディープインパクトに、エルコンドルパサーに、グラスワンダーに、そしてナリタブライアンに勝ってみせて実力を見せつけたのだ。

その理由を彼女はただ走るのが好きで、峠レースで勝ちたいから趣味で鍛えたただけだと気楽に嘯く。普通に考えれば信じられないことだ。

「くそツ：タービン、お前本当にズルしてないんだろ？」

「はっはっは、そんなもんブライアンがよくわかってんだろ。俺の尻見て走ってんだからよ。何ならほら、また調べてみるかい？」

「いい、尻を突き出すな」

「俺から言わせりゃ、こんなのできなくて当然なんだぜ。こいつはお前さんたちみたいなアスリート向けの練習じゃねえしな。」

むしろできたらくこつちがどんな顔すりゃいいんだってレベルだ、俺が自信無くしちゃうぜ?」

「だがこれでお前は鍛えてきたのだろうか?何かコツでもあるのか?」

「コツ?強いて言えば経験だな。うちはどんな名人でも最初はこういう補助も何もないヤツから始めるんだ。」

最初から良い装備使おうと最新装備の本当のありがたみってのが解らねえし、扱いても今のヤツは結構難しかったりするから未経験者にや扱いきれんのよ」

「こつちの自信が揺らぎそうな話だな」

「そう言われてもねえ…うーん。じゃあ、ちよつと偉そうなこと言わせてもらおうけど良いか?」

「遠慮などいらん、お前らも聞いてみたいだろ」

「おうわッ!?いつの間に背後に回り込みやがったお前ら!?…ディーブ、なんだその怪しい手」

「前よりおつきくなってるらしいから計測を」

「おま!?!あからさまに胸狙ってんじゃねー!」

いかん、完全に乗り遅れた。いつの間にかシマカゼタービンの後ろに忍び寄ったディーブインパクトたち3人とシマカゼタービンのじゃれあいに思わず愕然とした。

何やらシマカゼタービンが率直に自分たちを見た感想を言おうとしているらしい、それは聞いてみたい。

「つたく、好きでデカくなったんじゃねーっての…じゃあ、ま、遠慮なく言わせてもらうが、あくまで酒屋と走り屋としての意見だ。信じるかどうかはご勝手に。」

まずブライアンもディーブもナイスネイチャも、もちろんターボもだが、まだまだ自分の体を扱いきれてねえな。実力が出し切れてねえ」

「それは聞き捨てならないわね、一体何が不足しているというの?」

「うわ、そんな顔しないで下さいよ東条さん。説明しますって、まず前



置きするけどみんなウマ娘のレースに関しちや一流だ。

そりや見てりや分かるさ、さすが天下のトレセン学園生だよ。さすがは中央、相変わらず魔境だねえ。

レースに関する体の動きは頭ん中に叩き込んだんだ、踊りで体も磨き上げてる、見れば見るほど最高の仕上がりだよ。

本題はお前らが思ってる以上にすごいスペックを体が持つてることね、間違いない。ただそれをまだ活かしかれてねえんだよ」

「んん？タービン、それどういう意味？」

ツインターボが首を傾げてシマカゼタービンに問いかける。

「お前がピンとこないでどーすんだよ、散々親父が教えてくれたじゃねえか。そうだな…ちよいとズレるがクイズでもするか。

例えば新品ノーマルのS13をカスタムするとして、スピード上げたくて単純に性能のいいターボを車に組み込んだとする。どうなるよ？」

「スピードが上がるのでは？」

「あーなるほど、違うよトレーナー。タービンが言いたいのはね、スピードは上がるけど全体のスペックが生かしきれてないって言うてるの。

他の箇所がノーマルのまんまでパワーアップになってるから他の部品への負荷が大きくなるし、調整不足で摩耗も早くなっちゃうんだ」

東条と南坂の表情に緊張が走り、眉間にわずかに皺が寄ったのをシンボリルドルフは見逃さなかった。

二人の脳裏には親しいトレーナーの担当ウマ娘達の姿が過つたに違いない。

彼女が何気なしに言うそれには、彼女たちに符合する点がいくつもある。

「そういうこった。短期的にはそれで走れてもすぐにほかの場所が悲鳴を上げちまう。走行中に部品が大惨事確定、破損個所で暴れて最悪廃車だ。

だから、カスタムするなら必ずフルメンテも込みでやる。組み直し

た部分を軸に全部だ、細部の細部まで全て組み直して、愛車の全部頭の中に叩き込んで何度も試走して初めてフルスペックで振り回せるのさ。

ウマ娘だって同じ、そりゃトレーナーさん達も重々承知だろうからそうならないように訓練はしてんだろう。

だからお前たちは制御できてる、使いこなせてもいるさ。でも微妙にズレてる箇所がいくつもあらあな。

じゃあどうすんだって話になるがこれもまた曲者さ。こういうことは突き詰めても突き詰めてもキリがない、正解ってもんはどこにもねえからな」

「それは…まあ、ねえ？」

「ネイチヤは心当たりがあるようで。車のそれとウマ娘のそれは意外と似通っててな、下手すると体のスペックに肉体が付いて行かんのさ。

で、似てるといったが全部同じじゃない。車は部品を変えてきつちり調整すりゃ解決できる、機械だからな。だがウマ娘はそうじゃねえ。

足首、膝関節、あるいは骨そのもの、挙げればきりが無いがそういうところはなかなか鍛えられるもんじゃない。

無論対策できないわけじゃないが、ホイホイできるもんじゃねえや。それこそ長い目を見てすり合わせにやららん。

それに生まれ持った性質ってのもあるし、調子いいからってついついケアを怠っちゃうこともある。

それにレースじゃ時間も敵だ、クラシックレースとかはついついそうなっちゃう連中も多いだろ。地方も同じだしな。

ましてや伸び盛りの時なんか、ガンガン走ってどんどん強くなる。そうなるについ全部強くなったと思っちゃってやりすぎる。

もちろんそういうわけじゃねえからついつい力を入れすぎちまって弱い所がぼつきり、なんてよくある事さ。

お前さんらほどになったらそんなことは万が一にもないだろうけどな」

「…なんか、随分手慣れた感じですね」

恐る恐る、という雰囲気以南坂トレーナーが口を開く。当然だ、彼女の年齢に対して語るウマ娘に対する知識はあまりに乖離している。その言葉には多くにウマ娘達を育て上げ、知識を授けてきたトレーナーのような説得力があった。

自分が担当するウマ娘よりも少し年上なだけの、まだ18歳の少女がそんな言葉を発しているのだ。トレーナーとして感じる違和感は半端なものではないだろう。

そんな恐怖が若干混じる視線を向ける彼に、シマカゼターピンはなぜか突然立ち振る舞いを正し清楚なお嬢様然とした立ち振る舞いで答えた。

「瀬名の娘を名乗る以上これくらいは当然です、南坂トレーナーさん。こう見えてウマ娘と酒造の知識には自信があるんですよ。」

瀬名酒造は古くは戦国時代よりも前からこの芦名でウマ娘と共に生きてきた老舗、当然ながら先祖より長らく培ってきた技術と知識には自信があります。

伊達にウマ娘と長い時間を過ごしてきたわけではありませんからね、もうこの会社の歴史そのものに染みついていようなものです。

私はその一部を継承しているだけにすぎませんよ」

「でた、お嬢様もーど。相変わらずキモい」

「ははは…俺もそう思う、吐き気するぜ。よそ様には受けがいいんだから世の中は分かん」

「何も知らない人限定だけどね。地元だど？」

「キモイ変態」

唐突にお嬢様然とした立ち振る舞いをしたシマカゼに、ターボが当然のようにツッコんでそれに彼女も同意する。

その光景に二人のトレーナーの眉間に固まりつつあった皺がほぐれた。

「こう見えて会社じゃ教える側なんで慣れてるんです。ま、ただ仕事柄なだけですよ。」

それに所詮は部外者の勝手な感想、うちはあくまで走り屋やってる

ただの酒屋の小娘ですんでね。気にする必要はありませんや」

「いや、なかなか興味深い話だ。そういえばお前の走りはどれも無茶苦茶に見えて、きっちり制御できている類だったな」

「できてなきや酒は造れねえかな、ポーターズギアだって精密機械で扱い要注意だから結構気を使うんだ。これもまずは体にしみ込ませないと話にならん類だぜ」

「難しいよそれ、タービンなんか案ない？」

「こういうのに近道はねえんだぞ、ディープ。あ、いや…ギアの方も試してみるのもありか、お前なら壊さんだろうし」

「あれ？会社のは使えないんじゃないか？」

「ターボ、自前のがあるからそいつなら構わんさ。社用のは違うけど大体の感覚なら共通してる」

「でもお高いんでしょ？」

「ミリタリーグレードなんで結構なお値段ですよ、ネイチヤさん」

「隙あり！って痛つたい手がああ!!」

「簡単に採めると思うなよ小娘があ」

(…惜しいな)

本当に惜しい、シンボリルドルフは目の前でディープリンパクトに絡まれるシマカゼタービンを見ながら心の底から思った。

きっと彼女が本気でレースに挑めば、自分が届かなかった世界の頂にも手が届くかもしれない。

こんな逸材を見せつけられてしまったら、たとえ一度は納得しても未練がましく考えてしまう。

彼女は日本ウマ娘トレーニングセンター学園に通うべきウマ娘だ、中央のトウインクルシリーズに、クラシックにそして世界へ挑戦すべきウマ娘だと。

押しつけといわれても構わない、それだけ彼女の持ちうる才能と実力は凄まじいものがある。

瀬名酒造という長い歴史を持つ家で培われたウマ娘に対する深い知識と思考、そこから見出される技術が彼女の中で渦巻いている。

それをこのまま田舎の片隅に放置するのはあまりにも無駄遣いだ、

彼女はもつと大きな舞台で輝ける存在なのだ。

そんな才能を持ちながら、公式のレースにまったく無関心という彼女の本心を知ってしまったから余計に齒がゆい。

友人や従妹がレースの世界に足を踏み込んだからこそ多少知っている、本当に彼女の中ではそんな自分には全く縁のない遠い世界の扱いだ。

彼女の中で今一番大切なのは家族と会社、峠レースと車、ウマ娘レースに順位があるとすれば最下位どころか順位外である。

彼女はそれを自ら望んでいる、だが本当にそれでいいものか、それで終わらせていいものか、シンボリルドルフは胸の奥に何かがつつかえて拭えないのだった。

## 第二十五話

バムバムバム、と右手でバスケットボールを弾ませながら機を伺う。

自軍ゴールポスト側のコートに片隅に追いやられ孤立無援、クラスメートはガタイのいい相手チームの男子に阻まれ向こう側。

向こうは4人、こっちは1人、おまけに今日も糞暑い。

夏、正確には7月、ついにこの季節が来ましたファツキンジャパニーズサマー。ウマ娘にはなかなか辛い季節です事よ。

もしトレセン学園生なら夏合宿みたいな感じで海とかいろいろ行くらしいが、こちらは普通の高校生活3年生、勝手知ったる学校で夏休み前の気の抜けたラストスパート真つ最中。

期末試験も終わったからいろいろ気楽なんだが…やつぱり体育の授業だけはどうかやってもきついのですわ!!

体育館内とはいえこの炎天下、窓全開で扇風機が回しにしてもこの蒸し風呂状態。

しかもでクラス対抗バスケットボール2時限ぶつ続けときたらもうね…地獄!!しかもホント、こいつら容赦ないし!

「ちっ…少しくらい手加減しやがれ、3組バスケット部ひとまとめとか大人げねえぞ」

「悪いが容赦はしない、俺たちにもプライドがあるんでな」

「バスケット部が帰宅部にバスケットで負けてちや恥つてもんよ」

「舐めてかかってちやそれこそ赤っ恥なんでな、授業でも本気で狩らせてもらおう」

威勢は良いけど普通に弱い者いじめだかね。特にリーダーのデカブツ、お前はエースのスタメンで全国クラスのバケモンだろがい!! くっそー、こいつらプロになるためにガチでやってる連中だから本当に強いんだぞ。

いくらウマ娘スペックとはいえさすがに分が悪い、まあそれで諦め

るほど俺も往生際がいいわけじゃねえけどな。

じりじりとすり足で立ち位置を調整しつつ、踏み込みのフェイントを作って隙を伺いながら周囲を一瞥する。

ブロックはいまだに分厚い、バスケットの後ろも3組の運動部連中が固めて味方の行動を逐一けん制してやがる。

加減してやれよ、このチーム俺以外みんなスポーツはあまりやっつけないインドア系、吹奏楽とかそういうのだぞ。

「！」

「くっ!?!」

様子を伺いながら立ち位置を変えてたら突然デカブツが低姿勢で突っ込んできやがった。んなろう!こいつ、俺の下準備に気づきやがった。

もう少し立ち位置変えてそれとなく相手の配置を誘導しようと思っただのによお!

「手加減しやがれマジでよお!!」

「俺たちすら誤魔化しかける奴に手加減できるか!」

咄嗟にそれを躲して、デカブツの間をすり抜けて前に出る。すると俺の前に二人バスケット部がブロックに出てきた。

1人は一瞬ブレーキングしてタイミングを外して躲し、修正してきてもう一人はワンステップ入れて体を回転させてスピンスつつ避けて躲す。

これで3人、しかし3組のバスケット部はもう一人…ん、見つからないだど!?!見失った、ならばこのまま行くが良し。

このまま突っ込んで一気に前線を押し上げてチームを再編して立て直———気配!胸の下だど!?!

「しまった!!」

咄嗟にボールを掴もうとするが、その手が空を切る。いつの間にかボールは奪われていて、俺の胸の下にある死角から小柄な男子が俊敏な動きで俺の脇をすり抜けた。

こいつ、俺の視界の死角の中に隠れてやがった…なんて空間把握能力だ、しかも音も紛れさせてがやったな!?! 忍者は小町とダイオーで

十分だぞ!!

「下への視界の狭さが命取りだぜ、タービン!!」

「やれ!園原!!」

「させるかよ!!」

踵を返してゴールに向かう園原の後ろを負う、追いかけないわけがないのは向こうも承知の上なわけで：邪魔だぞデカブツ!!

「どけやゴリラ!!」

「させん!榊、小面原!!仕掛けるぞ!!」

「合点!!」「おうさ!!」

「ジェットストリームアタックだど!」

この場面でまさか、ブロックしつつ反則ギリギリを攻めに掛かって来るなんてグレーゾーンを!?

「ぬう!!」

でかい体を広げたゴリラを躲し、その後ろの榊をよけ、その影を利用して死角からブロックをかけてきた小面原をギリギリ抜ける。

それを見てゴリラが、黒星が不敵に笑った。

「勝ったぞ」

ズンツ!!とゴールポストのほうから重苦しいボールの跳ねる音。そして金属が上げる悲鳴。

見ると、ゴールポストに俺からボールを奪った園原がぶら下がっていて足元でバスケットボールがバンバン勢いよく跳ねていた。

おいおいおいおいダンクかよ、ナイスシュート。



「暑い」

「そうね…」

結局試合はそのあと膠着、2-0で俺たちの負けになりました。まあそれで何がどうってわけじゃないけど、やっぱり悔しいよね。



今はチーム交替でコマツのチームが2組の連中相手にやっているのを見学中。コマツの野郎、ちよこまかちよこまかしてて動き出すとなかなか捕まらない。

「ぬう……りやコマツに何言われるか分かんねえな、負けたし」

「いや、むしろバスケ部相手に2点しか取られてないとか奇跡でしょ。うちはお前以外運動神経いいのいないし」

「みんなBチームに集まっちゃったとはいえお前だってそれなりに動けんだろうが、散々先生に絞られてんだろ？」

「バスケ部とゲーム制作部を一緒にしないでくださいませんか？あんなガチムチ類人猿どもと張り合える方がおかしいっすよ」

「お前らダンスで鍛え上げてんじゃん、知ってんだぞ」

「なんのことやら」

「プールで晒しといて誤魔化せると思うなぼっちゃりマツチヨ」

そっぽを向く丸顔眼鏡な男子クラスメートに呆れた視線を送りながら体操服の胸元をパタパタさせながらため息。

「いやね、本当もうね、暑いよ。さつきまで滅茶苦茶走り回ってたからもう余計にさ。」

女になって幾星霜、何度経験してもこの蒸し暑さには辟易する。ただでさえ汗っかきになってるというのに、おかげで体操服がびっちりしてるとみたいに張り付くんだ。

「信じられるか？これ、胸のせいでワンサイズデカいのなんだから？それなのにもしろ小さく見えるくらいなんよ。」

「おかげで谷間が蒸れる、それはもう恐ろしいレベルで汗が溜まる。」

「エロいとかそんなもん飛び越すレベルでな。」

「ま、暑いけど平和になったからいいんじゃないやね？」

「お前までそれ言うか、せっかくのチャンスだったじゃん。お前らしいけど」

ま、平和になったっていうより平和に戻ったというほうが正しいかね。トレセン学園からのスカウトは正式に断って、全てが収まるまでひと月くらいかかったもんな。

断ったら断ったでまた変な連中が生き生きしだしたんで学校は殺

気立つし、生徒が追っかけ回されるで大変だったぜ。

ま、最後はブチ切れた群馬県が本気出して一番やらかした週刊誌の出版社を見せしめにぶっ潰して収まったけどね。

確か前世でもぼろ糞にされてなかったっけ？ いやあ叩いたら出るわ出るわ黒い埃：最後は群馬県警スペツナズまで突っ込んで大手柄だ。

雅孝さんとオニカゲさんが呆れてたよ、どんだけやればこうなるんだとかなんとか、もう出るわ出るわ。

でしかもそれ見つかるたんびに発狂してもう同じ人類とは思えない暴れっぷりしてたらしい。

さすがに大手週刊誌と言えど地方自治体が共倒れ覚悟で突っ込んできたら轢き殺されるしかないわな、お得意の言論のなんちゃらも先に手を出したのがあつちなのは周知の事実だから呆れられたただけだったし。

「俺はトレセンなんかよりここのほうが好きだね。だってあそこ女子校だぜ？俺には向かんわ」

トレセン学園の進路外してた理由にはそれもあんだよな。なんと  
いうか、いくら今は女でもあの女子校特有の空気感が合わなかった。

ウマ娘のレース専門校とはいえねえ：俺としては女子校って空気がいささか違和感強いわけで、少し滞在とかならまだしもしばらくそこに住むとかたぶん無理。

慣れ云々じゃなくて根本的にダメっぽいんだよなこれが、ストレスに強い自信はあんだけど特定の条件が重なると途端にダメになるっぽいんだわ。

長期海外旅行とか紛争地帯とかなら余裕なんだけど：不思議なものよな。

「それにトレセン学園って学歴的にはあんまりメリットがない」

「あー：就職率的にはトップ層だけどどえらい偏りしてるってこの前テレビで言ってたな」

あ、それ俺も見た。学校教育に関する討論会でトレセン学園が例になって話題になったんだよな。

学校が生徒を使ってお金儲けしてるのも現代社会的にどうなのか？とか伝統は否定しないしあるのが当たり前だけど現代教育的にちよつと考えるべきでは？とか。

まあ中学の頃からレースの世界に飛び込んですごい時は世界にも飛び出していろいろやるのがトレセン学園なわけで、もうあそこは完全な別世界。

そこにばつちり順応して堪能して浸ってりや、いきなり娑婆に放り出されたら悲惨なことになるわな…というかそうなりかけてた奴二人知ってるし。

就職率に関する中央の印象は学校教育者の中では専門学校の括りになってて、そこらへんは地方トレセンのほうで格上だって言ったな。

就職率は良いけど業界がレース系か舞台系とか、あるいは専門職に偏りまくってて一般業種とか別業種になると途端にランクが落ちるとかなんとか。

一般企業だとむしろトレセン学園卒業生って厳しめ判定するらしいし、6年間か下手すりやそれ以上学園生活だから一般常識がやばい奴もいるそうな。

対する地方トレセンはコンスタントな高進学率、高就職率を維持してて一般企業からの受けもいい。

運営のNAUがそこらへんは軽視しないで学園として教育と生徒指導にきっちりテコ入れして重視してたからな。

「会社を継ぐとしたらちよつと方向性違うってか」

「いや、それは関係ないな。そもそも跡継ぎは兄貴だ、俺はその下で職人やるんだもん」

社長なんて柄じゃありませんことよ、私は前世から一端の酒の匠、せいぜい部長程度がお似合いですわ。

部下の面倒を見るのは別にいいけど社長になんてなったら社員全員の面倒見なきゃならんじゃん、そんなに懐は大きくありません。

「おいしいよなあ、中央なら東京じゃん。大都会だぜ」

「大都会なんてそれこそお断りじゃねえか。東京は遊ぶとかならない

けど、生活するには騒がしすぎるんだよ。忙しないといふかなんといふか…」

大都会だけあって良い物はいっぱい売ってるし集まってるから、理由があつて少し行くならむしろ好きなんだけどね。用事済ませて買うだけ買ったら即帰りますよ。

「田舎者には田舎が一番つてか、お前が言うつと説得力あんな」

「なにより峠がない場所なんて住む気はない」

「結局そこかよ、ところでお前女嫌いつてわけじゃねえのよな？」

「女が嫌いで女ができると思うか？ほれ」

これ見よがしに胸を強調するポーズ、我ながらエロイと思う。なのに隣のあいつは白い視線、容赦ない！

「やめーや、誤解される」

「なんだよもー、つれないな。一緒に18禁コーナーで悩んだ仲じゃねーか、もうちよつといい反応しろよ」

「エロ本コーナーでガチ悩みする姿を見たらそんな気などおきんわ、見つけたこつちの気にもなつてみる」

「え、同志発見」

「ニヤツと笑つて手招きするお前に聞いた俺がバカだった」

ほつほつほ、伊達に人生2度目：いやウマ娘だし前世馬だし、まあいろいろ3周目か。伊達に経験豊富つてわけじゃねえことよ。

いやはや、本屋の18禁コーナーの暖簾前で迷つてるこいつ見たときはもう初々しくてねえ。ついついかっこつけちゃったわけよ。

あんなの堂々と入つちまえばどうつてことないつて、入つちまえばこつちのもんだしな。

「そーいやこの前の新作、もう読んだのか？お前が好きなヤツの2作目だろ」

「まだ途中だよ…芦名高校の美少女ランキング1がこれつて…ほかの学校の奴が知つたらどうなる事か」

「もう3だよ、こーうだから3位なんだろうがよ」

どこにでもある校内の美少女ランキング、男子学生が勝手にランク付けてる奴だが俺もそれはよく聞いてた。

ちなみに現在の順位1位はテューダーガーデン、2位クイーンベレー。こいつらが入ってくる前は俺がなぜか1位だった、理由は知らん。

この世界の顔面偏差値、ウマ娘っていう美少女因子が仕事してるせいか無駄に良くて前世並みにひどいブスとかまず見ないのにおかしな話だ。

多少丸っこかったり、特徴があっても普通に可愛いレベルだったりするの。

確か去年なんか美人生徒会長がいいとかいう理由で生徒会に推薦されたっけ。俺なんかが無理なんで辞退したが。

「真実つてのはつらいな、巷で評判の走り屋姉御の中身はこんなオヤジか」

「別に気取ったり繕ってるわけじゃねえんだけどな…なんでそんな評判なんだか俺も不思議」

「…走ってるときはかっこいいのにな」

「なんか言ったか？」

「走り屋は最近どうなんだよ、走り屋連中が最近よくやりあってるってほかの学校の奴らが言ってたぞ？」

あ、それね。

「レッドサンズが方々に喧嘩売ってる、群馬内のコース、全部レッドサンズで塗り替えるってよ」

「なんだそりゃ、随分デカく出たじゃねえの。レッドサンズって赤城のガチじゃん」

「この前は秋名にちよっかい出してきたらしいぞ」

「お隣かよ、予行演習か」

だろうな、もしくはちよっとした威嚇って所か。芦名と秋名は近い分、互いに仲がいい。池谷先輩たちがこつちに来る事もあれば俺もたまにあつちで走ることもある。

秋名の連中は俺たちと一緒に基本的にエンジョイ勢だから実力もほどほどだ、正直レッドサンズ相手には手も足も出ないだろうな。

面白いことにそこに樹と拓海が居合わせたってんだからなかなか

持つてる奴らだ、羨ましい。

「池谷さんたちじゃ手も足も出ないんじやねえか？」

「だろうけど逃げたりはしないだろ、先輩たちも走り屋だからプライドも意地もある」

きつと負けるとわかっていても最後まで意地だけは通すだろうな、と考えつつ大きく背伸び。

背中を後ろにせらせながらんくつとな、こうやってずっと座ってる  
と背中が固まっちゃっていかんね。

「ん？」

おや、気付けば横から控えめな視線。ほうほうほう？

「いいんだぜ？男つてのはそんなもんだ。ほれ、特別サービス」

少し笑いながら胸元をチラリ、サービスだぜ親友。でもそれを見て  
そいつはげんなり、さすがだぜ親友。

そうね、そうなるよね、現実はずらいもんだよ。だって俺の谷間汗  
だくで見えるからにひでー状況だもの、見て分かるくらい汗が溜まっ  
てるしな。

あつちーぜー、胸元パタパタしてると熱気がどんどん噴出してきや  
がる…マジで暑いんだよ、手が止まらない。

「幻滅させんなや、相変わらず大汗だなお前、その恰好でそれは正直エ  
ロくねーわ」

「うむ、俺もそう思う」

今更ながら、北半球やら南半球やらどう見ても必要ないけど突っ込  
むために必要な穴とかなんであんなエロい服が生まれたのかわかつ  
たわ。

そういや前にテレビで派手に胸開けてるウマ娘がいたな、マカフシ  
ギだったっけ？最初はそれってどうなのって思ったけど今は納得。

あの穴って通気のためだったのね、そりゃこんだけ蒸れれば開けた  
くもなる。蒸れて痛い目見るより多少エロイほうがマシってこった。

今なら恥を忍んで着れそう…着れるか？いやしかし暑いんだし…  
うーん…似合うんだろうか？そもそも。

「それとすまんが、俺の推しはゴールドシツプなんだ」

そういやそうだった、こいつあのトンデモが好きなヤツだったわ。確かどつかのレースで相方のかいヤツと組んでライブを漫才にしたとかテレビでやってた気がする。

中央トレセンの中でもトップクラスの奇行と目に余る行動力を持つ問題児って言ってたな、ツバキ曰くレースやってたらこいつらのトンデモエピソードは耳にしないことはないとか。

「好きなのはいいけど、距離感は徹底しとけよ」

「…うん、それは分かる。見てるだけで十分楽しいもんな」

「素直でよろしい」

ファンだけあって良くわかってらっしやるようで、そのままの君でいるといい。

ターボから聞くだけでも相当行動力がヤベーらしいし、仲間も含めてぶっ飛んでるそうなの…ってかいろいろやらかしてるらしいな？

ゴールドシップさんの武勇伝はともかく、相方のあのデカイヤツ…何て名前だったっけ？ 傾奇者みたいな俺よりでかくて胸のかいウマ娘も相当な傑物だとかなんとか。

あの前田家の傾奇者、方々に顔が広いから色々聞こえてくるんだが…正直命がいくつあっても足りんぞ、ニコさんが可愛く見えら。

金も地位も名誉もある生ハジケリストとは恐れ入る。まさかジャスタウェイが美少女になるとはあの人も思わなかっただろうが。

傍から見てりゃ面白い連中なんだろうが巻き込まれたらたまったもんじゃねえだろありや、本人スペックがすごいから何とかなってる分シヤレにならん。

有名な米軍の爆竜大佐と仲いいんだろ？ギブス捜査官とラング部長にガチマークされてる人物だ、前にちよつと聞いたことがある。

優秀だし職務に忠実で信頼はされてるけど行動力とその方法がやばいという意味だから悪い扱いじゃない、ハジケリスト枠だなあれも。

他も米軍内でも指折りのトンデモ人員といろいろ知り合いらしいとか、国内外のご同類とよくつるんでるとか、ギリギリライン攻めすぎるかアウトでも理由が理由だとか。

まあターボが一切嫌がらず普通に懐いてて写メ送ってくるくらいだからゴールドシップさんたちは悪い奴らじゃないんだらうけどねえ……うん、あのペースは付き合いきれん。

「そーいや、前雑誌でゴールドシップさんが中央トレセンの体操服は結構涼しいとか言ってたついな。やつぱ素材から違うんかね？」

「トレセンの？まあ違うんじゃないの、あそこ走りまくるんだしそりゃ汗だくだらうさ」

手触りはスゲー良かったの覚えてるぞ、いいもん使ってるよなあホント。

「お前それ使ったら？ターボちゃんに頼めば向こうの購買で買えるんじゃないかね？うちは先生にあらかじめお願いすりゃ一発だし」

「はっはっは……却下、走れば稼げる天下のトレセン学生と一般高校生のお財布を一緒にするんじゃないよ」

言っとくけどお財布の厚さもターボたちは破格だぞ、伊達に重賞を走る実力者やってねーわ。レースだけじゃなくて雑誌取材とか公演やらでめっちゃ稼いでるんだよあいつら。

伊達に現代社会の疑問の種になっただけあつて稼ぐ奴はとことん稼げるからなああの業界。

そんな奴らが日常的に使う体操服も素材と作りからすべて違う、普通の体操服とは比べ物にならない高級品だわ。

そりゃ着心地も使い勝手もお値段並みに良いんだらうけどさ、一般人にはまず手が届きません。

「安い物と言えば、帰りにコマツと供養衆に行くんだけどお前もくるか？レッドが連絡してきた、良い物が入ったらしい」

「また供養衆か、東京のシヨップ行つといて結局そこじゃねえか。そんなもん金使つてつから買えねえんだろ」

「供養衆は安いし品そろえがいいからな、他のシヨップの半額くらいで実物装備買えるなんて日本じゃ滅多にねえわ」

いやはや、前世では見つけれんなかったけどいいシヨップ見つけたもんだよねえ。まさか芦名にあんなシヨップがあるとは思わなんだ。

おかげで俺のサバゲ用装備はBDUからアーマーに至るまで全て



実物、普通に買ったなら目が飛び出る金額になるところを高いけど納得できる値段で手に入ってウハウハだぜ。

全部中古品だからがつつり使い込むのに抵抗もあまり感じないしな、むしろ増える傷がさらに味な感じになるし。前前世じゃ高くて手に入れても使い辛かったもんよ。

まあちよつと曰く付きなところはあるけど本業は特殊清掃業だからね、仕方ない。芦名の店のビルも、前のオーナーが自殺したのを後始末して引き取ったっていう話だし。

「まともな奴なら怖くて近寄らんだろ、あの幽霊ビルで長続きしてんのが奇跡だぞあの店」

まあ、あのビルは入る店が次々不幸になったり経営者が不審死したりする曰く付きだったもんな。

供養衆はそういうの慣れっこだから問題ないらしいが。

「それよりジャージだろジャージ、あれならジャージのジッパ、つかえないんじゃないやね？」

「ぬっ…」

悩ましいこと言ってくれやがる。確かに胸のせいで適正サイズのジャージだと胸でジッパが閉まらんから常に一つ大きめ着てるかな。

一年の時なんかサイズ間違えられて一時期は胸が収まらない状態で体育させられた。でも前開けっぱなしじゃ寒いし、中途半端にでも胸の下まで閉めなきゃやってられんのよ。

だから否応なく乗っかるし目立つしで視線がね、男も女も見てきやがるときたもんだ…まあ支えがある分楽だったから替えが来たときつい悩んだのは誤算だったか。

「なら買ってくれるかい？ほれ、今なら大サービスだぞ♡」

それとなくすり寄って体を密着させる、そしてできる限り猫なで声。

「エロさもへったくれもねえな、近づいてくん暑苦しい」

「いいのかいそんなんで？男なら好きだろ、本物がさ」

「本物ならなおさら嫌だわ、離れろや汗くせー」

だよね、汚いもんな。良い匂いとかそんなの言ってられんぞ、ガチで汗だくだからな今の俺。

ついでに体温もまだ高いウマ娘火力発電所だあ…うん、実に迷惑だよねえ!!

「ちよつとそこの男子、シマちゃんに何エロイことしてんのよー?」

「そんなことしてねーつつーの、こいつが許すようなタマかよ」

「ほんとかなー?」

そういつつ親友の方を見て首を傾げる。

「いやなんでお前が首傾げんねん」

「なんとなく」

「さいでつか」

「ま、そーだよねー、シマちゃんも変なことすんなよー…おい顔背けんな」

シランナ。

## 第二十六話 ☆

7月上旬、いつにもまして活気のあるトレセン学園の練習用レース場では、多くのウマ娘達が次のレースに向けてトレーニングに明け暮れている。

あるものはひたすらにウッドチップコースを走り、あるものは身の丈以上もあるタイヤを引き摺り、そしてあるものは将棋を指す。

それは東条ハナ率いるチームリギルも同じ、合宿に向かう前の最終仕上げの状況だ。

「なあおハナさん、あんたら一体何やってきたんだ？」

信じられない、と言った面持ちで自分が持っているストップウオッチの計測した数字を見つめる気の強そうな褐色肌のウマ娘『ヒシアマゾン』がナリタブライアンに食って掛かっている様子を遠目で見ながら東条ハナは隣で同じようにストップウオッチ片手に目を丸くしている同僚、沖野に隠すこともせずには答えた。

「少し走り方を見直しただけよ」

「いやおかしいだろ、なんで帰ってきたら新記録更新した上に平均タイムがいきなり2秒も縮んだよ」

沖野が見せてきたタイムは、群馬に行く前のナリタブライアンの平均タイムを上回るものだった。

約2秒、それがナリタブライアンが走った芝2400メートル右回りで縮めた自己平均記録のタイムである。

「しかもブライアンどころかディープリンパクトとシンボリルドルフ、ツインターボとナイスネイチャまで軒並みおかしなことになっているぞ。

カノープスの二人に至っては平均タイムが3秒も上がった上に、安田と宝塚取っちまいやがった。異常にもほどがあるぜ」

以前から狙うと明言していたツインターボの安田記念、出走枠が取れて出てきたら取れたナイスネイチャの宝塚記念、どちらも中央にお

けるG I、最高峰のレースだ。

当初は有力視されつつもいつも通りの結果を誰もが予想したが、あから不思議、ツインターボは最初から最後までロケットのような爆速大逃げをかまして先頭をぶつちぎり、ナイスネイチャは第4コーナーを終えた最後の直線で集団内後方からキレキレの足使いで群れたウマ娘達を抜け出してあっさり差し切り一着である。

そのあまりにあっさりともぎ取ったG Iの頂、その突発的な躍進に中央ウマ娘レースは大いに沸いた。

今もカノープスへの取材依頼や会見開催の希望はひっきりなしであり、南坂トレーナーはその対処に忙殺されている。

「…いえ、落ちてる。どこか変わったわね」

「いや落ちてるじゃねえよ、一体あいつらどうしちまつたんだ?」

群馬じゃ、一番うまい走りしたときなんかブライアンは3秒も一気にタイムが上がってたのよ。とは東条は言えなかった。

シマカゼタービンが主導し、並走し、走り方をつぶさに見たうえで意識させた矯正込みの全力疾走、それだけでタイムは見違えていたのだ。

トレーナーとしての認識がガラガラ崩れそうな光景に自分は自信を喪失しかけたし、南坂の表情は完全に戦意喪失状態だったのは記憶に新しい。

瀬名酒造で一人乗り4輪バギーを用いた併走訓練を紹介されて何とか持ち直していたが。

「そうは言っても本当にそれだけなのよ、走り方を今のブライアンに合わせた、それだけらしいわ」

「今のナリタブライアンに合わせた?」

「正確には今のナリタブライアンの性能をより引き出せるように調整した、って所ね。彼女曰く『バラして洗浄して組み直しただけ』らしいわ」

ついでに『やっぱバケモンだ』とあきれ返った感じもしていたが、お前が言うなど言ってやりたかった。

「性能って…おハナさん、らしくない例えだぜ?」

「そう思うけどこの表現がしっくりくるのよ、別に悪意とかは無いわ」  
彼女たちの走りを見たシマカゼタービンのちよつとしたアドバイスはまさに劇薬であった。

足の上げ幅、踏み込みの数ミリ単位の矯正、力の入れ方や体の重心移動、体の振れ幅、ありとあらゆる場所を見て覚えて解析する観察眼。それをさらに部品ごとに分解する、筋肉の作動域から作動効率などありとあらゆるところまで見通した上で組み直し、徹底的にチューンする解析力。

彼女自身は特別なことをしている感覚はない、そして見た目も大して変わったことをしているわけではない。

ただ相手と並走し、事細かな指示を出しながら走らせて情報を収集して走り方を見せながら教える、たったそれだけだった。

たったそれだけで劇的に変わる、まるで熟練の技術者が整備し直した車が見違えた動きをするかのようにだ。

「ついて来れるか！」

「ついていきます!!」

別のコースでは同じように見違えたかのような滑らかな走りを見せるシンボリルドルフとその後ろから追い上げるディープリンパクト。

その走る姿の滑らかな足運びは、いつにもまして鮮やか、色気すら感じるほどに艶やか、それでいてどこまでも狂暴なレーシングマシンと化していた。

さらに言えばルドルフに至っては、生徒会長の業務が多く一線からは退いていたはずなのだがそれを全く感じさせない状態である。

その姿はかつて現役を走っていた時以上に練り上げられた姿、頼れる生徒会長という今をそのままに現役時代の猛獣をそのまま突っ込んだような理想の姿と言えた。

その姿はあまりにも充実感に満ちていて、学園生活も生徒会の仕事も今まで以上に快調になっているのである。

「なんか羨ましい話だねえ、俺んところのあいつらも見てほしい位だ」  
「あら、良くないの？」

沖野が言っているのはおそらくトウカイテイオー、メジロマツク  
イーン、サイレンススズカの3人のことだろう。

この3人は現在の中央トレセン学園における強豪の一角であり、現  
役競争ウマ娘の中でも花形の存在だがこれまでは怪我と苦難の連続  
でもあった。

3人とも足に大きな怪我と爆弾を背負いながら走り抜き、今はやつ  
と一仕事終えたといったところである。

「いや全然、むしろ絶好調。この前の定期検診も医者は大鼓判押して  
たから、でも保険には保険かけておきたいんだよ。また何かあつてか  
らじゃ遅い」

「仲介はできないわよ、連絡先知らないし。やるなら直接瀬名酒造に  
連絡しなさい」

「連絡先交換しなかったの？」

「教えてくれなかったのよ、ああ見えて身持ちはすっごい固いの」

「おんりやああ!!」

「まだまだ!」

そして変わったのはディープインパクトも同じ、以前にもまして凶  
悪な脚力で、凶悪かつ命知らずな攻め込みを見せるようになった。

追い込みをかけながら最短距離を、相手に接触しそうでしない、反  
則と言われないキワのキワを見極めてギリギリまで攻め込む。

今でいえば、普通ならば抜こうとしないようなシンボリルドルフと  
内ラチの隙間を、自ら内ラチギリギリまで体を寄せて抜こうとするよ  
うなことを。

「くう…また狭くなってます」

「おおよそ25センチほどでしょうか…無理してますね、体幹がブレ  
ています。これ以上は無理ですか」

それを近くで見物しながらコースが空くのを待っているエルコン  
ドルパサーとグラスワンダー、二人は神妙な面持ちでシンボリルドル  
フとディープインパクトの併走を見つめていた。

「いや待ちなさい、グラスもエルも落ち着いて、普通そこまで詰めると  
危険よ?」

「そうだよグラスちゃん。なんか最近内ラチによく当たってるよ？あぶないっぺ」

「セイちゃんもそう思うなあ…気楽に行こうよ気楽にさあ、最近ちよつと根詰めすぎじゃない？」

その二人に練習相手に呼ばれたキングヘイローとスペシャルウィーク、暇なので言いながら心配そうについてきたセイウンスカイ。

「でもやったら速くなりマス！彼女はやりました、この目で見たんデス!!」

「危険すぎるって言うてるのよ、なんで顔と体は無駄に寄せてってるの？むしろバランス崩しちゃってるじゃないの。」

何度擦り傷作ってると思ってるの？あんな状態で本気で走ったら下手すりゃ死ぬわよ」

「でもやれるんですよ、速くもなります！実際見ました、やれるんデス!!」

「あ、それ知ってる。ビワハヤヒデさんのジョークでしょ、珍しいからってまさか信じちゃってるのかな？」

「スカイさん、それくらいできなければおそろく…今の私たちは勝ち目がありません」

「グラスちゃん、エルちゃん、一体何と走るつもりなの？なんだか最近怖いよ？」

「怖ッ…え？」

「自覚なかった!？」

ああ、普通はこういう反応するわよね。だからあの界限から全く広まらないのか、余りにぶっ飛んでるから逆に笑い話で済むのか。そりゃジョークと思うわよね。

親友に一切信じてもらえないグラスワンダーとエルコンドルパサーを見ながら、東条は少し羨ましがった。

こんな風に変に考えずジョークだと流しながら一緒に笑ってくれる仲間がいたなら、きつと自分の中で何かが崩れるような感覚は覚えなくて済んだだろうに。

学園内のように群馬トレセン学園にとんでもない強さのウマ娘がいた、そいつにコテンパンにされた、という解釈で終わっただろうに。「スぺ、それ、マジだぞ。というか一般相手…信じられないのも無理ねえけど。なんか生徒の間で噂が変質してんな」

「しようがないわよ、一般相手に負けたなんて私だってこの目で見てなければ信じない。あの子にはまだ早いわ、いつそ現物を見せたほうが手っ取り早い」

「でもあの映像、今は重要機密扱いでたづなさんが管理してるだろ。黒沼がちよつとぶつ飛びかけたからな」

あの映像とは東条と南坂が持ち帰ってきたシマカゼタービンの芦名峠ランニングと日中の練習風景を映した映像のことだ。

復帰して慣らしを終えたミホノブルボンを更なる高みに昇華するために努力を欠かさない黒沼トレーナーは、それを見て速攻で群馬に飛ばうとしたほどだ。

坂路の申し子とも呼ばれるミホノブルボンのトレーニングをも軽く超える狂ったトレーニングを軽々とこなすあの姿は、同じ逃げウマ娘を手掛ける彼には強烈過ぎた。

全身から青い炎が噴き出しているかのような錯覚すら覚えるほど、今も彼の中には闘気が渦巻いている。

「映像じゃない、現物が近々来るのよ。近所にね」

「ん？スカウトは断られたんだろ？」

「別件よ、URAFファイナルズ」

「あ、それで思い出した。おハナさんにしては珍しい登録したんだって？希望者全員芝の長距離に突っ込むなんてどうしたの？」

普段なら自分のチーム内でこんな重複出走登録なんてさせない、そういうやり口は目の前の沖野がやる事だ。しかし今回ばかりは違うのだ。

「怪物を迎撃するためよ、それには一人や二人じゃ足りない。リギルの最強を以て勝負する必要がある」

「まさか実戦の中でさえ選別するってのか、本気かよ…え、まさかそれって」



「ええ、件の彼女、URAFファイナルズに一般参加で登録してたのよ。芝の長距離部門でね」

こんなの、やるしかないじゃないか。こんなの、待ち受けるしかないじゃないか。

トレーナーとして手塩にかけたウマ娘達で、あの怪物をねじ伏せるチャンスではないか。

「本戦に必ず上がれるわ、彼女。みんなやる気なのよ、今のルドルフですら全く追い付けもなかった怪物を相手にね」



芦名市街地の一角、高校からは少し走り家からも距離がある古い雑居ビルが多い場所にその店はある。

8階建て雑居ビル一つを丸々使い、階数で品物の系統を大まかに分けて販売している群馬随一の国際リサイクルショップ『供養衆』。

本業は特殊清掃業でかつては日本国内で細々とやっていた。だが明治維新の後に活動を徐々に拡大、第一次世界大戦の時に何をトチ狂ったのか突然世界を相手に事業を展開した結果、誰もやりたがらない仕事を率先してやるという事もあって一気に国際企業になったという逸話がある。

現在も高品質な特殊清掃事業で世界でも知る人ぞ知る優良企業、回収した遺品の内必要なもの以外はすべて引き取るという事で破格の低価格で仕事をしてくれるという事もあって一般顧客も多い。

それ以上に本業である戦場などの危険地帯における特殊清掃業も、死体処理の際に発見した物品を引き取る契約で格安価格なんだから紛争当時国政府や自治体に人気だ。

しかも死体処理って言ってもただ処理するんじゃないで『供養』だ、ただの死体漁りとはわけが違う。

所持品を頂いたら遺体をきれいに整えて、衣類もできるだけきれい

にしたうえで遺影を撮影し、その後には火葬して遺骨は荼毘に付す。

しかもわかる限りの情報は収集して供養衆内のネットワークに保存、遺族から問い合わせがあれば即対応できるようにしてある。

まあ行為自体から金品目当てのガラス、戦場を渡るレイヴン（ワタリガラス）なんて言われてたりもするが…そこは有名税だな。

そんな供養衆が仕事で引き取った品物をきれいにして売っているのがこのリサイクルショップ、扱う品物もほぼその本業で引き取ったモノばかりなんだが何より国際色豊か過ぎてカオス。というか、このビルに限らず店や事務所を構えている場所もほとんどが引き取った日く付きの物件っていうとんがりっぷりだからな。

普通のマグカップから妙に迫力のある傷がついた軍用ヘルメットやらいかつい甲冑までありとあらゆるものが陳列されている。

「学校終わったら即うちとか相変わらず暇人だねえ、あんたも」

「速攻バイトしてるお前が言うか」

「うちはバスが近くまで来てるからね」

「俺だってウマ娘だけ」

それで群馬大学付属高校に通う親友のバイト先、まあ一人は俺と一緒にで実家の手伝いみたいなものなんだが。

いつものように検品なんかで使われているバーテーブルで暇そうにしてるのはネコっぽい猫淵風香、うちの生徒会長の妹で生徒会長も認める秀才。

家では普通に猫かわいがりされてて兄妹関係は良好、というか普通に兄貴好き。

ついでに素手なら最強の仙峯寺拳法使い、ウマ娘だって一捻りだ。ただし兄には勝てない、腕っぷしの強い妹とか思われたくない模様。

生徒会長はこいつが強いのは知ってるけど、こいつは隠したがつてるから知らないふりしてる。

「最近兄さんはどんな感じ？またあんたがやらかしたって言ってたよ？」

「やらかしたとは何だやらかしたとは、家で何しようが関係ないだろ。そもそもなんもやらかしとらんわい」

「またまた、最近また学校に中央トレセンからアプローチがあったとか言ってたよ？地域交流の一環とかでさ」

「なんだそりゃ、知らんぞ」

「というかホントになんもしとらんし、この前だつて少し練習見てやったのと最後にタイムマンやつて全員ぶっちぎっただけやがな。」

土2400右回り、家のコース。いやあみんな強い強い、気迫が半端なかったわ。走り慣れてなかったら負けてたかもな。

「とはいえ所詮は我が家の練習場、走り慣れてる俺が絶対有利、ノーカンだよノーカン。」

「そうなの？兄貴は断つたつて言つてたけど？」

「じゃあ俺が知ってるわけねえわ、生徒会の中で完結してら。」

「なあんだ、無関係か。もつたいないなあ、もしかしたら有名なスピカとかリギルの人たちを生で見れたかも…あ、あんたは見たのか」

「まあ変わった連中ではあったかな。うん、雰囲気全然ちやう、ちよつと浮世離れしてる感じ」

あの感じはなかなか興業向けかもね、踊つたらそりゃ様になるわな。

「それ、ちやうどいいから地方トレセンみたいな合同授業とかしようとしたんじゃねえの？世間勉強がてらさ」

「そりゃ中央つてそういうのいないんだっけ？」

「ターボから聞く限りねえな」

群馬じゃ当たり前だけどね、群馬トレセンからこっちに授業受けにくるやつ。そして頭は良いがちよつとズレてたりする、一般常識が。ま、すぐ治るけど。

「おまたせー、なんだか楽しそうな会話してるわね？」

なるほど納得、と頷く風香の後ろ、裏のバックヤードから大荷物を引っ張り出してきた濡れた黒髪赤眼のヨーロッパ系美少女、烏丸あやめ、通称レッド。

この供養衆芦名市街地2号店の店長で昔なじみ、よく海外遠征とかでは世話になる。供養衆の持つ海外ルート使わせてもらおうと安く上がるんだわ。

「レッド、なんなんだよ、いいもん手に入ったって」

「むふふ、まあまあ慌てなさんな。風香ちゃん、レジお願いね」

「あいあい」

「さ、まずはあんたがうちに依頼してたやつ」

そういつて風香と立ち位置を変えたレッドが持つてきた箱の中から無造作にテーブルへ品物を置く。

合板製の木製ハンドガードとストック、それと赤みがかったベークレート製グリップ。

「AKMのグリップとハンドガードとストックか…実物？」

「実物よ、今一番ホットな所から直輸入」

「またそんな物騒なもんを…」

「ちゃんと供養してあつから大丈夫よ。それにこれ、あんたには極上品だと思うよ？」

俺の愛銃の一つ…になるはずだったAKMのカスタム用に頼んでいたのだ。結局本体より先にパーツが来ちまったかあ…くそ、この胸が恨めしい。ブラの出費がなければ買えたつてのによ。

木製ストックを手にとってじっくりと見分する。見た目は悪くない、小傷と経年による変化はみられるがそりや当たり前だ。

合板製の特徴的な外見に合板止めのダボもしつかりある…ん？このダボ打ち直しか。くるつと回して尻から見ると…よく見りや割れた跡が。

撃った拍子に板が剥がれて隙間できたな、初期型によくあった症状だが起きる時は起きるわな。

まあ補修されてるしニスで塗り直してあるから問題ない、むしろ実用する身としては高評価だな。これ、軍の補修だ。

次にロアハンドガードを手にとってみる。これも同じか、ダボが一部新しいしニスも塗り直してる、でも割れはねえ。抜けたピンを新しい部品に変えただけか。

なるほど、俺好みだ。一番ホットなところで出てきたほやほやの放出品、最近まで使われてたってわけだ。

「良いな、よくそんなホットな場所からこれほどのもんが出てきたも

んだ。今は需要高いだろうに」

「ヨーロッパ支部から日本向けに仕分けられてて難しくなかったわよ、見たからわかってるんでしょけど補修された放出品よ。」

今はロシアから状態の良いヤツがごろごろ出てきてるけど、運用できない部品も腐るほどあるらしくてね。」

「軍じゃ無理でも民間転用ならできるのは手直しして流してんの、時期に日本中の供養衆にロシア製部品や装備が溢れかえるわ」

「随分だな、その口ぶりだと日本向けに出してるのか。どこのどいつだ？そんなもん売っぱらってるの」

「国そのもの、何が何でも外貨が欲しくていろいろやってるみたいね。ジャンクとか装備類ならむしろ日本向きだって入れ知恵したやつがいたんでしょ。」

なにしろ合法で手に入るなら実物部品なんて欲しがる連中はそれこそごまんといえるし、多少ジャンクでも問題ない」

なるほど、確かに部品や装備なら日本も輸入できるわな。しかもこの手のマニアは絶対欲しがる、俺だってほしくて頼んでたんだし。」

むしろこの程度のジャンクならそのまんま売りに出しても問題ないレベルだ、こっちで勝手に直して使うぞあいつら。」

外装部品なんてポン付けできなきや自分でできるようにするのが当たり前だかな。」

「それでついでなんだけどき。偶然デジフロ装備一式、そろってるんだけど買う？」

「形式とサイズは？」

「ラトニクセットなら一応持つとるぞ、アーマーは胸のせいでクツソきついでど前期型6B45、ベストも前期型6sh117、ヘルメットは47。」

エルボーパッドとニーパッドも51、ゴーグルだつて50、ブーツも官給品スタンプ付き、ほぼ実物あるぜ。」

VKBOがサイズ合わなくなったからBDUはマブタになっちゃまってるし、グローブはスプラフだけど。」

「新型6B46フルセット、プレート無し、補修有、サイズは3、タグ

あり」

おつま、見事にすり抜けさせてんじゃねえ!!なんだよその滅茶苦茶ツボにくるラインナップ!持っていない!!でもお金ない!!

レッドが次に出してきたのは特徴的なデジタルフローラ迷彩のプレートキャリア、しかもバックパックとかポーチの完備のフルセット。

うわ:マジで実物の6B46じゃん、ちゃんとマークとナンバーもあるから軍に納品されたガチもんだよ。

程度はほどほど、若干擦れが見られるし草臥れてる。あ、前面右下に一発喰らった痕もある、裏は:しとるな。

これ供養衆が回収したタイプか?まあ向こうの軍から流れたのだとしても、供養衆が並べるのはちゃんと供養してあるから問題ない。

やべーな、欲しい:これガチの運用済みならなおさら俺ほしい、新品じゃない味あるもん。

「そんな悲しい目しないでよ、まだ店先に出すの先だから知ってるのここにいるのだけよ。金なら今週末に纏まって入るでしょ?十分間に合うって」

「は?:ああ、URAFファイナルズの予選の事か、あれなあ:」

「なによ、エントリーしといて何で出るの渋ってるの?別に府中のレース場くらい車で行けるじゃないのさ」

「だってなあ:お前らだって知ってるだろ?」

被ってるんだよ、秋名スピードスターズと赤城レッドサンズの交流戦にURAFファイナルズ一般予選の日程が。

俺の予選会場なんだが、出場レースが芝の長距離って関係で会場が府中になっちまったんだよ。

しかも日程は二日まるまる、前日入りしてメデイカルチェック受けなきゃならん。終了時間が基本的に夜7時でほぼ丸一日使う日程、終わった後車をかつ飛ばしても間に合はん。

というか、予選って言っても疲れんだし帰りに車かつ飛ばすとか怖くてできん:でもな、でもなあ:

「あんたってやつは:」

「だってさ、やっぱこういうときって応援行くのが筋じゃん。俺、生で見たい」

「どっちかっていうと高橋兄弟の走りが主目的でしょうが」

確かに池谷先輩たちの負けは決まってるようなもんだろうさ、でもそれとこれとは話が別だろ。

秋名じやよく世話になってるんだしさ、ガチの勝負するってんならやっぱ応援しに行くのが当たり前だろ。

それにもしかしたらもしかしてもあるかもしれないしさあ。

「あんたさー…それはそれとしてまず予選に出なさいよ、そつちが大切でしょうが？」

「いやあ、予選と交流戦どっちかって言われちゃったら迷うだろ。こんな機会滅多にねえ」

「そこは友情とりなさいよこの峠バカ、こんなん一生に一度よ絶対。来年には絶対無くなってる」

「考えてみたら仮に予選抜けてもその先のレースにあいつらがエントリーできるか分かんねえしさあ」

あいつらは是が非でも出るって言ってくれてるけど、無理な時はどうあっても無理だし。ま、そんなときややめりやいいだけなんだけど。

「なら当たるまで勝ちやあいいのよ、みんな勝てば嫌でも決勝戦でぶち当たんだから」

「決勝まで進むとか嫌なんだが？というか、それ出る気ねえぞ」

「いや行けよ、なんでリタイアする気満々なんだあんた」

「本戦とか地方と中央のガチの中に放り込まれんじゃん。年末は卒業式と入学で忙しくなるだろうしさ、いやあきついつしよ」

「そういうこと言うかお前」

正直、あいつらがそこに出ないってんならそれもパスだわ。そもそもレースなら別にどこでもできんじゃん。

別に近所のコース借りてタイムマンやってあいつらボコすなんてしよっちゅうだったし、何なら家で散々千切り倒してんじゃん。

「あんたこの前郡サイの峠コースで勝負してなかったっけ？兄貴のワンビア相手に」

「負けたじゃん、一周でへばって勝負にならんかったわ」

何回かいいとこまで行っただけだね、結局タイムは5秒差で負けるし一周でへばるで完敗よ。やっぱなかなか厳しいわ。

前世じゃ、最後はアマチュア相手なら勝率1割、プロは0.5割まで行っただけだなあのコース。

ウマ娘じゃまた勝手が違うわ、面白かったらありやしねえぜ。

「お、その話聞いてないね。タイムは？」

「2分45秒ジャスト、5秒遅れだ」

「なんだ、縮んでないじゃん…ハハアン？もしかして、予選で負けそうで怖いのかな？」

「かもな」

一般参加枠とはいえ、出走登録の制限にこれといった所属の制限はなかったからな。資格とメデイカルチェックは厳しいけど当たり前の範囲だし。

「ま、運が悪けりや別ん所で埋め合わせしとくさ」

いつそ郡サイでやろうかな、言えばちゃんと入れてくれるし。一周6キロあるけどまああいつらなら余裕でしょ。

今のあいつらとタイムアタック、どっちが早いかな？…負ける気しねえけどちよつと楽しみ、地方とはいえプロの指導なんだ、化けたからなああいつら。

「あんたってやつは…どーしてこんなウマ娘が生まれてきたんだか」

「俺の継いだ名前ってレース向きのじゃねーんだろ、きつと。知らんけど」

ま、そもそも俺はそのまんまだからね。俺、基本はただの輓馬だからさ。そういうところは根っこから違うんだよ。

「(やっぱり…あいつらの予想通りめっちゃ渋りだしてるわね、というか普通にバツクレそう)」

「(まあ交流戦がかぶったって聞いたときから予想はしてたけどね、こいつだから。エサは効いてるみたいだけどもう一押しって所かな？)」

「(そうね)」



「ん？なあにこそこそ喋ってやがる」

「いやべつに」

うわ、なんかすっげえイヤな笑みするじゃねえかレッド。

「それでそろそろ本題なだけどき、実はこんなもん入ったのよね」  
そういつてレッドが出してきたのは一本の酒瓶、この感じはウイスキーか？かなり年季が入った感じだな。

保存状態は良さそうだがラベルがちよつと汚れて…こいつは!?

「お前!?!この酒!!」

「見つけちゃった」

「おつま…アードベックのキルダルトン、しかも1980のヴィンテージとかどこでこんなもんを!!」

「国内でちよいと仕事があつたとき偶然見つけたのよ、遺族の方には声かけたけどいらないうっていわれちゃった」

こりや盲点だ、近場はもうないと思ひ込んですつかり失念してた。

まさか…まさかこんなところでお目に掛かれるなんてな!!

「なに、あんたがそんな顔するとかそんなに珍しいの?」

「珍しいなんてもんじゃねえよ、こりやもう幻の酒だ。アードベック自体は珍しいわけじゃない、今でもキルダルトンは生産されてるが、それは新シリーズのキルダルトンだ。」

こいつはいわば旧作、アードベックの長い歴史の中で不運にも生産中止になって少数しか出回らなかつたっていう一品だ…」

アードベックは結構な逸話がある会社でな、不況だの経営不振だの数量調整だの何度も何度も操業停止を繰り返しては復活してくる不死鳥みたいな会社なんだ。

当然、そのあおりを食らった酒がいくつもあつて、このキルダルトンもその一品。

アードベックの中でも試験的にライト・ピートタイプで作られたヤツで、他のとはまた違う味わいをしてるのがまた珍しい。

しかもメーカーが2004年に限定販売した1980の数はたったの1300本だ。国内だけとか国外だけとかじゃない、全世界で1300だけしか出回ってない。

2022年の今となつちや、ほとんどが好事家の保管庫か酒好きの胃袋の中に納まつてて滅多に出てくるもんじゃねえ。

「そらまたなんで」

「アードベックは1981年に一回操業停止してんのよ、こいつはその前年にギリギリ仕込んだいわば遺作ね」

その通りだレッド！こいつは操業停止までの短い間に生産された最終ロットでもあるわけだ！まさに歴史的一本なのだよ！！

「親父だって80は飲んだことがねえって言ってた、俺も当然飲んだことがねえ…」

「あんたの親父さんがそういうんじゃよっぽどか」

運が悪かったのだ、発売当日の芦名は大雨で結構やばかったそうで、近所の方を優先したそうだからな。

「そうだよ、なんてヤベーもんを出してきやがる…俺にどうしろつてんだ？」

こんなもん、今の俺には全く手が出ない。前世でもこいつは全く見つからなくて諦めてた酒の一つだ。

1981は偶然前世じゃミニチュアセットが定価で手に入ってそのまま飲んだが…あれもうまかった。アードベックがこうも変わるもんかってな。

その一つ前の小瓶じゃない製品版フルボトル、いつか飲みたいとは思っていたが運良く出会えてもとんでもない値がついてて全く手が出せなかったんだ。

俺の酒の匠としてのプライドが、こいつを絶対に逃すなって叫んでやがる。

こいつは絶対に手に入れておきたい、こいつを開けて、飲んで、味を覚えて、それを俺たちの酒に反映しても取り込んでやりたいって疼いてやがるツ…

「べつにー？あんたなら買うと思って見せただけよ、うちの常連だし少しくらい融通利かせてもいいでしょ」

「いくらだっ…」

「――」

たっか!!?

「…今は手が出せん、持ち合わせがない」

くそ…どっかで稼ぐか? いや、この際車を担保に…いやでもそれは走り屋としてやっては…くっそー!

「そう慌てなさんな、こいつはまだ店には並べないわ。今ある酒が売れなきゃ棚が空かないし…ま、普通に並べんのは来年以降かしらね」

「そうか…当然、その前に俺が買うって言えば売ってくれるな?」

「モチロン、売り物だしね。あんたしか知らない情報よ、これ」

なら、まだ時間はあるか。しかし金を作るとなると、やっぱりUR Aフアイナルズが手っ取り早い。

前なら手ごころな大会に出て数で稼ぐって手もあつたが今年はこちらよつと忙しいし…うーむ…

「重賞、GⅢあたりの優勝賞金なら十分足りるでしょ」

「あ、そうか。それ俺にも入るんだっけか」

「うわ、ガチで興味なかったんかこいつ…」

期待するだけ無駄なもん覚えてもしょうがねーもん、くれるかもだがそれあとになってグダグダしそうな感じするしき。

調子のいい計画して、後になってグツダグダやってこっちに迷惑かけてくる連中なんざ前世と前前世でごまんと見てきたわ。

そういう奴らにね、言葉は通じないからすっぱり切ったほうが後腐れねえんだよ。損切でスパッとやれば被害はそこまで広がらん。

イヤダメでしょ、って目に見えてんのに変に相手を立てたり付託云々して自滅する日本人の多い事多い事。

「いや、それどうせ面倒事になりそうだしな、無いもんだと思ってた」

「はい出ました色気もなんもねえリアルなセリフ、あんたホントに女子高生かっつての」

「伊達に実家で社会を覗いてねえかな、現実つてのは厳しいもんだ」

「はいはい、まあそこらへん大丈夫だと思うわよ? 賞金の事ねじ込んだのって確か今の理事長だし、榎原副理事も賛成してたはず」

えー? 本当でござるかあ? なあんか前前世で嫌なくらい感じたのと似た匂いするんだけどな。

理事長：あ、あの合法ロリか。ま、出るなら買えるわな。最悪入着でも相応に出るし：よし、ちよつとお父さん頑張っちゃうぞ。

となるとやっぱり予選は出なきやだめだよなあ：池谷先輩、申し訳ない。不肖このシマカゼ、今回は自分を優先させていただきます！

「よしよし食いついた、ノルンの読みは大当たりね」

「これで食いつかなきゃツバキとダイオールの奴が泣くわよ、っていうか何でこんな大物？もつと手ごろなのあんじやないの？」

「中途半端なのだと普通に買われそうだから一番いいヤツ探したらこれだったわ」

「(この酒馬鹿がこんな目を引ん？くって相当レアな酒よこれ、オクでやべえ値段付くわよ)」

「(だからこそこいつを釣るのにぴったりじゃない♪エビで鯛を釣るってやつよ)」

「(どこから出てきたって話よ、ヤベー品じゃないでしょうね?)」

「(真つ当に仕事して出てきたヤツよ、偶然なのはほんと。物件はアブちゃんガリちゃんに教えてもらったけどね。)

こいつがレース出るって教えたら目の色変えて探ってくれたわ。

あ、国内つてのも本当。イタリアの金持ちの別荘よ)」

「(そりやそーなるわ、こりや情報回るわね)」

ならまずはレース上の状況調べて、出走者は：あ、これは当日じゃないからわからんからパスか。

確か知り合いで出るのは擬音姉妹が短とマイルでダート、テューダーとベレーが中距離芝だから被りはなし、と。

後は他の連中がどういったので出てくるかだな：靴替えとくか？まだ使えそうだけど使い込んでるのも事実だし：でもなあ。

ここで金使うの？キルダルトン用に少しでも溜めときたいんだけど：後蹄鉄もか？まだ予備残ってたかな。

そんな風に考えていると、不意にポケットの中でスマホが唸りを上げた。

「おつと、ちよつと失敬」

「どうぞどうぞ、気にする場所じゃねーわよ」

ほなほちつとな、スマホを元右耳にくつつけてもしもーし。

「はい、もしもし」

「だーらなんでそれで聞こえるんじやコイツ」

《あつータービンちゃん！今大丈夫!!?》

ん？この声は樹か、なんだなんだそんな切羽詰まった声上げて。

「どうどう落ち着け、なんかあつたんか？」

《大変なんだ！池谷先輩が、池谷先輩が秋名で事故った!!》

「…なんて？」

今なんつった？池谷先輩が事故った？え、え？ちよつと待て今？嘘  
だろおまえ!!?

## 第二十七話

七月、今年の群馬県は例年以上に暑くなりそうだと天気予報が言っていたのを聞き流しつつ、その熱気に大粒の汗が垂れる額を拭いながら藤原拓海はガソリンスタンド内に水道に繋いだホースで水撒きしながらいつものようにポケットと業務にいそしんでいた。

群馬県渋沢市にあるこのガソリンスタンドも例に漏れず茹だるような熱気に晒され、年季の入った店舗は今日も熱く熱されたとえ屋根の下でも油断はできない。

涼しいのは事務所位なもので良くある話なら店長だけがレジで涼んでいそうなものだが、今日はとある理由で先輩の欠員を埋めるために店長も店頭に出て接客に回っている。

「うへえ！今日も熱いな」

「今年もこりやきつくなるぞ、でもいい天気なのは良いことだぜ」

「ただし休日に限る、海ならなお良し！」

「それなー」

通りすがりの通行人が汗だくになりながら駄弁っている声を聴きながら拓海は別の事を考えながら上の空で水撒きを続けていた。

同級生の女子高校生、茂木夏樹と海に行く約束したことをぼうつと考えていた拓海はふと海に行くこと自体が久しぶりだという事を思い出した。

何しろ四方が陸の群馬県住まいで生活に困らないが裕福でもない個人経営の豆腐屋育ちである。

海自体にさほど興味がなかったこともあり、ここ最近海に行ったこととなると数年前というほどで大体は近場の水辺であった。

(海、そういえば高一の時以来か……ここ最近久しぶりばっかだなー俺) 拓海の脳裏には高校一年生の夏、友人のシマカゼタービンに誘われて二泊三日の高知旅行をしたことが浮かんでいた。

シマカゼタービンが商店街の福引でファミリーパック旅行券の特

賞を引き、最初は家族でと考えたが仕事で都合が付かず、この際なので友人と小旅行という事を画策したのである。

メンバーはホクリクダイオー、ノルンフアング、ツバキプリンセス、シマカゼタービンの女性四人と拓海とイツキ、この店の店長である祐一の男性三人。

池谷や健二と言った知り合いにも声を掛けていたが仕事の都合がつかず、祐一は暇が作れた大人として保護者の役を買って出てくれた。

初日は海で遊び、二日目と三日目で有名所を巡り、高校生としてのバイタリティで珍しく拓海も遊びまわった記憶がある。

(そっぴやあの時、イツキスゲー興奮してたよな。考えてみりや俺たち、ナンパ避けでもあったのか)

考えてみれば同年代とはいえシマカゼタービンたちはみんなウマ娘だ、肉体の成長が著しい時期という事もあって非常に眼福な光景が広がっていた。

さほど攻めてはいないが背伸びしたちよつと大人なビキニやセパレートであったはずだ。そういえばタービンはウエットスーツを最初に着てきて強制的に大人なビキニにされていたか。

とにかく高校一年生の集団とは思えない美少女軍団となっていて、普通のド田舎高校生である自分たちがなんか場違いな気もしていた。

それを理解していたらしい四人は、逆にイツキの興奮っぷりに苦笑いしながらもクソ面白がっていた。それを祐一がゲラゲラ笑うのでつられて自分も笑いながら海を堪能した覚えがある。

良く考えると高校一年生とはいえ見た目は抜群な美少女軍団である、拓海にとつては思い出したくもないとある先輩のような悪い男がちよつかいを掛けてくる可能性は大いにあった。

(いや…どつちかかっていうと俺が守ってたのは男の尊厳のほうだったかもしれない)

拓海が知っているこの四人はそんな男どもでは逆立ちしてもまず勝てない武術の達人なのでいざという心配はない、変な事したらそれこそ男としていろいろ失うコテンパンな結末が待っていたはずだ。

何しろ彼女たちはいろいろ敵には容赦がない、ひどいナンパには普通に拳の反撃で対応するだろう。それも法的にも守られる範囲を見極めた上で。

そんなのはめんどくさいので一人でも男が同行していれば虫よけには十分、という判断もあつたのだろう。まあ理由はどうあれ楽しかった思い出である。

大体一緒になって海ではしゃいでいたはずだ、ビーチボールをした時などホクリクダイオールのサーブに吹っ飛んだイツキがツバキプリンセスに抱き留められて鼻の下を伸ばしていた。

そんな自分たちにちよっかいを出すような隙はおそらくなかったはずだ、ナンパするのに男が同行している相手を誘うなんてまずありえない。

(その後チョップを食らってめっちゃ痛がるイツキを見てみんなでげらげら馬鹿みたいに笑いながら遊んだっけか。

そういえばあのピンクの髪の子、いつの間にか混ざってたんだよな。名前は…忘れたな。タービンに聞きやわかるか)

考えてみればみんな美少女ばかりだし、群馬トレセン学園に入学した三人はともかくシマカゼタービンはそういうところで少し経験があつたのかもなー、などとつらつらと拓海は考えた。

そうは言つても楽しい思い出であることには変わりない、そういう風に誘われるという事は友人として認められているという事でもあるわけで悪い気は全くしなかった。

(そういや天気予報じゃ晴れだったけど、雨になったらどうするんだろ?)

せつかく遠出するのだし、海がダメだった時のためのプランでも用意しておいた方がいいだろうか。あとで休憩時間にもスマホで調べてみるか。

「なあ拓海、明日の交流戦、忘れんなよ」

「分かつてるよ。でもさ、そもそも先輩事故つたつてのにやんのかよ？」

「そりややるさー！ここで引いたら地元の走り屋じゃねーつて！」



脳内で熱いレースを想像しているのが目に浮かぶ鼻息の荒いイツキに対して、拓海はそれよりも事故を起こした池谷のことが心配だった。

イツキが熱を上げる秋名スピードスターズ対赤城レッドサンズの交流戦はすでに明日に迫っている。

その噂はすでに群馬の走り屋のネットワーク内で広く広まっているらしく、ここ最近はそれらしいスポーツカーが多くこの店に出入りしているのを拓海は見ていた。

拓海自身はあんな山道を全速力で突っ走ることにはどんな楽しさを見出しているのか理解できない、だが友人が好きならただ否定しようとも思わない。

「仮に池谷先輩がダメでも健二先輩だっているんだぜ、逃げる理由がねえよ！」

(そういう話なんかねー?)

そもそも最近事故が起きた道路でレースをするというのもどうなのだろうか、警察の目につきやすいのだし少し時間を置いたほうがいい気がするのは素人考えなのだろうか？

(峠なんか走って面白いもんかね、俺そういうの飽きてるんだけどな)

「お前、その顔あんまり分かってねえな？」

「走り屋じゃねーもん、解んねーよ」

「お前なあ…」

「あ、ちよい待ちイツキ。あの車」

なんかまた語り出しそうだと思った拓海の目に、ガソリンスタンドに入ろうとしているダークブルーのややガタイの良いスポーツカーが入った。

いくら車に疎い拓海でも何度も見た見慣れた車ならすぐわかる。ましてやそれが自分の家の常連さんの車ならばなおさらだ。

「あー青いWRX!!ってことは!!」

走り屋に詳しいイツキもそれにピンと来たのかすぐにその車に視線が向く。ダークブルーのWRX—STIは慣れた動作で二人の前に停めると運転手席の窓を開けた。

「おう、お疲れ。ハイオク満タン、いつもの頼むわ。それと洗車機使わせてくれ」

「タービンちゃん!？」

「タービン、お前どうしてこっちに？」

WRX―STIの運転席から顔を出した青髪の見慣れたウマ娘、シマカゼタービンは隣町に住む二人の友人だ。

芦名峠の走り屋であり、芦名峠のナンバー2として地元では有名な彼女だが小野町ではちよくちよく顔を見る馴染みの人物である。

「池谷先輩の見舞いと豆腐を買いにな」

「先輩のところ行ってたのか、どうだった？怪我は軽いつて言ってたけど」

「いや、家にはいなかったよ」

拓海が知る限り、池谷の怪我は軽いほうではあるが立派なけが人である。頭に包帯を巻き、首にギプスを付けたあの姿はやはり見えて辛いものがあつた。

出来れば安静にして早く良くなってほしいと思うのだが、今の池谷にとつてそんなことをしている暇がないのかちよくちよく街に出ている姿を見かける。

原付バイクに跨ってどこかに向かつていく彼の姿を見たときには心底切羽詰まっているように見えたものだ。

「まったくどこほつつき歩いてんだか…いくら軽いつつたつて交通事故なんだから楽なわけじゃねえと思うんだがな。」

頭に包帯巻いてギプスもしてるつて話じゃねえか。なのに原付でどっか行つてるつてよ、ご両親心配してたぜ？」

「しようがないよ、いま秋名スピードスターズは大変な時期だから…」  
「しようがねーつつつても限度があらあな。俺も走り屋だからその気持ちはわかるんだが、だからつて大怪我したまま無理していいつて話でもねえだろ」

だよな、いくら走り屋でもそうなるよな。もつと言ってやつてくれ、拓海はタービンからゴミ箱代わりの灰皿を受け取りつつ内心うんうんと頷いてタービンを応援する。

イツキも自分が憧れる峠の走り屋でその実力トップ層からの意見に若干決まりが悪そうに笑いながら給油口に給油ノズルを刺した。「な、ならタービンちゃん、相談んだけどさ、もしどうしようもなかったら池谷先輩の代わりに走ってくれないかな？」

本当はこういうのダメなんだろうけどタービンちゃんは秋名でも顔が利くし、何とかなるならあ…なんて言われたらあ…ヒィっ!」

「それを今の俺の前で言うのか…この大イベントに参加できない俺の前でそんな魅力的な話をするのか…今も涙を吞んで東京行きのガソリン入れに来てる俺の前でそんな羨ま憎らしいこと言うのかお前え！」

「タービン、女がしちやいけない顔してんぞ。というか秋名の話に芦名が首突っ込んでええんか？」

「これが鬼にならないでいられるか!!…はあ…普通は良くない、でも今回はハプニングがあったし緊急手段位ありだ。

そもそも俺らお隣さんだし、イツキの言う通り顔も結構出してるしな。こつちから余計な手出しはしねえけど、そつちから声がかかったなら話は別だぜ」

そもそも秋名スピードスターズは芦名じゃ普通に仲間扱いだしな、とタービンは頷く。

「…あれ、タービンちゃん交流戦見に来れないの？意外だな、てつきり絶対くるもんだと思ってたよ」

「そっういやそっうだな、お前がこっういうのに来ないなんて珍しい」

イツキと同じくらいには走り屋に染まっているシマカゼタービンが秋名対赤城の交流戦に見物に来ないとは拓海から見ても意外な話であった。

普通ならばこの手のイベントには予定を空けて必ず見に行く、それにイツキが便乗することも時々で誘われることも多い。

だが今回に限って見物に行かないという、タービンにしては珍しい判断に首をかしげていると彼女は心底残念そうにして肩を竦めた。

「俺だっけ行きたいさ、こんなの絶対見逃さないって分かってんだよ。でも予定が被っちゃまってさ。これからテューダーとベレー連れて東

京だ」

「お前が峠じゃなくてそっち選ぶって…酒か？」

「それならこんな顔しねーよ。これだよ、これ」

タービンはダツシユボードを開けると中から封筒を取り出し、中にしまわれていた数枚の紙を取り出して手渡す。

「URAFファイナルズ、一般予選のご案内…え！タービンちゃんこれでんのか！！」

「ますます意外だな、お前こういうレースに全然興味ないだろ」

「ねえよ、ただまあ…あいつらが俺と勝負したいっていうからさ…学園行かないでガチ勝負するならその重賞がちょうどいいかと」

「へー…あ、予選通過でトライアルレースとして重賞走るわけね。なるほどそれで勝負しようってことか。でもこれ中央重賞ってなってるよ？」

ダイオーちゃんたちは地方だから、これに示し合わせて出るとなるとちよつときついんじゃない？」

「そこはほれ、まああいつらならなんとかやるつしよ。あいつらつえーし」

「随分アバウトだな…ってかこれは出走表？…なんでこんなまで持ってんだよ」

資料を一枚捲るとタービンが当日走るレースの出走表が印刷されていた、テレビでよく見るウマ娘レースの物だ。

「ちよいちよい聞かれるから説明面倒なんでそれ見せることにしてる。あ、別に問題ねえよ？もうネットのサイトに載ってるし」

「ふーん…」

「そっかタービンちゃん、これから東京か。ってことは向こうでホテル？車中泊はあの二人にはきついだろうし」

「まあな、安いビジネスホテルだ。近場は無理だったからちよいと距離あるところ、ターボに聞いたらおススメ教えてくれたよ。」

俺だけなら車中泊でいいがあいつら二人いるんじゃないやそうもいかねえから出費が痛いぜ」

遠出する走り屋の車中泊は嗜みであると断言するシマカゼタービ

ンもさすがに同乗者にそれをさせるつもりはないようだ、当たり前である。

「あれ、これなんかおかしくね？」

なんとなくレースの出走表を見て拓海はふと違和感を覚えた。出走は10人立ての芝コース左回り、長距離3000メートル。

レースは極めて普通のようなだが問題は出走するメンバーだ、シマカゼタービンが出走するレースをはじめとしたほかレースも見ると拓海は不思議に思うしかなかった。

『1枠1番 マイヤーメイン・渋谷トレーニングクラブ長距離部門

2枠2番 キンダーシャッツ・日本トレセン学園

3枠3番 スイートキャビン・日本トレセン学園

4枠4番 プリシンバル・日本トレセン学園

4枠5番 ブライダルエコー・木更津マラソンクラブ長距離部門

5枠6番 モブクロコ・日本トレセン学園

5枠7番 ヒラノゴウリキー・八千代曙学園陸上部

6枠8番 マイトリート・日本トレセン学園

6枠9番 シマカゼタービン・芦名高等学校

7枠10番ミソラファニー・埼玉栄高等学校陸上部』

（いややっぱそうだよな、タービンのレースだけじゃねえわ。他のもそんな感じだわ…

マイヤーメイン・渋谷トレーニングクラブ、ブライダルエコー・木更津マラソンクラブ、ヒラノゴウリキー・八千代曙学園陸上部。

確かここ、オリンピック選手とか世界ランク保持者とか居る名門とか実力者ばかりで超強いかそんなんばっかだよな。

埼玉栄も確か陸上でスゲー強いはず。サッカー部で聞いたことあつたような…うる覚えだな。

ほかの学校も強そうな陸上部とかマラソンランナーとかいっぱいいる。まあここら辺までは俺も理解できるんだが…なんでだ？

キンダーシャッツ・日本トレセン学園、スイートキャビン・日本トレセン学園、プリシンバル・日本トレセン学園、モブクロコ・日本ト

レセン学園、マイトリート・日本トレセン学園…うーん？

なんで日本トレセン学園の生徒がこれに？ほかのレースにも結構な割合で登録されてんぞ)

「どうしたんだよ拓海」

「いやさ、これ見ろよ」

拓海はイツキにもその出走表を見せる。最初は怪訝そうにしていたイツキであったが、最後のほうまで目を通すとますます不可思議そうに眉をひそめていた。

「タービンちゃん、これ一般の部だよね？なんか…所属がヤベーの多くね？」

「まあ長距離だから出てくる連中はほとんど有名クラブとか有名校の部活で鍛えてる連中ばかりになるだろうとは思ってたがな、たぶん一般も元トレセン生徒が大半だろうよ。」

俺みたいにド田舎一般校帰宅部のガチ高校生なんてレアだぜレア、だから何だって話だが」

「いやそれは俺も分かるんだけどさ…なんで一般なのに半分くらい現役中央トレセンの生徒で埋まってんの？」

「それは知らん」



ディープインパクトは上機嫌であった。今日の調整メニューはともいい結果に終わり、東条トレーナーも満足した結果に。

(ついに来ました来ましたよ！明日はタービンのURAFファイナルズ予選本番、予選通過は間違いなし、でも本気レースが見れるチャンス!!)

ディープインパクトにとってシマカゼタービンが一般部の予選程度で負けるとは露ほども考えていなかった。

何しろ彼女はこの自分が全力を出しても全く歯が立たない天然生

まれの強豪競争ウマ娘、ダービーウマ娘をコテンパンにしてのける怪物であり自分のライバルだ。

そんな相手がいくら有名クラブや有名校の部活でいい結果を残しているくらいの相手に負けるなんてそれこそ普通はあり得ないのである。

(準備は万端、高性能ビデオカメラに高解像度データ用メモリー、そして何より解析要員にエアシヤカール先輩!!)

いやほんと最初は怖かったけど話してみると話が分かる人だし良い人だったよ、ついでにまだちよつと怖いけどアグネスタキオン先輩にも話を通したもんね。

あの人は割とまだマッドなところあるけども実力は確かなわけで…まあカフェさんも一緒に見てくれるっていうし大丈夫。

多分これで解析と調査の準備は万全だね!!)

むふふ…思わず笑いが漏れる。これでシマカゼタービンの強さがすべて計れるとは思っていないが、それでも大収穫間違いなし。

なにより自分のシマカゼタービンコレクションが増えるというものの、彼女に出会ってから少しずつ集めて取り寄せたシマカゼタービンの活躍の断片はスクラップブックにしまい込んである。

トレセン学園に通っていないからこそ広い行動範囲を持ち、そこかしこに痕跡を残す彼女という存在にディープリンパクトはすっかり惹き込まれていた。

何よりシマカゼタービンは行う峠レースを記録した対スポーツカー峠レース映像はとてつもないの一言、マニアが撮影した映像は一区画だけの極めて短い物ばかりで資料にはほど遠い物ばかりだが中には掘り出し物も多数ある。

シマカゼタービンがコーナーで勝負を仕掛けた瞬間の追い抜き、強烈な攻め込みからのギリギリを見極めたテクニック、理解できるものこそ魅了される映像ばかりだ。

シマカゼタービンができるというなら、自分ができないなんて言う理由にはならない、鍛えれば車と違って勝負できるという夢を見られるのだ。

（ああ、明日は休みにしてもらったし、タービンと一緒にレース場で遊べるし、なんて素晴らしい一日。早く明日が来ないかな♪）

気分はルンルン気分、思わずスキップしたくなっちゃうくらいに上機嫌。

「あら、タイプ」

「タイプじゃねえか、随分上機嫌じゃねえか」

「あ、スカーレット先輩にウオツカ先輩、こんにちは」

そんなタイプインパクトと偶然出会ったのは、チームスピカに所属する先輩であり今のトレセン学園を牽引する強豪ウマ娘の二人、ダイワスカーレットとウオツカであった。

ウオツカは先輩であり先代のダービーウマ娘でもある為とてもよくしてくれており、タイプインパクトも頼っている。

「よっ、で？どうしたんだよそんな上機嫌で」

「何かいいことでもあったの？」

「いえ、明日、遠くに住んでる友人がこちらに出てくるのでそれが楽しみで」

「あらそうなの？もしかして編入生かしら？」

「いや、そういうのじゃないんです」

いや本当に、とても残念なことなのですが。その件はきっぱりお断りされちゃいましたよ先輩方。

「バツカだなあ、ただ遠くの友達が東京に遊びにくるってだけだろ？どんな奴なんだ？」

「な!?!バカとはなによバカとは!」

「まあまあ、彼女は普通の学校に通ってる私のライバルです!あ、ウオツカ先輩とは相性いいかも」

たしかウオツカはバイク好きで自分のバイクも持っていたはずだ。自分で乗っている所は見たことがないが。

「なんで？」

「あいつ、峠の走り屋でスポーツカー乗ってるんですよ。明日もそれで来るって言ってたんで」

「マジか!!どんなの乗ってた!!」



やっぱり食いついてきた、ウオツカはバイク好きだがそれと似たようにスポーツカーも結構好きなのだ。

こういうところではシマカゼタービンとも仲良くやれそうである。

「確かスバルのWRX―STIってやつだったかと、結構大きい四駆ですね」

「WRX!?!すっげー!!」

「何が凄いのよ、ただのスポーツカーでしょ?」

「スカーレットは分かってねえなあ、WRXって言えばスバルがWR Cのために開発したインプレッサWRXの系譜、バイク好きにだって分かるあのカツコよさはたまんねえって!」

本格的なレース用に開発されたスポーツカーで今もバリバリのラリーカーとして使われててさ、ランエボに並ぶ名車だぜ」

「はいはい、ところであんたのライバルってどういう意味?」

「そのまんまの意味です、実は…私よりずっと強くて速いウマ娘なんですー!」

「またまた、デイトンまでおんなじこと言っちゃって」

「最近リギルではやってんのか?その冗談」

「もー!二人まで信じてくれない」

「だってねえ?ダービーウマ娘さん」

「なあ?いくら何でも今年のダービーウマ娘千切るとか、ルドルフ会長コテンパンとか盛りすぎだって」

そもそもスポーツカー相手に坂道なら渡り合えるとかいろいろ盛りに盛りすぎて清々しいから笑えるリギルで流行りの冗談、最近はそのシマカゼタービンの事は笑い飛ばされる。

いくらデイトンパクトが力説しても信じてくれるのはほんのわずか、話を通ったトレーナー陣営か一部の超変わり種な癖ウマ娘ばかりである。

つい最近まで一般校相手に揉めていたのが嘘のように忘れられている辺り、実のところたいして生徒の間では気にされていなかったのだろう。

仮にスカウトを受けたとしても、編入したところで馴染めず実力も

発揮できぬまま短期間で消えていくのがオチだとても思われていたのかもしれない。

「ホントなんですってば、彼女は私よりもずっと速いし強いんです。この前も2400負けましたもん」

思い出すと清々しい位ボロボロだったなあ：ディープリンパクトは瀬名酒造で散々シマカゼタービン相手に勝負を挑んでボロクソにされたことを思い出してしみじみ笑った。

ツインターボ、ナイスネイチャ、ナリタブライアン、シンボリルドルフとかわるがわる勝負を挑み、シマカゼタービンは連戦に次ぐ連戦、なのに彼女は本気で苦しいと思うことなくぶっちぎる。

口では辛いと言い、汗をかき、肩で息をして切らしていたとしても、それは四人が動けないくらいにバテバテになってやっというのだから。

まず走る速度帯が違いすぎてお話にならない、そしてそれを支える無尽蔵の体力があまりにも桁違いすぎる。

「ほっほう？じゃあ俺とタービーでやり合ったらどうだろうな？そこまで言うなら勝負してみたいぜ」

「あら？なら私もやってみたいわね」

「…その方が手っ取り早いかも」

いつそ予選会場に二人も連れてって併走っていう名目でやってもらおうか、そのほうが話が早い。

シマカゼタービンなら本番前に一本二本くらい本気で走っても誤差でしかないだろう。

（頼んでみようかな、慣らしにはちょうどいいだろうし：あ、なら私がやればいいわけであって二人が行く必要がないか：うーん：）

いや、いつそあいつにはしこたま走ってもらった方が本番は面白いことになるのでは？などと邪な考えが浮かぶ。

いやしかし一般予選とはいえ実戦だ、真剣勝負にそんなことがあつてはならない。これではタービンにハンデを与えているようなものだ。

シマカゼタービンは確かに強い峠の走り屋だがURAFファイナル

ズではあくまで普通の一般ウマ娘、むしろ不利な立場にあるのだ。

「——つと、あなた本気なの!!」

「なによ、本気じゃなかったら何だっていうの?」

「ありや?」

「この声、サンバイザー先輩?」

「そうみたいね…あの裏かしら?」

ふと耳に入った誰かを糾弾するような声色、それに反論するどこか陰を帯びた声、この学園ではよくある事である。

普通は見えて見ぬふりするものだ、この学園は良くも悪くも普通の学園ではない。ウマ娘レースのための競争ウマ娘育成校なのだ。

しかし糾弾するような声の持ち主が知り合いだったなら話は別だ、もし何かあったりしたら寝覚めが悪い。

デーブインパクト達は互いを見合ってから少し考え、周囲を確認し、目立たないようにそそくさと陰によって用具倉庫裏を覗き込んだ。

「(サンバイザー先輩に…スイートキャビン先輩?どうしたんだろ…)」

「(あ…これはあれだな、うん)」

「(あれね)」

尾花栗毛でお気に入りサンバイザーを常に手放さないウマ娘、サンバイザー。得意距離はマイルで実力は中の上といったところだろうか。

彼女とはサイレンススズカとのつながりで何度か併走したり色々世話を焼いてもらった覚えがある。

そんな彼女と一緒にいるのはスイートキャビン、サンバイザーの同期でまだトレーナーも居なければチームにも入っていないデビュー前のウマ娘だ。

特に会話をしたりした覚えはないが、サンバイザーからは入学当時から一緒に頑張ってきた親友だ。

普段はかなり仲のいい友人同士だったはずだが、今日は様子がおかしい。なぜかスイートキャビンはどこか澁んだ雰囲気醸し出して

おり、それをサンバイザーが糾弾しているようだ。

「あんた、この登録はどういう事！URAFファイナルズに一般の部で出走って、あんた何してるか分かってるの！」

「何ってただの出走登録でしょ、別にトレセン生徒が一般の部に登録しちゃいけないなんてルールは無いわ」

「そんなの詭弁よ、トレセン生徒にはちゃんと専用の枠が用意されてる!!それに出るためのトライアルレースだってあるじゃないの!!」

「でもそれにはトレーナーが居て、デビューしてる奴らがごろごろいる。そんなのに太刀打ちできるわけじゃないじゃない。

あたしはトレーナーも居なけりやチーム入りもできてない、合同教練ばかりの当然デビューもできてない未出走ウマ娘、何もかも違いきるわよ」

「だからって、こんなのいくらなんでもおかしいって思わないの？こんな弱い者いじめよ、格下狩りでしかない!!」

「そののどろが悪いのよ、レースは一番速いウマ娘が勝者、遅くて弱いのが悪いのよ!!」

「そうじゃない、間違ってるわ。あんたが戦うべきは私達でしょ、一般のウマ娘なんかじゃないわ!!」

「はん、何それ、それで負ける勝負を挑めつての?…ふざけんじやないよ!!」

「何言ってるのよ、一緒に頑張ってきた同期でしょ?ライバルでしょ!」

「あんたみたいに一流になったウマ娘に、あたしたちみたいな落ちこぼれの思ってることなんかわかんないって言ってるのよ」

スイートキャビンがサンバイザーを睨む、その目を見てサンバイザーはびくりと肩を震わせた。それはディープリンパクトも同じだった。

それは恐ろしい目だった、まるで目の前のサンバイザーを今にも殺したいと思ってるかのようなどす黒い怒りを宿した瞳だ。

その目が怖い、自分に向けられていないのにまるで自分が見られているようなどす黒い怒り、ディープリンパクトにとってその悍ましさ

は初めての感覚であった。

ディープリンパクトもトレセン学園に入学する前から人生経験は積んできたが、その中でも上位に入る背中から押しつぶしてきそうな重苦しく悍ましいどす黒い感情の発露である。

「(落ち着け、ディープ)」

「(大丈夫よ、こっち見てない)」

思わず後ずさりしそうになったところをウオツカとダイワスカーレットが支えてくれて、ディープリンパクトはその温かさに背中が軽くなった気がした。

「あんたは良いよ。トレーナーが付いて、レースで活躍出来て、重賞にも出れて、みんなにチャホヤされて、引く手数多じゃん。」

あんたはみんなと仲良しじゃん、あんな怪物たち相手に平気な顔して話しかけてさ、一緒になっていろいろやってさ、頼られてさ!!

でもあたしは何? 頑張っても頑張っても結果が出ない、チームにも入れない、トレーナーもつかない、レースにも出られない。

あんな人たちと肩を並べるなんておこがましい、一緒にいるだけで変な目で見られて、話しかけられただけで疎まれる!!

頑張っても頑張っても 走っても走っても、だれもあたしの事を見てください。あたしが未熟だから? あたしが実力不足だから? ええそうでしょうね、何やっても何やってもあたしより上はたくさんいる。

あたしよりすごい才能持ちはたくさんいる、だけどそんなのあたしだってわかってる。だけど、それでも頑張つて…それで今のあたしよ。

あんたにわかるかサンバイザー!! その年の主役たちに噛み付いて、ガチで勝負を掛けられる立場にいてみんなに認められてるあんたにわかるか。

同期が頑張ってるって比べられて、努力も認めてもらえなくて、もっともっとつてずつとずつとせつつかれて…あたしたちの気持ちが分かるか!!

「何言ってるのよ! 私だって散々——」

「御託を並べるな!! ああそうだよ!! あんたは強い、あんたはあいつらと同じ土俵に立つてるだろ!! 強いならさっさとそこから上見てろ!!」

あたしたちの方見て憐れむな!! 同じ土俵にすら立てないあたしたちを見下して悦に浸るな!! 隣に立ってあたしたちを苦しめるな!! 一緒にいるだけで全部苦しいんだよ!!」

「!?」

「そんな目で見るな、そんな顔するな、あたしはまだ負けてない、あたしはまだあきらめてなんかない!! あたしは勝つんだ、期待に応えるんだ、じゃないとどうしてここまでやってきたかわかんないじゃないの。」

もうあたしたちみたいなのにはこれしかないんだよ、これでみんなに実力を見せつけるくらいしかもうトレーナーに見てもらおう術はないんだ!!

じゃなきゃ、あたしはあたしじゃいられない、ここに居場所がないなら、あたしは…」

「キャビン、私、そんなつもりじゃ…」

「解ってる、あんたが正しいなんてこと解ってる。でも、もうこれしかないのよ、私は走る事しかわからないの…」

スイートキャビンがくると背を向ける、その背中にサンバイザーが引き留めようと声を掛けるがその声に応えずスイートキャビンはその場から姿を消した。

(…なんか今期で一番やばいもん見ちゃった気がする)

余りに衝撃的な現場に、ディープリンパクトはサンバイザーに声を掛けようか迷ったが盗み聞きになった手前、ここで下手に声を掛けるのはまずい気がした。

変な気遣いはサンバイザーにいらぬ心労と不安を与えるだけだろう、そう思つてディープリンパクトは二人に目配せする。

ウオツカとダイワスカーレットも神妙な顔立ちで頷き、三人は彼女に気付かれないようそつとその場を後にした。

スイートキャビンの言い分は理解できる、勝てる勝負ができるならそつちで勝負をかけるのは間違つてはいない。

サンバイザーの言い分も分かる、曲がりなりにもレースのプロとして育成を受けているトレセン学園生徒が一般の部でアマチュアや学校の部活経験者を相手にすれば基本は蹂躪でしかないだろう。

どちらの言い分も正しいのだ、だからどちらかが歩み寄るか、どちらも何かを妥協しなければずっと平行線になるだろう。

そんな会話を聞きながらディープリンパクトはレースとはそういうモノだと昔から教えられていたが故か、まあそういう事もあるとどこか冷めていた。

結局のところスイートキャビンは弱く、サンバイザーは強い、そしてスイートキャビンはあきらめずに今も藻掻いて上を目指している、それだけのことなのだ。

(うーん…まあ私がどーたらこーたら言ってもどうにもなんないか)  
このトレセン学園ではよくある話だ、地元では負け知らずのウマ娘でも、地方で優秀な成績を残してスカウトされたウマ娘でも、いざここで走ると何もかもがうまくいかずに芽が出ずに人知れず消えていく。

ディープリンパクトでさえそんな背中を見送ったことが何度かあるが、スイートキャビンのようにならずに泣きながらも去って踏ん切りがつくのなら良い決断だったのだろう。

少なくともあの時のスイートキャビンが放っていた気配は尋常なものではなかった、競争ウマ娘にはそぐわない禍禍しきがあった。

あんな気配をしたまま勝利を得て彼女の望み通り進路が開けたとして、それは彼女が思う人々に誇れる姿だろうか？

(あんなふうに住ったら絶対面白くないもんね)

とはいえ、今のスイートキャビンが納得するにはおそらく勝つしかないだろう、しかしそれで負けたらもうだめだろう。

ディープリンパクトは冷静にそう判断していた。面白くないレースで惨敗したら、それはもうどうしようもないよな、と。

## 第二十八話

UR Aファイナルズ・一般参加選抜予選レースは一般予選に関わらずそれなりの客入りを記録し、観客席を埋まり具合はおよそ3分の1、少なくとも及第点という数字を示していた。

これにはレース場運営はひとまず胸を撫で下ろし、持ち前の経営手腕でそれなりの稼ぎを叩き出す。しかし、その数字に対する一般観客の入りはさほど多いものではない。

人数そのものはそれなりに見えるが、それは参加者たちの身内や知り合い、あるいは固定のファンなどが多く、この予選を見に来た一般からの見物客の数で言えば、せいぜいジュニアクラスのメイクデビュー戦の半分といったところだろう。

それもほとんどの場合、レースそのものに意味を感じている連中ではない。ほとんど面白いもの見たさでできた程度の人間だ。

それ以外はみんな関係者だ、この関係者席で苦い汁をとことん飲み干させられている彼も含めて。

彼はUR Aに籍を置き、後方部門で手広く様々なイベントを手掛けてきた人間だ。そしてこのUR Aファイナルズもまたしかり。

日本独自規格による勝ち上がり型トーナメントレースであり、日本独自規格であるが故に年度末のお祭りレースであるこのUR Aファイナルズは、初レースからまだ歴史は浅いなれどたびたび注目されてきた。

国際ウマ娘レースの中において、後れを取っていた日本が飛躍し始めたこの時代に、この時代の主役たちが自分の得意分野で年末最後にのぎを削り多くのライバルと競い合うこのレース。

時には順当な結果を残した、しかしある時は類い稀な奇跡をも生んだ、国際社会に則らないお祭りが故に世間を賑わすエンターテインメント。

その中に新たな仲間として一般からの参加者を集うというのは、



はつきり言えばURRは賛成であった。この自分でさえ、憎まれ役を買って出ただけであって賛成であった。

ウマ娘レースの世界は広いようで狭い、多くの種別で多くのウマ娘がしのぎを削り合い、その中で頂点に上り詰めるのはほんの一握りではない。

URRと日本トレセン学園はその先にある長い停滞の予感を抱いていた、この時代にも多くの傑物が生み出されすぎていたからだ。

そのエンターテイメント性に富んだ時代は躍進に繋がるが、それゆえにそれに慣れてしまった客層はやがて一通り落ち着いた時代に突入すると一気に離れてしまう懸念がある。

今が異常なのだがそれに慣れてしまつてそれが普通になつてしまい、故に平常時が衰退しているように感じてしまう悪夢である。そのダメージを減らすには新しい風は必要不可欠だと断じた。

しかしだからと言って無作為に、無差別に、オールウェルカムなレースでは意味がない。URRファイナルズはお祭りなれど、走るにはそれ相応の実力を示して資格を見せてもらふ必要がある、当然のことだ。

だから広報で口酸っぱく敵を作るように、挑発的に煽つてやったのだ。そうでなければあんなあからさまなことやる物か。

こんな言葉に気分を害してそっぽを向くようなものには走る資格などない、それに噛み付いてきては資格を示して挑戦してくるものこそURRファイナルズには、日本競争ウマ娘レースの世界には必要なのだ。

だというのに、最後の最後で我々は一つしくじった。URRと日本トレセン学園上層部は、身内の中に潜む病魔に内部から侵されていたことに気付かなかつた。

レース日程が本決まりになり正式な応募期間も順当に進んでいた時の事、定期報告の場で出走希望書類の受付担当がそれを報告してきたのだ。

一般の部に現役トレセン学園生徒とトレーナーが応募している、明

示されている資格に関してはギリギリ許容範囲なのだがどうしよう  
と。

一般の部の規定でも日本ウマ娘学園の現役生には出走権が認めら  
れるはずだ、一部のトレーナーとウマ娘がそう声を上げ、それに追従  
する動きは広がったのだ。

それはまさに青天の霹靂であった、まさか最初から優先出走枠を多  
く持ちトリアルレースの合格基準も低い内部からそんな重箱の隙  
間を突くようなことをやってくる連中が出てくるとは思わなかった  
からだ。

(確かに所属による登録可否の項目は反社等の話であって、中央や地  
方トレセン学園所属は不可という項目は付けていなかった。

資格云々も現役トレセン学園生とそのトレーナーならば登録資格  
には十分、一般基準なのだからそもそも通らない道理がない。

しかし…しかしだ…どうしてよりもよって中央の連中がそれを  
真つ先にやらかした？私には理解できん、あいつらあそこまでバカ  
だったか?)

彼は脳裏で必死な顔で食い下がるトレーナーの顔を拳でボコボコ  
にしながら悪態を吐く。

今回出走を決めたのは多くはデビューしたものの未勝利かつ連敗  
中のウマ娘達、トレセン学園内のトリアルレースに早々に敗退した  
実力の伴わないウマ娘達。

そしてそのウマ娘を指導する新人トレーナーや実力不足なトレ  
ナー、未勝利や連敗で追い詰められつつあった者達。

トレセン学園のトリアルレースに出走を認められなかった、ある  
いはトレーナーもつかずチームにも入れず未出走なまま時間が過ぎ  
た実力不明なウマ娘達。

つまりその多くが実戦を未経験のウマ娘達、あるいは実力不足のウ  
マ娘とトレーナー達。

理由は分かる、賭けたい理由も理解できる、そしてチャンスを見出  
す理由も認めたくないが想像できる。

現実にはその必死さに何もできず、学園理事長や副理事長に何とか

なだめすかしてもらおうように頼むしかなかったがそれもむなしく終わった。

学園理事長や副理事長がどれだけ言葉を重ねても、断固たる決意を見せたトレーナーたちとウマ娘は引かず、生徒とトレーナーを信じる理事長たちにはのちの悲劇を涙を呑んで認めるしかなかった。

いくら言ってもあの連中は聞かなかった、それでも走らせると聞かなかった、負けるわけがないという慢心すらあったかもしれない。

馬鹿な話だ、余りにも現実が見えていない無謀な挑戦だ。

UR Aは宣伝したのだ、高らかに宣言したのだ。UR Aファイナルズを走るには『資格』がいると、百戦錬磨のアマチュアたちを集うと声高に宣言したのだ。

そこらでただ野良レースをしているだけのアマチュアではない、その中でも選りすぐりの実力者を選別してここに招いたのだ。

その証拠にこの一般レースに地方トレセン所属で出走しているのはほぼ皆無、僅かにいるのはUR Aファイナルズなんて眼中になく腕試しに来たアホばかり、地方は中央よりも近い故に気付いているのだ。

《コーナーを抜けて最後の直線、先頭は大洗女子学園バレーハツキユン！逃げる逃げる!!トリツキーな差し足でごぼう抜き!!しかしすぐ後ろにマタカセルシア、マタカセルシア!!

小宮山芸能プロダクション猛追だ、これが新人女子高生アイドルか!?!歴戦の猛者のような追い込みを見せています、追いかけて慣れてます!!》

行われているレースが佳境に入る、幾度となく行われた選抜レースに目をやるとそこには予想でできた光景が広がっていた。

貸与された日本ウマ娘トレーニングセンター学園の体操服に身を包んだ出走ウマ娘達が次々と最後の直線に駆けこんでいく。

先頭を走るのはどれも一般クラブや一般校などから登録したアマチュアばかり、現役トレセン生はほぼ後ろで団子のまま上がってこれていない着外ばかり。

試験結果は順当に、当たり前のように、日本トレセン学園所属生徒

たちが一般部門の出走者に蹂躪されていた。

予選レースの通過条件は一つ、1着を取るか2着に入着することである。そして今まで行われたレースの中で中央トレセン生徒がそれを達成した事例は皆無だった。

「根性おとおお!!」

「だーらっしやああいー!」

栗毛の短髪と尾花栗毛のブロンドがほぼ同時にゴール板を駆け抜ける。わずかながら小柄な栗毛のほうが体勢有利か。

尾花栗毛の外人ウマ娘は僅かに体が浮き上がり最後の所で上体が浮いていたように見える、走り慣れているのはバレー部のほうだったのだろう。

《決まりました! 中距離選抜レース第5戦、1着はバレーハツキユン! 大洗女子学園!! 2着マタカセルシア、小宮山芸能プロダクション!!》

「ばぁありぼおおー!」

「これでも修羅場は潜ってきたんじやい! え…が、外国人舐めんなア!!」

勝てるものか、彼女たちは多くのアマチュアレースで経験を積んだれっきとした在野の実力者ばかり、たとえ経歴が浅くともこのレースのために経験を積んできた実力者ばかりだ。

確かにトレセン学園生は優秀だ、エリートで間違いない、最高の教育を受けてそれを実践できる。まさに英雄の素質を持つ駆け出し勇者だ。

そんな駆け出し装備でレベル5の勇者が、レベル20で特殊技を覚えたスライムを相手にして勝てるものか。

アマチュアレースとはいえ実戦、むしろ整備された模擬レースしか経験していないきれいなウマ娘達はアマチュア故のラフプレーには格好の餌食。

トレーナーたちも何を見ていた、あのウマ娘の中にはお前たちも見ただことのある連中も多く混じっていただろうに。

トレセン学園を去っても走ることを諦めなかった連中の執念、それ

を甘く見積もった結果がこの様だ。

相手についている連中はトレーナーの資格を持っていないだけであってどいつもこいつも歴戦の教育者や指導者や突然変異ばかりだぞ。

オリンピック選手を輩出した者もいる、トレーナー試験に落ちながら学校で地道に研鑽を積んだものも居る、まったくの畑違いな教師ながら積んだ経験をフルに活用するものも居る。

お前らがウマ娘のトレーニングに専念していた時間に多種多様な知識を得て、運用し、蓄積して融合させていった歴戦の教育者たちばかりなんだぞ。

中には芸能界でのオスカー女優や全世界無差別格闘技王者が全力指導するプロダクションや、まったくの畑違いな分野で活躍した部活が変な実力を発揮することまである。

そもそも気迫からして負けている、トレセン学園生も死に物狂いで食らい付かんとするがそんなひよっこのがむしやらなんて何のその、ひらりと躲して彼女たちは前へ行ってしまう。

(勝てるわけがないだろう、お前らが思っているほどアマチュアの世界というモノは甘くない。格下狩りなんて甘いこと考えてる時点で甘すぎる。)

見に来た連中も連中だ、リギルの東条にスピカの沖野、黒沼にあの六平まで：担当まで連れてきて何考えてるんだ、まったく。

あいつらのおかげでもうどうしようもない、ちゃんと見れてるのはあのカノープス位だともいうのか？)

実力不足、経験不足、知識不足、何もかもが日本トレセン学園現役生徒やトレーナーたちには足りていない。

それはこのレースに何を求めてきたのかわからないトップ層のトレーナーたちにも言える事、こいつら自分の立場が分かってここにいるのだろうか？そこから疑いたくなる。

彼ら、彼女らがそこに居てレースを見ていたという時点で、レースで惨敗を喫したウマ娘とトレーナーたちの傷は修復不能なまでに追い打ちを食らっているような状態だ。

さすがにまずい兆候だと思ったのか、彼ら彼女らは担当と一緒に裏に引っ込んでフォローに回っているようだが…この先を走るウマ娘とトレーナーたちの顔色はすこぶる悪い。

午前中のレースで瞬く間に蹴散らされ自信と戦意を喪失したウマ娘とトレーナーたちを見て、午後のレースに挑むトレーナーやウマ娘達は現実を思い知ったのであろう。

きつと今すぐにも逃げたいと思っっているのだろう。彼ら、彼女らの考えていた想定はあまりにも甘すぎた。

「ふん…逃げられるものか…」

もうレースは始まっている、戦いは始まっている。これで敵前逃亡、ドタキャンなんてしようものならそれこそトレーナーとしても競争ウマ娘としても終わる。

彼女たちはもう逃げ場がない、死に物狂いで何とか勝つか、蹂躪されて全て打ち碎かれるか、それしかないのだ。

来年からは徹底的に中央と地方のトレセン現役生徒は登録できないように進言してやる、そう誓った。



地獄だ、目の前に地獄が広がっている。ディープリンパクトは目の前の光景に、目の前の惨劇に、目の前の蹂躪劇に、そう名前を付けることしかできなかつた。

すっかり変装してタービンと一緒にレースを見物しようと思つたら地獄でしたとか何それ笑えない。

《中距離選抜第8レース、1着・サンゴナナ！新宿パルクルクラブ!! 2着・ハントバディ！天香学園!!》

「うっしやあい!!」

「くっ…鈍ったか…」

「伊達に新宿で負けなしじゃねーってことよ。室内ばつかで油断し

「ちやつたんじやない?」

「ただの追っかけでしようが」

「へタレがよく言うわ、ほら相棒が見てるわよ」

「んにゃあ!?!」

勝ち残ってしてやった感満載のやり取りをしている二人の後ろで悔しそうにしているほかの一般参加ウマ娘。

ここまではトレセン学園でもよく見る光景だが今回はさらにその後ろがある。

その後ろ、最下位争いで終始した現役トレセン学園生徒はまさに絶望という様相で明らかに普通ではない状況であった。

悔しさのあまり泣き出す者、激み切った視線を勝者に向ける者、泣くことすらできずに呆然自失と言った者、怒りに変わり苛立つ者、どれをとっても見てはいられない状態であった。

さらに彼女たちを指導していたトレーナーもまた声も何も上げられない絶望の淵に立たされておき、関係者席で文字通り頹れるものや激昂する者までいる。

それはそうだろう、苦勞してトレセン学園に合格したエリートのはずなのに一般のトレーナーですらないインストラクターや学校の先生、あるいはそれ以外にぼろ負けしているような状況である。

(…うん、私があそこにいたら自殺しそう)

特に感情が怒りに走る者は最悪である、裏方フォローに回った東条からの情報では、レース場の隅で互いに罵り合ったりウマ娘とトレーナーの間で殴り合いになりかけてもいるらしい。

おかげでシマカゼタービン目当てで見物に来た有名どころのトレーナーとウマ娘達は全員裏方に引っ込んで仕事をせざるを得ず、完全な休暇であるデーパーインパクトを除いて仕事で忙しくなってしまう。

なまじ頭を働かせて、選抜レースのお手伝いとサプライズとして堂々と大勢で乗り込めるようにしたトレーナー陣の誤算である。

おかげでほかのレース中は暇であろうシマカゼタービンに、暇なきに引き合わせて併走訓練してもらおう構想はパーだ。

まあその分、自分がみっちり併走訓練して大いに楽しませてもらったが。

「みんな張り切っちゃってるねえ。見たことないヤツばっかだけど…なんか面影のある奴がいるな。妹さんか？」

レースを間近で鑑賞できるコース脇で、関係者の中に混じって見物していたトレセン学園のジャージ姿のシマカゼタービンはけらけら笑う。

見慣れた白地の体操服に短パン、その上に前を開けたままジャージを着た彼女は目の前の地獄を見てもまるで当たり前のように笑うばかり。

困惑を隠せないトレセン学園関係者やレース場スタッフたちと気合いをいれるアマチュアたちとはまるで違うどっしりとした立ち振る舞いで怖ろしく浮いていた。

「タービン、私としてはどうしてこんなことになってるのか説明してほしいんだけど？なんでみんな負けちゃうのさ!？」

「いやいや、そんなの自明の理だぞ。トレセン学園の連中、明らかに経験も覚悟も足りん、死にに來たようなもんだぞあれ」

そりゃツインターボが珍しく曖昧な顔で『やめといたほうがいいよ…うん、ガチで』とか言っていたわけである。

なおチームカノープスはそんなツインターボの忠告を受けてトレセン学園で普段通りに過ごしている、超が付く英断である。

(でも確かに、ツインターボ先輩の言うことは正しかった…うん、考えてみれば当然だった)

今まさに柔和な顔を浮かべているサンゴーナナとハントバディに限らず、これまでのレースで一般からの参加者たちが醸し出す雰囲気は尋常ではなかった。

その痛烈で濃厚な戦意、それを向けられた中央トレセン生徒たちは真っ先に掛かり、あるいは気圧されてペースを崩して勝ち筋から消されてしまう。

しかもそれは中央トレセン生徒だけにあてられたものではない、一般の出走者全員が互いに向け、互いににらみ合う。そんな状態だ。



その中に挟まれて中央トレセン生徒は狂わされていく、そしてボロボロの成績を残し情けない姿を晒して自らの無力さを思い知らされる。

もしまだメイクデビュー前の自分がここに放り込まれたらどうなる、負けるだろう、確実に。

「やつほー、君達、ちよつといいかな？」

熟考に沈んでいたディープリンパクトの意識が引き上げられる、ふと声のしたほうを見るとそこにはタービンと同じトレセン学園の体操服を着た栗毛の大人びたウマ娘が手を振っていた。

「やあ、私はマイヤーメイン、しがないただのマラソンランナーだよん」

「マイヤーメイン…ああ、じゃあ俺と一緒にレースの」

「こそ、やー光栄ね。群馬の青い彗星と今年の二冠ウマ娘にまさかここで会えるなんてさ」

思わずディープリンパクトはぽかんと口を開けてしまった。その名は一時、シマカゼタービンがアマチュアレースを荒らし回って賞金を稼いでいた時に噂されたものだ。

彼女曰く、愛車を買うための資金集めだったらしいので噂も予想も何もかも的外れだったのだが、アマチュア界には激震が走り様々な憶測が流れていたのだ。

当然ながらそんな話をシマカゼタービンは知る由もない、アマチュアレースは出稼ぎの遠征先なので噂でもちきりになる頃にはルンルン気分であ車を買って峠に戻っていた。

「人違いじゃねえかな、俺は——」

「シマカゼタービンでしょ、芦名の。そっちはディープリンパクト、山と都会の怪物揃い踏みとかフライングじゃないかしら？」

「私は今回走らないけど？一回やる？千切るけど？」

「併走の申し出はありがたいけどパス、そのバケモンみたいな体力はないのよ」

「貶すか褒めるかどっちかにしろよ…なんなんだ？」

初対面の相手なのいろいろ容赦のない物言いにシマカゼタービ

ンは少し大きさに頭を抱える仕草をしながら問い返す。

その姿にマイヤーメインはけたけたと笑って面白がり、次の瞬間にはその笑みを好戦的な笑みに作り替えた。

「4年前、群馬を中心にアマチュアレース内を引つ掻き回した青い髪の中学生の噂でアマチュアレースは持ちきりだった。

群馬の目ぼしいレースをやり切ったらふらっと栃木、次に埼玉で数回、全部ぶっちぎりの大逃げでライブ拒否の直帰。

どのレースでも着差は大差か一バ身以上も付けての文句なしの完勝、そのとんでもない走りと姿を聞けば聞くほど走って見たかった。

でも生憎あんたとぶつかることがなくて、始まったのと同じく唐突にあんたはレースに出なくなった」

それで安心した？冗談じゃない、勝ち逃げされてみんなやる気満々になった。マイヤーメインはニツコリと挑発的な笑みを浮かべてシマカゼタービンを品定めするように見る。

「噂は間違いじゃなかった。峠の走り屋、車とガチをやる怪物は確かにいた」

「調べてくれたとは光荣だ…だがそれで？俺に何か言いに来たのか？」

「別に、宣戦布告に来ただけよ。今はあなたたちにまだ勝てそうにないけど…ね？」

瞬間、ディープリンパクトの背筋に感じたことのない悪寒が突き抜けた。目の前の女、このウマ娘の穏やかな笑みの裏。

これは戦意だ、だがこれまで競い合ってきたウマ娘達からは感じたこともないほどに熱さ、凝縮され、練りに練られて固まることを忘れた溶岩のような戦意だ。

いったいどれほどの熱情をもってすればそこまでになれるのか見当もつかない。

「まさかこんな機会が来るなんて思いもしなかった、こんな時代が来るなんて思いもしなかった」

なんだこいつは、なんだその表情は、なんだその目は、なんなんだこの自分を押しつぶさんとする重圧は!？」

ワカラナイ、理解できない、まるで初めての感覚にディープリンパクトの思考はかき乱されるしかなかった。

「まさかプロと戦える機会が来るなんて、まさかあの3冠ウマ娘とも戦える機会があるなんて、まさか平地で峠の伝説と戦える日が来るなんて。」

あの日はもう無理だっと思ってた、中央にも地方にも行けなかった私がさ…ねえ、ディープリンパクト」

マイヤーメインの瞳がディープリンパクトをじっと見る、そのどろりとした熱情に浮かされた目にディープリンパクトは思わず悲鳴を上げた。

それ程までに怖ろしい、ただただ恐ろしいとしか感じる事の出来ない濃密な重圧になすすべもない。

「本当ならあなたと戦えるチャンスなんて絶対に来なかった、どれだけ焦がれようとも私たちには到底届かなかった。

でも今は手に届くかもしれないところにある。この高ぶる気持ち、わかつてくれるわよね？」

分かるものか、理解できるものか、なんなのだお前は、なんなのだその目は、これが競争ウマ娘か、断じて違う!!

今にも逃げ出したい、なのに足が動かない。今もこうして体面を保っているだけで精いっぱいだ。

「こんなスペシャルな機会に巡り会うなんて一生無い、だから絶対に私は負けられない。私はこのレースで頂点に立つ、二人とも、勝負を受けてくれるかしら？」

マイヤーメインは自然な動作で右手を差し出してくる、まるで良い勝負をしようとするように。

だがディープリンパクトにはそうは見えない、まるでその手が自分を今にも握りつぶさんとしているかのように見えている。

その手がいつの間にか自分の首を掴んでいても少しも驚かない、それが当然だという雰囲気は彼女にはある。

呼吸が苦しくて仕方がない、マイヤーメインから目を逸らしたいのに逸らせない。

(殺される!!)

「その前にその物騒な気配を引つ込めやがれ、こいつにはまだ早い」  
その手を遮るように、シマカゼタービンは不機嫌そうにマイヤーメインからデーパーインパクトを引き離した。

彼女が前に出てデーパーインパクトを隠すように背中中で庇った途端、マイヤーメインから放たれた重圧から解放された。

「気が急ぎ過ぎだぜ、マラソンランナー。てめーみたいなベテランがクラシックのガキ相手に威張り散らしてどーするよ」

「あら、走り屋のあなたがその子を庇うの？この時代の無敗三冠に一番近いと言われているこの子に手加減なんて必要ないじゃない。

いえ、そもそもこんなレースにわざわざやってきて、仲間の負ける姿を見たらすぐ消えた連中よりよっぽど肝が据わってると思うけど？」

「それとこれとは話が別だ、あいつ等だつてやることあんだろうが。ベテランならベテランらしくしろってんだよみつともねえ、それ相応の態度つてもんがあるだろうが。」

そもそもお前は年上だろう、自分の歳くらい考えて行動しなよ、年上が年下を虐めて悦に浸るなんざだらしねえだけだろうが」

「私は19、大学生よ。確かに年上だけどレースでは関係無い…ああ、もしかしてあんた、実は中央に入りたいとか？」

そうね、現役二冠ウマ娘様に覚えめでたきやこのレースで目、付けてもらえるかもしれないし？ま、ほとんどいないけど」

「何下らんこと抜かしてやがる、そんなもんに興味などないわ。そもそも、それはお前だろ？」

マイヤーメインの表情が一瞬こわばり、開かれた口から言葉が詰まる。ほれ見た事か、シマカゼタービンは余裕しやくしやくで肩を竦めた。

やっぱりか、そう言いたげな表情で見つめ返すシマカゼタービンにマイヤーメインはバツが悪そうに顔をそむけた。

「…あなたには関係ない」

「そうかい。まあ俺が言いたいのは、レースで勝負付けるんならレー

スでやれ、ってことだ。ルールに則ってりや誰も文句は言わねーよ。だがそれ以外ではちゃんとそれらしい態度でいるんだな。じゃねえとお前だけの問題じゃ済まなくなるぜ」

「峠の走り屋風情が知ったこと言うわね、田舎者は田舎者らしくお山の大将でも気取ってなさい」

「そのお山で伊達に修羅場は潜っちゃいねえんだよ都会っ子、そういうあんたは都会で大将できてんのかい？」

シマカゼタービンは不敵に笑い、マイヤーメインの胸ぐらをつかんで自分から顔を近づけて真正面から向き合った。

「カリカリしてんじゃねえよ、周り見て一度頭冷やせ。じゃねえとお前も誤解されるぜ？わかつたら失せな」

挑発的にやりと笑って文字通り額を突き合わせて見つめるシマカゼタービンに、マイヤーメインも負けじと額を押し付け返して睨む。

その表情、その立ち振る舞い、見たことのないシマカゼタービンの姿にディープインパクトは思わず見惚れてしまった。

数秒間のにらみ合い、一瞬とも永遠とも感じる時間はあつという間に過ぎ去り、小さい舌打ちと同時にマイヤーメインのほうでシマカゼタービン突き放した。

「…今回は引いてあげる。でも優勝は私が頂くからね、お互いベストを尽くしましょう？」

「そりやどうも、ま、頑張りましょうや」

「そう言ってもらえるとは光栄ね、ディープインパクトさんもよろしくね？」

「ひゃ、ひゃい!!」

じゃ、レースでね。そう言って去っていく、嵐は過ぎた、ディープインパクトはなんとなくそう思っていた。

「やれやれ、随分カリカリしてんな…ディープ、あんまり悪いほうに取ってやらんでくれ、きつと悪い奴じゃねえ。イライラしてるだけだ」

「ひゅいつ!?!」

「やっぱビビってたな、世話のかかる奴だ」

「うえ!?いい、いやそんなことありませんよお…って、誤魔化せないか」  
正直に言えば、いまはそんな風にごまかす余裕なんてなかった。  
ディープリンパクトは小さくため息をついて気を落ち着かせながら  
小さく頷く。

「うん、正直飲まれてた。なにあれ、心臓止まるかと思ったよ」

「まあまだ中坊だもんなお前、気にすんな。ありやもう殺気だ殺気、百  
戦錬磨の兵だけが持つてていいってやつだ」

それを普通に耐えるお前はなんなんだよ、思わず問いかけたくなっ  
たがディープリンパクトは我慢した。百戦錬磨はこいつも同じなの  
である。

「お前どころか、ターボにだって早えよ、ルドルフかブライアン位じゃ  
ねえと耐えられんだろう。」

だがよ、あれくらいアマチュアレースじゃそこそこ普通だぜ。あれ  
よりもっと狂った気配を醸しだしてるの大勢いるしな」

「うええ?なにそれ、アマチュアレースってそんな魔窟だなんて聞い  
たことないんだけど?」

「そりやお前らみたいの名門とか名家とかいう連中はそうそう足なん  
て運ばんだろ。しかも行ったところであつうの場所だ。ああいうの  
はもつとコアな場所に潜んでるもんさ」

不適合者の吹き溜まりと同一視されてるからな、シマカゼターピン  
は肩をすくめる。どうやらプロの世界とは相性が悪いらしい。

《中距離部門第10レース、1枠1番・テューダーガーデン、芦名  
高等学校。1枠2番——》

《中距離部門最終レースの最終チェックを行います。出走者は指  
定の待機室へ》

そろそろ中距離の部が終わる、次のレースは少しインターバルを置  
いて長距離部門だ。

「最終ってこたあベレーのか…そうだ、ちようどいいし飯にしながら  
話すか、次の最初だし」

「見に行かなくていいの?」

「いいのいいの、あいつらならまず負けねえから。それより飯だ飯、腹が減っては戦はできぬ」

「なあんでそうなるかな、食べ過ぎて走れませんかなんてやめてよ?」

「はっはっは!言ってくれるじゃねえか」

「わっぷ!?!」

「ディーブ、飯ってのは燃料だ。燃料ってのは基本満タンか多めに入れとくのが吉ってもんさ、多けりや吹かして減らせばいいが、無けりや車は動かんからな」

ぐしゃぐしゃと頭を手荒く撫でられる温かい感触に思わずムーツとディーブインパクトは唸り、微笑むシマカゼタービンの顔を真正面から見据えてその頼もしい笑みに目を奪われた。

「心配すんな、負けやしねーさ。ま、峠の走り屋舐めんじやねーつてな。それよかお前、ここ良く知ってんだろ?このうまい飯、教えてくれよ」



うーん、これはなかなか…東京競馬場もといレース場の一般向け食堂の隅っこにある席で本日食べるのはこの食堂特製ニンジンハンバーグ、なかなかうまい。

トレセン学園のメニューをアレンジしたヤツらしくて、ハンバーグに甘く煮たニンジンが一本ぶっ刺さってるっていう豪快なトンデモメニューだったからついでに面食らうが、いい肉にいいニンジン、喰えば喰うほど食欲が出るな。

「うーん♪これはなかなか♪」

「美味しいでしょ、このハンバーグ、お値段の割にとっても美味しいの」

何より意外とリーズナブル、ウマ娘サイズデラックスセットで1200円、人間サイズデラックスはまさかの950円、しかも大盛無料

ときた。

デラックスセットはミニサラダ、汁物、ごはんかパン、お替り無料ドリンクバー、食後のパフェまで付いてくる。

レース前なんで人間サイズ大盛950円、いやあなかなか至福ですわあ。

肉汁たっぷりお肉とご飯のコンビはたまらん、それにニンジンの甘さが絶妙、すつと切れてパクツとイケて舌で押しつぶすとジンワリと甘み、たまりませんなあ！

中央の競馬場の飯ってなかなかお洒落さんだったのね、前世でも食って見たかったわ。前前世でも来ればよかったな。

前世じゃ高崎のこじんまりとした食堂しか縁がなかった、他の所じゃ出入りさせてくれんのよ。高崎もうまいんだけどやっぱ中央は金のかかり方違うわ。

「そんでお前さんはそれで足りんのか？」

でも俺がががつ食ってるときにお茶飲んでるだけってデイーブ…おごつてもらってるわけじゃねえのに罪悪感するんですが？

「食べる気失せちゃったよ…それでさ、さっきの話で気になったんだけど、みんなカリカリしてるのってなんか訳あるんでしょ？」

「おお？そりやそうなんだが…なんだ、お前さん気付いてないのか？あいつらがめつちやカリカリしてるの、お前らのせいだぞ？」

「なにそれ？」

なんだよ気付いてねえのか…まあ住む世界違うつちや違うから当たり前前なんかね。それがあいつらの中じやなんか尺度違うのか…

「あんな、ここは知ってる連中はアマチュアの中でも手練れが集まってる。そいつら、なんでアマチュアのまま手練れになったと思ってるだよ？」

早い話、諦められんかったからだよ。走って走って走りまくって、自分の足で栄光の場所に登りたくて仕方がない、そういう連中だ。

だができなかつた奴らはそれこそ大勢いるんだ、途中であきらめたやつも、惜しかつた奴も、そしてそもそもスタートラインにすら立たなかつた奴も、な。





ね？最初はそこまで期待してなかったのに、出てきてみれば中央の有名人勢ぞろいなんだろ？そりやテンション上がるわ。

「なのになんだよ、中央。お前ら、自分の仲間がコテンパンにやられだしたらどんどん見る価値無くなったみたいに席外しやがってさ」

「いや、それはみんなフォローに回っただけで…」

「そりや俺は理解できるさ、俺はな。一応聞いてるし、あいつ等みたいに切羽詰まってないし。」

だが俺みたいに余裕がないあいつらからしたら実力見せたのに負けた仲間のほうしか見てねえんじや納得できねえよ。

アマチュアはアマチュアでしかないから見る価値なんてない、お前らには価値がないって口で言ってるようなもんだぜ」

そりやイライラもすんだろうよ、中央から格下狩りに来た勘違いどもをコテンパンにして解らせたなら、お前らそいつらの味方してんだもん。

まあそりやあいつらはお前らの身内だしフォローすんのは道理だが、それで感情が納得するかと言えばそりやしねーわな。

俺はそういった理由がねえからある意味他人事なわけでこんな風に見えるだけなんだよ。

「その話、私に聞かせてもらってもいい？」

「おん？」

なんだなんだ、今日はやけに知らない顔に絡まれる日だな。声がするほうを見れば、俺の着てるジャージとは違う年季の入ったジャージ姿のウマ娘。

ははん？こいつも中央所属だな。見りやわかるぜ、ジャージの着こなし方がめっちゃ似合ってるもの。

「君は？」

「スイートキャビン、次のレースで一緒に走るわ」

「おお、よろしく。確か中央だったよな？」

「緊張感ないわね…中央なのだけど？」

「だから？」

「…あーもう、こいつもか」

だって緊張したって仕方ねーもん、なるようにしかならんさここま  
で来たら。

「スイートキャビン先輩!?なんでここに居るんですか?」

「それは私が聞きたいんだけどね、ディープリンパクト…ってか何で  
私のこと知ってるの?話したことあったっけ?」

「い、いやあ、その…あ!サンバイザー先輩と一緒にいる所をちよこ  
ちよこ見かけて、話聞いたことあって!」

「ふ、ふうん、あいつが…やっぱ悪いことしちゃったよね…」

ああ、俺、置いてけぼりです。しかしまあなんだ、ディープ、やつ  
ぱトレセンでも有名人なのね。

明らかにスイートキャビンのほうが上級生っぽいのに立場が上つ  
て感じがする。

「ってそうじゃない…えーと…なんであんた前開けてんの?」

「え、そこ!?!」

「これか?ああ、こういう事さ」

スイートキャビンの不思議そうな視線に俺はジャージのファス  
ナーを閉めて見せる。当然、胸のせいで胸の下あたりで突つかかっ  
た。

どうやらトレセン学園のジャージでも、胸囲の戦闘力には抗えな  
かった。良い素材使ってるしやらかいからいけると思ったんだけど  
ね、群馬トレセンみたく防弾ってわけでもねえし。

いやはや、こういうのは見るからうれしいのであって自分でやって  
たらただ楽なだけであとは視線集めるだけなのよ。

「入らねえのさ、適正サイズだとな。交換してほしかったんだが予備  
がないって言われちゃった」

「なるほどね、確かにそんだけデカいとそうなるか…ってそうじゃな  
い。聞きたい事があるの、いいかしら?」

「かまわんよ」

どうぞ、と俺は隣の席を引いてやる。そこにスイートキャビンがド  
カツと座った、いい太ももしてんじゃん。

「なんでこの大会に出ようなんて思ったわけ?」

「なぜに?」

「別に馬鹿にするわけじゃないわよ。あんたら目立つから気になってさ、高校でなんかクラブでもやってんの?」

あの二人、あんたのこと自慢しまくってるわ。トレセン時代のあいつらはうちらも知ってるから目立ってるのよ」

ははーん、なるほど、それで俺がどうしてこんなところにいるのかこいつは不思議なわけね。そりやそうだよ、俺だって理由がなきやこねえもん。

というかこんなこと言ってくるってこたああいつら勝ったな? まあ当然だろうよ、芦名でもそこそこ強いし。

「あいつら勝ったか、当然だな」

「うちらとしてはあり得ないくらい強くなつてて頭おかしくなったかと思つてただけどね。」

話を聞けば姐さん姐さん、そればつか。姐さんってあんたのことでしょ? やれ峠最強とか、車にだって負けないとか: あんなに強くなつたと思つたら変わりすぎでしょあいつら」

「何やってんだよあいつら: やつぱ見に行かなくてよかつた」

別に予想してたわけじゃないよ、ただいやな予感したただけだよ。

「止めなくていいの? タービンそういうの嫌がるじゃん」

「お前は吹聴して信じてもらえたかい?」

「いや全然: そっか、放っておけば勝手に消えるからか: つてかなぜ知っている!?:」

「想像つくわ」

ことさら競馬関連となると最初から信じてもらつたことなんて前世じゃほぼなかったかな、意外な事に。というか大体前世と変わらんなお前。

「えーと: 放っておかないでくれると嬉しいのだけど?」

「む、すまんすまん。俺の理由か: 恥ずかしい話、ダチのためさ。俺はとつくに別の道に進んでるつてのにあいつらは俺と走りたいつてあきらめねえからよ。」

だからちよいと背伸びして遊びに来ただけさ。ま、やって駄目なら

諦めつくつしよって話よ」

「…あんたも苦勞してるわね。でもいいの？負けたらそいつら、あんたのこと失望するんじゃない？」

「まったくもって、そうだよな、怖い怖い。ただの高校生にこんなデカい大会は荷が重すぎるってもんだつてのにねえ」

「そんなこと言いつつ逃げないんだ？あんたは別に逃げてもいいのに」

「逃げんよ、やるからには。あんただってそうだろう、こっちに出るつてこたあよ」

ターボから聞いてんだぜ？中央と地方にはそれぞれ優先出走枠があつて、それを決めるトライアルレースがあるつてことくらい。

でもそれを蹴つてこいつはここに居るんだ、なら理由は理解できるわ。

「…気に入らないわね、その目、あたしが嫌いな連中の目にそっくり」  
「それは残念。俺はあんたのそういう判断ができて行動できるところ、嫌いじゃないがね」

「どうだか…あたしは格下狩りに来ただけよ」

「それが何さ、真つ向勝負だけが正しいなんてことねえだろ。時には回り道も必要さ」

そもそもあれだ、見るからに自分が勝てそうにない道に突つ込むくらいなら多少なりとも可能性がある道に行くのは普通だろ。

目の前に高い壁があると、それ超える手段を指定されてないならわざわざよじ登る必要はない。

目的がその壁の裏にあるなら手段はいくらでもあるだろ。迂回していいなら迂回するし、はしごがあるならはしごを使うし、派手に爆薬で吹っ飛ばすのもありじゃん。

「で、ここに居る連中は格下だったかい？」

「…見込みが甘かったのは認めるわ、でも私だつて気持ちは負けてない」

俺を睨みつけてくるスイートキャビン、良い目してるぜ。気圧されてる連中多いのにこいつは負けてない。

「だったら対等だな、レースじゃ手加減しねーぜ？」

「言つてなさい、悪いけど勝たせてもらうわ。レースは遊びじゃない、あたしたちトレセン学園生徒の実力を見ておきなさい…ま、2着はくれてやるわ」

その言葉、そっくり返すぜ。まったく…良い目してやがる。こういう目をしてるのがいいいいのか。このレース、楽しみになってきたな。

## 第二十九話

天高く太陽が上がった昼下がり、いつもなら練習に励んでいるか、何もする気も起きないでただベンチでだらけているか、それが彼女の、スイートキャビンの日常だった。

そんな彼女、スイートキャビンは東京レース場の芝コースレース場の片隅で外ラチに背を預けたまま一枚の古い写真を眺めていた。

何度も折リたたまれて、擦り切れ始めた思い出の写真。入学して間もないころにそこで出会った仲間たちと始めた写真を撮った何気ない集合写真だ。

自分のほかに5人、恥ずかしげに笑うサンバイザーと肩を組む栗毛のウマ娘、そんな彼女達を抱きかかえるように笑う大柄で色黒なウマ娘。

カメラを天高く掲げて自撮りのようにする栗毛の活発なウマ娘とその後ろでおっとりした蘆毛のウマ娘と肩を組む自分。

今でも鮮明に思い出せる、あのころはまだ何も知らない夢見る少女だった。あの時は、自分がクラシック3冠を取ってやるんだと意気込んでいたっけ。

この写真をみんなでもって、大切な何かの約束の証みたいになって…いつの間にか支えになって、呪いになって、今やただの儂い思い出になった。

自分たちは現実打ちのめされた、自分たちの才能の限界に苦しめられた、何もかもうまくいかなくて、やがて自滅に近いやり方で消えていく。

みんなのために諦められないと、私はこんな風にはならないと、そう心に言い聞かせてがむしゃらに走って走って走って、すべて擦り切れかけてここまで来た。

(とはいえ、スタートできただけでも幸運だったのかもね…呆れるわ、結局、なんも見えてないだけだったじゃないの)

もうすでにこの写真に写るウマ娘でトレセン学園に残っているのは自分とサンバイザーのみになってしまった。そして今度はサンバイザーだけになる。

(次は自分の番か…まったく、あきらめの悪い愚か者の末路にはお似合いなのかもね)

次に消えるのは自分か、最後に残ったサンバイザーは無事に卒業できるだろうか。いや、結局自分たちも無数にある結末に落ち着くだけか。

(私は間違えた)

私たちは間違えた、私たちは傷ついた、何度も何度も間違えた、何度も何度も傷ついた、間違えて間違えて間違えて、傷ついて傷ついて傷ついて、そして何もかも失って、ここまで行きついたのであつた。夢なんて持たなければよかった、希望に縋らなければよかった、意地になって食らい付いていなければよかった。

自分がやりたいなんて思わなければよかった。3冠ウマ娘に憧れなんか持たなければよかった。ウイニングライブのセンターなんて憧れなければよかった。

私はなりたかった、一流の競争ウマ娘として名を馳せたかった、G1の頂に上り詰めたかった、たくさんファンレターが欲しかった、煌びやかなウイニングライブのセンターで踊りたかった。

自分のトレーナーに出会いたかった、自分のチームに出会いたかった、胸を張って学園を歩める競争ウマ娘でありたかった。

シンボリルドルフのようになりたかった、スペシャルウィークのようになりたかった、ハルウララのようになりたかった、トウカイテイオーのようになりたかった。

(あいつみたいに…私はなりたかった)

自分は自分が思い描いた最高のスイートキャビンになりたくて、サンバイザーのような自分になりたくて、そのために努力して、そしてすべて失敗し続けてきた。

自分らしく、自分に合った、身分相応の暮らしに満足していれば、きつとこんな惨めな思いなんてしなくてよかった。



背伸びなんてしないで地元の高校に進学して、地元の友達と馬鹿みたいに日々を楽しんで、ただの一般人として生きる未来が自分にはあつたはずだった。

そうやって生きていればきつと自分はここにはいなかっただろうけど、きつと別の未来がきつとたくさんあつただろうに…

(でもそれでも)

思い出に逃げていたスイートキャビンは写真を畳み、深呼吸して目を背けていた現実には再び目を向ける。

後悔するだろう、ずっとずっと過去を悔やんで生きるだろう、バカな夢で青春を不意にした自分を後悔し続けるだろう。

写真を見て俯いていた顔を上げる、瞬間、自分たちを包み込む濃厚な熱気と戦意の渦に飲み込まれた。

ゲート入り直前故に互いにけん制しあうアマチュアたちが発する殺気と闘気がせめぎ合う渦だ、顔は笑っていても雰囲気は全く笑っていない。

酷いものだ、自分以外のトレセン学園生はすでにこの熱気の中に飲まれて恐怖しすっかり委縮してしまっている。

自分自身、きつと一度切り替えができたからこそ落ち着いていられるだけだ。彼女に出会えた幸運がなければきつと同じように気圧されていただろう。

(私達なんか見ちゃいない、か：見てるのは上、私達みたいに下をみて歯あ食いしばってなんかいない)

この熱気の渦を一身に浴びせかけられながら、場違いに飄々と伸びをしていくウマ娘。シマカゼタービンはそれを全く気にも留めずに片眉を顰めながら足元を気にしている。

その姿は平静そのもの、このレースに参加するアマチュアたちから注がれる闘気に一切の反応も示さない：いや、少しだけ違った。

スイートキャビンの視線にだけは反応して、何とも気の抜けた笑みでひらひら手を振ってからサムズアップして気安い笑みを浮かべている。

ここにいるウマ娘達とはまるで心持が違う、レースで走るのを楽し

みに来たウマ娘の単純そうな笑み。

それが酷く浮いていて、どこまでも眩しく見える。きつと彼女がこの場を一番楽しんでいて、そんな時期が自分にもあった。

(ああそうか、なんで捨てちゃったんだろう)

そんな自分をあたしはとうの昔に捨ててていた、勝つために必要だと思っただけから、だった気がする。

私は走っていれば幸せを感じられていたはずなのに、もう遠い昔のことのように、本当にもう曖昧にしか思い出せないのだ。きつと心が思い出したくないのだろう。

ここ最近はずつと苦痛でしかなかった、走るたびに失敗の繰り返しで、走るたびに心が痛かった。だから、こんなことを考えたのだ。

「…回り道して、そのルート間違っちゃどうしようもないじゃん、私」  
結局、自分がいる世界はそれが大事だ。結局上をがむしやりに目指す以外に道はない。それは自分もよくわかっていた。

だがそれだけで生きていけるほど世界は甘くないのも事実、時には回り道や迂回も必要なのだ。

問題はそのルート選択を自分は盛大に間違ってしまったという事だろう、今にして思えばなかなか自分も慢心していたという事が分かる。

言い方は悪いが、上には上がいるように下には下がいたのだ。自分ほどれだけ現在の成績が不振でも、トレセン学園に入学しそこで暮らせる実力があつた。

これまでリタイアしていく多くの同期、先輩、後輩を自分は見送る側に立っていた。学園側から在学に関する注意喚起の一つももらつたことはなく、出走できずとも学生としてはしっかりやっていた。

だがそんな自分になれなかったウマ娘が、トレセン学園に入学すらできずにいたウマ娘がこの世界には多くいた。

それで彼女たちの多くはレースを諦めた、しかし諦めなかった者がここにいて。トレセン学園生が考えたこともない本当の裏道街道を走って地力をつけてきた者たちがここにいて。

ああきつと、そんな中にいる実力不足な自分たちはとても場違いに

見えているんだろうな、スイートキャabinは自嘲の笑みを浮かべて内ラチの向こう側に見える観客席のほうに視線を向けた。

向こう正面の位置にあるこのスタート位置からは米粒のようにしか見えないが、関係者用の観戦スペースにはビッグネームのトレーナーやウマ娘達が顔を連ねているように見える。

耳を澄ませると上空から静かなローター音が聞こえる、上空を見上げるとカメラ付きドローンがフライパスしているのが見えた。

午前中からレースを撮影している運営のドローンだ、この情けない姿は運営に記録されているというわけだ。

《ゲートの準備が完了しました、アナウンスに従ってゲートインを始めてください》

でもそれでも、自分は自分で選んでここに来た。スイートキャbinは、心を無にしながらゲートのある坂の上を目指して足を踏み込んだ。



ガチャンと後ろで扉が閉まる、前世じゃそれなりに慣れていたけどウマ娘になって入ってみるとまたなかなか景色が違うのなゲートつてやつは。

今も昔もただのせまつ苦しい鉄の囲いでしかねーけど、ウマ娘でもこれが苦手だっていう奴いるよね。まあ前世よりもずっと教えるの楽だけでも。

さてさて、久しぶりの平地レースである。しかも芝、都会の中央管轄レース場、都会の芝なんざ前世の有馬以来だぜ。

東京競馬場・芝長距離・左回り・距離3000メートル。天気は良好、コースコンディションも良し：距離は余裕だが、なあ？

もう一回、右足を少し踏み込んで足場を確認するが、相変わらず何とも言えない踏み込み辛い柔らかさだ。

ダートの砂みたいな滑りはないけどなんかぐにやつとしてるとい  
うか力が吸い込まれそうな感じ、踏んだらそのまま踏み千切りそう  
なこの柔さ、相変わらず慣れんな。

「こればかりは相性ってやつかね…」

小さく独り言、俺って競馬場と相性悪いよねホント。アスファルト  
とか泥道のほうがよっぽど走りやすいわい。

芝も砂もどっちもなんかこういうところは走り心地悪いんだよ  
…嫌だなあ、躓いてコケたらいい笑いもんだ。

しかもこれ、ダイオー達録画するとかなんとか言ってたし…そう  
いえばダイオー達は間に合ったのかね？

今朝は到着遅れるとか聞いていたが…結局午前中には間に合わ  
なかったな。

「ふう…」

そろそろ切り替えよう、まずはこのレースに勝つことだ。周りの空  
気は正直いつて最悪、このドロツとした感じは正直好きじゃねえ。

これなら妙義のアイツのほうがずっとマシ、性格悪くてもここまで  
ドロツとしてないし勝負に嘘はつかねえから。

せっかくだいいい場所で勝負できるんだからもう少し楽しんでも良  
くない？いや、まあ俺が変わってるだけなのは分かっているから言わん  
けども。

小さく嘆息してから息を整えていつでも飛び出せるよう半身に  
なって構える、ウマ娘では普通の出走スタイルだ。

隣を見るとゲートの中でクラウチングスタートをしようとしてる  
連中がちらほらいる、陸上経験者だとそっちがやりやすいんかね。

そんな疑問を感じていると周囲の空気に一本筋が入り、冷たい緊張  
が流れるのを感じて背筋がしゃんとする。

この感じはあれだ、スタート直前。係員がスタート用に旗を上に掲  
げて…降ろした！

勢いよくゲートが金属音を立てて開く。それと同時に、俺は右足を  
強く踏み込んで、勢いよくゲートを飛び出した。

スタートはまずまず、少し勢いをそがれたがポンと前に飛び出せ

た。そのまま勢いに乗って前に、いつも通り大逃げだ。

周りを見て少しだけ他の連中の走りを窺う、他の連中もスタートはまずまずだ、スイートキャビン以外のトレセン連中はやや遅れたか？

現状横一線、だが前に出ようとしている連中は少なめ、先行狙いか。逃げはいなさそうだが、邪魔はどうやらしてこないらしい。

なら逃げさせてもらおう、足の回転を徐々に早めて体を温めながら加速、先頭に飛び出してリードを稼いで距離を取る。

おおよそ三馬身、時速50km、最初の直線の終わりが見えてきた。もう少し加速して距離を取る、コーナーで少し後ろを見やすいように。

最初のコーナーは軽いインベタ、加速しつつ内ラチに余裕を取りつつ5センチまで寄せてコースの掴みを覚えて体幹を調節、荷重調整の狂いを正す。

やはり走りにくい、どうも加速が悪いし力が芝に吸い込まれている感じがする。踏んでも推力が想定通り稼げてない、力が逃げちまってる。

この先を考えると調整が必要だ：近所の市民体育館でコース借りるか。

時速55km、体の調整をしながらカーブを利用して後ろを見つつ、耳を澄ませて後ろの足音を聞き分ける。

先頭は二人、マイヤーメインとスイートキャビンか。足の踏み込みの強さから見て、加速をかけているのはこいつらだけか。

甘く見られたわけじゃねえ、まだ動向を見てるって所か：うっわ、気配が怖いね。もう少し楽しもうって気は：まー余裕ねえか。

本気だな？ならば俺も本気で行かねば無作法というモノ。こいつらは全員、素晴らしい競争ウマ娘に違いない。

俺みたいなエンジョイ勢とはわけが違う、将来の命を懸けて勝負に來てる。故に細心の注意を払い、最高の敬意を以て。

「ぶっちぎってやる」

やってやろう、勝ってやろうじゃないかその勝負、情けない姿をディープ達に見せるわけにはいかんしなあ！

最初のコーナーが終わる、良い感じに体が温まってきた、ここからさらに上げていくぞ。

コーナー終わりと同時に立ち上がり加速、時速60km。一瞬力を抜いて半クラッチ入れてからギアを一つ上げて一速から二速。

ここも思いのほか足場が悪い、加速が乗らん、できる限り観客席正面のこの直線で速度を稼ぐ。さらに加速をかけて、時速60kmから70km。

何の問題もなく一気に駆け抜ける、直線半分ですさらに時速80km、中間にあるスロープからさらに半分で上げられるだけ上げながら足元を確認しつつ踏み込みを変える。

このまま加速を掛けつつ第2コーナー、ここもインベタ。今度は本気で、攻められるだけ攻めて、推力を稼いだうえで上げられるだけ上げる!!

「上げてきた!?まだ上げるか!!」

「嘘でしょ、このままカーブに突っ込む気!?自殺行為よ!!」

「まずい、撤収させろ!急げ!あのバカが来やがった!!」

ラチの外で駆けずりまわっている係員たちの声が聞こえる。

コーナー入り口から前半、内ラチから3センチに攻め込む。ギリギリまで体を寄せて、加速を掛けられる限界まで体を寄せて、推力全てを加速と前進に回しながら駆け抜ける。

コーナー中盤から後半、内ラチまで2センチ半までさらに攻めこみギリギリまで体を寄せる。体幹をフル稼働、姿勢を維持しつつさらに踏み込んで加速、歩幅を調整して立ち上がり準備。

コーナー終了、内ラチから離れると同時にさらに踏み込んで加速、立ち上がりと同時に半クラに入れて二速から三速にギアチェンジ、踏み込みと同時に繋げてさらに加速!!

体感時速80km、二度目の後ろ正面、段差の向こうでゲートの格納を急いでいる係員が慌てて引っ込む姿が遠くに見える。

慌てて内ラチの中に駆けこんでいくのが少々滑稽だ。問題ない、オールクリア。

前半分は加速を維持しつつ通過、段差を超えて、残り半分、加速を維持したまま最終コーナー、時速85!!

最終コーナーを見てみる……ここもやっぱり足場が悪いな。いまいち速度の加減がしにくい所が踏み荒されて余計に柔らかいと来てる。インベタグリップで抜けるには少々足場が悪い、この速度でやる踏み込みだと強すぎてブレそうだ。

初戦で都会の芝に慣れてない状態では少々冒険が過ぎる。息を吸う、4つ数える、息を吐く。

コーナーに加速を最大限に掛けつつインベタで突入、加速して推力をさらに背中に稼ぎ、ギリギリまで遠心力を稼いで自然と体をもつていかせる。

体を弛緩させて半クラッチ、ギアを上げて四速に、全身を集中させて神経を研ぎ澄ませて、血の流れを意識して、筋肉の動きを注視して、最高のタイミングで繋げる!!

「フン!!」

超インコース、コーナーの中ほど。一番荒れた地面を選んで、一番踏み荒らされた一点を狙って、深い足跡を踏み抜き、思いつきりねじ込んで踏み込み、溝を作って蹴散らしながら一瞬のブレーキング。

稼いだ遠心力に引っ張られて体がブレて浮くのを重心の荷重移動で制動しつつ速力を前に逃がす、ブレーキングした足をすぐに引き抜いてステップに移行。

軽く芝をタップするように蹴って姿勢維持しつつ、柔らかい表面をヒールアンドトウの要領で蹴散らしながら速力を維持、カーブの中ほどで姿勢を切り替えて方向を変える。

尻を外に流してインベタを維持しつつ姿勢を左に回し、正面に内ラチが来るように、距離を維持しつつ横っ飛びロングドリフトに移行。目前に風切り音を立てる内ラチ、姿勢を体幹で制御しつつ内ラチ3センチを維持、普通ならやらん魅せる技だが役に立つときは役に立つもんだ。

姿勢を維持、落ちる速度をできるだけ維持しつつステップを絶やさず、横っ飛びにコーナーを抜けながら姿勢を変えて立ち上がり準備。

「ヴン!!」

コーナーが終わり、体があらぬ方向にすつ飛びかける直前で再び思いつき踏み込んで一瞬の制動。

同時に前に向けて踏み込み、荷重移動で重心を前に傾けつつ逃がしていた速力を再び前に、思いつき踏み込んで立ち上がり加速。

内ラチから流れるように離れつつ推力を背中に、思いつき加速を掛けながらスムーズに復帰。

時速80kmから再加速、最後の直線、このまま一気に駆け抜けて仕舞いに――

「!」

瞬間、背筋にピリツとした気配を感じた。遠い気配だ、俺には到底届かない。けれども彼女は諦めてない、追いつく気で踏み込む音が確かにした。

やはり来たか、マイヤーメイン、そしてスイートキャビン。わずかに、かすかに、けれども確実に聞こえたのは彼女たちの踏み込み。

距離は遠い、はるかに遠い、何故なら俺は最後の直線だがあいつらはまだ向こう正面にいる。聞こえる荒れた息遣いからして、もはや走るだけで精いっぱいではない。

それでも二人は踏み込んだ、まだ勝負は捨ててないってわけだ。ならばそれに応えよう、残り400メートル、時速82km。

息を吸う、息を吐く、息を整え、大きく吸い込む。体を整えて、姿勢を整え、弛緩させて半クラッチを入れる。

一瞬の減速、力が抜ける体を制御して走る。息と筋肉の動き、心臓の動きと血流の動きを見極める。

心音を合わせ、血流を読み、筋肉を軋ませて、関節を調節し、最高のタイミングですべてをつなぎ直してさらに踏み込む!!

「ヴウンツ!!」

吸い込んだ息を吐きだしながら芝を踏み込み加速、全身全てを最高の状態に繋ぎ直して5速、時速84km、残り380メートル。

350、85、300、86、250、86、200、87、150、88、100、88、50、89!!



体感時速90km、ゴール板の前を一気に駆け抜けてから最短距離で無理なく減速、内ラチのほうに身を寄せてゆつくりクールダウンをしながら立ち止まった。

うつすら汗がにじむ額に付いた芝を拭い、少しだけ上がった息を深呼吸しながら整えて戻す。よし、これで完璧。

あまり上出来ってわけじゃないが、まあ久しぶりの都会の芝でこれなら上等なもんだろ。いい汗かいたぜ。

「ま、こんなもんかね。さて、ディープは…お、いたいた」

関係者用の観戦スペースのほうに目を向ける。ディープのヤツ、ダイオー達と一緒にいるじゃんか。なんだよあいつら、間に合ったんか。

それに東条さんにブライアンと…あれ？あの白いのはまさかゴールドシップか？なら神妙な顔で肩掴んでんのは担当トレーナーか。

その横にいるのは…あれ、ダイオー？影分身？いや…胸が小さいな、つてことはあれがトウカイテイオー？

世の中不思議だな、いやここだと遠縁だからか？似てるのに全然似てねえじゃねえか、主に胸。

他にも見たことあるのがいっぱいいるなあ…あ、オグリキャップ、なんも食ってないのってなんか新鮮なこと。

あとグラスワンダーとエルコンドルパサー、なんだそのドヤ顔は？お前さんらなんでそんな得意そうなんだ。

そんなことするなら周りの奴らすっごい目で俺のこと見てくるんだがどうにかしてくんね？圧が凄いわ。

さて、ずっとコースにいても邪魔だし、後ろの連中が来るまでラチの外で待っていきましょうかね。

## 第三十話

正直に言えば嫌いだっただ、話を聞いただけでもシマカゼタービンと言うウマ娘は気に食わない相手だとトウカイテイオーはずっと思っていた。

聞けば聞くほど常識を無視したようなことばかり繰り返すウマ娘で、それでいて実力はあのシンボリルドルフが全く歯が立たないと豪語するほどで、それでいてかつて憧れだった彼女の姿を蘇らせた人物だった。

グラスワンダーとエルコンドルパサーは彼女について怖ろしい相手だと語った、常識では計れない怪物だと言って挑むべき存在だと認めめた。

ナリタブライアンは見たこともない闘気にあふれた笑みを浮かべて語らなかつた、それが答えだった。言葉は不要だ、食い千切るのみ。デーブインパクトは興奮気味に語っていた、最高のライバルだ、いくら走っても追いつける気がしないこの世代最強だ。故に次こそは勝つ、未来の3冠を取ってその上で勝つ。

シンボリルドルフが興奮したように語るのだ、追い付けなかつたと、敵わなかつたと。そして自分の限界はまだまだ先だと見せつけられた、あれは新世代の風になると語った。

彼女に会った誰もかれもが告げるのだ、奴は強い、怪物だ、挑みがないのあるライバルだ。あり得ない話だった、嘘みたいな話だった。

中央や地方のトレセン学園に所属していない、ウマ娘レースについて興味すらなくスカウトを断った世間知らずな高校生を相手に当たり前のように実力を認めている。

気にならないわけがなかつた、そしてまったく好きになれる要素がなかつた。

気に食わない、その存在が気に食わない、自分らしくないが気に食わない、自分たちの全てを否定しているような存在がとにかく気に食

わない。

何なんだそのウマ娘は、往復18キロの峠を毎日ランニング？時速45kmで登りだす？下りなら時速100kmもザラ？峠の下りならスポーツカーとだって互角？

バカげている、あり得ない、そんなのただのおとぎ話に決まっている。そのはずなのに、周りの知り合いはそれを認めてさも当然のように受け入れている。

事実は確かにある、あの皇帝をさらに磨き上げて蘇らせた酒蔵のウマ娘、最新の3冠ウマ娘をより高ぶらせた酒蔵のウマ娘、今一番3冠に近い彼女をしてライバルと言われる酒蔵のウマ娘。

友人であるスペシャルウィークの友人で学園を去ったウマ娘が、一世を風靡した黄金世代の二人が、辛くて逃げだそうとした自分を引き留めてくれたあの逃げの小さい師匠が、みんな口々に認めるのだ。

群馬には、芦名には、峠には、自分たちの想像を超えるはるかにイカレ狂った怪物が走っているのだと。

それが気に食わなかった、自分たちの世界を無作法に食い荒らすその存在が気に食わなかった、相手は中央どころか地方レースにすら登録していない一般人だというのに身の程もわきまえずにだ。

だから教えてやる、スカウトを断ったなら関わって来るなど、実力の違いを教えてやると。

(…って、思ってたんだけどな。なんか、違うなあ…)

だがしかし、現実と理想というのは往々にして噛み合わないものだ。トウカイテイオーは満を持して憎き在野の怪物をその目で見定め、何とも言えない肩透かしめいた脱力感に見舞われていた。

早い話が、実物を見たら今まで思ってきた恨み節を言うような気分でなくなっただけだ。

(なんだろう、なんか親近感と言うか、なんかシンパシーあるんだよねえ)

ふいにトウカイテイオーの脳裏に過る思い出、黄金の杖、ファンタジーな風景、空飛ぶ船に空に浮く島、ゴルシファー…いかんいかんあぶないあぶない、思わず思い出に耽りそうになってトウカイテイオー

はひとまず思い出を追い出す。

なんだかそれと似たような苦勞を知っているような親近感があるのだ、あり得ない話なのだがなんか話せば色々話が合うんじゃないかという確信がある。

ツインターボによく似た青いショートヘアに飾り一つ着けていない両耳、ツインターボ譲りだが色がはつきりと分かれた赤と青のオツドアイ。

大人びた風体でトレセン学園生だからこそわかる驚くほど鍛え上げられた肉体、そこから醸し出される不釣り合いな緩い雰囲気。

何よりツインターボの従姉とは思えない脅威の胸部装甲、お姉さんな風体なのはまあ良しとしてなぜそこまでデカイのか、ほんとに親戚なのか。

明らかにツインターボの遺伝子が仕事をしていない、実はスーパークリークの親類の間違いではないのか。

なんだろうか、なんか違う、ツインターボの従姉と言うには何か違う。そんな釈然としない気持ちのトウカイテイオーのすぐ近くで、サイレンススズカは噂の彼女を見つめて率直な感想をつぶやいた。

「確かに…鍛え上げてるね」

「あなたもそう思いますか？スズカさん」

「ええ、私たちに匹敵するというのは言いすぎじゃない」

一緒に眺めていたグラスワンダーの返しにサイレンススズカは頷く。

同じ逃げの戦術を好む自分だからこそわかる、あの体つきは逃げウマ娘の物だと。しかし自分の中にある知識をいくら照らし合わせても類似する鍛え方をしたウマ娘は思いつかない。

これまで多くのウマ娘と競い合い、多くの逃げウマ娘のデータを見て研究し、自分の逃げ戦術を研究してきたサイレンススズカの知識をもつてしても、シマカゼタービンの立ち姿はまったくもって異質でしかなかった。

「でも…とても不気味。理由が何かは分からないのだけど…スペチャんはどう？」

「え、そんな感じはしないですよ？なんかすごいなあとは思いますが……ほら、あの子一般なのに全然鍛え方が違うようですよし」

「う、うーん、そこなのかな……うーん、なんなんだろう、不気味、でも怖いってわけじゃないし……いえ、これは分からない？」

「あ、あのスズカさん？」

「うーん……」

「わわ、スズカさんここで回っちゃだめですから!!」

「あらすぺちゃん？」

「はっ……グラスちゃん、い、いやいやこれは違うよ前みたいなことじゃ……ひよ、ひよええ……ごめんなさい」

「あ、あら？スぺちゃん、私そんなつもりじゃ……」

「うーん……」

「グラス、出しちゃいけないオーラ出てマース……まあそれはそれとして、さすがタービンデース」

考え込み、治らない癖が出かけたサイレンススズカをそれとなく立ち止まらせるスペシャルウィークの後ろでグラスワンダーがしゃなりと微笑む。

その笑顔は笑っているのに笑っていないと形容するにふさわしい、まさしく武者にして大和撫子。

そしてそれを何か勘違いしたスペシャルウィークはしよげて平謝り、予想外の謝罪に思わずグラスワンダーもキョトンとしてからおろおろ、その横でサイレンススズカが左回転。

その愉快な漫才の横でヤレヤレと肩をすくめるエルコンドルパサーは、それを横目に目の前の彼女の仕上がりで心を躍らせていた。「ここまで不気味に仕上げられるとかどんなマジックですか？」

「流用とアレンジ、解析と分解、再設計と再結合、徹底したすり合わせ……彼女の得意技です。何がどんなふうにご混ぜりこんでるか見当が付きません。」

さすがは葦名流剣術の次代剣聖、今なお実戦で通じると言われるあの流派を修めた実力、ぜひ手合わせ願いたいものです」

「グラスちゃん、解るの？」

「ええ、一応私も武術は少々嗜んでいますから。エル、あなたもそうでしょう」

「冗談キツイデース…リアルでゴエモンやれる人とやりあうのは遠慮します。」

それはそれとして、あれがレース用に調整してきたタービン：デーパーが夢中になるのも納得です」

データ収集と観戦に集中したいからと客席の一番端っこで一人カメラを手に集中しているデーパーインパクトの姿を思い出し、エルコンドルパサーは小さく見えるシマカゼタービンの姿を舐めるように見る。

恐ろしいまでに不気味で底が見えない、一般と言うには不釣り合いなほどに鍛え抜かれているが同時にそれくらいしかわかる者にもわからない、その底の見えない不気味さが彼女にはある。

父のプロレスを見て、幾度となくその鍛錬と努力を垣間見ていたからこそ、エルコンドルパサーはその一端を感じ取る事はできたがそれゆえになおさらわかってしまう。

彼女は強い、そして怖い。この自分の経験をもってしてなお、彼女の走る姿を完全に想像することができないでいる。見えない、読めない、解らない、故に不気味な存在であり続ける。

だからこそ燃える、そんな理解しきれない相手に滾る、デーパーインパクトもそんな彼女にすっかり夢中だ。もし自分の世代に彼女がいたらと考えると非常に残念でならない。

いや、それとも居なかったのが幸運ととらえるべきなのだろうか？ふとそんな風に思っていると、エルコンドルパサーは客席の入り口から騒がしい駆け足の音が響いてくるのを聞いた。

「やっ到着いた!!」

「早く展開しなさい!!」

「皆さんすいません！ 場所少し空けてください!!」

バタバタと慌ただしく駆け込んできたのは東京では見慣れない制服を着た3人のウマ娘達、校章を見るとそれは地方トレセン学園の物だとわかる。

3人は両手で大きな荷物、軍用と思しき重厚なペリカンケースやゴツく見るからに重そうな軍用ラップトップPCを抱えており、それでも足りなかったのか背中にも大きなリュックサックを背負っている。その姿にエルコンドルパサーはすぐに気付いた、あの制服は地方の群馬トレーニングセンター学園の制服だ。という事は彼女たちはシマカゼタービンの関係者か？

客席出入り口近くの壁際に陣取っていたアグネスタキオンとエアシヤカールが場所を譲ると、3人はお礼と会釈をしてそこに次々と荷物を設置すると中身を出して手早く設置し始める。

その手際は本職の軍人かと思うかのような素早さで小型アンテナを組み上げコードをつなぎ、ラップトップとバッテリーと思しき四角いコンテナにつなげる。

その姿に周囲の注意は一旦集中するが無関係な者は慌ただししい遅刻者がやってきたただけだとすぐに逸れる、しかしエルコンドルパサーたち中央所属の全員の目がその3人の姿に釘付けになっていた。

「え、ボク!？」

「カワカミさん…じゃないわね？」

「ブルボン? いやまさか…」

「否定、隣にいます」

慌ただしく飛び込んできた3人の姿を見てトウカイテイオー、キングヘイロー、黒沼トレーナーが三者三様の驚きを見せる。

成長すればおそらくそうなるだろうという見本のような、そんなウマ娘達であった。

だがよく見れば、トウカイテイオー似の少女はともかく他は似ているがそれだけだ。

分厚い軍用ラップトップを開いて何かを操作するカワカミプリンセス似の少女は茸毛であるし、表情と雰囲気はどちらかと言えばキングヘイローのようである。

アンテナを組み上げて全体をまとめるミホノブルボン似のウマ娘は金髪碧眼で見た目は外国人のようであり、表情豊かで喜怒哀楽がはつきりしている。

コンテナと各所をつなげる配線を担当しているらしいトウカイテイオーによく似た少女も非常によく似ているがやや大人びており、特に体格の成長と一部主張が著しい。

その姿に思わずトウカイテイオーは自らの胴体に目を落として、目の前の自分のそっくりさんと自身の体軀を見比べた。

トウカイテイオーは決して貧相なスタイルではない、むしろ均整の取れたかわいらしい纏まった美形と言えるだろう。

しかし相手はより磨きをかけて大人の色気も纏わせた各部のムチムチ感が半端ない別の魅力を漂わせている。

「む？ツバキプリンセス達か、彼女たちも見学に来たのか」

「姉貴、知り合いか？」

「うん？シマカゼタービンの走り屋仲間だよ、群馬トレセンに在学している。」

テイオーのそっくりさんがホクリクダイオー、金髪碧眼のブルボン似がノルンファンング、どっちもかなりの実力だよ。

で、葦毛がツバキプリンセスなんだが…お前は会ったことがあるんじゃないか？彼女、お前のこと話してたが」

「そんな覚えは…ああ、案内してくれたアイツか。タービンの友達だったな、そういえば」

「忘れてたのか？珍しい、彼女も相当な強者のはずだが」

「そうなのか!? ディープと走ってる姿はそうは見えなかったぞ…まさか、騙されたのか？」

「騙されたな、ブライアン。噂は本当かもしれん…向こうの作戦勝ちだな」

「惜しいことをした。あの時は結局、タービン相手に千切られっぱなしだ…で、3人は強いのか？」

「峠では強い、車のレースは圧巻だった。レース場ではまだわからないが…仕上がりは上々なようだな？」

（ま、負けた…このテイオー様が…）

現実是非情である、さすがにどうしようもない戦力差にトウカイテイオーは打ちひしがれた。



確かにそこそこ仕上がっていた、そのせいで余計に己の戦力不足を痛感する。圧倒的に、女としての魅力は負けている。

「ダイオー、バッテリーは？」

「問題ない。ツバキ、立ち上げは？」

「10秒頂戴。アンテナ接続よし、電波よし、稼働率90%：問題なし。各部接続完了、いつでも」

洗練された迷いのないタイプピングでラップトップPCを操作したツバキプリンセスが情報を読み上げる。

それを聞いて頷いたノルンファンクが一度展開したすべての機材を睥睨し、小さく息をついて静かに号令を下した。

「ハッチ解放、1番から3番、射出用意。諸元入力！」

「諸元入力：完了。システムチェック開始、メインコントロー、チェック。サブコントロー、チェック。」

カタパルト、チェック。充填ガス、チェック。放出バルブ、チェック。バルブノッカー、チェック。

フラップ、チェック。メインローター、チェック。内部バッテリー、チェック。電気流量、チェック。

カメラ接続、チェック。録画状況、チェック：チェック完了」

「ダイオー！」

「ハッチ確認、射出方向確認、周囲の安全確認。皆さん！ドローンを発射しますのでどうか驚かないようお願いします!!これは会場にも許可を得ている機材ですので!!」

「なんだありや？」

「まるで映画の軍隊みたいだねえ…」

関係者用観戦スペースの一角に物々しい金属ケースをいくつも開いて、中から機材を展開した群馬地方トレーニングセンター学園から来た彼女たちが操作する機材を見て興味深そうにしているアグネスタキオンとエアシャカール。

その目の前で何かを入力し終えたツバキプリンセスはラップトップにつなげたガングリップ型のスイッチを引き抜き、トリガーと思しき箇所を覆う安全装置を外して引き金に人差し指を掛ける。

瞬間、ひと際引き締まった顔つきになったノルンフアングが合図のように腕を振り下ろし、ツバキプリンセスは引き金を3回引いた。

圧搾空気が抜ける軽いパスパスツ!!という音と共に、開かれたコンテナから撃ちだされた球体状の物体が一瞬の滞空と同時に四方へ散る。

「ドローンだ、最近の地方はハイテクになったんだねえ、羽が見えなかったよ」

「いや、ハイテク過ぎるぞ…あれアラサカの最新モデルだぞ、まだ発売前のはず」

散っていくドローンを見上げて暢気な感想を漏らすアグネスタキオンの横で、エアシヤカールは引つかかるものを感じているようだった。

作業に没頭していた彼女たちは空に舞い上がったドローンを見上げてひと心地付いたように安堵の表情を浮かべていた。

「全システム正常に稼働、通信状態は問題なし、カメラ画質もよし…さすがすごい画質、髪の毛一本まで見えるわよ」

「よかったあ…これでダメってなったらマジやばかった」

「カンパン生活は免れそうですか…残念です、いろいろ用意してたんですよ?楽しみにしてたのに」

「レーション生活なんてまっぴらごめんよ、あれで活き活きしてんのはあんただけでしょうが。ダイオー、あんただけ太鼓判押しといて何で遅れてんのよ」

「だってやっぱ最高のデータほしいじゃん、なら最高のヤツがいいと思つて兄さんに頼んでナイトシテイ支社のレース用最新モデル回してもらったらヤベーことになった」

「最先端技術の吹き溜まりじゃないですか…頼信さんも相変わらず妹に甘い」

「アルバイトだよ、ってかノルンも人のこと言えないでしょ。まあ最初はうまく行ってたんだよ、向こうのプロジェクトチームももっと試験運用したかったらしいから乗り気だったしき。」

なのにどう勘違いしたのかミリテクが輸送の邪魔してこのザマ、速

達輸送トラック一台に装甲車含めた一個中隊ブチ当てるとかふざけてんのか。

おかげでVさんとジャツキーさんに奪還依頼出さなきゃなんなかったんだかんね、武村おじさんにバレてめっちゃ怒られたよー！」

「あの連中が考える事なんか分かんないわよ、どうせ碌でもないふかしくに踊らされたんでしょ」

「良い銃と装備を作る会社なんですけどねえ…なんでこうはっちゃけちゃうんでしよう、だから印象悪いのに」

最近世間を賑わせている大事件のしようもない真実を知ってしまった気がして、聞いてしまった人々はとりあえず記憶の底にしまっておくことにした。

「つてかさ、最高のドローンならもつとすごいのが作れる連中がいるじゃないの。わざわざあんたんとこのじゃなくても」

「…思い当たるけど絶対に嫌だよ」

「でもあいつらなら少なくともほかに大きな迷惑をかけるリスクは減るわよ?」

そう言つて何か含みのある笑みを浮かべるツバキプリンセスは、自分の足をポンポンと叩いてみせる。

それを見てすぐに合点がいったのか、顔を真っ青にしてホクリクダイオーは慄いた。

「666をソロで抜けるつての!?裏葦名だけでも命がいくつあつても足んないのにその先もやべーじゃん、抜けられるわけないでしょ!!」「ツバキ、それはいくら何でも酷ですよ。忍術研究部の件をお忘れで?遭遇できたのは奇跡ですよ」

「そうだよーそれに帰すのだから大変だったでしょ、練り歩いたじゃん!一緒にやったんだから知らないとは言わせないよー!」

「構わん、行け」

「ワケワカンナイヨー!?アノトキダツテメツチャヤバカツタジャン!!サイゴハリユウダヨリユウ!!」

何やら愉快なことになっている、3人ともよく似ている別人であるというのはここにいる全員が理解している所であるが知り合いに似

ている顔立ちと姿で何ともコミカルなことをされているというのは何とも面白い所だ。

先ほどまでせかせかと遅れを取り戻そうとしていた3人は声を掛けられないほど焦っていたのだが、こうやってみるとどこにでもいる普通の地方トレセン学園生徒だ。

「不思議な事って続くときは続くのねえ…まさかテイオーさんのそっくりさんまで出てくるなんて」

「おや？なんか含みのある言い方ですなあ、さつきからなんか反応おかしかったのと何か関係が？」

面白いものを見つけたように探りを入れるセイウンスカイにキンググヘイローは少し言いづらそうに口ごもり、観念したように答えた。

「…実はあのシマカゼタービンと同名同姓でよく似てる友達がいるのよ。不思議な事に性格も背格好もほぼおんなじ、思わず本物かと思っちゃったわ」

「え、なにそれ知らない。というかそれももう本人なのでは？」

「違うわよ、彼女高知住まいだもの」

「高知？そりやまたなんで知り合ったのそれ？」

「ウララさんの友達よ、よく電話で話してたから自然と混ざるようになってね。直接は会ったことはないの」

「それじゃ断言できないんじゃない？」

「学校の制服が芦名のセーラー服じゃなかったわ。えーと確か去年の…あつたあつた、ほら」

キンググヘイローはスマートフォンを操作してハルウララから貰ったらしい写真を画面に映す。

どこかの休憩室で撮られた写真らしく、ワイシャツタイプの制服に白いジャケットを羽織ったシマカゼタービンに似たウマ娘が二人の少女に挟まれてソファアで居眠りしている。

片方は身のほどもある長い黒髪の少女、もう一人は赤毛の短髪でスカジャンを羽織った少女。その二人に挟まれているウマ娘の少女は、件のシマカゼタービンよりも若干子供っぽく見える。

3人は肩を寄せ合ってすやすやと寝息を立てており手には携帯

ゲーム機が握られ、画面にはレースゲームの待機画面、完全に寝落ちしたゲーマーのそれである。

しかし見た目ではなんの接点もなさそうなる3人がこうして肩を寄せ合って眠る姿は愛くるしさがあり、見ていると和む一枚であった。「なるほど…で、なんで写真持つてるんですかね?」

「ウララさんのよ、あの子が間違って送ってきちゃったの。可愛い写真だから消すのもつたいなくて」

「ま、確かに違う感じだねえ…噂の走り屋さんとはなんか違うわ」

「あなたも調べてたの?」

「そりゃね、一応あの会長さんをぼろ負けにしたって噂が立つくらいだし」

ニヤリ、と何か含みのある笑みを浮かべるセイウンスカイ。それにキングヘイローはやれやれといった風にため息をついた。

「でもそこまで情報は集まんなかったよ、走り屋界隈ってネットでもかなりアングラでさ。ブラックボックスみたいになっててセイちゃんの手には負えませんでしたよ」

「どうだか…そろそろ始まるわよ」

「お、じゃあお手並み拝見と行きますか」

喋っているうちに気が付けばレース寸前、ゲートインが始まっており次々とウマ娘達が向こう正面のゲートに入っていくのが見える。

その簡素な出走直前の風景を見つめながら、ある者は分かり切った未来を描きながら、ある者は未だ疑いを持ちながらで、ある者はただ好奇心と期待を胸に、そのレースの始まりを見届けるために息を呑む。

その後ろでは、トウカイテイオーとホクリクダイオーが互いに僅かな間にらみ合い、すぐに固い握手を交わして意気投合していた。



聞き慣れたゲートが開く音が響く。その瞬間、会場はいつもと変わらぬ声援と歓声がとどろきウマ娘達をレースに送り出した。

《ゲートが開いた、各ウマ娘いいスタートを切りました。まず飛び出したのはシマカゼタービン、ぐんぐんと前と進んでいきます。これはまさかの大逃げだ。

後ろに続きますのはモブクロコ、そのすぐ後ろにスイートキャビン。そこから一バ身後ろキンダーシャツ。ここに居ましたマイヤーメイン追走!》

「逃げか、なかなか決まってやがるな」

「ええ、でもこのペースは…」

「大逃げか?」

大きくリードを開いていくシマカゼタービンの加速は止まらない、まるで何も考えていないかのようにどんどん加速して後ろを突き放して前へ前へと進んでいく。

その姿に大半の観客は大きく囁し立てる、立派なムードメーカー扱いだ。

それを観客席から見ていた六平、ベルノライト、オグリキャップもそのきれいな走行フォームに感心しながらレースの行く末を見守っていた。

「良い走りをしている、ツインターボのそれとは違うが戦い方は似ているな」

「ターボちゃんが教えたのかな? 従姉のお姉さんだって聞いた。でもそれだけじゃなさそう」

「そうなのか?」

「うん、あのフォーム、ターボちゃんにも似てるけどもつとべつの…メジロ? いやまさかね」

オグリキャップが感心している横で事細かに分析しようと四苦八苦しているベルノライト。

確かにきれいなフォームだが不気味なまでに底が見えない、それでいてどうにも走り方がズレている。

どうやら芝コースには慣れていないというのが見て取れるが、その

姿が余計に彼女のキレイなフォームから浮き出て不気味に見えた。

「前も思っただけど随分ときれいなフォームで走るもんだ、でも芝に慣れてないな。おハナさんの的にはどう思う?」

「決まったわ、もう誰も止められない」

「ほう、あんな姿なのにお前がそう言い切るってのはなかなか珍しいな。なあ沖野」

すぐ近くで見えていたチームスピカの沖野、チームリギルの東条の会話に六平は当然のように割り込む。

沖野は一瞬だけ六平に視線をやり、小さく苦笑いしながら答えた。

「ロツペイさん、それ分かって言ってますよね…」

「六平<sup>むさか</sup>だ。まああんなの見せられたらな、だがそれにしたって…なかなか信じられるもんじゃねえや」

周囲の他のウマ娘達やトレーナーたちも一様に、シマカゼタービンの異様なまでに仕上がっている走行フォームに息を飲んでいる。

その仕上がりにトウカイテイオーのトレーナーである沖野や、ライバルチームであるリギルの東条だけが何とか動揺を抑え込んでいるのは六平には手に取るようにわかった。

それ程までに場違いで完璧な仕上がりに、G1に挑むウマ娘がするべき仕上がりで、このようなアマチュア選抜レースに出ている事自体が異様なのだ。

東条は手元に開いていた手帳に何かを書き込むと静かに答えた。

「ツバキプリンセスの言葉を借りるなら、あの戦術ではシマカゼタービンへの勝ち目は無い、完全な悪手です」

「そりやまたなでだ?」

「見ていれば解りますよ」

東条はあまり多く口にする気はないらしい。いやそんな余裕はないと考えるべきか、六平は緊張した面持ちで何かを吸い取ろうとしている彼女の視線を見て考えを変えた。

《最初のコーナーに差し掛かりまして先頭はシマカゼタービン、これは速い、5バ身…いえすでに10メートル以上の差をつけて先頭を悠々逃げてぐんぐん前へ逃げていきます。

その後ろを走るのは変わらずモブクロコ、僅かに後ろスイートキャビン、マイヤーメインが上がってきた。そこからさらに2バ身離れてキンダーシャッツ、ミソラファニー…》

最初のコーナー、シマカゼタービンがコーナーに差し掛かり内ラチギリギリまで体を寄せ、加速を維持しながら綺麗に曲がる。

その姿に観客席が感心したようにどよめき、そしてやはりと言うべきか関係者席のトレーナー陣やウマ娘達の間には驚愕と緊張がほとばしった。

余りに内ラチに寄せて走り、その上で加速を止めず、そしてきれいに内ラチに沿うように曲がっていく。

言葉にすれば簡単だ、ただ内ラチに沿ってきれいに曲がりながら加速するだけ、しかしそれがどれだけ難しい事か。

「お、恐ろしいことするね、あれだけきれいに曲がればそりや速いでしょうけどさあ!」

「いまたぶん5センチくらいまで寄ってたよね、え、なんでそんなに寄ってくの!?腕当たっちゃうよ!!」

「外に全くブレてない、なんて体幹なの、一体何をどうしたらあんな体幹を!!」

「(みなさん、驚いているところ申し訳ないですけど、あれたぶんお試しですよ?ねえエル?)」

「(デース、後ろ見ながらズレを直してマース…うわあ、イイ顔しちゃってマース)」

「…待て、これは速すぎないか?」

オグリキャップのぽつりと零した言葉に六平の眉間にわずかに皺が寄る。確かに速い、いや、速すぎる。

シマカゼタービンの走行フォームはやや修正されてきて、また徐々に加速がついてきている。それはいいのだが、オグリキャップの言う通り妙なのだ。

いくら逃げの戦術とはいえ、先頭を走るとはいえ、最後まで走り切るにはどこかで加速をやめて速度を維持して体力を温存する走りに移行する必要がある。



この長距離3000メートルを逃げで走り切るといふなら当然だ、それでもなければたとえG1の冠を持つ体力自慢でさえ最後までは持たない。

だがシマカゼタービンはスタンド前に差し掛かり、すでに後方に大差をつけて先頭を突き進みながら一向に加速するのをやめていない。どこまでも加速し続け、2番手との差を空け続けている。

《さあ最初のスタンド前に入りまして先頭はシマカゼタービン、後方を大きく突き放し先頭を走ります。

後ろは約50メートル、2番手はモブクロコ3番手マイヤーメイン僅かに遅れて4番手にスイートキャビン、この3人が先頭争い。

その後ろはまだ不気味になりを潜めているがこれは正解か、レースは超縦長の展開になってきているぞ間に合うか?》

「おいおいおい…まだ加速やめてねえぞ」

「所詮はド素人か、あれじゃあ最後まで持たない」

「所詮は噂か、皇帝様は何を見たんだ?」

周囲から落胆の声が聞こえてくる、しかしそこで終わる者達の声など聞く価値はない。

あり得ないのだ、こんな自殺行為染みたレースをする理由がない。

何故加速をやめない理由が思い浮かばないのか、こいつがやめないのはやめる理由がないだけだろう。

「冗談じゃねえぞ…」

六平の目にはあまりにも現実離れた景色が見えた、ここまで加速して無茶苦茶な走りをしているのに、シマカゼタービンの顔には一切の疲労が見られない。

息も乱れず、汗もかかず、走る姿に乱れもない、まるでその速度に慣れ切っているかのように。

加速する、まだまだ彼女の加速は止まらない、とつくに平均的なウマ娘レースのペースは超えている。

そのペースであらかじめ走る速度を維持しようとした後方連中はとつくに置き去りであり、異常性に気付いた3人の加速もとつくに及ばない。

速すぎる、あまりにもシマカゼタービンの速度が違いすぎる。時速何キロ出ているのだ、もう時速60キロメートルなどつくに超えているぞ。

背筋に冷たいものが走る、何かが変わる、変わってしまった、今日の日に何かが狂う。

《えー：シマカゼタービンまだまだ先頭、一人だけ第2コーナーに…ええ…》

たった一人、加速をつづけながらのびのびとスタンド前の直線を走り切ったシマカゼタービンだけが我が物顔でコーナーに飛び込み、そして内ラチに体を擦り付けるように攻め込んだ。

噂に聞いた彼女得意の超超インコース走法、インベタグリップと東条が呼ぶ六平の中で理想としてきた最高のコーナーリングよりも遙かに攻めていて狂ったコーナーリング。

自殺行為も甚だしいギリギリを、彼女は体幹と足使いで悠々と全てを制御して体を固定しているかのようにギリギリを攻め立てる。

見た目はとてつもない危険走行だ、なのに走っている彼女から感じるのは圧倒的な安定感。

直線を駆け抜けていたよりも細やかに刻む足使い、そして体に掛かる遠心力や負荷を完璧に制御する繊細なテクニックを彼女はやってのけている。

故に彼女の走りにブレはない、完全に制御しきった上での狂気のコーナーリング、何もかもが異次元だ。

「バカなの!? あんな速度で内ラチに寄りながら全くブレないなんてなんつー体幹してやがる!!」

「すごい、すごいですよトレーナーさん!! あんな風に曲がるなんて!!」  
「あの足使い、まさか等速ストライドですか?」

「…いや、それとはまた違い、まったく別もんだ」  
その光景に六平はおろかほぼ全員の目が釘付けになった、ベルノライトの問いに六平は頷く。

その目の前で彼女はコーナーリングを維持したままさらに加速し、そして更なる一步を踏み出していた。

コーナーが終了する寸前、シマカゼタービンの走りが一瞬だけ弛緩する。まるでギアが抜けたような一瞬のゆるみ、故障か？六平は一瞬そう思った。

だが次の瞬間、ギアが再び繋がれて彼女の走りにさらなるキレと加速が付与されて直線に飛び出していくのを見てしまった。

「速いー！」

「嘘でしょ、まだ加速するの!？」

「なんつーウマ娘だ！」

2度目の向こう正面に入った途端にコーナー終わりの立ち上がりからさらなる加速、他のウマ娘達はすでに遠くに置き去りの圧倒的大差、ただの一人旅だ。

最初に異常性を感じていた3人以外のウマ娘達もそれに気づいたのだろう、彼女たちも本来のペースや作戦などかなぐり捨てた加速を始めていたがそれでもまるで届かない。

そして何より、他のウマ娘達が大汗をかいて息を乱し始めているというのに当の本人は涼しい顔で楽々と走り続けているのだ。

「まずい！ゲートの格納が間に合っただねえぞトレーナー!!！」

「あ、やばい!!！」

目の前の光景に表情を引きつらせていたゴールドシップの顔がさらにこわばり、彼女の指さした先を見た沖野も目を丸くする。

見ればまだ撤収作業中のゲートがその身を半分ほど格納スペースに身を押し込んだところ、急ぐ係員が急ピッチの格納作業に追われている所だった。

シマカゼタービンのあまりに速いペースに普段通りの仕事をしていたのにもかかわらず係員たちは格納作業に遅れてしまったのだ。

しかし彼らもプロだ、ゲートの収納に掛かっていた係員たちはゲートを後ろから人力で押すことで無理矢理格納スペースに押し込み、自らも転げ出るようにコースから飛び出す。

その判断は間違いではない、明らかに異常な速度で迫りくるウマ娘に接触したら不幸になるのは自分だけでは済まないからだ。

だがしかし、その荒っぽい緊急格納作業のせいで荒れていた芝の

コースはさらに荒れていて足場が悪くなっている。

そこにシマカゼタービンが加速を維持したまま突き進み、荒れた地面だけをピッチ走行に切り替えて踏み抜き、抜けるとすぐに戻して通り過ぎていく。

《シマカゼタービン、未だに先頭、加速が全然止まらない!!なんということでしょう、なんということでしょう!!後ろの子たちは早く追いかけていけばいい!!》

「うそ、全然気にしてない。というか、あんなふうに足を切り替えるなんて!」

「トレーナー、あれはなんていう走法なんだ?あの走り方はカサマツでも中央でも見たことがない」

「解らん、あんな足腰が別の生き物みたいな動きは初めて見る」

不甲斐ない答えだが六平はオグリキャップの問いにそう答えるしかなかった。あの走りは一体なんだ、あの動きは一体なんだ、どういう鍛え方をすればあんな風に走ろうだなんて考える?

わからない、理解できない、これは明らかに自分の長い人生を以てさえ理解しえぬ未知の領域に他ならない。

(なんだよ、なんだよそりゃ…滾らせてくれるじゃねえか)

だがしかし、六平の脳裏にはまだ不安が残っていた。こんな加速がついた状態で彼女は最後のコーナーを曲がり切れるのか?

確かに加速も速度も体力もすべて素晴らしい、しかし最初のインベタグリップ走行で消耗は激しいはずだ、群馬トレセンにおけるデータではどうだった?そう六平は思い出し、そして戦慄した。

彼女は今日、これが初レースだ。そして今の彼女の顔色はどうだ?まったくもって涼しい顔だ、息を荒げていない、走行フォームに乱れはない、汗すらもかいていない。

スタート直後と何ら変わらない状態でひたすら前に向けて走っている、外装と内装はまるで別だとも言うように。その姿に六平は怖気が走った。

(まるでウマ娘の形をした車が走ってるみてえじゃねえか)

その姿に六平は伝説の姿を一瞬重ねた、この日本にさえ名声が響き

渡るあの赤毛のウマ娘を。その六平の耳に、悲鳴のようなアナウンスが劈いた。

《あぁっ！キンダーシャツツが急減速して離脱!!続いてプリシンバル、マイトリートも…き、棄権です!!これは大波乱!!》

シマカゼタービンの暴走ともいえる超高速ラップに食らい付かんと加速を掛けていたウマ娘達が次々と減速し、息も絶え絶えにコースからよろよろとはずれ落ちていく。

競争を中断したウマ娘達に係員が駆け寄り、その場で彼女たちが棄権したことを無線で連絡しているようだ。

《あぁッ！ミソラファニー転倒、立ち上がれない！ぶ、ブライダルエコーも立ち止まる!!ヒラノゴウリキー、モブクロコはどうだ！ダメか、ダメだ!!限界だ!!》

既に速力を維持できずにいた無理に加速しようとしたミソラファニーが転倒、すぐに立ち上がろうとしてその場で藻掻き、そして声にならない声を上げる。

それを避けたブライダルエコーは、周囲とはるか前を見て何かを悟ったように戦意を失い、その場で立ち止まり両膝をつく。

その前を走っていたヒラノゴウリキーとモブクロコは加速に体力が持たず息も絶え絶えになり、僅かに距離を開けてふらふらと前のめに倒れ込んだ。

起き上がろうとしても起き上がれない、しかしはいつくばってでも前に行こうとして芝を掴み、這いずる。

「落ちたか。まあ、そうなるわよね」

「あぁなったタービンは止めらんない、豆腐屋の親父呼んで来い」

「ん、まあ誰もが通る道ですね。というか何やってるんでしよう、早く回収しないと」

「そーいえばこーこ、回収用の車無いね」

「そーいえばそうね、高崎はあるのに」

群馬地方トレセンのウマ娘達が熟知り顔で頷く、まるでいつものことであるかのように。

六平でさえこんな光景は初めてだった、こんなレースは普通のレー

スではありえないのだ。

《なんとという事だ、すでに残るは三人のみ!!それでも差は広がるばかり!!最終コーナー、シマカゼタービンただ一人だけが戻ってききました。

すでに2番手マイヤーメイン、3番手スイートキャビンははるか後方、その後ろからは誰も来ておりません!!

何という事でしょう、これはすごいものを見ています、こんな圧倒的なレースがあつていいものなのでしょうか!!

最後のコーナーに一人だけ突入、このまま……えッ!!?》

すでに限界を超えているだろうにそれでも食らい付こうとする二人を一瞥もすることなく、最終コーナーにシマカゼタービンが突っ込んでいく。

先ほどのコーナーで見せたような内ラチにくっ付いているかのようなコーナーリングをするために内ラチに思い切り攻め込む姿に会場全員の視線が集中する。

だがそれでうまく走れるのか、六平は最終コーナーの荒れた芝のコースを見ながら不安を覚えた。

このコース、インコースはすでにシマカゼタービン自身が踏み荒らした上で後続のウマ娘達も踏み荒らしていて荒れ放題といつてもいい。

そんなところを彼女は走れるのか、いくら常軌を逸した実力があると言つても彼女はこれに対応できるというのか。

そう思つた矢先、コーナー半ばまで走り抜けたシマカゼタービンの拳動が大きくブレた。やはりこらえきれなかったのだろうか、いや違う。

「な!?!」

「マジかよ!?!」

最初はフォームが崩れたように見えた、荒れたコースの中でもひときわ荒れた部分に思いつきり足を突っ込み、そこに足を取られてシマカゼタービンが躓いたように見えた。

だがそうではない、次の瞬間彼女の拳動は明らかにウマ娘の走る走

行フォームから逸脱した動きを見せていた。

「ドリフトだど?！」

「…嘘だろうか?」

エアシヤカールが目を疑うように目をこすり、アグネスタキオンがまるで夢物語を見ているかのように柵から身を乗り出して呆ける。

走る姿をそのままに芝の上を滑っているような挙動、まるで両足の動きと挙動が一致していない。なのに彼女は転倒することはない。

内ラチに体の正面を向け、両足がまるで別の生き物のようにタップダンスのごとくコースを叩き、それでいて挙動は乱れない。

六平は思わず動いていた、関係者席の柵から身を乗り出してシマカゼタービンがしたことをまじまじと凝視した。

（あの野郎！わざと足跡を踏んで起点を作りやがった!!）

つまりそれは彼女が意図的にこのドリフトを行い、完璧に制御してみせたという事。それはこれが偶然の産物ではないという証。

その異常でしかない挙動を彼女は完全に成熟させ、自らの技として普通に繰り出せるという証左に他ならない。

《し、しまか、え、せんとうで、え、え、ど、ドリフトです!!シマカゼタービン渾身のロングドリフトオ!!》

「すごい?まさか、まだ最後の直線あんじゃん」

「ラストスパートですね、さあどこまで行けるんでしょうか?」

「…時速80?まあ初めてだもんね」

静まり返った関係者席に場違いなまでに落ち着いた声が響く、それに聞いたただすような者たちはいない。目の前の光景に誰もが釘付けだった。

コーナーが終わり、慣れたようにシマカゼタービンは内ラチから離れてドリフトから再び直線コースに飛び込む。

そして彼女の走りがさらに上のギアへ入るのを確かに見た。

「300、85」

ツバキプリンスが面白そうにカウントする。まるでいつもの光景を見ているかのように。

加速が止まらない、まったく陰ることがない、ぐんぐんぐんぐんと。

「200、87」

ホクリクダイオーがわくわくした様子を隠さずカウントする。その姿に食らい付かんと目を輝かせて。

なんだこれは、どうすればいいのだ、どうして彼女の体は壊れない、どうして彼女は平気な顔をして走れる、どうして彼女はそこまで鍛え上げた。

「100、88」

ノルフアングが含み笑いを浮かべてカウントする。その姿に胸を高鳴らせ、どこか自慢げに。

どうする、俺はどうする、どうすれば俺はオグリキャップをあ怪物に並び立たせる指導ができるのだ!!

「ゴール、90ジャスト」

実況はすでに途絶えていた、観客は声すら出ていなかった、圧倒的な存在の前に言葉がなかった。

時速90キロメートルでのゴール通過、そして最短距離のスムーズ過ぎる減速からの停止。

立ち止まった彼女は僅かに乱した息を深呼吸して整え、僅かに掻いた汗を拭い、観客席に向かってニヤリと笑ってから軽やかな足取りで内ラチを飛び越えてコースから出た。

まるでただ少しジョギングした、そんな風を感じるその軽やかすぎる足取りに、思わず六平は体が動きかけた。

トレーナーとしての本能が、彼女の下に駆け出さんと体を突き動かしかけた。

《し、しししし：審議です》

「ハアツ？」

実況の声が震えながら短く告げた瞬間、関係者席の全員がその地獄の底から響くような声に体が強張り、その声がしたほうを見ることを本能的に拒んだ。

見てはいけない、絶対に見てはいけない、そこにはおそらく鬼がいる、そんな恐怖がそこにある。

興奮した意識がその声で一気に冷静になったのは良かった、でもそ



の結果自分たちは一番やばい針の筵に立たされた事に六平は気付いた。

そういえば群馬地方トレーニングセンター学園は伝統的にありとあらゆる武術をカリキュラムに採用しており、それを修めたウマ娘は愛用の得物を勝負服に採用しているのだという事を。

つまり後ろの彼女たちも何かしら武術を修めている可能性が高い。もし間違つて暴れ出しでもしたら、おそらくここにいる自分たちでは押さえることはできないだろう。

現に今まさに近場の係員を呼びつけて問いただす彼女たち。その声色は落ち着いているのに落ち着いていない、まさに一触即発の二トログリセリンのような声色。

逃げたい、しかし動けない。そんな自分たちとは裏腹に掲示板に表示された『審議』という文字を見て、その渦中であるはずの彼女はなぜか一番納得したような表情をしていた。

## 小ネタ・今年のウマ娘で駄弁るスレPart 226

226：名無しのウマ娘ファン  
やっと落ち着いてきたな。

227：名無しのウマ娘ファン  
この過疎板ですらな。

228：名無しのウマ娘ファン  
ソレナ！

229：名無しのウマ娘ファン  
＜226

それな、どこもかしこもお祭り騒ぎだ。今なおメジャースレは更新され続けている。

230：名無しのウマ娘ファン  
その点この過疎板の平和感ときたら：

231：名無しのウマ娘ファン  
いうて普段よりだいぶ人多いぞ。このスレ、あのウマ娘が走るまで一日10レスも更新されないなんてザラだったし。

232：名無しのウマ娘ファン  
URA公認とはいえ民間選抜レースでまさかのワールドレコード、これが公式だったらと思うとそりややるせないでしょうよ！

233：名無しのウマ娘ファン  
公式サイト公開映像に加えて現地勢の撮影映像まで今やそこら

中に張られまくってるしなあ…

234：名無しのウマ娘ファン

そんだけやべーんだわ、ドーピング云々言われてもそもそもドーピングごときであの走りはまず無理なんだわ。

235：名無しのウマ娘ファン

ワイ、現地勢。シマカゼタービンちゃん的笑みにズキュンドキュン。

236：名無しのウマ娘ファン

走る姿はバルンバルン。

237：名無しのウマ娘ファン

あの胸で大逃げは無理でしょ…そう思ったた時期が私にもありました…

238：名無しのウマ娘ファン

また胸の話してる…

239：名無しのウマ娘ファン

まあ大逃げで有名なウマ娘って言ったらサイレンススズカさんだし…ね？

240：名無しのウマ娘ファン

あの巨乳もすごいけどもつと驚くのはあの完成された立ち姿よ、あの仕上がりで一般ウマ娘は無理でしょ…そんだけ出来上がってて吾輩びつくりしたぞ。

241：名無しのウマ娘ファン

ぶつちやけ何モノなんやあのウマ娘…特定班は混乱しとるし。

242：名無しのウマ娘ファン

一般予選公式サイトへの登録情報だと芦名高等学校3年生、部活はなし。よって田舎公立高校の帰宅部JK：とのこと。

243：名無しのウマ娘ファン

調べると酒やら剣術関連とかサバゲやら変なところでヒットするのね、しかも一緒に写ってる人たちがヤベーのぞろい。

でかい会社の社長さんやら会長さん、ご令嬢やらすっごいぞ。

244：名無しのウマ娘ファン

だがしかし、有力筋のまとめによれば走り屋なんだと、それも車で峠の。年末年始の小さなダートラリー大会で優勝してる。

245：名無しのウマ娘ファン

というかレース走った後何に全く息切らしてないあの子やっばい。

246：名無しのウマ娘ファン

というかそもそも足がやばい、なぜにドリフト？じそくきゅうじゅうつてなに？

247：名無しのウマ娘ファン

シマカゼタービン渾身のロングドリフトオオオツ!!

248：名無しのウマ娘ファン

うわあ…と呆れて汚い悲鳴上げてからのやけっぱちロングドリフトオオオオ!!

249：名無しのウマ娘ファン

また伝説の珍実況が生まれてしまったなwww

250：名無しのウマ娘ファン  
と言うかこれがウマ娘レースの実況なのか？カーレースの間違  
いではないのか？

251：名無しのウマ娘ファン  
URAファイナルズ一般予選はカーレースだった？

252：名無しのウマ娘ファン  
そもそもウマ娘の足は車輪ではないのでドリフトなんてできるは  
ずがないのです。

253：名無しのウマ娘ファン  
できとるやろがい!!

254：名無しのウマ娘ファン  
マジそれなんよ、体勢は確かに走ってるそれなのにその恰好で横滑  
りするってどんな走り方じゃww

255：名無しのウマ娘ファン  
解析班もあの動きに悪戦苦闘している模様。

256：名無しのウマ娘ファン  
動きと挙動と効果、そのすべてがちぐはぐで結びつかなくて目がお  
かしくなる、だそうな。

257：名無しのウマ娘ファン  
わい、元レイヴンなんだが…あれってバニホの亜種なんじゃねえか  
な？

258：名無しのウマ娘ファン  
サイドステップからの空中滑走にも見える、走ってるように見えて

実は超高速ステップで姿勢維持してるだけとか。

259：名無しのウマ娘ファン

ドリフトもそうだがあの最後の直線の速度、時速90kmとかどうせいつちゆうんじゃ？

260：名無しのウマ娘ファン

＜259

ま、まあ時速90は最後だけでそれですつと走ってるわけじゃないから（震え声）

261：名無しのウマ娘ファン

＜260

でも彼女、最初から最後までずつと加速しながら走ってるんですよえ…

262：名無しのウマ娘ファン

＜260

お、そうだな！（なお道中全く減速していない模様）

263：名無しのウマ娘ファン

で、あの審議よ。あれが余計に荒らした。

264：名無しのウマ娘ファン

なんでや！圧倒的な圧勝だったやろ！！

265：名無しのウマ娘ファン

現地勢は大困惑、運営は大混乱、そしてレースは阿鼻叫喚の地獄絵図。

10人走って走り切ったの3人だけやぞ、あんなん闇レースですらないのよ。

266：名無しのウマ娘ファン  
ワイ、現地民、初っ端からあんなことされた後レースの長距離部門のウマ娘ちゃんたちやトレーナーの絶望の顔が…ああなるとネタにもできん。

267：名無しのウマ娘ファン  
今日勝ったところで8月の2次予選で確実にぶち当たるわけで…とりあえず2着狙うしかなくなったらそらそうなるやろ。

268：名無しのウマ娘ファン  
というかインパクトがやばすぎて後続のレースがことごとく霞むのだ。

269：名無しのウマ娘ファン  
あれ、レースってこんなに展開遅かったっけ？（なお本職平均よりすこし遅い程度の模様）

270：名無しのウマ娘ファン  
∨ 267  
それな、勝ちに行こうとしてもぶっ壊されるし…

271：名無しのウマ娘ファン  
まさかリアルでツダの惨劇が起きるとは思わなんだ。

272：名無しのウマ娘ファン  
空中分解したのはジムでツダのほうはパーフェクトツダっていうデユバル少佐もにつこり案件だがな!!

273：名無しのウマ娘ファン  
最初にトレセン組の過半が離脱して半壊、からの壊滅まで流れるよ

うにぶっ壊れてったかな。

274：名無しのウマ娘ファン

ある意味、あそこで引く考えができたトレセン組は腐ってもトレセン生なのよね。無理して食らい付いた一般勢と他一部も結局千切られてるし。

275：名無しのウマ娘ファン

だがふと思り返すとねえ…そりやそうなるわな…

276：名無しのウマ娘ファン

あんなんドーピングを疑われてしかるべきよ。

277：名無しのウマ娘ファン

◇276

まあ…そうなるな…いや、個人的な意見だけでもそりやそうだよ…  
まあ、ありえんがな。

278：名無しのウマ娘ファン

所で疑問なんだがみんななぜドーピング疑いつつ擁護するんだ？  
そりやウマ娘ちゃんたちを疑いたくない気持ちは理解できるけど。  
他の板でも口ではそういういつつありえへんやろで終わってるところ多いんだがなぜ？

279：名無しのウマ娘ファン

◇278

おっ？おっ？もしや新人さんかな？

280：名無しのウマ娘ファン

◇278

これには理由があるのよ、そもそもこれがドーピングならシマカゼ



ちゃんはメデイカルチェックで落とされてないとおかしいんだ。

281：名無しのウマ娘ファン

そもそもドーピングっていうのは、簡単に言っちゃうとレースゲームで言うニトロブーストとかに近い代物なのよ。

つまり想定外の高火力燃料エンジンにぶち込んで無理やり出力爆上げにしてカツとんでるようなもん、普段の自分の技術で御しきれないほどにな。

その状態で直線かつ飛ばすならまだしもコーナーをあんな正確かつ繊細な足使いで綺麗に曲がれると思う？俺はゲームですらできん。

282：名無しのウマ娘ファン

なら普段からそれを制御できるように使って練習すれば解決じゃね？

283：名無しのウマ娘ファン

おっとそいつは不可能だ、その類なら事前のメデイカルチェックで検出されてなきやおかしい、常習的にその手の薬物使ったら否応なしに数値おかしくなる。

持病とかで常備薬を持つてる人は健康診断で経験あるだろ、何かしら薬飲んでる人は自己申告してくださいってやつ、それ含めて数値取らないと異常出るからなんよ。

ましてや劇物だと変な薬効と中毒性があったりするし、あの出力を維持するのは制御するにはそのための神経強化とかその他もやらんと無理よ、そんなことしたら日常生活に支障が出る。

284：名無しのウマ娘ファン

だから念入りにメデイカルチェックが必要だったんですね：パンフによればURA公認医療機関による診断書の提出からレース直前まで3回ほどあるのだ。

285：名無しのウマ娘ファン

引つかからんようにあらかじめ抜いて対策するつつうのも無理ぞ、そうなるに相当即効性の薬をレース直前にぶち込んでることになる。そういうのこそ二トロみたいなもの加減なんざ利きやしねーの、そんなんでまともなレースになるわきゃねーだろう。

286：名無しのウマ娘ファン

◇285

そーだな、薬で頭も茹で上がつちまつてまともを考えられんやろ：なら指揮役にもう一人担げばドーピング状態でも走れる!?

287：名無しのウマ娘ファン

◇286

無理やろ、我が故郷の火牛みたいなものだろそれ。乗ったところで制御なんぞできるか。

288：名無しのウマ娘ファン

いかんいかんあぶないあぶない。

289：名無しのウマ娘ファン

ぐぬぬ：そういう理屈があるのは理解した、まだドーピング疑惑は晴れとらんが。

なら、実際のところ原因は何だったのよあれ？一応決着ついたみたいだけど。

290：名無しのウマ娘ファン

30分くらいで着順変わらず、大差のタイムオーバーでシマカゼタービン独り勝ちっていうね。

あんな走りみてただ手元が狂ったってなら、今なら笑い話のミスで済むけど。

291：名無しのウマ娘ファン  
しかし現場のレースじゃ通用しないぞ。

292：名無しのウマ娘ファン  
マイヤーメインちゃん：スイートキャビンちゃん…

293：名無しのウマ娘ファン  
信じて送り出した二人が最後はへろへろ歩きでゴール板を超える  
なんて…

294：名無しのウマ娘ファン  
公式発表だと審議はあくまでゲート格納不備における走行妨害と  
走路悪化による障害の審査って理由ね、まあ理由付けには上等よ。  
ドーピング検査も一応やるにはやるんだろうし。

295：名無しのウマ娘ファン  
あれで係員にとやかく言うのはお門違いやろ、誰があんな爆速ラッ  
プで戻ってくるなんて考える。  
そもそもほかの公式レースと比べたけどゲート格納タイムと手際  
に不備なんざなかったぞ。

296：名無しのウマ娘ファン  
走路の悪化言うたかて、それにあの娘は普通に乗り越えてるし、何  
なら速度も加速も影響ないっていうね。

297：名無しのウマ娘ファン  
あそこだけピッチに切り替えてたから一応荒れてはいたんだし審  
査は当然なんだろうよ。

298：名無しのウマ娘ファン  
そもそもピッチとストライド自在に操ってるあの娘のほうが異常

なんよ、なにあれ？セクレタリアトの娘さんかなんかか？

299：名無しのウマ娘ファン

そんなレベルじゃねえぞ、映像見直してるんだがあの足はマジでやばい。ピッチとストライドの切り替えだけじゃなくて歩幅まで逐一変えてるぞ。

300：名無しのウマ娘ファン

そのセクレタリアトさんにもあの映像が回ってるらしいという噂が…

301：名無しのウマ娘ファン

一体あの娘は何を思ってたあそこまで強くなったんや…明らかにレースとかそういうもん超えたナニカやろあれ。

302：名無しのウマ娘ファン

しかし帰宅部である。

303：名無しのウマ娘ファン

帰宅部最強伝説始まったな。

304：名無しのウマ娘ファン

◇303

早く家に帰りたいから速くなった…ってこと!?

305：名無しのウマ娘ファン

◇304

トレセン学園生には絶対がない思考回路だな、中央も地方も寮生活だから学校と直結に近くて通学路なんざないに等しい

306：名無しのウマ娘ファン

『若き剣聖は死闘の日々を送りただひたすらに切った。如何に斬ろうか、如何に斬るべきか。そう突き詰めているうちにいつしか斬撃は飛んでいた』

あのウマ娘の出身地に存在するある古武術書より抜粋。

307：名無しのウマ娘ファン

『若きウマ娘は登下校の日々を送りひたすらに走った。如何に早く帰ろうか、如何に早く帰るべきか。そう突き詰めているうちにいつしか車を超えていた』

民明書房『葦名のウマ娘達』より抜粋

308：名無しのウマ娘ファン

じゃあシマカゼタービンちゃんも走りを極めるために…いやそれなら中央か地方にいるでしょうよ!!

309：名無しのウマ娘ファン

というか日本の誇るガチ剣術の話はちよいと違うやろwww

310：名無しのウマ娘ファン

∨308

いや走りを極めた理由がこれだと家に帰る為なんで中央も地方もアウトオブ眼中やぞ、レースすらする気ねえじゃん。

311：名無しのウマ娘ファン

しかしこれは今年の菊花賞…荒れるな。

312：名無しのウマ娘ファン

シマカゼちゃんの本戦進出はまず确实ですなあ、G3でと負けると思えん。どんな勝負服着てくるのか。踊ったらすごいやろなあ…

313：名無しのウマ娘ファン

本戦出るとして、あれで逃げられたら本職もたまらんだろうなあ。パーマーさんかブルボンさん、アイネスさんあたりか？競り合えそうなの。

314：名無しのウマ娘ファン

追い込み・差しの天敵。長距離の走りを真っ向からぶっ壊す奴やぞ。あの爆速についてくだけで足が潰れる。

315：名無しのウマ娘ファン

◇◇311

どうした急に？

316：名無しのウマ娘ファン

シンボリドルフでさえ相性悪そうなのが…まあさすがにやれば負けるのはシマカゼちゃんだろうけど。でも見てみたい気もする。

317：名無しのウマ娘ファン

◇◇311

なぜそこで菊花賞？

318：名無しのウマ娘ファン

あの爆速逃げをさせない…けどそれが難しい。

319：名無しのウマ娘ファン

どうしたも何も、UR Aのお茶目が裏目に出たと思う。

320：名無しのウマ娘ファン

お茶目？

321：名無しのウマ娘ファン

おや、空気が…

322：名無しのウマ娘ファン  
選抜レースのパンフ手元にあるわい、見直して気付く。これよく見れば菊花賞モチーフなのか!?

323：名無しのウマ娘ファン  
言うて芝で3000メートルとかそれくらいしかないやろ共通点。

324：名無しのウマ娘ファン  
そらアマチュア相手のファンサもあつたやろし当然…あ（察し）

325：名無しのウマ娘ファン  
芝3000、非公認ワールドレコード、一般ウマ娘、何も起きないはずもなく…ってこと!?

326：名無しのウマ娘ファン  
ヤエノムテキの皐月賞か!!

327：名無しのウマ娘ファン  
どういう意味？

328：名無しのウマ娘ファン  
326

ご明察、オグリキャップの日本ダービー騒動の前兆に似てる、あの時はヤエノムテキとかクラシック世代相手にオグリが実力差見せつけてたけどクラシックは登録してないから出てない。

しかもその前哨戦の毎日杯でヤエノムテキはオグリに負けて優先出走枠落として抽選による選出を待つつていう運試しする羽目になってる。

329：名無しのウマ娘ファン

328

その抽選も曰くがあつてな、オグリが毎日で勝ってるから当然優先出走権がオグリに与えられるんだがクラシックに登録してないので宝の持ち腐れ。

使われない優先出走用の枠ができちまって宙ぶらりんになって、当時それが抽選枠に放り込まれてたらしいって噂もあつたんよ。

330：名無しのウマ娘ファン

だから抽選枠が増えて、結果的にヤエノムテキが選出される可能性を僅かながら引き上げて、結果ヤエノムテキが抽選枠で出走、つてこと。

331：名無しのウマ娘ファン

：いうほど似てなくね？今回の場合、あの子完璧な一般枠やろ。比べる余地もなんもねえのでは？

332：名無しのウマ娘ファン

それで納得するようなファンばかりならいい、でもぜってえそうじゃねえしマスコミなら煽って煽って騒ぎ立てるぞ。

現にオグリ騒動の時はその煽った馬鹿がああシンボリドルフに直談判までやらかした、署名までご用意してな。

333：名無しのウマ娘ファン

それでドルフさん動いたけど、URAは動かなかつた。当時ぶつ叩かれたが運営責任者としてはむしろ当たり前で当然の措置なんかわ。

特別だなんだで特例とか作ったら悪しき前例になりかねない、運営も出したかつただろうが当時はそれがルールだったんだから守るのが運営者つてもんだろ。

でもちゃんと次の世代に種は蒔いて、追加登録制度を設定してるからやることはやったんだ。



334：名無しのウマ娘ファン

世論もそんな感じだったよなあ、オグリが出てたら絶対面白いし燃えたって。

出走の特別追加登録を望む声も多くあったし当時は俺も賛成派だったけど…大人になるって辛いねんな、URRの断腸の気持ちも理解できるんだわ。

同じではないけどシマカゼタービンもそんな感じになりかねないわけ、一般ウマ娘だから当然クラシック戦線どころかほかの公式戦、OPすら出る資格がない。

あの足にあの技術、今回は一般相手とはいえあの蹂躞劇とタイム、これが今年のクラシック戦線から公式戦に乗り込んでたかもしれないって考えたら…ねえ？

335：名無しのウマ娘ファン

大逃げだから比較も他と比べりゃ単純なものな、あの速さに勝てるかって言われちゃうとヤベーのよ。

世界を見てもアレに勝てるかって言われたら…

336：名無しのウマ娘ファン

そもそもあんな才能の塊、なんでレースに走ってないのかがまず不思議なんよ。

337：名無しのウマ娘ファン

そら試験落ちたんやろ、足はあっても頭が良くなけりゃ入れんよ。

338：名無しのウマ娘ファン

＜337

おまえ…それウララちゃん見て言えんの？

339：名無しのウマ娘ファン

ウララちゃんは別枠やろ、比較してはいけない。

340：名無しのウマ娘ファン

絶対中央編入を求める声上がるぞ、そんなんその子の意思次第やら  
：って言っても絶対聞かない未来まで見えて頭おかしくなりそう。

341：名無しのウマ娘ファン

あらあら、なんだか大変なことになりそうですね。

342：名無しのウマ娘ファン

そもそもその足を認められて地方から引き抜かれた優秀な娘が中  
央でどんだけぶっ壊されたと思ってるんだよ。

地元の負けなしウマ娘が中央でボッコボコにされた挙句体壊して  
帰ってきて性格も何もかもねじ曲がって帰ってきたとかそこら中に  
あるぞ。

オグリの件なんか奇跡中の奇跡、あのせいで余計ひどくなってる  
し。

343：名無しのウマ娘ファン

それな、オグリのカサマツ時代のライバルだって東海ダービーで群  
馬にボコられて一休み入れてなきやどうなってたことやら…

344：名無しのウマ娘ファン

カサマツのっていうとフジマサマーチ？あの子なんかあったんか  
!?

345：名無しのウマ娘ファン

地方紙のインタビュ記事なんでけど当初はオグリの背中追って  
中央入り目指してた、トレーナーも一緒。中央も歓迎ムード有。

けど群馬に東海ダービーでボッコボコにされたので、いったん立ち止  
まってトレーナーともども自分を見つめ直す一休み、その間に状況が  
変わった。

346：名無しのウマ娘ファン

今はルールも変わって地方でも手順踏めば中央重賞いけるからマイペースに編入と重賞狙ってる、現在はカサマツの守護神。

地方遠征しに来た中央勢を3バカラス（3バカ）と一緒にとにかくボコってる：いや強えーの、さすがライバル。

347：名無しのウマ娘ファン

直近だとスマートファルコンと競り合ってハナ差勝ち、両方逃げの潰し合いになったがホームコースの強みを生かして競り勝った。

その前はシンコウウインディ相手に余裕の勝利、ウインディは3着凡退。2着は3バカのちっこいマスクの子（名前が出ない、スマヌ）

348：名無しのウマ娘ファン

はええ：地方もやっぱ強いウマ娘はいるんやねえ：

とりま足だけじゃどうにもならんのが中央だったのが良く分かった、逆にそこであんだけブイブイ言わせるオグリもそれ以外のヤベー奴らの規格外っぷりも。

ウララちゃんもあそこであんなだけ目立っていて世間も好意的なあたり普通に規格外のトンデモお化けなのね：

349：名無しのウマ娘ファン

騒ぐ奴が絶対に出てくる、ただでさえあの足と才能の持ち主なんだからURR Aだって絶対逃がしたくないだろうし。

これ菊花賞出走者全員がシマカゼタービンの蹂躞劇を上回る走りをしてないと納得しないぞ。

350：名無しのウマ娘ファン

マーチちゃん確か群馬の連中にやられてたんだっけか：群馬と言えば少し前に群馬トレセンにスカウトしかけて蹴散らされてたな

351：名無しのウマ娘ファン

◇ 350

あつたあつた、確かマーチちゃん蹴散らした3人ともう1人にアップローチかけて断られたんだっけか…4人目って誰だ？

352：名無しのウマ娘ファン

◇ 351

4人目は不明、曰くレース関係者じゃないから情報規制されてたのにマスコミが騒いだから余計に情報規制された。

警察が動いて雑誌一つぶつ潰れたのは記憶に新しい、まあいろいろ目に余るあの週刊誌だったから誰も擁護しなかったが

353：名無しのウマ娘ファン

もしや群馬は最初からこいつのこと知ってた可能性が微粒子レベルで存在する？

354：名無しのウマ娘ファン

◇ 353

いや微粒子どころの話じゃなくて確信犯だろ、絶対群馬連中コイツぶっ倒したくてうずうずしてんだろ。芦名は群馬にあるんやぞ。

355：名無しのウマ娘ファン

というか中央、これどう見てもこいつに粉掛けに行つて蹴散らされてんじやねーか。謎の4人目絶対こいつじゃん。

356：名無しのウマ娘ファン

…デープちゃんも厄介な時期にデビューしちまったもんだ。予見しろつて方が無理なんだろうけど

357：名無しウマ娘ファン

クラシック最強格のデープインパクトの走りの基本が追い込み、彼女は犬逃げ…うわあ…

358：名無しのウマ娘ファン

差し、あるいは追い込み…どうやったって絶望じゃねーか。大逃げされたら磨り潰されるぞ。

359：名無しのウマ娘ファン

ディープちゃん1人だけ強くても周りが弱く見えたらあの大逃げのインパクトに勝てないのか…菊花賞荒れそうってのわかるわ

360：名無しのウマ娘ファン

アイツがいなかったから3冠を取れました、あいつがいればあいつが3冠です、って言われるよなこりゃ…ディープファンが発火するぞ。

361：名無しのウマ娘ファン

発火したところで彼女にとっては対岸の火事なんですよね…飛び火したらいらんとこまで火が回りそうだからURAも全力で止めよう。

362：名無しのウマ娘ファン

それどころかファンが好きなコンテンツを傷つけまくることすらありうると…そんなことならなきやいいけど。

### 第三十一話

一人の青髪の少女が両手を上げて身体検査を受けている、その姿は妙に堂の入ったホールドアップであったがその表情は実に退屈そうだった。

たいして金属探知機を手に何度も体を這わせるアグネスタキオンの表情は真剣そのもの、何も反応のないことを何度も確かめると今度は金属探知機に似たスキャナーを取り出して再び体を這わせる。

そのスキャナーから得られたデータは検査機材が積まれた部屋の片隅でエアシャカールが弄るパソコンに転送され、それを見て無言でキーボードを打って精査を繰り返す。

そんな光景が繰り返される会議室の片隅で、ゴールドシップは珍しく大人しく壁に貼り付けた背もたれに背を預けてにやにや笑っていた。

「なーんもでないとおもうけどなーごるしちゃんはなー…なー？Bの字の？」

その面白いものを見つけた子供のような表情で右往左往するアグネスタキオンを見ながら、近くでそれを眺めていたベルノライトに問う。

それを聞いたベルノライトは興味深そうなオグリキャップの視線に困ったように苦笑しながら答えた。

「それはそうですね…まああんな走りしちやっただんですし」

「足に鉄板仕込んでたって無理無理だぜ、それくらいここに居る全員解つてんだろ？なあロツペイのじいさんヨ？」

「六平だ、ゴールドシップ。言うまでもねえこと聞いてくるな、こんなのための言い訳にすぎねえ。」

お前は見えてたんだろ？あいつがなんにも不正なんぎしてねえつてのをよ」

身体検査を受けるシマカゼタービンの姿をオグリキャップの横で

同じように見ていた六平はいつも通りやや仏頂面でゴールドシップに返した。

その答えにゴールドシップは肩をすくめて肯定するように首を縦に振る。

「まあな、足になんか仕込んでるような疑惑はあったが有りやああり得ねえ。さすが爺さんだ」

六平の問いにベルノライトは首を傾げ、嫌に静かなゴールドシップのほうに目をやる。

ベンチに座ったままXの意匠をあつらえたカードを指に挟んでひらひらさせていた彼女はいつになく真剣な眼差しで答えた。

「恐ろしく緻密な足運び、このゴルシちゃんだって危うく見逃しかけちまったぜ」

「どう見えた？」  
「ホントにウマ娘かすら疑問だね」

端的に、それでいて普段のゴールドシップの様子からは考えられないほどに冷たい答え。

それがゴールドシップが感じた、シマカゼタービンに対する印象という事だろう。

制御不能の破天荒が地である彼女がどう感じたのか、オグリキャップには興味があった。

「どうしてそう思うんだ？」

「そうだな…上げるとキリがねえっていうか最初から最後まで全部おかしいって話なんだが、分かりやすいのは最後のドリフトだな」

「それは私も驚いた、ウマ娘もドリフトができるんだな」  
前に走るような動きのまま横に滑るロングドリフト走行、オグリキャップにとつてあれは確かに強烈だった。

これまで多くの強敵と鎬を削って走ってきたが、今までのような強烈な速度で走る相手にドリフトなどという走りを見せる相手はいなかった。

この映像を見ればきつとこれまで戦ってきたライバルたちも目の色を変えてくるに違いない。

「おいおいおい、葦毛の怪物さんがそんな感想でいいのかよ」  
「??？」

「…え、まじ?..」

「あはは、まあオグリちゃんだから」

「じゃあそのBの字、回答せよ。薄々感づいてんだろ?」

ズビシツと効果音が聞こえそうな勢いで指を刺されたベルノライト、彼女は少し考えて少ししどろもどろになりながら答えた。

「ドリフトの起点になった足使い、かな?」

「正解」

「やっぱおめえさんらにや見えてたか。俺みてえな老骨にや、目で追うのは無理だったぜ」

「だが気づいてんだろ?さすがだぜ」

「ただの経験則だ」

年は取りたくねえもんだな、六平はそう吐き捨ててチームスピカの面々に身体測定を受けているシマカゼタービンを見やった。

バスト、ウエスト、ヒップを再度メジャーを使って再測定して、バストを計ったサイレンススズカがその数値を二度見して再測定している。

無理もない、あの体を彼女はトレセンでのトレーニングもなく自然と作り上げて自分で維持していたというのだから。

トレセン学園で日夜日々のトレーニングに勤しみ体を作り上げている彼女たちからすれば信じられなくて当然だ、事実六平自身もこの目で見るとまでは確信は持っていなかった。

その体を使いこなしてみせたあの圧倒的な走りだ、もし若いころの目ならば確実に見えていたはずだった、しかし年老いた目では微かに感じ取るだけで精一杯だったのだ。

「どういう意味なんだ?」

「簡単な話だぜオグリちゃん?まずあたしらウマ娘の足、大体なんて呼ばれてるかくらい知ってんだろ?」

「うん?足は足じゃないか、右足で、左足だ」

「ちげえちげえ、言い方変えるか…メジロアルダンの足はなんてよば



れてたっけ？」

「あー…そういえばガラスの足とか聞いた覚えが」

「そう、ガラスの足だ。うちら競争ウマ娘の足はな、力強い反面ガラスみたいに繊細な代物だっというのが常識だぜ。」

「そんだけ繊細で傷つき壊れやすいっていうのが常識なんだが、言い過ぎでも何でもねえ」

「何しろうちのテイオーやマツクイーンが散々泣かされたんだぜ？とゴールドシップは少し茶化すように言う。」

その言葉にオグリキャップもすぐに合点がいった。そのケガや故障の類には自分も泣かされた覚えがある。しかしそれとこれの何が関係が？

不思議に思っただけでオグリキャップは再びシマカゼタービンのほうに目をやる。今は椅子に座り、トレセン学園でも見慣れた顔のメジロの主治医が採血を行っている所だった。

血液検査のための物だろう、彼がやっているのは急を要するためだろうか。しかし注射と聞くと苦手意識を持つことが多いウマ娘が多いが、彼女は我慢の素振りもなく平然としていた。

「こういう事さ、これを見な？まずこれがコース、そしてシャープペンの芯が足、いいか？」

ゴールドシップがどこからともなく左手に乗せて取り出した植木鉢には土が盛られており、右手には何の変哲もないシャープペンの芯。

彼女はそれを植木鉢の土に少し刺して、抜いて、少しずらして刺す、まるで走る足のようにスライドさせ始めた。

「走るとのは大体こうだ。で、ここからが本題だ。このシャープペンシルをシマカゼの足だとしてしよう、あいつはコーナーに差し掛かる。最終コーナーでドリフトする直前だ。」

そこでお前らが見た通り、あいつはコースに空いていた足跡を踏み込んで体を少しだけ制動してドリフトの起点を作って横に滑るようにして飛んだ。

「そこまではみんな見て解るよな？」

「ああ、確かに初めて見た走り方だった。足を踏ん張ってブレーキ、そのままスツと横になっていったのは分かるんだが」

「オグリ、そいつが滑るとき足を抜いたか？」

オグリキヤップは首をかしげる、質問の意図がいまいちわからない。  
「い。」

「抜けたじゃないか、普通に走ってたように見えたな」

「そうだ、オグリ。あいつは普通に、走る形のまま自然と足を抜いてるんだ。ドリフトなんて馬鹿げた走りにするための、ブレーキになるよう深くコースに踏み込んだ足をだ」

六平はいつになく力のこもった声色でそれを訂正する。その声の裏にある熱にはオグリキヤップが感じたことのない歓喜が見えた。

その六平の言葉にゴールドシップは頷き、シャープペンの芯を一度刺して植木鉢に直立させる。

「あいつは足であからさまな『抜く』動作をしてなかったんだ、走って抜けやがった」

「うん？よくわからないんだが、抜いてないのに抜けた？それがおかしいのか？」

「おかしいんだよ。自然と抜ける深さを見極め、必要最低限の制動力を得る踏み込みからのブレーキング、そして走りへの影響を極力抑えた復帰」

ゴールドシップはシャープペンの芯の差し込み具合を深く、浅くと抜き差しを繰り返す。

そしておもむろにまた抜き差しをはじめ、植木鉢の中を縁に沿ってスライドさせて走り回っているように動かした。

「踏み込みが浅ければ十分な制動は得られない、ブレーキが甘くて、ドリフトの起点になんかなんねえ」

浅く土に刺さったシャープペンスリルは軽い抵抗の後、するりと土を避けて無事な姿を現す。

「あんな超高速の中で急制動。かつ結構大柄なあいつの体躯となりや、それを一瞬とはいえ制動を掛けるブレーキはそれなりに必要だ。」

だがそれにかまけて深く差し過ぎると——」  
次にシャープペンシルを差し込むとき、ゴールドシップは先ほどよりも深く差し込んだ。

制動はきつちりと掛かり、土がシャープペンシルの芯を掴む、そして先ほどと同じように走っているように足が抜かれようとして、シャープペンシルの芯が折れた。

「走る格好でやったら折れるんだよ、ちゃんと抜かなきゃダメなんだ。なのにあいつときたらそんな仕草が全くねえ。」

そいつはつまり、走る動作で自然に抜ける深さとドリフトに必要なブレーキに必要な深さを見極めて、適切な制動力を得られて負荷を抑えられる際の際を攻めて踏み込んだことにほかなんねえんだ。

どうしてそんなことができるんだ？あり得ねえだろ、あいつはこのレース場は初体験のはずなんだぜ？」

「そうか、彼女は中央の芝は初めてだったな…おかしいな」

「ああ、でもやったんだ。初めてのレース場で、慣れない芝で、ぶっつけ本番で走りながら適応して、ドリフトチャレンジしやがった。」

あたしは怖くなつたぜ、コーナー抜けるたびにどんだん姿勢が矯正されてんだ、明らかに調節して慣らしながらやってんだよ」

なのにあの速さとスタミナだぜ？とゴールドシップにしては珍しい引き攣つたような笑み、明らかに穏やかではない内心が見て取れる。

それはそうだろう、彼女の得意な走りは追い込みである。もし最盛期の自分が彼女と当たったときのこと考えてしまったに違いない。

「アイツの目に何が見えてんのか知らねえがな、ありや生半可な経験じゃ絶対に身につかねえし磨かれねえテクニクの塊だぜ」

そのゴールドシップの答えにオグリキャップは合点がいき、そしてシマカゼタービンがどれだけ命知らずなことをやっていたのか気づいた。

初めてのこのレース場、慣れない芝、これにはオグリキャップも覚えがある。かつて彼女も、地方のカサマツに所属していた時に芝を経験した。

その時は勝った、その勝利で自分は中央に目を掛けられたとその時の恩師は言っていたが最高の走りだったかと言えばそうではない。

事前に慣らしはしていたし今もバックアップしてくれているベルノライトのサポートがあったとしても、初めてばかりで戸惑いがあったのは事実なのだ。

オグリキャップであったとしてもその状態ではしつかり走ることに集中せざるを得ない、たとえドリフトができたとしてもやろうとは思わない。

「…恐ろしいな、とんでもないウマ娘が来たものだ」

「だからリギルが目の色変えてるってことなんだろうな。あのディープがゾツコンだ」

「まあそれはあれを見てればわかるというか」

ベルノライトが苦笑いするのと同時に、執拗に足を触診する沖野の後ろでムスツとした表情でトレーナーである東条に愚痴愚痴言っているディープインパクトの姿がある。

併走するはずだったのにだの、レースするはずだったのにだの、予定を潰されたことに大変ご立腹の様だ。

その様子にシマカゼタービンが仲裁の言葉をかけるがそれでもムスツとして恨めし気に壁の花になっている審査員を睨む。

それに顔を蒼くする審査員だったが、やんわりとシマカゼタービンが声を掛けて再び仲裁していた。

「ただの大逃げよりも手強いな」

「ああ何しろあのバカみてえな足の速さに底の見えないスタミナだ。様子見なんざしたらおいてかれて終わりだぜ？たとえ車に乗っててもな」

「車に？」

「ああ、噂くらいは聞いているだろ？アレは本当だよ、このゴルシちゃんにはつきり見たぜ。あの野郎、夜の峠でスポーツカー相手に勝ちやがった。」

夜の峠、下りの9キロ、相手は群馬トレセンのプロの卵で乗ってる車は整備とカスタム万全なシルビアS13。

疑うならビワハヤヒデにでも確認するといひぜ、あいつも現地で見てる。それもこのゴルシちゃんよりもいい特等席でだ」

疑うまでもない、オグリキャップはすぐにゴールドシップの言葉を信じた。普段理解不能な言動の多いゴールドシップだが、彼女は決して無秩序にふざけているわけではないのだ。

ビワハヤヒデが知っているというのも本当だろう、ただまともに話しても信じられることではないから彼女は決して吹聴しないだけ。

彼女の微笑ましい姿とは別に心の奥が震える、ついで武者震いが体を伝う。久々に燃え上がるチャレンジャーとしての熱だ。

彼女は本物だ、チームリギルがそれを認め、現役のダービーウマ娘も彼女の実力に疑いを抱いていない。

峠の走り屋という全く経験のない相手、その実力は確かなものであり、これからさらに仕上げてくることが予想される。

滾らないはずがない、あのまったくの異物に自分の力が今はどれだけ通用するのか、競争ウマ娘としての闘争心が掻き立てられるのだ。

「…久々に見たぜ、葦毛の怪物の貌」

それはゴールドシップも同じこと、既に彼女の目にはシマカゼタービンが次なる獲物に見えている。

その表情は黄金の不沈艦と呼ばれた彼女にふさわしい、オグリキャップはにやりと笑ってみせた。

「そういう君もな、ゴールドシップ。トレーナー、あとで話があるんだが？」

「本気か？長いぞ」

「ダメかな？」

「フン…構わん、前とは違うんだ。久々にトウインクルの連中を揉んでやれ、ウインターは取り消しでいいな？」

URAFファイナルズは年末の大イベントでありお祭りレース、中央所属で出走するならトウインクルシリーズでもドリームシリーズでも関係がない。

トウインクルシリーズの猛者とドリームシリーズの伝説が顔を突き付けて競う夢をも内包した夢のレース、それがURAFファイナルズ

だ。

そこに在野の猛者たちすらもひつくるめようとしたのが今回の試みと言える、初っ端からそれが大当たりを引いた。

「へっへっへ…こりやあたしもスケジュール変更間違いなしってやつだぜ。不沈艦、再浮上だぜ！」

「それ沈んでないですか」

「なんだとBの字、黄金の不沈艦は水陸両用潜水可能の万能戦艦様なんだよ。そんなこと言うのはこの口かあ?!」

「あいだだだだだ!?!お、折れるう!!」

「懐かしいな…」

「あんぎやああああツ…懐かしいならとべてエエエツ…」

(…だが、こりややばいかもしれねえな)

新たに現れた強敵を相手に高ぶり、ベルノライトにじやれついで鱈折りを掛けるゴールドシップと懐かしそうにするオグリキャップに釘をさすかのように六平は表情を渋く歪めて、身体検査を終えたシマカゼタービンのほうを見やる。

この部屋でできることをすべて終えた彼女は、今後の予定を親交のある東条トレーナーから協力を請われて承諾している所だった。

(あれは劇薬だ。公式のレースに出ちやなんねえ、だがいるならば是非でも欲しい逸材。誰だつてほしがる、あんな走りを見せられたらな。

しかも本格化も終わってピークも過ぎたはずの体でだ、もう誰もかれもがもう血眼だぜ。俺でさえ疼いちまう、俺が手を掛けたらどんな怪物になるのかつてな)

だが、同時に六平は恐ろしさを感じていた。シマカゼタービンのその才能と実力に、自分が飲まれる姿が容易に想像できたからだ。

異常だ、自分の経歴を自慢するつもりはないが自信をもって自分はベテランだと言える。そんな自分が彼女を『御しきれる自信』がない。

常識が通用しない、これまでの経験が通用しない、これまでの技術が、積み重ねた歴史が、彼女には意味を為さない。彼女の存在はまさに未知の領域なのだ。

(何を意味するか分かってんのか、東条。そいつに関わるって意味をよ)

親しげに言葉を交わす二人の姿を見ながら、六平はこれまでの経験から波乱が待ち受けているだろうと予想が付いた。

そいつは下手すれば自分達の全てを否定しかねないウマ娘、トレーナーを必要とせず公式レースの猛者たちをなぎ倒す一般人。

彼女が峠を走るというのも納得だ、そんな規格外は車と競い合ってくれていたほうがちよūdいいとすらいえる。

彼女が上を目指すというのなら、それはただ素直に応援すべき歴史的な雄姿なのだから。



夕方、ホテルの一室に戻ってきた俺はやつとひと心地付いた気がした。まったくもって、公式のああいふ空気は好きじゃない。

前世でもそうだが落ち着かない、俺にはスターだのなんだのは無理だって証拠だよホント。

出来ればベッドにダイブして一旦リセットしたいところだがそうもいかない、さつさと荷物を纏めてチェックアウトだ。

今日も泊まる予定だったが予定変更、これから日本トレセン学園に行かなきゃならん。やれやれだぜ。

「やれやれ、やつと一息吐けるな」  
「ホントだよ、何回検査するんだか…」

「まだマシさ、天下のトレセン学園だ。これで白ならだれも文句は言わねえさ、はっはっは」

ま、唐突だし病院なんか飛び込めないしで当然の措置なんだろうけどね。まさかトレセンいく羽目になるとは思わなんだ。

正確にはドーピング検査の隔離って名目なんだろうけどね、やってるわけないから意味ないけども。

「笑い事じゃないよまったく、どこをどう見たって不正なんかしてないじゃん」

「そうは見えなかったんだろ？見えなかったんじゃ仕方ねえな」

「中央、審査員の質落ちたのかな？ これじゃ今後が思いやられるよ」

ぷんすか怒るディーブが仁王立ち。手伝いに来てくれたのは良いけどそう怒ったって結果は変わんねえぞ？

持ち込んだOD色のX300バックパックに荷物を放り込みながら、いまだに機嫌が直らないコイツを窘めた。

「怒るな怒るな、一応念のためって話なんだ。結果が変わることはないってお前んとこのトレーナーも言ってただろ」

「だったらいらぬじゃん、なのにみんな寄って集ってき。ドーピングとか機械隠してるとか変なの仕込んでるとか疑ってき。」

なんかタービンが悪いことしたの？してないよね!!そもそもレーズ前に検査してるのに何でああなるのさ、不手際晒してんじゃん!!」

おっと、なんかしらんがスイッチ入っちゃってる感じ？ こいつ意外と正義感あるタイプなのな。

「どうどう、何言ったって変わらんよ。切り替えていこうぜ、な？」

「タービン悔しくないの？正々堂々やったのに難癖付けられてさ」「いやべつに」

言う奴は言うもの、どこだって。そんなのいちいち気にしたって仕方ねーわ。人間なんざそんなもんよ。

まともによって、相手もまともならまともな結果になる。そうでなきやそんな時はそんな時、まともじゃねーのにまともによっても疲れるだけさ。

ディーブ、プライドは必要だがスイッチのオンオフしないと世間じゃやっていけないぜ。

「強いね、私はそんな風に思えないよ」

「ならもつとヒデー話してやろうか？酒探しに行ったアメリカで殺人犯に間違われたことあるぜ」

いやはや思い出すだけで嫌になるぜ、しかも間違った原因が通報したやつが部屋を間違えてたってんだからな。



事が起きたのは隣の部屋、いきなりドア突き破られて銃持った連中が押し込んできたらそりやアメリカだもの、殴り返すわ。

咄嗟に反撃して中に突っ込んできたマクギーを抑え込んだもんだから話がややこしくなっちゃった。

前日に絡んできやがったチャラ男共ボコボコにして裏路地に捨ててたから報復だと思っただのもまずかったなあ。

「泊まったモーテルの隣の部屋で銃撃戦やりやがってな、NCISにコツテリ絞られたもんさ。本場の尋問ってのは怖いぜ？それに比べりゃ軽い軽い」

「銃撃戦っていったい何があったのさ」

「殺人事件、現場は俺の隣の部屋、殺されたのは海軍士官ときたもんだ。なのに俺の部屋に来た理由は通報者の部屋間違い、間抜けで笑う気も失せたよ」

「うへえ…でもなんで両方気づかなかったの？」

「事件発生時間がちょうど戦争映画のクライマックスだった、派手な戦闘シーンをポップコーン片手にアメリカンに楽しんでたわけさ。」

ちなみに突入されたのも勘違いな、その時間はギャング物で相手殺しちゃったシーンの罵り合いをNCISが聞いてたのよ」

実のところテロだったけどね!!表敬訪問で海軍視察に入ったある王族を例のアツラーアクバルが狙いやがったんだ。

しかも感化された海軍士官がいてそれに協力、それに気づいた同僚が止めようとしてやられたのが発端ときたもんだ。

ちなみにぶっ放したのは最初の奇襲でミスって反撃されたからだそう、先に撃つたのは被害者側だそう。

何が悲しくてアメリカ本土でイスラム聖戦士相手に、あいつ連れてハンヴィーで大逃げしなきゃならんのだ。

知り合いのBARで酒談議してた時にチャラ男に絡まれてからとんとん拍子だったよ全く。

「俺はただ酒を探しに行っただけだったのにな」

「アメリカ怖ッ…近寄るのやめよう」

なーに、お前さんもいずれば世界に出るんだぞ。馬の時は気にしな

くていいことを一杯気にしなきゃならん、この程度でビビってちゃ話にならんぜ、とは言わない。

この世界でそうなるか知らん、同じようになるとか普通ありえん。そもそも行くとしたら欧州だしな、よほど変な冒険心を出さなきゃ表通りにいる分には安全だよ。俺はあーなったが。

「ま、だから気にすんな。大したことねーさ、それよりもっといいほうに考えろよ」

「どう考えろつてのさ？」

「明日の予定さ、俺はガラ空きだぜ？」

本当なら今日も一泊して、明日は東京に3人で繰り出す予定だったんだけどねえ…フライハイトとか軍拡交差点辺りに行こうかと思つてたんだ。

今日だつて本当はあいつら連れてマスターの所にでも足伸ばそうかと思つてたんだぜ？珍しい酒あるかもしれないし。

だが予定変更、二人とはここでお別れだ、さすがに古巣に行くのは気まずいってことで帰ることになった。

電車の費用はトレセン持ち、まあ向こうの都合でこうなつてんだから当然な話だがね。

俺は明日はトレセンで待機、ドーピング検査の結果待ちだ。公式だから仕方ないけど手間だよな。

「明日丸一日暇だしさ、練習の邪魔に——」

「え、練習に付き合つてくれるの!？」

「…ん？」

え、いや邪魔にならない程度に遊び相手に…つて聞いてねえや。そんな嬉しそうにされると否定し辛い、まったくこいつはこういうところ一緒だよ。

まあ俺としては暇つぶしになるならそれでもいいし、こいつがどれだけ強いのかは興味あるからいいけども。

「ま、暇だしな。次は菊花だろ？併走くらいはできるさ」

「やるやる！トレーナーには私が許可取るよ！あ、みんなも誘おうかな…」

お、そりやいいや。グラスワンダー達も同じチームなんだしな。デイープとタイムンもいいけど大人数ならいい暇つぶしになりそうだ。

「いいじゃねえか、暇なら誘おうぜ、ターボも呼んでみるか」

最近では忙しいらしいから顔出しはやめとこうかと思ってたが、練習ってことならいいわけも立つだろ。南坂トレーナーも東条トレーナー相手なら許してくれるだろうし。

タイムンで全員ぶつちぎれるか試してみるのも面白そうだ、トレセンのコースは向こうのほう慣れてるし難しいだろうがそれもまた面白い。

相手のホームコースに乗り込んで正々堂々勝ってこそ走り屋というやつよ。

「うんうん！あ、ならスピカとかもいい？別のチームんだけど面白い人いっぱいいるの、みんな強いよ？」

スピカ？どつかで聞いたような…あ、ゴールドシップのチームだ。確かダートの犬神家が宣伝看板だったな。

「あの犬神家看板のチームか、テレビで見たことあるな」

「その覚え方なんだ。まあアレはインパクトあるもんね」

「前にテレビでゴールドシップがでっかい相方とその前でマジックしてたからな」

デイープ基準の強いってなるとG I走るクラスってことか。ふーん…なんだろう、嫌な予感がする。

ゴールドシップみたいな奴らばつとかだったら俺は正気を失う自信があるぞ。

女子校っていうとアクが強い奴が集まっていたりするんだ、俺は良く知ってる。

「迷惑になるようなことするなよ？向こうにも都合あるだろうしな」

「大丈夫だよ、絶対にみんな来るって。もう注目株だよタービンってさ」

「ただの走り屋相手にそれでいいのか？」

いや前世でもそんなノリあったから中央つてのはそれが普通なの

か、なんだかんだ突き抜ける所は突き抜けるのが競馬だったしな。  
そんなんじやここでもタイマン併走千本ノックやらされるのか、  
こっちの群馬トレセンでも結構やってるヤツ。

群馬トレセンの連中相手なら余裕で相手できるけど中央の連中は  
なあ：前世でも散々千切ったけど強いのは、鼻っ柱へし折っても折れ  
ないエリートはほんと怖い。

今の群馬トレセンの連中もかなりガッツのある連中だが、こっちの  
中央は果たしてどうなのか。

前世のはガッツというか妙に扱い辛い連中が記憶に残ってるなあ  
：あの男が連れてくるのはいつもそうだったよ。

「ならコースの用意も頼むわ。2400と3000やりたいだろ？」  
「もちろん！ダービーウマ娘の実力見せてあげるよ、もう負けないか  
らね」

「ダービー？舐められたものだな、その程度の称号で峠の走り屋に挑  
むとは」

せめて9キロ走り切れるようになってから来なさい、もちろん登り  
だぞ。

「あ、言ったな。じゃあ負けたらトレセンに編入ね」  
「勝てるもんなら勝ってみな」

わざとらしくムハハと笑ってやる。さて、準備も終わったしさつき  
と出るかね。

あ、そういや服どうしよ？一応公式選抜だし制服は持ってきてるか  
ら服はこれでいいとして運動用のは持ち合わせてない。

レースはジャージ貸与だったから自前のは持ってきてねえんだよ  
な。頼めば貸してくれるかね？

「ほら行くぞ：ってかお前手伝ってなくない？」  
「気のせいでしょ。ところでそのバッグ、なんかゴツイね。どこの

メーカー？型番は？」  
「こいつか？WAS製だ。Elite Ops X300、どうしたんだ  
？」

「遠征用の時のバッグの新調を考えててね、頑丈なのにしたいんだけ

ど悩んでござ」

「ふーん、ならこれはいい品だと思うぞ？高いけど性能は俺が保証するぜ」

結構お高いけど替えは利くしお値段に見合った性能よ、これ買ってから買い替えた事なんてない。旅行の時はよく世話になつとるわ。

荷物を詰めたバックパックを背負って部屋を出る、廊下に出るとクイーンベレーとテューダーガーデンがもう部屋から荷物を出して待っていた。

「おっと、待たせちまったかな？」

「いやいや、うちらも今出てきた所ですよ」

「はい、特に待っていませんわ」

「そつか。悪いな、予定ドタキャンになつちまって」

「しよがないですよ、天下のトレセン学園ですしあつちのご配慮も理解できますもの」

顔では笑いながらやつぱり毒をにじませるテューダー。やつぱあれかな、遊びに行く予定ぶつ壊されたから頭に来てんな。

「…なんか棘がある言い方」

ほらみる、デイープが何とも言えない顔してるぜ。

「気にしないで、これワザとだからさ」

「はい、決して先輩と東京観光する予定をぶつ壊された恨みなんてありませんよ」

「絶対気にしてますよねえ!!」

ふはは、まあうちに転校してきてから東京に出てくる事なんてめつたになかっただろうからな。

何せ天下の女子高生、金の巡りはトレセン生とはまるで違う。つまりお財布の紐は固いのである。

「観光だったらこの後に行けばいいじゃないですか、トレセン学園なら宿泊費いりませんし」

「あんたねえ…退学した身でこんなことしてどんな顔して敷居跨げつての？」

ついさつきその現役をドロップアウト組のあたしが千切ったばつ

かなの、空気最悪すぎんでしょ」

「成長するって残酷な事ですわ、もう昔の私じゃありませんの」

「お前はバイトだろうが。ちなみにテューダーの奴はトレセン未勝利だ」

「：メイクデビュー勝った先輩いたんですけど、テューダー先輩のレース」

「いましたっけ？そんな強いの」

そんなのいたのか？俺は良く知らん。でもディープが知ってるってことは、実際に勝ってたんだろう。

「空気に飲まれてビビりまくった最下位のヤツだよ、あたしの同期の後輩だ。何度か会ったことがあるよ」

へえ、ベレーのヤツの後輩かい。

「え？あれで勝ってたんですか？ぽつんと一人のドベじゃないですか」

中央1勝よりもずっと強い!!ってか？一回勝つのが恐ろしく遠いって前世でもよく聞いた話だぞ。

俺の教え子、レースに出たやつらは全部勝ってるけど。

「そのあと鳴かず飛ばず、良くある話だよ。現状かなりギリギリ、同期が最悪見越してうちに声掛けしてくるくらいだからね。」

恥ずかしくて地元に戻れないって泣いてるらしくてさ。だから顔見知りにいる所で距離のあるとこ目星付けたいんだと」

恥ずかしくて帰れない？なら大丈夫じゃねえかな、泣けるならまだしがみつくガッツがあるってことじゃん。

本当にもうだめってなつたときは泣く元気も手を伸ばす力も無くなってる。

「地方に移籍するんじゃないんですか？勝ったなら引く手数多だと思いますが…」

「地方移籍は優先枠がもう満杯なんだってさ、前と同じで重賞持つてる奴らに取られちゃってるんだ。」

抽選に一発懸けてるけど保険は必要だから四方八方に声かけててさ、うまくやってるうちにも話が来たわけ」

「うわ、それ聞きたくなかったな」

「お前がその原因だよ」「あなたが多分原因ですよ」

「そう言われましてもこればかりは……」

よし、予定変更、寄り道してこう、そうしよう。このまま別れるのは惜しい。

「相変わらず大変だねえ……大変ついでにちよいと気晴らしに行きますか。おめえらも来い、駅まで送ってやる」

「え？トレセンに行くんじゃないの？」

「少し寄り道してもいいだろう？まだ時間はある。紹介しようと思っただお勧めのBarがあるんだ。」

レモンハートってところだな、いい酒を取り揃えてる。うちのも卸してるんだぜ」

こういう時は酒に限る、気分転換に酒談議にでも巻き込んでやろう。マスターも乗ってくれるだろうしきつと楽しいぞ。

ついでに松田さんにでもネタフリがてら付き合ってもらおうか？  
デイープくらいになれば、松田さん位のフリーライターに顔売つといて損はないだろ。

あの人良い人だし変な記事は絶対に書かないから安心できるんだよね、群馬の地方紙でも何回か書いてる。

メガネさんは……ま、いいか。あの人はその場のノリで行こう、居ないかもしれないし。

「お祝いだ、全員一杯奢ってやる。好きなの頼みな。うまい酒が山ほどあるぞ、もちろんカクテルも絶品だ」

「うわでた」

「女子高生とは思えないセリフよく言えますよね」

「何その貫禄……ってか飲酒運転はダメだよ！」

「飲まねえよ、ノンアルカクテルを作ってもらおうのさ」

走り屋舐めんなよ、酒気帯び運転なんざ死んでもしねえわ。酒は買うけどね、なんか珍しいもんもらおう。

「私未成年なだけど！」

「別に絶対に酒飲めなんざ言わねーよ、俺もノンアルカクテル飲むつ

て言ってるだろ。

あそこはノンアルもソフトドリンクも揃ってるし、別に嫌な顔なんてされねえから安心しろよ

あそこはいい店だ、うちの妹たちも連れてったことあるから信用しろって」

「…まあ姐さんのおすすめなら大丈夫でしょ」

「先輩のぐ実家がお酒を卸してるのなら問題はなさそうですね、ご相伴にお預かりしますわ」

常連はいい人たちだしマスターもできた人だからね。本当にひどい客は容赦なく一喝してくれるから安心だよ。

場所も新宿の歌舞伎町やら神室町とかの繁華街と違って結構閑静なところにあるから騒がしくねえ。

「なんで乗り気なのさ…barはいいからまっすぐトレセン!!」

「はっはー、お断りだね、気分じゃねーや。お前はこれからデカくなるんだ、酒場の空気くらい知っておいて損はねえだろ。」

時間もそんな掛からねえよ、高速かつ飛ばせば十分おつりがくる。安心しろ、攻めたりしないよ」

「そんなこと言ってもダメだかんね!」

「ノンアルカクテルでもbarで堂々と頼める女はモテるらしいぜ?」

「モテ…マジで?」

「大人な雰囲気出ている感じになると聞く」

知らんけど。俺はモテた試しないな、モテたいなんて思いもしないが記憶にはなんかあんまりない。

絡まれることはたつくさんあるのにおかしいね? 大体最後は拳で解決だね。

「そういうことなら…よし、試しだかんね!」

「ちよろいな」

「ちよろいですね」

うん、ちよろい。おじさんちよつと心配になってきたよ、大丈夫かいディープちゃん。



## 第三十二話 ☆

トレセン学園、チームカノープス部室では久しぶりに練習後のだらけた休憩時間が流れていた。

南坂トレナーはロイスアンドロイスとサウンズオブアースを連れて買い出しに出ていて、本日の練習を終えた室内は静かで気を張る必要のない緩い空気が流れている。

この空気は嫌いではない、お茶をすすりながらイクノデイクタスはマチカネタンホイザと談笑するナイスネイチャに視線を流す。

直近の宝塚記念で見事な勝利を収めた彼女は遅咲きのベテランとしてすっかり世間の人気者だ。

かつてブロンズコレクターと言われ親しまれ、その実力を認められつつも勝ちきれなかった彼女の冴え切った差し足は見る者が見れば唸る強さであった。

その横でノートパソコンを開きキーボードをたたいているツイントーボ、彼女もまた直近の安田記念を勝ち取り世間を大きくにぎわせた。

彼女の持ち味である大逃げ、からの逆噴射ともいえる大失速はお茶の間の人気者であり、戦績の落差は彼女の持ち味もあって魅力であった。

彼女ならばもしかしたら、と言われて親しまれる大逃げウマ娘はなかなかいない。そのファンの願いは最近になって報われたと言える。

マイルレースのGIである安田記念は、今まで主戦場としてきた中距離レースとは違う走りを要求されるにもかかわらず、彼女はいつも通りの大逃げで逆噴射しても諦めずに逃げ切った。

長い挑戦の末のGI勝利、ファン待望の大快挙、となれば世間は大いに盛り上がる。右に左に引っ張りだこな忙しい日々が今も続いていてこのような中たるみは久しぶりだった。

(負けてはいられませんね)

次こそは自分が勝利を掴んでみせる、これでもチームカノープスでは一番レースを走ってきたという自信がある。

何より今波に乗っているチームの空気に乗らない理由はない、数日後の夏合宿で行く群馬で体をきっちり仕上げ、秋のGI戦線で勝利を飾るのだ。

「…そういうえばここでは3番ではありませんでしたね」

「どしたのイクノ？」

ふと口に出た独り言はツインターボにしか聞こえなかったようだ。気が緩み過ぎていたらしい、イクノディクタスは小さく咳払いして答えた。

「いえ、何でもありません。所でターボさん、本当にお姉さんの応援に行かなくてもよかったですか？」

今日はツインターボの従姉がURAFファイナルズ一般予選を走る日のはずだ、それなのに彼女は平然とここに居る。

話を聞く限り、予選程度は余裕ということなのだが応援に行かなくてもいいとは少し意外な話だった。

彼女の性格なら真っ先にすっ飛んで行ってもいいものなのに、と考えているとターボは小さく笑いながら少し呆れの混じった笑みで首を横に振った。

「勝つことわかり切ってるし、絶対厄介ことになるから。さすがに今面倒事に巻き込まれるのはちよつと…」

「それはどういう意味です？」

「仕事に差し支えそうだからやめろって言われた」

確かに今のツインターボ、引いてはチームカノープスは忙しい。直近のGIレースで見事に勝ち星を二つも上げたのだから当然だ。

ナイスネイチャとツインターボも、現在は雑誌の取材やらテレビ出演やらで忙しい。なまじ、レースで長く走ってきていただけあって反響も大きかったのだ。

言われたという事は、おそらくシマカゼタービンが止めたのだらう。

「タービンは基本的に運が悪いからね…でも行きかけたなあ」

ツインターボは普段の様子からは考えられないようなちよつと困った雰囲気であらう。

行きかけたけど仕方ない、けどやっぱり残念で仕方ない、そんなアンニユイな表情だ。

「運が悪いというのは？」

「お？お二人さんどんなお話で？」

「なにになに？混ぜて混ぜて」

「なんていうかね、タービンが勝つのは当たり前なんだけど問題はそれ。必ず本気で走るからなんだよね」

どういう意味だろうか？イクノデイクタスはツインターボの返答にいまいちピンとこなかった。

それは会話に混ぜてきたマチカネタンホイザも同じよう首をかしげている。

反面、ナイスネイチャは何か理解できるところがあったのか何故か呆れた笑顔でなるほどとなるほどと頷いていた。

「タービンは本気には本気で挑むんだよ。本気の相手には本気で掛からなきゃ相手に失礼だからってさ」

「それは当たり前なのでは？」

「いやいや、それが問題。ね、ネイチャ？」

「あー…想像できた、なるほどそりゃ厄介事ですわ」

ツインターボが言いたいことを感づいたナイスネイチャが話題を引き継ぐ。その表情は呆れたような笑みだった。

どうやら彼女には思い当たる節があるらしい、生で対面して彼女の強さを一端でも身で感じた彼女にしか分からない経験から得たものだろうか。

それにはとても興味が引かれる、イクノデイクタスは眼鏡のツルを無意識に押し上げてナイスネイチャに問いかけた。

「どういう意味でしょうか？」

「あの化け物染みたのが本気で走るわけですよ？いくら歴戦のアマチュアだからってあれは相手が悪すぎるって話。

イクノもトレーナーが撮ってきた映像は見たでしょ？アレを平地でやる気だよ、彼女」

「前にアマチュア大会に出てた時期があったんだけど、やり過ぎていくつかには運営から出禁喰らっちゃったってあやめ姉ちゃんが言ってたよ。」

その時もお当地の人気者を散々な目に遭わせてたから嫌われちゃって大変だったってさ」

「なんか別で普通に稼いだ方が良くないですかねえあの人の場合」

「家の手伝いと並行して供養衆でポーターの仕事してたよ、でも時間なかったからやったとか」

「ポーターって…まさか危ない仕事じゃないよね？」

「そんなことしないよ。ちゃんと国際ライセンスも持ってたし」

ポーターとはいわゆるフリーランスの運び屋である、ほとんどの場合は個人単位で配送を請け負うちよつと敷居の高い料金割高な直送便だ。

配送者にもよるが基本的に普通の宅配業者よりも素早い配送と丁寧な仕事の特徴で、日本では速達の直送便として重宝されており人気の職業だ。

個人またはチーム単位で活動し合法ならば戦地にも荷物を運ぶ、合法なら危険もある仕事もやる。そこに人もウマ娘も区別しない。

特に軍人一家からの仕事はそれが主であり、配属先の戦地に家族からあるいは戦地から家族への手紙やビデオレターを届けるのにポーターを雇うのはよくある事である。

その仕事幹旋組織や企業も多く、フリーランスでウマ娘に人気のある職業であるとイクノデイクタスも知っている。

しかしなるには国が発行する国内公式ライセンスを取得することが必須であり、その試験は国家資格である以上それなりに厳しい。

そこからさらに国際ライセンスにするには国際機関『カイラルネットワーク』が主催する試験に合格しなければならない。

その国際ライセンスを持つ国際ポーターとはいわば国を跨いで仕事のできる国家間でも認められたポーターである証であり、各種ある

ポーター系の資格でも必要資格が複数ある上位ランクの難しい資格である。

その難しさは通常のライセンスの比ではなく、厳しい国内ライセンスを取得後に一定の成果を上げた上で国際機関の厳しい試験とふるい落として残った合格者はどこの会社でも重宝されているくらいだ。「おかしいですね、日本での国内ライセンスは18歳以上でないと思へられないのでは？」

「だから海外なの、今は知らないけど取ったときは国内ライセンスなら年齢制限が緩い国もあったから供養衆の伝手を使ってそこで取っ

てさ。そこでも供養衆は一応ポーター配送してるからそれでさっさと実績作って国際ライセンスにしたの。」

実は国際ライセンスって年齢制限ないんだって茂三おじさんも悪い顔してたよ、前提条件がほぼ年齢制限付きだからって」

「あいつならやりかねんわ…確か会社の人言ってたもんね、家族揃って資格マニアだって」

「キチガイなんだよ、ネイチャは知ってると思うけどタービンは峠バカで酒キチガイ、お酒の事になると昔から一直線と言うか加減を知らないというかね。」

中一になつてさっそくひとり海外行こうとしてたし、さすがにおじさんも止めようとしたんだけど強情でさ。

だからアホみたいな条件出して止めようとしたんだけどクリアしちゃうからもう止めらんなくなっちゃって」

「あ、解った。その条件がそのライセンス？」

「そうだよ、あれば何かあっても言い訳が利くし身分証明にもなる。お金に困っても仕事ができるからいいことづくめだからってさ。」

これがあれば97年とか98年のアメリカみたいに危ない橋を渡らなくていいからってすごい念押ししてた。

敏則兄ちゃんもそれに賛成しててね、結構苦労してたから…あ、取ったの東スラブ共和国だ。

行ったことあるから兄ちゃんが勧めてたんだ、内戦終わってガタガ

タだけど友達がいるから」

1997年と1998年のアメリカ、そういえば大きな事件があったとテレビで見た記憶がある。

イクノデイクタスはなんとなく思い出した。産まれる前の事なので大きな事件があったくらいの事しか分からないが大変だったと聞いた。

それにシマカゼタービンの父親は巻き込まれたらしい、不運な話だ。

「タービンってただでさえ運が悪いからね、まあ瀬名家って大体そんなところあるんだけども。

呪われてんのかってくらいなときもあるから、これくらい持つてないと話にならないって珍しく突っぱねたんだよ。

「当時中学生一年生だよ？普通取れるなんて思わないじゃん、諦めると思うじゃん、ただでさえ盛りに盛って難易度上げてるんだもん。

でも本気にして供養衆経由で現地に行つてき、取つてきちやうからおじさんもそこまで本気なら何も言わないってOK出しちゃった。

普通に海外まですつ飛んでいくからドクターもアレには呆れてたよ。

まあそれで一杯友達も作つて来るし楽しいこともたくさんあるからいいんだけどさ」

「じゃあキチガイみたいに着信してるスマホ放つておいてるのもそれかい」

それ言つてほしくなかつたな、とツインターボは再びらしくないげつそりとした表情をナイスネイチャに返す。

事実、なぜか窓際に遠ざけられたツインターボのスマートフォンは途切れなく無音の着信を繰り返して止まらない。

持ち主が先んじて着信を無音にしたためだがそれでもけたたましいと感じるほどにずっと着信し続けているのだ。

しかしナイスネイチャはその反応が面白く感じたのか言葉をつづけた。

「タービンがなんも反応しないからみんなこっちに連絡してくるんだ

よ」

「電源切れれば？」

「切ったら切ったで後がね…逆に心配させちゃうと悪いしき。こっちが出ないの知ってるから着信だけ残してるんだよ」

「なんですかそれは？」

「国際電話は料金馬鹿にならないから全無視安定、あと長話に絶対なる」

「で、でもさすがに少し確認したほうがいいかなーって？」

ツインターボはいつになく、そして非常に珍しい鬱陶しそうな表情をしてスマホを手にとって履歴を開く。

そして思いつき顔をしかめてため息をついた、実に彼女らしくないがこういう事もあるのだという新しい一面を見た気がした。

「どこから来てんの」

「イタリアのアブちゃんにガリちゃん、アキラ姉ちゃん。フランスのベニ子にコマちゃんにリシュ姉。」

ドイツのオイゲンにグラーフ、ローちゃんにビスねー。ロシアのソユーズにガン姉ちゃん。

イギリスのウェールズ姉ちゃんレパルス姉ちゃん、ウォー様、ネルソン姉ちゃん、リアスねえちゃん、くつころ、あとシエファイにベル。

アメリカのアイちゃんにサラにワシントン、ネバダに…うわ、エンプラ姉にホー姉、ヨー姉までかあ…」

「うえーいうえいうえい…あいつとんだけ外国に友達いるの？」

「滅茶苦茶いるよ？アリツサさんにウィーラーさんまで来てるし…あ、前田先生にマクギーまで。」

はあ…だから出たら底無しなんだよ、軍曹がいつも言ってるんだけど全然治んない。

どうして姉貴はいつも変なところで思い切りがいいんだ、いつか取り返しがつかなくなっちまうぞ？…ってさ」

「誰よそれ」

「ジョンソンのあだ名、タービンの妹」

「あいつ妹いたの!?!家に居なかつたよね？」

どうやらナイスネイチャも知らなかったらしく目を引ん？く。あの瀬名のウマ娘に姉妹である、どんな化け物だと言わんばかりだ。「瀬名家のウマ娘は四姉妹なんだよ。タービンが長女、軍曹が次女、シャットが三女、バタ子が四女。」

レースでも結構強くて、みんな群馬トレセンに入ってるから普段は家にいないんだ。血の繋がりはないけど似た者同士で仲良しだよ」

「さすが酒造の老舗、金あんな…あれ？モンスニーさんは？」

「姉ちゃんは敏則兄ちゃんのお嫁さんだからカウントしないね、街でも四姉妹だし」

「ますます異様ですね、聞けば聞くほどタービンさんだけ完全に浮いてますが…」

「それがタービンだもん、基本的に我が道を行くのは昔からだし。中学進学の時なんか、あの3人と一気に離れたのに平気な顔してたよ」  
自慢げに胸を張るツインターボ、その回答にイクノデイクタスはふと自分がもし同じ状況になったらと考える。

同じ小学校で幼馴染の仲の良いウマ娘の友達が複数いて全員がトレセン学園入学を希望し、自分は昔からそうではないからと言って普通に進学する。

仮に自分を貫き通したとしても一気に幼馴染たちから引き離された寂しさはとてつもないものだったろうに。

「ところでさ、あんたさつきから何やってんの？」

「これ？この前涼介兄ちゃんくれたデータのチェック。三女神さまから最適化が終わったって帰ってきたの」

「何それ、ってか誰？」

「知り合いの走り屋のお兄ちゃん。ほら、この前タービンと芦名峠走ったときネイチャ動画取ってたじゃん」

「あれですか」

ナイスネイチャが持って帰ってきたデータというのは、シマカゼタービンの運転を助手席から録画した物の事だろう。

峠を登っていくスポーツカーの助手席からスマホで録画した物であり、車の運転をしたことがないイクノデイクタスにもすぐにわかる



くらい丁寧な物であった。

ただ荒々しいだけでなく早く登るために計算し尽くしており、それでいて上を目指して運転しているのがよくわかる水の入ったコップが印象強かった。

なみなみ水の注がれたコップの水面は遠心力で偏りこぼれるギリギリまで盛り上がる、そこできると回すようにしてコップに戻る。

普通の運転ならばそんな風にはならない、あつという間にこぼれる。しかし映像では、アツプダウンが激しい地点で一滴だけ、それも僅かに垂れるだけであった。

「うん、あれ。何かに使えないかって相談したらね、データと交換で兄ちゃんがこれ丸ごとくれたんだ。」

VRだからウマレーターに使えるかもって思ったらできそうだから女神さまに頼んで変換してもらったの」

「ええ？でも使ってたの普通のスマホだよ？」

「実はそうじゃないんだなあ…」

ツイッターボがノートパソコンの画面に映したのは3つの峠のコースデータと、それに対応したレースプログラムだった。

よく見るとプログラムの端に見慣れたサトノ家のゲーム会社のロゴと三女神監修のロゴが追加されたようにしている。

その画面の中でデモ映像として動いているのは、イクノデイクタスも以前見た早朝の芦名峠を滑らかに登っていく車の助手席からの映像だった。

「とりあえず入ることはできるよ。走るのはまだ駄目だけど」

「なんでVRにまでなってるの？」

「ネイチャのスマホ、最新型だし映像撮ったとき練習用アプリ噛ませで色々測定しながらやってたでしょ。あれでVR化できるくらいデータを撮ってたんだよ」

「…あ、そういやそうだった」

どうやらナイスネイチャも完全に無意識だったらしい。だが不思議なことではない、トレセン学園では自主練でよくやる事だ。

きつと彼女は別のことに夢中になっていてスマホの操作はほとん

ど無意識だったのだろう、それで使い慣れた設定で録画してしまったのだ。

録画中でも画面は見ていただろうがそれも見慣れた画面だから違和感を覚えることがなかったのだろう。

「最近のアプリはすごいよね、啓介兄ちゃんがめっちゃ驚いてた。次から自分も使うってさ」

「あれ？ でも確か三女神様って今フルメンテで使えないんじゃないのかなかったっけ？」

マチカネタンホイザの言葉にイクノデイクタスも思い出す。

学校で試験的に運用されているサトノ家謹製の最新式VRシミュレーターであるVRウマレーター、その管制AIである三女神は既に学園の一員である。

彼女のお世話になっていているトレーナーやウマ娘も多く、端末越しに時々雑談しているところもよく見るくらいだ。

「あ、それターボも聞いた。サーバーにイレギュラーな超負荷が発生したとかなんとか…ターボギリギリだったんだよ」

「まさかターボちゃん、それウイルス入ってたんじゃない？」

「これじゃないよ…これの後だって言ってたもん。涼介兄ちゃんがそんなことするわけじゃないじゃんか」

「そうですね、そもそも走り屋がトレセン学園にウイルスを持ち込む意味が解りません」

「じゃあ偶然か」

「そもそもネイチャさんとしてはそれを使えるVRまで作ってるそのお兄さんが凄いなと思うんだけど…それって普通？」

ナイスネイチャが不思議そうに首をかしげる。たしかにそうだ、走り屋と言えど一般人のはずだ。

個人でやっている以上限界はある、仮に出来たとしてもVR化までしているのはなかなか考えづらい。

それだけ大金持ちの走り屋だとしても普通はあり得ないはずだ。

「高橋兄弟ならやりかねないんだよね、群馬の走り屋じゃ有名な話なんだ。主に涼介兄ちゃんなんかマジだもん。」

だからレッドサンズはかなりガチなほうの走り屋で有名、チームの連携もすごくてサポート専門チームまで作るくらいだよ。

タービン曰く、編成もプロ並みだから相当気合い入ってるってさ」「ほへ〜…そういうのって芦名にはないの？話聞いとると全然出てこないよね？」

「無いね、たまに秋名スピードスターズが遊びに来るくらい。隣の秋名峠のチームで仲がいいんだ。

芦名はみんなあくまでエンジョイ勢だから個人単位で赤城ほどガチじゃないの、それで弱いかって言えばそうじゃないけどね。

一応順位は競ってるしタービンと敏則兄ちゃんですーとツートップだもん。芦名のハチロクの二代目、瀬名兄妹って言えば古い走り屋ほど恐れ慄くよ」

「ハチロク…なるほど、例の車のハチロクですか」

学内で散々噂されていたスカウトを拒否した群馬トレセン学園の地方ウマ娘が放った捨て台詞の一件がやっといクノデイクタスの中で合点がいった。

恐らくそのウマ娘は走り屋のハチロクという存在を知っていてそれを目標にして走っていたに違いない。

しかもそのハチロクの後継者が公道で成果を上げていたのだから、正論を言つて止まるものではなかっただろう。

「ハチロクはやばいよ、群馬のハチロクはマジやばい」

「そこまでなの？」

「うん、やばい」

マチカネタンホイザの少し慄くような声色の問いに、ツイインターボはもつともらしくうなずく。

「今の走り屋の間じゃ廃れてるからそんな有名じゃないけど知ってる人は知ってる伝説だよ、群馬のハチロク。

茂三おじさんのハチロク、文太おじさんのハチロク、陽一おじさんのハチロク、登りもそうだけど峠の下りは訳わかんないくらい速いよ。

どこをどうライン作って、どんな考えで踏み込んで、どういうタイ

ミング計ってハンドル切ってるのか全然理解できない。

クレイジー過ぎて当時の現役ドライバーすらドン引きしたって話もあるくらいだよ」

「ああ、すごいってこと以外なんも分かんないってやつですか…わかるわあ、あたしもあの下りはさっぱり理解できなかつたもんですよ」

何とも言えない実感のこもった表情をするナイスネイチャ。その反応にツインターボはうんうん頷いた。

そりやあんな大騒ぎで悲鳴を上げているのだから何もわかっていないわな。

その様子にマチカネタンホイザは感嘆の声を上げる。ハチロクとはそれほどに凄い車なのか、イクノデイクタスはスマホを取り出してインターネットサイトで情報を調べ始めた。

「そんなすごい車なんだ、でもテレビで宣伝とかあまりしてないよね」  
「ハチロク自体はそこまで凄い車というわけではありませんよ」

イクノデイクタスはスマホで調べていたネット辞典を見ながらそれを否定する。

確かに名車ではある、しかし名車は名車でも隔絶した性能を持つといった部類ではないのだ。

「ハチロクというのは通称、正式名称はAE86。スプリンタートレノ、あるいはレビンですね。」

走り屋界隈では確かに名前の通った名車ですが、発売当初からそこまで値段のする車種ではありません」

「ハチロクの良い所は安くて改造しやすい所だったっておじさんも言ってたかんね、すごいいい車だけでもつといいのも普通にある感じ」

「ドリフト仕様にしやすい車だったそうですね、それでいて比較的安価で性能もそこそこ。名車ではありませんが方向性が違う」

「うん。でもおじさん曰く、峠で乗るならハチロクが一番だったさ。ハチロクはドライバーを成長させる車だって言ってた」

「ですがいくら名車と言え古い車種ですので性能は当時の時点でも新型に劣りますので上級者向けになるんですよ」

「再生産はされてるけど昔ほど人気ないんだよ、名車ではあるけど古いのは変わりないからどうしても性能がね。」

改造はしやすいって言っても知識は必要だから、ド素人が選んで痛い目を見る車なんて言われたりもするし。」

「そもそも手を加えるって言ってもお金はかかるから、それなら最初からもつといい車買おうって感じになっちゃうんだよね」

「それに今からAE86に乗るなら86やGR86に乗ってたほうがいいっていうのも多いしね、とツインターボは少し寂しそうに付け加える。」

「豆腐のような箱型ボディよりも新型のシャープなスポーツカーのほうがいい、とというのはツインターボも納得できる所であった。」

「残念なことであるが時代の流れというモノはどうしようもない、復刻生産されたとしても開発の歴史を見れば性能差は歴然だ。」

「新86にハチロクが絶対負けるわけじゃないけどまあ厳しいよ、おじさんかタービンくらいじゃないと。ほら見て、コースは三つ、車は大体トップ層」

「ツインターボがマウスを操作すると、画面に登録されているコースと車の一覧が出てきた。」

「コースは三つ登録されており、車種のドライバーはイニシャルで表示されている。」

「これうちにくれていいもんなの？そのチームの最高機密なんじゃない？」

「常に更新されてるし漏れても問題ないんだって。所詮は練習用だからってさ」

「赤城、妙義、芦名…これ全部峠ですか。こちらの車は？」

「それは仮想敵、レッドサンズが収集した三つの峠の強い走り屋の最新データで作ったCPUエネミーだって。」

「ほら、タービンも居るでしょ？WRXでTSになってるの、それタービンのデータ。夏前の最新らしいね」

「ホントだ、しかもご丁寧に車と足の両方が…じゃあこのRTとK

「Tってのがレッドサンズの人ってことかな？」

「そうそう、妙義が中里兄ちゃん達ナイトキッズ、赤城はレッドサンズ、芦名は他に敏則兄ちゃんとかは？例の3人も走り屋なんじゃないの？」

「ツバキプリンセスちゃんとかは？例の3人も走り屋なんじゃないの？」

「ナイスネイチャが上げた名前はここ最近噂されるスカウトを断つた地方トレセン生徒の名前だ。」

「どうやら彼女たちもシマカゼタービンとは幼馴染であり、群馬ではそこそこ名前の通った走り屋らしい。」

「ツインターボも走り屋の話題になるとよく口にしていたので実力はあるのだろうが、確かにシマカゼタービンがありながら彼女たちが名前がないのがイクノデイクタスには気にかかった。」

「そういうええそうですね、ターボさん？」

「あの3人は強いけどトップ3までは食い込めないよ、才能は有るけど経験の差が大きくて届いてないっておじさん言ってた」

「それは仕方のない話だ、シマカゼタービンとその3人の走り屋としての経歴は単純計算だと6年ほど前から差異が生まれている。」

「小学校卒業と同時に群馬トレセン学園に入学しレースの世界に入った3人と地元に残り6年間を自由に生きて峠を極めた彼女では何もかもが違うのだ。」

「文字通り年がら年中峠を攻めているようなシマカゼタービンとは雲泥の差があると言ってもいいだろう。」

「このあたりになると大体ホームコースを極めてるもん、基本的に地元じゃ負けなしって感じ。」

「そこに乗り込んで勝つってのが走り屋の交流戦で、流儀で、醍醐味なんだよね」

「相手の得意なフィールドに乗り込んで、相手が全力を出せるレースで挑む：私たちにはあまり馴染みがないですね」

「だから地元で挑まれて負けるなんて絶対嫌だっという走り屋いっぱいいるの。ターボも見えたかったな、今日の交流戦」

「今日？」

「秋名でやるんだよ、赤城レッドサンズと秋名スピードスターズの交流戦」

「ならネットかテレビで見よう、夜の生中継なら見れるよきつと」

「マチタン…これ違法レースだから中継なんてないよ」

「あ…」

「現地で見ないと見れないのが走り屋のレース、それもまた醍醐味だから人気あるんだよ。」

群馬トレセンで録画してくれてると思うけど…さすがにすぐ頂戴ってわけにはいかないしなあ」

残念だあ…と唸るツインターボ、心底残念そうだ。

「あ、そういえば！」

「どうしたんですか？」

「レース映像なら最近別のを貰えたんだ、芦名と群馬トレセンの交流戦。」

WRX対クラウン・アスリート、タービンとツバキのガチンコ!!見てみる?」

「ほう、良いですね」

「見たい見たい!面白そう!!」

「そんなのあるんかい…」

ニコニコでツインターボはパソコンを操作して一つの動画ファイルを再生する。

最初に画面に映し出されたのは群馬トレセン学園の制服を着たウマ娘達がこちらを見上げている所だった。

みどりがかった画面は少し上下左右に移動した後、眼下のウマ娘の指示と同時に移動を始める。

どうやらこれはドローンからの空撮映像の様だ、マイクロバスの横に広げられた武骨な天幕を飛び越えて向かったのは公道だ。

公道の脇には多くのギャラリーがたむろしており、道路をふさがないように多くのスポーツカーが並んで駐車されている。

道路上には二台のスポーツカーが横並びにスタートを待っており、二人のウマ娘が運転席に乗り込んでいる所だった。

「こんなの誰が撮ってるの？テレビ局とかじゃないよね？」

「群馬トレセンだよ、正確にはモータースポーツ部だけど。最近ドローン使って映像撮ってるんだよここ。」

高崎レース場でも導入してて結構評判いいって。ちなみにツバキたちはそこ所属で主力トップ3、部長と副部長やってるよ」

「随分と力が入って…おや、メール？」

「あれ？パソコンの方？…あ、ダイオーからだ。なんだろう？ちよつとごめんね」

今にもスタートしそうな画面の端にメールが届いたというホップアップが浮かび、ツインターボは映像を止めてメールを開く。

それは彼女の知り合いだというホクリクダイオーからのようだが、その内容に四人は首をかしげるしかなかった。

「タービンがトレセンに拉致られたから三人分どうにかできないか…はい？」

「拉致ってどういう事!?トレセンまさかやっちゃった!!？」

「いやいや、ただの比喩というかわざと変に言ってるだけでしょ。たぶんあいつなんかやったな」

「三人分、というのは一般来場の事でしょうか。さすがに無理では…地方トレセン生三人をいきなりというのは」

一体何があったのかは分からないが、シマカゼタービンが急遽トレセン学園に一日泊まることになったらしい。

噂のシマカゼタービン、一体どんなウマ娘なのだろうか。イクノデイクタスは暇を見て顔を見ようと心に決めた。



### 第三十三話

日本ウマ娘トレーニングセンター学園、通称トレセン学園。

夏休みでも学園内は朝から結構人通りがあつて、自主練だったりレースの練習してたりで普通ににぎわっている。

当然ながら学園内の施設も全力稼働中、普通の学校なら休んでそうな学内のカフェテリアも朝からモーニングメニューを出していて学生だけでなく教職員の朝ごはんを担っていた。

メニューは和風と洋風、そこからさらに魚か肉の2種類、あとは量が決められる。当然ながらお代わり自由とききたもんだ。

「ごちそうさまでした」

どうも皆様おはようございます、シマカゼタービンでござえます。

俺はいつも皆さま『中央』と呼んでるところ、トレセン学園のキャンパス内部にあるカフェテリアの窓際の席でちよつと豪華な朝ご飯を終えたところです。

予選が終わつて翌朝、カフェテリアでモーニングを頂いた後のコーヒーブレイク。

せつかくこんなところに来たんだし、ちよつとおしゃれな洋風朝食セットを頂いた後のコーヒーはなかなか乙なものだよな。

しかも料金は学園持ち、学内ならどこでも使える電子パスを貰ったなら喰わない理由がないつてもんさ。

「か、かっけー！マジの走り屋だぜ!!」

「はいはい、落ち着きなさいよ…」

「胸でつか、足やっぱ…あれ私より強くね?」

「負けていられませんか、ミック」

足を組んでコーヒーを一口飲みながらスマホを見る、目下の問題はこれだ。

今朝一番に送られてきたメール、昨日の夜にやった秋名での交流戦の結果だ。

「見たかったなあ…」

我ながら女々しいことを言ってるのは分かってる、けどな、けどなあ…

「こんなもん見せられたらそう思っちゃうだろうが」

スマホに朝方送られてきたメール、差出人は軍曹。秋名での交流戦の結果と添付ファイル一つ。

ファイルは動画で昨日やったっていう秋名のダウンヒルバトルを群馬トレセンの連中が撮ったドローン映像の切り抜きだった。

対戦は高橋啓介の黄色のRX-7・FD3Sと藤原豆腐店のスプリントトレノAE86GT-Apex。

場所は秋名の5連続ヘアピン、FDに先を行かれてるハチロクが後ろから追い上げて、コーナーをインベタからの不自然なまでに綺麗なコーナリングで追い抜く瞬間だった。

啓介のFDが下手なコーナリングをしたわけではない、むしろかなり理想的なコーナリングで攻め込んでいた。

だがそれ以上にハチロクのコーナリングが優れていて、余りに異常なスピードを持っていただけの事。

親父に散々教え込まれた俺だが、これには驚くしかない。あまりに綺麗で、余りに手馴れた、最高の出来に当たる『溝走り』だった。

溝走りは峠の走り屋の一種の裏技だ、道路の脇に水抜き用の傾斜や溝などがあつたらそこにタイヤを突っ込んで引っかけて脅威のコーナリングを作り出すという公式レースではまずやらない無茶な技だ。

まあ原理は簡単なんだがかなり無茶ぶりするし奥深い、使いこなせる走り屋はそうそう多くないんだ。

まずこの技を使うのはベテランかド素人のどっちかだ、なにしろ車に負荷のかかるコーナーでさらに無茶を強いる技だからな。

走り屋を分かってきたルーキーや中堅辺りになつてくると、この走り方がどれだけ難しくくて車に負担をかけるは分かるからまずやりたがらない。

一度や二度ならば耐えてくれるさ、だがそれで調子に乗って常用しようものならあつという間に車をダメにしちまう。

できもしねえ奴が恒常的にやろうものならシャーシや車軸、あるいはタイヤが簡単に歪む、それだけ負荷が強いのだ。

だがあの自然なまでのツツコミからの立ち上がりは別格だ、あれは日常的に使い慣れてないとできない。

自然なツツコミからのコーナリングに迷いがなく、それでいて車体への負荷も最小限に留めてる。

エンジン管理やハンドリング、総合的な荷重制御も完璧、日常的に使ってなきやできない絶妙なバランス具合なのだ。

見たかった、これを生で見たかった!!こんな走り方する奴そうそういねえ、間違いなく群馬の中でも指折りの走り屋だ。

「拓海のヤツ、ボケた顔してなんて爪隠してやがる…さすが文太さんの息子だよ」

最初はそのハチロクを見て文太さんが気まぐれ起こしたのかと思っただが、あの走り方は文太さんのそれじゃなかった。

文太さんならもつとえげつなくてクレイジーだ、啓介なんか歯牙にもかからない、もつと圧倒的で楽勝だよ。

乗ってたのは拓海、あの普段ボケツとしてる藤原拓海なんだとよ。最初は信じられなかった、あいつ車にてんで興味ねえもん。

でも考えてみりや納得だぜ。あんにやろう、文太さんに仕込まれてやがったな。羨ましいなあおい、しかもあのハチロクだぜ。

あいつのことだ、どうせ文太さんに配達やらされて仕方なくやってるうちに覚えたとかそんなんだろ絶対。

時々聞く秋名の幽霊車の正体見たりだな、道理で話題にならんわけだ、走る時間帯が違うからしようがねえよ。

「面白くなってきやがった」

スマホを机に置く。思わず笑いがこぼれそうになる、咄嗟に足を組み直してココアシガレットを口に啣えて誤魔化した。

いやいやいくら何でも一人笑いは恥ずかしいって、しかも否応なく今は視線集めてるし。

「うおおおッ!すげえ、かけえ!!」

「何見て笑ってるのかしら?レース?」

「むむむ…これは強敵ですね。啞えお菓子、キャラが立ってます」  
「マーちゃん!？」

これだから峠の走り屋はやめられない、居るんだよこういうのが。荒れる、間違いなく群馬の走り屋界隈は大荒れだ。あの赤城レッドサンズがまさかの秋名で敗退、しかも相手はあのハチロク。

新86じゃない、昔懐かしのパンダトレノときたもんだ。こりやURAだのなんだのに煩わされてる場合じゃねえよ。

さつさと予選終わらせて、重賞に出られる出走権を手に入れたらさつさと帰って特訓して挑まねばならない。

何しろあの赤城レッドサンズを迎え撃つためにみんな準備してたんだ、それだけの相手を拓海はいとも簡単に破った。

だから群馬の腕利きはこぞってあのハチロクに挑みかかる、赤城レッドサンズを破ったアイツに勝つために。

俺もはやく挑みたい、あの拓海とハチロクに俺の足がどれだけ通用するか試してみたくてたまらない。

秋名の峠は俺にだって多少分がある、とはいえ芦名とはまるで違うコース、俄然やる気が湧いてくるというモノ。

俺の愛車で挑んでどこまでやれるか、俺の足はどこまでアイツに通用するか…ああたまらん！考えるだけでワクワクしてくる!!

「でもない袖は振れぬ…」

少なくとも今日は缶詰、それも東京、府中のトレセン学園にて。我ながら場違いな場所にいるもんだ。

朝からずつと注がれる視線。好奇心、興味本位、嫉妬、殺気、疑問、軽蔑…うん、大変よろしくない。

そりやまあ、群馬のト田舎高校の制服が目立つのは分かるよ。普通こんなところに一般高校生なんかいないよ。

でもそんなにじろじろ見ることはないじゃない、ただの待ち合わせだ。朝食ついでにコーヒーブレイクしてるだけだぞ。

「やれやれ」

手を出してくるわけじゃないから何もできない、する気もない、けど雰囲気悪いのは変わらん。

これだから女子校は好かんのだ。その気はなくとも異物に敏感で居心地が悪い。これなら前世のほうがマシだぜ。

コーヒーはこんなにもうまいのにな、良い豆だろうし入れ方もこだわってんだろ絶対。早く来てくれデイーブ、お前だぞここ指定したの。

これならターボの所に転がり込めばよかったか？ でも朝練で忙しいって言ってたし、キングは連絡つかんかったし、ウララは遠征で入れ違いだ。

もう一度コーヒーに口を付けるとどこからか黄色い声：なんだ、どこかに有名人でも居るんか：居たわ。

周囲をそれとなく見回すと料理でんこ盛りの席を発見、普通に考えて狂ってるとしか言いようがない量をひたすら口に行っているのは茸毛の超有名ウマ娘のオグリキャップ。

まさにチョモランマというべきドカモリの料理がテーブルを占拠しているのを見ると呆れより恐れを感じるレベルだ。

テレビで大食いだと良く言ってるけど、想像をはるかに超える。というか普通に体の体積超えてないか？ 入るのかその量が？

ここの食事はアスリート向け、そんなバカみたいな量を喰っていい食事じゃねえはずだぞ。

そのリスみたいなのほっぺはなんだ、もきゅもきゅしてるのか？ あんな頬張って噛めてるのか？ 圧縮しているというのか？

それは：それはウマ娘の食事なのか？ 生物としてあっていいのか？ わからぬ、理解できぬ、頭が理解を拒んでいる！！

見る見るうちに消えていく食事、膨れていく腹、おい、それが日本の代表的なウマ娘の姿か？ オグリキャップ。

一体何が彼女をそんな風にしたのかは知らんが：関わり合いになりたくないな、あれ。

テレビで見るから面白いのであって生で見ると自分の食欲が失せるな。

というか競争ウマ娘って大体大食いなのは知ってたけどそれをはるかに超えるレベルって何なのさ。

「すまない、お代わりを貰えるだろうか」

「まだ食うのかよ…」

「うん?」

あ、いかん。ついツツコミが。いかん、逃げたい、でもコーヒー飲み切つてない。ああこら来るな、ステイステイオグリキヤップ。

そんなデカ盛り料理持ったままこつち来るんじゃねえ!!ただでさえ大食いばかりで浮いてたんだぞ俺の朝飯。

昨日は普通盛で食べてちよつと多い感じがしたから少なめにしたら変な目で見られたんだぞ!?

まだ食うのなら食つていいからこつち来るなここで食べるとでもいうんか俺の隣で?やめてくれマジで。

「シマカゼタービン、なぜここに?」

なぜ知っている!?!俺たち初対面のはずだぞ!!

「どこかでお会いしましたっけ?」

「昨日のレースを見ていたんだ」

そーういやいきましたねえ!なんで覚えてるんですか!?

「相席、良いかな?」

マジかよ。

「…どうぞ」

断りてえ、逃げてえ、けど無理…:やつたら今日一日もつと針の筵やんけ。ここはオグリキヤップの庭だぞ。

これで断るとか何様だよって感じになるだろ。畜生、オグリキヤップからは逃げられないってか?

うわあドカモリ料理のおいしそうだけど混沌とした香りがするう…:飯食ったばかりなのに腹がさらに膨れてきてる。

バカな、俺はもう食つてない。気のせいのはずだ、まさか食事が腹に転送されているとでもいうのか!?!いや、気のせいだ、気のせいに違いない。

くつ、口の中が妙に甘つたるくなってきた、なんで朝からこんな思ひしなきやあならんのじゃ。

しょうがない、食えなくなる前にまだ長さがあるココアシガレット

を一口で喰って無理矢理コーヒで流し込む。

「昨日は勝利おめでとう、すごい走りだったな」

「ありがとうございます」

「ドリフトなんて初めて見た、どうやってあんな走り方を覚えたんだ？」

もつきゆもつきゆと器用に食事を食べながらしゃべるオグリキャップさん。いやはやあなた、ほんとお食事が器用ですね。

こんな姿みてるつまああれね、テレビとかのオグリさんそのまま。気安いようにしてくれてるのかな？でもさつきも食ってたよな？

「うん？何か変かな？」

「いえ、不躰で失礼ですがその、たくさん食べるんですね？今日はチートデイですか？」

「チートデイとは何だ？」

「へ？」

まじかよ、これ素だよ。演技とかあんまりできないタイプの反応だよ。っていうかそれがデフォルトかよ、やっぱり中央ヤベーな。

っていうか中央ってチートデイを設けてないのか？いやしかしそれはねえよな、ってことはこのオグリさんがやってないだけ？

いや体質とかもあるからあり得ない話じゃないか、前世でも合う合わないで変えてたしな。

…え、普段からこれだけ食ってトレセンで超有名人になるくらい激強？どう見てもカロリーオーバー…え、怖。

「いえ、お気になさらず。別に特別なことはしちやありませんよ。ただうちはド田舎なもんで峠でよく走ってたもんですから、真似した相手が峠の走り屋だったもので」

「一般解放されているコースとかはなかったのか？」

「ありましたけどいつも人気ですからね、予約しても待ちますし地元クラブも使ってたなかなか取れないんですよ。

それならよく知ってる峠で知り合いの走り屋に混ざったほうが楽しくて、馴染みも一緒になってやってたんですよ」

ホントそうなのよね、ドリフトもどきはともかく。パワースライドくらいならほかの連中もできるぞ。

俺のだってドリフトというにはお粗末なもんなんだ、前世みたいに四つ足じゃないからバランスが難しくって満足いく形にはなつとらんぞ。

もつとこう変幻自在にどうか自由にいけるといっつか、とにかくもつとブラッシュアップしなきゃならん。

「峠とやらではあれが普通なのか？」

「自画自賛になりますが、自分ほどのウマ娘はそうそういませんよ。芦名の峠じゃ最強、お山の大将を気取ってますので」

「ふむ、ではできるウマ娘はいるんだな」

ありや不発、まあえつか。

「そうですね、峠の腕利きはそこそこいますし、昨日のにも出てました」

うちだとチューダーとベレーだな、トコトコとドカドカのほうがずつとうまいが。しかしプロとは分が悪い。

そもそも平地と峠じゃまるで違うからな、この差に対応できる連中となるとずつと少なくなるよ。

ターボも結局年単位ですり合わせしてようやくとだったからな、そもそもフィールドが違いすぎらあ。

あの二人の場合、まだ体が平地のやり方を覚えてるからできてるだけだ。

「ふむ、峠の走り屋とはそこまで強いのか。知らなかった」

「普通はこうはいきませんよ、そもそもフィールドが違いすぎます。平地と山岳地帯の戦績を同列視なんてできるものじゃない。

峠の走り屋のほとんどは平地に出たら中央どころか地方の足元にも及びませんし、仮に慣らしをしても微妙なところですよ。

今回の場合はこちらが特殊な例です、峠純粹培養がみんなそれなりに走るとは思わんでください。所詮は遊びです」

「安心してくれ、みんなそれぞれなのは理解してる」

そもそもウマ娘の峠の走り屋ってのはウマ娘が違法カーレースを



元にしてできたもんだ。始まりがまるで違う。

大本は対車両レースという負けて当然のチャレンジレースだからな。俺は勝つがね、自慢だぜ。

「スポーツカーに勝ったことがあると聞いたことがあるが、それは本当なのか?」

「ありますけど、それを誰から?」

「ナリタブライアンだ」

ブライアンか、そういえば散々話したっけか。あいつ、デイープと同じで食いつき凄かったんだよな。

「ああ、ビワハヤヒデの妹さんですか。そうですね、勝てますよ。まあ相手が新人な場合に限りですがね」

確かこの前はNSXタイプS—Zeroとインプレッサ相手だったか、どっちも新人だったから普通に勝てたな。

パワーと車体に振り回されてたからコーナーで差を付けてぶつちぎり余裕でした、グッドフェイスのほうが強かったよ。

「ふん、何が車に勝ったよ。嘘っぱちもいい所じゃない」

「いやいや、でもあの速さで走ってたのは事実だし。もしかしたら…」  
「普通あり得ないっしょ、というか山道で勝ったとか盛りすぎにもほどがあるって」

「でも情報源は確かにハヤヒデさんとかだし、ナリタブライアンさんやデイープインパクトちゃんたちリギルだよ?嘘言う?」

「…山つてのが盛られてるとか?」

「じゃあ平地で勝った?」

「いやいやそれこそあり得ないって」

聞こえてるぞお嬢さんたち、ひそひそ話をもっとこそそやりなさい。そういうの、聞こえてないって思っても結構聞こえてるからね。

「すまないな」

「いえいえ、慣れてますから」

おもに前前世でな!生きてりや陰口なんて特に珍しい事でも何でもねえさ。

俺が変なことしてるだけであってこれが普通なのだよ、それでいいのだ。社会一般的に見たら誇る事ではない。

「で、君以外にもできるのか？」

「できますね、やりようによりますが」

前世でもそれなりに勝負になるのは実証してるからウマ娘だつてやれるさ。本人の気質とか色々シビアに見定める所から始めないと無理だがね。

俺なら基本的に大逃げしか勝ち目ないけど、前世のジョンソンは峠じゃ差してしか勝負にはならんかったし。

我が息子が逃げと差してそこそこやれたが、ドリキンが乗ってないとボロクソだ。あいつは人が乗ってないと速度が出ない。

だがタイムマンじゃ無理でも非対称戦ならガキでもランエボに勝てるぞ、つてかこの学校で勝った奴がいる。

「私にもできると思うか？」

「それは断言できかねますね。平地専門でしょう？無理したら体壊すだけですよ」

断言はしないが：俺にはわかる、この人が峠でガチに慣れたら軽く俺を超えるね絶対。

さすが中央だ、さすが歴戦の猛者、さすがプロ、常に命を懸けて公式戦に挑んでるだけあるよ。

だが勝負になるのと勝てるか否かは別問題だ。相手は車、それもスポーツカー、出力も何もかも次元が違う格上相手だ。

ウマ娘の足じゃ普通は逆立ちしても敵わない。ある程度対抗できたとしてもあくまで勝負になる止まり、そこから勝ち目を掴めるか否かは俺にもわからん。

俺だつて所詮は新人に勝てる程度、中堅辺りになると勝率はガタ落ちだ。前世が懐かしいぜ、早く鍛え直さねえとな。

「よく見ているようだ。君ほどならトレセン学園に入れば活躍できただろうに、入学しようとは思わなかったのか？」

またその話？いやオグリさんとは初めてだけでも。

「生憎成績では全く太刀打ちできないところにおりましたから、模擬

試験でも合格圏内にちよいと届かなかったですし」

いくら頑張つてもあいつら3人は余裕で合格圏内だったのに無理だったのよねえ…

4人で通った学習塾の模擬試験、俺はいつもドベからそれでよくムードメーカーやってたっけな。

うっせえこちとらNAじゃ！こいつら過給機付きとは違うんじゃない!!とか。クラスのみんなでだけたげた笑ったっけ。

「模擬試験?そうか、塾か。そういうのもあるのか」

「オグリキヤップさんも経験あるでしょ?仲間内で俺はいつもドベ、いやあ幼馴染として誇らしいやら羨ましいやら」

「いや、私は塾に入つてなかったからな。そういう話は新鮮なんだ」

はい?え、何言つてんのこの人、もしかしてストレートで直行して受かったとでも…え、怖。

「あ、いや私も勉強はしたぞ!カサマツに入るときはお母さんと一緒に問題集を解いたり参考書を読んだりしたものだ。」

思い出すな、ついつい二人で居眠りしちやつたり足がしびれてそれどころじゃなくなったり…」

「それで受かったんすか?」

「ああ!ばっちりだ!!」

そういや元地方だったこの人…嘘だろ、こんなヤベー経歴なのかよ、そら有名にもなるわ。

これで中央でもクソつよ…え、怖い、すごいじゃなくてなんかこわい、背筋がゾゾつてなってる。

「ん、んん?どうしたんだその顔」

俺なんか凄い顔してる気がする、すごい目してる気がする…そりやそうなるわ。

やつぱりやばい連中ばかりじゃないか!!まともなのは俺だけか!!  
…いやむしろ俺が異物か、うん、俺が変な所にいるだけだわ。

でも俺はそれとしてやつぱりすごいな、脳みその造りからして違うんだろうなこういう人って。

「そ、そうだ、受験と言えば中央には一般からの編入試験というモノが

あるのは知ってるか？

スペシャルウィークはそれで一般校から編入してきたんだ、君ならきつとうまくやれると思うぞ？」

「そんなのが…あああれか」

確か群馬トレセンから勧められたな、群馬トレセンにもあるし。まあ普通に断ったけども。

言っとくけど、ここは国公立の超エリート学園なのよ。でもターボを見ると大体みんなそういうところ忘れてる節あるんだよな何故か。

地方トレセンだつて地元じゃエリート街道直通の学校、普通に入ろうとすると苦労するレベルにある。

そいつらがスカウトされてクソ苦労するレベルなんだよ、つまり日常生活の難易度からして高い。

実際俺は朝に飯食った時点で実感してる、学校の宿題の話してるの立ち聞きして俺は何話してんのかわからなかったよ。

数学ってことしか判別できんこの感覚、懐かしいけどこれが日常になつたらあまりよろしくない。

その編入試験だつて難度高め、入れたとしてもその先更なる地獄にご案内、苦労して入っても勉強の密度と速度について行けずボロボロ。

当然レースでも足を引つ張るし、そもそもいろいろ出遅れてるから箸にも棒にもかからない、入った意味を見失う、とか。

裏では人生即死トラップって言われてる曰く付きだ。たぶん皮肉込めた洒落なんだろうけどその名前にほぼ偽りはないと思うぞ俺は。

ターボに聞いたが数値は前世と大体変わらんそうじゃないか。一勝できるのは全体の30%前後、GIで勝てるのは良くて1%、レースに絞ってこれだぞ。

失敗したら出戻りできれば御の字、それだつて実質留年とかになつて大変で元の学校に居づらくて転校するのかな。

確か拓海の高校にそういうウマ娘がいたぞ、17で受かって編入して棒に振って出戻りになって20で高3からやり直しになつたウマ娘。

ちなみにこれは極めて幸運な例、良くない言い方だが恥はかき捨てに出来る、一年我慢すれば多少の歳の差は許容範囲な大学だ。

出戻りしないでそのままトレセン学園卒業ってことにすりやいってという人も多いが、出戻りを考えるタイプがそれをやると卒業まで心が持たんつてというのが精神科医の見解だな。

多感な時期に夢を見て、現実に打ちのめされて精神滅茶苦茶になった状態で自分の隣の誰かが自分の夢を叶えるなんて現実をみるとか、そりやよほどタフじゃなきや歪むわな。

同じようなパターンを中学でも量産してるからやばいといしか言えない、探られたくない闇抱えるとか俺なら発狂しかねんわ。

あとスペシャルウィークさんって誰？これ成功した人いるの？どんな化け物だ。

「編入なんて考えたこともないですね、元々公式レースにはあまり興味がないんですよ」

「そうだったな、すまない。ではなぜURAファイナルズに？」  
「幼馴染が出るんですよ、一緒に峠でブイブイ言わせた仲でしょね。あいつらは地方に行っちゃったんでちよいと縁遠くなっちゃったもんですから、久しぶりに楽しもうかと。」

もう高三ですし、受験の箔付けにするにもちようどいいんです。こうやって頑張りましたって、面接に使えますから」

「君には一石二鳥だったわけか」  
「そういう事です。ま、そしたらなんかこうなっちゃったわけですがね」

「それだけ君の走りが凄かったんだ、あんなふうには私も走れない」  
おっと、なんかオグリキャップさんの様子がおかしいぞ。なんかすごい顔していらっしやる、実にいい凄味。

「そうですかね、名高い中央ならば自分程度、どうとでもなると思いますが」

中央つつつたらあれだろ、ディープくらいヤベーのバツカやん。前世じゃみんな中央マジヤベーっていつも言ってたし。

俺はディープとかハーツクライくらいしか良く喋る奴はおらん

かったけど、見ただけで分かるやばいのばっかだわ。

本番でやったのは一回こっきりだったが、練習では何度も当たったかな。勝ちはしたけど何度負けそうになったことか。

実際今ここで格の違いつてのをいろいろ思い知らされてんぞ。

オグリキャップ、実際俺なんかより絶対強いだろ、見ただけで溢れんばかりの才能がにじみ出ているもの。

やろうと思えば俺のドリフトなんか訳ない走りを余裕でできるって絶対。

「謙遜しなくていい、君の走りは私たちに十分通じる。それは私のトレーナーも保証してる」

「冗談を、プロになんざ到底及ばない。所詮は趣味人の小手先にすぎませんよ」

昨日は勝ったとはいえ相手は一般校とかだし、トレセン連中は成績がそこまでよくない連中だろうしな。

あれで勝ったところで、中央からしたらだから何？って感じだろ。それでプロに通じるとかないない、プロの世界はそう甘いもんじゃなあって。

俺の走りが大逃げなのは、これは相手がプロだろうがド素人だろうがずつと前を走れば勝てるからなんだぜ？

「自分は所詮趣味で走ってる走り屋です、そんな持ち上げるもんじゃありませんよ」

「そうか…まあ、今はそれでいいのかもしれないな。すまない、そろそろ時間だ」

ええ…マジかよ、いつの間にか全部食ってやがるぞこの人。いつの間にか食った？食いながらしゃべってたのは分かるけど…なんだこの腹!?

え、ウマ娘こんな腹膨れるの？制服があんなに、え、制服対応してんの!?!うまい具合に避けてるじゃん。

「私もURAFファイナルズに出るんだ」

ほおーん、そりや大変だ。でも本戦は地獄だぜ？なんかいろいろ出るらしいじゃん。

「決勝で待っているよ、シマカゼタービン」  
いや出ねえわ。

## 第三十四話

日本ウマ娘トレーニングセンター学園の理事長室の空気は冷たく冷え切っていた。

空調によつては適温を保ち、快適な空間を作られているにもかかわらず、室内にいる全員がそれを感じ取っていた。

理事長席に座る部屋の主である秋川やよいは、普段では見せないような底冷えする表情をして目の前の男を見つめている。

その両脇に控える緑のスーツを着た秘書である駿川たづな、副理事長の榎本理子もまたその男を見つめている。

そしてその室内に呼ばれていた東条ハナ、シンボリルドルフ、ナリタブライアン、メジロ家の主治医は内心どうしたものかと考えを巡らせていた。

「君は、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

秋川やよい理事長の底冷えするような、それこそ何もかもを捨て去ったような冷たい声色の問いかけが部屋を満たす。

その声の主から注がれているのは軽蔑の視線、それを感じた男は、トレーナーはそれを当然だと受け入れた。

自分がここで願っているのはそれだけ非道で邪道なことだ、本来であれば許されないことだ、普段なら自分でもそうするだろう。

「理解しています、その上でお願いしています」

「このメジロ家の診断書が信用できないと？」

メジロ家の主治医の問い、それにトレーナーは頷く。

「はい、そう捉えていただいて構いません」

「しかし…あなたがそれをやる意味があるのですか？」

「君の訴えが仮に通ったとしよう、それで？君に何の意味がある？モブクロコのトレーナー」

たとえそれでシマカゼタービンが勝者でなくなったとしても、自分の担当がこのレースの勝者になることはあり得ない。繰り上がるの



はマイヤーメインとスイートキャビンだ。

彼の担当であるモブクロコはどうあろうとも敗退が決定している、彼がここで頭を下げる理由はない。

「言い訳はいい、診断書のことなど本当はどうでもいいんだろう？ただきつかけにちょうどいいだけ、そうだな？」

「…あの娘を私は大成させてあげられなかった、あの子の夢を叶えてあげられなかった。

すべては私の責任です、でも、彼女の努力は決して無駄な事じゃなかった、彼女は…」

全て知っているのだ、モブクロコがどれだけ努力を重ねてきたのか、それを自分が一番近くで見っていたのだから。

それを指導したのは自分だったのだから、彼女とずっとここまで歩んできたのだから。彼は睨む、一人のトレーナーとして理事長を睨む。

恨みではない、憎しみではない、ただ思いを伝えるために睨みつけた。

「私は信じられない、こんなウマ娘がいるはずがない、存在してはいけない。

これでは何もかも終わりじゃないですか、あの子の子のしてきた苦労はなんだったんですか、あの子は何のためにここまで走ってきたというんですか!!

信じられるものか、許されてたまるものか!!こんなことが許されたらあの娘に何が残るんだ!!あの娘はどう納得すればいいんだ!!」

モブクロコには何もなくなってしまったのだ、トレセン学園で学んできたすべてが無意味なものになってしまったのだ。

どんなレース結果であれ、これが認められてしまえば名実ともに『公立高校の帰宅部ウマ娘にレースで負けた競争ウマ娘』というレッテルが張られるのだ。

どんなバカな話か理解できないはずがない、本業であるレースでいくら走り屋と言えどアマチュアですらない一般人にこんな結果などと、どうトレセン学園生として捉えればよいというのか。

ふざけている、余りにもふざけている、これまで散々努力した結果がこれか、こんなバカな話があつてたまるか。

「君がそれを言うのか、トレーナー。事前に告知しなかった我々に非があるのは確かだ、我々の詰めが甘かったのも——」

「いいえ、理事長。それは違います、私は理解してあのレースに臨んでいた。最後まで悔つていたのでですよ。」

最後まで、あの瞬間まで私は、あの子が勝つことを疑つていなかった。それ以外、見えていなかった」

この予選レースに我々は出てはいけなかったのだ、なぜこんな簡単なことに気付かなかつたのか。

いや、それは違う。我々は気付いたうえで、誰もがすべてを理解した上で、自分達は格下狩りに向かつたのだ。

トレセン学園で、中央で燻つていたとしても、公式にすら出られなかった連中ならば勝ち目は十分にあるだろうとタカを括っていた。

それで負けてしまったのならもはやこれまでと、ここに出てくるようなスポーツ強豪校や他校のスポーツ部の出場者に負けるならばもはやどうしようもないと。

言い訳にはなるはずだった、相手のほうが一枚上手だったとあきらめがつくような話になるか、それで奮起しなおせる起爆剤に出来るのではと。

相手にとんでもない掘り出し物が潜んでいた、そんな言い訳にもできるはずだと。それ以外の有象無象など勝つて当然だ、負ける理由がないと。

「微塵も理解していなかったのですよ、ええ、まったくもって！私たちが彼女たちを侮り、バカにし、蔑んでいたのですよ!!」

それがどうだ、蓋を開けてみればどうだ、自分達は聞いたこともない田舎の公立一般高校の帰宅部女子高生にまるで歯が立たなかった。

仮にも日本ウマ娘トレーニングセンター学園の生徒が？立ち位置はどうあれプロの指導を受けて公式レースに出ることが出来るプロが？

悪い冗談にしか聞こえない、一般校とはいえスポーツ部のエースや

経験者というほうがまだ納得がいく。

そう思い込んでいた、あり得ないとタカを括っていた、それ以外の経験すら定かではない一般私人からの出走者など一考する価値などない。

だからあの時、あの場で、レースで名を上げる大勢のウマ娘達やトレーナーが勢ぞろいしたときには興奮したのだ。

少しでも担当の未来を拓く事ができる絶好の機会になったのではないかと、彼女たちも自分たちを応援してくれているのではないかと。

見たいものを見て、聞きたいことを聞いて、無様にそう思い込んでいた。周りを見ていれば、何もかも明らかだっただろうに。

結果は散々だ、どこまでも辛い現実がああレースにはあつた、自分達がどれだけ浅はかだったのかを見せつけられた。

極めつけには、自分達はU R Aファイナルズにおいて新たな歴史の幕開けになるはずだったこの輝かしいレースに泥を塗りたくった。

トレセン学園史上最悪の大敗北であり、決して笑って口にできるものではない史上最底のレース結果を刻んでしまった。

中身がどうあれ、彼女の実態がどうあれ、歴史には刻まれるのだ。

一般公立高校の帰宅部女子高生にトレセン学園生であり現役の競争ウマ娘が負けたのだと、トレセン学園で燻る自分たちは一般高校の帰宅部以下の劣等生だという前例を作ってしまったのだ。

「理事長、どうか、どうか!!」

自分の愚かさを棚に上げてでも、彼は必死になつて頭を下げる。自分にはこれしかできないから、もう残されていないから。

もうやめてくれ、ここでやめてくれ、もうあんまりだ、あの子ももう十分苦しんだ、もう十分悲しんだ。

「あの子の思い出を壊さないでください、あの子の思いを歪めさせないでください、あの子の世界を壊さないであげてください!」

これは我儘なのだ、これは自分の弱さが招いたことなのだ、ひとえに自分の実力不足故に起きてしまったことなのだ。

それが理解できていたとしても、彼はトレーナーなのだ、担当に全

てを捧げても惜しくないと考える存在なのだ。

「お願いします、お願いします！理事長、どうか、どうか再考を、どうか!!」

頭を下げる、無様にその場で土下座をして、地に額をこすりつけて願う。この学園の最高責任者に、URAFファイナルズの総責任者に。シマカゼタービンの出走不可を決定できる彼女に、シマカゼタービンの除名を無様に願う。

呆れた行為であり、許されない不正であり、これ以上になく泥を塗りたくる行為である、それでもやめるわけにはいかなかった。

「それはできない」

その思いは、その願いは、理事長も理解できた。だからこそ、彼女はそれを拒絶する。

「これは私が始めたことだ、すべての責任は私にある。故に、私にそのような不正を働くことなどできん!!」

起こしてはいけない怪物にちよっかいを出してしまったのだ、手を出してはいけない領域に手を出してしまったのだ。

それが身に染みて分かってしまったからこそ、理事長は頭を下げるトレーナーに向けて思いを否定する。

全てのウマ娘にチャンス等を等しく与えたいから起こした行動が、とんでもない怪物を揺り起こしてしまったのならば、それをすべて見届ける義務が自分にはある。

「彼女は勝ったのだ、実力を示したのだ！それを認めずして何が学園長か、何がURAFファイナルズか!!」

「理事長!!」

「敗北!!」

トレーナーの言葉を遮り、現実を突きつける。

「敗北したのは事実なのだ！我がトレセン学園の生徒が、現役の競争ウマ娘が!!部活に入っていない一般高校のウマ娘に惨敗したのだ!!」

「トレーナー君、何をどう言いつくろおうとも変わらないよ。我々はね、負けたんだ」

今まで静かに会話の推移を見守っていたシンボリルドルフが静か

に理事長の言葉に付け足す。

この学園において、かのシンボルドルフがそれを口にする。その  
事実は一トレーナーからしてもとてつもなく重い。

「負け、ですか…」

「そうだ、だがそれで——」

「それではあの娘は一体どこに居場所があるというんですか！誰が認  
めてくれるというんですか!!

ただの一般人に負けてしまったあの娘を、これまでの全てを否定さ  
れてしまったあの娘を！

世間は認めない、世界は認めない、こんなにあんまりではないです  
か!!」

「ここに居る!!ここに居る!!」

秋川理事長は力強く宣言する。

「たとえ世間が認めなくとも、たとえ誰もが否定しようとも、私は認め  
る、我々は覚えている！」

理事長は大振りな動きで扇子を取り出し、それをトレーナーに見せ  
つけるように開く。そのセンスに書かれた文字は『永劫』だ。

「我がトレセン学園はたとえ何があろうとも、未来永劫、競争ウマ娘達  
全ての味方である！」

誰も答えられなかった彼の慟哭に秋川理事長だけがそれに真っ向  
から理想で答える。残酷な話であり、交わることのない平行線だと東  
条は感じた。

これは理想だ、これは夢だ、彼女はそれを信じているし体現しよう  
としているのだとしても、今のトレーナーにはきつと響かない。

なぜなら彼は現実を知ってしまったているからだ、今を知っているか  
らだ。たとえ未来で救われるのだとしても、救いたい彼女がいるのは  
今なのだ。

次こそは、などという言葉は意味がない。ルドルフが言おうとした  
言葉は『挑戦者』故の余裕でしかない。

だから彼には意味がない、救えない理想には何も意味がない。ト  
レーナーは頭を下げるのをやめない、理事長の言葉は届いていないの

は明白だった。

言葉にならない、言葉を挟めない、どうしたものかと悩む東条ハナとメジロの主治医。

説得しようと言葉を重ねようとして後ろから口をふさがれるシンボリルドルフ、それを行うナリタブライアン。

その中で、部屋の隅からひどく空寒い拍手が鳴り響いた。

「素晴らしい、さすがは理事長、姿かたちからは決して計れぬその高潔なる精神と魂、感服いたしました」

「誰だ！」

この部屋の誰でもない男の声、いつの間に入り込んでいたのか分からないその言葉の主いち早くナリタブライアンが反応する。

室内に動揺が走る中、その声に一人だけ、メジロの主治医だけは頭が痛そうに頭を振った。

「黙っていると言ったでしょう……」

「失礼、少々込み入っているようでしたので少し手助けになればと思ひまして」

「ああもう……失礼します、込み入っていたようなので私が入れて待たせていました……彼を外に放置するのは、少々見た目が悪いので」

どうやら白熱する室内の議論の最中にメジロの主治医が対応して室内に招き入れていたらしい。

その彼の判断は間違っていないと室内の誰もが思った。その姿はまさに異形、そして異常であった。

「連絡を受けまして人獣総合病院『イドフロント・ロドス』より参りました。

シマカゼタービンの掛かりつけ医師を務めております、気軽にドクターとお呼びください」

蒼いラインの入った黒いコートを羽織り、黒ワイシャツに黒のスラックス、黒の革靴という黒づくめ。

そして頭部はメカメカしく紫に光るI字スリットの入ったマスクの男。ドクターと名乗る完全な不審者は恭しく一礼してみせる。

出自は理解できた、シマカゼタービンの健康診断書を発行した病院

でありかかりつけ医師を招待したのは紛れもないトレセン学園であるからだ。

しかしそれでこんな格好の医師がやって来るなんて誰が思うのか。

「ドクター？」

「放っておいてあげてください、彼はいつもこうなんですよ。私が保証します、本人です」

「さすが主治医、話が早いですね。皆さまこのような格好で失礼いたします。」

私、持病でアレルギーを持っておりまして、このマスクはその対策なのです。ないとそれはもう酷いことになります」

メジロの主治医と懇意なようだ。もともと、信頼しているように見えるドクターに対してメジロの主治医は心底呆れた雰囲気だが。

「それで？ 話に割って入った理由は？」

「ええ、少々提案があるのですがよろしいですか？」

「まったく：相変わらずですね。そう思いつくなら自分の名前くらいすぐに思い出すようにできませんか？」

「私も努めてはいるのですが、なかなか：不思議ですよ？」

「不思議なのはあなたの頭かと。また奥さんとCEOに言いつけますよ？ いらぬ茶目つ気を出したと」

「どうかご容赦ください、あの二人はさすがに手に余ります」

「なら妙な思わせぶりをやめることです。今回は話をまとめることで手を打ちましょう」

こういう時のあなたの提案は頼りになるのも確かです。主治医の全幅の信頼のこもった言葉に、ドクターはやや照れ臭そうにそつぽを向く。

「それはありがたい、では」

ドクターはあまりにも気軽な態度で理事長の前に割って入る、その姿は明らかに手馴れていた。

「聞こう」

「どうやら私の診断書に信憑性がないのが大本の理由のご様子、であれば、信用できる事実があればよろしいのですよね？」

「いや、それは我々の中の問題だ。メジロの診断書も、もちろんあなたの診断書にもケチなど付けるはずもない。」

「どれも公的な書式と審査、そしてU R Aの定めた基準に沿った診断書であると考えている」

「ええ、トレセン学園やひいてはU R Aそのものもそう判断するでしょう。しかし、そうではない方々も居るのも確かです」

「ドクターは未だに両膝をついたまま頭をこすりつけているトレーナーを一瞥する。」

「表情の見えない仮面の先から感じる視線はどこか憐憫を感じさせた。」

「こういった方々を納得させることは容易ではありません。それこそ時間がたてばたつほどに。時間は無条件で彼らの味方です」

「ではどうしよう?」

「証明してもらえばよいでしょう、幸いにしてここは天下のトレセン学園ですからね。競争ウマ娘らしく、タービンには模擬レースをしていただきますしよ。」

「彼女ならやってくれます、私からも話は通しますので」

「彼女の身内でもあるドクターからの提案ならばシマカゼタービンは拒否をするまい。」

「ましてやこの現状を一発で打破できるとするならばそれに乗らない手はないはずだ。」

「幸い、彼女は昨日からあなたたちの管理下にあり、食事などもすべてあなたたちに用意されている。これではドーピングなんてできませんよね?」

「もちろんレース前には細かなメディカルチェックと血液検査をして潔白を証明しましょう、それでこのトレセン学園の精鋭を相手に実力を示せばそれで証明になりませんか?」

「そう、例えば：G Iクラスの精鋭たちに好成績を収めたとなれば、それで十分でしょう」

「軽やかに提案を述べるドクター、その言葉は確かに正論である。常道である。それは実にわかりやすい証明だろう。」



しかし秋川理事長も、樫本副理事も、それだけでなくこの室内にいるドクターとチームリギル以外の誰もが容認できない発言であった。「彼女に連戦を強いるというのですか、仮にも彼女のかかりつけ医師を名乗るあなたが？」

いつになく厳しい表情をしたたづなが強い口調でドクターの提案に疑問を投げかける。

その疑問は競争ウマ娘と深く関わっているのならば当然の発言であるが、ドクターはそれに軽く首をかしげて何でもないように返答した。

「はい、そうですが何か？」

「それがどれだけ無謀な発言かわかって仰っているのですか？彼女は昨日、本番のレースをしたばかりです。

ウマ娘の足の繊細さはご存じのはず、彼女の足はまだレースをできるほど回復していません。

それなのにそのような無茶を、このような模擬レースですると？無為に怪我をさせるつもりですか？」

普段では見られないほど強い睨みでたづなはドクターを睨みつける。しかしそれを見たドクターは少し考え、そしてあっけらかんとそれに返した。

「ああ、その点はご心配なく。彼女の足はたかが3キロの平地レースで音上げるほど脆弱ではありませんので」

「なにを——」

「チームリギルの皆様、あなた方ならばわかっていただけですよね？」  
ドクター、シンボリルドルフ、ナリタブライアン以外から注がれる驚愕の視線に、内心嘘をつくべきだったと柄にもなく後悔した東条ハナであった。

既にレポートの詳細は提出済みである、すでにチームリギル内でも周知済みである、彼女の規格外っぷりを誤魔化すのは不可能だ。

ドクターの言葉は正しい、シマカゼタービンはまったくもって消耗していない。昨日のレースをまるでなかったかのように。

それを知っているからこそデュープリンパクトの提案を了承した

し、いい機会だからと大々的な合同練習を企画した。

トレセン学園側においてそれを認めるのは非常識だとしても、現実に目を背けるわけにはいかない。

出来る、簡単な話に違いないのだ。現地で見た限りシマカゼタービンは毛ほども前回のレースで消耗していない。

これは後でまた根掘り葉掘り聞かれるだろうな、しばらくまた残業だろうな、実に無情な話であった。



「そーいやトレセンって夏合宿あるんだろ？なんでいかないんだ？」

朝の清々しい空気が残るトレセン学園の歩道、トレセンのジャージに着替えた俺とデイープはチームリギルが予約した練習場に駄乗りながら向かっていた。

なんか懐かしい感じ、前前世の頃はこういうのなかった気がする。あつたけど忘れただけか、元からなかったか、さすがに記憶は薄れてきた。

だが前みたいで楽しいのは確かだな、馬鹿笑いでできる相手は本当に重要だ。

「トレセンの合宿所だって限りがあるからね、集中すると練習どころじゃなくなるから学園全体でローテ組んだりするんだよ。

でもそれじゃ間に合わなかったり足りなかったりするからさ、余裕のあるチームによっては自前で場所を取ったりするんだよ。

だから日程は程よくバラバラだったりするんだ、リギルなんかは毎回そのタイプ、うち資金には余裕があるんだよね」

「テレビでやったビーチとか合宿所って滅茶苦茶広い印象あったがそれでも足らねえのな。さすが中央、全部スケールがでかいね」

「タービンに聞くのもアレだけど、群馬トレセンだところはどうなの？」

「修学旅行の話とかじゃなくていいんかい？いろいろバカ話は山ほどあるぜ」

普通の修学旅行だったけどな、定番の京都旅行は楽しかったぜ。特に大きな事件らしい事件はなかったな。

神社巡りに映画村、修学旅行シーズン特有のイベント行事もいろいろあった。

他の学校の連中と被ってたこともあってか不思議と一緒にになって駄弁ったり面白かったぜ、オッドアイ仲間もできたしな。

ああでもスケベ女子のケツは蹴飛ばしてたか、あいつら男が覗かないからこつちから覗こうとしてやがった。

肉食系女子は逞しいがそれは流行らんわ、そもそも覗きで悲鳴上げるほどうちの男子の裸に価値はない。

「それ禁句、うちでそれは嫉妬の炎で焼かれるからね？」  
「お前ら縁遠いもんな、そういうの」

あの3人もそうだったわ、修学旅行の写真見てなんか凄い顔してた。どんだけ睨んでもお前らそこにはいないのよね。

班作って見学したり、旅館の部屋で夜更かししたり、度が過ぎてバカやった阿呆が怒られてるの覗き見たりさ。

「やっぱり憧れる事ってあるんだよ。好きで入ったとはいえさ。普通の学校に行つてればああいう青春もあったのかなってさ」

ならそうすりやよかつたじゃねえか、とは言わない。俺の家は別にウマ娘レースに思い入れなんかねえから自由にできたが、そうじゃねえ家庭は多い。

ウマ娘が生まれたなら大体は親ですら一度は夢を見る、一般家庭だと養育に諸々に国から補助が出るあたり余計に強いんだよな。

「トレセン学園にはウマ娘が必要とするものは何でもそろっているってよく聞く話だけどねえ？」

「全部あったらタービン来てたでしょ？」

「なる、そりゃそうだ。ま、話を戻すと知ってる限りじゃそつちとそう変わらんが企業体験とか力入れてるな。」

陸自の入隊体験会とか警察学校体験入学とか、一般企業も地元の有

力企業は全部あるし推薦枠もあつたはずだ」

「群馬は地元密着型だから地元企業との関りが深い、ここで渡りをつけて卒業後の進路を作ったりしてんだと。」

確か藤原豆腐店に行つた変わり種も過去には居たと聞いたな、意外と幅広いコース揃えてんだよなあホント。

ダイオー、ツバキ、ノルンの実家なんかもその類、さすが俺なんか遙かに超える超が付くお嬢様だ。

うちにも何度か来てるの見たし一緒に仕事したり指導したが、そいつらがうちに来てくれたことはまずねえ。

これは有る意味伝統というか通例というか、うちに来た連中は大体レースで成功するから来る理由がなくなっちゃうんだよな。

親父も兄貴も熱心に指導してるから知り合いが活躍してうれしいのと同時にちよつと残念がつてるのよな。

「企業体験？なんでそんなことしてるの？」

「卒業して就職する連中も居るからだ、予め対策しておいた方が何かと気楽に取り組めるからな。」

あとは葦名武道場で泊まり込みが常連か、おかげで合宿期間は余計に戦場だぜあそこ」

葦名武道場、我が芦名の名所である葦名城下町の大手門付近にあるでつかい五重塔みたいな武道場だ。

芦名に伝わる古武術の総本山みたいなもんで、芦名に散らばる道場から年がら年中そこに集まって異種交流戦とか演舞やってる。

しかも夏祭、冬祭で市街地まで使つた大規模模擬戦とかもするしな。

去年の夏は葦名城攻略大規模模擬戦でやばかった。忍び伝説モチーフの救出イベント、ラスボスの剣聖役やらされたんだよな。

大忍がダイオーで、現城主をツバキ。ノルンとウララが大手門の門番、あいつらチハ乗り回してハチャメチャだった。

「トレーナーに提案してみようかな？たぶんそれ、グラス先輩が興味津々だったやつだ」

「やめとけやめとけ、さつきも言ったがこの時期はガチで戦場なんだ

よ。このクソ熱いのにそれを喜ぶ変態が世界中から集まってきやがる。

とつくに自衛隊や在日米軍のモノ好きどもが居座ってるし、他の国の連中も入ってるんだ」

そうなるとうなる、戦いは激化する、それだけなら喧嘩祭りみたいなもんだから風物詩なんだが、問題はこんな奴らが集まるせいでお食事処も戦場になることだ。

武道場にも食堂はあるけどそこで全部賄ってるわけじゃねえし、そもそも武道場のは関係者用で挑戦者という名の部外者は実は使えなかつたりする。

かといってそれに合わせて食事処を増やすなんてこともしない、あくまで一時的なもんだからな。恒常的に増やすと大赤字だ。

ただでさえキャパオーバーな所に食欲旺盛なお年頃のウマ娘達が大挙してくるんだぞ、もう戦争だよ、食事の取り合いみたいになって競い合うようにみんな貪ってんだ。

「おかげで酒が売れる売れる、他にもいろんなところから来てるからもっと人が多くなるぞ」

実際、ブーニーハットの英国紳士が酒を買いに来たかん。いつも常温スタウトを欲しがるから今回は特別に仕込んだ試作品を押し付けてやったぜ。

気合い入れて作ったから味は保証するが、それがあの人の舌に合うかはまた別問題だ。

「あの祭りはお前らにや向かねえよ、観光以外はやめときな」

ちなみにあいつら、女もゴリゴリのゴリラだぞ。普通のウマ娘程度なら素手で勝てるわ。いらん妄想は捨てる、みな優秀な兵士だ。

あいつらも峠に出現するからな、朝練で隊列組んでランニングしてる。たまにかち合つてバトルになつてぶつ倒れるまでがお約束。

今年は一切何やる気なんだか…今回は俺に頼られても無理だぜ？  
校長。

「うへえ、なんかやばそう…それにしてもタービンがURAFアイナルズに出てくるなんて思わなかつたよ、すっごい楽しみ」

「期待されても出ないものは出ないぞ」

「そんなこと言って、楽しみな癖に」

「まあな、あいつらがどこまで強くなったか知るにはいいチャンスだ」  
「あ、それ私入ってないでしょ？ 私も出ようかな、タービンのGⅢ、どうする？」

「お前はクラシックに集中しろ、余所見してる余裕なんざねーだろ。  
3冠最弱って名乗りたいなら別だがな」

「うわ、勝つ気だよ…まあ確かに負けてるけど酷くない？ 中央はうちのホームですぞ？」

「走り屋の流儀を忘れたか？ なんと、嘆かわしい…」

まあそうそうそんなことはないと思うがね、菊花賞の前だろうが後だろうが俺の出るレースに出る理由がない。

しいて言えば菊花賞前の調整目的とかだろ、それはそれで絶対荒れるだろうな。

「じゃ、やろうか」

「貴公は2着がお似合いだ！」

俺はすぐさま大いなる鷹のポーズ、ディープも勇猛なる熊のポーズ。互いにバカみてえなポーズで相対、あかん、もうあかん、笑う！  
「ぎやはははッ!!」

腹を抱えて二人して笑った、あー楽しい、こういうバカみてえなやり取りってホント楽しい。朝飯はなんか変なことになったが気分を切り替えていこう。

本日の予定は秋葉原で軍拡交差点からスタートという東京見物から大幅に変わりトレセン学園でディープの練習相手になるはずだった。

まあそこは名目でおおよそ、チームリギルとやらの練習に俺が紛れ込む形になるだろうから大人数になるだろうなとは思ってた。

他にも声かけようかとか話もあったし、ターボ辺りは混ざって来るだろうなとか気楽に思ってた。

うん、まあでも、でもねえ…

「なあディープ、素直に言って良いか？」

「なに？」

「お前一体何しやがった？」

バカみてえなポーズをやめて練習場に入ってすぐに感じたのは違和感、明らかに人の気配が多い、チームリギルは大所帯だと聞いていたがそれにしたって多すぎる。

練習場所にされてるコースに行ってみればもうウマ娘ウマ娘ウマ娘、どっかで見たようなウマ娘だらけ。

グラスワンダーやエルコンドルパサー、それから多分チームリギルのチームメンバーがいるのはいい。

ターボも居るしネイチャも居る、それと写真で見たことのあるメガネと帽子のウマ娘と見たことないヤツと南坂トレーナー、チームカノープスがいるのも納得だ。

だがなぜいるゴールドシップ、という事は周りにいるのはたしかチームスピカってやつか。なぜ大勢でいる、わからん。

それに何よりなぜここにもいるのかオグリキャップ、ついでにほかにもウマ娘がいるが全員顔も名前も知らぬ。

当然周りもトレーナートレーナートレーナー、さすがに俺だつてちよこつとは見た覚えのあるトレーナーが勢ぞろい。

あのジャージのグラサン、どこことなく桐生さんに似てるから覚えてるわ。前にテレビに出てたよ、ある種の凄味つてのを感じるぜ。

何なら神室町を練り歩いてても違和感ないし喧嘩を吹っ掛けられてるイメージが浮かぶわ、あそこ昔っから手が出る連中多いのよ。

兄貴と一緒に暴れてんの何度も見たし、俺も秋山さんとか春日さんと一緒に暴れたっけな。

あと俺の見間違いないならいいんだが…なんか光ってるのいないか？着ぐるみがないか？俺の幻覚だよな？なんか濃いんだけど色々。

「多くね？いや多いだろ、これ」

「そうだね、みんな来てるね！」

「いや来てるねじゃねーだろ。明らかに関係ない人混じつてんぞ、あれとか」

俺が指差したのはメイドさん、俺はほとほとメイドに縁があるらし

い。そう思うことにする、まだメイドのほうがマシだ。

あれサトノ財閥の人だろ。取引先の資料に顔写真が載ってたぞ、メイドのまま。トレーナーだったんかい。

じゃあその周りにいるのはサトノ財閥のウマ娘ってわけか、すげーなおい。

「チームカペラだね、クラウン先輩とダイヤモンド先輩、来てくれたんだ」

「誰だよ」

「あ、タマモ先輩だ。イナリ先輩とクリーク先輩もいる」

「いや誰だよ」

「キタサン先輩とドウラメンテ先輩もいる、シユヴァルグラン先輩にヴィブロス先輩にヴィルシーナ先輩も揃い踏みだあ！」

「だから誰やねん…」

わからん、わからんぞ、俺にはグラスワンダーとエルコンドルパサー達くらいしかわからん。

南坂トレーナーの隣にいるなんか見るからに女帝って感じのウマ娘だつて顔も名前も知らんぞ。

だがわかる、わかるぞ。ここに居る連中、全員底が知れん…立ち振る舞いからしてヤベーのばかりだ。

しかし問題はそれだけじゃない、見られているな。うまく隠している、敵意だけじゃない。

「見られてるな…」

「そりや見られるでしよ、大注目だよ」

そうなんだろうけどねえ…こいつらのそれは全く別のものが混じってやがるな。選別する目、見極める目だな。

こいつらは一流のトレーナーだ、良い目を持っている。しかしあくまでトレーナーだ、教師の目じゃない。

あながちテレビで言ってたことは間違いじゃねえ、群馬でもこれは同じだ。

正直、教師として一人前つて言える連中は少ないんじゃないか？学び舎なのにな。



大人が子供を見極める？選別する？気に食わん。だがそういう世界なのも理解してる。

ここに来た連中も覚悟してんだ、それならとやかく言うつもりはねえさ：だが俺にその目を向けんじゃねえよ。

視線のほうにそれとなく睨み返す。口には出さん、俺が勝手に気に食わんだだけの事、世直しするような性分でもない。

だが忘れるな、神聖なる学び舎としての体を取っているんだろう？トレーナー共。

「それより何やらせる気だ？こんな大勢の前で」

「トレーナーは普通に併走と炭酸水のをやってもらおうって言ったよ、あとみんなの走行スタイル見てほしいって言ってた」

「それくらいなら別にかまわんが：炭酸はウエストポーチくらいないといけないぞ、さすがにあれは用意してないぜ？」

いくら俺でも装備一式いつも用意してるわけじゃねえ、すぐ使えるようにする場合意外と嵩張るからな。

バラシて分解しておけば大体コンパクトにできるんだがそうすると今度は即応性に難があるし。

「それならターボ先輩が貸してくれるってさ、えるしーっ？っていうベルトにペットボトルポーチ付けたヤツ。

あと胸に付けるエプロンみたいなのも貸してくれたけど、あれのポケット、ペットボトル入んなかったんだよね」

56式弾帯とLC-2ピストルベルトか、まだ持ってたのか。最近ヘリコンテックス一式に変えたって聞いてたんだがな。

「まあ俺はいいが：東条トレーナーがそれでいいってんならいい。うん？そういうええ見当たらねえがどこ行った？」

「あれ？ほんとだ。エアグルーヴ先輩しかいないなんておかしいな」あの女帝っぽいエアグルーヴってのか：エアグルーヴ？あれ、なんかどつかで聞いたような：でねえや。

あいつが首ったけのヤツってそんな名前だったような気がするんだが：気のせいだな。

「ちよつと聞いてくるね、ここら辺で待ってて」

え、ちよつと待つてデイープ：行っちまった、こんなところで一人にしないでくれよ、まじで心細いぞ。

どうする？どうすりゃいい？げ、視線がやばい。なんかそこら中から見られ始めた、やだやだこういうの。

しかしかといつて踵を返すわけにもいかないし、ここで待つてるよ  
うに言われたし：しようがない、グラスワンダーの所にでも混じる  
か。お？

「キング、あいつなんでこんなところに」

ちよつど近くにいたグラスワンダーとエルコンドルパサーの所に  
ウマ娘が3人加わった、見たことのないのと妹に似てるのと見慣れた  
の。

シャツの奴の髪を水色にしたらこうなる奴はともかく、キングへ  
イローにまさかここで出会うとは思わなんだ。

アイツこういうの好きそうには見えなかったが：まあ一緒に遊ん  
だことあるわけじゃねえしな。

「あの野郎、電話に出ないと思つたらなんでこんなところに」

ちよつどいい、生の初対面だ。そこまで移動するわけじゃねえから  
駄弁つてても大丈夫だろう。

こういう時に顔見知りが多いのは大変心強い、今回はあいつらの所  
に混じるとしますか。

「キング！まさかそこにいるのはキングヘイローか！」

「え、な。何よあんた!!」

おつと、なんだなんだよそよそしい。

「誰つて俺だよ俺、シマカゼタービン。こうして面と向かうのは初め  
てだが、互いに見慣れた顔だろ？」

ウララは大丈夫だったか？あいつ、遠征にもつてく荷物で悩んでた  
ろ。結局尻切れトンボになつちまったがどうなつたんだ？」

「なんでそんなこと知つてるの!？あなた、一体何モノ!!」

「だから何言つてんだお前、この前も電話で話したじゃねえか。しか  
もお前の方からさ。まさかお前ら知り合いだったとはな、世間は狭い  
ね」

「おや、おやおや？この反応、これはもしかしてひよっとするんじゃないんですかキングさん？」

「何の話だ？」

シャットを成長させたらこうなるような葦毛のウマ娘がなぜか面白いものを見つけたように悪戯気に笑う。

うむ、似てるけどこういうところは違うわな。あいつは心底のんびり屋で超が付くマイペースだが、なんか違う。

「そっちの二人とは初対面だな。シマカゼタービンだ、芦名高等学校3年生帰宅部、峠の走り屋やってる。よろしく」

「これはこれはご丁寧に。私はセイウンスカイ、よろしく」

「スペシャルウィークです、よろしくお願いします！もしかしてベレーちゃんの先輩のタービンさんですか？」

「クイーンベレーの事か？トレセンから転校してきた？それなら俺だと思うが…ああ！もしかしてスペってあんたのことか」

「はいー」

なるほどスペシャルウィークだからスペなのね、なんか似合ってるな。スペンツって感じるし…スペンツってなんだ？

「よろしくな、俺の事は好きに呼んでくれや、タービンでもシマカゼでも」

「よろしくお願いね、タービンちゃん！」

「はっはっは、ちゃん付けとはやりおるわ。しかし本当に世間は狭いな、驚きだ」

「それはごっちのセリフデース！タービン、どうしてキングと知り合いなんですか!?説明を要求シマース！」

落ち着きたまえエルコンドルパサー、元から癖のある言葉遣いがさらに愉快なことになってるぞ。

「特別な事なんざねーよ、ハルウララ経由だ。友達の友達ってやつさ。あいつと知り合いで時々電話で話してたのさ。」

そういう電話って大体寮の部屋でやっててな、同室のキングが話に混ざるようになってそこからさ」

「ウララちゃんはそんなこと話したことなかったような…あ、でも高

知の友達のこととは言ってたかな？」

「スペちゃん、たぶんその中に混じってたんだと思いますよ。ところでベレーさんのやり取りについて詳しくお聞かせ願えますか？」

「ひよえ…」

あ、グラスワンダーの顔が怖い。穏やかに笑ってるのに背後に般若のお面を付けた鎧武者が見える。

こいつスゲーな、完全に大和撫子じゃん。たしかアメリカからの留学生で純度百パーセントアメリカ人じゃなかったっけ？

まあ日本文化に憧れてて葦名の歴史にはかなり食いついてたから納得いくけど…今度もしこっち来たら一心校長の道場に呼んでみるか。

「落ち着けよグラスワンダー、スペシャルウィークさん絞ってもなんも出ねえよ」

「…そうですね、少々取り乱しました。あとグラスで結構です」

「こ、怖かったっぺ。助かったよタービンちゃん…あ、私はスペとか呼びやすいように呼んでいいですよ？」

「私もスカイでいいよ。同じ逃げウマ娘として仲よくしようね？」

「エル、デース！今日は負けません！」

元気で大変よろしい、高校生はやっぱりこうでなくっちゃな。元氣すぎるのも大変だけど、それが若さだからね。

「な、な、な…」

おや、キングの様子が…なんか既視感。

「なんですってええええッ!!」

うるせえ!!またこの空気かよ!!

「うわ!!?どうしたのキングちゃん!!?何かあったの?」

「何かあったかじゃないわよ!!何かありまくりよ!!というか何がどうなっかってこうなってるのよ!!」

「おい、さつきからどうしたんだ?まるで意味が分からねーぞ」

「意味が分からないのはあなたよ!!あなたの学校って、芦名じゃないでしょ!制服だって全然違うじゃないの!」

「はい?なんの話だ、というかお前に俺の制服姿見せたことあったか

？」

あつたか？覚えてないぞ。というかこいつと話すときつて大体夜だから制服着てないはずなんだが…

「ほらこれー！ミレニアムってあるじゃない！おかしいでしょ！！高知から転校したとかそういう話一つなかったじゃないの！！」

キングが若干怒りながら見せてきたスマホの画面には、まあ何とも見慣れた面子との懐かしい写真。

ネルとアリスと一緒に寝落ちしてるヤツ、ちなみに撮影者はウタハ。

よく覚えとるわ、向こうでも散々ネタにされたし。レースゲー大会に出ようとした二人に巻き込まれたんよ、チーム戦で3人必要だからつてき。

ゲームと実物は違うというに走り屋だからつて…まさかゲームでここまで特訓するなんて、初めての経験だったよ。

なんでこんなのキングが持つとるんじゃない！！これこっちで持つてんのウララくらいやる！！どうする、どう言い訳する!? そうだ！

「ああ、これ短期留学してた時の写真だな…なんでこれ持つてんのお前？」

調べられたらアウトだけどね！そんな学校ないし！！誤魔化すにはこれしかない。何とかなれー！！

「短期留学？でも確か高知で知り合ったってウララさんが…」

「おう、それは間違っていないな、ちよつと縁があつて高知で知り合ったんだがそれとこれは別件だぜ。」

こいつは別の時に撮られたヤツだ。すまん、なんか勘違いさせちまつてたみたいだな。

俺は生まれも育ちも群馬でな、ウララと知り合ったのは高知なんだがそりや旅行に行ったからなんだよ。

ほらこれ、高一の時に拓海たちと一緒に高知旅行に行ったんだがな？そこの海水浴場で偶然な。

あ、男は俺の友達な。拓海とイツキ、昔なじみだよ」

俺がスマホを出して見せたのは高一の時の高知旅行の写真。

海辺の砂浜で水着姿の俺やダイオー達、拓海とイツキ、それに混ざったハルウララが並んだ写真。

ちなみに撮影者は祐一さん、ほんとにこの時はお世話になりました。でもガソスタに飾るのは勘弁してください。

「そうだったの…ああもう、私こそごめんなさい。完全に自己完結してたわ、そういえばこの手の話は全然してなかったわね」

「まあ元々ウララ挟んでの始まりだったしな、する必要も意味もなかったというか…俺もとつくに知ってるもんだと思ってたし」

「じゃあお互い様ね」

「それでいこう」

なんとかなった、か。すまんキング、こればかりはそうペラペラ喋るわけにやいかんのだ。せめてウララから顛末聞いたとかじやないとな。

まあいくらハルウララでもそうそうペラペラ喋らんだろうけども…ないよな、やらないよなウララ。信じてるからなウララ。

「で、なんでお前がその写真持つてんだ？」

「ウララさんが間違えて送ってきたのよ」

「おっふ…」

あんのおバカ!!何という事を!!あれほど扱いは慎重にといったのに!!返せ!俺の信頼を返せ!!

「ほかにもあつたり?」

「さすがに無いわよ。えっと…ネルさんとアリスさんだったかしら？」

その二人と一緒のだけ」

名前までゲロったんかい…いやこうなりやそれくらい教えるのが普通か、秘密にしたら目立つか。

良かった、本当に良かった。たぶんもつと不味いのか恥ずかしいのじゃなくて、メイドとかドレスとかバニーとか!!

そうでなくてもいろいろあの連中の詰め合わせ持つてんだからあいつ…今度きつちり釘刺しておかねばならんかね。

「今度俺からも言つとく。じゃ、それ消しといってくれ」  
「え?」

「…いや、いや、うん」

一枚くらいならまあええか、心靈写真とかオカルトグッズだと悪いものは呼び水になったりするからホントにダメなんだけども。

神社土産やら開運グッズやら集めまくった結果、なぜか家が吹っ飛んだとかあるからな。

けどキングに関しちや今更だ、だって同室がその塊な感じなわけでごんなの誤差なんだよ誤差…でもターボとウララには神ふぶきを渡しておこう。

あれがあればよほどのモノじゃなけりや物理で何とかなる。

「で？なんで朝無視した？電話したんだけど？」

「え、そうなの!?!ごめんなさい、気付かなかったわ…」

ありや、ならしやーないな。でも気づかんとはなんかあつたんか？

「あー、ほら、アヤベさんが忍び込んで大変だったから」

スカイ曰く、アヤベさんとやらがキングの部屋に忍び込んでいたらしくその対処でひと騒動あつたとか。

なんでもキングの同室であるウララが部屋にぬいぐるみを持ち込んで、それがそのアヤベさんに気に入られて時々モフモフしてるらしい。

普段はウララに許可を得てそこにいるのだが、今はウララが遠征で不在かつキングと絶妙にタイミングが合わずで、何を思ったのか忍び込んでいたそうな…吹っ切れてんなあ、トレセン。

「ぬいぐるみってあいつ何持ち込んでんだ？麻薬かなんかか？」

「人聞きの悪いこと言わないで頂戴、ただのぬいぐるみよ。あれはアヤベさんだからとしか言えないわね。」

そもそも少し前まではこんなの無かったのよ？でもウララさんが、今回なんか変なデザインのぬいぐるみを持ってきててね。

どこ見てるか分からないような白い鳥の…なんていうか、鶏の、その、何とも言い難いのかあるんだけどそれが何とも良い肌触りで「ピンキーカバとスカルマンを抱いてウェーブキャットさんを首に巻いてビッグペロ口様にダイブするの、ふわふわでふかふかよ」

「あ…あれか」

忍術研究部の一件の時に桜龍が持ってきた支援物資に突っ込まれたあのペロキチ厳選モモフレンズ布教グッズ。

そういえばほとんどウララが引き取ってたつけ、小物ならともかく等身大ペロロ人形とかどう見ても頭おかしかつたからな。

あんなもん何に使うんだ？って考えたら普通を自称する例のあの人なら『ペロロ様ですから』って言いそうな感じではある。

今思うとだいぶ遊んでたよなあっち側、まあ切羽詰まってたわけじゃねえからいいけど。

「…ところで誰です？」

「アヤベさん、まだ話は終わってませんよ！あ、初めまして！ナリタトップロードです！」

すみませんお騒がせして。ほらこっち、他の人に迷惑かけないでください!!」

「待って、待って頂戴、ふわふわが、やっと見つけた手掛かりが——」  
「はーはっはっはーアヤベさんは相変わらずだね、騒がせてすまないね君達！この僕が代わりに謝罪しよう！」

シマカゼ君、話は聞いてるよ。僕はティエムオペラオー、チームリギルのチームメンバーだ。これからよろしく、では！」

「マジかよ」

件の不法侵入者かよ、言うだけ言ってなんか主人公っぽいウマ娘に引っ張られて消えていったぞ。

ついでになんか妙に自己主張が激しいウマ娘も居たな、なんだあいつ？さすがトレセン、やっぱり吹っ切れてんな。

「あ、居た居た。タービン、話聞いてきたよ。なんか急な呼び出しがあったとかで…ってどしたの一体？タービン何その悟った顔」

「いや、世間の狭さと懐の深さに脱帽してたところ」

「なにそれ？どういう意味？」

「呆れてんだよ」

「ぶっちやけやがった!?!」

ぶっちやけもするわ、これが噂の中央か？日本が世界に誇る日本ウマ娘トレーニングセンター学園の中身か？



日本の学界の中でもトップ層に位置する最高学府の一端か？これが？この姿が？　：女子校ってこうなる運命なのかね。

ふと空を見上げた、空は青い、空の向こうには群馬県警のハインドDがのびのび飛んでる。

良いよな、自由に飛んでる日の丸ハインドD。あれクソが付くほど頑丈で汎用性あるのに安いんだぜ？

「結構ヤベーのばっかじゃね？朝から濃いのはっかで…なんかこう、うん」

「いつものことじゃん」

「マジでいってんの？」

「うん」

現実逃避もそこそこそこそそ耳打ちすると普通に領きやがったぞコイツ。いつもの事か、そうか、うん…ターボ凄いなあ。

「…やめよう、この話題」

「いいけど、それでどうしたのさ？キング先輩となんか妙に仲いいじゃん」

「こちら、友人のキングハイローです、いままで本人認定されてませんでした」

「一体何が起きてんの？」

いやはや、実はかくかくしかじかまるまるウマウマウマ娘って具合でござーまして。

説明するとお目目真ん丸になったディープの顔はなかなか面白かったと付け加えておこう。

そりやまさかキングハイローと馴染みがあるなんて思ってもみなかったんだろうよ。

その後なんか獲物を見つけた狩人の目でキングを見てもいたけどな、ドンマイだキング。

ウマ娘 IF・番外編

IF1・オグリキャップの災難 ☆

オグリキャップ、それは中央レースにおける伝説。地方レースからやってきた芦毛のシンデレラ。

これまで多くのレースを走り、多くの名誉と伝説を作り上げてきた彼女は：担当トレーナーである六平のトレーナールームの片隅で見事に燃え尽きた抜け殻と化していた。

文字通りの抜け殻だ、下手の隅で体育座りして一步も動かず、親友のベルノライトの声掛けにすらわずかな返事しか返さない。

一体何が起きたのだろうか？知らない者が見たら不思議に思い、そして一つの違和感に気付くだろう。

オグリキャップから感じる奇妙な違和感、それは彼女の頭部がさみしいという事。最終防衛ラインが後退したとかいう話ではない。

彼女がいつも身に着けている髪飾り、五つのひし形を連ねたようなデザインのそれが今はない。

簡単な話だ、髪飾りは壊れてしまったのだ。少し前の練習終わり、レース場の出入り口で段差を踏み外した拍子にオグリキャップの頭から擦り落ちたそれは簡単に壊れた。

髪に固定する櫛の基部部分からひし形の飾りの内側が二つ、ぽきりと折れてはじけ飛んだ。

その光景にあのオグリキャップがこの世の終わりのような、ガラにもない絶望の悲鳴を上げたのは言うまでもなく、その事件は知り合いに瞬く間に広がった。

落とした際に塗装も剥げ、赤く変色した破損箇所をのぞかせた髪飾りは部屋のデスクの上に安置されている。

「おーいオグリ、生きてるか?」

「あ、北原さん」

それこそ、カサマツトレセンに勤める前トレーナーである北原まで

駆けつけてしまうというくらいには。

北原は相も変わらず燃え尽きているオグリキャップを見て小さく嘆息する。こんな姿は自分が担当していた時も見なかったことがない。

それだけこの髪飾りは大切なものだったのだ。

オグリキャップ曰く、それは母が現役時代に走っていた時からつけていたものをカサマツトレセンで走っていた時にプレゼントしてくれたものだという。

以来、肌身離さず持ち歩いてきたかけがえのない思い出の品である。

そこには今までオグリキャップがレースの中で築き上げてきた思い出も、その先代の母が走ってきた思い出も詰まっている。

まさに酸いも甘いも美味しいも、オグリキャップの全てがそれには詰まっていたといっても過言ではない。

それが壊れたのだ、いや、壊れただけならばまだよかった。実のところ、壊れた当初は慄いたオグリキャップも少ししたら落ち着いていたのだ。

元々古いものであるし壊れる時は壊れる、壊れたのなら直せばいい。飾りが折れてしまうのは落としてしまったからしょうがない。

自分の不手際だし、しばらく無しで頑張るよ、と。一週間前のオグリキャップは少し寂し気に笑っていた。

ベルノライトと北原の頭を悩ませるのは、この髪飾りの修理が考えていたよりもはるかに難航してしまっていたことだ。

「どうでした?」

「いや…言いにくいんだが、俺のほうはダメだった。知り合いの工場とかかたっぱしから頼んでみたんだが…」

厄介なのがこの髪飾り、修理しようにもできないのだ。いくら髪飾りの専門家や、この手の小物修理に長けた場所をあたってでも断られてしまう。

最初、オグリキャップは自ら校内で勝負服などの修理を担当している部門に赴いて修理を依頼しようとしていた。

レースで激しく酷使する勝負服に破損は付きものでオグリキャッ

プも面識がある職員が多くいた、そこならば多少専門外でもなんとかなると思っていたのだ。

しかし無理であった、顔見知りの修理担当は髪飾りを見て少し調べた後、とても難しそうな顔をして首を横に振った。そこから雲行きが怪しくなった。

理由はこの髪飾りそのものの造りであった。元々そこまで値打ちのある造りはしていないし宝石などもない、作りも簡素で手の込んだ代物でもない。

直そうと思えば簡単に直せるだろう、そこまで金もかからないだろう、そう素人考えで即決するくらいにはちやちな代物。

ちやちな代物過ぎて修理を仕事とする根っからの職人の手には逆に余る、経年劣化も起き、さらに酷使されていて疲労による負荷も激しく、修理すると言つてもどこから手を付けるべきか分からない代物だったのだ。

元よりレース用ではない普通の髪飾りだ、オグリキャップが思っていた以上に髪飾りは酷使されて消耗していた。

本番どころか練習でも使われ、日常的に使っていたというこの状態で下手な手を打てば逆に破損を悪化させ修理不能になりかねない。

さらに言えばこの髪飾りは『オグリキャップの髪飾り』である。オグリキャップの伝説と一緒に駆け抜けた伝説の品ともいえるそれを下手な修理で壊すわけにもいかない。

それが一週間前、髪飾りの破損から二日後の出来事である。

「できると思ってたんだがな…」

「仕方ありませんよ」

北原は学生時代のツテも使い、この手のリーズナブルな代物を扱う工場に就職した知り合いに尋ねていたのだがそこでも首を横に振られていた。

出来ないことはない、けれど部品がまるでないし絶版なら代替可能な品を調べる所からやらなければならない。

はつきり言ってしまうえばこれを直すのに必要な労力と資金がまるで釣り合っていない、と彼は言っていた。

それでも直せと言うなら直すのが仕事であるが、それにかかりきりになると他の仕事が回らないのだとも。

何よりこれは『オグリキャップの髪飾り』なのだ、失敗したときのリスクも極めて高いとなればなおさら慎重になる。

一応上司には相談してくれたが、彼の上司もオグリキャップの品となればと悩み、やがて心苦しそうに首を横に振った。

「メーカーだけでもわかりやあなあ…」

「さすがに昔のことですし」

メーカーに直接あたろうと思っても、年代物の髪飾りにはそれらしい刻印はなかった。プリントされていたのならきつと経年劣化ではがれたのだろう。

ならば母親はどうかと思つて連絡したが、これを付けていた母親でさえメーカーを知らない。

ただ街の片隅にあった老夫婦が営む雑貨店で一目ぼれして買っただけで、メーカーも何も考えておらずただこの形が好きだけで買ったそうだ。

その雑貨店に探りを入れようと月日の中ですでに店を閉めていて、店主の行き先は不明。

地元に住むベルノライトの両親に聞いても、高齢化で店を閉めて息子夫婦の家に引っ越しすると聞いて以降は知らない。

一応その住所も調べたが住宅地はすでに無く更地となっていた。

「おう、戻ったぞー」

「あ、ロツペイさん、お邪魔してます」

「六平だ。そっちはどうだった？」

「ダメです。費用と時間が見合わないし、他の仕事に支障が出るからって断られました」

「こつちも同じようなもんだ。知り合いの連中に声を掛けたが、みんな簡単なようで難しいって突っぱねやがった。

リスクもたけえし、直すならいつそ特注して新造しちまった方が安いし頑丈にできるってよ」

「特注ですか…」

「おう、勝負服の部品となればそんなの当たり前だからな。だが完全再現となればサンプルが必要になるし、バラさにやならん」

わかるだろ？と六平銀次郎は言葉を切った。その先のことは北原とベルノライトには想像がかった。

完全な複製品を製造するなら、しっかりと採寸して形状を調べ上げるのはむしろ当然のことだ。

サンプルとして提出した髪飾りは構造を調べるために修復不可能になるまでバラバラにされてしまうだろう。

修理不能だけどこれじゃないとだめだから、という事ならば言い訳にもなる。制作側も気合いを入れて仕事をやりやすいというわけだ。

むしろオグリキャップの髪飾りを作り直したとなれば箔が付く、気合いを入れて素晴らしい物を作ればより多く。

そうして出来上がった髪飾りはレースの酷使にも耐える素晴らしい逸品に仕上がるだろうが、それはあくまで複製品だ。

「そんなのダメだ…」

小さくか細い否定が部屋の隅から飛んでくる、見るとオグリキャップが明らかに憔悴しきった顔を上げて首を横に振っていた。

「分かってるよ、あれはあれじゃねえとダメなんだろう？」

「すまない、トレーナー」

「いいんだよ、気にすんな」

しかしどうしたもんか、六平は頭をひねる。現状、自分たちにできる手段は出尽くしていたといってもいい。

廃棄して別物にするならば、それこそ同じ型の品を見つけ出すほうがまだ受け入れやすいだろう。

同型品があるかどうかはベルノライトがすでに両親に尋ねたが不発に終わっている、ウマ娘用スポーツ用品店を営む傍らこういった装飾品も多少仕入れてはいたがそう都合よくはいかなかった。

もとより古い品物であるし知り合いの店や持ち主が使わなくなった古い商品倉庫にあるかもと考え、両親の協力のもとカサマツトレセンの友人たちに依頼して搜索もしたが不発。

自分自身も、実は倉庫の奥に埃をかぶっていたなんて展開を期待し

て実家の倉庫を片っ端から調べたりもしたがそううまくはいかない。

「いつそジャンクでも見つければ…」

「ニコイチか？」

「ええ、カサマツでたまにやってみましたから」

保存が悪くて破損した同型ジャンク品でも見つかったなら、それから部品取りをしてニコイチにするなど話は変わっていたのだがそういったモノも見つからない。

八方ふさがりだ、ここまできるといつそまったく新しいものに付け替えて代替わりさせたほうがオグリキャップの精神的にもいい。

一時はつらいかもしれないが、オグリキャップも壊れること自体は理解している。受け入れるのに時間がかかるだけだ。

「おう、オグリ！いるかあ？」

「タマ…」

「おうわ、なんやますますひどい顔になつとるなあ。朗報やで、髪飾りを直せそうなヤツ見つけたんや」

「タマ…また断られたりしないか？」

「一応写真見せたらできそうって言ってたで。ツバキの知り合いなんやけどまたえらいかわ——」

「それは本当か!?!どこにいるんだ!!」

電光石火、即座に再起動したオグリキャップがタマモクロスの体に飛びつく。

「どこだ！どこにいるんだ!!」

「すごい食いつきっぷりやな…何かあつたんか？」

「実は…」

せつかく骨を折ってもらって悪いのだが、事態はそう簡単な話ではない。ベルノライトは北原や六平が四方八方を回って起きたことを掻い摘んで説明した。

それを聞くとタマモクロスは納得したようにうなづく。

「そうか、オグリは有名になったからなあ…尻込みすんのも分かるわ。ま、あいつは大丈夫やろ」

「どういうことですか？」

「さつき言うたやろ？ 変わり者やって。実際、相当変な奴やからなあ。放課後にガレージで待つとる言うてたから、行ってみるとええで？」

「…危ない奴じゃないだろうな？」

北原の脳裏には学内で偶然見かけたゴールドシップ、アグネスタキオンの破天荒な姿が過る。

このトレセン学園に通うウマ娘は良くも悪くも濃ゆいのだ。

「北原はん、あんたが想像した連中のことはよくわかった。そっちじゃないから安心しとき」

「それはそれで大丈夫か？」

「王女様でも皇帝様でもあらへんがな！ 変わり者なんやが、悪い奴やないで…まあ、口で言うより会ったほうが早いねん」

説明し辛いやつちやで、と苦笑いするタマモクロスに少し不安感を覚えながらも、ベルノライトとオグリキャップは放課後にタマモクロスの教えてくれたガレージに行ってみることにした。



日本ウマ娘トレーニングセンター学園、通称トレセン学園は全校生徒ウマ娘2000人を擁するマンモス校である。

故に出入りする人間も多く、関係者の人数もそれに比例してさまざまな人数になる。

それに対応するため、学内には複数個所に大きめの駐車場を配置し利用者の利便性に配慮して運用されている。

しかし歴史が長いこのトレセン学園の中で、その運用に統廃合と方向性の変化により人気の消えた区画ができるのは当たり前だった。

トレセン学園内にある古いガレージ式駐車場の複数固まった区画、名前もなく駐車場ガレージ区画とだけ呼ばれる其処もその一つ。

かつてまだ車の価値が高く性能もまちまちであった時代、シンボリ



家、メジロ家など大御所のウマ娘を送り迎えする高級車を收容し、車の簡単な整備や運転手の常駐のために作られた一両收容の2階建てガレージを複数建ててあった場所だ。

現代は車の進化、運用の変化、学内施設の変遷で使用されなくなり、清掃員が定期的に巡回する以外は人気があまりない場所だ。

当然ながらガレージは内も外も荒れ放題であり、興味本位で忍び込むウマ娘達のせいで半開きになった壊れたシャッターなど廃墟じみた個所もある。

それはオグリキャップとベルノライトも知っていた、入学初期に散歩がてらこの区域に入ったことがあり、一度だけ見た後すっかり忘れていた。

「驚いたな、ここに住んでるのか？」

そんな場所に再び足を向けたオグリキャップは、まずその変化に驚いた。

ガレージ区画の出入り口周辺のみであるが、確かに人の手が入っており日常生活の雰囲気は漂っていたのだ。

荒れ放題になっていたガレージの外観は、古びた状態ではあるもののきっちり整備し直されて小綺麗になっており放置されていた工具箱や空のドラム缶などは消えている。

タマモクロス曰く、この区画に彼女の知り合いを含めた数名が入学と同時に入居して暮らしているようだ。

トレセン学園にはちゃんとした寮が二つあり、普通はそのどちらかに入寮する決まりとなっているが、入学してきた生徒は煩雑な手続きをして許可をもらったマルゼンスキーやミスターシービーのようなタイプらしい。

そのガレージのうちの一つ、表札に『瀬名』と札が掛けられたガレージ。そのシャッターの横扉をオグリはノックした。

「はい、ちょっと待っててくれー」

間延びした返事が返ってきて、少し待つとドアが開く。

「どちらさんで…ああ、あんたがオグリキャップさんとベルノライトさんか？ツバキから聞いてるぜ」

「ああ、君がシマカゼタービン?」

「そうだ、こんな所まで来てもらって悪いな。入ってくれ、立ち話もなんだ」

ドアを開けてくれたのは蒼い短髪のどこか大人びた表情のウマ娘、右目が青く、左目が赤いオッドアイが特徴的でどこことなくツインターボを思わせる。

彼女も帰って来たばかりなのかトレセン学園の制服姿のまま、口には棒菓子のようなものを咥えていた。

彼女は大人びた仕草で踵を返すと、二人をガレージの中に招き入れた。

ガレージ内はきれいに整理整頓されており、中央部にはダークブルーのスポーツカーが駐車されていた。

トレセン学園ではあまり見ないその車種に思わず目が行く、一番有名なマルゼンスキーのカウンタック以外は目にすることはない。

「おお、すごい車だな」

「俺の愛車だよ、実家におきっぱだと整備し辛いから持ってきた」

「だから寮じゃなくてここに住んでるんですねえ…」

「俺の自慢だね。さ、こっちだ」

シマカゼタービンは心なしか誇らしげにスポーツカーを見てから、ガレージ奥の作業場に二人を案内した。

作業場はオグリキャップとベルノライトには何に使うかわからない機材や部品、オイルなどが所狭しと置かれていて見るからに作業場である。

シマカゼタービンは部屋の隅に片づけてあったパイプ椅子を二つ持ってくる、それを広げて座るよう促し。

その奥にある作業用デスクの椅子にシマカゼタービンは腰かけると、デスクのライトをつけてから足を組んで二人に向き直った。

「さ、まずはモノを見せてくれ。話はそれからだ」

「解った、これなんだが…」

「どれどれ?」

オグリキャップは通学鞆に入れていたプラスチックケースを取り

出し、ふたを開けてシマカゼタービンに渡す。

その中に安置されていた髪飾りを一瞥し、一言断って彼女はケースごと髪飾りを受け取るとデスクの上でその一部を手に取り上げた。

心なしか引き締まった顔つきでじつくりと飾りの取れた髪飾りを見分する彼女は、先ほどの緩い表情とはうって変わった鋭い視線をしており真剣に見ているのうかがえる。

「こりやひどいな、経年劣化と赤錆でボロボロじゃないか。ちゃんと手入れしてなかったな？」

「いや、ちゃんと汚れは拭いたり水で洗ったりはしていたぞ」

「オイルかグリスで仕上げはしてたか？」

「なんだそれは？」

「やつぱり…話にや聞いてたが、こいつはそもそもレース向けの装飾じゃない、予め謝つとくがこれは安物だ。」

基部はステンレスじゃねえし、各種ネジや部品も防錆加工はいまいち、売れるまでそのまんまならそれでいいってパターンだなこりや。

一旦バラすぞ、やって良いか？」

「直るのか？」

「できる、時間は少し貰うが大丈夫だ」

シマカゼタービンがオグリキャップに向き直る。その自信ありげな表情と真剣な眼差しに、オグリキャップは何故かぞくりとした。

彼女は確信している。間違いなく、これは直せると。その自信に、自分はどうかたえるべきか？

「頼む」

あいよ、と彼女は軽く答え。迷うことなく工具箱を開き、中を見ることなくドライバーを手にとると淀みない手つきでネジを外しだす。

ドライバーでネジを回し、動きが悪ければオイルを吹き、丁寧にされど迷いなく。

その手慣れた手つきに、実家に入入りしていた業者を思い出して思わずベルノライトは感嘆の声を上げた。

「すごい…」

「別に普通だぜ、車弄つてりゃこれくらいできるさ。ほら、見ろよこの

ネジ」

シマカゼタービンが無事な髪飾りと装飾部位を固定していたネジを取り出して見せる。

そのネジの姿は赤茶けた汚い汚れがまわりついており、素人目から見ても異常なことが分かる有様だった。

「こいつなんか赤さびでネジじゃなくなつたら、もう使えんから別のヤツを使うぞ」

「部品があるのか？」

「類似品になるがな。無事なのを見た限りこれならイギリス製の小ネジが使える。輸入品だったのかもしれない、日本製っぽくない造りだ」

「そこまでわかるんですか？」

「お国柄つてのは案外消せないもんさ、外車弄るとよくわかるぜ」

見ている間にどんどん解体され、残っていた飾りはすべて外されてほとんどバラバラにされた髪飾りを見てオグリキャップは不思議と納得してしまった。

「これはひどい」

「うわあ……」

「だろ？」

見た目は今まで問題はなかった、だが見た目ではわからない部分のパーツの隙間や可動部の奥まった場所など赤錆や白錆を身にまとった無残な個所が白日の下に晒されていた。

はつきり言えば赤錆と白錆、さらに汗や髪の毛などが固まったよくわからない汚れなどの塊が隠れた場所に付着しまくっていた。

この姿を見るとお気に入りへの髪飾りと言えど、こんなものを付けていたのかと一瞬考えてしまう。

ああ、そういえばこの前髪を洗ったときに赤土っぽいものがじやりじやりしてたな。それ、これからはがれた錆だったのか。

「こりゃ無事な塗装の下も錆が進行してるかもしれない、一度剥いて金属部品は錆落とししてから黒染めしたほうがいいかも」

「黒染めとは何だ？」

「黒錆で部品を黒く染めるんだ。酸化被膜って言われるな」

「錆させるのか？わざと？」

「黒錆はこの赤さびと違って他の部位に浸食しないんだ。人類の知恵ってやつさ、どうせ錆びるなら都合のいい錆で先に覆っちゃおうってな」

「あ、それ確か私も聞いたことがあります。たしかスポーツ用品の部品でもやってるのがあって」

「あれは選手が汗をかいた手でべたべた触るからだな、塗装で覆っても対策としてやっておいて損はねえ。金属に塩気と水気は天敵だからな。」

さてと…うん、造りは単純、部品もほぼほぼ再生できそうだがネジは変えなきゃダメだな…ふむ」

完全にバラバラにされた髪飾りの部品を一つ一つ見分し、シマカゼタービンは小さくうなずく。

「少し時間をくれ、三日くらいしたら連絡する。任せな、がっかりはさせねーよ」



三日後…

「で、この状態か」

六平のトレーナールーム、以前はそこで屍のようになっていたオグリキャップが待ちきれないとばかりに、まるでクマのようにうろろうしている姿を見て呆れたように嘆息した。

それを一緒に見ていたベルノライトは、打って変わってどこか懐かしむように遠い目をする。

「ホントに直せるのか？俺の知り合いだって一流だったぞ、言っちゃあ悪いがただの学生にそんなこと」

「普通に考えたらそうなんですけど…シマカゼさん、断言したんです

よ。ほかの人が無理だつていうのに」

「安請け合いじゃねえのか？」

「そんな風には見えませんでしたよ、作業少しだけ見せてもらったんですけど確かに修理してましたし」

なんだそりや？六平は思わず眉を吊り上げた。この際、髪飾りを本気でばらされたのは良しとしよう。オグリキャップも認めたうえでやったことだ。

しかし、いくらトレセン学園の生徒とはいえただの一生徒ができる修復作業程度で、本職の人間が匙を投げたそれを何とか出来るわけがない。

「カサマツでもおんなじでした、懐かしいですね」

「ほーう？」

「な!?!それは言わない約束!!」

思いもよらぬ方向からやってきた裏切りの一撃に赤面したオグリキャップがわたわたし始める、

いつもより騒がしいが、いつもの日常に戻ってきたように思えて思わずほっとする六平の耳にやや控えめなノックの音が響いてきた。

「どうぞ、開いてるぜ」

「失礼します、お届け物にきました」

「シマカゼ!!」

「おう!?!いきなりだな、落ち着け落ち着け。ほれ、開けてみ？」

シマカゼと呼ばれた彼女は落ち着け落ち着けと笑いながら今にも突進しそうなオグリキャップを諫めて部屋の中に入って来る。

どうやら同じトレセン学園の生徒らしいが、六平はそこで違和感を覚えた。

(こんな奴、いたか?)

トレーナーだからこそわかる、完成された競争ウマ娘として鍛え上げられた身体は制服では隠しようがない。

見れば見るほど見惚れんばかりに鍛え上げられ、今走っても楽々勝利を掲げられそうなほどに磨かれた立ち振る舞い。

そんな彼女を、六平は今までレース場どころか練習場ですら見たこ

とがなかった。

まだデビューしていない新人ならばそれもありそうだが、彼女の体つきはデビュー前のそれとは比較にならない完成度を誇っている。

何モノだこいつ？そんな怪訝に感じていた六平をよそに、オグリに案内されて来客用のソファアームに座った彼女がバッグから取り出したケースをオグリはそわそわしながら受け取っていた。

それを一瞬の緊張とともにごくりと唾を飲みこみ、蓋を開いて、中に安置されたそれを手に取り思わず目を見開いた。

「直ってる!!」

「すごいきれい!」

「驚いたなこりや…」

塗装はきれいに塗られた上に慣らされ、塗りむらもなく綺麗に光を反射し、稼働部位も今までの動きがなんだったのか疑問に思うくらいにスムーズ。

破損していた髪飾り部分も狂いなく整備され、よく見るとプラスチックの宝石風装飾の輝きも前と違うものに見える。

「お前さん、どうやって直した？ほかの連中が匙投げてたんだぞ」

「別に特別なことはしてませんよ。ダメな部品はうちにあったのと取り換えて、部品全てを黒染めしてから再塗装しただけです。」

まあ塗装は耐久性と修復性を考えて、よく似た色のウレタン塗装に変えたんで手触りが違うかもしれませんが——」

「す、すごいぞベルノ!この髪飾り、前よりきっちりくつつくぞ!まるで吸い付くみたいだ!付けてみる、みればわかる!」

「わ、ほんとだ!滑らない!!」

「…問題ねえみたいだな」

「そのようで。では、自分はこれで」

「待ちな」

何にもなかったかのように出ていこうとする彼女を六平は止める。

「名前を聞いてなかった、俺は六平だ。今回は助かった」

「シマカゼタービンです、いえいえ、お役に立てて何よりです、では」

「シマカゼ、本当にありがとう!!」

「気にすんなよ、同じ学校の生徒なんだ、困ったときはお互い様だ」  
じやな、と軽く言つて彼女は部屋を出ていく。その背中を見送つて  
六平は小さく息をついた。

理由は分かった、彼女はオグリキャップをまるで意識していない。  
ただ同じ学校の生徒として手を貸したとしか考えていない。

思えば断られたとき、大体はオグリキャップの持つネームバリユー  
もかなり邪魔だった気がする。

(それを気にもせず、手を貸してくれる豪胆な奴か…シマカゼタービ  
ン、覚えておくぜ。その名前)



ブルーアーカイブ×ウマ娘コラボイベント『三女神S OS』 最終章2 『残された蹄跡』 ☆

キツイ光景だった、これまでになくキツイ現実だった。清潔な病室の中で意識のない親友たちがただ機械に繋がれている光景。

傷一つないきれいな姿で、声を掛ければいつものように起きそうな姿で、本当にただ寝ているだけの姿で：でも彼女たちは起きなかった。

彼女たちを呼ぶご両親、答えのない沈黙、押し殺してもなお部屋に満ちる嗚咽と鳴き声。

遅々として進まない奇病の解析、いつになく諦めに近い溜息を吐く群馬医療の精鋭たち。

いつか見たような光景だった、悲しみに暮れ、なすすべもなく、泣くことしかできず、ただいつか来る結末に怯えるばかり。

俺は何もできなかった、俺には何もわからなかった、いくら声を掛けても誰もいつものように答えてくれなかった。

声を掛けた、話をした、体を揺らした、食事を作った、映画を見せた、酒を持つてきた、昔の話だつてしてやった、いつもならあいつらが飛び起きることを全部やった。でもだめだった。

ホクリクダイオーも、ツバキプリンセスも、ノルンファンクも、いつか世界を取るためにレースに挑んでいた彼女たちは、なぜかこんな似つかわしくないところにいる。

何もなかったはずだった、なにも事故も起きてなかった、いたって普通の生活をしていただけだった。

群馬トレセン学園の競争ウマ娘として当たり前前の日常と当たり前前の練習をして、学生のように遊んで駄弁つて、寮に帰って、次の日に元気に起きる。

ただそれだけのはずなのに、3人はそのまま深い眠りについて起きることはなかった。原因不明のこん睡状態、まるで魂だけが抜けたよ

うに。

生きている、科学的には生きている、脳も活動していて体の健康そのもの、それどころかまるで時が進んでいないかのように変わらな  
い。

一週間、運動も食事をしていないのに体は衰えていない。体は鈍ら  
ず痩せもしない、栄養補給の点滴をしているにしてもあまりにも不可  
解極まりなかった。

俺には何もできなかった、俺には何もわからなかった。それは仕方  
ないことだ、解ってる、解っているが…

(悪い事なんざこれ以上ないって思ってたのに、畜生め…)

だというのに、まったくもって悪いことは続くもんだ。息苦しい、  
無理矢理呼吸を整えながら俺は目を開ける。

上には見るからにこの世の物じやない空と大穴、そして苔生して自  
然に飲み込まれた遺跡のような場所で俺は何とか体を起こした。

そこかしこにショートして煙を上げるオートマタ兵士の残骸、足元  
にはぶっ壊れたAKM。

「くっそ…痛いなあ、最悪だ、最悪過ぎる」

全身が痛くて痛くてしようがねえ、吐き気がして止まらねえ、けど  
寝転がってたら死ぬから無理してでも起き上がる。

前前世でもそうだけど、前世でもそうなんだけど、なんで時々世  
界観変わるのかな俺の人生。

酒造が本業で趣味に走り屋だったのになんか競馬で変なことに  
なったし、今だって俺は普通の女子高生だったはずだ。

いつにも増してボロボロな俺、借り物のミレニアムサイエンスス  
クルの一般的な白シャツとスカートの制服にプレートキャリア、そ  
してほぼほぼ空になった武器弾薬ポーチ類。

最後に不死切り・開門を腰に添えて少しだけサムライ風味…いやな  
んというか変なサイバーパンクかよ。

「まったくもってついてない」

最後の最後で良いのを貰った、オートマタのボディブローはやば  
いって分かってたのによお…おかげであれば何が本か逝ったぞ。

おまけに最後の防弾プレートと一緒にプレートキャリアはお釈迦、無かつたら死んでたとはいえレベル5クラスだったのが一撃だ。

何度も言うがこちとらただの走り屋、護身程度に剣術納めて、CQができるだけの一般女子高生だぞくそつたれ。

こんな世界で過ごしすぎてたら命がいくつあっても足りんわ、さつさと帰らせてもらうぜ全く。

「インチキだ、軽く常識を超えないでもらいたいよ」

無事なココアシガレットのしわくちやな箱を取り出して数少ない一本を口に咥え、腰のナイロンホルスターからM9を引き抜く。

今にも分解しそうなくらい痛いのを我慢して誤魔化しながら滅茶苦茶になった遺跡内を歩く。その先には苔生した観測塔。

ここは小高い丘の上にある古い遺跡の観測塔だ、ここが一番あの穴に近い場所で360度全てを見渡せる塔が絶好の設置場所なのさ。

くそ、足も腕も罅が悪化してやがんな。頭痛もしてきたし、視界も霞む、出血してないだけ奇跡じゃねえか畜生。

苔生した観測塔の足元にはボロボロな床に刻まれたミレニウムサイエンススクールの校章の上に駐機された自動制御トレーラー。

それがけん引してきた大型コンテナは既に空っぽだが、外部は焦げ付いたへこみと無数の小傷がついている。

コンテナの観測塔のほうに抜けると、広場のような場所ですら近未来的な高射砲を取り付いている紫色の長髪のやや場違いなエンジンニア。

頭に未来的な装飾を付けて不思議な形をした天使の輪を備えた少女、白石ウタハがいた。

「ウタハ、トラムの発電機を再起動したぞ。お前の言う通りひどく調子が悪そうだ、いつ停止しても不思議じゃない。」

あの路線の劣化具合から見ても計算通り一度が限度だな。長居は無用だ、さつさと終わらせて帰ろう」

「まだだ。少し待ってくれ」

観測所へ上がるリフト内に設置した銃身が上下に分かれてるレールガンみたいに近未来的な高射砲の制御装置を弄り回しているウタ

ハの返答は芳しくない。

ここまで来てトラブルか？いやここまでトラブル三昧だったからちよつとやそつとでは驚かんぞ。

《こ、こちらクイーン。カイザーの増援が麓に集まってきてる》

《増援ですね。アリス、撃ちます!!》

《待つて待つて狙撃手居るから頭下げて!!》

《当たらないよお姉ちゃん、風が強いから…でもアリスちゃんだけじゃ時間稼ぎにもならないかな》

ゲーム部は仮設拠点の防衛ライン、道は一本道で見晴らしがいい。

迎撃には最適だが相手からも撃ちまくられる。

《こちら00、こっちも確認した。ありや戦力再集結つて動きだな、チビ撃つな、居場所が割れる》

《こちら01、先生と通信できないけどトラブル？あとなんか、相手柔くなかった?》

《03より00、残存兵力の撤退を確認。戦力再集結で間違いありません、もしかしてこれは…》

《こちら02、同じく戦力の撤退を確認。今までのカイザーにはない動きだが…なるほど、包囲するつもりだ》

C&Cは遊撃、こいつらの練度からして無駄な言葉はいらない。やれやれまだまだ敵さんは元気みたいだな。

対応が早い、評判はどうあれ歴戦PMCだ。うちの世界でもめつたに見ない、アラサカの護衛PMC並みじゃねえの。

「そうも言つてられん、カイザーがまた上がつて来る。それと通信があつちと繋がらん、理由は分かるか?」

「…ならみんなを先に戻してくれ、君達には説明しよう」  
「ふーん」

あ、そういう状況。俺解つちやつた、不運野郎セミプロの俺を舐めるなよ?なりたくてなつたわけじゃねーけど。

短くなったココアシガレットを口に押し込んで食い切り、M9をホルスターに収めて無線機のプレストークを押した。

「こちらCB、通信不良のため代わりに通達する。作戦完了、繰り返し

す、作戦完了。

各員再集結地点ポイントブラボーまで後退、プランEに移行する。繰り返す、各員再集結地点ポイントブラボーにてプランEに移行、以上」

《こちら00、了解した。C&C、移動する》

《こちらクイーン、解りました。待機場所に向かいます》

悪いな、これも大人の知恵ってやつだ。

「さて、何があった？」

「感心しないけど…仕方ないか。良いニュースと悪いニュースがある」

「聞かせてくれ」

「まず、さっきの戦闘で無線の中継器がやられた。先生との連絡が取れないのはそれが原因だ」

ウタハが指を差したのは無線の中継器、信号増幅もしてくれる優れたものの箱…の残骸。グレネードでも食らったか。

なるほど、それは痛い。ここまで少数で無数のカイザーPMCのオートマタを倒して登ってこれたのは、本部で指揮してくれていた先生がいたからだ。

その先生からの指揮を受けられなくなったという事は、カイザーPMCに追撃されれば勝ち目はない。まあ、ここに追撃できる戦力があればの話だ。

このあたり一帯のカイザーPMCはほぼ掃除したが悠長にはしてられん、この観測所の上空は乱気流でヘリが飛ばせない以上戦力を再度投入するには時間がかかる。

しかし奴らもそれが分かっているから俺たちはここに居る。あいつら、無理に止めずに受け流して包囲殲滅するほうに変えてたわけだ。

ネル達C&Cとアリス達ゲーム制作部は無事、弾薬と戦意も十分だがいかんせん人数差がある。

三女神さまというチートも居るが、しかしこっちも消耗はしてるしはつきり言って隔絶したパワープレイだから崩れるとやばい。

「悪いニュースは？」

「ドローンが底をついた、スクラップででっち上げるから時間が欲しい。それまで私は戦力外だと思ってくれ」

「嘘が下手だな、そうじゃねーだろ」

「真実なんだがね…高射砲の制御装置が壊れた。自動制御、自動照準、タイマーも全部ダメだ。手動で操作するしかない」

…確かに悪いニュースだ、この上ない最悪の類だな。

「すまない、私のミスだ。襲撃に後れを取った」

「得手不得手は誰にだってあるさ…直せないか？」

「直せるよ、持って帰って解析できればね」

コンテナの防御は完璧だった、流れ弾じゃビクともしないしミサイルが当たっても焦げる程度で中身は無事だった。

だが設置の段階で潜伏していた連中に突貫を掛けられたのは痛かったな…時間稼ぎのつもりか、嫌がらせのつもりで装備破壊していきやがった。

「そんな暇はないだろ、もう時間がない。長いことここにはいられんぞ」

「解ってるよ、だが何か手があるはずだ。せめて先生と連絡が取れれば何とか…少し時間を稼げないか？」

「無茶を言うな、あの人だって限界がある。カイザー共なら何とかなっても上のあれは俺達にはどうしようもないだろ」

俺は空を指差す、この狭間の世界から見上げる空模様が狂った空中にはうっすらと見える円形の穴があった。俺達の世界とキヴオトスのある世界をつなぐ大穴だ。

何かの事故かなんかで空いた大穴だが、すでに二つの世界で修正力が働いていて修復されかかっている。これはいわば薄い瘡蓋だ。

俺達はこのつを少し引っぺがして、修正力に影響を出さないように潜り抜けなきゃならなかった。

この装置が通じるのはもう今しかない、そうしなければ俺たちはこの世界に閉じ込められてしまう。

「もうそいつでぶち抜けるギリギリなんだ、機能は問題ないんだよな？」

「ああ、装置は問題ない。女神さまの力とやらも十分に充填されてるし、電力や砲身も問題ない。

射撃装置や装填済みの通常弾にも異常はないから、立ち上げればいつでも撃てる状態だ。」

だが自動補正や自動制御、時限起動はダメだ、小手先の修理ではどうにもならない」

「つまり誰かが残ってやるしかない、でもそれは……」

世界に穴を開けるんだ、何が起きるか分かったモノじゃない。予想が何もできない危険な仕事なんだよこれは。

それで世界の穴に吸い込まれたりでもしたら、どうなるか分かったもんじゃない。死ぬたら幸運だ。」

この世界の狭間のような場所ですらもうどうしようもない、追跡調査なんぞできるもんじゃないからな。

そもそもこの機械自体曰く付きの代物、先生曰くゲマトリアとかいう普段は敵の組織から提供されたもんだっていうんだからな。

それにキヴオトス人から見ても危険なことを俺たちがやったら、それはもつと悲惨だ。誰か一人は置いてけぼり、帰れないってことなんだからな。

「私がやろう、それが最善だ。タービン、刀を。二人はみんなを頼む」  
「バカ言うんじゃないよ、君は唯一まともに戦えるんだ。向こうに帰ってもらわないといざって時に困る。」

僕が残るよ、かわいこちゃんも居るから退屈しなさそうだしね。  
「さあ」

「それはいけません、あなたは学生さんに刺激が強すぎます。私が残りましょう。ご心配なく、教師としてなら私が一番ですから」

おつといつかから聞いてたんだ赤いの青いの黄色いの、ってかいきなり後ろから声かけてくんな。

バイアリータークスさんが真っ先に手を差し伸べてきたと思ったら、ダーレーアラビアンさんがそれを遮る。

二人が押し問答している所に割って入るようにして押しのけて、あらあらうふふと言いそうなゴドルフィンバルブさんも手を差し出し

てきた。

確かに、こいつらが言うことは正論だ。きつと一番正しいし、俺は守られる側なんだろうな。それが普通なんだろうな。

というか、そもそもこいつらが興味本位でこんなところに遊びに来てハマやったのが悪いんだよな。

現世の写し身の姿で遊びに来たとか神様がやるべきことか：いやまあたまには遊びたいのも分かるけども!!

こいつらの責任ではあるし、こいつを渡しちまえばそれでいい、もとより俺の身に余るんだ。不死切りも、こんな戦いも。

「いや、俺がやる。あんたたちは戻れ」

「…何を言ってるんだい？」

震えそうな声を抑えて、今にもブルつちまいそうな体を全力で虚勢を張った。

ダーレーアラビアンさんが怪訝そうに眉を顰めるが虚勢を張る、かっこつける。

逃げたいけどさ、だめなんだよな、納得できない。なによりそれダメって勘が言ってるんだよなあ!

「あんたたちにはあいつらを絶対に送り返してもらわなきゃならんし、向こうの世界にはあんたたちは絶対に必要だ」

「待ってくれ、気は確かか? そんな事したら君が帰れなくなるじゃないか」

ウタハ、そんな顔するんじゃないよ。

「キミがそんなことする必要はない、あなたたちもだ：私がやろう! 狙って砲撃すればいいだけなんだ!!」

「お前こそバカ言ってるんじゃないよ。こいつの衝撃波はキヴオトスの人間には有害だ、そう先生に教えられたらどう？」

だから時限起動で安全にやろうって話にしたんじゃないか、ぶつ壊れちゃったがな」

「だがそれは君だって同じだろう」

「いいや：俺はちがう。話しただろ、俺はあいつらを助けるために送り込まれたんだ。意図的にな、だから大丈夫だ」



俺にはこいつらみたいなヘイローがない、それは何故か。理由は推測に過ぎないが、たぶん俺が正規ルートでこちらに来たからだ。

ヨモツヘグイに似たようなもんなんだろう、本来あり得ない異物は弾かれるとか長く存在できないとかありそうだしな。

現に騒動の原因である三女神さまにヘイローはなく、巻き込まれて引き摺り込まれたあいつらとウララにはあった。

だから俺はこの世界の理に染まっていないし、染まらなければ存在できないわけでもない。あの黒服が変に気にしてたのはそういう理由だろうよ。

あのクソ龍ちゃんとしてやがったわけだ、片道出撃だとしてもな。そら車ごと放り込むなんざ余裕か。

この装置が発砲したときにバラまかれる三女神のパワーと恐怖とか言う不思議パワーは問題ではない。

だから俺ならば安全にできる、やった後に逃げる余裕が俺にはある。

「俺の世界でできる奴がいるんだ、こつちにだっているさ。事実、何代前は分かんねえとしてもミレニアムはここを作った、だろ？」

ノープランってわけじゃねえのさ、ああ、0パーセントじゃねえんだ、帰れないって決まったわけじゃない。

俺は自腹で帰るだけさ、走り屋にはよくある話だぜ。俺は今回ハマして事故った、それだけさ。

「ま、気を病むんならあとで良い武器見繕ってくれ。さすがにこいつもガタが来ちまつてる、元々拾い物だから変え時だ」

話題を変えるためにホルスターを叩く、この世界ではどこにでもあるM9が収まつてる。

この世界に来てから偶然拾ってここまで使い倒してきたからな、オンボロだ。

「俺はまだキヴオトスにや日が浅い、良い店を知らん」

「そんな馬鹿な話で誤魔化せると思うな。私は絶対に認めない、そんなことを言っている君こそ真つ先に帰るべきだ。」

そんなボロボロの姿で大丈夫だなんて言われて信じるほど私は口

マンに溺れちやいない!!」

「バレてたのか」

「気づかないとでも思ったか、これでも先生の無茶ぶりには気を使つてた方でね」

なら、隠す必要もねえか。こいつの言う通りボロボロさ、生傷絶えねえしあいつらみたいに治んねえし後を引くしで散々だ。

今も体がぎゃーすか悲鳴上げまくってるよ。花の女子高生だぞ？いくら走り屋だからって限度があるわ。

なのにこつちのやり方に順応したダチの無茶にも何とかついて行っただぜ？褒めてほしい位だよ。

「そんな体で何ができる。今の君は悪いが信用できない、絶対にミスをする。気合いだのなんだので済むような話じゃない、ここで失敗は絶対に出来ないんだ。」

君がそう言ったんだ、そうだろう！だったらなおさらそんなボロボロの君に任せるなんてできないね、何がどうあろうとだ！」

優しい奴だ、わざとときつい言い方で突き放してくれるのか。そんな風に言ってくれるならそれを尊重しよう。

腰のホルスターに差していた不死切り・開門を鞘ごと抜いて、ウタハのほうに差し出した。

「そうまで言われちやあ：仕方ないか。頼めるか？」

「謝らなくていい、これは私が決めたことだ。向こうに付いたら信号弾で合図をくれ」

「悪いな」

本当にごめんな、ウタハが不死切りを受け取ると同時にその手を絡め捕って体勢を崩し、体を裏返しながら引き寄せる。

背中の方から羽交い絞めにする形になったところで右腕を彼女の首に巻き付けるように絞めて一気に締め上げた。

藻掻くウタハの手が俺の腕をはがそうともがくが無理だ、もとよりインドア型のエンジニアのお前がウマ娘の俺に力で勝てるわけないだろう？

「ありがとう」

一思いに締め上げて意識を落とす、一瞬の苦しみと同時に気を失えただろう。

やはりビッグボスは偉大な。CQCの汎用性は本当に役に立つ。世話になりっぱなしだぜ。

意識を失って倒れる彼女の体を抱きかかえると、俺は有無言わずダーレーアラビアンさんに彼女を押し付けた。

「…バカだな、君は」

「生憎そうなんだ、バカで単純で平凡なんだよ。あいつらと違って、こいつらと違って、あんたたちとも違う」

バカだから結局ズルズルとここまで来ちまったんだろうよ、賢く立ちまわりやこんな痛い思いしないで済んだんだろうに。

「まだ終わりじゃねえ、カイザーの連中はまだうようよしてる。今も下では戦ってるんだ。あいつらが世界を超えるまで守ってやれる戦力がある、違うか？」

本部は先生たちが飛行場を守ってる、はやくゲーム開発部とC&Cを戻さんとならん。

忍術研究部や放課後スイーツ部、ウタハのエンジニア部、人数がないゲヘナ給食部とかアビドス対策委員会も全員で出張ってきてくれてるが無敵じゃねえんだ。

それなのにおめおめ仲間を犠牲にして帰ってきました？んなもん空中分解もんじゃねえか。

そういうと余計に拗れそうだから言わんけどな、信用してないって言ってるようなもんだしそういう奴らじゃねえのも分かってる。

だからこそダメだ、こいつらにそんなことさせてやらない。絶対にダメなんだよ。

こいつらは命の恩人なんだ、だから恩返ししなきゃな。でないとなんか男が廃るってもんだろうが。

「あいつらを頼む、確実に帰してやってくれ。言い訳は任せた、合図を頼むぞ」

「気は変わらない？」

俺は答えない。気が変わるかって？変えてえよ、俺が変えてえよ！

帰りたいつて言いてえよ!!

やりたきや待つてりや音を上げるかな! ホントにいつまでも意地張つてられないかな!!

「…わかつたよ」

「頼む、できれば急ぎでな」

じゃねえと本気で前線に飛び出してきかねんぞ、今まで伊達に前線張つてきてねえ経験が生半可にある。

あの4人はもう戦えないんだ、今のあいつらにヘイローはない。帰る為にはそうしたのはあんたらだ。

あの馬鹿ども、なまじサバゲーみたいに撃ち合いしてたから被弾上等で危なっかしいんだよ。

大忍刺しのホクリクダイオー? ゲヘナ給食部の雷落とし? どつちもヘイローがなきや一発お陀仏だ。

魔改造チハを乗り回してるノルンだつて出せたもんじゃねえ、無駄に前に出て盾役やりたがるからいつ抜かれてもおかしくねえ。

大盾でガチガチに固めたうえで引つ込んで、モチグレネードフル装填のアーウエン37で支援してたウララのほうがはるかにましなんだよ。

それっぽい言い訳して後ろに下がらせんのに苦労したじゃないか。だからさ、止めないでくれ。俺だつてビビり散らしてんだから迷わせないでくれ。

「撃つたらどうする?」

「強行突破して先生の所に駆け込むさ、下りで俺に勝てる奴はいねえよ。早く行け、もう時間がない」

俺の気が変わる前に。今だつて撤回したい気持ちでいっばいなんだ。峠と酒の事でも考えてねえと頭がおかしくなっちまいそうだ。

生きて帰つて走るんだよ、作るんだよ。満足して、やり切つたつて胸張つてやんねえと一生氣に病むんだよ。

そんなのダメなんだよ、走り屋としても職人としても、そんな不純物が混ざるなんざ断固として認めてたまるか!!

「まだ高一の冬休みは始まったばかりなんだ、こんな苦労背負いこん

だんだん少しばかり観光してから帰ってもバチは当たんねえだろ。

せつかくの異世界だ、どうせなら異世界の峠や酒くらい知らねえと割に合わねえつてもんよ。

あつちとこつち、どう違うのか興味あるんだぜ？ぜひともこの千載一遇のチャンスを生かしたいもんだね」

「まったく、無理に笑うんじゃないよ：死ぬんじゃないよ」

そう言うあんたもな、ダーレーアラビアンさん。ウタハを落とすんじゃないぞ。

「みんなを送ったら必ず迎えに来ます、それまで絶対に——」

「おっと、そこまでだ。女が約束しちやだめだぜ？できない約束はなああくそ、できれば男の時に言いたかったなあこういうの。ゴドルフィンバルブさんみたいな美人さんならかつこつけても言いたいよなあ畜生。

「心より感謝を、そして武運長久を。一緒に戦えて光栄だった」

最後にバイアリータークさん、芯の入った敬礼をしてくれた。おおよ、俺はそれしか答えられなかった。

そういうのは俺には過ぎたもんだぜ、照れくさい。

三人が走り去っていくのを見送って、俺はリフトを起動して高射砲を観測所の屋上へ運んだ。

屋上に向かう間に、不死切り・開門を特殊砲弾に装着して通常弾とは別の弾倉に装填して高射砲に積み込む。

これで後はスイッチ一つで切り替え可能、いつでも撃てる準備は整った。

屋上はより空に近く、穴が大きく見えた。見晴らしもいい、本部基地での戦闘も良く見える。

滑走路にカイザーから奪った輸送機が出ている、もうすぐ準備が終わりそうだ。あとは合図を待つばかり。つかの間の休憩か：なんとなく空を見上げた。

遠くに多くの機影が見える、カイザーPMCの輸送編隊の様だ。きつと中にはオートマタ兵士がしこたま詰め込まれてるに違いない。編隊はバラバラで、機体は大きく揺さぶられていて、今もぽろぽろ

落ちていくくらいめっちゃくちゃだ。

それでも飛んでる。編隊は二つに分けられた、一つは本部基地に向かう。

もう一つはこっちか、機数は18。内訳は大型6、護衛ヘリ12：爆撃編隊じゃねえか、向こうも必死だ。

「さあ、もうひと踏ん張りだ」

俺は高射砲の砲手席に乗り込み、マニュアルを片手に近接防空システムを立ち上げる。やはり自動補正装置類が死んでる。

自動補正を切ってマニュアル照準を起動する。失敗できないんだ、ちようどいい、試射に付き合ってもらおうとしよう。

マニュアルモードが立ち上がり、砲手席のHUDに照準用サイト、弾設定、残弾、砲身状態などの情報が投影される。

初弾を近接起爆モードから時限信管モードに変更。対空砲対策の妨害電波位してるはずだ、アナログで度肝を抜いてやる。

起爆距離をセット、装填。次弾、次々弾共に時限信管、距離を設定。一定数発射の後で信管を着発式に変更、直撃なら妨害電波は関係ないだろ。

少し齧っただけなのに不思議と覚えてるもんだ、こんなの初めてなのに妙に馴染む。

背後の弾倉から通常弾が装填された音を聞きながら砲口を敵爆撃編隊に向けて指向させて、編隊を射撃距離まで引き寄せるために一瞬の空白ができて、おもむろに空を見上げた。



「…またこの夢か」

目覚めの悪い、こんな寝覚めは数えることすら億劫になった。俺は小綺麗な運転席で体を伸ばしながらため息をついた。

見上げれば見慣れた天井、フロントガラスからは青い空と光の環、

地球じゃないどこかの見たこともない空だ。

周りを見れば日本のようでそうじゃない近未来的な街並み、看板は日本語だし言語も日本語なのになんか違う。

住人はロボットやら二足歩行の犬やらねこやらの獣人、そして光の環『ヘイロー』を頭に光らせていろんな銃を担いだ天使みたいな女の子。

女の子たちだって多種多様、羽なり角なりケモミミなりとバリエーション豊か、おかげでウマ耳の俺も全く浮かない。

バックミラーを見れば俺、その頭には赤青黄色の半透明な蹄鉄型疑似ヘイロー、三女神の置き土産だ。

「いけねえ、居眠りしちまったか」

でも仕方ねえだろ、俺はただの走り屋、ただの人間だ。俺は女神さまやあいづらみたいにかみみたいな根性があるわけでもない。

ただ強がっただけだ、ただ虚勢を張って大丈夫なふりをしただけだ。俺だって帰りたいさ、俺も連れてってくれって言いたかったさ。

でもそれじゃダメだったんだ、誰かが残らなきゃダメだったんだ。あの世界には女神さまが必要だ、ダイオー達にはさせたくないから俺がやったんだ。

後悔したさ、なんでこんな苦しいんだって、どうして俺がこんな目になって、でもそうじゃないと納得できなかったんだよ。

「馬鹿やつちまったよなあ…まったく、俺ってホントバカ」

でも止められない、何度も何度も繰り返して終わらない。帰りたい、芦名に帰りたい、家に帰りたい。

学校に帰りたい、芦名に帰りたい、秋名に帰りたい、藤原の豆腐が食べたい、ガソリンスタンドで駄弁りたい、峠を走りたい。

家に帰りたい、家族の所に帰りたい。でもよ、ダメなんだよなあ…馬鹿だよなあ、凡骨だからよ。

帰ろうとはしてるが未だに叶わず、最近は何にちの感覚もおかしくなってるように感じる。なんか年単位でここに居る感覚だ。

あいつらの魂は無事に帰ったんだろうか、まだ病室のベッドで意識

不明になってるとかだつたら死んでも死に切れん。

下手すりゃ府中にもう一人同じ状態になつてるのが増えてるってことだからな、恨むぞ三女神。

「あつち側は遠いなあ…」

見慣れた見慣れない空を見上げて呟く。この空の向こうに俺の帰る場所は確かにある、けどそこまでの道筋はまだ見つからない。

あの時使った手段は使えない、時空の狭間に行く手段もそこにあったミレニアムの観測基地も全部壊れちまった。

ウタハたちは今日も研究に励んでるだろうし、俺も足で何とか痕跡を探っちゃいるが未だにうまく行つてない。

「そっついや俺はどうなつちまつてるのかねえ」

順当に考えりゃ、あいつらが起きてて俺は路肩のWRXの中で意識不明になつてると感じて。

でもこつちとあつちじゃ時間の経過がまるで違うっぽいな、あいつら月単位でいたから普通に馴染んでたし。

《《こちらトキ。シマ、応答を》》

「こちらシマカゼ、そつちで進展でも？」

《《はい、こちらは全て外れでした。そちらは？》》

「まだ動きはねえ、うちの連中からは外れと聞いている。あとは先生たちだが、動きがねえしこつちも外れっぽいな」

《《そうですか、先輩方も全員外れとのことでしたのでまさかとは思ったのですか：ヴェリタスが出し抜かれたのでしょうか》》

「どうだか：下手人がダブっただけだしなんとも言えん、ヴァルキューレじゃこつちはほぼ外れて見解だったし——」

瞬間、どこかでズドンと何かが爆発し、ついでに周囲が一気にドンパチにぎやかになり始めた。

周りを見れば先ほどまでのどかに歩いていた人々が消えて、物騒な装甲車やら武装した女子高生やらがうようよと。

「訂正、先生たちがあたりを引いたみたいだ。切るぞ」

《《了解、合流します》》

「おう」



ショルダーホルスターからP226Rを引き抜き、弾倉に9×19ミリフルメタルジャケット強装弾が装填されているのを確認してからスライドを引き初弾装填。

プレスチエックして初弾が装填されているのを確認してからデコツキングレバーを押しハンマーを下ろしてホルスターに戻す。

運転席脇の専用ホルダーに固定された刀を確認してからエンジンを回す。

EJ20エンジンが快調に回り出したらハンドルを握り、その場からWRX―STIカスタムを出してガラガラの公道を一気に駆け抜ける。

「おっと」

当然ながら妨害されそうになった、相手も俺の愛車の事くらいもう頭に入れてるんだらう。

進路をふさぐように出てきたクルセイダー戦車を軽く避け、その先にも居た装甲車を慣性ドリフトの要領でパスする。

軽く滑らせて射線を誘導しながら装甲車の機銃掃射を躲し、スレスレを抜けるようにして躲した。

道路わきに展開していた傭兵生徒たちが目をひん剥いて銃を構えているがそんなへっぴり腰の弾なんて当たりっこないし避けられる。

それを躲して十字路に差し掛かる、一瞬急ブレーキをかけて制動、即座にハンドルを切ってドリフトカーブ。

十字路に差し掛かった時に見えた傭兵が予測射撃で撃ったロケットランチャーのロケット弾をスレスレで躲しつつ傭兵の真横を突き抜けた。

防弾仕様の車体に一発の着弾も感じないまま突破し、そのまま道路を迂回してあらかじめ決めていた合流ポイントまで、頭上の喧しい銃撃戦を聞きながら愛車を走らせる。

なんの変哲もない路地に愛車を駐車させた途端、目の前のビルの中から黄色のスポーツカーが飛び出し、その直後に爆発。

それに追いつかれるように人影が3つ、ビルから飛び出した。

「今日もまた派手だねえ、嫌だ嫌だ」

二人は生徒、白を基調とした警察官風のヴァルキューレ警察学校の制服を着た二人。

妙にデコレーションされたライフル『第14号ヴァルキューレ制式ライフル』を構えてビルからの攻撃に応戦する合歓垣フブキ。

もう一人は当たりもしないリボルバー『第3号ヴァルキューレ制式拳銃』を撃つて、結局いつものスモークグレネードをぶん投げる中務キリノ。

最後の一人はこの世界ではかなり珍しいらしい大人、タブレットを抱えて周囲警戒を怠らない黒髪ロングで目つきが細い巨乳の先生。

フブキがすっげえ不服そうな顔してるから大方大当たり引いちまったか？わかる、ドンパチってのは嫌だよねホント。

あの飛び出してきたスポーツカー、最近盗まれたっていうミレニアムの最新式エンジン搭載のスポーツカーによく似てた。

なるほどね、C&Cが追ってる一件は逃走手段の確保だったわけだ。なかなか用意周到な連中ってわけだ。

俺がすでにいるのを見てすごい安心した笑顔を見せた先生が二人に合図をしてすぐさま乗り込んでくる。

後部座席にキリノとフブキが飛び込み、先生が助手席に転がり込むように乗ってきたのを俺は茶化して歓迎した。

「よう先生、どちらまでっ。」

「〴〵追いかけて!!」

「あいよ」

これが俺のキヴオトスでの日常の一部、シャールレの運転手としての仕事だ。



☆『シマカゼタービン』

加入時セリフ『群馬県立芦名高等学校一年生、シマカゼタービン。ここじや無所属ってことになるのかな。』

え？ミレニアムの留学生扱いでシャーレ預かり？身分保障か…ならそれでいいか。

すまんが戦闘は専門外だ、あまり期待しないでくれると助かる。

代わりに車は任せてくれ、峠の走り屋は伊達じゃねえぜ？ついでに酒も得意だ、酒屋の娘なもんでな』

年齢・16歳

生年月日・5月5日

身長・161センチ

所属・群馬県立芦名高等学校

学年・一年生

部活・帰宅部

趣味・峠レース、車、酒、エアソフトガン

#### 基本情報

異世界に存在する群馬県立芦名高校に所属する一般生徒のウマ娘。どこにでもいる一般生徒であり、酒の匠、峠の走り屋。

実家が酒造業を営んでおり本人も『酒の職人』であると自負している、その実力は確かなもの。

走り屋としての実力は随一であり、車の運転に関してトップクラスである。

本人曰く戦闘は専門外だというが、実力を知る者は誰も信じていない。

ノーマルスキル『狙い撃ち』

構え直して狙い直し、急所を狙って発砲する。スキル発動後、初弾にクリティカル確定付与、攻撃力300%ダメージ。

抜刀モードでは発動しない。

パッシブスキル『葦名十文字』

一度納刀し、居合切りからの二連撃を放つ。攻撃力300%×2のダメージ。

通常モードでは発動しない

サブスキル『葦名流剣術一文字二連』（コスト4）

攻撃範囲内の一体の標的を選択、瞬時に接近し特殊効果と高火力の二連撃を叩き込む。

一撃目は敵に対して攻撃力140%の攻撃、状態異常効果として敵に麻痺、防御力無効化、被クリティカルヒット確定状態を一秒与える。

二撃目は攻撃力の500%のダメージを敵に与える。

通常モードでは発動しない。

EXスキル『抜刀突撃』（コスト2）

コストを消費して抜刀モードに変化、専用ゲージが0になるまで抜刀状態を維持する。

射撃による通常攻撃をしなくなり、積極的突撃による近接しての剣術攻撃になる。

遮蔽物を使わないようになるがゲージがなくなるまでは被弾しても剣撃で銃撃を弾く。

移動速度アップ、通常攻撃速度アップ、攻撃力アップ、被弾率アップ。

また抜刀モードではEXスキルが変化し『葦名流剣術一文字二連』となる。

固有武器『シマカゼ専用9ミリオート&不死切り・複製』

シマカゼタービンがこの世界で主に携帯しているミレニアム製護身用自動拳銃と日本刀。

日本刀はかつて所有していた『不死切り・開門』を模してミレニアムサイエンススクールのマイスターたちが制作した逸品。

一見古風な拵えであるがエンジニア部謹製の最新技術がふんだんに盛り込まれた逸品、非常に頑丈。

何もなければ振るわれることはない、そして振るう事を彼女は望んでいない。